岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第312集

志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書

―関遊水地事業関連遺跡発掘調査

（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書

—関遊水地事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成11年３月現在、10178ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えて行くことは、県民に課られた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は一関遊水地事業に係わる太田川堤防建設工事及び国道４号線改修工事に関連して、平成７年度、９年度、10年度に実施した平泉町志羅山遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では奥州藤原氏の時代の建物跡や井戸、道路跡などと、それに伴うかわらけ、陶磁器などが多数発見され、貴重な資料を提供することができました。中でも鴛鴦文の施された轡は他に事例が少なく注目されます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました建設省東北工事局岩手工事事務所・平泉町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成12年２月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長　船　越　昭　治

例　言

1．本報告書は岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山32－1他に所在する志羅山遺跡の第46次、第66次、第74次発掘調査の成果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、一関遊水地事業に係わる太田川堤防工事、国道4号線改良工事に伴う事前の発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡台帳の遺跡番号はＮＥ76－1088、調査略号は調査次ごとにＳＹ95－46、ＳＹ97－66、ＳＹ98－74である。

4．調査面積、野外調査期間、室内整理期間、担当者は以下のとおりである。

第46次調査　調査面積　2,102㎡

野外調査期間　平成7年8月7日～11月22日(8月9日～8月31日まで中断)　羽柴直人　吉田　理

室内整理期間　平成7年11月1日～平成8年3月31日　羽柴直人　吉田　理

第66次調査　調査面積　1,891㎡

野外調査期間　平成9年4月7日～8月31日　羽柴直人　高橋実央　朝倉雄大

室内整理期間　平成9年11月1日～平成10年3月31日　羽柴直人　高橋実央

第74次調査　調査面積　1,001㎡

野外調査期間　平成10年5月1日～7月31日　羽柴直人　朝倉雄大

室内整理期間　平成10年11月1日～平成11年3月31日　羽柴直人

調査面積合計　4994㎡

6．本報告書の執筆は羽柴直人が中心に一部を高橋実央がおこなった。高橋の執筆分は文末に名を付した。他に執筆を依頼した文章がある。依頼した文章については文頭に執筆者名を付した。
編集は羽柴がおこなった。

7．分析、鑑定、保存処理は以下の方に依頼した。(順不同、敬称略)

鴛鴦文轡の科学分析	赤沼英男	(岩手県立博物館)
鴛鴦文轡の鑑定	久保智康	(京都国立博物館)
鴛鴦文轡の保存処理	肥塚隆保	(奈良国立文化財研究所)
墨書かわらけの解読	佐藤　信	(東京大学)
馬骨の鑑定	小林和彦	(八戸市縄文学習館)
樹種同定	高橋利彦	(木工舎「ゆい」)
石材鑑定	佐藤二郎	(長内水源工業)
国産陶器、中国産陶磁器の鑑定	八重樫忠郎	(平泉町教育委員会)

1号池のかわらけの鑑定	松本建速　（筑波大学博士課程）
近世墓石の観察	千葉和弘　（國学院大学博士前期課程）
木製品の保存処理	新日鉄釜石文化財保存処理センター
トイレ状土坑の土壌分析	株式会社古環境研究所

8．本報告書の作成にあたっては下記の方々にご指導、ご協力をいただいた。（順不同、敬称略）

藤島亥治郎（東京大学名誉教授）、村越潔（青森大学）、飯村均（福島県文化センター）、本田泰貴（東北陶磁文化館）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、木村高（青森県埋文センター）、半沢紀（北奥文化研究会）、本堂寿一（北上市立博物館）、金丸義一（芝浦工業大学）、斎木秀雄（鎌倉考古学研究所）、本澤慎輔、及川司、千葉信胤、菅原計二、鈴木江利子、茂庭泰正、鹿野里絵（平泉町教育委員会）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、山本信夫（太宰府市教育委員会）、阿部一（前沢町役場）、及川真紀（前沢町教育委員会）、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、鈴木徹（黒石市教育委員会）、大坪聖子（武蔵文化財研究所）、井上雅孝（滝沢村役場）、橋口定志（豊島区教育委員会）、榊原滋高（市浦村教育委員会）、室野秀文（盛岡市教育委員会）、菅原修（岩手町教育委員会）、伊藤博幸、佐々木千鶴子、佐藤良和（水沢市埋蔵文化財調査センター）、高橋千晶（水沢市教育委員会）、小笠原雅行（青森県教育委員会）、田中則和（仙台市教育委員会）、五十川伸矢（京都大学）関根達人（東北大学）、高橋香理（弘前市教育委員会）、畠山篤雄（千厩町役場）、鈴木寛（平泉町大沢）、工藤清泰（浪岡町史編纂室）、菅野澄順、佐々木邦世、破石澄元（中尊寺）、小山彦逸（七戸町教育委員会）、西山要一（奈良大学）、大庭泰時、吉留秀敏、菅浪正人（福岡市教育委員会）、相原康二、三浦謙一、鎌田勉、日下和寿（岩手県立博物館）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、佐々木浩一（八戸市博物館）、藤田俊雄、宇部則保（八戸市教育委員会）、工藤雅樹（福島大学）、斎藤邦雄（柳之御所遺跡調査事務所）、堀内明博（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、鎌田精造（大槌町教育委員会）、森村健一（堺市埋蔵文化財センター）、佐藤正彦、熊谷賢（陸前高田市博物館）、堀江格（福島市振興公社）、川崎利夫（うきたむ風土記の丘考古資料館）、山口博之、高桑登斎藤建（山形県埋蔵文化財センター）、平田禎文（三春町教育委員会）、桑原幸則（佐賀県神埼町教育委員会）、西（前川）佳代（奈良女子大学博士課程）、関口慶久（立正大学大学院）、島原弘征（福島大学大学院）、高杉諭史（千葉大学大学院（既卒））、門島知二（二戸市教育委員会）

9．調査成果はこれまでに現地説明会資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容がこれらに優先するものである。

10．土層の色調観察は、「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　1989）を用いた。

11．本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

目　次

序

例言

第１章　調査に至る経過……1

第２章　遺跡の立地と環境……3

第１節　位置……3

第２節　地形……3

第３章　調査と整理の方法……5

第１節　調査の経過……5

1　志羅山遺跡第46次調査……5

2　志羅山遺跡第66次調査……5

3　志羅山遺跡第74次調査……5

4　室内整理……7

第２節　野外調査の方法……7

1　グリッドの設定……7

2　遺構の名称……7

3　粗掘り・遺構検出……7

4　遺構の精査……7

5　遺物の取り上げ……8

6　実測・写真撮影……8

第３節　室内整理の方法……8

第４節　本報告書の構成……8

第４章　Ａ地区の遺構・遺物……12

第１節　Ａ地区の概観……12

第２節　遺構……13

1　建物……13

2　井戸……21

3　土坑……27

4　溝……35

第３節　遺物……47

1　土師器、須恵器……47

2　かわらけ……49

3　国産陶器……53

（１）常滑産陶器……53

（２）渥美産陶器……60

（３）猿投産陶器……60

（４）水沼産陶器……60

（５）須恵器系陶器……63

4　中国産磁器……64

5　瓦……64

6　石製品……66

7　木製品（12世紀）……66

8　近世陶磁器……66

（１）磁器……66

（２）陶器……73

9　土製品（近世～近代）……81

10　木製品（近世～近代）……81

11　石製品（近世～近代）……83

12　金属製品（近世～近代）……85

13　墓石……85

第５章　Ｂ地区の遺構・遺物……90

第１節　Ｂ地区の概観……90

第２節　遺構……90

1　建物……90

2　井戸……108

3　土坑……111

4　焼土遺構……126

5　溝……127

6　塀……140

第３節　遺物……144

1　須恵器……144

2　かわらけ ……146
3　国産陶器 ……154
（1）常滑産陶器 ……154
（2）渥美産陶器 ……166
（3）猿投産陶器 ……171
（4）水沼産陶器 ……171
（5）須恵器系陶器 ……175
4　中国産陶磁器 ……175
5　木製品 ……177
6　瓦 ……182
7　石製品 ……182

第6章　C地区の遺構・遺物 ……184
第1節　C地区の概観 ……184
第2節　遺構 ……185
1　竪穴住居 ……185
2　建物 ……185
3　土坑 ……196
4　溝 ……202
5　池 ……206
6　塀 ……211
第3節　遺物 ……213
1　土師器、須恵器 ……213
（1）46・66SI1出土遺物 ……213
（2）遺構外の土師器、須恵器 ……213
2　661号池出土遺物 ……216
（1）かわらけ ……216
（2）笹塔婆 ……220
（3）木製品 ……226
（4）瓦 ……232
（5）金属製品 ……232
（6）馬骨 ……236
3　かわらけ ……237
4　国産陶器 ……249
（1）常滑産陶器 ……249
（2）渥美産陶器 ……253
（3）猿投産陶器 ……261
（4）須恵器系陶器 ……261
5　中国産磁器 ……264
6　瓦 ……268
7　土製品 ……269
8　木製品 ……270
9　石製品 ……271
10　近世陶磁器 ……272

第7章　D地区の遺構・遺物 ……274
第1節　D地区の概観 ……274
第2節　遺構 ……274
1　建物 ……274
2　井戸 ……288
3　土坑 ……290
4　溝 ……294
5　池 ……298
6　塀 ……300
第3節　遺物 ……304
1　662号池出土遺物 ……304
（1）国産陶器 ……304
（2）木製品 ……304
2　かわらけ ……306
3　国産陶器 ……310
（1）常滑産陶器 ……310
（2）渥美産陶器 ……311
（3）須恵器系陶器 ……311
4　中国産磁器 ……312
5　瓦 ……312
6　石製品 ……314
7　金属製品 ……314

第8章　E地区の遺構・遺物 ……316
第1節　E地区の概観 ……316
第2節　遺構 ……316
1　建物 ……316
2　土坑 ……318
3　焼土遺構 ……320
4　溝 ……325
5　塀 ……327

第３節　遺物 ……328
1　かわらけ ……328
2　国産陶器 ……330
（1）常滑産陶器 ……330
3　瓦 ……330
4　近世陶磁器 ……330
5　石製品 ……333
6　土製品 ……333
7　金属製品 ……334

第９章　Ｆ地区の遺構・遺物 ……336
第１節　Ｆ地区の概観 ……336
第２節　遺構 ……336
1　建物 ……336
2　土坑 ……343
3　溝 ……347
第３節　遺物 ……356
1　かわらけ ……356
2　国産陶器 ……362
（1）常滑産陶器 ……362
（2）渥美産陶器 ……362
3　中国産磁器 ……365
4　金属製品 ……366
5　近世陶磁器 ……367
6　馬骨、馬歯 ……368

第10章　Ｇ地区の遺構・遺物 ……370
第１節　Ｇ地区の概観 ……370
第２節　遺構 ……370
1　建物 ……370
2　土坑 ……373
3　溝 ……374
4　塀 ……374
第３節　遺物 ……377
1　かわらけ ……377
2　中国産磁器 ……377
3　石製品 ……378

第11章　複数調査地区にまたがる遺構 ……379
第１節　道路遺構 ……379
第２節　埋没沢 ……380

第12章　考察 ……387
1　12世紀都市平泉の南辺の状況 ……387
2　志羅山遺跡のものさしと柳之御所跡のものさしの比較 ……394
3　平泉遺跡群の提子（ひさげ）について …396
4　志羅山遺跡第66次調査出土の笹塔婆についての考察 ……403
5　66次１号池出土かわらけに関する若干の考察 ……409
6　鴛鴦文銅像嵌鏡轡について ……413

第13章　自然科学分析 ……423
1　志羅山遺跡46次調査におけるトイレ遺構分析 ……423
2　志羅山遺跡第66次・74次調査出土材の樹種 ……433
3　志羅山遺跡出土轡の金属考古学的解析結果について ……445
4　志羅山遺跡（第66次）から出土したウマ遺存骨 ……455

報告書抄録

＜図版・表目次＞

第１図　遺跡位置図……2
第２図　地形分類図……3
第３図　各調査次の調査区範囲……6
第４図　各調査区の位置図……9

Ａ地区の遺構・遺物
第５図　Ａ地区の建物①（46ＳＢ１、２）……14
第６図　Ａ地区の建物②（46ＳＢ３）……16
第７図　Ａ地区の建物③（46ＳＢ４、５）……17
第８図　Ａ地区の建物④（46ＳＢ６～10）……19
第９図　Ａ地区の井戸①（46ＳＥ２～４）……22
第10図　Ａ地区の井戸②（46ＳＥ５～７）……24
第11図　Ａ地区の井戸③（46ＳＥ８～９）……25
第12図　Ａ地区の土坑①（46ＳＫ１～６）……28
第13図　Ａ地区の土坑②（46ＳＫ７～10）……30
第14図　Ａ地区の土坑③（46ＳＫ11～18）……32
第15図　Ａ地区の溝①（46ＳＤ１、２、３、12）……36
第16図　Ａ地区の溝②（46ＳＤ３、11、12、13、15）……37
第17図　Ａ地区の溝③（46ＳＤ４、５、７、８）……38
第18図　Ａ地区の溝④（46ＳＤ６、９、10、14）……41．42
Ａ地区柱穴計測表①……45
Ａ地区柱穴計測表②……46
第19図　Ａ地区の土師器、須恵器（1001～1009）……48
第20図　Ａ地区のかわらけ①（1101～1123）……51
第21図　Ａ地区のかわらけ②（1124～1145）……52
第22図　Ａ地区の常滑産陶器①（1201～1213）……54
第23図　Ａ地区の常滑産陶器②（1214～1223）……55
第24図　Ａ地区の常滑産陶器③（1224～1230）……56
第25図　Ａ地区の常滑産陶器④（1231～1244）……57
第26図　Ａ地区の常滑産陶器⑤（1245～1260）……58
第27図　Ａ地区の常滑産陶器⑥（1261～1274）……59
第28図　Ａ地区の渥美産陶器（1275～1288）……61
第29図　Ａ地区の猿投産、水沼産、須恵器系陶器（1289～1299）……62
第30図　1291～1295（擬水沼産陶器）の推定復元図……63
第31図　Ａ地区の中国産磁器（1301～1308）……64
第32図　Ａ地区の瓦（1401～1408）……65
第33図　Ａ地区の石製品（1501～1504）……66
第34図　Ａ地区の木製品（1505～1506）……67
第35図　Ａ地区の近世磁器①（1601～1620）……69
第36図　Ａ地区の近世磁器②（1621～1630）……70
第37図　Ａ地区の近世磁器③（1631～1641）……71
第38図　Ａ地区の近世磁器④（1642～1648）……72
第39図　Ａ地区の近世磁器⑤（1649～1659）……73
第40図　Ａ地区の近世陶器①（1701～1725）……75
第41図　Ａ地区の近世陶器②（1726～1740）……76
第42図　Ａ地区の近世陶器③（1741～1750）……77
第43図　Ａ地区の近世陶器④（1751～1756）……78
第44図　Ａ地区の近世陶器⑤（1757～1767）……79
第45図　Ａ地区の近世陶器⑥（1768～1781）……80
第46図　Ａ地区の近世の土製品、木製品（1782～1805）……82
第47図　Ａ地区の近世の石製品①（1806～1810）……83
第48図　Ａ地区の近世の石製品②（1811～1813）……84
第49図　Ａ地区の近世の銭貨（1821～1826）……85
第50図　Ａ地区の近代の銭貨（1827～1832）……86
第51図　Ａ地区の近世の金属製品（1833～1836）……86
第52図　近世の墓石①（1901～1902）……87
第53図　近世の墓石②（1903～1906）……88

Ｂ地区の遺構、遺物
第54図　Ｂ地区の建物①（74ＳＢ１～４）……92
第55図　Ｂ地区の建物②（74ＳＢ５～８）……94
第56図　Ｂ地区の建物③（74ＳＢ９～13）……97
第57図　Ｂ地区の建物④（74ＳＢ14～17）……100
第58図　Ｂ地区の建物⑤（74ＳＢ18～22）……102
第59図　Ｂ地区の建物⑥（74ＳＢ23～27、柱列１、２）……106
第60図　Ｂ地区の井戸①（74ＳＥ１～５）……109
第61図　Ｂ地区の土坑①（66ＳＫ３～６）……111
第62図　Ｂ地区の土坑②
（74ＳＫ２～17、19～21、23、27、32、74ＳＸ１）……114
第63図　Ｂ地区の土坑③
（74ＳＫ８～17、19～21、23、27、32、74ＳＸ１）……115
第64図　Ｂ地区の土坑④（74ＳＫ22、24～26、29、30）……120
第65図　Ｂ地区の土坑⑤（74ＳＫ１、18、28、31、33、34、37）……124
第66図　Ｂ地区の土坑⑥（74ＳＫ35、36、38）……126
第67図　Ｂ地区の溝①（46ＳＤ16、17）……127
第68図　Ｂ地区の溝②（74ＳＤ１、２）……129
第69図　Ｂ地区の溝③（74ＳＤ４、６、13、16）……130
第70図　Ｂ地区の溝④（74ＳＤ４、５、６、15、17、18）……131
第71図　Ｂ地区の溝⑤（74ＳＤ４～６）……132
第72図　Ｂ地区の溝⑥（74ＳＤ３、７～９）……135
第73図　Ｂ地区の溝⑦（74ＳＤ９～12、14）……137
第74図　Ｂ地区の塀（74ＳＡ１、２）……141
Ｂ地区柱穴計測表①……142
Ｂ地区柱穴計測表②……143
第75図　Ｂ地区の須恵器（2001～2015）……145
第76図　Ｂ地区のかわらけ①（2101～2122）……148
第77図　Ｂ地区のかわらけ②（2123～2143）……149
第78図　Ｂ地区のかわらけ③（2144～2163）……150
第79図　Ｂ地区のかわらけ④（2164～2171）……151
第80図　Ｂ地区のかわらけ⑤（2172～2189）……152
第81図　Ｂ地区のかわらけ⑥（2190～2200）……153
第82図　Ｂ地区の常滑産陶器①（2201～2213）……156
第83図　Ｂ地区の常滑産陶器②（2214～2217）……157
第84図　Ｂ地区の常滑産陶器③（2218～2230）……158
第85図　Ｂ地区の常滑産陶器④（2231～2234）……159
第86図　Ｂ地区の常滑産陶器⑤（2235～2236）……160
第87図　Ｂ地区の常滑産陶器⑥（2237～2243）……161
第88図　Ｂ地区の常滑産陶器⑦（2244～2255）……162
第89図　Ｂ地区の常滑産陶器⑧（2256～2270）……163
第90図　Ｂ地区の常滑産陶器⑨（2271～2282）……164
第91図　Ｂ地区の常滑産陶器⑩（2283～2296）……165
第92図　Ｂ地区の常滑産陶器①（2297～2305）……166
第93図　Ｂ地区の渥美産陶器①（2311～2320）……167
第94図　Ｂ地区の渥美産陶器②（2321～2331）……168
第95図　Ｂ地区の渥美産陶器③（2332～2340）……169
第96図　Ｂ地区の渥美産陶器④（2341～2352）……170

第 97図　B地区の渥美産陶器⑤（2353～2357）……171
第 98図　B地区の猿投産陶器①（2361～2367）……172
第 99図　B地区の猿投産陶器②（2368～2375）……173
第100図　B地区の水沼産、須恵器系陶器（2381～2391）……174
第101図　B地区の中国産陶磁器①（2401～2413）……176
第102図　B地区の中国産陶磁器②（2414～2419）……177
第103図　B地区の木製品①（2501～2521）……178
第104図　B地区の木製品②（2522～2545）……179
第105図　B地区の木製品③（2546～2572）……180
第106図　B地区の木製品④（2573）……181
第107図　B地区の瓦、石製品（2601～2603）……182

C地区の遺構、遺物

第108図　C地区の竪穴住居跡（46・66ＳＩ１）……186
第109図　C地区の建物①（66ＳＢ１～４）……188
第110図　C地区の建物②（66ＳＢ５～８）……190
第111図　C地区の建物③（66ＳＢ９～13）……193
第112図　C地区の建物④（66ＳＢ14～16）……195
第113図　C地区の土坑①（46ＳＫ19～28、31）……197
第114図　C地区の土坑②（46ＳＫ26～31）……199
第115図　C地区の土坑③（66ＳＫ１、２、７）……201
第116図　C地区の溝①（46ＳＤ16、17）……204
第117図　C地区の溝②（46ＳＤ16、66１号池）……205
第118図　C地区の池①（66１号池平面）……207
第119図　C地区の池②（66１号池断面）……208
第120図　C地区の池③（66１号池遺物出土状況）……209．210
第121図　C地区の塀（46・66ＳＡ１）……211
　　C地区柱穴計測表……212
第122図　46・66ＳＩ１出土遺物（3001～3009）……214
第123図　C地区の土師器、須恵器（3010～3022）……215
第124図　66１号池出土遺物①（かわらけ　3101～3119）……216
第125図　66１号池出土遺物②（かわらけ　3120～3128）……217
第126図　墨書かわらけ（3118）釈文……218
第127図　墨書かわらけ（3119）釈文……219
第128図　66１号池出土遺物③（笹塔婆3131～3140）……221
第129図　66１号池出土遺物④（笹塔婆3141～3153）……222
第130図　66１号池出土遺物⑤（笹塔婆3154～3168）……223
第131図　66１号池出土遺物⑥（笹塔婆3168～3178）……224
　　笹塔婆観察表……225
第132図　66１号池出土遺物⑦（木製品　3181～3192）……227
第133図　66１号池出土遺物⑧（木製品　3193～3201）……228
第134図　66１号池出土遺物⑨（木製品　3202～3212）……229
第135図　66１号池出土遺物⑩（木製品　3213～3228）……230
第136図　66１号池出土遺物⑪（木製品　3229～3242）……231
第137図　66１号池出土遺物⑫（木製品、瓦、鉄鎌　3243～3245）……232
第138図　66１号池出土遺物⑬（轡　3246）……234
第139図　66１号池出土遺物⑭（轡　3246）……235
第140図　66１号池出土遺物⑮（轡　3246）……236
第141図　鴛鴦の文様……237
第142図　C地区のかわらけ①（3301～3321）……239
第143図　C地区のかわらけ②（3322～3344）……240
第144図　C地区のかわらけ③（3345～3363）……241
第145図　C地区のかわらけ④（3364～3385）……242
第146図　C地区のかわらけ⑤（3386～3403）……243
第147図　C地区のかわらけ⑥（3405～3426）……244
第148図　C地区のかわらけ⑦（3427～3449）……245
第149図　C地区のかわらけ⑧（3450～3472）……246
第150図　C地区のかわらけ⑨（3473～3487）……247
第151図　C地区のかわらけ⑩（3488～3500）……248
第152図　C地区の常滑産陶器①（3501～3511）……250
第153図　C地区の常滑産陶器②（3512～3525）……251
第154図　C地区の常滑産陶器③（3526～3536）……252
第155図　C地区の渥美産陶器①（3601～3605）……253
第156図　C地区の渥美産陶器②（3606～3611）……254
第157図　C地区の渥美産陶器③（3612～3621）……255
第158図　C地区の渥美産陶器④（3623～3631）……256
第159図　C地区の渥美産陶器⑤（3632～3645）……257
第160図　C地区の渥美産陶器⑥（3646～3657）……258
第161図　C地区の渥美産陶器⑦（3658～3667）……259
第162図　C地区の渥美産陶器⑧（3668～3676）……260
第163図　C地区の渥美産陶器⑨（3677～3682）……261
第164図　C地区の猿投産陶器（3683～3685）……262
第165図　C地区の須恵器系陶器（3686～3694）……263
第166図　C地区の中国産磁器①（3701～3719）……265
第167図　C地区の中国産磁器②（3720～3732）……266
第168図　C地区の中国産磁器③（3733～3739）……267
第169図　C地区の瓦①（3801～3810）……268
第170図　C地区の瓦②（3811～3815）……269
第171図　C地区の土製品、木製品（3816～3819）……270
第172図　C地区の石製品（3820～3821）……271
第173図　C地区の近世陶磁器（3901～3913）……272

D地区の遺構、遺物

第174図　D地区の建物①（66ＳＢ17～20）……275
第175図　D地区の建物②（66ＳＢ21～24）……278
第176図　D地区の建物③（66ＳＢ25～28）……280
第177図　D地区の建物④（66ＳＢ29～33）……283
第178図　D地区の建物⑤（66ＳＢ34～38）……285
第179図　D地区の建物⑥（66ＳＢ39・40）……288
第180図　D地区の井戸（66ＳＥ１～３）……289
第181図　D地区の土坑①（66ＳＫ24～30）……291
第182図　D地区の土坑②（66ＳＫ31～33）……293
第183図　D地区の溝①（66ＳＤ16～18）……295
第184図　D地区の溝②（66ＳＤ19）……297
第185図　D地区の溝③（66ＳＤ20・21）……298
第186図　D地区の池（66２号池）……299
第187図　D地区の塀（66ＳＡ３・４）……301
　　D地区柱穴計測表①……302
　　D地区柱穴計測表②……303
第188図　66２号池出土遺物①（陶器　4001～4007）……304
第189図　66２号池出土遺物②（木製品　4008～4015）……305
第190図　66２号池出土遺物③（ざる　4016）……306
第191図　D地区のかわらけ①（4101～4123）……308
第192図　D地区のかわらけ②（4124～4142）……309
第193図　D地区の常滑産陶器（4201～4209）……310
第194図　D地区の渥美産、須恵器系陶器（4210～4217）……311
第195図　D地区の中国産磁器（4301～4308）……312
第196図　D地区の瓦①（4401～4407）……313
第197図　D地区の瓦②（4408～4409）……314
第198図　D地区の石製品、金属製品（4501～4503）……314

E地区の遺構、遺物

第199図　E地区の建物（66ＳB41・42）……317
第200図　E地区の土坑①（66ＳK８～10）……319
第201図　E地区の土坑②（66ＳK11・12）……320
第202図　E地区の焼土遺構（66ＳＸ２～８、10～15）……323
第203図　E地区の溝（66ＳＤ１～３）……326
第204図　E地区の塀（66ＳＡ２）……327
　　E地区柱穴計測表……327
第205図　E地区のかわらけ（5001～5019）……329
第206図　E地区の常滑産陶器（5101～5103）……330
第207図　E地区の瓦（5201）……330
第208図　E地区の近世陶磁器①（5301～5316）……331
第209図　E地区の近世陶磁器②（5317～5321）……332
第210図　E地区の石製品、土製品（5401～5405）……333
第211図　E地区の金属製品（5406～5407）……334

F地区の遺構、遺物

第212図　F地区の建物①（66ＳB43～48）……337
第213図　F地区の建物②（66ＳB49～54）……341
第214図　F地区の土坑①（66ＳK13～19）……345
第215図　F地区の土坑②（66ＳK20～23）……346
第216図　F地区の溝①（66ＳＤ４～６）……348
第217図　66ＳＤ６馬骨出土状況①……349
第218図　66ＳＤ６馬骨出土状況②……350
第219図　F地区の溝②（66ＳＤ７、８）……351
第220図　F地区の溝③（66ＳＤ９～12）……353
第221図　F地区の溝④（66ＳＤ13～15）……354
　　F地区柱穴計測表……356
第222図　F地区のかわらけ①（6001～6028）……358
第223図　F地区のかわらけ②（6029～6049）……359
第224図　F地区のかわらけ③（6050～6070）……360
第225図　F地区のかわらけ④（6071～6088）……361
第226図　F地区の常滑産陶器（6101～6106）……362
第227図　F地区の渥美産陶器①（6107～6120）……363
第228図　F地区の渥美産陶器②、須恵器系陶器（6121～6131）……364
第229図　F地区の中国産磁器（6201～6203）……365
第230図　F地区の金属製品（6301～6302）……366
第231図　F地区の近世陶磁器（6401～6405）……367

G地区の遺構、遺物

第232図　G地区の建物（66ＳB55～58）……371
第233図　G地区の土坑①（66ＳK34～35）……373
第234図　G地区の土坑②（66ＳK36）……374
第235図　G地区の溝（66ＳD22）……375
第236図　G地区の塀（66ＳＡ５）……376
　　G地区柱穴計測表……376
第237図　G地区のかわらけ（7001）……377
第238図　G地区の中国産磁器（7101～7103）……377
第239図　G地区の石製品（7201）……378

複数以上の調査区のまたがる遺構

第240図　道路遺構全体図……381・382
第241図　埋没沢想定図……383
第242図　埋没沢跡……385

考察

第243図　都市平泉南辺の状況……389・390
第244図　平泉遺跡群主要部……392
第245図　柳之御所跡と志羅山遺跡のものさし……395
第246図　銚子と提子……396
第247図　絵巻物にみられる提子、銚子……397
第248図　提子と提子の金具……399
第249図　陸前高田市軍見洞出土の銚子……402
第250図　主な笹塔婆……405
第251図　１号池かわらけ①……410
第252図　１号池かわらけ②……411

附図　１　志羅山遺跡46・66・74次調査全体図
　　２　A地区遺構配置図①
　　３　A地区遺構配置図②
　　４　B地区遺構配置図
　　５　C地区・E地区遺構配置図
　　６　D地区・F地区遺構配置図
　　７　G地区遺構配置図

＜写真図版目次＞

写真図版１　鴛鴦文轡……463
写真図版２　墨書かわらけ……464
写真図版３　笹塔婆①……465
写真図版４　笹塔婆②……466
写真図版５　木製品・常滑産甕……467
写真図版６　Ｂ地区出土の中国産陶磁器……468
写真図版７　航空写真……469
写真図版８　轡Ｅ部から摘出した試料片のマクロ組織と含有する元素濃度分布のカラーマップ……470
写真図版９　昭和30年代の調査区付近……471
写真図版10　航空写真①……472
写真図版11　航空写真②……473
写真図版12　道路状遺構①……474
写真図版13　道路状遺構②……475
写真図版14　66次１号池、Ｄ地区沢整地層……476
写真図版15　66次１号池遺物出土状況①……477
写真図版16　66次１号池遺物出土状況②……478
写真図版17　馬骨出土状況、66ＳＤ10と66ＳＤ17……479

写真図版18　Ａ地区の遺構①……480
写真図版19　Ａ地区の遺構②……481
写真図版20　Ａ地区の遺構③……482
写真図版21　Ａ地区の遺構④……483
写真図版22　Ａ地区の遺構⑤……484
写真図版23　Ａ地区の遺構⑥……485
写真図版24　Ａ地区の遺構⑦……486
写真図版25　Ａ地区の遺構⑧……487
写真図版26　Ａ地区の遺構⑨……488
写真図版27　Ａ地区の遺構⑩……489
写真図版28　Ａ地区の遺構⑪……490
写真図版29　Ａ地区の遺構⑫……491

写真図版30　Ｂ地区の遺構①……492
写真図版31　Ｂ地区の遺構②……493
写真図版32　Ｂ地区の遺構③……494
写真図版33　Ｂ地区の遺構④……495
写真図版34　Ｂ地区の遺構⑤……496
写真図版35　Ｂ地区の遺構⑥……497
写真図版36　Ｂ地区の遺構⑦……498
写真図版37　Ｂ地区の遺構⑧……499
写真図版38　Ｂ地区の遺構⑨……500
写真図版39　Ｂ地区の遺構⑩……501
写真図版40　Ｂ地区の遺構⑪……502
写真図版41　Ｂ地区の遺構⑫……503
写真図版42　Ｂ地区の遺構⑬……504
写真図版43　Ｂ地区の遺構⑭……505
写真図版44　Ｂ地区の遺構⑮……506
写真図版45　Ｂ地区の遺構⑯……507
写真図版46　Ｂ地区の遺構⑰……508
写真図版47　Ｂ地区の遺構⑱……509
写真図版48　Ｂ地区の遺構⑲……510
写真図版49　Ｂ地区の遺構⑳……511
写真図版50　Ｂ地区の遺構㉑……512
写真図版51　Ｂ地区の遺構㉒……513
写真図版52　Ｂ地区の遺構㉓……514

写真図版53　Ｃ地区の遺構①……515
写真図版54　Ｃ地区の遺構②……516
写真図版55　Ｃ地区の遺構③……517
写真図版56　Ｃ地区の遺構④……518
写真図版57　Ｃ地区の遺構⑤……519
写真図版58　Ｃ地区の遺構⑥……520
写真図版59　Ｃ地区の遺構⑦……521
写真図版60　Ｃ地区の遺構⑧……522
写真図版61　Ｃ地区の遺構⑨……523
写真図版62　Ｃ地区の遺構⑩……524
写真図版63　Ｃ地区の遺構⑪……525
写真図版64　Ｃ地区の遺構⑫……526
写真図版65　Ｃ地区の遺構⑬……527
写真図版66　Ｃ地区の遺構⑭……528
写真図版67　Ｃ地区の遺構⑮……529

写真図版68　Ｄ地区の遺構①……530
写真図版69　Ｄ地区の遺構②……531
写真図版70　Ｄ地区の遺構③……532
写真図版71　Ｄ地区の遺構④……533
写真図版72　Ｄ地区の遺構⑤……534
写真図版73　Ｄ地区の遺構⑥……535
写真図版74　Ｄ地区の遺構⑦……536
写真図版75　Ｄ地区の遺構⑧……537
写真図版76　Ｄ地区の遺構⑨……538

写真図版77　Ｅ地区の遺構①……539
写真図版78　Ｅ地区の遺構②……540
写真図版79　Ｅ地区の遺構③……541
写真図版80　Ｅ地区の遺構④……542
写真図版81　Ｅ地区の遺構⑤……543
写真図版82　Ｅ地区の遺構⑥……544

写真図版83　Ｆ地区の遺構①……545
写真図版84　Ｆ地区の遺構②……546
写真図版85　Ｆ地区の遺構③……547
写真図版86　Ｆ地区の遺構④……548
写真図版87　Ｆ地区の遺構⑤……549
写真図版88　Ｆ地区の遺構⑥……550

写真図版89　Ｇ地区の遺構①……551
写真図版90　Ｇ地区の遺構②……552

写真図版91　Ａ地区の遺物①（1001～1103）……553
写真図版92　Ａ地区の遺物②（1104～1115）……554
写真図版93　Ａ地区の遺物③（1116～1132）……555
写真図版94　Ａ地区の遺物④（1133～1206）……556
写真図版95　Ａ地区の遺物⑤（1207～1220）……557
写真図版96　Ａ地区の遺物⑥（1221～1226）……558
写真図版97　Ａ地区の遺物⑦（1227～1237）……559
写真図版98　Ａ地区の遺物⑧（1238～1252）……560
写真図版99　Ａ地区の遺物⑨（1253～1270）……561

写真図版100　A地区の遺物⑩（1271～1286）……562
写真図版101　A地区の遺物⑪（1287～1402）……563
写真図版102　A地区の遺物⑫（1403～1610）……564
写真図版103　A地区の遺物⑬（1612～1641）……565
写真図版104　A地区の遺物⑭（1642～1710）……566
写真図版105　A地区の遺物⑮（1711～1740）……567
写真図版106　A地区の遺物⑯（1741～1749）……568
写真図版107　A地区の遺物⑰（1750～1759）……569
写真図版108　A地区の遺物⑱（1760～1781）……570
写真図版109　A地区の遺物⑲（1782～1812）……571
写真図版110　A地区の遺物⑳（1813～1836）……572
写真図版111　A地区の遺物㉑（1901～1906）……573

写真図版112　B地区の遺物①（2001～2105）……574
写真図版113　B地区の遺物②（2106～2130）……575
写真図版114　B地区の遺物③（2131～2153）……576
写真図版115　B地区の遺物④（2154～2169）……577
写真図版116　B地区の遺物⑤（2170～2184）……578
写真図版117　B地区の遺物⑥（2185～2207）……579
写真図版118　B地区の遺物⑦（2208～2215）……580
写真図版119　B地区の遺物⑧（2216～2233）……581
写真図版120　B地区の遺物⑨（2231、2234）……582
写真図版121　B地区の遺物⑩（2235～2237）……583
写真図版122　B地区の遺物⑪（2238～2249）……584
写真図版123　B地区の遺物⑫（2252～2270）……585
写真図版124　B地区の遺物⑬（2271～2288）……586
写真図版125　B地区の遺物⑭（2289～2305）……587
写真図版126　B地区の遺物⑮（2311～2320）……588
写真図版127　B地区の遺物⑯（2321～2332）……589
写真図版128　B地区の遺物⑰（2333～2343）……590
写真図版129　B地区の遺物⑱（2344～2362）……591
写真図版130　B地区の遺物⑲（2363～2367）……592
写真図版131　B地区の遺物⑳（2368～2386）……593
写真図版132　B地区の遺物㉑（2387～2419）……594
写真図版133　B地区の遺物㉒（2501～2536）……595
写真図版134　B地区の遺物㉓（2537～2603）……596

写真図版135　C地区の遺物①（3001～3018）……597
写真図版136　C地区の遺物②（3019～3113）……598
写真図版137　C地区の遺物③（3114～3125）……599
写真図版138　C地区の遺物④（3118、3119）……600
写真図版139　C地区の遺物⑤（3131～3140）……601
写真図版140　C地区の遺物⑥（3141～3152）……602
写真図版141　C地区の遺物⑦（3153～3166）……603
写真図版142　C地区の遺物⑧（3167～3178）……604
写真図版143　C地区の遺物⑨（3181～3195）……605
写真図版144　C地区の遺物⑩（3196～3202）……606
写真図版145　C地区の遺物⑪（3203～3224）……607
写真図版146　C地区の遺物⑫（3225～3245）……608
写真図版147　C地区の遺物⑬（3246）……609
写真図版148　C地区の遺物⑭（3246）……610
写真図版149　C地区の遺物⑮（3246）……611
写真図版150　C地区の遺物⑯（3246）……612
写真図版151　C地区の遺物⑰（3301～3312）……613
写真図版152　C地区の遺物⑱（3313～3324）……614
写真図版153　C地区の遺物⑲（3325～3337）……615
写真図版154　C地区の遺物⑳（3338～3349）……616
写真図版155　C地区の遺物㉑（3350～3361）……617
写真図版156　C地区の遺物㉒（3362～3375）……618
写真図版157　C地区の遺物㉓（3376～3394）……619
写真図版158　C地区の遺物㉔（3395～3420）……620
写真図版159　C地区の遺物㉕（3421～3433）……621
写真図版160　C地区の遺物㉖（3434～3451）……622
写真図版161　C地区の遺物㉗（3452～3470）……623
写真図版162　C地区の遺物㉘（3471～3483）……624
写真図版163　C地区の遺物㉙（3484～3500）……625
写真図版164　C地区の遺物㉚（3501～3514）……626
写真図版165　C地区の遺物㉛（3515～3533）……627
写真図版166　C地区の遺物㉜（3534～3607）……628
写真図版167　C地区の遺物㉝（3608～3616）……629
写真図版168　C地区の遺物㉞（3617～3627）……630
写真図版169　C地区の遺物㉟（3628～3645）……631
写真図版170　C地区の遺物㊱（3646～3662）……632
写真図版171　C地区の遺物㊲（3663～3674）……633
写真図版172　C地区の遺物㊳（3675～3684）……634
写真図版173　C地区の遺物㊴（3685～3694）……635
写真図版174　C地区の遺物㊵（3701～3723）……636
写真図版175　C地区の遺物㊶（3724～3810）……637
写真図版176　C地区の遺物㊷（3811～3913）……638

写真図版177　D地区の遺物①（4001～4014）……639
写真図版178　D地区の遺物②（4015～4118）……640
写真図版179　D地区の遺物③（4119～4135）……641
写真図版180　D地区の遺物④（4136～4217）……642
写真図版181　D地区の遺物⑤（4301～4503）……643

写真図版182　E地区の遺物①（5001～5016）……644
写真図版183　E地区の遺物②（5017～5407）……645

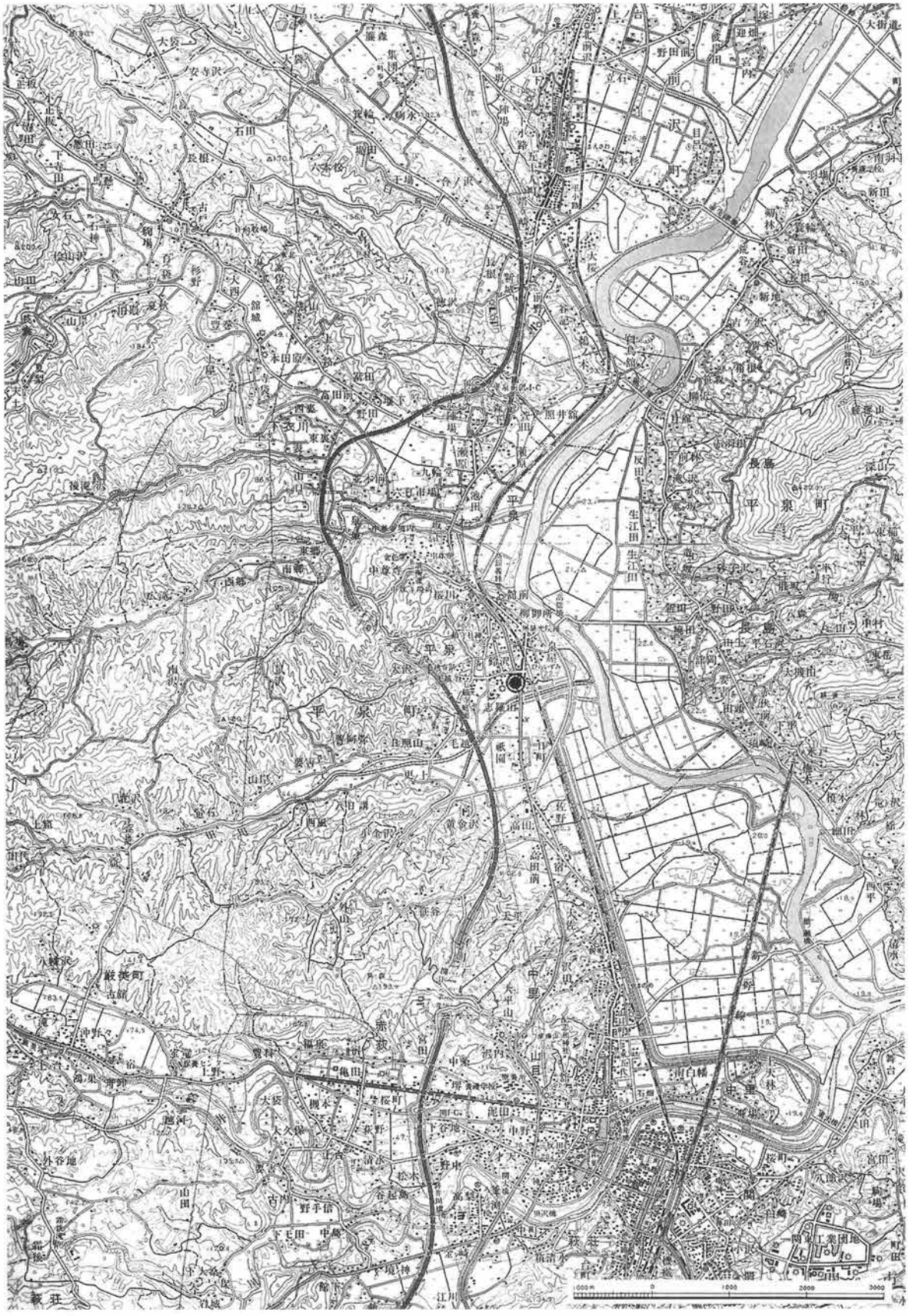
写真図版184　F地区の遺物①（6001～6024）……646
写真図版185　F地区の遺物②（6025～6046）……647
写真図版186　F地区の遺物③（6047～6065）……648
写真図版187　F地区の遺物④（6066～6081）……649
写真図版188　F地区の遺物⑤（6082～6111）……650
写真図版189　F地区の遺物⑥（6112～6123）……651
写真図版190　F地区の遺物⑦（6124～6405）……652

写真図版191　G地区の遺物①（7001～7201）……653

第１章　　調査に至る経過

一関遊水地事業は、北上川上流改修の一大プロジェクトとして、岩手県一関市・平泉町地区を洪水から守るため、二線堤方式による遊水地を建設するもので、上流ダム群とともに北上川治水計画の根幹をなすものである。遊水地は延長25kmの地区堤と延長18kmの小堤に囲まれた第一遊水地から第三遊水地まであわせて１，450haからなり、洪水調整・市街地等の水害防除および土地の高度利用を目的とするものである。事業は、昭和48年に工事実施基本計画が決定されたのを受けて昭和53年から本格的な着工のはこびとなった。

この事業に関わる埋蔵文化財包含地の取扱いについては、岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との間で協議がおこなわれた。関連する遺跡は柳之御所跡・泉屋・志羅山の３遺跡であり、柳之御所跡は昭和63年度、泉屋遺跡は平成３年度、志羅山遺跡は平成４年度から財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業として調査が開始された。そのうち、本報告書に関連する太田川堤防建設および国道４号太田橋建設に伴う志羅山遺跡の発掘調査は平成７年度から行なわれることになり、平成７年の８月７日から調査を着手した。なお志羅山遺跡は平泉町教育委員会などにより幾度か調査がおこなわれており、一連の調査次数を与えてきた。そこで平泉町教育委員会と埋蔵文化財センターが協議のうえ、平成７年度の調査は第46次調査、平成９年度は第66次調査、平成10年度は第74次調査とすることとした。



第１図　遺跡位置図

（国土地理院発行５万分の１地形図
「水沢」・「一関」を使用

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　位置

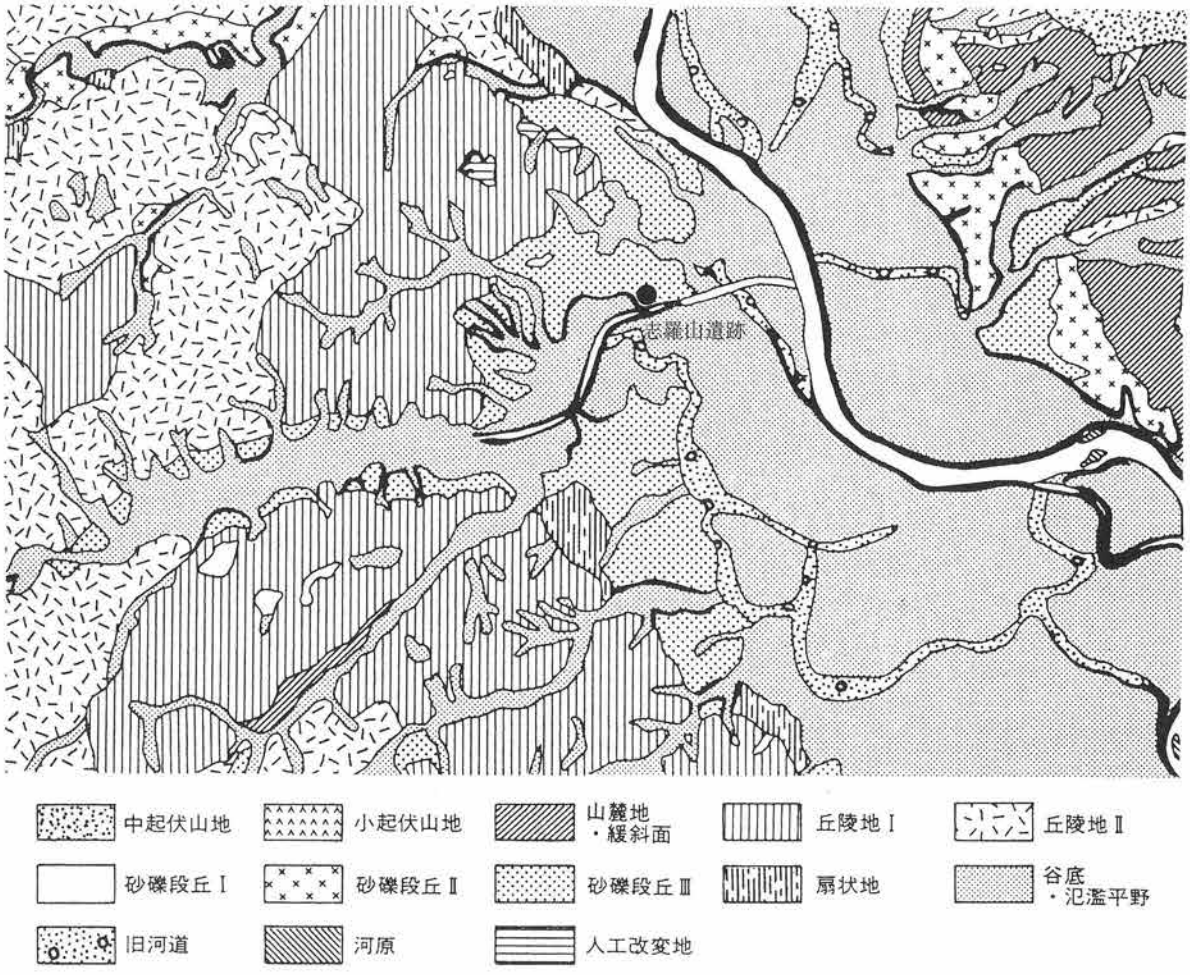
本遺跡の所在する岩手県西磐井郡平泉町は、県南部に位置し、面積6375㎢、人口は約9600人の町である。町のほぼ中央部を北上川が流れ、南は一関市、北は胆沢郡前沢町と衣川村、東は東磐井郡東山町に接する。

志羅山遺跡は平泉町市街地の南東部に位置する、東側は旧国道４号線、南側は太田川がその境界になっている。本報告書の調査区は、国道４号線の両脇部部分である。

本遺跡は国土地理院発行の５万分の１地形図「一関」（ＮＪ－54－14－15）、及び２万５千分の１の地形図「平泉」（ＮＪ－54－14－15－３）の図幅に含まれ、北緯38° 58′ 59″、東経141° 7′ 30″付近にある。

第２節　地形

平泉町付近は中央に北上川が南に流れ低地が形成されており、西に奥羽山脈、東に北上高地が広がる。西岳付近に源を発し岩手県を縦断する北上川は延長約247kmあり、一関の狐禅寺付近の狭窄部を経て宮城県に



第２図　地形分類図

到り、追波湾に注いでいる。狐禅寺付近の狭窄部はこの地方で大洪水が起こる要因の一つとなっている。北上川は平泉の中心部で氾濫平野の西縁を平泉段丘と接するように流れ、志羅山遺跡の南を流れる太田川と合流した後東に流れを変える。北上高地西縁がのびてきている氾濫平野の東には北東に束稲山（標高595.7m）、東に観音山（325.2m）がある。西側に比べて起伏量が大きく主に山地として分類されている。西側は主に丘陵地に分類され、平泉西方には衣川丘陵が広がる。本遺跡を含む平泉中心部は北上川の西にあり、平泉段丘の北半に立地する。平泉段丘は北上川によって形成された段丘で、範囲は狭く氾濫平野との比高もそれほど大きくないが、崖線は明瞭である。今回の調査区は志羅山遺跡の南端に位置し、太田川を挟んで沖積平野と接しており平泉遺跡群の南部にあたる。

第３章　調査・整理の方法

第１節　調査の経過

本書で報告するのは志羅山遺跡第46次、第66次、第74次調査についてである。

これ以外に一関遊水地事業の一環の太田川関係工事に伴う遺跡（泉屋遺跡、志羅山遺跡）の発掘は多年度にわたっておこなわれている。平成３年度には泉屋遺跡第７次調査がおこなわれている。平成４年には志羅山遺跡第14次調査がおこなわれ、平成５年度には志羅山遺跡第25次調査、泉屋遺跡第10次、第11次調査がおこなわれている。平成６年度には泉屋遺跡第13次調査が、平成７年度には泉屋遺跡第15次調査がおこなわれている。これらの調査の報告書はすでに発刊済みである。(㈶岩手県埋文センター1993 泉屋遺跡発掘調査報告書 第184集)、(㈶岩手県埋文センター1995 志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書 第216集)、(㈶岩手県埋文センター1997 泉屋山遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書 第247集)。

また、報告書は未刊行であるが、平成８年度に泉屋遺跡第16次調査がおこなわれている。

志羅山遺跡は平成10年度の第74次調査をもって、太田川関係工事に伴う遺跡発掘は終了した。泉屋遺跡は平成11年度以降も太田川関係の発掘調査は続けられる予定である。

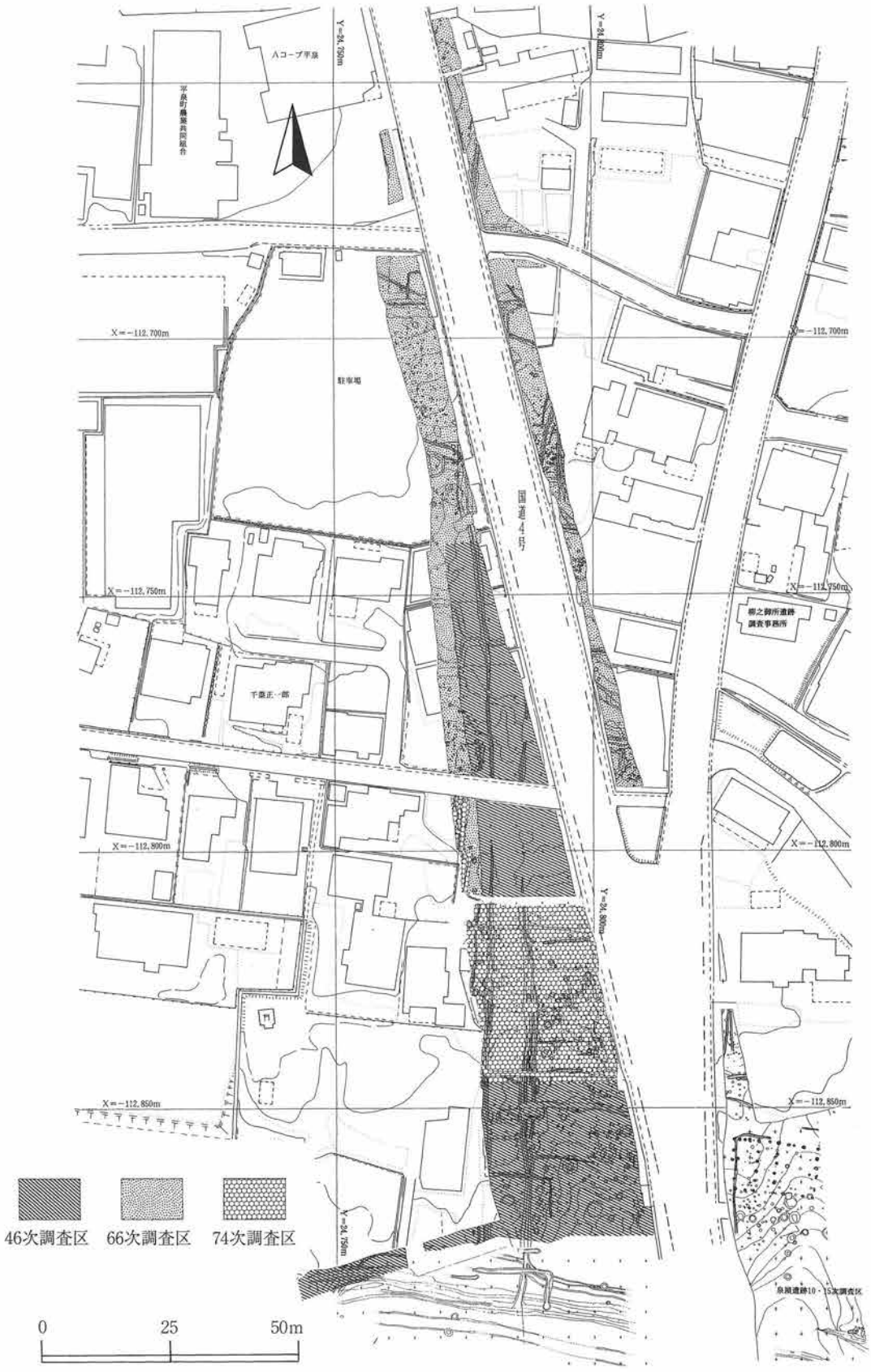
以下、本報告書に掲載の志羅山遺跡第46次、66次、74次の経過を述べる。

（１）志羅山遺跡第46次調査（平成７年度）

野外調査は平成７年８月７日から11月22日までおこなった。調査面積は2102㎡である。途中８月９日から８月31日まで、水沢市白井坂遺跡を支援のため、野外調査を中断した。調査区域は本報告書のＡ地区と、Ｂ地区の北部、Ｃ地区の東側である。Ａ地区では12世紀の道路跡、井戸、近世の屋敷跡が検出された。Ｂ地区では削平が著しく、遺構の残存度が極端に悪かったが、道路の側溝跡が検出された。Ｃ地区では道路側溝と埋没沢が検出された。埋没沢は埋め立て整地されており、その上から道路側溝が掘り込まれていた。10月28日（土）に現地説明会をおこなった。

（２）志羅山遺跡第66次調査（平成９年度）

野外調査は平成９年４月７日から８月31日までおこなった。調査面積は1891㎡である。調査区域はＣ地区の西側、Ｄ地区、Ｅ地区、Ｆ地区、Ｇ地区、Ｂ地区の北側の西側の一部である。この調査区は国道４号線に沿った細長く、幅の狭い調査区が多く、調査は難儀した。Ｃ地区では埋没沢を埋め立てて作った池が検出され、鉄地銅象嵌の轡が出土した。他にこの池からは笹塔婆、墨書かわらけ、馬歯など特異な遺物が出土しており、祭祀的な行為が行われていたと推定される。Ｄ地区では埋没沢が検出され、埋め立て整地が行われていた。この上には整地層を掘りぬく形で池が構築されていた。これは13～14世紀の遺構と考えられる。他に多数の掘立柱建物、井戸、土坑が検出されている。また道路側溝と、それに平行する形で板塀跡が検出されている。Ｅ、Ｆ地区では埋没沢とその整地層が検出されている。またＦ地区では道路側溝と道路側溝にぶつかる大規模な東西の溝が検出されている。Ｇ地区では道路側溝とそれと平行な状態で板塀跡が検出されている。



第3図　各調査次の調査区範囲

（３）志羅山遺跡第74次調査（平成10年度）

野外調査は平成10年５月１日から７月31日までおこなった。調査面積は1001㎡である。調査区域はＢ地区である。Ｂ地区では道路側溝の跡と道路の両側から掘立柱建物跡、井戸、板塀跡が検出された。７月18日（土）に現地説明会をおこなった。

（４）室内整理

室内整理は平成７年度、９年度、10年度におこなった。

平成７年度は11月１日から３月29日まで、担当は羽柴直人、吉田理である。

平成９年度は11月４日から３月31日まで、担当は羽柴直人、高橋実央である。

平成10年度は11月１日から２月26日まで、担当は羽柴直人である。

平成７年度、９年度の整理作業は、その年度の出土遺物、検出遺構の整理をおこった。平成10年度はそれに加えて、まとめや編集をおこなった。

第２節　野外調査の方法

（１）グリッドの設定

グリッドの設定は志羅山遺跡第14次調査の基準に準拠しており、その名称の付し方も同じである。

グリッドは平面直角座標のＸ系に沿って設定しており、大グリッドは１辺が50m、小グリッドは大グリッドの各辺を10等分して一辺５ｍとしている。グリッドの起点（ＩＡ０ａ）はＸ＝－112945.000m、Ｙ＝24720.000mとし、ここから大グリッドは北に向かってローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ‥‥）、東に向かって大文字のアルファベット（Ａ、Ｂ、Ｃ‥‥）とする。小グリッドは北に向かって（０、１、２‥‥９、０）、東に向かって（ａ、ｂ、ｃ‥‥ｊ）で示している。グリッドの名称はその南西隅の杭の名称による。基準杭設置は第46次、第66次調査では第一航業株式会社に、第74次調査では（株）一測設計株式会社に委託した。

（２）遺構の名称

遺構の名称は以下のように略号を付した。

建物・・ＳＢ　竪穴住居・・ＳＩ　井戸・井戸状・・ＳＥ　土坑・・ＳＫ　溝・・ＳＤ　カマド、焼土遺構・・ＳＸ　塀跡・・ＳＡ　柱穴・・Ｐ

本報告書では調査次が複数にわたるため、遺構の略号の上に調査次数を付している。遺構の番号は検出順に算用数字を付していった。なおこの番号には調査の過程や調査後の検討で遺構になりえないと判断したものもあり欠番が生じていることもある。また池跡が２基検出されているが、これは略号付さず、「66１号池」、「66２号池」というように呼称している。

（３）粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを設定し遺物の包含状況、遺構の確認面を把握した。調査区の大部分では12世紀の生活面は残存しておらず、多くは遺構確認面まで重機を用いて表土を除去した。12世紀の遺物を多く包含する層は人力によって表土を除去した。

遺構の確認は表土を除去した面を、ジョレン、両刃鎌で平滑にしプランを確認するようにした。

（４）遺構の精査

検出した遺構は土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。井戸の場合は一度に底面まで２分法で掘り下げることは安全上困難であった。よって上面から可能なかぎり２分法で掘り下げ、写真撮影、実測、土層観察をおこない、その後危険と判断した場合は、土層の変化に注意しながら、断面観察を行なわず丸掘りした。柱穴は平面で柱痕の確認、他の遺構又は柱穴同士の重複関係を把握することとし、断面の立ち割りは基本的におこなわず、そしてその分の余力は建物プランを把握することに注いだ。建物のプランが把握できなければ、個々の柱穴の観察の意味は低くなると考えたのである。

（５）遺物の取り上げ

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能なかぎり埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

（６）実測・写真撮影

平面実測は簡易遣り方測量で５ｍグリッドを１ｍに細分したメッシュを用いておこなった。原則として1/20の縮尺を用い、必要に応じて任意の縮尺を用いた。各調査次終了時に遺構確認面の地形測量を、平板を用いておこなった。等高線は20cm毎に記録した。

写真撮影は35㎜モノクロームとカラースライド各１台を主に使用し、６×７cmモノクローム１台を補助的に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行い、各調査次終了時にセスナ機により空中写真を撮影した。空撮は東邦航空株式会社に依託した。

第３節　　室内整理の方法

出土遺物は水洗、注記を行い、必要なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書登載遺物を選びだし登録を行なった。各調査次の調査区が入り組み、調査次を越えて接合する遺物もあり、調査次ごとに遺物を区分していない。

遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で実測した実測図は、必要なものについては第２原図を作成した。その後これらの遺物、遺構の実測図のトレースを行い。種別ごとに観察表と図版を作成した。

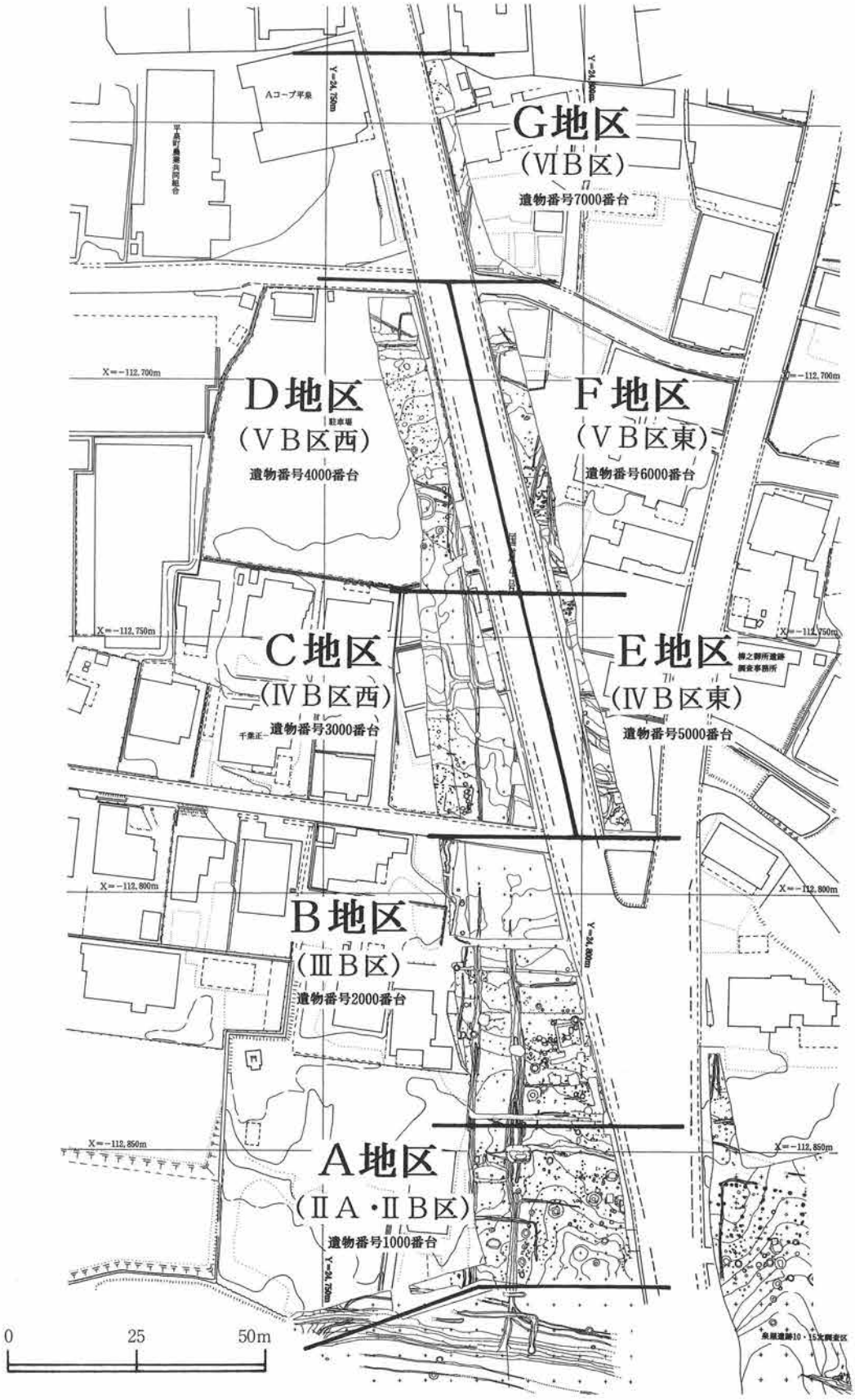
撮影したフィルムはネガアルバムにベタ焼き写真と一組にして収納した。カラースライドはスライドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。

これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

第４節　本報告書の構成

（１）本報告書は46次、66次、74次の３次に渡っての調査の記録である。通常であれば調査次ごとに成果を報告するべきであろう。しかし各調査次の調査区は土地買収の関係などで複雑に入り組み、同じ調査次で飛び地などが存在し、また複数の調査次にまたがる遺構や、調査次を越えて接合する遺物もあり、調査次ごとの報告は必ずしも適切でないと判断した。また調査区の全長が200m以上にわたり、遺構、遺物を一括して報告するには差し支えがあると考えられる。よって本報告書では、３次にわたる調査区全体を７か所に分けて、各地区毎に遺構、遺物を掲載する形をとる。

調査区はＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区、Ｄ地区、Ｅ地区、Ｆ地区、Ｇ地区の７か所である。これらの調査区は



第4図　各調査区の位置図

調査次のまとまり、大グリッドの境界などを加味して設定した。

Ａ地区は概ね大グリッドのＩＢ区、ⅡＢ区に相当する。北側のＢ地区との境界は、大グリッドのⅢラインとする。Ａ地区は、すべて第46次調査区に相当する。「ⅡＢ区で」などと称している場合もＡ地区を指していると判断していただきたい。

Ｂ地区は概ね大グリッドのⅢＢ区に相当する。ただし北限を未調査の東西に走る現道までにしており、大グリッドのⅣラインより北の部分もわずかに含まれる。「ⅢＢ区で」などと称している場合もＢ地区を指していると判断していただきたい。Ｂ地区の調査は南側の半分以上が第74次調査でおこなわれたが、北側部分は第46次、第66次調査調査区が含まれる。

Ｃ地区は大グリッドⅣＡ区とⅣＢ区の国道４号線より西の部分が相当する。南境は未調査の東西に走る現道、北境は調査次の関係上、大グリッドのⅤラインよりも４ｍほど北の部分とする。ここが第46次調査の北限であったためである。このＣ地区を「ⅣＢ区西」と称していることもある。

Ｄ地区は主にＶＢ区の国道４号線西側が相当する。北側は東西に走る現道を境界とするため、大グリッドのⅣラインより北のＶＢ区も、一部Ｄ地区に含んでいる。本調査区を「ＶＢ区西」と称する場合もある。

Ｅ地区はⅣＢ区の国道４号線の東側である。北側の境界は、概ね大グリッドのⅤラインである。このＥ地区は「ⅣＢ区東」と称することもある。

Ｆ地区はＶＢ区の国道４号線の東側である。北側は東西に走る現道を境界とするため、大グリッドのⅣラインより北のⅣＢ区も、一部Ｆ地区に含んでいる。このＥ地区は「ⅣＢ区東」と称することもある。

Ｇ地区は概ねⅣＡ、ⅣＢ区に相当する。ただし東西に走る現道より南の、Ｄ地区、Ｆ地区に含まれるⅣＢ区は本地区に含まない。Ｇ地区は国道４号線の両側を一括して含むことにする。

（２）遺構は種別ごとに各調査区別に掲載した。遺構の所属時期ごとに報告することも考えたが、全ての遺構の所属時期が明らかではないので機械的に遺構番号順に掲載した。所属時期については各遺構の文章中に考えられる可能性を記した。遺構の縮尺は建物（ＳＢ）、溝（ＳＤ）が１／100、竪穴住居（ＳＩ）、井戸・井戸状（ＳＥ）、土坑（ＳＫ）、焼土遺構（ＳＸ）塀（ＳＡ）が１／60を原則とした。各図版にスケールを付してある。

（３）遺物は出土遺構ごとの掲載はおこなわず、器種ごとに，また可能なかぎり時期別に掲載した。ただし、66１号池、66２号池出土遺物は、その一括性に意味があると考え、そのかぎりではない。

遺物は概ね時代順に、各調査区ごとに掲載した。Ａ地区の遺物番号は1000番台、Ｂ地区の遺物は2000番台、Ｃ地区の遺物は3000番台、Ｄ地区の遺物は4000番台、Ｅ地区の遺物は5000番台、Ｆ地区の遺物は6000番台、Ｇ地区の遺物は7000番台の番号を付して、区別しやすいようにした。

遺構からの出土遺物は、遺構の事実記載の文章中にその旨を記載してある。

遺物実測図の縮尺は、１／２、１／３を多く用いている。同じ種別のものは同一縮尺になるように掲載した。ただし木製品は１／３を原則としているが、笹塔婆は１／２の縮尺を用いた。各図版にはスケールを付してある。また遺物実測図の下に遺物観察表を付してある。よって文章では個々の遺物についての説明はかならずしも詳細におこなっていない。

（４）遺構写真図版の縮尺は全て任意縮尺である。遺物写真の縮尺は実測図の縮尺と同じにしてある。しかし一部は掲載の都合上そのかぎりでない。遺物に付した番号は実測図の番号と共通である。

第４章　Ａ地区の遺構・遺物

第４章　Ａ地区の遺構・遺物

第１節　Ａ地区の概観

Ａ地区は本報告書の調査区の最も南の部分である。大グリッドのⅡＡ区、ⅡＢ区が相当する。Ａ地区は全体が46次調査次に調査された。

本調査区の西側には12世紀の道路状遺構が南北に縦貫する。東側の側溝に掘り返しの重複がみられ、そのたびに路面が狭くなっている。この側溝の重複はＢ地区の南半までみられる。道路遺構の東側では12世紀の井戸が４基（46ＳＥ６、46ＳＥ７、46ＳＥ８、46ＳＥ９）検出されている。これらの井戸に伴う掘立柱建物が本調査区では検出されていない。おそらくＢ地区で検出された三間四面の建物（74ＳＢ１、74ＳＢ４、74ＳＢ６）などがこれらの井戸に伴う建物と推測される。また道路側溝から直交する形で伸びる46ＳＤ14は屋敷を区画する溝と考えられる。46ＳＫ８はいわゆるトイレ状土坑である。

本調査区の西側に突出する部分では東西に走る大規模な溝46ＳＤ７が検出されている。埋土中に十和田ａ火山灰を含むが、二次的な堆積の結果と考えられる。この大規模な溝は沖積低地に突出する段丘の基部を切る形で構築されており、区画溝であるとともに、この部分を走る道路の南側側溝であると考えられる。対になる北側の溝は検出されていないが、下水管工事のために調査できなかった部分に存在していたと推測される。

本調査区では近世の遺構、遺物も多量に検出されている。本調査区の地番は志羅山32番地で、調査以前は鈴木寛氏（現平泉町大沢）の屋敷地であった。検出された近世の遺構、遺物は鈴木氏の先祖の営みによるものと理解できる。

検出された掘立柱建物の中で46ＳＢ１、46ＳＢ２、46ＳＢ３、46ＳＢ４の４棟が母屋と考えられる。これらはＳＢ１→ＳＢ２→ＳＢ３→ＳＢ４の順に変遷したと考えられる。最も古いＳＢ１は17世紀初頭と推測される。また遺構としては検出されていないが、掘立柱の母屋に後続する礎石建物の母屋が存在していた。これは昭和41年に火災によって焼失した建物で、18世紀後半の建築と推測される（詳細は　羽柴1997「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について」　岩手埋文紀要ⅩⅪに記載）。

まとめると鈴木氏の先祖は17世紀初頭にこの地に屋敷を構え、掘立柱建物の母屋を４回建て、18世紀後半に礎石建物の母屋に建て替え、その建物が昭和41年に焼失し、平成７年に一関遊水地事業の用地買収によって移転した、ということになる。

屋敷の背面に東西に走る溝46ＳＤ９は、近世屋敷の排水のための溝であり、それに伴う46ＳＫ６は水場、洗い場といった用途と理解できる。近世以降の井戸である46ＳＥ２、46ＳＥ３、46ＳＥ４、46ＳＥ５はもちろん屋敷に伴うものである。

出土遺物は12世紀に所属するものでは、かわらけ、国産陶器、中国産磁器、瓦、砥石、滑石製石鍋がある。国産陶器の常滑産甕（1224～1227）は同一個体の破片がＢ地区の74ＳＥ３から出土している。また擬水沼産陶器の1291～1295（同一個体）は袈裟襷文の壷で、おそらく四耳壷であったと推測される。滑石製石鍋（1504）は外面に煤が付着しており実際に鍋として使用があったことがわかる。だが突帯が削られており、何かに転用する意図があった可能性がある。

近世の遺物は上述のように、鈴木氏の先祖の屋敷に伴うもので、多量の遺物が出土している。磁器、陶器、土製品、石製品、銭、金属製品がある。陶磁器は17世紀初頭の中国産の磁器染付碗（1601～1604）、16世紀

末～17世紀初頭の唐津産陶器皿（1726、1727）が最古級のものである。

1901～1906の墓石は鈴木氏の先祖のものではないが、本調査区の南に近接する志羅山遺跡14次調査区にあったものである。最古は寛延４年（1751）のものである。

第２節　遺構

１　建物

46ＳＢ１（第５図、写真図版18）

〔位置〕ⅡＢ７ｃ～９ｃ、７ｄ～９ｄ、８ｅ～９ｅに位置する。

〔重複〕46ＳＫ６、ＳＫ７と重複するが本建物が古い。また46ＳＢ２とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは1260cm、梁間は672cmと推定される。面積は約25.7坪である。構造は上屋柱と下屋柱からなっており、上屋柱と下屋柱では柱穴の掘方の大きさの差が著しい。間仕切りの柱穴は検出されなかった。使用した柱穴は18個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＥ－９°－Ｓである。

〔柱間寸法〕桁行では6尺8寸（約206cm）と９尺７寸（約294cm）、梁間では8尺3寸（約251cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。他の母屋と考えられる建物の年代観との兼ね合いから近世初頭の所属と考えられる。

46ＳＢ２（第５図、写真図版18）

〔位置〕ⅡＢ７ｃ、８ｃ、７ｄ、８ｄ、７ｅ、８ｅに位置する。

〔重複〕46ＳＫ６、ＳＫ７と重複するが本建物が古い。また46ＳＫ18とプランが重複するが、本建物が新しい。また46ＳＢ１とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは1196cm、梁間は451cmと推定される。面積は約16.3坪である。この面積は想定される下屋部分の面積は含んでいない。下屋柱の柱穴は１個も検出されなかったが重複する46ＳＢ１のプランから推定して、本建物にも上屋柱に対応する形で下屋柱が存在していたと考えたい。下屋柱の柱穴は掘り込みが上屋柱の柱穴にくらべて極端に浅かったため検出されなかったと解釈する。使用した柱穴は10個である。

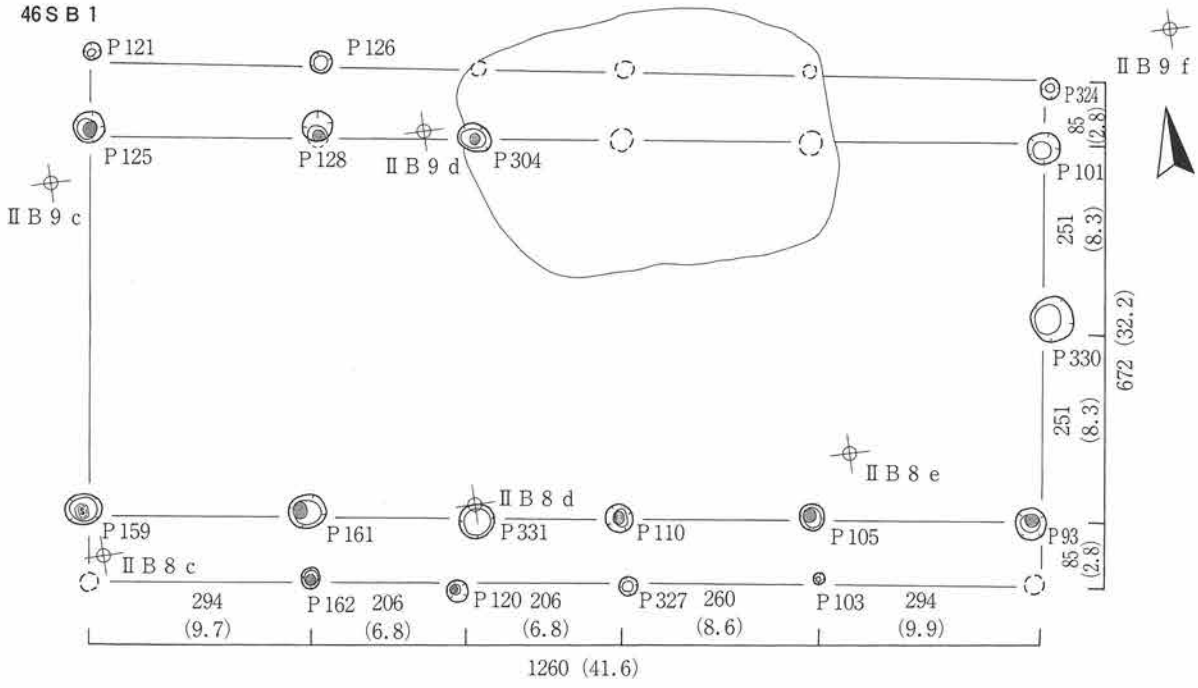
〔建物方位〕桁行の軸方向はＥ－４°－Ｓである。

〔柱間寸法〕桁行では７尺７寸（約233cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

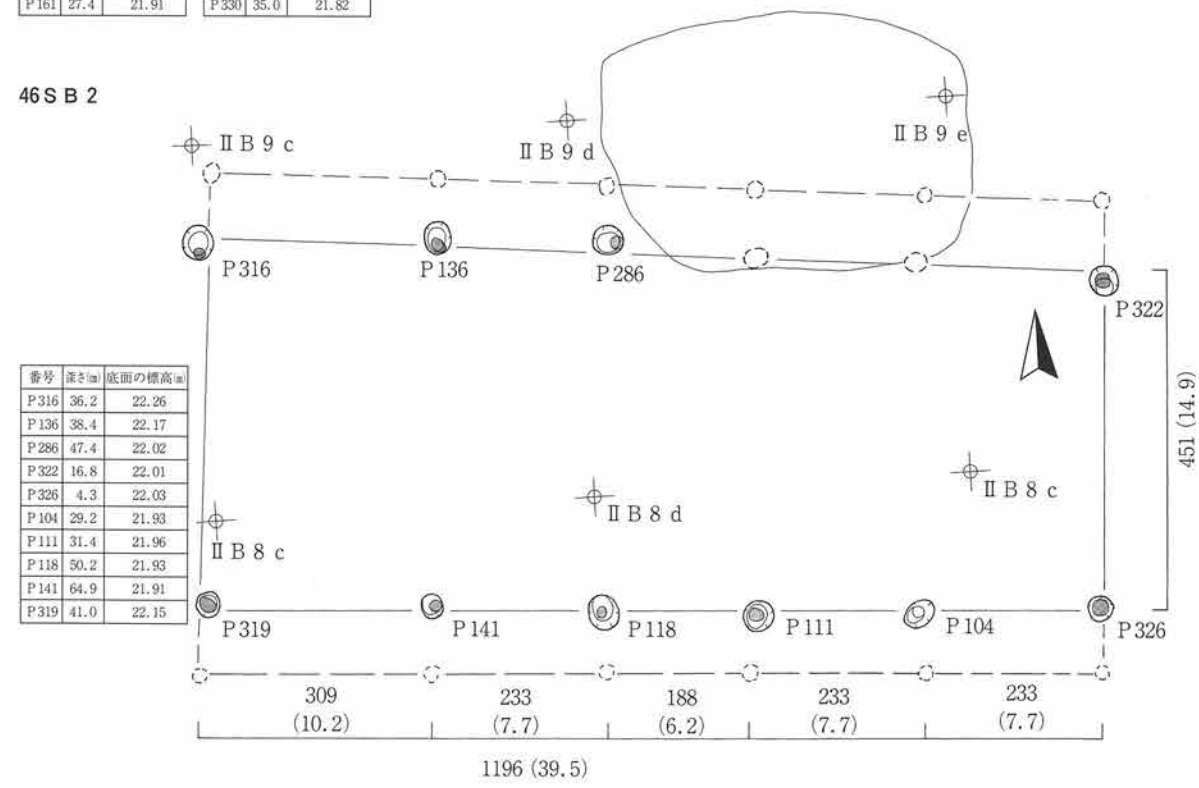
〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P121	52.4	22.15
P126	8.0	22.45
P324	6.8	22.01
P125	68.5	21.97
P128	70.2	21.84
P304	24.7	21.80
P101	32.7	21.79
P159	14.5	22.15
P161	27.4	21.91

番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P331	3.1	22.19
P110	45.6	21.86
P105	42.4	21.84
P162	25.8	22.09
P120	48.8	21.97
P327	10.7	22.17
P103	12.5	22.07
P 93	30.2	21.78
P330	35.0	21.82



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P316	36.2	22.26
P136	38.4	22.17
P286	47.4	22.02
P322	16.8	22.01
P326	4.3	22.03
P104	29.2	21.93
P111	31.4	21.96
P118	50.2	21.93
P141	64.9	21.91
P319	41.0	22.15

第5図　A地区の建物①（46SB1・2）

〔年代〕近世の所属と考えられる。本建物より古い46ＳＫ18の埋土から古寛永通寶が出土した。古寛永の初鋳年代は1636年なので、本建物の建築年代はそれより新しいことになる。また他の母屋と考えられる建物の年代観との兼ね合いから、17世紀中葉頃の所属と考えられる。

46ＳＢ３（第６図、写真図版18）

〔位置〕ⅡＢ６ｇ、６ｈ、ⅡＢ７ｇ、７ｈに位置する。

〔重複〕46ＳＢ４、ＳＢ７とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係を判断できない。また46ＳＥ７、ＳＥ８、ＳＥ９とプランが重複するが、柱穴の切り合い関係から、いずれの井戸より本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。建物の東側は調査区域外に伸びている。桁行は672cm検出できた。梁間は490cm分検出された。検出できた部分の面積は約10.0坪である。重複する46ＳＢ３との比較から本建物も上屋柱と下屋柱からなる構造の可能性が高い。下屋柱の柱穴は１個も検出できなかったが、上屋柱の柱穴に比べて掘込み極端に浅かったため検出できなかったと解釈したい。建物の全体が検出されたわけではなく、間取りを判断するのは難しいが一応想定してみた。想定には泉屋遺跡などで検出された近世掘立柱民家の間取りを参考にする。本建物は東側が上手、西側が下手になると思われる。上手は納戸と座敷といった部屋が存在すると推定される。また中の部屋は南側と北側で２室に分けられると想定する。下手は土間と想定される。土間は建物の半分以上の面積を占めると考えられる。使用した柱穴は13個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＥ－４°－Ｓである。

〔柱間寸法〕桁行の検出された部分では６尺３寸（約191cm）が多用されている。梁間では8尺1寸（約245cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕建物の大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。他の母屋と考えられる建物の年代観との兼ね合いから17世紀後半～18世紀前半の所属と考えられる。

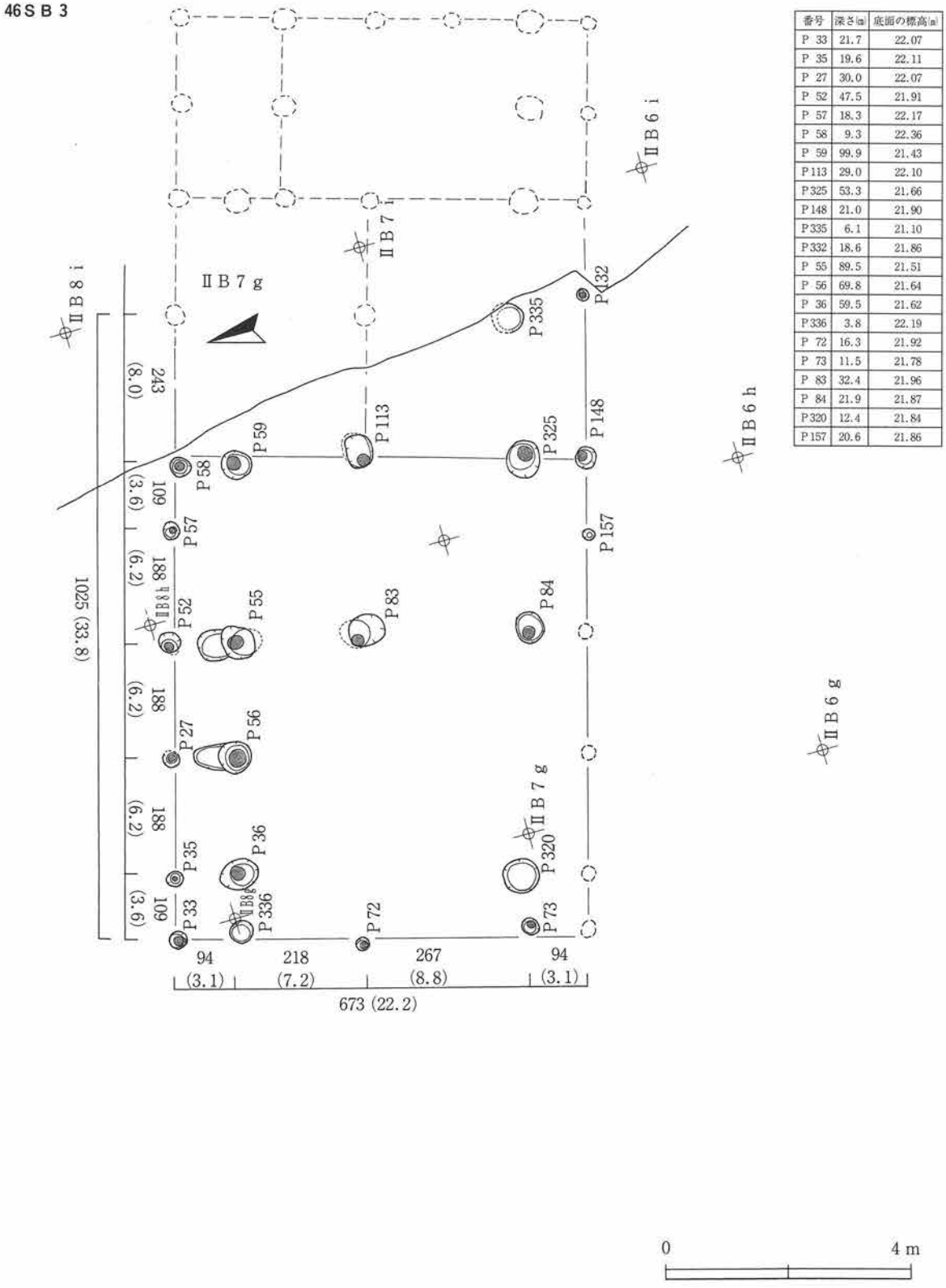
46ＳＢ４（第７図、写真図版18）

〔位置〕ⅡＢ６ｇ、６ｈ、ⅡＢ７ｆ～ｈ、ⅡＢ８ｆ、８ｇに位置する。

〔重複〕46ＳＢ４、ＳＢ６、ＳＢ７とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく、前後関係を判断できない。また46ＳＥ７、ＳＥ８、ＳＥ９とプランが重複するが直接切合う部分がなく前後関係を判断できないが、所属時期の推定から本建物が新しいと推定される。

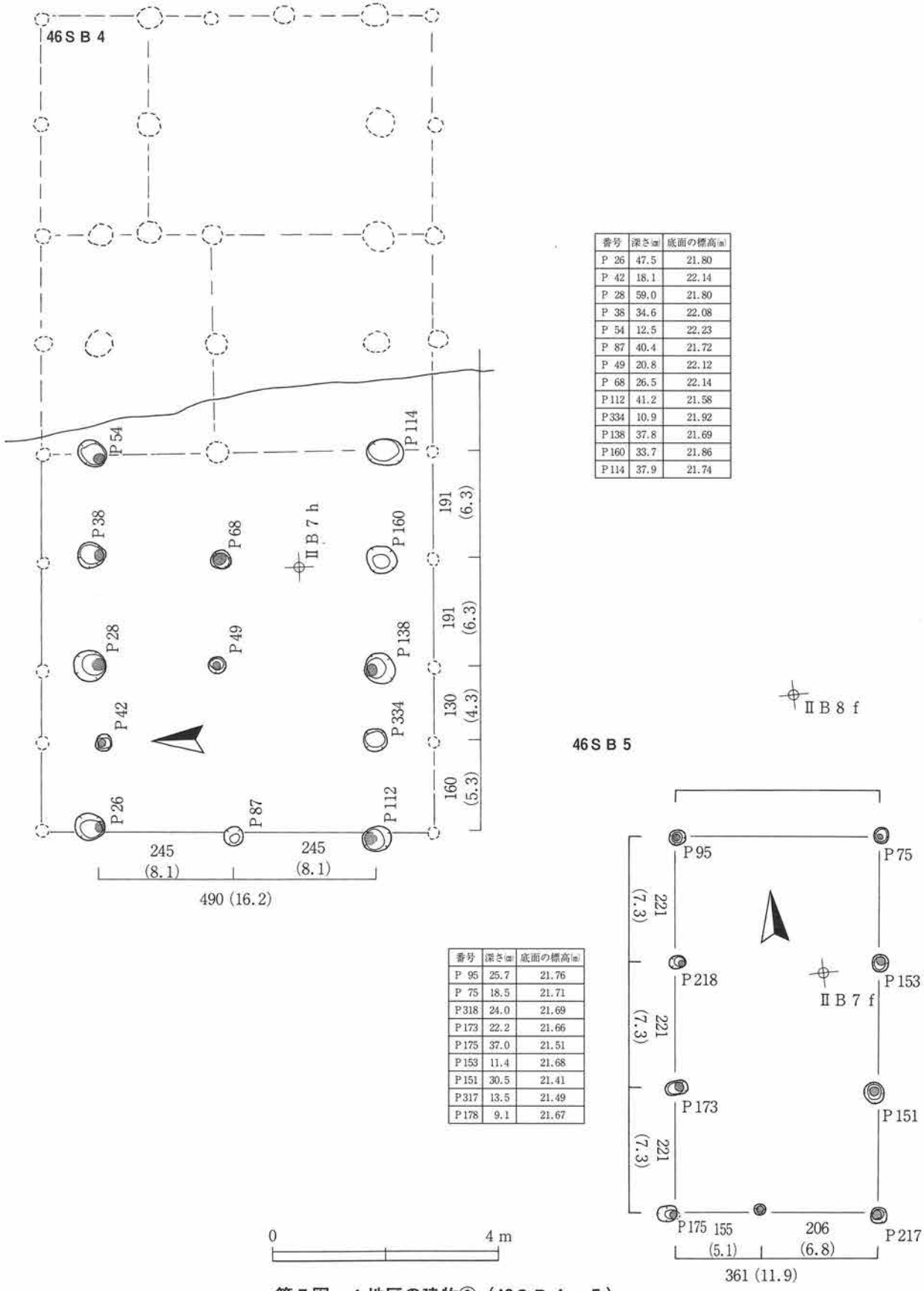
〔平面形式〕掘立柱建物である。建物の東側は調査区域外に伸びている。桁行は1025cm検出できた。梁間は673cmと推定される。検出できた部分の面積は約18.4坪である。上屋柱と下屋柱からなる構造であるが、南側の下屋柱は検出できなかった柱が多い。これは南側の柱穴の検出面の標高が低かったためである。

建物の全体が検出されたわけではなく、間取りを判断するのは難しいが一応想定してみた。想定には泉屋遺跡などで検出された近世掘立柱民家の間取りを参考にする。本建物は東側が上手、西側が下手になると思われる。上手は納戸と座敷といった部屋が存在すると推定される。また中の部屋は南側と北側で２室に分けられると想定する。下手は土間と想定される。土間は建物の半分以上の面積を占め、土間には５本の上屋柱



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 33	21.7	22.07
P 35	19.6	22.11
P 27	30.0	22.07
P 52	47.5	21.91
P 57	18.3	22.17
P 58	9.3	22.36
P 59	99.9	21.43
P113	29.0	22.10
P325	53.3	21.66
P148	21.0	21.90
P335	6.1	21.10
P332	18.6	21.86
P 55	89.5	21.51
P 56	69.8	21.64
P 36	59.5	21.62
P336	3.8	22.19
P 72	16.3	21.92
P 73	11.5	21.78
P 83	32.4	21.96
P 84	21.9	21.87
P320	12.4	21.84
P157	20.6	21.86

第6図　A地区の建物②（46SB3）



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P 26	47.5	21.80
P 42	18.1	22.14
P 28	59.0	21.80
P 38	34.6	22.08
P 54	12.5	22.23
P 87	40.4	21.72
P 49	20.8	22.12
P 68	26.5	22.14
P112	41.2	21.58
P334	10.9	21.92
P138	37.8	21.69
P160	33.7	21.86
P114	37.9	21.74

番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P 95	25.7	21.76
P 75	18.5	21.71
P318	24.0	21.69
P173	22.2	21.66
P175	37.0	21.51
P153	11.4	21.68
P151	30.5	21.41
P317	13.5	21.49
P178	9.1	21.67

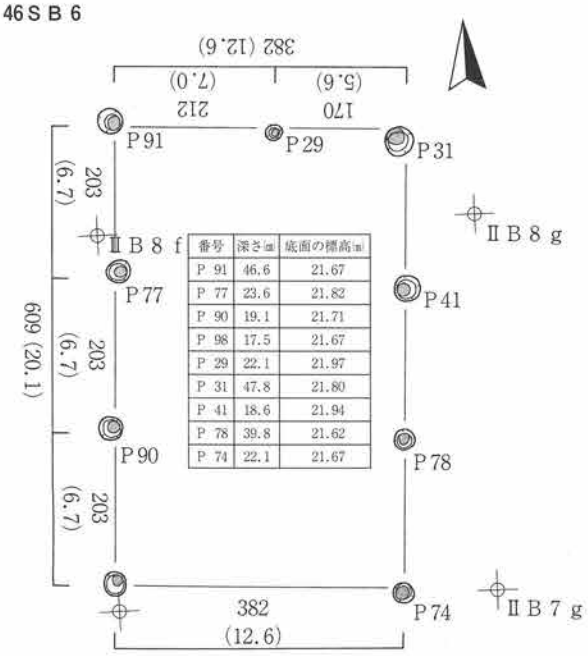
第7図　A地区の建物③（46SB4・5）

が立っていたと考えられる。以上のような間取りと考えたい。使用した柱穴は22個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＥ－16°－Ｓである。
〔柱間寸法〕桁行は６尺２寸（約188cm）を多用している。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕建物の大きさから母屋と考えられる。
〔年代〕近世の所属である。他の母屋と考えられる建物の年代観との兼ね合いから18世紀前半～中葉の所属と考えられる。

46ＳＢ５（第７図、写真図版18）
〔位置〕ⅡＢ６ｅ、６ｆ、７ｅ、７ｆに位置する。
〔重複〕46ＳＥ６と重複するが本建物が新しい。また46ＳＢ６、ＳＢ７とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は３間の長方形のプランである。梁間は361cm、桁行は663cmで、面積は約7.4坪である。使用した柱穴は９個である。だがＰ178は本建物に伴うかどうか不明である。
〔建物方位〕梁間の軸方向はＥ－７°－Ｎである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺３寸（約221cm）を使用している。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。
〔年代〕不明であるが、近世の所属の可能性が高い。

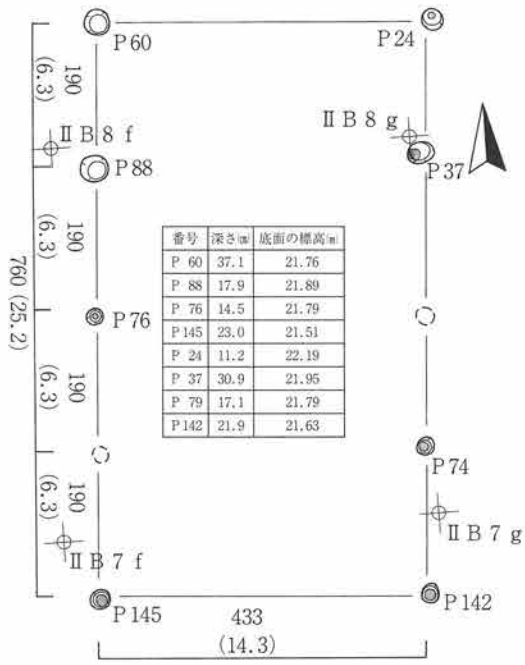
46ＳＢ６（第８図、写真図版18）
〔位置〕ⅡＢ８ｆ、８ｆに位置する。
〔重複〕46ＳＢ４、46ＳＢ５、46ＳＢ７とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は３間の長方形のプランである。桁行は609cm、梁間は382cmで、面積は約7.2坪である。使用した柱穴は９個である。だがＰ29は本建物に伴うかどうか不明である。
〔建物方位〕梁間の軸方向はＥ－４°－Ｎである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺７寸（約203cm）を使用している。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。母屋と考えられる46ＳＢ３と建物の軸がほぼ共通するため、46ＳＢ３に付属する建物の可能性が考えられる。
〔年代〕近世の所属と考えられる。46ＳＢ３に付属する建物であるならば17世紀末から18世紀初めの年代が考えられる。

46SB6



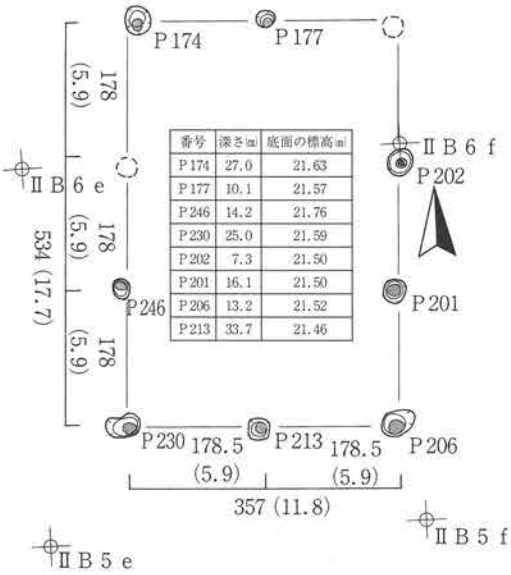
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 91	46.6	21.67
P 77	23.6	21.82
P 90	19.1	21.71
P 98	17.5	21.67
P 29	22.1	21.97
P 31	47.8	21.80
P 41	18.6	21.94
P 78	39.8	21.62
P 74	22.1	21.67

46SB7



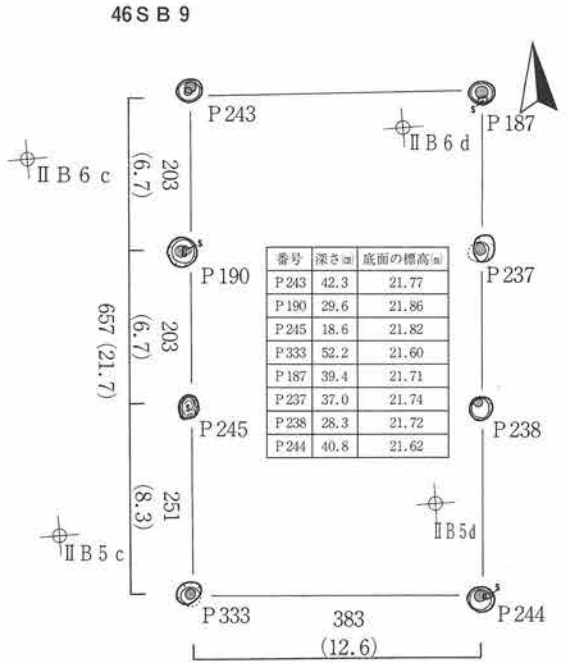
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 60	37.1	21.76
P 88	17.9	21.89
P 76	14.5	21.79
P145	23.0	21.51
P 24	11.2	22.19
P 37	30.9	21.95
P 79	17.1	21.79
P142	21.9	21.63

46SB8



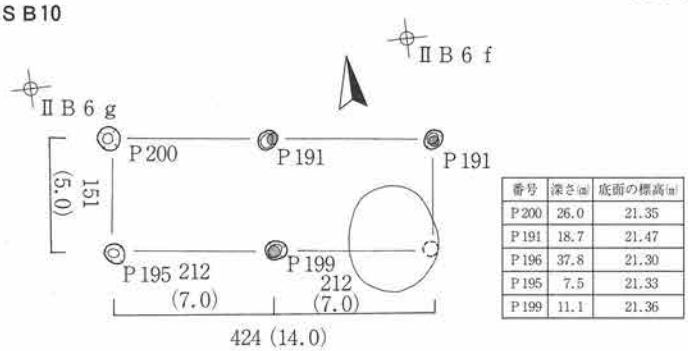
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P174	27.0	21.63
P177	10.1	21.57
P246	14.2	21.76
P230	25.0	21.59
P202	7.3	21.50
P201	16.1	21.50
P206	13.2	21.52
P213	33.7	21.46

46SB9

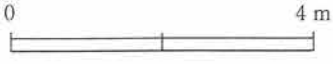


番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P243	42.3	21.77
P190	29.6	21.86
P245	18.6	21.82
P333	52.2	21.60
P187	39.4	21.71
P237	37.0	21.74
P238	28.3	21.72
P244	40.8	21.62

46SB10



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P200	26.0	21.35
P191	18.7	21.47
P196	37.8	21.30
P195	7.5	21.33
P199	11.1	21.36



第8図　A地区の建物④（46SB6～10）

46ＳＢ７（第８図、写真図版18）

〔位置〕ⅡＢ６ｆ、７ｆ、８ｆ、６ｇ、７ｇ、８ｇに位置する。

〔重複〕Ｐ145が46ＳＥ６と重複するが本建物が新しい。また46ＳＢ３、ＳＢ４、ＳＢ５、ＳＢ６とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は４間の長方形のプランである。桁行760cm、梁間は433cmで、面積は約10.6坪である。使用した柱穴は８個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＥ－３°－Ｎである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺３寸（約190cm）を使用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。

〔年代〕近世の所属と考えられる。

46ＳＢ８（第８図、写真図版18）

〔位置〕ⅡＢ５ｅ、６ｅに位置する。

〔重複〕46ＳＤ10と重複するが、おそらく本建物が古い。また46ＳＢ６とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は３間の長方形のプランである。桁行534cm、梁間は357cmで、面積は約5.9坪である。使用した柱穴は８個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＥ－５°－Ｎである。

〔柱間寸法〕５尺９寸（約178cm）を使用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。

〔年代〕近世の所属と考えられる。

46ＳＢ９（第８図、写真図版19）

〔位置〕ⅡＢ４ｃ、５ｃ、６ｃ、４ｄ、５ｄ、６ｄに位置する。

〔重複〕Ｐ245が46ＳＫ13と重複するが本建物が古い。また本建物のプラン内に46ＳＫ９があるが直接切り合う部分が無く前後関係は不明である。同時存在の可能性がある。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は３間の長方形のプランである。桁行657cm、梁間は383cmで、面積は約7.8坪である。使用した柱穴は８個である。Ｐ187、Ｐ190、Ｐ244、Ｐ245の底面には石が敷かれている。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＥ－４°－Ｎである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺７寸（約203cm）を多用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。

〔年代〕近世の所属と考えられる。

46ＳＢ10（第８図）

〔位置〕ⅡＢ５ｇに位置する。

〔重複〕46ＳＥ３と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は２間の長方形のプランである。桁行424cm、梁間は151cmで、面積は約2.0坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＥ－８°－Ｎである。

〔柱間寸法〕桁行では７尺（約212cm）を多用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。長木を収納する建物の可能性がある。

〔年代〕近世の所属と考えられる。

２　井戸

46ＳＥ１は調査時に番号を付したが近年に廃絶の井戸であり、報告を割愛する。

46ＳＥ２（第９図、写真図版19）

〔位置〕ⅡＢ５ｄ、５ｅに位置する。

〔重複〕なし。

〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は概ね垂直に立ち開口部でやや広がる。

〔埋土〕６層に分けられる。２層から６層は人為堆積と考えられる。１層は人為堆積、自然堆積の別を判断できない。

〔出土遺物〕埋土中から17世紀後半代の肥前産磁器碗（1605）、17世紀前半の肥前磁器皿（1621、1622）、17世紀末？の大堀相馬陶器碗（1764）、砥石（1808）が出土した。それ以外に埋土中から自然木が出土している。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕出土遺物から17世紀末以降の廃絶と理解できる。構築、使用されたのは17世紀代と考えられる。

46ＳＥ３（第９図、写真図版19）

〔位置〕ⅡＢ５ｇ、５ｈに位置する。

〔重複〕46ＳＢ11と重複するが本井戸が古い。

〔底面、壁〕崩落の危険があり底面まで掘り下げていない。壁は概ね垂直に立ち上がる。

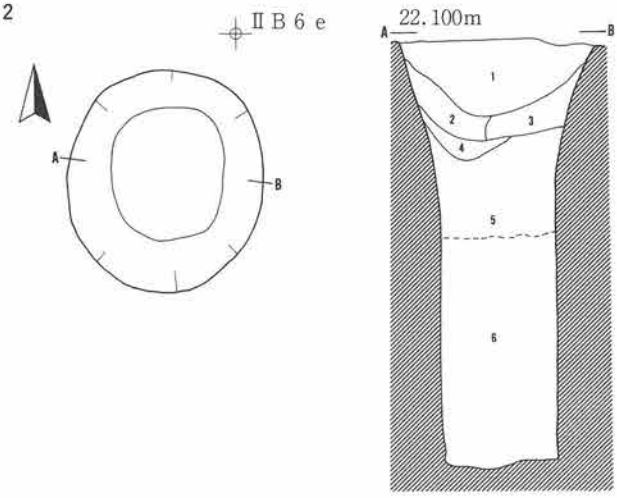
〔埋土〕３層に分けられる。非常にしまりが無く、木屑などが多量に混入する。人為堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

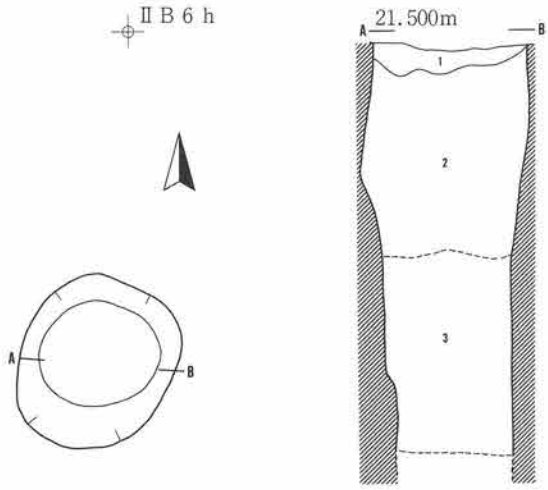
〔年代〕埋土の状況から新しい時期の遺構と考えられる。近代以降の所属であろうか。

46ＳＥ２



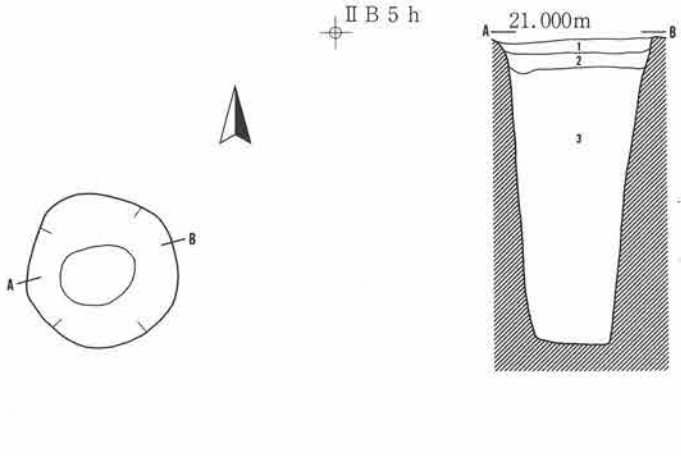
46ＳＥ２
1　10ＹＲ5/2灰黄褐色土　2.5Y8/3淡黄色ロームブロックがブロック状とまだら状に少量混入
2　10ＹＲ5/2灰黄褐色土　2.5Y8/3淡黄色ロームまだら状に大多量混入
3　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土　2.5Y8/3淡黄色ロームまだら状に少量混入
4　10ＹＲ4/1褐灰色土　10ＹＲ4/6褐色砂質土ブロック少量混入
5　10ＧＹ4/1暗緑灰色土　2.5Y8/3淡黄色ロームと10Ｙ7/2灰色ロームがまだら状に少量混入
1層は人為堆積か自然堆積か不明。２～５層は人為堆積

46ＳＥ３



46ＳＥ３
1　10ＹＲ2/2黒褐色土　10Y6/2オリーブ灰色ロームまだら状に多量混入　木片・木屑・多量混入、しまりなし
2　10Y6/2オリーブ灰色ローム　10ＹＲ2/2黒褐色土まだら状に少量混入　木屑少量混入、しまりなし、一時に埋めた土非常に新しい遺構であろう

46ＳＥ４



46ＳＥ４
1　10ＹＲ2/3黒褐色土　５Y7/4浅黄色ローム粒多量混入、焼土粒微量混入
2　2.5Y3/2黒褐色土　鉄分が表面に浮き出ている。３層の変化したもの。
3　2.5Y3/1黒褐色土

第９図　Ａ地区の井戸①（46ＳＥ２～４）

46ＳＥ４（第９図、写真図版19）

〔位置〕ⅡＢ４ｇに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁は開口部に向かってやや広がりながら立ち上がる。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕近世または近代の所属と考えられる。

46ＳＥ５（第10図、写真図版20）

〔位置〕ⅡＢ８ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕崩落のため底面まで掘り下げていない。壁は下半部が崩落のため奥に入り込んでいる。

〔埋土〕調査中に埋土が崩落してしまい、土層断面の観察ができなかった。

〔出土遺物〕埋土の上位から曲物の底板（1505）が出土した。

〔年代〕近世または近代の所属と考えられる。

46ＳＥ６（第10図、写真図版20）

〔位置〕ⅡＢ６ｅ、６ｆに位置する。

〔重複〕46ＳＢ5の柱穴（Ｐ151）、46ＳＢ7の柱穴（Ｐ145）と重複するが本遺構が古い。また46ＳＤ14と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕底面は皿状を呈する。壁は開きながらやや斜めに立ち、開口部で大きく広がる。

〔埋土〕９層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から須恵器甕片（1007）が出土した。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕出土遺物と46ＳＤ14との切り合い関係から、12世紀の所属と考えられる。

46ＳＥ７（第10図、写真図版20）

〔位置〕ⅡＢ６ｈ、７ｈに位置する。

〔重複〕46ＳＢ4の柱穴（Ｐ113）、46ＳＢ3の柱穴（Ｐ114）と重複するが本遺構が古い。また46ＳＫ４と重複するが本遺構が古い。

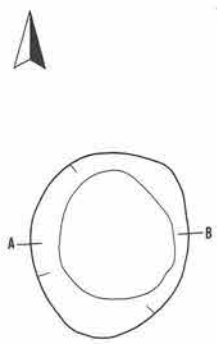
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。

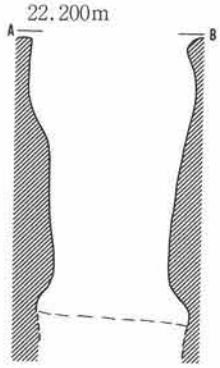
〔埋土〕７層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から常滑産陶器壷（1120～1222）、常滑産甕（1224、1225、1227、1229、1233、1234、1236、1242、1245、1247、1248～1251、1255、1256、1260、1267）、渥美産陶器甕（1284）、水沼系と考えられる瓷器系陶器壷（1291、1292）、中国産白磁壷（1305）、砥石（1503）、滑石製石鍋片（1504）が出土した。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

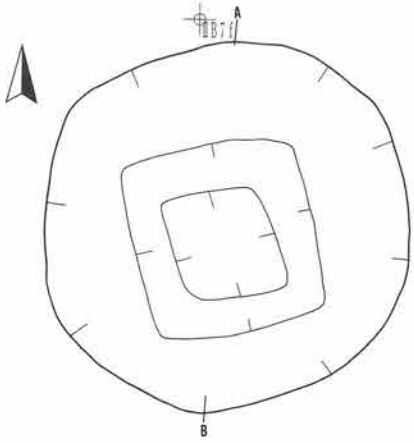
46ＳＥ５

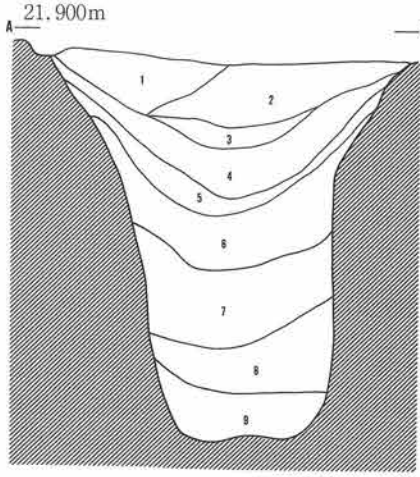




46ＳＥ５
（注記なし）

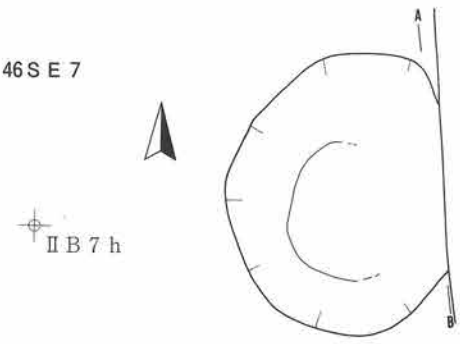
46ＳＥ６

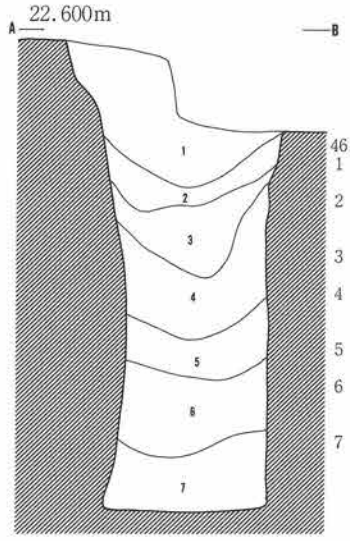




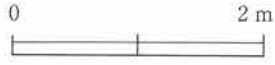
46ＳＥ６
1　10ＹＲ2/3黒褐色土　５Ｙ7/4浅黄色ロームブロック多量混入、焼土粒少量混入、酸化鉄分混入
2　10ＹＲ2/3黒褐色土　５Ｙ7/4浅黄色ロームブロック多量混入、7.5Y6/3オリーブ黄色ローム（10Y5/2オリーブ灰色ロームが酸化したもの）ブロック多量混入、酸化鉄分混入
3　10ＹＲ2/1黒色土　10Y6/2オリーブ灰色ロームブロック少量混入。
4　５Y2/2オリーブ黒色土　10Y6/2オリーブ灰色ロームブロック多量混入、北端・南端に酸化鉄分混入
5　５Y2/2オリーブ黒色土
6　５Y2/1オリーブ黒色土　５Y7/3浅黄色砂ブロック多量混入、10Y6/2オリーブ灰色ロームブロック多量混入、北側に焼土（2.5Y6/6明黄褐色）溶け込んでいる

46ＳＥ７



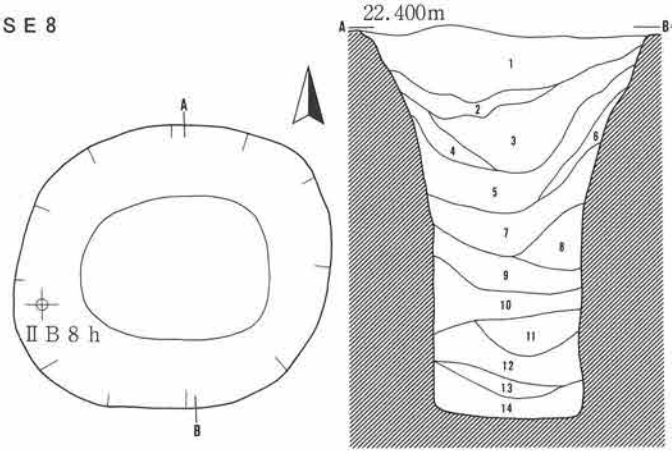


46ＳＥ７
1　10ＹＲ3/2黒褐色土　炭化物粒多量混入、焼土粒少量混入、酸化鉄分混入
2　10ＹＲ2/1黒色土　7.5Y6/3オリーブ黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入、焼土溶け込みのため2.5Y5/4黄褐色のところもある
3　10ＹＲ2/1黒色土　10Y6/2オリーブ灰色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入。焼土粒微量混入
4　7.5Y6/３オリーブ黄色ローム　10Y6/2オリーブ灰色ロームブロック多量混入、南上部に５Y6/4オリーブ黄色ローム混入、炭化物粒微量混入
5　10ＹＲ2/2黒褐色土　10Y6/2オリーブ灰色ローム多量混入（とくに北側）、炭化物粒少量混入
6　５Y4/1灰色土（10GY6/1黒灰色土の酸化したもの）５Y5/3灰オリーブ色ロームブロック多量混入、2.5Y3/1黒褐色土下部に層状に混入
7　10GY6/1緑灰色砂　水が湧くと７層は水没



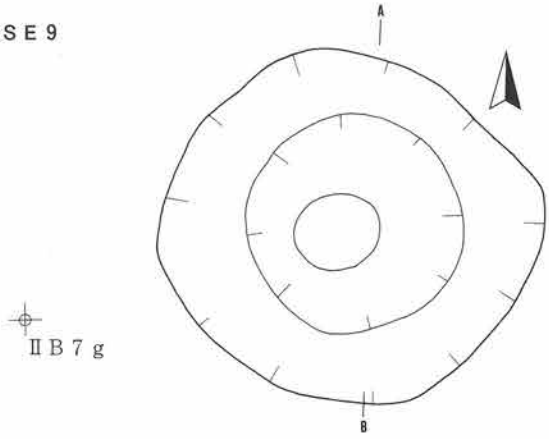
第10図　Ａ地区の井戸②（46ＳＥ５～７）

46ＳＥ８



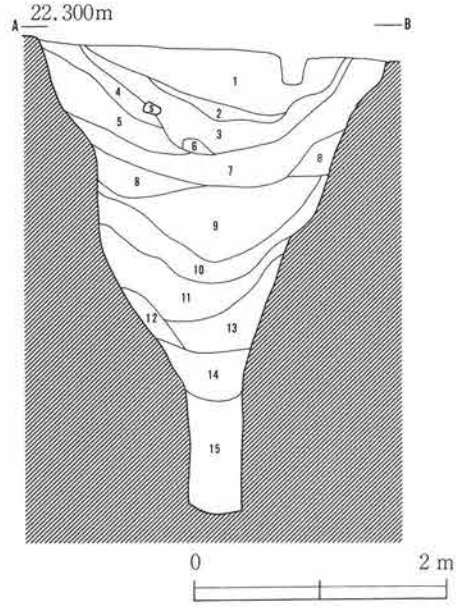
46ＳＥ８
1　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土　10ＹＲ7/6明黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入　かわらけ片少量出土
2　10ＹＲ4/1褐灰色土　10ＹＲ7/6明黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物多量混入　かわらけ片大多量出土
3　10ＹＲ7/6明黄褐色ローム（酸化鉄分の混入でまだら状に10ＹＲ7/8黄橙色を呈する部分ある）　10ＹＲ4/1褐灰色土まだら状に混入
4　10ＹＲ5/1褐灰色土　10ＹＲ7/6明黄褐色ロームまだら状に多量混入
5　10ＹＲ2/2黒褐色土　10ＹＲ1.7/1黒色土縞状に混入、炭化物粒少量混入
6　10ＹＲ2/2黒褐色土　2.5Ｙ5/2暗灰黄色土縞状に混入
7　2.5Ｙ5/2暗灰黄色土　10ＹＲ1.7/1黒色土縞状に少量混入
8　10ＧＹ7/1明緑灰色ローム　10ＹＲ4/1褐灰色土まだら状に少量混入
9　10ＧＹ7/1明緑灰色ローム　10ＹＲ4/1褐灰色土と2.5Ｙ5/2暗灰黄色土がまだら状に多量混入　中位より完形かわらけが出土
10　10ＹＲ2/2黒褐色土　10Ｙ6/2オリーブ灰色土層状に少量混入、炭化物粒少量混入　かわらけ片少量混入
11　10ＹＲ3/2黒褐色土　10ＹＲ5/3にぶい黄褐色ロームブロック大多量混入、橙化鉄分混入
12　2.5Ｙ5/2暗灰黄色土　10ＹＲ7/1灰白色ロームと10Ｙ6/1灰色ロームが層状に入り混じる、酸化鉄分混入
13　10Ｙ6/1灰色土（酸化のため黄色変化している所あり）　酸化鉄分混入
14　10Ｙ6/1灰色土（酸化のため2.5Ｙ5/1黄灰色に見えるところもある）　7.5ＧＹ7/1明緑灰色ロームブロック少量混入
全体的に人為堆積と思われる。なお３～４・９層は明らかに埋め戻した土である。

46ＳＥ９



46ＳＥ９
1　10ＹＲ3/4暗褐色土　５Ｙ7/3浅黄色ロームブロック微量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入　かわらけ片多量混入
2　10ＹＲ3/4黒褐色土　５Ｙ7/3浅黄色ローム少量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入、小石多量混入
3　５Ｙ7/3浅黄色ローム：炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
4　10ＹＲ3/4暗褐色土　５Ｙ7/3浅黄色ロームブロック少量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入
5　10ＹＲ3/4暗褐色土　５Ｙ7/3浅黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入
6　10ＹＲ1.7/1黒色炭化物層
7　10ＹＲ3/2黒褐色土　５Ｙ7/3浅黄色ロームブロック少量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒少量混入　かわらけ出土
8　10Ｙ6/2オリーブ灰色ローム、10ＹＲ2/2黒褐色土ブロック多量混入、10Ｙ5/2オリーブ灰色砂ブロック多量混入、炭化物粒多量混入
9　10ＹＲ2/1黒色土　10Ｙ6/2オリーブ灰色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒微量混入
10　10Ｙ6/2オリーブ灰色ローム　10ＹＲ2/1黒色土まだら状に少量混入
11　2.5Ｙ7/3浅黄色ローム　10Ｙ6/2オリーブ灰色ロームまだら状に大多量混入
12　2.5Ｙ7/3浅黄色ローム　10ＹＲ2/1黒色土縞状に少量混入
13　10Ｙ6/2オリーブ灰色ローム　10ＹＲ2/1黒色土縞状に少量混入
14　10ＹＲ4/1褐灰色土　10Ｙ6/2オリーブ灰色ロームまだら状に少量混入　曲物片出土
15　10Ｙ6/2オリーブ灰色ローム　10ＹＲ4/1褐灰色土縞状に少量混入　非常にしまり悪い

ⅡＢ７ｈ



第11図　Ａ地区の井戸③（46ＳＥ８・９）

〔年代〕出土遺物から12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＥ８（第11図、写真図版20）

〔位置〕ⅡＢ７ｇ、７ｈ、８ｇ、８ｈに位置する。

〔重複〕46ＳＢ４の柱穴（Ｐ57）、46ＳＢ３の柱穴（Ｐ38、Ｐ54）と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや開きながら立ち、開口部で開く。

〔埋土〕14層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（1104、1110、1112、1117、1118、1120、1129、1131、1134）、ろくろかわらけ（1145）、中国産白磁碗（1301、1304）が出土した。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕出土遺物から12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＥ９（第11図、写真図版21）

〔位置〕ⅡＢ６ｇ、７ｇに位置する。

〔重複〕46ＳＢ３の柱穴（Ｐ138、Ｐ344）と重複するが本遺構が古い。また46ＳＫ８と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕底面は皿状を呈する。底辺部は幅が狭く、全体の断面形は漏斗状を呈する。

〔埋土〕15層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（1102、1105～1107、1109、1114～1116、1121～1127、1132、1133、1135）、ろくろかわらけ（1142）、常滑産陶器片口鉢（1202、1210）、常滑産陶器甕（1226、1238、1243、1257、1268、1270）、渥美産陶器片口鉢（1277）が出土した。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕出土遺物から12世紀後半の所属と考えられる。

3　土坑

46ＳＫ１（第12図、写真図版21）

〔位置〕ⅡＢ３ｄに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

46ＳＫ２（第12図、写真図版21）

〔位置〕ⅡＢ４ｄに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

46ＳＫ３（第12図、写真図版22）

〔位置〕ⅡＢ４ｂに位置する。

〔重複〕なし。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

46ＳＫ４（第12図、写真図版22）

〔位置〕ⅡＢ６ｈ、７ｈに位置する。

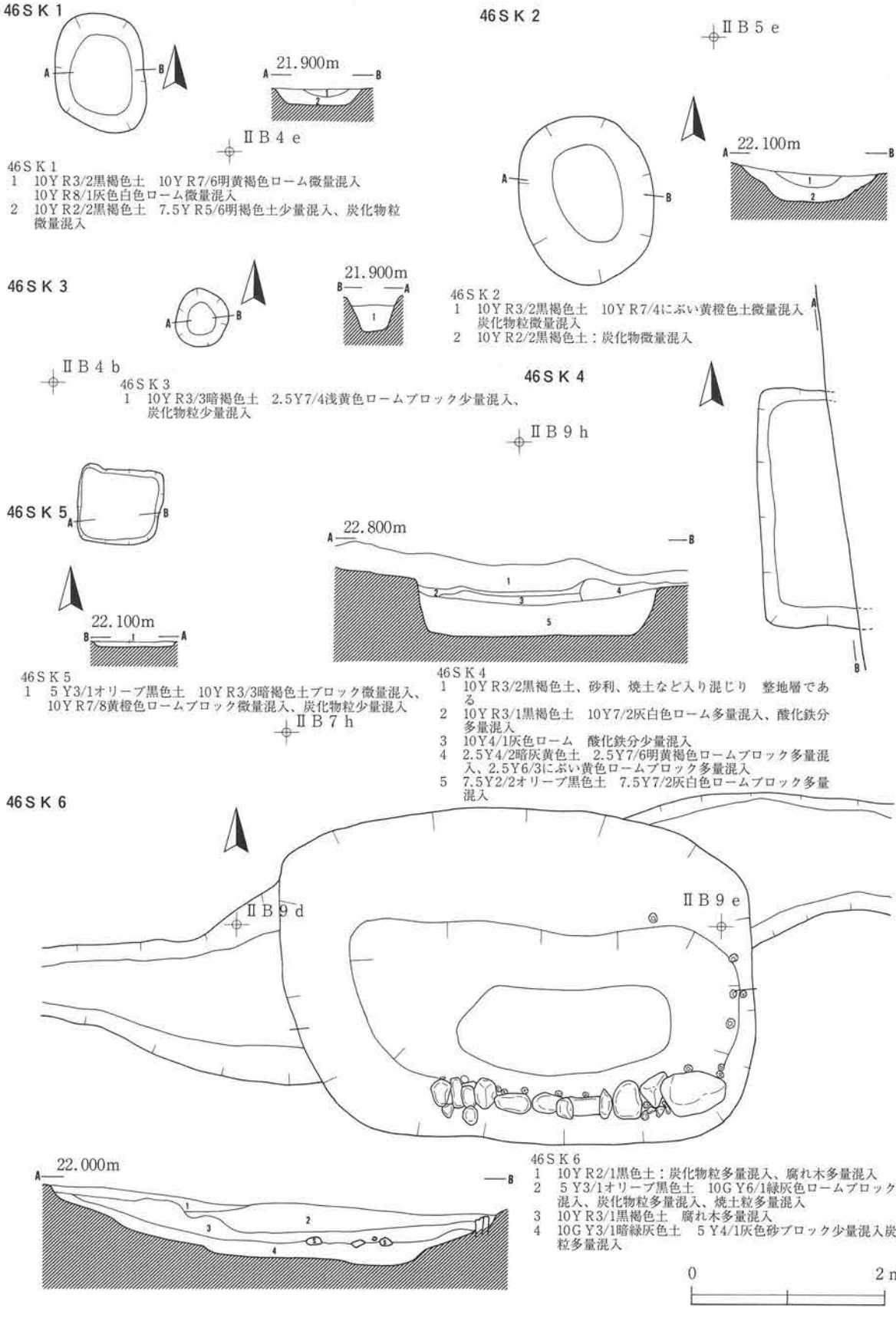
〔重複〕46ＳＥ７と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＢ３、ＳＢ４とプランが重複するが、直接重複する柱穴がなく前後関係は判断できない。おそらく本遺構が新しい。

〔埋土〕図中の１層は本遺構の埋土ではなく、その上を覆う整地層である。よって埋土は４層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕近世または近代以降の所属である。



第12図　Ａ地区の土坑①（46ＳＫ１～６）

46ＳＫ５（第12図、写真図版22）

〔位置〕ⅡＢ７ｇに位置する。

〔重複〕46ＳＥ９と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＢ３、ＳＢ４とプランが重複するが、直接重複する柱穴がなく前後関係は判断できない。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕近世または近代以降の所属である。

46ＳＫ６（第12図、写真図版22）

〔位置〕ⅡＢ８ｄ、９ｄ、８ｅ、９ｅに位置する。

〔重複〕46ＳＢ１、ＳＢ２、46ＳＤ11、ＳＤ12、ＳＤ13と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。南側の壁には石組みと杭を打った痕跡が、東壁には杭を打った痕跡がみられる。

〔埋土〕４層に分けられる。多量の遺物、木屑、木片などを含んでおり、人為的に埋められたものと考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から須恵器壺片（1002）が出土した。また18世紀後半の東北地方在地産と考えられる焼き締め陶器の擂鉢（1765）、19世紀代の東北在地産の陶器擂鉢（1777）、20世紀代の汽車茶瓶（1785）、時期不明の土人形（1801）、羽口（1802、1803）、桶の側板（1804）、糸巻きの部品（1805）、砥石（1807、1809）、石鉢（1812、1813）が出土している。

〔遺構の性格〕本遺構は独立して構築されたものではなく、溝状遺構である46ＳＤ９と一体の構造である。水路であるＳＤ９の途中に作られた洗い場、水場といった性格の遺構と考えられる。

〔年代〕出土遺物から廃絶は相当近年まで下ると考えられる。だが昭和41年の火災面を覆う土が埋土に入っていないので、この火災以前にすでに廃絶されていたと推測される。構築は46ＳＢ１、46ＳＢ２より新しいので、18世紀代より後と考えられる。

46ＳＫ７（第13図、写真図版23）

〔位置〕ⅡＢ７ｂ、７ｃ、７ｄ、８ｂ、８ｃ、８ｄに位置する。

〔重複〕46ＳＢ１、ＳＢ２、46ＳＤ３、ＳＤ12と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は斜めに立ち上がる

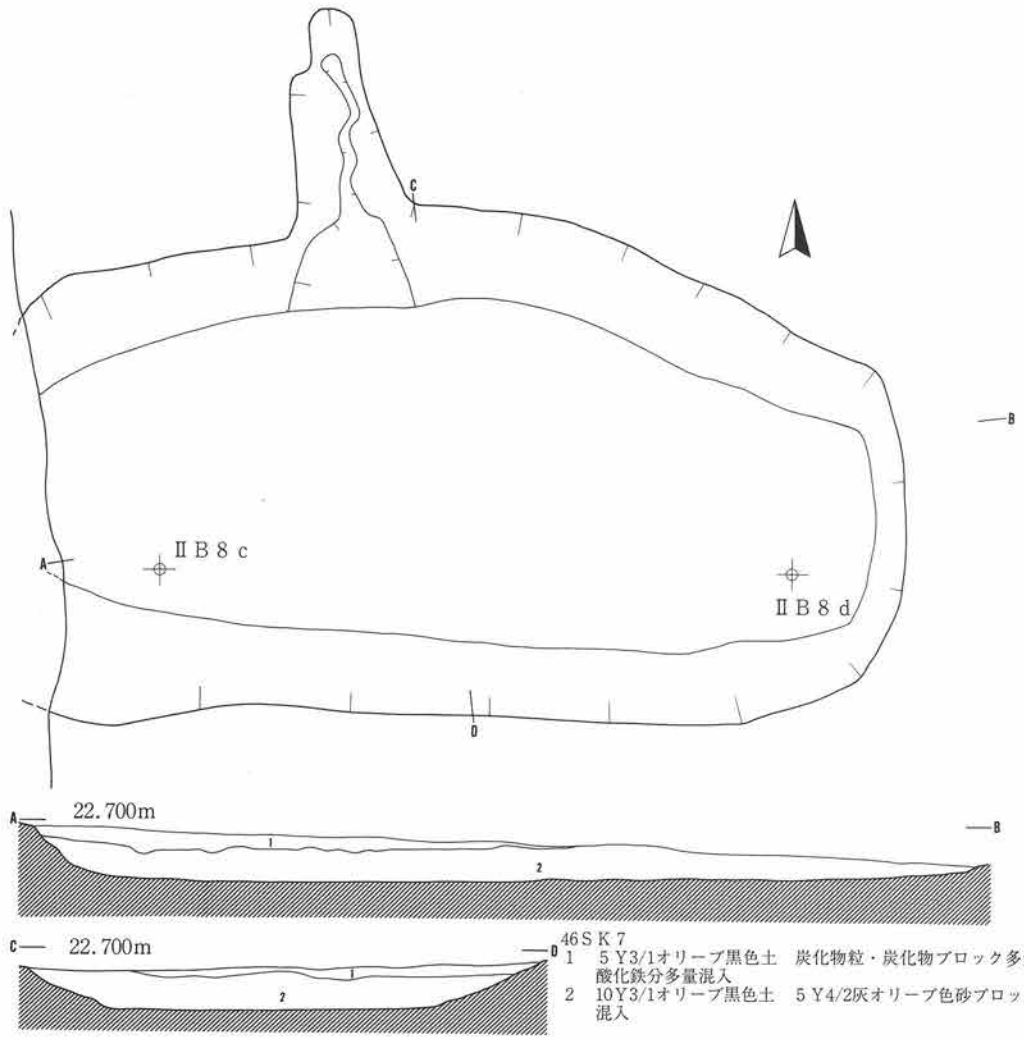
〔埋土〕２層に分けられる。人為的に埋められたものと考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から19世紀代の平清水産？の磁器碗（1619）、18世紀代の肥前産磁器皿、18世紀後半～19世紀初めの肥前磁器皿、19世紀前半代の肥前？磁器鉢、19世紀代と考えられる器種不明陶器（1741）、陶器甕（1743）、18世紀前半代の瀬戸産擂鉢（1751）、18世紀後半の東北地方在地産と考えられる焼き締め陶器の擂鉢（1757）、19世紀代の東北在地産の陶器擂鉢（1756、1762、1764）、20世紀代の東北在地産と考えられる陶器擂鉢（1778、1779）が出土している。

〔遺構の性格〕不明であるが、既のくぼみの可能性が考えられる。

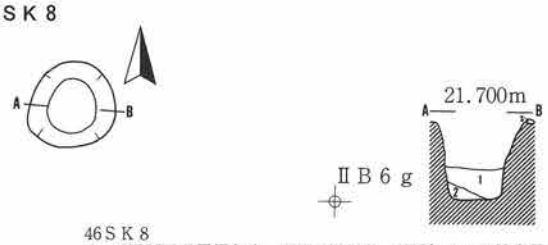
〔年代〕出土遺物から廃絶は相当近年まで下ると考えられる。だが昭和41年の火災面を覆う土が埋土に入っ

46ＳＫ７



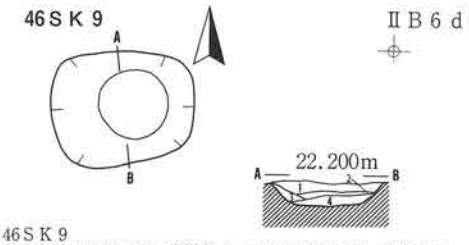
46ＳＫ７
1　５Ｙ3/1オリーブ黒色土　炭化物粒・炭化物ブロック多量混入、酸化鉄分多量混入
2　10Ｙ3/1オリーブ黒色土　５Ｙ4/2灰オリーブ色砂ブロック少量混入

46ＳＫ８



46ＳＫ８
1　10ＹＲ2/2黒褐色土　10Ｙ5/2オリーブ灰色ローム粒少量混入、炭化物粒多量混入、酸化鉄分多量混入　有機質多い。下部より種出土
2　10ＹＲ2/2黒褐色土　10Ｙ5/2オリーブ灰色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入

46ＳＫ９



46ＳＫ９
1　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土　10ＹＲ6/4にぶい黄橙色ロームブロック少量混入、2.5Ｙ4/2暗灰黄色土少量混入、炭化物少量混入、酸化鉄分混入
2　2.5Ｙ4/2暗灰黄色土　酸化鉄分混入
3　2.5Ｙ4/1黄灰色ローム　しまりなし
4　2.5Ｙ5/2暗灰黄色砂　2.5Ｙ4/1黄灰色ローム少量混入酸化鉄分混入

46ＳＫ10

46ＳＫ10
1　10ＹＲ3/2黒褐色土　10ＹＲ7/4にぶい黄橙色ロームブロック少量混入、酸化鉄分少量混入

0　2ｍ

第13図　Ａ地区の土坑②（46ＳＫ７～10）

ていないので、この火災以前にすでに廃絶されていたと推測される。構築は46ＳＢ１、46ＳＢ２より新しいので、18世紀代より後と考えられる。

46ＳＫ８（第13図、写真図版23）

〔位置〕ⅡＢ６ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積である。１層は有機質分が多く種子が混入する土である。この１層の土を採取して土壌分析を（株）古環境研究所に委託した。（第13章１参照）

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕形状と埋土の状態から、平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」である。土壌分析の結果では多量の寄生虫卵が検出されている。種子は瓜類の他に19種類もの種子が検出された。

〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ９（第13図、写真図版23）

〔位置〕ⅡＢ６ｃに位置する。

〔重複〕46ＳＢ９のプラン内に位置するが直接重複する部分がなく前後関係は不明である。同時存在の可能性もある。

〔底面、壁〕底面は皿状であり、壁と底面の区別ができない。

〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から19世紀代の東北地方在地産と考えられる陶器擂鉢（1775）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕近世末又は近代の所属である。

46ＳＫ10（第13図、写真図版23）

〔位置〕ⅡＢ６ｇに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は斜めに立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

46ＳＫ11（第14図、写真図版24）

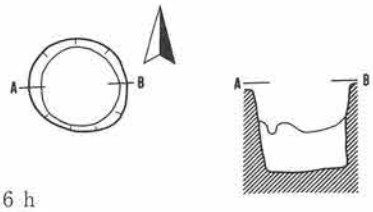
〔位置〕ⅡＢ６ｈに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

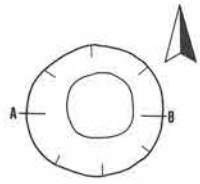
46S K11

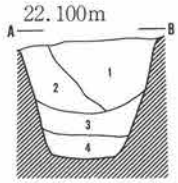


ⅡB6h

46S K11
1　10YR3/2黒褐色土　5YR7/4浅黄色ロームブロック多量混入、酸化鉄分少量混入

46S K12





ⅡB6e

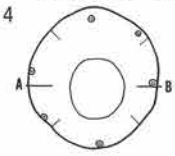
46S K12
1　2.5Y8/3浅黄色ローム　10YR3/2黒褐色土まだら状に少量混入
2　10YR3/2黒褐色土　2.5Y8/3淡黄色ロームまだら状に少量混入
3　10YR3/2黒褐色土　2.5Y8/3淡黄色ロームまだら状に多量混入
4　10Y8/1灰白色ローム　10YR3/2黒褐色土まだら状に少量混入
分層できるが一時に埋め戻されたと思われる

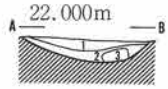
46S K13

46S K13
1　2.5Y6/2灰黄色土　酸化鉄分混入
2　10YR5/1褐灰色土　10YR1.7/1黒色土少量混入　木屑が少量混入
3　10YR1.7/1黒色土　木屑多量混入
全体しまりなし。2層は自然堆積。1層は人為的に埋めたものか

ⅡB5d

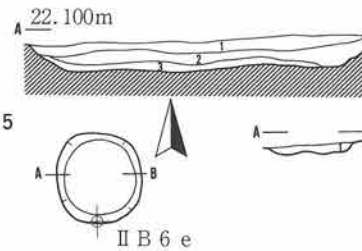
46S K14





ⅡB5e

46SK14
1　10RY4/2灰黄褐色土　10YR4/6褐色砂質土土粒少量混入
2　10YR4/1褐灰色土　10YR4/6褐色砂質土粒多量混入
3　10YR4/6褐色砂質土

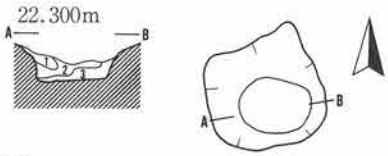


46S K15

ⅡB6e

46S K15
1　10YR4/2灰黄色褐色土　2.5Y8/6黄色ロームまだら状に少量混入　人為堆積・自然堆積の別は不明

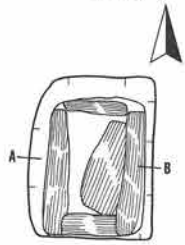
46S K16

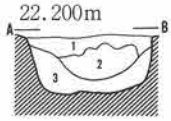


46S K16
1　10YR6/3にぶい黄橙色ローム、2.5Y7/3浅黄色ロームまだらに入り混じり　焼土溶け込んでいる。
2　10YR3/3暗褐色土　5Y7/4浅黄色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土溶け込んでいる、酸化鉄分混入
3　2.5Y7/3浅黄色ローム　炭化物粒少量混入、焼土溶け込んでいる

46S K18

ⅡB9c



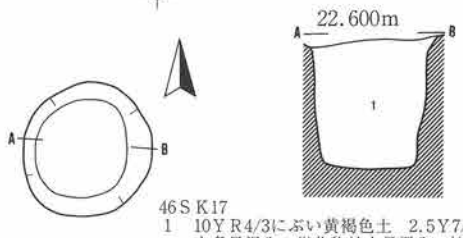


46S K18
1　10YR5/1褐灰色土　10YR8/6黄橙色ロームまだら状に少量混入
2　10YR8/6黄橙色ローム　10YR5/1褐灰色土まだら状に多量混入
3　10YR8/6黄橙色ローム　10YR5/1褐灰色土、10GY7/1明緑灰色ロームまだら状に多量混入

ⅡB7e

46S K17

ⅡB0g



46S K17
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　2.5Y7/3浅黄色ローム大ブロック大多量混入、炭化物粒少量混入、焼土溶け込んでいる

第14図　A地区の土坑③（46S K11～18）

〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕46ＳＫ８のような「トイレ状遺構」に形状が類似するが、埋土の状況が異なり、「トイレ状遺構」と断定することはできない。
〔年代〕不明である。トイレ状遺構であれば12世紀の所属の可能性が高い。

46ＳＫ12（第14図、写真図版24）
〔位置〕ⅡＢ６ｅに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はやや斜めに立つ。
〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土中からろくろかわらけ（1141）が出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明であるが、埋土の状況から12世紀に所属する可能性が高い。

46ＳＫ13（第14図、写真図版24）
〔位置〕ⅡＢ５ｃに位置する。
〔重複〕46ＳＢ９の柱穴（Ｐ245）と重複し、本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面は平らで、壁は斜めに立つ。
〔埋土〕３層に分けられる。１層と３層は人為堆積、２層は自然堆積の可能性が高い。３層には木屑が多量に混じる。
〔出土遺物〕埋土中から19世紀前半代と思われる肥前産？磁器碗（1614）が出土した
〔遺構の性格〕不明であるが、埋土に木屑が多量に混じることから、ごみの廃棄坑の可能性が考えられる。
〔年代〕近世または近代の所属と考えられる。

46ＳＫ14（第14図、写真図版24）
〔位置〕ⅡＢ５ｄに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状であり、壁と底面の区別ができない。壁際に杭が打ち込まれた痕跡がみられる。
〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

46ＳＫ15（第14図、写真図版25）
〔位置〕ⅡＢ６ｄ、６ｅに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状で、壁との区別ができない。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

46ＳＫ16（第14図、写真図版25）
〔位置〕ⅡＢ７ｄに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁は不整に立つ。
〔埋土〕３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

46ＳＫ17（第14図、写真図版25）
〔位置〕ⅡＢ９ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立ちあがる。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明であるが埋土の色調、感触から12世紀に所属する可能性が高い。

46ＳＫ18（第14図、写真図版25）
〔位置〕ⅡＢ８ｂ、８ｃに位置する。
〔重複〕46ＳＢ２の柱穴（Ｐ316）と重複するが、本遺構が古い。また46ＳＢ１のプランとも重複するが直接の切り合いがなく前後関係は不明である。おそらく本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面はやや不整である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面に木の皮が敷いてある。
〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕底面から須恵器甕片（1009）と寛永通寶（1821）が出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕出土した寛永通寶は古寛永である。その初鋳年代は1636年であるので、本遺構の廃絶はそれよりも新しいことになる。

4　溝

46ＳＤ１（第15図、写真図版26）

〔位置〕ⅡＢ３ｄ、４ｄ、５ｄ、６ｄ、７ｄに位置する。

〔重複〕14次調査のＳＤ４から直接つながる溝である。46ＳＤ10と46ＳＤ12と重複するが本溝が古い。だが46ＳＤ12と直接重複しない部分は、46ＳＤ12と同時に機能していたと考えられる。また46ＳＤ14と本溝が接するが前後関係を把握できない。同時存在の可能性が高い。

〔平面形式〕上場の幅、下場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。

〔埋土〕３層に分けられる。全体的に自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から須恵器壺（1006）、手づくねかわらけ（1119、1136）ろくろかわらけ（1143）、常滑産陶器片口鉢（1203、1204、1207～1209）、常滑産陶器三筋壺（1211、1212）、常滑産陶器壺（1213、1217）、常滑産陶器短頸壺（1214）、常滑産陶器甕（1232、1239、1258、1264、1266、1271）、渥美産陶器山茶碗（1276）、渥美産陶器甕（1281、1282）、水沼産陶器壺（1296、1297）、中国産白磁碗（1302）が出土した。

〔溝の性格〕道路側溝である。道路の東側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ２（第15図、写真図版26）

〔位置〕ⅡＢ３ｂ、４ｂに位置する。

〔重複〕46ＳＤ３と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕ほぼ真っすぐである。西側の縁に段がつき細い溝状になっている。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。

〔埋土〕３層に分けられる。全体的に自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕なし。

〔溝の性格〕道路側溝である。道路の西側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ３（第15・16図、写真図版26）

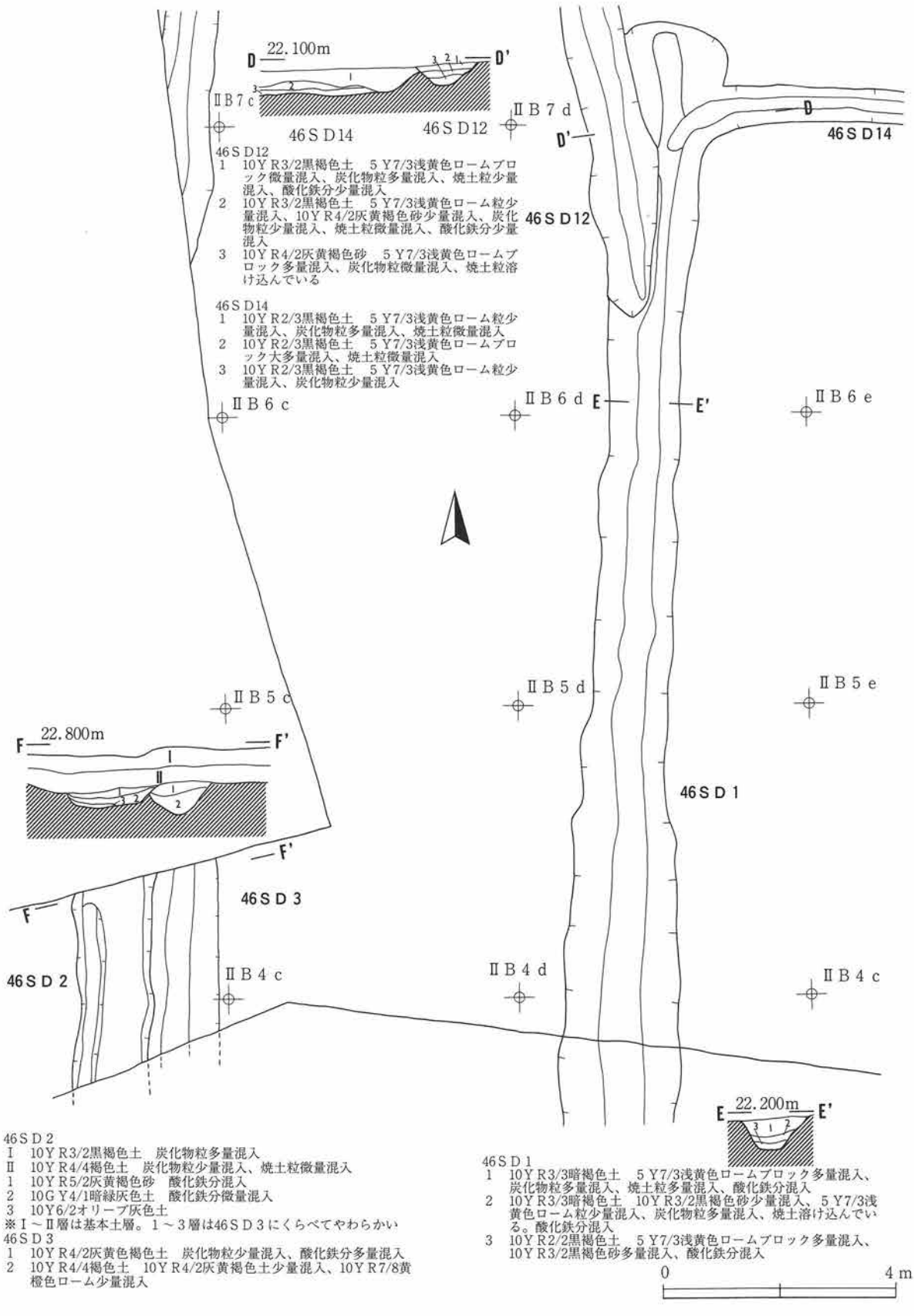
〔位置〕ⅡＢ３ｂ、４ｂ、６ｂ、７ｂ、８ｂ、９ｂに位置する。

〔重複〕本溝はⅢＢ区の74ＳＤ６に直接つながる同一の溝である。46ＳＤ２と重複するが本溝が古い。また46ＳＫ７、46ＳＫ18と重複するが本溝が古い。また46ＳＢ２の柱穴Ｐ319と重複するが本溝が古い。

〔平面形式〕ⅡＢ４ｂでいったん調査区外に入り、再びⅡＢ６ｂ付近で調査区内に延びてくる。一部不整な部分もあるが、全体的にはほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。

〔埋土〕南側では２層に北側では３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から須恵器壺（1003）、手づくねかわらけ（1103、1108、1138、1139）、常滑産陶器片口鉢（1205）、常滑産陶器甕（1252～1254、1269、1273）、渥美産陶器甕（1279、1287）、平瓦（1402、



46SD12
1 10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック微量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒少量混入、酸化鉄分少量混入
2 10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ローム粒少量混入、10YR4/2灰黄褐色砂少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒微量混入、酸化鉄分少量混入
3 10YR4/2灰黄褐色砂　5Y7/3浅黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒溶け込んでいる

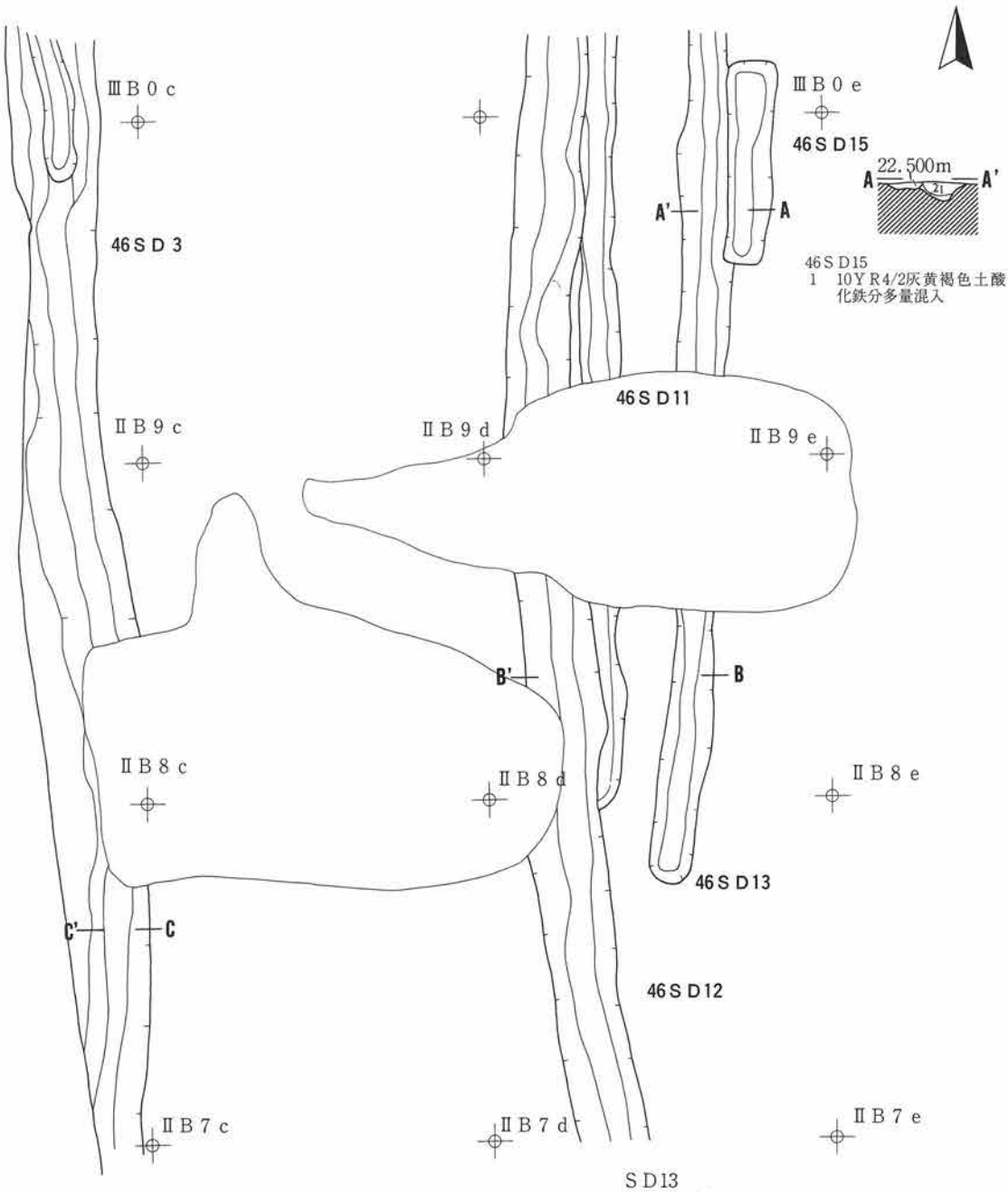
46SD14
1 10YR2/3黒褐色土　5Y7/3浅黄色ローム粒少量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒微量混入
2 10YR2/3黒褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック大多量混入、焼土粒微量混入
3 10YR2/3黒褐色土　5Y7/3浅黄色ローム粒少量混入、炭化物粒少量混入

46SD2
Ⅰ 10YR3/2黒褐色土　炭化物粒多量混入
Ⅱ 10YR4/4褐色土　炭化物粒少量混入、焼土粒微量混入
1 10YR5/2灰黄褐色砂　酸化鉄分混入
2 10GY4/1暗緑灰色土　酸化鉄分微量混入
3 10Y6/2オリーブ灰色土
※Ⅰ～Ⅱ層は基本土層。1～3層は46SD3にくらべてやわらかい

46SD3
1 10YR4/2灰黄色褐色土　炭化物粒少量混入、酸化鉄分多量混入
2 10YR4/4褐色土　10YR4/2灰黄褐色土少量混入、10YR7/8黄橙色ローム少量混入

46SD1
1 10YR3/3暗褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入、酸化鉄分混入
2 10YR3/3暗褐色土　10YR3/2黒褐色砂少量混入、5Y7/3浅黄色ローム粒少量混入、炭化物粒多量混入、焼土溶け込んでいる。酸化鉄分混入
3 10YR2/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック多量混入、10YR3/2黒褐色砂多量混入、酸化鉄分混入

第15図　A地区の溝①（46SD1・2・3・12）



46SD15
1　10YR4/2灰黄褐色土酸化鉄分多量混入

46SD3
1　10YR4/2灰黄褐色土　炭化物粒少量混入、酸化鉄分多量混入
2　10YR4/4褐色土　10YR4/2灰黄褐色土少量混入、10YR7/8黄橙色ローム少量混入
3　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/8黄橙色ロームブロック多量混入、10GY7/1明緑灰色砂少量混入、炭化物粒少量混入

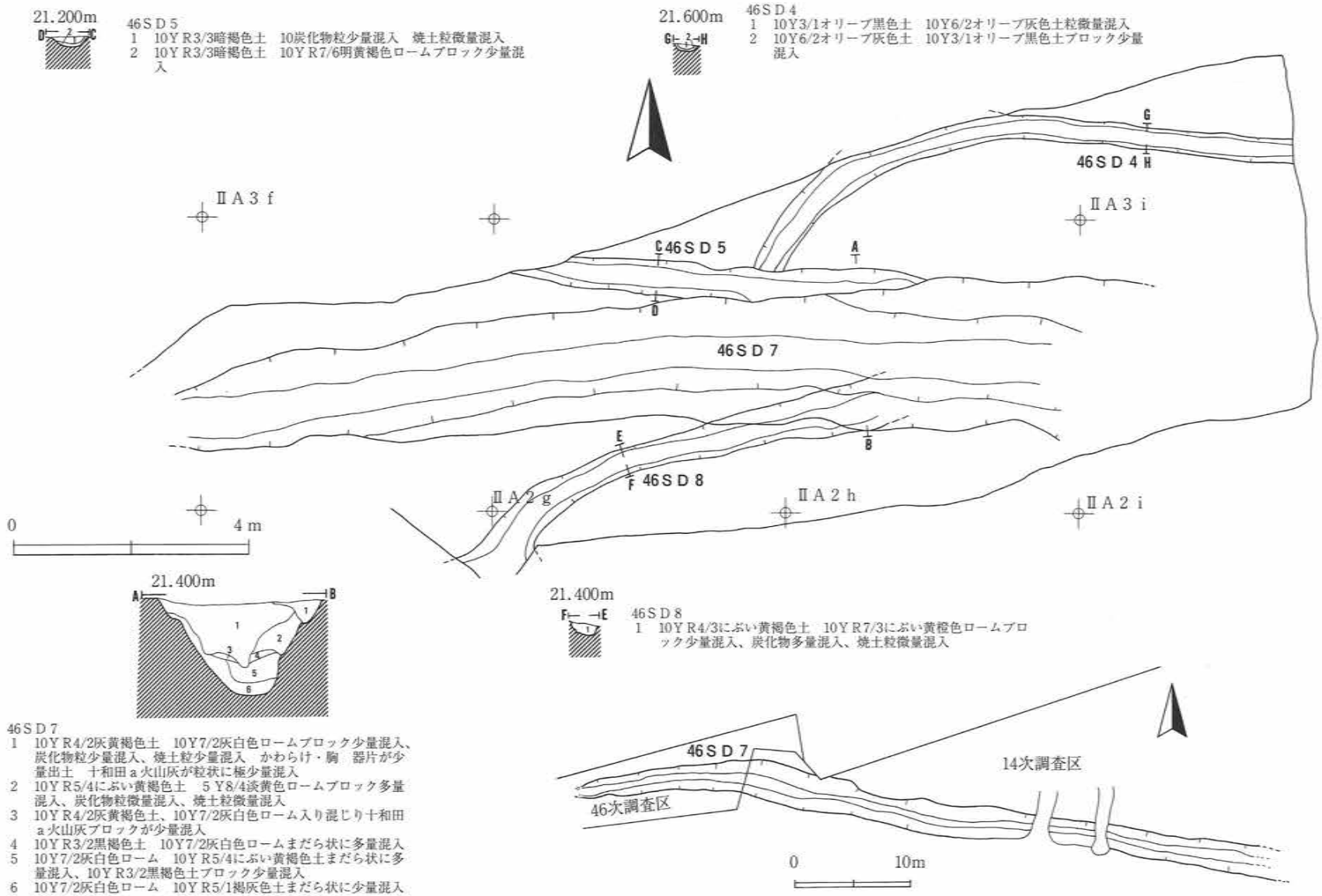
46SD11
1　10YR3/3暗褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入、酸化鉄分少量混入

46SD12
1　10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック微量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒少量混入、酸化鉄分少量混入
2　10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ローム粒少量混入、10YR4/2灰黄褐色砂少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒微量混入、酸化鉄分少量混入

46SD13
1　10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック微量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒少量混入、酸化鉄分少量混入
2　10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒溶け込んでいる

0　4m

第16図　A地区の溝②（46SD3・11～13・15）



第17図　A地区の溝③（46ＳＤ4・5・7・8）

1404）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である。道路の西側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ４（第17図、写真図版26）
〔位置〕ⅡＡ２ｇ、３ｈ、３ｉに位置する。
〔重複〕46ＳＤ５、46ＳＤ７と重複するが本溝が新しい。
〔平面形式〕やや弓なりになっている。底面の傾斜方向は東側より西側が標高が低くなっている。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土中から小野相馬産の陶器碗片（1723）が出土した。
〔溝の性格〕おそらく排水を目的とした溝と考えられる。
〔年代〕出土遺物から18世紀後半以降の所属と考えられる。

46ＳＤ５（第17図、写真図版26・27）
〔位置〕ⅡＡ２ｇ、２ｈに位置する。
〔重複〕46ＳＤ４、46ＳＤ７と重複するが、いずれも本溝が古い。
〔平面形式〕ほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし。
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる46ＳＤ７より古く、12世紀でも前半～中葉の可能性が高い。

46ＳＤ６（第18図、写真図版27）
〔位置〕ⅡＡ３ｊ、ⅡＢ３ａに位置する。
〔重複〕なし
〔平面形式〕ほぼ真っすぐであるが東側で幅が広がる。底面の傾斜方向は明瞭でない。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし。
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕近世から近代にかけての所属と思われる。

46ＳＤ７（第17図、写真図版27）
〔位置〕ⅡＡ２ｆ、２ｇ、２ｈに位置する。
〔重複〕46ＳＤ５と重複するが本溝が新しい。また46ＳＤ４、46ＳＤ８と重複するが本溝が古い。また志羅山遺跡14次調査のＳＤ３とつながる同一の溝である。
〔平面形式〕ほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は東側が高く、西側が低い。
〔埋土〕６層に分けられる。２～５層が自然堆積した後、再び浚渫し掘り込まれたと考えられる。そこに堆積したのが１層である。１層には十和田ａ火山灰が粒状に混入するが、これは直接火山灰降下時に堆積した

のではなく、二次的に土とともに堆積したものである。本溝の西側の低地には十和田ａ火山灰が多量に堆積している。本溝の構築時にその低地部分も掘り起こされ、溝周辺に掘りおこされた土と火山灰が分布していたと考えられる。その火山灰が再堆積したものと考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から須恵器甕（1008）、手づくねかわらけ（1101、1113、1137、1140）、常滑産片口鉢（1201、1206）、渥美産壺（1278）、渥美産甕（1280、1285）、丸瓦（1403、1406）、平瓦（1405、1408）が出土した。

〔溝の性格〕大規模な溝であり、都市を区画する溝、または道路側溝と考えられる。

〔年代〕出土遺物から12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＤ８（第17図、写真図版28）

〔位置〕ⅡＡ１ｆ、２ｆ、２ｇ、２ｈに位置する。

〔重複〕46ＳＤ７と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕やや弓なりになっている。底面の傾斜方向は東側が高く、西側が低い。

〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

46ＳＤ９（第18図、写真図版28）

〔位置〕ⅡＢ８ｃ、８ｄ、９ｄ、８ｅ、９ｅ、８ｆ、９ｆ、８ｇ、９ｇ、８ｈに位置する。

〔重複〕46ＳＫ６と接するが同時存在である。また46ＳＢ１と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕緩やかに蛇行し一部分で膨隆する。膨隆する部分には石敷がある。この部分は洗い場と考えられる。本溝と同時存在の46ＳＫ６も洗い場、水場といった機能と考えられる。水は西から東に水が流れるようになっている。

〔埋土〕３箇所で土層を観察したが１層から５層に分けられる。自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中からろくろかわらけ（1144）、中国産白磁壺（1307）、18世紀代の肥前産磁器碗（1606、1613）、18世紀後半～19世紀初の肥前産磁器火入れ（1655）、18世紀前半の肥前産陶器碗（1702）、19世紀代の東北地方在地産の陶器甕（1747）、東北地方在地産と考えられる陶器擂鉢（1754、1755、1763、1774）が出土した。

〔溝の性格〕流水をつくり、洗い場とした使用していた。

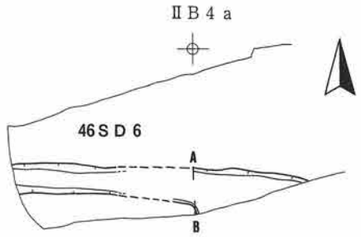
〔年代〕構築は近世にさかのぼる可能性があるが、廃絶は近代まで下る。

46ＳＤ10（第18図、写真図版28）

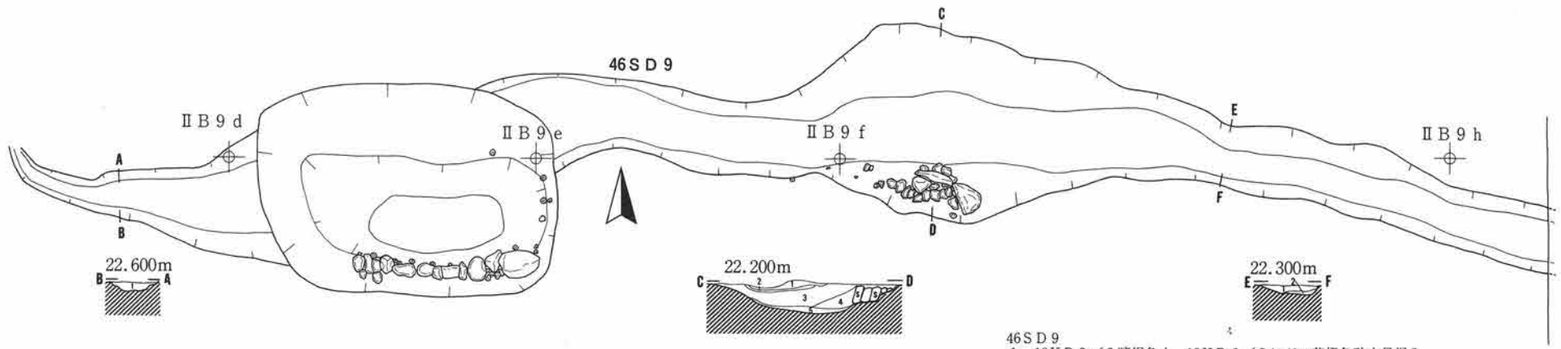
〔位置〕ⅡＢ４ｅ、５ｅ、６ｃ、６ｄ、６ｅに位置する。

〔重複〕46ＳＢ８の柱穴Ｐ230と重複するが本溝が新しい。また46ＳＤ１、46ＳＤ12と重複するが本溝が新しい。

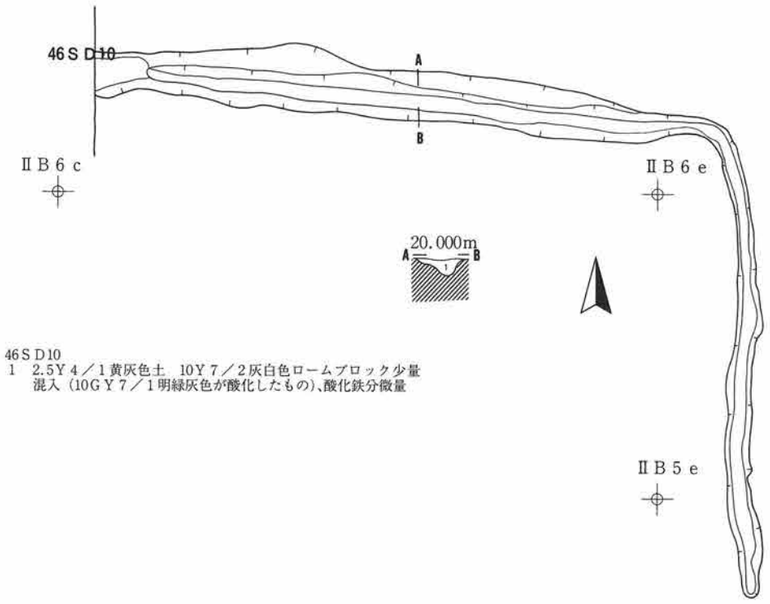
〔平面形式〕Ｌ字形の平面形である。底面の傾斜方向は東西部分では西から東、南北部分では北から南に水が流れるようになっている。西側はなお調査区外に延びる。



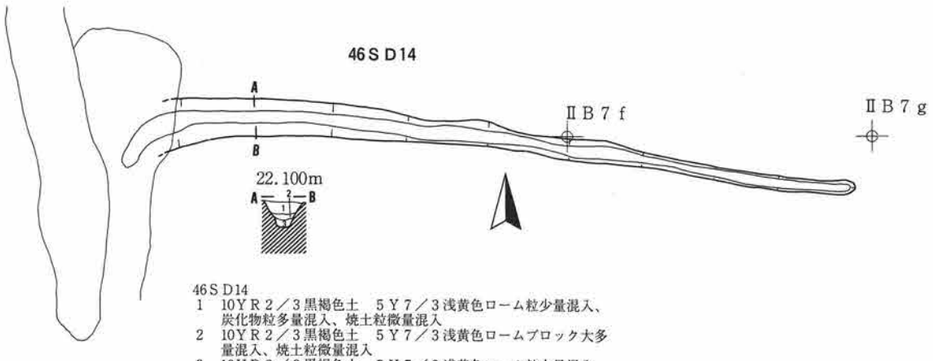
46SD6
1　10YR3／4暗褐色土　10YR5／8黄褐色土ブロック少量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入



46SD9
1　10YR3／3暗褐色土　10YR6／3にぶい黄橙色砂少量混入
　炭化物粒少量混入
2　10YR3／3暗褐色土　10YR6／3にぶい黄橙色砂炭化物粒
　炭化物粒少量混入
3　5Y3／1オリーブ黒色土　炭化物粒多量混入　やわらかい
4　5Y3／1オリーブ黒色砂　炭化物粒多量混入
5　5Y2／2オリーブ黒色土　5Y6／3オリーブ黄色ローム粒少量混入、炭化物粒多量混入



46SD10
1　2.5Y4／1黄灰色土　10Y7／2灰白色ロームブロック少量混入（10GY7／1明緑灰色が酸化したもの）、酸化鉄分微量



46SD14
1　10YR2／3黒褐色土　5Y7／3浅黄色ローム粒少量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒微量混入
2　10YR2／3黒褐色土　5Y7／3浅黄色ロームブロック大多量混入、焼土粒微量混入
3　10YR2／3黒褐色土　5Y7／3浅黄色ローム粒少量混入、炭化物粒少量混入

第18図　A地区の溝④（46SD6・9・10・14）

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から常滑産陶器壺（1216）、猿投産陶器短頸壺（1289）、猿投産陶器壺（1290）、軒丸瓦（1401）、大堀相馬産陶器碗（1714、1719）、18世紀後半の東北地方在地産と考えられる焼き締め陶器擂鉢（1766）が出土した。
〔溝の性格〕不明であるが、46ＳＢ９を囲む形に位置しており同時存在の可能性も考えられる。
〔年代〕近世の所属である。

46ＳＤ11（第16図、写真図版28・29）
〔位置〕ⅡＢ８ｄ、９ｄに位置する。
〔重複〕Ｂ地区の74ＳＤ18に直接つながる同一の溝である。また46ＳＤ12、46ＳＫ６と重複するが本溝が古い。
〔平面形式〕46ＳＤ12によって西側の上場が切られているため全体形は不明であるが、ほぼ真っすぐと思われる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（1111）、常滑産陶器甕（1231、1237）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である。道路の東側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ12（第15・16図、写真図版29）
〔位置〕ⅡＢ６ｄ、７ｄ、８ｄ、９ｄに位置する。
〔重複〕ⅢＢ区の74ＳＤ４に直接つながる同一の溝である。46ＳＤ１、46ＳＤ11と重複するが本溝が新しい。だが46ＳＤ１と直接重複しない部分は、本溝と同時に機能していたと考えられる。また46ＳＤ９、46ＳＤ10と重複するが本溝が古い。
〔平面形式〕上場の幅、下場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。
〔埋土〕２層に分けられる。全体的に自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土中から須恵器壺（1005）、常滑産陶器甕（1261、1262）、須恵器系陶器甕（1298）、平瓦（1407）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である。道路の東側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ13（第16図、写真図版29）
〔位置〕ⅡＢ７ｄ、８ｄ、９ｄに位置する。
〔重複〕ⅢＢ区の74ＳＤ５に直接つながる同一の溝である。また46ＳＤ15、46ＳＫ６と重複するが本溝が古い。
〔平面形式〕全体的にほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（1128）が出土した。

〔溝の性格〕道路側溝である。道路の東側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ14（第18図、写真図版29）
〔位置〕ⅡＢ６ｄ、６ｅ、６ｆ、７ｄ、７ｅに位置する。
〔重複〕46ＳＤ１と接するが前後関係を把握できなかった。同時存在の可能性が高い。また46ＳＥ６と重複するが本溝が新しい。また46ＳＢ５とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕ほぼ真っすぐのプランである。底面の傾斜方向は明瞭でない。
〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から渥美産陶器山茶碗（1275）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である46ＳＤ１からほぼ直角に延びており、都市、屋敷を区画する区画溝の可能性が考えられる。Ｂ地区に位置する74ＳＤ３、74ＳＤ９と平行関係にあり、関連が考えられる。
〔年代〕道路側溝と同時存在と考えられることから12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＤ15（第16図、写真図版29）
〔位置〕ⅡＢ７ｄ、８ｄ、９ｄに位置する。
〔重複〕46ＳＤ13と重複するが本溝が新しい。
〔平面形式〕全体的にほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は北側が高く、南側の標高が低い。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から常滑産陶器壺（1215、1223）、常滑産陶器（1263、1265）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である46ＳＤ13と重複するが、本溝の長さが３ｍほどしかなく、道路側溝になりうるかどうか判断できない。
〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

A地区柱穴計測表①

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
46P 1	37.1	21.92	
〃P 2	12.7	22.18	
〃P 3	48.7	21.82	
〃P 4	13.3	22.2	
〃P 5	18.0	22.16	
〃P 6	17.0	22.18	
〃P 7	9.2	22.30	
〃P 8	7.9	22.32	
〃P 9	15.4	22.09	
〃P 10	11.8	22.15	
〃P 11	20.0	22.09	
〃P 12	11.8	22.21	
〃P 13	12.4	22.26	
〃P 14	18.7	22.29	
〃P 15	11.8	22.29	
〃P 16	17.3	22.05	
〃P 17	13.7	22.04	
〃P 18	6.7	22.10	
〃P 19	12.6	22.15	
〃P 20	20.7	22.14	
〃P 21	15.1	22.11	
〃P 22	16.5	22.20	
〃P 23	欠番		
〃P 24	11.2	22.19	46SB7
〃P 25	19.0	22.15	
〃P 26	47.5	21.81	46SB4
〃P 27	30.0	22.07	46SB3
〃P 28	59.0	22.81	46SB4
〃P 29	22.1	22.98	46SB6
〃P 30	4.9	22.12	
〃P 31	47.8	21.80	46SB6
〃P 32	42.1	21.93	
〃P 33	22.2	22.07	46SB3
〃P 34	19.7	22.08	46SB3
〃P 35	3.1	22.20	46SB3
〃P 36	59.5	21.63	46SB3
〃P 37	30.9	21.95	46SB7
〃P 38	34.4	22.09	46SB4
〃P 39	15.5	22.07	
〃P 40	28.1	21.91	
〃P 41	18.6	21.94	46SB6
〃P 42	18.4	22.14	46SB4
〃P 43	22.1	22.15	
〃P 44	19.5	22.19	
〃P 45	16.6	22.23	
〃P 46	18.9	22.22	
〃P 47	40.3	21.99	
〃P 48	21.7	22.16	
〃P 49	20.8	22.13	46SB4
〃P 50	23.3	22.19	
〃P 51	24.3	22.19	
〃P 52	51.3	21.92	46SB3
〃P 53	欠番		
〃P 54	12.5	22.23	46SB4
〃P 55	89.5	21.51	46SB3
〃P 56	69.8	21.64	46SB3
46P 57	18.3	22.17	46SB3
〃P 58	9.3	23.34	46SB3
〃P 59	99.9	21.43	46SB3
〃P 60	37.1	21.76	46SB7
〃P 61	10.7	22.19	
〃P 62	20.1	22.20	
〃P 63	16.4	22.25	
〃P 64	26.2	22.36	
〃P 65	31.4	22.17	
〃P 66	欠番		
〃P 67	7.1	22.23	
〃P 68	26.5	22.14	46SB4
〃P 69	11.1	21.82	
〃P 70	25.6	21.90	
〃P 71	9.9	22.05	
〃P 72	16.3	21.93	46SB3
〃P 73	11.5	21.78	46SB3
〃P 74	20.4	21.67	46SB6
〃P 75	18.5	21.71	46SB5
〃P 76	14.5	21.80	46SB7
〃P 77	23.6	21.82	46SB6
〃P 78	39.8	21.63	46SB6
〃P 79	17.1	21.79	46SB7
〃P 80	8.2	22.07	
〃P 81	17.2	21.92	
〃P 82	10.1	22.01	
〃P 83	32.4	21.96	46SB3
〃P 84	21.9	21.87	46SB3
〃P 85	18.2	21.88	
〃P 86	21.5	21.86	
〃P 87	40.4	21.73	46SB4
〃P 88	17.9	21.89	46SB7
〃P 89	11.0	22.04	
〃P 90	18.8	21.71	46SB6
〃P 91	46.6	21.67	46SB6
〃P 92	21.0	21.97	
〃P 93	30.2	21.78	46SB1
〃P 94	17.5	21.82	
〃P 95	25.7	21.77	46SB5
〃P 96	10.3	21.96	
〃P 97	16.9	21.78	
〃P 98	17.5	21.67	46SB6
〃P 99	10.5	22.15	
〃P100	23.6	21.93	
〃P101	32.7	21.80	46SB1
〃P102	24.3	21.89	
〃P103	12.5	22.07	46SB1
〃P104	29.2	21.93	46SB2
〃P105	42.4	21.84	
〃P106	9.3	22.19	
〃P107	13.2	22.15	
〃P108	22.7	22.09	
〃P109	14.3	22.11	
〃P110	45.6	21.86	46SB1
〃P111	31.4	21.96	46SB2
〃P112	41.2	21.58	46SB4
46P113	12.9	22.10	46SB3
〃P114	37.9	21.75	46SB4
〃P115	欠番		
〃P116	33.8	21.89	
〃P117	9.4	22.15	
〃P118	50.2	21.94	46SB2
〃P119	20.0	22.37	
〃P120	48.8	21.98	46SB1
〃P121	52.4	22.15	46SB1
〃P122	51.1	21.96	
〃P123	欠番		
〃P124	欠番		
〃P125	68.5	21.97	46SB1
〃P126	8.0	22.45	46SB1
〃P127	8.4	13.94	
〃P128	70.2	21.85	46SB1
〃P129	24.2	21.99	
〃P130	21.0	22.01	
〃P131	29.0	22.01	
〃P132	13.6	21.99	
〃P133	12.5	22.36	
〃P134	37.5	22.15	
〃P135	79.8	22.45	
〃P136	34.4	22.18	46SB2
〃P137	14.8	21.96	
〃P138	37.3	21.69	46SB4
〃P139	15.6	21.72	
〃P140	8.7	21.68	
〃P141	95.1	21.91	46SB2
〃P142	23.9	21.61	46SB7
〃P143	12.0	21.59	
〃P144	7.6	21.71	
〃P145	23.6	21.51	46SB7
〃P146	6.6	22.12	
〃P147	4.5	22.14	
〃P148	21.0	21.90	46SB3
〃P149	39.7	23.29	
〃P150	34.2	22.25	
〃P151	31.5	21.41	46SB5
〃P152	5.0	21.75	
〃P153	11.4	21.68	46SB5
〃P154	42.6	21.33	
〃P155	22.2	21.59	
〃P156	42.8	21.37	
〃P157	20.6	21.86	46SB3
〃P158	8.7	22.09	
〃P159	8.7	22.21	46SB1
〃P160	33.7	21.86	46SB4
〃P161	27.4	21.91	46SB1
〃P162	25.8	22.10	46SB1
〃P163	4.8	22.19	
〃P164	20.6	21.50	
〃P165	8.8	21.70	
〃P166	13.3	21.51	
〃P167	12.8	21.49	
〃P168	23.7	21.42	

A地区柱穴計測表②

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
46P169	19.0	21.66	
〃P170	14.5	21.97	
〃P171	53.3	21.92	
〃P172	18.9	21.68	
〃P173	22.2	21.66	46SB5
〃P174	27.0	21.63	46SB8
〃P175	36.5	21.51	46SB5
〃P176	19.0	21.78	
〃P177	10.1	21.58	46SB8
〃P178	9.1	21.57	46SB5
〃P179	8.9	22.15	
〃P180	14.2	22.08	
〃P181	38.0	22.10	
〃P182	14.8	22.30	
〃P183	18.9	21.78	
〃P184	19.0	21.68	
〃P185	30.0	22.00	
〃P186	51.9	21.71	
〃P187	39.4	21.72	46SB9
〃P188	欠番		
〃P189	欠番		
〃P190	29.6	21.86	46SB9
〃P191	20.7	21.45	46SB10
〃P192	16.6	21.27	
〃P193	23.0	21.22	
〃P194	32.7	21.15	
〃P195	7.5	21.33	46SB10
〃P196	37.8	21.30	46SB10
〃P197	12.4	21.35	
〃P198	19.4	21.27	
〃P199	11.6	21.36	46SB10
〃P200	26.0	21.35	46SB10
〃P201	16.1	21.50	46SB8
〃P202	7.3	21.60	46SB8
〃P203	27.0	21.30	
〃P204	9.3	21.58	
〃P205	8.0	21.61	
〃P206	13.2	21.52	46SB8
〃P207	10.6	21.68	
〃P208	28.7	21.55	
〃P209	9.5	21.79	
〃P210	7.2	21.70	
〃P211	25.6	21.51	
〃P212	20.7	21.56	
〃P213	33.7	21.46	46SB8
〃P214	24.2	21.52	
〃P215	22.1	21.51	
〃P216	13.2	21.69	
〃P217	21.6	21.64	
〃P218	27.0	21.59	
〃P219	11.3	21.71	
〃P220	18.0	21.72	
〃P221	20.1	21.66	
〃P222	25.8	21.89	
〃P223	25.6	21.68	
〃P224	27.6	21.64	
46P225	14.6	21.84	
〃P226	19.8	21.70	
〃P227	19.0	21.70	
〃P228	4.0	21.84	
〃P229	14.6	21.66	
〃P230	25.0	21.59	46SB8
〃P231	38.8	21.85	
〃P232	4.5	21.90	
〃P233	27.1	21.72	
〃P234	17.2	21.69	
〃P235	7.5	21.81	
〃P236	21.5	21.67	
〃P237	37.0	21.74	46SB9
〃P238	28.3	21.72	46SB9
〃P239	16.0	21.85	
〃P240	13.8	21.92	
〃P241	7.1	21.93	
〃P242	15.0	21.72	
〃P243	42.3	21.77	46SB9
〃P244	40.8	21.62	46SB9
〃P245	5.1	21.96	46SB9
〃P246	12.3	21.77	46SB8
〃P247	38.8	21.39	
〃P248	14.6	21.53	
〃P249	37.2	21.32	
〃P250	16.6	21.51	
〃P251	12.0	21.52	
〃P252	38.6	21.60	
〃P253	12.4	21.60	
〃P254	6.6	21.62	
〃P255	13.5	21.39	
〃P256	10.1	21.28	
〃P257	欠番		
〃P258	7.5	21.36	
〃P259	欠番		
〃P260	5.9	21.55	
〃P261	6.0	21.64	
〃P262	14.5	21.54	
〃P263	20.1	21.51	
〃P264	14.5	21.62	
〃P265	12.1	21.53	
〃P266	6.6	21.55	
〃P267	74.0	21.22	
〃P268	7.6	21.48	
〃P269	49.4	21.52	
〃P270	7.8	21.26	
〃P271	11.8	21.37	
〃P272	11.9	21.34	
〃P273	14.3	21.50	
〃P274	16.3	21.49	
〃P275	欠番		
〃P276	27.5	21.18	
〃P277	9.1	21.21	
〃P278	12.2	21.26	
〃P279	29.2	21.25	
〃P280	16.9	21.24	
46P281	11.6	21.41	
〃P282	23.1	21.11	
〃P283	18.0	21.31	
〃P284	11.2	21.09	
〃P285	23.1	21.25	
〃P286	43.0	22.02	46SB2
〃P287	16.9	20.96	
〃P288	9.1	20.98	
〃P289	11.8	22.36	
〃P290	22.0	22.24	
〃P291	10.8	24.61	74SB13
〃P292	30.3	22.15	74SB21
〃P293	7.4	22.46	
〃P294	14.7	22.42	74SB13
〃P295	21.5	22.43	
〃P296	26.0	22.47	74SB20
〃P297	14.5	22.60	
〃P298	11.4	22.63	74SB21
〃P299	13.0	22.61	
〃P300	11.5	22.52	
〃P301	11.5	22.52	
〃P302	6.9	22.47	
〃P303	20.3	22.43	
〃P304	13.6	22.33	
〃P305	15.4	22.54	
〃P306	19.2	22.66	
〃P307	12.7	22.51	
〃P308	39.9	22.29	74SB20
〃P309	35.1	22.32	
〃P310	9.4	22.50	
〃P311	26.5	22.37	
〃P312	14.8	22.39	
〃P313	21.2	22.22	74SB13
〃P314	欠番		
〃P315	10.2	21.90	
〃P316	36.2	22.26	46SB2
〃P317	13.5	21.50	46SB5
〃P318	24.0	21.69	46SB5
〃P319	41.0	22.15	46SB2
〃P320	12.4	21.84	46SB3
〃P321	6.5	22.04	
〃P322	16.8	20.01	46SB2
〃P323	31.9	21.54	
〃P324	6.8	22.02	46SB1
〃P325	52.4	21.66	46SB3
〃P326	4.3	22.03	46SB2
〃P327	10.7	22.17	46SB1
〃P328	26.5	22.18	
〃P329	16.9	22.40	
〃P330	35.0	21.83	46SB1
〃P331	3.1	22.19	46SB1
〃P332	18.6	21.86	46SB3
〃P333	52.2	21.60	46SB9
〃P334	8.1	21.92	46SB4
〃P335	6.1	22.00	46SB3
〃P336	3.1	22.20	46SB3

第３節　出土遺物

１　土師器、須恵器（第19図、写真図版91）

本調査区では古代の遺構は検出されなかったが、古代の土師器、須恵器が少量出土している。多くは12世紀、近世の遺構の埋土中から出土している。土とともに流れ込んで埋土に混入したものと考えられる。本調査区の南の志羅山遺跡14次調査区、また北のＣ地区では古代の竪穴住居が検出されており、これら周辺から移動してきた遺物と考えられる。

現在、12世紀の須恵器系陶器について十分に把握されておらず、また磐井郡での古代須恵器についてもほとんど明らかになっていない状況である。よってここで須恵器として示したものには、12世紀の須恵器系陶器が含まれている可能性もあることを記しておく。

土師器は長胴甕の1001が１片のみ出土している。口縁部が短く外反も弱く、概ね10世紀代と考えられる。外面の調整が頚部にまで及ばず、頸部近くの輪積み痕があらわになっている。内面は横位にナデられている。胎土には海綿状骨針が混入している。

須恵器は1002～1009の８点を示した。他に不掲載の古代の須恵器と考えらる破片が24片出土している。

1002の器種は長頸壺の可能性が考えられる。底部にには貼り付けによる低い高台がある。外面は回転ヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。断面の胎土は灰色である。

1003は甕の下半部と考えられる。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。断面の胎土は暗赤褐色を呈し海綿状骨針が混入する。

1004は甕の下半部と考えられる。外面にはヘラケズリが施される。断面の胎土は灰色を呈しやや軟質である。海綿状骨針が混入する。なおこの破片はⅢＢ区の74ＳＥ４出土の破片と接合した。

1005は甕の肩部である。外面のロクロ調整の下にタタキが施されている。内面はロクロ調整である。断面の胎土は暗灰色である。

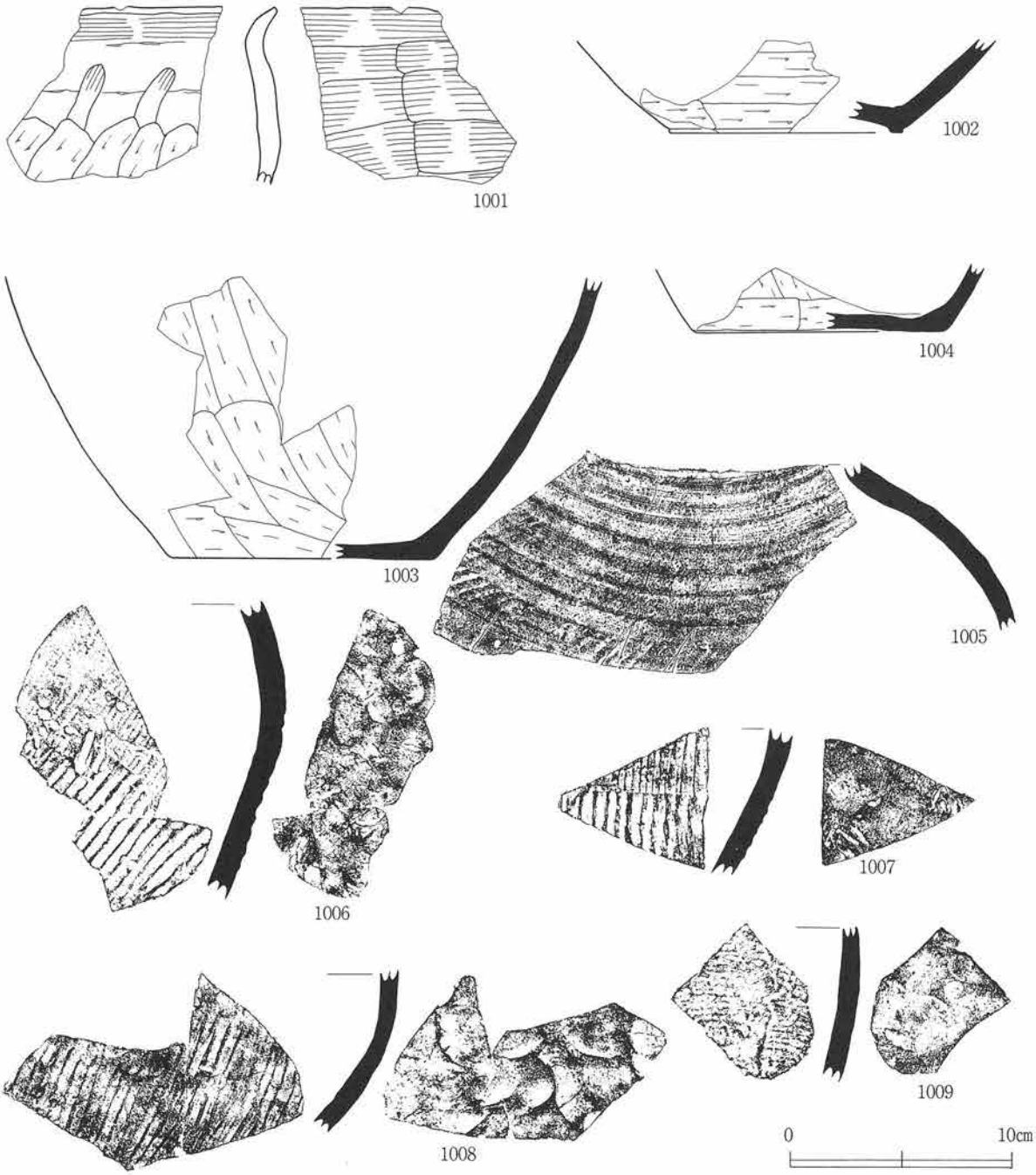
1006は大甕の体部破片である。外面にはタタキ目が施されるが、下側が目の大きい格子目状のタタキ、上側は目の小さい格子目状のタタキの２種類のタタキ具が使用されている。内面の下側には青海波のアテ具痕がみられる。また内面には指紋がべったりと明瞭についている。断面の胎土は暗赤褐色で硬い感じがする。

1007は1006と同一個体である。外面は２種類の格子目状のタタキが施されている。内面には青海波のアテ具痕がみられる。断面の胎土は1006と同一である。

1008は大甕の体部破片である。外面には平行タタキ目、内面には丸みを持つ種類を判定できないアテ具痕がみられる。断面の胎土は暗灰色で海綿状骨針が混入する。

1009は1006、1007と同一個体と推定される大甕である。外面には1006、1007にみられる目の小さい方の格子目状タタキが施されている。内面は指によってナデられている。胎土は1006、1007と同一である。

以上のように須恵器の胎土はさまざまであり、複数の産地のものが存在すると考えられる。時期については伴出遺物も明らかでないので、ここで一つ一つについて考察はできない。概ね９～10世紀のものであろう。



番号	種類	器種	出土位置	法量（cm） 高さ	口径	底径	外面調整	内面調整	色調	その他
1001	土師器	長胴甕	ⅡB5～9d表土	(8.0)	－	－	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	橙色	
1002	須恵器	壺	46SK6埋土	4.2	－	10.6	ヘラケズリ	ナデ	灰色	低い高台がつく
1003	〃	〃	46SD3埋土	12.6	－	11.8	ヘラケズリ	ナデ	暗灰色	
1004	〃	〃	46P135埋土	28	－	11.2	ヘラケズリ	ナデ	灰色	
1005	〃	〃	46SD12埋土	(7.1)	－	－	タタキ・ロクロ	ロクロ	灰色	
1006	〃	甕	46SD1埋土	(13.5)	－	－	タタキ・ロクロ	指によるナデ	灰色	ⅡB5d表土からも出土
1007	〃	〃	46SE6埋土	(6.2)	－	－	タタキ	ロクロ	暗灰色	
1008	〃	〃	46SD71～2層	(7.3)	－	－	タタキ	アテ具	灰色	
1009	〃	〃	46SK18底面	(7.0)	－	－	タタキ	指によるナデ	灰色	

第19図　A地区の土師器、須恵器

2　かわらけ（第20～21図、写真図版91～94）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊３　Ｘかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。下に分類基準を示す。

手づくねかわらけ

Ｃ類（口縁部二段なで技法）

Ｃ$_3$類　上段のつまみは弱くいくらか内湾ぎみ。上段と下段のなで面はほぼ同じ幅である。口唇部断面形は丸い。

Ｃ$_4$類　上段を強くつまむ。上段は下段のなで面より幅が狭い。口唇部断面形は丸い。

Ｃ$_5$類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

Ｃ$_{5'}$類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形だが面取り部がくびれる。

Ｄ類（口縁部一段なで技法）

Ｄ$_2$類　口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部断面形は丸い。

Ｄ$_3$類　口縁部は弱く内湾気味。口唇部断面形は丸い。

Ｄ$_4$類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

Ｄ$_{4'}$類　Ｄ$_4$類に類似。口唇部面取り後、口縁全体を一度なでる。断面形はほぼ三角形。

ロクロかわらけ

Ｒｄ　皿型の大型品

Ｒｂ　皿型の小型品（小型品は皿型とする。）

Ｒｂ　碗型

口縁部の形態

０類　口縁部が底部から丸く立ち上がるもの

１類　口縁部が底部からすぐにほぼまっすぐに立ち上がるもの

２類　口縁部が内湾し、均等の割合で口縁部、底部の二つに二分できるもの。

段の有無と段の数

０　段はなく、表面は滑らかである。

１　段はないが、表面には粗い調整痕がある。

２　段が２段ある。

３　段が３段ある。

4　段が4段ある。

5　段が5段以上ある。

底部の形状

疑似高台がない場合はダッシュ（′）をつける。

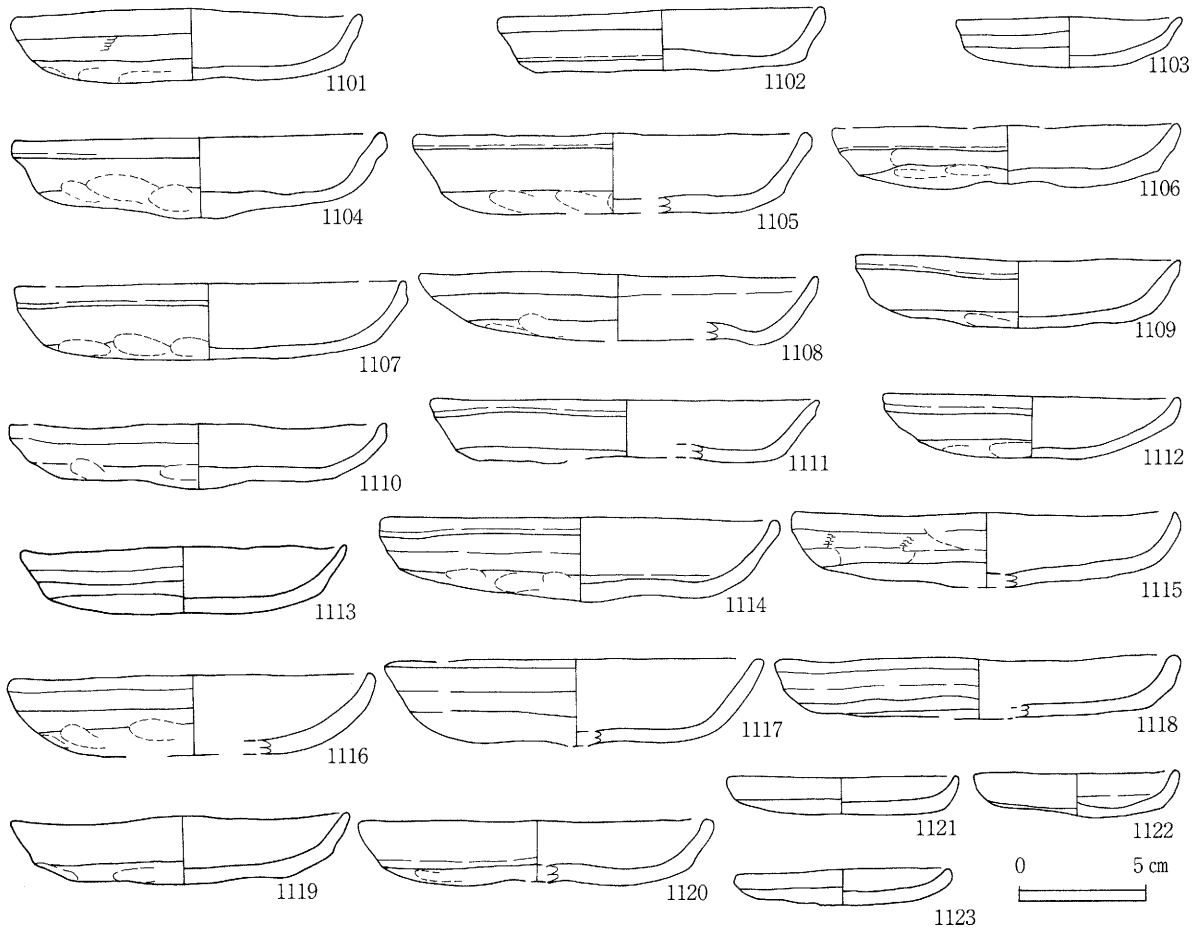
疑似高台がある場合はダッシュ（′）をつけない。

以上の要素を合わせてＲｄ01′、ｒｄ10のように表す。

12世紀のかわらけは、手づくねかわらけ41点、ロクロかわらけ4点を図示した。他に不掲載のかわらけは15kg出土している。本調査区ではかわらけが集中して出土した遺構はなく、全体を合わせた出土量も少ないといえる。

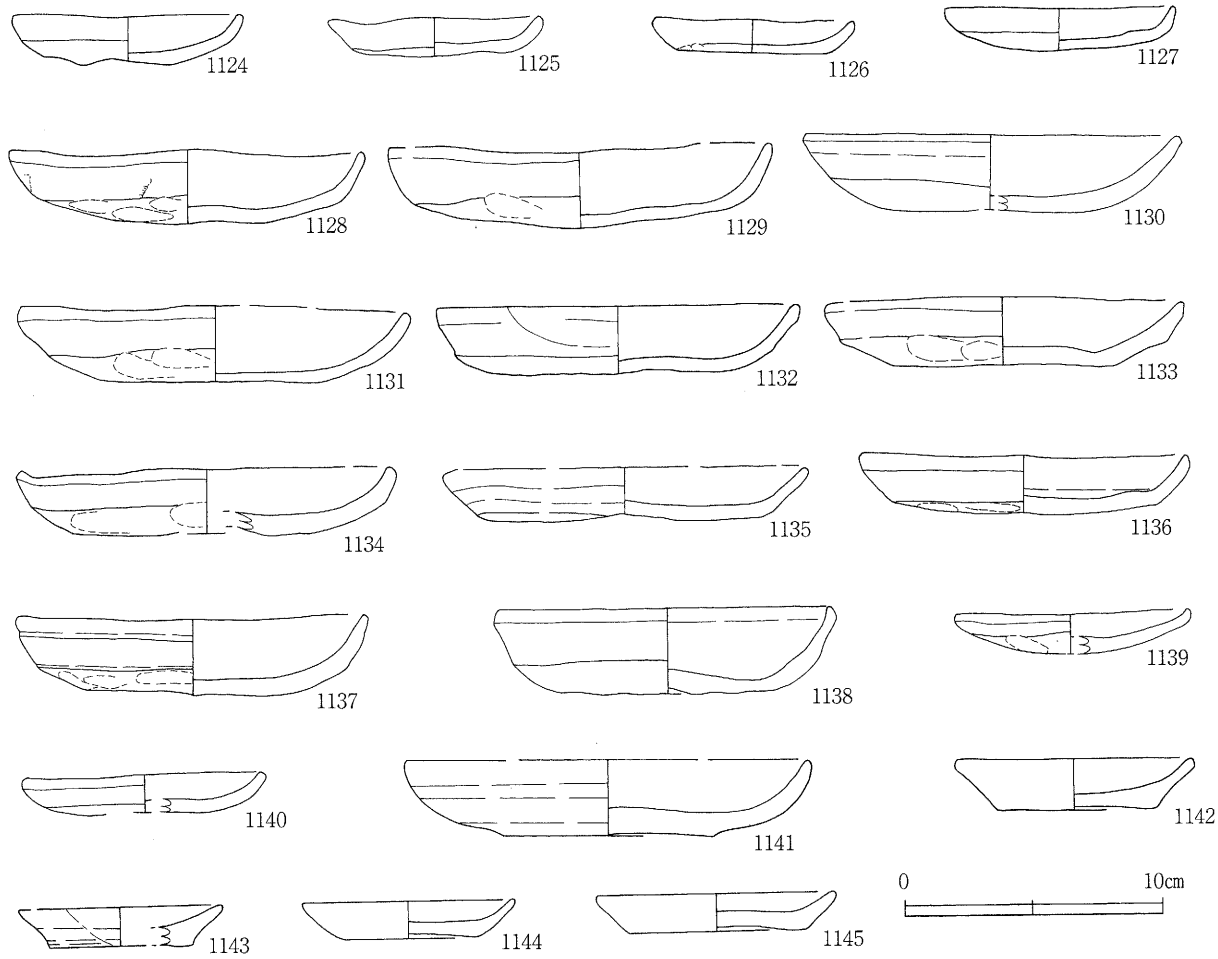
手づくねかわらけはC_3類が3点、C_4類は9点、C_5類は6点、D_2類が1点、D_3類が8点D_4類が13点ある。

ロクロかわらけは4点とも小型の皿（ｒｄ）である。



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
1101	46SD7埋土 1、2層	C3	13.6	—	3.0	布？		85	細砂多	
1102	46SE9埋土	C3	13.0	—	2.5	布？	すのこ痕	100	細砂多	
1103	46SD3埋土	C3	8.8	—	2.0			80	細砂多	風化著しい
1104	46SE8 1層	C4	14.8	—	3.3			40		歪み著しい
1105	46SE9埋土	C4	15.7	—	(3.2)	布		25		
1106	〃	C4	13.8	—	2.5			55	細砂少	内面に少量の油煙、歪み著しい
1107	〃	C4	15.2	—	3.7	ヘラ		75	細砂少	
1108	46SD3埋土	C4	15.4	—	2.8			50	細砂多	
1109	46SE9埋土	C4	12.6	—	2.8			20	細砂多	歪み著しい
1110	46SE8	C4	15.0	—	2.6			60	細砂多	指示み
1111	46SD11埋土	C4	15.2	—	(2.6)			50	細砂多	
1112	46SE8埋土	C4	11.8	—	2.4	布		100		内面に油煙付着
1113	46SD7 1～2層	C5	12.8	—	2.7			50	細砂少	
1114	46SE9 1層	C5	15.4	—	3.4	皮？		70		
1115	46SE9埋土	C5	15.1	—	(3.0)	布	すのこ痕	30		
1116	〃	C5	14.2	—	(3.2)			25	細砂多	
1117	46SE8 1層	C5	15.0	—	3.5			20	細砂多	指凹み
1118	〃	C5	15.6	—	(2.5)			35	細砂多	
1119	46SD1埋土(ⅡB6d)	D2	13.2	—	2.7			30	細砂多	
1120	46SE8 1層	D3	13.6	—	2.6			30	細砂多	中央指凹み
1121	46SE9埋土	D3	9.0	—	1.5			100	細砂少	口辰の一部に油煙付着、継ぎ目、植物痕
1122	〃	D3	8.0	—	1.9	布？		60	細砂多	指頭圧痕散在
1123	〃	D3	8.6	—	1.4			100	細砂多	内面いっぱいに炭化物吸着 外底にタール状付着物

第20図　A地区のかわらけ①



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
1124	46ＳＥ９埋土	D3	9.2	6.9	1.5			30	粗砂多	
1125	〃	D3	8.2	－	1.5	布？		80	粗砂多	
1126	〃	D3	7.7	－	1.3			30	細砂少	
1127	〃	D3	9.0	－	1.7		すのこ痕	100	細砂多	継ぎ目
1128	46ＳＤ13埋土	D4	13.7	－	3.0		すのこ痕	70	細砂多	
1129	46ＳＥ８　１層	D4	15.0	－	3.3	布？		20	細砂多	
1130	46ＳＤ13埋土	D4	14.6	－	(3.1)	布		20	粗砂多	
1131	46ＳＥ８埋土	D4	15.2	－	3.0			85	細砂多	
1132	46ＳＥ９埋土	D4	14.0	－	2.7	布		80	細砂少	指凹み
1133	〃	D4	13.8	－	2.8	布	すのこ痕	20	細砂多	
1134	46ＳＥ８埋土	D4	14.6	－	2.7			90	細砂多	
1135	46ＳＥ９埋土	D4	14.3	－	2.1			35	細砂多	
1136	46ＳＤ１埋土	D4	12.6	－	2.4	布？		35	細砂多	
1137	46ＳＤ７　１～２層	D4	13.5	－	3.2	布？		90	細砂多	風化著しい
1138	46ＳＤ３埋土(ⅡB8c)	D4	13.0	－	3.4			45	細砂多	中央指凹み
1139	46ＳＤ３埋土	D4	9.0	－	(1.7)			30	細砂少	
1140	46ＳＤ７　１～２層	D4	9.2	－	(1.6)	布		45		
1141	46ＳＫ12埋土	R d04	16.0	8.2	3.0	ロクロ	回転糸切	25	粗砂少	右回り
1142	46ＳＥ９埋土	r d	9.2	6.2	2.0	ロクロ	回転糸切		粗砂少	
1143	46ＳＤ１埋土	r d	8.0	5.6	(2.1)	ロクロ	回転糸切	15	粗砂多	
1144	46ＳＤ９埋土(ⅡB8c)	r d10	8.2	5.2	1.5	ロクロ	回転糸切	40	細砂多	風化著しい
1145	46ＳＥ８　１層	r d10	9.2	6.9	1.5	ロクロ	回転糸切	30	粗砂多	右回りか

第21図　Ａ地区のかわらけ②

3　国産陶器（第22～30図、写真図版94～101）

（1）常滑産陶器（第22～27図、写真図版94～100）

本調査区から出土した常滑産陶器は中野・赤羽生産地編年の2型式と3型式に相当するものが出土している。図示したのは片口鉢9点、三筋壺2点、広口瓶？1点、短頸壺1点、広口壺9点、甕51点である。これらは破片資料が多く、残された破片からは2型式と3型式に型式分類ができないものも多い。他に不掲載の常滑産陶器の破片が169片出土している。

1201～1209は片口鉢である。底辺部を有するものはいずれもヘラケズリが施されているのが観察できる。1201は高台部の形状から2型式と考えられる。1204は高台が取れてしまっている。1206～1207は口唇部に面取りがなされている。2型式に相当する。1209は高台の断面形が細長い台形を呈しており3型式に相当する。厚ぼったい感じのする個体である。1210は口縁部が凹み渥美産の片口鉢に似るが、胎土から一応常滑産と判断した。

1211、1212は三筋壺である。1211の三筋文は細い三本の線からなっており、1212は太い単線からなっている。1211は最下段の筋である。1212は中段か下段か判断できない。

1213は体部の立ち上がりが急な器形である。広口瓶と推測される。底辺部に回転ヘラケズリが施されている。1214は短頸壺である。外面には自然釉がかかる。

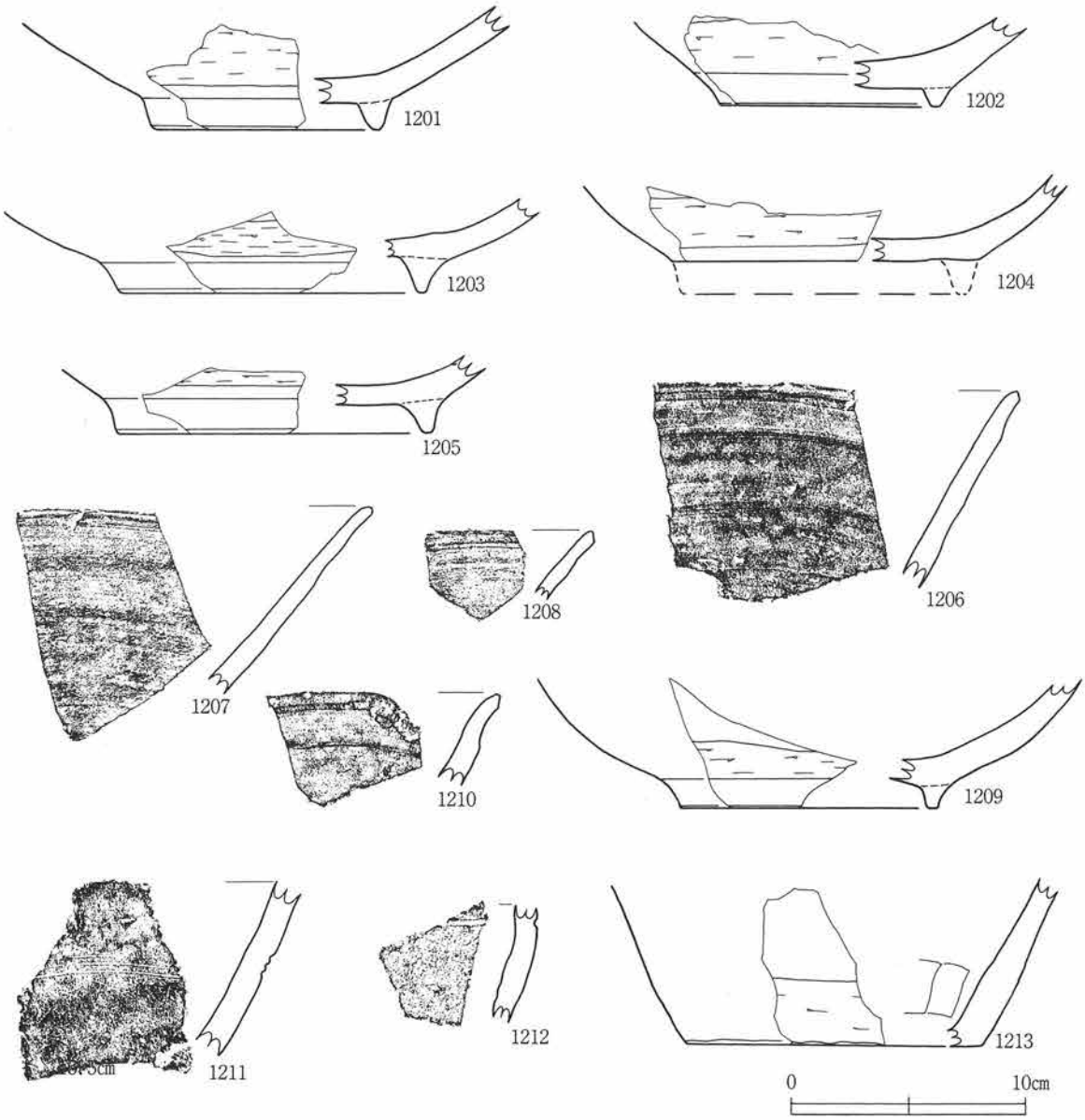
1215～1223は広口壺である。1215、1216は口縁部の断面形態から2型式と思われる。1219はⅢＢ区出土の口縁部破片2217と同一個体と思われる。同一個体であれば3型式ということになる。1220の外底面には蛇目状に砂が付着する。

1224～1227は甕である。この3片は胎土、押印から同一個体と考えられる。またＢ地区の74ＳＥ3から、直接接合はしないが、これと同一個体と考えられる大形の破片が出土している（2235～2245）。この個体は頸部の立ち上がり角度から3型式に相当する。

1228、1229の2破片は同一個体である。また1231～1237の7破片は胎土、押印から同一個体の可能性が高いと思われる。1238～1244の7破片も同一個体と考えられる。

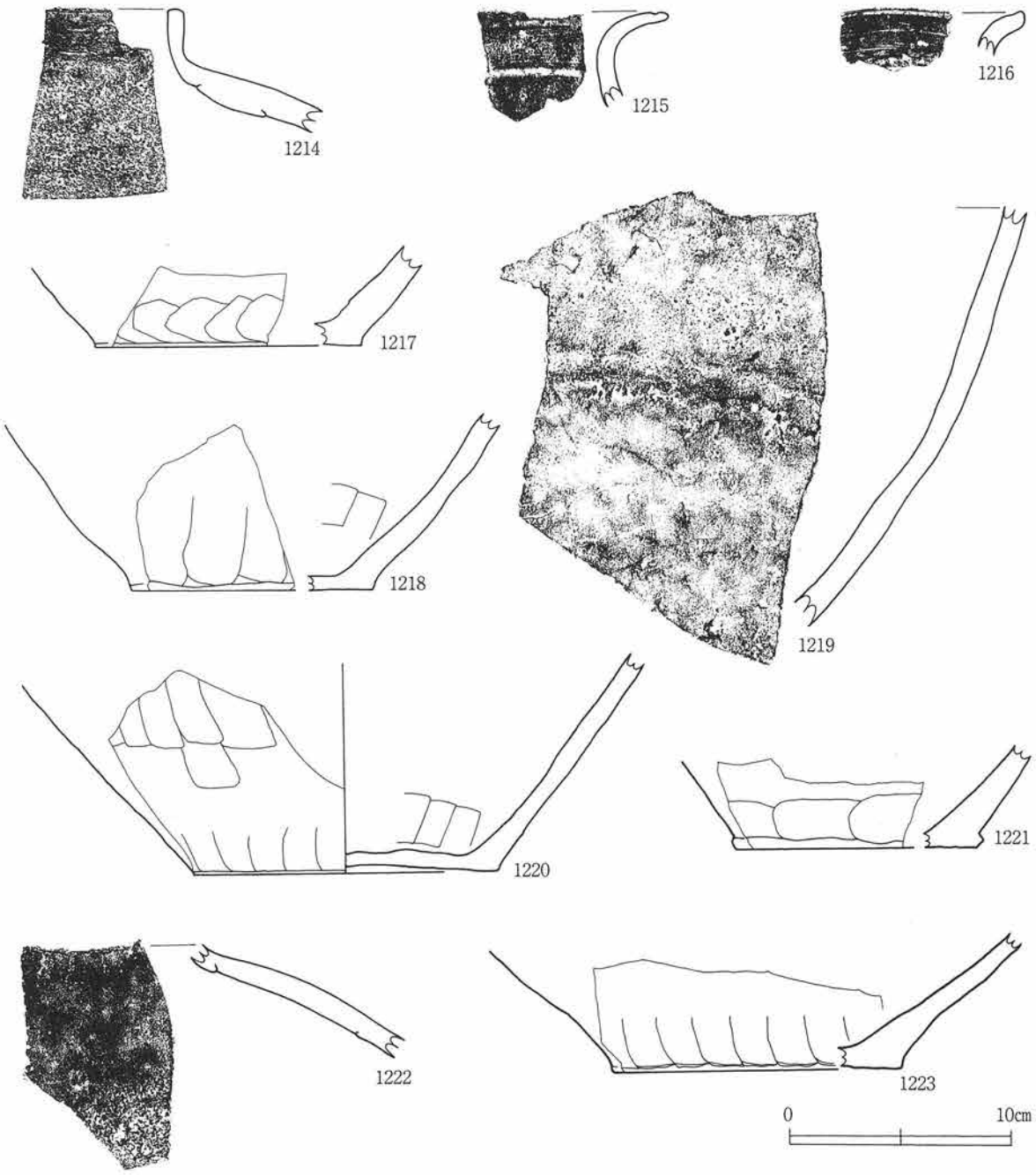
1245～1258は主に46ＳＥ7と46ＳＤ3から出土しているが押印、胎土から同一個体と考えられる。1265は頸部～口縁部の形態から3型式に相当する。

1268は接合しないが、胎土と押印からＢ地区の74ＳＥ3出土の底部から口縁部まで接合できた甕（2231）と同一個体と考えられる。同一個体であれば3型式である。



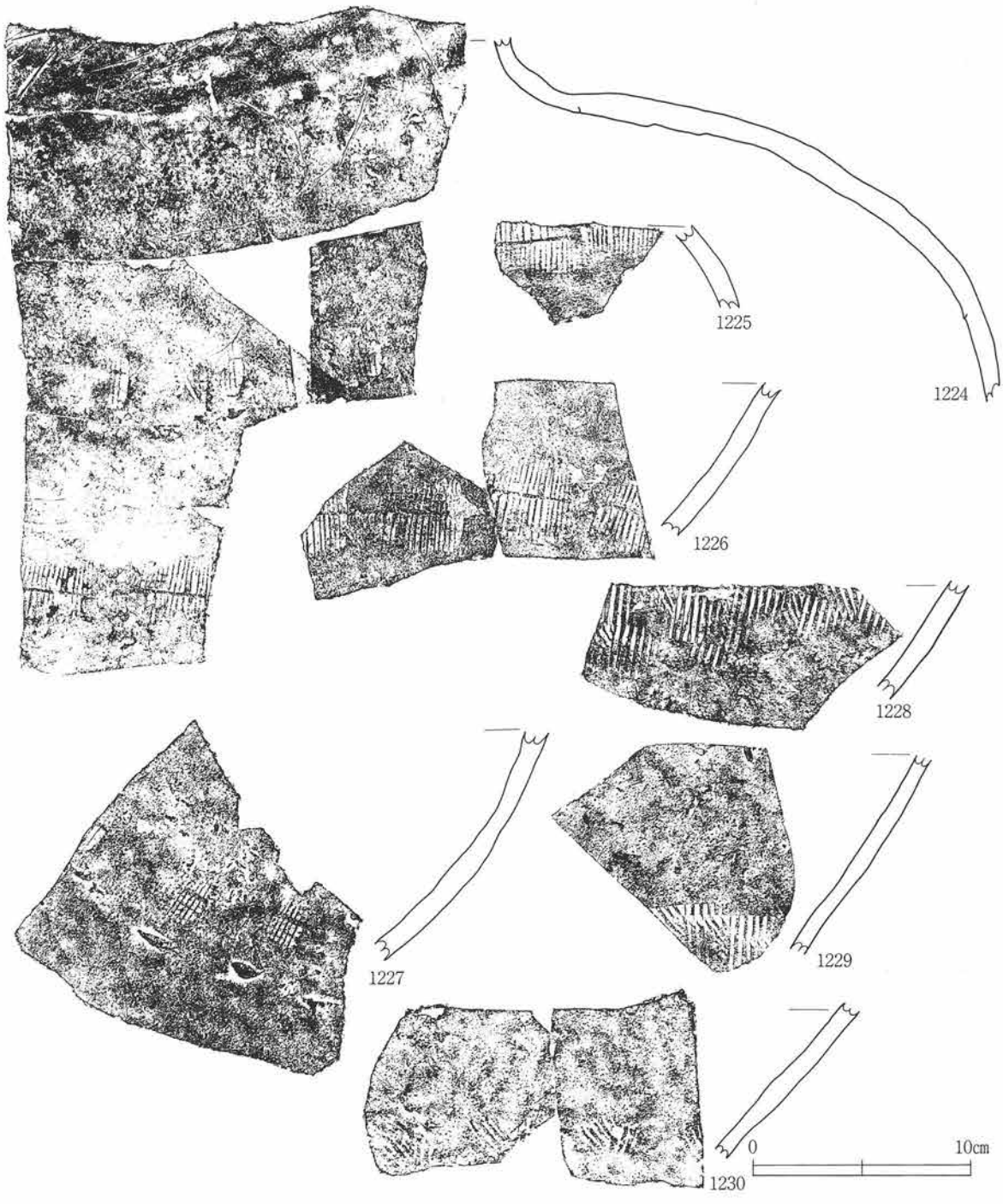
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1201	常滑	片口鉢	体下～底	46ＳＤ７埋土1～2層	２型式	灰色	内面摩耗
1202	〃	〃	体下～底	46ＳＥ９　１層西半	２～３型式	灰色	内底面摩耗、外底面砂付着
1203	〃	〃	体下～底	46ＳＤ1検出面(ⅡB7d)	〃	灰色	内底面摩耗
1204	〃	〃	体下～底	46ＳＤ１埋土	〃	灰色	高台部欠損、内面摩耗
1205	〃	〃	体下～底	46ＳＤ3埋土(ⅡB8c)	〃	灰色	内底面摩耗、外底面砂付着
1206	〃	〃	口縁	46ＳＤ７　１～２層	〃	灰～茶色	口唇部面取りあり
1207	〃	〃	口縁	46ＳＤ１埋土	〃	外灰・内自然釉	口唇部面取りあり
1208	〃	〃	口縁	46ＳＤ１埋土	〃	外灰・内自然釉	口唇部面取りあり
1209	〃	〃	体下～底	46ＳＤ１検出面	３型式	灰色	内底面摩耗
1210	〃	〃	口縁	46ＳＥ９　１層西半	不明	外灰色･内自然釉	常滑か渥美かはっきりしない、おそらく常滑
1211	〃	三筋壺	体下	46ＳＤ1埋土(ⅡB5d)	２～３型式	茶色	三本の細い線による文様
1212	〃	〃	体下	46ＳＤ1埋土(ⅡB5d)	３型式	茶色　自然釉	一本の太い線による文様
1213	〃	壺	体下	46ＳＤ1埋土(ⅡB5d)	２～３型式	茶色～自然釉	底辺部に回転ヘラケズリ

第22図　Ａ地区の常滑産陶器①



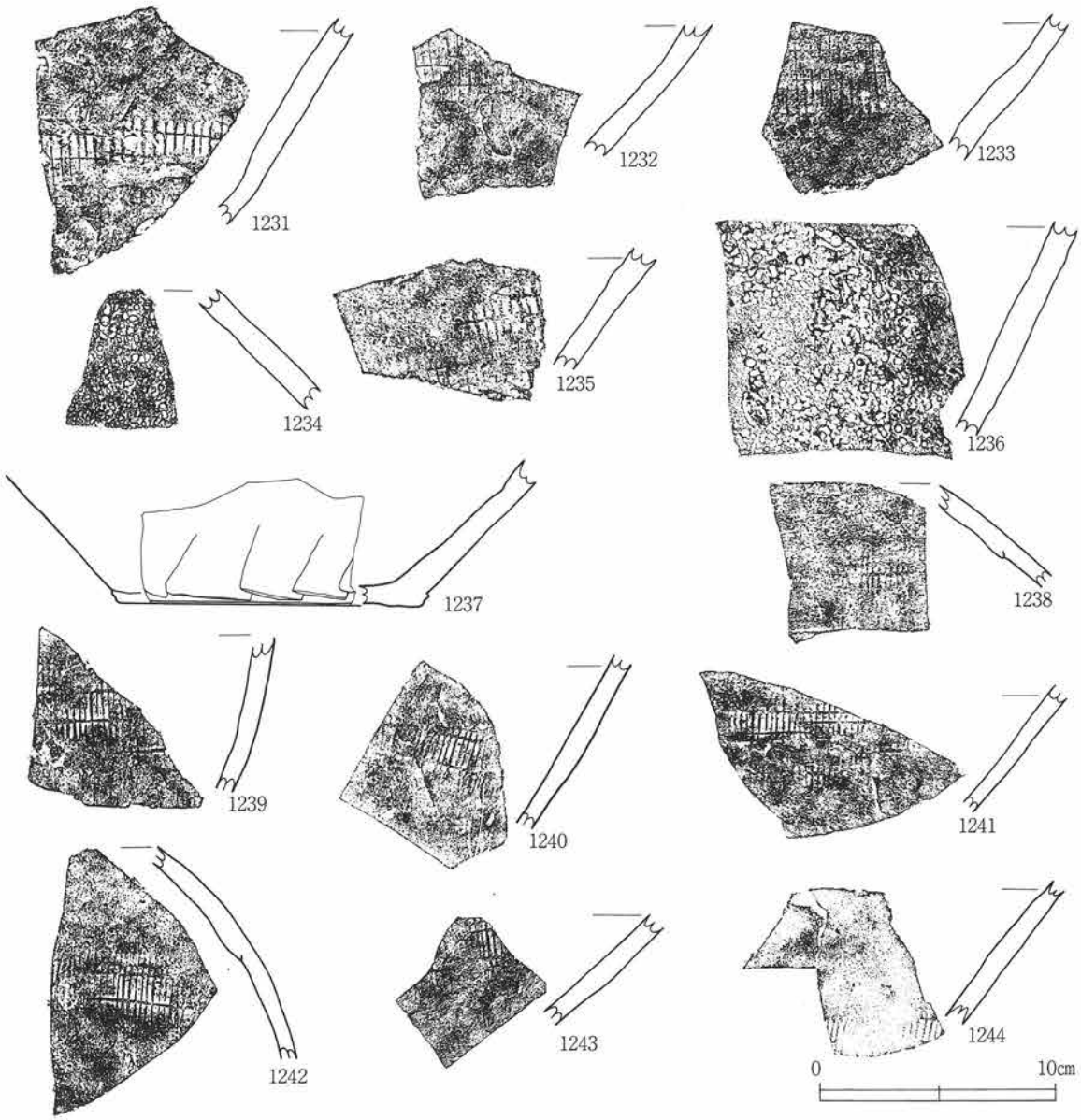
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1214	常滑	短頸壺	口～肩	46ＳＤ１検出面	２～３型式	外灰～自然釉	内面灰色
1215	〃	壺	口縁	46ＳＤ15埋土	２型式	褐色～自然釉	口縁内面に沈線状のくぼみあり
1216	〃	〃	口縁	46ＳＤ10埋土	〃	褐色	
1217	〃	〃	体下～底	46ＳＤ１埋土	２～３型式	灰色	
1218	〃	〃	体下～底	ⅡＢ５～９ｄ表土	〃	灰色	
1219	〃	〃	体部	ⅡＢ５～９ｄ表土	３型式	外灰色	内自然釉
1220	〃	〃	体下～底	46ＳＥ７埋土	２型式	灰褐色	
1221	〃	〃	体下～底	46ＳＥ７埋土	２～３型式	灰色	
1222	〃	〃	肩	46ＳＥ７埋土	〃	外自然釉	内赤褐色
1223	〃	〃	体下～底	46ＳＤ15埋土	〃	外赤褐色	内面全面に自然釉

第23図　Ａ地区の常滑産陶器②



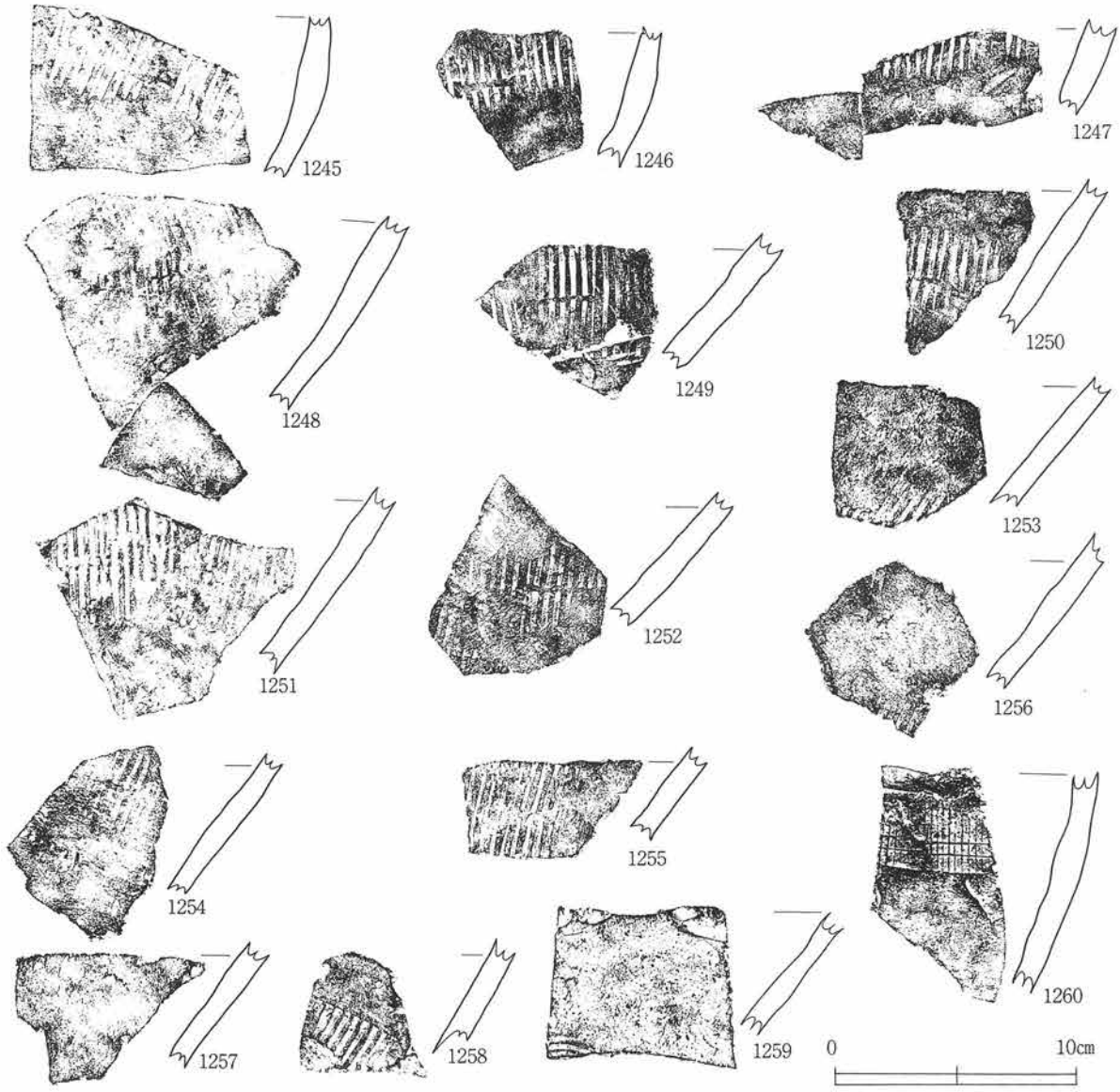
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1224	常滑	甕	肩	46ＳＥ７埋土	３型式	茶褐色	46ＳＥ９　１層からも出土　1224～1227同一個体
1225	〃	〃	体上	46ＳＥ７埋土	〃	茶褐色	同一個体片は74ＳＥ３からも出土
1226	〃	〃	体下	46ＳＥ９　１層	〃	茶褐色	
1227	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	茶褐色	
1228	〃	〃	体下	ⅡＢ区　火災面	〃	赤褐色	28、29同一個体
1229	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	２～３型式	茶褐色	
1230	〃	〃	体下	ⅡＢ９ｄ表土	〃	橙色	

第24図　Ａ地区の常滑産陶器③



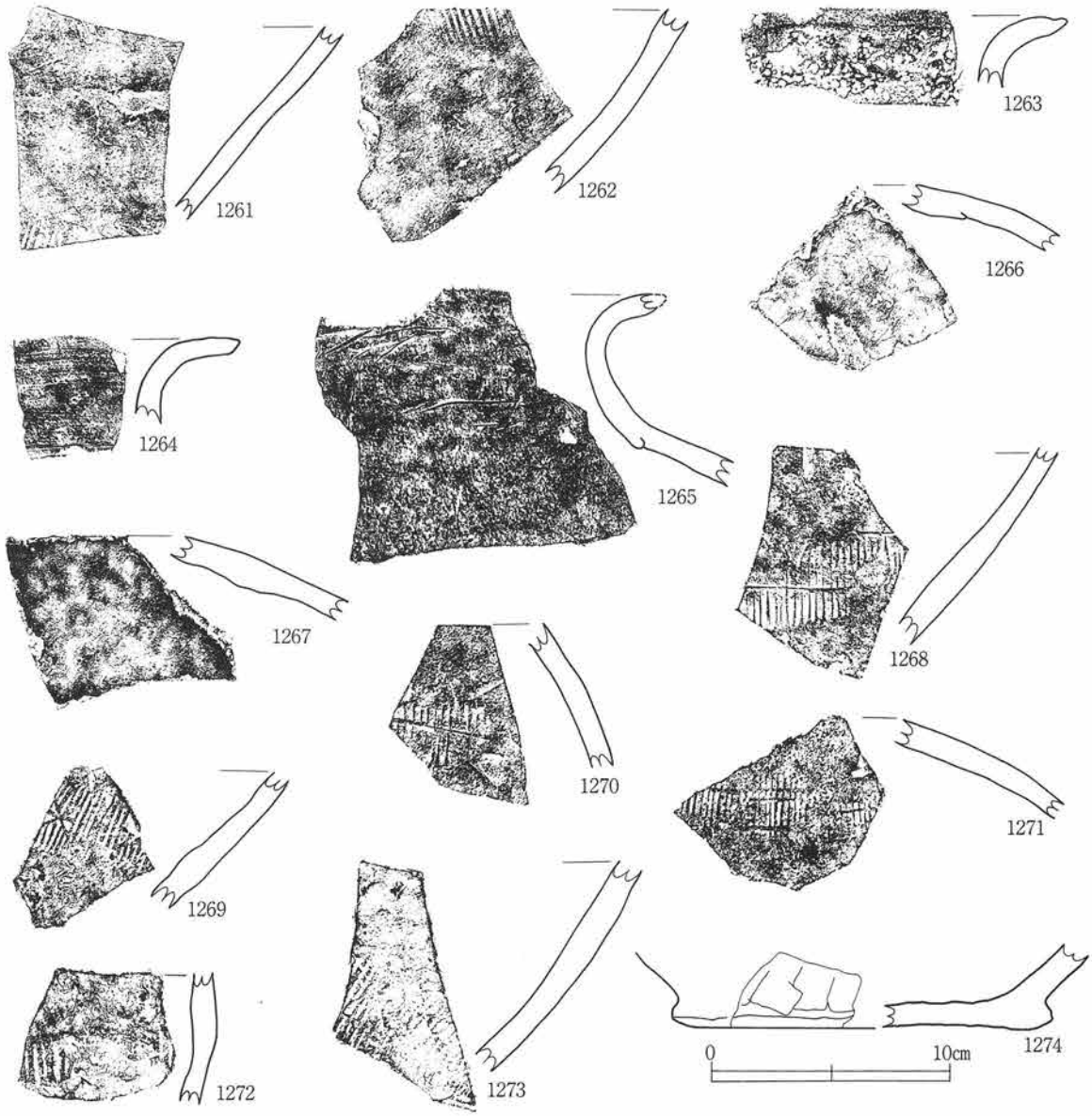
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1231	常滑	甕	体下	46ＳＤ11埋土	2～3型式	灰色	1231～1237同一個体
1232	〃	〃	体下	46ＳＤ１埋土	〃	灰色	
1233	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	灰色	
1234	〃	〃	体上	46ＳＥ７埋土	〃	外自然釉	内灰色
1235	〃	〃	体下	ⅡＢ５～９ｄ表土	〃	灰色	
1236	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	外自然釉	内灰色
1237	〃	〃	体下～底	46ＳＤ11埋土	〃	灰色	
1238	〃	〃	体上	46ＳＥ９　１層	〃	暗灰色	1238～1244同一個体
1239	〃	〃	体中	46ＳＤ1埋土(ⅡＢ5ｄ)	〃	灰色	
1240	〃	〃	体下	ⅡＢ５～９ｄ表土	〃	灰色	
1241	〃	〃	体下	ⅡＢ５～９ｄ表土	〃	灰色	
1242	〃	〃	体上	46ＳＥ７埋土	〃	灰色	
1243	〃	〃	体下	46ＳＥ９　１層	〃	暗灰色	
1244	〃	〃	体下	46Ｐ55埋土	〃	灰色	

第25図　Ａ地区の常滑産陶器④



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1245	常滑	甕	体中	46ＳＥ７埋土	２～３型式	暗褐色～赤褐色	1245～1258同一個体
1246	〃	〃	体中	46ＳＤ３埋土	〃	灰褐色～赤褐色	
1247	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	灰白色～赤褐色	
1248	〃	〃	体下	46ＳＥ７　１層	〃	暗褐色～赤褐色	
1249	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	灰白色～赤褐色	
1250	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	暗褐色～赤褐色	
1251	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	暗褐色～赤褐色	
1252	〃	〃	体下	46ＳＤ3埋土(ⅡB8C)	〃	暗褐色～赤褐色	
1253	〃	〃	体下	46ＳＤ3埋土(ⅡB9C)	〃	暗褐色～赤褐色	
1254	〃	〃	体下	46ＳＤ3埋土(ⅡB8C)	〃	暗褐色～赤褐色	
1255	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	暗褐色～赤褐色	
1256	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	赤褐色	
1257	〃	〃	体下	46ＳＥ９　１層西半	〃	暗褐色～赤褐色	
1258	〃	〃	体下	46ＳＤ１埋土	〃	灰褐色～赤褐色	
1259	〃	〃	体下	ⅡＢ区　火災面	〃	外面暗灰色	内面赤褐色
1260	〃	〃	体中	46ＳＥ７埋土	〃	外面茶褐色	内面自然釉

第26図　Ａ地区の常滑産陶器⑤



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1261	常滑	甕	体下	46ＳＤ12埋土	2～3型式	茶褐色	
1262	〃	〃	体下	46ＳＤ12埋土	〃	茶褐色～橙色	
1263	〃	〃	口縁	46ＳＤ15埋土	〃	外自然釉	内面灰色
1264	〃	〃	口縁	46ＳＤ１埋土	〃	外暗褐色	内面自然釉
1265	〃	〃	口～肩	46ＳＤ15埋土	〃	灰色	外面灰かぶり
1266	〃	〃	肩	46ＳＤ1埋土(ⅡＢ5ｄ)	〃	外自然釉	内面茶色　1267と同一個体
1267	〃	〃	肩	46ＳＥ７埋土	〃	外自然釉	内面茶色
1268	〃	〃	体下	46ＳＥ９　１層西半	〃	灰色	
1269	〃	〃	体下	46ＳＤ３埋土	〃	赤褐色	
1270	〃	〃	体中	46ＳＥ９　１層西半	〃	灰色	
1271	〃	〃	肩	46ＳＤ１埋土	〃	灰色	
1272	〃	〃	体中	ⅡＢ区　火災面	〃	暗褐色	
1273	〃	〃	体下	46ＳＤ３埋土	〃	茶褐色	
1274	〃	〃	底部	不明	3型式か	赤褐色	

第27図　Ａ地区の常滑産陶器⑥

（２）渥美産陶器（第28図、写真図版100・101）

本調査区では渥美産陶器の出土量は常滑産陶器に比較すると少ない。図示したのは山茶碗２点、片口鉢１点、刻画文壺１点、甕10点である。他に不掲載の渥美産陶器の破片が25片ある。

1275、1276は山茶碗である。1275の外底面には回転糸切痕がある。また釉の流れが底辺部に一条みられ、上半部が施釉されていた可能性を示している。内底面にも釉の飛沫がみられる。1276は高台部が剥がれ落ちている。内面は磨耗しており、赤色顔料が付着している。赤色顔料（ベンガラか？）を擂る用途に使用されたことがわかる。

1277の片口鉢は口縁部が凹んでいる。わずかながら片口部の突出が始まる部位の破片である。1278は壺の肩部破片である。自然釉で埋もれていて明瞭に観察できないが、線と刺突による文様が観察できる。刻画に囲まれた部分に剥落した痕跡があるが、なんらかの突起が剥離した部分の可能性が高い。

1279～1288は甕である。1279は口縁部破片である。口縁部の傾きが急で、口唇部の断面形がやや丸まっており12世紀でも新しい段階（第４四半期頃）の所属である。1280と1281は同一の押印がみられ同一個体と考えられる。1282は外面に土師器のハケメ調整に似る調整が施されている。1285には灰釉の刷毛塗りがみられる。

（３）猿投産陶器（第29図、写真図版100）

胎土が常滑、渥美産陶器と異なり、猿投産陶器と思われるものが２点ある。12世紀段階の猿投産陶器の実態は明らかではなく、これらが確実に猿投産陶器か否かははっきりしないことは承知であるが、その可能性が高いものとして示しておく。1289は短頸壺の口縁部、1290は壺の体部の破片である。1289の胎土はやや黄色がかった灰色、1290は灰色でどちらも非常に緻密である。

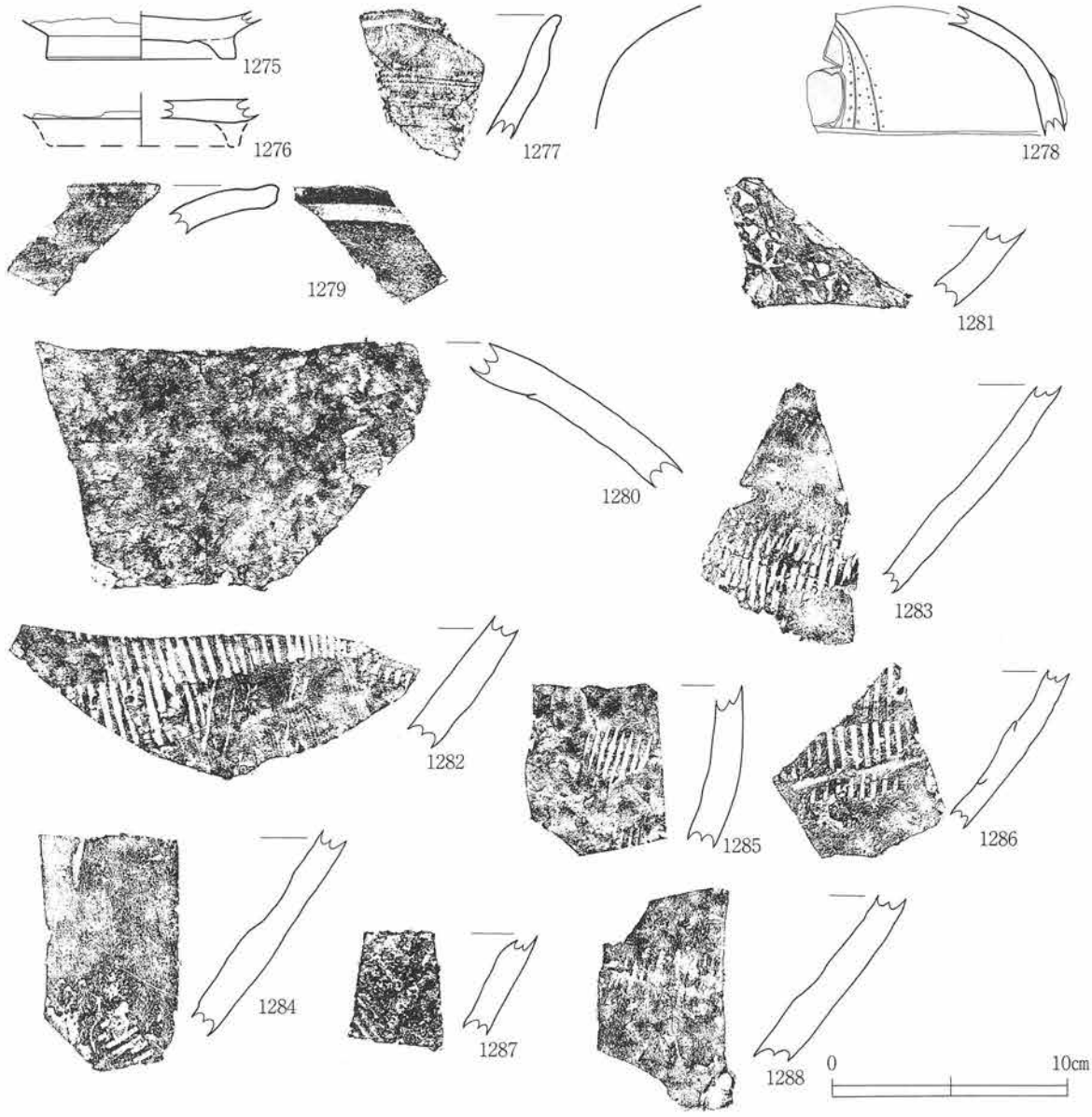
（４）水沼産陶器・擬水沼産陶器（第29・30図、写真図版100）

宮城県石巻市に所在する水沼窯産の陶器と、はっきりした窯は特定できないが、水沼産陶器と同じ系譜の東北地方産と考えられる「擬水沼産陶器」が出土している。出土した全点を図示した。1291～1295が擬水沼産陶器、1296～1298が水沼産陶器である。

1291～1295は同一個体の壺である。断面の胎土は暗灰色で砂粒が混じり硬い。1291は口縁部の破片である。頸部がやや外反して立ち上がり口唇部が屈曲する。口唇部の内面と外面の肩部の始まりに自然釉がかかる。口径を出すには残存が少ないが、やや無理をして口径を割り出し図示した。1292の体部破片には沈線による文線が施されている。これは袈裟襷文と考えられる。1293は口縁部破片で1291と同じ形態をしている。1294は沈線文を持つ体部破片、1294は体部下半の破片である。これと同一個体の破片がⅢＢ区の道路状遺構の道路側溝（74ＳＤ４と74ＳＤ６）から３片（2382～2384）出土している。

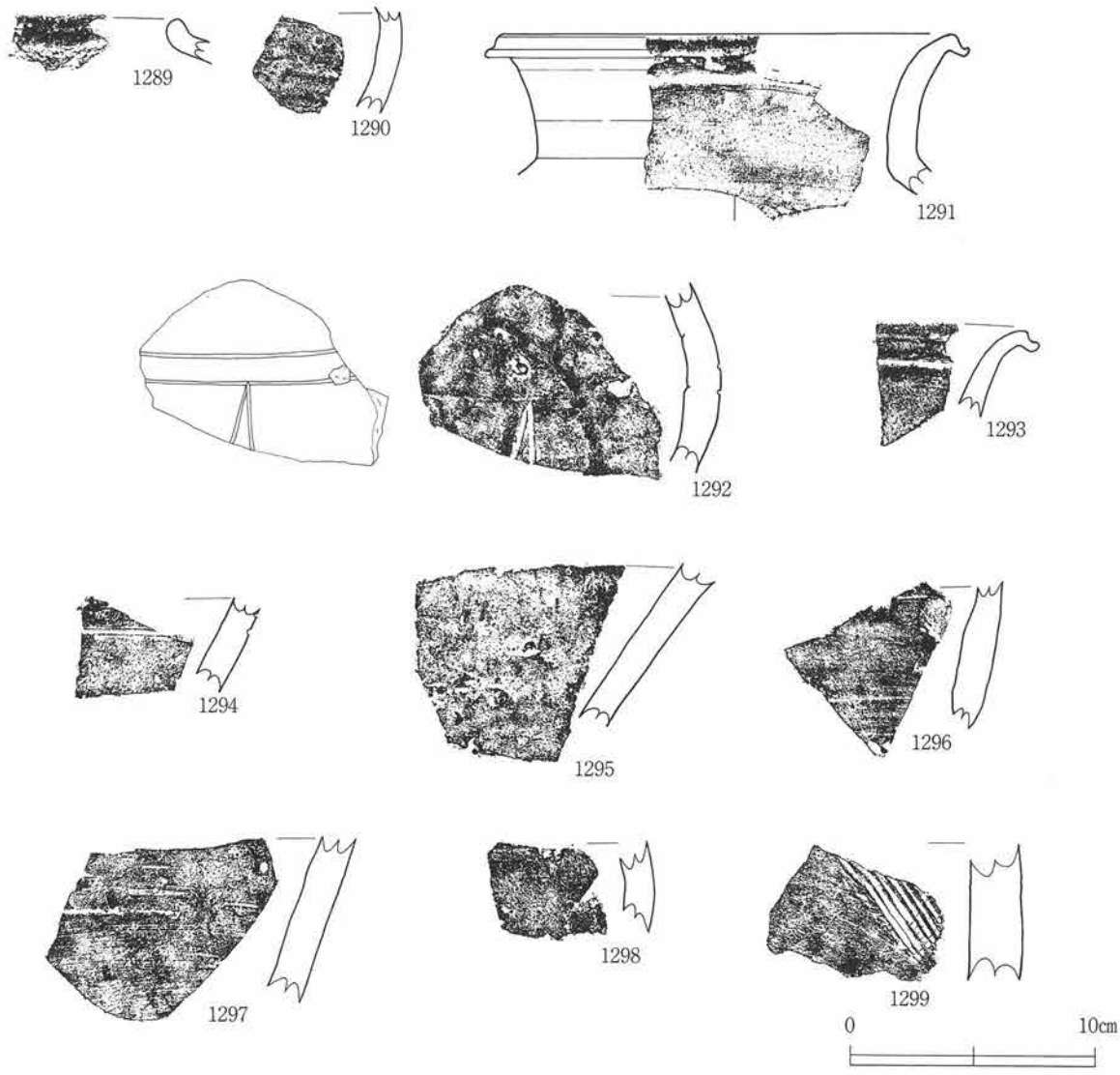
水沼産陶器の袈裟襷文壺は、町教育委員会調査の志羅山遺跡64次調査で出土している。1291の口縁部形態は64次調査の袈裟襷文壺の口縁部に非常に類似している。また体部の袈裟襷文から同様の形態の壺の可能性が高い。第30図はその復元想定図（実測図ではない）である。64次調査の壺は肩部に縦位の耳が付く四耳壺である。1291の壺は耳の有無は不明であるが同様の形態の壺であれば耳がついていた可能性は高いと考えられる。

1296～1298は水沼産陶器の壺である。いずれも別個体と思われる。断面の胎土はどれも暗赤褐色である。1295、1296は緻密で硬く、1297はやや軟質で粗い胎土である。



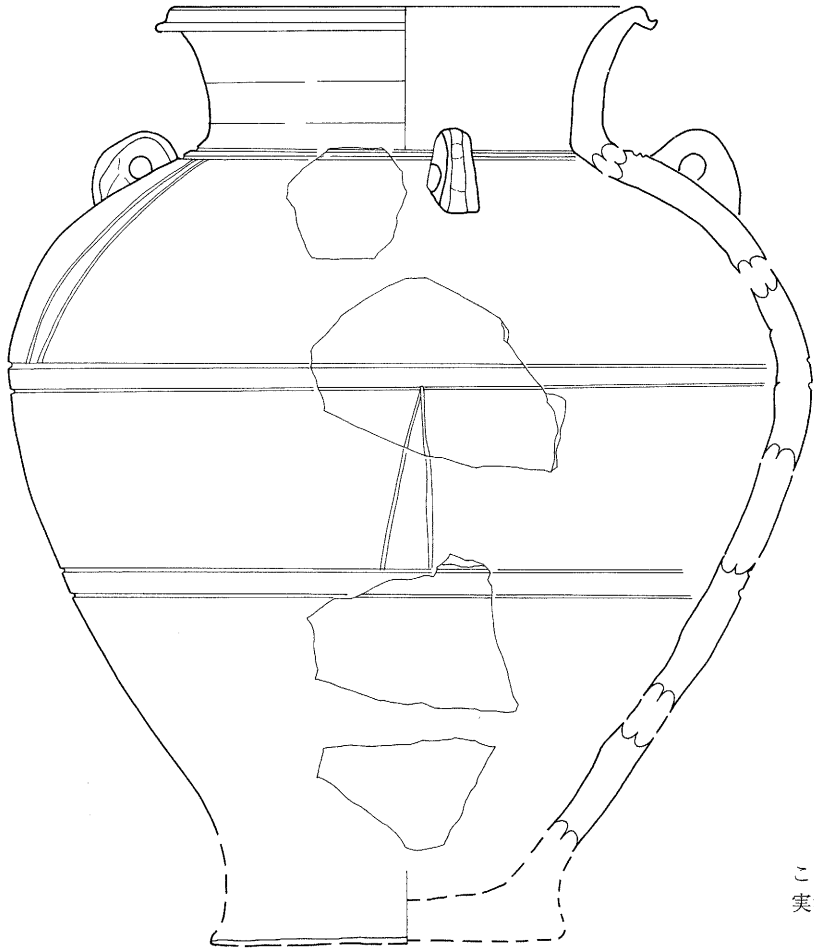
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1275	渥美	山茶碗	底部	46ＳＤ14埋土	12Ｃ後半か	橙色	外底面回転糸切痕、釉のたれがみられる
1276	〃	〃	底部	46ＳＤ1埋土(ⅡＢ6ｄ)	12Ｃ	灰色	内色に赤色顔料の付着、内面摩耗している
1277	〃	片口鉢	口縁	46ＳＥ９　１層西半	〃	灰色	片口部近くの破片
1278	〃	壺	肩	46ＳＤ７　１層	〃	灰～オリーブ色	線刻による文様あり
1279	〃	甕	口縁	46ＳＤ3埋土(ⅡＢ7ｃ)	〃	外黒色,内自然釉	
1280	〃	〃	体上	46ＳＤ７　１～２層	12Ｃ中葉か	外自然釉,内暗灰色	1281と同一個体か
1281	〃	〃	体下	46ＳＤ１埋土	〃	暗灰色	
1282	〃	〃	体下	46ＳＤ１埋土	12Ｃ	灰色	
1283	〃	〃	体下	46ＳＫ７埋土	〃	灰色	
1284	〃	〃	体下	46ＳＥ７埋土	〃	灰白色	
1285	〃	〃	体中	46ＳＤ７　１～２層	〃	外暗灰色,内灰色	釉の刷毛ぬりあり
1286	〃	〃	体下	ⅡＢ区　火災面	〃	灰色	
1287	〃	〃	体下	46ＳＤ3埋土(ⅡＢ7ｃ)	〃	灰色～灰白色	外面自然釉
1288	〃	〃	体下	ⅡＢ５ｇ表土	〃	灰色	

第28図　Ａ地区の渥美産陶器



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1289	猿投	短頸壺	口縁	46ＳＤ10埋土	12Ｃか	外自然釉	内面灰色
1290	猿投	壺	体中	46ＳＤ10埋土	〃	灰色	
1291	擬水沼	壺	口縁	46ＳＥ７埋土	12Ｃ前葉か	茶褐色	1291～1295は同一個体
1292	〃	〃	体上	46ＳＥ７埋土	〃	茶褐色	
1293	〃	〃	口縁	46ＳＥ７　１層	〃	暗褐色～茶褐色	
1294	〃	〃	体中	ⅡＢ区　火災面	〃	暗褐色～茶褐色	
1295	〃	〃	体下	ⅡＢ５～９ｄ表土	〃	暗褐色～茶褐色	
1296	水沼	〃	体中	ⅡＢ８ｂ表土	〃	暗赤褐色	
1297	水沼	〃	体下	46ＳＤ１埋土	〃	黒灰色	外面にヘラケズリ
1298	水沼	〃	体中	46ＳＤ１埋土	〃	暗赤褐色	
1299	須恵器系	甕	体部	46ＳＤ12埋土	12Ｃか	灰色	

第29図　Ａ地区の猿投産、水沼産、須恵器系陶器



この図は推定復元図で
実測図ではない
S＝約1/3

第30図　1291～1295（擬水沼産陶器）の推定復元図

（5）須恵器系陶器（第29図、写真図版101）

1299の1片のみの出土である。器種は甕であるが非常に厚い。厚さから考えてかなり大形の製品と考えられる。外面には格子目状のタタキ目が施される。胎土は灰色で砂粒混じりで非常に硬い。

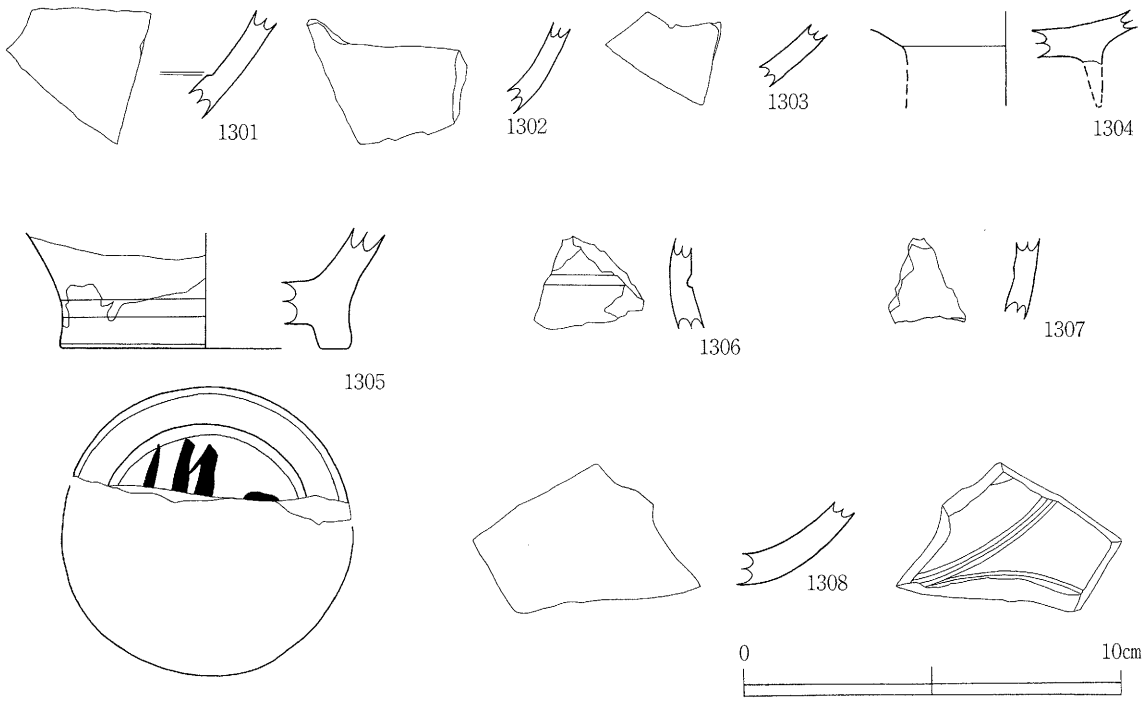
4　中国産磁器（第31図、写真図版101）

本調査区では中国産磁器は白磁７点、青磁１点の合計８点のみの出土である。

1301の白磁碗は内面に段状の沈線があり、体部が直線的で大宰府分類のⅣ類の範疇と考えられる。1302は釉に埋もれているが内面上位に沈線を有する。1303は釉、胎土の感じが1301と共通しており同一個体と考えられる。1304は高台部分が欠損しており分類が難しい。おそらく高いタイプの高台と推測される。

1304は外底面に墨書のある壺である。墨書の内容は欠損しているため判読できない。畳付部分が滑らかで、意図的に平滑にされている。1306は壺の首の破片である。外面に沈線状の凹がある。

1308は龍泉窯系の青磁碗である。内面に草花文が描かれている。



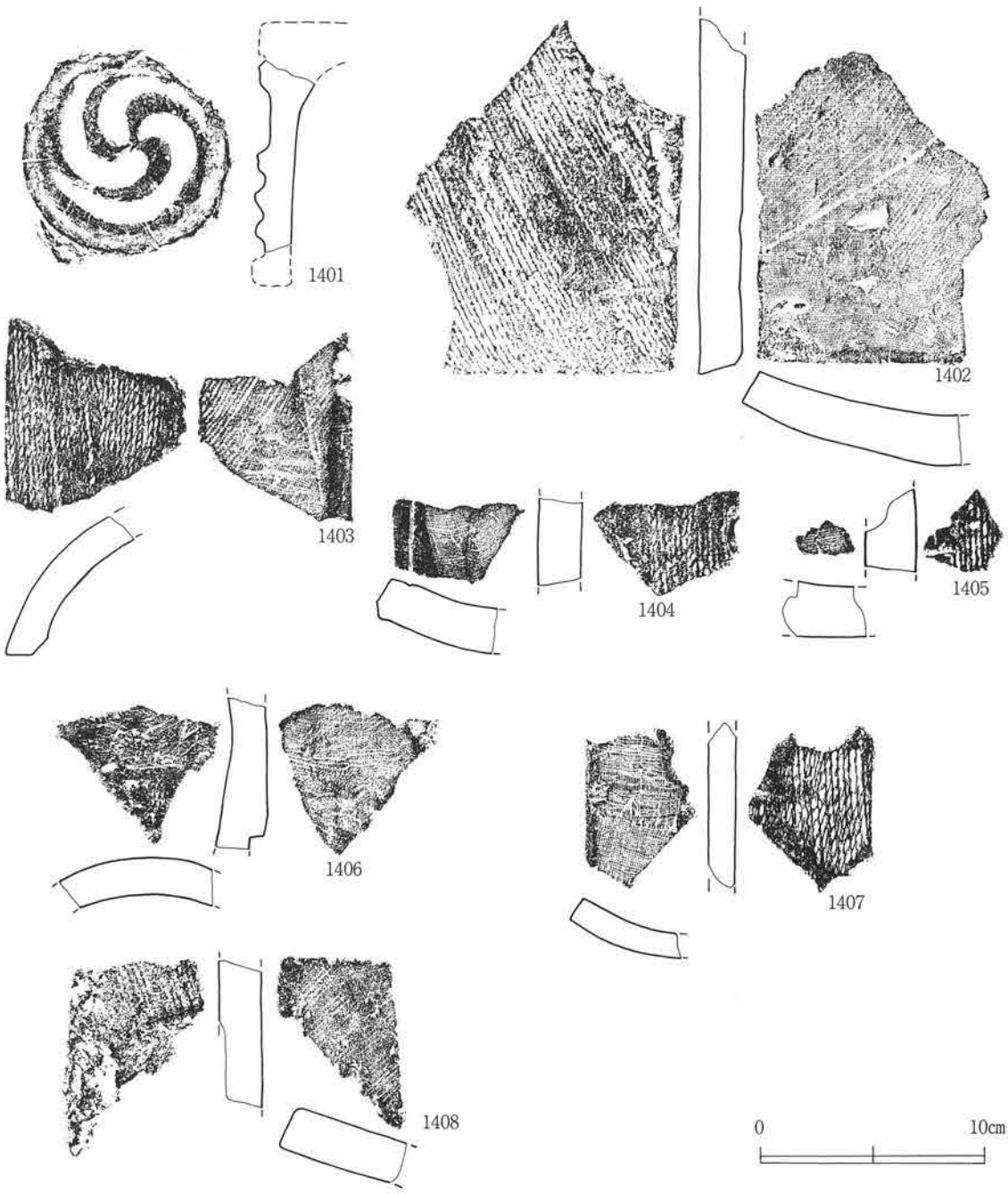
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
1301	白磁	碗	体	46ＳＥ８　５層	Ⅳ１ａかⅣ２	12C	
1302	〃	〃	体	46ＳＤ１埋土	ⅤかⅥかⅦ	12C	
1303	〃	〃	体	ⅡＡ３ｉ表土	Ⅳか	12C	
1304	〃	〃	底辺	46ＳＥ８　１層	Ⅴか	12C	
1305	〃	壺	底	46ＳＥ７埋土	Ⅲ系	12C	外底面に墨書あり
1306	〃	〃	頸	46次排土中	Ⅲ系	12C	
1307	〃	〃	体	46ＳＤ９埋土	Ⅲ系	12C	
1308	青磁	碗	体	ⅡＢ６ｆ表土	龍泉Ｉ２	12C	

第31図　Ａ地区の中国産磁器

5　瓦（第32図、写真図版101・102）

12世紀に属する瓦は、軒丸瓦１点、平瓦５点、丸瓦２点が出土している。

1401は軒丸瓦である。陰刻の右巴文である。1406は丸瓦である。玉縁部の一部が残っている。



番号	器種	出土位置	
1401	軒丸瓦	46ＳＤ10埋土	陰刻右三巴文
1402	平瓦	46ＳＤ３埋土	
1403	丸瓦	46ＳＤ３埋土	
1404	平瓦	46ＳＤ３埋土	
1405	〃	46ＳＤ７　１～２層	
1406	丸瓦	〃	玉縁部の一部が残る
1407	平瓦	46ＳＤ12埋土	
1408	〃	46ＳＤ７　１～２層	

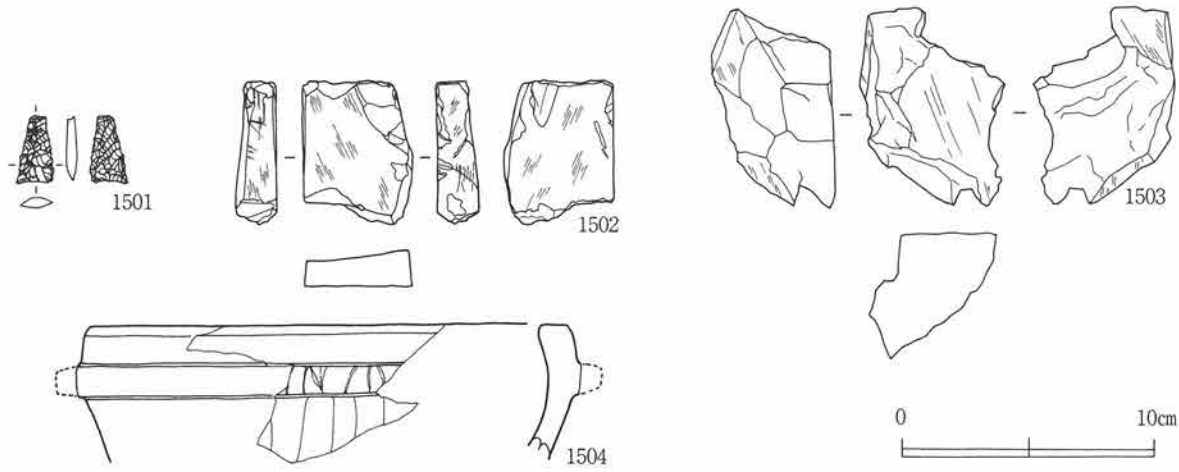
第32図　Ａ地区の瓦

6　石製品（第33図、写真図版102）

12世紀以前の石製品には、石鏃１点、砥石２点、滑石製石鍋１点がある。

1501は石鏃である。無茎鏃で、先端が折れている。縄文時代ないし弥生時代のものである。1502、1503は砥石である。12世紀の遺構から出土しており、12世紀の所属と考えられる。

1504は滑石製の石鍋である。外面には煤が付着している。外面の口縁部には突帯がめぐるが、それが意図的に削り取られている。何かに転用する意図があったのであろうか。突帯の下には整形痕がみられる。12世紀の所属である。



表番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
1501	石鏃	ⅡＢ区表採	珪質頁岩	先端が欠損	未測定
1502	砥石	46ＳＤ１埋土	凝灰岩	12Cのもの	46.0
1503	砥石	46ＳＥ７埋土	流紋岩	12Cのもの	130.0
1504	石鍋片	46ＳＥ７埋土	滑石	炭化物付着　突帯が削られている	85.0

第33図　A地区の石製品

7　木製品（12世紀）（第34図、写真図版102）

1506は板である。両端が欠損している。残存部の中央付近に穿孔がある。樹種同定はおこなっていない。

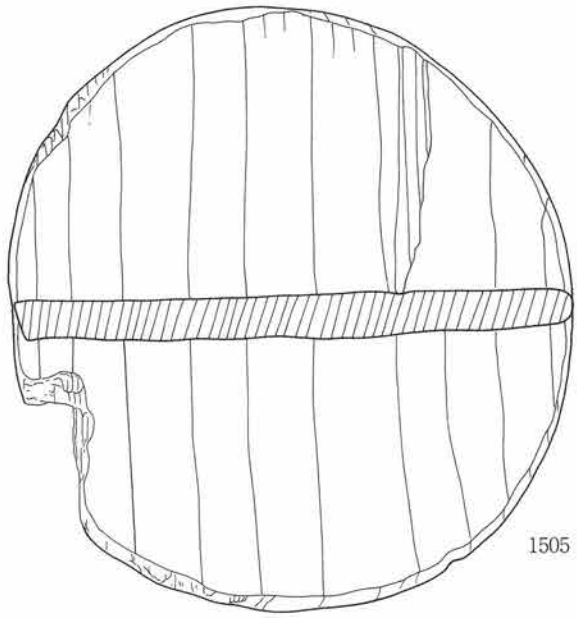
1505は近世～近代の遺物である。

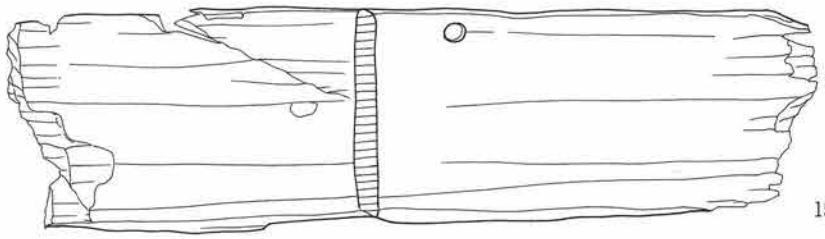
8　近世陶磁器（第35～46図、写真図版102～109）

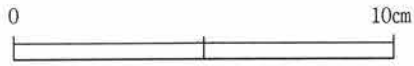
本調査区は近世の屋敷跡が検出され、それに伴う近世遺物が多量に出土している。ここでは南側に隣接する志羅山遺跡14次調査調査区から出土した遺物（未報告のものである。）も加えて報告する。14次調査区は本調査区に南接し、ここから出土した近世遺物は、本調査区の近世屋敷と同一の屋敷に伴う遺物ととらえられる。

（１）磁器（第35～39図、写真図版102～104）

近世の磁器は碗20点、皿29点、鉢１点、小杯３点、猪口２点、火入２点、仏飯器１点、瓶１点の合計59点を図示した。







番号	器種	出土位置	法量（cm）			その他
			最大長	最大幅	厚さ	
1505	桶底	46ＳＥ５埋土上部	16.1	14.8	1.1	12Ｃの遺物ではない
1506	板	46ＳＥ９　14層	21.3	5.5	0.6	中央端部に穿孔あり　12Ｃの遺物

第34図　Ａ地区の木製品

1601～1620は碗である。1601～1604は中国産の染付碗である。漳州窯系の碗で17世紀初めのものである。いずれも類似した文様であるが、それぞれ別個体である。いずれも釉むらが著しい。呉須の色は青灰色を呈する。胎土は白色で黒い粒が交じる。

1605は肥前Ⅲ期の染付碗である。文様は一重網目文である。17世紀後半のものである。

1605～1613は肥前Ⅳ期の碗である。1606は呉須の色が黒っぽい。1610～1612は見込み蛇目釉剥ぎである。

1614は肥前産の碗かと思われるがはっきりしない。小振りな碗である。肥前Ⅴ期相当であろうか。

1615、1616は瀬戸産の染付碗である。呉須の色は鮮やかな藍色で、染付け部分が盛り上がっている。19世紀前半のものである。

1617～1620は東北地方産の染付碗である。19世紀中葉のものである。具体的な窯としては、平清水産の可能性が高い。

1621～1648は皿である。1621は高台径が小さく、釉むらが著しい。肥前Ⅱ期で17世紀前半のものと思われる。1622は肥前Ⅱ期かⅢ期と思われる。釉は均一でむらは無い。

1623は肥前Ⅲ期の皿である。見込み蛇目釉剥ぎである。

1624～1637は肥前Ⅳ期の皿である。1624～1628は同一の文様の皿である。いずれも別個体である。外底面に崩れた「大明年製」の銘がある。口縁部は輪花である。

1629は外底面に「成化年製」の銘がある。内外面に煤が付着し火災の際に被熱したしたことがわかる。1630も外底面に銘がある。1632は墨弾きの文様の皿である。1633、1634も同一の文様と推測される。1636は小型の型おこしの皿である。

1638は型おこしの皿である。肥前Ⅲ期のものと推測される。口唇部には口紅が付く。

1639は凹蛇目高台の皿である。18世紀後半から19世紀前半のものである。1640は型おこしの小型の皿である。染付は型紙刷りによる。肥前Ⅳ期のものである。

1641は大形の皿である。肥前産の18世紀後半から19世紀初めのものである。内面には菖蒲の文様が描かれている。外底面には「大明成化年製」の銘とハリ跡がある。二次被熱しており、火災の際に炎にさらされている。

1642～1646は同一文様の山水楼閣文の皿である。いずれも別個体である。産地ははっきりしない。口縁部は輪花で、口紅が施されている。

1647は輪花の皿で口紅が施されている。内外面に煤が付いている。1648は大形の皿である。６つの破片があるが同一個体と考えた。内面には氷列文が描かれている。外底面にはハリ跡がある。19世紀前～中葉のものである。産地はあきらかではないが、肥前の塩田窯の可能性が高い。

1649は鉢である。産地ははっきりしないが肥前産の可能性が高い。肥前Ⅴ期相当のものである。

1650～1652は小杯である。いずれも肥前Ⅳ期のものである。1653は猪口である。外面には青磁釉がかかる。肥前産で18世紀後半～19世紀前半のものである。

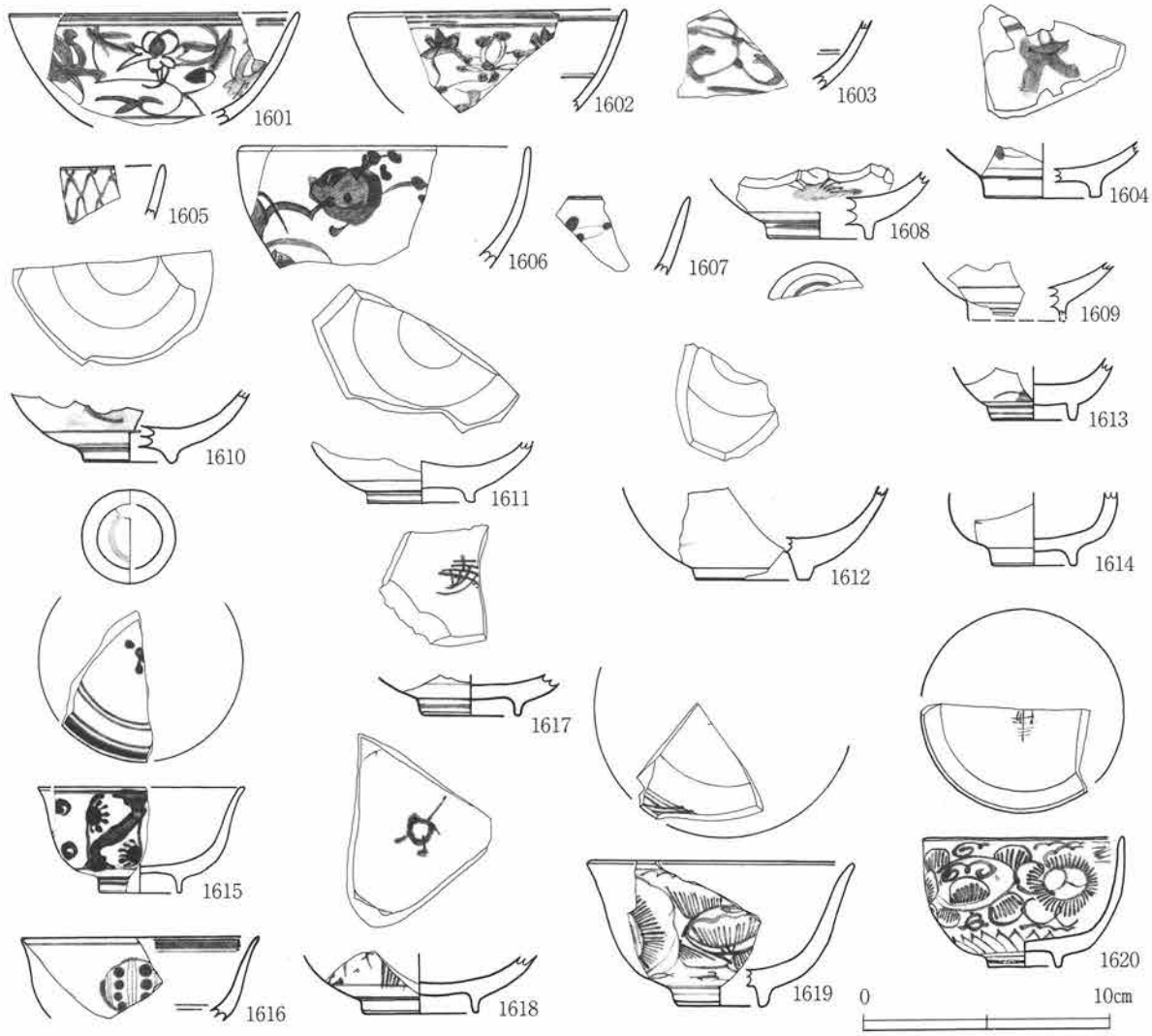
1654、1655は火入である。どちらも外面に青磁釉がかけられ、内面は無釉である。1654は凹蛇目高台である。

1656は皿である。内面の見込み以外と外面に青磁釉がかけられている。二次被熱しており著しく歪んでいる。

1657は仏飯器である。呉須は濃い藍色で産地は不明である。19世紀前半のものである。

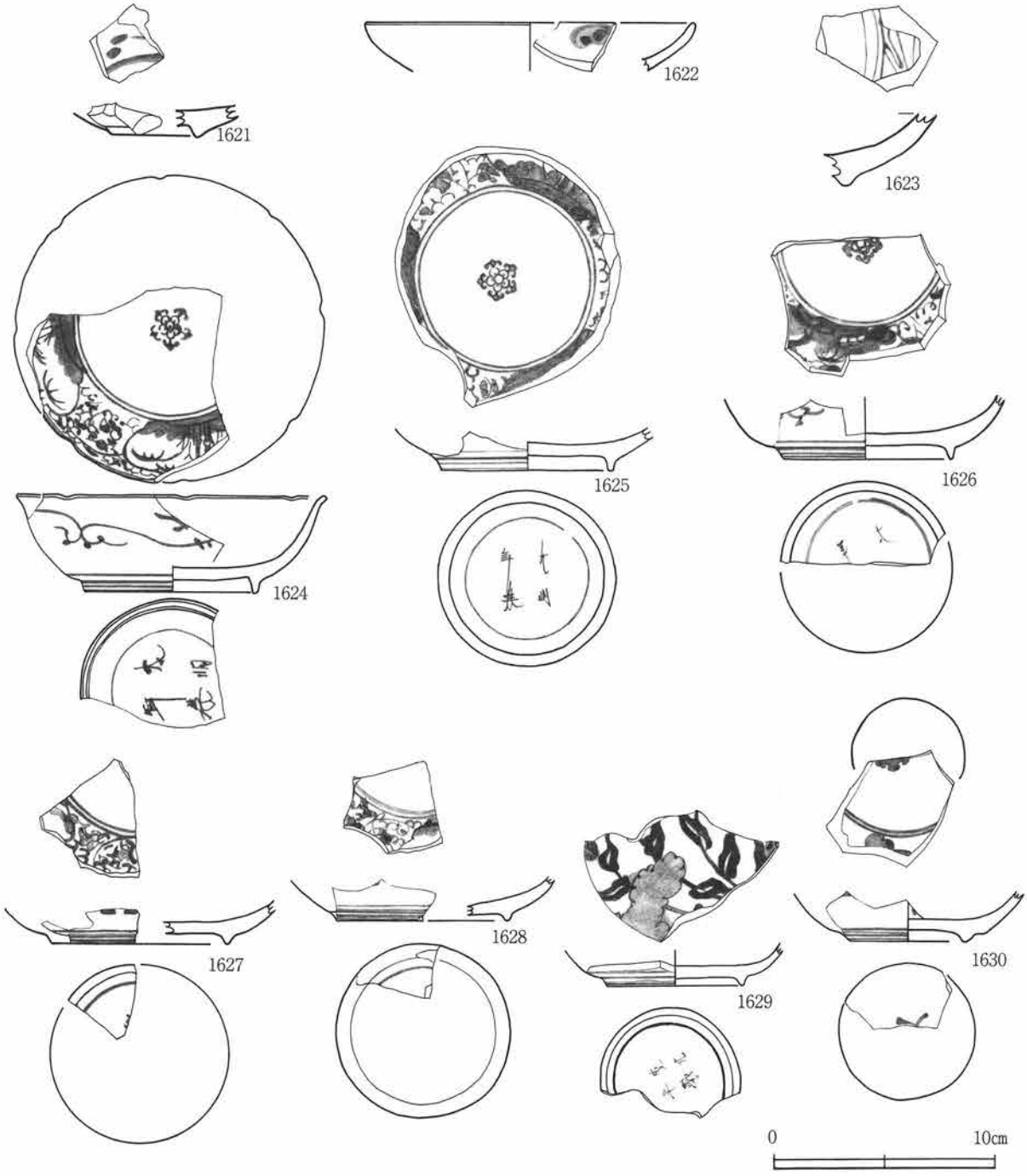
1658は瓶である。内面は無釉である。肥前Ⅳ期と推測される。

1659は猪口と推測される。外面にコンニャク印判が施されている。また焼き継ぎ痕がある。肥前Ⅳ期のものである。



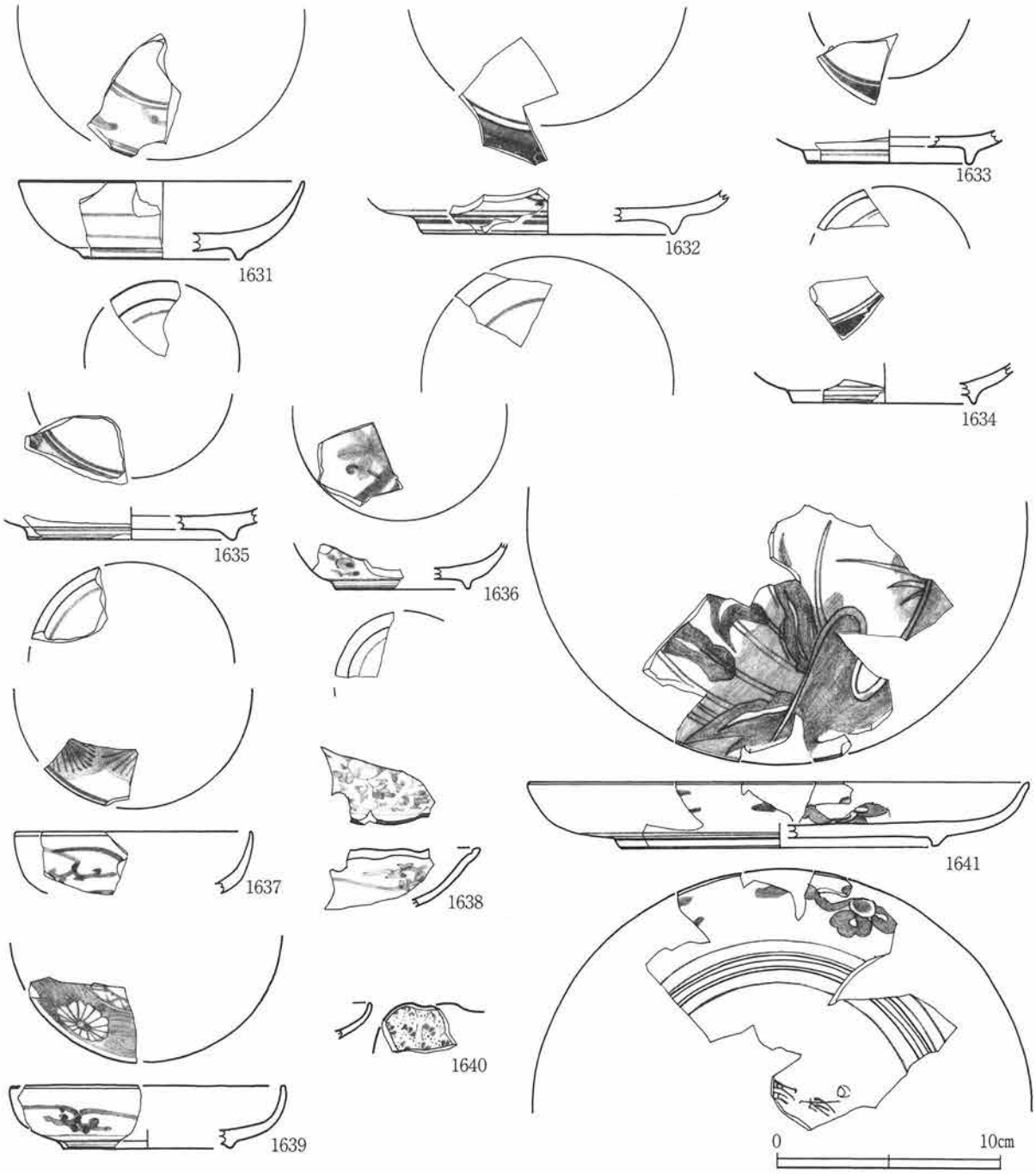
番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
1601	碗	ⅡＢ区火災面	11.5	－	(4.0)	白色、黒い粒	染付	中国(漳州窯)	17Ｃ初	釉むらが著しい
1602	〃	ⅡＢ区火災面	11.1	－	(4.2)	〃	〃	〃	〃	1601、1603、1604とは別個体
1603	〃	ⅡＢ区火災面	－	－	(2.8)	〃	〃	〃	〃	1601、1602、1604とは別個体
1604	〃	ⅡＢ区（14次）	－	4.8	(2.4)	〃	〃	〃	〃	釉むらが著しい
1605	〃	46ＳＥ２　１層	－	－	(2.2)	白色	〃	肥前	17Ｃ後半	一重網目文
1606	〃	46ＳＤ９埋土	11.7	－	(5.0)	白色	〃	肥前	1690～1780	呉須の色　黒っぽい
1607	〃	ⅡＢ区火災面	－	－	(3.2)	白色	〃	〃	〃	
1608	〃	ⅡＢ区（14次）	－	4.2	(3.0)	白色	〃	〃	〃	
1609	〃	ⅡＢ区火災面	－	4.0	(2.4)	〃	〃	〃	〃	
1610	〃	ⅡＢ区（14次）	－	3.5	(2.9)	〃	〃	〃	〃	見込蛇目釉はぎ
1611	〃	ⅡＢ８ｂ表採	－	4.4	(2.5)	〃	〃	〃	〃	〃
1612	〃	ⅡＢ区火災面	－	4.5	(3.8)	〃	〃	〃	〃	〃
1613	〃	46ＳＤ９埋土	－	3.3	(2.4)	〃	〃	〃	〃	小振りな碗
1614	〃	46ＳＫ13埋土	－	3.4	(3.0)	白色　黒い粒	〃	肥前？	1780～1860	小振りな碗
1615	〃	ⅡＢ区火災面	8.3	3.4	4.3	白色 ガラス質	〃	瀬戸	19Ｃ前半	染付が盛り上がっている。
1616	〃	ⅡＢ区火災面	9.4	－	(3.4)	白色 ガラス質	〃	瀬戸	19Ｃ前半	染付が盛り上がっている。
1617	〃	ⅡＢ区火災面	－	3.8	(1.7)	〃	〃	平清水	19Ｃ中頃	
1618	〃	ⅡＢ区火災面	－	4.6	(2.3)	〃	〃	〃	〃	
1619	〃	46ＳＫ７埋土	10.5	3.3	5.8	〃	〃	平清水？	〃	
1620	〃	ⅡＢ区火災面	8.1	2.9	5.3	〃	〃	〃	〃	

第35図　Ａ地区の近世磁器①



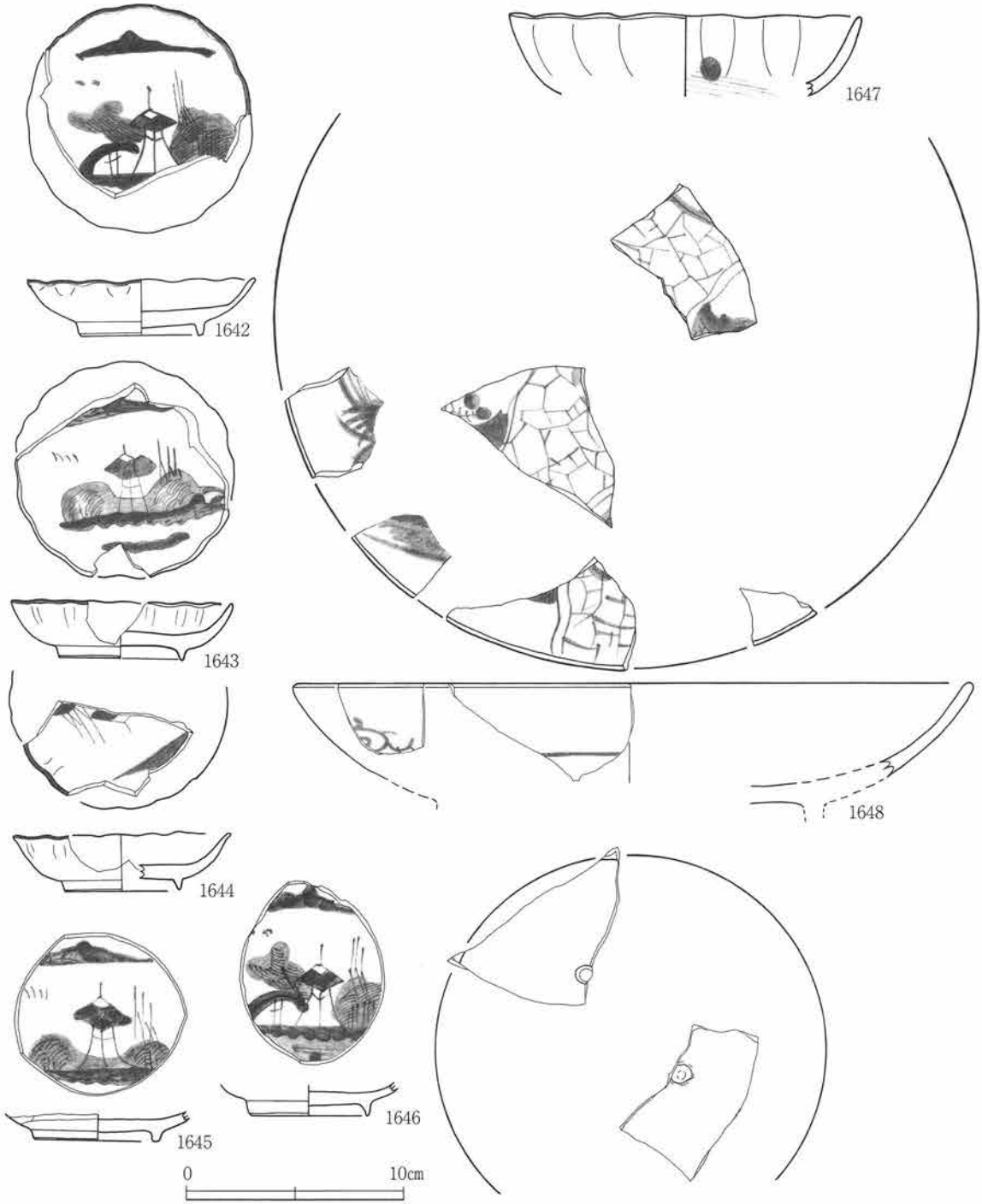
番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
1621	Ⅲ	46ＳＥ２　１層	－	3.9	(1.5)	白色	染付	肥前	1630～1650	釉むら著しい
1622	〃	46ＳＥ２　１層	14.8	－	(2.2)	〃	〃	〃	17Ｃ代か	
1623	〃	ⅡＢ区（14次）	－	－	(3.3)	〃	〃	〃	1650～1690	見込み蛇目釉はぎ
1624	〃	46ＳＫ７埋土	13.8	7.7	4.4	〃	〃	〃	1690～1780	口縁輪花
1625	〃	ⅡＢ区（46次）	－	7.8	(2.0)	〃	〃	〃	〃	
1626	〃	ⅡＢ区（14次）	－	7.6	(2.9)	〃	〃	〃	〃	内外面　擦痕が著しい
1627	〃	ⅡＢ区（14次）	－	8.0	(2.0)	〃	〃	〃	〃	二次被熱している
1628	〃	ⅡＢ区（14次）	－	7.8	(2.1)	〃	〃	〃	〃	〃
1629	〃	ⅡＢ区（14次）	－	6.2	(1.9)	〃	〃	〃	〃	二次被熱している
1630	〃	ⅡＢ８ｂ表土	－	5.2	(2.3)	〃	〃	〃	〃	見込みに五弁花

第36図　Ａ地区の近世磁器②



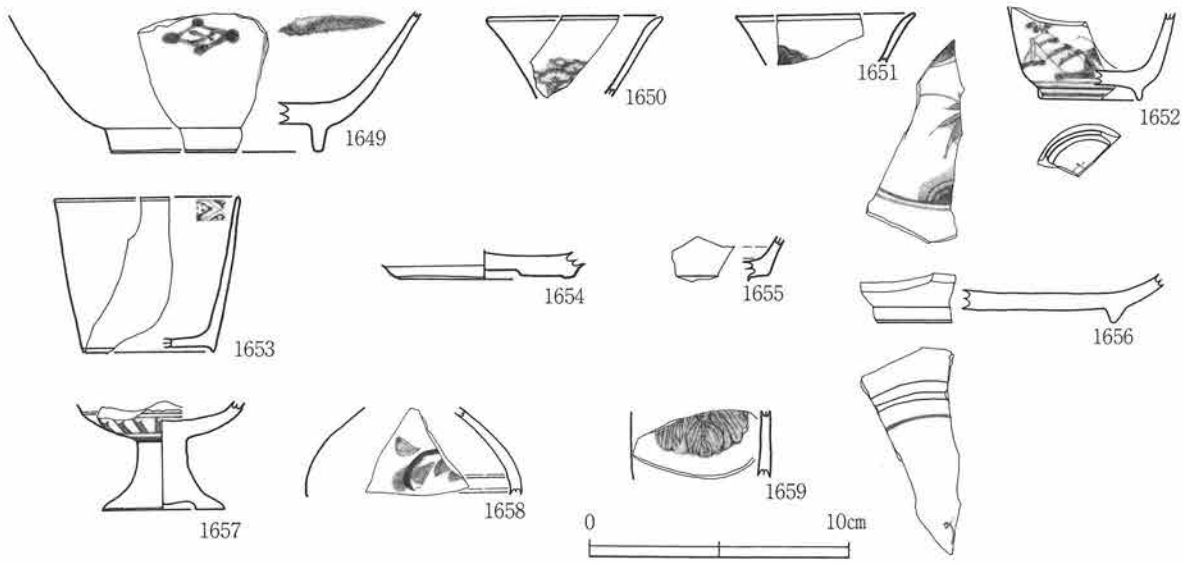
番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
1631	皿	ⅡＢ８ｂ表土	12.7	6.9	3.6	灰色	染付	肥前	1690～1780	呉須の色緑がかっている
1632	〃	ⅡＢ区火災面	－	11.2	(2.0)	白色	〃	〃	〃	内面墨弾き
1633	〃	〃	－	7.3	(1.5)	〃	〃	〃	〃	1632と同一個体の可能性
1634	〃	〃	－	8.2	(1.8)	〃	〃	〃	〃	
1635	〃	〃	－	9.2	(1.5)	〃	〃	〃	〃	釉むらがある
1636	〃	ⅡＢ８ｂ表土	－	6.0	(2.1)	〃	〃	〃	〃	
1637	〃	ⅡＢ区表採	10.5	－	(2.9)	〃	〃	〃	1690～1780か	
1638	〃	ⅡＢ区火災面	－	－	(2.7)	〃	染付、口紅	〃	17C後半	型おこし
1639	〃	46ＳＫ７埋土	12.2	7.5	2.9	〃	染付	〃	18C後～19C初	凹蛇目高台
1640	〃	ⅡＢ区火災面			(1.7)	〃	型紙刷り	〃	1690～1780	型おこし
1641	〃	〃	25.0	14.2	3.0	〃	染付	〃	18C後～19C初	二次被熱している

第37図　Ａ地区の近世磁器③



番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1642	皿	ⅡB区火災面	10.9	5.5	2.7	白色	染付、口紅	肥前？	19C前～中	口縁輪花
1643	〃	〃	10.2	5.7	2.7	〃	〃	〃	〃	〃
1644	〃	〃	10.0	5.3	2.8	〃	〃	〃	〃	〃
1645	〃	〃	—	5.6	(1.4)	〃	染付	〃	〃	〃
1646	〃	〃	—	5.4	(1.6)	〃	〃	〃	〃	〃
1647	〃	〃	15.8	—	(3.7)	〃	〃	〃	〃	二次被熱している
1648	〃	〃	31.1	—	(4.4)	〃	〃	〃	〃	塩田（肥前）産か

第38図　A地区の近世磁器④



番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1649	鉢	46ＳＫ７埋土	－	8.0	(5.4)	白色	染付	肥前？	1780～1860	多角形の鉢
1650	小鉢	ⅡＢ区火災面	6.7	－	(3.1)	〃	コンニャク判	肥前	1690～1780	
1651	〃	〃	6.9	－	(1.9)	〃	染付	〃	〃	
1652	〃	ⅡＢ区（14次）	－	4.0	(3.45)	〃	〃	〃	〃	
1653	猪口	ⅡＢ区火災面	7.0	5.0	6.0	〃	青磁、染付	肥前	18C後半～19C初	外面青磁釉
1654	火入	〃	－	6.4	(1.1)	〃	青磁	〃	〃	内面無釉
1655	火入	46ＳＤ９埋土	－	－	(1.7)	〃	〃	〃	〃	〃
1656	皿	ⅡＢ区（14次）	－	9.2	(1.9)	〃	青磁、染付	〃	〃	内面見込以外青磁
1657	仏飯器	ⅡＢ区火災面	－	4.7	(4.2)	〃	染付	東北産？	1780～1860	
1658	瓶	〃	－	－	(3.5)	〃	〃	肥前	1690～1780	内面無釉
1659	猪口？	〃	－	－	(2.7)	白色	コンニャク判	肥前	1690～1780	焼き継ぎ痕あり

第39図　Ａ地区の近世磁器⑤

（２）陶器（第40～46図、写真図版104～109）

近世の陶器は碗23点、碗蓋２点、皿５点、鉢２点、香炉１点、火入１点、行平１点、土瓶２点、土瓶蓋１点、蓋１点、瓶掛１点、甕８点、擂鉢31点、器種不明２点、素焼きの甕２点、素焼きの鉢１点、近～現代の汽車茶瓶１点の計85点を図示した。素焼き状態のものも陶器に含めて報告している。基本的に陶磁器は近世に属するものを図示し、近代以降のものは報告から省いた。だが陶器の編年上、近世と近代に分類するのが難しい場合がある。よって報告した中に近代以降の陶器が含まれている可能性もある。また近代以降のものでも意図的に報告しているものがある。

1701～1725は碗または碗蓋である。1701は瀬戸・美濃産の碗であるが、高台部分のみの破片で、時期をはっきりできない。17世紀代のものであろうか。

1702は肥前産の碗で外面に透明釉がかけられている。

1703～1713は大堀相馬産の碗である。透明製のある灰釉がかけられており18世紀代のものと思われる。1708、1709、1712は灰釉と鉄釉の掛け分けの碗である。1711は体部の丸みが強く大堀相馬の初期の製品の可能性もある。だが全体の器形が明らかではなく、はっきりしたことは言えない。1710は器高が低く、18世紀後半のものと考えられる。

1714～1720は大堀相馬産陶器である。失透性の藁灰釉がかけられており、19世紀前半頃のものと考えられ

る。釉の色は灰～緑色を呈する。1717は外面の高台内に墨書きがある。1720は外面に他の個体が窯着している。1721、1722は碗蓋である。どちらも19世紀前半頃のものである。1721は珪酸分の多い失透性の褐釉、1722は藁灰釉が施されている。

1723は小野相馬産の碗である。胎土は暗い灰色で粗い。釉薬は失透性の空色の釉の上に褐釉が流しかけられている。18世紀後半のものであろう。

1724は産地不明の碗である。器形は丸みを帯びており、外面下半に横走する沈線と左右対象の渦巻き文が施されている。釉薬は灰色の失透性の釉がかけられている。胎土は灰色で硬い。この胎土は19世紀代の大堀相馬産陶器のものに類似しており、本製品が大堀相馬産の可能性も考えられる。しかし器形と文様が特異であり、ここではっきり産地を断定するのは避けたい。よって時期も不明としておく。

1725は大堀相馬産の20世紀代の碗である。２次的に被熱している。

1726～1728、1730、1731は皿である。1726、1727は唐津の16世紀末頃の皿である。どちらも鉄絵が施されている。1726には胎土目がある。1726の胎土は赤褐色、1727の胎土は灰色である。

1728は肥前産の皿である。白化粧の上に透明釉薬が施されている。内面は蛇目釉剥ぎになっている。18世紀前半のものである。

1730、1731は大堀相馬産の19世紀前半頃の皿である。1730は鉄釉により文様が描かれている。内面には目跡がある。1731は藁灰釉がかけられている。

1729、1732は鉢である。1729は大堀相馬産で、やや失透性の灰釉がかけられる。口縁部が折り返されている。1732は失透性の空色の釉がかけられている。東北地方在地産のものである。

1733は瀬戸・美濃産の香炉である。外面には黄色がかった褐釉がかけられ内面は無釉である。1734は火入、又は香炉である。東北在地産のものである。

1736は行平である。胎土から大堀相馬産と思われる。外面に飛びカンナの文様がある。

1736は土瓶と思われる。東北地方在地産と思われる。赤褐色の胎土で海綿状骨針が混じる。1737は鮫肌釉の土瓶である。大堀相馬産と思われる。1738は土瓶の蓋である。胎土は赤褐色である。産地は不明で東北地方在地産である。1739は蓋と思われる。焼き締め陶器で釉はかけられていない。

1740は瀬戸・美濃産の瓶掛である。外面には緑色の釉、内面と外底面には鉄釉がかけられている。２次的に被熱している。

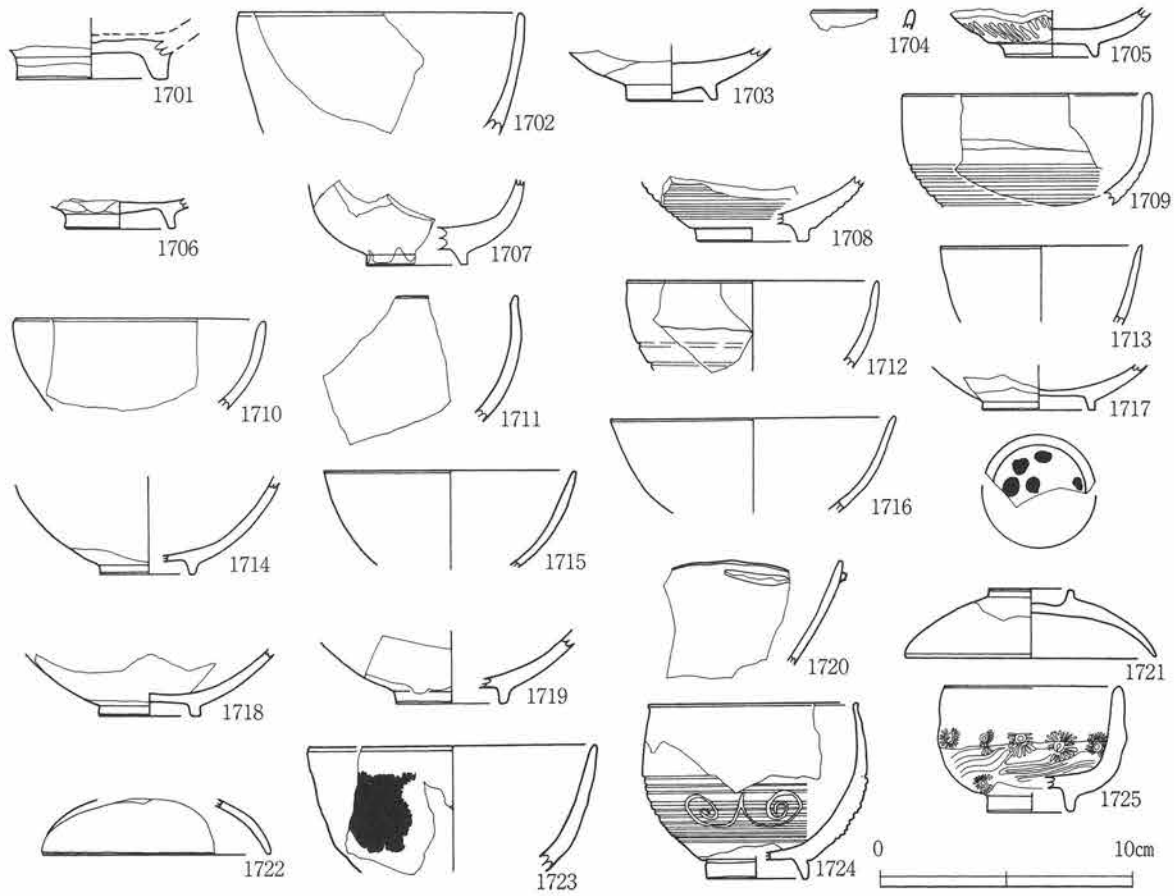
1741は器種不明の陶器である。体部が波状に立上がっている。口縁部は欠損しているが水平に欠けており、意図的に打ち欠いている可能性もある。外面には褐釉がかけられ、内面は無釉である。外底面には墨書があるが判読できない。胎土は赤褐色を呈する。東北地方在地産である。

1742も器種不明陶器である。内面が無釉で、体部は直線的に立上がり始めており、1741に類似する器形と推測される。外面には褐釉がかけられている。胎土は赤褐色～灰色を呈する。東北地方在地産である。

1743～1745は小型の甕である。いずれも東北地方在池産である。1743は口縁部の破片と底部の破片の２つに別れており接合しないが、図上で合成した。1744は底面に回転糸切痕がある。1746、1747は甕である。どちらも東北地方在地産である。1747には底辺部に、割れ口の隙間を充填した鉛？が付着している。

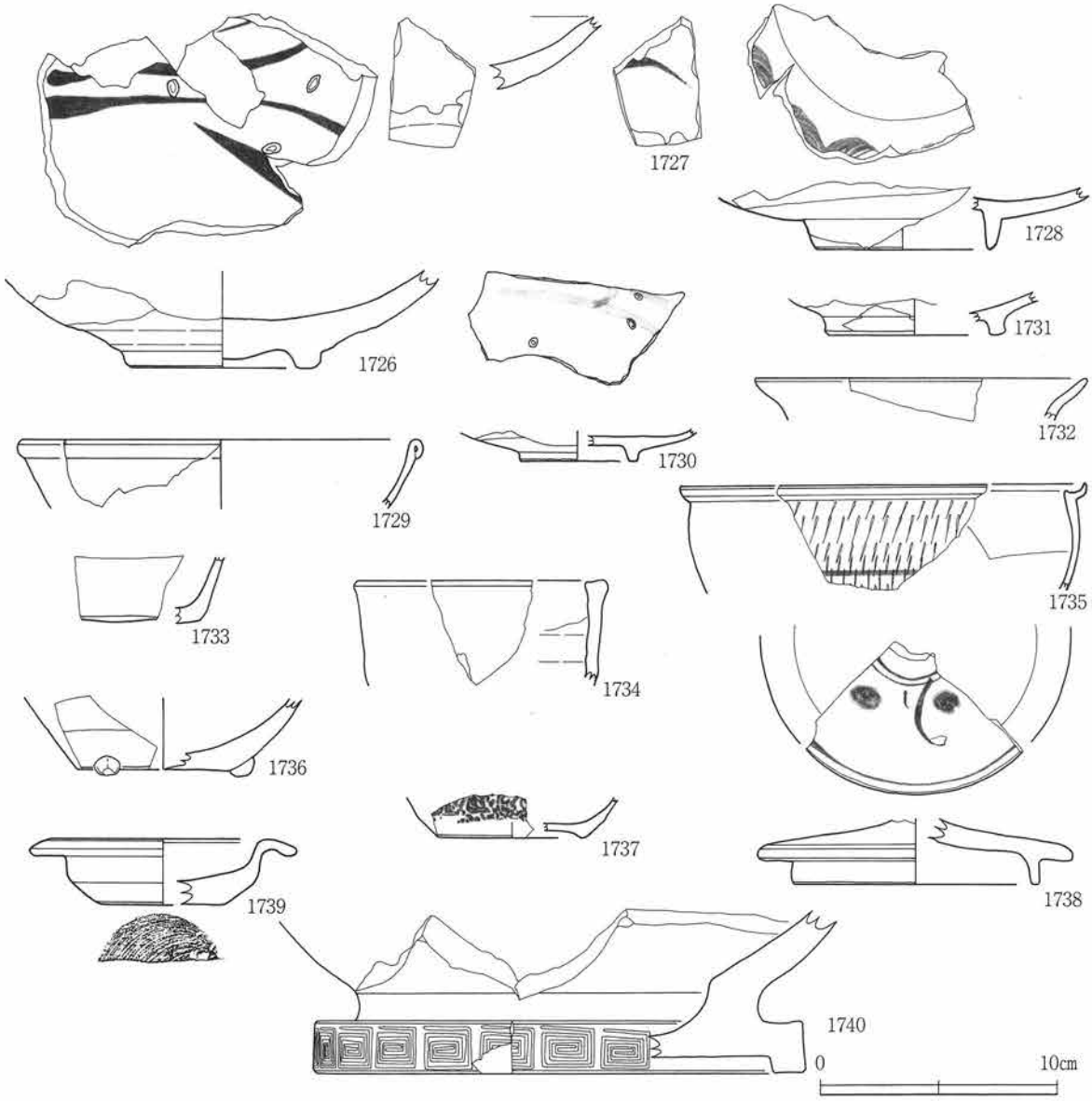
1748～1750は大形の甕である。いずれも東北地方在地産である。1749の胎土には海綿状骨針が混入している。

1751～1781は擂鉢である。1751、1752は瀬戸産の擂鉢である。1753は産地不明の擂鉢である。器形とおろし目が福島市岸窯産の擂鉢に類似する。時代は17世紀代と思われる。産地は不明であるが東北地方在地産と



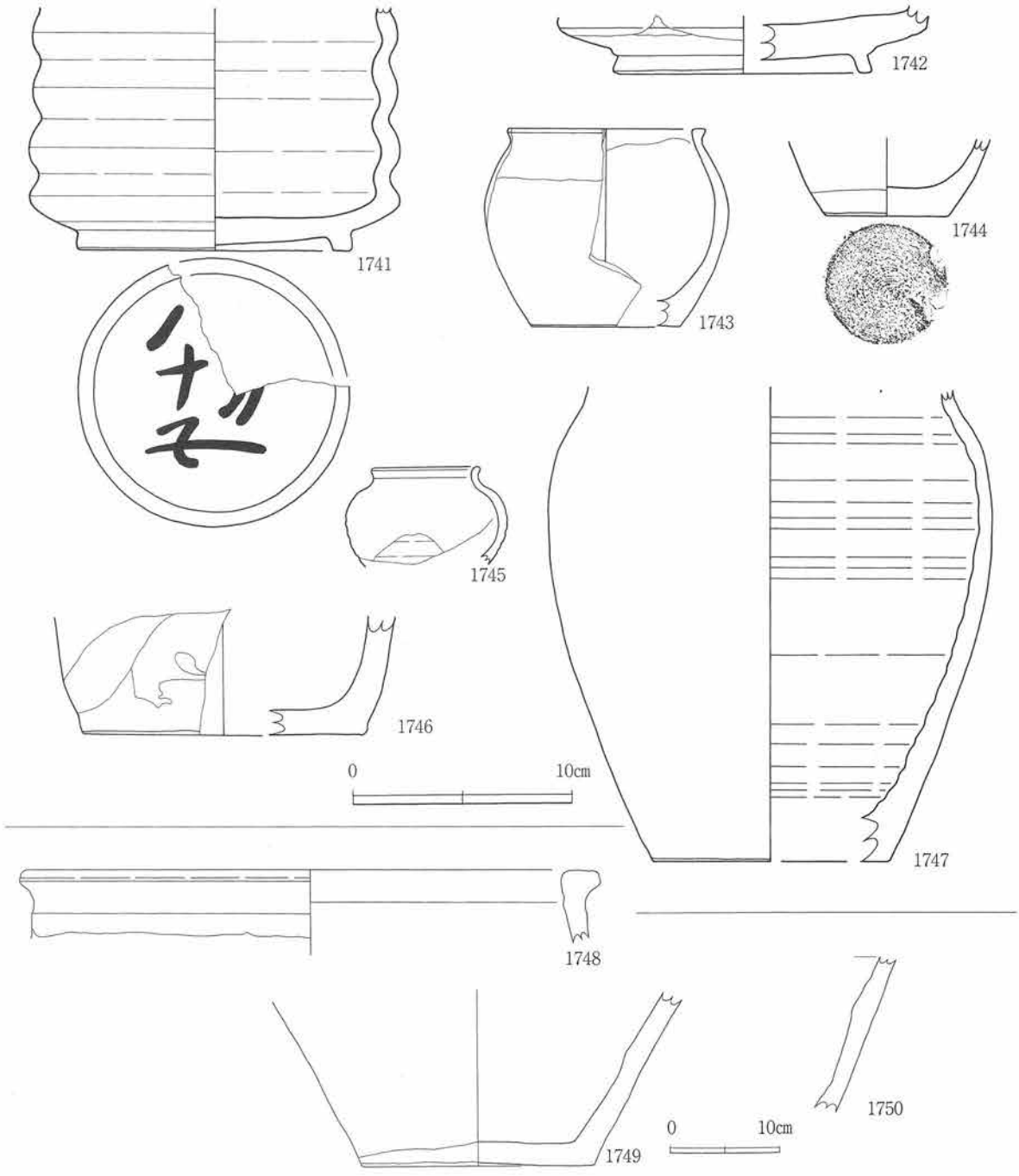
番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1701	碗	ⅡB区（14次）	－	6.0	(1.7)	肌色	長石釉	瀬戸？		
1702	〃	46SD9埋土	11.2	－	(4.9)	黄灰色	透明釉	肥前	18C前半	
1703	〃	ⅡB区火災面	－	3.4	(2.1)	灰色	灰釉	大堀相馬	18C	
1704	〃	46SE2　1層	－	－	(0.8)	〃	〃	〃	〃	
1705	〃	ⅡB区火災面	－	3.6	(2.0)	〃	灰釉、褐釉	〃	18C	灰釉に褐釉流しかけ
1706	〃	ⅡB区（14次）	－	4.4	(1.2)	灰～黄灰	灰釉	〃	〃	灰釉の色黄色がかる
1707	〃	〃	－	4.0	(3.4)	灰色	灰釉	〃	〃	小振りな碗
1708	〃	〃	－	4.4	(2.6)	灰色	灰釉、鉄釉	〃	18C	内面灰釉、外面鉄釉
1709	〃	ⅡB区（14次）	10.0	－	(4.5)	〃	〃	〃	〃	〃
1710	〃	ⅡB区火災面	9.8	－	(3.6)	〃	灰釉	〃	〃	
1711	〃	〃	－	－	(5.1)	〃	〃	〃	18C前半か	口縁部内湾する
1712	〃	〃	9.9	－	(3.5)	〃	灰釉、鉄釉	〃	18C後半か	灰釉はやや失透性
1713	〃	〃	8.0	－	(3.2)	〃	灰釉	〃	18C後半か	〃
1714	〃	46SD10埋土	－	3.7	(4.0)	灰色	藁灰釉	〃	19C前半	
1715	〃	ⅡB区火災面	10.0	－	(3.9)	〃	〃	〃	〃	二次被熱している
1716	〃	〃	12.2	－	(3.8)	〃	〃	〃	〃	
1717	〃	ⅡB8b表土	－	4.4	(1.8)	〃	〃	〃	〃	外底面に墨書あり
1718	〃	ⅡB区火災面	－	3.9	(2.7)	〃	〃	〃	〃	
1719	〃	46SD10埋土	－	4.3	(3.0)	〃	〃	〃	〃	
1720	〃	ⅡB区火災面	－	－	(4.2)	〃	〃	〃	〃	外面に他個体の破片窯着
1721	蓋	ⅡB区（14次）	9.9	3.2	2.8	〃	褐釉	〃	〃	珪酸分の混じる褐釉
1722	〃	ⅡB区火災面	9.0	－	(2.3)	〃	藁灰釉	〃	〃	
1723	碗	46SD4埋土	11.3	－	(5.1)	灰色（粗）	藁灰釉、褐釉	小野相馬	18C後半	褐釉流しかけ
1724	〃	ⅡB区火災面	8.2	4.0	7.0	灰色	藁灰釉	大堀相馬？	不明	体部に沈線でうず巻文
1725	〃	〃	6.9	3.4	5.1	灰色	鉄釉、緑色の釉	大堀相馬	20C	二次被熱している

第40図　A地区の近世陶器①



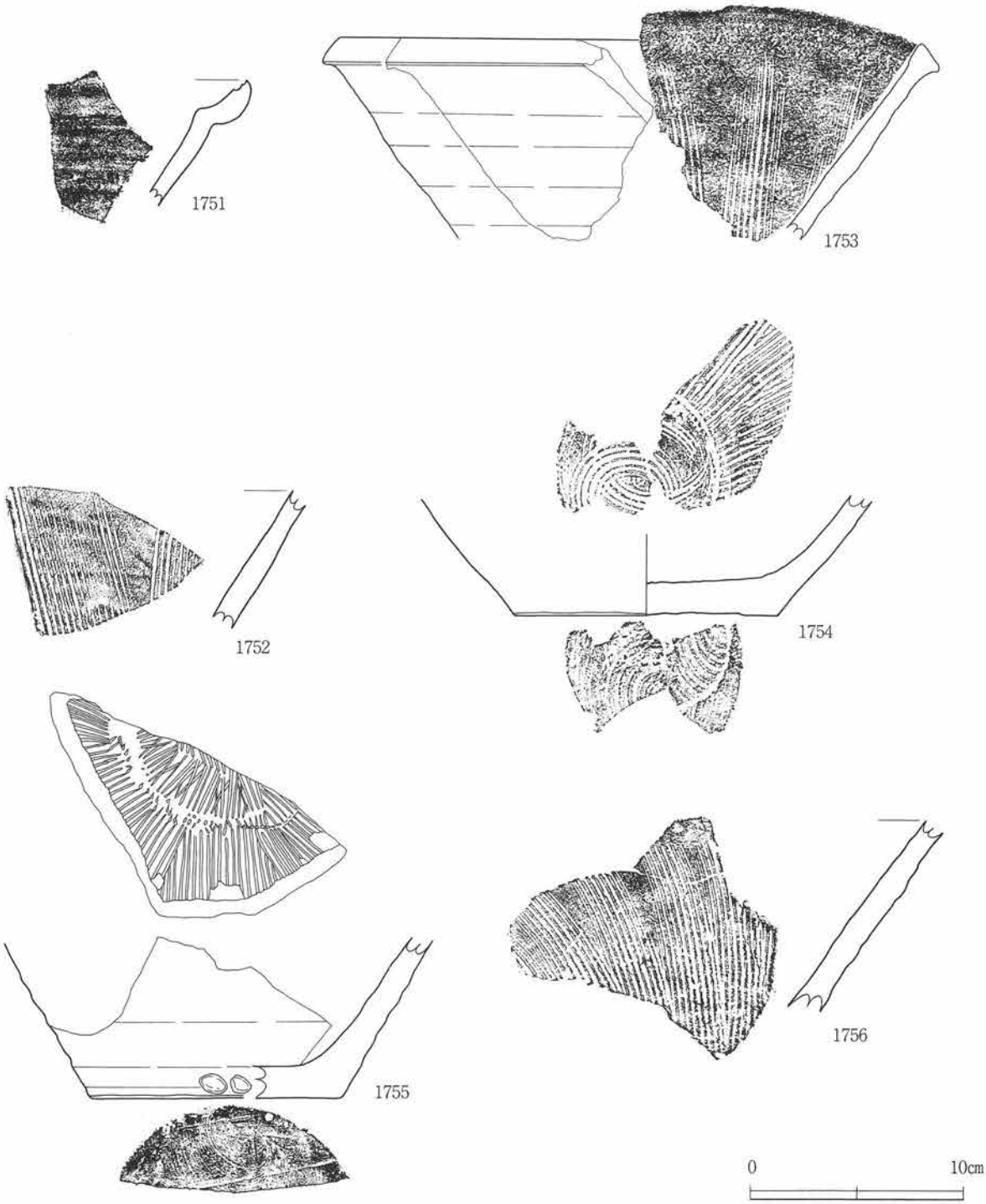
番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1726	皿	ⅡＢ区（14次）	－	7.7	(4.2)	赤褐色	灰釉、鉄絵	肥前（唐津）	16C末	胎土目あり
1727	〃	ⅡＢ区（14次）	－	－	(3.1)	暗灰色	〃	〃	〃	
1728	〃	ⅡＢ区（14次）	－	7.4	(2.7)	肌色	透明釉、白化粧	肥前	18C前半	内面に刷毛目文
1729	鉢	ⅡＢ区火災面	16.8	－	(3.0)	黄灰色	灰釉	大堀相馬	18C？	口縁部折りかえし
1730	皿	〃	－	4.9	(1.4)	灰色	灰釉、鉄絵	〃	19C前半	目跡あり
1731	〃	〃	－	7.1	(1.8)	灰色	藁灰釉	〃	19C前半	
1732	鉢	〃	14.0	－	(1.8)	暗灰色	空色の釉	東北在地	19C前半か	
1733	香炉	〃	－	－	(2.9)	黄灰色	褐釉	瀬戸・美濃	18C	内面無釉
1734	火入	ⅡＢ８ｂ表土	10.4	－	(4.5)	暗赤褐色	褐釉	東北在地	19C前半か	珪酸分の多い褐釉
1735	行平	ⅡＢ区火災面	17.2	－	(4.6)	灰色	灰釉	大堀相馬？	19Cか	外面無釉で飛びカンナ
1736	土瓶？	ⅡＢ８ｂ表土	－	6.4	(3.3)	赤褐色	鉄釉	東北在地	19～20C	胎土に海綿状骨鉢混じる
1737	土瓶	ⅡＢ９ｄ表土	－	6.2	(1.7)	灰色	鮫肌釉	大堀相馬か	19末～20C	
1738	土瓶蓋	ⅡＢ８ｂ表土	－	10.4	(2.8)	赤褐色	鉄絵、緑釉	東北在地	19C	内面無釉
1739	蓋？	ⅡＢ火災面	9.2	5.2	2.9	暗灰色	無釉	東北在地？	18C～19Cか	焼き締め陶器
1740	瓶掛	ⅡＢ区（14次）	－	20.8	(6.9)	肌色（粗）	緑釉、鉄釉	瀬戸・美濃	19C前半	２次被熱

第41図　Ａ地区の近世陶器②



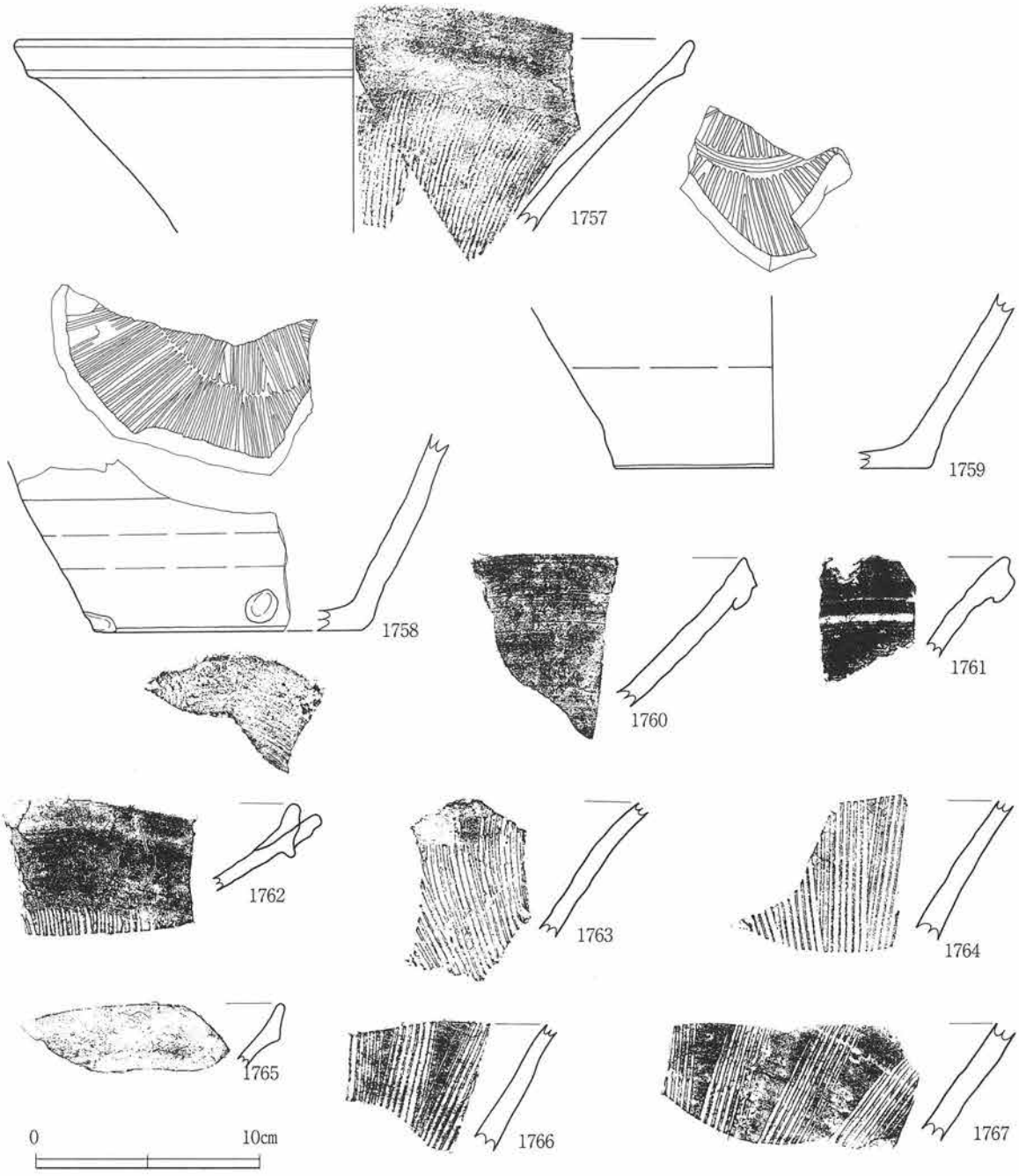
番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1741	不明	46ＳＫ７埋土	－	12.4	(11.2)	赤褐色	褐釉	東北在地	19Cか	内面無釉、底面に墨書
1742	〃	46次排土中	－	11.4	(3.1)	赤褐色～暗灰色	褐釉	〃	〃	内面無釉
1743	甕	46ＳＫ７埋土	9.0	6.8	(9.1)	暗灰色	鉄釉、空色の釉	〃	〃	鉄釉に空色の釉流しかけ
1744	〃	ⅡB8b（調査区外表採）	－	5.6	(3.6)	灰色	鉄釉	〃	〃	外底面と底辺部無釉
1745	〃	ⅡＢ区（14次）	5.0	－	(4.5)	暗灰色	褐釉	〃	〃	珪酸分の多い褐釉
1746	〃	ⅡＢ区火災面	－	12.7	(5.5)	〃	〃	〃	〃	底辺部は無釉で茶色を呈する
1747	〃	46ＳＤ９埋土	－	10.8	(21.7)	〃	鉄釉	〃	〃	鉛？による補修痕あり
1748	〃	ⅡＢ区表土中	52.0	－	(6.8)	暗灰色	鉄釉	〃	〃	図のスケールは６分の１
1749	〃	ⅡＢ区火災面	－	21.2	(15.8)	暗灰色～赤褐色	鉄釉	〃	〃	胎土に海綿状骨鉢混じる
1750	〃	ⅡＢ８ｂ表土	－	－	(14.4)	赤褐色	褐釉	〃	〃	胎土に砂粒多量混入

第42図　Ａ地区の近世陶器③



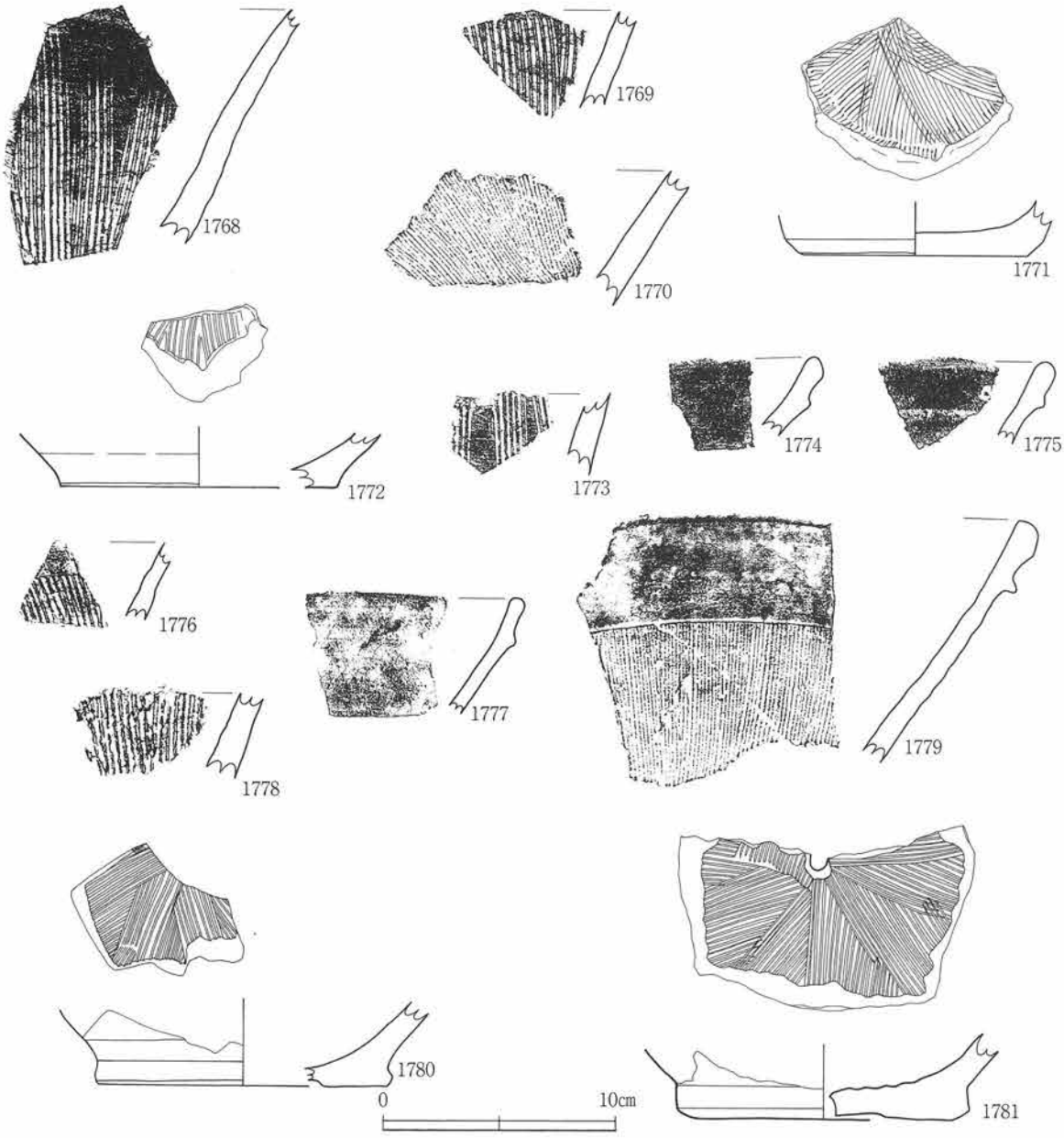
番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1751	擂鉢	46ＳＫ７埋土	－	－	(6.0)	肌色	鉄釉	瀬戸	18Ｃ前半	
1752	〃	ⅡＢ区火災面	－	－	(6.5)	〃	〃	〃	18Ｃ前半か	
1753	〃	〃	29.0	－	(9.8)	赤褐色	鉄釉	東北在地？	17Ｃか	胎土に砂粒混入
1754	〃	46ＳＤ９東埋土	－	12.3	(5.2)	赤褐色	〃	〃	不明	1753に胎土が似る
1755	〃	46ＳＤ９埋土	－	11.8	(7.6)	赤褐色～暗灰色	〃	東北在地	19Ｃ前半	底辺部に「しんこ」の跡あり
1756	〃	46ＳＫ７埋土	－	－	(9.1)	赤褐色	〃	〃	〃	

第43図　Ａ地区の近世陶器④



番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
1757	擂鉢	46ＳＫ７埋土	30.2	—	(8.7)	暗灰色	無釉	東北在地	18Ｃ後半か	焼き締め陶器
1758	〃	ⅡＢ区火災面	—	12.0	(8.8)	〃	〃	〃	不明	〃
1759	〃	ⅡB8b調査区外表採	—	14.0	(7.9)	暗灰～暗赤褐色	〃	〃	18Ｃ後半か	〃
1760	〃	ⅡＢ区火災面	—	—	(6.7)	〃	〃	〃	〃	〃
1761	〃	ⅡＡ３ｉ表土	—	—	(4.5)	〃	〃	〃	〃	〃
1762	〃	46ＳＫ７埋土	—	—	(4.0)	暗赤褐色	鉄釉	〃	19Ｃ前半か	
1763	〃	46ＳＤ９西埋土	—	—	(6.2)	暗灰～暗赤褐色	無釉	〃	不明	焼き締め陶器
1764	〃	46ＳＫ７埋土	—	—	(6.3)	赤褐色～暗赤褐色	〃	〃	18Ｃ後半か	〃
1765	〃	46ＳＫ６埋土	—	—	(2.8)	暗灰色	〃	〃	〃	〃
1766	〃	46ＳＤ10埋土	—	—	(5.7)	暗灰色～暗赤褐色	〃	〃	〃	〃
1767	〃	ⅡＢ区（14次）	—	—	(5.3)	〃	〃	〃	〃	〃

第44図　Ａ地区の近世陶器⑤



番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
1768	擂鉢	ⅡＢ区（14次）	－	－	(10.2)	暗赤褐色	無釉	東北在地	18C後半か	焼き締め陶器
1769	〃	ⅡＢ８ｂ表土	－	－	(4.2)	〃	〃	〃	〃	〃
1770	〃	ⅡＢ5~9ｄトレンチ表土	－	－	(5.9)	赤褐色	鉄釉	〃	19C後半か	胎土に海綿状骨針混入
1771	〃	ⅡＢ８ｂ表土	－	9.6	(2.4)	〃	〃	〃	〃	1770と同一個体か
1772	〃	ⅡＢ区火災面	－	11.9	(2.4)	赤橙色	無釉	東北在地？	不明	
1773	〃	ⅡＢ０ｈ表土	－	－	(3.6)	〃	〃	東北在地	18C後半か	焼き締め陶器
1774	〃	46ＳＤ９埋土	－	－	(3.4)	赤褐色	鉄釉	〃	19Cか	胎土に海綿状骨針混じる
1775	〃	46ＳＫ９埋土	－	－	(3.6)	〃	〃	〃	〃	〃
1776	〃	ⅡＢ区火災面	－	－	(3.4)	暗灰色	〃	〃	19Cか	光沢のある鉄釉
1777	〃	46ＳＫ６埋土	－	－	(5.1)	暗赤褐色	〃	〃	19C後半か	
1778	〃	46ＳＫ７埋土	－	－	(3.7)	赤褐色	〃	〃	19C後~20Cか	胎土に海綿状骨針混じる
1779	〃	〃 〃	－	－	(10.7)	暗灰色	〃	〃	20C	毛越寺焼に似る
1780	〃	ⅡＢ区火災面	－	12.4	(3.7)	〃	〃	〃	〃	〃
1781	〃	ⅡＡ２ｇ表土	－	11.0	(3.8)	橙色	無釉	〃	20C	素焼状態、底部に穿孔あり

第45図　Ａ地区の近世陶器⑥

推測される。1754は産地不明の擂鉢である。赤褐色の胎土で底面には回転糸切痕がある。

1755～1781は東北地方在地産の擂鉢である。1755は外面の底辺部に、焼成の際に擂鉢を重ねるために使用される「しんこ」の痕跡がある。1756は赤褐色の胎土で海綿状骨針が混じる。

1757～1761、1763～1769、1773は焼き締め陶器の擂鉢である。1760、1761のような折り返し口縁と1757、1765のような折り返しでない口縁の２種類の口縁形態がある。

1762は片口部の破片である。これは焼き締め陶器でない。1770と1771は同一個体かと推測される。胎土は赤褐色で海綿状骨針が混入する。1772は無釉の擂鉢である。赤褐色の胎土で砂粒が混入する。1774、1775は口縁部破片である。どちらの胎土にも海綿状骨針が混入する。1776は体部上半の破片である。茶色の光沢のある釉がかけられている。1777、1778は茶褐色の光沢のある釉がかけられている。1778の胎土には海綿状骨針が混入している。

1779、1780は平泉町教育委員会がおこなった観自在王院９次調査で検出された「毛越寺焼」の擂鉢に酷似する。1781は素焼状態の擂鉢である。底部中央に焼成後の穿孔がある。

1782～1784は素焼き状態の製品である。いずれの胎土にも海綿状骨針が混じる。1785は汽車茶瓶である。20世紀代のものである。

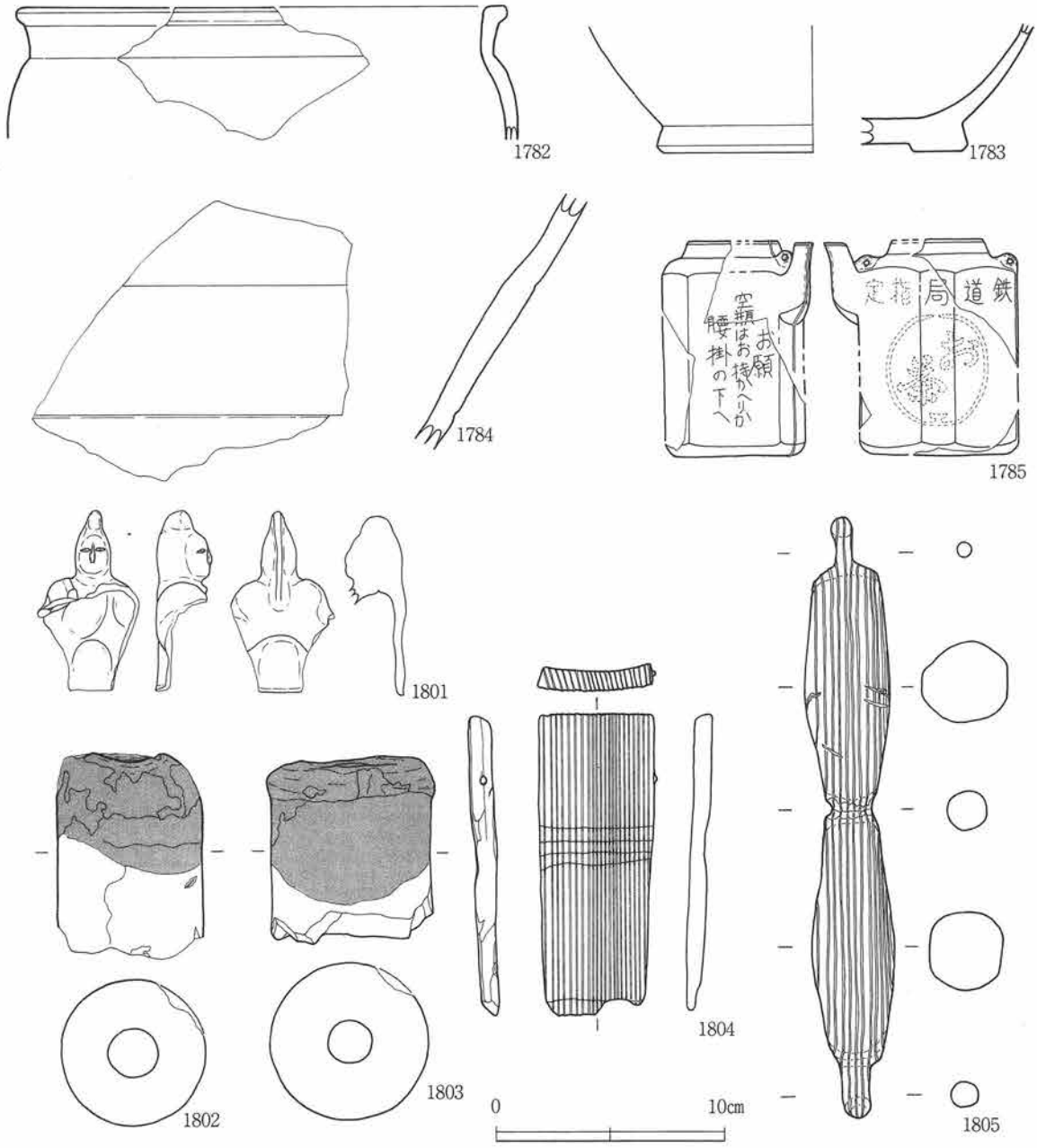
9　土製品（近世～近代）（第46図、写真図版109）

1801は土製の型おこしの土人形である。烏帽子をかぶった人物である。1802～1803は羽口である。鍛冶用の羽口と考えられる。

10　木製品（近世～近代）（第34・46図、写真図版109）

1804は桶の側板である。外面には、たがの痕跡があり、側面には木釘の痕跡がある。1805は糸巻きの部品と考えられる。

1505は曲物か桶の底板である。近世～近代の所属の46ＳＥ５からの出土であり、近世～近代のものである。

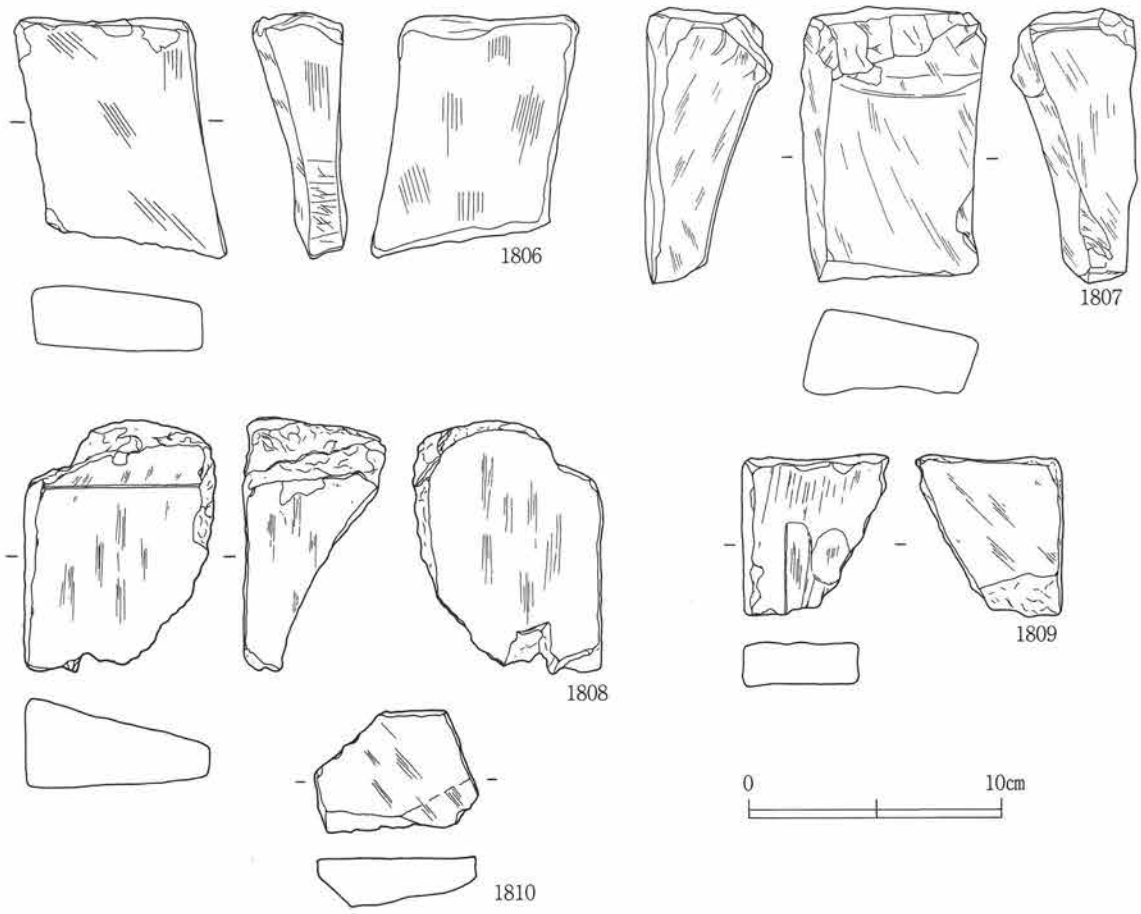


番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
1782	甕	ⅡB区火災面	21.2	—	(6.0)	肌色	素焼	東北在地	20C	胎土に海綿状骨針混じる
1783	鉢	〃	—	13.1	(5.6)	〃	〃	〃	〃	〃
1784	甕	〃	—	—	(11.2)	〃	〃	〃	〃	〃
1785	茶瓶	46SK6埋土	4.0	6.0	9.6	白色	透明釉	不明	20C	汽車茶瓶
1801	土人形	〃	—	—	8.0	橙色	素焼	東北在地	不明	型による成形
1802	羽口	〃	直径 6.3	—	(9.0)	橙～灰色	—	—	近世～近代	鍛冶用羽口か
1803	〃	〃	直径 7.0	—	(8.3)	〃	—	—	〃	〃
1804	桶	〃	正面 5.1	側面 1.0	13.3	—	—	—	近世～近代	
1805	糸まき	〃	直径 3.8	中心直径 1.8	26.6	—	—	—	〃	

第46図　A地区の近世の土製品・木製品

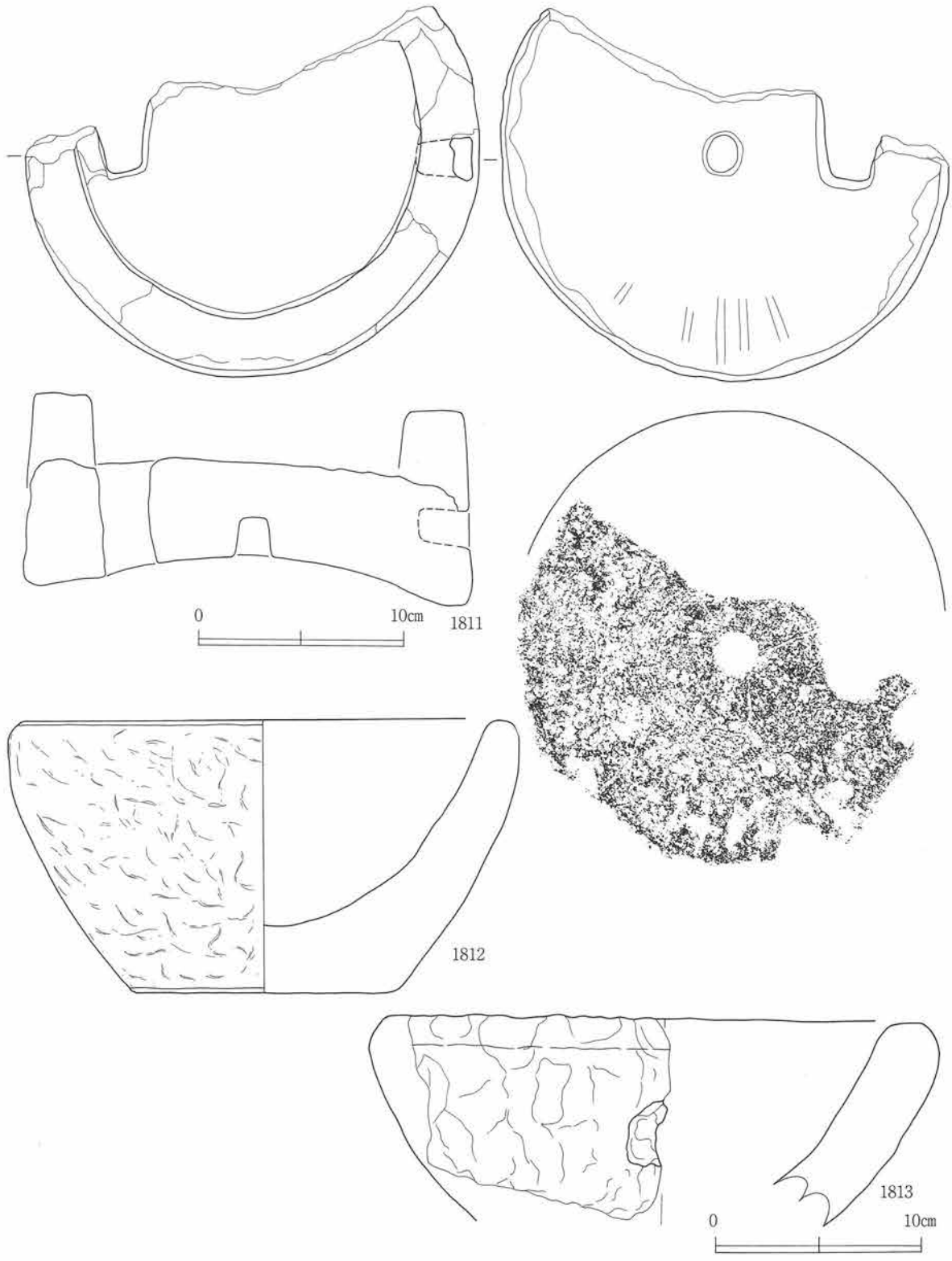
11　石製品（近世～近代）（第47・48図、写真図版109・110）

1806～1810は砥石である。1811は挽き臼の上臼である。磨耗が著しく目がほとんど残っていない。目のパターンは放射状と推測される。1812、1813は石製の鉢である。1812は内面がツルツルしている。用途はどちらも不明である。



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
1806	砥石	ⅡB区火災面	細粒凝灰岩	砥面3　仕上げ砥、置き砥	300
1807	〃	46SK6埋土	〃	〃　中砥、置き砥	398
1808	〃	46SE2　1層	溶結凝灰岩	〃　〃　〃	338
1809	〃	46SK6埋土	細粒凝灰岩	〃　仕上げ砥	97
1810	〃	46P118	〃	砥面2　〃	59

第47図　A地区の近世の石製品①



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
1811	挽き臼	ⅡＢ区表採	溶結凝灰岩	摩耗甚しく、放射状の目の一部が残る	7,000
1812	石鉢	46ＳＫ６埋土	〃		4,000
1813	〃	〃	〃		500

第48図　Ａ地区の近世の石製品②

12　金属製品（近世～近代）（第49～51図、写真図版110）

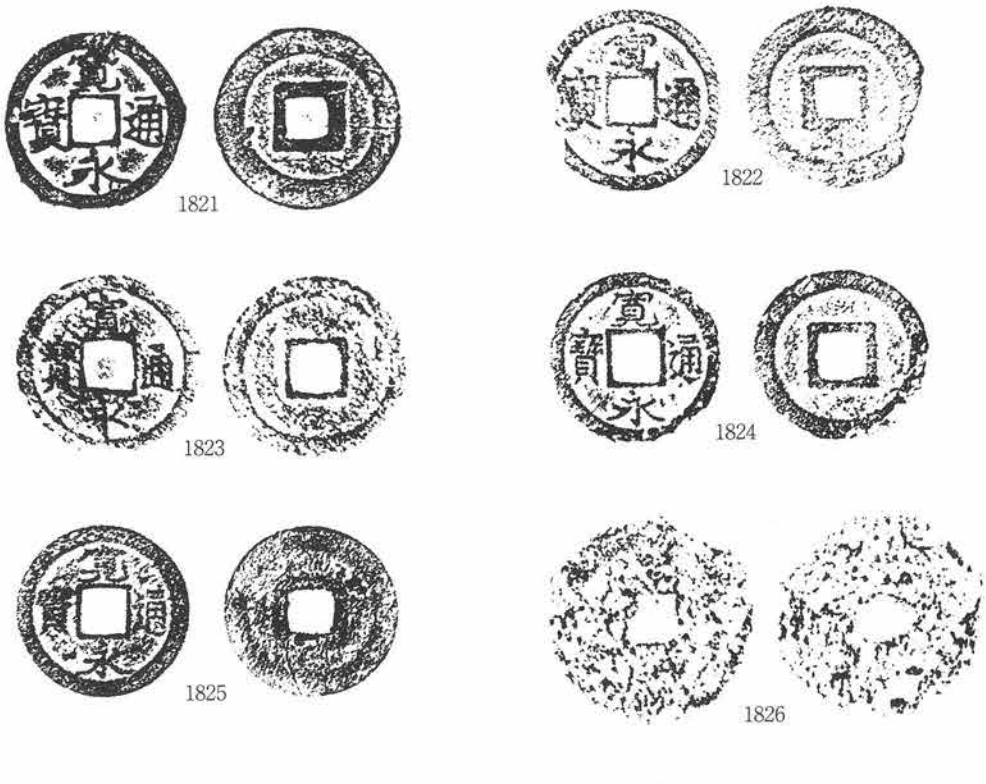
1821～1826は近世の銭貨である。1821～1826は寛永通寶である。1821、1822は古寛永である。1826は鉄銭で錆が著しい。

1827～1832は近代～現代の貨幣である。明治16年の半銭銅貨から昭和33年の百円銀貨までである。

1833は小柄の柄である。銅製で折れ曲がっている。1834～1836は煙管である。1834は雁首であるが火皿が欠損している。1835、1836は吸口である。

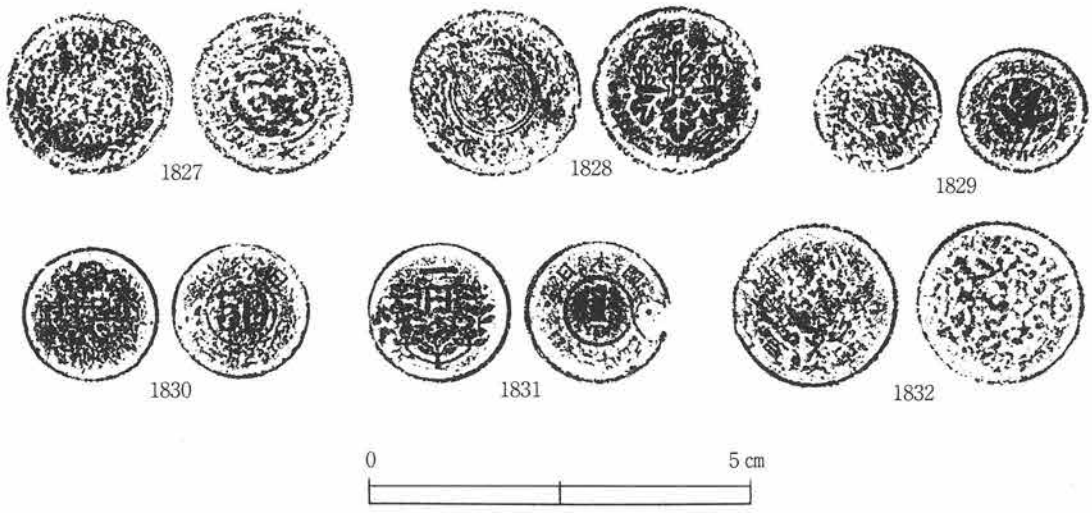
13　墓石（第52図・53図、写真図版111）

ここで報告する墓石は、志羅山遺跡14次、25次調査区域内に横位に積み重ねられたような状態になって置かれていたものである。14次、25次調査の報告書で、これらの墓石については報告されていないのでここで報告したい。14次、25次調査区付近には以前、鈴木寛家の墓地があったが、鈴木氏の家の分の墓石は整理し改葬をおこなったという。だが14次、25次調査区に残されていた墓石は鈴木氏の先祖のものではなく、無縁になってしまった墓石らしい。これらがなぜ横位に積み重ねられた様な状態になっていたのかその経緯はわからない。いずれにせよこれらの墓石は動かされた状態であり、地下の墓壙との関係はわからない。志羅山



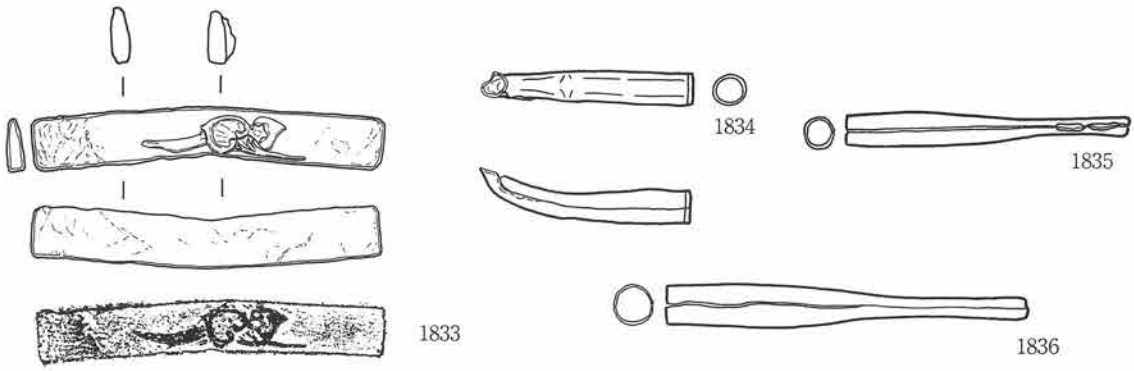
番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	備考
1821	寛永通寶	46ＳＫ18底部	2.40	2.91	銅	寛永13年（1636）	古寛永通宝
1822	寛永通寶	ⅡＢ区火災面	2.40	2.80	〃	〃	〃
1823	寛永通寶	〃	2.40	2.36	〃	元文元年（1736）	山城横大路所鋳
1824	寛永通寶	〃	2.30	2.10	〃	元文２年（1737）	下野国日光所鋳
1825	寛永通寶	〃	2.30	2.26	〃	元文４年（1739）	江戸深川平野新田
1826	寛永通寶	〃	2.90	5.10	鉄		四文銭、錆化甚しい

第49図　Ａ地区の近世の銭貨



番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	備考
1827	半銭銅貨	ⅡB区火災面	2.2	3.33	銅他	明治16年（1883）	
1828	1銭銅貨	〃	2.3	3.42	銅他	大正12年（1923）	
1829	1銭アルミ貨	〃	1.8	0.88	アルミニウム	昭和15年（1940）	
1830	50銭黄銅貨	〃	1.9	2.62	銅他	昭和22年（1947）	
1831	1円黄銅貨	〃	2.0	3.07	銅、亜鉛	昭和24年（1949）	
1832	100円銀貨	〃	2.3	3.05	銀他	昭和33年（1958）	

第50図　A地区の近代の銭貨



番号	器種	出土位置	法量（cm）			その他
			最大長	最大幅	厚さ	
1833	小柄	ⅡB区火災面	8.9	1.3	0.3	銅製　折れ曲がっている
1834	煙管	〃	6.5	0.8	0.8	煙管雁首　18C代の製作か
1835	〃	〃	7.3	0.9	0.9	煙管吸口
1836	〃	ⅡB-5~9dトレンチ表土	9.4	0.9	0.9	〃

第51図　A地区の近世の金属製品

遺跡25次調査では近世～近代の墓壙が9基検出されているが、これらの墓壙と今回報告の墓石が関係あるかどうかは判断できない。

1901は寛延4年（1751）の墓石である。石質はよくわからないが火山岩と思われる。前面は平坦になって

おり、側面と背面は自然面のままである。戒名の下に蓮台が線刻されている。

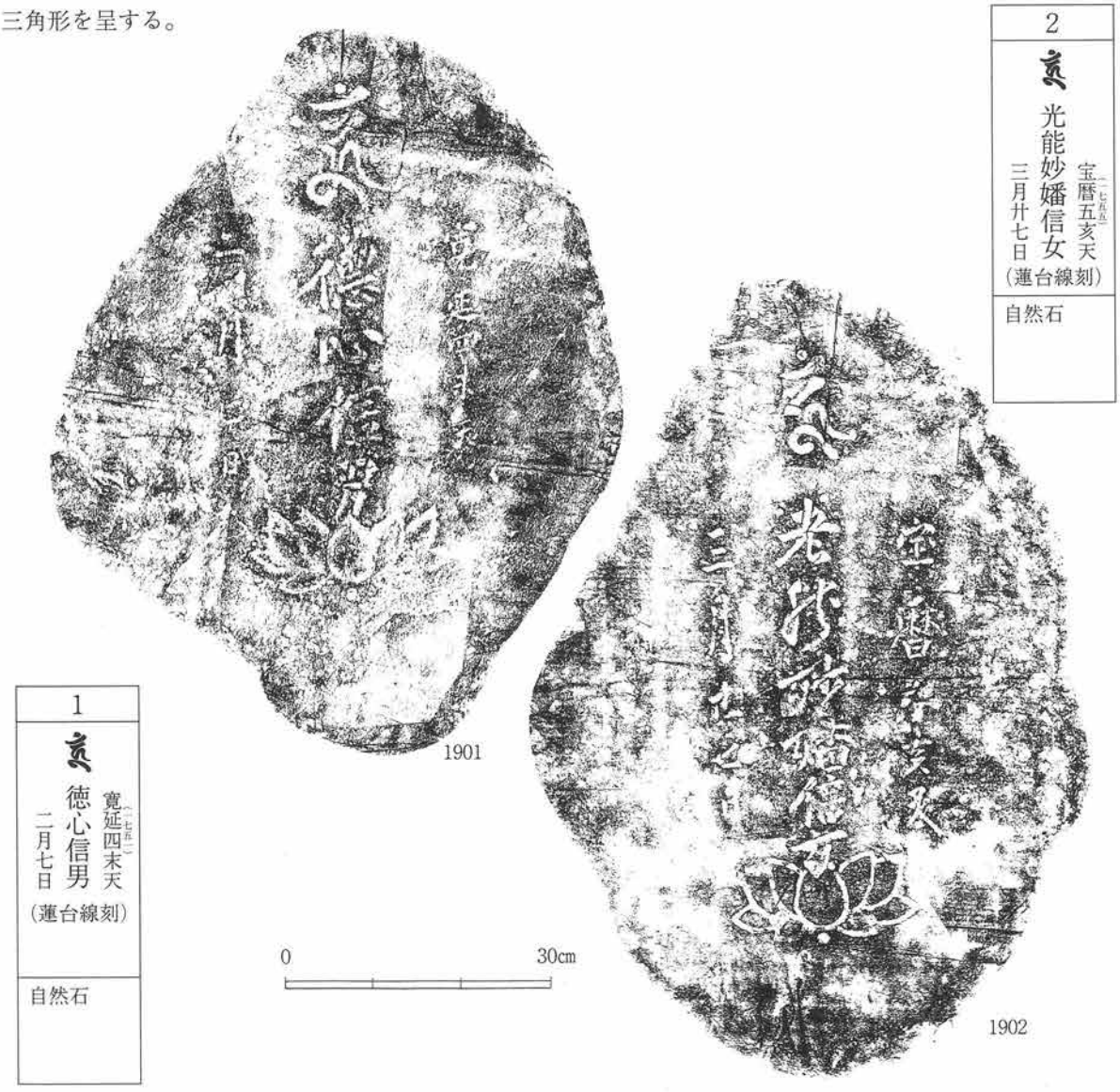
1902は宝暦５年（1755）の墓石である。石の形状は1901と酷似する。石質はわからなかったが、1901と同一の石質である。蓮台の形状も1901と共通する。戒名、蓮台の線刻の中には赤色の顔料がみられた。

1903は柱状の自然石の墓石である。年号は安永２年（1772）である。石質は判断できないが火山岩と思われる。

1904は天明４年（1784）の墓石である。石質は安山岩かと推測される。加工がほとんどない自然石の墓石である。

1905は板状に加工した墓石である。下部には柄があり、戒名の部分は少し引っ込んでいる。石質は凝灰岩と推測される。年号が欠損しているが、干支から天明４年（1784）か文久４年（1864）と考えられる。天明４年銘の1904が自然石の墓石であることから、文久４年（1864）年の可能性が高い。文久４年は２月に元治元年に改元されている。

1906は1905と同じ形状の墓石である。石質も同じである。この墓石には銘が全く刻まれていない。頭部は三角形を呈する。



第52図　近世の墓石①

1903

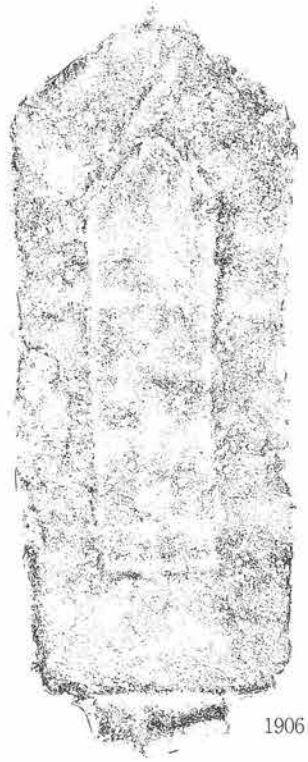
3
寛永二癸巳天（一七三三） 正月十有七日 帰俊妙証禅定門 （蓮台線刻）
やや柱状の自然石

1904

4
天明四甲辰天（一七八四） 三月十三日 通教善信士 （蓮台線刻）
自然石

1905

5
□□四甲□天 □月十一日 □染善信男 （蓮台線刻）
板状に加工した石。下部に柄を作る。上部は欠損



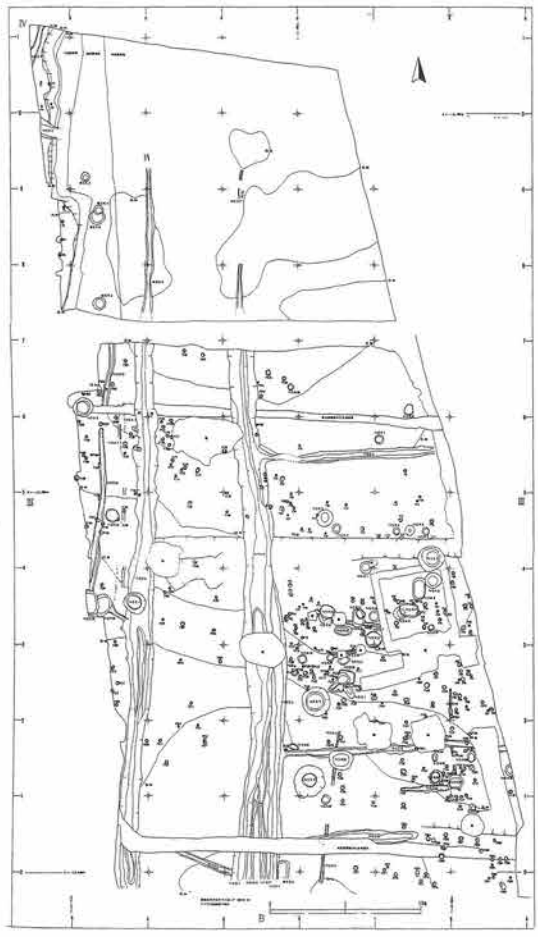
1906

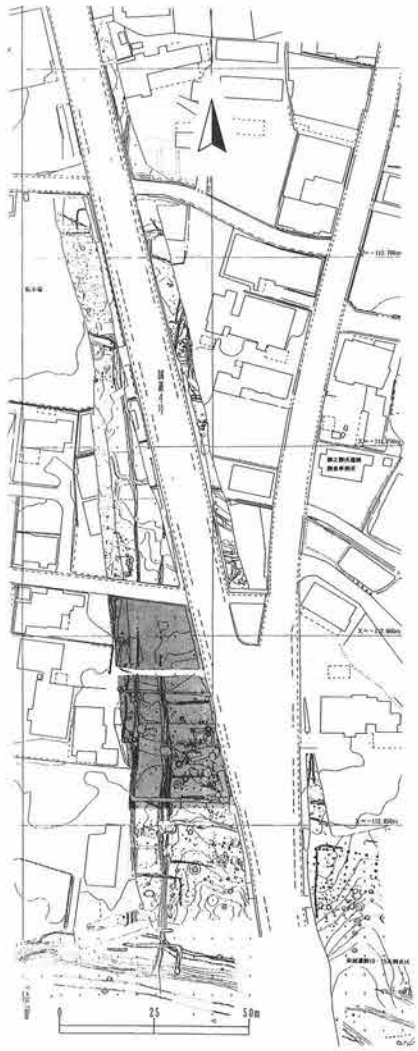
6
（銘文なし）
板状に加工した石。下部に柄を作る。

0　30cm

第53図　近世の墓石②

第５章　Ｂ地区の遺構・遺物





第５章　Ｂ地区の遺構・遺物

第１節　Ｂ地区の概観

Ｂ地区は大グリッドのⅢＢ区が相当する。調査区の南側約２／３は第74次の調査区であるが、北側１／３は46、66、74次の３次にわたって調査がおこなわれた。よってＢ地区の遺構名は46、66、74次の３つの調査次を付した遺構が存在する。

本調査区では、中央やや西側に南北に走る道路状遺構が縦貫している。道路状遺構の路面内には遺構が少なく、道路状遺構の東西に遺構が展開する形になっている。道路状遺構の東側側溝は溝の掘り返しが観察でき、その度に道路の幅が狭くなっているのが観察できる。　道路遺構の西側には道路側溝に平行な形で塀跡（74ＳＡ1、74ＳＡ2）が観察できる。この塀に伴うであろう屋敷は調査区外に展開しており、今回の調査にはひっかからなかった。

道路遺構の西側では12世紀の屋敷を構成すると考えられる遺構が多く検出されている。道路側溝から直交する角度に伸びる溝（74ＳＤ３、74ＳＤ９）は屋敷を区画する溝の可能性も考えられる。特に74ＳＤ３はその東側の延長線状あたる部分（泉屋13次、16次調査区）で溝が検出されており、都市を区画する溝でもある可能性がある。泉屋16次調査の溝は74ＳＤ３の道路側溝と接する部分から約250m離れた地点である。

掘立柱建物は全部で27棟を示した。この中の74ＳＢ１、ＳＢ４、ＳＢ６は調査区の東側、国道４号線側にプランが伸びているため全体のプランを検出できないが、身舎２間×３間で４面に廂が付く三間四面の建物と考えられる。即ちこれらは12世紀の屋敷に中で中核的な建物と考えられるものである。他の建物は時期を示せないものが多い。重複の具合から考えると12世紀遺構の建物も存在すると考えられる。少なくとも近世以降の建物は存在していないようである。

井戸は５基検出されている。この中の74ＳＥ１は12世紀の道路側溝と重複しており12世紀より新しい井戸と考えられる。他の４つは出土遺物から12世紀の井戸と推測できる。74ＳＫ12はいわゆるトイレ状土坑であり、底面近くからチュウ木が多量に出土した。

出土遺物はかわらけ、国産陶器、中国産陶磁器、瓦、石製品がある。かわらけは74ＳＫ27から多量に出土した。これらのかわらけは非常に磨耗が著しい破片であった。

国産陶器は底部から口縁部から接合した常滑産陶器甕（2231）がある。これは74ＳＥ３からの出土である。同じ74ＳＥ３からは常滑産陶器甕の大型破片が出土している。この個体と同一のものの破片がＡ地区の46ＳＥ７から大型破片の状態で出土しており、遺構どうしの関連が指摘できる。また石巻市水沼窯系統の製品と推測される「擬水沼産陶器」(2382～2384）が出土している。これはＡ地区出土の同一個体と思われる破片も含めて考え合わせると袈裟襷文の四耳壷と推測される。

74ＳＥ４から出土した漆塗りの木製品の断片は当初、鞍の「後輪」の破片と考えたが、湾曲の少なさからこれにはどうも無理があるかもしれない。だが今の所これに代わる製品をみつけるあぐねている。

第2節　遺構

1　建物

74ＳＢ1（第54図、写真図版30）

〔位置〕ⅢＢ３ｆ、３ｇ、４ｆ、４ｇに位置する。

〔重複〕74ＳＥ２、74ＳＫ８、74ＳＫ９、74ＳＫ11、74ＳＫ13、74ＳＫ23、74ＳＢ４、74ＳＢ６、74ＳＢ16、74ＳＢ17とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。建物のプランが調査区域外に延びるため全体のプランは検出できなかった。また撹乱により失われた柱穴もあると考えられる。検出できた部分から推定して、身舎２間×３間に四面の廂が付く「三間四面」のプランと考えられる。梁間は廂部分も含めて708cm、桁行は検出された分で445cmである。身舎の梁間は436cm、桁行は762cmと推定される。面積は検出された分で約9.5坪である。全体の面積は約24.5坪と推定される。使用した柱穴は10個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－２°－Ｅである。

〔柱間寸法〕身舎の梁間では７尺２寸（約218cm）、桁行では８尺４寸（約254cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ16から５片、Ｐ36から３片、Ｐ42から３片、Ｐ48から６片、Ｐ50から１片、Ｐ55から２片、Ｐ59から３片手づくねかわらけの細片が出土した。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と「三間四面」のプランであることから、屋敷の中の中核的な建物と考えられる。

〔年代〕多くの柱穴から手づくねかわらけの破片が出土した。本建物には柱穴の抜き取り痕はないのでこれらは建物の構築時に混入したものと考えられる。よって本建物は12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＢ2（第54図、写真図版30）

〔位置〕ⅢＢ０ｅ、０ｆ、１ｅ、１ｆ、２ｅ、２ｆに位置する。

〔重複〕74ＳＫ33、74ＳＤ９、74ＳＢ８、74ＳＢ14、74ＳＢ19とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また74ＳＢ９柱穴Ｐ234と本建物の柱穴Ｐ155が重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は684cm、梁間は412cmである。面積は約8.5坪である。使用した柱穴は10個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－１°－Ｅである。

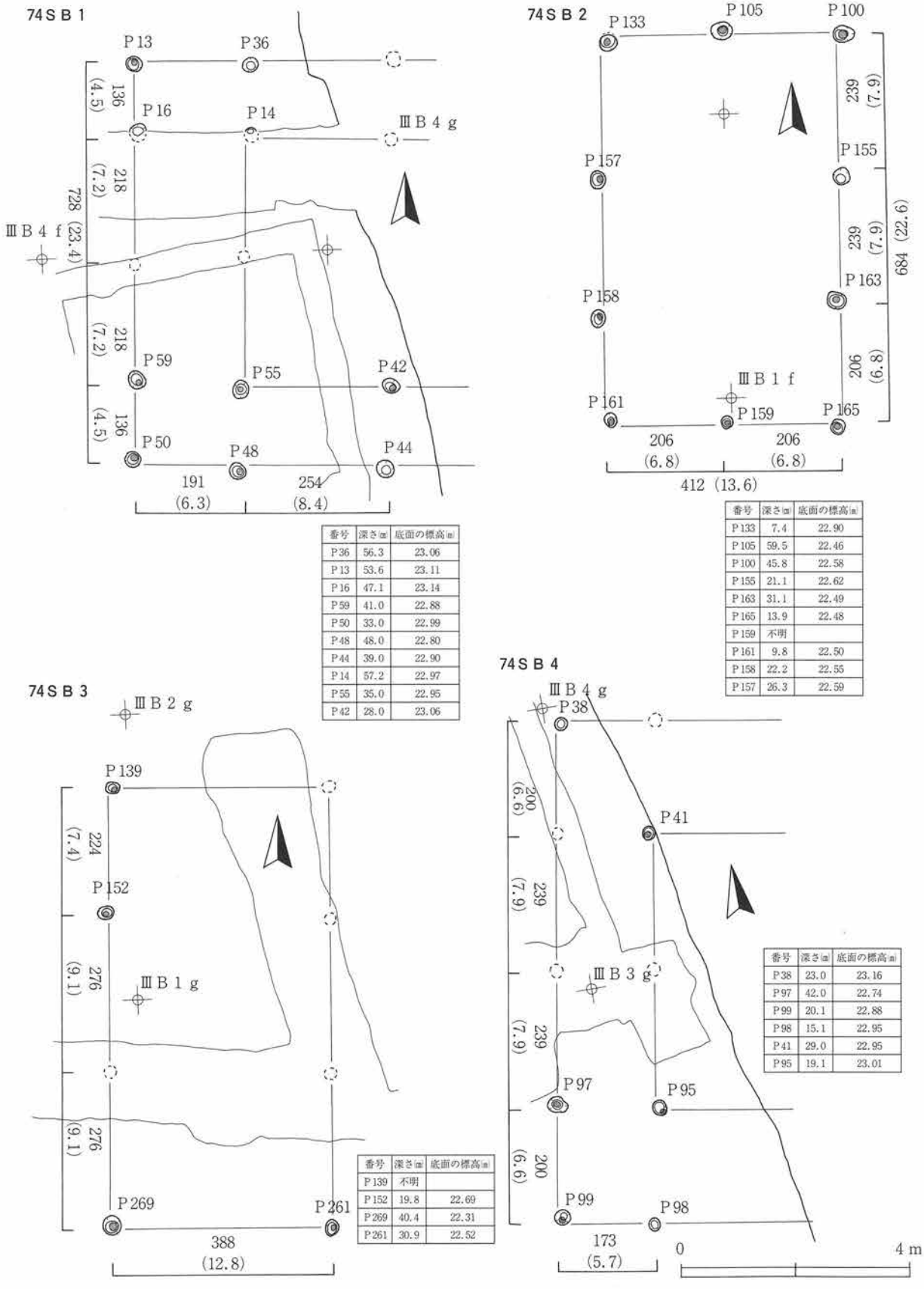
〔柱間寸法〕桁行では７尺９寸（約239cm）と６尺８寸（約206cm）が使用されている。梁間では６尺８寸（約206cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないがＰ155から３片、Ｐ163から２片手づくねかわらけの細片が出土した。またＰ157から１片、Ｐ163から１片ろくろかわらけの細片が出土した。またＰ165から１片縄文土器と思われる微小な破片が出土した。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。

〔年代〕12世紀の所属と考えられる。柱穴から手づくねかわらけが出土しており、12世紀後半以降の構築である。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P36	56.3	23.06
P13	53.6	23.11
P16	47.1	23.14
P59	41.0	22.88
P50	33.0	22.99
P48	48.0	22.80
P44	39.0	22.90
P14	57.2	22.97
P55	35.0	22.95
P42	28.0	23.06

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P133	7.4	22.90
P105	59.5	22.46
P100	45.8	22.58
P155	21.1	22.62
P163	31.1	22.49
P165	13.9	22.48
P159	不明	
P161	9.8	22.50
P158	22.2	22.55
P157	26.3	22.59

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P139	不明	
P152	19.8	22.69
P269	40.4	22.31
P261	30.9	22.52

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P38	23.0	23.16
P97	42.0	22.74
P99	20.1	22.88
P98	15.1	22.95
P41	29.0	22.95
P95	19.1	23.01

第54図　B地区の建物①（74SB1～4）

74ＳＢ３（第54図、写真図版30）

〔位置〕ⅢＢ０ｆ、１ｆ、０ｇ、１ｇに位置する。

〔重複〕本建物の柱穴Ｐ139が74ＳＤ９と重複するが本建物が新しい。また74ＳＫ22、74ＳＫ25、74ＳＫ30、74ＳＤ12、74ＳＢ５、74ＳＢ７、74ＳＢ９、74ＳＢ10、74ＳＢ12、74ＳＢ13、74ＳＢ15、74ＳＢ20とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は776cm、梁間は388cmである。面積は約9.1坪である。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－３°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では９尺１寸（約276cm）と７尺４寸（約224cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明であるが大きさから、付属屋と考えられる。

〔年代〕不明である。12世紀後半から中世にかけての建物である可能性が高い。

74ＳＢ４（第54図、写真図版30）

〔位置〕ⅢＢ２ｆ、２ｇ、３ｆ、３ｇに位置する。

〔重複〕74ＳＤ10、74ＳＢ１、74ＳＢ６、74ＳＢ８、74ＳＢ９、74ＳＢ10、74ＳＢ11、74ＳＢ15、74ＳＢ18とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。建物のプランが調査区域外に延びるため全体のプランは検出できなかった。また撹乱により失われた柱穴もあると考えられる。検出できた部分から推定して、身舎２間×３間に四面の廂が付く「三間四面」のプランと考えられる。梁間は廂部分も含めて878cm、桁行は検出された分で173cmである。身舎の梁間は478cmである。面積は検出された分で約4.6坪である。全体の面積は身舎の桁行の寸法が不明のため、推定できない。使用した柱穴は６個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－10°－Ｅである。

〔柱間寸法〕身舎の梁間では7尺9寸（約239cm）が使用されている。廂は梁間では6尺6寸（約200cm）、桁行では５尺７寸（約173cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ97から手づくねかわらけの細片が６片出土した。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と「三間四面」のプランであることから、屋敷の中の中核的な建物と考えられる。

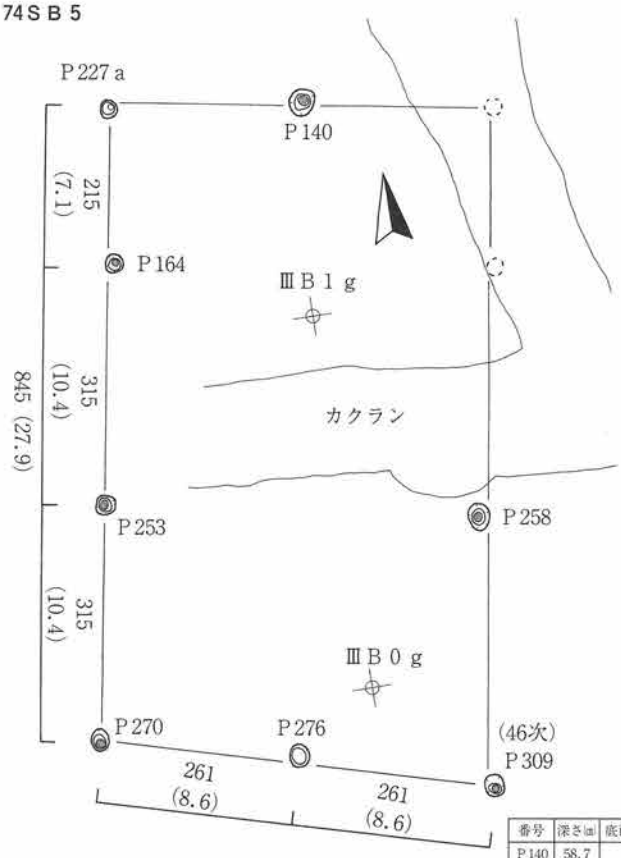
〔年代〕柱穴から手づくねかわらけが出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＢ５（第55図、写真図版30）

〔位置〕ⅡＢ９ｆ、９ｇ、ⅢＢ０ｆ、０ｇ、１ｆ、１ｇに位置する。

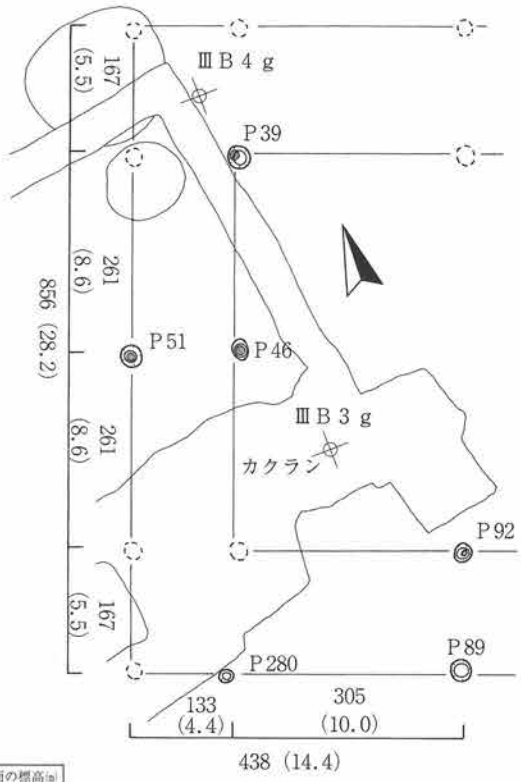
〔重複〕本建物の柱穴Ｐ227が74ＳＤ９と、また柱穴Ｐ140が74ＳＤ10と重複するがいずれも本建物が新しい。また74ＳＫ22、74ＳＫ24、74ＳＫ25、74ＳＫ29、74ＳＫ30、74ＳＤ12、74ＳＤ14、74ＳＢ３、74ＳＢ７、74ＳＢ９、74ＳＢ10、74ＳＢ12、74ＳＢ13、74ＳＢ15とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

74SB5



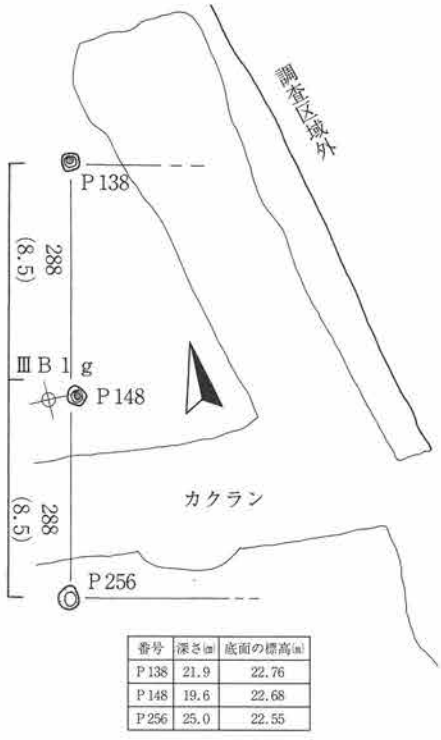
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P140	58.7	23.38
P227a	14.7	27.21
P164	28.4	22.54
P253	34.4	22.32
P270	21.4	22.31
P276	9.8	22.52
46P309	35.1	23.82
P258	18.4	22.60

74SB6



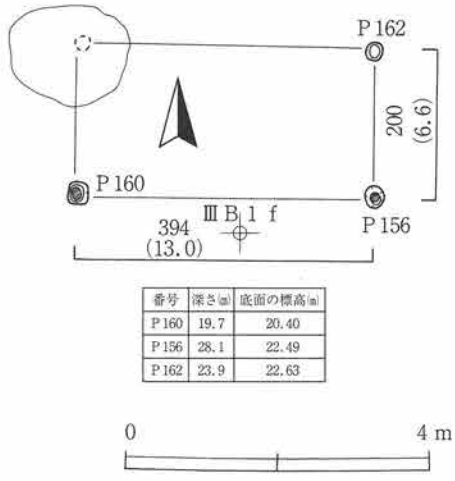
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 51	20.7	23.07
P280	12.3	22.95
P 89	14.1	23.01
P 39	21.0	23.17
P 46	11.0	23.12
P 92	16.7	23.04

74SB7



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P138	21.9	22.76
P148	19.6	22.68
P256	25.0	22.55

74SB8



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P160	19.7	20.40
P156	28.1	22.49
P162	23.9	22.63

第55図　B地区の建物②（74SB5～8）

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は845cm、梁間は522cmである。面積は約13.1坪である。使用した柱穴は８個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－10°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では10尺4寸（約315cm）と7尺1寸（約215cm）が使用されている。梁間では8尺6寸（約261cm）が使用されている。
〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ164から手づくねかわらけの細片が１片出土した。
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。
〔年代〕柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築であることは確かである。おそらく12世紀後半の所属と考えられる。

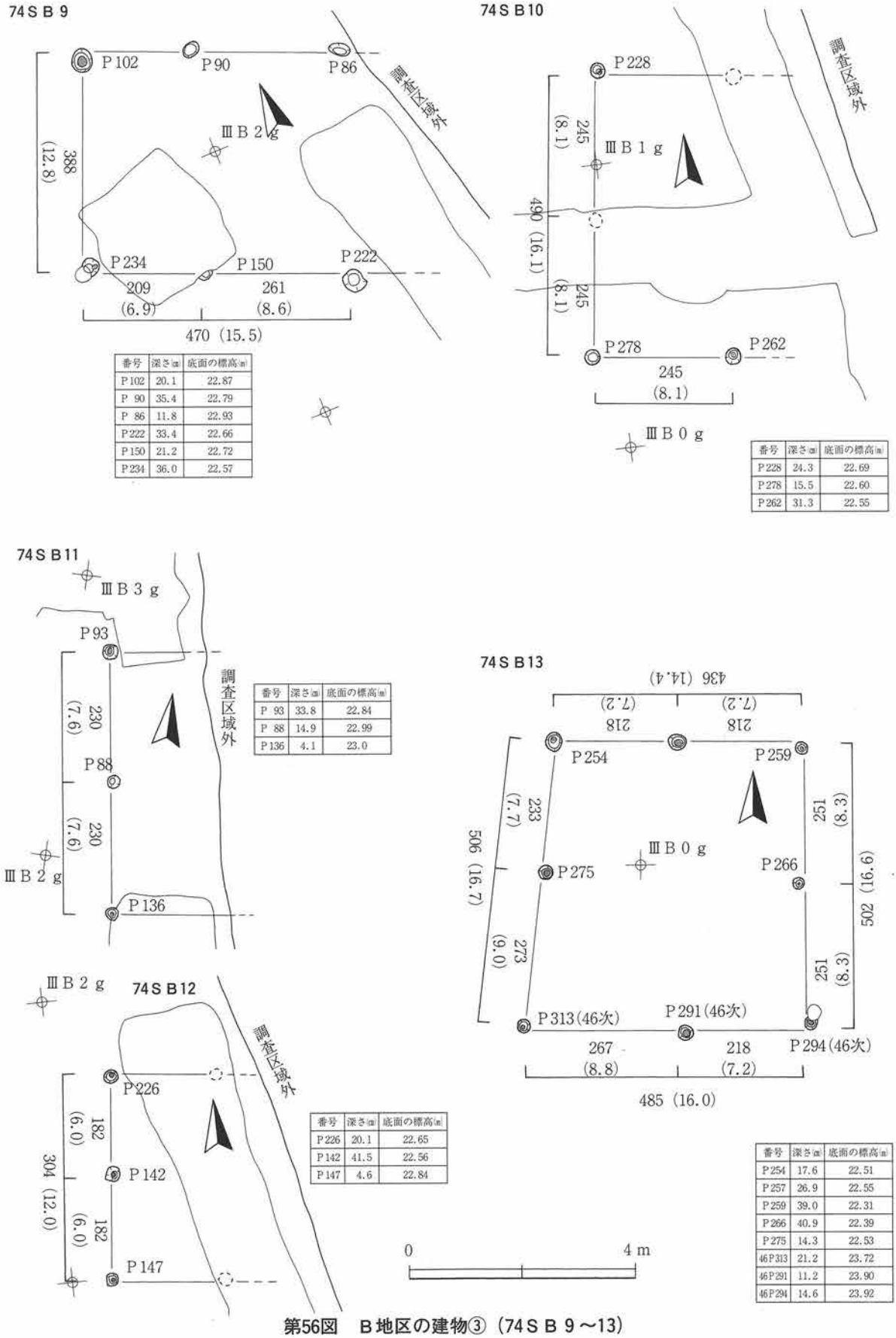
74ＳＢ６（第55図、写真図版30）
〔位置〕ⅢＢ２ｆ、２ｇ、３ｆ、３ｇに位置する。
〔重複〕74ＳＥ２、74ＳＫ８と重複するがおそらく本建物が古い。また74ＳＫ23、74ＳＢ１、74ＳＢ４、74ＳＢ９、74ＳＢ11、74ＳＢ15、74ＳＢ18、74ＳＢ19とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。建物のプランが調査区域外に延びるため全体のプランは検出できなかった。また撹乱により失われた柱穴もあると考えられる。検出できた部分から推定して、身舎２間×３間に四面の廂が付く「三間四面」のプランと考えられる。梁間は廂部分も含めて856cm、桁行は検出された分で438cmである。身舎の梁間は522cmで、桁行は915cmと推定される。面積は検出された分で約11.4坪である。全体の面積は約30.6坪と推定される。使用した柱穴は６個である。
〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－21°－Ｅである。
〔柱間寸法〕身舎の梁間では８尺６寸（約261cm）、桁行では10尺（約305cm）が使用されている。廂では梁間は５尺５寸（約167cm）、桁行では４尺４寸（約133cm）が使用されている。
〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ51から手づくねかわらけの細片が５片出土した。
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕規模と「三間四面」のプランであることから、屋敷の中の中核的な建物と考えられる。
〔年代〕柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。おそらく12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＢ７（第55図、写真図版30）
〔位置〕ⅢＢ０ｆ、０ｇ、１ｇに位置する。
〔重複〕74ＳＫ22、74ＳＢ３、74ＳＢ５、74ＳＢ９、74ＳＢ10、74ＳＢ12、74ＳＢ13、74ＳＢ15とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びると考えられ、また撹乱によって柱穴が失われており全体のプランを検出できなかった。梁間（検出できた分を梁と考える）は576cmである。使用した柱穴は３個である。
〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－13°－Ｅである。

〔柱間寸法〕梁間では８尺５寸（約288cm）が使用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ８（第55図、写真図版30）
〔位置〕ⅢＢ１ｅ、１ｆに位置する。
〔重複〕74ＳＫ33とプランが重複するがおそらく本建物が古い。また74ＳＤ12と本建物の柱穴Ｐ156が接するが前後関係を把握できなかった。また74ＳＢ２とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は394cm、梁間は200cmである。面積は約2.4坪である。使用した柱穴は３個である。
〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－２°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では13尺（約394cm）、梁間では６尺６寸（約200cm）が使用されている。
〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ156から３片、Ｐ162から４片手づくねかわらけの細片が出土した。
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。
〔年代〕不明であるが柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀後半から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ９（第56図、写真図版31）
〔位置〕ⅢＢ１ｆ、１ｇ、２ｆ、２ｇに位置する。
〔重複〕本建物の柱穴Ｐ234と74ＳＢ２の柱穴Ｐ155が重複するが本建物が古い。74ＳＤ９、74ＳＫ30、74ＳＢ３、74ＳＢ４、74ＳＢ５、74ＳＢ６、74ＳＢ11、74ＳＢ12、74ＳＢ15、74ＳＢ18とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びており、全体のプランを検出できなかった。梁間は388cmで、桁行は検出した分で470cmである。面積は検出した分で約5.5坪である。使用した柱穴は６個である。
〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－22°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺６寸（約261cm）と６尺９寸（約209cm）が使用されている。
〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ90から６片、Ｐ150から１片手づくねかわらけの細片が出土した。またＰ90から１片ろくろかわらけの細片が出土した。
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。
〔年代〕不明であるが柱穴からろくろかわらけの細片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀後半から中世にかけての建物の可能性が高い。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P102	20.1	22.87
P 90	35.4	22.79
P 86	11.8	22.93
P222	33.4	22.66
P150	21.2	22.72
P234	36.0	22.57

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P228	24.3	22.69
P278	15.5	22.60
P262	31.3	22.55

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 93	33.8	22.84
P 88	14.9	22.99
P136	4.1	23.0

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P226	20.1	22.65
P142	41.5	22.56
P147	4.6	22.84

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P254	17.6	22.51
P257	26.9	22.55
P259	39.0	22.31
P266	40.9	22.39
P275	14.3	22.53
46P313	21.2	23.72
46P291	11.2	23.90
46P294	14.6	23.92

第56図　B地区の建物③（74SB9～13）

74ＳＢ10（第56図、写真図版31）

〔位置〕ⅢＢ０ｆ、０ｇ、１ｇに位置する。

〔重複〕本建物の柱穴Ｐ228と74ＳＤ10が重複するが本建物が新しい。また74ＳＫ22、74ＳＢ３、74ＳＢ５、74ＳＢ７、74ＳＢ12、74ＳＢ13とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びており、全体のプランを検出できなかった。梁間は490cmで、桁行は検出した分で245cmである。面積は検出した分で約3.6坪である。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－８°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行、梁間ともに８尺１寸（約245cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ11（第56図、写真図版31）

〔位置〕ⅢＢ１ｇ、２ｇに位置する。

〔重複〕74ＳＢ４、74ＳＢ６、74ＳＢ９、74ＳＢ15、74ＳＢ18とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びており、全体のプランを検出できなかった。梁間は460cmである。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－８°－Ｗである。

〔柱間寸法〕梁間では７尺６寸（約230cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ93から１片手づくねかわらけの細片が出土した。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。

〔年代〕不明であるが柱穴から手づくねかわらけの細片が出土しており12世紀後半以降の構築である。。12世紀後半から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ12（第56図、写真図版31）

〔位置〕ⅢＢ０ｇ、１ｇに位置する。

〔重複〕本建物の柱穴Ｐ142と74ＳＢ15の柱穴Ｐ143が重複するが本建物が新しい。また74ＳＢ３、74ＳＢ５、74ＳＢ７、74ＳＢ９、74ＳＢ10とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びており、全体のプランを検出できなかった。梁間は364cmである。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－６°－Ｅである。

〔柱間寸法〕梁間では６尺（約182cm）が使用されている。

〔出土遺物〕Ｐ142から４片、Ｐ216から２片手づくねかわらけの細片が出土した。

〔付属施設〕なし

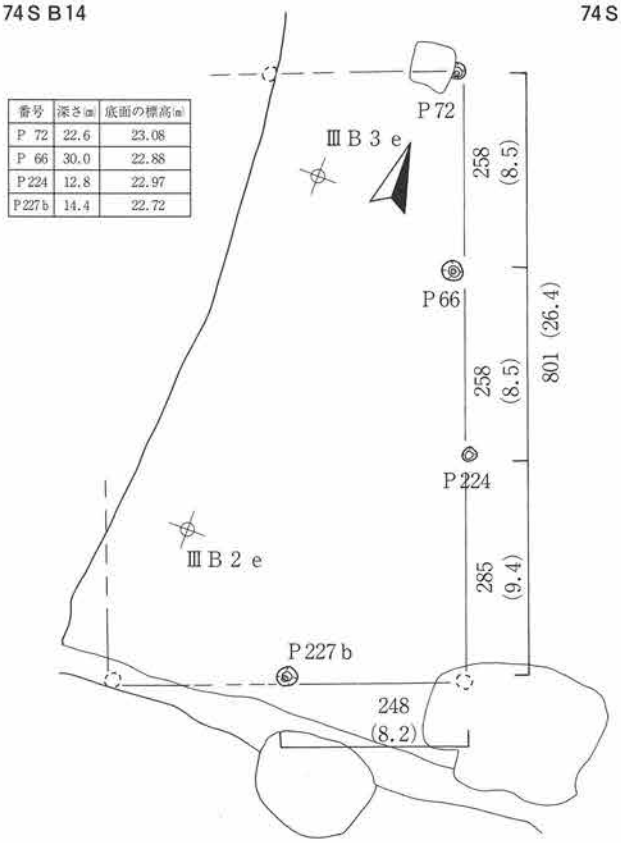
〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。
〔年代〕不明であるが柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀後半から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ13（第56図、写真図版31）
〔位置〕ⅡＢ９ｆ、９ｇ、ⅢＢ０ｆ、０ｇに位置する。
〔重複〕46ＳＫ17、74ＳＢ３、74ＳＢ５、74ＳＢ７、74ＳＢ10、74ＳＢ21とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。46次調査のＰ314を使用することによってプランが台形を呈するが、他に適切な柱穴が見当らずこのプランを採用した。桁行は西辺で506cm、東辺で502cm、梁間は北辺で436cm、南辺で485cmである。面積は約6.9坪である。使用した柱穴は８個である。
〔建物方位〕桁行（東辺）の軸方向はＮ－１°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺９寸（約239cm）と６尺８寸（約206cm）が使用されている。梁間では７尺２寸（約218cm）が多用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての所属の可能性が高い。

74ＳＢ14（第57図、写真図版31）
〔位置〕ⅢＢ１ｃ、２ｃ、３ｃに位置する。
〔重複〕本建物の柱穴Ｐ224と74ＳＸ１が重複するが本建物が古い。また本建物の柱穴Ｐ66と74ＳＫ19が重複するが本建物が新しい。そして道路側溝である74ＳＤ４、74ＳＤ５、また74ＳＤ９とプランが重複するが、おそらく本建物が古い。また74ＳＥ３、74ＳＫ18、74ＳＫ27、74ＳＫ32、74ＳＫ34、74ＳＢ19とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが道路側溝である74ＳＤ４、ＳＤ５の構築により失われたと考えられ、全体のプランを検出できなかった。桁行は801cmで梁間は検出された分で248cmである。面積は検出した分で約6.0坪である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－21°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺５寸（約258cm）と９尺４寸（約285cm）が使用されている。
〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ66から１片ろくろかわらけの細片が出土した。
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明であるが柱穴からろくろかわらけの破片が出土しており、12世紀以降の構築の可能性がある。また道路側溝より古いことから、12世紀後半より古い可能性も考えられる。

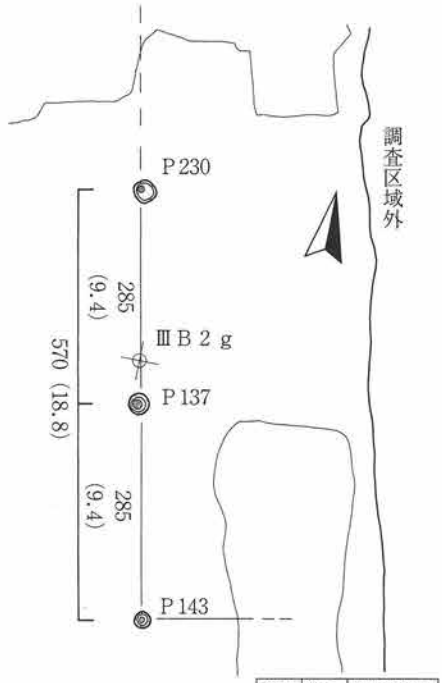
74ＳＢ15（第57図、写真図版31）
〔位置〕ⅢＢ１ｇ、２ｆ、２ｇに位置する。

74S B14



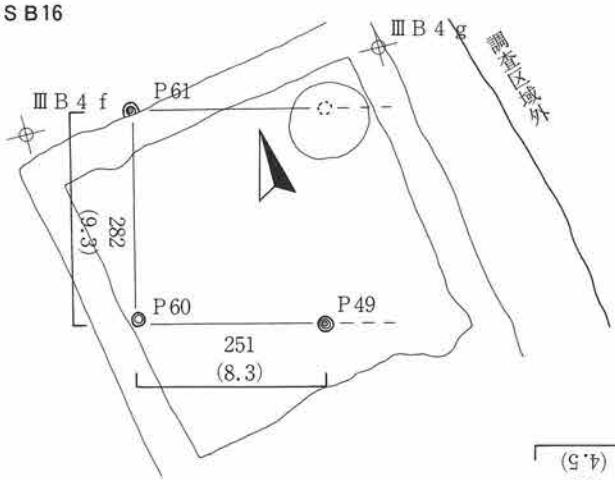
番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P 72	22.6	23.08
P 66	30.0	22.88
P224	12.8	22.97
P227b	14.4	22.72

74S B15



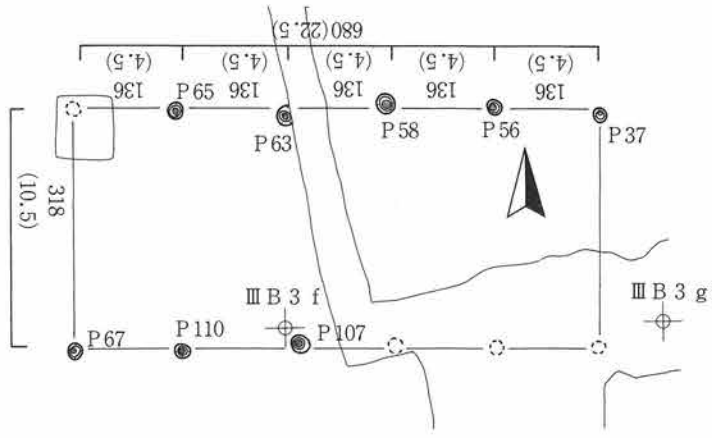
番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P230	37.2	23.30
P137	33.1	22.81
P143	22.4	22.76

74S B16



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P61	19.0	23.15
P60	14.0	23.18
P49	24.5	23.04

74S B17



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P65	16.5	23.16
P63	18.5	23.15
P58	12.0	23.19
P56	12.0	23.16
P37	17.0	23.12
P67	15.0	23.01
P110	25.9	22.94
P107	21.9	22.94

0 4 m

第57図　B地区の建物④（74S B14～17）

〔重複〕74ＳＢ12の柱穴Ｐ142と本建物の柱穴Ｐ143が重複するが本建物が古い。また74ＳＤ９、74ＳＢ３、74ＳＢ４、74ＳＢ５、74ＳＢ６、74ＳＢ９とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びると考えられ、全体のプランを検出できなかった。検出した辺の長さは570cmである。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕検出できた辺の軸方向はＮ－12°－Ｗである。

〔柱間寸法〕９尺４寸（約285cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ137から手づくねかわらけの細片が２片出土した。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。

〔年代〕不明であるが柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ16（第57図、写真図版31）

〔位置〕ⅢＢ３ｆに位置する。

〔重複〕74ＳＫ８と重複するがおそらく本建物が古い。また74ＳＫ11、74ＳＫ13、74ＳＢ１、74ＳＢ６、74ＳＢ17とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが撹乱部分、または調査区外に延びている可能性があり、プランを確定できない。検出した西辺は282cmで、南辺は251cmである。面積は検出した分で約2.1坪である。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕西辺の軸方向はＮ－14°－Ｅである。

〔柱間寸法〕西辺は９尺３寸（約282cm）、南辺は８尺３寸（約251cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ17（第57図、写真図版32）

〔位置〕ⅢＢ２ｆ、３ｆに位置する。

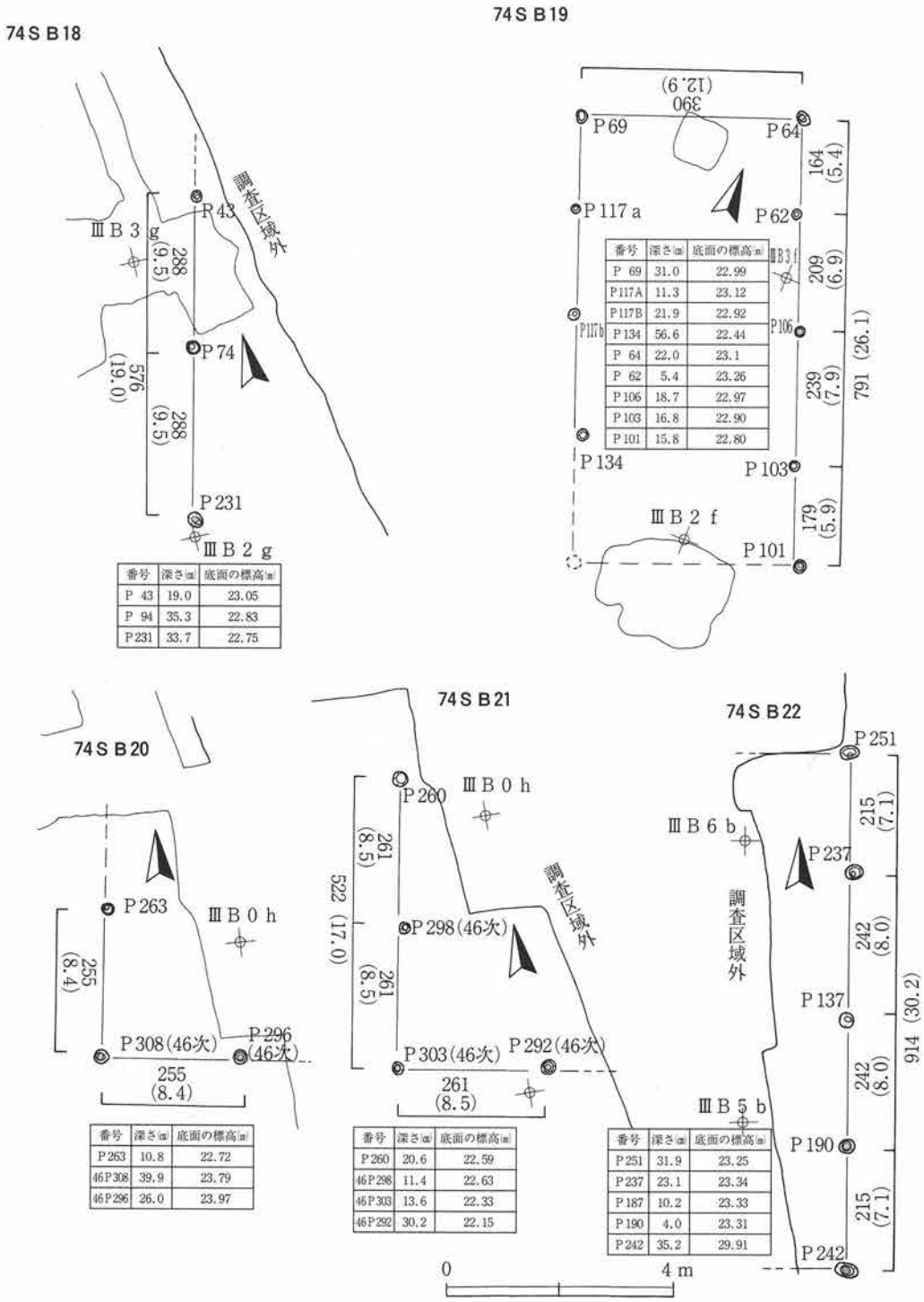
〔重複〕74ＳＫ10、74ＳＫ11、74ＳＫ12、74ＳＫ13、74ＳＫ15、74ＳＫ16、74ＳＫ17、74ＳＫ20、74ＳＫ21、74ＳＫ23、74ＳＢ１、74ＳＢ６、74ＳＢ16、74ＳＢ19とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は680cm、梁間は318cmである。面積は約6.9坪である。使用した柱穴は８個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はＮ－１°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では４尺５寸（約136cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ58から５片、Ｐ65から１片、Ｐ110から４片手づくねかわらけの細片が出土している。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 43	19.0	23.05
P 94	35.3	22.83
P231	33.7	22.75

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 69	31.0	22.99
P117A	11.3	23.12
P117B	21.9	22.92
P134	56.6	22.44
P 64	22.0	23.1
P 62	5.4	23.26
P106	18.7	22.97
P103	16.8	22.90
P101	15.8	22.80

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P263	10.8	22.72
46P308	39.9	23.79
46P296	26.0	23.97

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P260	20.6	22.59
46P298	11.4	22.63
46P303	13.6	22.33
46P292	30.2	22.15

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P251	31.9	23.25
P237	23.1	23.34
P187	10.2	23.33
P190	4.0	23.31
P242	35.2	29.91

第58図　B地区の建物⑤（74S B18～22）

〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明であるが柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀から中世にかけての所属の可能性が高い。

74ＳＢ18（第58図、写真図版32）
〔位置〕ⅢＢ２ｇ、３ｇに位置する。
〔重複〕本建物の柱穴Ｐ231と74ＳＤ10が重複するが本建物が新しい。また74ＳＢ４、74ＳＢ６、74ＳＢ９、74ＳＢ11とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びると考えられ、全体のプランを確定できなかった。検出した辺の長さは576cmである。使用した柱穴は３個である。
〔建物方位〕検出できた辺の軸方向はＮ－13°－Ｅである。
〔柱間寸法〕９尺５寸（約288cm）が使用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ19（第58図）
〔位置〕ⅢＢ２ｅ、３ｅに位置する。
〔重複〕74ＳＫ12、74ＳＫ14、74ＳＫ15、74ＳＫ16、74ＳＫ17、74ＳＫ20、74ＳＫ21、74ＳＫ27、74ＳＫ32、74ＳＢ２、74ＳＢ14、74ＳＢ17とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。南西隅の柱穴は意図して探したが検出できなかった。本来は存在していたものが何らかの原因で失われたものと考えたい。桁行は791cm、梁間は390cmである。面積は約9.3坪である。使用した柱穴は９個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－20°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では様々な寸法が用いられており基準寸法を見いだせない。
〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ106から手づくねかわらけの細片が２片出土した。
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明であるが柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀から中世にかけての所属の可能性が高い。

74ＳＢ20（第58図）
〔位置〕ⅡＢ９ｇ、ⅢＢ０ｇに位置する。
〔重複〕74ＳＢ13、74ＳＢ21とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが撹乱部分、または調査区外に延びており、プランを確定できない。検出した長さは西辺、南辺共に255cmである。面積は検出した分で約2.0坪である。使用した柱穴は３個であ

る。

〔建物方位〕西辺の軸方向はＮ－７°－Ｅである。

〔柱間寸法〕８尺４寸（約255cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ21（第58図）

〔位置〕ⅡＢ９ｇ、ⅢＢ０ｇに位置する。

〔重複〕74ＳＢ20とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外または撹乱部分に延びており、プランを確定できない。検出した長さは西辺で522cm、南辺で281cmである。面積は検出した分で約4.4坪である。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕西辺の軸方向はＮ－10°－Ｅである。

〔柱間寸法〕８尺５寸（約281cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ22（第58図）

〔位置〕ⅢＢ４ｂ、５ｂ、６ｂに位置する。

〔重複〕本建物の柱穴Ｐ187、Ｐ190、Ｐ242が74ＳＤ13と重複するが本建物が新しい。また74ＳＥ５、74ＳＢ23とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。建物のプランが調査区域外に延びるため全体のプランは検出できなかった。推測ではあるが、建物の規模が大きいことと、南側と北側１間分と、真中の２間の柱間寸法が異なることから、身舎２間×３間に四面の廂が付く「三間四面」のプランの可能性が高い。検出した辺の長さは914cmである。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕検出した辺の軸方向はＮ－１°－Ｅである。

〔柱間寸法〕南側と北側１間分では7尺1寸（約215cm）、真中の2間分では8尺寸（約242cm）を使用している。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ187から手づくねかわらけの細片が２片、Ｐ242からろくろかわらけの細片が２片出土した。

〔付属施設〕東側に本建物と平行する形で板塀の跡が検出されている。本建物に伴う板塀の可能性が高い。

〔建物の性格〕「三間四面」のプランであれば屋敷の中の中核的な建物と考えられる。

〔年代〕柱穴から手づくねかわらけの破片が出土しており12世紀後半以降の構築である。12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＢ23（第59図）

〔位置〕ⅢＢ６ｂに位置する。

〔重複〕74ＳＥ５、74ＳＤ16、74ＳＢ22とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。プランが調査区外に延びると考えられ、全体のプランを確定できなかった。Ｐ250の北の柱穴は意図して探したが検出できなかった。検出した長さは東辺が224cm、南辺が248cmである。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕東辺の軸方向はＮ－６°－Ｗである。

〔柱間寸法〕東辺では７尺４寸（約224cm）が、南辺では８尺２寸（約248cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ24（第59図）

〔位置〕ⅢＢ２ｂに位置する。

〔重複〕74ＳＢ25とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物と考えられる。プランが調査区外に延びると考えられ、全体のプランを確定できなかった。検出した長さは388cmである。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕検出した辺の軸方向はＮ－３°－Ｅである。

〔柱間寸法〕５尺３寸（約164cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74ＳＢ25（第59図）

〔位置〕ⅢＢ２ｂに位置する。

〔重複〕74ＳＢ24とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物と考えられる。プランが調査区外に延びると考えられ、全体のプランを確定できなかった。検出した長さは152cmである。使用した柱穴は２個である。

〔建物方位〕検出した辺の軸方向はＮ－３°－Ｅである。

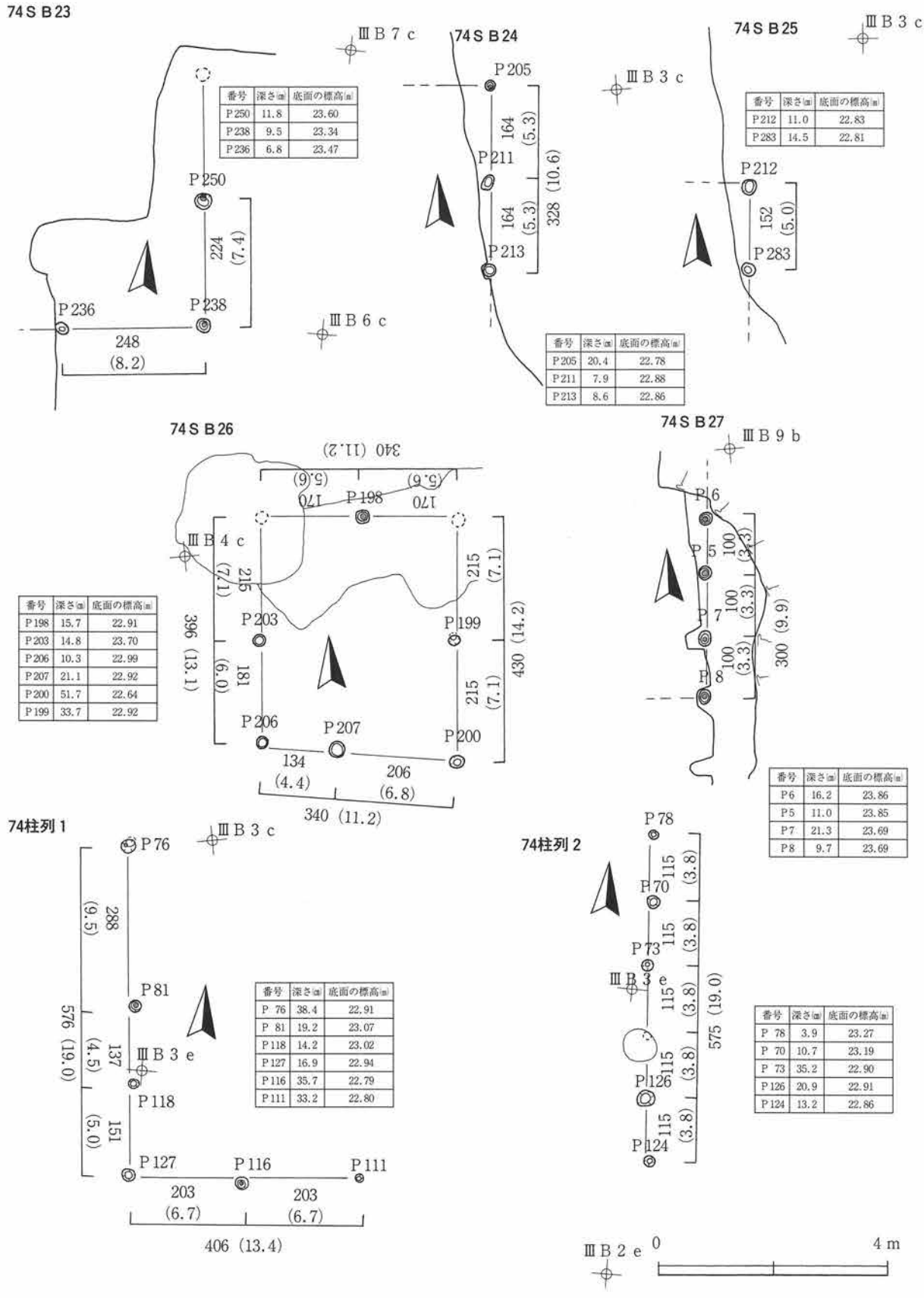
〔柱間寸法〕５尺（約152cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。



第59図　B地区の建物⑥（74SB23～27・柱列1、2）

74ＳＢ26（第59図）

〔位置〕ⅢＢ３ｃに位置する。

〔重複〕本建物は道路状遺構の路面上にあり、道路状遺構と重複することになる。前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。Ｐ206を使用することによってプランが台形を呈するが、他に適切な柱穴が見当らずこのプランを採用した。桁行は西辺で396cm、東辺で430cm、梁間は340cmである。面積は約4.1坪である。使用した柱穴は６個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－６°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では7尺1寸（約215cm）が多用されている。梁間では5尺6寸（約170cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。大きさから付属屋の可能性が高い。

〔年代〕不明である。道路状遺構と重複していることから、道路が構築される以前か、道路が廃絶した後の建物である。

74ＳＢ27（第59図、写真図版32）

〔位置〕ⅢＢ８ａに位置する。

〔重複〕なし

〔平面形式〕掘立柱建物と考えられる。プランが調査区外の西側に展開する可能性と、削平され遺構が検出できない東側に展開する可能性の双方が考えられ全体のプランを確定できなかった。検出した長さは300cmである。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕検出した辺の軸方向はＮ－５°－Ｅである。

〔柱間寸法〕３尺３寸（約100cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物の可能性が高い。

74柱列１（第59図）

〔位置〕ⅢＢ２ｄ、２ｅ、３ｄ、３ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＢ14、74ＳＢ19とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕建物として展開せず、また道路側溝である74ＳＤ４、74ＳＤ５とほぼ平行関係にあり、柱列と考えられる。プランは「Ｌ」字形になる。検出した長さは西辺で576cm、南辺で406cmである。使用した柱穴は６個である。

〔建物方位〕西辺の軸方向はＮ－5°－Ｗである。

〔柱間寸法〕西辺では９尺５寸（約288cm）、南辺では６尺７寸（約203cm）が使用されている。

〔出土遺物〕図示できないが、Ｐ111から手づくねかわらけの細片が22片出土した。これらの破片はあまり磨耗していない。

〔付属施設〕なし

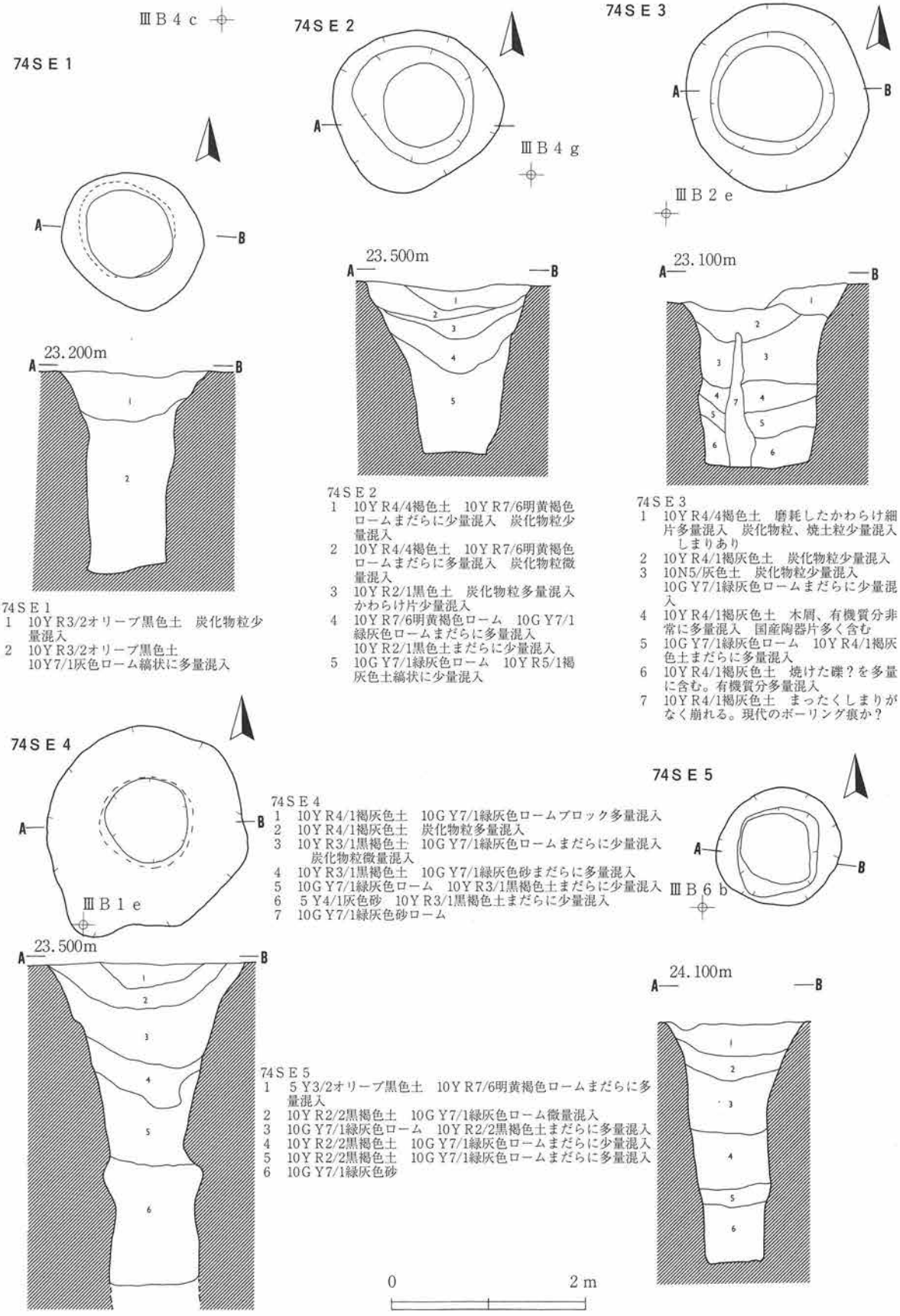
〔遺構の性格〕柵または塀と考えられる。
〔年代〕道路状遺構と同時存在の可能性が高い。そうであれば12世紀後半の所属と考えられる。

74柱列２（第59図）
〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。
〔重複〕74ＳＫ18とプランが重複するがおそらく本遺構が古い。また74ＳＢ14とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また本遺構のＰ124が74ＳＥ３と接するが前後関係を把握できなかった。
〔平面形式〕建物として展開せず、また道路側溝である74ＳＤ４、74ＳＤ５とほぼ平行関係にあり、柱列と考えられる。プランは真っすぐな形になる。検出した長さは西辺で575cmである。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕西辺の軸方向はＮ－４°－Ｗである。
〔柱間寸法〕西辺では３尺８寸（約115cm）が使用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔遺構の性格〕柵または塀と考えられる。
〔年代〕道路状遺構と同時存在の可能性が高い。そうであれば12世紀後半の所属と考えられる。

２　井戸

74ＳＥ１（第60図、写真図版32）
〔位置〕ⅢＢ３ｂに位置する。
〔重複〕66ＳＤ６と重複するが本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁の全体の断面形は漏斗状を呈する。
〔埋土〕２層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土から渥美産陶器甕（2349、2356）、中国産白磁碗（2407）が出土した。またかわらけの細片が少量出土した。
〔遺構の性格〕井戸と考えられる。
〔年代〕12世紀の道路側溝と考えられる74ＳＤ６より新しいことから、12世紀以後の年代の可能性が高い。

74ＳＥ２（第60図、写真図版32・33）
〔位置〕ⅢＢ３ｆ、４ｆに位置する。
〔重複〕74ＳＢ６とプランが重複するがおそらく本井戸が新しい。また74ＳＢ１とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなくて前後関係は不明である。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁の全体の断面形は漏斗状を呈する。
〔埋土〕５層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕２層から手づくねかわらけ（2132）、埋土から手づくねかわらけ（2163、2183）、常滑産陶器壺（2212）、常滑産陶器広口壺（2223）、猿投産陶器甕（2362）が出土した。



74SE1
1 10YR3/2オリーブ黒色土　炭化物粒少量混入
2 10YR3/2オリーブ黒色土
10Y7/1灰色ローム縞状に多量混入

74SE2
1 10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入　炭化物粒少量混入
2 10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入　炭化物粒微量混入
3 10YR2/1黒色土　炭化物粒多量混入　かわらけ片少量混入
4 10YR7/6明黄褐色ローム　10GY7/1緑灰色ロームまだらに多量混入
10YR2/1黒色土まだらに少量混入
5 10GY7/1緑灰色ローム　10YR5/1褐灰色土縞状に少量混入

74SE3
1 10YR4/4褐色土　磨耗したかわらけ細片多量混入　炭化物粒、焼土粒少量混入　しまりあり
2 10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入
3 10N5/灰色土　炭化物粒少量混入
10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入
4 10YR4/1褐灰色土　木屑、有機質分非常に多量混入　国産陶器片多く含む
5 10GY7/1緑灰色ローム　10YR4/1褐灰色土まだらに多量混入
6 10YR4/1褐灰色土　焼けた礫？を多量に含む。有機質分多量混入
7 10YR4/1褐灰色土　まったくしまりがなく崩れる。現代のボーリング痕か？

74SE4
1 10YR4/1褐灰色土　10GY7/1緑灰色ロームブロック多量混入
2 10YR4/1褐灰色土　炭化物粒多量混入
3 10YR3/1黒褐色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入　炭化物粒微量混入
4 10YR3/1黒褐色土　10GY7/1緑灰色砂まだらに多量混入
5 10GY7/1緑灰色ローム　10YR3/1黒褐色土まだらに少量混入
6 5Y4/1灰色砂　10YR3/1黒褐色土まだらに少量混入
7 10GY7/1緑灰色砂ローム

74SE5
1 5Y3/2オリーブ黒色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
2 10YR2/2黒褐色土　10GY7/1緑灰色ローム微量混入
3 10GY7/1緑灰色ローム　10YR2/2黒褐色土まだらに多量混入
4 10YR2/2黒褐色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入
5 10YR2/2黒褐色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに多量混入
6 10GY7/1緑灰色砂

第60図　B地区の井戸①（74SE1～5）

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

74ＳＥ３（第60図、写真図版33）
〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。
〔重複〕74ＳＢ14とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁の全体の断面形は漏斗状を呈する。
〔埋土〕６層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕１層からかわらけ質の大型のロクロ製品（2200）、常滑産陶器甕（2278）、中国産白磁壺（2409、2411）、３層から手づくねかわらけ（2108、2109、2111、2159、2175）、ロクロかわらけ（2194）、４層から手づくねかわらけ（2137、2150、2177）、５層から手づくねかわらけ（2147、2172、2179）、埋土上部から渥美産陶器甕（2330）、底面から曲物の側板？（2527）、４層の上面から黒漆塗りの木製品の破片（2573）が出土した。
また底部から口縁部まで接合した常滑産甕（2231）は、破片がばらばらの状態で１～６層にわたって出土した。これと同一個体で接合しなかった破片2232は６層、2233は３層、2234は１層から出土した。またこれとは別に常滑産陶器甕で同一個体の2235～2239、2241は１～６層からばらばらの状態で出土した。
〔遺構の性格〕井戸と考えられる。
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＥ４（第60図、写真図版33・34）
〔位置〕ⅢＢ１ｄ、１ｅに位置する。
〔重複〕なし。
〔底面、壁〕崩落の危険があり底面まで完掘していない。壁の全体の断面形は漏斗状を呈する。下半部で壁が入り込む部分があるが、これは崩落によるものと考えられる。
〔埋土〕６層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土から遺物が出土している。以下列挙する。須恵器甕？（2001）、須恵器大甕片（2014、2015）、手づくねかわらけ（2127、2149）、ロクロかわらけ（2193）、常滑産陶器甕（2242）、渥美産陶器甕（2328、2331）である。
〔遺構の性格〕井戸と考えられる。
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＥ５（第60図、写真図版34）
〔位置〕ⅢＢ６ｂに位置する。
〔重複〕74ＳＢ22、74ＳＢ23とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁の全体の断面形は漏斗状を呈する。
〔埋土〕２層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土からロクロかわらけ（2195）が出土した。
〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

3　土坑

66ＳＫ３（第61図、写真図版34）

〔位置〕ⅢＢ９ｂに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立つ。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土から柱状高台のかわらけ（2199）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＫ４（第61図、写真図版34）

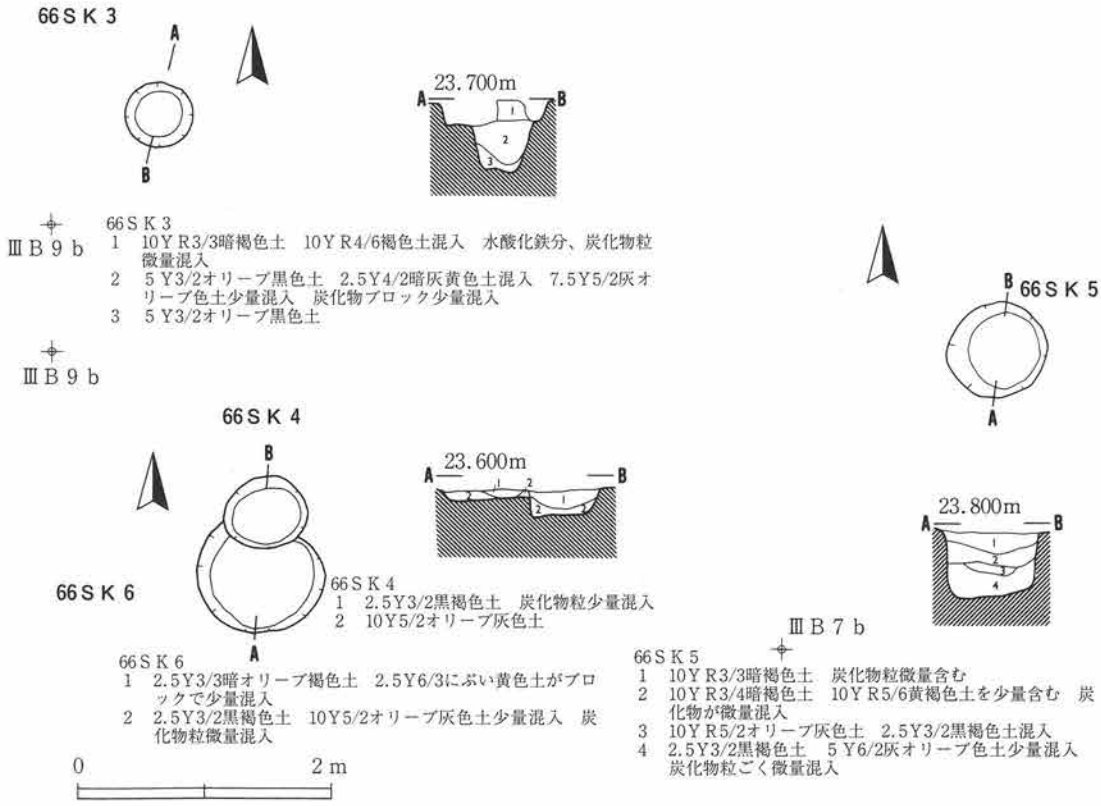
〔位置〕ⅢＢ８ｂに位置する。

〔重複〕66ＳＫ６と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし



第61図　Ｂ地区の土坑①（66ＳＫ３～６）

〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＫ５（第61図、写真図版35）
〔位置〕ⅢＢ７ｂに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＫ６（第61図、写真図版34）
〔位置〕ⅢＢ８ｂに位置する。
〔重複〕66ＳＫ４と重複するが本遺構が古い。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ１（第65図、写真図版35）
〔位置〕ⅢＢ５ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は平らで、壁は垂直に立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕磨耗した土師器？の細片が１片出土したのみである。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ２（第62図、写真図版35）
〔位置〕ⅢＢ４ｅに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕磨耗したかわらけの細片が１片出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ３（第62図、写真図版35）

〔位置〕ⅢＢ４ｅに位置する。

〔重複〕Ｐ21と重複するが本土坑が古い。

〔底面、壁〕底面は平らで、壁は垂直に立つ。

〔埋土〕５層に分けられる。自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土から常滑産陶器甕片（2245、2301）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ４（第62図、写真図版36）

〔位置〕ⅢＢ４ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕手づくねかわらけ（2158）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ５（第62図、写真図版36）

〔位置〕ⅢＢ４ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕かわらけ片が少量出土した。図示できるものはない。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ６（第62図、写真図版36）

〔位置〕ⅢＢ４ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。また壁の一部が焼けている。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

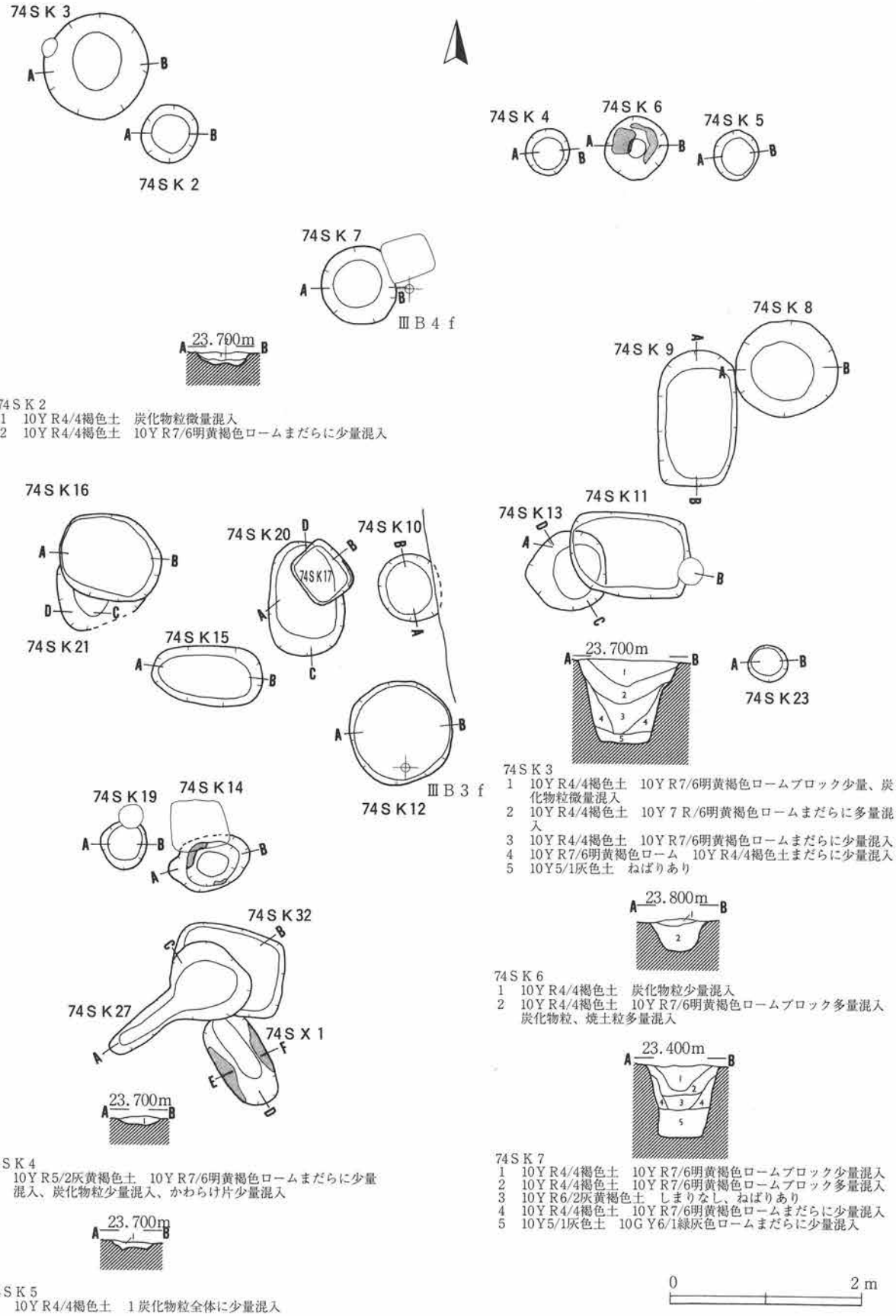
〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（2172）、常滑産陶器甕（2303）が出土した。

〔遺構の性格〕不明であるが、内部で火を焚いた痕跡がある。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ７（第62図、写真図版36）

〔位置〕ⅢＢ３ｅ、３ｆに位置する。



74SK 2
1　10YR4/4褐色土　炭化物粒微量混入
2　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

74SK 3
1　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量、炭化物粒微量混入
2　10YR4/4褐色土　10Y7R/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
3　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入
4　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR4/4褐色土まだらに少量混入
5　10Y5/1灰色土　ねばりあり

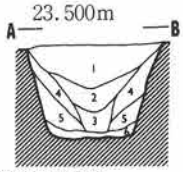
74SK 4
1　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入、炭化物粒少量混入、かわらけ片少量混入

74SK 5
1　10YR4/4褐色土　1炭化物粒全体に少量混入

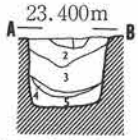
74SK 6
1　10YR4/4褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック多量混入　炭化物粒、焼土粒多量混入

74SK 7
1　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入
2　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック多量混入
3　10YR6/2灰黄褐色土　しまりなし、ねばりあり
4　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入
5　10Y5/1灰色土　10GY6/1緑灰色ロームまだらに少量混入

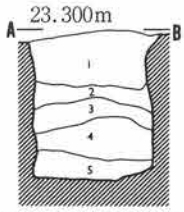
第62図　B地区の土坑②（74SK 2～17・19～21・23・27・32・74SX 1）



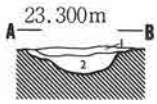
74SK8
1　10YR4/4褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR4/4褐色土　炭化物まだらに多量混入
3　10YR5/2灰黄褐色土　炭化物まだらに多量混入
4　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
5　7.5GY7/1明緑灰色ローム　10YR5/2灰黄褐色土まだらに少量混入しまりなし



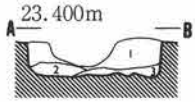
74SK10
1　10YR4/4褐色土　焼土、炭化物粒多量混入
2　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入
3　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック多量混入
4　10YR1.7/1黒色炭化物層土
5　10Y7/4にぶい黄褐色砂層　10YR4/4褐色土まだらに少量混入



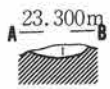
74SK12
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック、炭化物粒に少量混入
2　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR4/3黄褐色土まだら状に少量混入
3　10YR4/1褐灰色土　5Y7/4浅黄色ロームまだら状に多量混入
4　10YR4/1褐灰色土　10GY7/1明緑灰色ロームまだら状に少量混入
5　10YR5/1褐灰色土　炭化物粒、種子、木片など多量に混入しまりなし



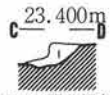
74SK14
1　10YRにぶい4/3黄褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YRにぶい4/3黄褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入　10YR7/6明黄褐色ロームブロック多量混入



74SK16
1　10YR5/2灰黄褐色土　焼けた壁土、炭化物粒多量混入　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
2　10YR5/6黄褐色ローム　10YR5/2灰黄褐色まだらに少量混入
3　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR5/2灰黄褐色まだらに少量混入

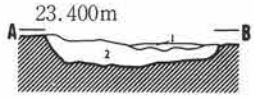


74SK19
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　炭化物粒少量、10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

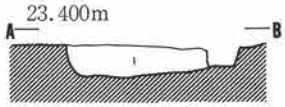


74SK21
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

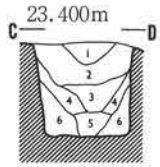
0　2m



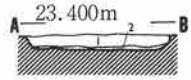
74SK9
1　7.5Y5/1灰色砂
2　2.5Y7/6明黄褐色ローム　10YR4／4褐色土まだらに多量混入　焼けた壁土、炭化物粒多量に混入



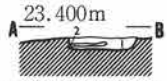
74SK11
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入



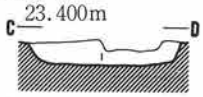
74SK13
1　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ローム縞状に少量混入
2　10YR4/4褐色土　炭化物粒少量混入
3　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
4　10YR5/1褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入
5　10Y6/1褐灰色土　しまりなし
6　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR5/1褐灰色土まだらに少量混入



74SK15
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入
2　10YR7/6明黄褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色土まだらに少量混入

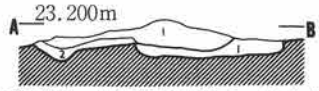


74SK17
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
2　10YR1.7/1黒色炭化物層



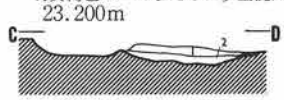
74SK20
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入

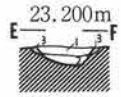
74SK23
1　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入



74SK27
1　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　かわらけ片非常に多量に混入
2　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　かわらけ片少量混入

74SK32
1　10YR5/2灰黄褐色土　焼土粒、炭化物粒多量混入　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入





74SX1
1　10YR2/3暗褐色土　5YR7/8橙色焼土ブロック多量混入炭化物粒多量、かわらけ片多量混入
2　10YR3/3暗褐色土　5YR7/8橙色焼土粒多量混入
3　5YR7/8橙色焼土　地山が熱変化したもの

第63図　B地区の土坑③（74SK8～17・19～21・23・27・32、74SX1）

〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕５層に分けられる。５層は人為堆積、それより上の１～４層は自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕かわらけ片が少量出土した。図示できるものはない。
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ８（第62図、写真図版37）
〔位置〕ⅢＢ３ｆに位置する。
〔重複〕74ＳＫ９と重複するが、接する部分があまりに僅かで前後関係を判断できない。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕６層に分けられる。６層は人為堆積、それより上の１～５層は自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕３層から手づくねかわらけ（2170）、埋土から常滑産甕（2304）が出土した。
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ９（第62図、写真図版37）
〔位置〕ⅢＢ３ｆに位置する。
〔重複〕74ＳＫ８と重複するが、接する部分があまりに僅かで前後関係を判断できない。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。全体に焼けた壁土、炭化物粒を多量に混入している。
〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（2141）、底面から手づくねかわらけ（2165、2171）、埋土中から常滑産甕片（2243）、須恵器系陶器壺（2387）、また焼けた壁土片が９号ビニール袋に２つ分出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ10（第62図、写真図版37）
〔位置〕ⅢＢ３ｅ、３ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕５層に分けられる。５層は人為堆積と考えられる。、それより上の１～４層は自然堆積の可能性が考えられる。４層は炭化物の層である。
〔出土遺物〕埋土から渥美産陶器甕（2313）が出土した。
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ11（第62図、写真図版38）

〔位置〕ⅢＢ３ｆに位置する。

〔重複〕74ＳＫ13、柱穴Ｐ57と重複するが、本遺構が新しい。また柱穴Ｐ51と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土からロクロかわらけ（2197）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ12（第62図、写真図版38）

〔位置〕ⅢＢ２ｅ、２ｆ、３ｅ、３ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕５層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。５層は有機質分の多い種子混じりの土である。

〔出土遺物〕埋土から古代の須恵器大甕片（2012）が出土した。５層から「チュウ木」と考えられる板状の木が多数出土した。図示したのは（2501～2571）である。樹種は2501～2505、2510、2519、2521、2525がスギ、2506～2509、2511～2518、2520、2522～2524、2526～2530がアスナロである。2531～2571の樹種は同定をおこなっていない。

〔遺構の性格〕形状と埋土から平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ13（第62図、写真図版38）

〔位置〕ⅢＢ３ｆに位置する。

〔重複〕74ＳＫ11と重複するが本土坑が古い。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕６層に分けられる。全体に自然堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（2124、2168）が出土した。

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ14（第62図、写真図版39）

〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。また壁の一部が焼けている。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（2169）が出土した。

〔遺構の性格〕不明であるが、内部で火を焚いた痕跡がある。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ15（第62図、写真図版39）

〔位置〕ⅢＢ３ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁は斜めに立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕２層中から手づくねかわらけ（2101、2181）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ16（第62図、写真図版39）

〔位置〕ⅢＢ３ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＫ21と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕３層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。１層は焼けた壁土が多量に混入する。

〔出土遺物〕焼けた壁土が多量に出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ17（第62図、写真図版39・40）

〔位置〕ⅢＢ３ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＫ20と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ18（第65図、写真図版39・40）

〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ19（第62図、写真図版40）

〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。

〔重複〕柱穴Ｐ66と重複するが本土坑が古い。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕かわらけ片が微量に出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ20（第62図、写真図版40）

〔位置〕ⅢＢ３ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＫ17と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（2114、2139、2143）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ21（第62図、写真図版39）

〔位置〕ⅢＢ３ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＫ16と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ22（第64図、写真図版40・41）

〔位置〕ⅢＢ１ｆに位置する。

〔重複〕溝と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕５層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。４層は有機質分の多い種子混じりの土である。

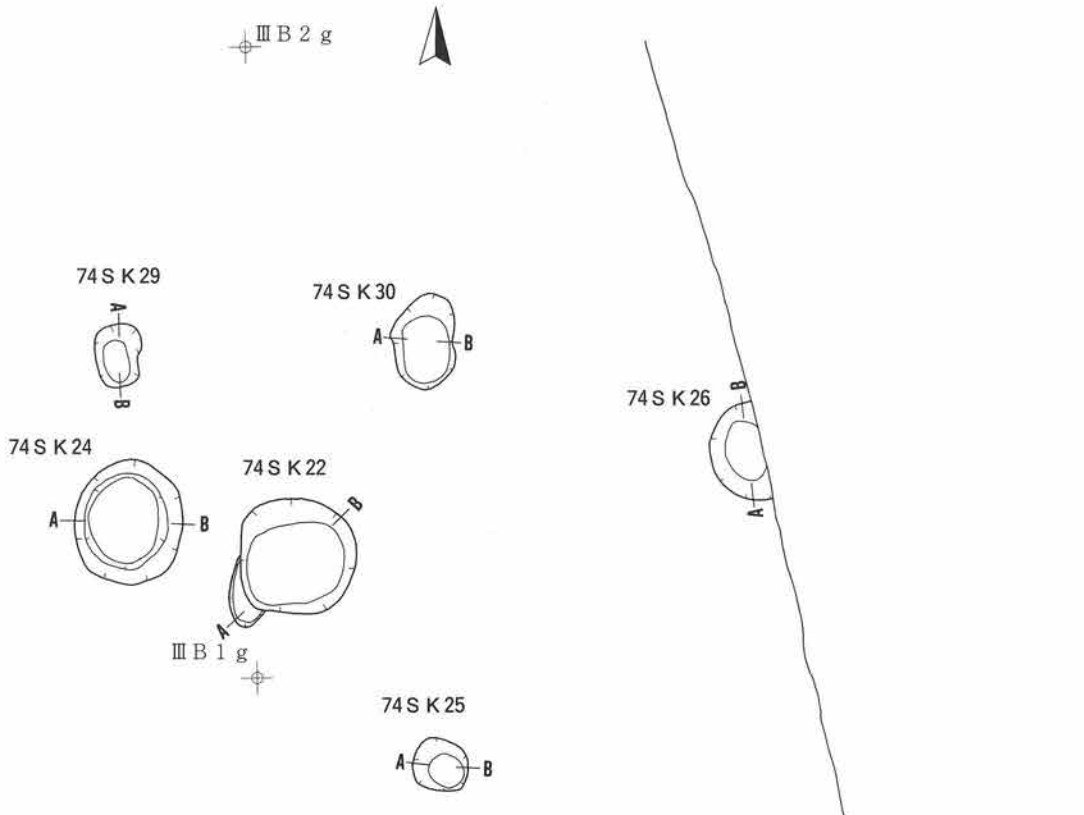
〔出土遺物〕埋土の上部からかわらけ細片が少量出土した。

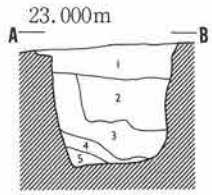
〔遺構の性格〕形状と埋土から、平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

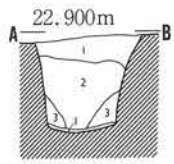
74ＳＫ23（第62図、写真図版41）

〔位置〕ⅢＢ３ｆに位置する。

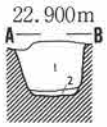




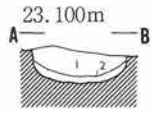
74SK22
1　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入　炭化物粒少量混入
2　10YR4/1褐灰色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入
3　10GY7/1緑灰色ローム　10YR4/1褐灰色土まだらに少量混入
4　10YR4/1褐灰色土　炭化物、種子多量混入　しまりなし
5　10GY7/1緑灰色ローム　10YR4/1褐灰色土まだらに少量混入



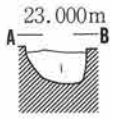
74SK24
1　10YR4/4褐色土　炭化物粒微量混入
2　10YR4/1褐灰色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに多量混入　炭化物粒微量混入
3　10GY7/1緑灰色ローム　10YR4/1褐灰色土まだらに少量混入
4　10YR5/1褐灰色土　炭化物多量混入　ねばりあり



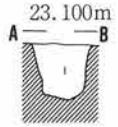
74SK25
1　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック多量混入
2　10YR5/1褐灰色土　ねばりあり



74SK26
1　10YR3/4暗褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入
2　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR3/4暗褐色土まだらに少量混入



74SK29
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入



74SK30
1　5Y4/1灰色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに多量混入

第64図　B地区の土坑④（74SK22・24～26・29・30）

〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕かわらけの微細な破片が微量に出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ24（第64図、写真図版41）
〔位置〕ⅢＢ１ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕４層に分けられる。最下部の４層以外は自然堆積の可能性が考えられる。
〔出土遺物〕かわらけ片が微量に出土した。
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ25（第64図、写真図版41）
〔位置〕ⅢＢ１ｇに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕かわらけ片が微量に出土した。
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ26（第64図、写真図版41）
〔位置〕ⅢＢ１ｇに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

74ＳＫ27（第62図、写真図版42）
〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＫ32と74ＳＸ１と重複するが本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積である。１層は非常に多量の磨耗したかわらけ片が含まれている。
〔出土遺物〕多数のかわらけ片が出土した。図示したのは手づくねかわらけ（2112、2113、2116、2117、2119、2120、2121、2123、2128　2130、2136、2146、2152、2153、2156、2173、2174、2176）である。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高いが、かわらけ片が磨耗していることからそれ以降の可能性も考えられる。

74ＳＫ28（第65図、写真図版42）
〔位置〕ⅢＢ０ｅに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

74ＳＫ29（第64図、写真図版42）
〔位置〕ⅢＢ１ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

74ＳＫ30（第64図、写真図版42）
〔位置〕ⅢＢ１ｇに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕木の根、樹皮？が出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕近世以降の所属の可能性が高い。

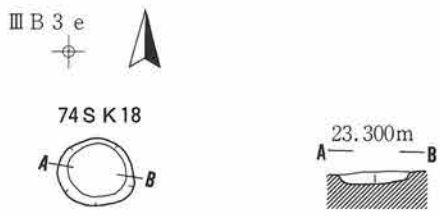
74ＳＫ31（第65図、写真図版43）
〔位置〕ⅢＢ４ｂに位置する。

〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。底面にグライ化した隅丸方形のプランがある。
〔埋土〕５層に分けられる。本土坑は桶または曲物を埋設した遺構と思われる。１～４層は埋設物が変化した、または抜き取った後に堆積した土と思われる。これらの層はしまりがない。５層は埋設物を埋めた土と考えられる。
〔出土遺物〕埋土から渥美産陶器甕（2316、2319）、中国産白磁碗（2408）が出土した。
〔遺構の性格〕桶または曲物を埋設した遺構と考えられる。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

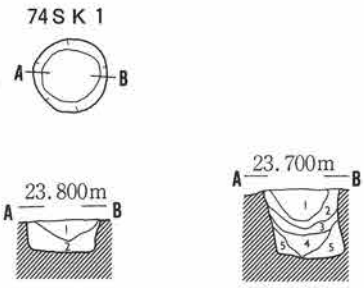
74ＳＫ32（第62図、写真図版43）
〔位置〕ⅢＢ１ｅに位置する。
〔重複〕74ＳＫ９と重複するが本土坑が新しい。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕底面から手づくねかわらけ（2154）が出土している。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

74ＳＫ33（第65図、写真図版43）
〔位置〕ⅢＢ１ｅに位置する。
〔重複〕74ＳＤ９、74ＳＤ11と重複するが本土坑が新しい。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ2102、2107、2110、2118、2135、2138、2142、2144、2157、2160、2161、2164、2185、2186が出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

74ＳＫ34（第65図、写真図版43）
〔位置〕ⅢＢ１ｄに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は不整で凹凸があり、壁面はなだらかに立つ。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積と思われる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕人為的なものではなく、自然の撹乱などの可能性がある。
〔年代〕不明である。

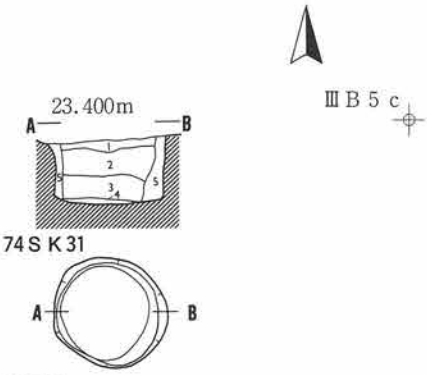


74SK18
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　炭化物粒微量混入

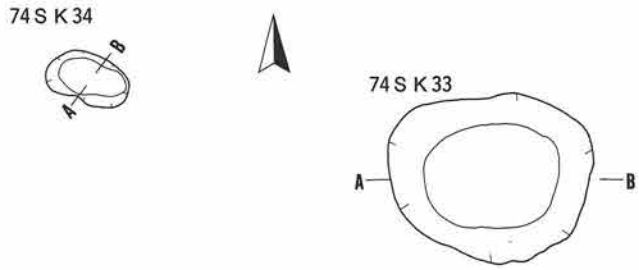


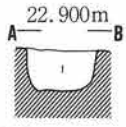
74SK1
1　10YR3/2黒褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック多量混入
2　10YR4/4褐色土　10YR7/6明黄褐色ローム多量混入

74SK37
1　10YR3/4暗褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入　炭化物粒多量混入
2　10YR6/1褐灰色土　10YR4/3暗褐色土まだらに少量混入
3　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ローム少量混入　炭化物粒多量混入
4　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ローム多量混入　炭化物粒多量混入
5　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR4/1褐灰色土まだらに少量混入

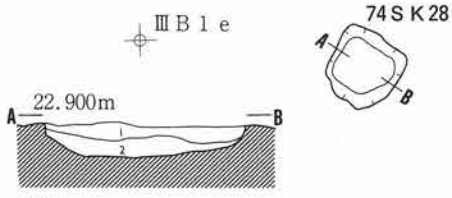


74SK31
1　10YR4/2灰黄褐色土　炭化物粒多量混入
2　10YR4/1褐灰色土　10YR7/1灰白色ローム粒少量混入　炭化物粒微量混入
3　10YR5/1褐灰色土　炭化物多量混入　10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入　しまりなし
4　10GY7/1緑灰色ローム　10YR5/1褐灰色土まだらに少量混入
5　10YR7/1灰白色ローム　10YR4/2灰黄褐色土まだらに多量混入

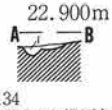




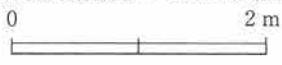
74SK28
1　5Y2/1黒色土　炭化物粒微量混入　10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入



74SK33
1　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒多量混入　かわらけ細片多量混入
2　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入



74SK34
1　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに微量混入　しまりあり



第65図　B地区の土坑⑤（74SK1・18・28・31・33・34・37）

74ＳＫ35（第66図、写真図版43）

〔位置〕ⅢＢ３ｂに位置する。

〔重複〕74ＳＫ36と重複するが本土坑が新しい。

〔底面、壁〕底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕埋土から常滑産陶器甕（2266）が出土している。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀の所属である。

74ＳＫ36（第66図、写真図版44）

〔位置〕ⅢＢ３ｂに位置する。

〔重複〕74ＳＫ36と重複するが本土坑が古い。また溝状の部分が道路側溝である74ＳＤ６と接するが前後関係を判断しかねた。同時存在の可能性が考えられる。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。また溝状部分の断面形はＵ字形である。

〔埋土〕土坑部分は３層に、溝状部分は１層に分けられる。人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（2162）、ロクロかわらけ（2190～2192）が出土している。

〔遺構の性格〕不明であるが、道路側溝74ＳＤ６と同時存在であれば、本土坑から道路側溝に水が流れるしくみになっている。

〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

74ＳＫ37（第65図、写真図版44）

〔位置〕ⅢＢ６ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕５層に分けられる。全体に自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多くみられる「トイレ状土坑」に似る。だが埋土が「トイレ状土坑」特有の有機質分の多い埋土とは異なっている。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

74ＳＫ38（第66図、写真図版44）

〔位置〕ⅢＢ６ｄに位置する。

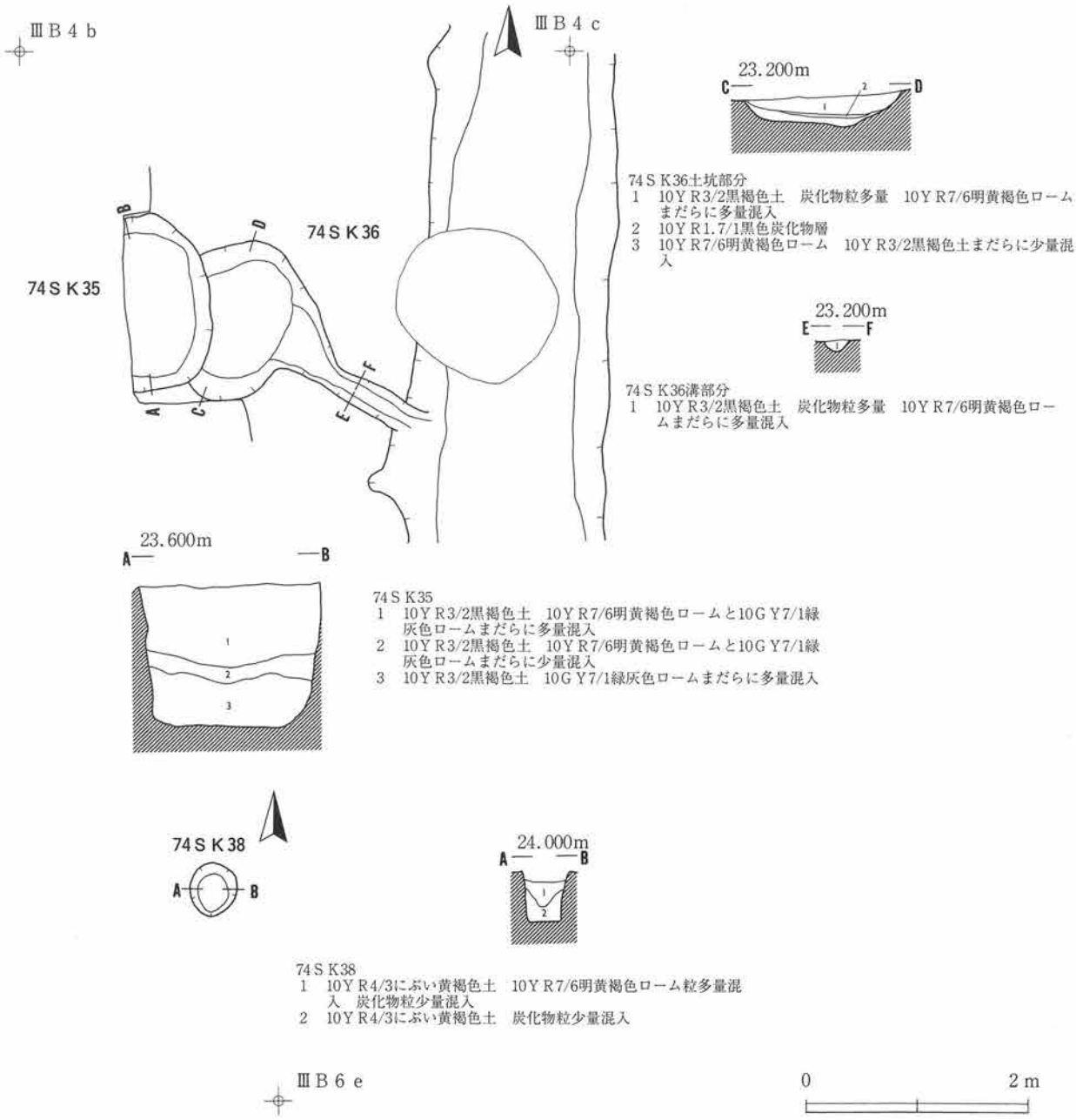
〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕大型の柱穴に形状が似るが、柱痕が認められず、また他に組み合わせになる柱穴が存在せず柱穴ではなく土坑とした。性格は不明である。



第66図　B地区の土坑⑥（74SK35・36・38）

〔年代〕不明である。

4　焼土遺構

74SX1（第62図、写真図版44）

〔位置〕ⅢB2eに位置する。

〔重複〕74SK27と重複するが本遺構が古い。また74SK32と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。壁面の長軸を挟んで両側の壁面が三角

形の範囲で焼けている。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。また壁面が焼けて熱変化した層がある。

〔出土遺物〕なし

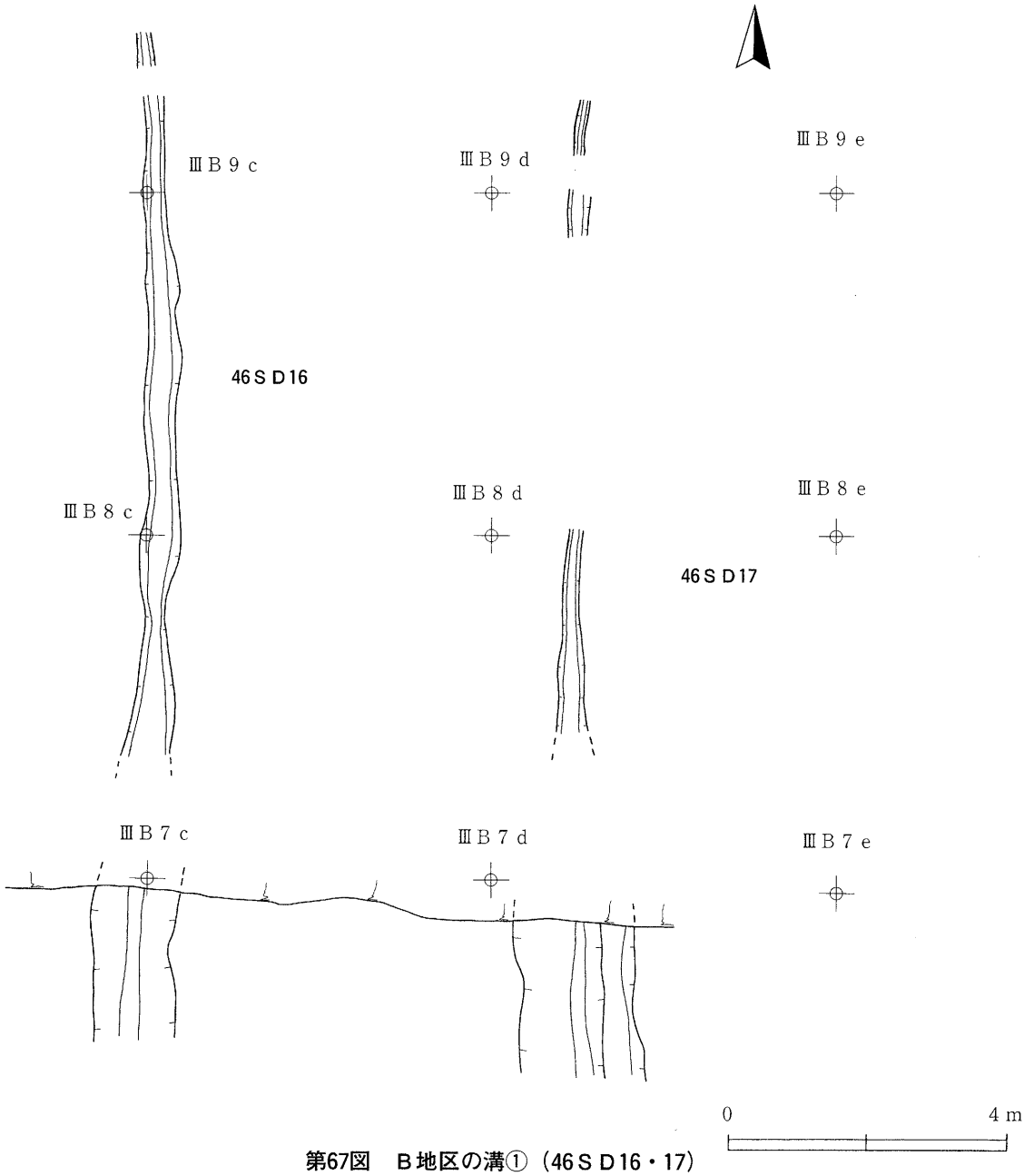
〔遺構の性格〕不明であるが内部で火を焚いた痕跡がある。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

5　溝

46ＳＤ16（Ｂ地区分）(第67図、写真図版51)

46ＳＤ16はＢ地区からＣ地区にかけて存在する。ここではＢ地区部分について記す。



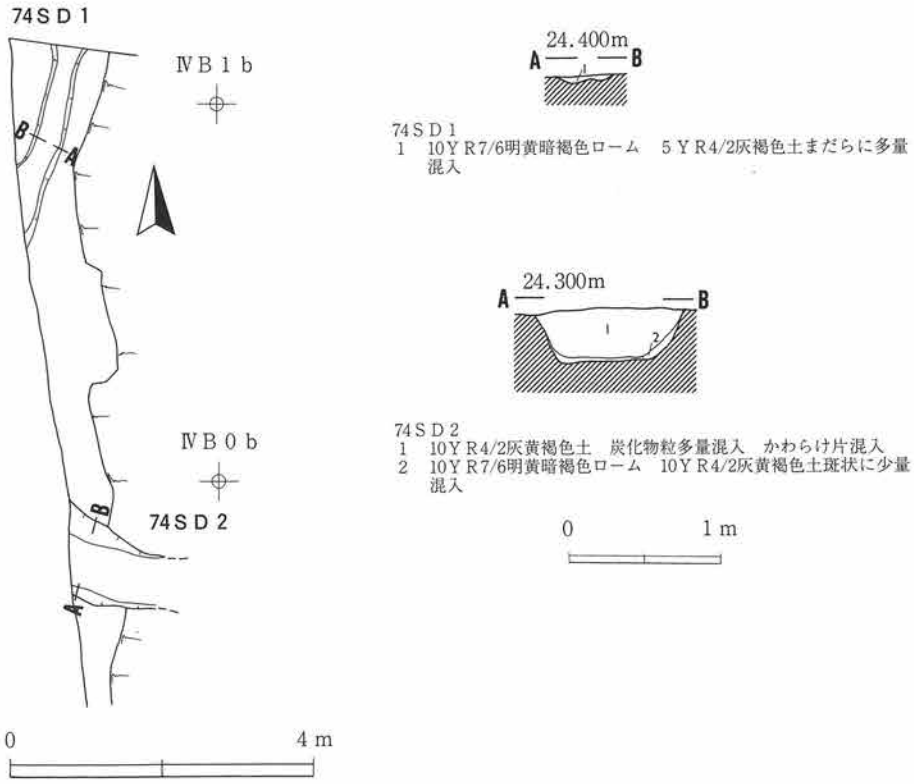
第67図　Ｂ地区の溝①（46ＳＤ16・17）

〔位置〕ⅢＢ７ｃ、８ｃ、９ｃに位置する。
〔重複〕なし
〔平面形式〕上場がやや蛇行するが全体的にはほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。本溝が検出された付近は著しく削平されていた。本溝も本来はもっと幅が広くしっかりしたものが、削平の結果、検出されたような細いプランになったと考えられる。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の西側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ17（Ｂ地区分）(第67図、写真図版51)
46ＳＤ17はＢ地区からＣ地区にかけて存在する。ここではＢ地区部分について記す。
〔位置〕ⅢＢ７ｄ、８ｄ、９ｄに位置する。
〔重複〕なし
〔平面形式〕削平のため、三箇所に切れ切れになっているが、本来はつながったプランである。全体的にはほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の東側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

74ＳＤ１（第68図、写真図版45)
〔位置〕ⅣＢ０ａに位置する。
〔重複〕なし
〔平面形式〕やや弓なりになっている。底面の傾斜方向は北から南で、北側が南側より底面の標高が高い。
本溝は調査区域外の南にさらに延びている。また北側にも続いていたと考えられるが、現道により壊されたと考えられる。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

74ＳＤ２（第68図、写真図版45)
〔位置〕ⅢＢ９ａに位置する。
〔重複〕なし
〔平面形式〕ほぼ真っすぐと考えられるが、検出した長さが短く全体の形状を把握できない。調査区域外の西側にさらに続き、東側に延びていたものが、削平により失われたと考えられる。底面の傾斜方向は明瞭でない。



第68図　Ｂ地区の溝②（74ＳＤ１・２）

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（2151）が出土した。

〔溝の性格〕不明であるが、割合に規模が大きく、都市、屋敷を区画する区画溝の可能性もある。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＤ３（第72図、写真図版45・46）

〔位置〕ⅢＢ５ｄ、５ｅ、５ｆに位置する。

〔重複〕道路側溝である74ＳＤ４と接するが、同時存在と考えられる。

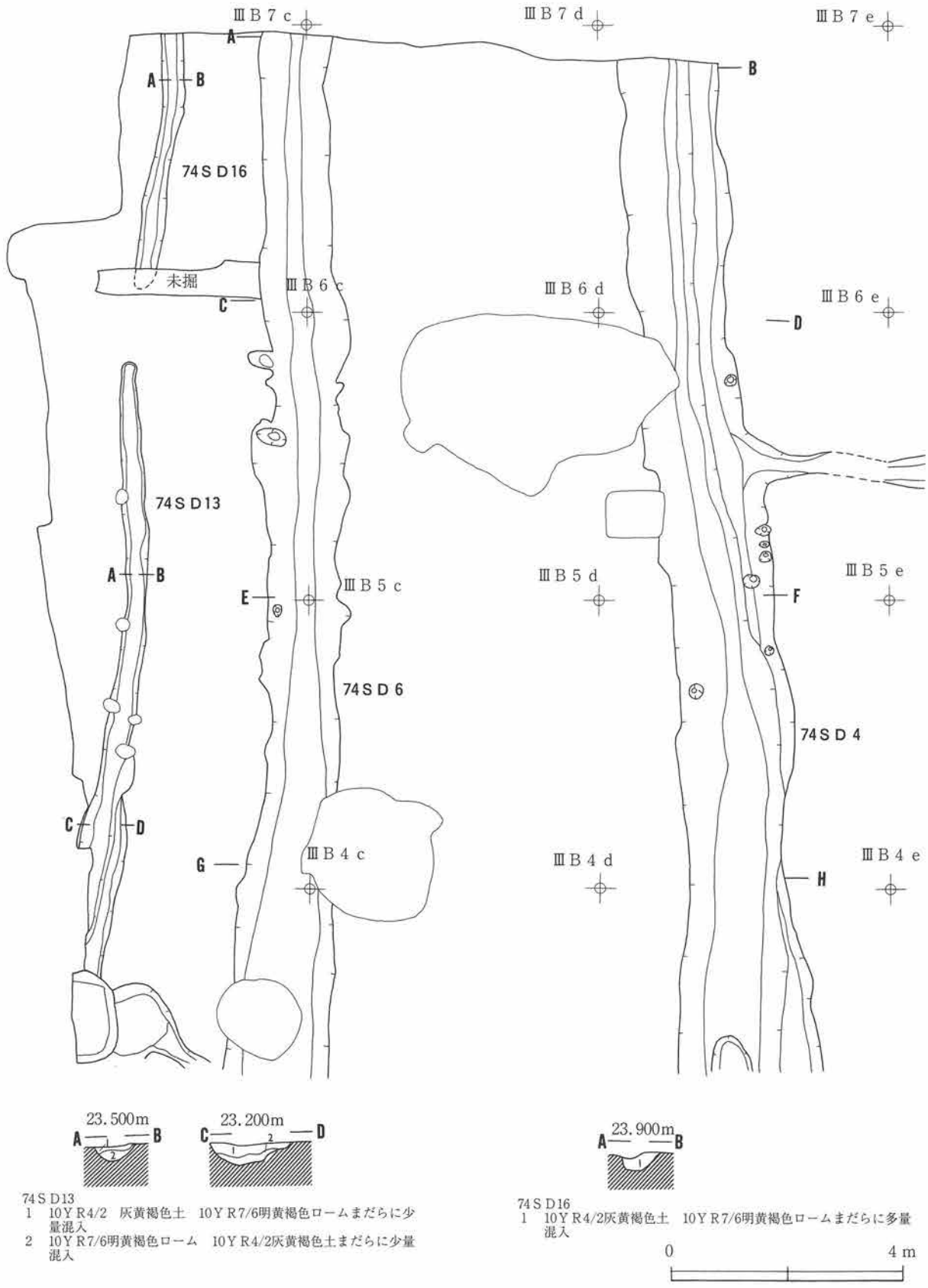
〔平面形式〕ほぼ真っすぐである。74ＳＤ４と接する部分はやや広がる。また調査区域外の東側にさらに続いていたが、現道（国道４号）により削平され失われたと考えられる。底面の傾斜方向は全体的には東側が高く、西側が低いが明瞭でない。一定以上の水位になれば、水は74ＳＤ４に注ぐと思われる。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積と考えられる。

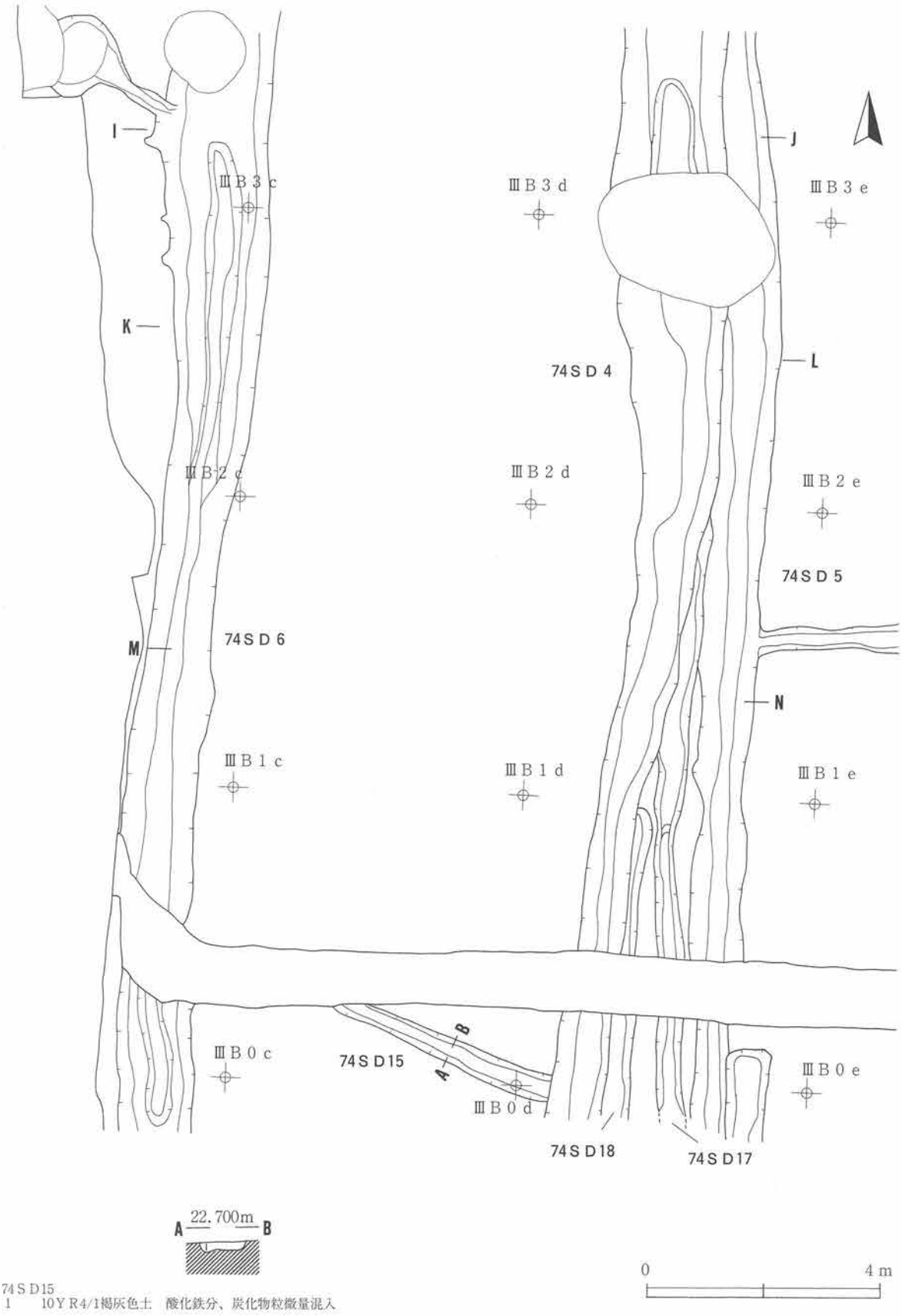
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（2125、2126、2167、2178、）、常滑産陶器甕（2297、2305）、中国産白磁碗（2403）が出土した。

〔溝の性格〕都市、屋敷を区画する区画溝の可能性が考えられる。この溝の東側の同一線上にあたる部分の調査（泉屋13次調査、泉屋16次調査）で溝が検出されており、本溝が連続している可能性が考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。



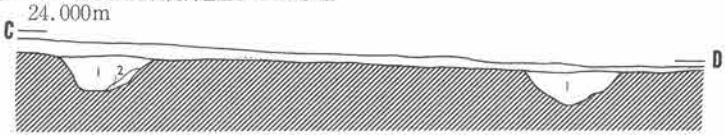
第69図　B地区の溝③（74SD4・6・13・16）



第70図　B地区の溝④（74SD4・5・6・15・17・18）

74SD6　A－B
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入
2　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR4/2灰黄褐色土まだらに少量混入

74SD4　A－B
1　10YR4/2灰黄褐色土　炭化物粒少量混入

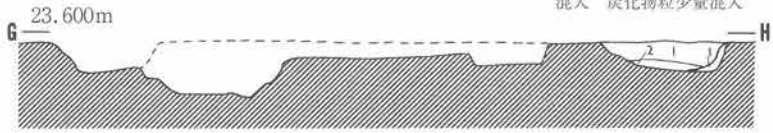


74SD6　C－D
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入
2　10YR7/6明黄褐色ローム　10YR4/2灰黄褐色土まだらに少量混入

74SD4　C－D
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入　炭化物粒少量混入

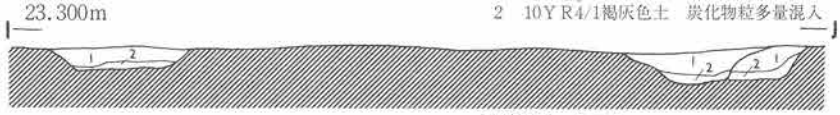
74SD6　E－F
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入　炭化物粒少量混入

74SD4　E－F
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入　炭化物粒少量混入



74SD5　G－H
1　10YR7/6明黄褐灰色ローム　10YR4/1褐灰色土まだらに少量混入

74SD4　G－H
1　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　酸化鉄分全体に染みている。
2　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒多量混入



74SD6　I－J
1　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　全体に酸化鉄分染みる。
2　10YR4/1褐灰色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに多量混入

74SD4　I－J
1　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　酸化鉄分全体に染みている。
2　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

74SD5　I－J
1　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入　炭化物粒多量混入
2　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

74SD6　K－L
1　10YR4/2灰黄褐色土　炭化物粒微量混入　全体に酸化鉄分染みる。
2　10GY7/1緑灰色砂　10YR4/1褐灰色土まだらに少量混入

74SD4　K－L
1　10YR4/2灰黄褐色土　砂多量混入　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに微量混入
2　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

74SD5　K－L
1　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入　炭化物粒少量混入
2　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入　炭化物粒多量混入

74SD6　M－N
1　10YR4/2灰黄褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入

74SD4A　M－N
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入

74SD4B　M－N
1　10YR4/1褐灰色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

74SD5　M－N
1　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームブロック少量混入
2　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入

第71図　B地区の溝⑤（74SD4～6）

74ＳＤ４（第69～71図、写真図版46～48）

〔位置〕ⅢＢ０ｄ、１ｄ、２ｄ、３ｄ、４ｄ、５ｄ、６ｄに位置する。

〔重複〕46次調査の46ＳＤ12から直接つながる同一の溝である。74ＳＤ５と重複するが本溝が新しい。また74ＳＤ３と本溝が接するが同時存在と考えられる。また74ＳＢ14のプランが本溝と重複するが本溝が新しいと思われる。

〔平面形式〕上場の幅、下場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。またⅢＢ５ｄ付近の本溝の壁面に柱穴状のピットが幾つかみられた。これらには何れも柱痕は存在せず、その性格を把握することはできなかった。

〔埋土〕１層又は２層に分けられる。全体的に自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から遺物が多量に出土した。以下列挙する。古代の須恵器大甕（2009）、手づくねかわらけ（2106、2140）、常滑産陶器山皿（2201）、常滑産片口鉢（2203、2206、2208、2209）、常滑産陶器壺（2210）、常滑産陶器広口壺（2220、2221、2225）、常滑産陶器甕（2240、2244、2250、2254、2255、2258、2260、2264、2267～2269、2271、2272、2276、2285、2287、2294、2299、2302）、渥美産陶器甕（2315、2325、2326、2329、2333、2334、2336、2339、2341、2342、2344、2347）、猿投産陶器甕（2361）、擬水沼産陶器壺（2383、2384）、須恵器系陶器甕（2391）、中国産白磁碗（2406）、白磁壺（2413）、平瓦（2602）が出土した。

〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の東側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

74ＳＤ５（第70・71図、写真図版46～49）

〔位置〕ⅢＢ０ｄ、１ｄ、２ｄ、３ｄ、４ｄに位置する。

〔重複〕46次調査の46ＳＤ13から直接つながる溝である。74ＳＤ４と重複するが本溝が古い。本溝も74ＳＤ４も道路遺構の道路側溝であるが、何らかの理由で本溝を埋めて新しく74ＳＤ４を構築したと考えられる。本溝と重複しない部分の74ＳＤ４は、本溝と同時存在であったことになる。この道路側溝の作り替えによって道路幅は狭くなったことになる。

また74ＳＤ９と本溝が接するが同時存在と考えられる。また74ＳＢ14のプランが本溝と重複するが、本溝が新しいと思われる。

〔平面形式〕上場の幅、下場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。

〔埋土〕２層に分けられる。１層は自然堆積、２層は人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から遺物が多量に出土した。以下列挙する。古代の須恵器大甕（2010）、手づくねかわらけ（2104、2106、2115、2129、2133、2134、2187）、ロクロかわらけ（2196）、常滑産陶器甕（2229、2263、2286、2289、2292）、渥美産陶器甕（2311、2314、2338）、中国産白磁碗（2405）が出土した。

〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の東側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

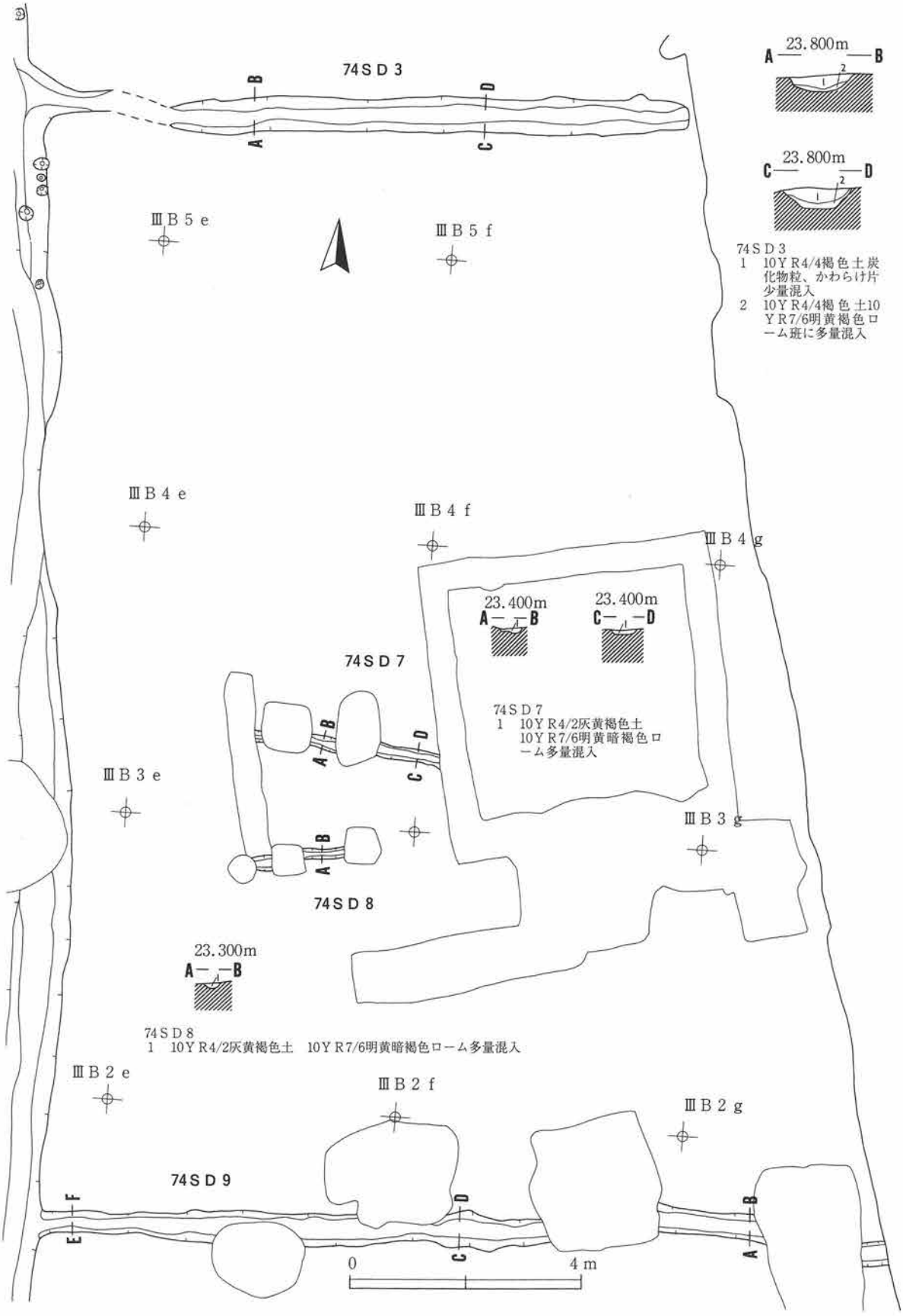
74ＳＤ６（第69～71図、写真図版46～48）

〔位置〕ⅢＢ０ｂ、１ｂ、２ｂ、３ｂ、４ｂ、５ｂ、６ｂ、２ｃ、３ｃ、４ｃ、５ｃ、６ｃに位置する。

〔重複〕46次調査の46ＳＤ３から直接つながる溝である。74ＳＥ１と重複するが本溝が古い。また74ＳＫ36と本溝が接するが同時存在と考えられる。
〔平面形式〕上場の幅、下場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。
〔埋土〕１層又は２層に分けられる。全体的に自然堆積と考えられる。砂が溜り水流によって生成された層もある。
〔出土遺物〕埋土中から遺物が多量に出土した。以下列挙する。古代の須恵器長頸壺（2003、2006）、大甕（2007、2011、2013）、手づくねかわらけ（2103、2105、2148、2155、2180、2182、2184、2188、2189）、ロクロかわらけ（2198）、常滑産片口鉢（2202、2204、2205）、常滑産陶器壺（2211、2213）、常滑産陶器広口壺（2214、2215、2217、2218、2219、2222、2224）、常滑産陶器甕（2227、2228、2246、2248、2249、2252、2253、2256、2257、2261、2262、2265、2273、2274、2280～2284、2288、2290、2291、2295、2296、2298、2303）、渥美産陶器甕（2312、2317、2318、2320、2322、2323、2332、2335、2337、2340、2343、2346、2351、2353、2354、2357）、猿投産陶器甕（2363～2372、2374、2375）、水沼産陶器壺（2381）、擬水沼産陶器壺（2382、2385、2386）、須恵器系陶器甕（2388～2390）、中国産白磁碗（2401、2402、2404）、白磁壺（2410、2412）、白磁水注？（2415）、青磁碗（2416）、青白磁壺（2417、2418）、平瓦（2601）、砥石？（2603）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の西側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

74ＳＤ７（第72図、写真図版48）
〔位置〕ⅢＢ３ｅ、３ｆに位置する。
〔重複〕74ＳＫ20、74ＳＫ21と重複するが本遺構が古い。
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は東から西で、東側が西側より底面の標高が高い。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕掘方の幅から塀の可能性を考えて調査をおこなった。だが塀の板痕は全く確認できなかった。
〔年代〕12世紀の所属の可能性が高い。

74ＳＤ８（第72図、写真図版48・49）
〔位置〕ⅢＢ２ｅに位置する。
〔重複〕74ＳＫ19と重複するが本遺構が古い。
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の傾斜は不明瞭である。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕掘方の幅から塀の可能性を考えて調査をおこなった。だが塀の板痕は全く確認できなかった。
〔年代〕12世紀の所属の可能性が高い。



第72図　B地区の溝⑥（74SD3・7・8・9）

74ＳＤ９（第72図、写真図版49）

〔位置〕ⅢＢ１ｄ、１ｅ、１ｆ、１ｇに位置する。

〔重複〕道路側溝である74ＳＤ５と接するが、同時存在と考えられる。また74ＳＫ33と重複するが本溝が古い。また74ＳＤ10、74ＳＤ11と重複するが本溝が新しい。また74ＳＢ３、74ＳＢ５、74ＳＢ12が重複するが本溝が古い。また74ＳＢ２、74ＳＢ９とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕部分的に膨隆するが、ほぼ真っすぐである。調査区域外の東側にさらに続いていたが、現道（国道４号）により削平され失われたと考えられる。底面の傾斜方向は東側が標高が高く、西側が低い。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕都市、屋敷を区画する区画溝の可能性が考えられる。本溝から約19m北に位置する74ＳＤ３は、本溝と軸方向がほぼ同じであるが、同時存在かどうかの判断は難しい。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

74ＳＤ10（第73図、写真図版49）

〔位置〕ⅢＢ１ｇ、２ｇに位置する。

〔重複〕74ＳＫ22、74ＳＤ９、74ＳＢ５、74ＳＢ18と重複するが本遺溝が古い。また74ＳＢ３、74ＳＢ７、74ＳＢ９、74ＳＢ10とプランが重複するが直接切合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘方が浅く切れ切れになっている。全体的にはほぼ真直ぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕掘方の幅から塀の可能性を考えて調査をおこなった。だが塀の板痕は全く確認できなかった。

〔年代〕不明である。

74ＳＤ11（第73図、写真図版50）

〔位置〕ⅢＢ０ｅ、１ｅに位置する。

〔重複〕74ＳＫ33、74ＳＤ９、74ＳＤ14と重複するが本溝が古い。

〔平面形式〕北側と南側に分かれているが本来はつながっていたと考え、同一の遺構とした。全体的にはほぼ真直ぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし

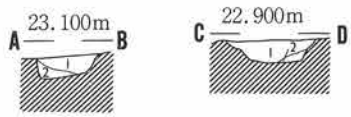
〔溝の性格〕掘方の幅から塀の可能性を考えて調査をおこなった。だが塀の板痕は全く確認できなかった。

〔年代〕不明である。

74ＳＤ12（第73図、写真図版50）

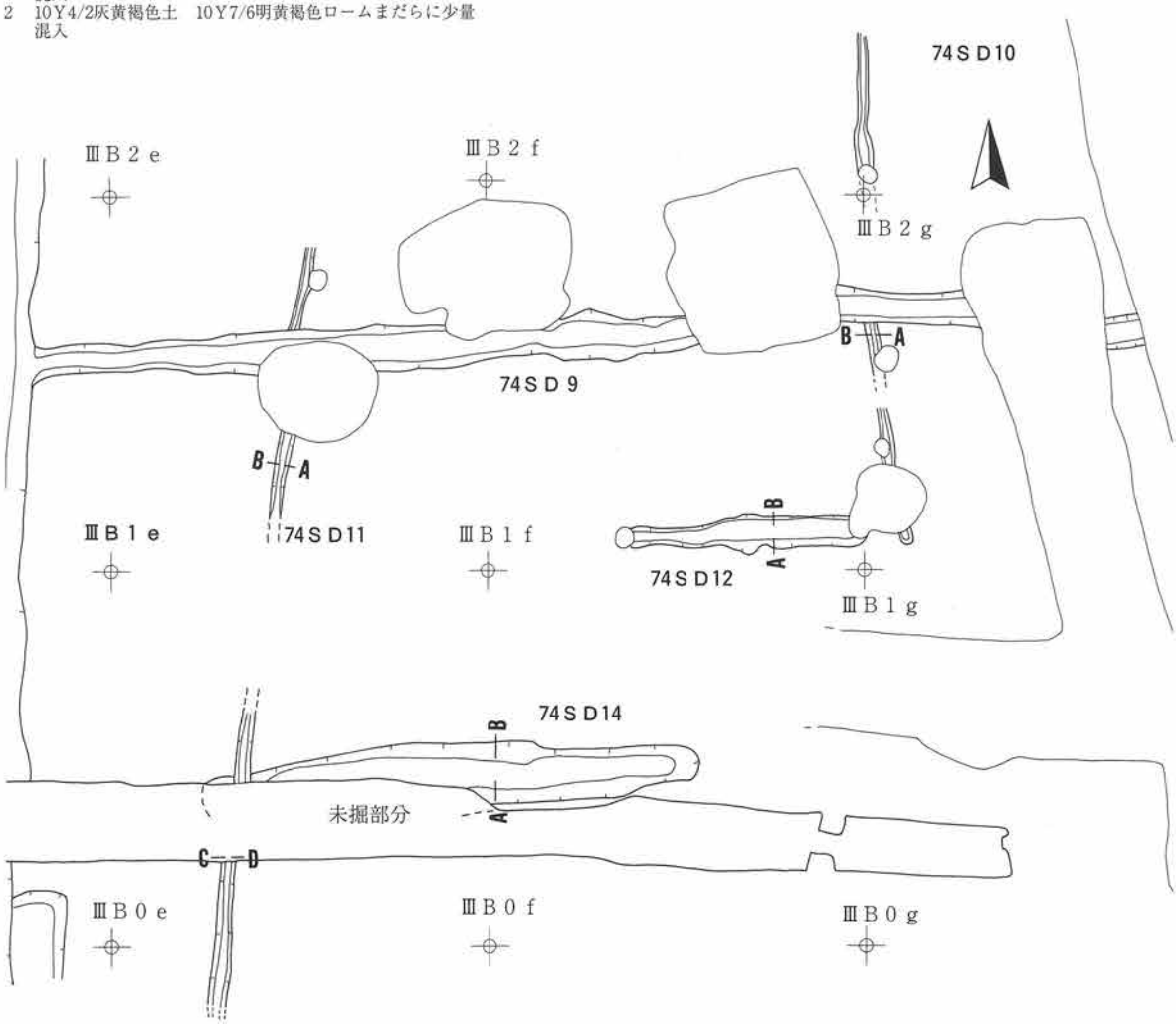
〔位置〕ⅢＢ１ｆに位置する。

〔重複〕74ＳＫ24、74ＳＢ８と重複するが本溝が古い。また74ＳＤ10、74ＳＤ11と重複するが本溝が新しい。また74ＳＢ３、74ＳＢ５とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

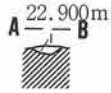


74SD9　A－B　C－D
1　10Y4/2灰黄褐色土　10Y7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入
2　10Y4/2灰黄褐色土　10Y7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入

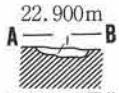
74SD9　E－F
1　10Y3/1黒褐色土　10Y7/6明黄褐色ロームまだらに微量混入
2　10Y3/1黒褐色土　10Y7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入



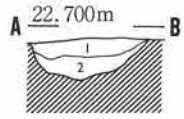
74SD10
1　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入



74SD11
1　5Y3/1オリーブ黒色土　10GY7/1緑灰色ロームまだらに少量混入



74SD12
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入



74SD14
1　10YR3/2黒褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに少量混入
2　10YR3/2黒褐色土　10YR7/6明黄褐色ロームまだらに多量混入

第73図　B地区の溝⑦（74SD9～12・14）

〔平面形式〕部分的に膨隆するが、ほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕74ＳＤ９と平行な位置にあり同時存在の可能性が可能性が考えられる。だが74ＳＤ９は調査区を横断する長さで検出されているのに対して、本溝は短い長さでしか検出されていない。よって74ＳＤ９と無関係の可能性も高い。
〔年代〕不明である。

74ＳＤ13（第69図、写真図版50・51）
〔位置〕ⅢＢ３ｂ、４ｂ、５ｂに位置する。
〔重複〕74ＳＫ35、74ＳＢＫ22と重複するが本溝が古い。
〔平面形式〕なだらかに弓なりになっている。南側では東側の縁に段が付きテラス状になっている。北端は一応明瞭に閉じて溝が終わっている。底面の傾斜方向は北側が標高が高く、南側が低い。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけの細片が少量出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である74ＳＤ６とほぼ平行であり、何らかの区画溝的な性格も考えられる。
〔年代〕不明であるが、12世紀後半の所属の可能性が高い。

74ＳＤ14（第73図、写真図版51）
〔位置〕ⅢＢ０ｅ、０ｆに位置する。
〔重複〕74ＳＤ11と重複するが本溝が新しい。また74ＳＢ５とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕真中が膨らむ葉巻形を呈する。東西の端でそれぞれ完結している。底面の傾斜方向は東側が標高が高く、西側が低い。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕かわらけの細片が微量出土した。
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕不明であるが12世紀後半の所属の可能性が高い。

74ＳＤ15（第70図、写真図版51）
〔位置〕ⅢＢ０ｃ、０ｄに位置する。
〔重複〕74ＳＤ４と接するが前後関係をはっきり把握できなかった。また本溝は道路状遺構の路面状に位置するが、これも前後関係を把握できない。本溝が道路遺構の路面内でプランが完結していることから、道路状遺構、道路側溝と同時存在の可能性もある。
〔平面形式〕ほぼ真っすぐである。現在使用されている水道管が存在するため調査できない部分があるが、その中で完結して終わっていると考えられる。
底面の傾斜方向は不明瞭である。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

74ＳＤ16（第69図、写真図版51）
〔位置〕ⅢＢ６ｂに位置する。
〔重複〕74ＳＢ23と重複するが直接切合う柱穴が無く前後関係は不明である。
〔平面形式〕74ＳＤ13と同一線上にあるが、74ＳＤ13の北端が閉じて終わっており、本溝とはつながらないと考え、異なる遺構名を付した。平面形はなだらかな弓なりになっている。本来は北側にまだ延びていたと考えられるが、削平されて失われたと考えられる。また南側は、現在の排水溝が存在するために調査できなかった部分で完結した終わっていると考えられる。底面の傾斜方向は北側が標高が高く、南側が低い。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕道路側溝である74ＳＤ６とほぼ平行であり、何らかの区画溝的な性格も考えられる。またお互いに途切れてつながらないが74ＳＤ13と対になる可能性も考えられる。
〔年代〕不明であるが、12世紀後半の所属の可能性が高い。

74ＳＤ17（第70図、写真図版48）
〔位置〕ⅡＢ９ｄ、ⅢＢ０ｄ、１ｄに位置する。
〔重複〕74ＳＤ４と重複するが本溝が古い。本溝も74ＳＤ４も道路遺構の道路側溝であるが、何らかの理由で本溝を埋めて新しく74ＳＤ４を構築したと考えられる。本溝と重複しない部分の74ＳＤ４は、本溝と同時存在であったことになる。この道路側溝の作り替えによって道路幅は狭くなったことになる。
〔平面形式〕上場の幅、下場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。74ＳＤ４から枝分かれするような形になっている。ⅡＢ９ｄ付近で浅くなり途切れてしまい、46次調査区には延びていかない。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中からかわらけの細片が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の東側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

74ＳＤ18（第70図、写真図版48）
〔位置〕ⅡＢ９ｄ、ⅢＢ０ｄに位置する。
〔重複〕74ＳＤ４と重複するが本溝が古い。本溝も74ＳＤ４も道路遺構の道路側溝であるが、何らかの理由で本溝を埋めて新しく74ＳＤ４を構築したと考えられる。本溝と重複しない部分の74ＳＤ４は、本溝と同時存在であったことになる。この道路側溝の作り替えによって道路幅は狭くなったことになる。
〔平面形式〕46次調査の46ＳＤ11に直接つながる溝である。上場の幅が部分によって変化するが、大きくみると、全体にほぼ真っすぐといえる。底面の傾斜方向は北側が高く、南側が標高が低い。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕道路側溝である。Ａ地区から続く道路の東側の側溝である。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

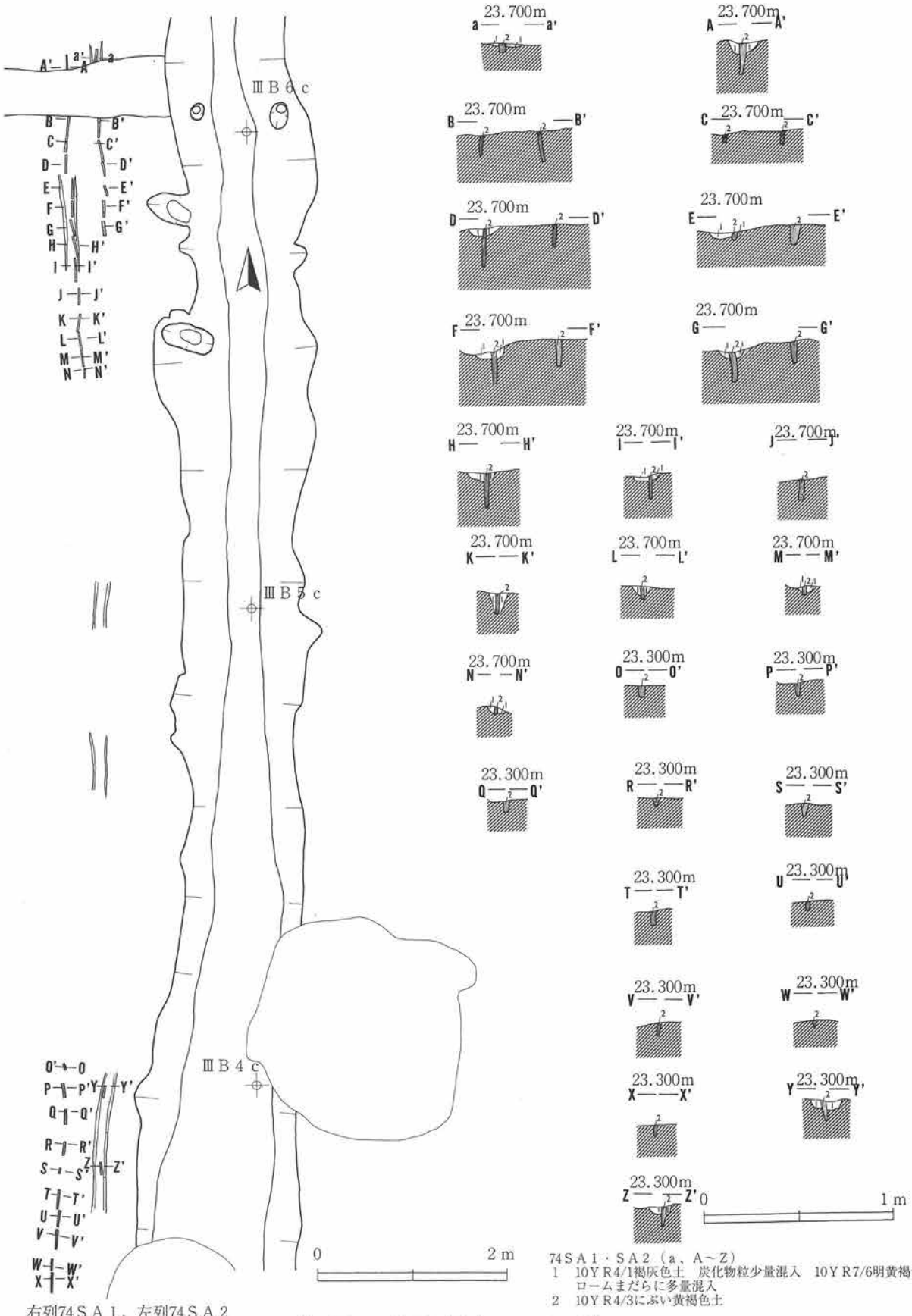
6　塀

74ＳＡ１（第74図、写真図版52）

〔位置〕ⅢＢ３ｂ、４ｂ、５ｂ、６ｂに位置する。
〔重複〕直接重複しないが、本塀から約30cmほど東側に平行する形で74ＳＡ２が存在する。あまりに接近しており、前後関係は不明であるが同時存在ではない。
〔形式〕掘方が確認できた部分では幅約14cmで、断面形がＵ字形である。間が途切れて南北２つに分かれた状態になっている。これは間が途切れているのではなく、本来存在していたものが痕跡を留めていないものと思われる。板材は幅約２cm、長さ約20cmほどである。断面の観察では先端は尖っていないが、掘方の底面から８cmも食込んでいるものがあり、意図的に打ち込まれたものと考えられる。板材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。
〔埋土〕掘方の埋土は１層に分けられる。人為堆積である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕板塀である。道路側溝と平行な位置にあり同時存在と考えられる。道路から屋敷を区画し、また道路から見えないようにする目隠し塀と考えられる。
〔年代〕12世紀後半の所属である。

74ＳＡ２（第74図、写真図版52）

〔位置〕ⅢＢ３ｂ、４ｂ、５ｂ、６ｂに位置する。
〔重複〕直接重複しないが、本塀から約30cmほど西側に平行する形で74ＳＡ１が存在する。あまりに接近しており、前後関係は不明であるが同時存在ではない。
〔形式〕掘方が確認できた部分では幅約14cmで、断面形がＵ字形である。間が所々途切れて、切れ切れの状態になっている。これも74ＳＡ１と同様に間が途切れているのではなく、本来は存在していたのであるが痕跡を留めていないものと思われる。板材は幅約２cm、長さ約20cmほどで74ＳＡ１とほとんど同じである。断面の観察では先端は尖っていないが、掘方の底面から６cmも食込んでいるものがあり、意図的に打ち込まれたものと考えられる。板材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。
〔埋土〕掘方の埋土は１層に分けられる。人為堆積である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕板塀である。道路側溝と平行な位置にあり同時存在と考えられる。道路から屋敷を区画し、また道路から見えないようにする目隠し塀と考えられる。
〔年代〕12世紀後半の所属である。



第74図　B地区の塀（74SA1・2）

B地区柱穴計測表①

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
74P 1	20.6	24.07	
〃 P 2	11.9	24.15	
〃 P 3	11.2	23.93	
〃 P 4	15.8	24.09	
〃 P 5	11.0	23.85	74SB27
〃 P 6	16.2	23.86	74SB27
〃 P 7	21.3	23.69	74SB27
〃 P 8	9.7	23.69	74SB27
〃 P 9	17.3	23.46	
〃 P 10	10.1	23.55	
〃 P 11	9.6	23.56	
〃 P 12	6.1	23.59	
〃 P 13	53.6	23.11	74SB 1
〃 P 14	57.2	22.97	74SB 1
〃 P 15	27.1	23.35	
〃 P 16	47.1	23.14	74SB 1
〃 P 17	28.7	23.25	
〃 P 18	31.5	23.23	
〃 P 19	5.9	23.27	
〃 P 20	5.6	23.63	
〃 P 21	24.1	23.43	
〃 P 22	16.9	23.47	
〃 P 23	13.6	23.51	
〃 P 24	7.2	23.60	
〃 P 25	14.1	23.49	
〃 P 26	13.4	23.53	
〃 P 27	9.2	23.57	
〃 P 28	6.5	23.60	
〃 P 29	14.1	23.53	
〃 P 30	37.2	23.30	74SB15
〃 P 31	8.6	23.58	
〃 P 32	17.2	23.49	
〃 P 33	21.3	23.45	
〃 P 34	11.6	23.53	
〃 P 35	10.9	23.54	
〃 P 36	56.3	23.06	74SB 1
〃 P 37	17.0	23.12	74SB17
〃 P 38	23.0	23.16	74SB 4
〃 P 39	21.0	23.17	74SB 6
〃 P 40	8.0	23.19	
〃 P 41	29.0	22.95	74SB 4
〃 P 42	28.5	23.06	74SB 1
〃 P 43	19.0	23.05	74SB18
〃 P 44	39.0	22.90	74SB 1
〃 P 45	15.0	23.14	
〃 P 46	11.0	23.20	74SB 6
〃 P 47	欠番		
〃 P 48	48.0	22.80	74SB 1
〃 P 49	24.5	23.04	74SB16
〃 P 50	33.0	22.99	74SB 1
74P 51	20.7	23.07	74SB 6
〃 P 52	19.0	23.11	
〃 P 53	10.0	23.20	
〃 P 54	15.0	23.17	
〃 P 55	135.0	22.95	74SB 1
〃 P 56	12.0	23.16	74SB17
〃 P 57	13.0	23.14	
〃 P 58	12.0	23.19	74SB17
〃 P 59	41.0	22.88	74SB 1
〃 P 60	14.0	23.18	74SB16
〃 P 61	19.0	23.15	74SB16
〃 P 62	5.4	23.26	74SB19
〃 P 63	18.5	23.15	74SB17
〃 P 64	22.0	23.10	74SB19
〃 P 65	16.5	23.16	74SB17
〃 P 66	30.0	22.88	74SB14
〃 P 67	15.0	23.01	74SB17
〃 P 68	11.3	23.20	
〃 P 69	31.0	22.99	74SB19
〃 P 70	10.7	23.19	74柱列2
〃 P 71	11.2	23.19	
〃 P 72	22.6	23.08	74SB14
〃 P 73	35.2	22.90	74柱列2
〃 P 74	22.3	23.09	
〃 P 75	11.8	23.21	
〃 P 76	38.4	22.91	74柱列1
〃 P 77	16.0	23.13	
〃 P 78	3.9	23.27	74柱列2
〃 P 79	11.9	23.19	
〃 P 80	24.0	23.01	
〃 P 81	19.2	23.07	74柱列1
〃 P 82	22.8	23.03	
〃 P 83	27.3	23.01	
〃 P 84	17.0	23.12	
〃 P 85	16.7	22.95	
〃 P 86	11.8	22.93	74SB 9
〃 P 87	6.7	22.03	
〃 P 88	14.8	22.99	74SB11
〃 P 89	14.1	23.01	74SB 6
〃 P 90	35.4	22.79	74SB 9
〃 P 91	28.5	22.89	
〃 P 92	16.7	23.04	74SB 6
〃 P 93	33.8	22.84	74SB11
〃 P 94	35.3	22.83	74SB18
〃 P 95	19.1	23.01	74SB 4
〃 P 96	11.5	23.09	
〃 P 97	42.0	22.74	74SB 4
〃 P 98	15.1	22.95	74SB 4
〃 P 99	20.1	22.88	74SB 4
〃 P100	45.8	22.58	74SB 2
74P101	15.8	22.80	74SB19
〃 P102	20.1	22.87	74SB 9
〃 P103	16.8	22.90	74SB19
〃 P104	11.8	22.88	
〃 P105	59.5	22.46	74SB 2
〃 P106	18.7	22.97	74SB19
〃 P107	21.9	22.94	74SB17
〃 P108	欠番		
〃 P109	2.0	22.88	
〃 P110	25.9	22.94	74SB17
〃 P111	33.2	22.80	74柱列1
〃 P112	7.5	23.06	
〃 P113	13.3	23.00	
〃 P114	6.4	23.06	
〃 P115	19.3	22.93	
〃 P116	35.7	22.79	74柱列11
〃 P117a	11.3	23.12	74SB19
〃 P117b	21.9	22.92	74SB19
〃 P118	14.2	23.02	74柱列1
〃 P119	19.5	23.01	
〃 P120	9.8	23.02	
〃 P121	32.1	22.83	
〃 P122	13.6	23.00	
〃 P123	16.2	22.95	
〃 P124	13.2	22.86	74柱列2
〃 P125	15.0	22.99	
〃 P126	20.9	22.91	74柱列2
〃 P127	16.9	22.94	74柱列1
〃 P128	11.1	23.01	
〃 P129	13.5	22.97	
〃 P130	13.5	22.97	
〃 P131	15.9	22.94	
〃 P132	8.9	22.90	
〃 P133	7.4	22.90	74SB 2
〃 P134	56.6	22.44	74SB19
〃 P135	欠番		
〃 P136	4.1	23.00	74SB11
〃 P137	33.1	22.81	74SB15
〃 P138	21.9	22.76	74SB 7
〃 P139	不明		74SB 3
〃 P140	58.7	22.38	74SB 5
〃 P141	20.7	22.78	
〃 P142	41.5	22.56	74SB12
〃 P143	22.4	22.76	74SB15
〃 P144	12.3	22.85	
〃 P145	2.6	22.92	
〃 P146	13.7	22.77	
〃 P147	4.6	22.84	74SB12
〃 P148	19.6	22.68	74SB 7
〃 P149	13.6	22.70	

B地区柱穴計測表②

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
74P150	21.2	22.72	74SB9
〃P151	欠番		
〃P152	19.8	22.69	74SB3
〃P153	17.8	22.69	
〃P154	17.7	22.74	
〃P155	21.1	22.62	74SB2
〃P156	28.1	22.49	74SB8
〃P157	26.3	22.59	74SB2
〃P158	22.2	22.55	74SB2
〃P159	不明		74SB2
〃P160	19.7	20.40	74SB8
〃P161	9.8	22.50	74SB2
〃P162	23.9	22.63	74SB8
〃P163	31.1	22.49	74SB2
〃P164	28.4	22.54	74SB4
〃P165	139.0	22.48	74SB2
〃P166	8.3	23.58	
〃P167	11.0	23.56	
〃P168a	8.6	23.55	
〃P168b	7.0	23.62	
〃P169	15.0	23.64	
〃P170	7.9	23.57	
〃P171	14.4	23.50	
〃P172	9.4	23.50	
〃P173	5.8	23.53	
〃P174	10.7	23.47	
〃P175	19.1	23.38	
〃P176	18.9	23.38	
〃P177	7.5	23.45	
〃P178	7.3	23.50	
〃P179	15.8	23.42	
〃P180	12.9	23.51	
〃P181	5.1	23.48	
〃P182	20.8	23.34	
〃P183	17.5	23.37	
〃P184	7.0	23.42	
〃P185	19.4	23.28	
〃P186	15.6	23.30	
〃P187	10.2	23.33	74SB17
〃P188	欠番		
〃P189	20.9	23.22	
〃P190	4.0	23.31	74SB22
〃P191	22.6	23.19	
〃P192	12.1	23.17	
〃P193	15.7	23.12	
〃P194	13.9	23.20	
〃P195	12.5	23.36	
〃P196	10.4	23.32	
〃P197	欠番		
〃P198	15.7	22.91	74SB26
74P199	33.7	22.92	74SB26
〃P200	51.7	22.64	74SB26
〃P201	欠番		
〃P202	30.9	22.95	
〃P203	14.8	23.70	74SB26
〃P204	5.9	23.18	
〃P205	20.4	22.78	
〃P206	10.3	22.99	74SB26
〃P207	21.1	22.92	74SB26
〃P208	欠番		
〃P209	11.3	22.92	
〃P210	10.0	22.91	
〃P211	7.9	22.88	
〃P212	11.0	22.83	74SB25
〃P213	8.6	22.86	
〃P214	11.4	22.74	
〃P215	5.4	22.69	
〃P216	14.4	22.66	
〃P217	15.0	22.535	
〃P218	18.7	22.53	
〃P219	17.9	22.70	
〃P220	11.6	22.70	
〃P221	20.7	22.65	
〃P222	33.4	22.66	74SB9
〃P223	欠番		
〃P224	12.8	22.97	74SB14
〃P225	25.0	23.05	
〃P226	20.1	22.65	74SB12
〃P227a	14.7	22.56	74SB5
〃P227b	14.4	22.72	74SB14
〃P228	24.3	22.69	74SB10
〃P229	17.2	22.69	
〃P230	42.0	23.10	
〃P231	33.7	22.75	74SB18
〃P232	17.2	22.70	
〃P233	15.9	22.74	
〃P234	36.0	22.57	74SB9
〃P235	6.4	22.78	
〃P236	6.8	23.47	74SB24
〃P237	23.1	23.34	74SB22
〃P238	9.5	23.34	74SB24
〃P239	欠番		
〃P240	25.5	23.03	
〃P241	33.1	22.99	
〃P242	35.2	29.91	74SB22
〃P243	22.8	23.53	
〃P244	9.9	23.80	
〃P245	15.6	23.72	
〃P246	8.2	23.82	
〃P247	21.2	23.70	
74P248	20.9	23.68	
〃P249	欠番		
〃P250	11.8	23.60	74SB24
〃P251	31.8	23.25	74SB22
〃P252	31.9	23.60	
〃P253	11.8	22.32	74SB5
〃P254	34.4	22.51	74SB13
〃P255	17.6	22.54	
〃P256	20.2	22.55	74SB7
〃P257	25.0	22.55	74SB13
〃P258	26.9	22.60	74SB5
〃P259	18.4	22.31	74SB13
〃P260	20.6	22.59	74SB21
〃P261	30.9	22.52	74SB3
〃P262	31.3	22.55	74SB10
〃P263	10.8	22.72	74SB20
〃P264	17.8	22.60	
〃P265	6.3	22.75	
〃P266	40.9	22.39	74SB13
〃P267	7.2	22.73	
〃P268	41.0	22.40	
〃P269	40.4	22.31	74SB3
〃P270	21.4	22.31	74SB5
〃P271	4.4	22.49	
〃P272	6.4	22.44	
〃P273	10.2	22.48	
〃P274	7.9	22.50	
〃P275	14.3	22.53	74SB13
〃P276	9.8	22.52	74SB5
〃P277	5.9	22.45	
〃P278	15.5	22.60	74SB10
〃P279	14.8	22.97	
〃P280	12.3	22.95	74SB6
〃P281	15.1	23.61	
〃P282	欠番		
〃P283	14.5	22.81	74SB25
〃P284	7.0	23.49	

第3節　遺物

1　須恵器（第75図、写真図版112）

本調査区から古代の須恵器片が出土している。これらの多くは12世紀の遺構から出土しており、破片の状態で土とともに混入したものである。なお本調査区には古代の遺構は存在していない。これらの須恵器は概ね9～10世紀のものと思われるが、いずれも細片で全体の器形もわからず、詳細は時期の考察は難しい。

図示した破片は15点である。他に不掲載の破片が11片ある。

2001は甕の底部と推測される。この破片はA地区出土の破片（1004）と接合した。図示した拓本は接合した状態の拓本である。外面にヘラケズリが施されている。外面の色調は褐灰色で断面と内面は灰色を呈する。胎土には砂粒と海綿状骨針が混入する。

2002は甕の口縁部破片である。胎土は緻密で明褐灰色を呈する。海綿状骨針は混入しない。

2003は長頸壺の頸部～肩部の破片である。肩部と頸部の境に沈線が1条施される。胎土は灰色で砂粒と海綿状骨針が混入する。

2004は長頸壺の頸部～肩部の破片である。外面にロクロ調整の前に施されたタタキ目の痕跡がみられる。胎土は灰色で砂粒と海綿状骨針を少量混入する。内面は黒みがかった灰色を呈している。

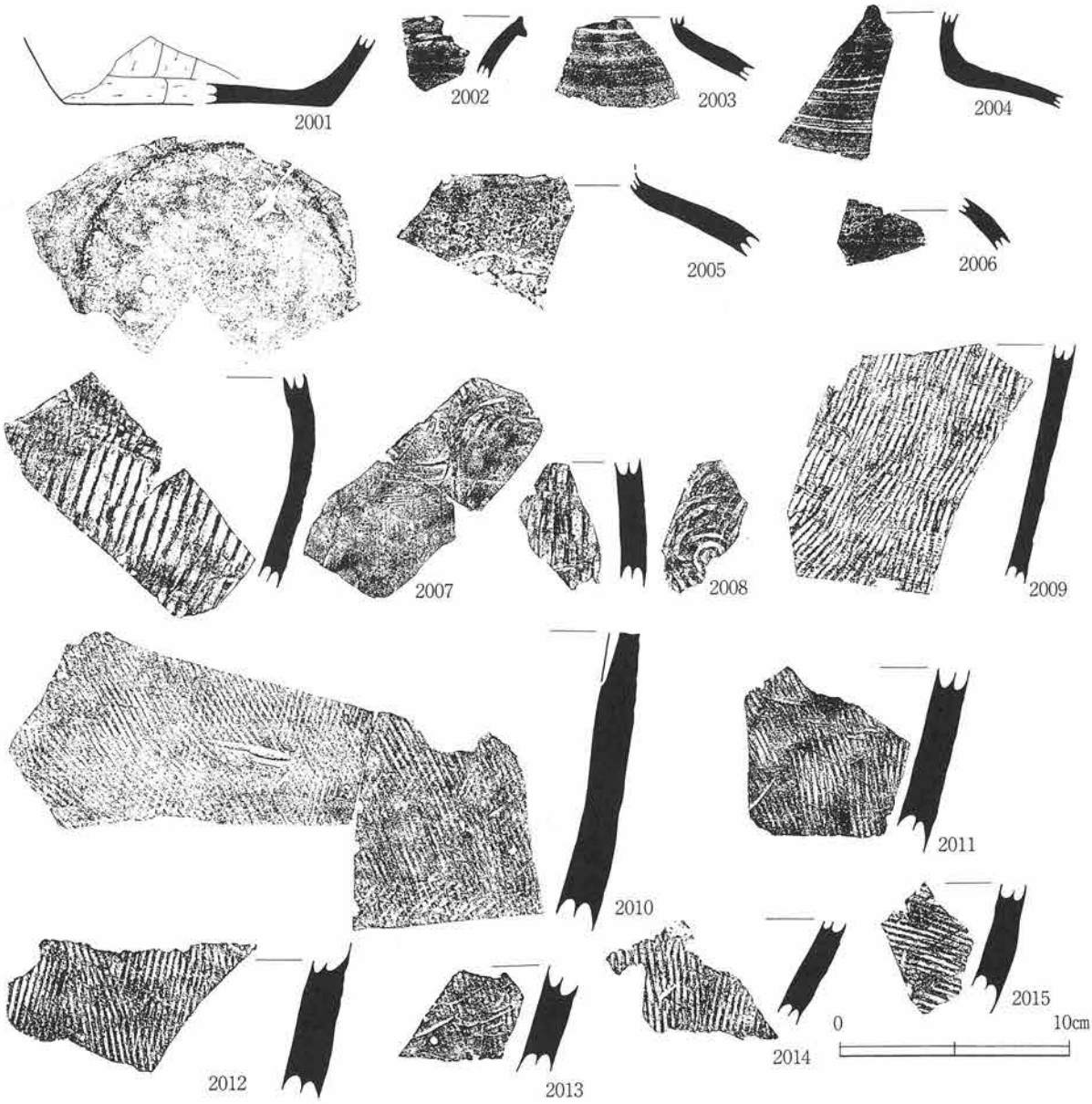
2005は甕の肩部破片である。外面は灰を被っており調整が判然としないがロクロ調整と推測される。また他の個体の一部が窯着している。内面にはヘラナデが施されている。胎土は灰色で海綿状骨針は混入しない。

2006は体部の小破片で器種ははっきりしないが、断面の丸みから長頸壺と推測される。調整は内外面ロクロ調整である。胎土は暗灰色で砂粒が多量に混入する。海綿状骨針は混入しない。

2007、2008は同一個体の大甕である。A地区出土の1006～1008も同一個体である。外面には格子目状のタタキ目が施されている。2007を観察すると目の粗いタタキ具と細いタタキ具の二種類が使用されていることがわかる。これは1006、1008にもみられる。体部下半が目の粗いタタキで、上半に目の細かいタタキが施されていると理解できる。内面には青海波のアテ具痕とナデ調整がみられる。2007には指紋の痕跡がみられる。胎土は赤褐色で緻密である。海綿状骨針は混入していない。

2009は大甕の体部破片である。外面にタタキ目、内面にアテ具痕と思われる凹がみられる。タタキ目は格子目状のタタキである。断面の胎土はにぶい赤褐色を呈し緻密である。海綿状骨針は混入していない。

2010～2015は同一個体の大甕の破片である。外面には目の細い格子目状のタタキ目が施されている。内面にはナデ調整が施されているが、2010、2012の内面のナデの下にかすかにアテ具痕を確認できる。断面の胎土はにぶい橙色を呈し多量の砂粒と海綿状骨針を混入する。2010は径のカーブが非常にゆるく、かなり大型の個体であると考えられる。2013は内外面ともに磨耗が著しい。



番号	種類	器種	出土位置	法量（cm） 高さ	口径	底径	外面調整	内面調整	色調	その他
2001	須恵器	甕？	74ＳＥ4埋土	(2.9)	—	11.4	ヘラケズリ	ヘラナデ	褐灰	ⅡＢ区出土片（1004）と接合
2002	〃	甕	ⅢＢ6ｂ表土	(2.4)	—	—	ロクロ	ロクロ	明赤褐	
2003	〃	長頸壺	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ0ｂ)	(2.6)	—	—	ロクロ	ロクロ	灰	
2004	〃	〃	ⅢＢ2ｄかくらん	(4.1)	—	—	タタキ　ロクロ	ロクロ	灰	ロクロ調整の下地にタタキ
2005	〃	甕	74ＳＤ1埋土	(3.6)	—	—	ロクロ	ヘラナデ	灰	
2006	〃	長頸壺？	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ0ｂ)	(2.3)	—	—	ロクロ	ロクロ	暗灰	
2007	〃	大甕	74ＳＤ6埋土(ⅡＢ9ｂ)	(9.1)	—	—	タタキ	アテ具	暗灰	74ＳＤ４埋土（ⅢＢ３ｄ）からも出土
2008	〃	〃	ⅢＢ6ｂ表土	(5.4)	—	—	タタキ	アテ具	〃	
2009	〃	〃	74ＳＤ4埋土(ⅢＢ2ｄ)	(10.4)	—	—	タタキ	アテ具？	灰	
2010	〃	〃	74ＳＤ5埋土(ⅢＢ1ｄ)	(12.6)	—	—	タタキ	ヘラナデ	にぶい橙	ヘラナデの下にアテ具痕
2011	〃	〃	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ1ｂ)	(7.8)	—	—	〃	〃	〃	2010～2015同一個体
2012	〃	〃	74ＳＫ12埋土	(6.5)	—	—	〃	〃	〃	ヘラナデの下にアテ具痕
2013	〃	〃	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ2ｂ)	(5.1)	—	—	〃	〃	〃	
2014	〃	〃	74ＳＥ4埋土	(4.6)	—	—	〃	〃	〃	
2015	〃	〃	74ＳＥ4埋土	(5.8)	—	—	〃	〃	〃	

第75図　Ｂ地区の須恵器

2　かわらけ（第76～81図、写真図版112～117）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊３　Ｘかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。下に分類基準を示す。

手づくねかわらけ

Ｃ類（口縁部二段なで技法）

Ｃ3 類　上段のつまみは弱くいくらか内湾ぎみ。上段と下段のなで面はほぼ同じ幅である。口唇部断面形は丸い。

Ｃ4 類　上段を強くつまむ。上段は下段のなで面より幅が狭い。口唇部断面形は丸い。

Ｃ5 類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

Ｃ5′類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形だが面取り部がくびれる。

Ｄ類（口縁部一段なで技法）

Ｄ2 類　口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部断面形は丸い。

Ｄ3 類　口縁部は弱く内湾気味。口唇部断面形は丸い。

Ｄ4 類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

Ｄ4′類　Ｄ4類に類似。口唇部面取り後、口縁全体を一度なでる。断面形はほぼ三角形。

ロクロかわらけ

Ｒｄ　皿型の大型品

Ｒｂ　皿型の小型品（小型品は皿型とする。）

Ｒｂ　碗型

口縁部の形態

０類　口縁部が底部から丸く立ち上がるもの

１類　口縁部が底部からすぐにほぼまっすぐに立ち上がるもの

２類　口縁部が内湾し、均等の割合で口縁部、底部の二つに二分できるもの。

段の有無と段の数

０　段はなく、表面は滑らかである。

１　段はないが、表面には粗い調整痕がある。

２　段が２段ある。

３　段が３段ある。

４　段が４段ある。

５　段が５段以上ある。

底部の形状

疑似高台がない場合はダッシュ（′）をつける。

疑似高台がある場合はダッシュ（′）をつけない。

以上の要素を合わせてＲｄ01′、ｒｄ10のように表す。

12世紀のかわらけは、手づくねかわらけ87点、内折かわらけ２点、ロクロかわらけ９点、柱状高台かわらけ１点を図示した。他に不掲載のかわらけが83kg出土している。

手づくねかわらけはD2類が39点、D3類が14点、D4類が17点、C3類が４点、C4類は９点、C5類が３点ある。

磨耗している個体が多く、内面のナデ、外底面のすのこ痕の有無を確認できないものが多い。

2170はＤ４類の大型かわらけである。内外面に油煙が付着している。一見すると灯明皿として使用した結果の自然の油煙の付着のように見えるが、外底面の中央に２つの点があり、少なくともこの点は意図的に描いたものといえる。このような視点でみると、外面の口縁部から底面中央に向かって伸びる放射状の幾つかの筋も自然に流れたものではなく、人為的に描かれた可能性を考えなければならない。詳細に観察すると、内面から自然に流れて外面の口唇部に自然に付着した油煙があり、放射状になっている油煙はその上に重なって状態になっている。よって外面口縁部の放射状の油煙は意図的に描かれたものと考えられる。内面の油煙は観察するところでは自然の付着と考えられる。内面と外面口唇部に付着した油煙は自然のものなので、このかわらけが灯明皿として使用された後、外面に油煙で文様を描いたと考えられる。

このように外面中央の点、口縁部付近の放射状の線は人為的に描かれたものと考えられるのであるが、中央の点はともかく、口縁部の放射状の線はあまりに稚拙で規則性が感じられない。これは輪宝墨諸書土器などのような意味のあるものではなく、手すさびに描かれた可能性が高いとここでは考えたい。

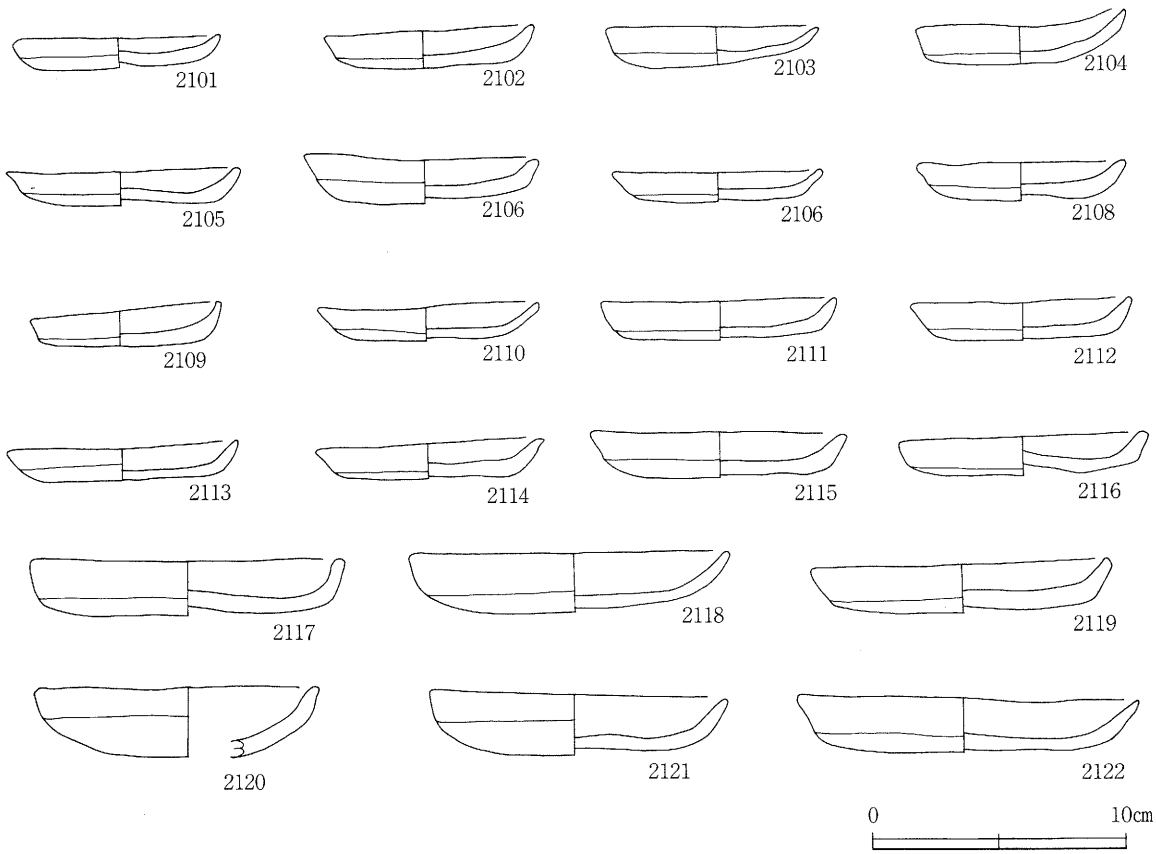
2171はＤ４類のかわらけの下に内折れかわらけが重なった状態で癒着しているものである。これは焼成する前の生乾きの状態の時に重ねられ、押しつけられて癒着したものである。押しつけた際に、上のＤ４類かわらけの底部付近に亀裂が生じている。下の内折れかわらけはＤ４類のかわらけの中央からわずかにずれた位置に癒着している。そしてこのように癒着し、亀裂を生じたものを乾燥し焼成しているのである。

これが意味のある行為なのかそうでないのかは判断に苦しむ。このようなかわらけが成品として扱われたのであろうか。わかることはＤ４類のかわらけと内折れかわらけがほぼ同時に同じ（系統の）工人、同じ工房で製作されていたということである。

ロクロかわらけはｒｄが６点とＲｄが３点である。2190～2192の３点は質感も器形も非常に類似する。2193は器形の歪みが著しい。2198は意図的かどうかはわからないが内外面が黒色を呈する。

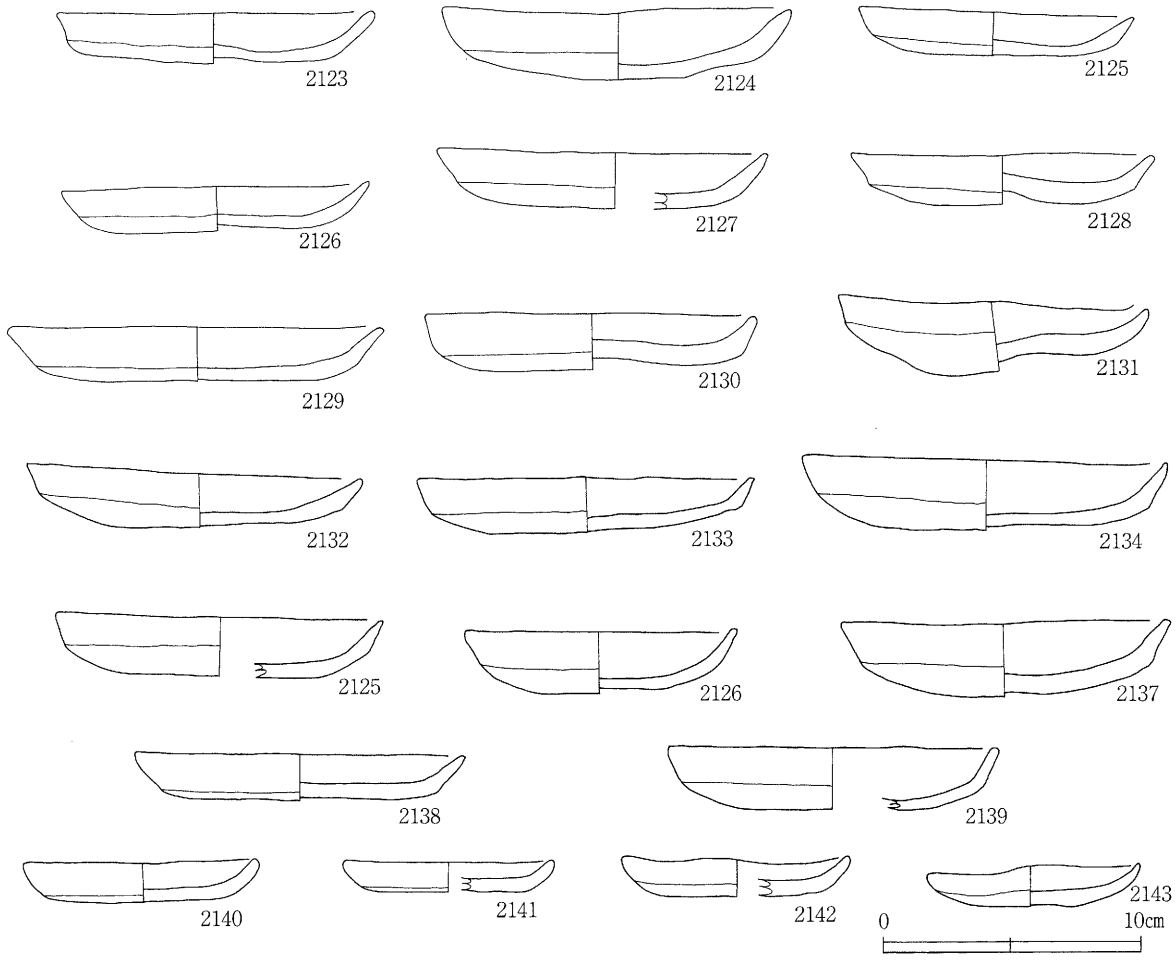
2199は柱状高台かわらけである。底面は磨耗しているが回転糸切痕がある。身部の内面には油煙が付着している。

2200は一般的なかわらけではなく、大型の器種である。ロクロかわらけと同じ胎土で、内外面にロクロ調整が施されている。



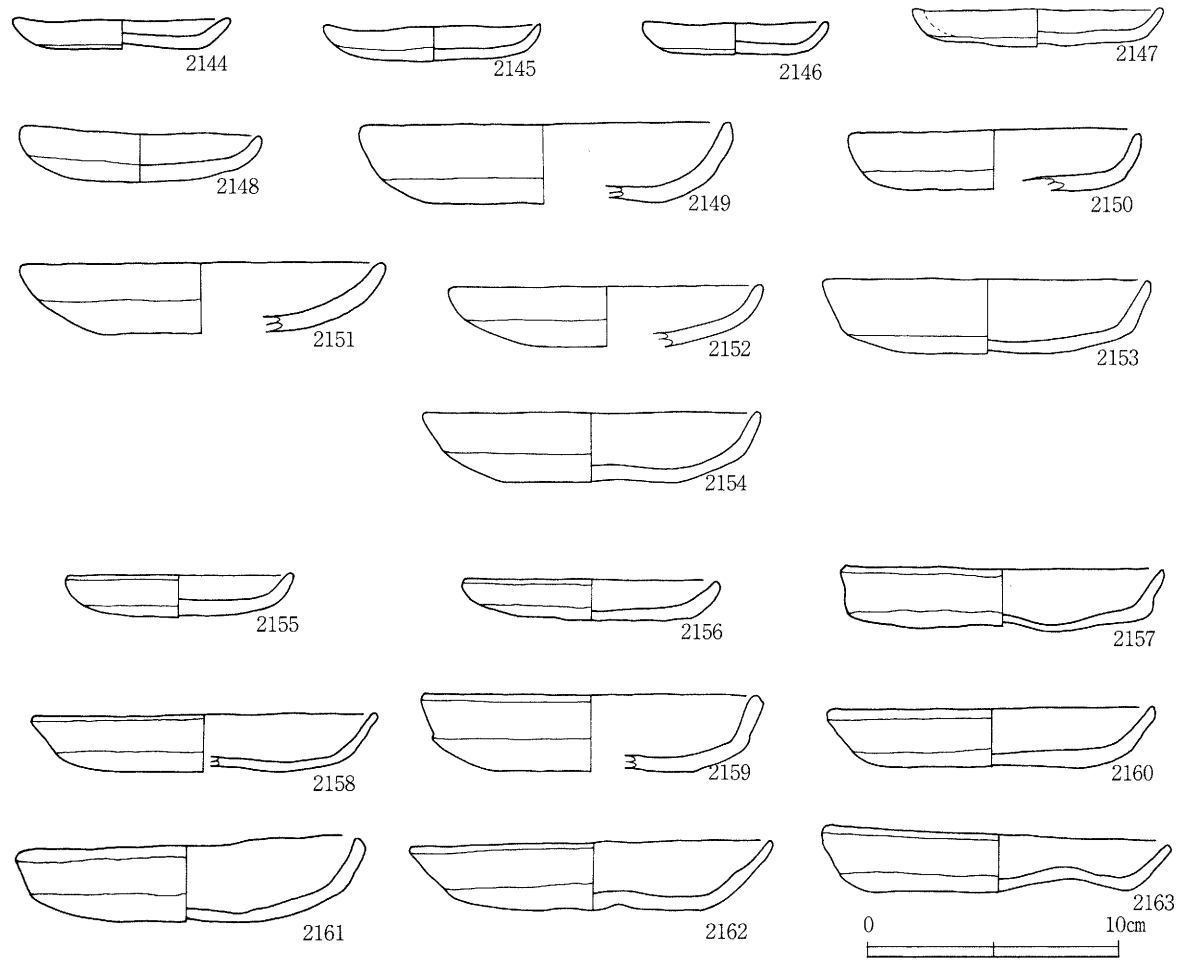
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
2101	74SK15　2層	D2	8		1.2	不明	不明	100	細砂少量	摩耗している
2102	74SK33埋土	〃	8.1		1.5	木目	なし	90	細砂少量	
2103	74SD6埋土(ⅢB1b)	〃	8.2		1.5	指？	なし	100	細砂少量	
2104	74SD5埋土(ⅢB0d)	〃	8.3		1.5	木目	なし	100	細砂少量	
2105	74SD6埋土(ⅢB0d)	〃	9.1		1.3	木目	不明	100	細砂少量	摩耗している
2106	74SD4埋土(ⅢB0d)	〃	9.1		1.2	不明	不明	100	細砂少量	摩耗している
2107	74SK33埋土	〃	8.1		1.2	不明		40	細砂少量	
2108	74SE3　3層	〃	8.0		1.5	不明		50	細砂少量	
2109	74SE3　3層	〃	7.3		1.4	指？	なし	50	細砂少量	
2110	74SK33　1層	〃	8.6		1.3	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2111	74SE3　3層	〃	9.2		1.6	不明	不明	70	細砂少量	摩耗している
2112	74SK27埋土	〃	8.5		1.5	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2113	74SK27埋土	〃	9.0		1.3	不明	不明	80	細砂少量	摩耗している
2114	74SK20埋土	〃	8.8		1.4	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2115	74SD5埋土(ⅢB2d)	〃	9.7		1.8	指か布	すのこ痕	100	細砂少量	内面に油煙付着
2116	74SK27埋土	〃	9.5		1.6	不明	不明	40	細砂少量	摩耗している
2117	74SK27埋土	〃	12.0		2.1	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2118	74SK33埋土	〃	12.5		2.3	指か布	すのこ痕	50	細砂少量	
2119	74SK27埋土	〃	11.7		1.9	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2120	74SK27埋土	〃	11.3		2.8	不明	不明	20	細砂少量	摩耗している
2121	74SK27埋土	〃	11.5		2.4	不明		60	細砂少量	
2122	74SK6埋土	〃	13.4		2.3	不明	不明	80	細砂少量	摩耗している

第76図　B地区のかわらけ①



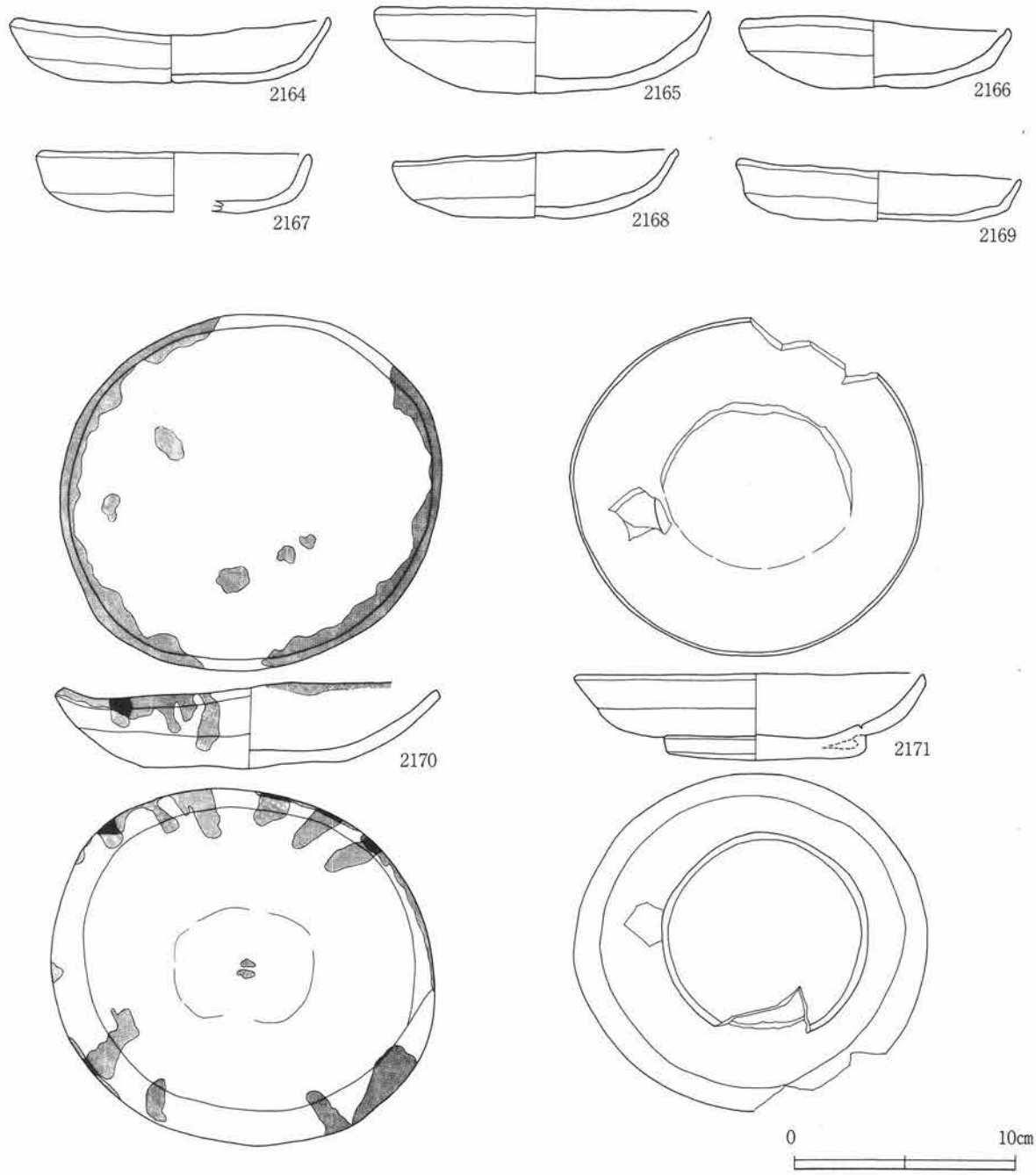
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
2123	74ＳＫ27埋土	Ｄ２	12.2		2.0	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2124	74ＳＫ13埋土	〃	13.5		2.6	不明	不明	100	〃	摩耗している
2125	74ＳＤ3埋土（ⅢＢ5ｅ）	〃	10.6		1.7	不明	不明	30	〃	
2126	74ＳＤ3埋土（ⅢＢ5ｅ）	〃	11.9		1.8	不明	不明	40	〃	摩耗している
2127	74ＳＥ４埋土	〃	12.7		1.4	木目	なし	20	〃	
2128	74ＳＫ27埋土	〃	11.7		1.4	木目	なし	40	〃	
2129	74ＳＤ5埋土（ⅢＢ1ｄ）	〃	14.5		2.1	指	すのこ痕	50	〃	
2130	74ＳＫ27埋土	〃	12.7		2.2	不明	不明	30	〃	摩耗している
2131	74ＳＫ27埋土	〃	12.0		2.7	不明	不明	50	〃	摩耗している
2132	74ＳＥ２　２層	〃	13.0		2.1	木目	すのこ痕	100	〃	
2133	74ＳＤ5埋土（ⅢＢ0ｄ）	〃	13.0		2.2	布か皮	すのこ痕	100	〃	
2134	74ＳＤ5埋土（ⅢＢ0ｄ）	〃	14.1		2.8	不明	すのこ痕	60	細砂多量	内面摩耗している
2135	74ＳＫ33　１層	〃	12.6		2.3	不明	不明	30	細砂少量	摩耗している
2136	74ＳＫ27埋土	〃	10.4		2.5	不明	不明	70	〃	摩耗している
2137	74ＳＥ３　４層	〃	12.5		2.9	木目	なし	40	細砂少量	
2138	74ＳＫ33埋土	〃	12.7		1.8	不明	不明	50	〃	摩耗している
2139	74ＳＫ20埋土	〃	12.7		2.5	指？	すのこ痕	40	〃	
2140	74ＳＤ4埋土（ⅢＢ4ｄ）	Ｄ３	9.0		1.5	不明	不明	60	〃	摩耗している
2141	74ＳＫ９底面	〃	8.7		1.7	不明	不明	40	〃	摩耗している
2142	74ＳＫ33埋土	〃	8.7		1.5	不明	不明	40	〃	摩耗している
2143	74ＳＫ20埋土	〃	8.3		1.6	不明	不明	50	〃	摩耗している

第77図　Ｂ地区のかわらけ②



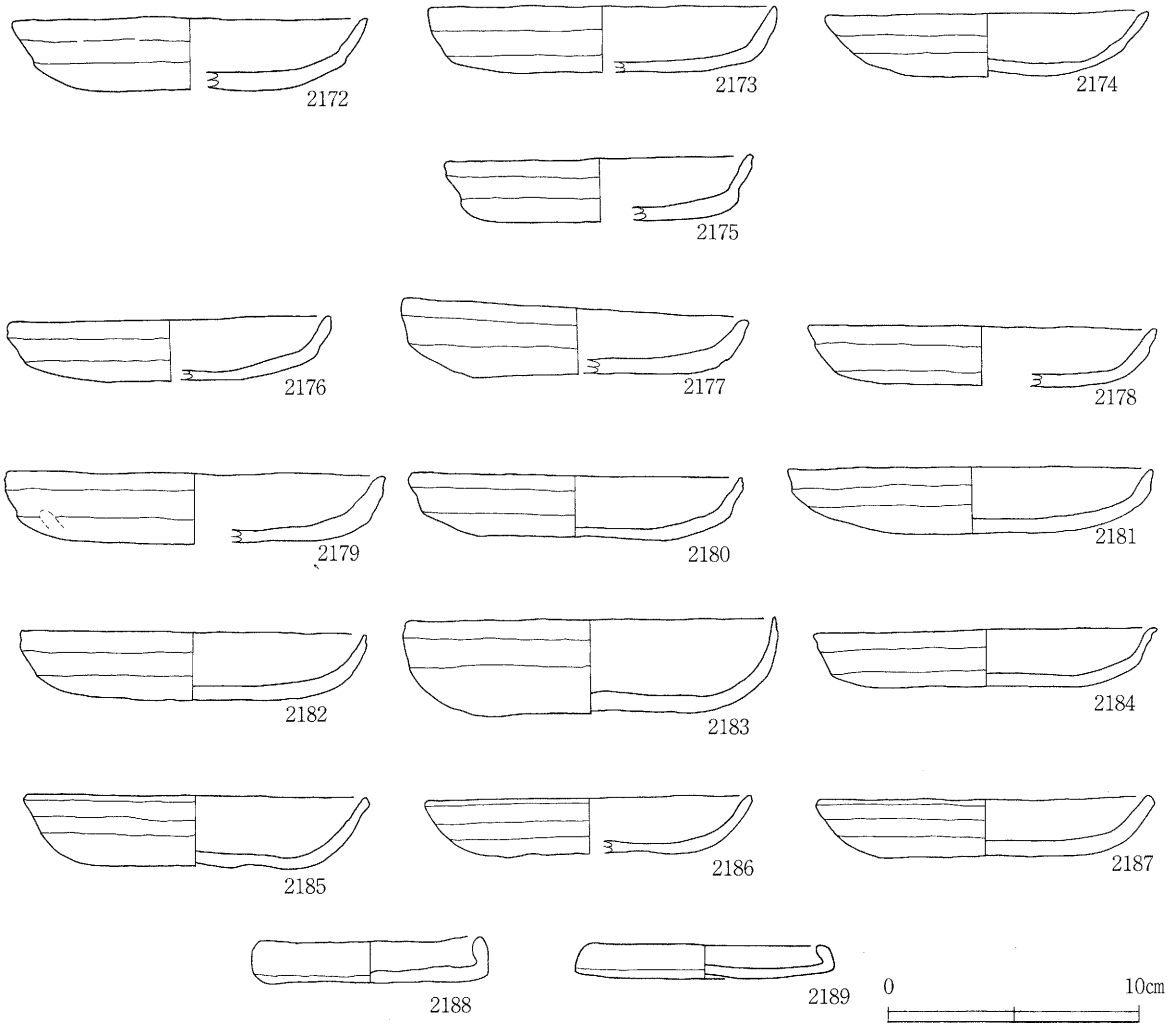
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
2144	74SK33　2層	D3	8.4		1.1	木目	なし	80	細砂少量	
2145	74P18掘方	〃	8.5		1.3	指？	なし	50	〃	
2146	74SK27埋土	〃	7.1		1.2	不明	不明	50	〃	摩耗している
2147	74SE3　5層	〃	9.6		1.5	指	すのこ痕	30	〃	
2148	74SD6埋土(ⅢB2b)	〃	9.2		1.9	皮？	すのこ痕	70	〃	
2149	74SE4埋土	〃	14.3		3.2	指	すのこ痕	30	〃	内面油煙付着
2150	74SE3　4層	〃	11.3		2.3	指	なし	30	〃	
2151	74SD2埋土	〃	14.0		2.8	不明	不明	30	〃	摩耗している
2152	74SK27埋土	〃	12.1		2.4	不明	不明	40	〃	摩耗している
2153	74SK27埋土	〃	12.7		2.9	不明	すのこ痕	50	〃	摩耗している
2154	74SK32底面	〃	13.1		2.2	不明	不明	60	〃	摩耗している
2155	74SD6埋土(ⅢB2b)	D4	8.6		1.7	皮？	すのこ痕	50	〃	
2156	74SK27埋土	〃	10.0		1.6	不明	不明	50	〃	摩耗している
2157	74SK33埋土	〃	12.5		2.3	不明	すのこ痕	80	〃	摩耗している
2158	74SK4埋土	〃	13.3		2.3	木目？	不明	60	細砂多量	胎土に海綿状骨針少量混入
2159	74SE3　3層	〃	13.0		3.0	皮	すのこ痕	30	細砂少量	
2160	74SK33　1層	〃	12.7		2.3	木目	すのこ痕	60	〃	
2161	74SK33埋土	〃	13.2		3.0	指？	すのこ痕	90	〃	
2162	74SK36埋土	〃	14.1		2.6	皮	すのこ痕	50	〃	
2163	74SE2埋土	〃	13.6		2.3	不明	不明	50	〃	摩耗している

第78図　B地区のかわらけ③



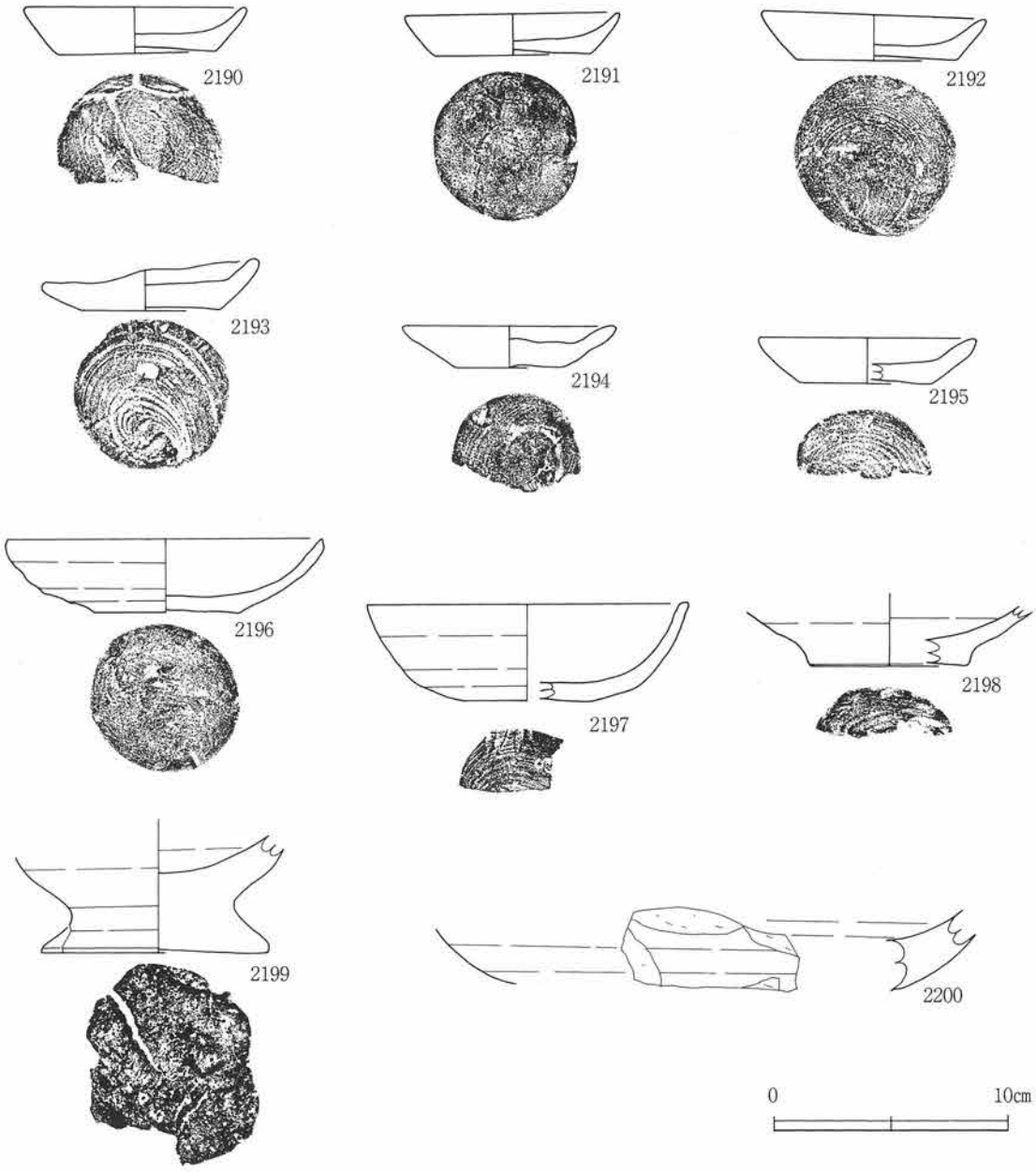
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
2164	74SK33埋土	D4	14.2		2.1	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
2165	74SK9底面	〃	14.7		4.8	皮	なし	100	〃	
2166	74SX1　1層	〃	11.8		3.0	不明	なし	100	細砂多量	摩耗している
2167	74SD3埋土（ⅢB5f）	〃	12.0		2.7	不明	不明	30	細砂少量	
2168	74SK13埋土	〃	12.5		2.9	不明	不明	60	細砂多量	海綿状骨針少量混入
2169	74SK14埋土	〃	12.7		2.3	不明	すのこ痕	70	細砂少量	
2170	74SK8　3層	〃	16.6		3.1	指	すのこ痕	100	細砂多量	内外面油煙付着
2171	74SK9底面	〃	15.4		3.9	皮	不明	100	細砂少量	底面に内折れかわらけが付着

第79図　B地区のかわらけ④



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
2172	74SE3　5層	C3	13.7		2.8	皮か布	すのこ痕	30	細砂少量	胎土に海綿状骨針少量混入
2173	74SK27埋土	〃	13.5		1.6	指？	すのこ痕	50	細砂多量	
2174	74SK27埋土	〃	12.6		2.5	不明	不明	60	細砂少量	摩耗している
2175	74SE3　3層	〃	12.0		2.5	木目	不明	20	〃	
2176	74SK27埋土	C4	12.5		2.5	指	すのこ痕	30	〃	
2177	74SE3　4層	〃	13.3		2.6	皮	すのこ痕	30	〃	
2178	74SD3埋土（ⅢB5f）	〃	13.5		2.3	不明	不明	30	〃	摩耗している
2179	74SE3　5層	〃	14.6		2.8	皮	すのこ痕	20	〃	
2180	74SD6埋土（ⅢB0d）	〃	13.0		2.4	不明	不明	40	〃	摩耗している
2181	74SK15　2層　上面	〃	14.3		2.7	不明	不明	50	〃	摩耗している
2182	74SD6埋土（ⅢB1b）	〃	13.5		2.7	不明	すのこ痕	70	〃	
2183	74SE2埋土	〃	14.5		3.7	不明	すのこ痕	60	細砂多量	摩耗している
2184	74SD6埋土（ⅢB1b）	〃	13.1		2.2	木目	すのこ痕	90	細砂少量	内外面にわずかに油煙付着
2185	74SK331層	C5	13.2		2.8	不明	すのこ痕	50	〃	摩耗している
2186	74SK33埋土	〃	12.6		2.7	木目	すのこ痕	40	〃	
2187	74SD5埋土（ⅢB0d）	〃	13.1		2.2	不明	不明	50	〃	
2188	74SD6埋土（ⅢB2b）	内折れ	8.6		1.6	不明	不明	100	細砂多量	
2189	74SD6埋土（ⅢB1b）	〃	9.0		1.3	不明	不明	100	細砂少量	

第80図　B地区のかわらけ⑤



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底の（すこし痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
2190	74ＳＫ36埋土	ｒｄ	9.2	6.1	2.0	ロクロ	糸切	60	海綿状骨針	
2191	74ＳＫ36埋土	〃	9.0	6.1	1.7	ロクロ	糸切	100	〃	
2192	74ＳＫ36埋土	〃	9.2	6.7	1.9	ロクロ	糸切	100	〃	
2193	74ＳＥ４　３層	〃	8.8	5.8	1.2	ロクロ	糸切	100	〃	
2194	74ＳＥ３　３層	〃	8.8	4.5	1.2	ロクロ	糸切	40	〃	
2195	74ＳＥ５埋土	〃	8.9	5.5	2.0	ロクロ	糸切	4	〃	摩耗している
2196	74ＳＤ5埋土（ⅢＢ0ｄ）	Ｒｄ24	13.2	6.1	3.1	ロクロ	糸切	100	〃	
2197	74ＳＫ11埋土	Ｒｄ04	13.3	5.1	4.1	ロクロ	糸切	40	〃	
2198	74ＳＤ6埋土（ⅢＢ2Ｃ）	Ｒｄ	－	6.1	(3.1)	ロクロ	糸切	15	〃	内外面黒色を呈する
2199	66ＳＫ３埋土	柱状高台	－	9.1	(5.6)	ロクロ	糸切	50	〃	内面油煙付着
2200	74ＳＥ３　１層	大形	－	－	－	ロクロ		2	〃	ロクロかわらけと同じ胎土

第81図　Ｂ地区のかわらけ⑥

3　国産陶器（第82～100図、写真図版117～132）

（1）常滑産陶器（第82～92図、写真図版117～125）

本調査区から出土した常滑産陶器は中野・赤羽生産地編年の2型式と3型式に相当するものが出土している。だが特徴的な部位のない破片資料を2形式と3形式に分けるのは分類するのはかなり難しく。どちらに分類されるのか不明なものがほとんどである。

図示したのは山皿1点、片口鉢8点、広口壺13点、広口壺以外の壺4点、甕79点である。他に図示しなかった常滑産陶器の破片が166片ある。

2201は高台のつかない山皿である。外底面にはかすかに回転糸切痕がみられる。内面には自然釉がかかっている。

2202～2209は片口鉢である。2202、2203は口唇部に面取りがあり、2型式に分類される。2203は外面の輪積み痕が顕著に残る。内面の下半部はやや磨耗している。

2203の内面は自然釉がかかっている。2204は高台の断面形が三角形であり、2型式に分類される。内底面はやや磨耗しており外底面の高台内には灰が付着している。2205は口唇部に面取りがあるもののシャープな作りではなく、3型式と考えたい。片口部の突出しが始まる部分の破片である。2206、2207は底部の破片であるが2型式、3型式の区別をつけがたい。どちらも内底面が磨耗している。2206の高台はきゃしゃな作りである。2208、2209は体部下半の破片である。どちらも内面が磨耗しているが、2209は磨耗度がかなり強い。またどちらも外面には回転ヘラケズリ痕がみられる。

2210～2213は壺である。2210は三筋壺の器形である。しかし最下の三段目の沈線があるべき部位の破片であるのに、それがみられない。二筋壺の可能性も考えられる。外面に一条の垂下する自然釉がみられる。2211は壺の下半部である。三筋壺にしては大振であるが、広口壺にしては体部の立ち上がりがまっすぐである。底部に窯体の付着があり、正立させることができない。74ＳＤ4と74ＳＤ6から出土した破片が接合した。2212は壺の肩部破片である。三筋壺の破片と推測される。外面には自然釉が垂れかかる。2213は縦耳を持つ壺の肩部破片である。外面には自然釉がかかる。耳は張り付けである。小破片のため双耳あるいは四耳なのかは判断しようがない。どちらにせよ平泉遺跡群ではあまり例のない資料である。

2214～2226は広口壺である。2214は3破片から合成して実測図をおこした。合成した器形なので難があるかもしれないが2型式と考えられる。頸部から体部上半には自然釉がかかる。体部にはヘラの木目が残るナデ調整がおこなわれている。また体部上半には横位のヘラケズリが施されている。2214はⅢＢ５ｃの74ＳＤ6埋土から出土したが、ⅣＢ４ａ出土の破片（3514）と接合した。約50m離れての接合である。図示したのは接合した状態である。上半部には自然釉がかかり、下半部には木目の残るヘラナデがおこなわれている。口縁部を欠き2型式、3型式の区別ができない。2216は広口壺の口縁部破片である。口唇部に面がとられている。内面には自然釉がかかる。2217は肩部の破片である。内面に漆状のものが付着している。2218、2219は同一個体の体部破片である。2218～2223は体部の破片である。薄手で押印がなく広口壺と判断した。2224は広口壺の底部から体部下半の破片である。内面に灰が付着している。2225は底辺部近くの破片、2226は2226に質感が類似しており同一個体の可能性も考えられる。

2227～2305は甕である。2227は口唇部を欠くが頸部の立ち上がり具合から2型式に分類される。2228、2230は3型式と考えられる。2229は口縁部がゆがんでおり、型式分類が難しい。口唇部外面にくぼみがある。

2231は底部から口縁部まで接合した甕である。破片のほとんどは74ＳＥ3の埋土から出土したが、74ＳＤ

６埋土（ⅢＢ１ｂ）から出土した破片もある。74ＳＥ３からは破片の状態で各層位からばらばらに出土した。口縁部～頸部の形態から３型式に分類される。底部から口縁部まで接合できたものの、破片は全体の30％ほど（感覚的な概算）しか残っていない。2232～2234は同一個体であるが接合できなかった破片である。他に図示しなかった小破片が数片ある。いずれも74ＳＥ３埋土からの出土である。色調は内外面ともに灰色で、自然釉はかかっていない。押印は帯状に５段施されている。また押印を施す前に上から下へのヘラナデが行なわれている。外底面には砂が蛇の目状に付着している。内面には輪積痕が顕著に残り、ナデの調整もみられる。頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁の端部内面にはくぼみがない。

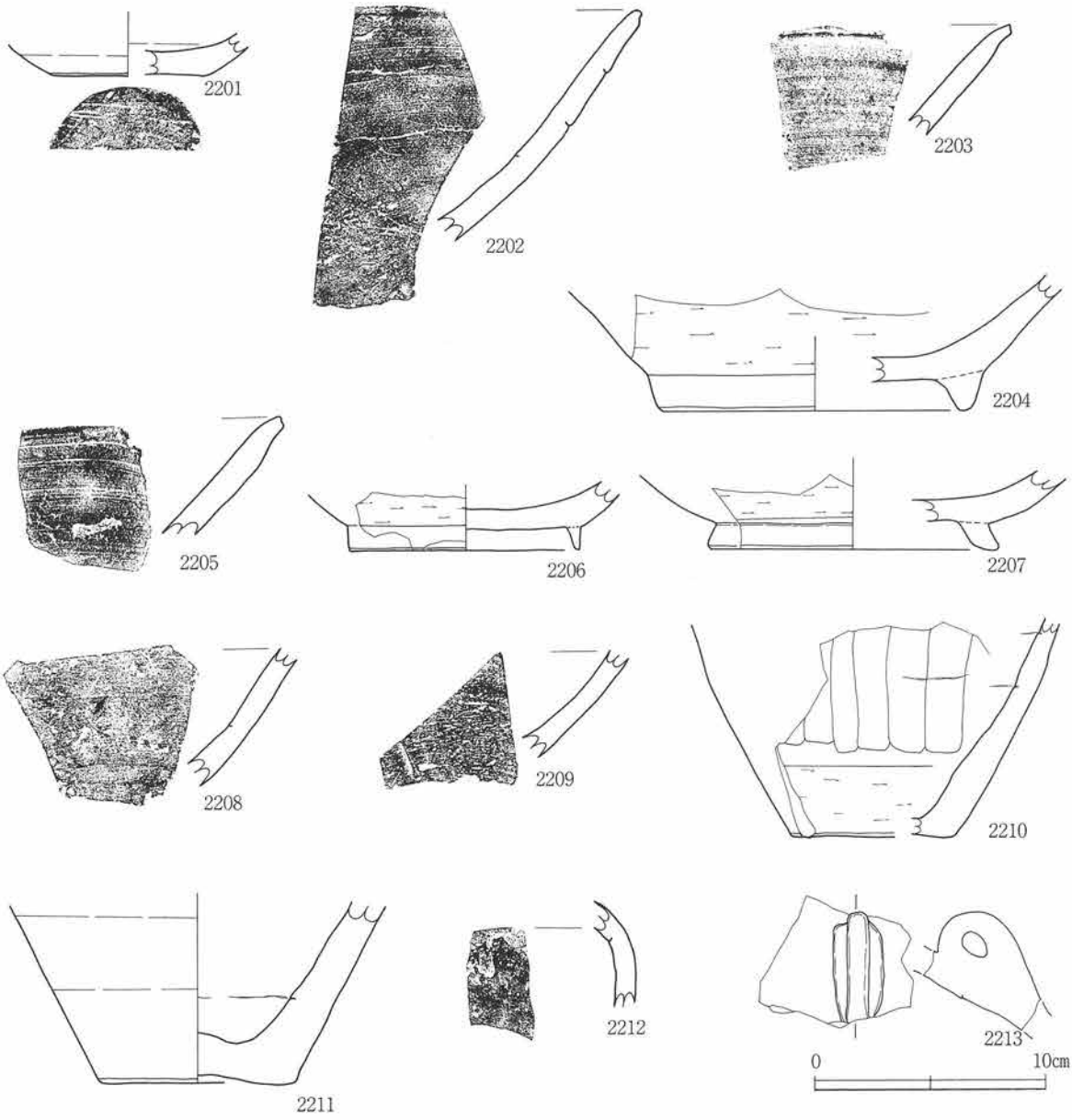
2235～2243は同一個体の甕である。多くは74ＳＥ３の埋土中から出土したが、74ＳＤ４、74ＳＥ４、74ＳＤ９からも破片が出土している。またＡ地区の46ＳＥ７、46ＳＥ９の埋土から、接合はしないが同一個体の破片が出土している（1224～1227）。このように各地に破片が散乱している状態である。全体の器形は接合しないので不明であるが、頸部は内傾して立上がっており３型式に分類される。2236には外底面部が僅かに残っているが、砂粒が付着している。押印は５～６段巡っていると推測される。押印の下地にはナデ調整が施されている。内面にはナデ調整がみられるが輪積痕がかなり残る。色調は赤褐色～にぶい赤褐色を呈し、頸部から肩部には自然釉がかかる。断面の胎土の色調は浅黄橙色である。2239は外面に擦った痕跡があり器面が平滑になっている。

2244～2247は同一個体の甕である。いずれの破片も外面にはオリーブ色の自然釉がかかり、内面は橙色でていねいなナデが施されている。2245、2247には押印がみられるが、2275～2278と同じ押印が施されている。だが2244～2247と2275～2278は色調は全く異なっている。同一個体である可能性と、別個体であるが同じ窯の産で、共通の押印具を使用した可能性の両者が考えられる。

2248～2261は同一個体の甕である。暗赤褐色の器面に自然釉がかかっている。大部分は道路側溝である74ＳＤ４、74ＳＤ６の埋土中から出土している。

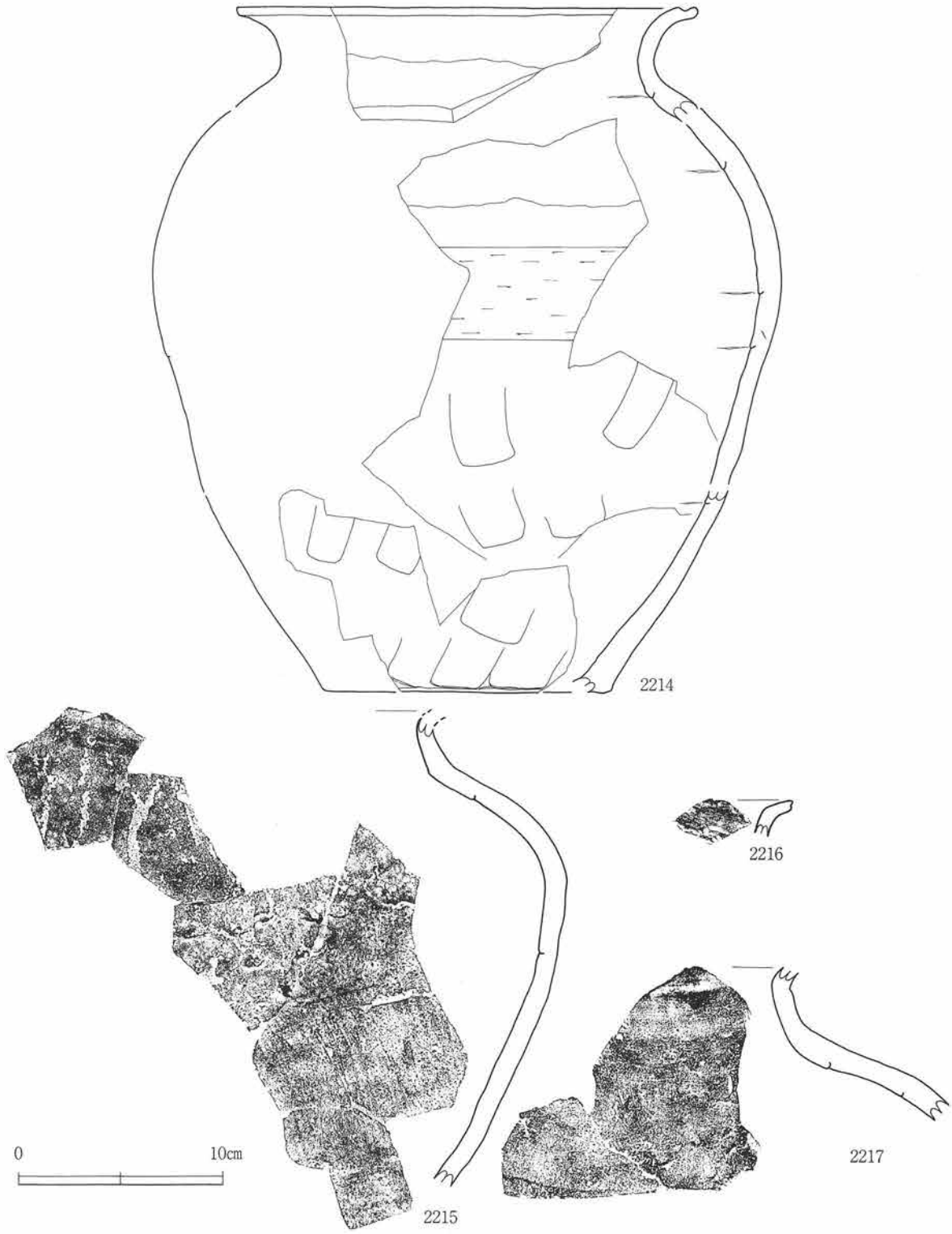
2262～2274も同一個体の甕と考えられる。自然釉のかかる破片と灰色を呈する色調の破片がある。内面のナデ調整は粗い。

2275～2279は押印が共通している。2275～2278は胎土も共通しており同一個体と考えられる。だが2279はやや異なった器面の質感で同一個体かどうか判断が難しい。これらの押印は2244～2247の押印とも共通する。2280～2282、2283と2284、2285～2287、2288～2290はそれぞれ胎土、押印から同一個体と考えられる。2299は他の個体に比べて砂粒が非常に多量に混じる胎土である。2304は内外面ともに非常に磨耗している。2305は底部破片であるが、底面に砂粒が付着する。



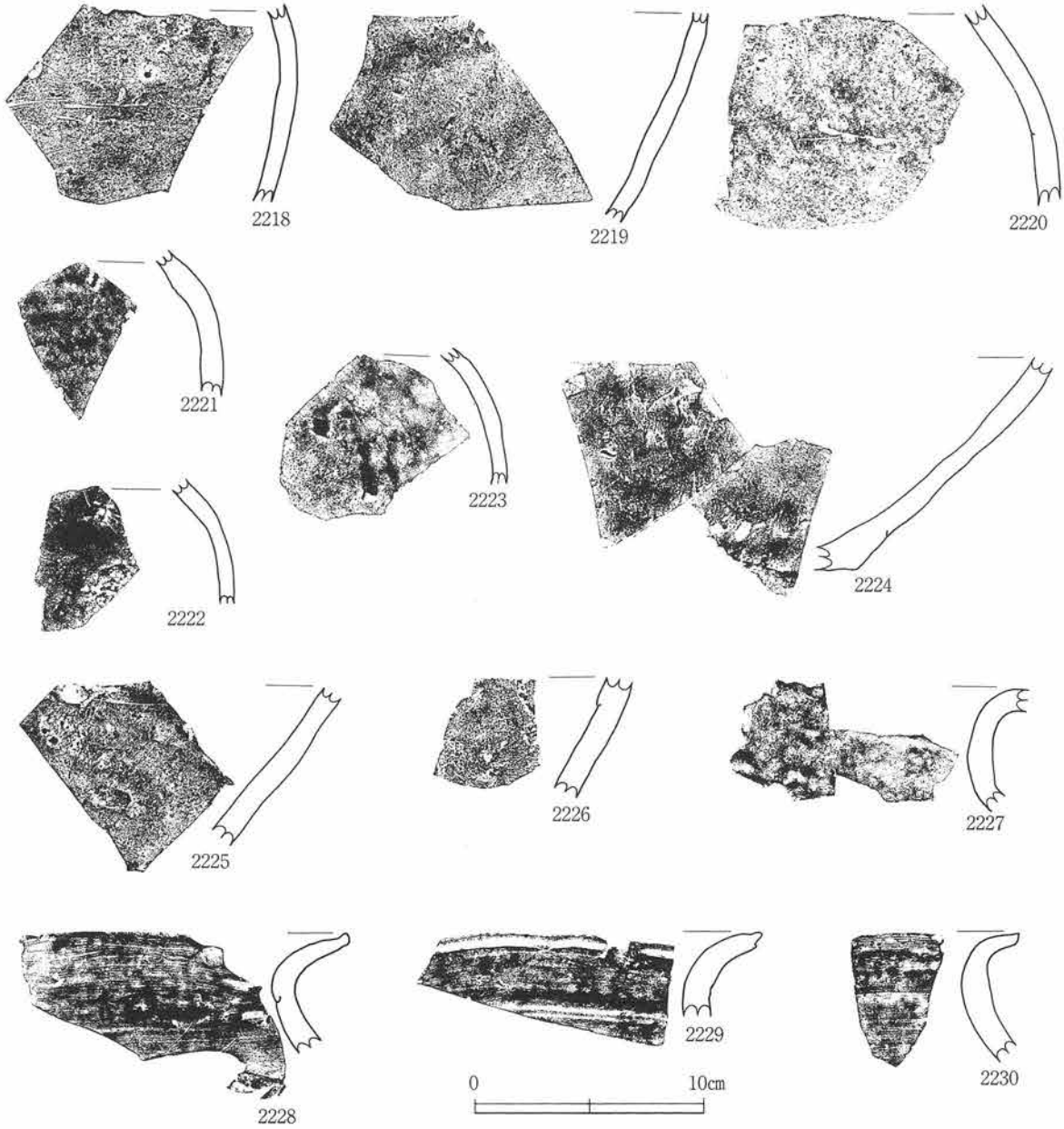
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2201	常滑	山皿	底	74ＳD4埋土(ⅢB6d)	3型式	灰白色	内面自然釉
2202	〃	片口鉢	口～体	74ＳD6埋土(ⅢB4b)	2型式	〃	外面の輪積み痕　顕著
2203	〃	〃	口	74ＳD4埋土(ⅢB1d)	2型式	〃	内面に自然釉
2204	〃	〃	底～体	74ＳD6埋土(ⅢB3d)	2型式	〃	外底面に灰付着
2205	〃	〃	口	74ＳD6埋土(ⅢB0b)	3型式	〃	片口部の突出が始まる部分の破片
2206	〃	〃	底	74ＳD4埋土(ⅢB5d)	3型式	〃	内底面摩耗
2207	〃	〃	底	ⅢB6b表土	2～3型式	〃	内底面摩耗
2208	〃	〃	体	74ＳD4埋土(ⅢB3d)	2～3型式	灰白色	内面やや摩耗
2209	〃	〃	体	74ＳD4埋土(ⅢB6d)	2～3型式	暗灰色	内面摩耗著しい
2210	〃	壺	底～体	74ＳD4埋土(ⅢB2d)	2～3型式	灰黄色	三筋壺の器形であるが沈線がない
2211	〃	〃	底～体	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	2～3型式	褐灰色	74ＳＤ４埋土（ⅢＢ３ｄ）からも出土
2212	〃	〃	肩	74ＳE2埋土	2～3型式	褐灰色	外面自然釉　三筋壺か
2213	〃	壺	肩	74ＳD6埋土(ⅢB0c)	2～3型式	灰オリーブ色	縦耳が付く、外面は自然釉

第82図　Ｂ地区の常滑産陶器①



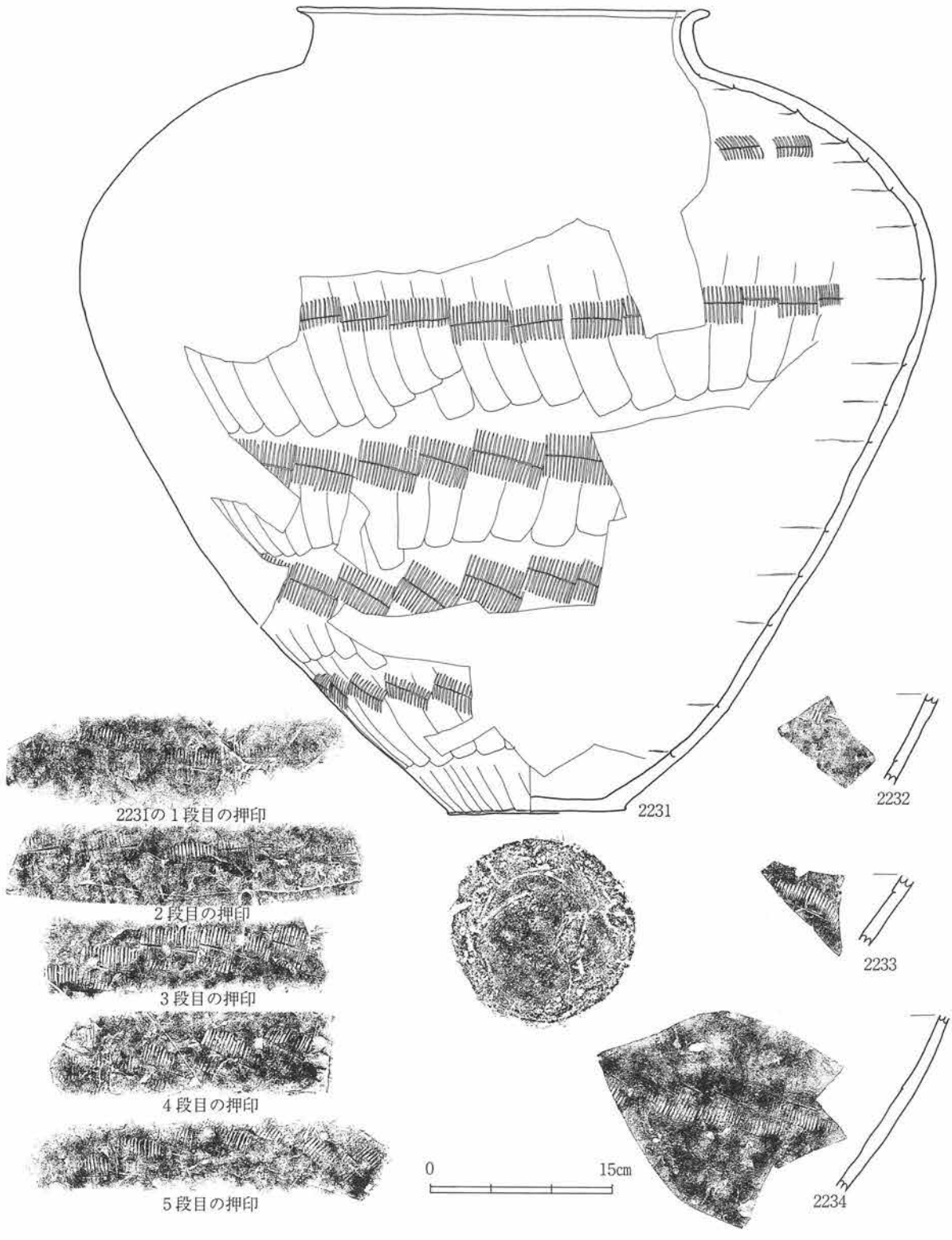
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2214	常滑	広口壺	完形	74SD6埋土(ⅢB1b,5c,6b)	2型式	褐色	74SD4（ⅢB3d、6d）からも出土
2215	〃	〃	肩～体	74SD6埋土(ⅢB5C)	2～3型式	褐色	ⅣB4a表土出土片（3514）と接合
2216	〃	〃	口	ⅢB0b表土	3型式	褐色	内面自然釉
2217	〃	〃	肩	74SD6埋土(ⅢB4c)	3型式	褐灰色	内面に漆状のものが付着

第83図　B地区の常滑産陶器②



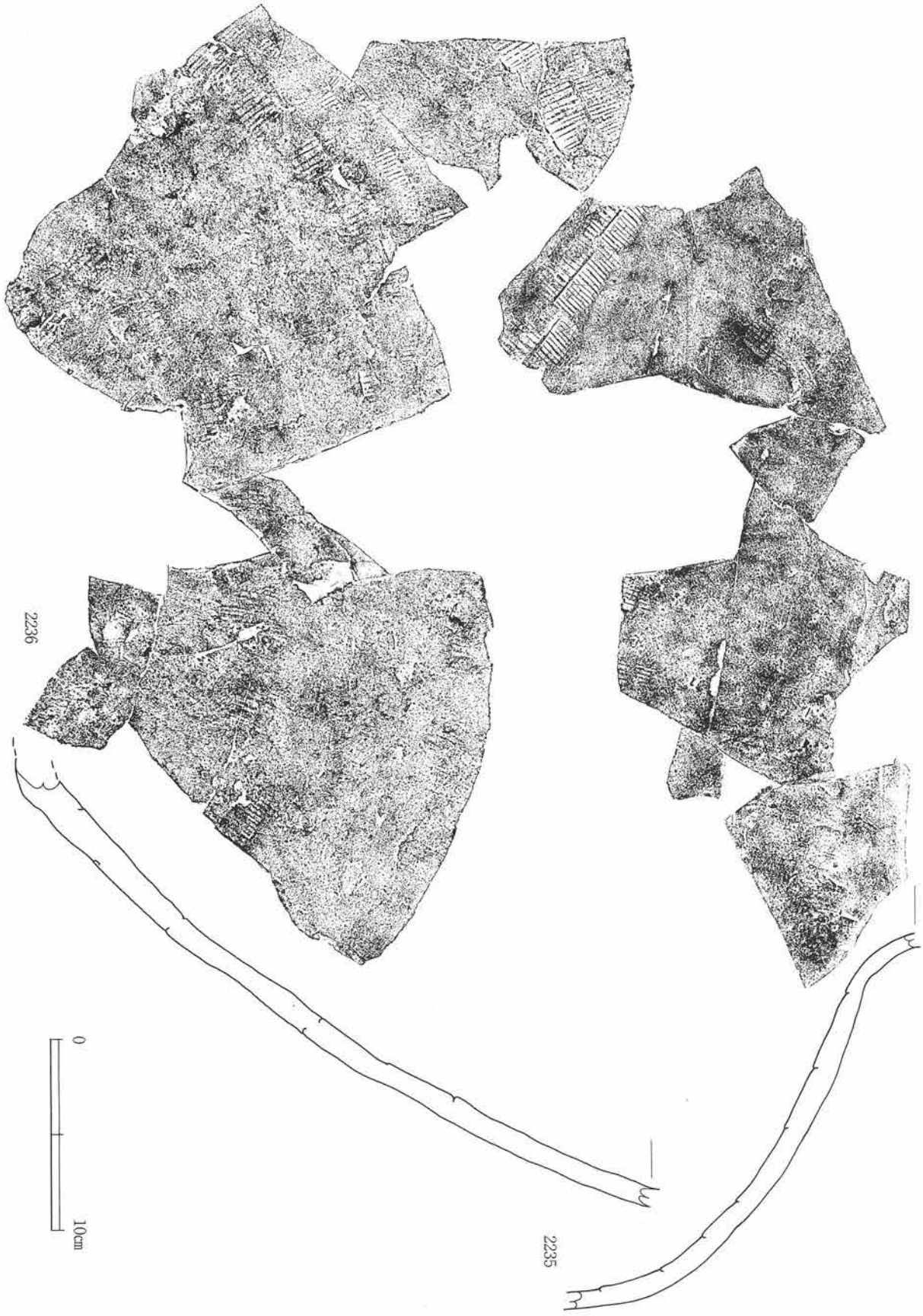
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2218	常滑	広口壺	体	74S D6埋土(Ⅲ B6b)	2～3型式	暗褐色	外面上部に自然釉
2219	〃	〃	〃	74S D6埋土(Ⅲ B4b)	〃	暗褐色	2218と同一個体
2220	〃	〃	〃	74S D4埋土(Ⅲ B5d)	〃	灰色	外面自然釉
2221	〃	〃	〃	74S D4埋土(Ⅲ B3d)	〃	暗褐色	外面自然釉
2222	〃	〃	〃	74S D6埋土(Ⅲ B5b)	〃	褐灰色	外面自然釉
2223	〃	〃	〃	74S E2埋土	〃	暗褐色	外面に自然釉の流れ
2224	〃	〃	底～体	74S D6埋土(Ⅲ B4b)	〃	にぶい黄色	内面に自然釉
2225	〃	〃	体	74S D4埋土(Ⅲ B3d)	〃	暗赤褐色	
2226	〃	〃	〃	74P178埋土	〃	灰黄褐色	
2227	〃	甕	口	74S D6埋土(Ⅲ B4b)	2型式	黄灰色	口唇部欠損
2228	〃	〃	〃	74S D6埋土(Ⅲ B0c)	3型式	にぶい橙色	口縁内面に自然釉
2229	〃	〃	〃	74S D5埋土(Ⅲ B2d)	2～3型式	黄灰色	口唇部にくぼみがある
2230	〃	〃	〃	Ⅲ B区　表採	3型式	灰褐色	2231と同一個体の可能性あり

第84図　B地区の常滑産陶器③

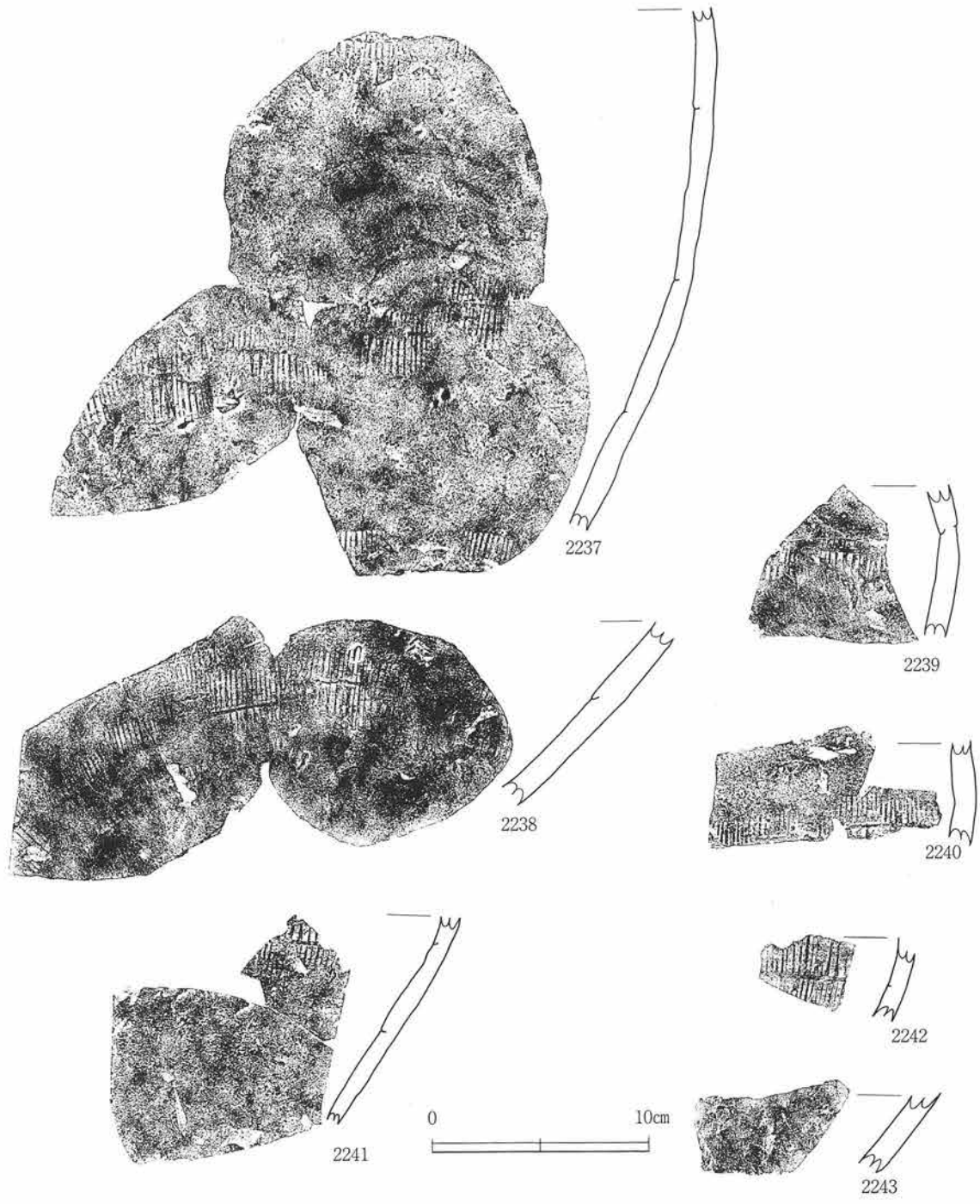


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2231	常滑	甕	完形	74ＳＥ３　１～６層	３型式	暗灰色	外底面に蛇目状に砂痕
2232	〃	〃	体	74ＳＥ３　６層	〃	〃	2231と同一個体
2233	〃	〃	〃	74ＳＥ３　３層	〃	〃	2231と同一個体
2234	〃	〃	〃	74ＳＥ３　１層	〃	〃	2231と同一個体

第85図　Ｂ地区の常滑産陶器④

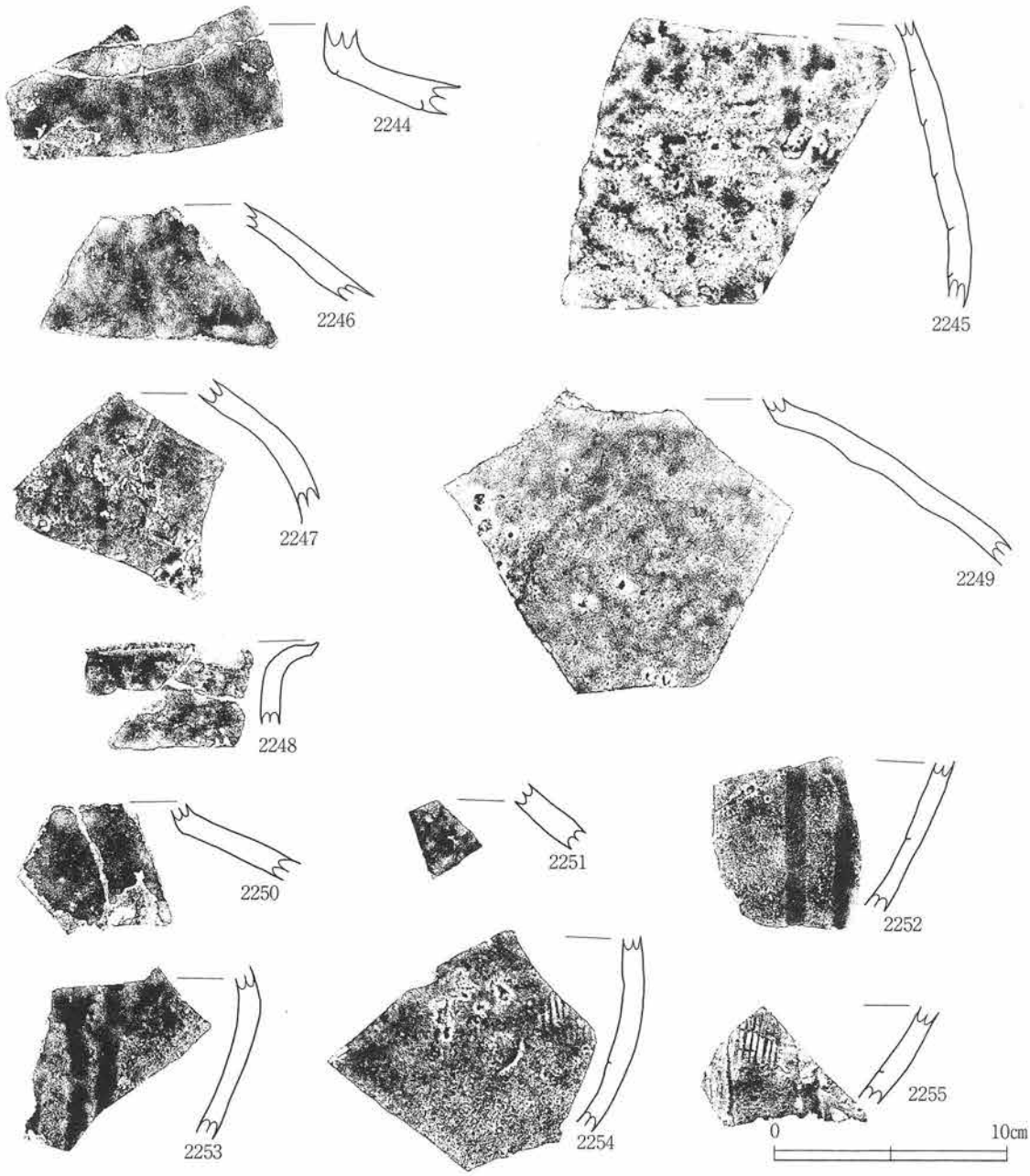


第86図　B地区の常滑産陶器⑤



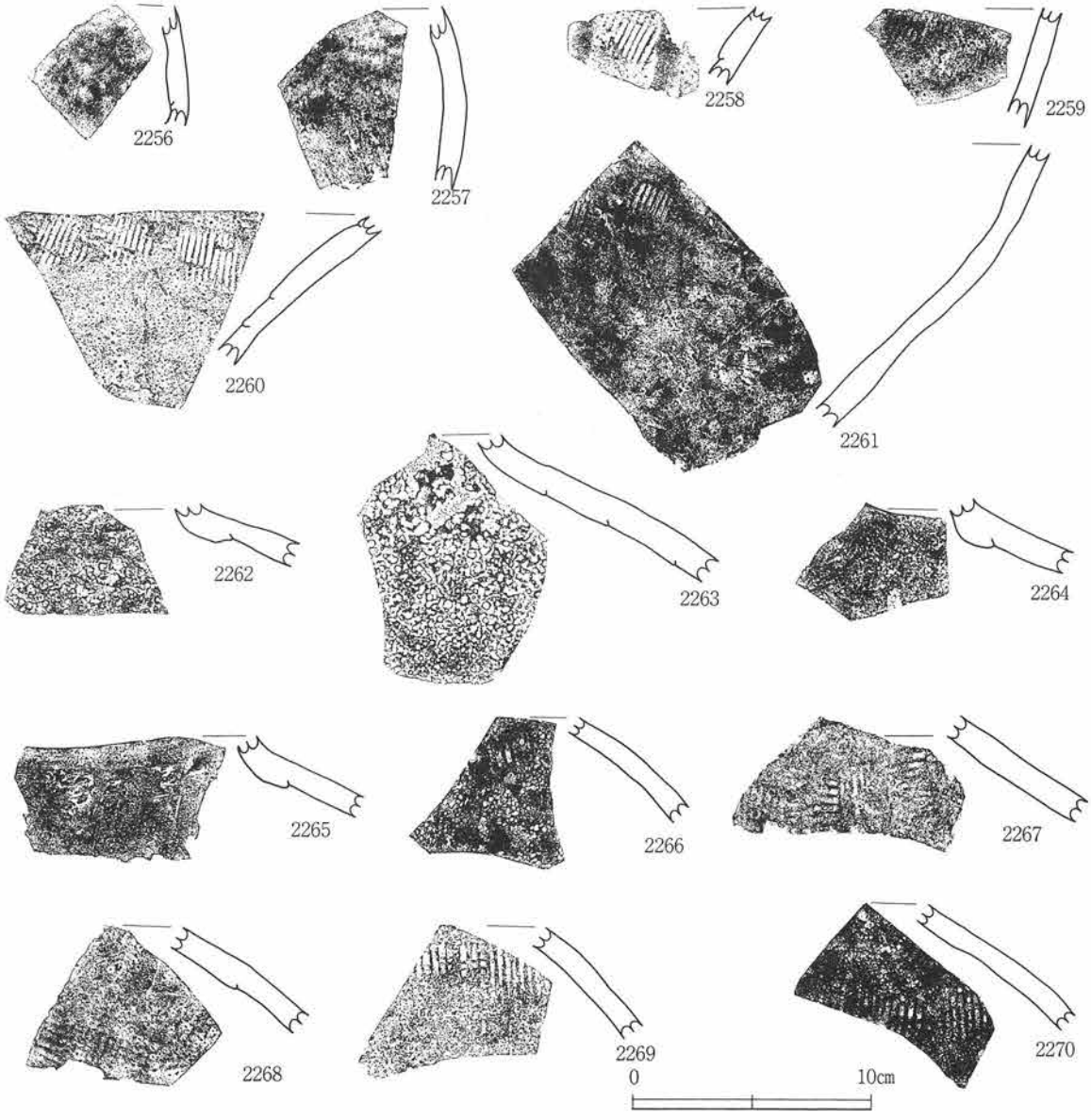
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2235	常滑	甕	肩	74ＳＥ3埋土(1層､3層)	3型式	暗褐色	74ＳＤ６埋土（ⅢＢ２ｄ）からも出土
2236	〃	〃	底~体下	74ＳＥ3埋土(1層､3層､4層､6層)	〃	灰白色	2235と同一個体
2237	〃	〃	体	74ＳＥ3埋土(1~3層､4層)	〃	暗赤褐色	〃
2238	〃	〃	〃	74ＳＥ3埋土(1~3層)	〃	〃	〃
2239	〃	〃	〃	〃	〃	〃	2235と同一個体、外面に擦痕がある
2240	〃	〃	〃	74ＳＤ4埋土(ⅢＢ5ｄ)	〃	暗赤褐色	2235と同一個体
2241	〃	〃	〃	74ＳＥ3埋土(1~3層)	〃	〃	2235と同一個体
2242	〃	〃	〃	74ＳＥ4埋土	〃	にぶい赤褐色	2235と同一個体
2243	〃	〃	〃	74ＳＫ9埋土	〃	〃	2235と同一個体、底辺部の破片

第87図　Ｂ地区の常滑産陶器⑥



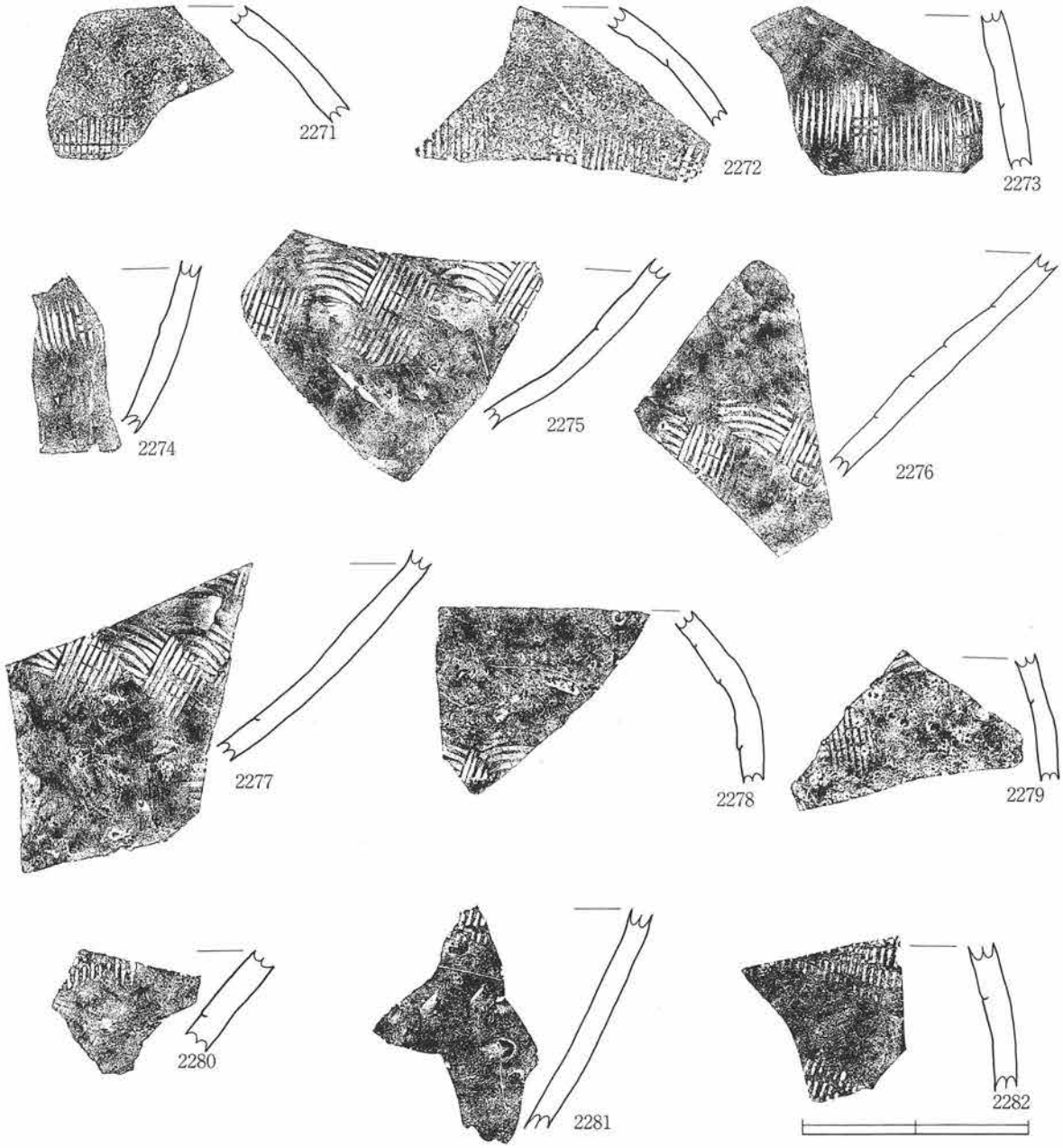
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2244	常滑	甕	肩	74ＳD4埋土(ⅢB4d)	2～3型式	灰オリーブ色	外面　自然釉
2245	〃	〃	体	74ＳK3埋土	〃	オリーブ色	2244と同一個体
2246	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB2c)	〃	〃	〃
2247	〃	〃	〃	ⅢB区表採	〃	灰黄色	2244と同一個体の可能性あり
2248	〃	〃	口	74ＳD6埋土(ⅢB5c)	〃	〃	74ＳＤ４埋土（ⅢＢ５ｃ）からも出土
2249	〃	〃	肩	74ＳD6埋土(ⅢB6b)	〃	オリーブ黒色	2248と同一個体　外面自然釉
2250	〃	〃	肩	74ＳD4埋土(ⅢB5d)	〃	灰褐色	2248と同一個体
2251	〃	〃	体	74P30掘方	〃	灰オリーブ色	
2252	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB2b)	〃	暗褐色	2248と同一個体
2253	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	〃	〃	〃
2254	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB6b)	〃	〃	〃
2255	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB5d)	〃	褐色	2248と同一個体の可能性あり

第88図　Ｂ地区の常滑産陶器⑦



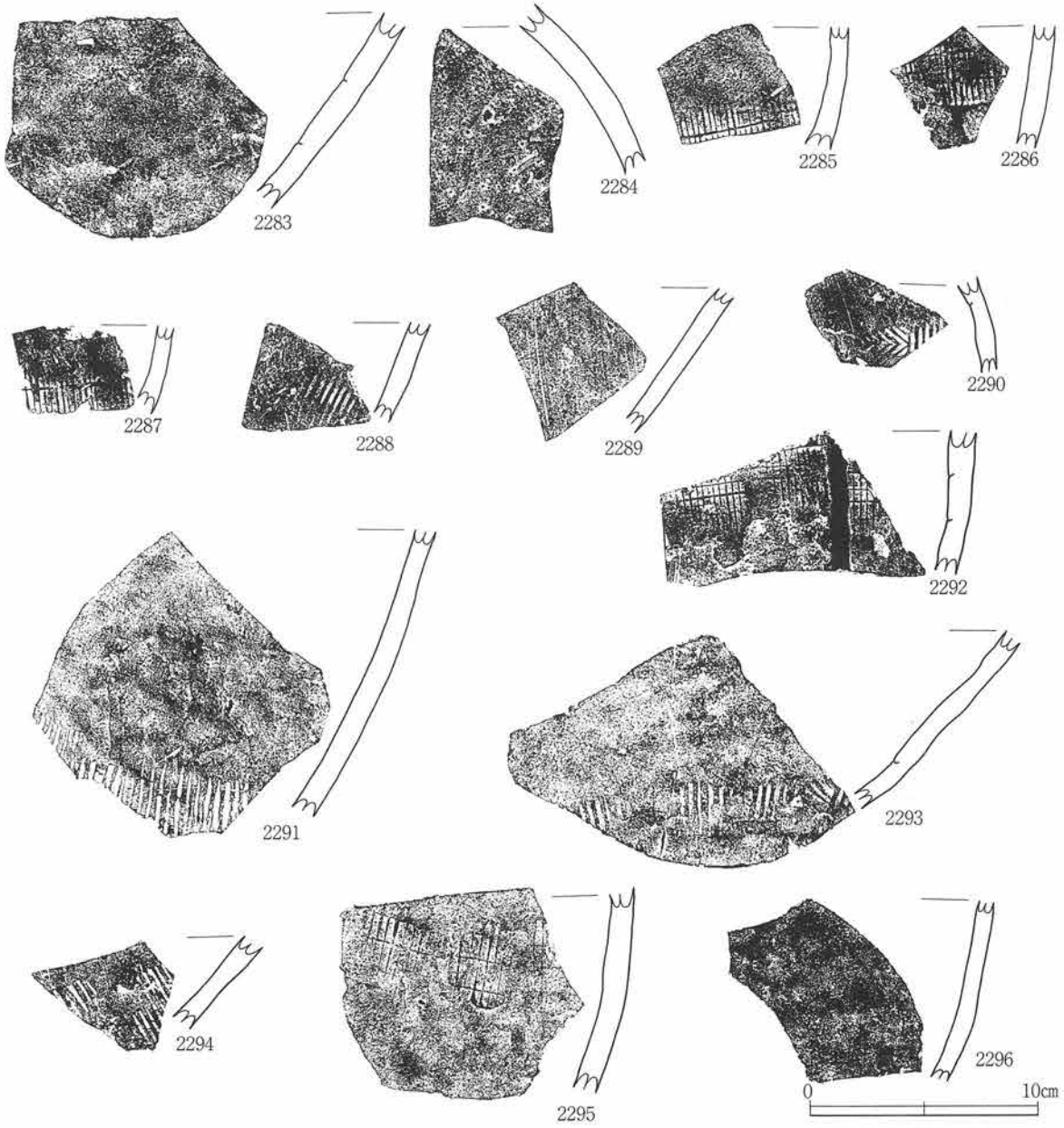
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2256	常滑	甕	体	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	2～3型式	暗褐色	2248と同一個体
2257	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB6b)	〃	〃	〃
2258	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB3d)	〃	〃	〃
2259	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB6b)	〃	〃	〃
2260	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB3d)	〃	〃	〃
2261	〃	〃	体下	74ＳD6埋土(ⅢB2b)	〃	〃	〃
2262	〃	〃	肩	74ＳD6埋土(ⅢB2b)	〃	灰黄褐色	外面自然釉　頸部近くの破片
2263	〃	〃	〃	74ＳD5埋土(ⅢB3d)	〃	〃	2262と同一個体
2264	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB2d)	〃	黄灰色	〃
2265	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB3b)	〃	〃	〃
2266	〃	〃	体	74ＳK35埋土	〃	〃	〃
2267	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB4d)	〃	〃	〃
2268	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB4d)	〃	〃	〃
2269	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB3d)	〃	〃	〃
2270	〃	〃	〃	ⅢB区　表採	〃	〃	〃

第89図　B地区の常滑産陶器⑧



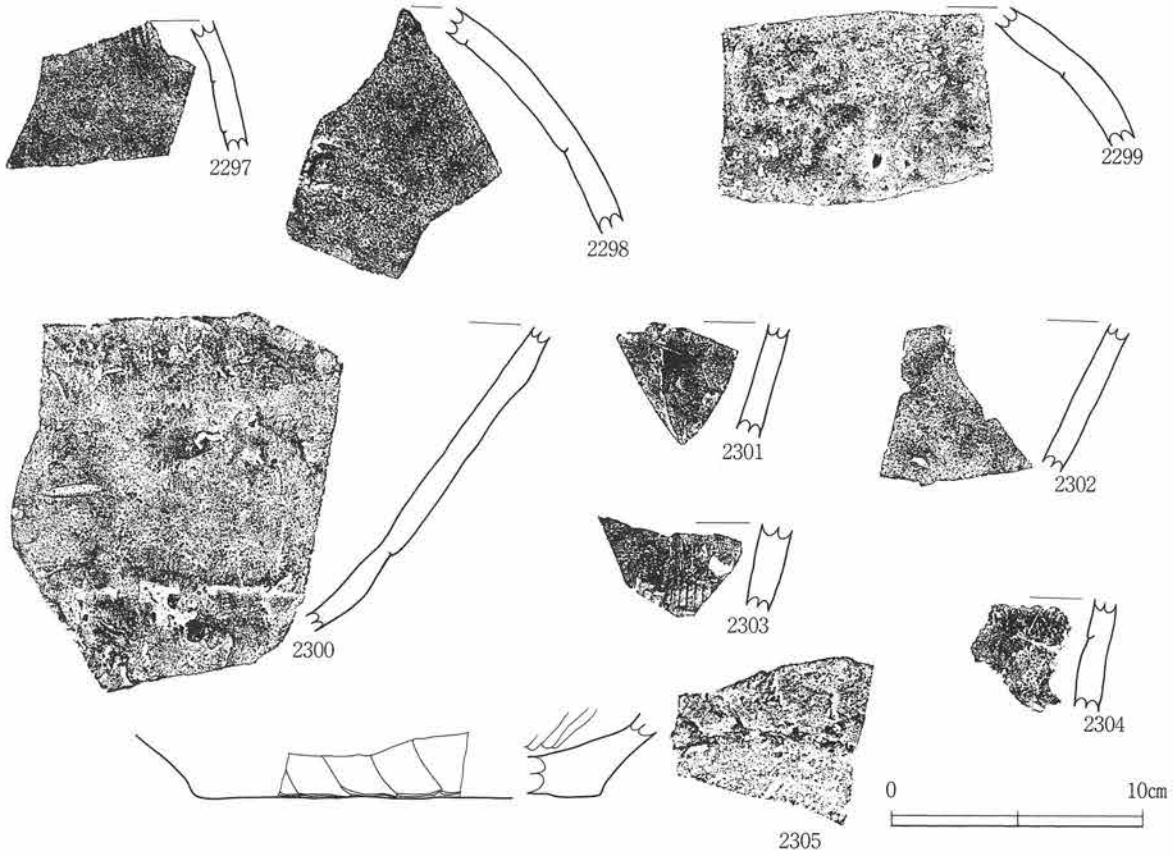
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2271	常滑	甕	体	74ＳD4埋土(ⅢB3d)	2～3型式	黄灰色	2262と同一個体
2272	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB6d)	〃	〃	〃
2273	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB4b)	〃	〃	〃
2274	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB3b)	〃	〃	〃
2275	〃	〃	〃	ⅢB0d表土	〃	暗褐色	
2276	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(ⅢB1d)	〃	褐灰色	2275と同一個体
2277	〃	〃	〃	ⅢB区　表採	〃	〃	〃
2278	〃	〃	〃	74ＳE3　1層	〃	〃	〃
2279	〃	〃	〃	ⅢB0e表土	〃	灰褐色	2275と同一個体の可能性がある
2280	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB3b)	〃	灰黄褐色	
2281	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB1b)	〃	〃	2280と同一個体
2282	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(ⅢB5c)	〃	暗褐色	〃

第90図　B地区の常滑産陶器⑨



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2283	常滑	甕	体	74SD6埋土(ⅢB3b)	2～3型式	灰褐色	
2284	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB2b)	〃	黄灰褐色	2283と同一個体
2285	〃	〃	〃	74SD4埋土(ⅢB0d)	〃	灰褐色	
2286	〃	〃	〃	74SD5埋土(ⅢB1d)	〃	〃	2284と同一個体
2287	〃	〃	〃	74SD4埋土(ⅢB4d)	〃	〃	〃
2288	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB2b)	〃	〃	〃
2289	〃	〃	〃	74SD5埋土(ⅢB2d)	〃	〃	2288と同一個体
2290	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB1b)	〃	灰黄褐色	〃
2291	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB2b)	〃	灰褐色	
2292	〃	〃	〃	74SD5埋土(ⅢB2d)	〃	暗赤褐色	外面に自然釉一条
2293	〃	〃	〃	ⅢB1e表土	〃	にぶい赤褐色	底辺部の破片
2294	〃	〃	〃	74SD4埋土(ⅢB3d)	〃	灰色	
2295	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB2b)	〃	〃	
2296	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB3b)	〃	褐灰色	

第91図　B地区の常滑産陶器⑩



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2297	常滑	甕	体	74ＳD3埋土(Ⅲ B5f)	2～3型式	灰色	
2298	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(Ⅲ B5c)	〃	灰白色	
2299	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(Ⅲ B3d)	〃	灰白色	外面自然釉
2300	〃	〃	〃	Ⅲ B0d表土	〃	灰色	
2301	〃	〃	〃	74ＳK3埋土	〃	黄灰色	
2302	〃	〃	〃	74ＳD4埋土(Ⅲ B4d)	〃	灰オリーブ色	
2303	〃	〃	〃	74ＳK6埋土	〃	灰色	
2304	〃	〃	〃	74ＳK8埋土		灰色	内外面ともに摩耗している
2305	〃	〃	底	74ＳD3埋土(Ⅲ B5e)	〃	灰色	外底面に砂粒付着

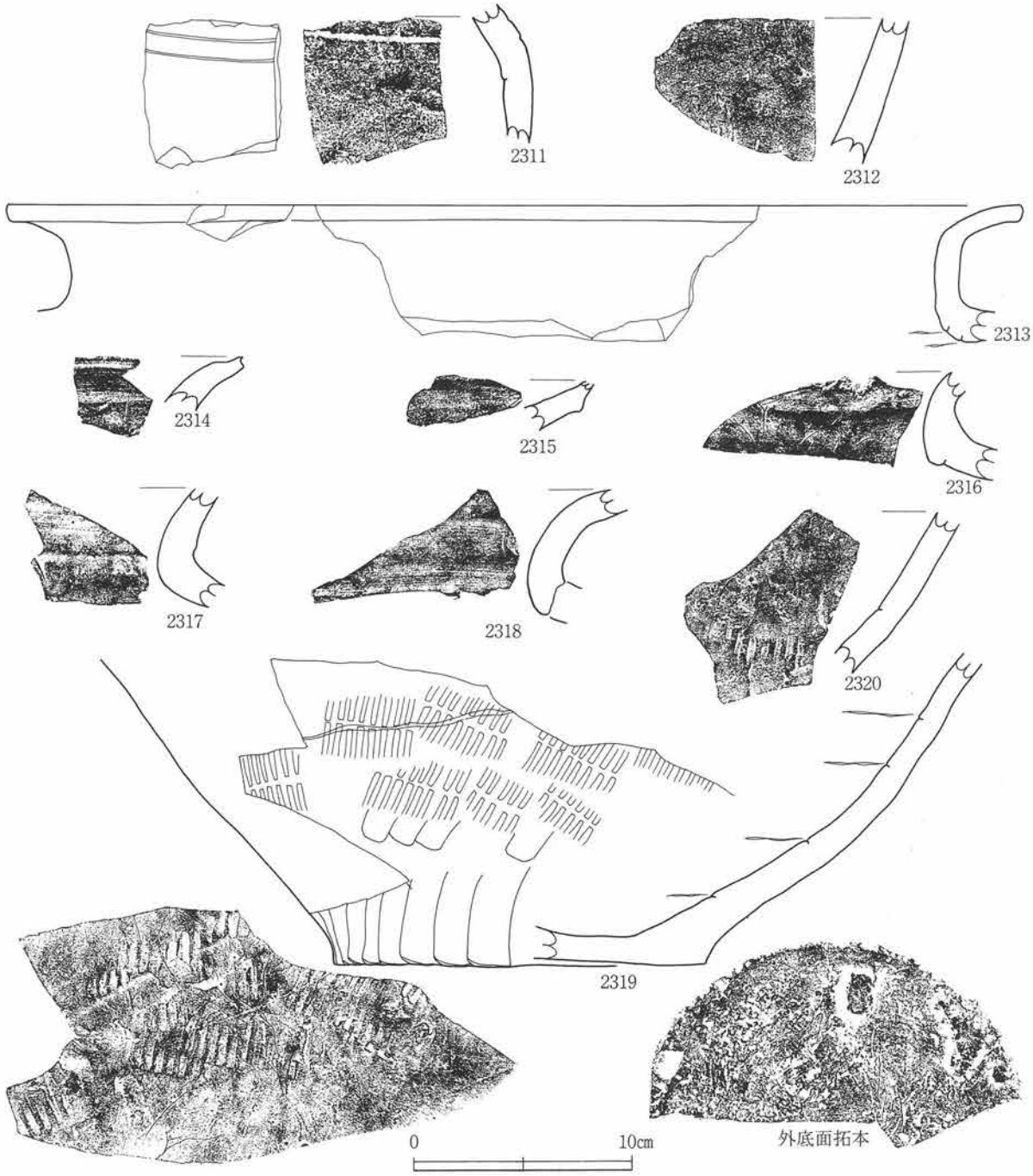
第92図　Ｂ地区の常滑産陶器⑪

（2.）渥美産陶器（第83～93図、写真図版126～129）

本調査区出土の渥美産陶器で図示したのは、壺２点、甕45点である。他に不掲載の破片が24片ある。

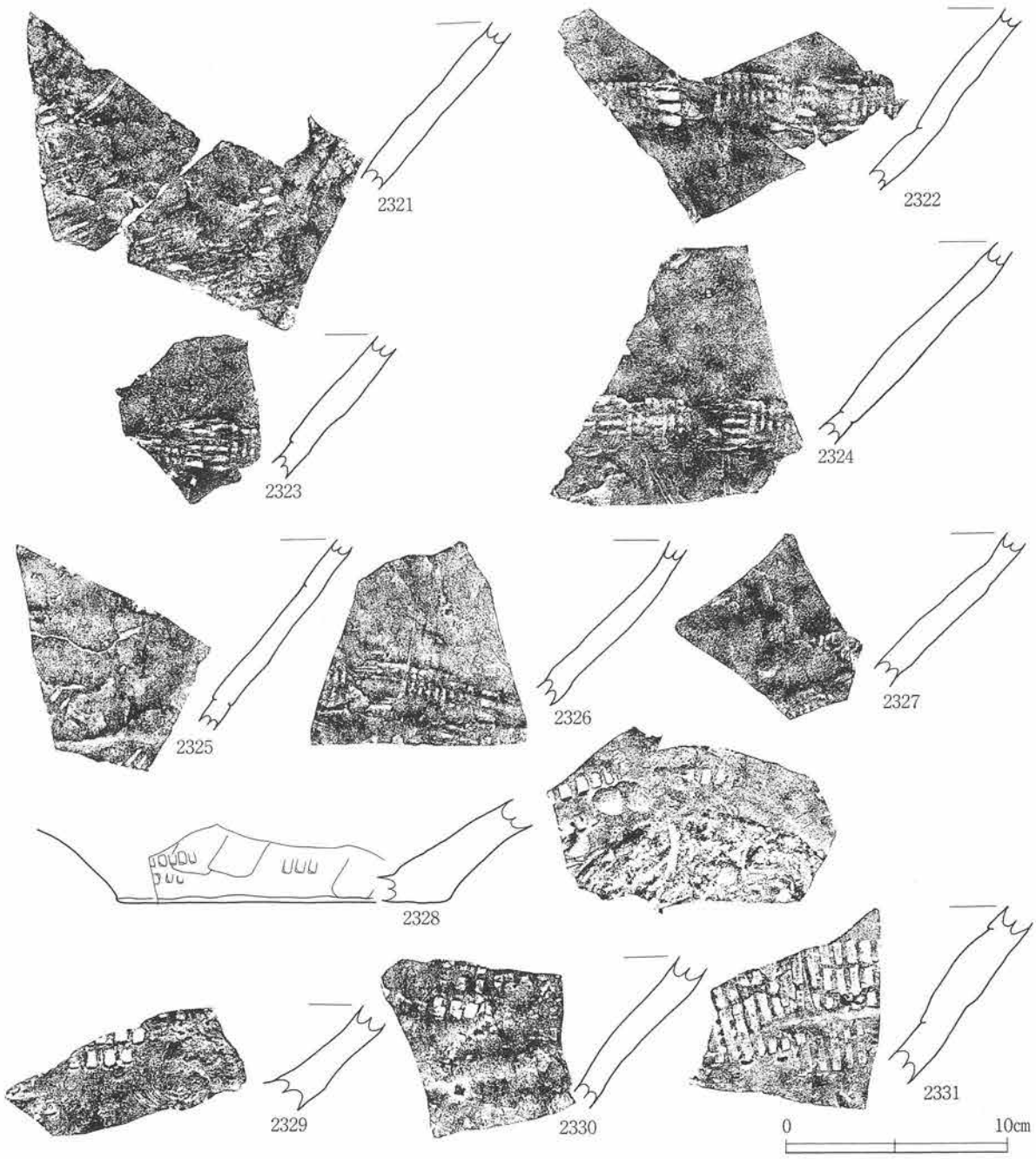
2311、2312は壺の破片である。2311は体部上半の破片で沈線が平行に２条みられる。下の一条は釉により埋もれており拓本に表れない。外面には自然釉がかかる。2312は壺の下半部の破片である。

2313～2357は甕の破片である。2313は口縁部の破片である。頸部が直立ぎみで古い様相を呈する。12世紀前半に属する可能性がある。口唇部は面取りされている。2314の口縁部破片はⅣＢ区出土の3652と同一個体である。接合はしない。2315の口縁部破片であるが端部を欠く。2316～2318は頸部の破片である。2316の頸部の下の内面には指による押しつけが顕著にみられる。2319、2320は同一個体である。2319の外底面には窯体が付着しており正立させることができない。外面の押印はややランダムに押されているが、全体としては帯状になるよう意識しているようである。内面には自然釉がかかっている。2321～2327は同一個体と考えら



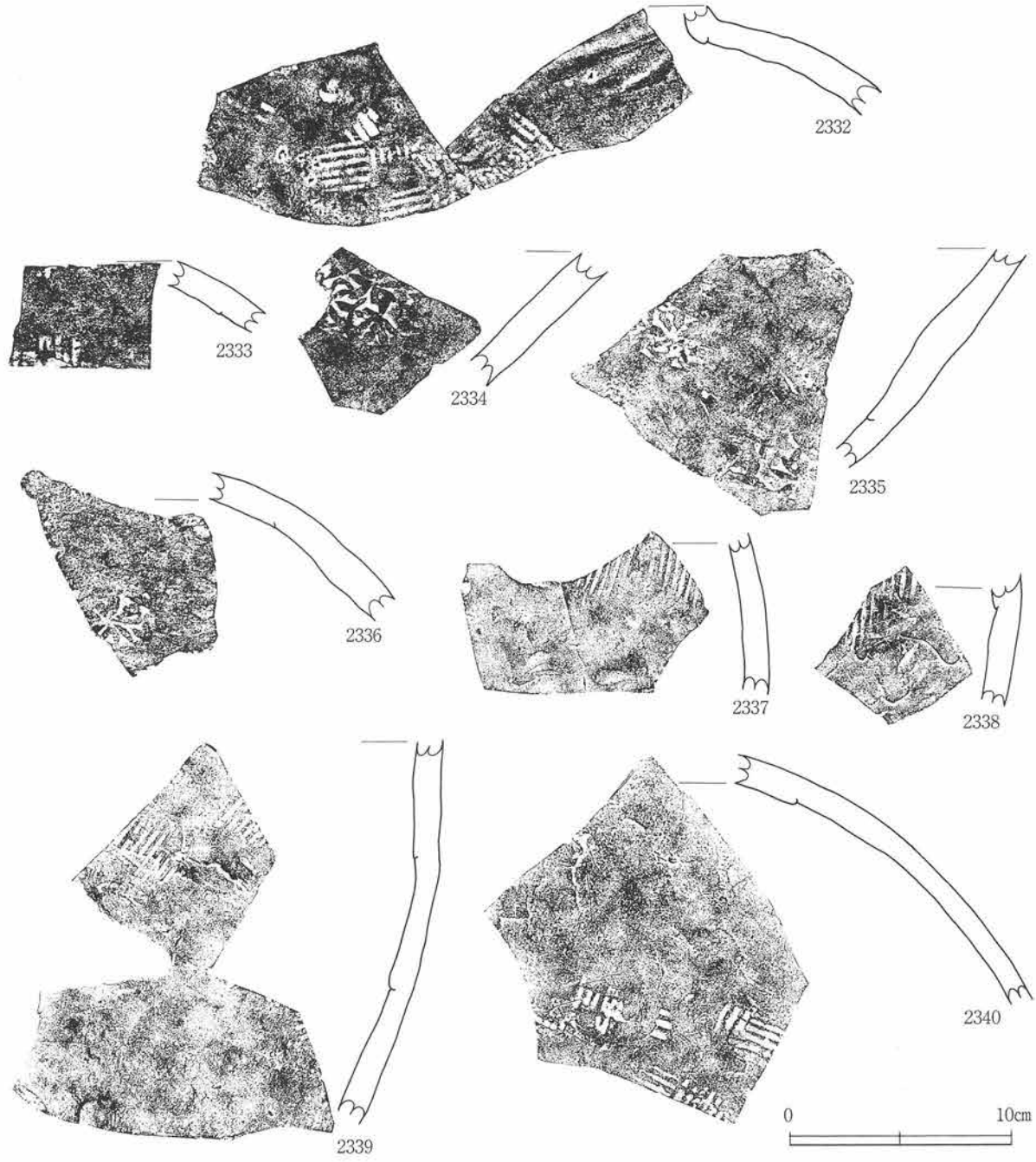
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2311	渥美	壺	体	74S D5埋土(Ⅲ B2d)	12C	灰オリーブ色	外面に沈線が2条ある
2312	〃	〃	体下	74S D6埋土(Ⅲ B2b)	〃	灰黄褐色	
2313	〃	甕	口	74S K10埋土	12C前半か	灰白色	口縁部直立ぎみ
2314	〃	〃	口	74S D5埋土(Ⅲ B1d)	12C	灰白色	Ⅳ B区の3652と同一個体
2315	〃	〃	口	74S D4埋土(Ⅲ B5d)	〃	黒色	口唇部端部を欠く
2316	〃	〃	頸	74S K31埋土	〃	黒色	口縁部直立ぎみか
2317	〃	〃	頸	74S D6埋土(Ⅲ B5c)	〃	黒色	〃
2318	〃	〃	頸	74S D6埋土(Ⅲ B2b)	〃	褐灰色	口縁部開きぎみか
2319	〃	〃	底～体	74S K31埋土	〃	褐灰色	内面自然釉
2320	〃	〃	体	74S D6埋土(Ⅲ B4b)	〃	灰黄褐色	2319と同一個体

第93図　B地区の渥美産陶器①



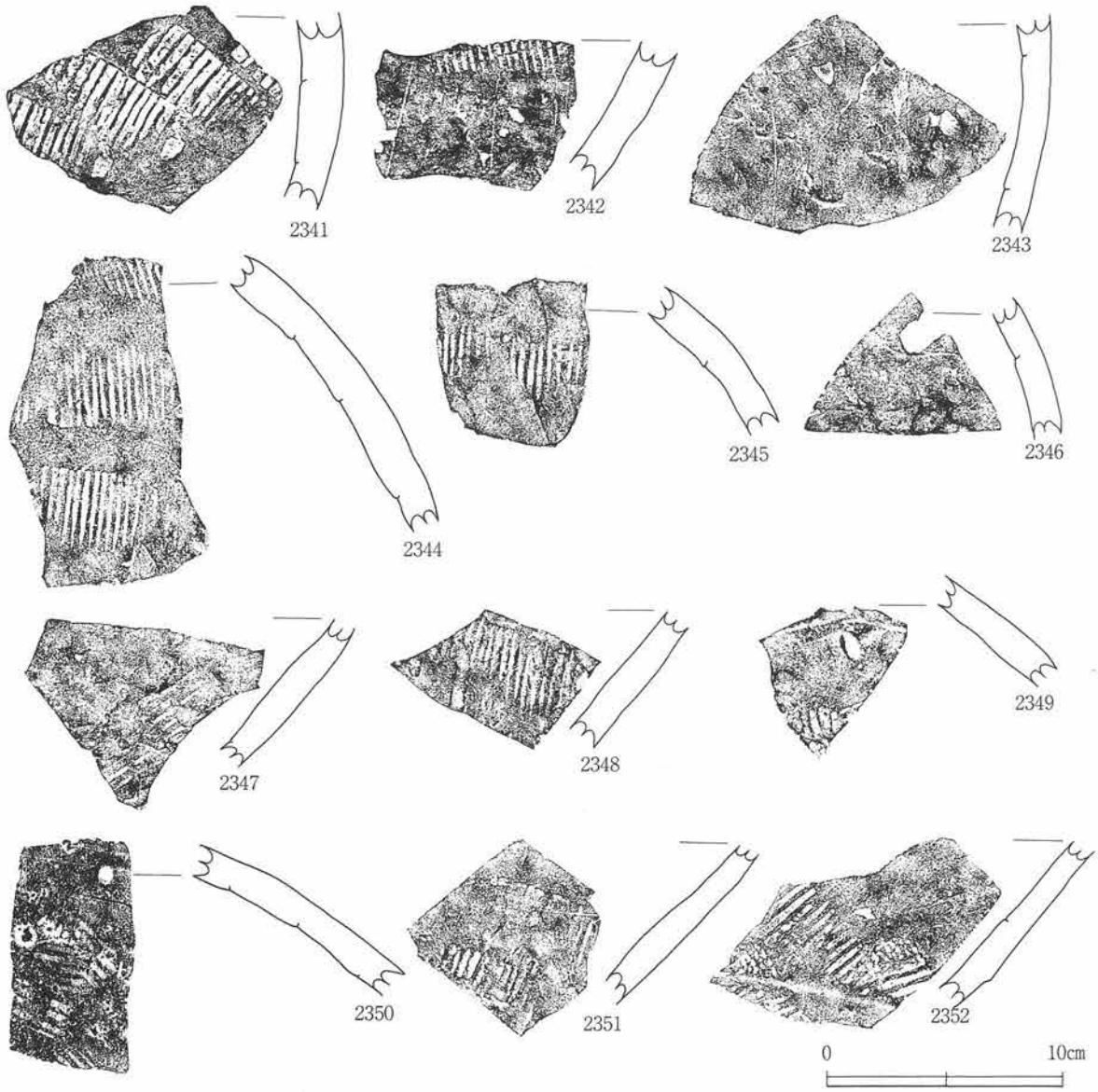
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2321	渥美	甕	体下	74ＳＤ６埋土	12C	暗灰色	
2322	〃	〃	〃	74ＳＤ6埋土(ⅢB3b)	〃	暗灰色	2321と同一個体
2323	〃	〃	〃	74ＳＤ6埋土(ⅢB4b)	〃	暗灰色	〃
2324	〃	〃	〃	ⅢB区　表採	〃	褐灰色	〃
2325	〃	〃	〃	74ＳＤ4埋土(ⅢB3d)	〃	褐灰色	〃
2326	〃	〃	〃	74ＳＤ4埋土(ⅢB3d)	〃	褐灰色	〃
2327	〃	〃	〃	ⅢB2b表土	〃	褐灰色	〃
2328	〃	〃	底	74ＳＥ4埋土	〃	褐灰色	ⅣB区　3682と接合
2329	〃	〃	体下	74ＳＤ4埋土(ⅢB3d)	〃	灰色	2328と同一個体
2330	〃	〃	〃	74ＳＥ3　1~3層	〃	灰色	〃
2331	〃	〃	〃	74ＳＥ4埋土	〃	黄灰色	〃

第94図　Ｂ地区の渥美産陶器②



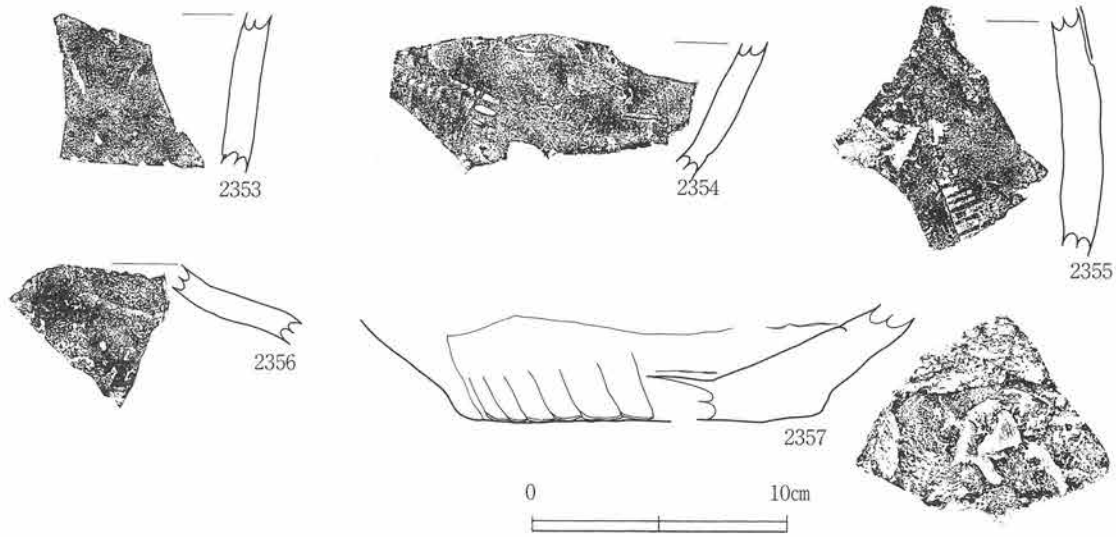
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2332	渥美	甕	肩	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B6c)	12C	灰白色	
2333	〃	〃	体	74ＳＤ4埋土(Ⅲ B4d)	〃	灰色	2332と同一個体
2334	〃	〃	〃	74ＳＤ4埋土(Ⅲ B5d)	〃	暗灰色	
2335	〃	〃	〃	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B3c)	〃	黒褐色	2334と同一個体の可能性あり
2336	〃	〃	〃	74ＳＤ4埋土(Ⅲ B4d)	〃	褐灰色	〃
2337	〃	〃	〃	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B4b)	〃	黄灰色	74ＳＤ５埋土（Ⅲ Ｂ２ｄ）からも出土
2338	〃	〃	〃	74ＳＤ5埋土(Ⅲ B1d)	〃	黒色	
2339	〃	〃	〃	74ＳＤ4埋土(Ⅲ B6d)	〃	灰色	74ＳＤ６埋土（Ⅲ Ｂ４ｃ）からも出土
2340	〃	〃	〃	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B2b)	〃	灰白色	2332と同一個体

第95図　Ｂ地区の渥美産陶器③



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2341	渥美	甕	体	74SD4埋土(ⅢB6d)	12C	褐灰色	
2342	〃	〃	〃	74SD4埋土(ⅢB6d)	〃	灰白色	
2343	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB5b)	〃	暗灰色	
2344	〃	〃	〃	74SD4埋土(ⅢB4d)	〃	灰白色	
2345	〃	〃	〃	ⅢB0d表採	〃	黄灰色	
2346	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB4b)	〃	灰色	
2347	〃	〃	〃	74SD4埋土(ⅢB4d)	〃	灰色	
2348	〃	〃	〃	ⅢB区　表採	〃	黄灰色	
2349	〃	〃	〃	74SE1埋土	〃	灰色	
2350	〃	〃	〃	ⅢB区　表採	〃	灰白色	2332と同一個体か
2351	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB2b)	〃	黄灰色	
2352	〃	〃	体下	ⅢB区　表採	〃	灰黄色	

第96図　B地区の渥美産陶器④



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2353	渥美	甕	体	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ3ｂ)	12C	褐灰色	
2354	〃	〃	〃	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ5ｂ)	〃	黄灰色	
2355	〃	〃	〃	ⅢＢ区　表採	〃	褐灰色	
2356	〃	〃	肩	74ＳＥ1埋土	〃	黄褐色	
2357	〃	〃	底	74ＳＤ6埋土(ⅢＢ6ｃ)	〃	灰黄色	

第97図　Ｂ地区の渥美産陶器⑤

れる甕の破片である。押印が深く、帯状に押されている。2332、2333、2340、2350も同一個体の破片である。これらは肩部～体部上半の破片である。これらは押印が2321～2327と同一で同じ個体の可能性が高い。2354もこれらと同じ押印が施されており同一個体の可能性がある。2328～2330は同一個体の破片である。いずれも底部～底辺部の破片である。2334～2336の破片は押印が共通する。ⅡＢ区出土の1280、1281にもこれと同じ押印が押されている。2357は底部付近の破片である。内面に煤状のものがわずかに付着している。

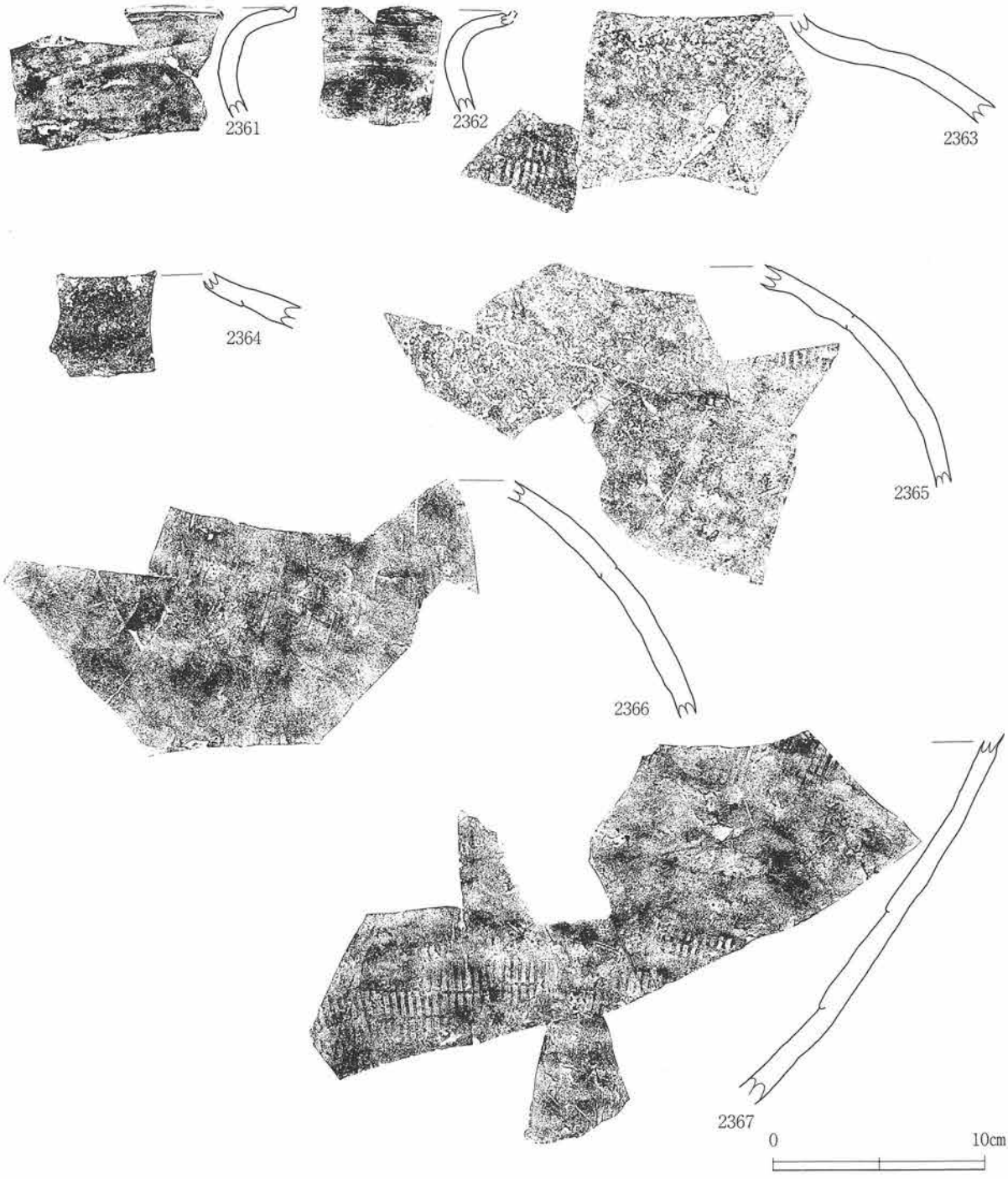
（３）猿投産陶器（第98・99図、写真図版129～131）

胎土が常滑、渥美産陶器と異なり、猿投産陶器と思われるものを15点図示した。これらは15点は同一個体である。器種は甕である。ⅣＢ区の46ＳＤ16埋土出土の3684、3685も同一個体である。

断面の胎土は淡黄色で緻密な感じがする。口縁部～体部上半の破片外面は自然釉がかかり、体部下半の破片外面は褐灰色～灰黄褐色を呈する。全体的に薄手である。2361、2362は口縁部の破片である頸部が直立し口縁が強く外反する形態である。口唇部は面取りされている。内面の口縁端部にはくぼみがある。体部には押印が帯状に施されている。内面には横位のナデ調整が施されている。

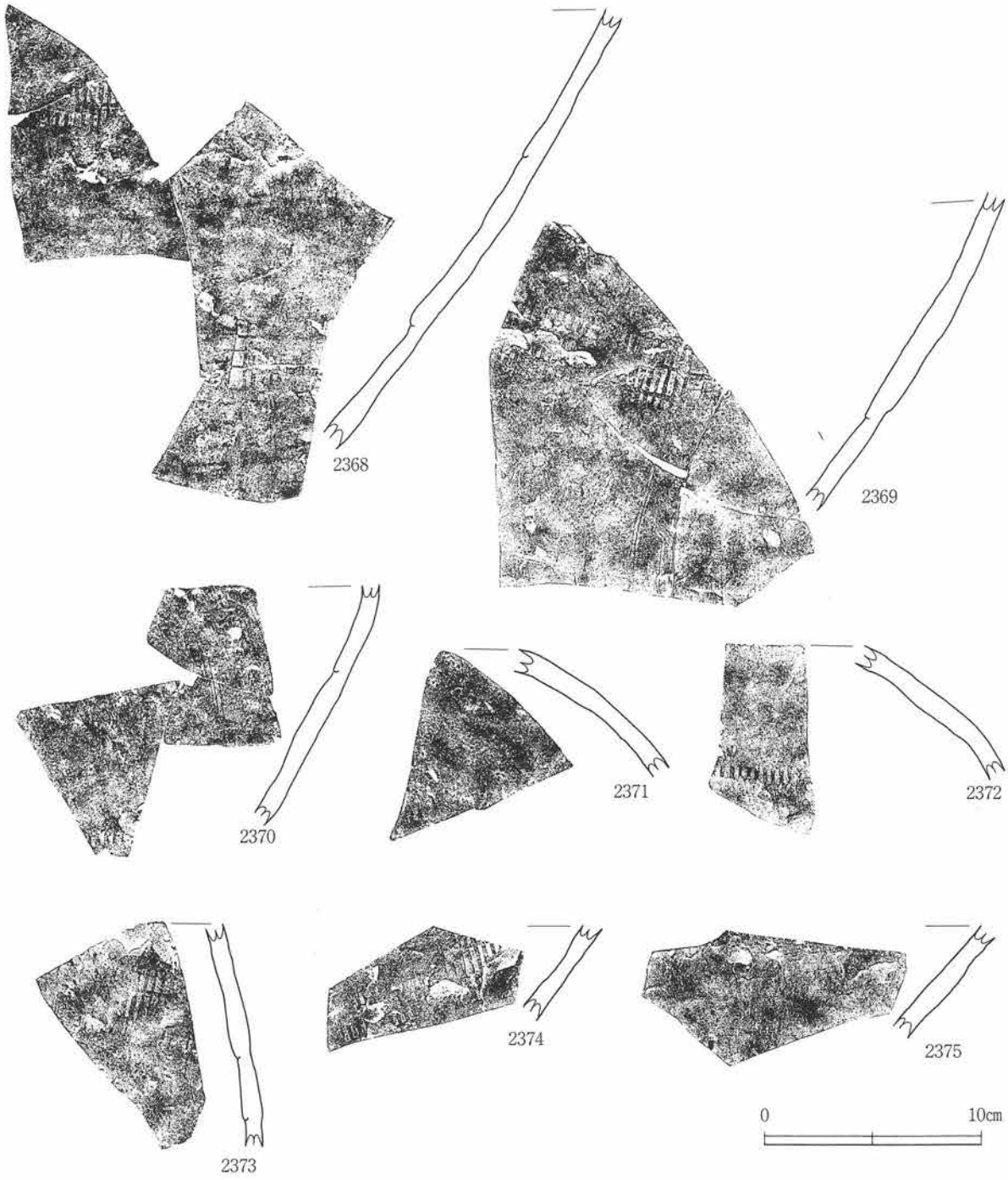
（４）水沼産陶器・擬水沼産陶器（第100図、写真図版131）

出土したものをすべて図示した。2381は宮城県石巻市所在の水沼窯産陶器である。壺の体部下半の破片である。断面の胎土は両外側が暗灰色、内側が赤褐色のサンドイッチ状を呈している。内外面は暗灰色を呈する。緻密な胎土で、厚手の作りの個体である。外面には回転ヘラケズリが施されており内面は横位のナデ調整がある。



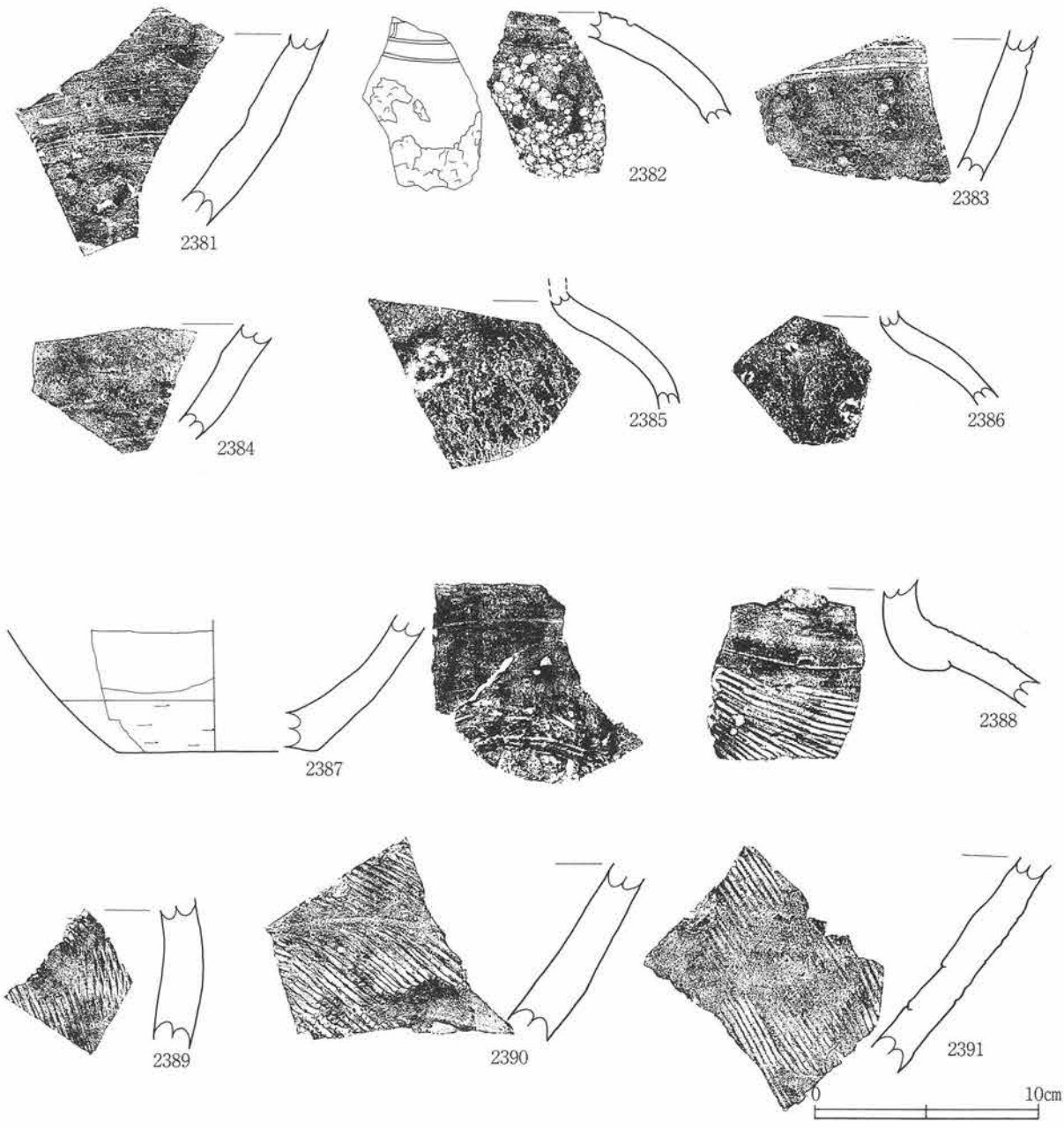
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2361	猿投	甕	口	74ＳD4埋土(ⅢB6d)	12C	灰オリーブ色	2361～2375は同一個体
2362	〃	〃	口	74ＳE2埋土	〃	灰黄褐色	
2363	〃	〃	肩	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	〃	黄灰色	
2364	〃	〃	肩	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	〃	黄灰色	
2365	〃	〃	体上	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	〃	灰色	74ＳＤ４埋土（ⅢＢ３ｄ）からも出土
2366	〃	〃	体上	74ＳD6埋土(ⅢB5b)	〃	灰オリーブ色	74ＳＥ１埋土からも出土
2367	〃	〃	体下	74ＳD6埋土(ⅢB6b)	〃	暗灰黄色	74ＳＤ４（ⅢＢ４ｄ）からも出土

第98図　Ｂ地区の猿投産陶器①



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2368	猿投	甕	体下	74ＳD6埋土(Ⅲ B5b)	12C	暗灰黄色	2361～2375は同一個体
2369	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(Ⅲ B5b)	〃	黄褐色	
2370	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(Ⅲ B5b)	〃	黄灰色	
2371	〃	〃	体上	74ＳD6埋土(Ⅲ B5b)	〃	灰オリーブ色	
2372	〃	〃	体上	74ＳD6埋土(Ⅲ B4b)	〃	灰オリーブ色	
2373	〃	〃	〃	Ⅲ B区　表採	〃	暗灰黄色	
2374	〃	〃	体下	74ＳD6埋土(Ⅲ B5c)	〃	暗灰黄色	
2375	〃	〃	〃	74ＳD6埋土(Ⅲ B4b)	〃	暗灰黄色	

第99図　Ｂ地区の猿投産陶器②



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
2381	水沼	壺	体下	74SD6埋土(ⅢB3b)	12C	黒色	外面、回転ヘラケズリ
2382	擬水沼	〃	体上	74SD6埋土(ⅢB0c)	〃	灰色	ⅡB区の1291～1294と同一個体
2383	〃	〃	体下	74SD4埋土(ⅢB4d)	〃	暗赤褐色	2382、2384と同一個体か
2384	〃	〃	体下	74SD4埋土(ⅢB1d)	〃	〃	〃
2385	〃	〃	肩	74SD6埋土(ⅢB5b)	〃	灰色	
2386	〃	〃	〃	74SD6埋土(ⅢB3b)	〃	〃	2385と同一個体
2387	須恵器系	壺	底～体	74SK9埋土	〃	暗灰色	内外面に黒色の自然釉
2388	〃	甕	肩	74SD6埋土(ⅢB4c)	〃	黄灰色	内面のアテ具痕不明瞭
2389	〃	〃	体	74SD6埋土(ⅢB5c)	〃	暗灰色	
2390	〃	〃	体	74SD6埋土(ⅢB1b)	〃	灰白色	
2391	〃	〃	体	74SD4埋土(ⅢB3d)	〃	灰色	

第100図　B地区の水沼産、須恵器系陶器

2382～2386は水沼窯産陶器と胎土が異なる。水沼窯の製品そのものでないが、水沼窯の近隣の未発見の水沼窯系統の窯の製品と考えられる「擬水沼」陶器である。2382と2383と2384、2385と2386がそれぞれ同一個体である。

2382～2384はＡ地区の1291～1295と同一個体である。Ａ地区出土の破片から、これは袈裟襷文を持つ壺とわかる。2382はその肩部の破片、2382、2384は体部下半の破片である。胎土は暗灰色で砂粒が混じり硬い。この壺の推定復元図を第30図に示している。

2385、2386は壺の肩部破片である。胎土は暗灰色で砂粒が多量に混じる。2382～2384の壺に非常に似る胎土である。内面は暗灰色を呈し外面には自然釉がかかる。これらの胎土、色調は志羅山遺跡第17次調査の第10号土坑出土の瓷器陶器壺に非常に類似する。直接比較してみたが、同一個体ではないようである。だが器形もほとんど同じで同一窯の産と推測される。

（５）須恵器系陶器（第160図、写真図版132）

出土したものをすべて図示した。５点の出土である。2387は壺の底部～体部下半の破片である。内面と表面の上半に光沢のある黒色の自然釉がかかっている。胎土は暗灰色で砂粒が混じり硬い。外底面は僅かしか残っておらず、切り離し方法は不明である。2388～2391は甕の破片である。いずれも外面にタタキ目が施される。内面は横位にナデられておりアテ具痕がはっきりしない。2389と2390はタタキ目、色調、胎土が共通しており同一個体である。

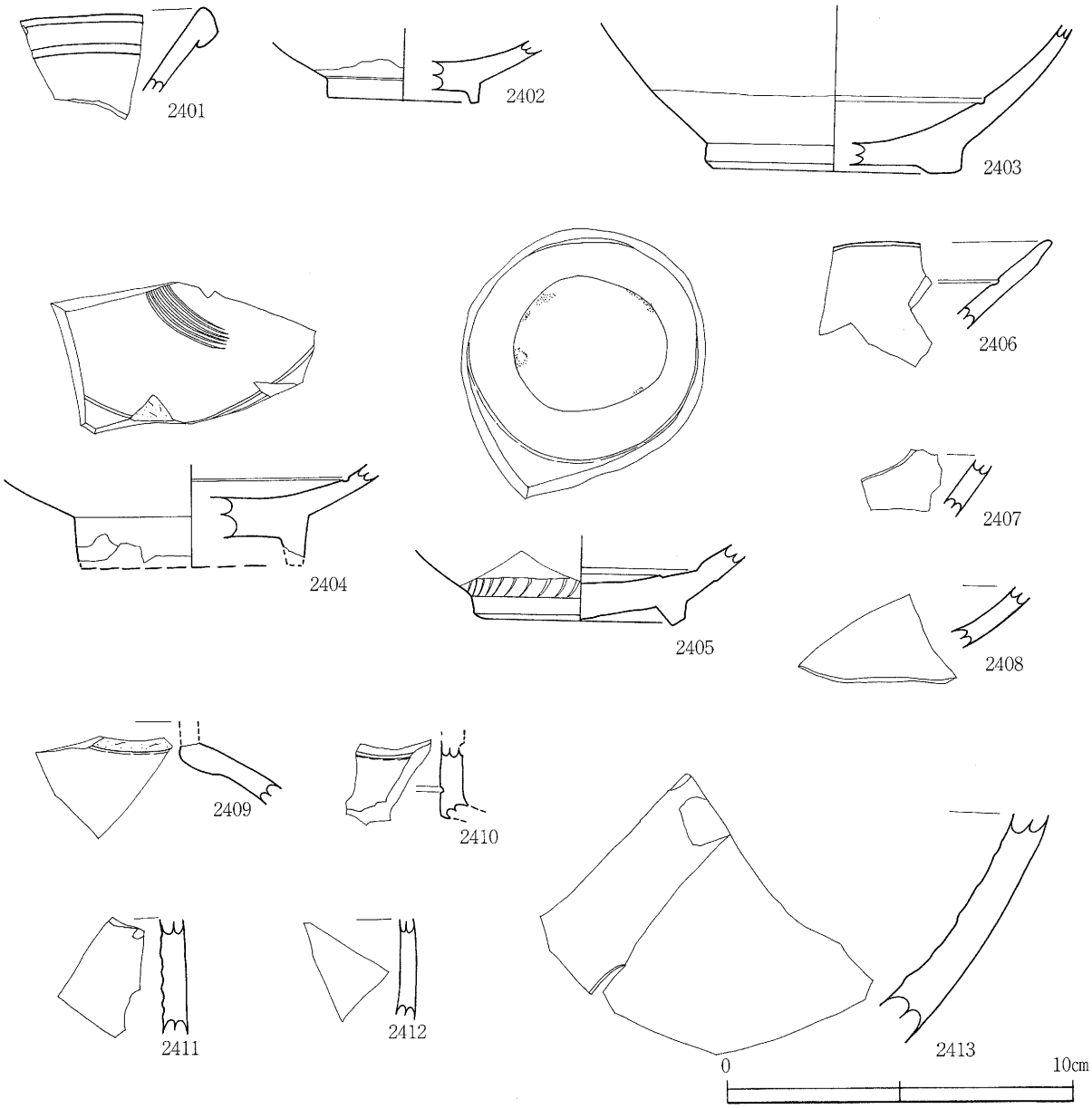
4　中国産陶磁器（第101・102図、写真図版132）

本調査区の中国産陶磁器は白磁15点、青磁１点、青白磁２点、陶器１点の合計19点の出土である。

2401～2408は白磁の碗である。2401は玉縁の口縁で大宰府分類のⅣ類に相当する。2402、2403は底部の破片である。2402は高台をやや高く削り出し、2403は幅の広い低い高台である。どちらも口縁部は玉縁のⅣ類と推測される。2404は内面に櫛目文と沈線を持つ。高台の端部は欠損しているが、直立した高い高台と推測される。Ｖ４ｂ類に分類される。2405は見込みが蛇の目に釉剥ぎされた碗である。胎土は灰色で、釉は青みがかっている。高台は幅が広くあまり高くない。このように胎土、釉調、高台が一般的なⅧ類と異なっているが、他に当てはまる分類がなく、ここでは釉を蛇の目に掻き取って、段が付いていることからⅦ類に分類しておく。2406は口縁部破片である。胎土、釉調は2405と共通しており同一個体と考えられる。内面体部中央に沈線がある。2405と同一個体とすればⅧ２類に分類される。2407、2408は体部破片で詳細な分類は難しい。2409～2414は壺である。おそらく四耳壺であるが耳の部位がないので断言できない。いずれも化粧土の無いⅢ系の壺である。2413は46次調査の46ＳＤ16出土の破片と接合した。約80ｍ離れた場所からの出土である。二次的に被熱している。図示しているのは接合した状態のものである。2415は頸部の破片であるが、形状から水注と考えられる。Ⅲ系である。

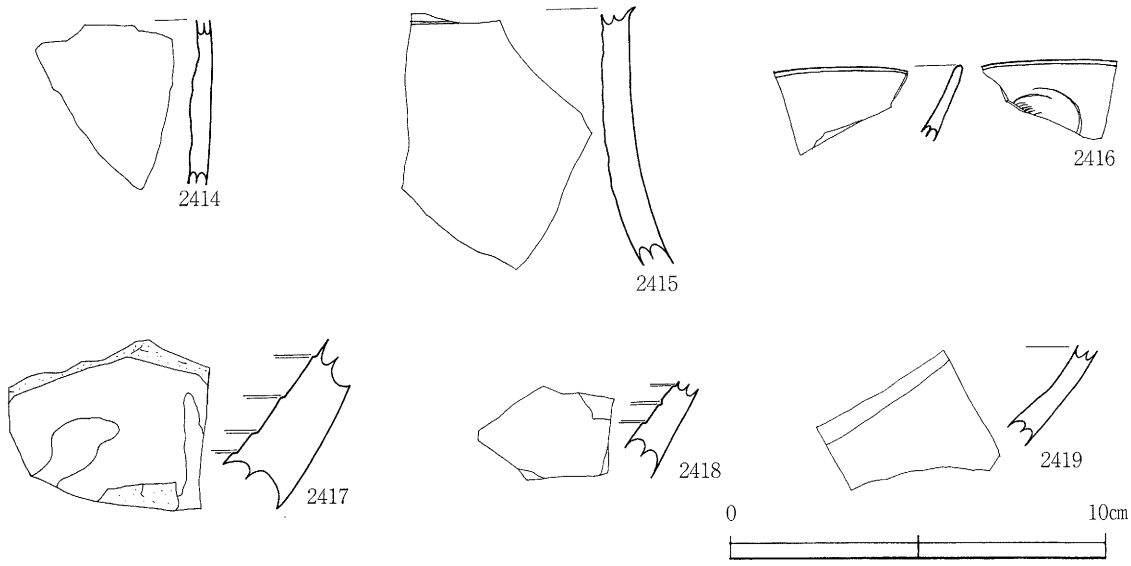
2416は青磁の碗である。内面にヘラと櫛目の文様がある。龍泉窯のＩ３類に分類される。

2417、2418は青白磁の壺である。同一個体と考えられる。胎土は白色で粒子が細かく光沢が無い。釉は青みがかっている。内面はロクロ目の段が顕著である。　2418は陶器の体部破片である。内外面ともに釉境がみられる。壺の底辺部近くの破片と考えられる。胎土は肌色で粒子は細かい。釉は発色が悪く、光沢の無い白色を呈している。



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2401	白磁	碗	口	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B6b)	Ⅳ	12Ｃ	玉縁の口縁
2402	〃	〃	底	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B4c)	Ⅳ２ｃ	〃	高台部露胎
2403	〃	〃	底	74ＳＤ3埋土(Ⅲ B5f)	Ⅳ１ａ	〃	
2404	〃	〃	底	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B1b)	Ｖ４ｂ	12Ｃ中～	高台端部欠損
2405	〃	〃	底	74ＳＤ5埋土(Ⅲ B3d)	Ⅷか	12Ｃ中～13Ｃ	見込み蛇目に釉はぎ
2406	〃	〃	口	74ＳＤ4埋土(Ⅲ B6d)	Ⅷ２か	〃	2505と同一個体か
2407	〃	〃	体	74ＳＥ1埋土	Ⅳか	12Ｃ	
2408	〃	〃	体	74ＳＫ31埋土	ＶかⅥかⅦ	12Ｃか	
2409	〃	壺	肩	74ＳＥ3　1層	Ⅲ系	12Ｃ	
2410	〃	〃	頸	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B8b)	Ⅲ系	12Ｃ	
2411	〃	〃	体	74ＳＥ3　1層	Ⅲ系	12Ｃ	
2412	〃	〃	体	74ＳＤ6埋土(Ⅲ B6b)	Ⅲ系	12Ｃ	二次被熱している
2413	〃	〃	体	74ＳＤ4埋土(Ⅲ B1d)	Ⅲ系	12Ｃ	2514（46ＳＤ16埋土）出土片と接合

第101図　Ｂ地区の中国産陶磁器①



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2414	白磁	壺	体	ⅢB区　表採	Ⅲ系	12C	
2415	〃	水注か	頸	74SD6埋土(ⅢB6b)	Ⅲ系	12C	
2416	青磁	碗	口	74SD6埋土(ⅢB2b)	龍泉Ⅰ3	12C中葉以降	
2417	青白磁	壺	体	74SD6埋土(ⅢB6b)	青白磁	12C	白色の胎土　壺の底辺部である。
2418	〃	壺	体	74SD6埋土(ⅢB6b)	青白磁	12C	2517と同一個体
2419	陶器	壺か	体	ⅢB0d表土		12C	肌色の胎土、釉は発色が悪く白色を呈する

第102図　B地区の中国産陶磁器②

5　木製品（第103～106図、写真図版133～134）

本調査区では74SK12と74SE3から木製品が出土している。いずれも12世紀後半所属の遺構であり、これらの木製品も12世紀後半のものと考えられる。

2501～2571は74SK12の最下層である5層から出土した。この5層は有機質分の多い種子が混じる土である。74SK12は形状と埋土の状態からトイレ状遺構と考えられ、これらの木製品はチュウ木の可能性が高い。この層には図示した以外にもチュウ木状の木製品があったが腐食が著しく取り上げることができなかったものもあった。

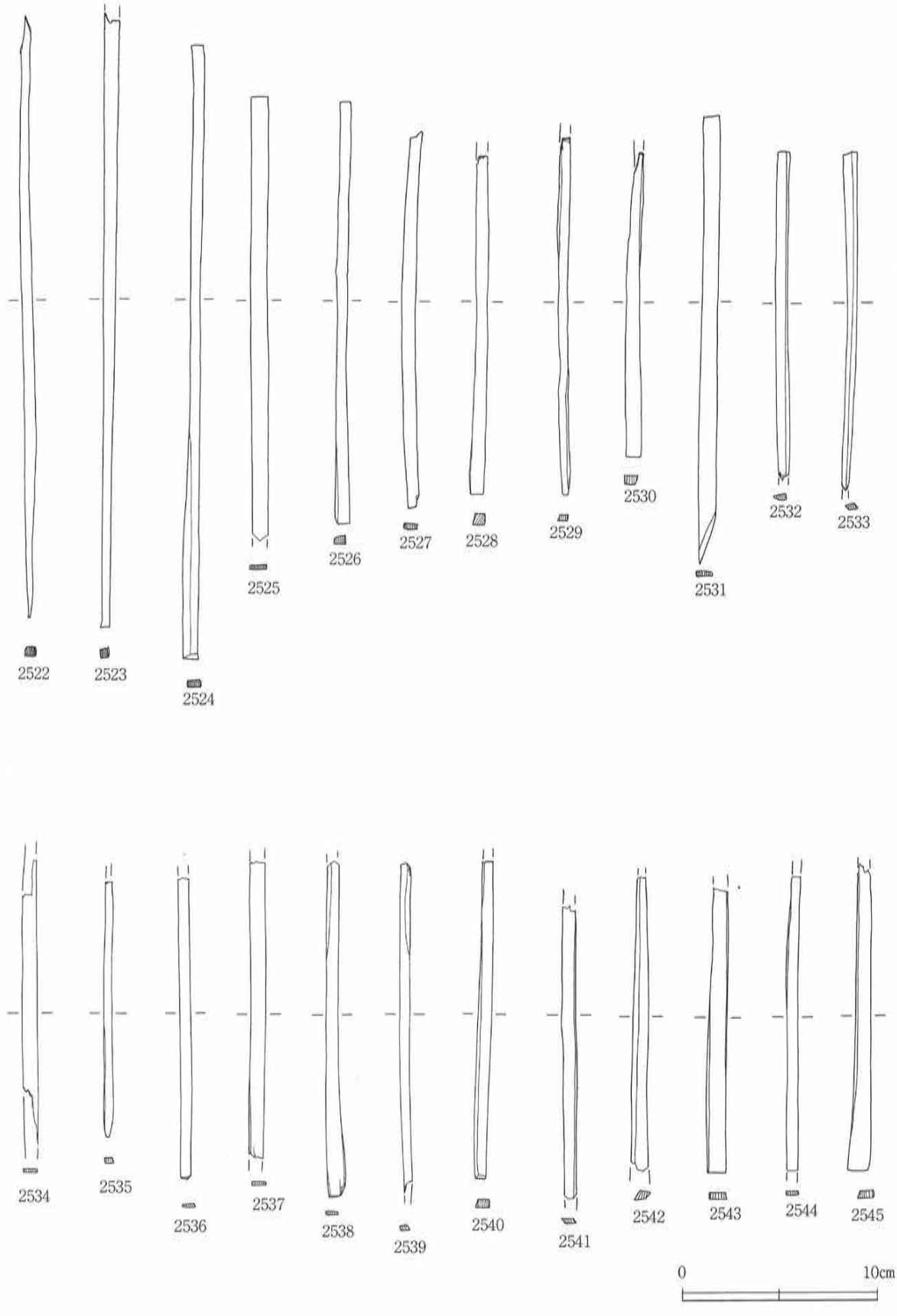
2501～2505は下端（本来の天地はわからない、図示した下端）が半分削られ尖っている。チュウ木にはこのような加工は不必要であり、他の器物の転用品と考えられる。扇の骨を半裁した状態に似るが、削って抉って尖らせており、孔状になっておらず、扇の骨ではない。これら2501～2505は接合を試みたが、接合するものはなかった。チュウ木として使用する際に、何らかの器物の部品を断ち割ったのか、この状態が何らかの器物（の部品）であるのか判断しがたい。

2506～2571は端部に加工の無いものである。欠損していないものでは2515が32.8cmが最長で、2521が18.8cmで最短である。

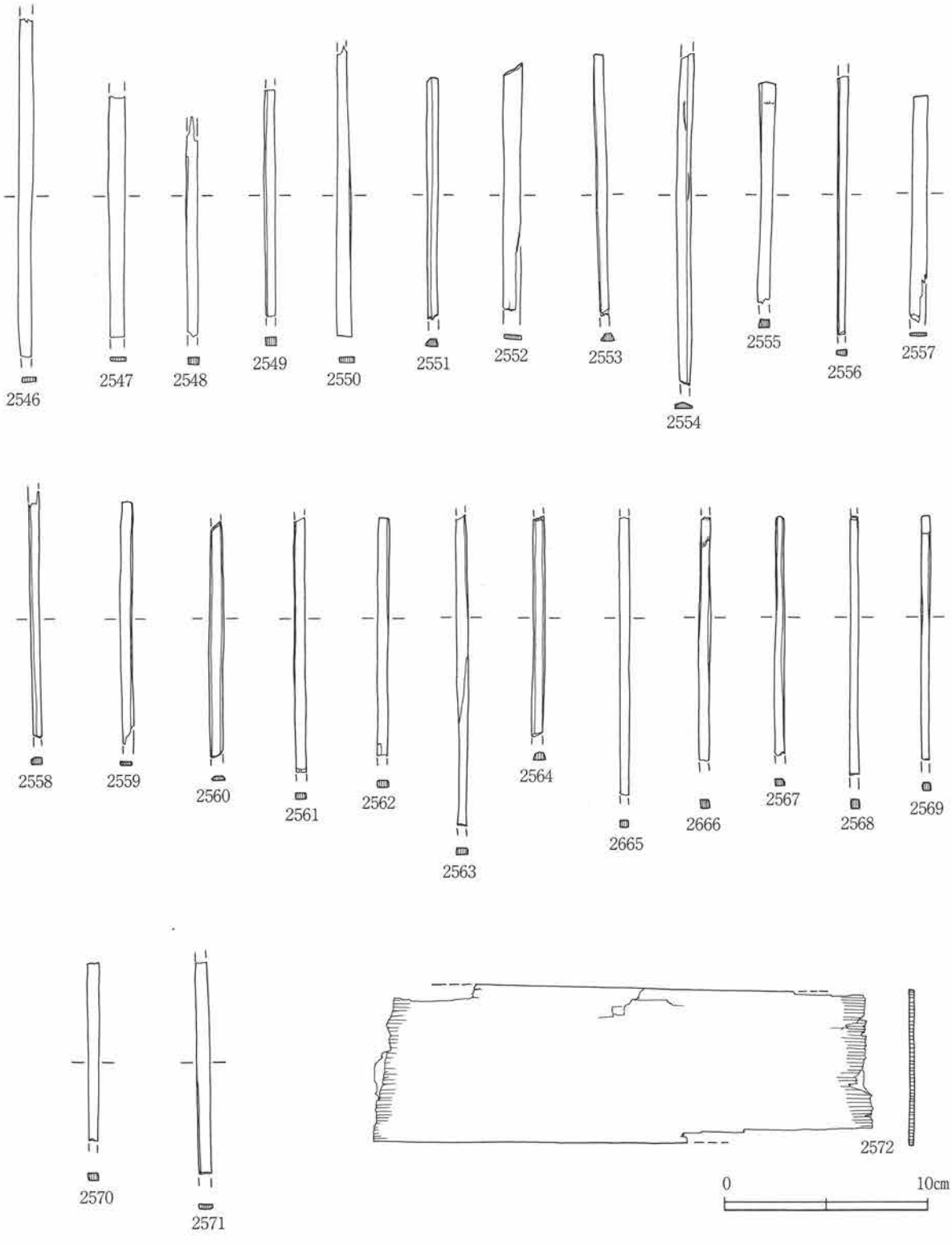
2572は74SE3の底面から出土した。薄い板状で上端と下端は完結している。曲物の側板に似る。

2573は74SE3の上面から出土した。黒漆塗りの木製品である。図示している表面と左側面に黒漆が塗られている。裏面は剥離した状態で、木質が露出している。表面の左側面近くで段が付き低くなっている。ま

第103図　B地区の木製品①



第104図　B地区の木製品②



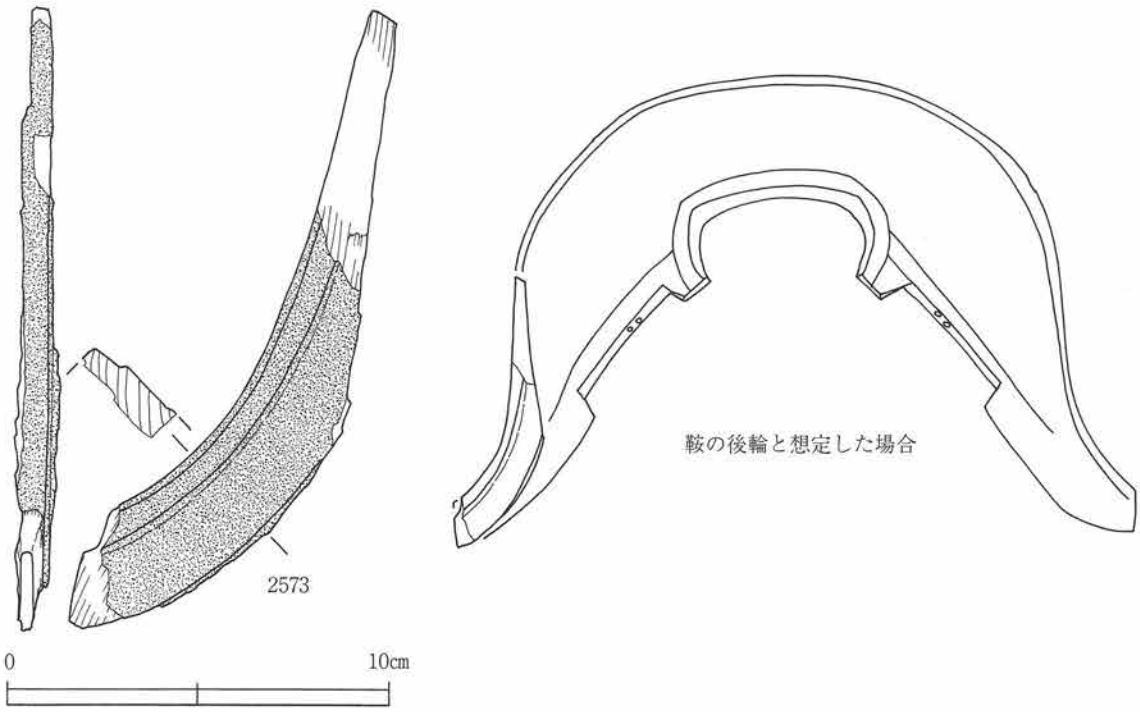
番号	器種	出土位置	樹種	その他
2501～2571	チュウ木	74ＳＫ12　５層	スギ（右の番号）	2501～2505、2510、2519、2521、2525
	チュウ木	74ＳＫ12　５層	アスナロ（右の番号）	2506～2509、2511～2518、2520、2522～2524、2526～2530
2572	曲物側板？	74ＳＥ３底面	アスナロ	

第105図　Ｂ地区の木製品③

た右側では段が付き高くなっている。左下の端部は漆が残存していないが、完結しているようである。

これが如何なる製品（の部品）であるかは判断が難しい。管見の及ぶかぎりでは、鞍の後輪（しずわ）の一部分に類似している。しかし後輪にしては前後の湾曲が少ない点に大きな難がある。前輪であれば前後の湾曲は少なくて良いのであるが、前輪にしては側面の反り具合が強いようである。そして、その部位の破片であれば、しおで穴があるはずであるが、それが無い。いずれにせよ破片が小さくはっきりした判断は難しい。

このように鞍の後輪とするにも疑問が多く、これを後輪と強く主張することはできない。よってこれが何かということは不明としておく。



番号	器種	出土位置	樹種	その他
2573	鞍？	74ＳＥ3　4層上面	ヒノキ属の一種	鞍ではない可能性も高い

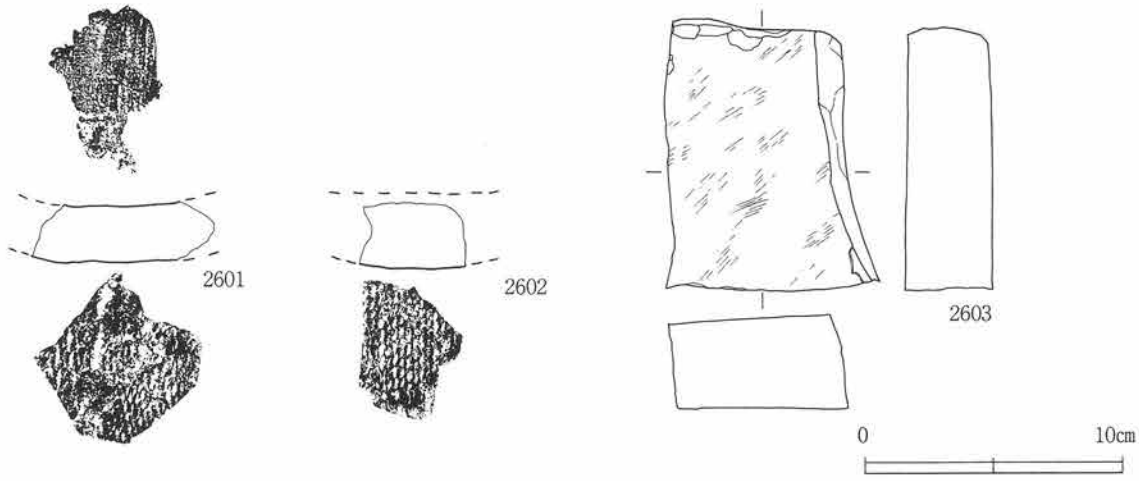
第106図　Ｂ地区の木製品④

6　瓦（第107図、写真図版134）

12世紀の平瓦が２点出土している。どちらも小破片で、著しく磨耗している。2601は灰色、2602は暗赤灰色を呈する。

7　石製品（第107図、写真図版134）

砥石？が１点ある。道路側溝である74ＳＤ６の埋土からの出土である。一面が平滑になっており擦痕がみられる。図示した裏面と上面は自然面が残り、下面と両側面は打ち欠いた面になっている。非常に硬い石で通常の砥石かどうか疑問が残る。



番号	器種	出土位置	その他
2601	平瓦	66ＳＤ６埋土（ⅢＢ６ｂ）	磨耗著しい
2602	〃	66ＳＤ４埋土（ⅢＢ５ｄ）	〃
2603	砥石？	66ＳＤ６埋土（ⅢＢ６ｂ）	砥石面は一面

第107図　Ｂ地区の瓦・石製品

第6章　C地区の遺構・遺物

第６章　　Ｃ地区の遺構・遺物

第１節　Ｃ地区の概観

Ｃ地区は大グリッドのⅣＡ、ⅣＢ区の国道４号線の西側部分が相当する。南端はⅣＢの２ライン、北端はⅣ区とＶ区の境界のラインになる。

Ｃ地区は調査区の東側約２／３が46次、西側約１／３が66次に調査がおこなわれた。よって本調査区の遺構名には頭に46の数字を付したものと、66の数字を付したものの２種類がある。

本調査区では古代の竪穴住居１棟、掘立柱建物16棟、土坑16基、溝２条、池跡１基が検出されている。また埋没沢跡も検出されている。

埋没沢跡は調査区の北寄りにある。西から東に水が流れる沢である。本調査区の北のＤ地区にも埋没沢が存在するが、この２つの沢は国道４号線の下で合流し、国道東では１本の沢になっている。埋没沢の下部には十和田ａ火山灰が堆積しており、10世紀前半には沢として存在していたことがわかる。その後自然堆積が続き、12世紀の段階ではかなり埋没が進んだ状態になったようである。そして、その埋もれかけた沢に人為的に埋立整地がおこなわれている。この埋立ては12世紀におこなわれたと考えられる。

沢の埋立整地層の面には、池と道路が構築されている。池の壁面、底面には埋立整地に用いられた土と同じ土が貼られており、埋立整地と同時に池が構築されたとわかる。道路はその側溝が整地層の上に掘り込まれているが、整地面と道路は同時に機能していたと考えられる。道路はＡ地区から南北に続く道で、沢を横切る形になっている。

池の排水は道路側溝に落ち、道路を横切る溝を通って埋没沢に沿って水が流れて行く仕組みになっている。つまりこの部分は水の道と人の道の交差点ということになる。池からは祭祀の色合いの強い遺物が多く出土しており、水の道と人の道の辻で祭祀行為が行なわれていたと考えられる。道路を横切る排水路は埋没沢に沿って構築されており、太田川と合流し、さらに北上川に流れて行く。ここでけがれを平泉の外に流す「祓」がおこなわれた可能性も考えられる。

Ｃ地区の南端からは古代の竪穴住居（46・66ＳＩ１）が検出されている。出土した土師器、須恵器から９世紀後半代の住居と推測される。かまどは東壁に作られている。

また、古代の竪穴住居の周辺に12世紀の形態の類似する土坑が多数構築されている。この中にはいわゆるトイレ状土坑（46ＳＫ26）もあるが、埋土の状態がトイレ状土坑とは異なるものもある。

掘立柱建物は沢跡の南側、道路遺構の西側から検出されている。小規模な建物が多く時期を特定できないものがほとんどである。重複の密度から12世紀以外の建物も多数存在すると考えられる。

66１号池からは特筆すべき遺物が多数出土している。3118、3119のかわらけには墨書が施されている。また墨書資料としては笹塔婆が47本（3131～3177）出土している。他に木製品では漆紙が付着した漆器皿（3181）、鏑（3186）、ものさし（3111）、鏡箱に似る漆器容器（3243）などがある。また鴛鴦文の轡（3246）も出土している。

１号池以外からの12世紀の遺物では、かわらけ、国産陶器、中国産磁器、瓦、砥石、下駄、土錘が出土している。他に近世～近代の陶磁器も少量出土している。

第２節　遺構

１　竪穴住居

46ＳＩ１・66ＳＩ１（第108図、写真図版53・54）

〔位置〕ⅣＢ２ａ、２ｂ、３ａ、３ｂに位置する。

〔重複〕46次、66次にまたがって調査したため、２つの名称がついているが同一の遺構である。46ＳＫ19、46ＳＫ22、46ＳＫ23、46ＳＫ27、46ＳＫ28、46ＳＫ31、66ＳＫ７、66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ14と重複しているが、いずれよりも本遺構が古い。

〔平面形式〕古代の竪穴住居である。南北長は510cm、東西長は520cmの方形を呈する。東西の軸方向はＮ－79°－Ｅである。

〔カマド〕東壁の中央から南寄りにカマドを持つ。煙道は削平のため失われており形状は不明である。ソデは明黄褐色ロームにより作られている。両ソデの間に橙色の火焼面がある。

〔柱穴〕本住居に伴う柱穴ははっきり特定できないが、46Ｐ337、66Ｐ57、66Ｐ62の３つを想定した。だが配列が不整であり、これらが確実に本住居の柱穴かどうかは自信がない。本来は４つの柱穴からなるが、北東側にあるべき柱穴は46ＳＫ28、46ＳＫ31の構築により失われたと考えたい。

〔付属施設〕カマド南脇に皿状の掘込みがあり、本住居に伴う施設と考えられる。

〔床面〕きっちり平坦ではなく、緩やかな凹凸がみられる。北西側には黄褐色土による貼り床が施される。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕カマドの埋土から、土師器坏（3001）、小型の長胴甕（3003）、須恵器坏（3006）、須恵器甕（3007）が出土した。また床面から土師器長胴甕（3004、3005）が出土した。また埋土から土師器の高台部（3002）、須恵器甕（3008、3009）が出土した。（3002）の高台部は12世紀の柱状高台かわらけに似るが、確実に本住居の埋土から出土した。

〔年代〕出土遺物から９世紀後半、おそらくは十和田ａ火山灰降下以前の所属と考えられる。

２　建物

66ＳＢ１（第109図）

〔位置〕ⅣＢ５ａ、５ｂに位置する。

〔重複〕46ＳＫ29、66ＳＫ２、66ＳＢ２、66ＳＢ３、66ＳＢ４、66ＳＢ７とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。不整なプランであるが、桁行は512cm、梁間は595cmと推定される。面積は約10.0坪である。使用した柱穴は11個である。

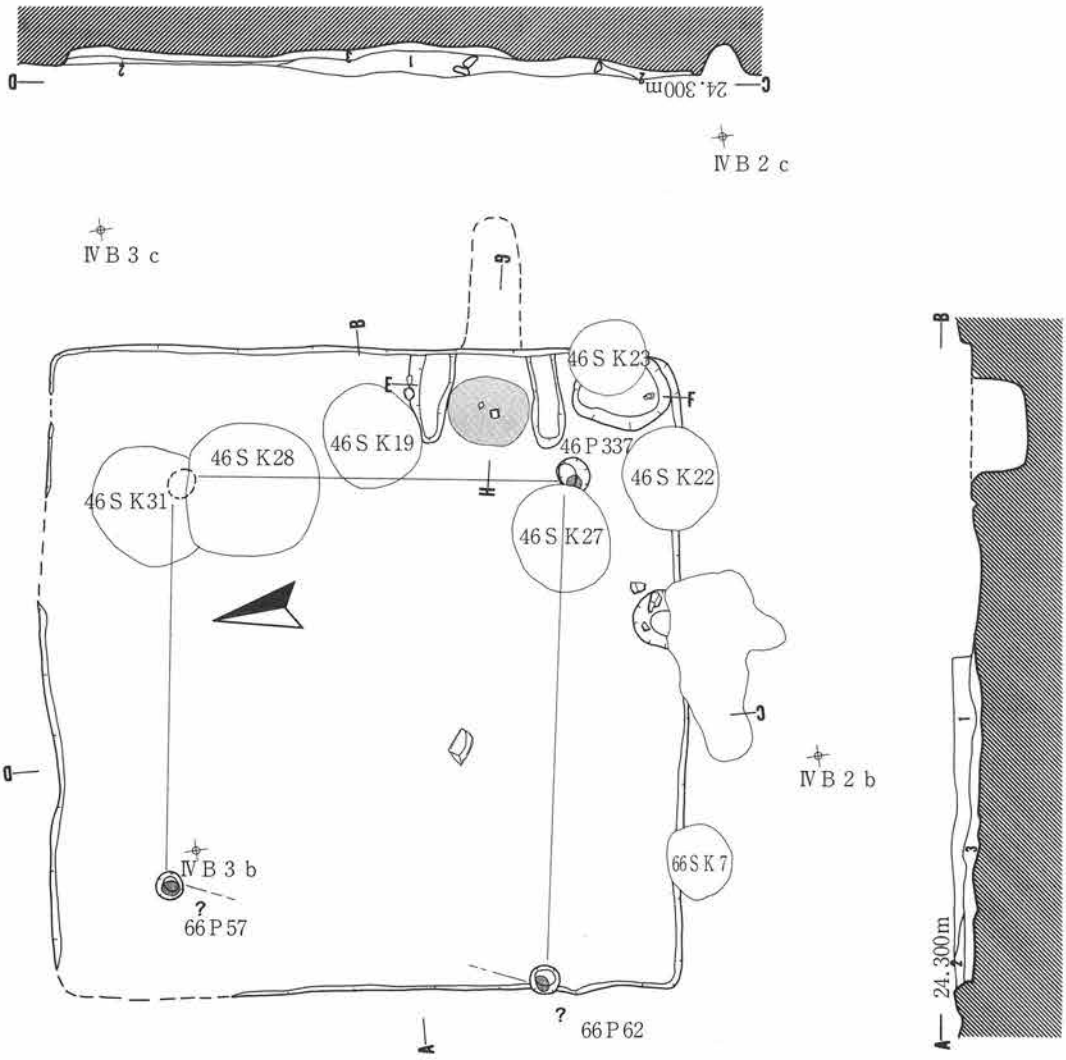
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－１°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから、付属屋と考えられる。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P57	21.7	23.899
P62	24.9	23.902
46P337	9.4	23.675

46S11
1　10YR3/2黒褐色土　10YR2/2　黒褐色土を多量混入　炭化物微量混入
2　10YR4/2灰黄色土　10YR6/6　明黄褐色土を多量に含む
3　2.5Y5/6黄褐色土　10YR3/3　暗褐色土を多量に混入

カマド
1　10YR4/4褐色土　炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
2　10YR4/4褐色土：焼土粒多量混入
3　10YR4/4褐色土：炭化物粒微量混入
4　カマドのソデ　2.5Y7/6明黄褐色ローム　10YR4/4褐色土ブロック多量混入
5　火焼面　5YR6/8橙色焼土
6　7.5YR4/4褐色土　2.5Y7/6明黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入
7　7.5YR4/4褐色土　2.5YR4/6赤褐色焼土ブロック少量混入、炭化物粒少量混入
8　2.5Y7/6明黄褐色ローム　7.5YR4/4褐色土まだら状に混入

0　4m

第108図　C地区の竪穴住居跡（46・66SI1）

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ２（第109図）

〔位置〕ⅣＢ４ａ、４ｂ、５ａ、５ｂに位置する。

〔重複〕46ＳＫ29、46ＳＫ30、66ＳＫ２、66ＳＢ１、66ＳＢ３、66ＳＢ４、66ＳＢ７とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は692cm、梁間は397cmである。面積は約8.3坪である。使用した柱穴は６個である。東辺の未検出の柱穴３個は意図して探したが検出できなかった。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－11°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）と４尺６寸（約140cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから、付属屋と考えられる。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ３（第109図）

〔位置〕ⅣＢ４ａ、５ａに位置する。

〔重複〕46ＳＫ29、46ＳＫ30、66ＳＫ１、66ＳＫ２、46ＳＡ１、66ＳＢ１、66ＳＢ２、66ＳＢ４、66ＳＢ７とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は792cm、梁間は調査区内で対応する柱穴が検出されていないので、448cm以上である。梁間を450cmと仮定すると面積は約10.8坪である。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－11°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では８尺４寸（約255cm）と９尺３寸（約282cm）が使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから、付属屋と考えられる。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ４（第109図）

〔位置〕ⅣＢ４ａ、４ｂ、５ａ、５ｂに位置する。

〔重複〕66ＳＫ２、66ＳＢ１、66ＳＢ２、66ＳＢ３、66ＳＢ７とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

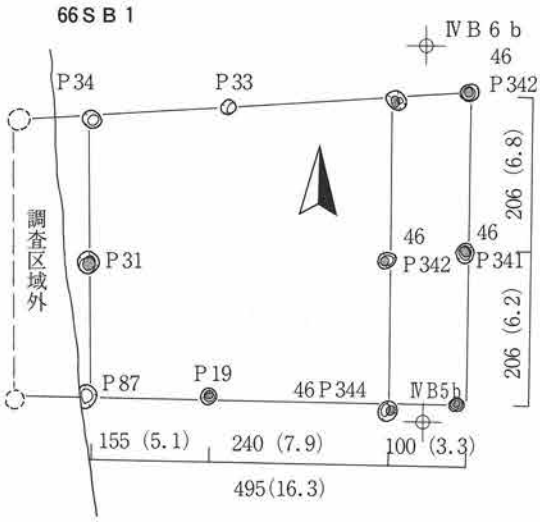
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は700cm、梁間は412cmである。面積は約8.7坪である。使用した柱穴は８個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－85°－Ｗである。

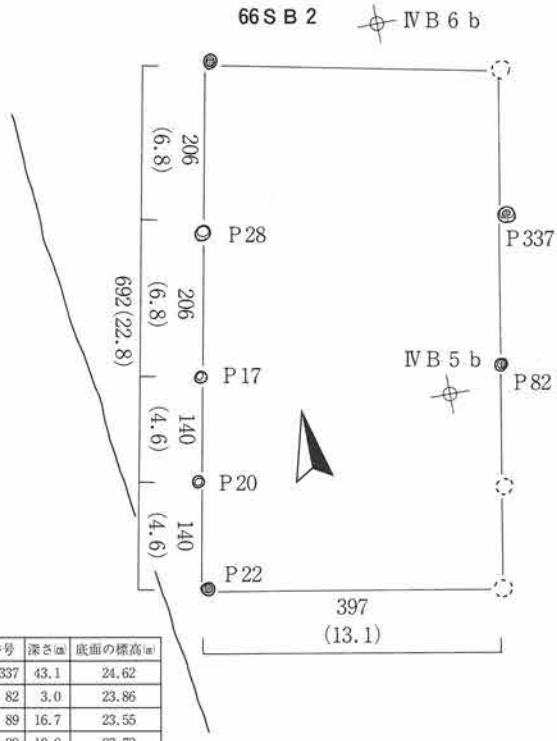
〔柱間寸法〕桁行では６尺１寸（約185cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

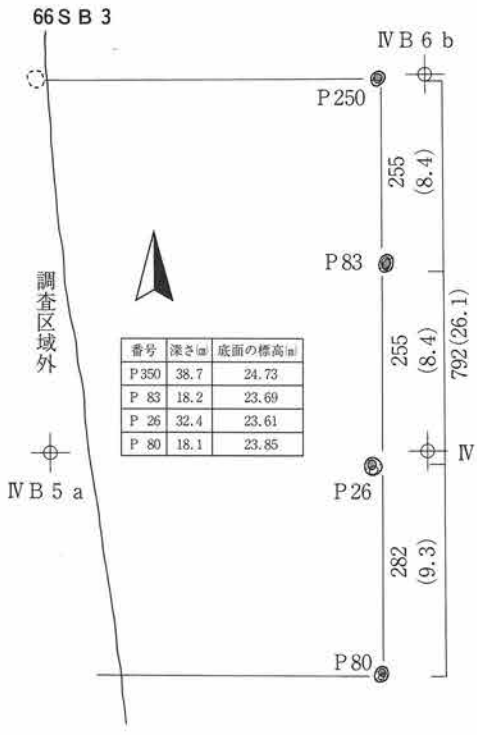
〔付属施設〕なし



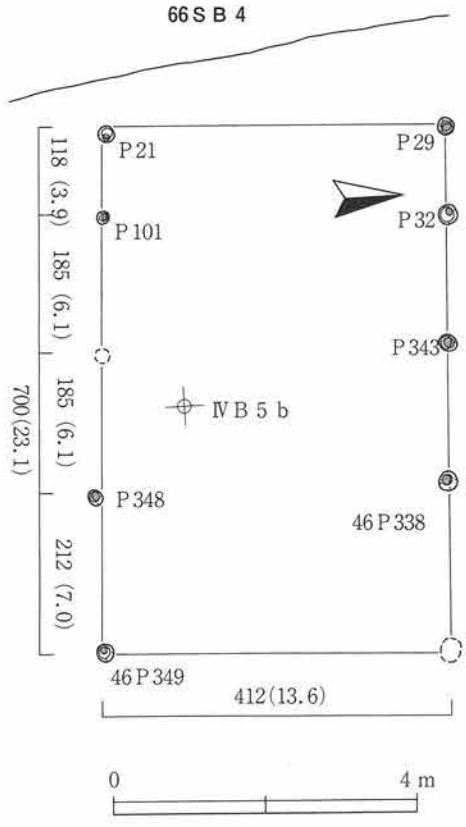
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P34	14.5	23.71
P33	44.7	23.38
46P344	39.4	23.42
46P340	25.8	23.50
P31	48.6	23.43
46P342	27.2	23.64
46P341	25.1	23.57
P87	23.8	23.70
P19	18.0	23.78
46P346	41.5	23.55
46P347	22.4	23.71



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P337	43.1	24.62
P 82	3.0	23.86
P 89	16.7	23.55
P 28	19.8	23.73
P 17	15.6	23.78
P 20	11.0	23.85
P 22	18.9	23.81



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P350	38.7	24.73
P 83	18.2	23.69
P 26	32.4	23.61
P 80	18.1	23.85



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 29	39.2	23.48
P 32	25.2	23.62
P343	24.0	23.82
46P338	30.9	23.44
P 21	6.8	23.91
P101	4.8	23.91
P348	18.5	23.89
46P349	17.6	23.67

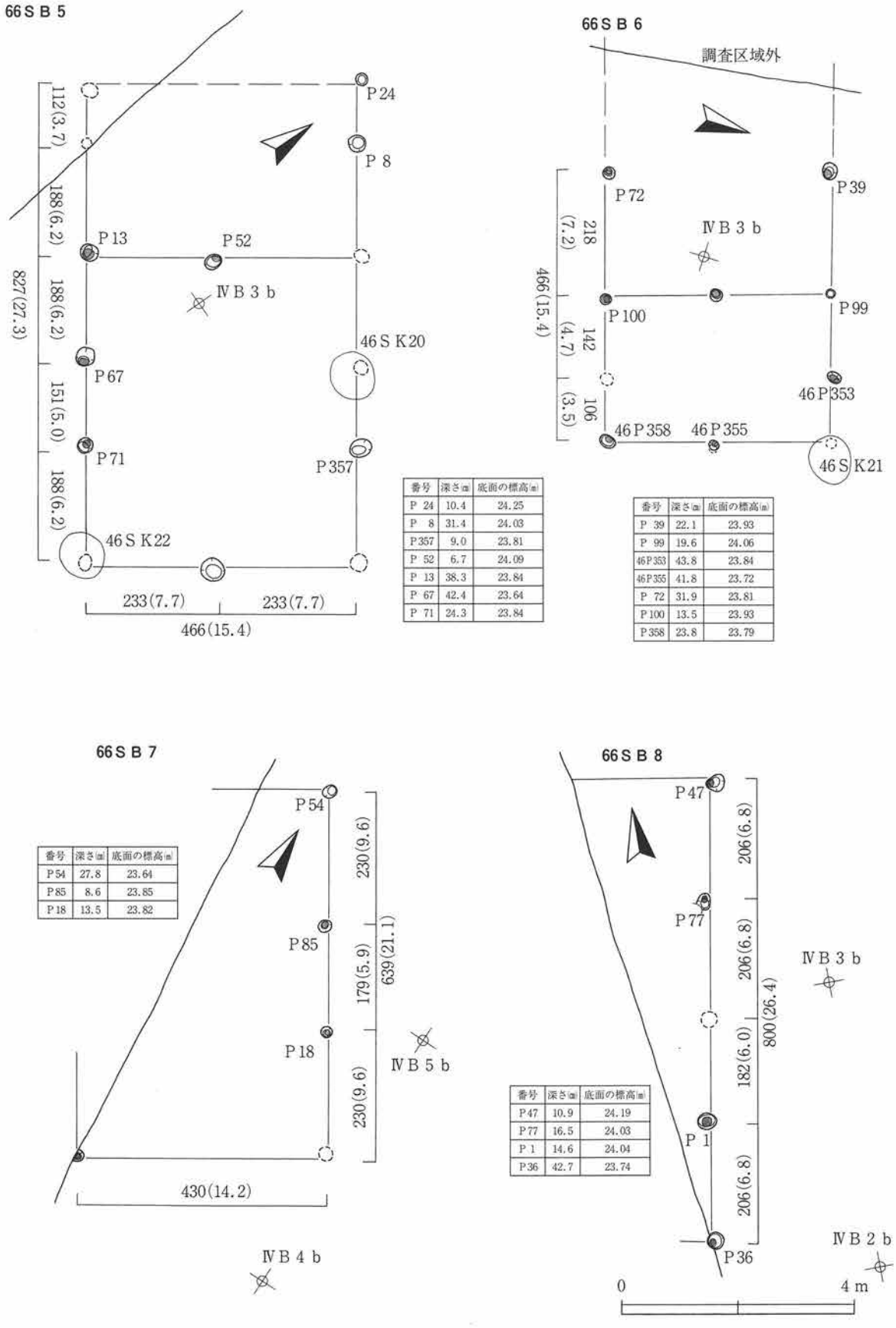
第109図　C地区の建物①（66SB1～4）

〔建物の性格〕大きさから、付属屋と考えられる。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ５（第110図）
〔位置〕ⅣＢ２ａ、２ｂ、３ａ、３ｂに位置する。
〔重複〕66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ14、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＫ20、46ＳＫ22と重複するが、おそらく本遺構が古い。だが、土坑の確認時に柱穴を検出できなかった可能性もあり、確実なことはいえない。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は827cm、梁間は466cmである。面積は約11.7坪である。南北２室に分かれるプランと考えられる。使用した柱穴は８個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－56°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺２寸（約188cm）が多用されている。梁間では７尺７寸（約233cm）が用いている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ６（第110図）
〔位置〕ⅣＢ２ａ、２ｂ、３ａ、３ｂに位置する。
〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ14、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＫ21と重複するが、おそらく本遺構が古い。だが、土坑の確認時に柱穴を検出できなかった可能性もあり、確実なことはいえない。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で466cm、梁間は394cmである。検出された分で面積は約５．６坪である。東西２室に分かれるプランと考えられる。使用した柱穴は８個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－72°－Ｅである。
〔柱間寸法〕梁間では６尺５寸（約197cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ７（第110図）
〔位置〕ⅣＢ４ａ、５ａに位置する。
〔重複〕66ＳＫ１、66ＳＢ１、66ＳＢ２、66ＳＢ３、66ＳＢ４、66ＳＢ９とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また46ＳＡ１と重複するが、おそらく本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は639cm、梁間は430cmである。面積は約8.3坪である。使用した柱穴



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 24	10.4	24.25
P 8	31.4	24.03
P357	9.0	23.81
P 52	6.7	24.09
P 13	38.3	23.84
P 67	42.4	23.64
P 71	24.3	23.84

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 39	22.1	23.93
P 99	19.6	24.06
46P353	43.8	23.84
46P355	41.8	23.72
P 72	31.9	23.81
P100	13.5	23.93
P358	23.8	23.79

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P54	27.8	23.64
P85	8.6	23.85
P18	13.5	23.82

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P47	10.9	24.19
P77	16.5	24.03
P 1	14.6	24.04
P36	42.7	23.74

第110図　C地区の建物②（66SB5～8）

は４個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－33°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では７尺６寸（約230cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから、付属屋と考えられる。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ８（第110図）

〔位置〕ⅣＢ２ａ、３ａに位置する。

〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は800cmであるが、梁間は調査区外に延びるため、不明である。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－12°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ９（第111図）

〔位置〕ⅣＢ３ａに位置する。

〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ13の柱穴Ｐ37と本建物の柱穴Ｐ38が重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で376cm、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－６°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺２寸（約188cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ10（第111図）

〔位置〕ⅣＢ２ａ、３ａに位置する。

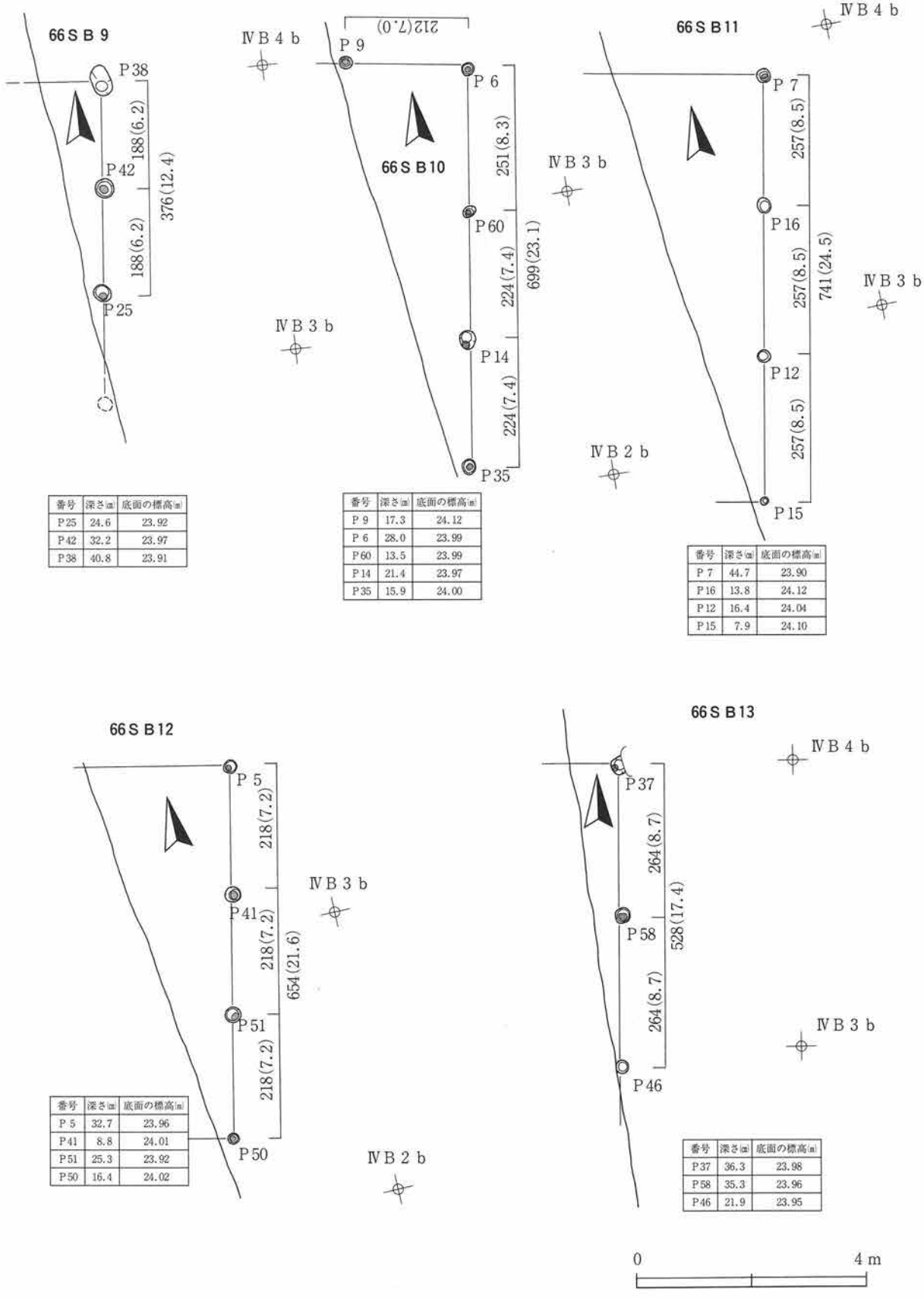
〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ15、66ＳＢ16

とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は699cm、梁間は検出された分で212cmである。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－９°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺４寸（約224cm）が多用されている。梁間では７尺（約212cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ11（第111図）
〔位置〕ⅣＢ２ａ、３ａに位置する。
〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は741cm、梁間は検出された分で173cmである。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－11°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺５寸（約257cm）が多用されている。梁間では５尺７寸（約173cm）を用いている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ12（第111図）
〔位置〕ⅣＢ２ａ、３ａに位置する。
〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ13、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は654cm、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－13°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺２寸（約218cm）が多用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ13（第111図）
〔位置〕ⅣＢ２ａ、３ａに位置する。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P25	24.6	23.92
P42	32.2	23.97
P38	40.8	23.91

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 9	17.3	24.12
P 6	28.0	23.99
P60	13.5	23.99
P14	21.4	23.97
P35	15.9	24.00

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 7	44.7	23.90
P16	13.8	24.12
P12	16.4	24.04
P15	7.9	24.10

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 5	32.7	23.96
P41	8.8	24.01
P51	25.3	23.92
P50	16.4	24.02

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P37	36.3	23.98
P58	35.3	23.96
P46	21.9	23.95

第111図　C地区の建物③（66SB 9～13）

〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また本建物の柱穴Ｐ37と66ＳＢ９の柱穴Ｐ38が重複するが、本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で528cm、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－２°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では８尺７寸（約264cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ14（第112図）

〔位置〕ⅣＢ２ａ、２ｂ、３ａ、３ｂに位置する。

〔重複〕66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ15、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＫ31と重複するが、おそらく本遺構が古い。だが、土坑の確認時に柱穴を検出できなかった可能性もあり、確実なことはいえない。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は484cm、梁間は273cmである。面積は約4.0坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－35°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では７尺４寸（約224cm）と８尺６寸（約260cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＢ15（第112図）

〔位置〕ⅣＢ３ａ、４ａに位置する。

〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ６、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ16とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で364cm、梁間は345cmである。面積は検出された分で約3.8坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－88°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺（約182cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ16（第112図）

〔位置〕ⅣＢ３ａ、４ａ、３ｂ、４ｂに位置する。

〔重複〕66ＳＢ５、66ＳＢ８、66ＳＢ９、66ＳＢ10、66ＳＢ11、66ＳＢ12、66ＳＢ13、66ＳＢ15とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は582cm、梁間は312cmである。面積は約5.5坪である。使用した柱穴は５個である。南側の柱穴は地山が削平されてしまったため失われ、検出されなかったと考えたい。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－80°－Ｅである。

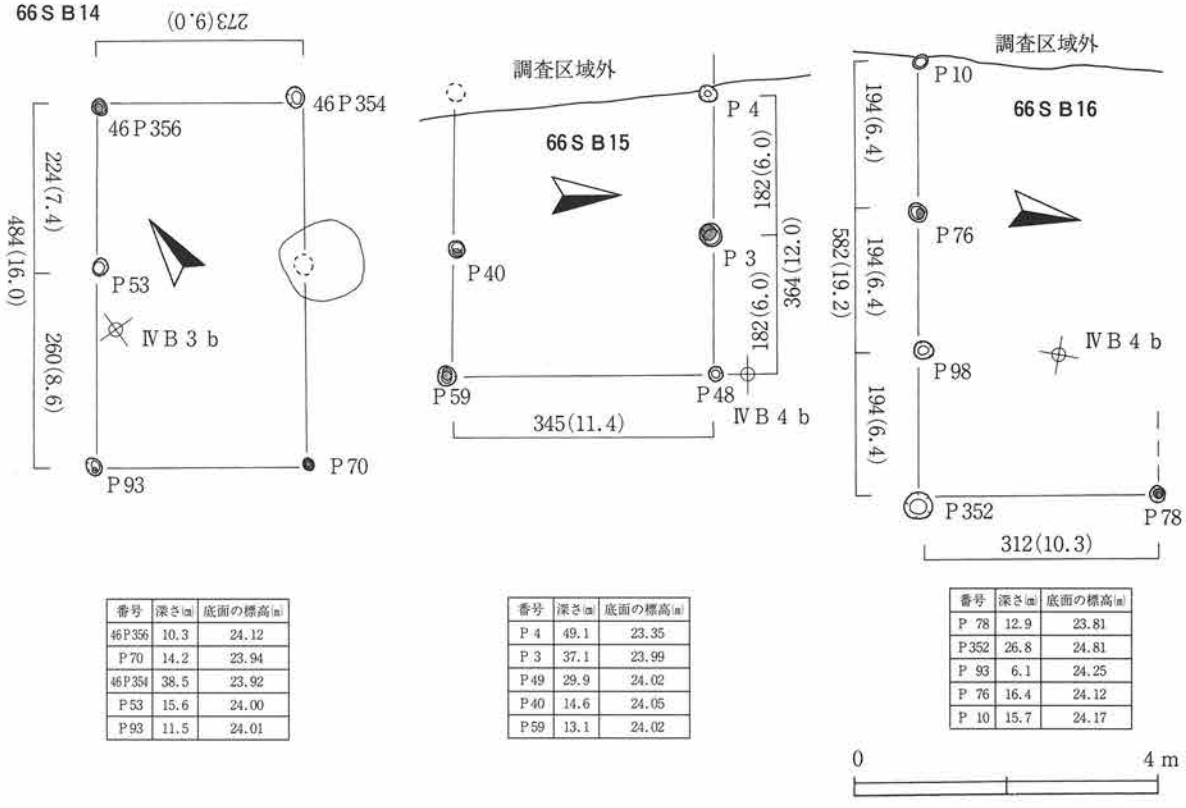
〔柱間寸法〕桁行では６尺４寸（約194cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
46P356	10.3	24.12
P70	14.2	23.94
46P354	38.5	23.92
P53	15.6	24.00
P93	11.5	24.01

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P4	49.1	23.35
P3	37.1	23.99
P49	29.9	24.02
P40	14.6	24.05
P59	13.1	24.02

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P78	12.9	23.81
P352	26.8	24.81
P93	6.1	24.25
P76	16.4	24.12
P10	15.7	24.17

第112図　Ｃ地区の建物④（66ＳＢ14～16）

3　土坑

46ＳＫ19（第113図、写真図版54）

〔位置〕ⅣＢ２ｂに位置する。

〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（3366）が出土した。

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＫ20（第113図、写真図版54）

〔位置〕ⅣＢ２ｃに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は平坦であり、壁は垂直に立つ。

〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。

〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ21（第113図、写真図版54）

〔位置〕ⅣＢ２ｃに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はフラスコ状に斜めに立つ。

〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕埋土中から渥美産陶器甕片（3639）が出土した。

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＫ22（第113図、写真図版54）

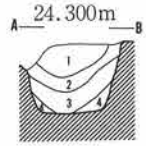
〔位置〕ⅣＢ２ｂに位置する。

〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。

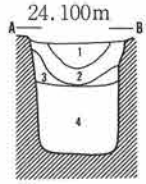
〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はやや斜めに立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。

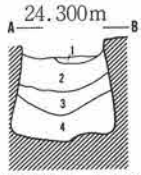
〔出土遺物〕なし



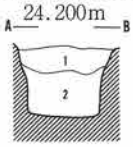
46SK19
1　10YR5/2灰黄褐色土　5Y7/3浅黄色ローム少量混入、炭化物粒少量混入
2　10YR5/3にぶい黄橙色土　炭化物粒少量混入
3　10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ローム粒少量混入、炭化物粒少量混入
4　10YR3/2黒褐色土　5Y7/3浅黄色ローム縞状に混入



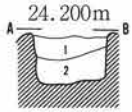
46SK20
1　10YR5/2灰黄褐色土　2.5Y7/6明黄褐色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒少量混入
2　2.5Y7/6明黄褐色ローム　10YR5/2灰黄褐色土少量混入
3　10YR5/1褐灰色土　2.5Y7/6明黄褐色ローム縞状に少量混入
4　10YR5/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　ややしまりなし



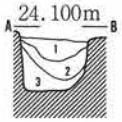
46SK21
1　10YR5/3にぶい黄褐色土　2.5Y7/6明黄褐色ローム縞状に混入
2　10YR4/2灰黄褐色土　2.5Y7/6明黄褐色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒混入
3　10YR5/1褐灰色土　2.5Y7/6明黄褐色ローム縞状に混入
4　10YR5/1褐灰色土　炭化物粒混入　ややしまりなし



46SK22
1　10YR4/4褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR5/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　ややしまりなし

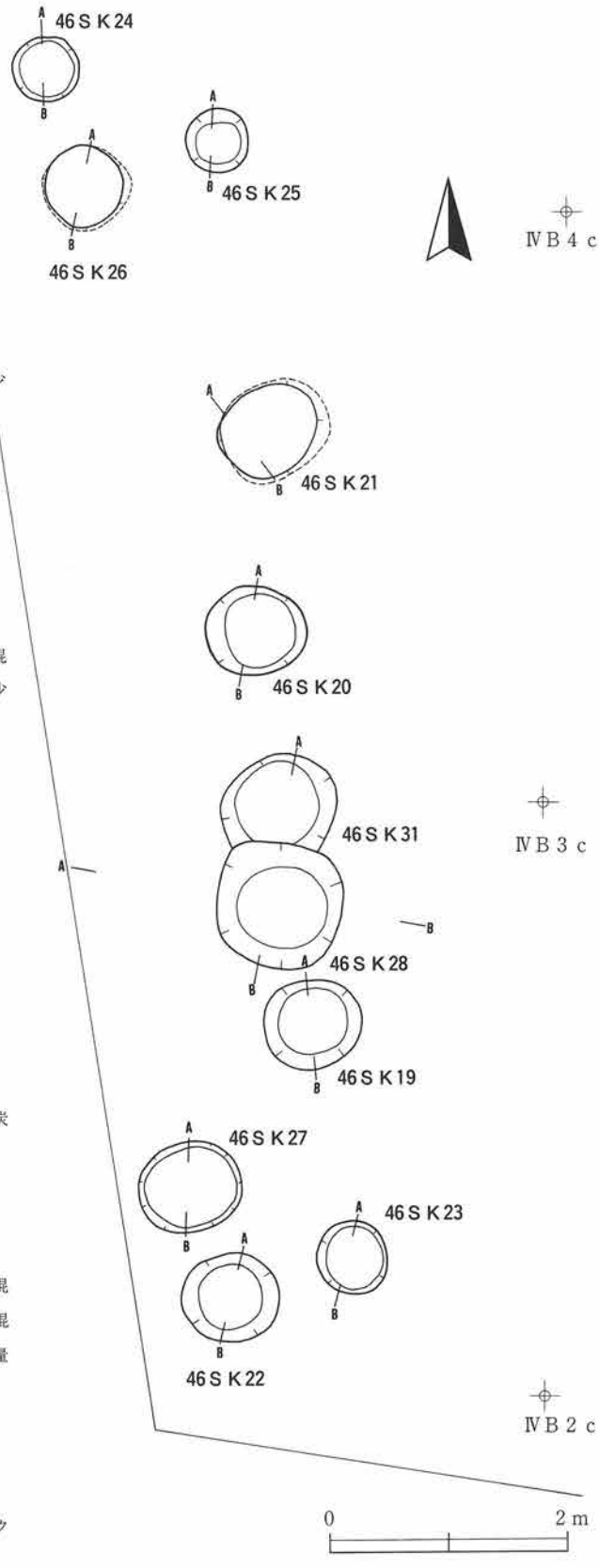


46SK23
1　10YR5/3にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR5/1褐灰色土　2.5Y7/6明黄褐色ローム粒少量混入、炭化物粒混入



46SK24
1　10YR3/3暗褐色土　10YR7/8黄橙色ロームまだら状に多量混入、炭化物粒少量混入
2　10YR3/3暗褐色土　2.5Y7/6明黄褐色ロームブロック少量混入
3　10YR5/2灰黄褐色土　10YR7/8黄橙色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒混入

46SK25
1　10YR5/3にぶい黄褐色土　2.5Y7/6明黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物粒混入
2　10YR5/2灰黄褐色土　炭化物粒少量混入



第113図　C地区の土坑①（46SK19～28・31）

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ23（第113図、写真図版55）
〔位置〕ⅣＢ２ｂに位置する。
〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（3355、3360、3364）とろくろかわらけ（3401）が出土した。
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＫ24（第113図、写真図版55）
〔位置〕ⅣＢ４ｂに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ25（第113図、写真図版55）
〔位置〕ⅣＢ４ｂに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面にはやや凹凸がある。壁はやや斜めに立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ26（第113図、写真図版56）
〔位置〕ⅣＢ３ｂ、４ｂに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積である。４層は有機質分が多い土で木屑や種子が混入している。この

4層の土を採取して土壌分析を（株）古環境研究所に依託した。（第13章１）

〔出土遺物〕埋土中からろくろかわらけ（3395）と木製の下駄片（3817、3818、3819）が出土した。

〔遺構の性格〕形状と埋土の状態から平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」である。土層分析では多数の回虫、鞭虫の寄生虫卵が検出された。またヒユ属の種子が多数検出された。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＫ27（第113図、写真図版56）

〔位置〕ⅣＢ２ｂに位置する。

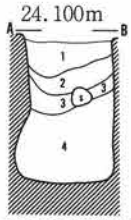
〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。

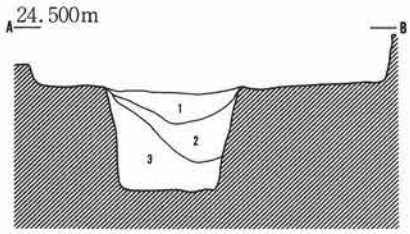
〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕埋土中から須恵器甕片（3014）、手づくねかわらけ（3337、3371）が出土した。

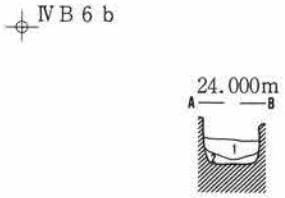
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異な



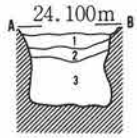
46ＳＫ26
1　10ＹＲ3/3暗褐色土　10ＹＲ7/8黄橙色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒多量混入
2　10ＹＲ4/1褐灰色土　10ＹＲ3/3暗褐色土、10ＹＲ7/8黄橙色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒多量混入　白い粒（骨片か？）少量混入
3　10ＹＲ4/1褐灰色土　10ＹＲ6/1褐灰色土まだら状に少量混入、炭化物粒少量混入
4　10ＹＲ5/1褐灰色土　炭化物粒多量混入　木屑、瓜類の種微量混入。しまりなし



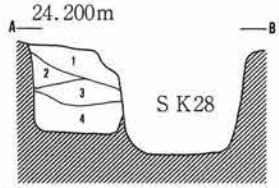
46ＳＫ28
1　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土　10ＹＲ8/4浅黄橙色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入　かわらけ細片少量出土
2　10ＹＲ8/4浅黄橙色ローム　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土まだら状に少量混入
3　５Ｙ4/1灰色土　炭化物粒多量混入



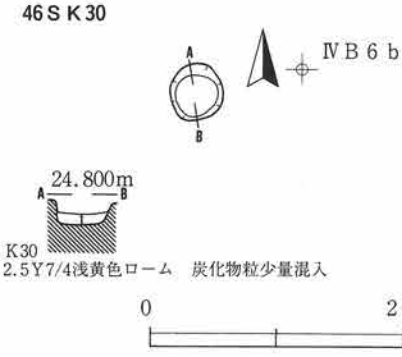
46ＳＫ29
1　7.5ＹＲ4/2灰褐色土　炭化物粒多量混入
2　2.5Ｙ7/4浅黄色ローム　炭化物粒少量混入



46ＳＫ27
1　10ＹＲ3/3暗褐色土　炭化物粒少量混入
2　10ＹＲ5/1褐灰色土　炭化物粒少量混入
3　10ＹＲ5/1褐灰色土　10Ｙ6/2オリーブ灰色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入



46ＳＫ31
1　10ＹＲ4/4褐色土　10ＹＲ7/3にぶい黄橙色ローム大ブロック多量混入、炭化物粒多量混入
2　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土　10ＹＲ7/3にぶい黄橙色ローム粒少量混入、炭化物粒少量混入
3　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土　10ＹＲ6/2灰黄褐色ロームブロック右半分に多量混入、炭化物粒多量混入
4　10ＹＲ3/1黒褐色土　10Ｙ6/2オリーブ灰色ロームブロック少量混入、炭化物粒多量混入



46ＳＫ30
1　2.5Ｙ7/4浅黄色ローム　炭化物粒少量混入

第114図　Ｃ地区の土坑②（46ＳＫ26～31）

っている。
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

46ＳＫ28（第113図、写真図版56）
〔位置〕ⅣＢ２ｂに位置する。
〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＫ31とも重複するが本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ29（第114図、写真図版56）
〔位置〕ⅣＢ５ａに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ30（第114図、写真図版57）
〔位置〕ⅣＢ５ａに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と思われる。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

46ＳＫ31（第113図、写真図版57）
〔位置〕ⅣＢ２ｂ、３ｂに位置する。
〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本遺構が新しい。また46ＳＫ28と重複するが本遺構が古い。
〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。
〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積である。
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（3383、3384）と渥美産陶器甕片（3621）が出土した。

〔遺構の性格〕形状は平泉遺跡群で多く検出されている「トイレ状遺構」に類似するが、埋土の様子は異なっている。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる。

66ＳＫ１（第115図、写真図版57）

〔位置〕ⅣＡ５ｉに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕４層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から常滑甕片（3534、3535）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

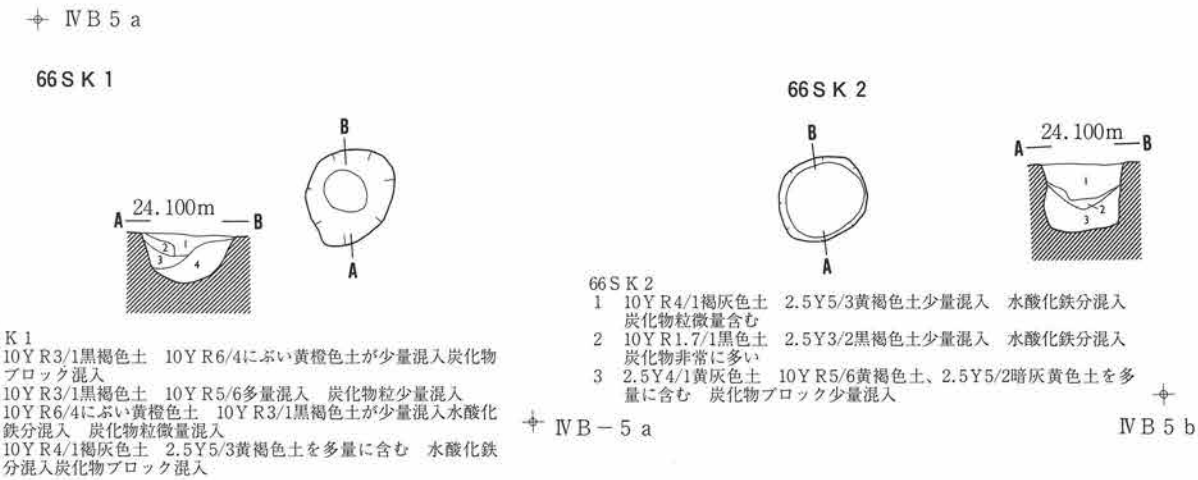
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

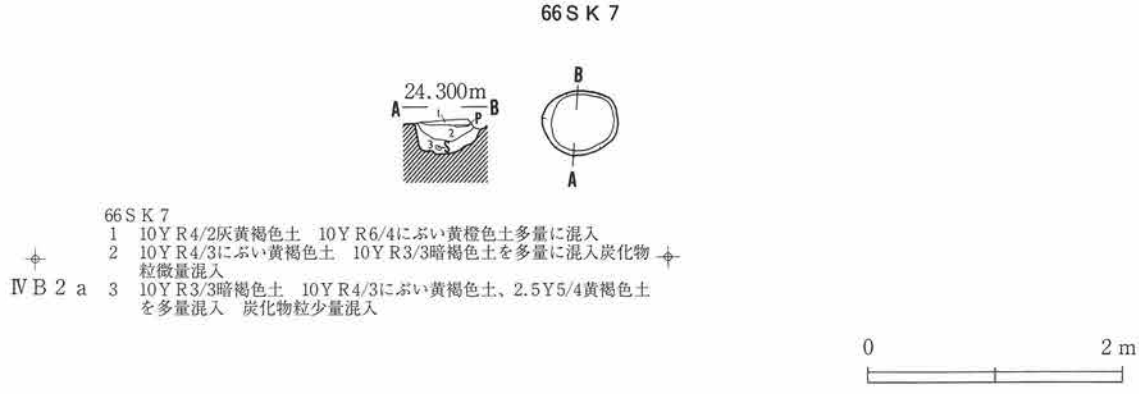
66ＳＫ２（第115図、写真図版57）

〔位置〕ⅣＢ４ａに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。





第115図　Ｃ地区の土坑③（66ＳＫ１・２・７）

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（3432）、常滑甕片（3536）が出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＫ７（第115図、写真図版58）
〔位置〕ⅣＢ２ａに位置する。
〔重複〕竪穴住居である46ＳＩ１と重複するが本土坑が新しい。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。
〔埋土〕３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

4　溝

46ＳＤ16（Ｃ地区分）（第116・117図、写真図版58・59）
46ＳＤ16はＢ地区からＣ地区に渡って伸びる溝である。ここではＣ地区分を報告する。
〔位置〕ⅣＢ２ｃ、３ｂ、３ｃ、４ｂ、４ｃ、５ｂ、５ｃ、６ｂ、７ｂ、７ｃ、８ｂ、９ｂ、ＶＢ０ｂに位置する。
〔重複〕埋没沢の整地層を切って構築されている。順番としては、整地を施した後、本溝を掘り込んでいるのであるが、整地した面と本溝は同時存在であったと考えられる。また本溝はＤ地区の66ＳＤ19に直接つながる同一の溝である。
〔平面形式〕部分的に幅が変わるが、全体的にはほぼ真っすぐである。ⅣＢ７ｃ付近で溝に段差がつき、その部分から東側に向かって溝が枝分かれして延びていく。この東流部分の続きは国道４号線の東側で検出されたＥ地区の66ＳＤ３につながる。
底面の傾斜方向はⅣＢ２ｃからⅣＢ７ｂ付近までは南から北に水が流れ、段差から北側に水が落ちる。ⅣＢ７ｂ、７ｃからⅣＢ９ｃ付近では北から南に水が流れるようになっている。そしていずれも東側に延びる溝に水が流れこんでいく。ⅣＢ９ｂより北では南から北に水が流れるようになっている。
〔埋土〕埋没沢から南側の埋土は２層に分けられる。シルト質の土である。自然堆積、人為堆積の別は不明である。埋没沢の中、それより北の部分では３層に分けられる。下半部は砂の層で明らかに流水により生成された層である。この層にはかわらけ、国産陶器片が非常に多量に含まれる。
〔出土遺物〕ⅣＢ７ｂから北の部分の埋土から、多量の遺物が出土した。以下列挙する。手づくねかわらけ（3301～3305、3307、3308、3312、3313、3315～3327、3329～3333、3335、3336、3338～3344、3346～3349、3351、3352、3354、3357～3359、3361、3363、3365、3372、3375～3382、3385、3387、3389、3390、3392、3393、3403）、ろくろかわらけ(3397～3399）、常滑産陶器（3504～3508、3510、3511、3516、3517、3522）、渥美産陶器（3601～3603、3615、3616、3618、3624、3625、3629、3632～3634、3642、3645）、猿投産陶器（3684、3685）、須恵器系陶器（3686）、中国産白磁（3701、3704、3705、3713、3714）中国産青白磁（37

17、3718）、丸瓦（3801）、平瓦（3807、3808）が出土している。一方ⅣＢ７ｂより南部分の埋土からの出土遺物はそれに比べると少ない。常滑産片口鉢（3501、3502）、常滑産陶器甕（3515、3518、3521）渥美産陶器壺（3604、3606～3611、3617、3620、3628、3631）が出土している。

〔溝の性格〕道路側溝である。道路の西側の側溝である。東側に延びる部分は道路の路面を横切ることになるが、道路と同時存在と考えられる。この部分は埋没沢の整地層の上にあたり、埋没沢の上流である西側と沢の両岸である南北から水が集まる部分である。東側に延びる溝は、この水を道路の路面から埋没沢の下流に排水する目的の溝と考えらえる。この溝幅は約１m20cmほどであり上を跨ぐのは少し難しい。よって道路の通行を妨げないため、上に板などが渡されていた可能性が考えられる。だがその痕跡は確認できなかった。この溝の続きは国道４号線の東側で検出されたＥ地区の66ＳＤ３につながり、さらに町教育委員会により調査された志羅山遺跡36次調査（平泉町教育委員会1995）の１号溝につながる。このように道路の路面の外へ、埋没沢にそって溝が延びることが確認されている。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

46ＳＤ17（ⅣＢ区分）(第116図、写真図版58・59)

46ＳＤ17はＢ地区からＣ地区に渡って伸びる溝である。ここではＣ地区分を報告する。

〔位置〕ⅣＢ２ｄ、３ｄ、４ｄに位置する。

〔重複〕なし

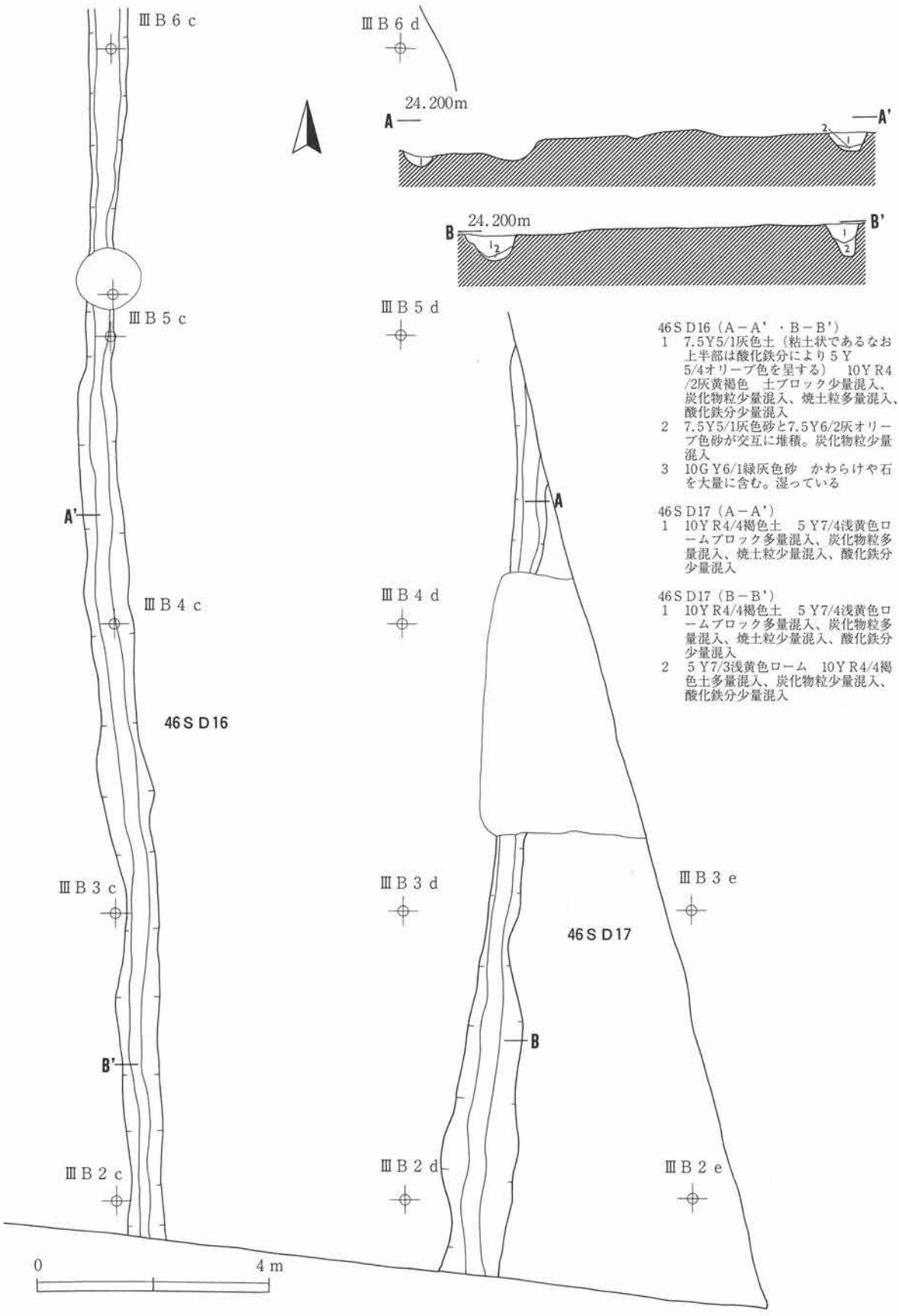
〔平面形式〕部分的に幅が変わるが、全体的にはほぼ真っすぐである。底面の傾斜方向は南から北に水が流れるようになっている。なお本溝は北側では調査区域外の国道４号線の下に延びていく。そして再び現われるのがＦ地区の66ＳＤ11である。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

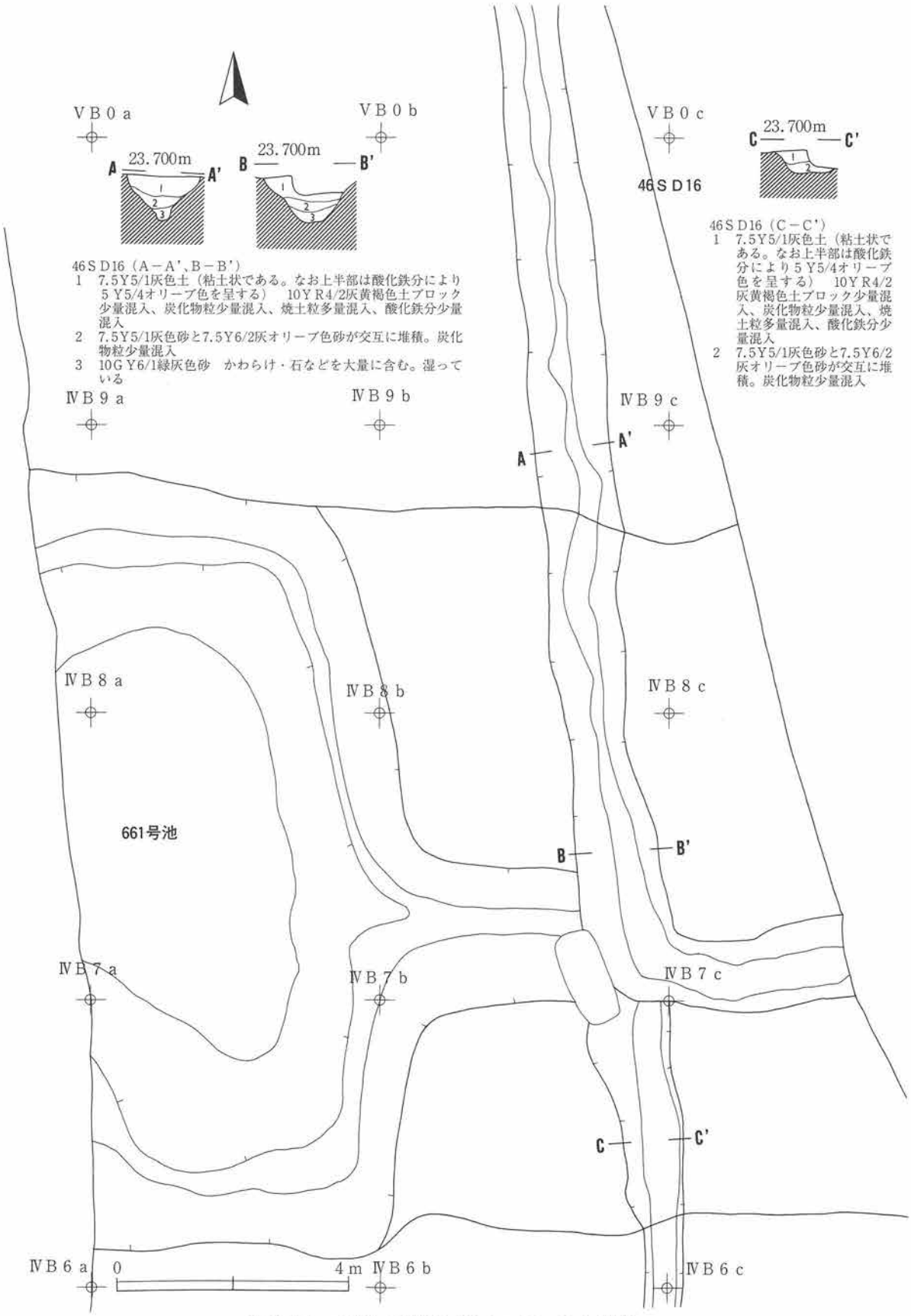
〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ（3366）、渥美産陶器甕（3640）、中国産白磁（3711）、丸瓦（3802）が出土した。

〔溝の性格〕Ａ地区から続く道路の側溝である。東側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属である。



第116図　C地区の溝①（46SD16・17）



第117図　C地区の溝②（46SD16・661号池）

5　池

661号池（第118～120図、写真図版60～67）

〔位置〕ⅣＢ６ａ、６ｂ、７ａ、７ｂ、８ａ、８ｂ、ⅣＡ７ｊ、８ｊに位置する。

〔重複〕埋没沢中に構築されている。埋没沢の埋立の整地層中に位置しているのであるが、本池の壁面、底面には整地層と同じ土が貼られており、沢の埋め立て整地の際に、同時に構築された池と理解できる。また道路側溝である46ＳＤ16と接するが同時存在と考えられる。

〔平面形〕西側が調査区外に広がるために全体のプランは検出されていない。本池が正方形に近い形であるのならば、検出された部分は全体の約半分ということになる。池のプランは埋没沢の幅に納まるように構築されている。

東側の岸の中央からは池の外へ向かって溝がのびており、道路側溝につながっている。池の水位が一定以上になった時の排水溝と考えられる。池の水面の標高が約23.0ｍを越えると、排水されるようになっている。池の南岸は湾状に作られた部分があり、池の岸に変化を付けている。この汀線が現われるのは、水面の標高が約23.0ｍ以下の時である。

〔底面、壁〕皿状の形態で、底面と壁面の区別ができない。壁面の縁近くは埋没沢の地山の壁をそのまま利用しているが、標高23.0ｍ付近から下の壁、底面には厚さ約10㎝前後の埋め立ての整地に使用されたのと同じ土（土層断面の６層）が貼られている。

〔埋土〕底面の構成する整地層を合わせて、７層に分けられる。上部の１、２ａ、２ｂ層は池が完全に廃絶した後に自然に流れこんだ土と考えられる。12世紀のかわらけ、国産陶器片を多量に含んでいるが、12世紀より後に堆積した層の可能性が高い。

３層、４層、５層は池が機能している段階に堆積した層と考えられる。いずれも水成堆積である。これらの層には多量に木質遺物や加工痕のない自然木が含まれていた。人為的に廃棄された遺物もあるが、自然に流れ込んだものも多いと考えられる。

〔出土遺物〕１、２ａ、２ｂ層中から多量の遺物が出土している。以下列挙する。須恵器坏（3015、3016）、手づくねかわらけ（3405～3431、3434～3484）、ろくろかわらけ（3485、3497）、高台付のかわらけ？（3498、3499）、常滑産片口鉢（3526、3527）常滑産甕（3514、3520、3528～3533）、渥美産山茶碗（3646～3649）、渥美産片口鉢（3650、3651）、渥美産甕（3615、3652～3660、3662～3668、3670～3682）須恵器系陶器（3690、3691）、中国産白磁碗（3720、3721、3723、3725、3727）、中国産白磁皿（3726）、中国産白磁壺（3728～3734、3736）　平瓦（3812、3813、3815）が出土している。

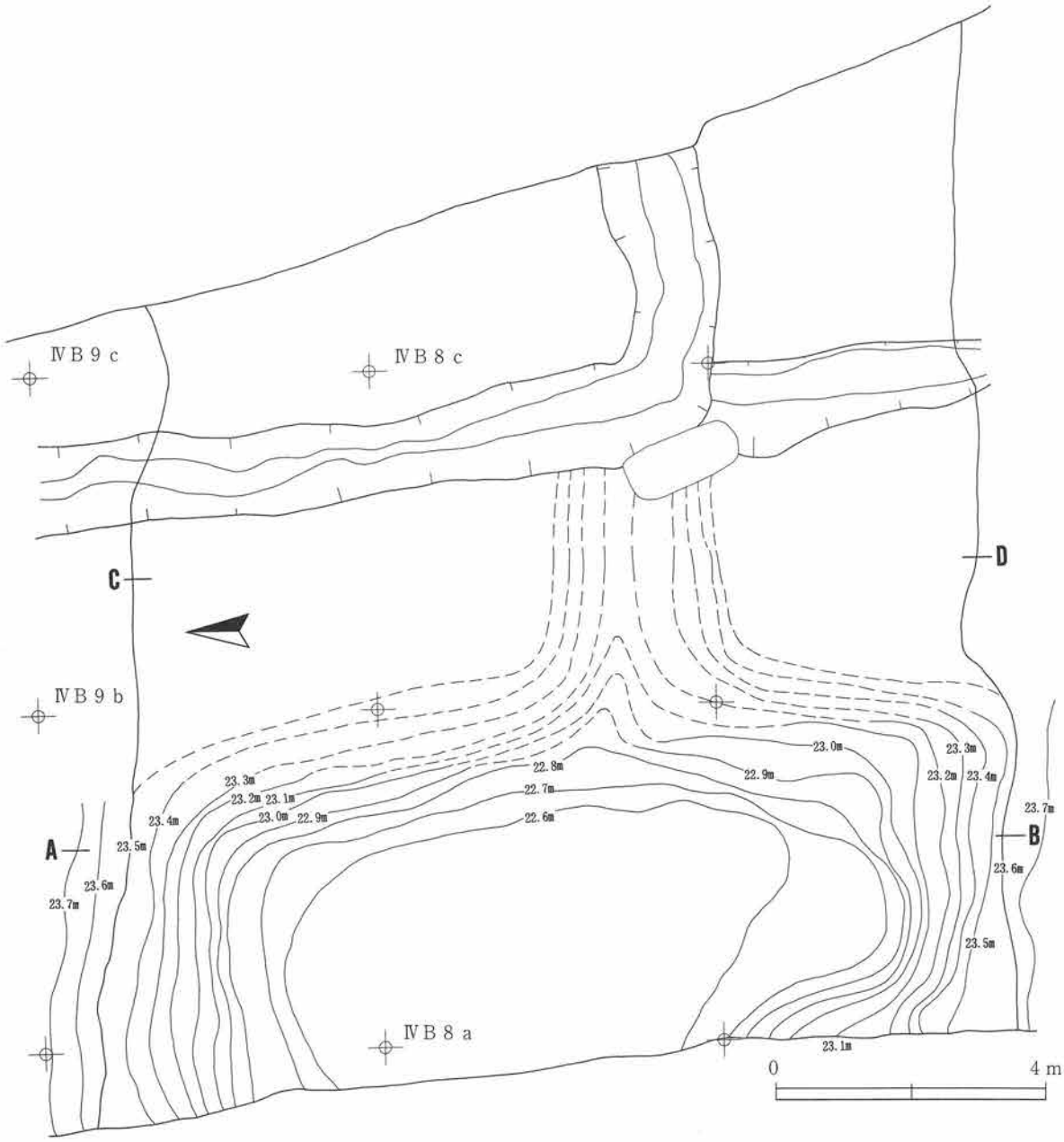
また池が機能していた段階の３層、４層、５層からも多量の遺物が出土している。以下列挙する。手づくねかわらけ（3101～3122）、この中の（3118、3119）には墨書が施されている。ロクロかわらけ（3123～3128）、笹塔婆（3131～3137）、墨書のある木片（3178）、漆器皿（3181～3183）、木製の大型椀（3184）、漆塗りの板状のもの（3185）、鳴りかぶら（3186）、漆塗りの棒状のもの（3187）、櫛（3188）、形代？（3189～3191、3193）、陽物（3192）、刀子の柄（3194、3195）、下駄（3196、3197）、扇の骨（3198）、ものさし（3199）、曲物底（3200、3201）、加工痕があるが製品名が不明の木片（3202～3215）、はし（3216～3241）、縄（3242）、平瓦（3243）、鉄鏃（3244）、轡（3245）が出土した。

〔遺構の性格〕はっきり断定はできないが、祭祀に関連する笹塔婆などが出土しており、祭祀行為が行なわれた場所であったことがわかる。この池の排水は埋立整地層の上に構築された溝を通って、太田川に流れて

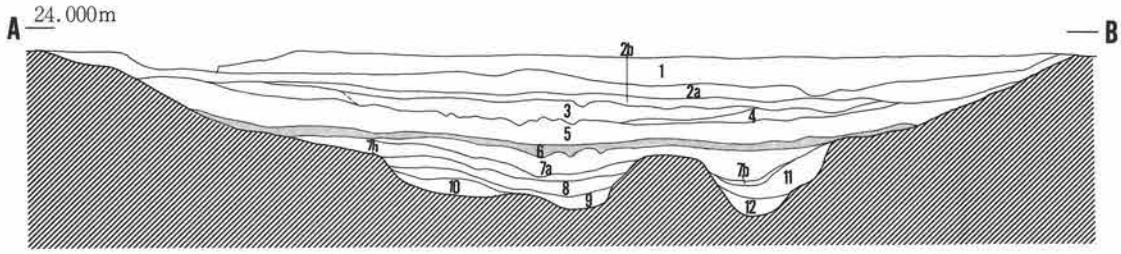
いくようになっている。けがれを都市の外に流す「祓」が行なわれていた可能性も考えられる。

沢を埋め立て、池を構築するという事業は大規模なものであり、個人的な行為とは考えられず、都市計画を実施できる権力者の意図によって構築されたものと考えらえる。

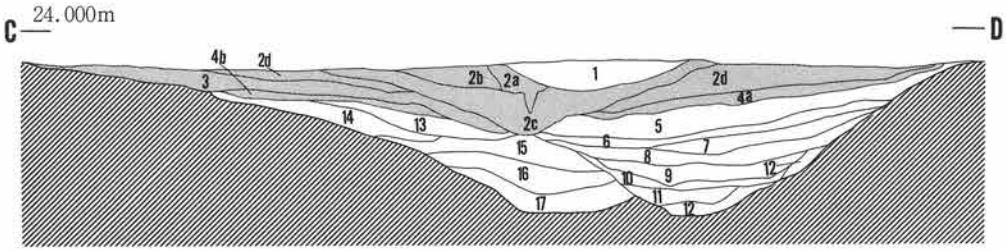
〔年代〕出土遺物から12世紀中葉に構築され、12世紀後半に機能していたと考えられる。



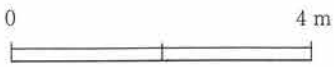
第118図　C地区の池①（66１号池平面）



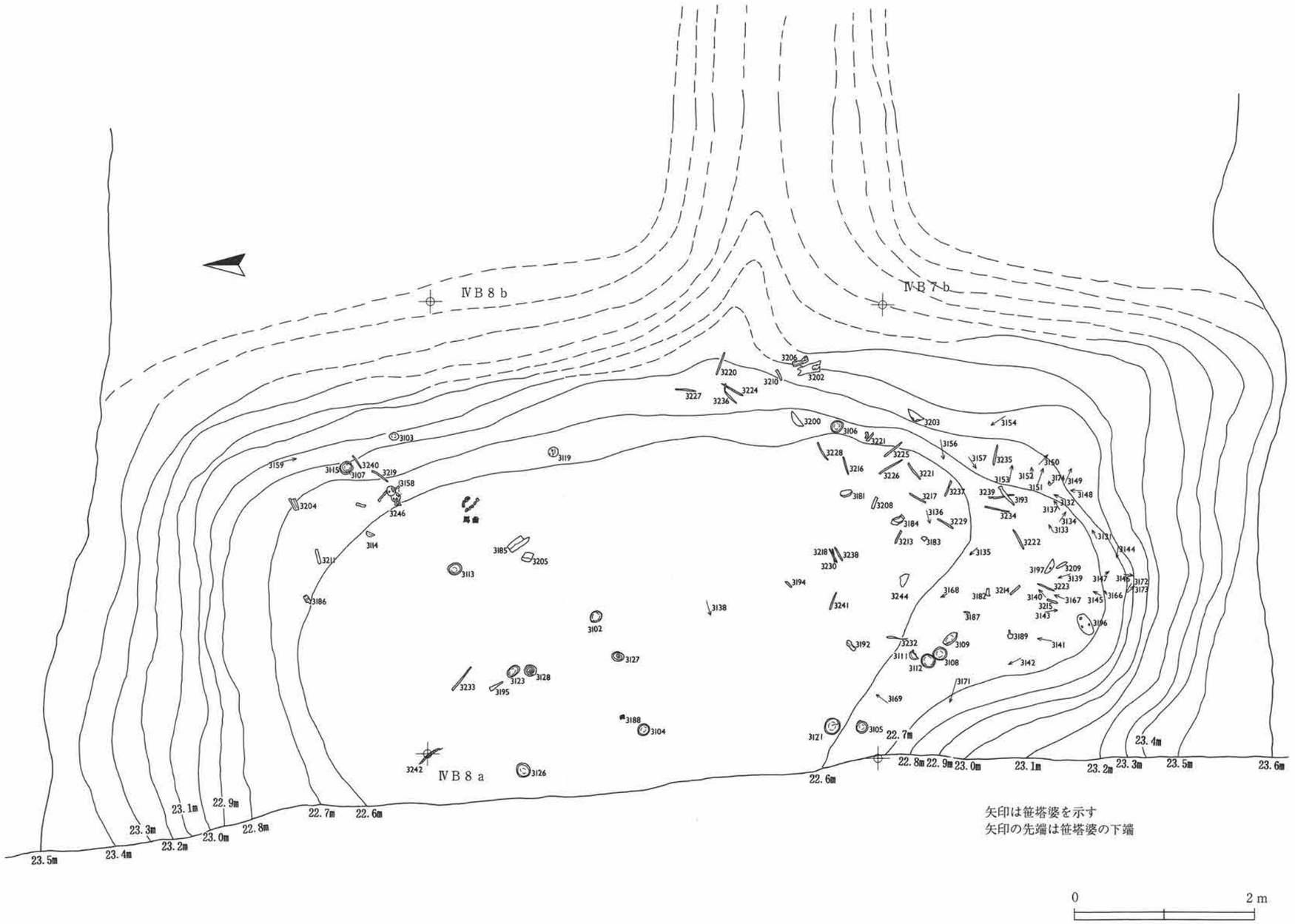
1　2.5Y R4/1黄灰色土　上半部に酸化鉄分多量混入　全体に炭化物粒、かわらけ片など多量に混入　非常に硬い
2 a　5 Y3/2オリーブ黒色土　炭化物粒かわらけ片など多量混入　5 Y6/8オリーブ色ロームまだら状に少量混入
2 b　5 Y3/2オリーブ黒色土　2.5Y3/2黒褐色ブロック　5 Y6/8オリーブ色ロームブロックを非常に多量に混入　12世紀の遺物も少量含む
3　5 Y4/1灰色土　5 Y4/2灰オリーブ色土をまだら上に多量混入　炭化物粒少量混入　5 Y5/3オリーブ色砂を少量混入　北側はその砂が非常に多い　12世紀の遺物出土　馬歯が出土
4　10Y R3/2黒褐色土　木くずを多量に含む　しまりなし　有機質遺物出土（くさい層）
5　5 Y2/2オリーブ黒色土　木くずを多量に含み、それに付着するリン分（青色）多量に混入　12世紀の遺物出土（轡、笹塔婆など）　人為堆積とは思われない
6　10Y R3/1黒褐色土　10G Y7/1明緑灰色ロームブロックを多量に混入12世紀の遺物は出土しない　人為的に貼った層
7 a　10Y R3/1黒褐色土　10G Y7/1明緑灰色色ロームをまだら状に少量混入土師器片が少量出土　鹿の骨（？）出土　自然木と思われるものが混入
7 b　5 Y4/1灰色土　5 Y7/1灰白色火山灰をまだら状に多量混入　火山灰は十和田ａか？　火山灰はベースの土ににじんだような形で混入している　土師器片出土
8　5 Y5/2灰オリーブ色土　同色の砂多量に混入
9　5 Y3/1オリーブ黒色土　炭化物粒少量混入
10　5 Y5/2灰オリーブ色砂　10G Y7/1明緑灰色ローム粒少量混入
11　5 Y4/2灰オリーブ色土　十和田ａ火山灰粒（？）少量混入　草根多量混入
12　5 Y2/2オリーブ黒色土　木くず、木の葉など多量に混入　土師器出土



1　5 Y5/1灰色土　炭化物粒混入　かわらけ片混入
2 a　5 Y5/1灰色土　5 Y6/6オリーブ色ローム（10G Y6/1褐灰色が酸化したもの）まだら状に少量混入、炭化物粒少量混入　人為的に埋めた土
2 b　5 Y2/1黒色土　5 Y5/1灰色土まだら状に多量混入　5 Y6/6オリーブ色ロームブロック少量混入　人為的に埋めた土
2 c　5 Y6/6オリーブ色ローム　5 Y2/1黒色土ブロック少量混入　人為的に埋めた土
2 d　5 Y6/6オリーブ色ローム：5 Y2/1黒色土ブロック多量混入　人為的に埋めた土
3　2.5Y3/1黒褐色土　5 Y6/6オリーブ色ロームまだら状に少量混入、炭化物粒少量混入　人為的に埋めた土か？
4 a　5 Y6/6オリーブ色ローム、2.5Y3/1黒褐色土入り混じり　人為的に埋めた土
4 b　2.5Y3/1黒褐色土　5 Y6/6オリーブ色ロームブロック少量混入　人為的に埋めた土か？
5　10Y R3/1黒褐色土　2.5Y4/2暗灰黄色土まだら状に少量混入、炭化物粒少量混入
6　10Y R3/1黒褐色土　2.5Y4/2暗灰黄色土まだら状に多量混入、炭化物粒少量混入
7　10Y R3/1黒褐色土　5 Y6/6オリーブ色ロームまだら状に多量混入
8　2.5Y3/1黒褐色土　炭化物粒多量混入、砂多量混入、植物片多量混入
9　10Y R4/2灰黄褐色土　炭化物粒多量混入　砂多量混入　植物片多量混入
10　2.5Y5/2暗灰黄色土　砂粒多量混入　十和田ａ火山灰まだら状に少量混入する
11　2.5Y5/2暗灰黄色土　炭化物粒多量混入、砂大多量混入、植物片多量混入
12　5 Y6/1灰色砂　炭化物粒多量混入、植物片多量混入
13　10Y R3/1黒褐色土　2.5Y5/2暗灰黄色土まだら状に多量混入
14　10Y R3/1黒褐色土　2.5Y5/2暗灰黄色土まだら状に多量混入
15　2.5Y5/2暗灰黄色土　10Y R3/1黒褐色土まだら状に少量混入、砂ブロック少量混入、植物根少量混入
16　10Y3/1オリーブ黒色土　2.5Y5/2暗灰黄色土まだら状に多量混入、炭化物粒多量混入、砂多量混入
17　7.5Y4/1灰色砂層　炭化物粒少量混入



第119図　C地区の池②（66 1 号池断面）



第120図　C地区の池③（661号池遺物出土状況）

6　塀

66ＳＡ１（第121図、写真図版59）

〔位置〕ⅣＢ４ａ、４ｂに位置する。

〔重複〕66ＳＢ２、66ＳＢ７と重複するがおそらく本遺構が新しい。また66ＳＢ３とプランが重複するが直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。

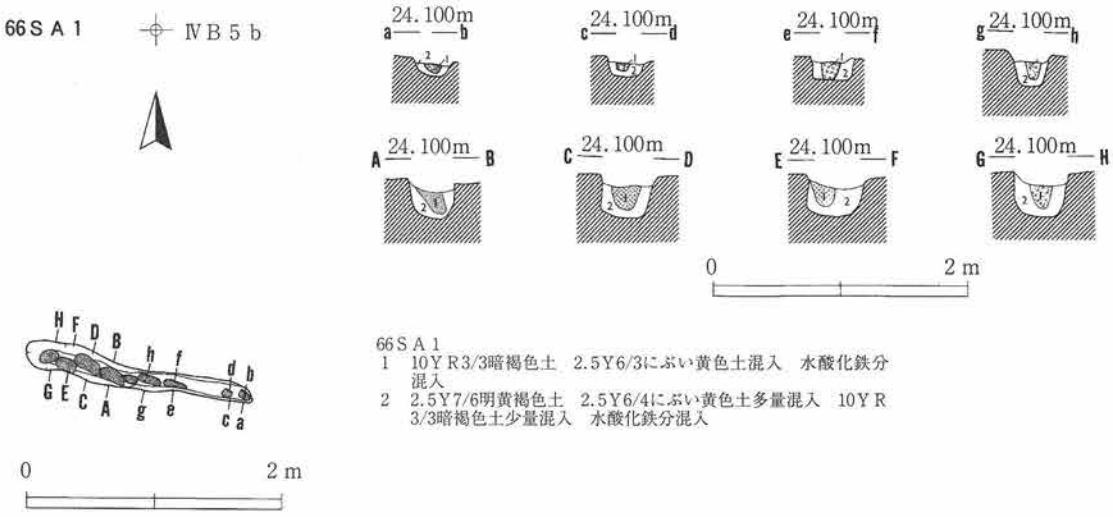
〔形式〕掘方の上幅は約22cmで、断面形がＵ字形である立てられた材木は分厚い板材と考えられる。幅は約５cm、長さは約20cmほどである。材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。

〔埋土〕掘方の埋土は１層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕塀である。

〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。



第121図　Ｃ地区の塀（46・66ＳＡ１）

C地区柱穴計測表

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
46P337	9.4	23.68	
〃P338	11.4	23.63	66SB 4
〃P339	9.6	23.63	
〃P340	25.8	23.50	66SB 1
〃P341	25.1	23.58	66SB 1
〃P342	27.2	23.65	66SB 1
〃P343	55.7	23.33	
〃P344	39.4	23.43	66SB 1
〃P345	27.9	23.42	
〃P346	41.5	23.55	66SB 1
〃P347	22.4	23.71	66SB 1
〃P348	16.1	23.76	
〃P349	17.6	23.67	66SB 4
〃P350	20.2	23.55	
〃P351	17.4	24.06	
〃P352	14.9	24.09	
〃P353	43.8	23.85	66SB 6
〃P354	38.5	23.92	66SB14
〃P355	41.8	23.82	66SB 6
〃P356	10.3	24.12	66SB14
〃P357	23.6	23.96	
〃P358	18.0	23.88	
〃P359	12.4	23.97	
〃P360	12.5	23.93	
66P 1	14.6	24.05	66SB 8
〃P 2	51.8	23.84	
〃P 3	35.8	23.99	66SB15
〃P 4	49.1	23.86	66SB15
〃P 5	32.7	23.96	66SB12
〃P 6	28.0	24.00	66SB10
〃P 7	44.4	23.91	66SB11
〃P 8	31.4	24.03	66SB 5
〃P 9	17.3	24.13	66SB10
〃P 10	15.7	24.18	66SB16
〃P 11	14.1	24.13	
〃P 12	16.4	24.04	66SB11
〃P 13	38.3	23.85	66SB 5
〃P 14	21.4	23.97	66SB10
〃P 15	7.9	24.10	66SB11
〃P 16	13.8	24.12	66SB11
〃P 17	15.1	23.78	66SB 2
〃P 18	13.5	23.83	66SB 7
〃P 19	18.0	23.78	66SB 1
〃P 20	11.0	23.86	66SB 2
〃P 21	6.8	23.92	66SB 4
〃P 22	18.9	23.82	66SB 2
〃P 23	22.5	23.92	
〃P 24	10.4	24.26	66SB 5
〃P 25	24.6	23.92	66SB 9

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
66P 26	32.4	23.62	66SB 3
〃P 27	27.5	23.64	
〃P 28	19.8	23.73	66SB 2
〃P 29	39.6	23.48	66SB 4
〃P 30	23.0	23.70	
〃P 31	48.6	23.43	66SB 1
〃P 32	25.2	23.63	66SB 4
〃P 33	44.7	23.39	66SB 1
〃P 34	14.5	23.72	66SB 1
〃P 35	15.9	24.01	66SB10
〃P 36	42.7	23.74	66SB 8
〃P 37	36.3	23.98	66SB13
〃P 38	40.8	23.95	66SB 9
〃P 39	20.5	23.98	66SB 6
〃P 40	14.6	24.05	66SB15
〃P 41	8.8	24.02	66SB12
〃P 42	32.2	23.97	66SB 9
〃P 43	7.6	24.08	
〃P 44	22.1	23.91	
〃P 45	29.5	23.83	
〃P 46	21.9	23.95	66SB13
〃P 47	10.9	24.19	66SB 8
〃P 48	18.6	24.08	
〃P 49	29.9	24.03	66SB15
〃P 50	16.3	24.02	66SB12
〃P 51	35.3	23.85	66SB12
〃P 52	6.7	24.09	66SB 5
〃P 53	15.6	24.00	66SB14
〃P 54	27.8	23.92	66SB 7
〃P 55	9.8	24.04	
〃P 56	24.1	23.89	
〃P 57	21.7	23.90	46SI 1
〃P 58	35.3	23.97	66SB13
〃P 59	13.1	24.02	66SB15
〃P 60	13.5	23.99	66SB10
〃P 61	15.9	23.95	
〃P 62	24.9	23.91	46SI 1
〃P 63	15.4	23.97	
〃P 64	94.9	23.97	
〃P 65	10.3	24.04	
〃P 66	39.4	23.71	
〃P 67	42.4	23.65	66SB 5
〃P 68	19.1	23.83	
〃P 69	19.5	23.90	
〃P 70	14.2	23.95	66SB14
〃P 71	24.3	23.84	66SB 5
〃P 72	31.9	23.81	66SB 6
〃P 73	31.0	23.83	
〃P 74	51.4	23.84	
〃P 75	14.3	24.17	

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
66P 76	16.4	24.13	66SB16
〃P 77	16.5	24.03	66SB 8
〃P 78	12.9	23.81	66SB16
〃P 79	22.4	23.82	
〃P 80	18.1	23.86	66SB 3
〃P 81	8.2	24.01	
〃P 82	3.0	23.86	66SB 2
〃P 83	18.2	23.40	66SB 3
〃P 84	20.7	23.74	
〃P 85	8.6	23.86	66SB 7
〃P 86	12.4	23.95	
〃P 87	23.8	23.70	66SB 1
〃P 88	13.6	23.78	
〃P 89	16.7	23.55	66SB 2
〃P 90	18.1	24.16	
〃P 91	54.8	23.65	
〃P 92	欠番		
〃P 93	20.5	24.01	66SB14
〃P 94	25.6	23.83	
〃P 95	20.8	23.90	
〃P 96	25.2	23.84	
〃P 97	6.3	24.27	
〃P 98	6.1	24.22	66SB16
〃P 99	19.6	24.06	66SB 6
〃P100	13.5	23.93	66SB 6
〃P101	4.8	23.92	66SB 4

第３節　遺物

１　土師器、須恵器（第122・123図、写真図版135・136）

本調査区では古代の竪穴住居（46ＳＩ１）が検出され、土師器、須恵器が出土している。またそれ以外の場所からも土師器、須恵器が出土している。

（１）46ＳＩ１出土遺物（第122図、写真図版135）

本調査区では古代の竪穴住居が検出されている。3001～3009は46ＳＩ１から出土した土師器、須恵器である。

3001の土師器坏は磨耗が著しく、底辺部の再調整の有無は確認できない。3002は12世紀の柱状高台かわらけに似るが、確実に本住居の埋土中から出土している。よってこの土器は古代の所属である。3004、3005の土師器長胴甕は床面から出土した。これらの土師器の胎土には海綿状骨針が混入している。

3006～3009は須恵器である。3008は外面にロクロ調整前のタタキ目がみられる。

本住居は埋土が非常に浅く、埋土からの出土した土師器、須恵器も住居の使用時に伴うものと考えたい。これらの土師器、須恵器の年代は概ね９世紀後半頃のものと考えられる。

（２）住居以外の土師器、須恵器（第123図、写真図版135・136）

竪穴住居以外からの土師器、須恵器の出土は、埋没沢に関連する部分から多く出土した。

3010、3011、3017、3018は須恵器の坏である。3017は底部を欠くが、他の切離しは回転糸切である。これらは12世紀の埋立て整地をおこなう以前の埋没沢中からの出土である。だが十和田ａ火山灰を含む層よりは上の層からの出土である。

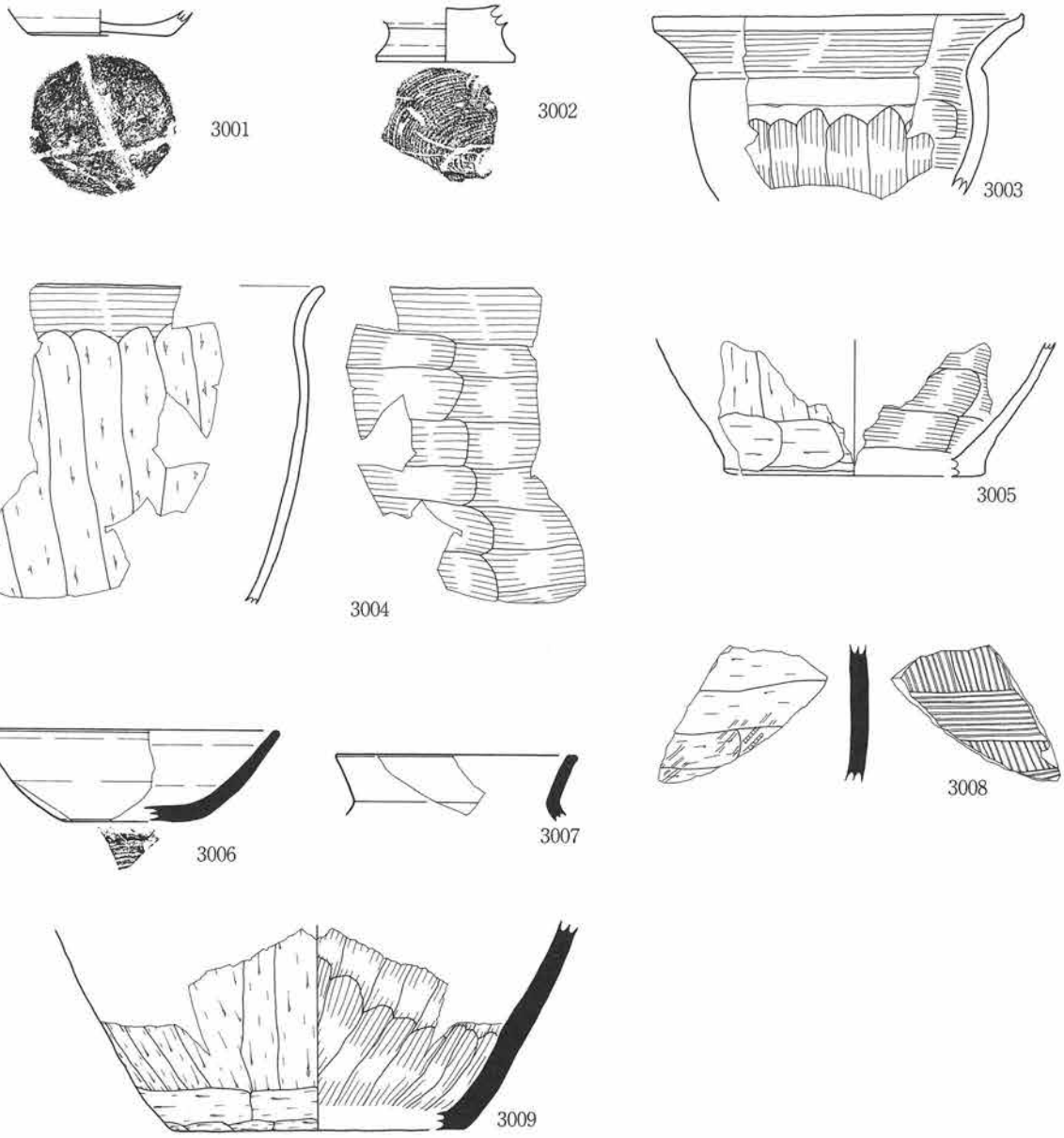
3013の須恵器の大甕はＢ地区出土の破片と接合した。図示しているのは接合していない状態の破片である。外面に平行タタキ目が施され、内面にはヘラナデが施されている。底部近くの破片と考えられる。断面の胎土は暗赤褐色である。

3014の須恵器甕は12世紀の土坑である46ＳＫ27から出土した。内面にアテ具痕がある。

3010、3011は須恵器の坏である。12世紀の遺物とともに１号池廃絶後に流れ込んだものである。

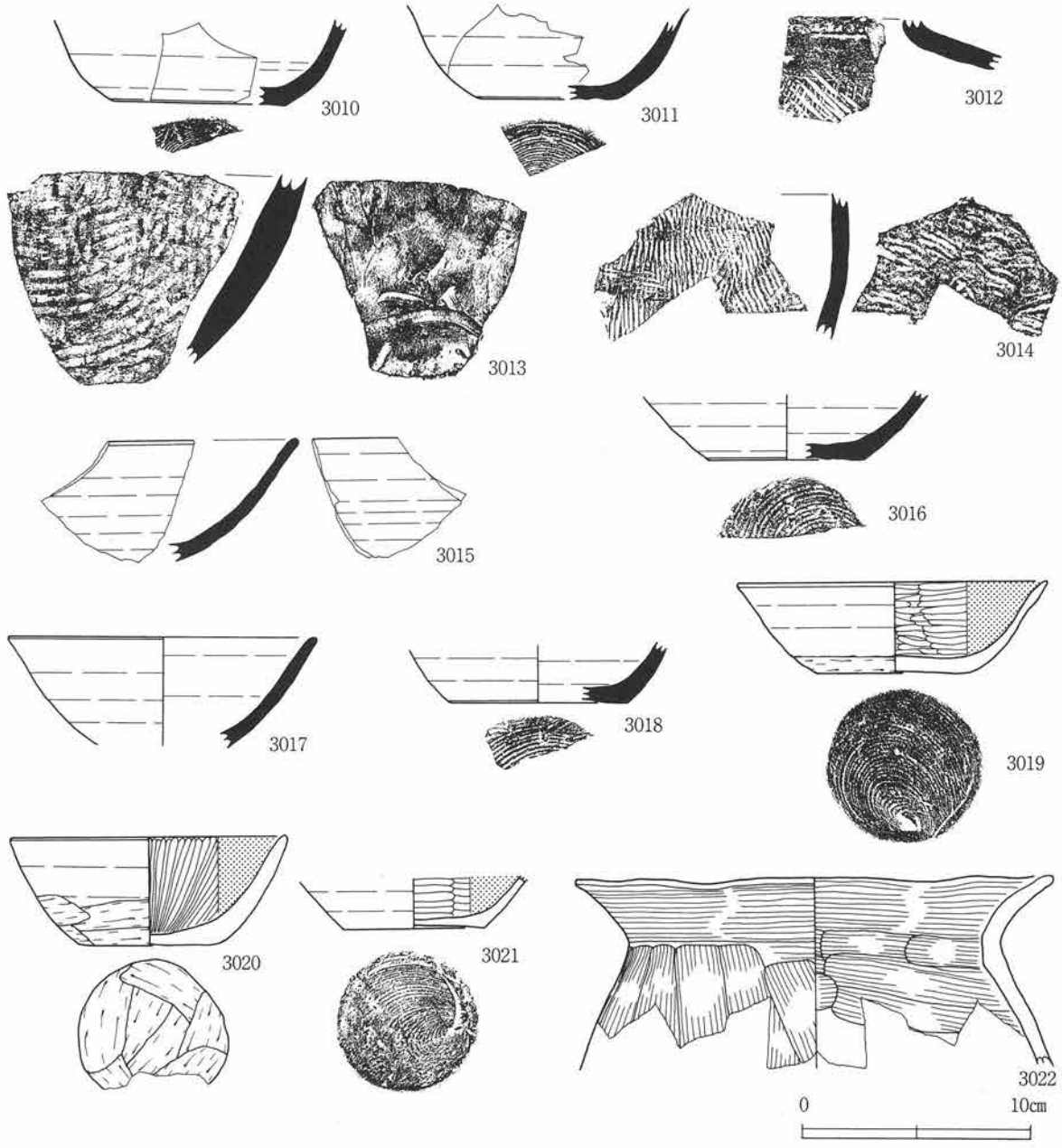
3019の土師器坏は底辺部に回転ヘラケズリの再調整が施されている。埋没沢の十和田ａ火山灰を含む層よりは上の層からの出土である。胎土には海綿状骨針が混入する。

3020、3021の土師器坏、3022の土師器長胴甕は埋没沢の十和田ａ火山灰を含む層より下の層からの出土である。3020は底辺部と底面に手持ちヘラケズリが施されている。切離し方法は不明である。内面には放射状にヘラミガキが施され、黒色処理がなされている。3021は底辺部に再調整が無い。底面の切離しは回転糸切である。内面には横位にヘラミガキが施され黒色処理が施されている。3022の土師器甕は口縁部が強く外反する。頸部に段はない。これら十和田ａ火山灰より下からの出土の3020、3021、3022は概ね９世紀代のものと考えたい。これらの土師器の胎土にも海綿状骨針が混入する。



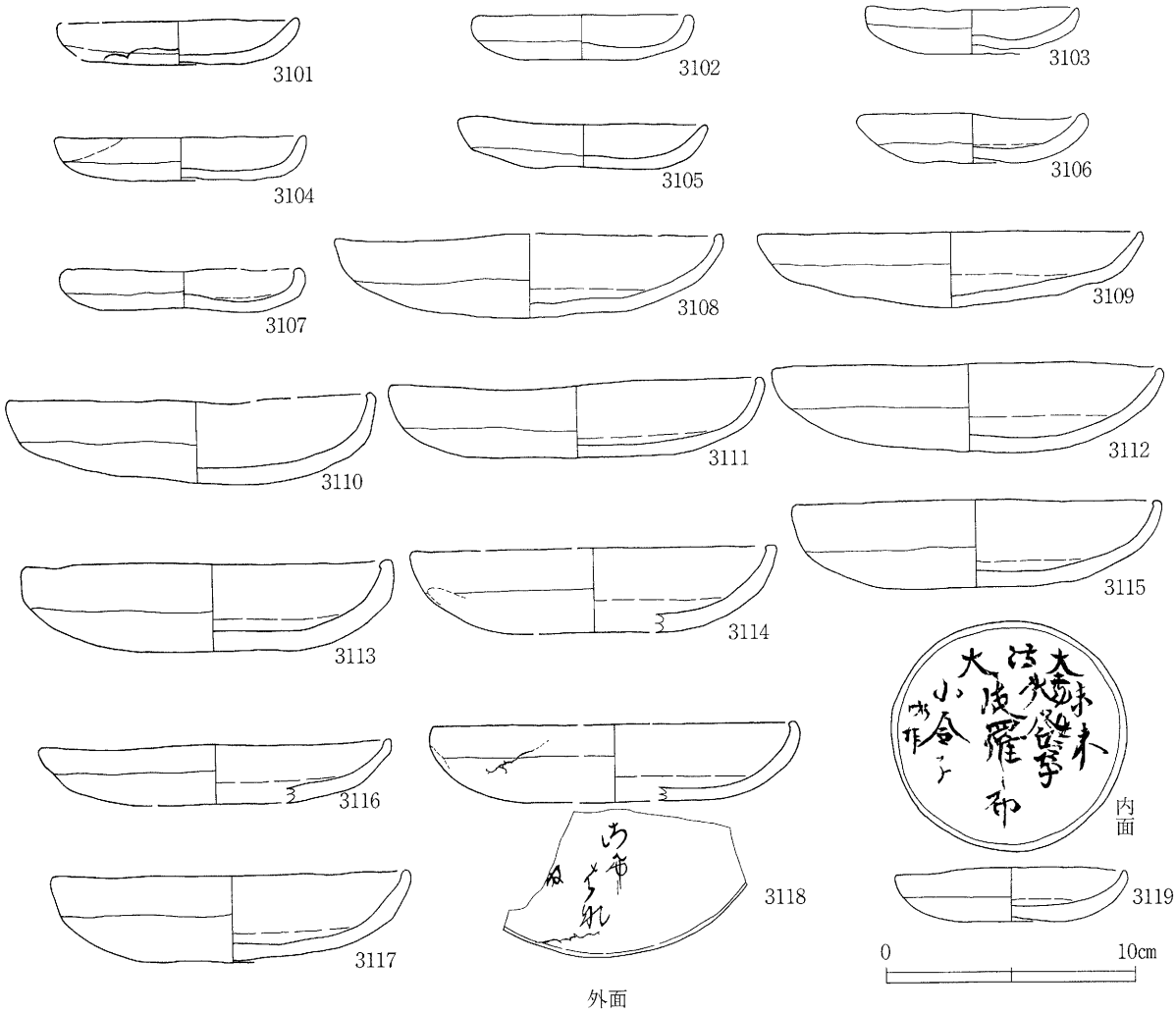
番号	種類	器種	出土位置	法量（cm）			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
3001	土師器	坏	カマドソデ付近	(1.0)	—	5.8	ロクロ	ミガキ？	橙色	内面黒色処理、底面回転糸切
3002	〃	坏？	埋土	(2.4)	—	5.8	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	底面回転糸切、柱状高台？
3003	〃	長胴甕	カマド燃焼部	(7.6)	15.5	—	ヨコナデ　ヘラナデ	ヨコナデ　ヘラナデ	にぶい橙色	頸部が段状になっている
3004	〃	〃	床面（南壁きわ）	(13.5)	—	—	ヨコナデ　ヘラケズリ	ヨコナデ　ヘラナデ	灰白色	
3005	〃	〃	床面（南西隅）	(5.8)	—	11.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	浅黄橙色	
3006	須恵器	坏	カマド埋土	3.8	12.6	5.5	ロクロ	ロクロ	灰色	底面回転糸切
3007	〃	甕	カマドソデ付近	(2.5)	10.0	—	ロクロ	ロクロ	灰色	
3008	〃	〃	埋土	(5.2)	—	—	タタキ　ヘラケズリ	ハケメ	暗灰色	
3009	〃	〃	埋土	(8.3)	—	12.3	ヘラケズリ	ヘラナデ	灰色	

第122図　46・66ＳＩ１出土遺物



番号	種類	器種	出土位置	法量（cm） 高さ	口径	底径	外面調整	内面調整	色調	その他
3010	須恵器	坏	46沢跡トレンチ5層	(3.2)	－	7.6	ロクロ	ロクロ	灰色	底面回転糸切　トレンチC－D出土
3011	〃	〃	46沢跡トレンチ6層	(3.6)	－	6.4	〃	〃	灰色	〃　トレンチC－D出土
3012	〃	大甕	ⅣB－9b表土	(1.8)	－	－	タタキ	アテ具？	灰色	
3013	〃	〃	ⅣB－2b表土	(8.4)	－	－	タタキ	アテ具痕	灰褐色	
3014	〃	〃	46SK27埋土	(5.6)	－	－	タタキ	アテ具	にぶい黄褐色	
3015	〃	坏	66 1池1層(ⅣB6a)	(5.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	
3016	〃	〃	66 1池26層(ⅣB6a)	(2.6)	－	7.4	ロクロ	ロクロ	灰色	底面回転糸切
3017	〃	〃	66沢7a層(ⅣB7a)	(4.7)	13.6	－	ロクロ	ロクロ	灰色	トレンチA－B出土
3018	〃	〃	66沢7a層(ⅣB8a)	(2.5)	－	8.1	ロクロ	ロクロ	灰色	底面回転糸切　トレンチA－B出土
3019	土師器	〃	66沢76層(ⅣB6a)	4.2	13.6	7.1	ロクロ　回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	灰黄褐色	底面回転糸切　トレンチA－B出土
3020	〃	〃	66沢12層(ⅣB6a)	4.8	12.3	6.2	ロクロ　ヘラケズリ	〃	にぶい黄色	底面ヘラケズリ　トレンチA－B出土
3021	〃	〃	66沢12層(ⅣB6a)	(2.2)	－	6.3	ロクロ	ヘラミガキ	灰黄色	底面回転糸切　トレンチA－B出土
3022	〃	甕	66沢12層(ⅣB6a)	(8.4)	21.2	－	ヨコナデ　ヘラナデ	ヨコナデ　ヘラナデ	にぶい褐色	トレンチA－B出土

第123図　C地区の土師器・須恵器



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3101	3層（ⅣB－6a）	D3	9.6		1.8	布		70	粘土多・細砂少量	やや摩耗している。石英粗砂・海綿状骨針少量
3102	5層	〃	8.6		1.8	布		100	粘土多・細砂少量	海綿状骨針少量
3103	5層	〃	8.4		1.95	布・一方向	指紋顕著	100	粘土多・細砂少量	海綿状骨針極少量
3104	5層	〃	10.0		1.8	布	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	金雲母・海綿状骨針少量
3105	5層	〃	9.9		2.1	布	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	金雲母・海綿状骨針少量
3106	5層	〃	8.9		2.0	布・一方向		90	粘土多・細砂少量	石英粗砂・海綿状骨針少量
3107	3層	〃	9.3		1.8	布		100	粘土多・細砂少量	3115と重なって出土。金雲母・海綿状骨針少量
3108	5層	〃	15.4		3.4	風化で見えず	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	やや摩耗している。金雲母・海綿状骨針少量
3109	4層	〃	15.3		3.1	布・多方向	すのこ痕	50	粘土多・細砂少量	やや摩耗している。金雲母・海綿状骨針少量
3110	4層	〃	14.4		3.6	布	すのこ痕	60	粘土多・細砂少量	内面油煙付着。金雲母含む
3111	4層	〃	15.0		3.1	布・多方向	すのこ痕	60	粘土多・細砂少量	内面油煙付着。金雲母・海綿状骨針少量
3112	5層	〃	15.6		3.7	布・多方向	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	金雲母・海綿状骨針少量
3113	5層	〃	14.6		3.6	布・多方向		100	粘土多・細砂少量	金雲母・海綿状骨針少量
3114	5層	〃	(14.5)		3.4	布・多方向		30	粘土多・細砂少量	内面油煙付着。金雲母含む
3115	5層	〃	14.6		3.6	布・多方向	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	3107と重なって出土。金雲母・海綿状骨針少量
3116	4層（ⅣB6a）	〃	14.0		2.45	布・多方向	すのこ痕	50	粘土多・細砂少量	
3117	5層（ⅣB8a）	〃	(14.4)		3.5	布		40	粘土多・細砂少量	金雲母・海綿状骨針少量
3118	5層（ⅣB7a）	〃	(14.7)		3.15	布		25	粘土多・細砂少量	内面油煙付着。金雲母含む。
3119	5層	〃	9.4		2.2	布・一方向	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	内面油煙付着。金雲母含む。

第124図　661号池出土遺物①（かわらけ）

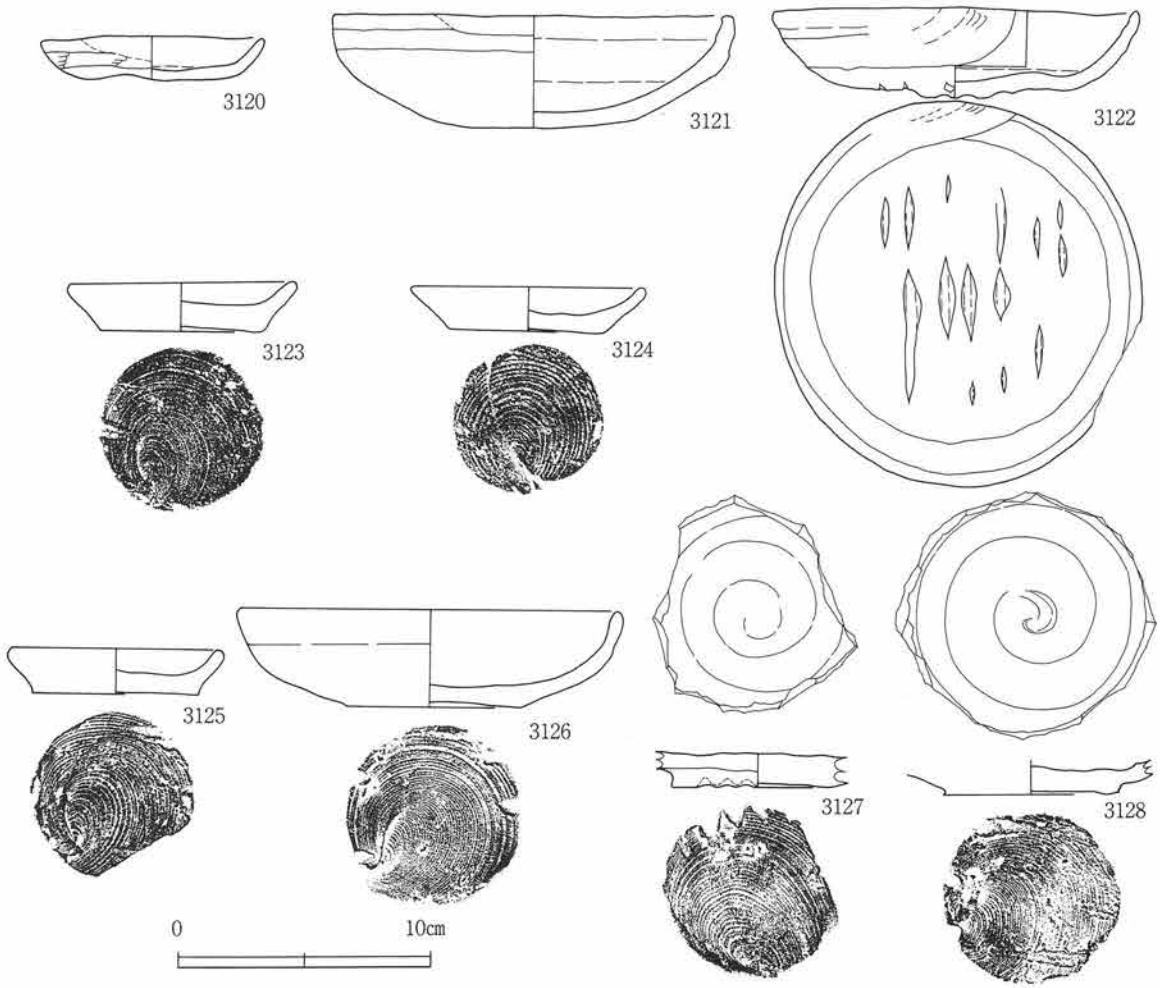
2　661号池出土遺物（第124～141、写真図版136～150）

本報告書では、出土遺物については遺物の種類ごとに記載するのを原則としているが、1号池からの出土遺物は特異なものが多く、その一括性に意味があると考え、1号池の出土遺物は一まとめにして報告する。

なおここでは1号池が機能していた段階の遺物を記載することとし、1号池が廃絶した後に堆積した1層～2層からの出土遺物は除いた。即ち1号池の3～5層出土の遺物についてここで記載する。

（1）かわらけ（第124・125図、写真図版136～138）

1号池から出土したかわらけは完形品が多い。破片であっても大形の破片が多く、磨耗の具合も少ない。



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3120	3層（ⅣB－7a）	C4	8.7		1.8	布		100	粘土多・細砂少量	やや摩耗している。金雲母・石英粗砂含む。
3121	5層	〃	15.8		4.5	布・多方向		100	粘土多・細砂少量	金雲母・石英粗砂・海綿状骨針少量
3122	5層	〃	14.6		3.65	布・一方向	すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	内面油煙付着
3123	3層（ⅣB－7a）	rd	8.9		2.0	ロクロ	回転糸切・すのこ痕	100	粗砂多量	金雲母・石英粗砂・海綿状骨針多量
3124	5層（ⅣB－7a）	rd	9.1	6.1	1.85	ロクロ	回転糸切・すのこ痕	100	粘土多・細砂少量	石英粗砂・海綿状骨針極少量
3125	5層	rd	(8.2)	6.6	1.8	ロクロ	回転糸切・すのこ痕	60	粘土多・細砂少量	海綿状骨針多量
3126	5層	Rd02	15.0	6.9	3.9	ロクロ	回転糸切・すのこ痕	100	粗砂多量	金雲母・石英粗砂・海綿状骨針少量
3127	5層	Rd	－	6.2	－	ロクロ	回転糸切・すのこ痕	30	粗砂多量	意図的に円板状に割っているか？海綿状骨針多量・石英粗砂
3128	5層	Rd	－	6.9	1.35	ロクロ	回転糸切・すのこ痕	40	粗砂多量	意図的に円板状に割っているか？海綿状骨針多量・石英粗砂・金雲母

第125図　661号池出土遺物②（かわらけ）

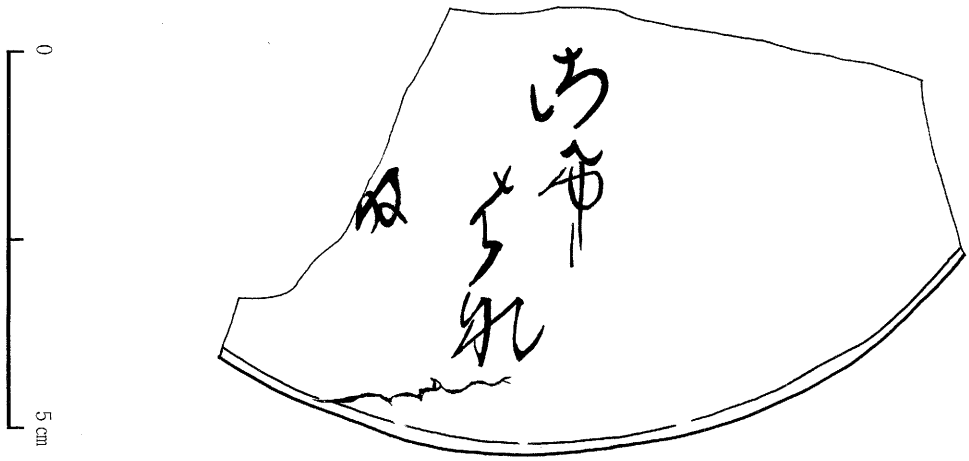
28点を図示した。手づくねかわらけ22点、ロクロかわらけ６点である。かわらけの分類基準は次の項目の「３　かわらけ」で記すことにする。

3101～3107、3120は小型の手づくねかわらけである。3102～3105、3107、3120は完形である。3102は外面に油煙が付着している。3107は3108と正位の状態に重なって出土した。大型の3108が下、3107が上の状態であった。

3108～3118、3121、3122は大形の手づくねかわらけである。3112は内外面に3110、3114、3122は内面に油煙が付着している。3122は底面にすのこ痕が顕著に付く。

3118には外面に墨書がある。3119は小型の手づくねかわらけで、内面に墨書がある。それぞれのかわらけの墨書の釈文は第126図、第127図に示した。3118、3119どちらにも内面に油煙が付着する。

3123～3128はろくろかわらけである。いずれも海綿状骨針が混入する胎土である。3126は手づくねかわらけと類似する器形である。3127、3128は底部破片であるが、内面のロクロ目の渦巻きが顕著である。3127は意図的に口縁部を打ち欠いたと思えるほど、綺麗な円形の破片である。3127は3128ほど整っていないが円形の破片である。



釈文

「御□ゆし
はれ
ね」

第126図　墨書かわらけ（3118）釈文

釈文

大　未未
波　□□□
大　大合子
　　皮羅布
　　小合子
　　御作

第127図　墨書かわらけ（3119）釈文

（２）笹塔婆（第128～131図、写真図版139～142）

66１号池からは墨書の施された木製品が48点出土した。そのうち47点は笹塔婆と呼ばれる厚さ１～４㎜程度の板状の小型の塔婆で、それぞれに仏名等が墨書されている。笹塔婆の頭頂部は圭頭型で、その下には左右に２ヵ所ずつ刻みが施してある。脚部は尖っている。

これらの笹塔婆は池が機能している段階に堆積した土層から出土した。この層位からは完形のかわらけや漆器、下駄などの木製品が出土しているが笹塔婆は他の遺物と入り混じった状態で出土した。多くの笹塔婆は池の南岸に集中していたが、向き傾きなどは無秩序な状態であった。またこの出土時の状況からは、笹塔婆を池の底面に刺し立てて使用した形跡は看取されない。これらのことから、笹塔婆は別な場所で使用された後、この池に廃棄された可能性も否定できない。

出土した笹塔婆は完全な形状を保っているのは数点のみで、多くは欠損、磨耗している。

頭部の左右二ヶ所の刻みは、ほぼ左右対称に刻まれている場合（3140など）と左右非対称の場合（3132など）がある。刻みの形はほぼ三角形であるが、切り込みの角度は様々である。3138の刻みは円形を呈するが、これは磨耗の結果の可能性もある。また二ヶ所の刻みの間隔の長さは各々によって異なっており一定でない。

脚部の形状は、徐々に自然に尖っていくもの（3134、3139、3140など）と先端で急に角度を変えて尖っているもの（3146、3150、3156など）に分けられる。脚部も左右対称に削られる場合（3140、3156など）と左右の削り方が異なる場合（3153）などがある。

墨書は墨自体が風化のため失われているものが多い。しかし笹塔婆の表面が風化する際に、墨書がなされた部分は墨の皮膜の保護のため他の部分より風化が一歩遅れ、その結果文字が浮き上がって見えたり、白く見えたりして判読の可能なものがあった。しかし、風化の著しいものは判読の困難なものもかなりあった。また欠損のため墨書の有無を確認できないものもある。この著しい風化の度合いは、池以外の場所で長い間外気にさらされていた可能性を示しているでであろうか。

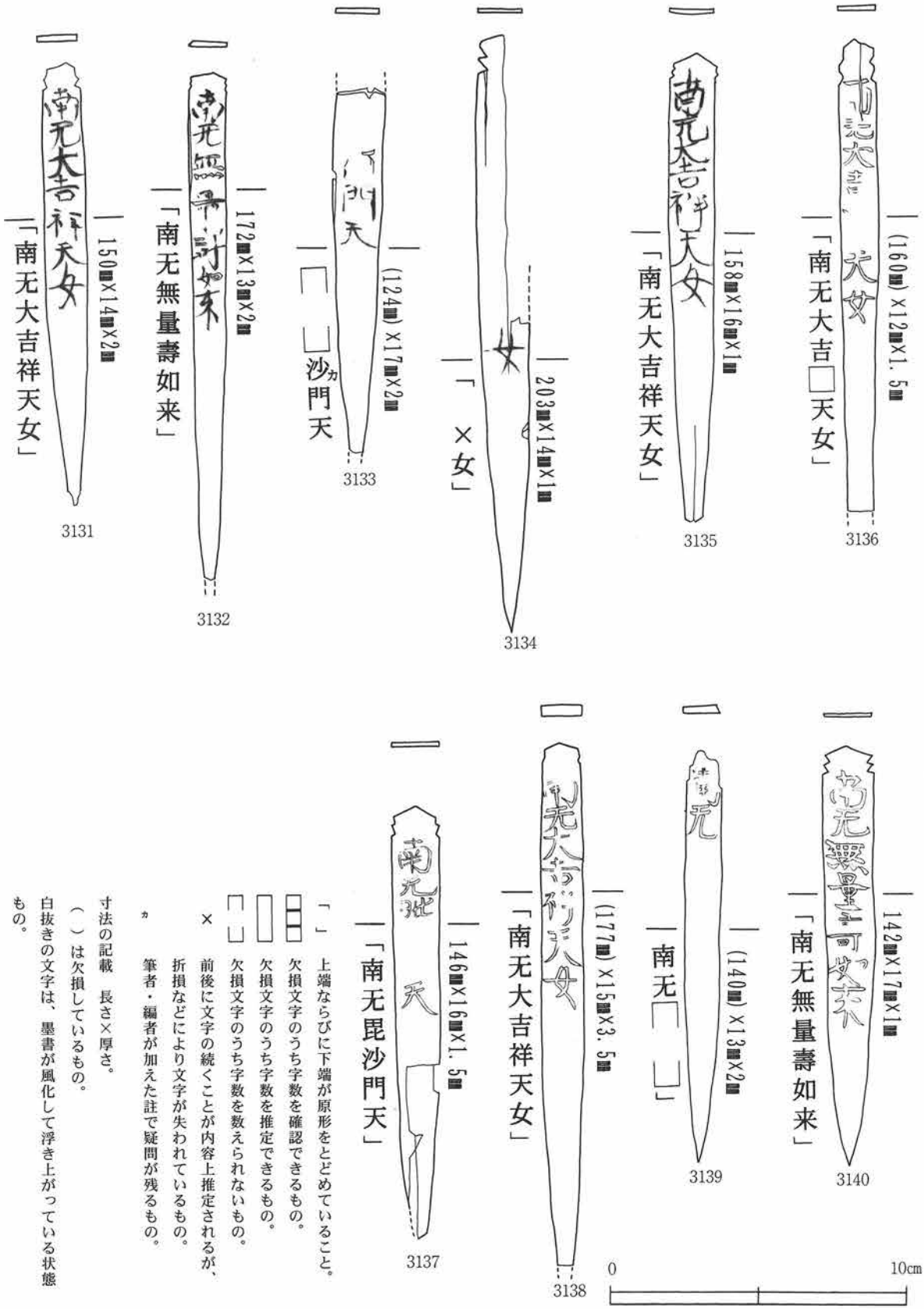
墨書は3169の１点を除き、片面のみの施されている。「南无大吉祥天女」というように「南无」の下に様々な仏名が墨書されている。欠損や磨耗のため完全に判読できず推測したものも含めるが（3170、3171を除く）、「大吉祥天女」が15点、「毘沙門天」４点、「如意輪観音」３点、「無量寿如来」２点、「歓喜天」１点、「・・・王」１点、不明８点である。

3169は他と異なり両面に墨書が施される。「南无大吉祥天女」と書かれている反対の面には「五回ヵ」と記される。「五」の下の文字は明確に判読できないが一応「回」としておく。

3170、3171の２点は他の笹塔婆に比べ寸法が大きい。墨書は3170が「南无十四日普賢菩薩」、3171が「南无十八日観世□□薩ヵ」というように仏名の前に日付が記してある。これは「三十日仏」にあたる日付及び仏名とみられ、それに基づく作善によるものと考えられる。

3178は笹塔婆ではない。板状の木に墨書が施されている。墨書の状態から考えると、この板は完全な形状ではなく、左右が欠損している可能性が高いと思われる。墨がわずかに残存しているが風化が著しく墨書の内容を判読することはできなかった。

（高橋実央）



寸法の記載　長さ×厚さ。

（ ）は欠損しているもの。

白抜きの文字は、墨書が風化して浮き上がっている状態もの。

「 」　上端ならびに下端が原形をとどめていること。

□□　欠損文字のうち字数を確認できるもの。

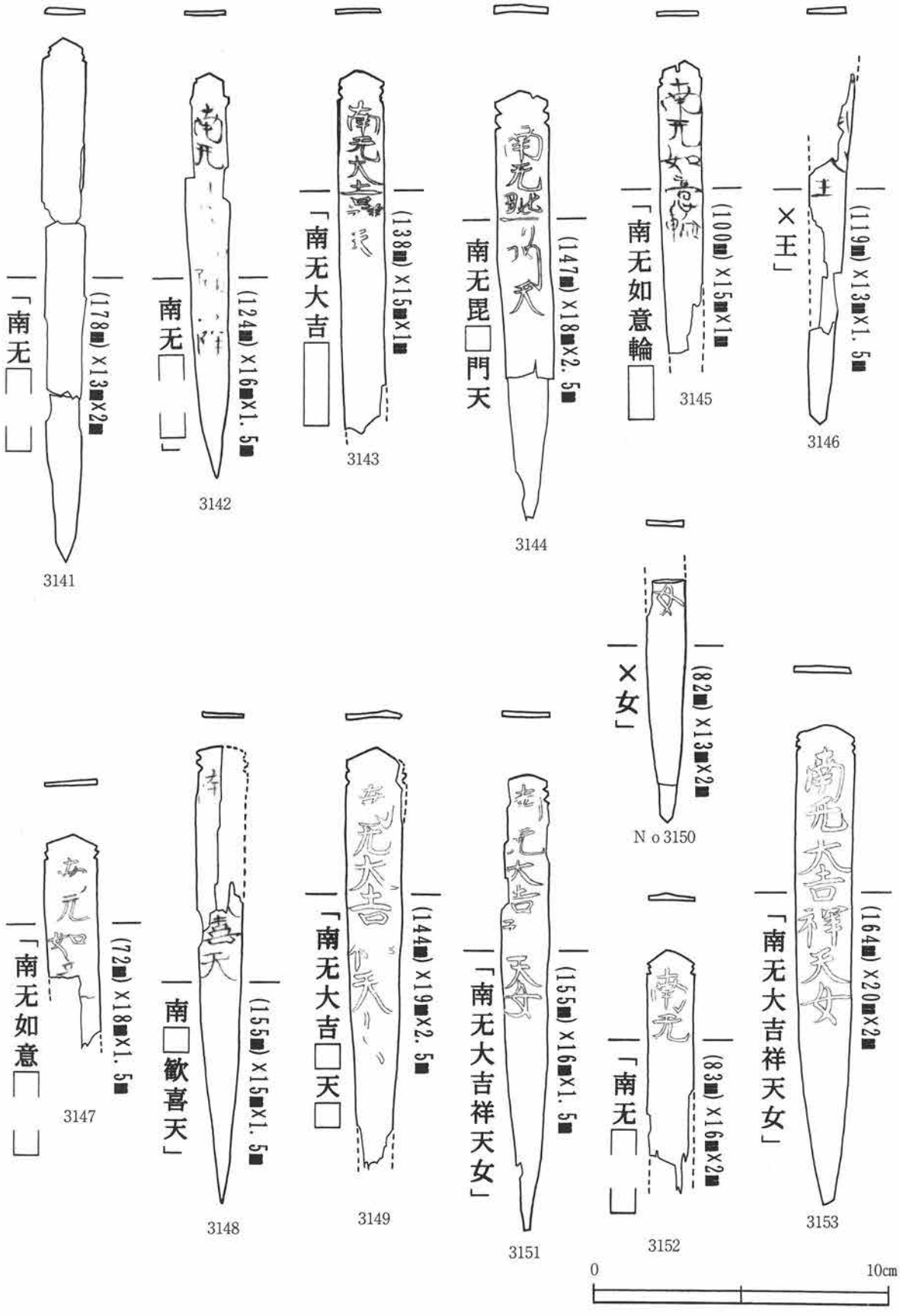
□　欠損文字のうち字数を推定できるもの。

□ □　欠損文字のうち字数を数えられないもの。

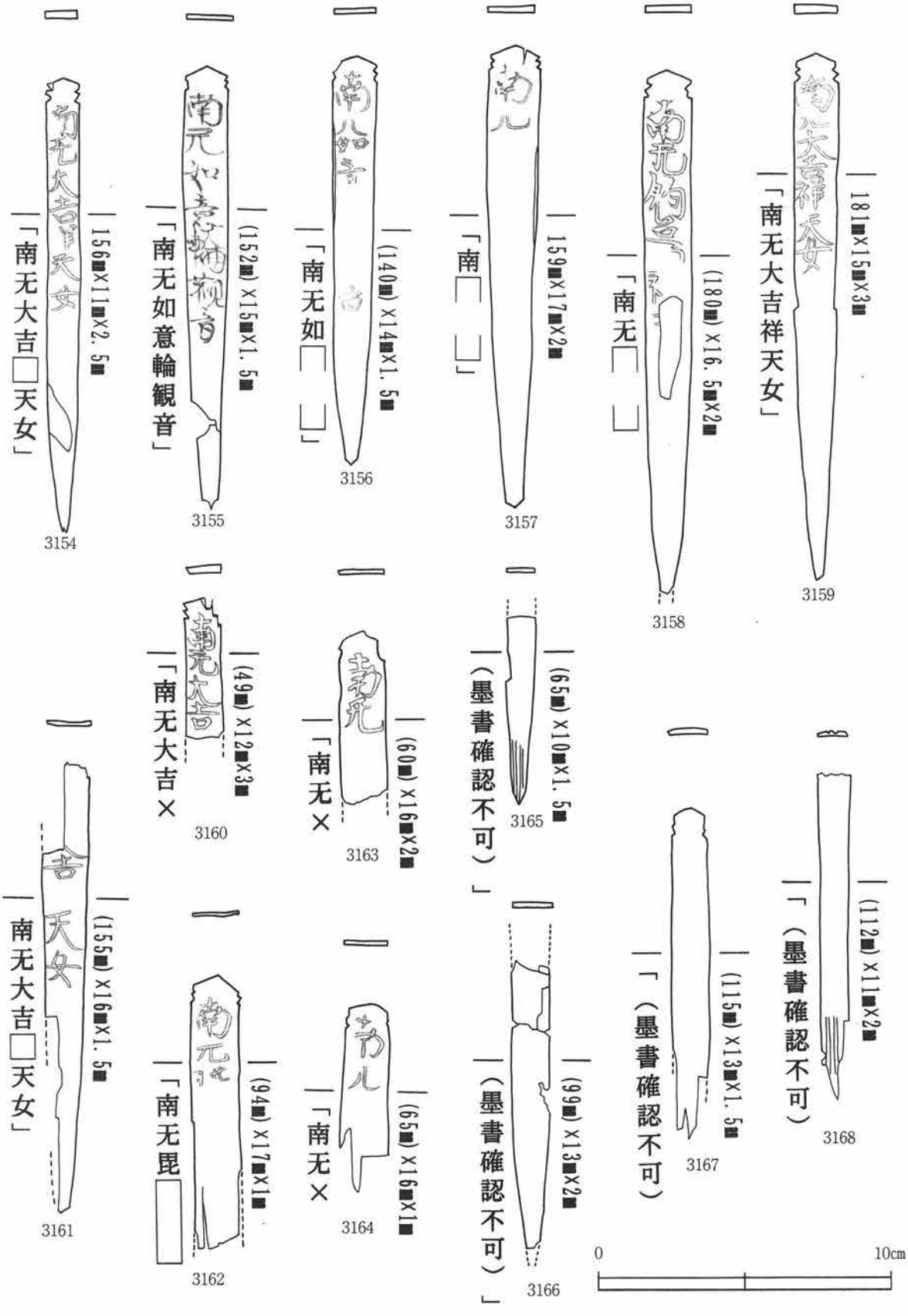
×　前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

カ　筆者・編者が加えた註で疑問が残るもの。

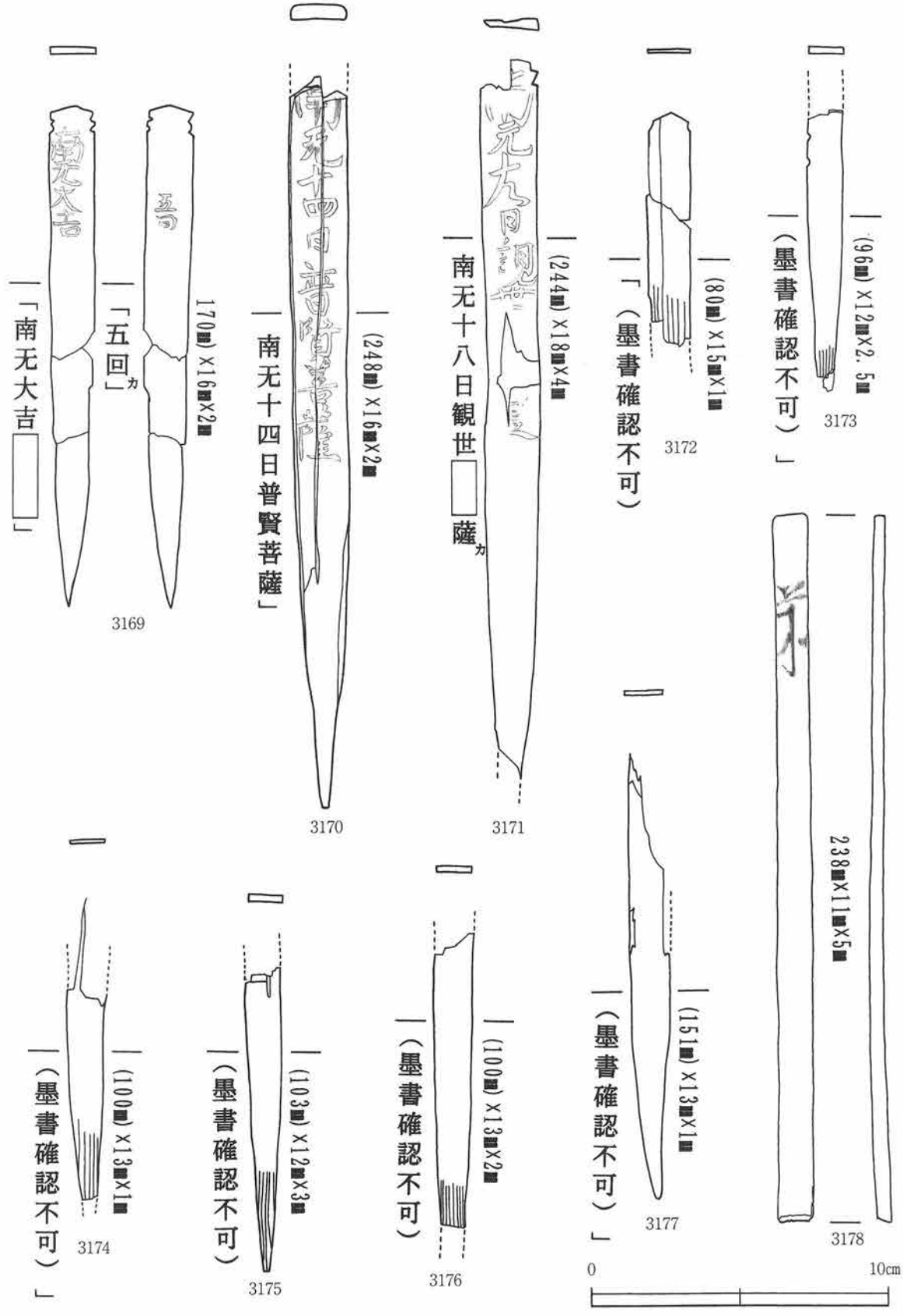
第128図　661号池出土遺物③（笹塔婆）



第129図　661号池出土遺物④（笹塔婆）



第130図　661号池出土遺物⑤（笹塔婆）



第131図　661号池出土遺物⑥（笹塔婆）

661号池　笹塔婆　観察表

番号	出土位置	墨書の状態	樹種	その他
3131	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	スギ	頭部下部先端欠損
3132	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	スギ	頭部摩耗、下部先端欠損
3133	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	スギ	上半部欠損、下部先端欠損
3134	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨がわずかに残る	ヒノキ層の一種	上半部右側欠損
3135	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	ヒノキ層類似種	上半部右側欠損
3136	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	スギ	頭部摩耗、下部欠損
3137	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに白く浮き上がって確認可	ヒノキ層類似種	下部左側欠損
3138	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	スギ	頭部摩耗、下部欠損
3139	5層　（ⅣＢ７ａ）	わずかに浮き上がって確認可	アスナロ	頭部欠損
3140	5層　（ⅣＢ７ａ）	白く浮き上がって確認可	スギ	
3141	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	ヒノキ層類似種	頭部摩耗
3142	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨がわずかに残る	アスナロ類似種	頭部両側欠損
3143	5層　（ⅣＢ６ａ）	浮き上がって確認可	スギ	頭部右側摩耗、下部欠損
3144	5層　（ⅣＢ６ａ）	浮き上がって確認可	スギ	頭頂部下部先端欠損
3145	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	アスナロ	頭部摩耗、下部欠損
3146	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	スギ	上半部欠損
3147	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨がわずかに残る	ヒノキ層類似種	下半部右側欠損
3148	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	スギ	上半部右側欠損
3149	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	スギ	頭部右側摩耗下部欠損
3150	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	ヒノキ層の一種	上半部欠損
3151	5層　（ⅣＢ６ａ）	はっきり浮き上がって確認可	スギ	頭部左側欠損、下部先端欠損
3152	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	スギ	頭部のきざみは左右非対称、下半部欠損
3153	5層　（ⅣＢ６ａ）	はっきり浮き上がって確認可	ヒノキ層の一種	頭頂部摩耗
3154	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	スギ	頭部わずかに欠損
3155	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨が残る	スギ	頭部左側わずかに欠損、下部先端欠損
3156	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨書の痕跡あり	ヒノキ層類似種	頭部左側欠損
3157	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨がわずかに残る	ヒノキ層類似種	頭部わずかに摩耗
3158	5層　（ⅣＢ８ａ）	墨が残る	スギ	頭部きざみは欠損か、下部先端欠損
3159	5層　（ⅣＢ８ａ）	はっきり浮き上がって確認可	スギ	頭部わずかに欠損中間部両側にきざみ有り
3160	5層　（ⅣＢ６ａ）	浮き上がって確認可	ヒノキ層類似種	頭部右側下半部ともに欠損
3161	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	アスナロ類似種	頭部上半部ともに左側が欠損
3162	5層　（ⅣＢ６ａ）	わずかに浮き上がって確認可	ヒノキ層の一種	頭部きざみ欠損左右非対称、下半部欠損
3163	5層　（ⅣＢ６ａ）	白く浮き上がって確認可	スギ	頭部のきざみ下半部ともに欠損
3164	5層　（ⅣＢ８ａ）	白く浮き上がって確認可	スギ	頭部摩耗下半部欠損
3165	5層　（ⅣＢ６ａ）	確認不可	ヒノキ層類似種	上半部欠損
3166	5層　（ⅣＢ６ａ）	確認不可	スギ	上半部下部先端ともに欠損
3167	5層　（ⅣＢ６ａ）	確認不可	スギ	頭部摩耗、下部欠損
3168	5層　（ⅣＢ６ａ）	確認不可	スギ	上半部、下部先端ともに欠損
3169	5層　（ⅣＢ６ａ）	浮き上がって確認可	スギ	頭部のきざみ左右非対称
3170	5層　（ⅣＢ８ａ）	はっきり浮き上がって確認可	スギ	頭部欠損
3171	5層　（ⅣＢ６ａ）	はっきり浮き上がって確認可	スギ	頭部左側下部先端ともに欠損
3172	5層　（ⅣＢ６ａ）		スギ	頭部摩耗、下部欠損
3173	5層　（ⅣＢ６ａ）		ヒノキ層類似種	上半部　下部先端ともに欠損
3174	5層　（ⅣＢ６ａ）		アスナロ	上半部　下半部先端ともに欠損
3745	5層　（ⅣＢ６ａ）		ヒノキ層の一種	上半部　欠損
3176	5層　（ⅣＢ６ａ）		スギ	上半部　下部先端ともに欠損
3177	5層　（ⅣＢ６ａ）		アスナロ類似種	上半部　下部右側ともに欠損
3178	5層　（ⅣＢ６ａ）	墨書の痕跡有り	スギ	笹塔婆ではない

（3）木製品（第132～137図、写真図版143～146）

笹塔婆以外の木製品を示す。

3181～3183は漆器皿である。いずれも内外面黒漆塗りで樹種はケヤキである。3181は内面に漆紙が付着しており、漆塗りのパレットと使用されたと考えられる。漆紙は表面から赤外線をとおして観察したが、墨書は確認できなかった。外底面には漆塗りは無い。3183は小破片のため口径を出せなかった。3184は大形の椀（鉢？）である。底辺部が炭化しており火熱を受けたことがわかる。遺存状態は非常に悪い。漆塗りは内外面ともに施されていない。樹種ケヤキである。

3185は板状のもので、内外面に黒漆が施されている。内外面に火熱を受けて炭化しており、漆塗りの遺存状態も悪い。下端部分の漆塗りが真っすぐになって終わっており、この部分から別の板状の部品が組合わさっていたと推測される。よって箱状の製品の部品と考えられる。

3186は鏑（かぶら）である。「蟇目（ひきめ）」と称される先端に矢尻を装着しないタイプの鏑と考えられる。筒状で外面に黒漆が塗られている。帯状に漆が施されない部分があるが、この部分には紐状のものが巻かれており、それが剥落したと考えられる。「蟇目」の矢は儀礼や犬追物の際に使用される。これについて樹種同定をおこなったのであるが、「非木材」との結果が出ている。植物質のものであるようだが、その材質を示せない現状である。

3187はやや扁平な棒状の形状で、両端が欠損している。両面に黒漆が塗られている。何であるか不明である。

3188は櫛である。両端が欠けている。樹種はイスノキである。

3189～3191は形代と思われる。だが3点とも何をかたどっているのか判然としない。3190は人の側面をかたどった人形であろうか。

3192は陽物である。意図的か偶然か判断できないが縦に半分に欠損している。3193は刀か剣の形代であろうか、はっきりしない。

3194、3195は刀子の柄である。どちらも欠損している。欠損したため廃棄されたのであろうか。

3196、3197は連歯下駄である。どちらも歯は非常に減っている。この二つが組合わせかどうかはわからないが、形状と歯の磨耗具合は似る。

3198は扇の骨である。上部が火熱を受けて炭化している。

3199はものさしである。欠損しており、3目盛り分が残っている。目盛りの平均は3.68cmである。鯨尺相当のものさしと考えられる。

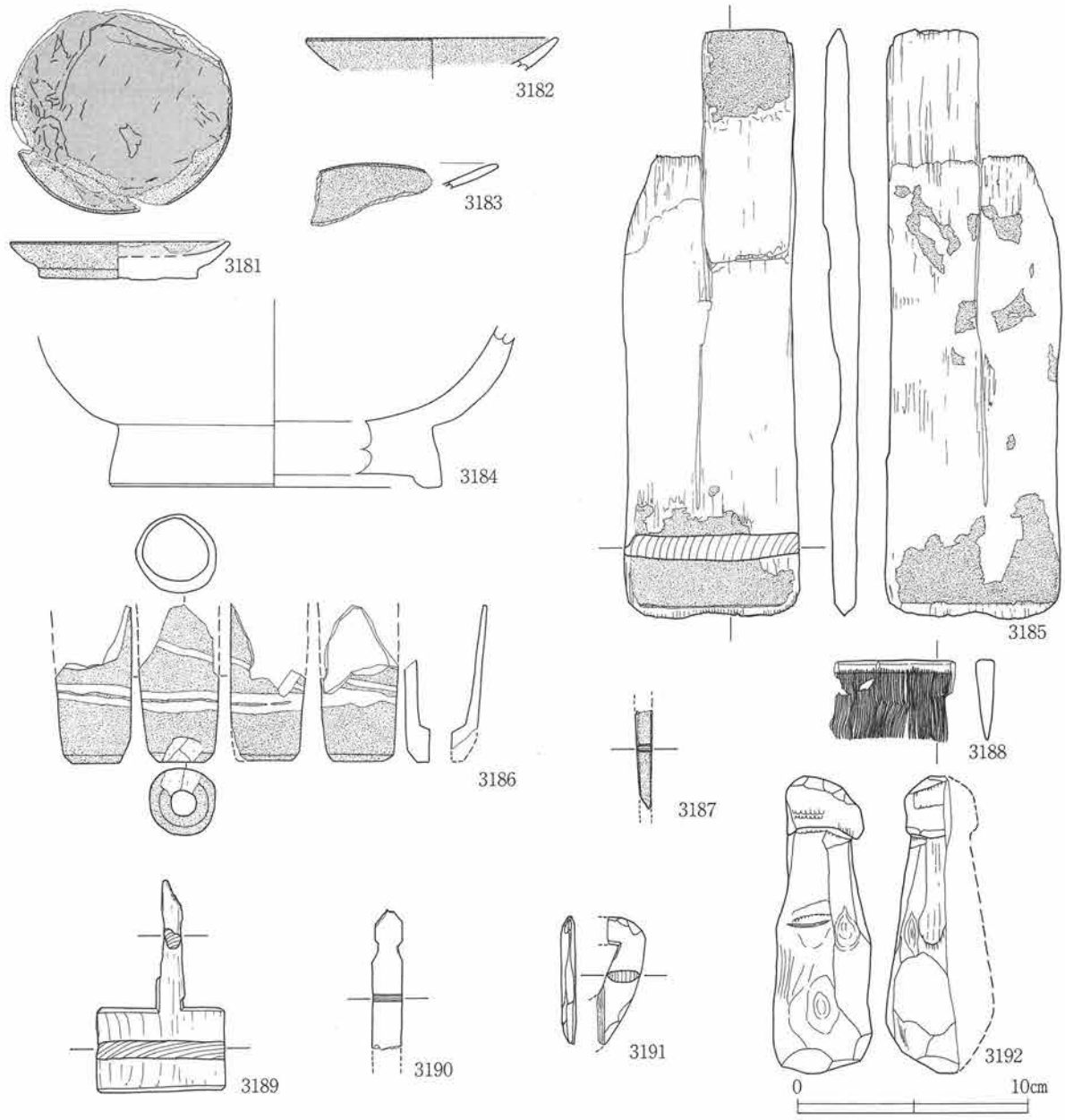
3200、3201は曲物の底である。

3702～3212は加工痕があるが、器種、用途が不明なものである。3202は貫き穴らしものがあるが、全体に腐食が著しい。建材であろうか。3203は断面が三角形に面取りされている。3204、3205は板状のものである。3206は角材であるが抉りが入る。下端はのこぎりで切ったように平坦である。3207～3215は幅が狭い棒状の板である。3210は先端が炭化している。

3216～3241は箸である。樹種はスギが多い。いずれも両端が尖る形態である。3231、3232は両端が尖らず、箸でない可能性もある。

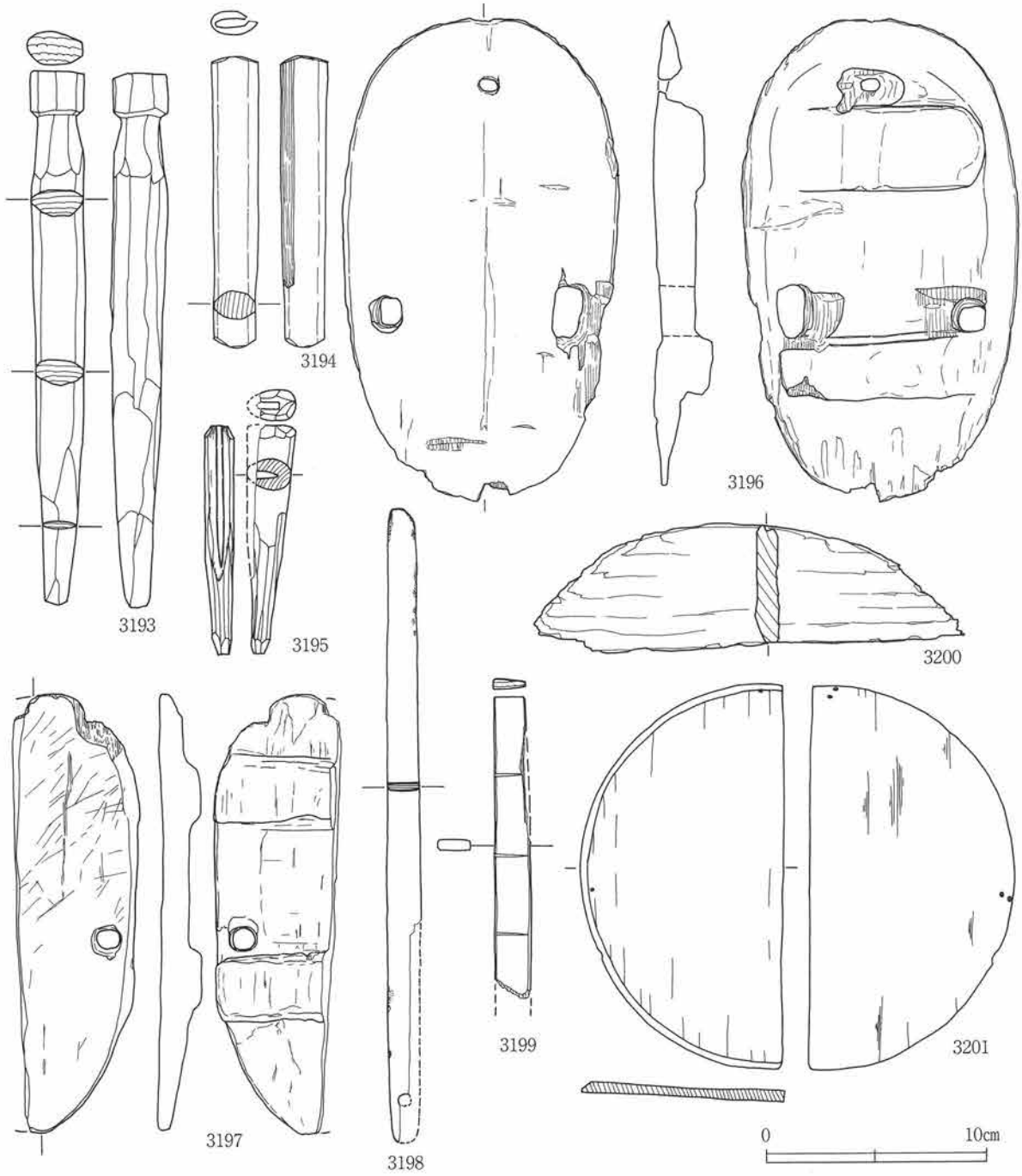
3242は縄である。材質を同定はしていないが藁縄のようである。

3243は漆器である。残存状態が悪くはっきり判断できないが、円形の受け口のある容器と推測される。鏡箱の身の部分に似る。想定図を示しておいた。漆は内外面黒漆である。



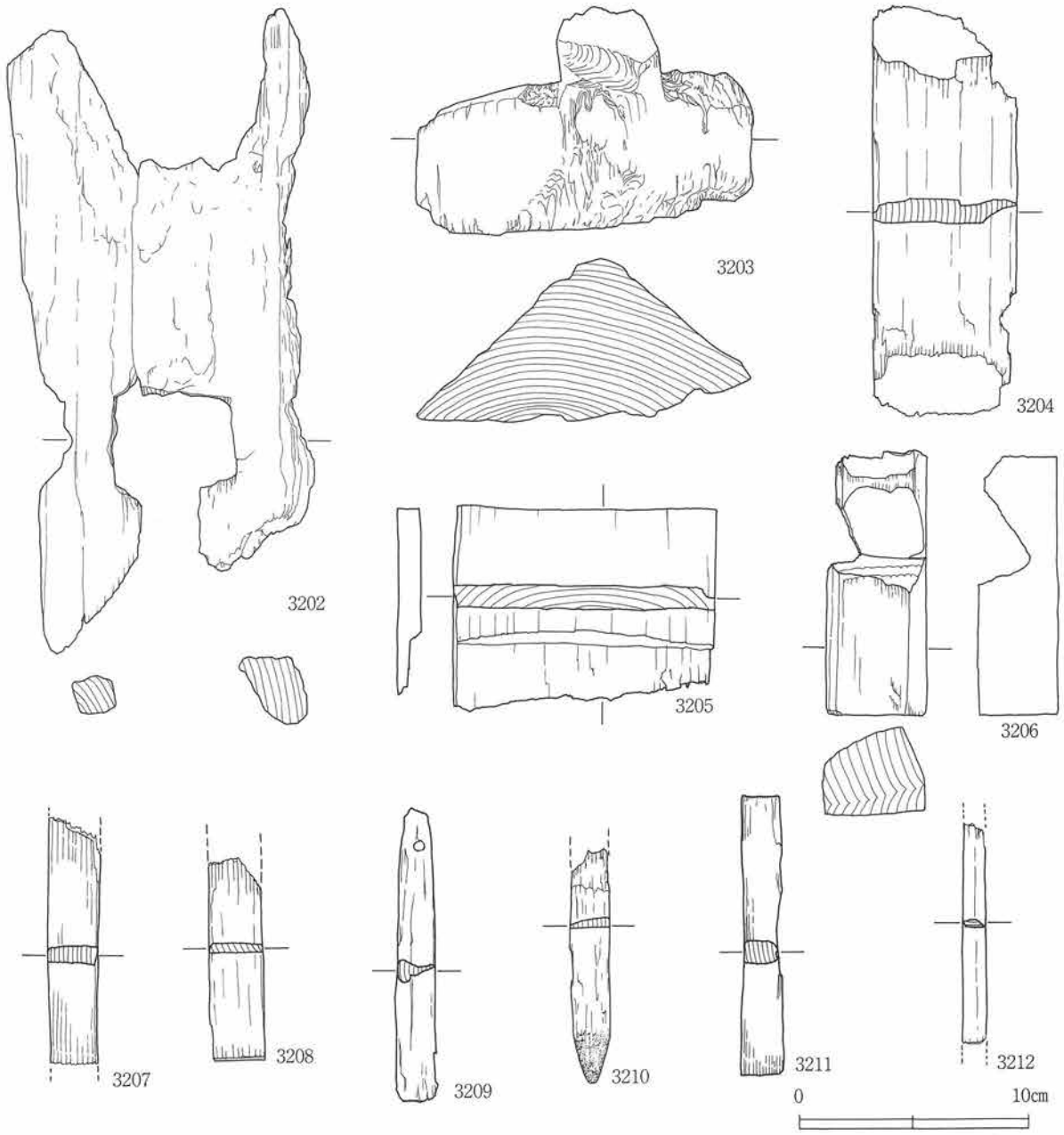
番号	器種	出土位置	樹種	その他
3181	漆器皿	4層	ケヤキ	内面に漆紙付着　表面に墨書確認できず
3182	漆器皿？	3層	ケヤキ	内外面黒漆
3183	〃	4層	ケヤキ	〃
3184	椀	4層	ケヤキ	漆塗り確認できず　一部分炭化している
3185	不明	3層	ヒノキ属の一種	箱状のものか　内外面に黒漆塗り
3186	鳴かぶら	5層	非木材	外面黒漆塗り
3187	不明	4層	ヒノキ属の一種	両面黒漆塗り
3188	櫛	5層	イスノキ	
3189	形代？	4層	スギ	
3190	形代？	5層	スギ	
3191	形代？	5層	ヒノキ属の一種	
3192	陽物	5層	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節の一種	縦半分に欠損

第132図　66 1 号池出土遺物⑦（木製品）



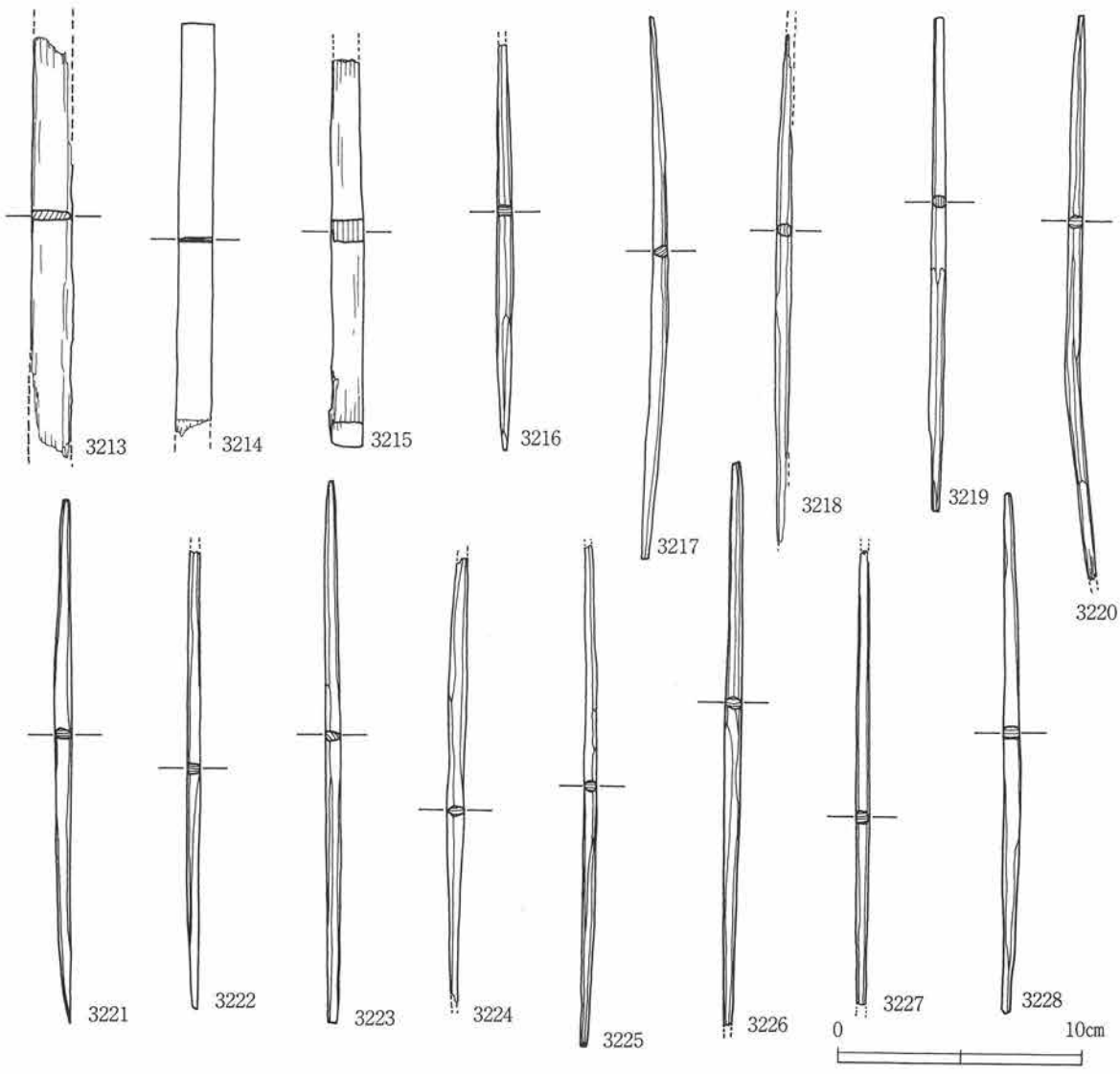
番号	器種	出土位置	樹種	その他
3193	形代？	5層	スギ類似種	
3194	刀子柄	4層	ヒノキ属の一種	一部欠損
3195	〃	5層（ⅣB７a）	アスナロ	
3196	下駄	5層	クリ	
3197	〃	5層	クリ	
3198	扇の骨	5層	スギ	一部炭化している
3199	ものさし	5層	スギ	
3200	曲物底	3層	未同定	
3201	〃	3層（ⅣB７a）	ヒノキ属の一種	

第133図　661号池出土遺物⑧（木製品）



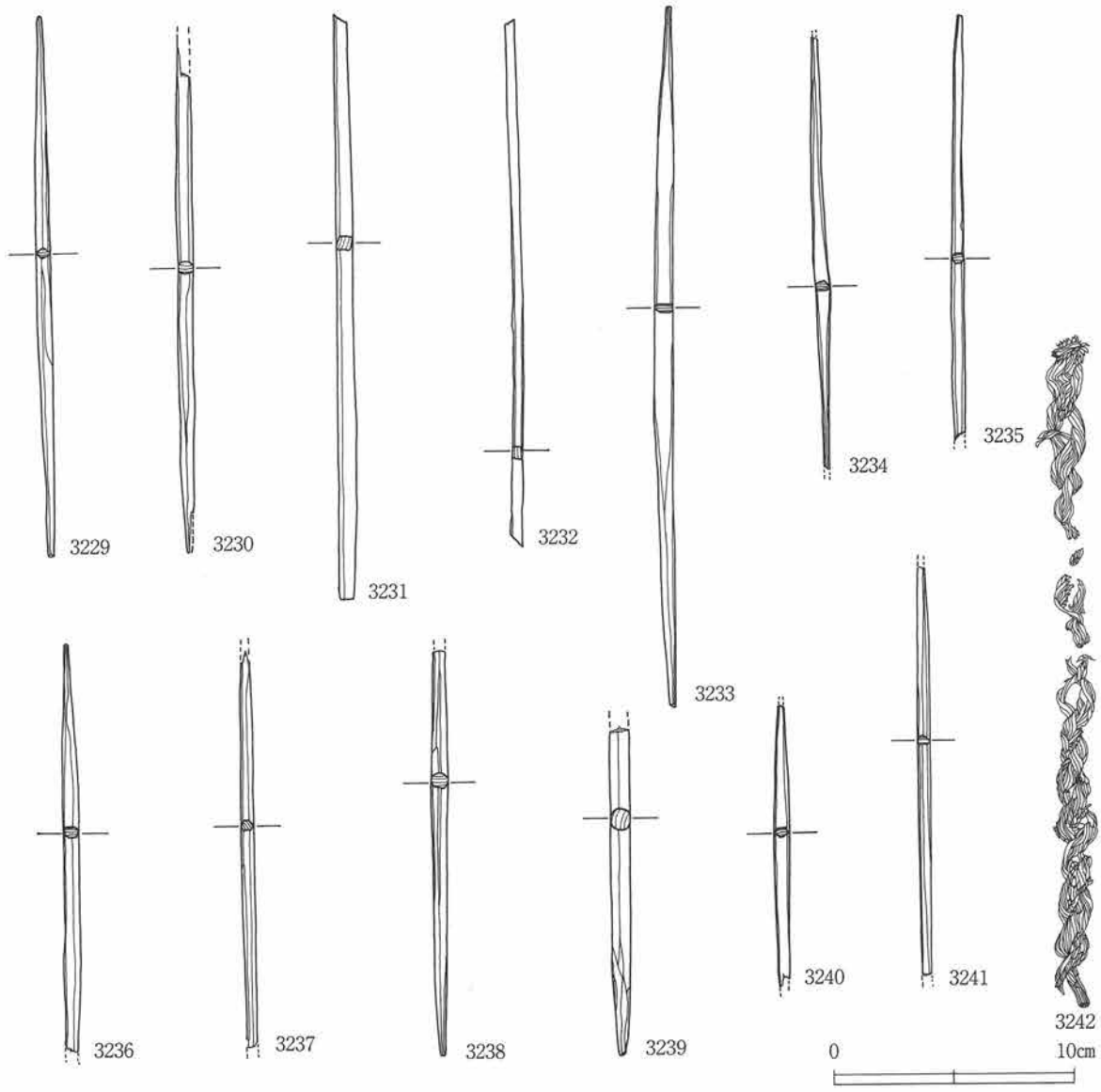
番号	器種	出土位置	樹種	その他
3202	不明	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
3203	〃	5層	クリ	
3204	〃	5層	スギ	
3205	〃	5層	スギ	
3206	〃	3層	スギ	
3207	〃	5層	未同定	
3208	〃	4層	〃	
3209	〃	4層	〃	
3210	〃	5層	〃	先端炭化している
3211	〃	5層	〃	
3212	〃	4層	〃	

第134図　66 1 号池出土遺物⑨（木製品）



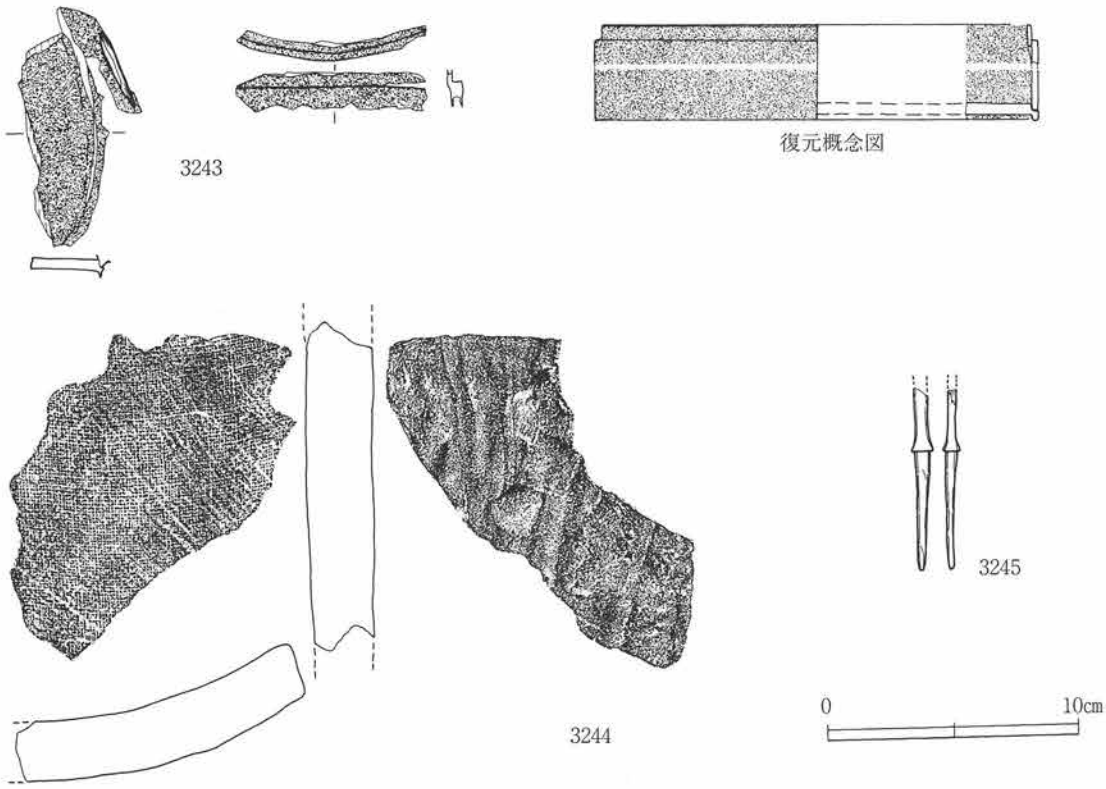
番号	器種	出土位置	樹種	その他
3213	不明	4層	未同定	
3214	〃	5層	〃	
3215	〃	5層	〃	
3216	はし	5層	〃	
3217	〃	5層	スギ	
3218	〃	4層	スギ	
3219	〃	5層	スギ	
3220	〃	3層	スギ	
3221	〃	5層	スギ	
3222	〃	5層	スギ	
3223	〃	5層	スギ	
3224	〃	5層	スギ	
3225	〃	4層	スギ	
3226	〃	5層	スギ	
3227	〃	5層	スギ	
3228	〃	5層	スギ	

第135図　661号池出土遺物⑩（木製品）



番号	器種	出土位置	樹種	その他
3229	はし	5層	スギ	
3230	〃	4層	スギ	
3231	〃	5層	スギ	
3232	〃	〃	スギ	
3233	〃	〃	スギ	
3234	〃	〃	スギ	
3235	〃	〃	未同定	
3236	〃	〃	〃	
3237	〃	〃	〃	
3238	〃	4層	〃	
3239	〃	5層	〃	
3240	〃	〃	〃	
3241	〃	〃	〃	
3242	縄	〃	〃	

第136図　66 1 号池出土遺物⑪（木製品）



番号	器種	出土位置	樹種	その他
3243	漆器容器	3層（ⅣＢ７ａ）	ケヤキ	残存状態が非常に悪い

番号	器種	出土位置	その他
3244	平瓦	5層	下面ナデ調整
3245	鉄鏃	5層	先端欠損

第137図　66１号池出土遺物⑫（木製品・瓦・鉄鏃）

（４）瓦（第137図、写真図版146）

3243の平瓦が１点出土している。上面には布痕があるが、下面はナデ調整がおこなわれている。厚手の瓦である。

（５）金属製品（第137～141図、写真図版146～150）

3244の鉄鏃と3245の鴛鴦文の轡が出土している。

3244の鉄鏃は先端が折れている。おそらく鏨状の形態であったと推測される。

3245は轡である。立聞（たちぎき）、鏡板（かがみいた）、引手（ひって）、遊金（あそびがね）、喰（はみ）の部品からなり、それらが連結した状態で出土した。ほとんど錆膨れも無く、各部位が可動する状態である。

この轡の鏡板に描かれた鳥の文様を、発見当初は「鳳凰」として新聞等に発表したのであるが、鳳凰ではなく「鴛鴦（エンオウ）」が妥当であるとの指摘を京都国立博物館久保智康氏から賜った。やはりご指摘のとおり、鳥の後頭部のカールする羽冠の表現は「鴛鴦」にふさわしいものである。また鳳凰であれば頭頂部にも羽冠が施される意匠になる。ここでこれまで「鳳凰文」としていた意匠を「鴛鴦文」と訂正したい。各

種の鴛鴦の意匠を第139図に示した。

「鴛鴦」の音は「エンオウ」で、訓では「おしどり」と読める。だが「鴛」、「鴦」のそれぞれの一字でも「おしどり」と訓じている。「鴛」は雄のおしどり、「鴦」は雌のおしどりの意であるという。

鴛鴦文轡の出土位置は池の北東付近で、両方の鏡板の裏面が上を向き、両引手が西側を向いた状態で出土した。不整な状態であり、この状況に人為的な意図は感じられない。おそらく原位置から二次的に動いていると考えられる。

本轡から約80cmほど離れて馬の顎と歯が出土している。確実には言えないが何らかの関係が考えられる。

鏡板と立聞は鋲によって留められている。これらの部品はいずれも鉄製である。鏡板は直径約10cmほどの円形である。断面形は裏面が幾分凹状になっている。表面には鴛鴦が象嵌によって描かれている。外側の翼は幅の広い彫り込み、他の部分は線状の彫り込みを行ない、その中に銅を象嵌している。その銅の上に金と銀で鍍金しているようであるが、残存状態が悪くはっきりしない。これについては科学分析の成果を読んでいただきたい。また鏡板に透かしが4ヵ所施され、鴛鴦の体を形どるようになっている。下の二つの透かしは喰を結合する穴にもなっている。鴛鴦の目は立聞を留める鋲のふくらみで表現されている。鴛鴦の顔は横向きで翼は広げた状態になっている。馬に轡を装着した場合には、鴛鴦の顔は横を向く状態になる。

立聞の上部の環状の部分（立聞壺）は左右で不対称の形になっている。図示した下の立聞壺は丸っぽいの輪であるが、上は方形がかった輪である。もっとも上の立聞はかなり腐食しており、立聞壺が変形した可能性もある。立聞には肉眼観察、またX線写真でも明瞭な文様がみられない。一方の立聞に文様らしい三角形の形が観察できるが確実に文様かどうか判断できない。どちらの立聞も腐食しており、確実に文様がないとは言いきれない状態である。立聞の縦断面は幾分内湾している。

引手は約16cmの長さである。手綱を取り付ける引手壺は先端の鉄を薄く伸ばして、巻いて作られている。遊金に取り付ける部分は引手本体より細くなっており巻いて輪に作り出されている。この輪の大きさは左右で不対称である。馬に装着した場合外側になる部分には文様がみられる。遺存状態が悪くはっきりしないが渦巻きの文様がみられる。唐草文様であろうか。また引手壺にも文様が観察できる。この文様は鏡板の文様とは異なり、象嵌ではなく、浮き上がった状態の文様に見える。使用されている素材は判断できないが、文様は金色に見える

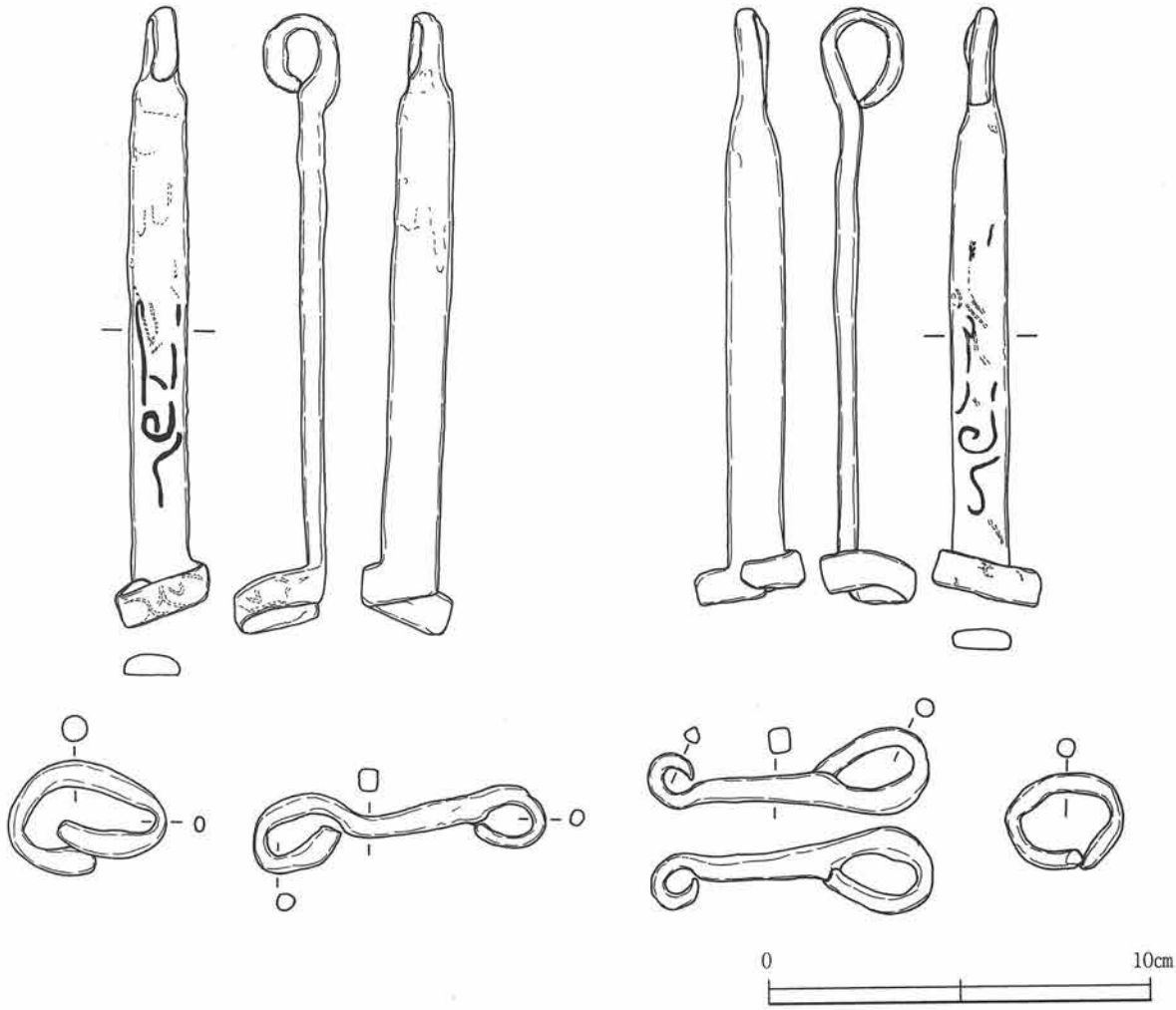
喰は二連式である。両端の環状の部分である喰先と輪違（かんちがえ）の断面は円形であるが、喰本体の中央部分の断面は角型を呈する。

遊金の大きさは左右で不対称である。断面形はどちらも円形であるが太さも大分異なっている。

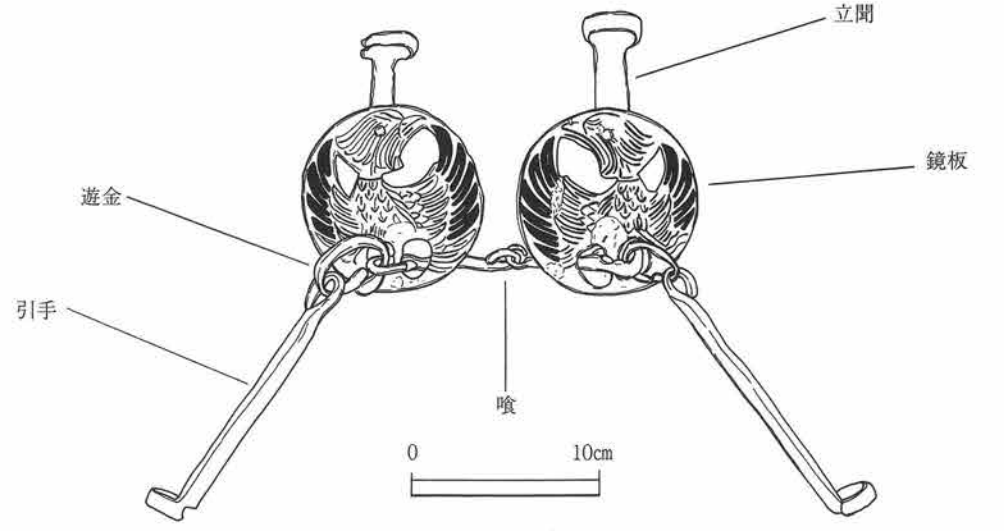
鏡板の鴛鴦の文様をX線写真、肉眼観察すると、象嵌を施す前の彫り込みのタガネ痕が観察できる。タガネ痕は糸目状になっており、コツコツと少しずつ彫り込んでいる状況がわかる。羽の先端部分のような幅の広い部分の彫り込みは、最初にその輪郭を線状に刻み、その後にその中を削いでいるとことが観察できる。また、うまく図示できなかったが、鏡板の透かし部分もタガネで刻んで切り取っている状況が観察できる。

この轡の総合的な考察については京都国立博物館の久保智康氏に依頼している。詳細は久保氏の文章（第12章6）を参照されたい。

第138図　661号池出土遺物⑬（轡）



番号	器種	出土位置	その他
3246	轡	5層	



連結した状態

遺物番号　3246

第139図　66 1 号池出土遺物⑭（轡）

第140図　66 1 号池出土遺物⑮（轡）

（6）馬骨（写真図版67）

池の北東から馬骨が出土した。良好に残存しているのは歯である。2列になって出土しており、北東側に2個、南西側に5個それぞれ並んでいた。これらは臼歯である。歯列のどうしの間隔は内法で約8㎝ほどで、顎に歯が付いた状態の間隔を保っていると考えられる。

顎の骨はわずかであるが、歯に付着する形で残存している。前歯や、他の部位の骨は検出できなかった。この歯および顎の骨が、下顎骨なのか、頭蓋骨なのかは、小林和彦氏の分析に任せたい。頭蓋骨であれば逆位、下顎であれば正位の出土状態である。

この馬骨が、池に置かれた時の状態がどのようであったかは判断が難しい。骨の状態で置かれたのか、肉のついた状態であったかということであるが、それを判断する材料はない、

また、頭部のみであったか、全身があったのかも判断できない。顎の骨の残存状態の悪さから考えれば、他の部位の骨が腐食して失われてしまった可能性も否定できない。

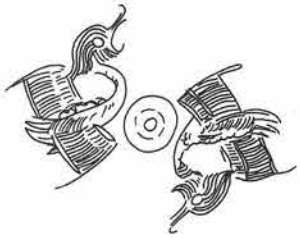
また轡が、この馬骨から約80㎝ほど離れて出土している。近接して出土したことから考えて、轡とこの馬骨に何らかの関係がある可能性は非常に高い。本来は馬の頭部に装着した状態であった可能性も考えられる。もし轡と馬骨が伴うものであれば、祭祀的な行為によって馬骨を置いた可能性が非常に強くなる。

紫檀木画槽琵琶
（正倉院　奈良時代）

瑞花鴛鴦文鏡
（平安時代）

瑞花鴛鴦八稜鏡
（平安時代）

唐花鴛鴦八稜鏡
（平安時代）



蝶鴛鴦鏡（平安時代）

鴛鴦丸（えんおうのまる）
（有職模様にみられるもの）

飾り金具の鴛鴦文
（鳥羽離宮出土）

鳳凰

おしどり

日本の文様21（小林桂助他著　光琳出版）に掲載の図を引用

第141図　鴛鴦の文様

3　かわらけ（第142～151図、写真図版151～163）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊3　Xかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。下に分類基準を示す。

手づくねかわらけ

C類（口縁部二段なで技法）

C_3類　上段のつまみは弱くいくらか内湾ぎみ。上段と下段のなで面はほぼ同じ幅である。口唇部断面形は丸い。

C_4類　上段を強くつまむ。上段は下段のなで面より幅が狭い。口唇部断面形は丸い。

C_5類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

$C_{5'}$類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形だが面取り部がくびれる。

D類（口縁部一段なで技法）

D2類　口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部断面形は丸い。

D3類　口縁部は弱く内湾気味。口唇部断面形は丸い。

D4類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

D4′類　D４類に類似。口唇部面取り後、口縁全体を一度なでる。断面形はほぼ三角形。

ロクロかわらけ

Ｒｄ　皿型の大型品

Ｒｂ　皿型の小型品（小型品は皿型とする。）

Ｒｂ　碗型

口縁部の形態

０類　口縁部が底部から丸く立ち上がるもの

１類　口縁部が底部からすぐにほぼまっすぐに立ち上がるもの

２類　口縁部が内湾し、均等の割合で口縁部、底部の二つに二分できるもの。

段の有無と段の数

0　段はなく、表面は滑らかである。

1　段はないが、表面には粗い調整痕がある。

2　段が２段ある。

3　段が３段ある。

4　段が４段ある。

5　段が５段以上ある。

底部の形状

疑似高台がない場合はダッシュ（′）をつける。

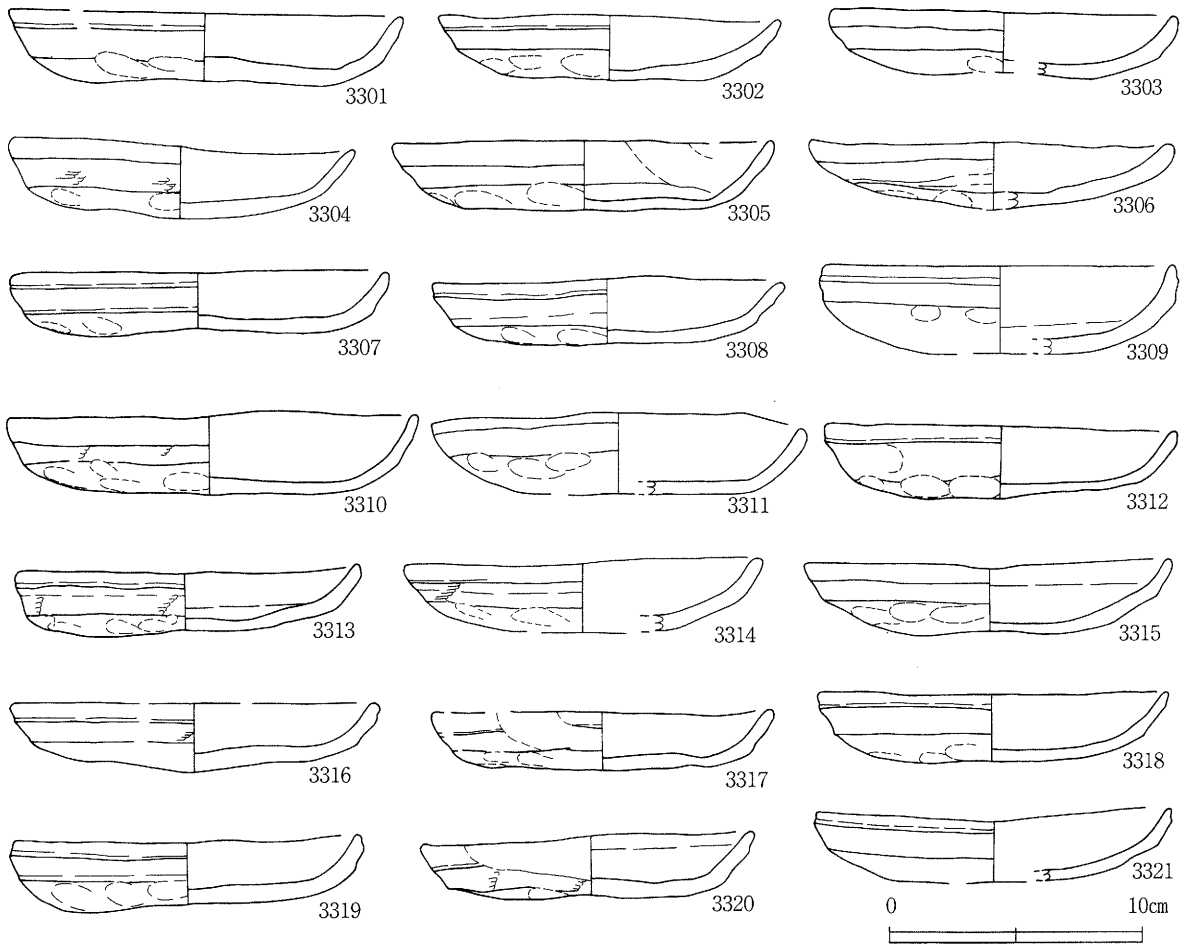
疑似高台がある場合はダッシュ（′）をつけない。

以上の要素を合わせてＲｄ01′、ｒｄ10のように表す。

12世紀のかわらけは、手づくねかわらけ172点、ロクロかわらけ21点、内折かわらけ２点、高台のあるかわらけ３点を図示した。かわらけの多くは道路側溝である46ＳＤ16からと、１号池跡が廃絶した後に堆積した１号池１～２層から多く出土した。他に不掲載のかわらけが125kg出土している。

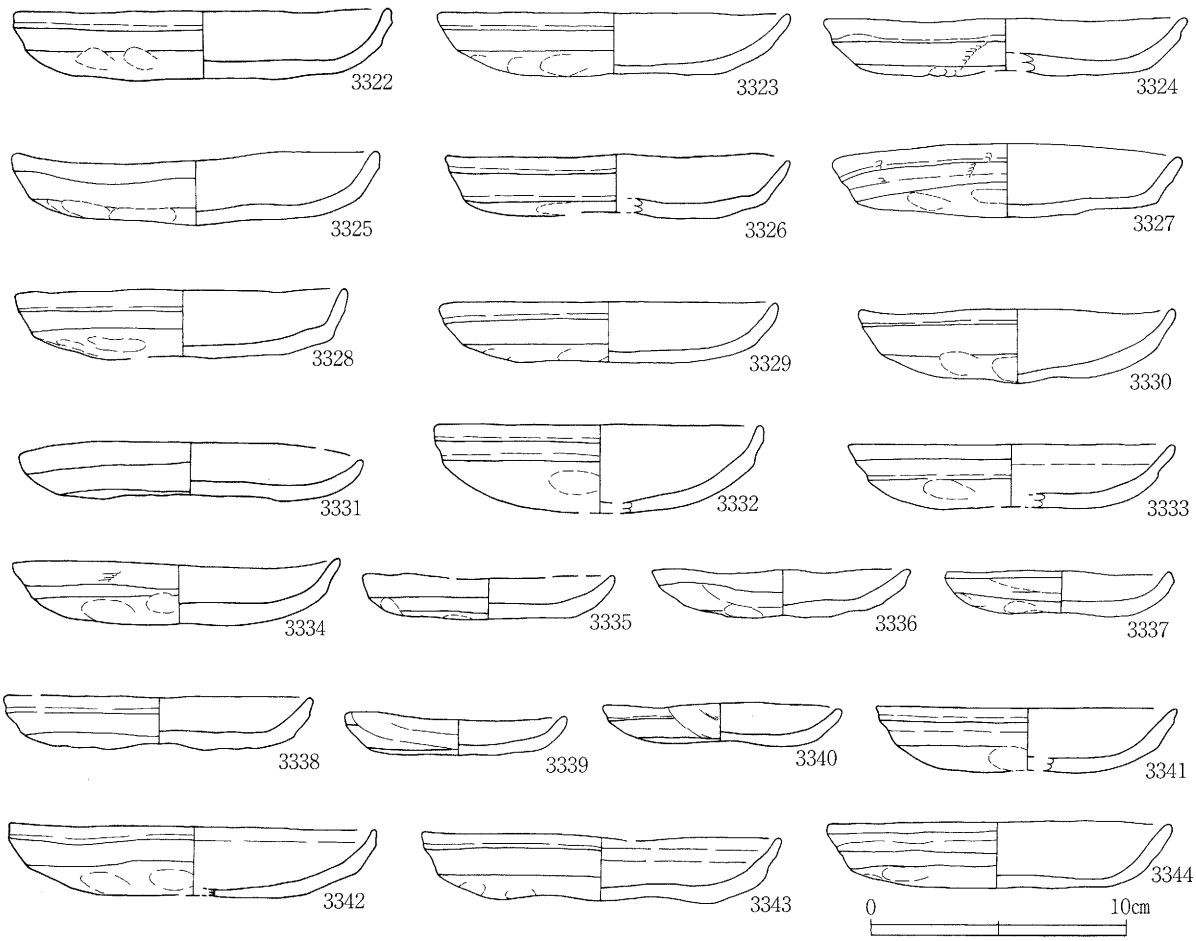
手づくねかわらけはC3類が11点、C4類は61点、C5類は14点、D2類が６点、D3類が42点、D4類が38点ある。

ロクロかわらけはｒｄが13点とＲｄが８点である。また高台の付く3402、3498、3499はロクロ不使用のものであり、胎土は手づくねかわらけと共通する。



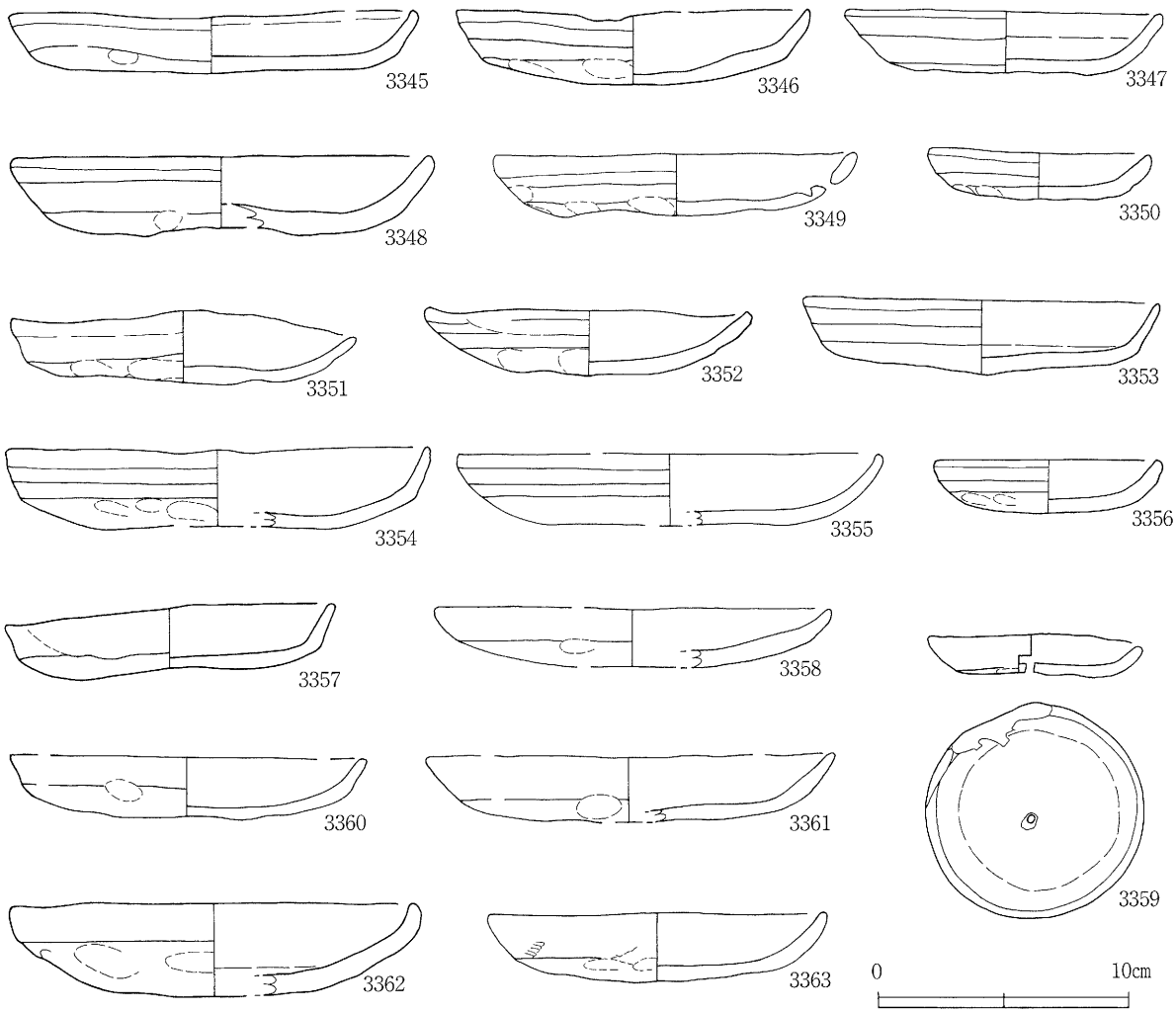
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3301	46SD16埋土(ⅣB8b南)	C_3	15.6	—	2.9	布？		40	細砂小	内面に多少の油煙が付着
3302	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C_4	13.5	—	2.6			45	〃	指凹み
3303	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C_3	13.8	—	(2.6)			20		
3304	46SD16埋土(ⅣB7b北)	C_4	13.4	—	3.2	ヘラ		95		指紋
3305	46SD16埋土(ⅣB7b北)	C_3	15.1	—	2.8	ヘラ	すのこ痕	55	細砂小	
3306	46低地覆土(ⅣB7a)	C_3	14.4	—	(2.7)			35	細砂多	指頭圧痕散在
3307	46SD16埋土(ⅣB7b)	C_4	14.9	—	2.6			30	〃	
3308	46SD16埋土(東流部)	C_4	13.8	—	2.8			80	〃	
3309	46低地覆土(ⅣB6c)	C_4	13.8	—	(3.5)			25	〃	
3310	46低地覆土(ⅣB7a)	C_3	16.2	—	3.3	ヘラ	すのこ痕	100		
3311	46低地覆土(ⅣB6a)	C_4	14.6	—	(3.3)			45	細砂小	内面に油煙付着
3312	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C_4	14.0	—	2.9	ヘラ		65	細砂多	継ぎ目
3313	46SD16埋土(東流部)	C_4	13.4	—	2.7	ヘラ	すのこ痕	100		内面に油煙付着
3314	46低地覆土(ⅣB7a)	C_4	14.2	—	(3.0)	ヘラ		30	細砂小	
3315	46SD16埋土(ⅣB0b南)	C_4	14.5	—	3.0			40	〃	
3316	46SD16埋土(ⅣB0b南)	C_4	14.5	—	2.8	ヘラ		20	細砂多	指凹み
3317	46SD16埋土(ⅣB7b北)	C_4	13.5	—	2.4	ヘラ		50	細砂小	
3318	46SD16埋土	C_4	13.8	—	2.8			65	細砂多	
3319	46SD16埋土(東流部)	C_4	13.6	—	2.9	皮？	すのこ痕	50	〃	
3320	46SD16埋土(東流部)	C_4	13.0	—	2.6	ヘラ	すのこ痕	60	細砂小	植物痕
3321	46SD16埋土(ⅥB0b北)	C_4	14.0	—	2.9			30	〃	

第142図　C地区のかわらけ①



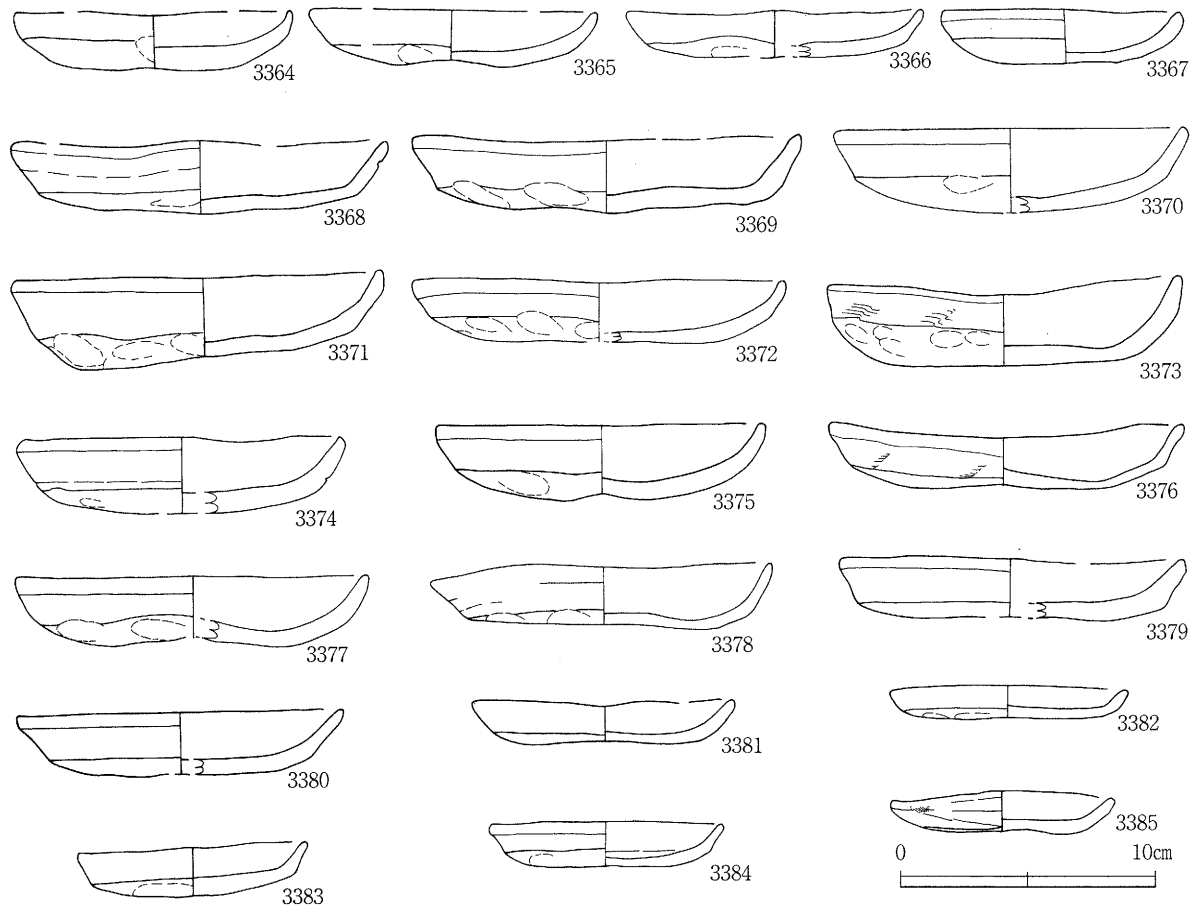
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3322	46SD16埋土(ⅣB8b北)	C4	14.9	—	2.8	布	すのこ痕	25	細砂多	
3323	46SD16埋土(ⅣB0b南)	C4	13.9	—	2.5	布		50	細砂小	継ぎ目
3324	46SD16埋土(ⅣB7b北)	C4	14.3	—	(2.3)	ヘラ？		35	〃	指凹み著しい
3325	46SD16埋土(東流部)	C4	14.3	—	2.9	ヘラ		50	〃	
3326	46SD16埋土(ⅤB0b北)	C4	13.6	—	(2.6)			45	細砂多	継ぎ目
3327	46SD16埋土(東流部)	C4	13.4	—	3.0	ヘラ		50		外底に指紋、口縁部歪み
3328	46低地覆土(ⅣB7a)	C4	13.0	—	2.9			95	細砂小	指頭圧痕散在
3329	46SD16埋土(ⅣB7b北)	C4	13.3	—	2.4	ヘラ		50		
3330	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C4	12.4	—	2.9	布？		35	細砂小	
3331	46SD16埋土	C4	13.6	—	2.1			30	〃	内面に油煙付着、指凹み
3332	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C4	13.0	—	3.5			20	〃	
3333	46SD16埋土(ⅣB0b南)	C4	12.2	—	2.1			15	粗砂小	
3334	46低地覆土(ⅣB7a)	C4	12.8	—	(2.6)			20	細砂小	
3335	46SD16埋土(ⅣB9b)	C4	13.0	—	2.6			45	〃	歪み著しい
3336	46SD16埋土(東流部)	C4	10.0	—	1.8	布		60	細	
3337	46SK27埋土	C4	8.6	—	1.7			100	細砂多	内面に炭化物付着
3338	46SD16埋土(東流部)	C4	8.7	—	1.8			60	〃	継ぎ目
3339	〃	C4	10.2	—	1.9			65	細砂小	指凹み
3340	46SD16埋土(ⅣB9b北)	C4	9.5	—	1.7			50	〃	継ぎ目　指凹み
3341	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C4	14.1	—	26		すのこ痕	30	〃	
3342	465D16埋土(ⅣB0b南)	C4	14.6	—	(2.8)			30	〃	
3343	46SD16埋土(ⅣB7b北)	C4	11.8	—	(2.6)			15		
3344	46SD16埋土(東流部)	C5	13.4	—	2.7	木	すのこ痕	60	細砂多	

第143図　C地区のかわらけ②



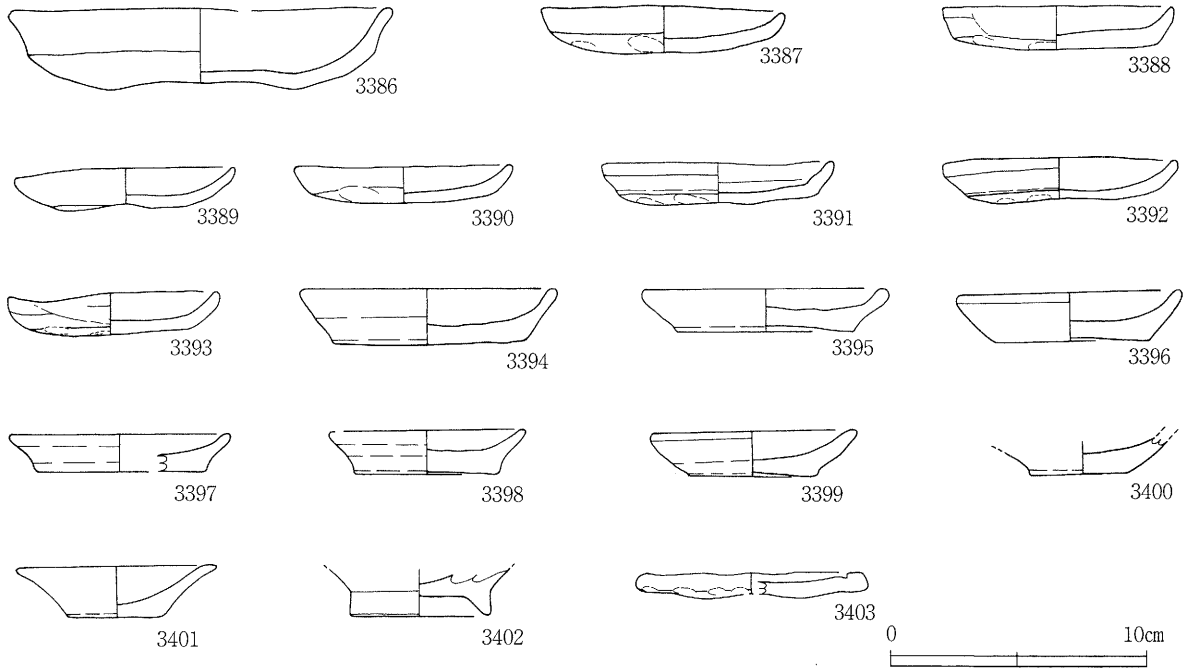
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3345	46低地覆土(ⅣB7a)	C_5	16.4	—	2.5			30		内底油煙付着
3346	46SD16埋土(ⅣB8b南)	C_5	14.1	—	3.0			25	細砂小	
3347	46SD16埋土(東流部)	C_5	12.7	—	2.5			35	粗砂小	指頭圧痕散在
3348	46SD16埋土(ⅣB8b北)	C_5	17.0	—	3.2			20	細砂多	指凹み
3349	〃	C_5	14.3	—	2.5	ヘラ		80		穿孔
3350	46低地覆土(ⅣB7b)	C_5	9.0	—	2.0			55		内底に油煙付着
3351	46SD16埋土(東流部)	D_3	13.6	—	3.0	ヘラ	すのこ痕	65	細砂多	歪み著しい内面にスス付着
3352	46SD16埋土(東流部)	C_5	12.7	—	2.7			30	〃	歪み
3353	46低地覆土(ⅣB6b)	C_5	14.2	—	3.0			30	〃	油煙付着炉明皿か
3354	46SD16埋土(ⅣB8b南)	C_5	17.0	—	(3.3)			25	〃	継ぎ目
3355	46SK23埋土	C_5	17.0	—	(2.9)			15	細砂小	
3356	46低地覆土(ⅣB7a)	C_5	9.1	—	2.1		すのこ痕	50	細砂多	
3357	46SD16埋土(東流部)	D_2	13.3	—	3.0			90		指凹み
3358	46SD16埋土(ⅣB0b北)	D_3	15.9	—	(2.4)			20	細砂多	
3359	46SD16埋土	D_3	8.7	—	1.8			95		底中心に穿孔（焼成後か）
3360	46SK23埋土	D_3	14.3	—	2.5			20	細砂多	
3361	46SD16埋土(ⅤB0b南)	D_3	16.3	—	(2.7)			20	細砂多	内面に油煙付着　継ぎ目
3362	46低地覆土(ⅣB7a)	D_3	16.2	—	(3.7)		すのこ痕	35		
3363	46SD16埋土(東流部)	D_3?	13.4	—	(2.8)	布		35	粗砂小	外底に指紋

第144図　C地区のかわらけ③



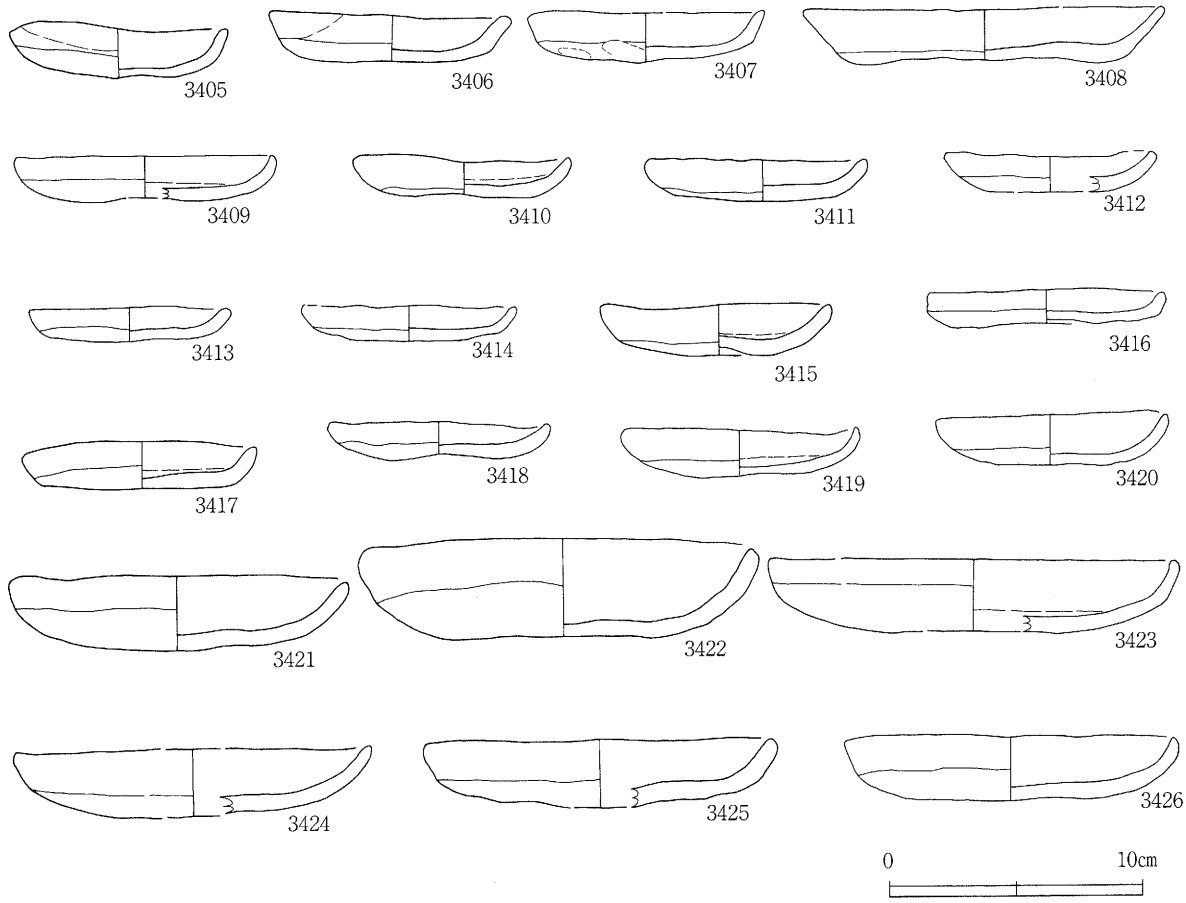
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底のすこ痕	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3364	46SK23埋土	D_3	11	—	2.4			20	細砂多	
3365	46SD16埋土(ⅣB0b)	D_3	11.3	—	2.3			15	細砂少	
3366	46SK17埋土	D_3	11.5	—	1.9			30	細砂多	
3367	46低地覆土(ⅣB7a)	D_3	7.7	—	1.3			30	細砂少	
3368	46低地覆土(ⅣB6b)	D_4	14.9	—	3.0			20	細砂多	
3369	46低地覆土(ⅣB6a)	D_4	15.3	—	3.2			55	細砂多	指凹み著しい
3370	46低地覆土(ⅣB6a)	D_4	13.6	—	(3.4)			20	細砂多	
3371	46SK27埋土	D_4	14.4	—	3.7	布？		100	粗砂多	継ぎ目、中央指凹み
3372	46SD16埋土(ⅣB0b北)	C_4	14.6	—	(2.5)	布？		25	細砂少	
3373	46低地覆土(ⅣB7a)	D_4	13.8	—	3.4		すのこ痕	25	細砂多	
3374	46低地覆土(ⅣB6b)	D_4	12.4	—	(3.1)			15	細砂多	
3375	46SD16埋土(ⅣB8b北)	D_4	13.0	—	3.0			25	細砂多	指凹み
3376	46SD16埋土(東流部)	D_4	13.8	—	2.6	布？		50	細砂少	
3377	46SD16埋土(ⅤB0b)	D_4	14.0	—	2.8			20	細砂多	
3378	46SD16埋土(ⅤB0b南)	D_4	13.5	—	2.6			35	細砂少	継ぎ目
3379	46SD16埋土(東流部)	D_4	13.5	—	(2.5)	皮？		25	細砂多	
3380	46SD16埋土(ⅣB6c)	D_4	12.9	—	(2.5)			15	細砂多	
3381	46SD16埋土	D_3	10.3	—	1.8			25	細砂多	
3382	46SD16埋土(東流部)	D_3	9.3	—	1.3			50	細砂少	
3383	46SK31埋土	D_3	9.0	—	2.1		すのこ痕	100	粗砂多	継ぎ目、底部肉厚
3384	46SK31埋土	D_4	9.0	—	1.8			80	細砂多	口縁部歪み
3385	46SD16埋土(東流部)	D_4	8.8	—	1.8			100	細砂少	内面に油煙指凹み

第145図　C地区のかわらけ④



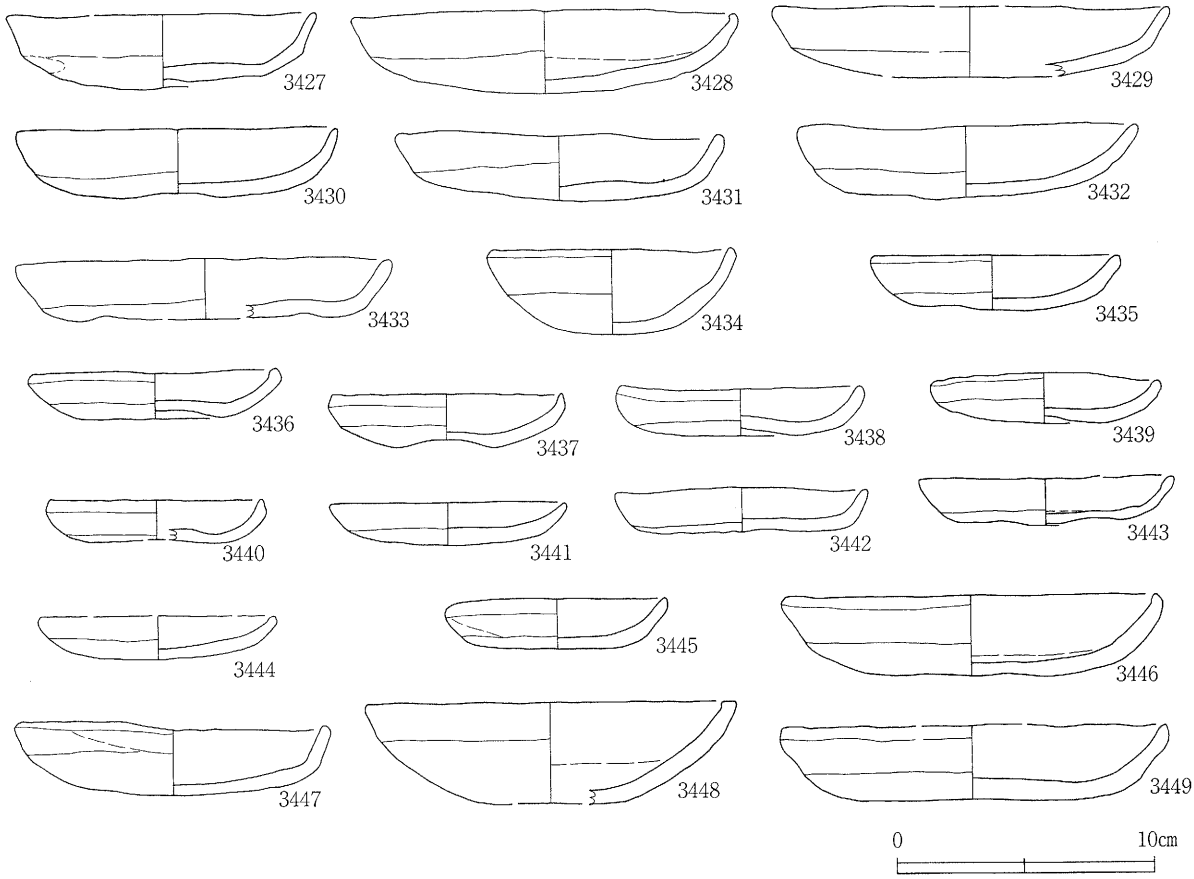
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3386	46低地トレンチ1層(ⅣB7b)	D_2	15.1	—	3.2			20	粗砂多	指凹み著しい
3387	46SD16埋土(ⅣB7b北)	D_3	9.6	—	1.9	ヘラ	すのこ痕	85	細砂多	歪み著しい
3388	46低地覆土(ⅣB6a)	D_4	9.0	—	1.8	ヘラ		100	細砂少	指凹み、継ぎ目
3389	46SD16埋土(東流部)	D_3	8.6	—	1.8	ヘラ	すのこ痕	75		中央指凹み
3390	〃	D_3	8.6	—	1.5	ヘラ		35	細砂少	
3391	46低地覆土(ⅣB7b)	D_4	9.1	—	1.7	ヘラ		45		指紋
3392	46SD16埋土(東流部)	D_4	9.2	—	1.8	ヘラ		100		中央指凹み
3393	46SD16埋土(東流部)	D_4	8.3	—	1.7			100		
3394	46低地覆土(ⅣB7b)	rd12	10.1	7.6	2.2	ロクロ	回転糸切	55	粗砂多	
3395	46SK26埋土	rd	12.9	—	(2.5)	〃	〃	15	細砂多	
3396	46低地覆土(ⅣB7b)	rd11	8.8	5.8	1.9	〃	〃	75	細砂多	右回り
3397	46SD16埋土(東流部)	rd	8.7	6.6	1.5	〃	〃	20	細砂少	
3398	46SD16埋土(東流部)	rd13	7.8	5.8	1.8	〃	〃	45	粗砂少	右回り
3399	46SD16埋土(東流部)	rd12	8.1	5.1	1.8	〃	〃	100	粗砂少	
3400	46低地覆土(ⅣB6b)		1.9	—	(5.6)	〃	〃			
3401	46SK23埋土	rd	7.8	3.2	3.7	〃	〃	30	細砂多	底径下さい。風化著しい
3402	46低地トレンチ1層(ⅣB7b)		1.9	—	(5.6)	〃	〃		細砂少	高台が付く
3403	46SD16埋土(ⅣB7b)	内折れ	10.3	—	1.8			25	細砂多	

第146図　C地区のかわらけ⑤



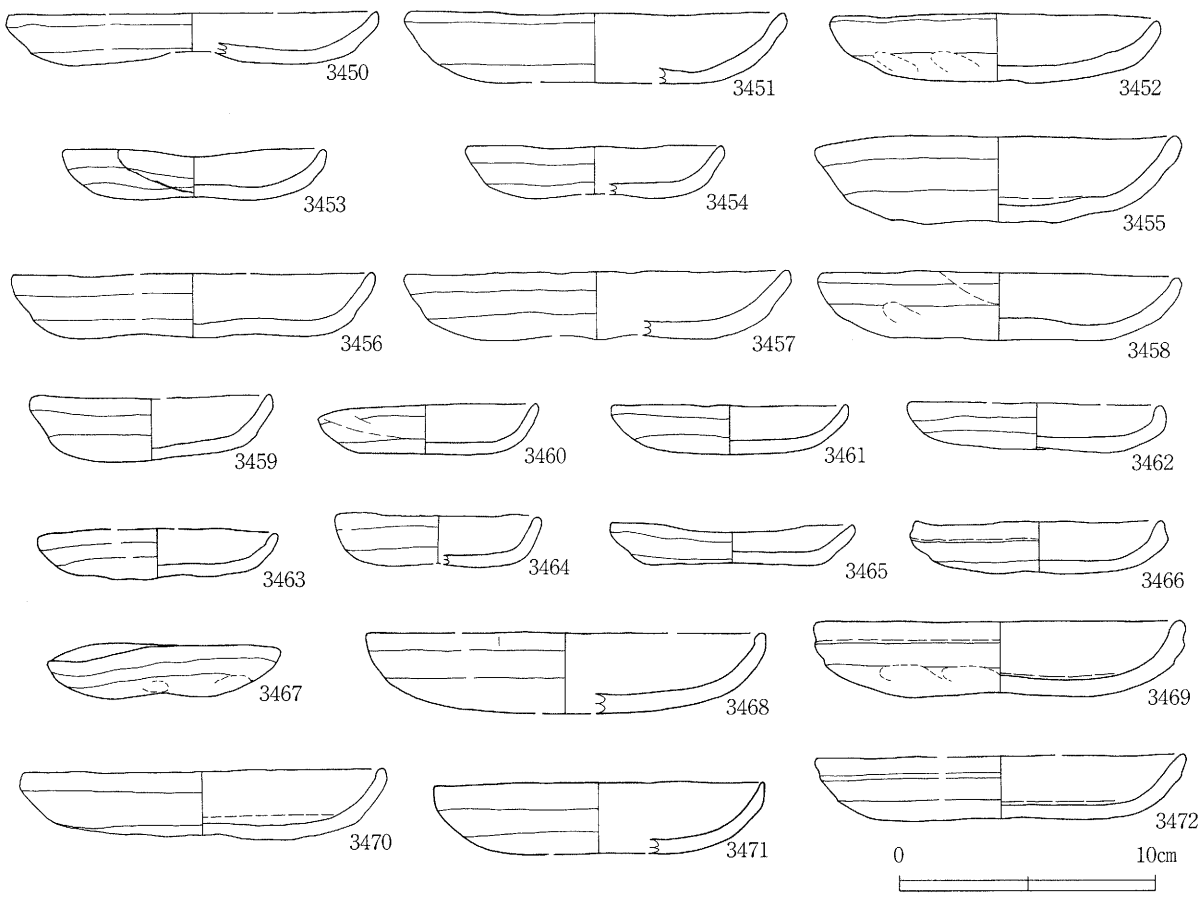
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3405	66 1池1層（ⅣA8j）	D_2	8.5		2.3	指？		100	細砂少量	やや摩耗している
3406	66 1池1層	〃	9.1		2.0	指	すのこ痕	100	〃	
3407	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	9.2		2.1	指？		60	〃	
3408	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	14.0		2.2	不明		40	細砂多量	
3409	66 1池1層（ⅣB8a）	D_3	10.0		1.8	指？	すのこ痕	30	細砂少量	
3410	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	8.4		1.7	不明		100	細砂少量	摩耗している
3411	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	8.4		1.7	不明	すのこ痕	90	細砂少量	やや摩耗している
3412	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	8.2		1.6	ヘラ		30	細砂多量	胎土に雲母が混入
3413	〃	〃	8.0		1.4	不明	すのこ痕	60	〃	胎土に雲母がわずかに混入
3414	〃	〃	8.3		1.4	ヘラ？		40	細砂少量	
3415	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	8.8		2.1	指		50	〃	
3416	66 1池2層（ⅣB8a）	〃	9.3		1.5	指？		80	〃	
3417	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	8.9		2.0	不明		80	細砂多量	摩耗している
3418	〃	〃	8.6		1.5	ヘラ？		100	細砂多量	摩耗している
3419	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	9.1		2.0	指	すのこ痕	80	細砂少量	
3420	〃	〃	9.1		2.2	不明		100	細砂少量	摩耗している
3421	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	12.9		3.0	不明	すのこ痕	90	細砂多量	摩耗している
3422	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	15.3		4.0	指	すのこ痕	100	細砂少量	内面に頭髪の圧痕がある
3423	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	16.0		3.0	指		20	〃	内面に炭化物付着
3424	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	14.0		2.7	ヘラ	すのこ痕	30	細砂少量	
3425	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	13.5		2.7	不明	すのこ痕	40	〃	摩耗している
3426	〃	〃	13.0		2.6	不明	すのこ痕	90	細砂多量	

第147図　C地区のかわらけ⑥



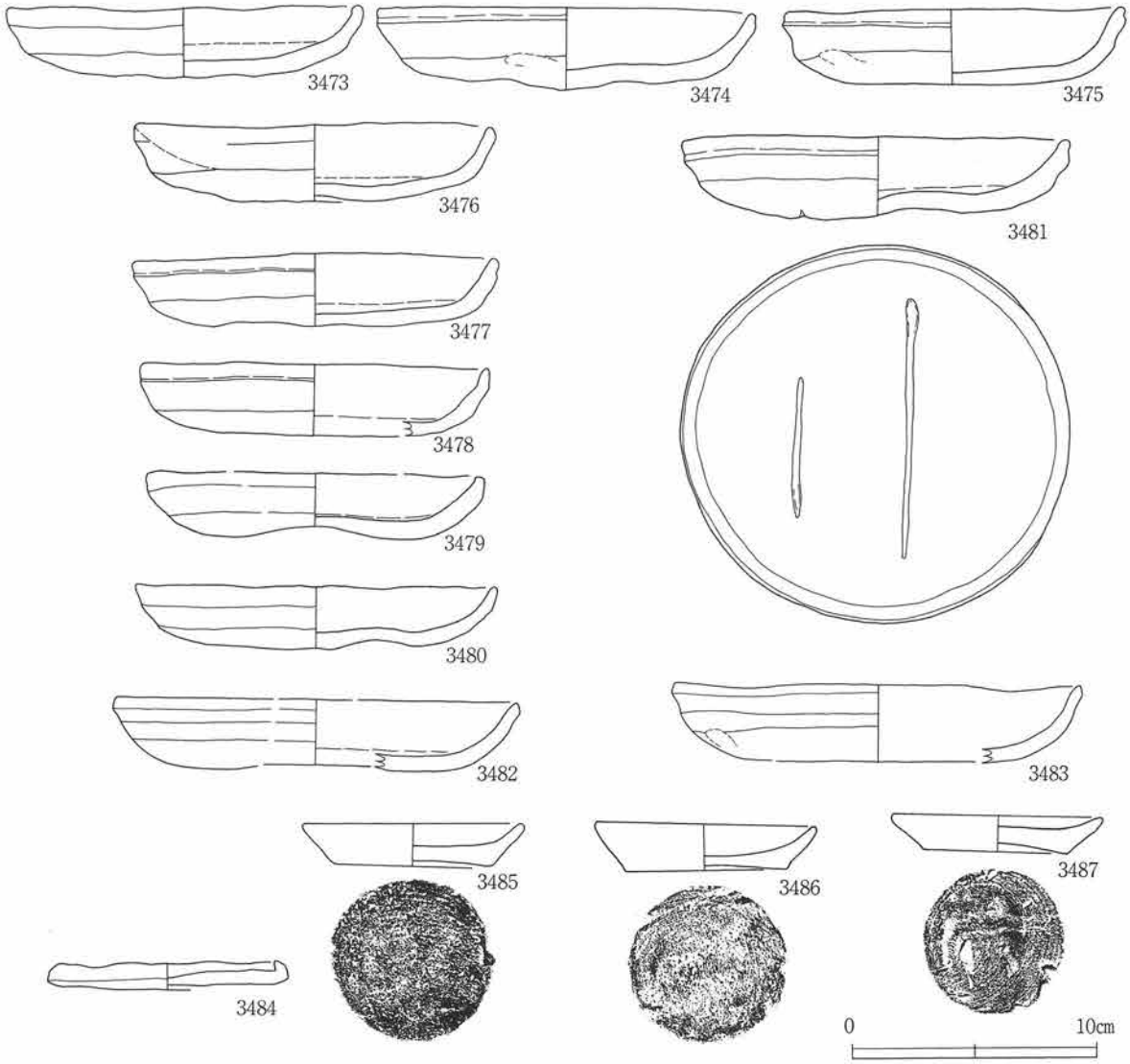
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3427	66 1池1層（ⅣA8j）	D3	12.0		3.0	指？	すのこ痕	40	細砂少量	
3428	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	15.0		3.3	指		50	〃	内外面に油煙付着
3429	〃	〃	15.4		2.8	指？		30	〃	内面に油煙付着
3430	66 1池2層（ⅣA7j）	〃	12.6		2.8	指？	すのこ痕	30	〃	
3431	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	12.5		2.8	指？		90	細砂多量	摩耗している
3432	66SK2 2層	〃	13.2		3.0	指？		50	〃	
3433	66P31埋土	〃	14.6		2.4	ヘラ	すのこ痕	50	細砂少量	
3434	66 1池1層（ⅣB6a）	D4	9.4		3.4	不明		100	〃	身の深い器形
3435	66 1池1層（ⅣA8j）	〃	9.4		2.2	不明		100	〃	摩耗している
3436	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	9.6		3.0	指		100	〃	
3437	66 1池1層（ 〃 ）	〃	9.0		2.1	不明		30	〃	摩耗している
3438	〃	〃	9.4		2.0	指	すのこ痕	70	〃	
3439	66 1池2層（ⅣB7a）	〃	8.7		2.0	指？	すのこ痕	30	〃	口縁内外面に油煙付着
3440	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	8.2		1.7	不明	すのこ痕	30	〃	摩耗している
3441	66 1池2層（ 〃 ）	〃	9.1		2.7	不明	すのこ痕	30	細砂多量	摩耗している
3442	66 1池2層（ⅣB8a）	〃	9.8		1.8	指	指紋顕著	50	細砂少量	
3443	66 1池2層（ⅣA8j）	〃	10.0		1.95	指		50	〃	
3444	66 1池2層（ⅣB8a）	〃	9.1		1.7	指		90	〃	胎土に海綿状骨針混入する
3445	66 1池2層（ⅣB6a）	〃	8.4		3.0	指？		50	〃	摩耗している
3446	66 1池2層（ⅣB7a）	〃	14.4		3.2	指	すのこ痕	70	〃	
3447	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	12.0		2.9	指？	すのこ痕	100	〃	
3448	〃	〃	14.2		4.0	指		30	〃	
3449	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	15.0		3.0	不明	すのこ痕	40	〃	

第148図　C地区のかわらけ⑦



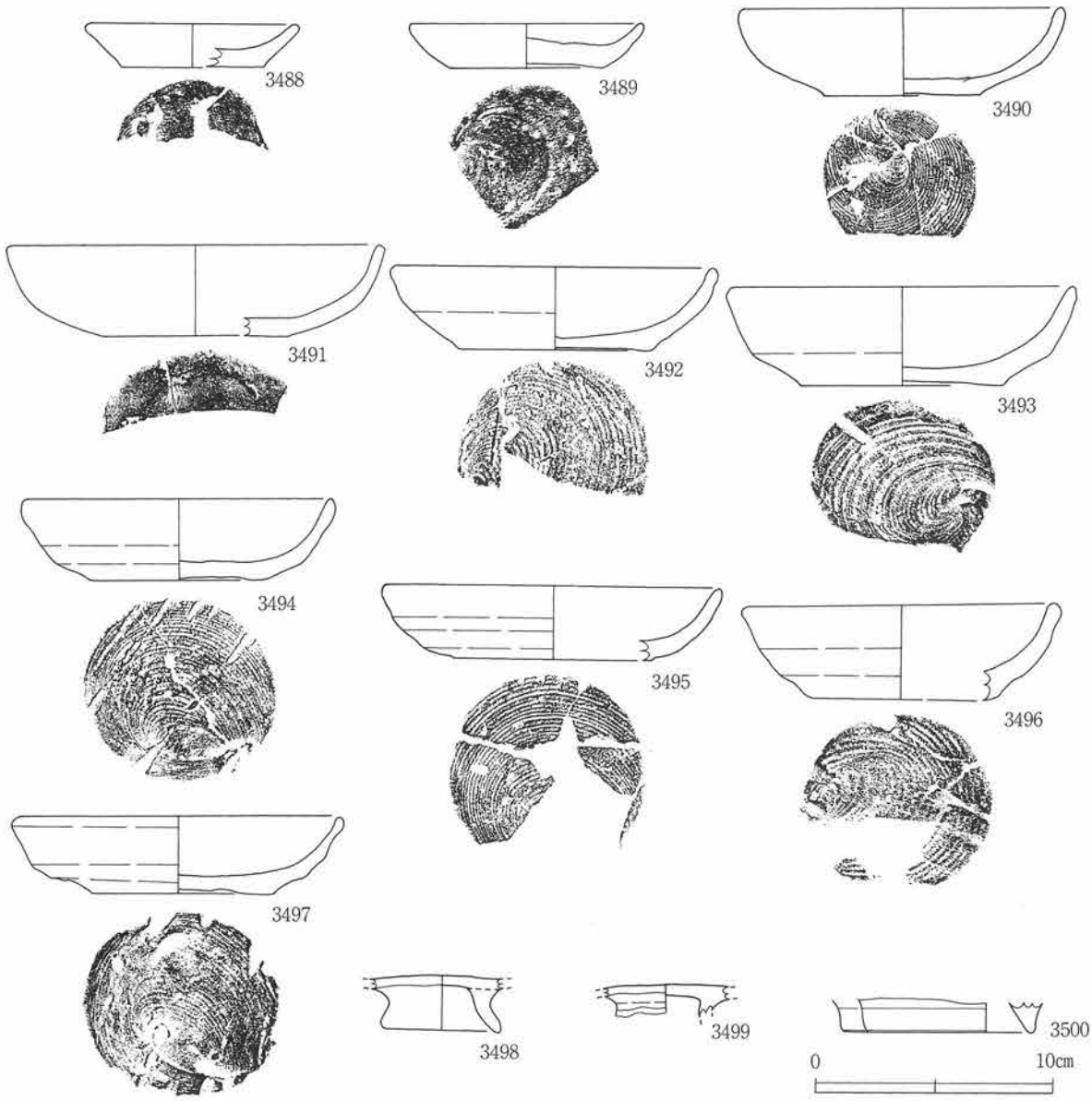
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3450	66 1池1層（ⅣB6a）	D_4	14.4		2.0	指？	すのこ痕	30	細砂少量	
3451	66 1池2層（ⅣB8a）	〃	14.5		2.8	指	すのこ痕	30	〃	外面油煙付着
3452	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	12.8		2.8	指？		70	細砂多量	内面油煙多量に付着
3453	66 1池1層（ⅣB8a）	C_3	10.0		2.0	指？		50	細砂少量	摩耗している
3454	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	10.0		2.1	指？		40	〃	
3455	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	14.0		3.5	指	すのこ痕	80	〃	
3456	〃	〃	14.0		2.5	指？		20	細砂多量	内面油煙付着
3457	〃	〃	15.0		2.7	指	すのこ痕	30	細砂少量	内面油煙付着
3458	〃	〃	14.0		2.7	指	すのこ痕	60	〃	
3459	66 1池1層（ⅣA8j）	C_4	9.1		2.7	指？		80	〃	摩耗している
3460	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	8.4		2.0	指	すのこ痕	80	〃	
3461	66 1池1層（ⅣA8j）	〃	9.0		2.0	指	すのこ痕	50	〃	内面油煙付着
3462	66 1池2a層（ⅣB7a）	〃	9.8		1.9	指	すのこ痕	50	細砂多量	胎土に雲母わずかに混じる
3463	〃	〃	9.2		2.0	指	すのこ痕	90	細砂少量	
3464	66 1池2a層（ⅣA7j）	〃	7.8		2.1	指		50	〃	
3465	66 1池1層（ⅣA8j）	〃	9.3		1.6	指		40	〃	
3466	66 1池2層（ⅣA7j）	〃	10.8		2.1	指		50	〃	
3467	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	9.0		2.2	指	すのこ痕	100	〃	
3468	66 1池2層（ⅣB6a）	〃	15.5		3.2	指		30	〃	
3469	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	14.2		3.1	指	すのこ痕	50	〃	
3470	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	14.2		2.8	指		60	〃	内面油煙付着
3471	〃	〃	13.0		2.8	指？	すのこ痕	40	〃	内面油煙付着
3472	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	14.4		2.5	指	すのこ痕	30	〃	

第149図　C地区のかわらけ⑧



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3473	66 1池1層（ⅣB6a）	C_4	14.4		2.95	指	すのこ痕	50	細砂少量	
3474	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	15.3		3.4	指？	すのこ痕	60	細砂多量	
3475	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	13.6		3.1	指	すのこ痕	90	〃	
3476	66 1池2層（ⅣB8a）	〃	14.4		3.3	指		100	細砂少量	内面油煙付着
3477	66 1池1層（ⅣB7a）	〃	14.6		3.0	指	すのこ痕	90	〃	
3478	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	14.0		3.0	指	すのこ痕	30	〃	
3479	66 1池2a層（ⅣB6a）	〃	13.5		2.7	指	すのこ痕	40	〃	
3480	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	14.6		2.7	指？		50	細砂多量	摩耗している
3481	66 1池1層（ⅣA6i）	〃	15.9		3.5	指	すのこ痕	100	細砂少量	
3482	66 1池1層（ⅣB6a）	C_5	16.4		2.9	指	すのこ痕	40	〃	
3483	66 1池1層（ⅣB6a）	〃	16.6		3.2	不明	すのこ痕	40	〃	摩耗している
3484	66 1池1層（ⅣB7a）	内折れ	9.0		1.1	指？		40	〃	
3485	66 1池1層（ⅣB6a）	rd	8.8		1.9	ロクロ	回転糸切	90	細砂多量	
3486	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	8.9		2.1	ロクロ	〃	100	〃	
3487	66 1池2層（ⅣB7a）	〃	8.6		1.5	〃	〃	90	〃	

第150図　C地区のかわらけ⑨



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
3488	66 1池1層（ⅣB8a）	rd	8.8	6.0	1.85	ロクロ	回転糸切	50	細砂多量	
3489	66 1池2層（ⅣA8i）	〃	9.8	6.4	1.9	〃	〃	50	砂多量	胎土の砂粒が他に較べて大きい
3490	66 1池1層（ⅣB7a）	Rd00	13.4	6.6	3.75	ロクロ	回転糸切	60	細砂少量	
3491	66 1池2層（ⅣB8a）	〃	15.6	8.0	3.9	ロクロ	ヘラケズリ	40	〃	底面、底辺部にヘラケズリ
3492	66 1池1層（ⅣB8a）	Rd22	13.4	8.1	3.6	ロクロ	回転糸切	70	〃	口縁部内外面に油煙付着
3493	66 1池2層（ⅣB6a）	〃	14.6	8.6	4.25	ロクロ	〃	70	〃	内面に油煙付着
3494	66 1池1層（ⅣB7a）	Rd03	13.0	7.2	3.5	〃	〃	70	〃	
3495	66 1池1層（ⅣB8a）	Rd04	14.2	8.4	3.1	〃	〃	50	〃	
3496	66 1池2層（ⅣB6a）	Rd23	13.1	7.5	4.2	〃	〃	70	〃	
3497	66 1池1層（ⅣB8a）	〃	14.0	7.3	3.3	〃	〃	80	〃	
3498	66 1池1層（ⅣB7a）	—	—	5.0	—	指？	—	40	〃	手づくね　かわらけの胎土
3499	66 1池2層（ⅣB6a）	—	—	—	—	〃	—	30	〃	〃
3500	66 1池1層（ⅣB8a）	—	—	8.1	—	—	—	10	〃	〃

第151図　C地区のかわらけ⑩

4　国産陶器（第152～165図、写真図版164～173）

（1）常滑産陶器（第152～154図、写真図版164～166）

本調査区から出土した常滑産陶器は中野・赤羽生産地編年の2型式と3型式に相当するものが出土している。だが破片資料を2形式と3形式に分けるのは分類するのはかなり難しく。どちらに分類されるのか不明なものがほとんどである。

図示したのは片口鉢10点、山茶碗1点、広口壺7点、広口壺以外の壺2点、広口瓶？2点、甕14点である。他に不掲載の常滑産陶器片が105片出土している。

3501～3503の片口鉢は口縁部形態から2型式に相当すると思われる。3501は内底面がかなり磨耗している。3503は内面の磨耗がほとんどない。3504は高台部の形態から2型式に相当すると思われる。内面がかなり磨耗している。3505～3506は口縁部形態から3型式に相当すると思われる。3505は片口部の屈曲がわずかに始まる部位の破片である。3507の外面には重ね焼きの際に他個体の破片が窯着している。3508は器厚が厚い個体である。内面はかなり磨耗している。3526は口縁部形態から2型式に、3527は3型式に相当する。

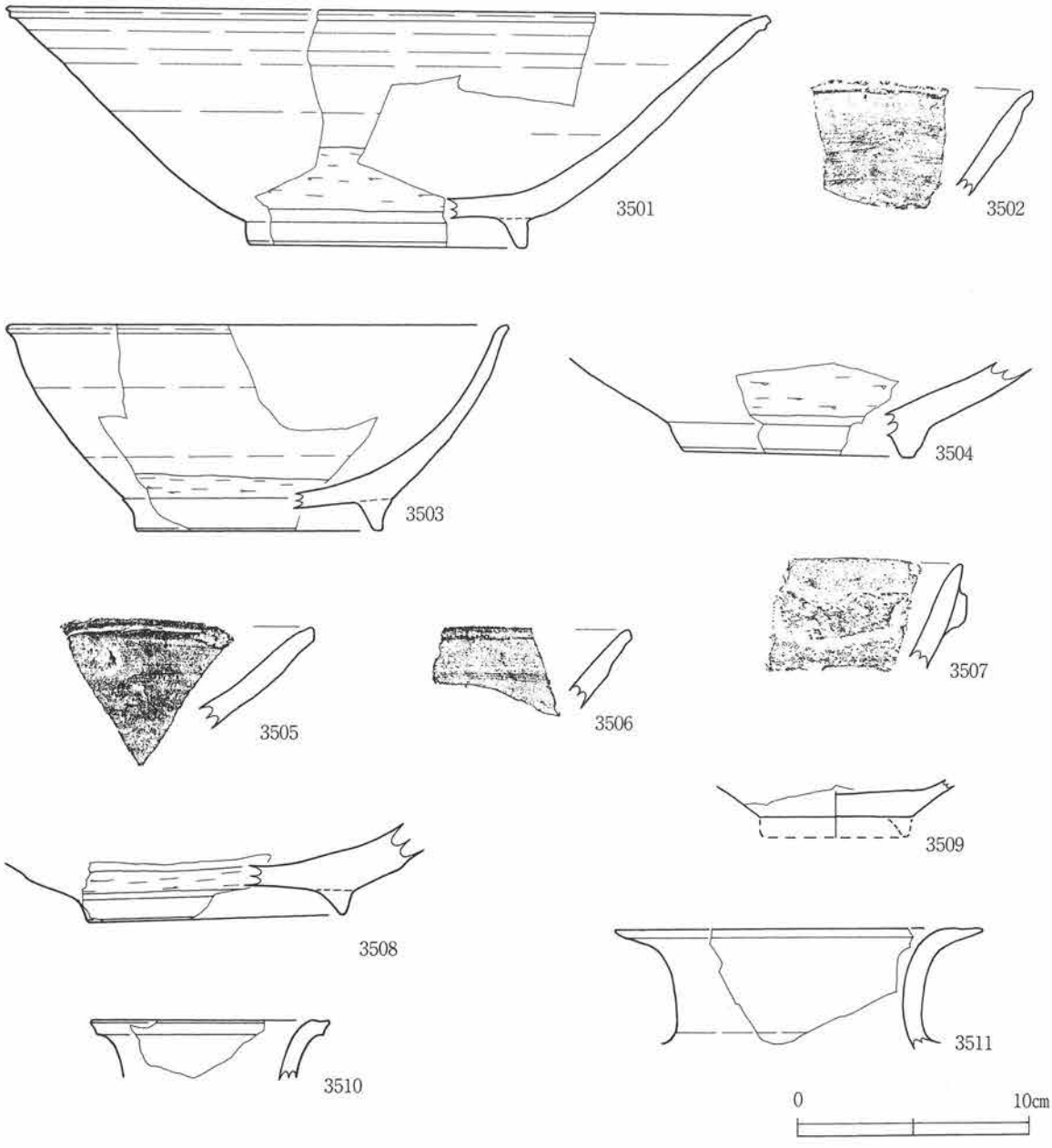
3509の山茶碗は常滑産か渥美産かはっきりしないが、ここでは一応常滑産としておく。高台部が剥離している。外底面に糸切りなどの切離し痕はみられない。

3510は三筋壺の口縁部と考えられる。内外面に自然釉がかかっている。3511は口径が小さく、広口壺ではなく広口瓶の口縁部の可能性がある。2型式相当する。

3512は底部の破片であるが、底径と体部の立ち上がり角度から広口壺と考えられる。底面には砂が付着する。3513は体部が直線的に立ち上がり。広口瓶の体部と考えられる。おそらく2型式に相当する。3514と3515は広口壺の破片である。おそらく同一個体と推測される。3514はⅢB区の道路状遺構の道路側溝74SD4、74SD6から出土した破片と接合した。約45m離れた破片が接合したことになる。図示しているのは接合していない状態の破片である。口縁部が欠損しているためはっきりしないが体部の形態から2型式に相当すると推測される。

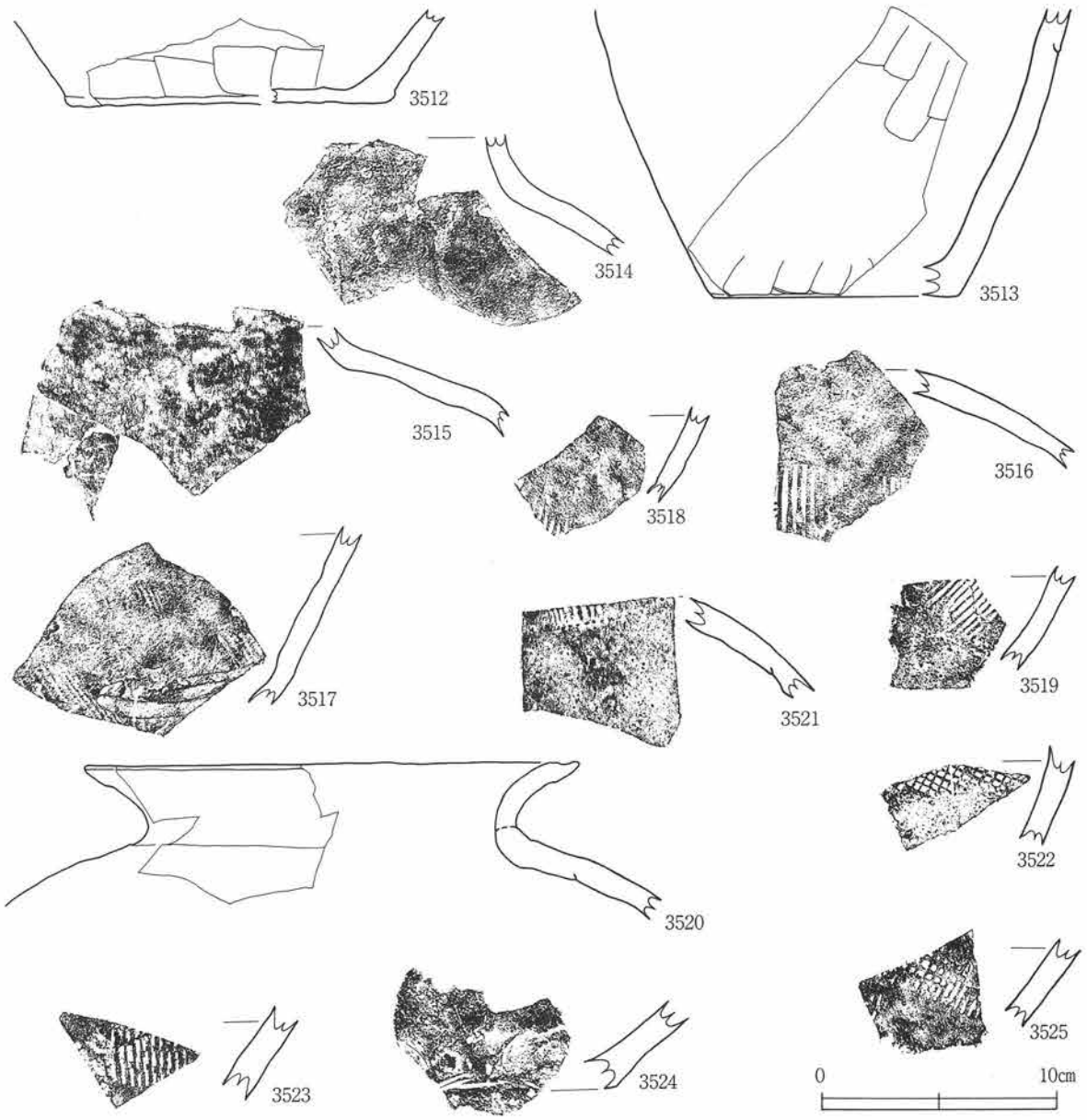
3528は三筋壺の口縁部と考えられる。3532は押印がみとめられず広口壺の体部破片と考えられる。3534、3535は広口壺の体部破片であるが、3514、3515と同一個体と思われる。

3516～3519、3521～3525は甕の破片であるが、特徴のある部位がなく、2型式と3型式に分けることができない。3530は甕の頸～肩部破片である。肩部に線刻が施されている。3531は口唇部が欠損している口縁部破片である。口縁端部近くが下方に引き出されており特異な形状である。3533は甕の底辺部破片と考えられる。3536は薄手の破片で2型式に相当する可能性が高いがはっきりしない。断面の胎土は赤褐色を呈する。



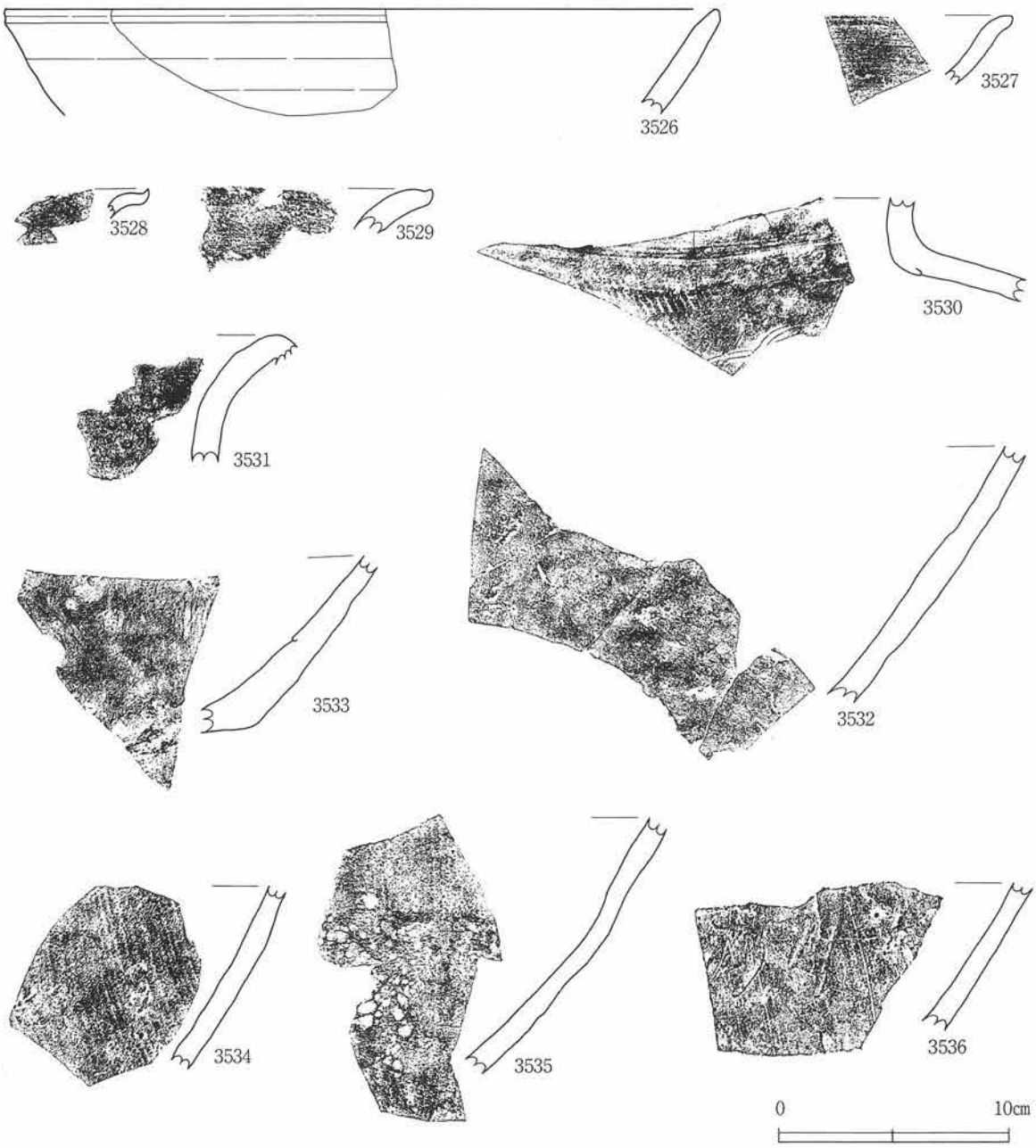
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3501	常滑	片口鉢	完存	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	２型式	灰白	口唇部に面取りあり
3502	〃	〃	口	〃	〃	褐灰	〃
3503	〃	〃	完存	46低地覆土(ⅣB6a)	〃	灰白	〃
3504	〃	〃	体下～底	46ＳＤ16埋土(東流部)	〃	灰黄	
3505	〃	〃	口縁	46ＳＤ16埋土(ⅣB9b)	３型式？	灰黄褐	口唇部に面取りあり
3506	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB0b)	３型式	灰褐	〃
3507	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB0b)	〃	ｵﾘｰﾌﾞ灰(上) 褐灰(下)	窯体付着
3508	〃	〃	体下～底	46ＳＤ16埋土(ⅤB0b)	２～３型式	灰白	
3509	〃	山茶碗	〃	46低地覆土(ⅣB7a)	〃	〃	高台部欠損
3510	〃	壺	口縁	46ＳＤ16埋土(ⅤB0b)	〃	灰オリーブ	三筋壺か
3511	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB6b)	〃	黒褐	

第152図　Ｃ地区の常滑産陶器①



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3512	常滑	甕	底	46ＳＤ17埋土(ⅢB7d)	2～3型式	灰色	
3513	〃	〃	体下～底	46低地覆土(ⅣB7b)	2型式	褐灰色	
3514	〃	〃	肩	ⅣB4a表土	〃	灰オリーブ色	66　1池1層（ⅣＢ８ａ）出土片と接合
3515	〃	〃	肩	46ＳＤ16埋土	〃	灰オリーブ色	
3516	〃	〃	肩	46ＳＤ16埋土(ⅤB0b)		灰白色	
3517	〃	〃	体下	46ＳＤ16埋土(ⅣB7b北)		褐色	
3518	〃	〃	体下	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)		褐灰色	
3519	〃	〃	体下	46ＳＤ17埋土(ⅣB2d)		暗赤褐色	
3520	〃	〃	肩	ⅣB3d表土	2型式	灰オリーブ色	66　1池2層（ⅣＢ７ａ）出土片と接合
3521	〃	〃	口～肩	46ＳＤ16埋土(ⅣB6b)		灰オリーブ色	
3522	〃	〃	体中	46ＳＤ16埋土(ⅣB9b)		暗褐色	
3523	〃	〃	体下	ⅣB5a表土		にぶい橙色	
3524	〃	〃	底辺	46ＳＤ17埋土(ⅣB2d)		灰色	
3525	〃	〃	体下	46ＳＤ17埋土(ⅣB4b)		にぶい橙色	

第153図　Ｃ地区の常滑産陶器②



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3526	常滑	片口鉢	口	66　1池1層(ⅣB8j)	2型式	灰色	口唇部に面取りあり
3527	〃	〃	口	66　1池1層(ⅣB6a)	3型式？	灰色	口唇部外反
3528	〃	壺	〃	66　1池1層(ⅣB6a)		灰オリーブ色	三筋壺か
3529	〃	甕	〃	66　1池1層(ⅣB8a)		暗赤褐色	内面自然釉
3530	〃	〃	肩	66　1池1層(ⅣB7a)	3型式？	灰褐色	肩部に線刻あり
3531	〃	〃	首	66　1池1層(ⅣB6a)		暗褐色	
3532	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB6a)		灰色	
3533	〃	〃	底辺	66　1池1層(ⅣB6a)		暗褐色	内面自然釉
3534	〃	〃	体下	66ＳＫ1埋土	2型式？	灰黄褐色	3535と同一個体か　工具の木目がみられる
3535	〃	〃	体下	〃	2型式？	黒褐色	
3536	〃	〃	体下	66ＳＫ2埋土	2型式？	灰黄褐色	

第154図　Ｃ地区の常滑産陶器③

（2）渥美産陶器（第155～163図、写真図版166～172）

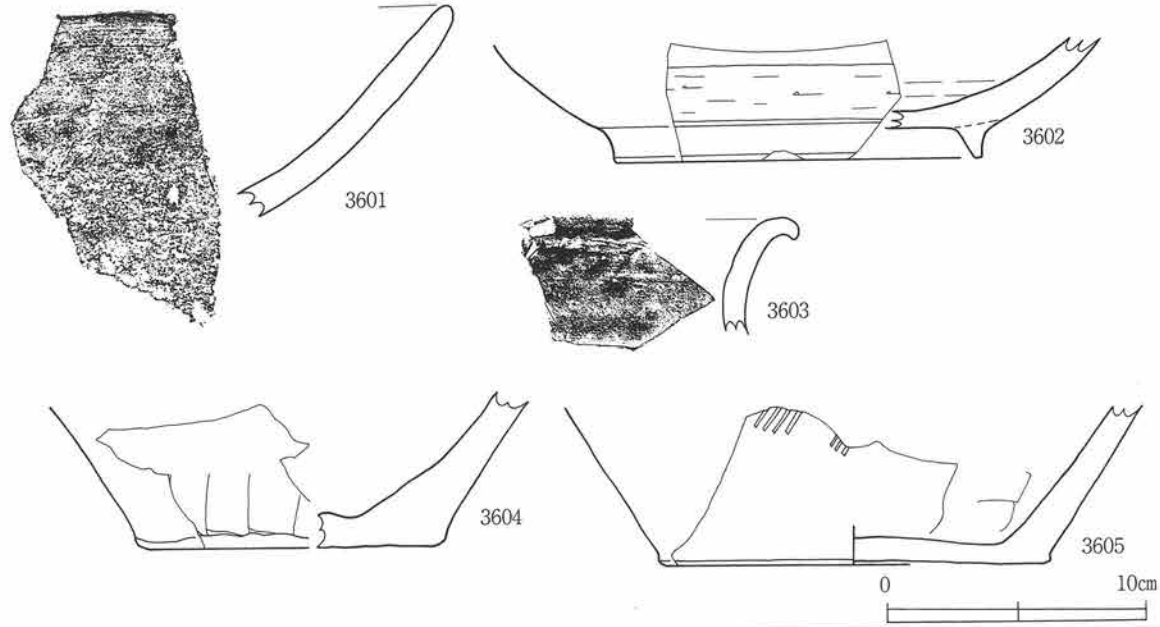
本調査区出土の渥美産陶器で図示したのは、山茶碗4点、片口鉢4点、壺10点、甕53点である。他に不掲載の渥美産陶器片が81片出土している。

3646～3649は山茶碗である。3646～3648は口縁部破片で外面の口唇下が凹んでいる。3647は口縁部に捻りが入っている部分があり、輪花になっていることがわかる。3648は底部破片であるが、外底面に回転糸切痕がある。口縁の内外面に釉がかかる。

3601、3602、3650、3651は片口鉢である。3601、3602は体部下半にヘラケズリが施されているが、胎土から渥美産陶器と考えた。3601の内面は磨耗しておりツルツルしている。3650、3651の高台部の断面形は四角形である。どちらの内面も磨耗している。

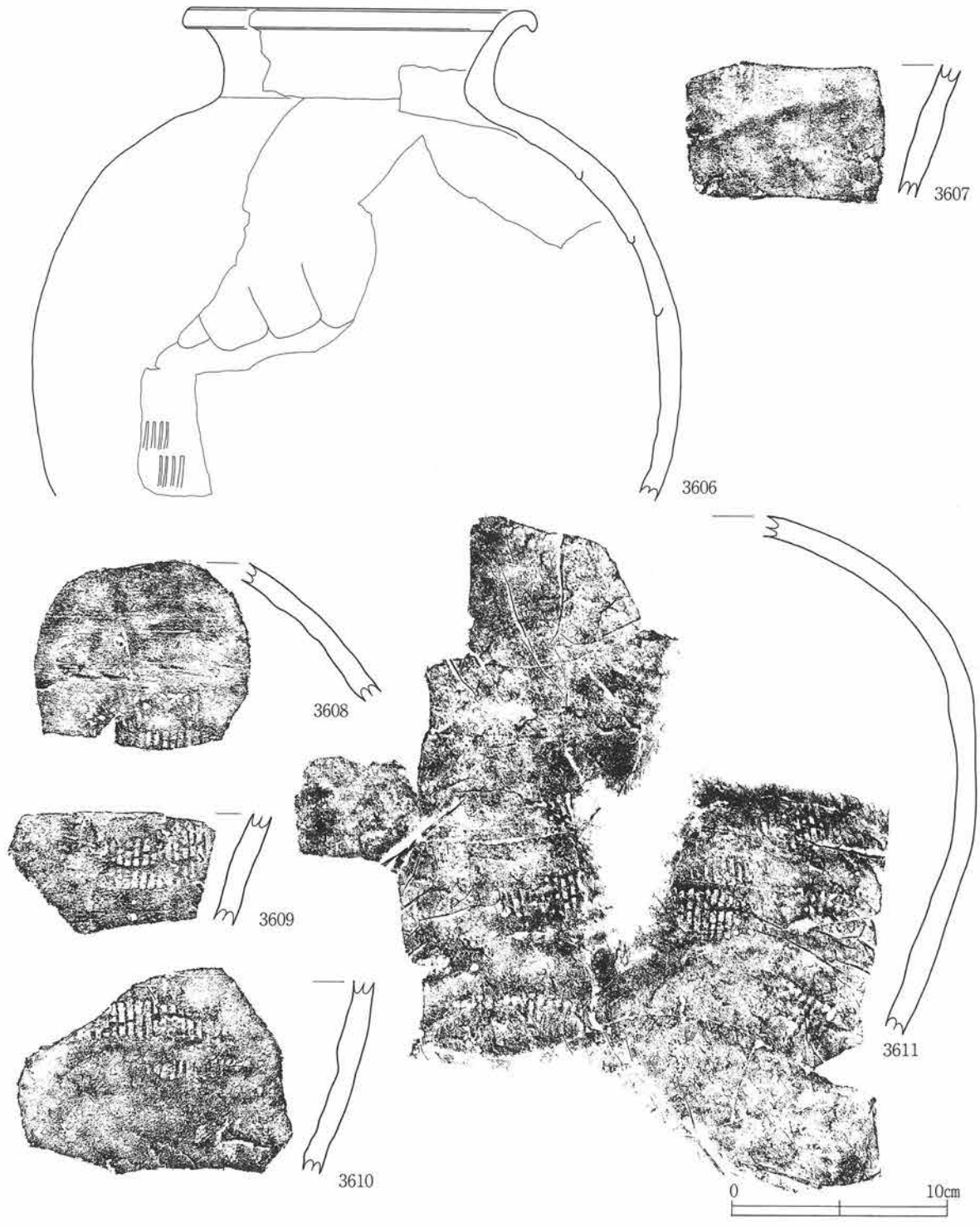
3603は壺の口縁部破片である。頸部がやや外反する広口壺と考えられる。3604、3605は底径と体部の立ち上がり角度から壺と考えられる。3605には押印が施されている。3606～3616は同一個体の壺である。口縁部はやや外傾し、口唇部は折り返えされる。体部の中央から下半には押印が施される。3668は壺の肩付近の体部破片である。外面には自然釉がかかり、一部分に窯体が付着している。外面の器肌が猿投産陶器の感じに似ているが、胎土からここでは渥美産陶器とした。

3612～3615の甕は同一個体である。いずれの破片も外面にオリーブ色の自然釉がかかっている。内面には部分的に煤？が付着している。3616、3617は同一個体で外面に刷毛塗りの灰釉が施されている。3631は甕の肩部破片であるが刷毛塗りの灰釉が施されている。3652～3657は甕で同一個体である。3652は頸部の破片である。残念ながら口縁部を欠くため、口縁の開き具合がはっきりしない。3658は外面に土師器のハケメ調整に似る調整が施されている。3670は甕の頸部破片である。頸部が直立気味で、古い様相を呈しており、12世紀前半の可能性がある。



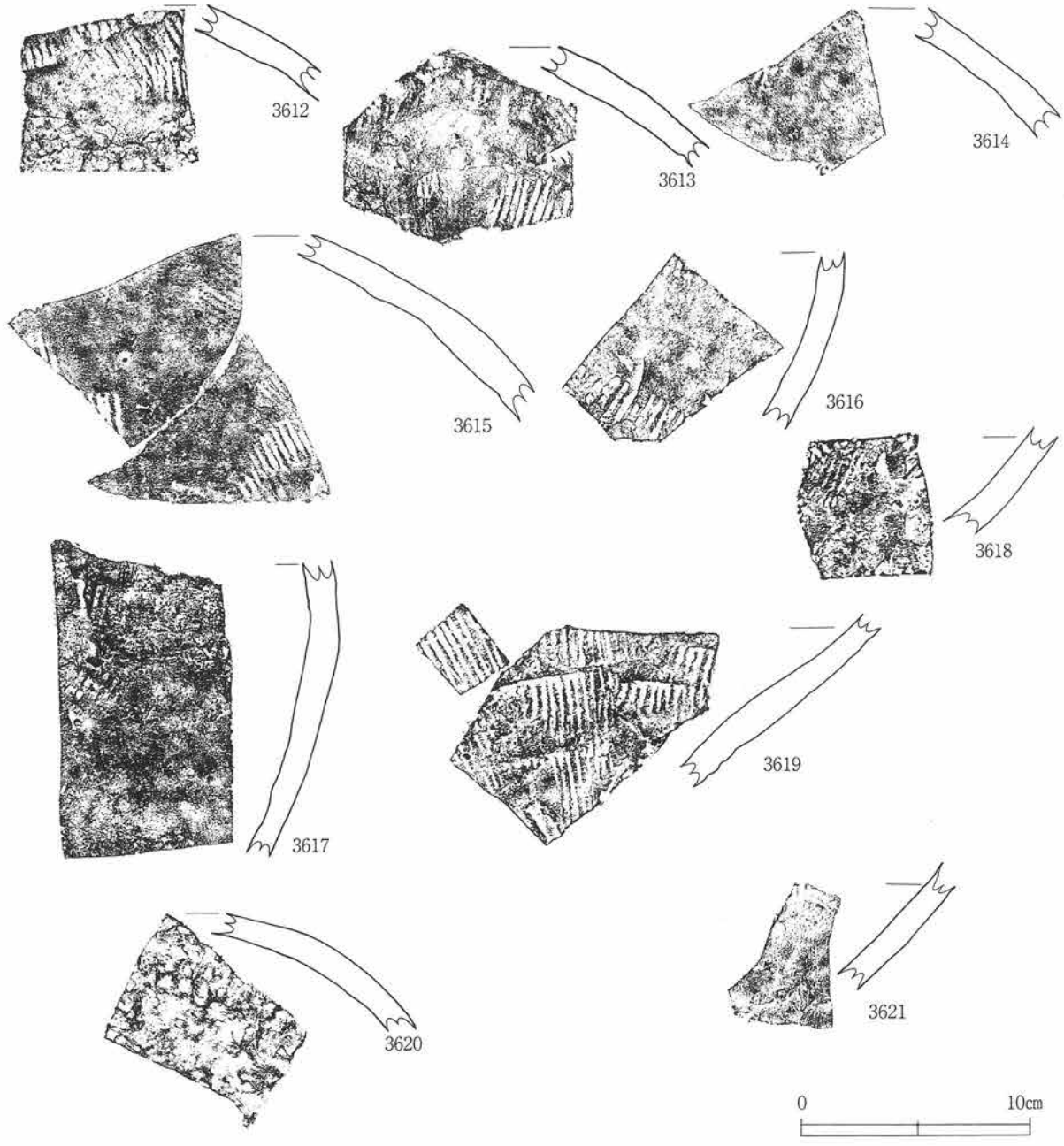
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3601	渥美	片口鉢	口	46SD16埋土(NB7b)	12C	褐灰	
3602	〃	〃	体下～底	46SD16埋土(NB9b)	〃	灰	
3603	〃	壺	口	46SD16埋土(VB0b)	〃	暗灰	
3604	〃	〃	体下～底	46SD16埋土(NB4b)	〃	黒褐	
3605	〃	〃	〃	46低地覆土(NB6c)	〃	〃	

第155図　C地区の渥美産陶器①



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3606	渥美	壺	口～体	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	12C	黒褐	3606～3611は同一個体
3607	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	〃	褐灰色	
3608	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
3609	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB6b)	〃	灰	
3610	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	〃	黒褐	
3611	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	〃	〃	46ＳＤ17埋土（ⅣＢ２ｄ）出土片が接合

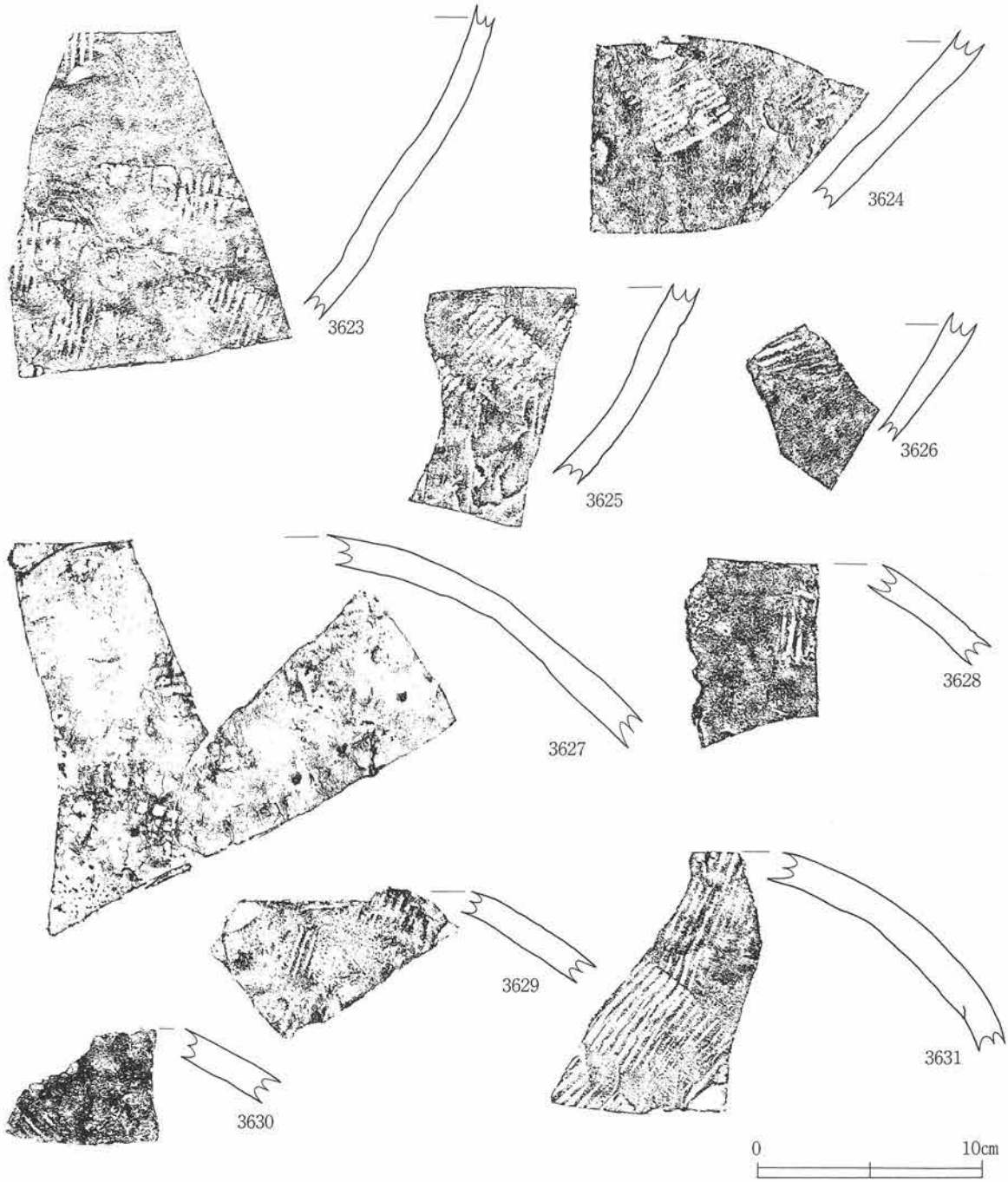
第156図　Ｃ地区の渥美産陶器②



（3622は欠番）

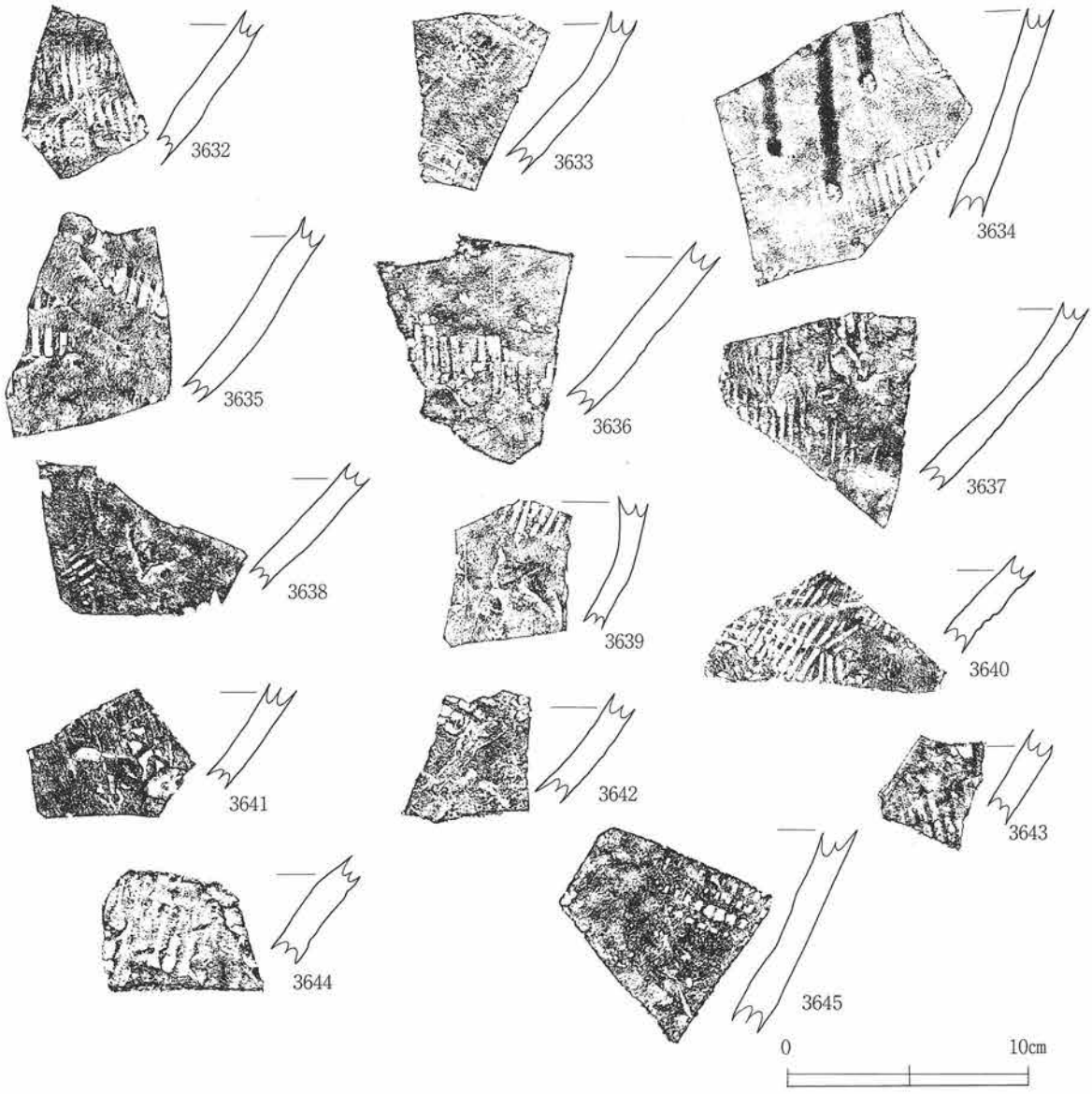
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3612	渥美	甕	体上	46低地覆土(ⅣB7a)	12C	黄褐色	3612～3615同一個体
3613	〃	〃	〃	46低地覆土(ⅣB6c)	〃	〃	
3614	〃	〃	〃	661池1層(ⅣB6a)	〃	〃	
3615	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土	〃	〃	66　1池2層（ⅣＢ７ａ）出土片と接合
3616	〃	〃	体中	46ＳＤ16埋土(ⅣB7b)北	〃	灰褐色	
3617	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣB2c)	〃	〃	
3618	〃	〃	体下	46ＳＤ16埋土(ⅣB8b)	〃	灰白色	
3619	〃	〃	体下	46低地覆土(ⅣB8b)	〃	にぶい黄橙色	
3620	〃	〃	肩	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	〃	灰色	
3621	〃	〃	体下	46ＳＫ31埋土	〃	灰黄褐	

第157図　Ｃ地区の渥美産陶器③



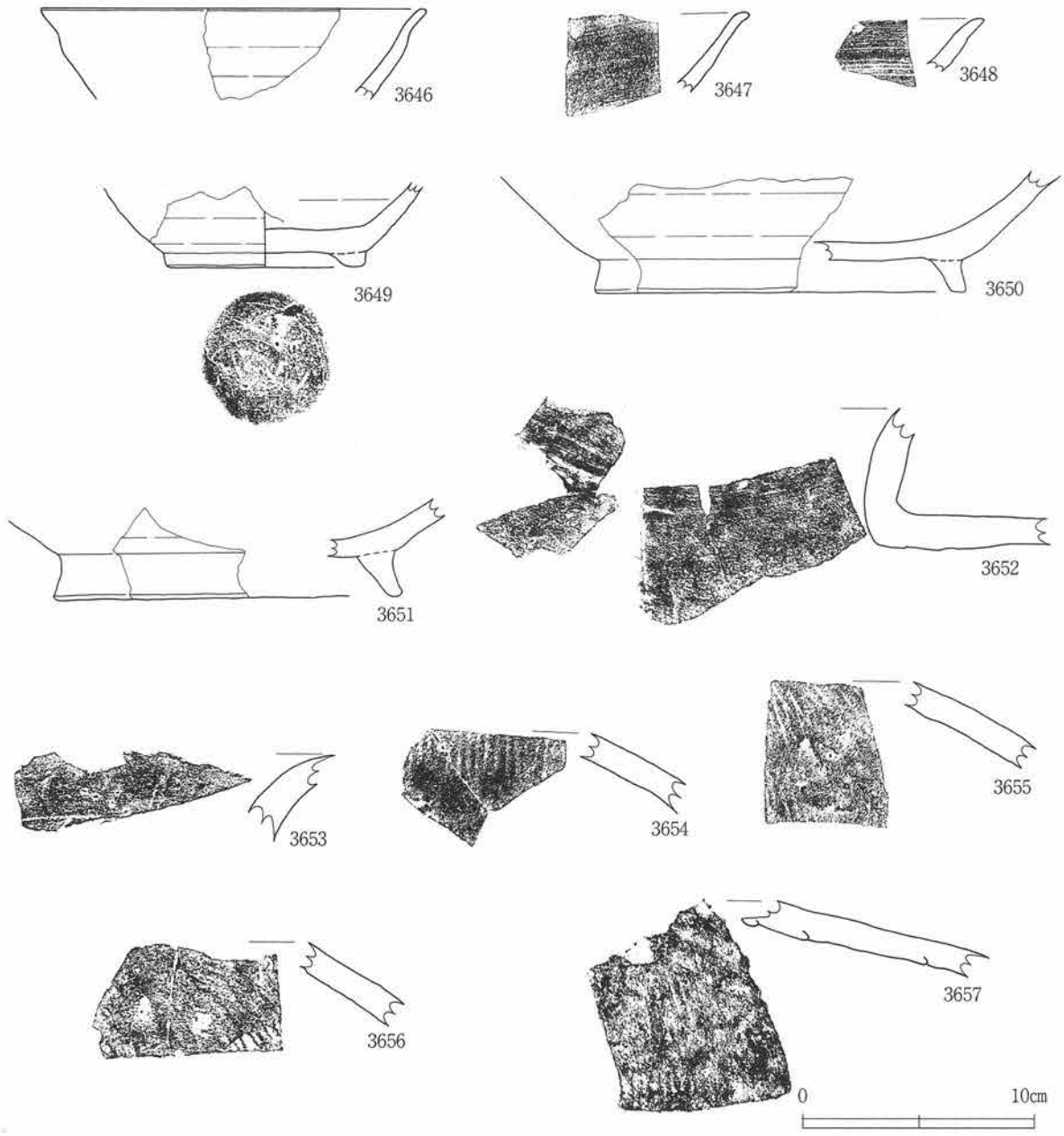
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3623	渥美	甕	体下	46低地覆土(ⅣB6c)	12C	褐灰	
3624	〃	〃	体下	46SD16埋土(ⅣB8b)	〃	灰	
3625	〃	〃	体下	46SD16埋土	〃	灰褐	
3626	〃	〃	体下	46低地1層(ⅣB7a)	〃	灰	
3627	〃	〃	体上	〃	〃	灰オリーブ	
3628	〃	〃	〃	46SD16埋土(ⅣB5b)	〃	灰	
3629	〃	〃	肩	46SD16埋土(ⅤB0b)	〃	灰オリーブ	
3630	〃	〃	肩	46低地覆土(ⅣB8a)	〃	暗オリーブ	
3631	〃	〃	肩	46SD16埋土(ⅣB3c)	〃	浅黄	

第158図　C地区の渥美産陶器④



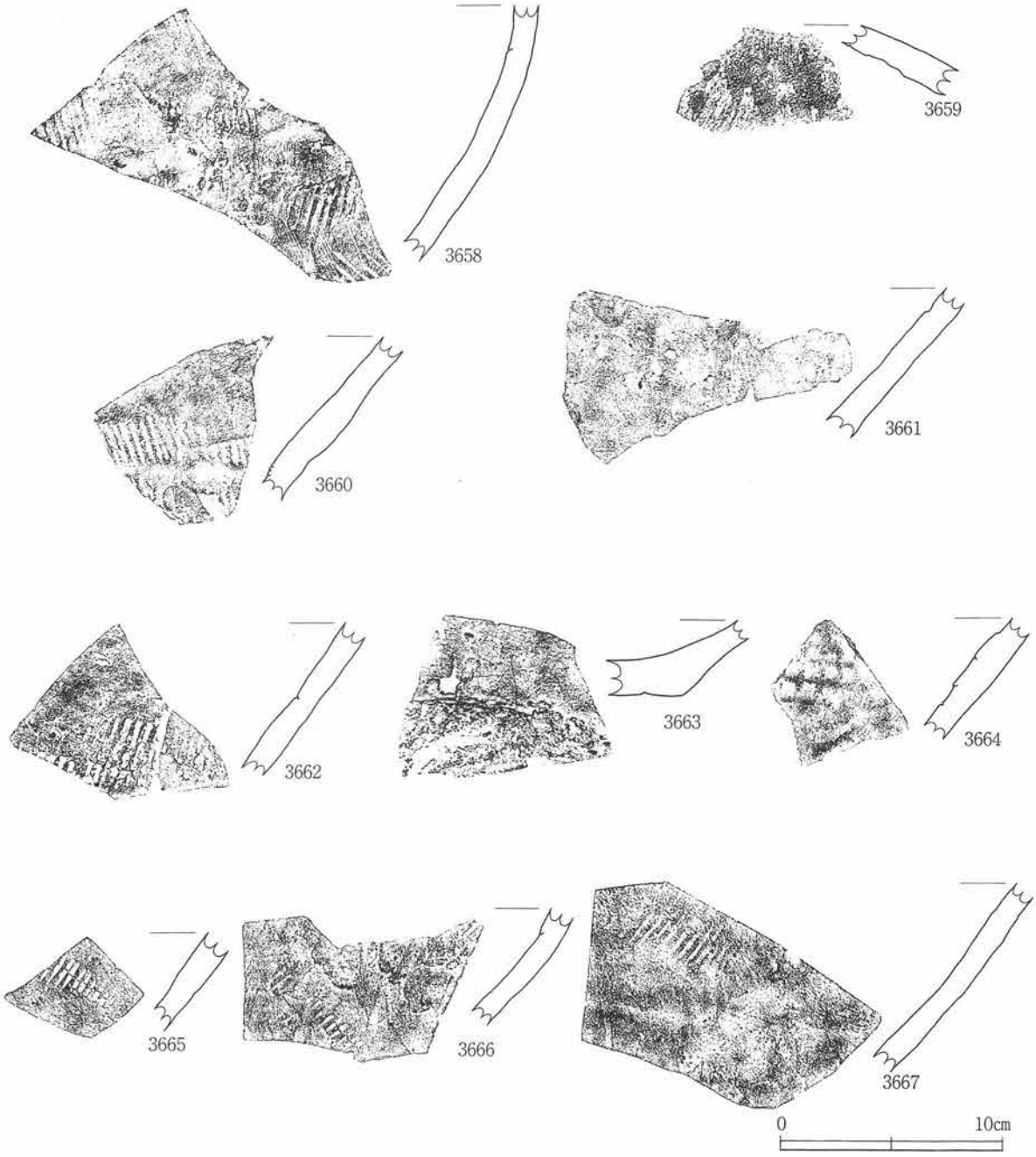
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3632	渥美	甕	体下	46ＳＤ16埋土(ⅣＢ7ｂ)	12Ｃ	褐灰	
3633	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣＢ7ｃ)	〃	〃	
3634	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣＢ7ｂ)	〃	黒	
3635	〃	〃	〃	46低地覆土(ⅣＢ6ａ)	〃	黒褐	
3636	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰	3675と同一個体
3637	〃	〃	〃	46低地1層(ⅣＢ7ｂ)	〃	〃	
3638	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣＢ4ｂ)	〃	灰白	
3639	〃	〃	〃	46ＳＫ21埋土	〃	灰黄	
3640	〃	〃	〃	46ＳＤ17埋土	〃	灰褐	
3641	〃	〃	〃	ⅣＢ3ａ表土	〃	褐灰	
3642	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(東流部)	〃	灰黄褐	
3643	〃	〃	〃	46低地覆土(ⅣＢ6ａ)	〃	〃	
3644	〃	〃	〃	46低地覆土(ⅣＢ6ｃ)	〃	灰	
3645	〃	〃	〃	46ＳＤ16埋土(ⅤＢ0ｂ)	〃	褐灰	

第159図　Ｃ地区の渥美産陶器⑤



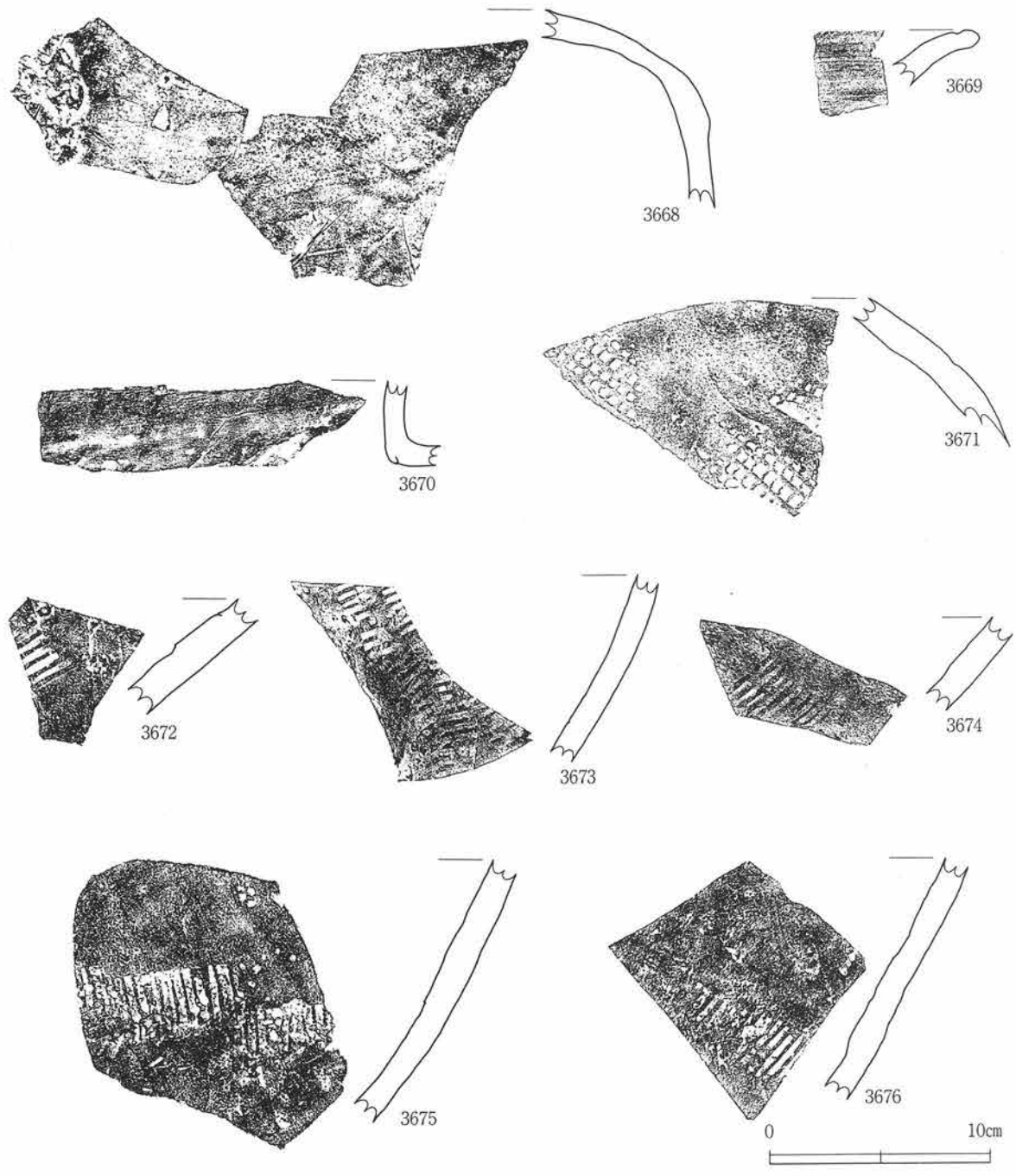
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3646	渥美	山茶碗	口縁	66　1池1層(ⅣB6a)	12C	灰色	
3647	〃	〃	〃	661池2a層(ⅣB7a)	〃	灰色	
3648	〃	〃	〃	66　1池2層(ⅣA7j)	〃	褐灰色	
3649	〃	〃	体下～底	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	黄灰色	底面回転糸切
3650	〃	片口鉢	〃	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	灰色	内面磨耗
3651	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	灰色	
3652	〃	甕	頸～肩	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	黄灰色	46低地1層（ⅣB7a）出土片と接合
3653	〃	〃	首	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	3652～3657同一個体
3654	〃	〃	肩	66　1池1層(ⅣB8a)	〃	灰オリーブ色	46低地1層（ⅣB7a）出土片と接合
3655	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰オリーブ色	
3656	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰オリーブ色	
3657	〃	〃	〃	46低地1層(ⅣB7a)	〃	灰オリーブ色	

第160図　C地区の渥美産陶器⑥



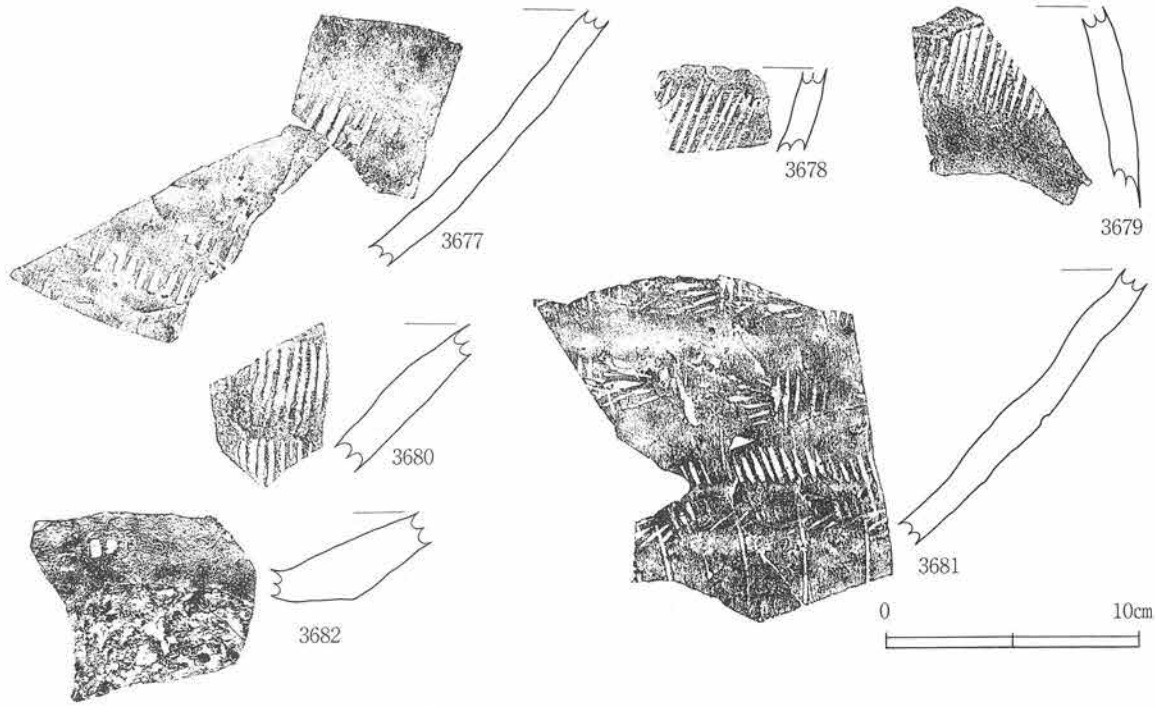
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3658	渥美	甕	体中	66　1池1層(ⅣB8a)	12C	灰色	46低地1層（ⅣB7a）出土片と接合
3659	〃	〃	体上	66　1池1層(ⅣB8a)	〃	オリーブ灰色	外面自然釉
3660	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	
3661	〃	〃	体下	ⅣB4a表土	〃	灰白色	
3662	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰黄色	内面灰かぶり
3663	〃	〃	底	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	暗灰色	内面自然釉
3664	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB8a)	〃	オリーブ灰色	外面自然釉
3665	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	3666と同一個体
3666	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	
3667	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB8a)	〃	暗灰色	

第161図　C地区の渥美産陶器⑦



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3668	渥美	壺	体上	66　1池1層(ⅣB6a)	12C	灰オリーブ色	外面に窯体付着
3669	〃	甕	口	ⅣB6a表土	〃	暗灰色	内面自然釉
3670	〃	〃	頸	66　1池1層(ⅣA8i)	〃	灰色	
3671	〃	〃	体上	66　1池1層(ⅣB8a)	〃	灰色	外面一部灰かぶり
3672	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	灰色	
3673	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	
3674	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	
3675	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	
3676	〃	〃	〃	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	灰黄色	

第162図　C地区の渥美産陶器⑧



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3677	渥美	甕	体下	66　1池1層(ⅣB6a)	12C	暗灰色	
3678	〃	〃	体中	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰色	
3679	〃	〃	体中	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	褐灰色	
3680	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	灰白色	内面灰かぶり
3681	〃	〃	体下	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	灰褐色	46ＳＤ16埋土（ⅣＢ７ｂ）出土片と接合
3682	〃	〃	底	66　1池2層(ⅣB7a)	〃	灰色	内面灰かぶり

第163図　Ｃ地区の渥美産陶器⑨

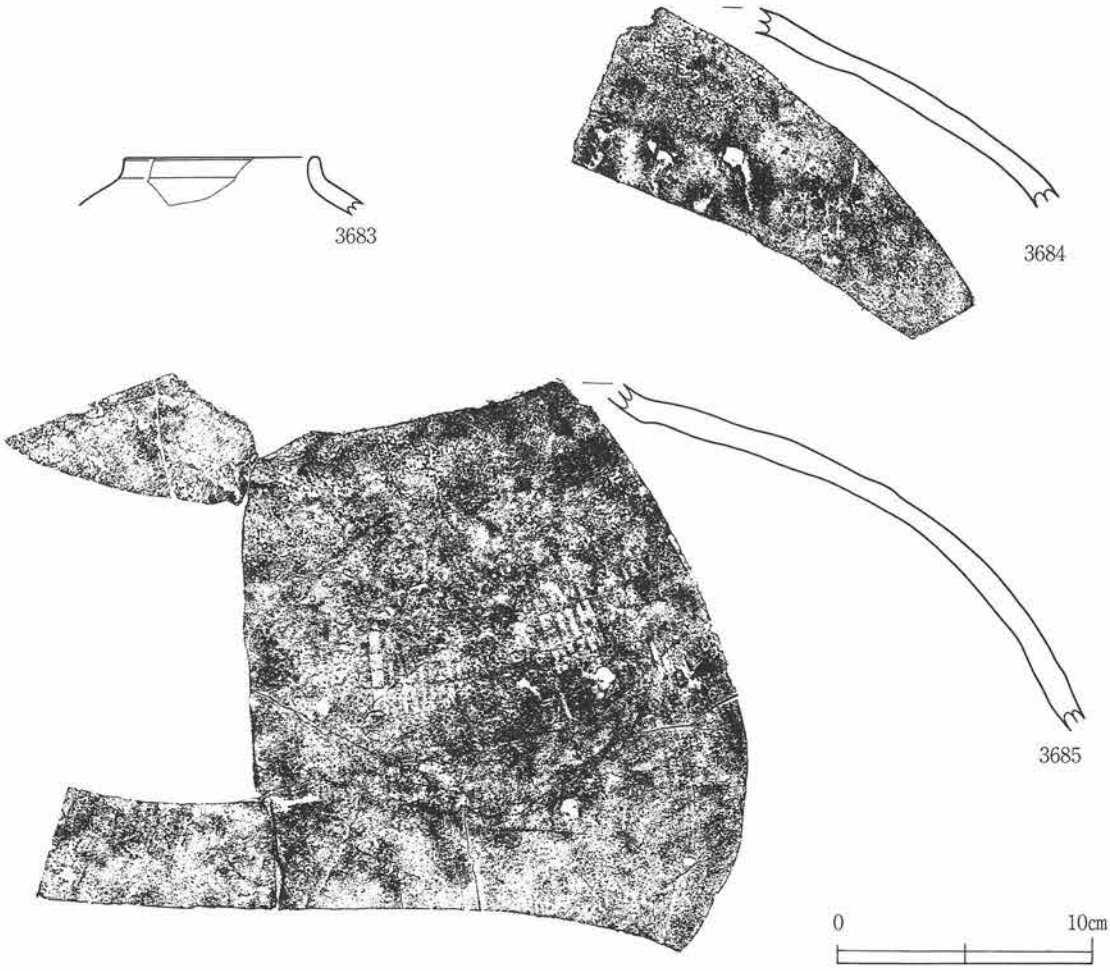
（３）猿投産陶器（第164図、写真図版172・173）

胎土が常滑、渥美産陶器と異なり、猿投産陶器と思われるものが３点ある。12世紀段階の猿投産陶器の実態は明らかではなく、これらが確実に猿投産陶器か否かははっきりは言える段階ではないことは承知であるがその可能性が高いものとして示しておく。3863は短頸壺の口縁部である。胎土は灰色で緻密である。外面にはオリーブ色の自然釉が付着する。3684、3685は甕の破片で同一個体である。胎土は黄灰色で緻密である。外面には押印が横位に帯状に施され、オリーブ色の自然釉がかかる。なお3684、3685と同一個体の破片（接合はしない）がⅢＢ区から多数（2361～2375）出土している。

（４）須恵器系陶器（第165図、写真図版173）

片口鉢が２点、壺が５点、甕２点を図示した。不掲載の破片が12片あるが、掲載したものと同一個体の破片が多い。

3686は底部から口縁部まで接合した。外底面には回転糸切痕がある。口縁部の断面が角型をしている。内底面は僅かに磨耗している。断面の胎土は灰色で緻密である。3687は片口鉢の口縁部破片である。片口部の破片で口縁部が捻ってある。口縁部の断面形は3686と同様に角型をしている。胎土も共通しており同一個体の可能性もある。



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3683	猿投	短頸壺	口～肩	46低地1層(ⅣB6b)	12C	灰白	
3684	〃	甕	体上	46SD16埋土(ⅣB3c)	〃	灰オリーブ	3685と同一個体か
3685	〃	〃	肩	46SD16埋土(ⅣB9b)	〃	〃	46SK27埋土出土片と接合

第164図　C地区の猿投産陶器

3688は壺の底部破片である。外底面が剥離しており観察できない。胎土は灰色で砂粒混じりで硬い。3689はやや厚手の破片であるが壺の下半部の破片と思われる。胎土は灰色で緻密である。

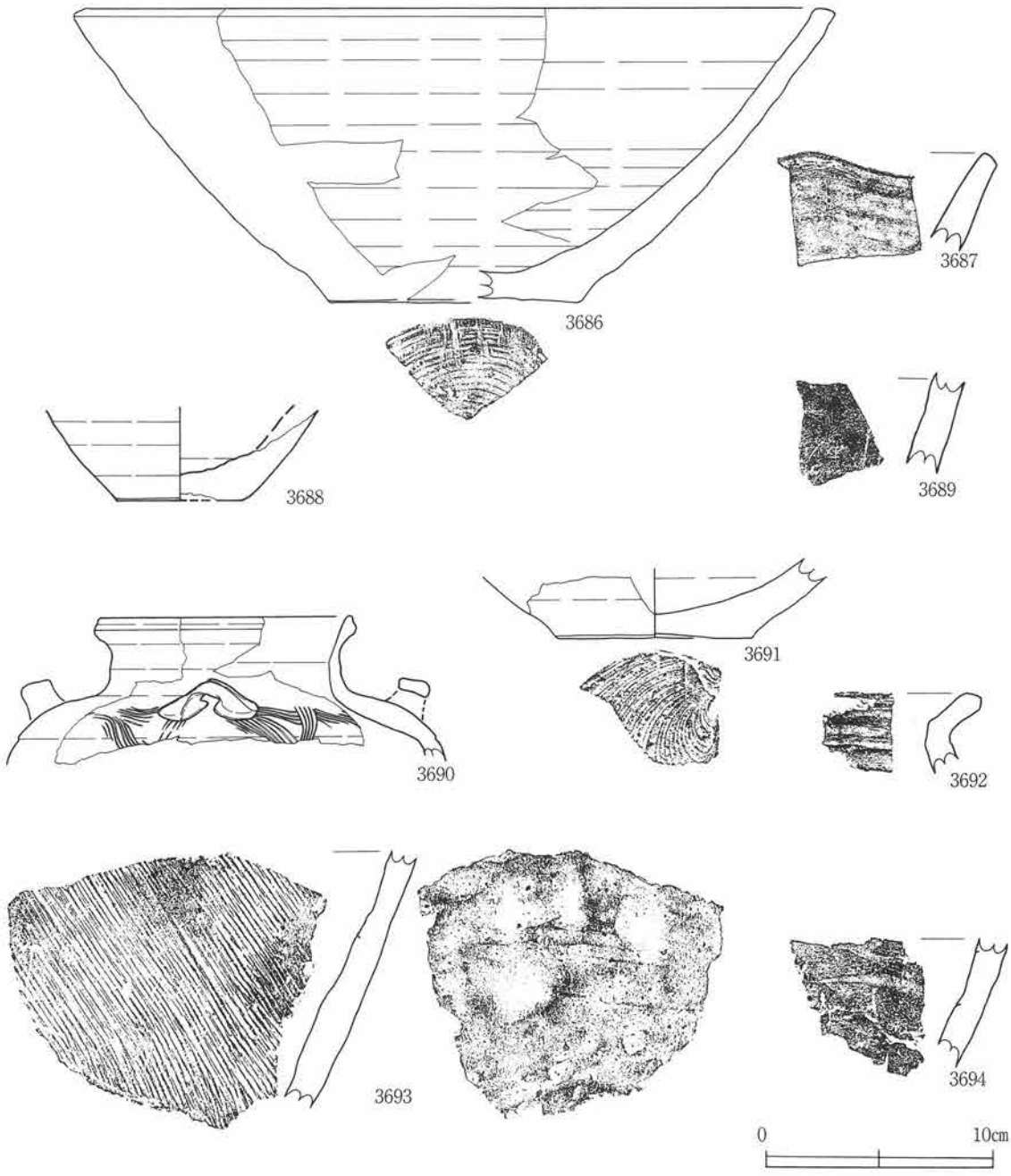
3690は波状文四耳壺の口縁～肩部の破片である。胎土は暗灰色で緻密である。耳は横耳で残存しているのは１単位のみである。肩部に櫛状の工具により波状文が施文されている。

3691は内底面に凹凸があり片口鉢ではなく壺の底部と考えられる。胎土は灰色で硬い。外底面には回転糸切痕がある。

3692は甕の口縁部である。断面の胎土は内側が茶褐色、外側が灰色とサンドイッチ状になっている。

3693は甕の体部破片である。外面にはタタキ目、内面にはアテ具痕がある。湾曲がほとんどなく、かなり大形の個体と考えられる。

3694は壺の破片である。胎土が渥美産陶器に似た感じもあり、須恵器系陶器でない可能性もある。



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
3686	須恵器系	片口鉢	完存	46ＳＤ16埋土(ⅣＢ9ｂ)	12Ｃ	灰色	ＶＢ４ａ表土出土片と接合
3687	〃	〃	口	46低地1層(ⅣＢ6ｂ)	〃	暗灰色	
3688	〃	壺	体下～底	46低地1層(ⅣＢ6ａ)	〃	灰色	底面剥離
3689	〃	壺？	体下	〃	〃	暗灰色	
3690	〃	四耳壺	口～肩	66　1池1層(ⅣＢ6ａ)	〃	灰色	
3691	〃	壺	体下～底	66　1池2層(ⅣＢ7ａ)	〃	暗灰色	
3692	〃	甕	口	ⅣＢ2ａ表土	〃	暗灰色	
3693	〃	〃	体	ⅣＢ3ａ表土	〃	灰色	
3694	〃	壺？	体下	ⅣＢ9ａ表土	〃	灰色	

第165図　Ｃ地区の須恵器系陶器

5　中国産磁器（第166～168図、写真図版174・175）

本調査区では中国産磁器は白磁31点、青磁３点、青白磁５点の合計39点の出土である。

3701～3719は46次調査での出土である。3701の白磁碗は外面の高台部にまで釉がかかっている。化粧土の有無ははっきりしないが一応Ⅱ類と考えられる。3702は内面の割口上端に沈線がある。高台の形態からⅣ類に分類される。3703は釉がかかっているため、口唇部が丸みを帯びてみえるが、断面をみると口唇部が平らなことがわかる。3706は内面の釉薬を掻き取っている。Ⅷ類に分類される。3707は破片の内面下端に釉を掻き取った部分が僅かにあり、Ⅷ類に分類される。3708ははっきり断定できないが体部が直線的であり一応Ⅳ類に分類した。

3709、3710、3712、3713の白磁壺は化粧土がありⅡ系に分類される。3709、3713は内面無釉である。3712は上部が施釉されているが下部は無釉である。

3711、3714、3715は白磁のⅢ系の壺である。3714はＢ地区の74ＳＤ４出土の破片と接合した。これらの破片は約80m離れて出土している。どちらの破片も２次的に被熱しており、被熱した後に割れている。3714として図示しているのは接合していない状態の破片である。

3716～3718は青白磁である。3717の内面にはヘラと櫛状の工具による文様が施されている。3719は体部と底部の境界ぎりぎりまで施釉されている。

3720～3739は66次調査での出土である。3720、3721、3723～3725は白磁碗である。3720は口縁部の形態からⅣ類に分類される。釉が厚くかけられており、釉むらも著しい。3721は化粧土が施されており、Ⅱ類に分類される。3724は細片のため確証はないが、口縁形態からⅧ２類と推測される。

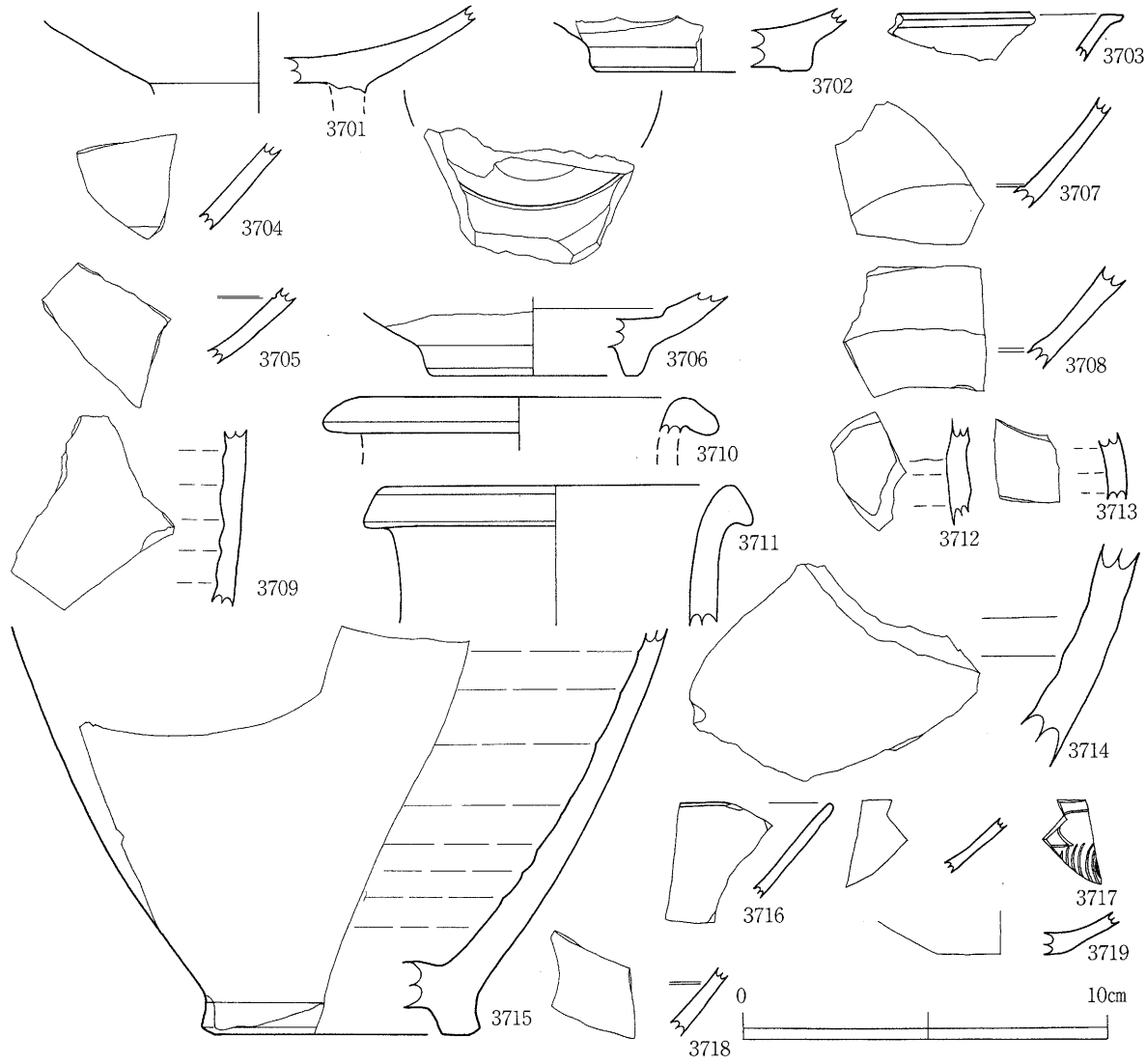
3722、3726は青磁碗である。3722は内外面に櫛状工具による施文がある同安窯系青磁碗のＩ１ｂ類である。3726は龍泉窯系青磁碗のＩ１類である。

3727は白磁Ⅲと考えられる。口縁部形態からⅣ１ａと思われる。

3728～3737はⅢ系の白磁壺である。3730は内面無釉である。3728は3715と同一個体の可能性が高い。3737は２次的に被熱している。

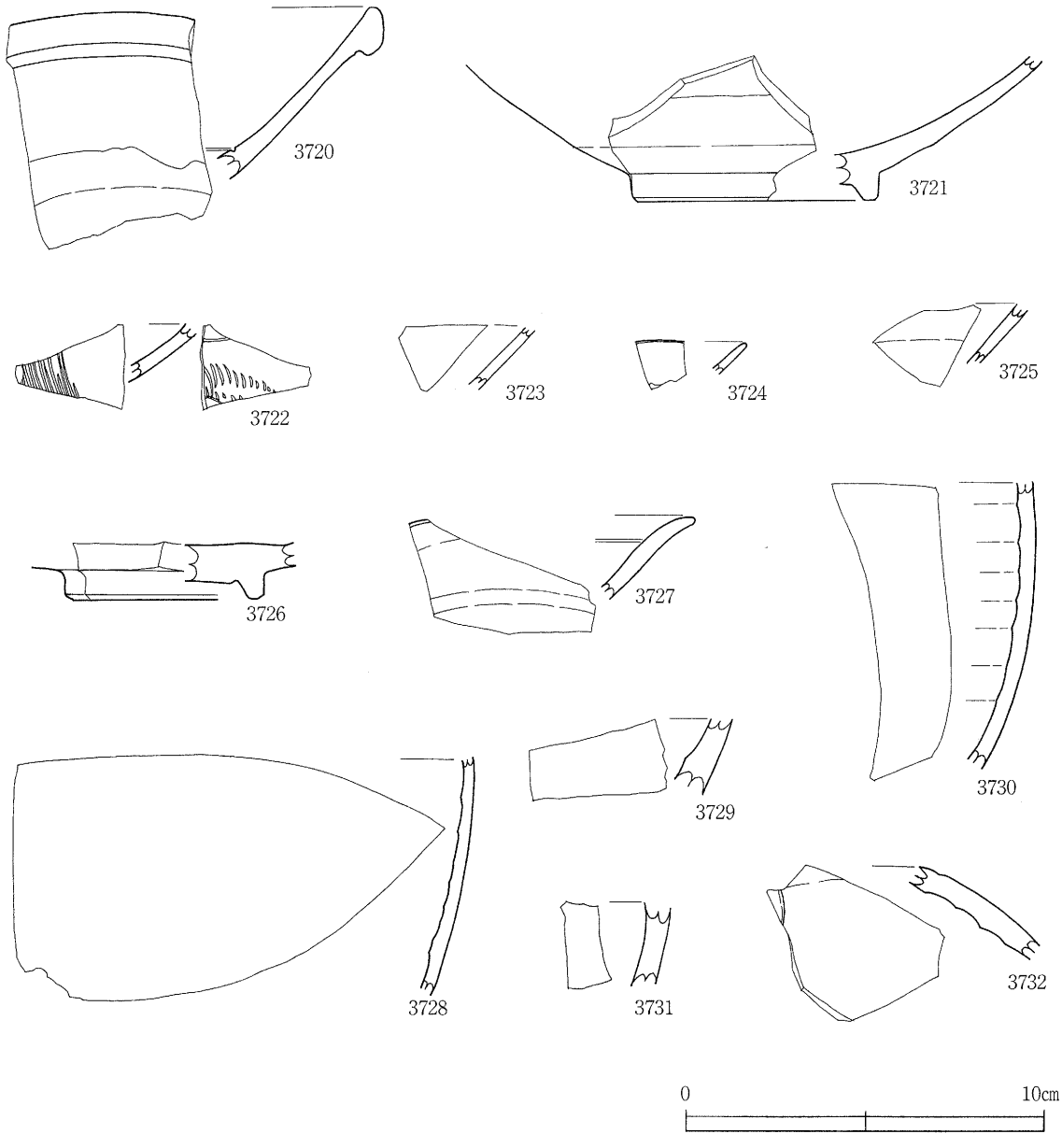
3738は龍泉窯系青磁碗のＩ３類である。内面に櫛状工具による施文がある。

3739は青白磁である。細片のためはっきりしないが合子の蓋と推測される。



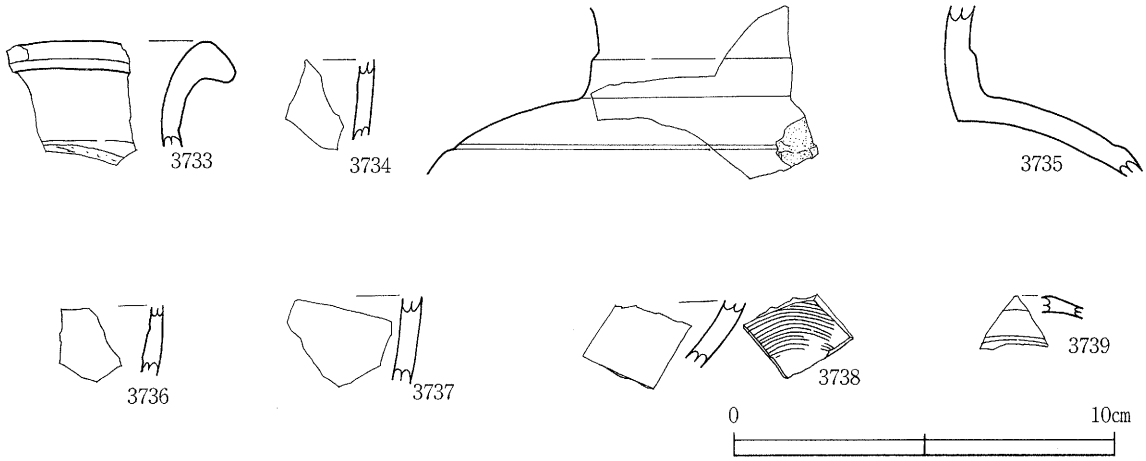
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
3701	白磁	碗	体下	46ＳＤ16埋土(ⅣB7b)	Ⅱ	11C後半12C前半	
3702	〃	〃	底	46低地覆土(ⅣB6c)	Ⅳ１Ａ	12C	
3703	〃	〃	口	ⅣB2b表土	ⅤかⅥかⅦ	〃	
3704	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(東流部)	ⅤかⅥかⅦ	〃	
3705	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(東流部)	ⅤかⅥかⅦ	〃	
3706	〃	〃	底	46低地覆土(ⅣB6c)	Ⅷ２か３	〃	
3707	〃	〃	体	46低地1層(ⅣB7b)	Ⅷ１	〃	
3708	〃	〃	体	46低地1層(ⅣB7a)	Ⅳか	〃	
3709	〃	壺	体	46低地1層(ⅣB7b)	Ⅱ系	11C後半12C前半	
3710	〃	〃	口	46低地1層(ⅣB7a)	Ⅱ系	〃	
3711	〃	〃	口	46ＳＤ17埋土(ⅣB2d)	Ⅲ系	12C	
3712	〃	〃	体	46低地1層(ⅣB6b)	Ⅱ系	11C後半12C前半	
3713	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(ⅣB4b)	Ⅱ系	〃	
3714	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(ⅣB7b)	Ⅲ系	12C	
3715	〃	〃	体～底	66　1池1層(ⅣB6a)	Ⅲ系	〃	46低地１層（ⅣＢ６ｂ）出土片と接合
3716	青白磁	碗	口	ⅣB2b表土	Ⅷ２	〃	
3717	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(ⅣB7b)	青白磁	〃	
3718	〃	〃	体	46ＳＤ16埋土(ⅣB7b)	Ⅵか	〃	
3719		Ⅲ	体～底	46低地1層(ⅣB7b)	Ⅳ１ａ	〃	

第166図　Ｃ地区の中国産磁器①



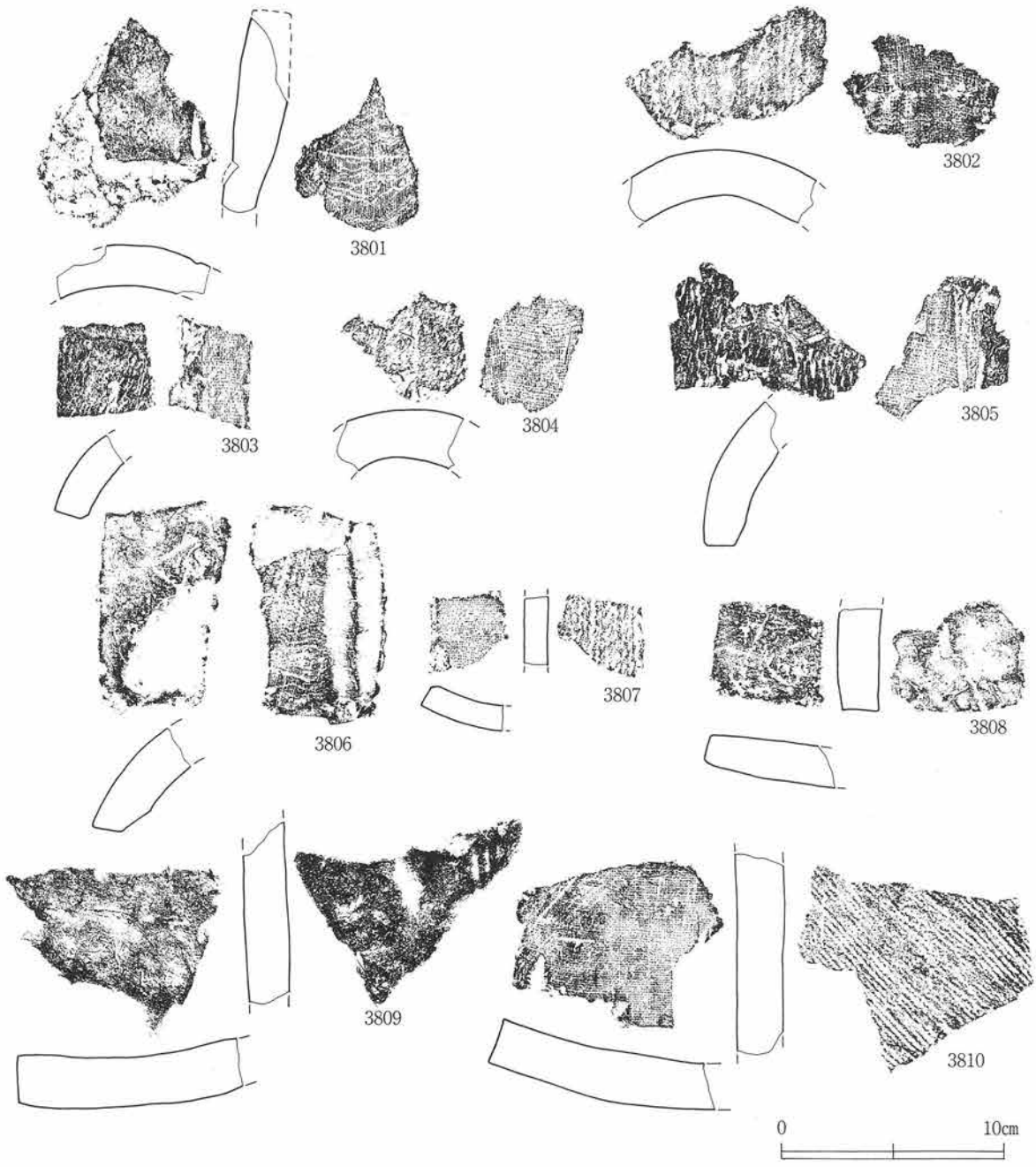
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
3720	白磁	碗	口	66　1池1層(ⅣB6a)	Ⅳ1a	12C	
3721	〃	〃	体～底	66　1池1層(ⅣB7a)	Ⅱ1a	11C後半12C前半	
3722	〃	〃	体	ⅣB9a地山上	同安Ⅰ1b	12C	
3723	〃	〃	体	66　1池1層(ⅣB6a)	ⅥかⅧ	〃	
3724	〃	〃	口	ⅣB3a表土	Ⅷ2か	〃	
3725	〃	〃	体	66　1池1層(ⅣB6a)	ⅤかⅥかⅦ	〃	
3726	〃	皿？	底	66　1池1層(ⅣB6a)	龍泉Ⅰ1	〃	
3727	〃	碗	口	66　1池2層(ⅣB7a)	Ⅳ1a（Ⅲ）	〃	
3728	〃	壺	体	66　1池1層(ⅣB6a)	Ⅲ系	〃	
3729	〃	〃	体	66　1池1層(ⅣB7a)	〃	〃	
3730	〃	〃	体	66　1池2層(ⅣB6a)	〃	〃	
3731	〃	〃	体	66　1池1層	〃	〃	
3732	〃	〃	肩	66　1池1層(ⅣA7j)	〃	〃	

第167図　C地区の中国産磁器②



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
3733	白磁	壺	口縁	66　1池1層(ⅣB8a)	Ⅲ系	12C	
3734	〃	〃	体部	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	〃	
3735	〃	〃	肩～首	ⅣB3a表土	〃	〃	
3736	〃	〃	体部	66　1池1層(ⅣB6a)	〃	〃	
3737	〃	〃	〃	ⅣB4a表土	〃	〃	
3738	青磁	碗	〃	ⅣB3a表土	龍泉Ⅰ3	〃	
3739	青白磁	合子	ふた	ⅣB3a表土	青白磁	〃	

第168図　C地区の中国産磁器③



番号	器種	出土位置	その他
3801	丸瓦	46ＳＤ16埋土(東流部)	二次焼成の痕あり
3802	〃	46ＳＤ17埋土	
3803	〃	46低地1層(ⅣＢ7ｂ)	
3804	〃	46低地1層(ⅣＢ6ｃ)	二次焼成の痕あり
3805	〃	46低地1層(ⅣＢ6ｂ)	二次焼成の痕あり
3806	〃	46低地覆土(ⅣＢ7ｃ)	
3807	平瓦	46ＳＤ16埋土(東流部)	
3808	〃	46ＳＤ16埋土(ⅣＢ7ｂ)	上面に縄目なし
3809	〃	46低地1層(ⅣＢ6ｃ)	
3810	〃	46低地1層(ⅣＢ6ｃ)	

第169図　Ｃ地区の瓦①

6　瓦（第169・170図、写真図版175・176）

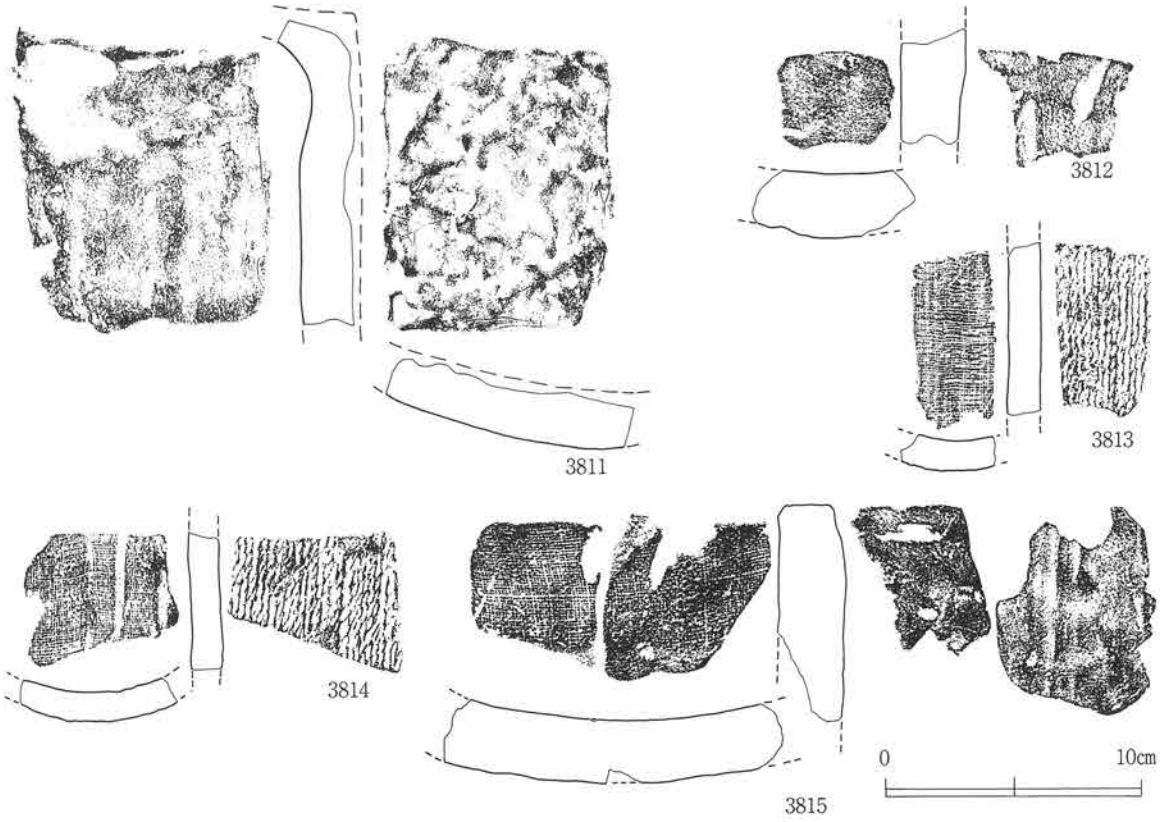
12世紀の瓦が15点出土している。いずれも小破片で軒部分があるものはない。

3801～3806は丸瓦である。3801、3804、3805には二次的な被熱の痕跡がある。3807～3810、3812～3815は平瓦である。

3811は軒平瓦であるが瓦当部を欠損している。全体に磨耗が著しい。

7　土製品（第171図、写真図版176）

3816の土錘が１点出土している。おそらく12世紀のものと思われる。胎土に海面状骨針が混入している。

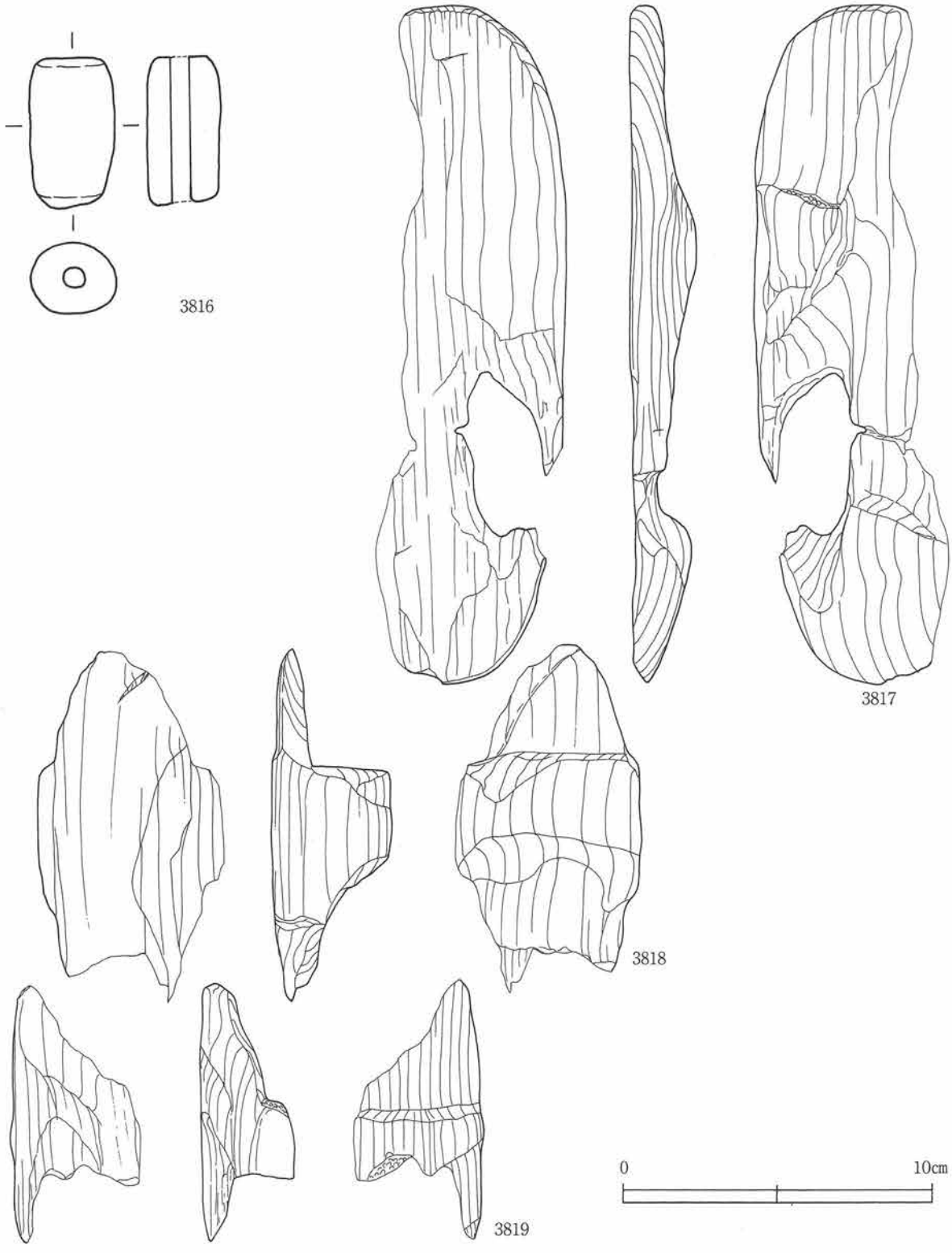


番号	器種	出土位置	その他
3811	軒平瓦	46低地トレンチ4層	瓦当部を欠く　磨耗甚しい
3812	平瓦	66　1池2層(ⅣB6a)	
3813	〃	66　1池1層(ⅣB6a)	
3814	〃	ⅣB4a表土	
3815	〃	66　1池2層(ⅣB6a)	

第170図　C地区の瓦②

8　木製品（第171図、写真図版176）

46ＳＫ26から3817～3819の下駄が３片出土している。本来は同一個体であった可能性があるが、腐食が著しく接合できない。出土遺構の年代観から12世紀のものと推測される。

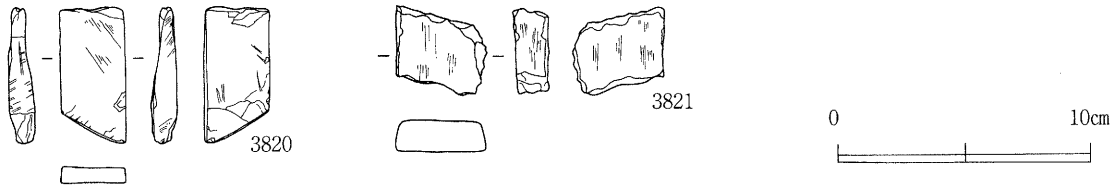


番号	器種	出土位置	その他
3816	土錘	46低地トレンチ1層	胎土に海綿状骨針混じる
3817	下駄	46ＳＫ26埋土	腐食著しい
3818	〃	〃	3817～3819は同一個体と思われる。
3819	〃	〃	

第171図　Ｃ地区の土製品、木製品

9　石製品（第172図、写真図版176）

3820、3821は砥石である。3820は出土地点から12世紀のものである可能性が高い。3821は時期不明とせざるを得ない。



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
3820	砥石	46低地トレンチ1層	粘板岩	砥面4　仕上げ砥か	19.0
3821	〃	ⅣB2b水田面	凝灰岩	〃　3	24.0

第172図　C地区の石製品

10　近世陶磁器（第173図、写真図版176）

ここに示した近世陶磁器の多くは、ⅣB3dの水田面から近代の陶磁器、ガラス瓶などとともに廃棄された状態で出土したものである。近代以降の遺物は掲載していない。

3901は16世紀の中国景徳鎮産の染付皿である。中世の遺物であるがここで報告する。底面に放射状のカンナ痕がある。

3902は肥前Ⅱ期の磁器皿である。高台内は無釉である。釉むらが著しい。

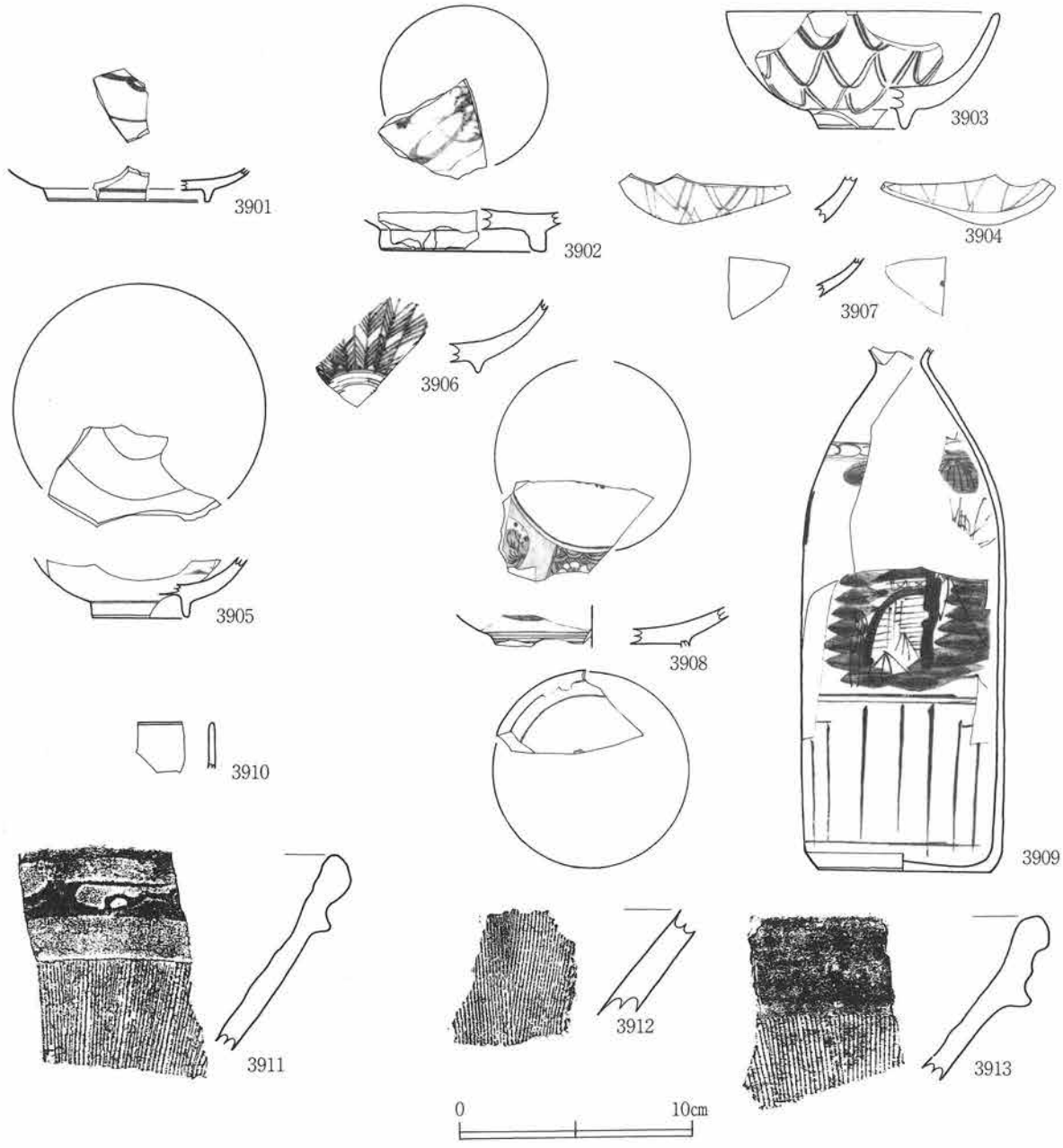
3903～3905は肥前Ⅳ期の磁器碗である。3905の内面は蛇目釉剥ぎになっている。3906は18世紀後半～19世紀初めの肥前産の磁器碗である。3908は肥前Ⅳ期の磁器皿である。

3909は平清水産の磁器徳利である。19世紀中頃のものである。

3910は大堀相馬産の陶器碗である。灰釉が施されており18世紀代のものと考えられる。

3911～3913は擂鉢である。3911、3912は毛越寺門前に20世紀前半に所在した、毛越寺焼の擂鉢に酷似する。胎土には海綿状骨針が混入する。20世期代のものである。

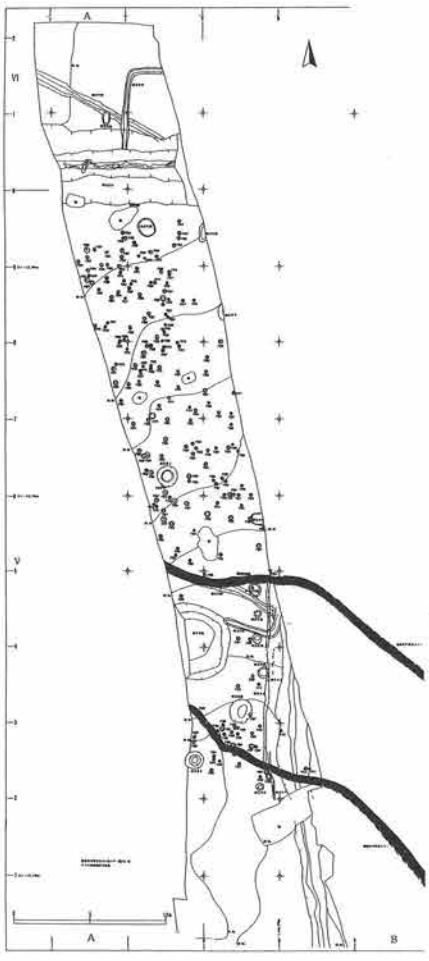
3913は産地は不明であるが形状から20世紀代のものである。

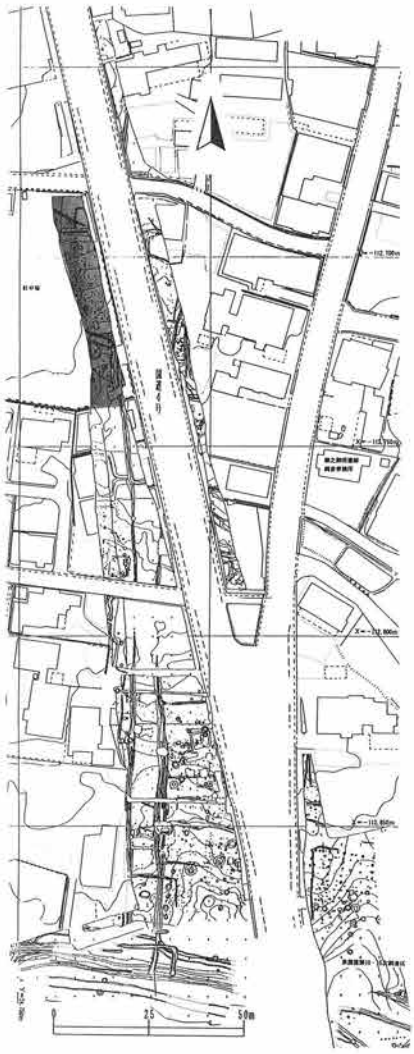


番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
3901	磁器皿	ⅣＢ４ａ表土	－	7.0	(2.5)	白色、黒粒	染付	中国	16C	高台内カンナ痕あり
3902	〃	ⅣＢ３ｄ水田面	－	7.1	(1.8)	白色	〃	肥前	17C前半	高台無釉
3903	磁器碗	〃	(11.7)	3.8	(5.0)	白色	〃	〃	1690～1780	
3904	〃	〃	－	－	(2.0)	白色	〃	〃	〃	
3905	〃	〃	－	4.2	(2.5)	白色	〃	〃	〃	見込蛇目釉はぎ
3906	〃	66Ｐ80埋土	－	－	(3.0)	白色	〃	〃	18C後半～19C初	
3907	磁器皿	ⅣＢ３ｄ水田面	－	－	(1.7)	白色	〃	〃	1690～1780	
3908	磁器皿	ⅣＢ３ｄ水田面	－	－	(1.3)	白色	〃	〃	〃	見込に五弁花
3909	磁器徳利	〃	－	7.4	(22.5)	白色ガラス質	〃	平清水	19C中	
3910	陶器碗	ⅣＢ３ｄ水田面	－	－	(1.9)	灰色	灰釉	大堀相馬	18C	
3911	陶器擂鉢	ⅣＢ３ｄ水田面	－	－	(8.4)	橙色	鉄釉	東北産	20C	毛越寺窯に似る
3912	〃	〃	－	－	(3.5)	橙色	〃	〃	20C	〃
3913	〃	〃	－	－	(7.0)	黒灰～橙色	〃	〃	20C	〃

第173図　Ｃ地区の近世陶磁器

第７章　Ｄ地区の遺構・遺物





第７章　Ｄ地区の遺構・遺物

第１節　Ｄ地区の概観

Ｄ地区はＶＡ・ＶＢ区の国道西側に相当する。ただし北側はⅥＡ区にかかる部分も含んでいる。

南側では埋没沢があり、その部分に埋立整地がなされている。埋立整地の上には道路側溝（66ＳＤ19）と塀（66ＳＡ３、66ＳＡ４）が構築されている。道路側溝は南北に走るＡ～Ｃ、Ｆ地区で検出されているものと同一の道で、西側の側溝である。塀はこの道に平行の形で構築されており、同時存在と考えられる。

Ｄ地区の北側には規模の大きい東西に走る溝（66ＳＤ17）がある。これはＦ地区の66ＳＤ10につながる同一の溝である。現在の町道立石線は12世紀以来の古道と考えられるが、その南側の道路側溝をなしていると考えられる。

埋没沢の埋立て整地以前の遺構もある。66ＳＤ20と66ＳＤ21は整地以前の溝であり、12世紀前半の所属の可能性が高い。また66ＳＤ18も12世紀後半期と考えられる66ＳＤ17に切られており12世紀前半の所属の可能性がある。

またＤ地区には12世紀より新しい13～14世紀の遺構もある。66２号池は沢の整地層を掘り抜く形で構築されており、出土した瓷器系陶器片から13世紀後半～14世紀前半の遺構と推測される。同様に井戸である66ＳＥ１も出土した漆器の形態から同時期の遺構と推測される。よって出土遺物がないため時期を特定できない遺構の中にも13世紀後半～14世紀前半のものが含まれている可能性もある。

掘立柱建物は24棟を示したが調査区の幅が狭いため全体のプランが明らかなものは少ない。時期についてもはっきり示せるものはない。

出土遺物は、12世紀のものではかわらけ、国産陶器、中国産磁器、瓦がある。沢の埋立整地層中から中国銭「天聖元寶」が出土している。平泉遺跡群では数少ない確実に12世紀に伴う銭貨の事例である。

13世紀後半～14世紀後半の遺物には66２号池、66ＳＥ１の出土遺物がある。66２号池の瓷器系陶器は東北地方産と推測される。木製品も複数以上出土しており、皿、椀、曲物、ざる、笹塔婆などがある。笹塔婆は頭部に刻みが無く、12世紀のものと形態が異なっている。笹塔婆の形態変化を知る上で重要な資料である。

第２節　遺構

１　建物

66ＳＢ17（第174図）

〔位置〕ＶＡ９ｉ、９ｊ、ⅥＡ０ｉ、０ｊに位置する。

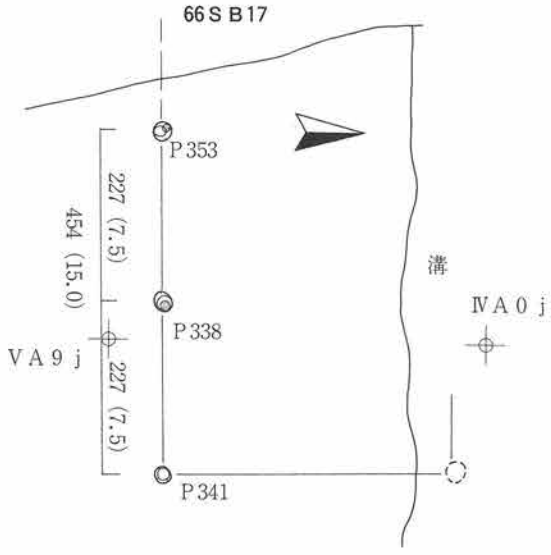
〔重複〕66ＳＫ26、66ＳＢ18、66ＳＢ19、66ＳＢ20、66ＳＢ22、66ＳＢ23とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ17と重複するが、おそらく本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で454cmである。使用した柱穴は３個である。

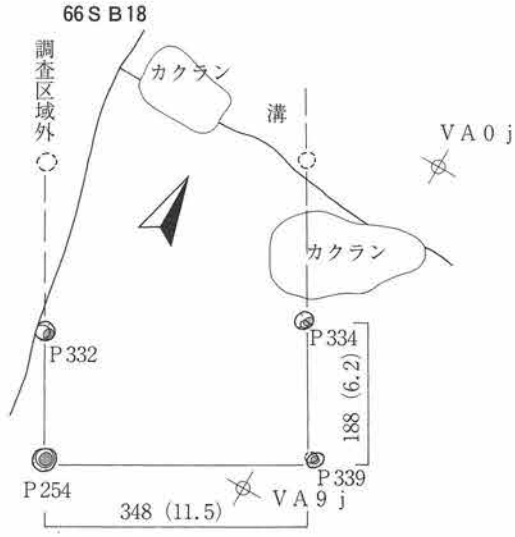
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－89°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では７尺５寸（約227cm）が用いられている。

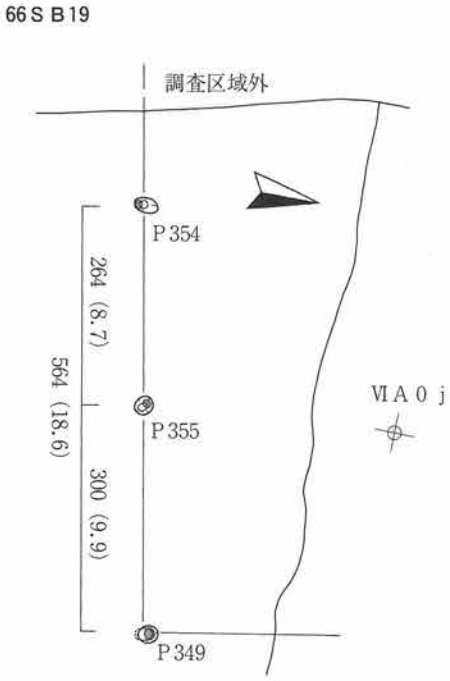
〔出土遺物〕なし



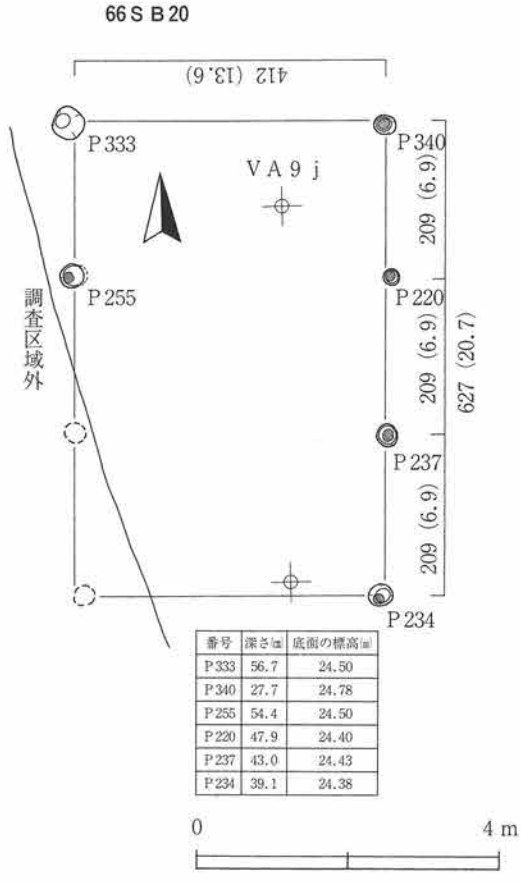
番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P353	18.9	24.89
P338	31.9	24.73
P341	15.6	24.87



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P334	28.4	24.79
P339	30.6	24.73
P332	53.6	24.58
P254	23.0	24.81



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P354	33.3	24.74
P355	25.7	24.88
P349	37.0	24.70



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P333	56.7	24.50
P340	27.7	24.78
P255	54.4	24.50
P220	47.9	24.40
P237	43.0	24.43
P234	39.1	24.38

第174図　D地区の建物①（66SB17～20）

〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ18（第174図）
〔位置〕ＶＡ８ｉ、９ｉ、９ｊ、ⅥＡ０ｉに位置する。
〔重複〕66ＳＢ17、66ＳＢ19、66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ22、66ＳＢ23とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ17と重複するが、おそらく本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。梁間は348cm、桁行は検出された分で188cmである。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－31°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺２寸（約188cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ19（第174図）
〔位置〕ＶＡ９ｉ、９ｊ、ⅥＡ０ｉ、０ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＫ26、66ＳＢ17、66ＳＢ18、66ＳＢ20、66ＳＢ22、66ＳＢ23とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ17と重複するが、おそらく本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で564cmである。使用した柱穴は３個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－81°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺７寸（約264cm）と９尺９寸（約300cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

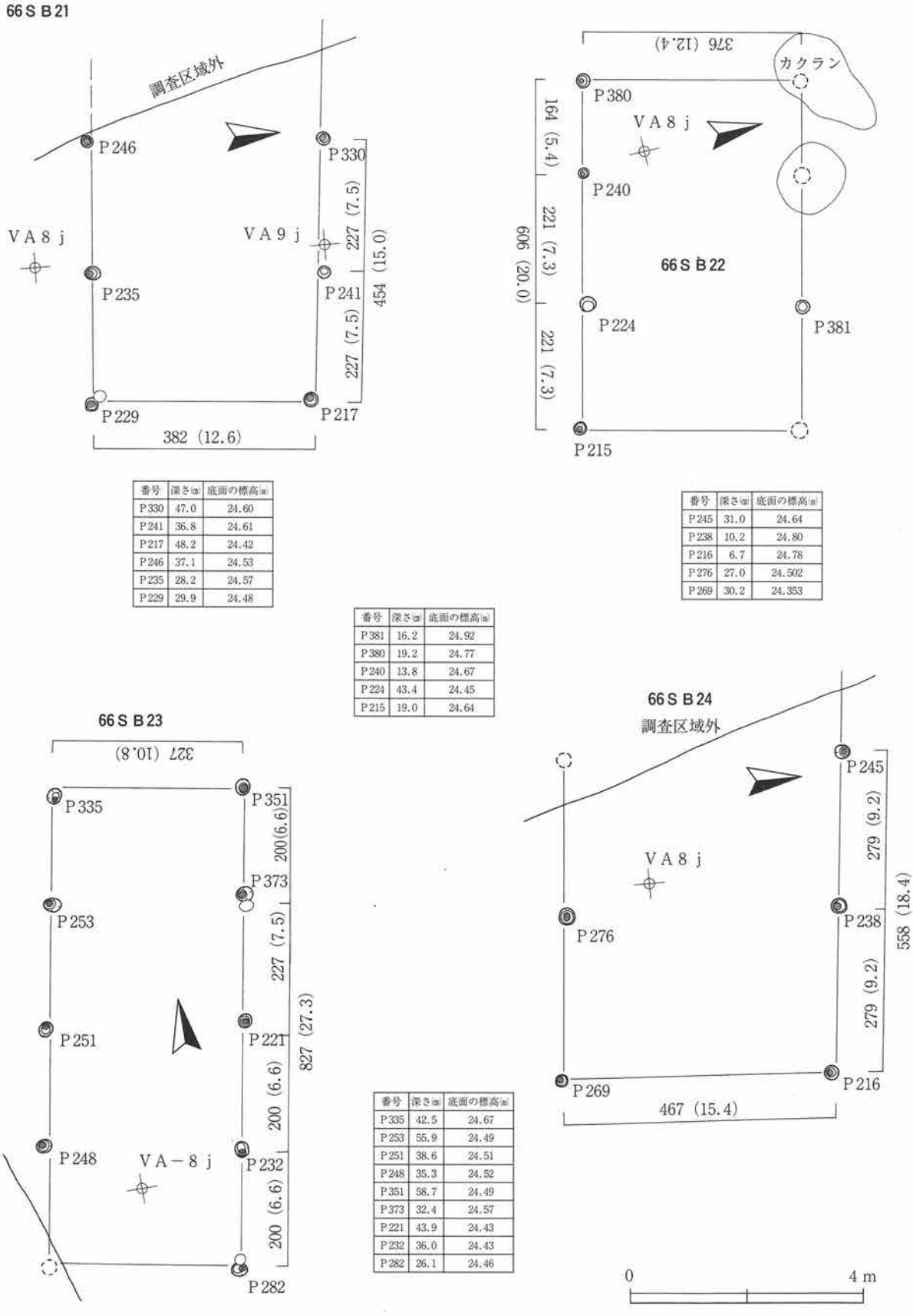
66ＳＢ20（第174図、写真図版68）
〔位置〕ＶＡ７ｉ、７ｊ、８ｉ、８ｊ、９ｉ、９ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＢ17、66ＳＢ18、66ＳＢ19、66ＳＢ21、66ＳＢ22、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ25、66ＳＢ26、66ＳＢ28、66ＳＢ29とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ27の柱穴Ｐ233と本建物の柱穴Ｐ234が重複するが、本建物が新しい。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は627cm、梁間は412cmである。面積は約7.8坪である。使用した柱穴は６個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－６°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺９寸（約209cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ21（第175図）
〔位置〕ＶＡ８ｉ、８ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＢ18、66ＳＢ19、66ＳＢ20、66ＳＢ22、66ＳＢ27、66ＳＢ24、66ＳＢ25、66ＳＢ27、66ＳＢ28、66ＳＢ29とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ23の柱穴Ｐ373と本建物の柱穴Ｐ217が重複するが、本建物が新しい。また66ＳＢ26の柱穴Ｐ230と本建物の柱穴Ｐ229が重複するが本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で454cm、梁間は382cmである。面積は検出した分で約5.6坪である。使用した柱穴は６個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－85°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺５寸（約227cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ22（第175図）
〔位置〕ＶＡ８ｉ、８ｊ、９ｉ、９ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＢ17、66ＳＢ18、66ＳＢ19、66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ23、66ＳＢ25、66ＳＢ27、66ＳＢ28とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＫ26と重複するが本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は606cmで、梁間は376cmである。面積は約6.9坪である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－76°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺３寸（約221cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ23（第175図、写真図版68）
〔位置〕ＶＡ７ｉ、７ｊ、８ｉ、８ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＢ17、66ＳＢ18、66ＳＢ19、66ＳＢ20、66ＳＢ22、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ25、66ＳＢ26、66ＳＢ27、66ＳＢ28、66ＳＢ34とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。ま



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 330	47.0	24.60
P 241	36.8	24.61
P 217	48.2	24.42
P 246	37.1	24.53
P 235	28.2	24.57
P 229	29.9	24.48

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 381	16.2	24.92
P 380	19.2	24.77
P 240	13.8	24.67
P 224	43.4	24.45
P 215	19.0	24.64

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 245	31.0	24.64
P 238	10.2	24.80
P 216	6.7	24.78
P 276	27.0	24.502
P 269	30.2	24.353

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P 335	42.5	24.67
P 253	55.9	24.49
P 251	38.6	24.51
P 248	35.3	24.52
P 351	58.7	24.49
P 373	32.4	24.57
P 221	43.9	24.43
P 232	36.0	24.43
P 282	26.1	24.46

第175図　D地区の建物②（66 S B 21～24）

た66ＳＢ21の柱穴Ｐ217と本建物の柱穴Ｐ373が、また66ＳＢ29の柱穴Ｐ283と本建物の柱穴Ｐ282が重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は827cmで、梁間は327cmである。面積は約8.2坪である。使用した柱穴は９個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－12°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺６寸（約200cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ24（第175図）

〔位置〕ＶＡ７ｉ、７ｊ、８ｉ、８ｊに位置する。

〔重複〕66ＳＢ18、66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ23、66ＳＢ25、66ＳＢ26、66ＳＢ27、66ＳＢ28、66ＳＢ29、66ＳＢ30、66ＳＢ34とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で558cmで、梁間は467cmである。面積は検出された分で約7.9坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－84°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では９尺２寸（約279cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ25（第176図）

〔位置〕ＶＡ８ｉ、８ｊ、９ｉ、９ｊに位置する。

〔重複〕66ＳＢ18、66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ22、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ28、66ＳＢ29、66ＳＢ30とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ27の柱穴Ｐ250と本建物の柱穴Ｐ249が重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で270cmで、梁間は448cmである。面積は検出された分で約3.7坪である。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－88°－Ｅである。

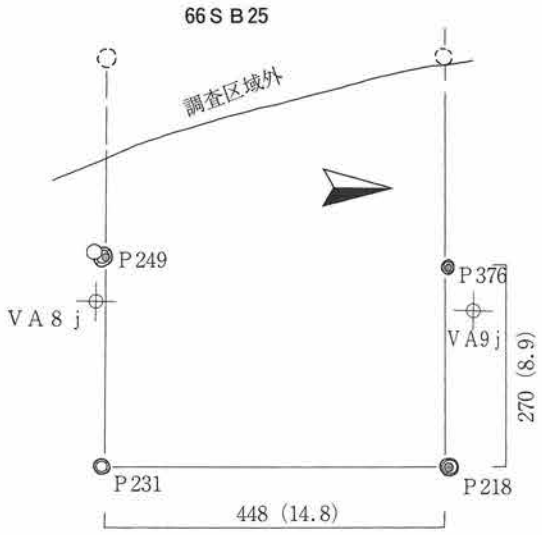
〔柱間寸法〕桁行では８尺９寸（約270cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

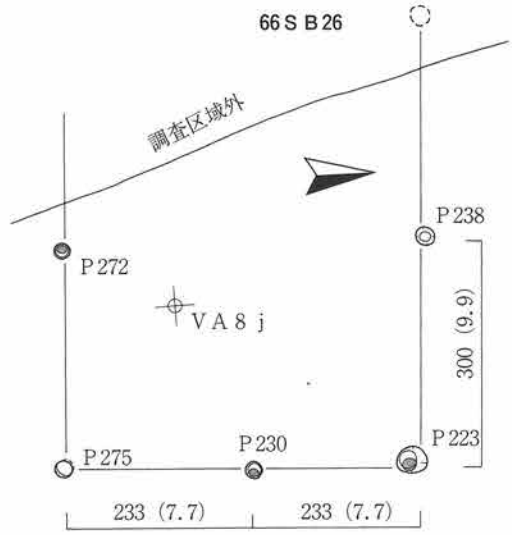
〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

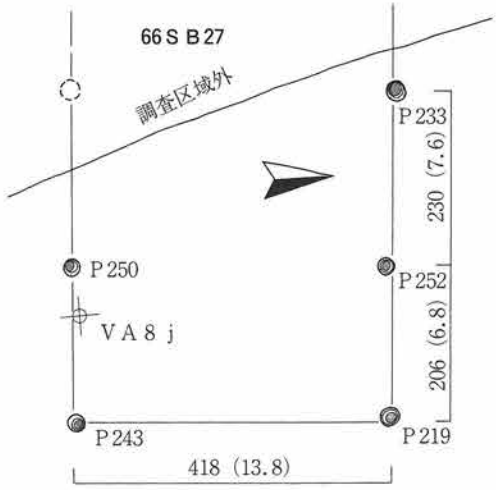
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。



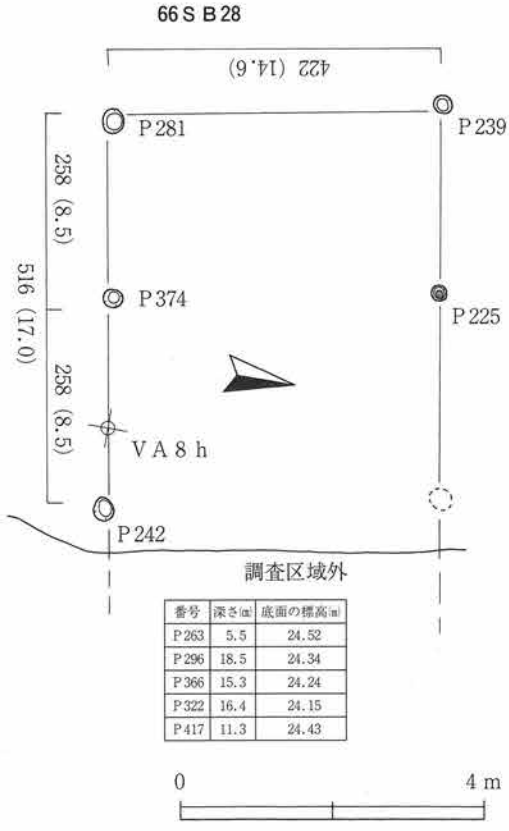
番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P247	28.5	24.58
P236	24.1	24.60
P271	52.6	24.33
P283	7.3	24.64



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P227	18.3	24.65
P284	32.4	24.41
P260	13.8	24.54
P372	24.5	24.29
P268	10.4	24.53
P267	13.5	24.46



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P257	37.4	24.43
P273	7.9	24.48
P264	16.0	24.42
P266	12.6	24.39
P287	21.6	24.30
P306	12.7	24.34
P299	13.5	24.28



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P263	5.5	24.52
P296	18.5	24.34
P366	15.3	24.24
P322	16.4	24.15
P417	11.3	24.43

第176図　D地区の建物③（66SB25～28）

66ＳＢ26（第176図）

〔位置〕ＶＡ８ｉ、８ｊ、９ｉ、９ｊに位置する。

〔重複〕66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ25、66ＳＢ27、66ＳＢ28、66ＳＢ29、66ＳＢ30、66ＳＢ34とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で300cmで、梁間は466cmである。面積は検出された分で約4.2坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－85°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では９尺９寸（約300cm）が、梁間では７尺７寸（約233cm）用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ27（第176図）

〔位置〕ＶＡ７ｉ、７ｊ、８ｉ、８ｊに位置する。

〔重複〕66ＳＢ18、66ＳＢ21、66ＳＢ22、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ26、66ＳＢ28、66ＳＢ29とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ20の柱穴Ｐ234と本建物の柱穴Ｐ233が重複するが、本建物が古い。また66ＳＢ25の柱穴Ｐ249と本建物の柱穴Ｐ250が重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で436cmで、梁間は418cmである。面積は検出された分で約5.5坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－87°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）と７尺６寸（約230cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ28（第176図）

〔位置〕ＶＡ８ｊ、ＶＢ８ａに位置する。

〔重複〕66ＳＥ３、66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ22、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ25、66ＳＢ26、66ＳＢ27、66ＳＢ29、66ＳＢ30とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で516cmで、梁間は442cmである。面積は検出された分で約6.9坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－80°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では８尺５寸（約258cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

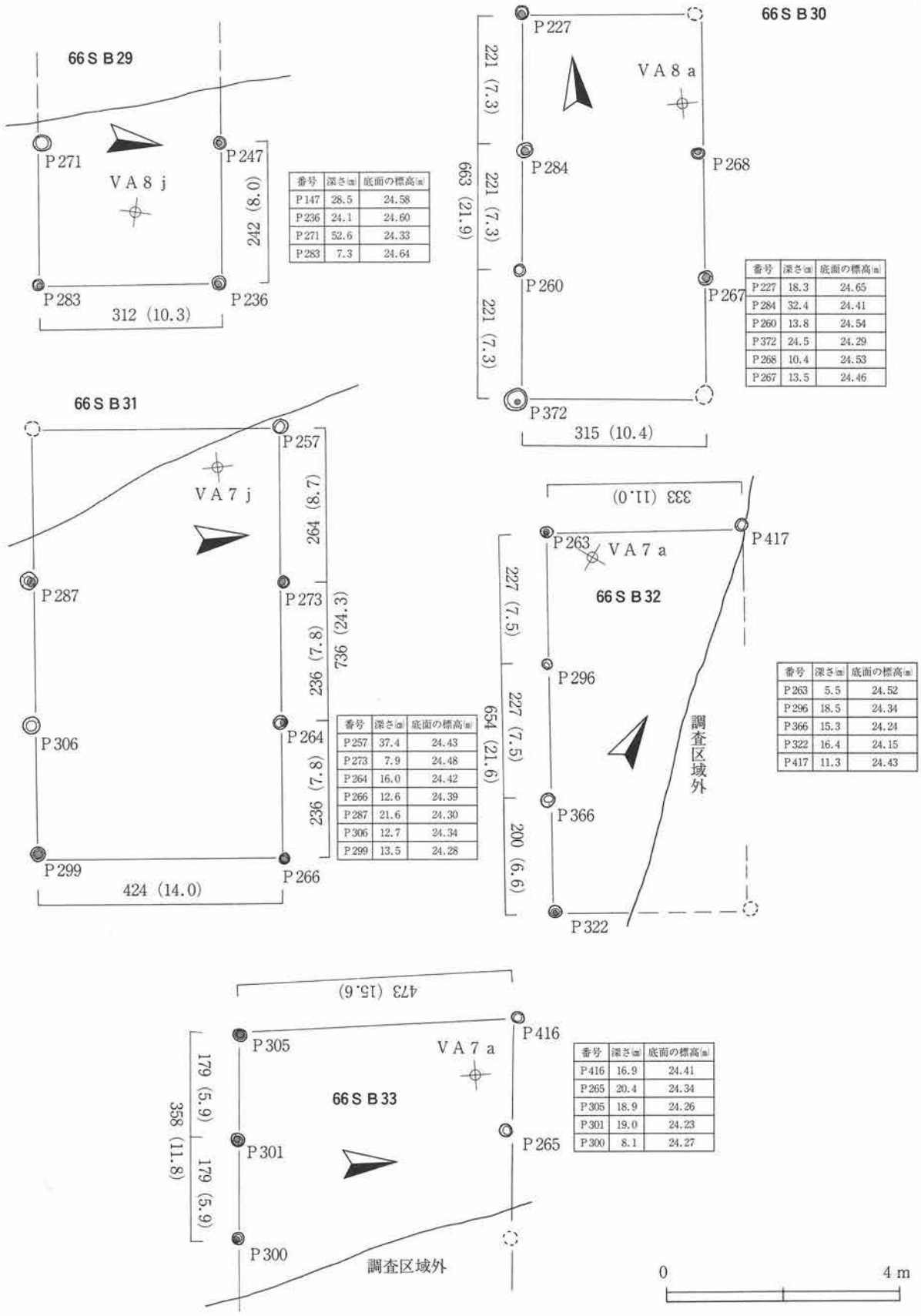
〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ29（第177図）
〔位置〕ＶＡ７ｉ、７ｊ、８ｉ、８ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＢ20、66ＳＢ21、66ＳＢ24、66ＳＢ25、66ＳＢ26、66ＳＢ27、66ＳＢ28、66ＳＢ34とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ23の柱穴Ｐ282と本建物の柱穴Ｐ283が重複するが本建物が新しい。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で242cmで、梁間は312cmである。面積は約2.3坪である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－81°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺（約242cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ30（第177図）
〔位置〕ＶＡ７ｊ、８ｊ、ＶＢ７ａ、８ａに位置する。
〔重複〕66ＳＢ21、66ＳＢ24、66ＳＢ28、66ＳＢ31、66ＳＢ32、66ＳＢ33、66ＳＢ36とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は663cmで、梁間は315cmである。面積は約6.3坪である。使用した柱穴は６個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－５°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺３寸（約221cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ31（第177図、写真図版68）
〔位置〕ＶＡ６ｉ、６ｊ、７ｉ、７ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＥ１、66ＳＢ30、66ＳＢ32、66ＳＢ33、66ＳＢ34、66ＳＢ35、66ＳＢ36、66ＳＢ37、66ＳＢ38とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は736cmで、梁間は424cmである。面積は約9.5坪である。使用した柱穴は７個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－85°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺８寸（約236cm）が多用されている。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P147	28.5	24.58
P236	24.1	24.60
P271	52.6	24.33
P283	7.3	24.64

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P227	18.3	24.65
P284	32.4	24.41
P260	13.8	24.54
P372	24.5	24.29
P268	10.4	24.53
P267	13.5	24.46

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P257	37.4	24.43
P273	7.9	24.48
P264	16.0	24.42
P266	12.6	24.39
P287	21.6	24.30
P306	12.7	24.34
P299	13.5	24.28

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P263	5.5	24.52
P296	18.5	24.34
P366	15.3	24.24
P322	16.4	24.15
P417	11.3	24.43

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P416	16.9	24.41
P265	20.4	24.34
P305	18.9	24.26
P301	19.0	24.23
P300	8.1	24.27

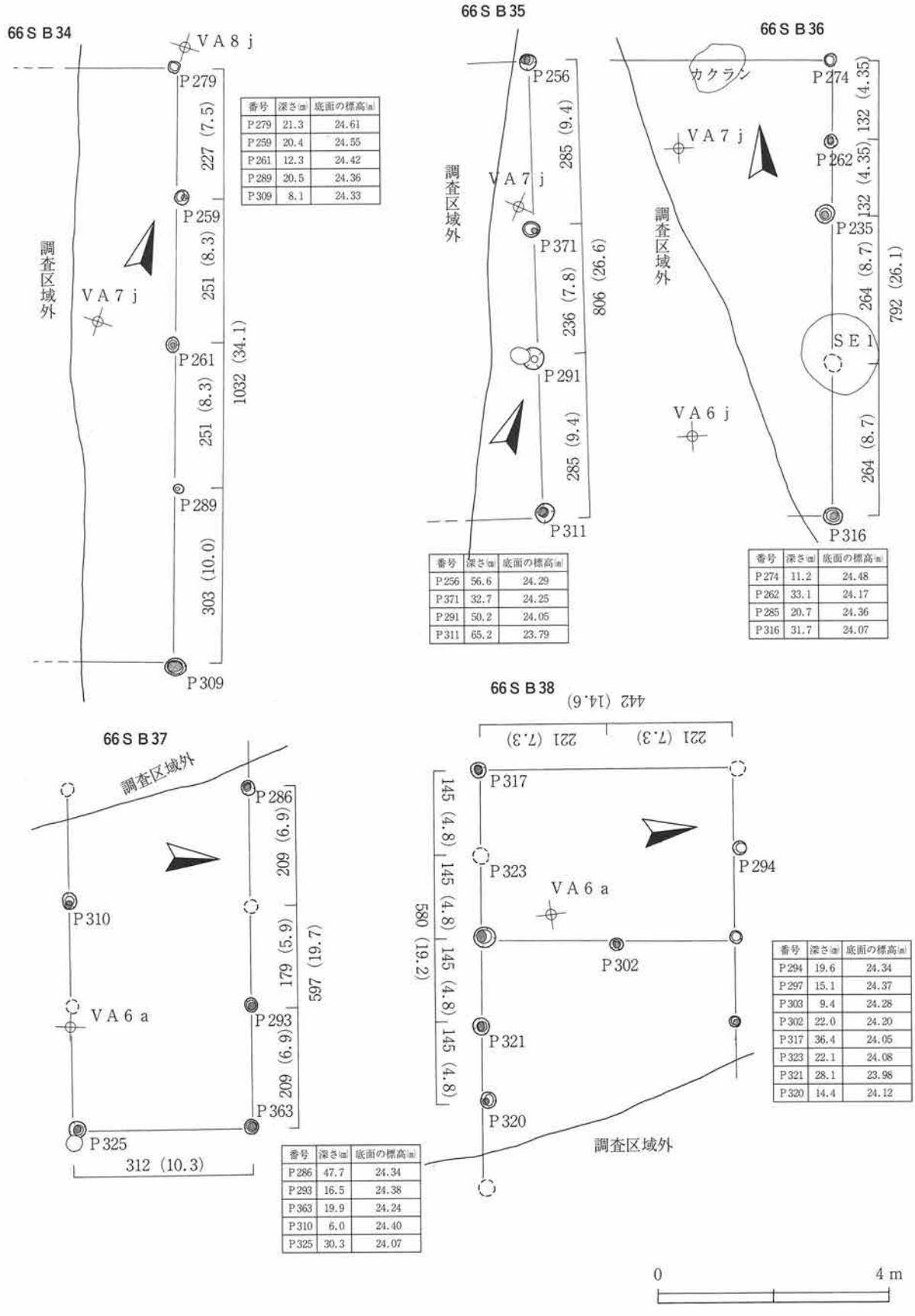
第177図　D地区の建物④（66SB29～33）

〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ32（第177図）
〔位置〕ＶＡ６ｊ、７ｊ、ＶＢ６ａ、７ａに位置する。
〔重複〕66ＳＢ30、66ＳＢ31、66ＳＢ33とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は654cmで、梁間は333cmである。面積は約6.6坪である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－29°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では７尺５寸（約227cm）が多用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ33（第177図）
〔位置〕ＶＡ６ｊ、７ｊ、ＶＢ６ａ、７ａに位置する。
〔重複〕66ＳＢ30、66ＳＢ31、66ＳＢ32、66ＳＢ37、66ＳＢ38とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で358cmで、梁間は473cmである。面積は検出した分で約5.1坪である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－85°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では５尺９寸（約179cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ34（第178図）
〔位置〕ＶＡ６ｉ、６ｊ、７ｉ、７ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＥ１、66ＳＢ23、66ＳＢ24、66ＳＢ29、66ＳＢ31、66ＳＢ35、66ＳＢ36、66ＳＢ37、66ＳＢ38、66ＳＢ39、66ＳＢ40とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は1032cmで、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－17°－Ｗである。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P279	21.3	24.61
P259	20.4	24.55
P261	12.3	24.42
P289	20.5	24.36
P309	8.1	24.33

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P256	56.6	24.29
P371	32.7	24.25
P291	50.2	24.05
P311	65.2	23.79

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P274	11.2	24.48
P262	33.1	24.17
P285	20.7	24.36
P316	31.7	24.07

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P286	47.7	24.34
P293	16.5	24.38
P363	19.9	24.24
P310	6.0	24.40
P325	30.3	24.07

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P294	19.6	24.34
P297	15.1	24.37
P303	9.4	24.28
P302	22.0	24.20
P317	36.4	24.05
P323	22.1	24.08
P321	28.1	23.98
P320	14.4	24.12

第178図　D地区の建物⑤（66SB34～38）

〔柱間寸法〕桁行では８尺３寸（約251cm）が多用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ35（第178図）
〔位置〕ＶＡ６ｉ、６ｊ、７ｉ、７ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＥ１、66ＳＢ31、66ＳＢ34、66ＳＢ36、66ＳＢ37、66ＳＢ38とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は806cmで、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－26°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では９尺４寸（約285cm）が多用されている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ36（第178図）
〔位置〕ＶＡ５ｉ、６ｊ、６ｉ、６ｊ、７ｉ、７ｊに位置する。
〔重複〕66ＳＢ30、66ＳＢ31、66ＳＢ34、66ＳＢ35、66ＳＢ37、66ＳＢ38、66ＳＢ40とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＥ１と重複するが本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は792cmで、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－３°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺７寸（約264cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ37（第178図）
〔位置〕ＶＡ６ｊ、ＶＢ６ａに位置する。
〔重複〕66ＳＥ１、66ＳＢ31、66ＳＢ32、66ＳＢ33、66ＳＢ34、66ＳＢ35、66ＳＢ36、66ＳＢ38とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ40の柱穴Ｐ324と本建物の柱穴Ｐ325が重複するが本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は597cmで、梁間は312cmである。面積は約5.6坪である。使用した柱

穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－88°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺９寸（約209cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ38（第178図）

〔位置〕ＶＡ５ｊ、６ｊ、ＶＢ５ａ、６ａに位置する。

〔重複〕66ＳＥ１、66ＳＫ31、66ＳＢ31、66ＳＢ32、66ＳＢ33、66ＳＢ34、66ＳＢ35、66ＳＢ36、66ＳＢ37、66ＳＢ39、66ＳＢ40とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で580cmで、梁間は442cmである。面積は検出された分で約7.8坪である。使用した柱穴は６個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－83°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では４尺８寸（約145cm）、梁間では７尺３寸（約221cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ39（第179図）

〔位置〕ＶＡ５ｊ、ＶＢ５ａに位置する。

〔重複〕66ＳＢ34、66ＳＢ36、66ＳＢ38、66ＳＢ40とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で400cmで、梁間は358cmである。面積は検出された分で約4.3坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－86°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺６寸（約200cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ40（第179図）

〔位置〕ＶＡ５ｊ、６ｊ、ＶＢ５ａ、６ａに位置する。

〔重複〕66ＳＫ31、66ＳＢ34、66ＳＢ35、66ＳＢ38、66ＳＢ39とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ37の柱穴Ｐ325と本建物の柱穴Ｐ324が重複するが本建物が新しい。

また66ＳＥ１と本建物のＰ312が切り合うが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は634cmで、梁間は324cmである。面積は検出された分で約6.2坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－86°－Ｗである。

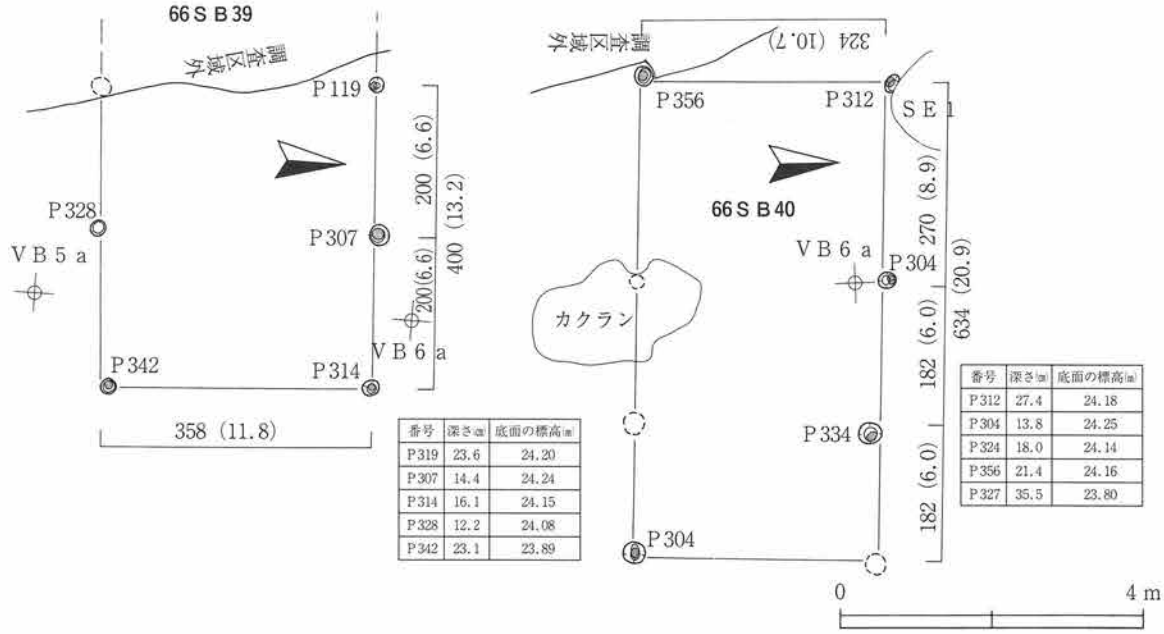
〔柱間寸法〕桁行では６尺（約182cm）が多用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P319	23.6	24.20
P307	14.4	24.24
P314	16.1	24.15
P328	12.2	24.08
P342	23.1	23.89

番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
P312	27.4	24.18
P304	13.8	24.25
P324	18.0	24.14
P356	21.4	24.16
P327	35.5	23.80

第179図　Ｄ地区の建物⑥（66ＳＢ39・40）

2　井戸

66ＳＥ１（第180図、写真図版68・69）

〔位置〕ＶＡ６ｊに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁の全体の断面形は漏斗状を呈する。

〔埋土〕３層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕４層から漆器椀（4014）、底面から笹塔婆状の木製品（4015）、埋土中から砥石（4501）が出土している。また確認面で青白磁の梅瓶片（4308）が出土しており本遺構に伴う可能性がある。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕出土した漆器椀の形状から、13～14世紀の遺構の可能性が高い。

66ＳＥ２（第180図、写真図版69）

〔位置〕ＶＢ１ａに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁はやや不整に立ち上がる。

〔埋土〕３層に分けられる。全体に人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土下部から淡水産の貝「タガイ」の貝殻の皮膜が出土している。図示はしていない。

〔遺構の性格〕浅いが井戸と考えられる。

〔年代〕不明である。

66ＳＥ３（第180図、写真図版69）

〔位置〕ＶＢ８ａに位置する。

〔重複〕なし。大部分が調査区外にかかり全体の形状は不明である。

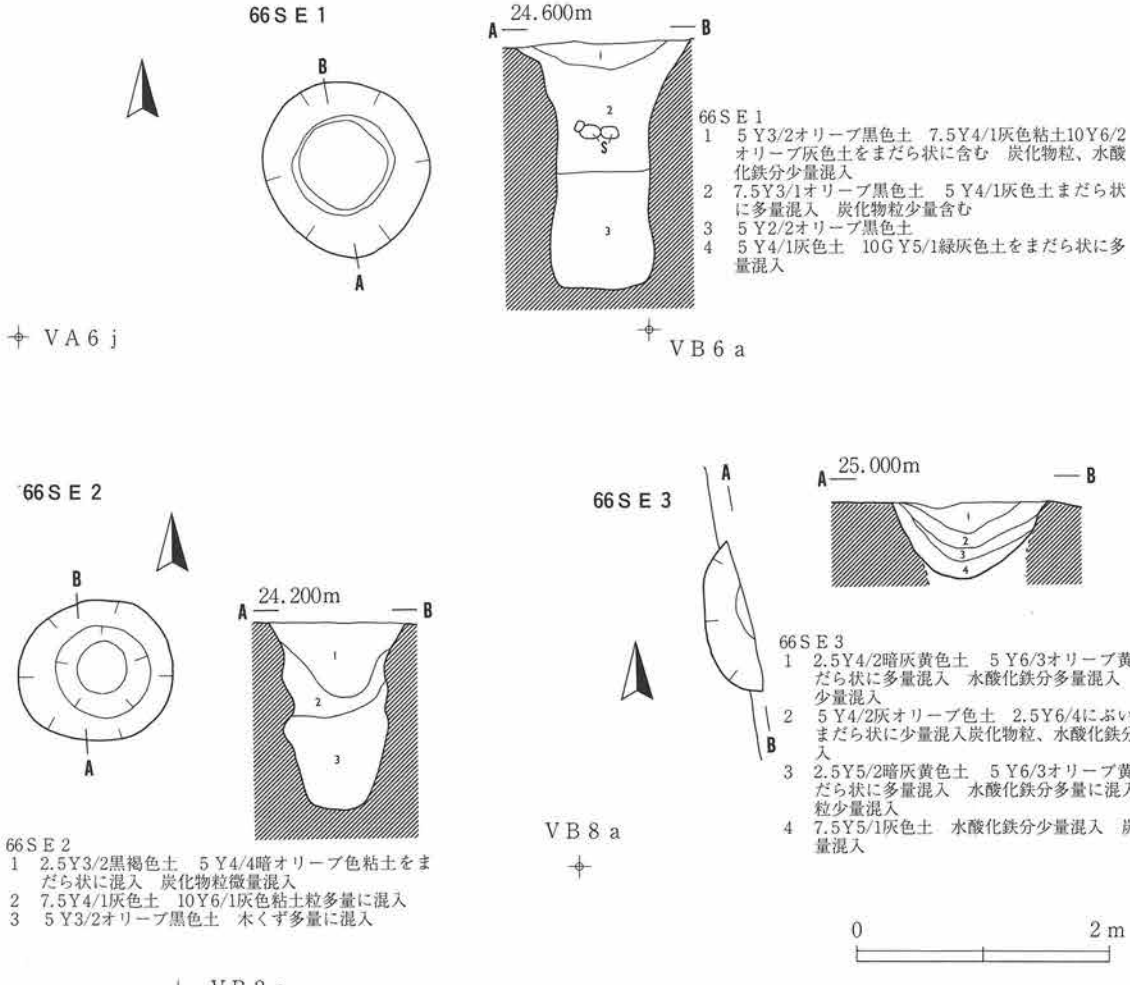
〔底面、壁〕全掘していないため、不明である。

〔埋土〕４層に分けられる。全体に人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕底まで掘っていないので確実に井戸かどうか不明だが、一応井戸として扱う。

〔年代〕不明である。



第180図　Ｄ地区の井戸（66ＳＥ１～３）

3　土坑

66ＳＫ24（第181図、写真図版69）

〔位置〕ⅦＡ０ｉに位置する。

〔重複〕66ＳＤ18と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ25（第181図、写真図版70）

〔位置〕ＶＢ３ａに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地層より新しい遺構である。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、12世紀の後半以降の所属である。

66ＳＫ26（第181図、写真図版70）

〔位置〕ＶＡ９ｊに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

〔埋土〕５層に分けられる。５層は人為的に埋められた土である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕確認面のプランと断面の観察から、桶のような円等形のものを埋設した遺構と考えられる。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ27（第181図、写真図版70）

〔位置〕ＶＢ２ａに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁面はやや斜めに立ち上がる。

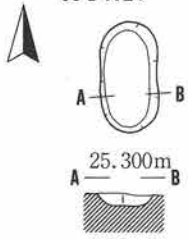
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66S K24

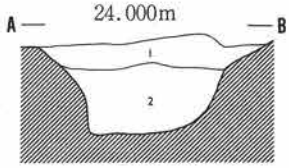


VA1g

66S K24
1　2.5Y4/3オリーブ褐色土　2.5Y5/6黄褐色土をまだら状に多量混入

66S K25

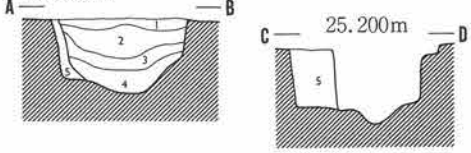
VB3b

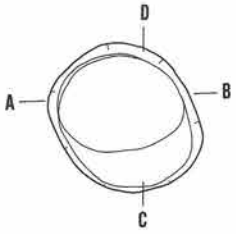


66S K25
1　7.5Y3/1オリーブ黒色土　炭化物粒少量混入水酸化鉄分微量混入
2　5Y3/2オリーブ黒色粘土　7.5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロックで少量混入　炭化物粒微量混入　底部に5Y3/2オリーブ黒色砂少量含む

66S K26

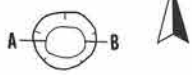
VB0j



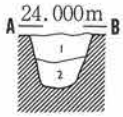


66S K26
1　2.5Y5/3黄褐色土　2.5Y5/4黄褐色粘土をまだら状に混入　炭化物粒微量混入
2　5Y4/3暗オリーブ色土　2.5Y5/6黄褐色土をまだら状に多量混入　炭化物粒多量混入
3　2.5Y6/6明黄褐色土　7.5Y6/2灰オリーブ色粘土をまだら状に少量混入
4　2.5Y5/2暗灰黄色土　2.5Y6/4にぶい黄色土まだら状に少量混入炭化物粒微量混入
5　5GY6/1緑灰色土　5Y5/6オリーブ色土、5Y4/2灰オリーブ色土をまだら状に多量混入　炭化物少量混入

66S E27

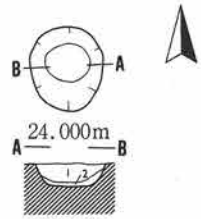


VB2b



66S K27
1　5Y3/2オリーブ黒色土　5Y5/3灰オリーブ色土粒まだら状に多量混入　炭化物粒少量混入
2　5Y4/1灰色土　5Y5/2灰オリーブ色粘土まだら状に少量混入

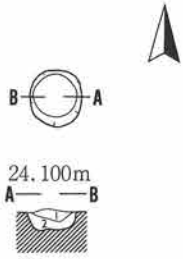
66S E28



VB4b

66S K28
1　5Y3/1オリーブ黒色土　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土まだら状に少量混入　炭化物粒少量混入
2　5Y4/1灰色土　10Y6/2オリーブ灰色土まだら状に多量混入

66S E29

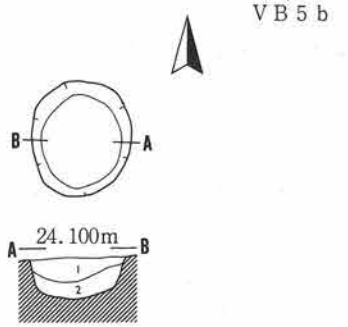


66S K29
1　5Y4/2灰オリーブ色土　水酸化鉄分多量に含む炭化物粒多量に混入
2　5Y4/1灰色土　10Y5/2オリーブ灰色土まだら状に少量混入　炭化物粒微量混入

VB4b

VB5b

66S E30



66S K30
1　5Y4/1灰色土　10GY7/1明緑灰色土まだら状に少量混入　水酸化鉄分、炭化物を多量に混入
2　7.5Y4/1灰色土　7.5Y3/1オリーブ黒色土まだら状に多量混入

0　2m

第181図　D地区の土坑①（66SK24～30）

66ＳＫ28（第181図、写真図版70）

〔位置〕ＶＢ４ａに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地層の上に位置するが、整地層より新しい。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁面はやや斜めに立ち上がる。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、12世紀後半以降の所属である。

66ＳＫ29（第181図、写真図版71）

〔位置〕ＶＢ４ａに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地層の上に位置するが、整地層より新しい。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、12世紀後半以降の所属である。

66ＳＫ30（第181図、写真図版71）

〔位置〕ＶＢ４ａに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地層の上に位置するが、整地層より新しい。

〔底面、壁〕底面は皿状なっているが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、12世紀後半以降の所属である。

66ＳＫ31（第182図、写真図版71）

〔位置〕ＶＢ５ａに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

〔埋土〕４層に分けられる。人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（4126）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀の所属の可能性が高い。

66ＳＫ32（第182図、写真図版71）

〔位置〕ＶＡ９ｊ、ＶＢ９ａに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、12世紀後半以降の所属である。

66ＳＫ33（第182図、写真図版71）

〔位置〕ＶＢ３ａに位置する。

〔重複〕沢の整地層に重複するが、整地層より古い遺構である。

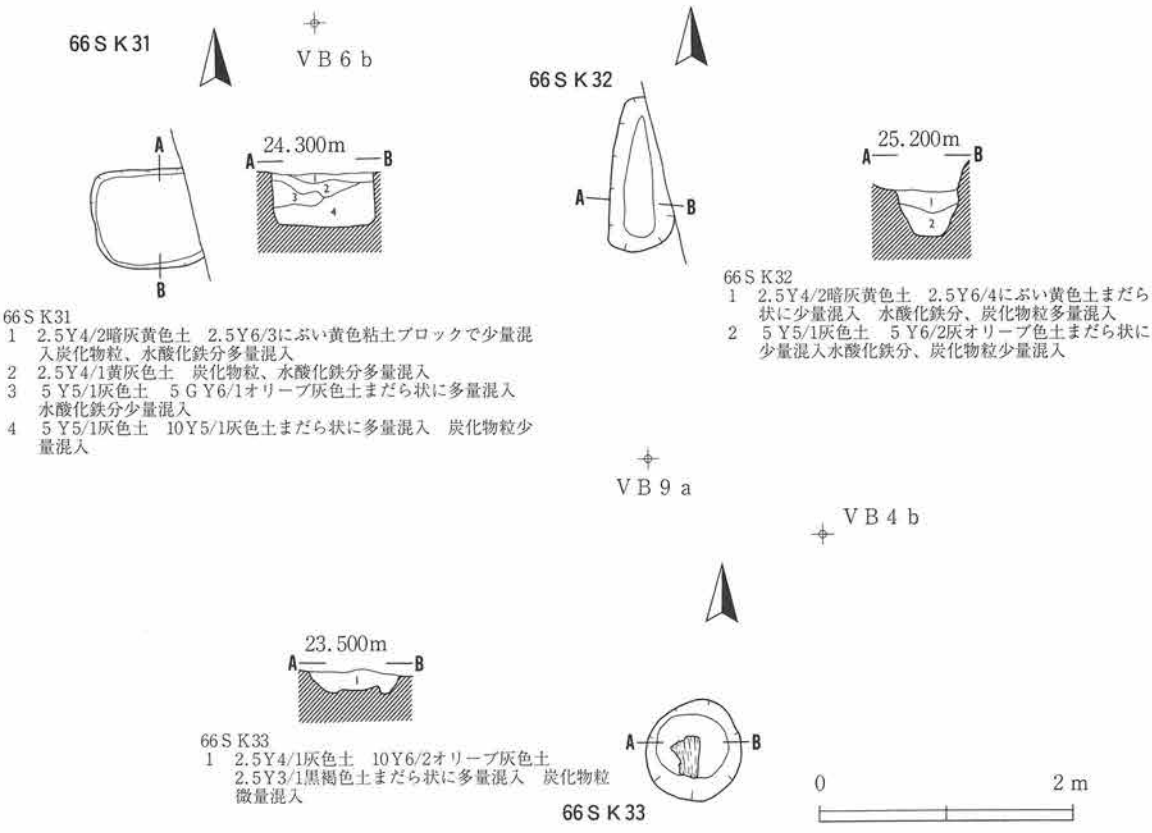
〔底面、壁〕底面は不整で、壁は斜めに立ち上がる。

〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕底面に板？の痕跡があった。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、整地層より古いことから、12世紀中葉より以前の所属と考えられる。



第182図　Ｄ地区の土坑②（66ＳＫ31～33）

4　溝

66ＳＤ16（第183図、写真図版72）

〔位置〕ⅥＡ０ｉ、０ｊ、１ｉ、１ｊに位置する。

〔重複〕66ＳＤ17と重複するが本遺構が古い。また66ＳＤ18と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕東西方向に走っていたものが南側に曲がり、Ｌ字形をなす。底面の標高は東側が高く、東から南へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕手づくねかわらけの細片が少量出土した。

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる66ＳＤ17より古いが、出土遺物から本溝も12世紀後半の所属と考えられる。

66ＳＤ17（第183図、写真図版72）

〔位置〕ＶＡ９ｉ、９ｊ、ⅥＡ０ｉ、０ｊに位置する。

〔重複〕66ＳＤ16、66ＳＤ18と重複するが本遺構が新しい。また66ＳＢ17、66ＳＢ18、66ＳＢ19とプランが重複するが、おそらく本溝が新しい。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。国道東側のを66ＳＤ10と同一の溝である。66ＳＤ10と本溝の上幅が合わないが、これは本溝の漏斗状に広がる部分が、ＳＤ10の場合には確認面が低いため検出されなかったためである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。最底面は流水によりえぐれて蛇行したようになっている。

〔埋土〕４層に分けられる。全体的に砂質の層が多く流水により生成されたと考えられる。

〔出土遺物〕多くは３層からの出土である。出土遺物を列挙する。手づくねかわらけ（4102～4106、4115、4123、4136、4137）、ろくろかわらけ（4140）、常滑産甕（4202～4205、4208、4209）、中国産白磁（4301、4303、4304）が出土した。

〔溝の性格〕大規模な溝であり、単なる排水用の溝ではなく、道路側溝または都市を区画する溝と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

66ＳＤ18（第183図、写真図版73）

〔位置〕ⅥＡ０ｊ、１ｈ、１ｉに位置する。

〔重複〕66ＳＫ24、66ＳＤ16、66ＳＤ17と重複するが本遺構が古い。

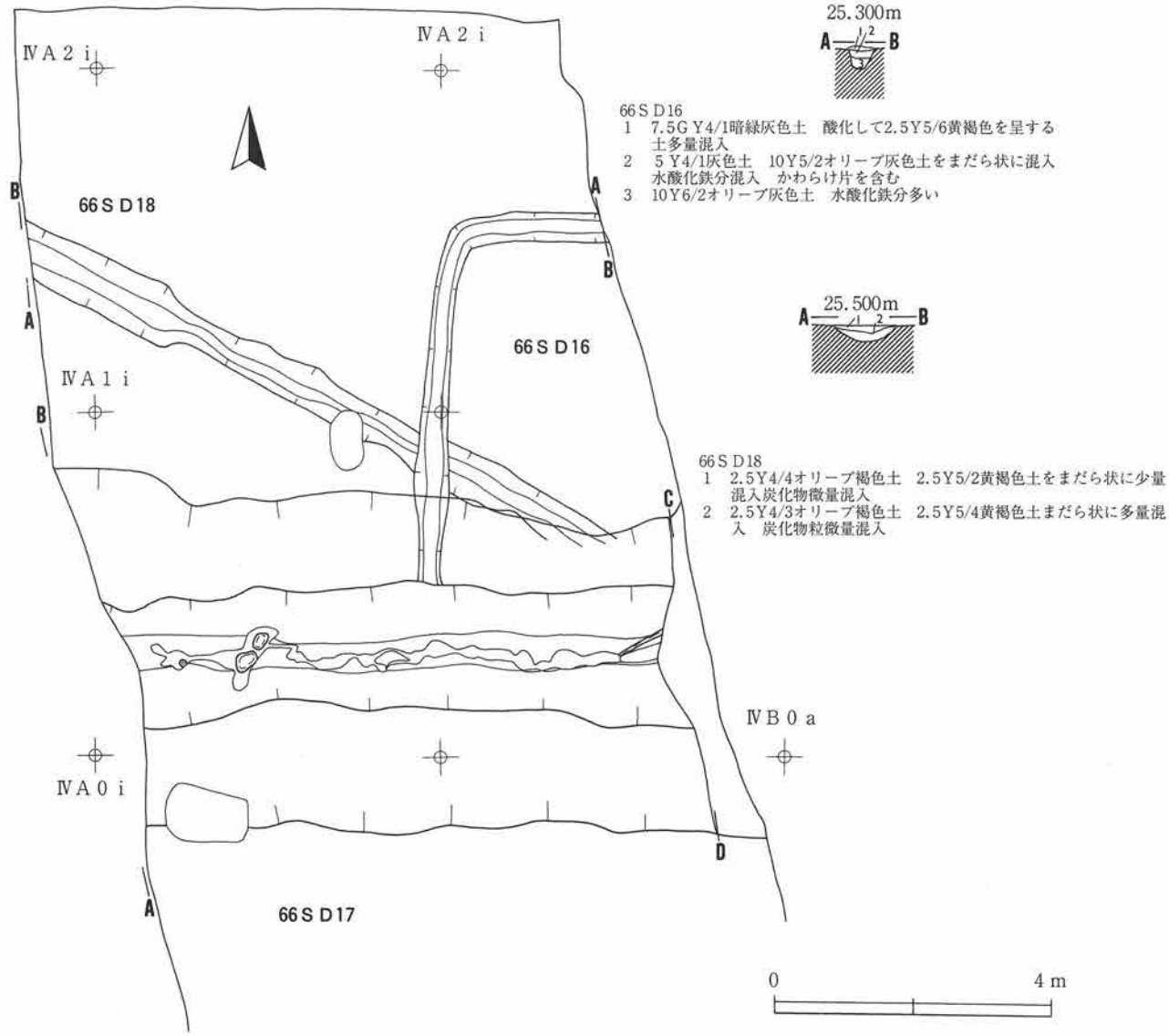
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。国道西側の66ＳＤ12と同一の溝である。底面の標高は北西側が高く、北西から南東へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

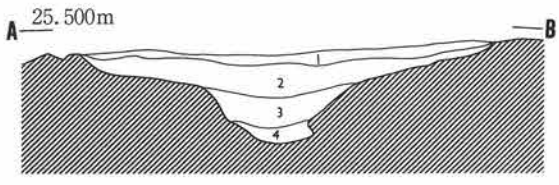
〔溝の性格〕不明である。

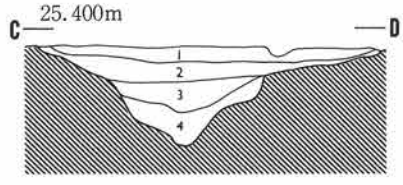
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる66ＳＤ16、66ＳＤ17より古いことから、12世紀前半所属の可能性が



66SD16
1　7.5GY4/1暗緑灰色土　酸化して2.5Y5/6黄褐色を呈する土多量混入
2　5Y4/1灰色土　10Y5/2オリーブ灰色土をまだら状に混入　水酸化鉄分混入　かわらけ片を含む
3　10Y6/2オリーブ灰色土　水酸化鉄分多い

66SD18
1　2.5Y4/4オリーブ褐色土　2.5Y5/2黄褐色土をまだら状に少量混入炭化物微量混入
2　2.5Y4/3オリーブ褐色土　2.5Y5/4黄褐色土まだら状に多量混入　炭化物粒微量混入





66SD17（A－B）
1　5Y4/3暗オリーブ色土　炭化物粒少量混入　土器片含む
2　5Y5/3灰オリーブ色土　炭化物粒微量混入　土器片含む
3　5Y4/2灰オリーブ色土　炭化物粒少量混入　土器片含む
4　5Y4/3灰オリーブ色土　5Y5/4オリーブ色粘土まだら状に多量混入　5Y4/3暗オリーブ色砂多量混入　土器片含む

66SD17（C－D）
1　5Y4/3暗オリーブ色土　炭化物少量混入　水酸化鉄分多量混入　土器片少量含む
2　5Y5/2灰オリーブ色土　5Y5/2灰オリーブ色砂少量混入　水酸化鉄分多量に混入
3　5Y5/3灰オリーブ色土　炭化物粒微量混入　土器片含む
4　5Y4/2灰オリーブ色土　炭化物粒少量混入　土器片含む

第183図　D地区の溝①（66SD16～18）

高い。

66ＳＤ19（第184図、写真図版73）

〔位置〕ＶＢ２ｂ、３ｂ、４ｂに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地層の上から掘り込まれており、整地層より新しい。

〔平面形式〕46ＳＤ16と直接つながる溝である。上場は不整だが、下場は全体的にほぼ真直ぐである。底面の傾斜方向は明瞭でない。

〔埋土〕３層に分けられる。下部は砂質で流水により生成された層と考えられる。

〔出土遺物〕多くの遺物が出土した。以下列挙する。手づくねかわらけ（4107～4113、4116～4122、4124、4125、4127～4135、4138）、常滑産陶器甕（4206、4207、4209）、渥美産陶器甕（4211～4215）、須恵器系陶器壺（4216）、中国産白磁（4302）、丸瓦（4402）、平瓦（4407）、砥石（4502）が出土した。

〔溝の性格〕道路側溝である。ⅡＢ区から続く道路の西側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

66ＳＤ20（第185図、写真図版73）

〔位置〕ＶＡ４ｊ、５ｊ、ＶＢ４ａに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地以前に構築されている。また66ＳＤ21と重複するが本溝が古い。

〔平面形式〕やや蛇行するが全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は北西側が高く、北西から南東へ水が流れるようになっている。国道西側の66ＳＤ６につながる溝である。埋没沢の縁に沿って構築されている。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕沢の埋立整地以前、おそらく12世紀前半の所属である。

66ＳＤ21（第185図、写真図版73）

〔位置〕ＶＢ４ａに位置する。

〔重複〕沢の埋立整地以前に構築されている。また66ＳＤ20と重複するが本溝が新しい。

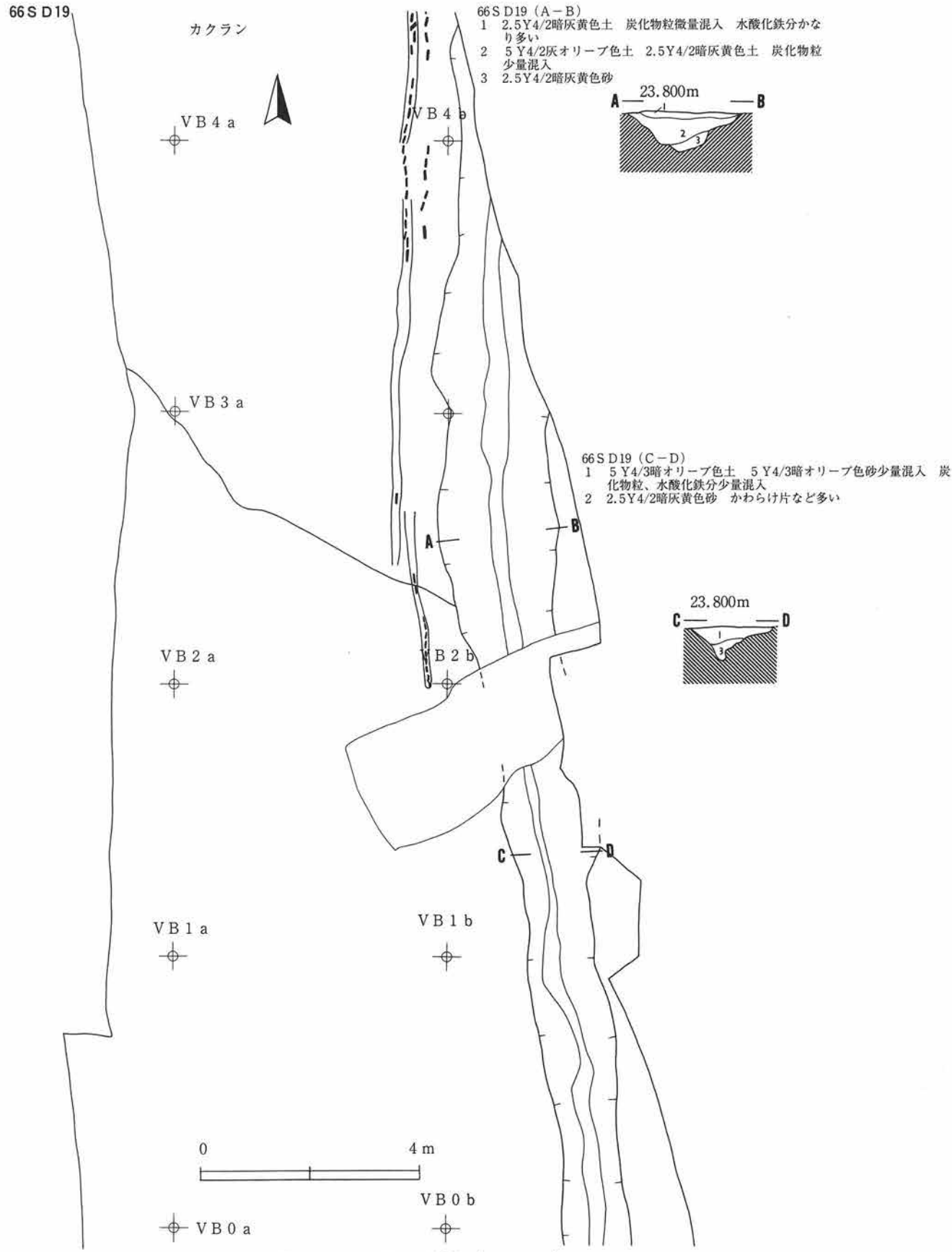
〔平面形式〕Ｌ字形を呈する。底面の傾斜方向は不明瞭である。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

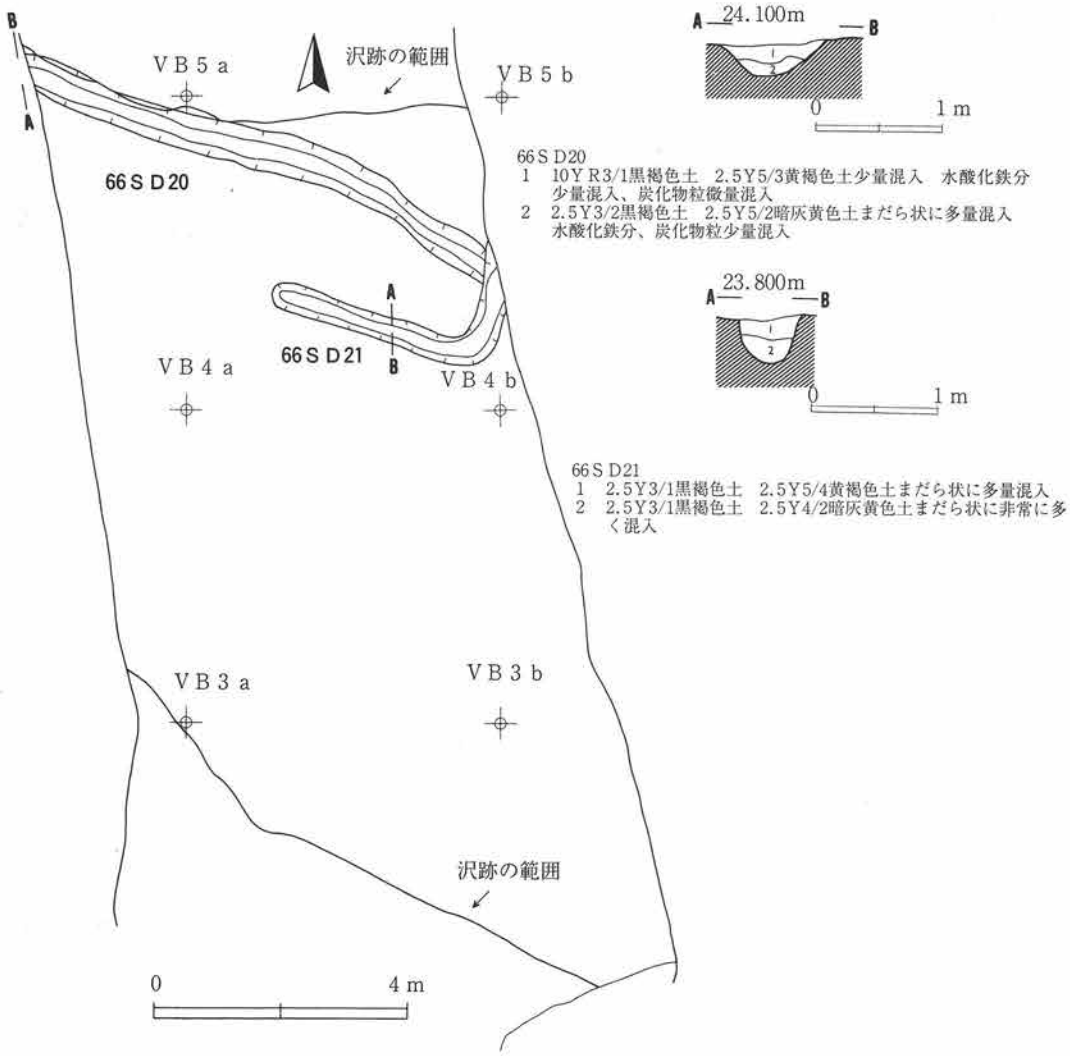
〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕沢の埋立整地以前、おそらく12世紀前半の所属である。



第184図　D地区の溝②（66SD19）



第185図　D地区の溝③（66SD20・21）

5　池

662号池（第186図、写真図版74）

〔位置〕VA3j、4j、VB3a、4aに位置する。

〔重複〕埋没沢を埋め立てた整地層を掘りぬいて構築されており、沢の埋立整地より新しい。

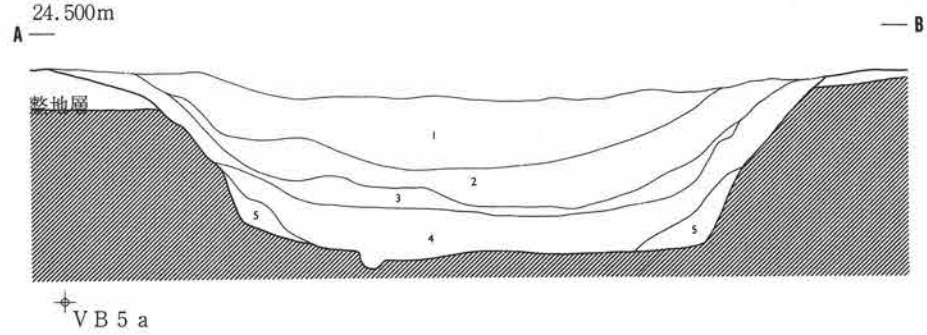
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁は斜めに立ち上がる。なお西側が調査区域外にのびており、全体のプランは検出していない。

〔埋土〕5層に分けられる。全体的に自然堆積と考えられる。

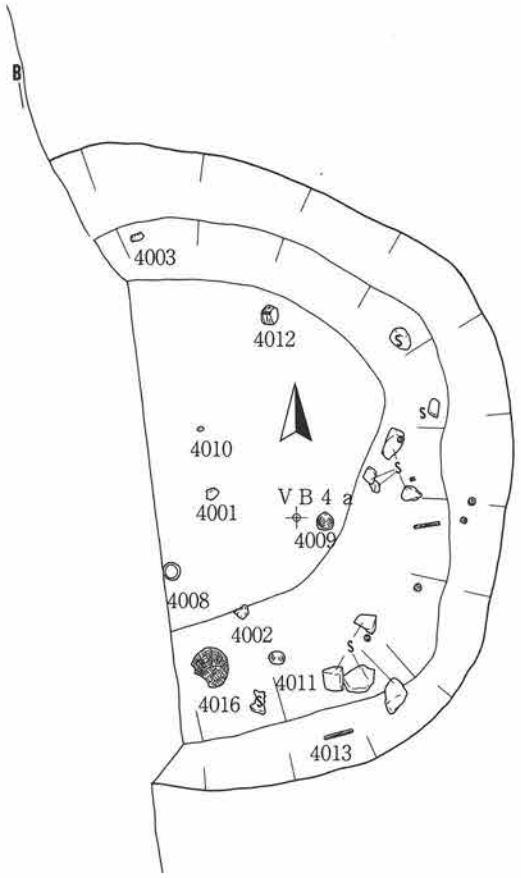
〔出土遺物〕１層中から木製の皿（4008）と漆塗りの木製円盤（4010）が出土している。また２層中から常滑産陶器の甕片（4007）、中国産白磁壺（4305）と漆器椀（4009）、曲物（4012）が出土している。３層中からは東北地方在地産と推測される瓷器系陶器の甕？片（4002、4003）と常滑産？の片口鉢片が出土した。４層中からは東北地方在地産と考えられる瓷器系陶器の片口鉢片（4001）と常滑産甕片（4006）、中国産白磁壺（4306、4307）、曲物蓋？（4012）が出土している。また埋土中から常滑産の片口鉢片（4005）と笹塔婆（4013）、ざる（4016）が出土している。

〔遺構の性格〕不明であるが、生活に必要な水を確保しておくための「水場」といったような施設の可能性が高い。

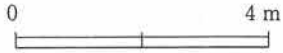
〔年代〕12世紀後半の整地層を掘りぬいて構築されており、12世紀より後に所属する遺構である。出土遺物



662号池跡



662号池跡
1　2.5Y3/1黒褐色土　水酸化鉄分少量含む　しまりなし
2　5Y2/2オリーブ黒色土　5Y4/1灰色土、5Y2/2オリーブ黒色砂すじ状に混入　しまりなし　木くず混入
3　5Y3/1オリーブ黒色砂　水酸化鉄分混入　木製品出土
4　7.5Y3/1オリーブ黒色土　しまりなし
5　5Y3/1オリーブ黒色土　5Y3/1オリーブ黒色砂全体に多量混入
整地層　2.5Y3/1黒褐色土　10Y6/2オリーブ灰色土まだら状に多量混入　水酸化鉄分多量混入　炭化物粒少量混入



第186図　D地区の池（662号池）

に13世紀後半～14世紀前半と考えられる東北地方在地産の瓷器系陶器片があり、13世紀後半～14世紀前半頃の所属の遺構と考えられる。

6　塀

66ＳＡ３（第187図、写真図版74）

〔位置〕ＶＢ２ａ、３ａ、４ａに位置する。

〔重複〕沢跡を埋め立てた整地層の上に構築されている。また直接重複しないが、本塀から約30cmほど東側に平行する形で66ＳＡ４が存在する。あまりに接近しており、前後関係は不明であるがこれとは同時存在ではない。

〔形式〕掘方が確認できた部分では幅約14cmで、断面形がＵ字形の掘方である。板材は幅約２cm、長さ約20cmほどである。断面の観察では板材の先端はやや尖っている。板材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。

〔埋土〕掘方の埋土は１層ないし２層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕板塀である。道路側溝と平行な位置にあり同時存在と考えられる。道路から屋敷を区画し、また道路から見えないようにする目隠し塀と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

66ＳＡ４（第187図、写真図版74）

〔位置〕ＶＢ２ａ、３ａ、４ａに位置する。

〔重複〕沢跡を埋め立てた整地層の上に構築されている。また直接重複しないが、本塀から約30cmほど西側に平行する形で66ＳＡ３が存在する。あまりに接近しており、前後関係は不明であるが、これとは同時存在ではない。

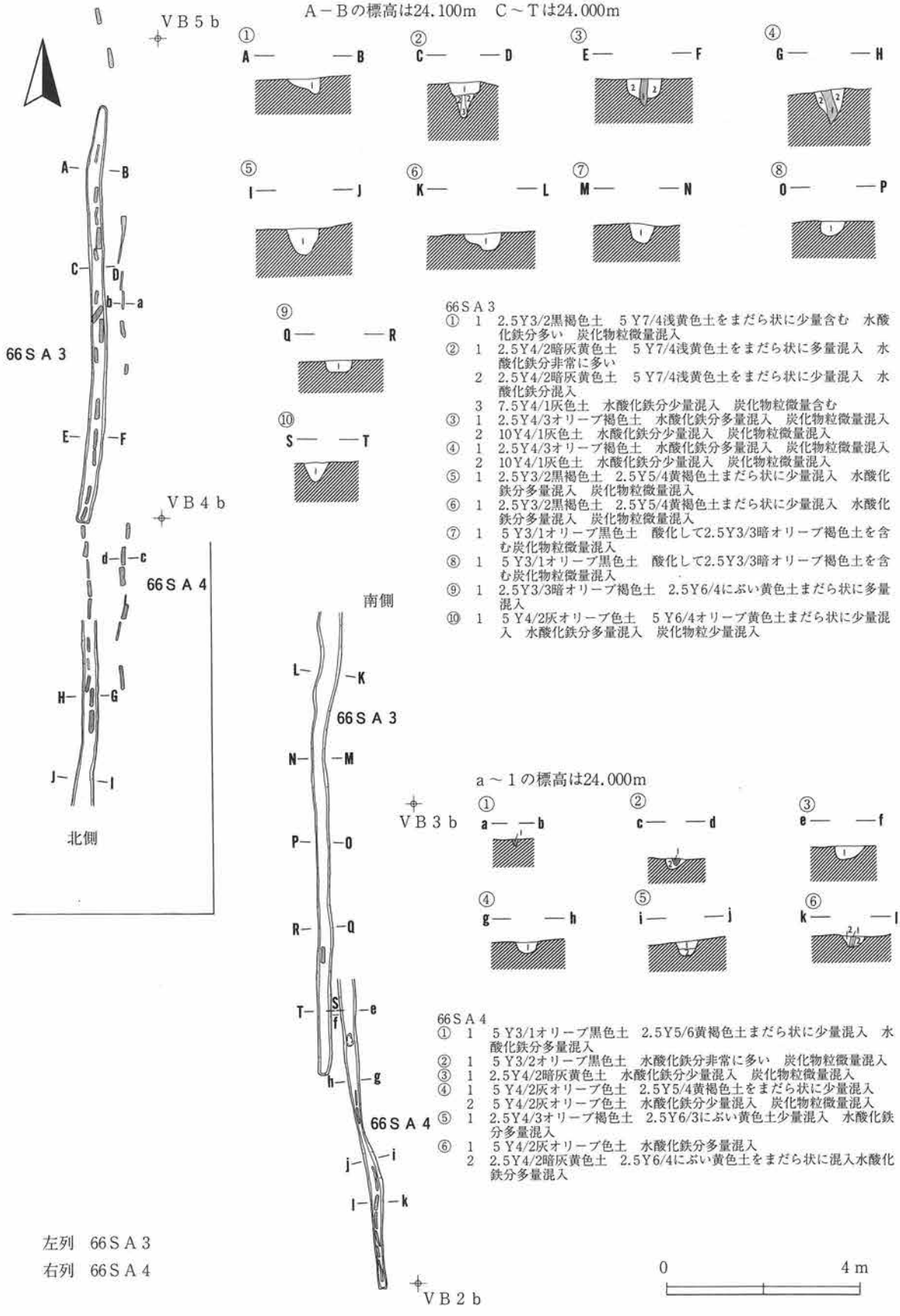
〔形式〕掘方が確認できた部分では幅約13cmで、断面形がＵ字形の掘方である。板材は幅約２cm、長さ約20cmほどである。板材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。

〔埋土〕掘方の埋土は１層ないし２層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕板塀である。道路側溝と平行な位置にあり同時存在と考えられる。道路から屋敷を区画し、また道路から見えないようにする目隠し塀と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属である。



第187図　D地区の塀（66SA3・4）

D地区柱穴計測表①

柱穴番号	深さ(cm)	底面の標高(m)	建物番号
66P215	19.0	24.64	66SB22
〃P216	6.7	24.79	66SB24
〃P217	48.2	24.42	66SB21
〃P218	24.6	24.65	66SB25
〃P219	26.2	24.62	66SB27
〃P220	47.9	24.41	66SB20
〃P221	43.9	24.43	66SB23
〃P222	25.3	24.64	
〃P223	27.9	24.60	66SB26
〃P224	43.4	24.46	66SB22
〃P225	36.7	24.53	66SB28
〃P226	10.1	24.72	
〃P227	18.3	24.64	66SB30
〃P228	9.3	24.69	
〃P229	29.9	24.49	66SB21
〃P230	26.9	24.52	66SB26
〃P231	9.5	24.68	66SB25
〃P232	36.0	24.42	66SB23
〃P233	23.9	24.53	66SB27
〃P234	39.1	24.38	66SB20
〃P235	28.2	24.57	66SB21
〃P236	24.1	24.60	66SB29
〃P237	43.0	24.48	66SB30
〃P238	10.2	24.80	66SB24
〃P239	10.2	24.82	66SB28
〃P240	13.8	24.76	66SB22
〃P241	35.8	24.64	66SB21
〃P242	21.0	24.45	66SB28
〃P243	49.3	24.57	66SB27
〃P244	7.6	25.00	
〃P245	21.0	24.73	66SB24
〃P246	39.1	24.51	66SB21
〃P247	28.5	24.58	66SB29
〃P248	35.5	24.52	66SB23
〃P249	30.9	24.56	66SB25
〃P250	49.9	24.36	66SB27
〃P251	38.6	24.51	66SB23
〃P252	32.1	24.59	66SB27
〃P253	55.9	24.49	66SB23
〃P254	28.0	24.80	66SB18
〃P255	54.4	24.51	66SB20
〃P256	56.6	24.29	66SB35
〃P257	37.4	24.43	66SB31
〃P258	18.2	24.58	
〃P259	20.4	24.55	66SB34
〃P260	13.8	24.54	66SB30
〃P261	12.3	24.41	66SB34
〃P262	33.1	24.18	66SB36
〃P263	5.5	24.51	66SB32
〃P264	16.0	24.42	66SB31
66P265	20.4	24.34	66SB33
〃P266	16.2	24.94	66SB31
〃P267	13.2	24.45	66SB30
〃P268	10.4	24.53	66SB30
〃P269	30.2	24.26	66SB34
〃P270	11.0	24.63	
〃P271	52.6	24.33	66SB29
〃P272	21.8	24.64	66SB26
〃P273	7.9	24.46	66SB31
〃P274	11.2	24.48	66SB36
〃P275	17.4	24.51	66SB26
〃P276	27.0	24.50	66SB24
〃P277	5.6	24.68	
〃P278	23.7	24.52	66SB26
〃P279	21.3	24.62	66SB34
〃P280	11.3	24.65	
〃P281	44.1	24.33	66SB28
〃P282	25.1	24.48	66SB23
〃P283	7.3	24.63	66SB29
〃P284	32.4	24.41	66SB30
〃P285	20.7	24.37	66SB36
〃P286	24.7	24.33	66SB37
〃P287	21.6	24.30	66SB31
〃P288	26.8	24.29	
〃P289	20.5	24.36	66SB34
〃P290	42.7	24.14	
〃P291	50.2	24.06	66SB35
〃P292	10.8	24.44	
〃P293	16.5	24.38	66SB37
〃P294	19.6	24.35	66SB38
〃P295	9.2	24.44	
〃P296	18.5	24.34	66SB32
〃P297	15.1	24.37	66SB37
〃P298	31.6	24.16	
〃P299	13.5	24.29	66SB31
〃P300	8.1	24.27	66SB33
〃P301	19.0	24.22	66SB33
〃P302	22.0	24.21	66SB38
〃P303	9.4	24.28	66SB38
〃P304	14.6	24.25	66SB40
〃P305	18.9	24.26	66SB33
〃P306	12.7	24.33	66SB31
〃P307	16.4	24.22	66SB39
〃P308	28.1	24.05	
〃P309	8.1	24.32	66SB34
〃P310	6.0	24.40	66SB37
〃P311	65.8	23.79	66SB35
〃P312	27.4	24.18	66SB40
〃P313	5.2	24.40	
〃P314	16.1	24.16	66SB39
66P315	13.1	24.23	
〃P316	31.7	24.07	66SB36
〃P317	36.0	24.05	66SB38
〃P318	14.5	24.31	
〃P319	23.6	24.20	66SB39
〃P320	14.4	24.11	66SB38
〃P321	28.1	23.99	66SB38
〃P322	16.4	24.15	66SB32
〃P323	22.1	24.08	66SB38
〃P324	18.0	24.14	66SB40
〃P325	29.8	24.04	66SB37
〃P326	11.7	24.25	
〃P327	35.5	23.81	66SB40
〃P328	12.2	24.07	66SB39
〃P329	10.3	24.13	
〃P330	47.5	24.60	66SB21
〃P331	33.8	24.72	
〃P332	53.6	24.58	66SB18
〃P333	56.3	24.50	66SB20
〃P334	28.4	24.79	66SB18
〃P335	42.5	24.67	66SB23
〃P336	45.3	24.63	
〃P337	43.1	24.61	66SB 2
〃P338	31.9	24.74	66SB17
〃P339	30.6	24.74	66SB18
〃P340	27.7	24.79	66SB20
〃P341	15.6	24.88	66SB17
〃P342	23.1	23.89	66SB39
〃P343	24.0	23.81	66SB 4
〃P344	26.3	23.81	
〃P345	28.1	23.79	
〃P346	40.7	23.54	
〃P347	33.6	23.61	
〃P348	18.5	23.89	66SB 4
〃P349	37.0	27.30	66SB19
〃P350	38.7	24.73	66SB 3
〃P351	58.7	24.48	66SB23
〃P352	26.8	24.19	66SB16
〃P353	18.9	24.89	66SB17
〃P354	33.3	24.74	66SB19
〃P355	25.7	24.83	66SB19
〃P356	21.4	24.14	66SB40
〃P357	9.4	23.81	66SB 5
〃P358	23.8	23.79	66SB 6
〃P359	1.8	23.85	
〃P360	8.0	23.83	
〃P361	27.1	23.73	
〃P362	23.4	23.71	
〃P363	19.9	24.25	66SB37
〃P364	25.8	53.83	

D地区柱穴計測表②

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P365	28.6	24.18	
〃P366	15.3	24.25	66SB32
〃P367	18.0	24.16	
〃P368	欠番		
〃P369	14.7	24.45	
〃P370	11.9	24.65	
〃P371	32.7	24.26	66SB35
〃P372	24.5	24.49	66SB30
〃P373	32.2	24.57	66SB23
〃P374	36.5	24.36	66SB28
〃P375	欠番		
〃P376	11.1	24.86	66SB25
〃P377	36.9	24.53	
〃P378	13.6	24.77	
〃P379	38.6	24.95	
〃P380	19.0	24.77	66SB22
〃P381	16.2	24.91	66SB22
〃P382	10.5	24.47	

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P383	28.3	24.76	
〃P384	22.0	24.05	
〃P385	16.9	23.89	
〃P386	15.2	24.70	
〃P387	33.2	23.26	
〃P388	31.0	23.08	
〃P389	13.2	25.52	
〃P390	25.7	23.47	
〃P391	21.4	23.59	
〃P392	28.8	22.98	
〃P393	欠番		
〃P394	26.6	23.80	
〃P395	15.6	23.72	
〃P396	23.9	23.69	
〃P397	20.6	23.54	
〃P398	23.2	23.58	
〃P399	16.2	23.58	
〃P400	33.5	23.41	

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P401	39.4	23.50	
〃P402	11.7	23.61	
〃P403	23.6	23.65	
〃P404	13.9	23.78	
〃P405	9.5	23.70	
〃P406	欠番		
〃P407	欠番		
〃P408	9.2	24.18	
〃P409	欠番		
〃P410	20.5	23.30	
〃P411	29.1	23.00	
〃P412	16.8	23.16	
〃P413	33.9	23.10	
〃P414	30.8	23.03	
〃P415	32.9	23.04	
〃P416	16.9	24.40	66SB33
〃P417	11.3	24.44	66SB32

第３節　出土遺物

１　66２号池出土遺物（第188～190図、写真図版177・178）

２号池は13世紀後半～14世紀前半に属する遺構である。ここでは２号池の出土品を他と区別して報告する。なお中国陶磁器のみは、少量でいずれも12世紀に属する遺物であるので、他の中国陶磁器とまとめて報告している。

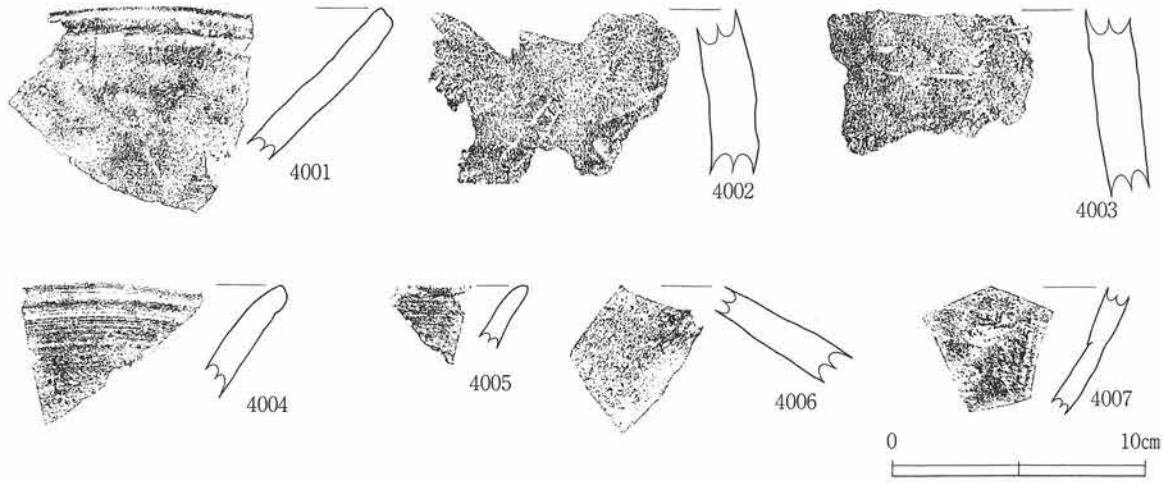
（１）国産陶器（第188図、写真図版177）

4001～4003は13世紀後半～14世紀前半の東北地方産の瓷器系陶器である。4001は片口鉢である。明赤褐色で砂粒混じりの硬い胎土である。4002、4003は同一個体と考えられる。器種は大形の甕である。表面は青黒色を呈し、断面と内面の色調は明赤褐色である。胎土は砂粒混じりで硬いが、4001に比較すると粗い。4001～4003の窯の特定するの難しいが、地理的な近さを考慮すると伊豆沼窯の可能性が高い。

4004、4005は常滑産の３型式の片口鉢である。4006、4007は常滑産の甕で２～３型式に属する。いずれも12世紀のものであり、池の埋没の過程で混入したものである。

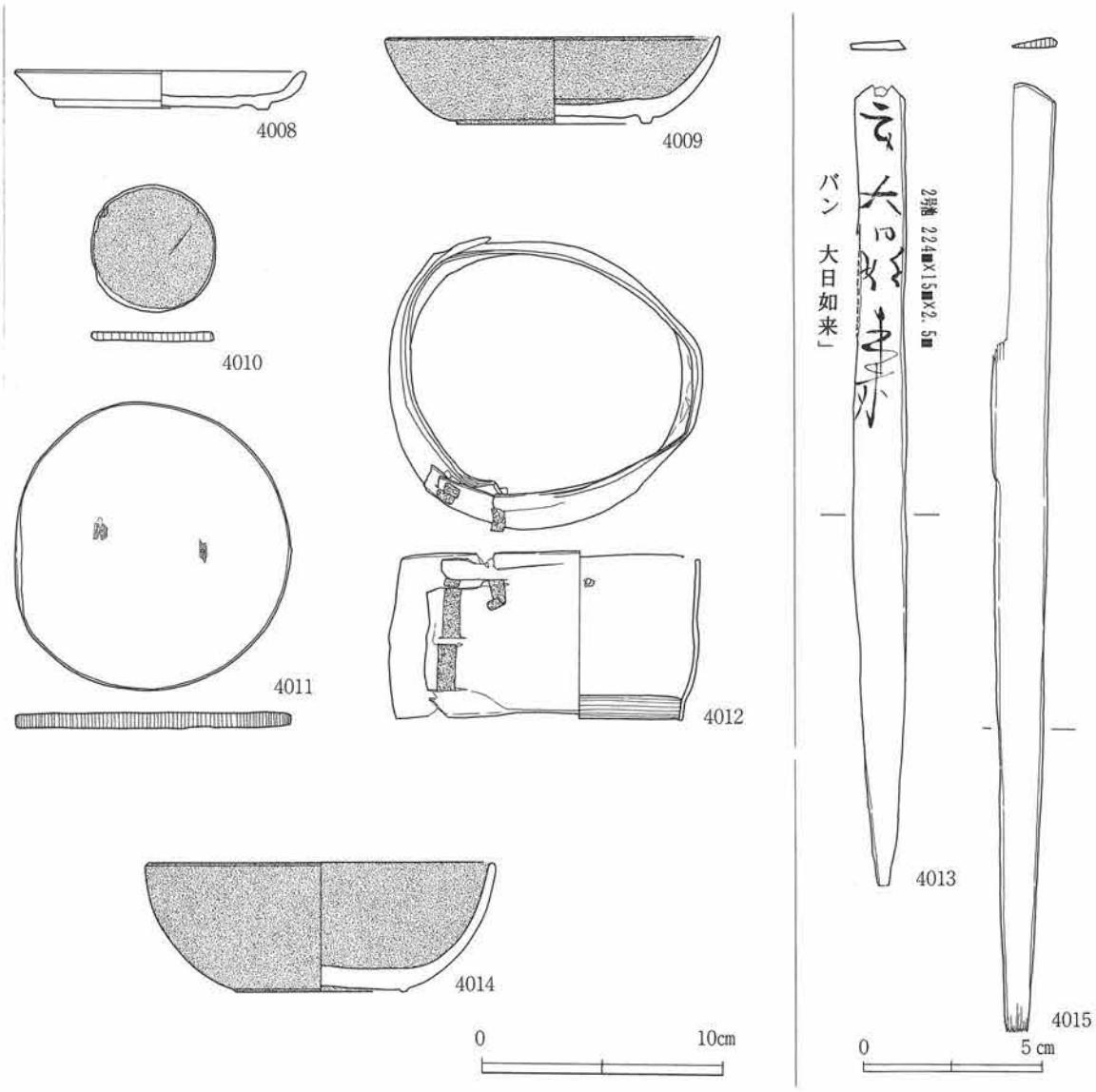
（２）木製品（第189・190図、写真図版177・178）

4008は木製の皿である。漆塗りは認めらず白木の製品である。4009は漆器椀である。内外面黒漆塗りである。外底面には漆塗りが施されていない。4010は円形の板の両面に黒漆を塗ったものである。側面には漆がみられない。用途は不明である。4011は曲物の蓋と考えられる。円形の板に釘の痕跡が２箇所みられる。4012は小型の曲物である。土圧のために形が歪んでいる。4013は笹塔婆である。墨書で大日如来の種子と大日如来の文字が記されている。頭部に刻みが無く、12世紀の笹塔婆と形態が異なっている。4016はざるである。材質については未同定である。土圧により本来の形状は判じ難いが、底径は約21cm、器高は12cm以上と推定される。



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
4001	瓷器系	片口鉢	口縁	66　２池４層	13C後半～14C前半	明赤褐色	伊豆沼窯産に似る
4002	〃	甕？	体部	66　２池３層	〃	明青灰色	伊豆沼窯産に似る　軟質な胎土
4003	〃	〃	体部	66　２池３層	〃	青黒色	4002と同一個体か
4004	常滑？	片口鉢	口縁	66　２池３層	３型式？	灰色	
4005	常滑	〃	〃	66　２池南側埋土	〃	黒色	
4006	〃	甕	肩部	66　２池４層	２～３型式	２～３型式	オリーブ灰色
4007	〃	〃	体下	66　２池２層	２～３型式	黒褐色	

第188図　66２号池出土遺物①（陶器）



番号	器種	出土位置	樹種	その他
4008	皿	2号池1層	ブナ属の一種	漆塗りがない
4009	漆器椀	2号池2層	ブナ属の一種	外底面漆塗りなし
4010	円盤状	2号池1層	スギ	両面漆塗り
4011	曲物蓋？	2号池4層	スギ	釘穴2ヶ所あり
4012	曲物	2号池2層	スギ（底板）	側板の樹種はヒノキ属の一種
4013	笹塔婆	2号池埋土	スギ	墨書「（バン）大日如来」
4014	漆器椀	66ＳＥ１　4層	ハリギリ	外底面漆塗りあり
4015	笹塔婆状	66ＳＥ１底面	アスナロ	墨書確認できず

第189図　66 2号池出土遺物②（木製品）

第190図　662号池出土遺物③（ざる）

2　かわらけ（第191・192図、写真図版178～180）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊3　Xかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。下に分類基準を示す。

手づくねかわらけ

C類（口縁部二段なで技法）

C_3類　上段のつまみは弱くいくらか内湾ぎみ。上段と下段のなで面はほぼ同じ幅である。口唇部断面形は丸い。

C_4類　上段を強くつまむ。上段は下段のなで面より幅が狭い。口唇部断面形は丸い。

C_5類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

$C_{5'}$類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形だが面取り部がくびれる。

D類（口縁部一段なで技法）

D_2類　口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部断面形は丸い。

D3類　口縁部は弱く内湾気味。口唇部断面形は丸い。

D4類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

D4′類　D4類に類似。口唇部面取り後、口縁全体を一度なでる。断面形はほぼ三角形。

ロクロかわらけ

Rd　皿型の大型品

Rb　皿型の小型品（小型品は皿型とする。）

Rb　碗型

口縁部の形態

0類　口縁部が底部から丸く立ち上がるもの

1類　口縁部が底部からすぐにほぼまっすぐに立ち上がるもの

2類　口縁部が内湾し、均等の割合で口縁部、底部の二つに二分できるもの。

段の有無と段の数

0　段はなく、表面は滑らかである。

1　段はないが、表面には粗い調整痕がある。

2　段が2段ある。

3　段が3段ある。

4　段が4段ある。

5　段が5段以上ある。

底部の形状

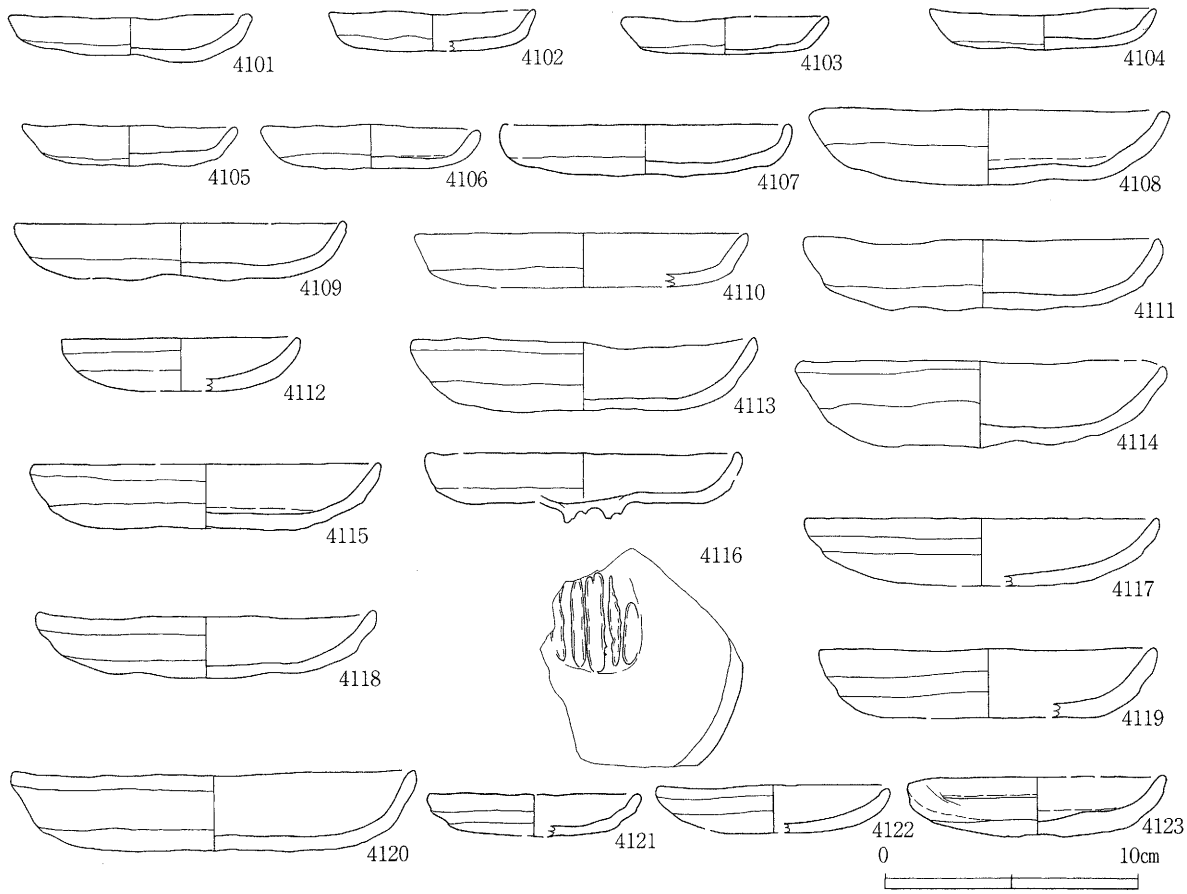
疑似高台がない場合はダッシュ（′）をつける。

疑似高台がある場合はダッシュ（′）をつけない。

以上の要素を合わせてRd01′、rd10のように表す。

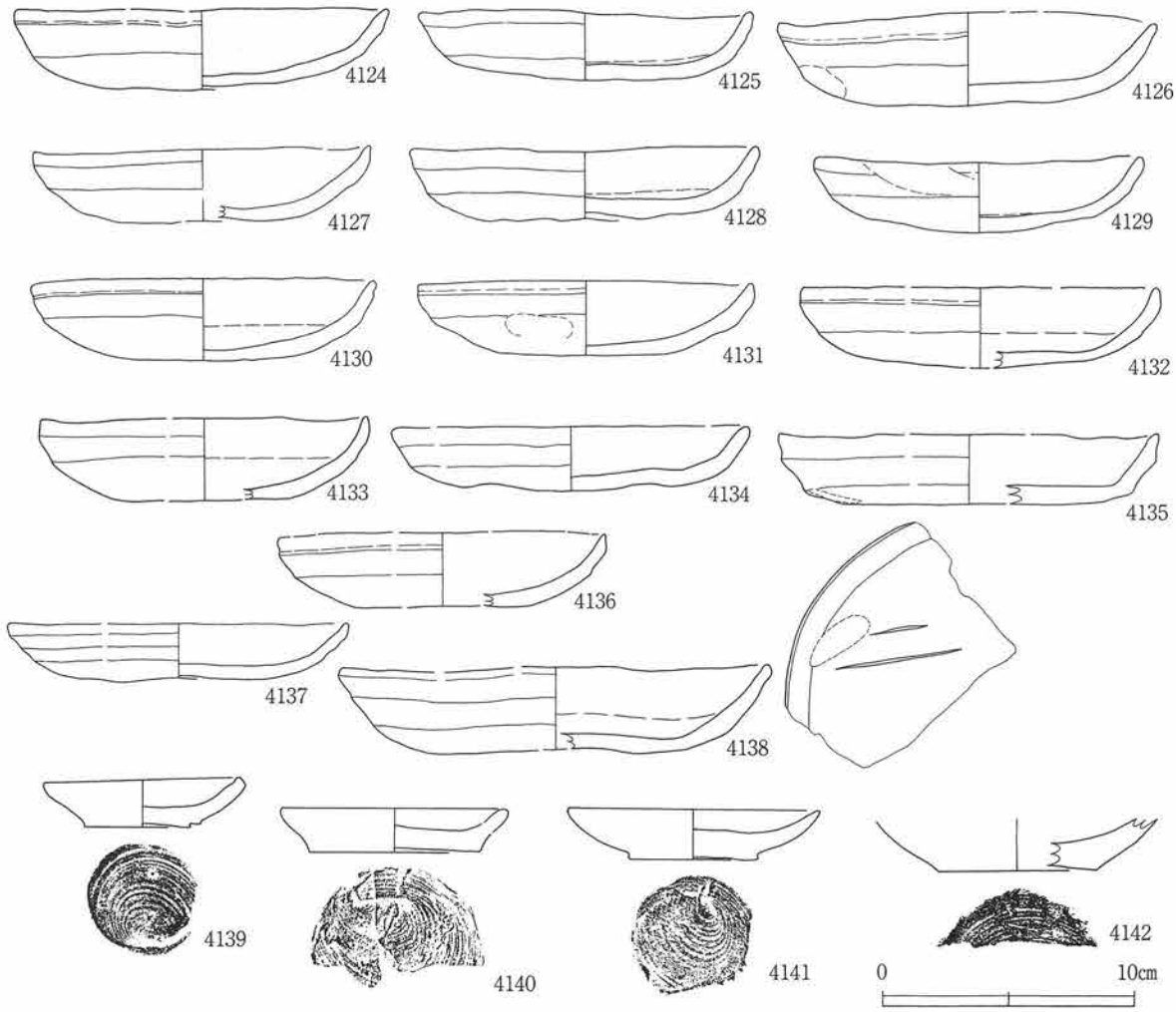
12世紀のかわらけは、手づくねかわらけ38点、ろくろかわらけ4点を図示した。他に不掲載のかわらけが64kg出土している。本調査区でかわらけが集中して出土した遺構は、道路側溝の66SD17である。手づくねかわらけはC3類が4点、C4類は16点、C5類は2点、D2類が4点、D3類が7点、D4類が4点ある。

ろくろかわらけはrdが2点とRdが2点である。ロクロかわらけの4139と4141は沢の埋立ての土の中から出土している。



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
4101	VB2e地山上	D_2	9.3		1.9	指	すのこ痕	100	細砂少量	
4102	66SD17 3層(ⅦA0i)	〃	8.2		1.6	指		30	〃	
4103	〃	〃	8.0		1.5	〃		40	〃	
4104	〃	〃	8.9		1.65	〃		60	〃	
4105	〃	D_3	8.4		1.65	〃		60	〃	
4106	〃	〃	8.6		1.8	〃	すのこ痕	100	〃	
4107	66SD19底面(VB1b)	〃	11.2		2.1	不明		40	〃	摩耗している
4108	66SD19埋土上部(VB2b)	〃	13.8		3.0	指、ヘラ	すのこ痕	70	〃	
4109	〃	〃	13.0		2.3	不明		60	〃	摩耗している
4110	〃	〃	13.0		2.2	指？		40	〃	
4111	〃	〃	14.0		2.9	指？		60	〃	
4112	〃	D_4	9.2		2.1	不明	不明	40	〃	摩耗している
4113	〃	〃	13.6		3.0	指？	すのこ痕	60	〃	摩耗している
4114	66SK31 2層	〃	14.4		3.5	指	すのこ痕	100	〃	
4115	66SD17 3層(ⅦA0i)	〃	13.8		2.6	指	すのこ痕	70	〃	
4116	66SD19 3層(VB3b)	D_3	12.4		2.8	指	すのこ痕	40	〃	
4117	66SD19埋土上部(VB2b)	C_3	14.0		3.2	不明	不明	40	〃	摩耗している
4118	66SD19 3層(VB1b)	〃	13.4		2.65	ヘラ？		50	〃	
4119	66SD19埋土上部(VB2b)	〃	13.2		2.8	指		40	〃	摩耗している
4120	66SD19 3層(VB2b)	〃	16.0		3.2	指	すのこ痕	60	〃	内面油煙付着
4121	66SD19 3層(VB3b)	C_4	8.4		1.7	〃		30	〃	
4122	66SD19埋土上部(VB3b)	〃	9.0		1.9	不明	不明	50	〃	摩耗している
4123	66SD17埋土	〃	10.2		2.4	指	すのこ痕	80	〃	

第191図　D地区のかわらけ①



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
4124	66SD19埋土上部(VB2b)	C_4	14.8		3.3	指		60	細砂少量	内面油煙付着
4125	66SD19 3層(VB2b)	〃	13.1		2.8	指	すのこ痕	80	〃	
4126	66SK31 4層	〃	14.3		3.8	不明	〃	80	〃	
4127	66SD19 3層(VB1b)	〃	13.4		3.0	指	〃	50	〃	
4128	66SD19埋土上部(VB2b)	〃	13.8		3.0	ヘラ	すのこ痕	90	〃	
4129	66SD19底面(VB1b)	〃	12.9		3.0	指、ヘラ	〃	50	〃	
4130	66SD19 3層(VB1b)	〃	13.6		3.3	指	〃	60	〃	
4131	66SD19 3層(VB1b)	〃	13.2		3.0	〃	〃	30	〃	
4132	66SD19埋土上部(VB2b)	〃	14.0		3.2	〃		30	〃	
4133	66SD19 3層(VB2b)	〃	13.0		3.3	〃	すのこ痕	30	〃	
4134	66SD19埋土上部(VB2b)	〃	14.1		2.6	不明		30	〃	摩耗している
4135	66SD19 3層(VB3b)	〃	13.0		2.8	指？	すのこ痕	40	〃	
4136	66SD17 3層(ⅦA0i)	〃	15.0		3.0	指	〃	30	〃	
4137	66SD17 2層(ⅦA0i)	C_5	13.5		2.0	〃	〃	30	〃	
4138	66SD19埋土(VB1b)	〃	17.0		3.55	〃	〃	70	〃	
4139	沢整地層中(VB3a)	rd	7.8	6.6	2.0	ロクロ	回転糸切	70	〃	
4140	66SD17 3層(ⅦA0i)	〃	8.8	6.8	1.75	〃	〃	60	〃	
4141	沢整地層中(VB3a)	Rd	10.0	5.0	2.0	〃	〃	40	〃	
4142	66SK35埋土	Rd0	—	6.4	—	〃	〃	30	〃	

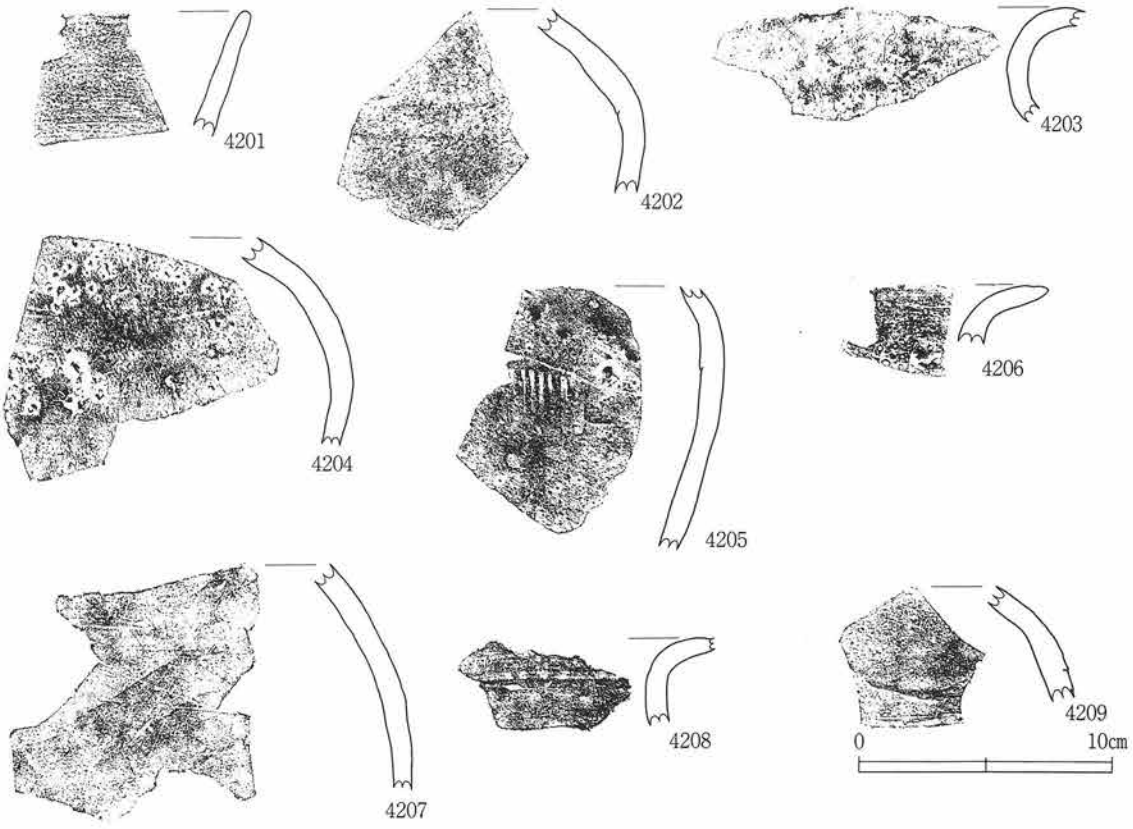
第192図　D地区のかわらけ②

3　国産陶器（第193・194図、写真図版180）

（1）常滑産陶器（第193図、写真図版180）

本調査区から出土した常滑産陶器は中野・赤羽生産地編年の2型式と3型式に相当するものが出土している。だが破片資料を2形式と3形式に分けるのは分類するのはかなり難しく。どちらに分類されるのか不明なものがほとんどである。図示したのは片口鉢1点、広口壺6点、甕2点である。他に掲載しなかった常滑産陶器片が41片出土している。

4201は口縁部形態から3型式に属すると考えられる。内外面に灰をかぶっている。4203、4208の広口壺は口縁部の形態から2型式に属する。どちらも口唇部を欠損している破片である。4206は甕の口縁部である。頸部の形状が不明であり、2型式、3型式の分類は難しい。口唇の内面はわずかに凹む。4202、4204、4205、4207、4209は体部の破片であり型式の分類は難しい。



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
4201	常滑	片口鉢	口縁	VB2b沢上面	3型式	灰黄色	
4202	〃	甕	肩	66SD17 3層(ⅦA0j)	2～3型式	暗オリーブ色	
4203	〃	甕	口縁	66SD17 3層(ⅦA0j)	2型式	暗オリーブ色	
4204	〃	〃	肩	66SD17 3層(ⅦA0j)	2～3型式	暗褐色	
4205	〃	〃	体上	66SD17埋土	〃	にぶい暗褐色	
4206	〃	〃	口縁	66SD19(VB3b)	〃	灰オリーブ色	
4207	〃	〃	体	66SD19 3層	〃	にぶい赤褐色	
4208	〃	〃	口縁	66SD17 3層(ⅦA0i)	2型式	灰褐色	
4209	〃	〃	体上	66SD19埋土(VB2b)	2～3型式	灰色	

第193図　D地区の常滑産陶器

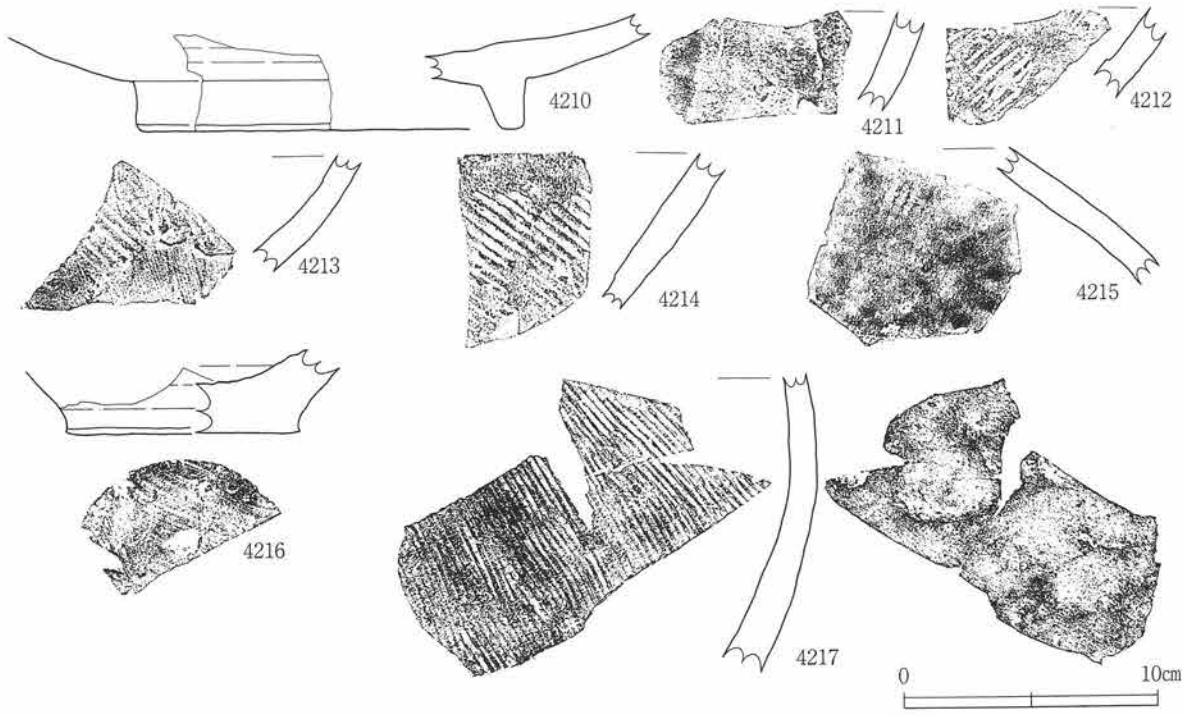
（2）渥美産陶器（第194図、写真図版180）

本調査区の渥美産陶器で図示したのは、片口鉢1点、甕5点である。他に不掲載の渥美産陶器片が6片出土している。

4210の片口鉢は高台の断面が角型である。内面は磨耗している。4211～4215は甕の体部破片である。4213、4214は同一個体と思われる。4215は外面全面に自然釉がかかっている。

（3）須恵器系陶器（第194図、写真図版180）

壺1点、甕1点の出土である。4216は壺の底部破片と思われる。外底面にはヘラ状の工具による擦痕がみられる。胎土は灰白色で緻密である。4217は甕の体部破片である。外面にはタタキ無目、内面にはアテ具痕がみられる。胎土は灰色で緻密である。

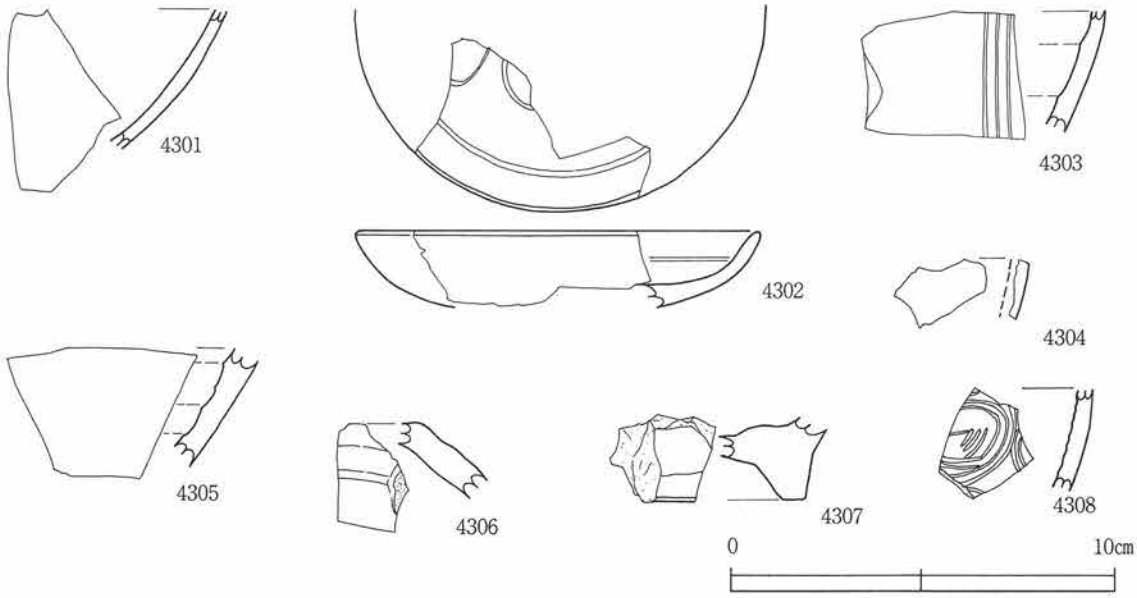


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
4210	渥美	片口鉢	底~体下	沢整地層中(VB2b)	12C	灰色	
4211	〃	甕	体下	66SD19埋土上(VB2b)	〃	灰色	
4212	〃	〃	体下	66SD19埋土上(VB2b)	〃	灰色	
4213	〃	〃	体下	66SD19埋土上(VB2b)	〃	灰色	4214と同一個体
4214	〃	〃	体下	66SD19埋土上(VB2b)	〃	灰色	
4215	〃	〃	体上	66SD19埋土上(VB2b)	〃	灰オリーブ色	
4216	須恵器系	壺	底部	66SD19埋土上(VB2b)	〃	灰色	
4217	〃	甕	体部	沢上面(VB3a)	〃	灰色	

第194図　D地区の渥美産、須恵器系陶器

4　中国産磁器（第195図、写真図版181）

本調査区で中国産磁器は白磁6点、青白磁2点の合計8点の出土である。4301は釉調が白磁と異なっており、一応青白磁として分類したがはっきりしない。碗の破片で体部は丸みを帯びている。4302は白磁のⅢで内面にヘラによる施文がある。外面の釉むらが著しい。4303は白磁の壺である。外面に3条の垂線があるが、化粧土が確認されずⅢ系と考えたい。二次的に被熱している。4305～4307は白磁のⅢ系の壺である。4308は青白磁の梅瓶である。外面にヘラによる文様が施されている。

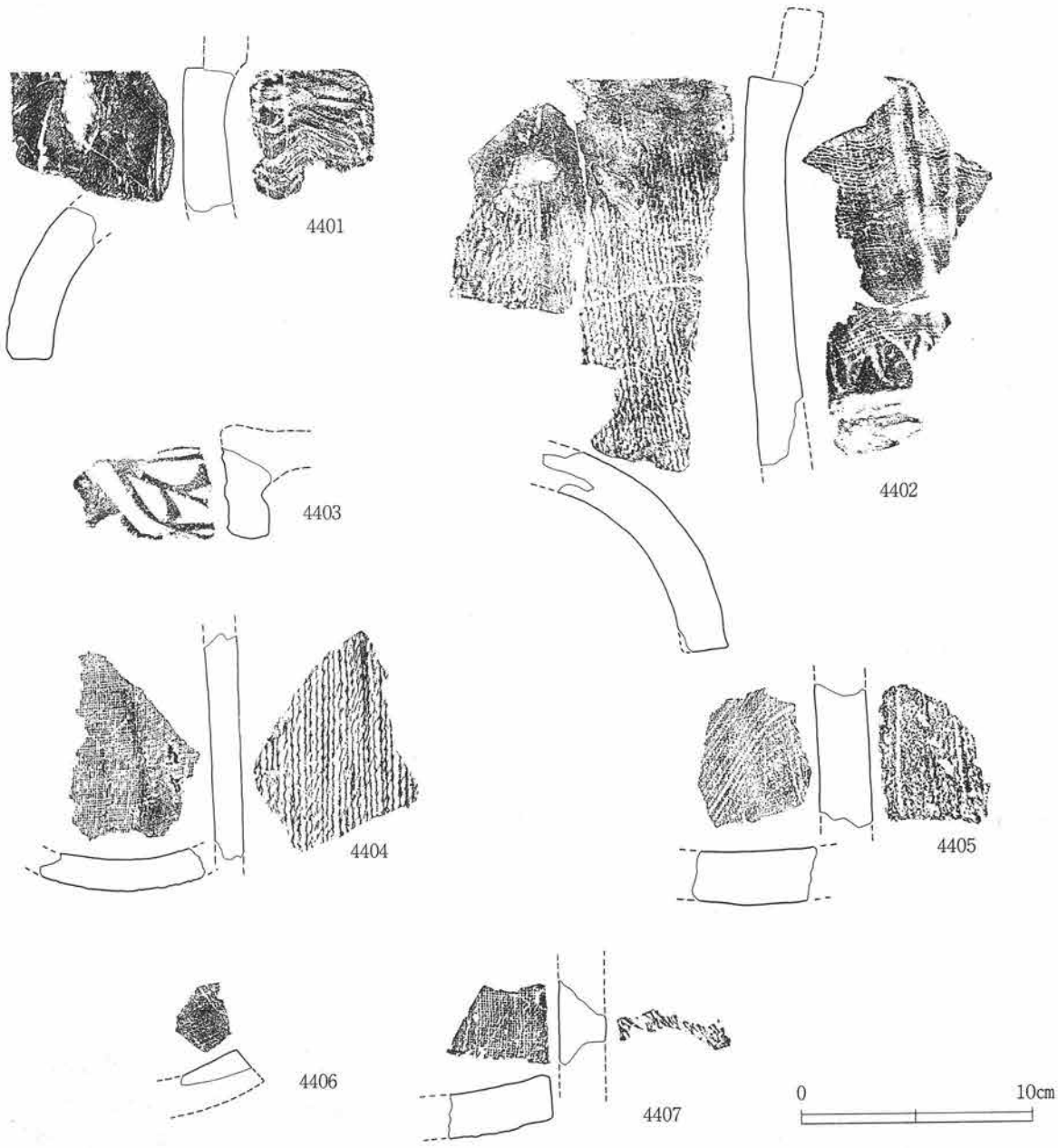


番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
4301	青白磁	碗	体部	66ＳＤ17　1層(ⅥA0j)	青白磁か	12Ｃ	
4302	〃	Ⅲ	口～体	66ＳＤ19埋土(ⅤB3b)	Ⅷ１ｂ（Ⅲ）	12Ｃ	
4303	〃	壺	体部	66ＳＤ17　3層(ⅥA0i)	Ⅲ系	12Ｃ	3条の垂線がある。
4304	〃	〃	体部	66ＳＤ17　3層(ⅥA0i)	〃	12Ｃ	
4305	〃	〃	体下	66　2池2層	〃	12Ｃ	
4306	〃	壺	肩	66　2池4層	〃	12Ｃ	
4307	〃	〃	底	66　2池4層	〃	12Ｃ	
4308	青白磁	梅瓶	体	66ＳＥ1確認面	青白磁	12Ｃ～	

第195図　Ｄ地区の中国産磁器

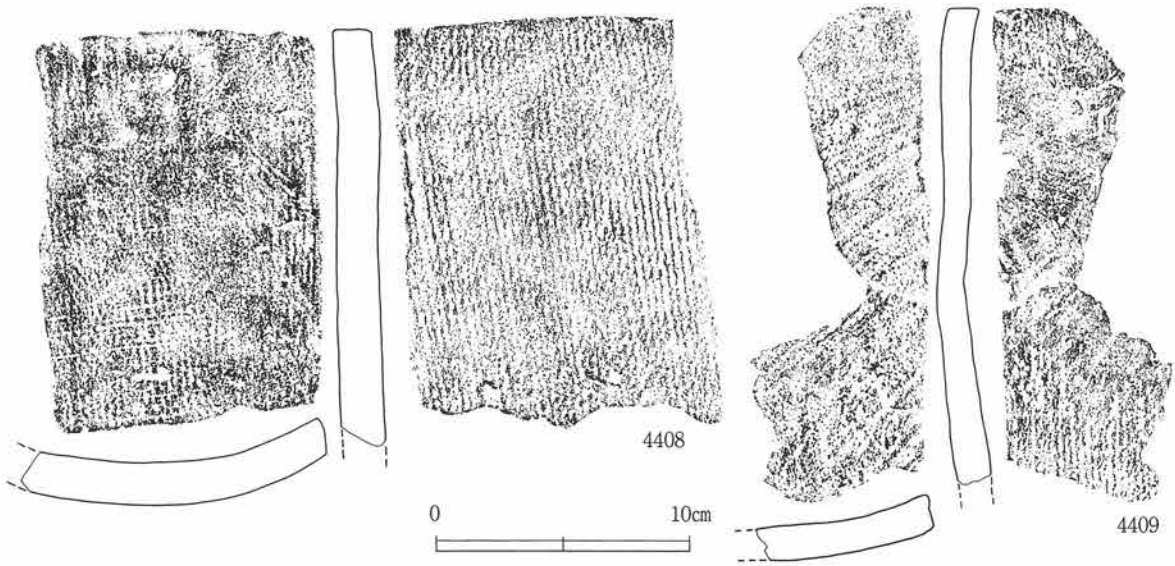
5　瓦（第196・197図、写真図版181）

12世紀の瓦が9点出土している。4401、4402は丸瓦である。どちらも玉縁部の一部が残っている。沢の埋立て整地層中からの出土である。埋立て時に混入したものである。4403は軒平瓦である。4404～4406は平瓦である。沢跡の埋立て整地層中から出土した。4407～4409も平瓦である。



番号	器種	出土位置	その他
4401	丸瓦	沢整地層中(VB3a)	
4402	〃	66SD19 3層(VB3b)	
4403	軒平瓦	沢整地層中(VB3a)	
4404	平瓦	沢整地層中(VB3a)	
4405	〃	〃	
4406	〃	〃	
4407	〃	66SD19埋土(VB3b)	

第196図　D地区の瓦①



番号	器種	出土位置	その他
4408	平瓦	沢整地層上面(VB3a)	
4409	〃	VB2a地山上	

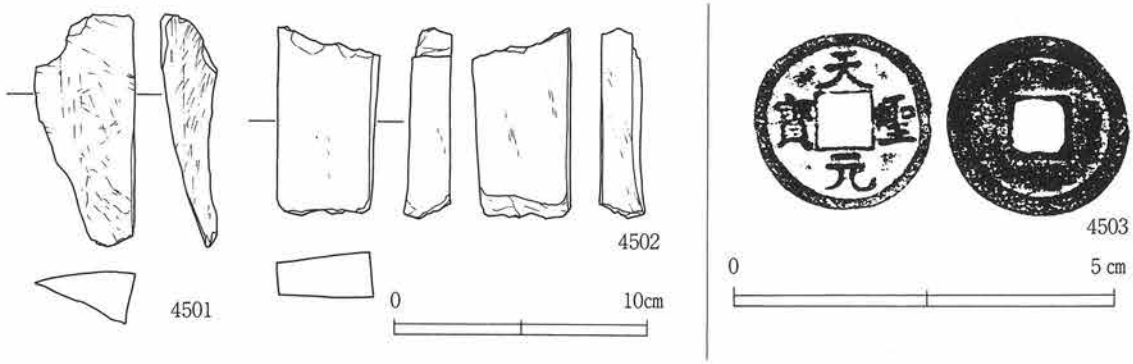
第197図　D地区の瓦②

6　石製品（第198図、写真図版181）

砥石が2点出土している。4501は66ＳＥ１から出土しており、井戸の年代観から13～14世紀のものと推測される。4502は12世紀の道路側溝である66ＳＤ19からの出土で12世紀のものと考えられる。

7　金属製品（第198図、写真図版181）

中国銭が出土している。天聖元寶で沢の埋立整地層から出土した。埋立の際に混入したか、又は意図的に置かれたものである。12世紀平泉に伴う確実な貨幣の例である。非常に質が良く、ほとんど腐食していない。

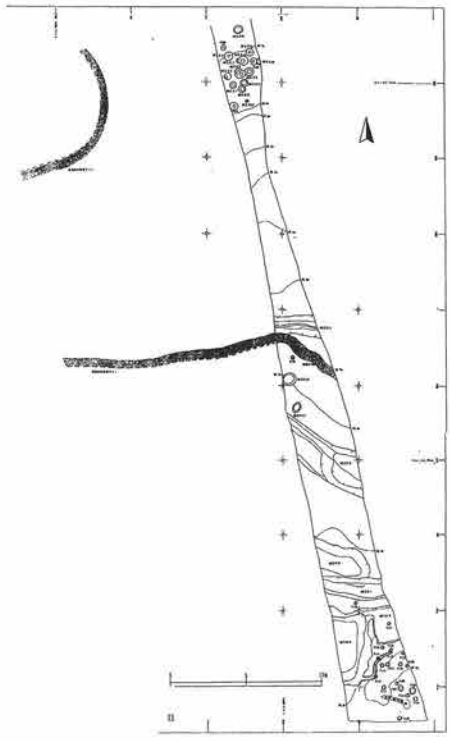


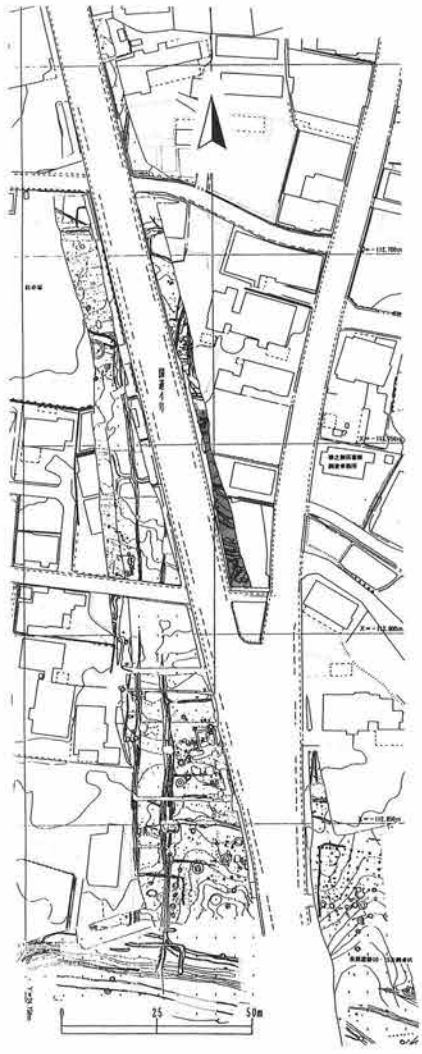
番号	器種	出土位置	石質	その他
4501	砥石	66ＳＥ1埋土	細粒砂岩	
4502	〃	66ＳＤ19埋土(VB2b)	白色細粒砂岩	

番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	鋳所など
4503	天聖元寶	沢整地層中(VB4a)	2.3	3.1	銅	1023	北宋銭

第198図　D地区の石製品、金属製品

第8章　E地区の遺構・遺物





第８章　Ｅ地区の遺構・遺物

第１節　Ｅ地区の概観

Ｅ地区はⅣＢ区の国道４号線の東側である。調査区の幅は４ｍに満たず、細長い形状の地区である。

調査区の北側は埋没沢がある。この埋没沢の幅は広く、北岸は本地区ではなくＦ地区に位置する。埋没沢は埋立て整地が行なわれており、その上にＳＸとした皿状の底面や壁面がわずかに焼けた遺構が集中して検出されている。用途は不明であるが、12世紀後半の遺構と推測される。また埋没沢の南岸近くの埋立整地層の上から溝（66ＳＤ３）が構築されている。この溝は国道西側のＣ地区の66１号池から伸び道路状遺構を横切る形の46ＳＤ16につながる溝である。池、道路の路面の排水の目的の溝と考えられる。

調査区の南側には近代～現代の所属の遺構（66ＳＫ８、66ＳＫ９など）があり、12世紀とはっきり特定できる遺構はない。掘立柱建物が２棟検出されているが所属時期ははっきりしない。

12世紀の遺物はかわらけ、国産陶器、瓦がある。多くは66ＳＤ３からの出土である。また近世陶磁器がまとまった量出土している。これは本調査区の一部が近世の屋敷にひっかかっているためと推測される。だが明確な近世の遺構は検出されなかった。近代以降の遺物は多量に出土したが、ここではそれらを掲載していない。

第２節　遺構

１　建物

66ＳＢ41（第199図）

〔位置〕ⅣＢ１ｇ、１ｈ、２ｇ、２ｈに位置する。

〔重複〕66ＳＢ42とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＫ８、66ＳＫ９と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は618cmで、梁間は調査区域外に伸びるため不明である。使用した柱穴は４個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－２°－Ｅである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ42（第199図）

〔位置〕ⅣＢ２ｇ、２ｈ、３ｇ、３ｈに位置する。

〔重複〕66ＳＢ41とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＫ８、66ＳＫ９と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で358cmで、梁間は調査区域外に伸びるため不明である。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－16°－Ｅである。

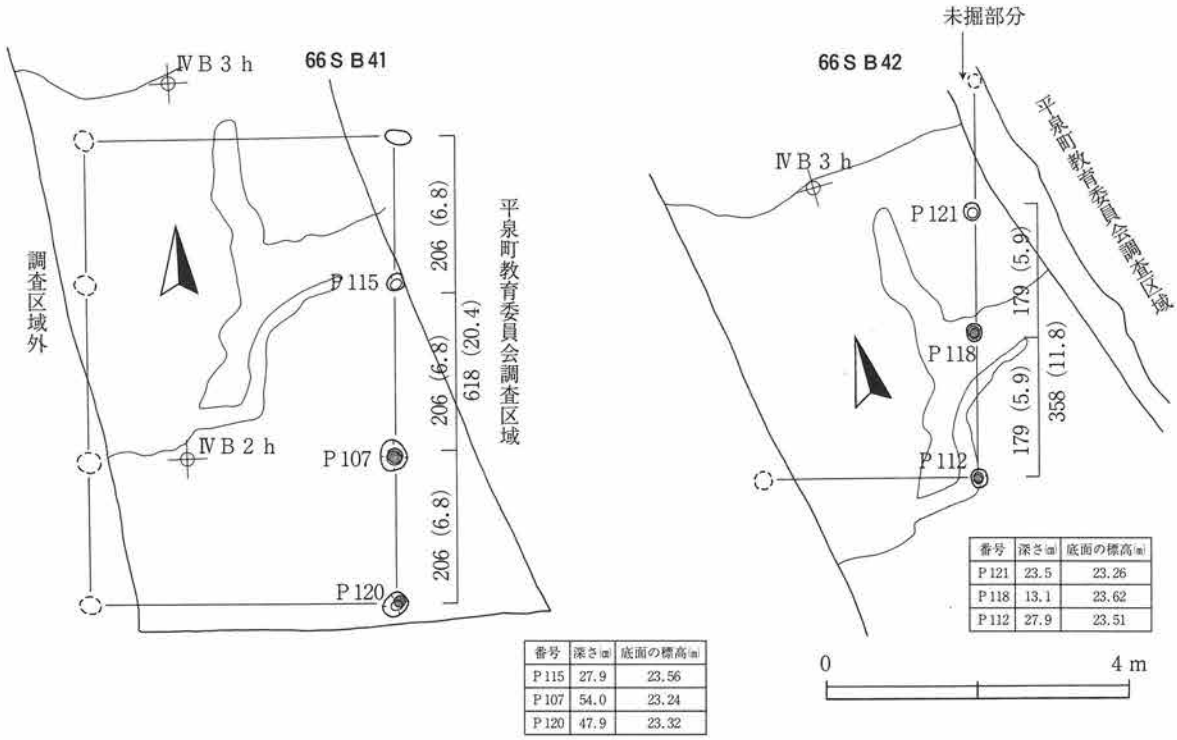
〔柱間寸法〕桁行では５尺９寸（約179cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
Ｐ115	27.9	23.56
Ｐ107	54.0	23.24
Ｐ120	47.9	23.32

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
Ｐ121	23.5	23.26
Ｐ118	13.1	23.62
Ｐ112	27.9	23.51

第199図　Ｅ地区の建物（66ＳＢ41・42）

2　土坑

66ＳＫ８（第200図、写真図版77）

〔位置〕ⅣＢ２ｇ、２ｈに位置する。

〔重複〕66ＳＫ９と溝状の部分によりつながっており同時存在の遺構と考えられる。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕６層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕近現代の遺物が多量に出土した。また12世紀の常滑産陶器甕（5101）、18世紀の肥前産陶器碗（5301）も出土している。

〔遺構の性格〕池、水場といった遺構と思われる。これを廃絶する際にゴミを廃棄したと考えられる。

〔年代〕20世紀代の遺構である。

66ＳＫ９（第200図、写真図版77）

〔位置〕ⅣＢ２ｈに位置する。

〔重複〕66ＳＫ８と溝状の部分によりつながっており同時存在の遺構と考えられる。

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕66ＳＫ８と同時存在と考えられ、20世紀代の遺構と考えられる。

66ＳＫ10（第200図、写真図版77）

〔位置〕ⅣＢ３ｇ、３ｈに位置する。

〔重複〕66ＳＤ１と重複するが、本土坑が古い。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕埋土の感じから、近代～現代の遺構と考えられる。

66ＳＫ11（第201図、写真図版77・78）

〔位置〕ⅣＢ５ｇに位置する。

〔重複〕なし

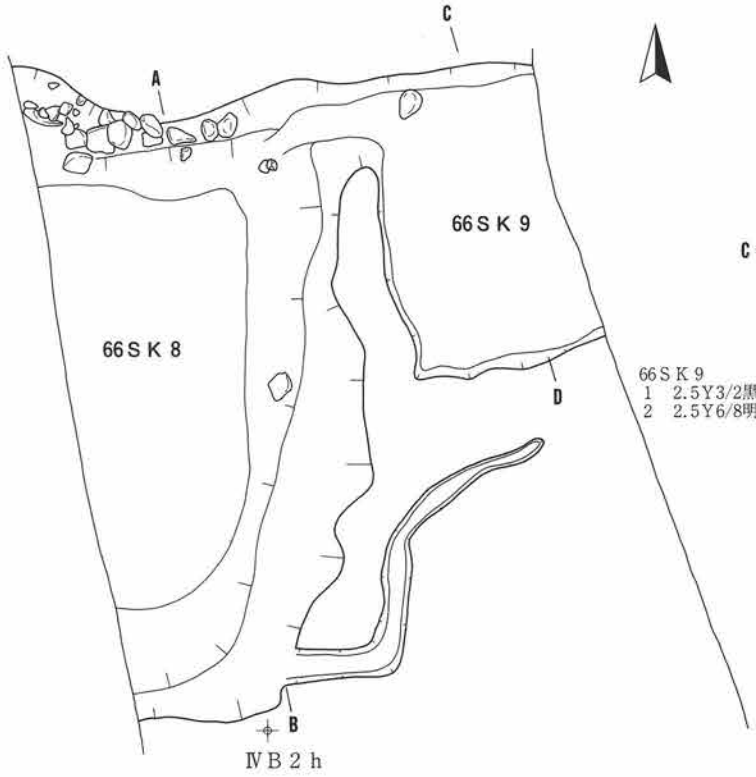
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はなだらかに立つ。

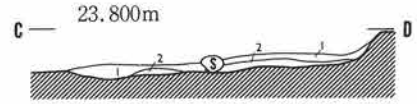
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

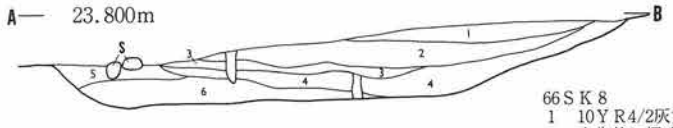
〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕埋土の調子から近世以降の所属と推測される。



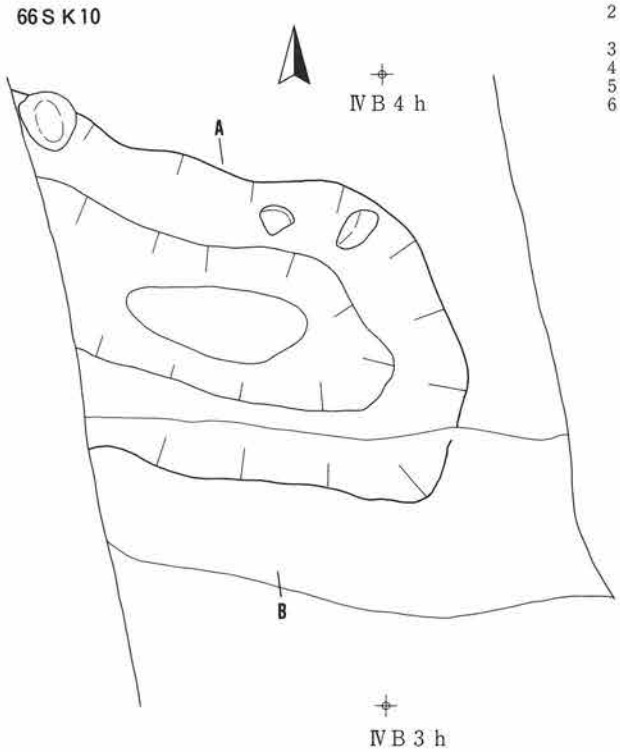


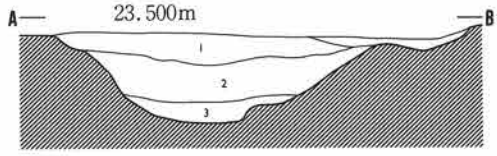
66SK9
1　2.5Y3/2黒褐色土　2.5Y6/8明黄褐色土粒、炭化物粒多量混入
2　2.5Y6/8明黄褐色土　2.5Y3/2黒褐色土ブロックで多量混入



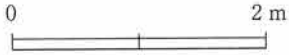
66SK8
1　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/8黄橙色ロームブロック多量混入
　人為的に埋めた土　かたい
2　10YR4/2灰黄褐色土　10YR5/1褐灰色土まだら状に多量混入　炭化物粒、陶磁器片多量混入
3　7.5YR3/1褐灰色土　礫陶磁器片多量混入　しまりなし
4　2.5Y5/4黄褐色砂質土　礫多量混入
5　10YR3/1黒褐色土　2.5Y5/4黄褐色砂質土多量混入
6　5Y3/1オリーブ黒色土　炭化物片多量混入

66SK10





66SK10
1　2.5Y4/2暗灰黄色土　2.5Y5/6黄褐色土がまだら状に多量混入
　水酸化鉄分が非常に多い
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　2.5Y4/6オリーブ褐色土まだら状に多量混入　水酸化鉄分混入
3　5Y4/2灰オリーブ色砂質土　2.5Y4/6オリーブ褐色土まだら状に多量混入



第200図　E地区の土坑①（66SK8～10）

66ＳＫ12（第201図、写真図版78）

〔位置〕ⅣＢ６ｇに位置する。

〔重複〕なし

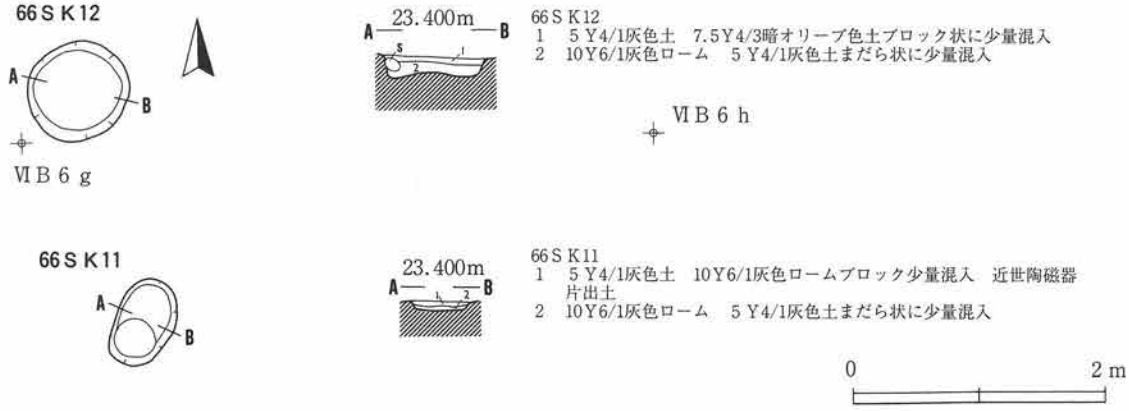
〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はなだらかに立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。



第201図　Ｅ地区の土坑②（66ＳＫ11・12）

3　焼土遺構（第202図、写真図版78～81）

66ＳＸ２（第202図、写真図版78）

〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。

〔埋土〕２層に分けられる。下層の２層には炭化物粒が多量に混入する。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕かわらけ片が少量出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ３（第202図、写真図版78）

〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。

〔重複〕66ＳＸ４と重複するが、本遺構が新しい。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。

〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒が多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ４（第202図、写真図版78）
〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。
〔重複〕66ＳＸ３と重複するが、本遺構が古い。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒が少量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ５（第202図、写真図版79）
〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。
〔重複〕66ＳＸ８と接するが重複しない。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。また本遺構に伴うか不明であるが、本遺構の北側に現地性の焼土の分布がみられる。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物とかわらけ片が多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕図化できないが、かわらけ片が多量に出土した。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ６（第202図、写真図版79）
〔位置〕ＶＢ０ｆ、０ｇに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒が多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ７（第202図、写真図版79）
〔位置〕ⅣＢ９ｆ、ＶＢ０ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒、かわらけ片が多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

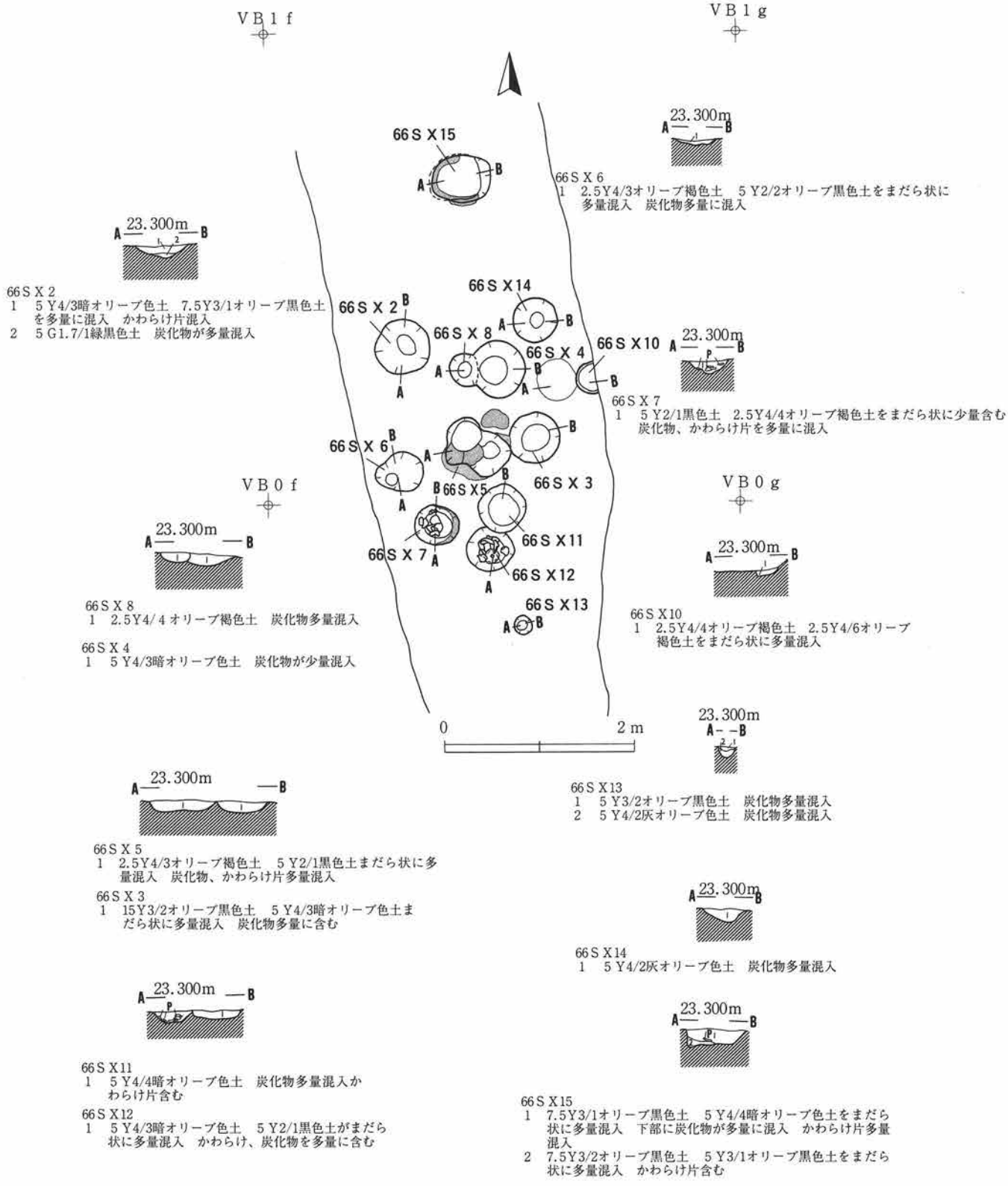
〔出土遺物〕手づくねかわらけ片が多量に出土した。図化できたのは（5016、5017）である。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ８（第202図、写真図版79）
〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。
〔重複〕66ＳＸ５と接するが重複しない。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒が多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は判断できなかった。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ10（第202図、写真図版80）
〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。
〔重複〕なし
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面の一部が引っ込む部分がある
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ11（第202図、写真図版80）
〔位置〕ⅣＢ９ｆ、ＶＢ０ｆに位置する。
〔重複〕66ＳＸ12と重複するが本遺構が新しい。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒が多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は判断できなかった。
〔出土遺物〕かわらけ片が少量出土している。
〔遺構の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ12（第202図、写真図版80）
〔位置〕ⅣＢ９ｆに位置する。
〔重複〕66ＳＸ11と重複するが本遺構が古い。
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。
〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒とかわらけ片を多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別



第202図　E地区の焼土遺構（66SX2～8・10～15）

は不明である。

〔出土遺物〕手づくねかわらけ（5008、5009、5018）が出土している。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ13（第202図、写真図版80）

〔位置〕ＶＢ１ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。炭化物粒を多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は判断できなかった。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ14（第202図、写真図版81）

〔位置〕ＶＢ０ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。

〔埋土〕１層に分けられる。炭化物粒を多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は判断できなかった。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

66ＳＸ15（第202図、写真図版81）

〔位置〕ＶＢ０ｇに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。底面はわずかに焼けている。

〔埋土〕２層に分けられる。炭化物粒を多量に混入する埋土である。人為堆積、自然堆積の別は判断できなかった。

〔出土遺物〕手づくねかわらけ（5005、5010、5011）、常滑産甕片（5103）が出土している。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀に所属する可能性が高い。

4　溝

66ＳＤ１（第203図、写真図版81）

〔位置〕ⅣＢ３ｇ、３ｈに位置する。

〔重複〕66ＳＫ10と重複しており、本遺構が新しい。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕１層に分けられる。砂質の埋土であり、流水により形成されたと考えられる。

〔出土遺物〕底面に木材が置かれている。また埋土からガラス片が出土した。また肥前産磁器皿（5317）が出土している。

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕近代以降の所属である。

66ＳＤ２（第203図、写真図版81）

〔位置〕ⅣＢ４ｇ、５ｇに位置する。

〔重複〕なし

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕５層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕底面に礫が置かれている。また埋土中から手づくねかわらけ（5019）、肥前産磁器瓶（5321）、砥石（5401～5403）、羽口（5404、5405）が出土した

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕近代以降の所属である。

66ＳＤ３（第203図、写真図版82）

〔位置〕ⅣＢ６ｇ、６ｈに位置する。

〔重複〕沢の整地層を切って構築されている。

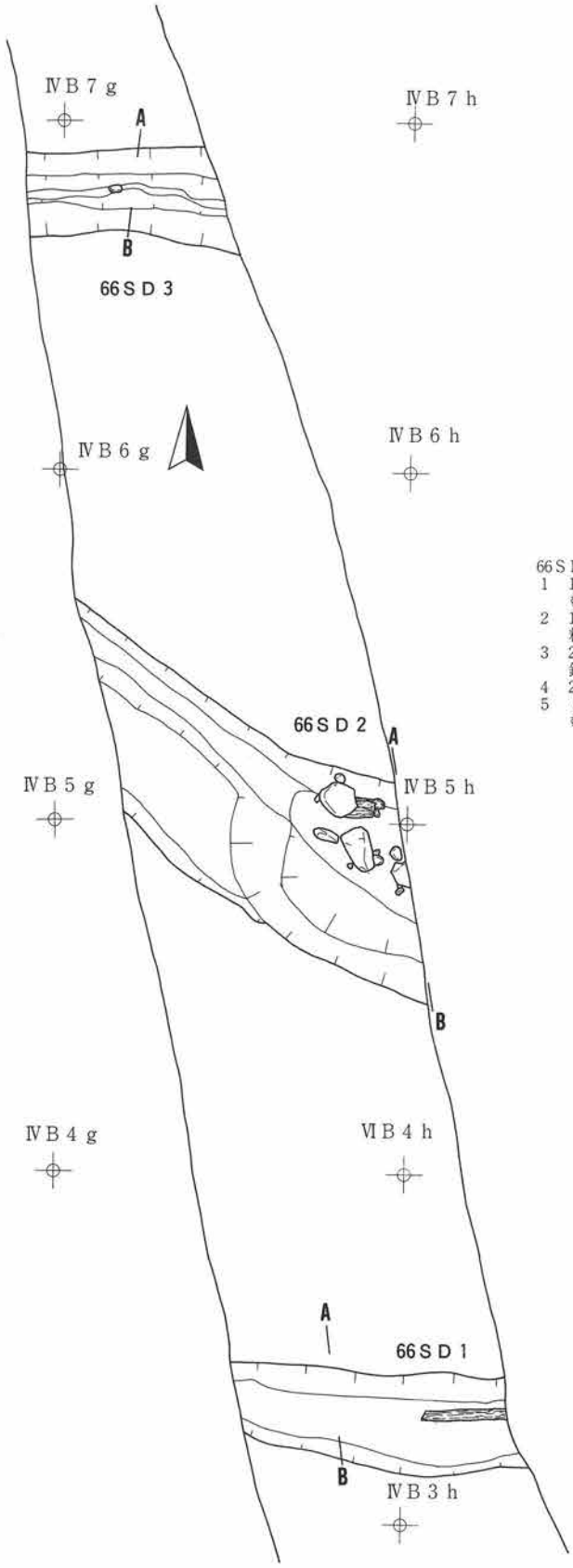
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。国道西側の46ＳＤ16の東流部分につながる溝である。

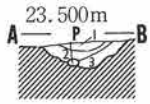
〔埋土〕３層に分けられる。砂質の埋土であり、流水により形成されたと考えられる。３層にはかわらけ片が非常に多量に含まれる。

〔出土遺物〕埋土中から、手づくねかわらけ（5001～5003、5006、5007、5012～5015）、常滑産甕（5102）が出土した。

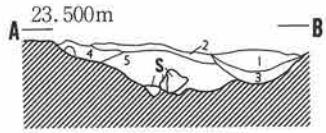
〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

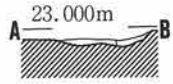




66SD3
1　10YR3/2黒褐色土　10Y6/1灰色砂少量混じる
2　10Y6/1灰色ローム　10Y6/1灰色砂多量混入
3　10Y6/1灰色砂　かわらけ片多量混入



66SD2
1　10YR4/2灰黄褐色土　2.5Y6/4にぶい黄色土をまだら状に多量含む水酸化鉄分多い
2　10YR4/2灰黄褐色土　10YR3/2黒褐色土が多量に混じる　炭化物粒、水酸化鉄分多い
3　2.5Y7/4浅黄色土　2.5Y4/1黄灰色土をまだら状に多量含む水酸化鉄分含む
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　水酸化鉄分を多量に含む
5　5Y2/2オリーブ黒色土　7.5GY5/1緑灰色土をまだら状に少量含む



66SD1
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土

第203図　E地区の溝（66SD1～3）

5　塀

66ＳＡ２（第204図、写真図版82）

〔位置〕ⅣＢ１ｈに位置する。

〔重複〕なし

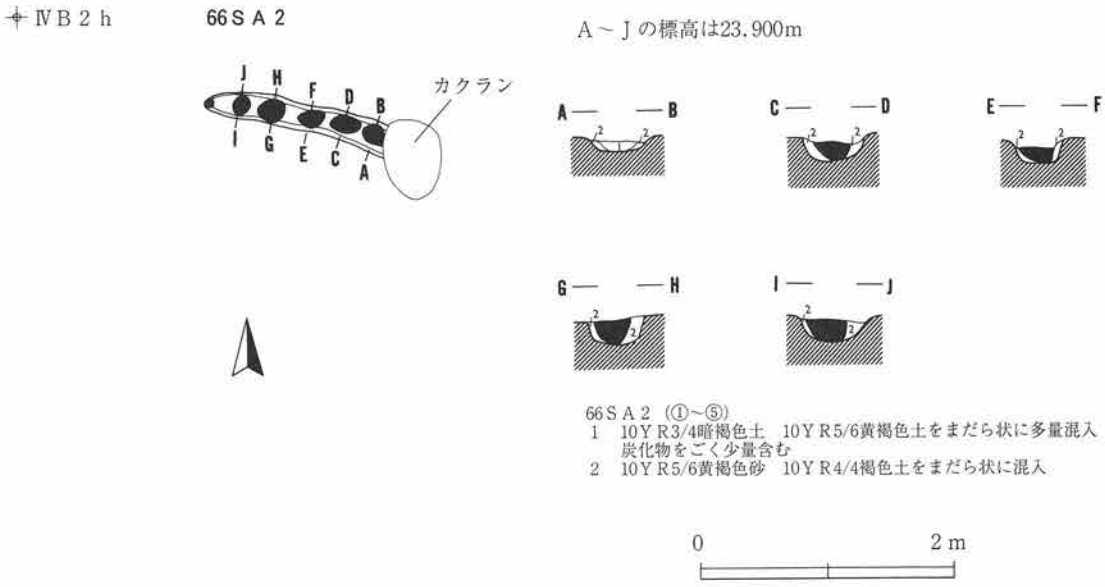
〔形式〕掘方の上幅は約20cmで、断面形がＵ字形である立てられた材木は断面が円形の棒状のものと考えられる。直径は約18cmほどである。材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。

〔埋土〕掘方の埋土は１層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕塀である。

〔年代〕不明である。



第204図　Ｅ地区の塀（66ＳＡ２）

Ｅ地区柱穴計測表

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P106	19.2	23.60	
〃P107	55.7	24.25	66SB41
〃P108	16.1	23.65	
〃P109	32.5	26.53	
〃P110	31.4	23.50	
〃P111	12.3	23.72	
〃P112	27.8	23.52	66SB42
〃P113	43.7	23.39	
〃P114	11.3	23.70	

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P115	27.9	23.56	66SB42
〃P116	14.8	23.62	
〃P117	7.4	23.71	
〃P118	13.1	23.62	66SB42
〃P119	27.5	23.53	
〃P120	47.5	23.32	66SB41
〃P121	23.5	23.24	66SB42
〃P122	12.4	23.29	
〃P123	22.0	23.57	

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P124	15.7	23.62	
〃P125	29.9	22.82	
〃P126	21.9	23.03	
〃P127	55.4	22.61	
〃P128	欠番		
〃P129	欠番		
〃P130	欠番		
〃P131	11.1	23.06	
〃P132	欠番		

第３節　遺物

１　かわらけ（第205図、写真図版182・183）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊３　Ｘかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。下に分類基準を示す。本調査区では手づくねかわらけのみ出土しているので、手づくねかわらけの分類基準のみ示す。

手づくねかわらけ

Ｃ類（口縁部二段なで技法）

Ｃ3 類　上段のつまみは弱くいくらか内湾ぎみ。上段と下段のなで面はほぼ同じ幅である。口唇部断面形は丸い。

Ｃ4 類　上段を強くつまむ。上段は下段のなで面より幅が狭い。口唇部断面形は丸い。

Ｃ5 類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

Ｃ5′類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形だが面取り部がくびれる。

Ｄ類（口縁部一段なで技法）

Ｄ2 類　口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部断面形は丸い。

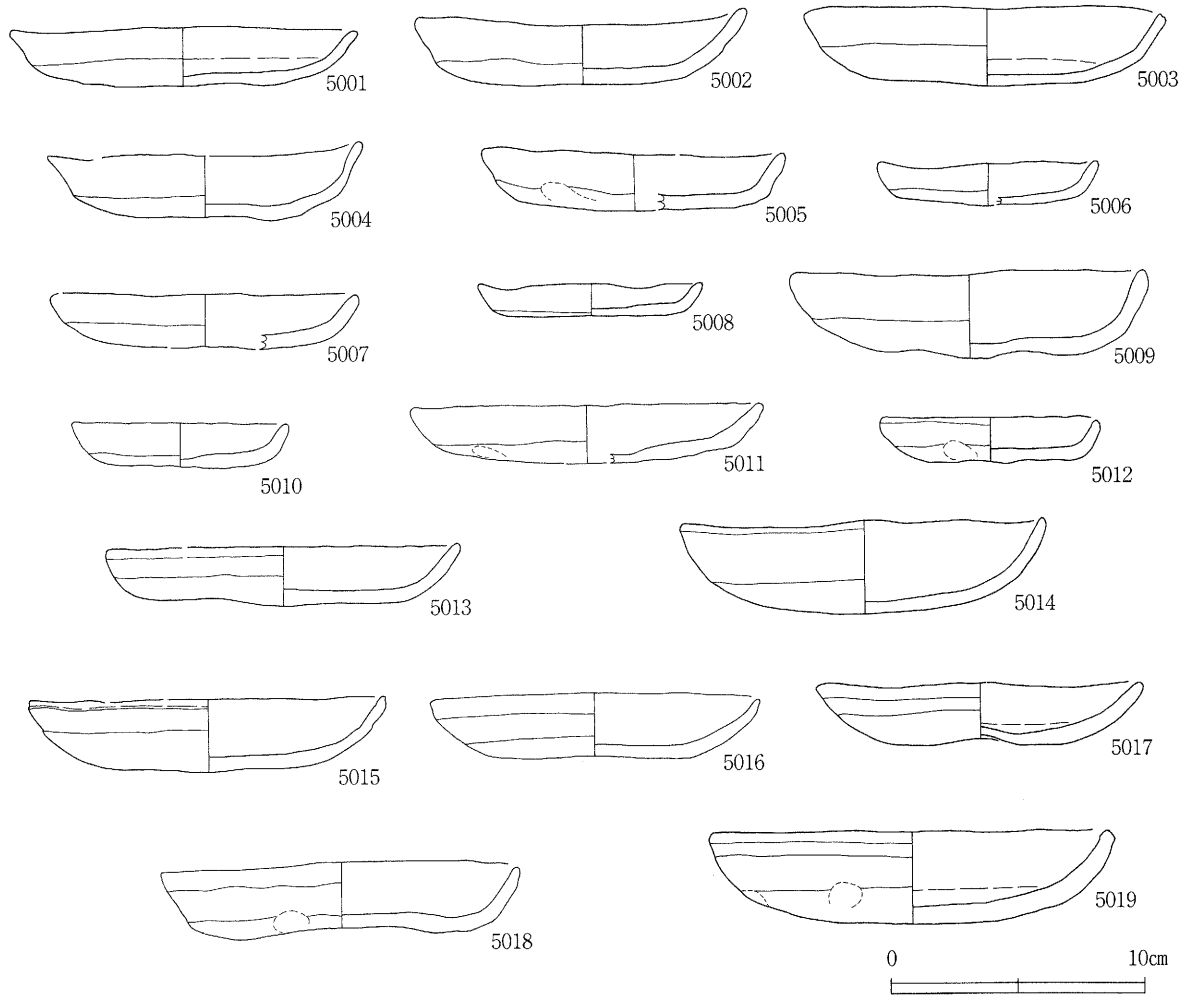
Ｄ3 類　口縁部は弱く内湾気味。口唇部断面形は丸い。

Ｄ4 類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

Ｄ4′類　Ｄ４類に類似。口唇部面取り後、口縁全体を一度なでる。断面形はほぼ三角形。

12世紀のかわらけは、手づくねかわらけ19点を図示した。他に不掲載のかわらけが5.5kg出土している。これらのほとんどは66ＳＤ３からの出土である。

手づくねかわらけはＣ４類は４点、Ｃ５類は１点、Ｄ２類が５点、Ｄ３類が６点、Ｄ４類が３点ある。



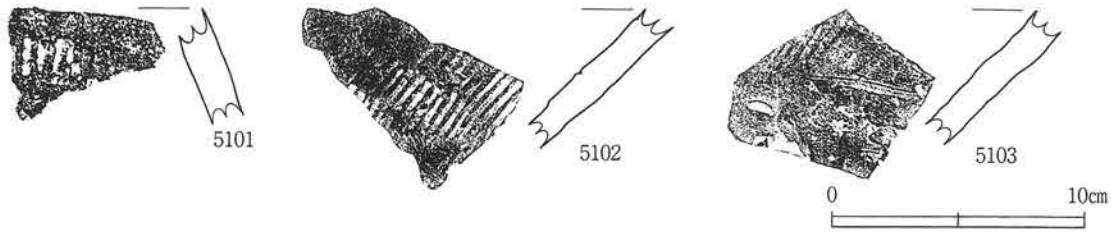
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
5001	66SD3埋土下部	D_2	13.5		2.35	指、ヘラ	すのこ痕	70	細砂少量	
5002	66SD3埋土下部	〃	12.9		3.0	指、ヘラ	すのこ痕	100	〃	
5003	66SD3埋土下部	〃	13.8		3.2	指、ヘラ		70	〃	
5004	66SX12埋土	〃	12.4		3.1	指	すのこ痕	50	〃	
5005	66SX15埋土	〃	11.6		2.6	不明	〃	40	〃	摩耗している
5006	66SD3埋土下部	D_3	8.8		1.8	不明	〃	50	〃	〃
5007	66SD3埋土下部	〃	11.7		2.2	指	〃	50	〃	
5008	66SX12埋土	〃	8.8		1.3	不明		50	〃	摩耗している
5009	66SX12埋土	〃	13.9		3.5	〃	すのこ痕	80	〃	〃
5010	66SX15埋土	〃	8.4		1.8	〃	〃	100	〃	〃
5011	66SX15埋土	〃	13.7		2.3	〃		50	〃	〃
5012	66SD3埋土下部	D_4	8.5		1.9	指	すのこ痕	100	〃	〃
5013	66SD3埋土下部	〃	13.8		2.4	指	〃	60	〃	
5014	66SD3埋土下部	〃	14.2		3.7	不明	不明	60	〃	内面炭化物付着
5015	66SD3埋土下部	C_4	14.0		2.9	〃	〃	30	〃	摩耗している
5016	66SX7埋土	〃	13.0		2.6	指	すのこ痕	40	〃	内面油煙付着
5017	66SX7埋土	〃	12.5		2.5	指、ヘラ	〃	40	〃	
5018	66SX12埋土	〃	13.9		3.1	指	〃	80	〃	
5019	66SD2埋土	C_5	15.6		3.7	指、ヘラ	〃	70	〃	内面にわずかに油煙付着

第205図　E地区のかわらけ

2　国産陶器（第206図、写真図版183）

（１）常滑産陶器（第206図、写真図版183）

本調査区から出土した常滑産陶器で図示したのは甕の破片３点である。他に不掲載の常滑産陶器の破片が２片出土している。なお本調査区では常滑産陶器以外の国産陶器は出土していない。5101～5103は甕の破片である。いずれも体部の破片であり、型式の分類は難しい。5101が出土した66ＳＫ８は近代以降の遺構であり、5101は混入したものである。

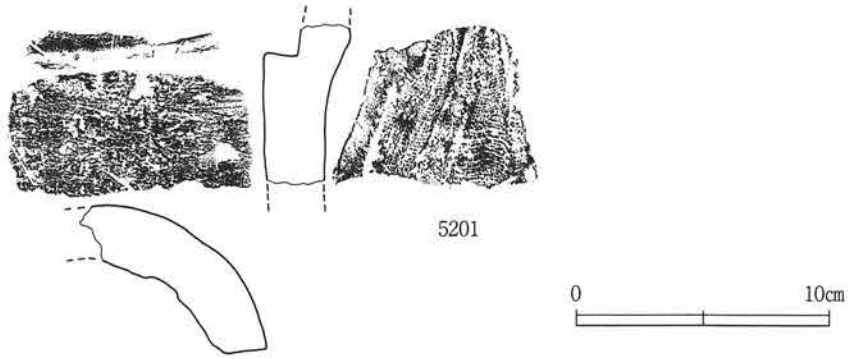


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
5101	常滑	甕	体部	66ＳＫ８埋土	２～３型式	灰色	
5102	〃	〃	体下	66ＳＤ３埋土下部	〃	〃	
5103	〃	〃	体下	66ＳＸ15埋土	〃	〃	

第206図　Ｅ地区の常滑産陶器

3　瓦（第207図、写真図版183）

瓦が１点出土している。12世紀のものである。丸瓦で玉縁部の一部が残る。

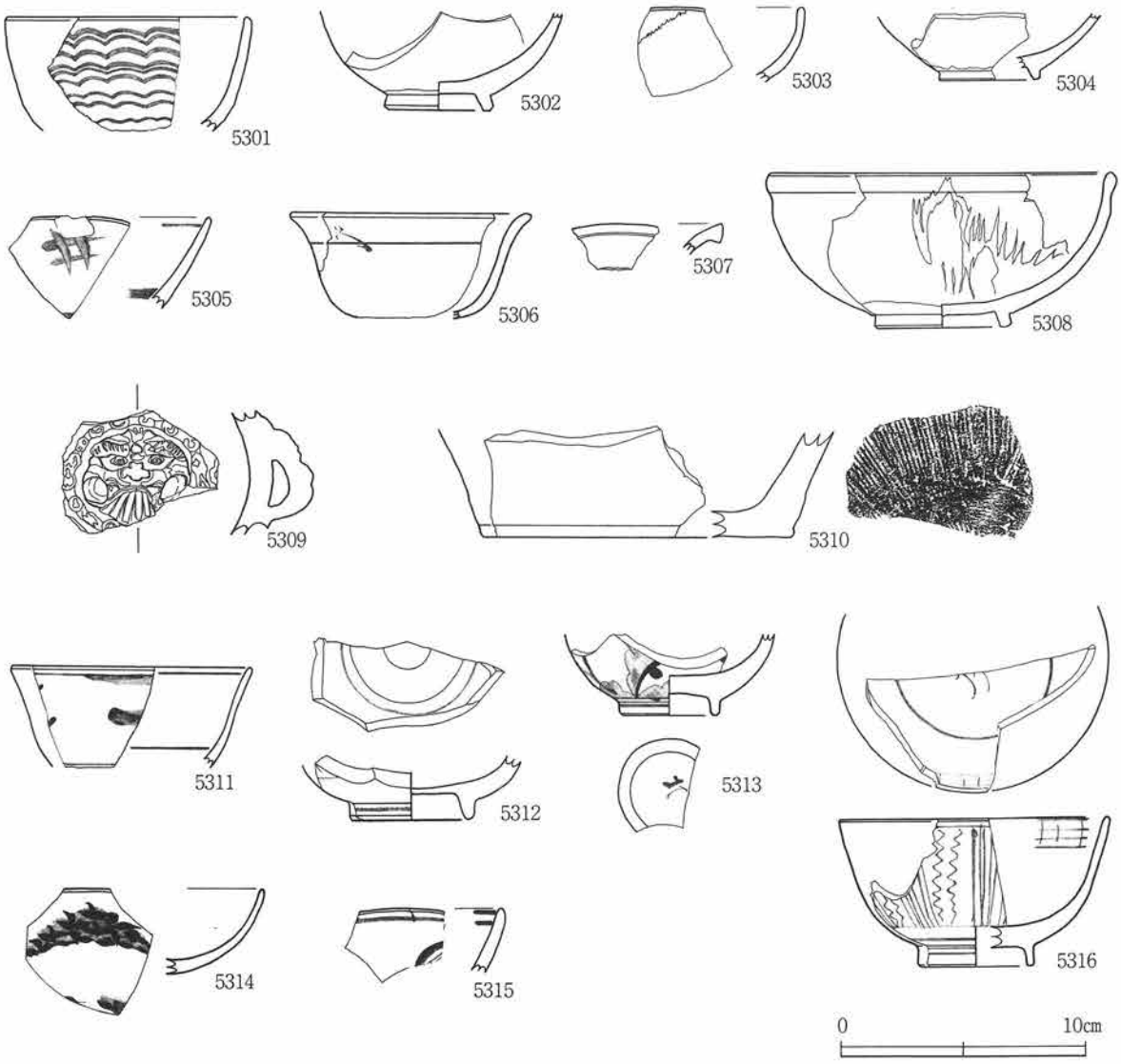


番号	器種	出土位置	その他
5201	丸瓦	沢整地層上面(ⅣB2e)	

第207図　Ｅ地区の瓦

4　近世陶磁器（第208・209図、写真図版183）

本調査区の近世陶磁器は、重機で表土を除去中に出土したものがほとんどである。本調査区が含まれる字志羅山20番地は、明治初年の地籍図「広土絵図」では宅地の地目になっている。この「宅地」が近世から存続して営まれた屋敷で、出土した陶磁器はこの屋敷に伴うものと推測される。



番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
5301	陶器碗	66ＳＫ８埋土	10.0	－	(4.5)	赤褐色	刷毛目	肥前	18Ｃ前	
5302	〃	ⅣＢ４ｇ表土	－	4.4	(4.0)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18Ｃ	
5303	〃	ⅣＢ４ｇ表土	－	－	(2.9)	灰白色	灰釉、褐釉	〃	18Ｃ後半	
5304	〃	ⅣＢ５ｇ表土	－	3.9	(2.4)	灰色	藁灰釉	〃	19Ｃ前	
5305	〃	ⅣＢ５ｇ表土	－	－	(3.4)	灰色	染付	瀬戸・美濃	18Ｃ末～19Ｃ前	陶胎染付
5306	〃	ⅣＢ５ｇ表土	9.9	－	(4.2)	黄白色	鉄絵	京・信楽系？	19Ｃ前？	
5307	陶器皿	ⅣＢ５ｇ表土	－	－	(0.8)	灰白色（粗）	灰釉	瀬戸・美濃	18Ｃ	
5308	陶器鉢	ⅣＢ５ｇ表土	14.2	5.3	6.3	灰色	藁灰釉、褐釉	大堀相馬	19Ｃ前	
5309	陶器瓶掛	ⅣＢ８ｇ表土	－	－	(4.9)	灰白色（粗）	銅緑釉	瀬戸	19Ｃ前	内面鉄釉
5310	陶器擂鉢	ⅣＢ５ｇ表土	－	12.9	(4.5)	暗灰色	鉄釉	東北産	19Ｃ前	
5311	磁器碗	ⅣＢ８ｇ表土	9.8	－	(4.2)	白色	染付	肥前	17Ｃ後半	
5312	〃	ⅣＢ８ｇ表土	－	4.8	(2.9)	白色	〃	〃	1690～1780	内面蛇目釉はぎ
5313	〃	ⅣＢ５ｇ表土	－	4.0	(3.4)	白色	〃	〃	18Ｃ後～19Ｃ初	
5315	〃	ⅣＢ５ｇ表土	－	－	(2.3)	白色	〃	〃	〃	
5316	〃	ⅣＢ８ｇ表土	10.8	4.4	6.1	灰白色	〃	東北産	19Ｃ前～中	平清水産か

第208図　Ｅ地区の近世陶磁器①

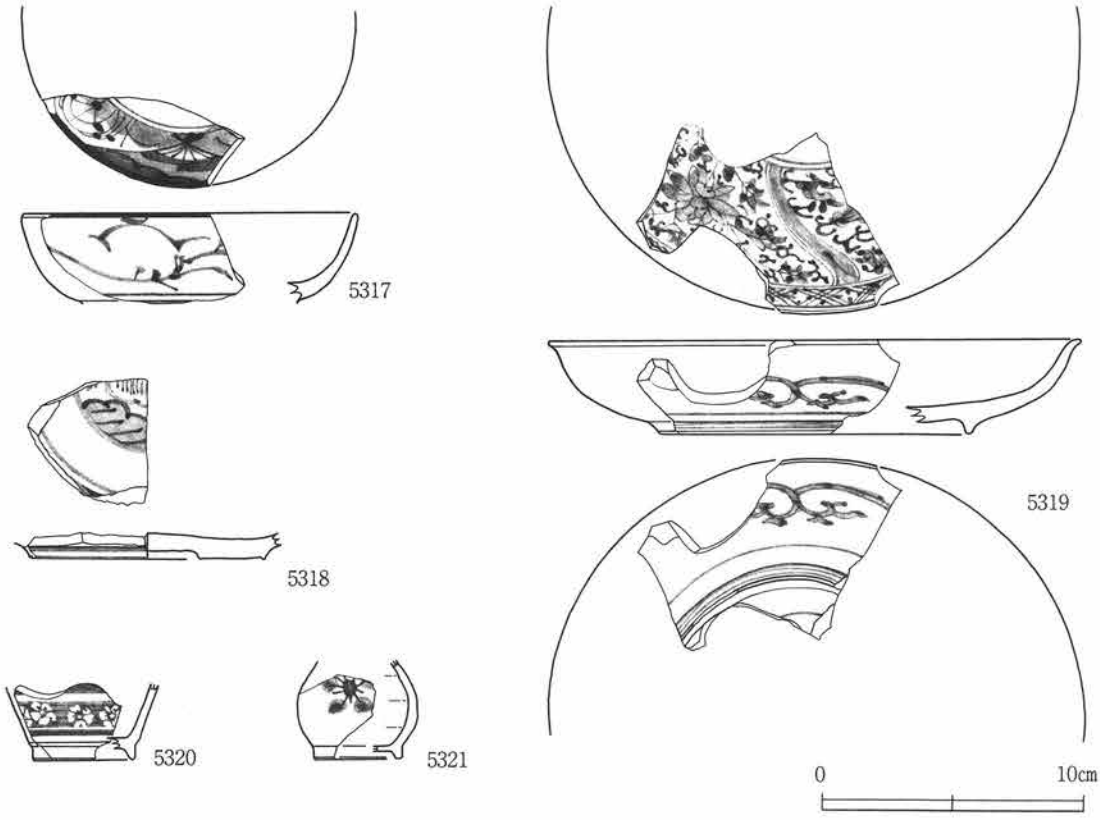
5301は肥前産は陶器碗である。白化粧を掻き取った刷毛目文が施される。5302～5304は大堀相馬産の陶器碗である。5302、5303は透明性のある灰釉、5304が失透性の藁灰釉が施される。5305は瀬戸・美濃産の陶胎染付碗である。5306は鉄絵のある碗である。京・信楽系と考えられるがはっきりしない。

5303は瀬戸・美濃産の折縁皿である。5308は大堀相馬産の鉢である。失透性の藁灰釉の上に褐釉が流し掛けられる。

5309は瀬戸・美濃産の瓶掛の獅噛の装飾部分である。内面には鉄釉が施されている。5310は陶器擂鉢である。東北地方在地産と推測される。内底面はかなり磨耗している。

5311は肥前Ⅲ期の磁器碗である。5312、5313は肥前Ⅳ期の磁器碗である。5312は見込みが蛇目釉剥ぎになっている。5314、5315は肥前産の磁器碗で18世紀後半から19世紀初のものである。5316は東北地方産の磁器碗と思われる。窯ははっきりしないが、平清水窯産の可能性が高い。

5317は肥前Ⅳ期の磁器皿、5318は18世紀後半～19世紀初の磁器皿である。どちらも肥前産である。5318は凹蛇目高台である。5319は肥前産の磁器皿である。18世紀前半のものと思われる。5320は肥前産の磁器小杯である。墨弾きによる染付けが施されている。5321は磁器の瓶である。肥前産で肥前Ⅳ期のものである。内面は無釉である。



番号	器種	出土位置	法量（cm） 口径	底径	高さ	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
5317	磁器皿	66ＳＤ１埋土	12.6	－	(3.4)	白色	染付	肥前	1690～1780	
5318	〃	ⅣＢ７ｇ表土	－	9.1	(0.9)	白色	〃	〃	18C後半～19C初	凹蛇目高台
5319	〃	表採	20.1	11.8	3.6	白色	〃	〃	1690～18C前	
5320	磁器小坏	ⅣＢ５ｇ表土	－	3.9	(2.9)	白色	〃	〃	1690～1780	墨弾き
5321	磁器瓶	66ＳＤ２埋土	－	3.2	(3.8)	白色	〃	〃	〃	内面無釉

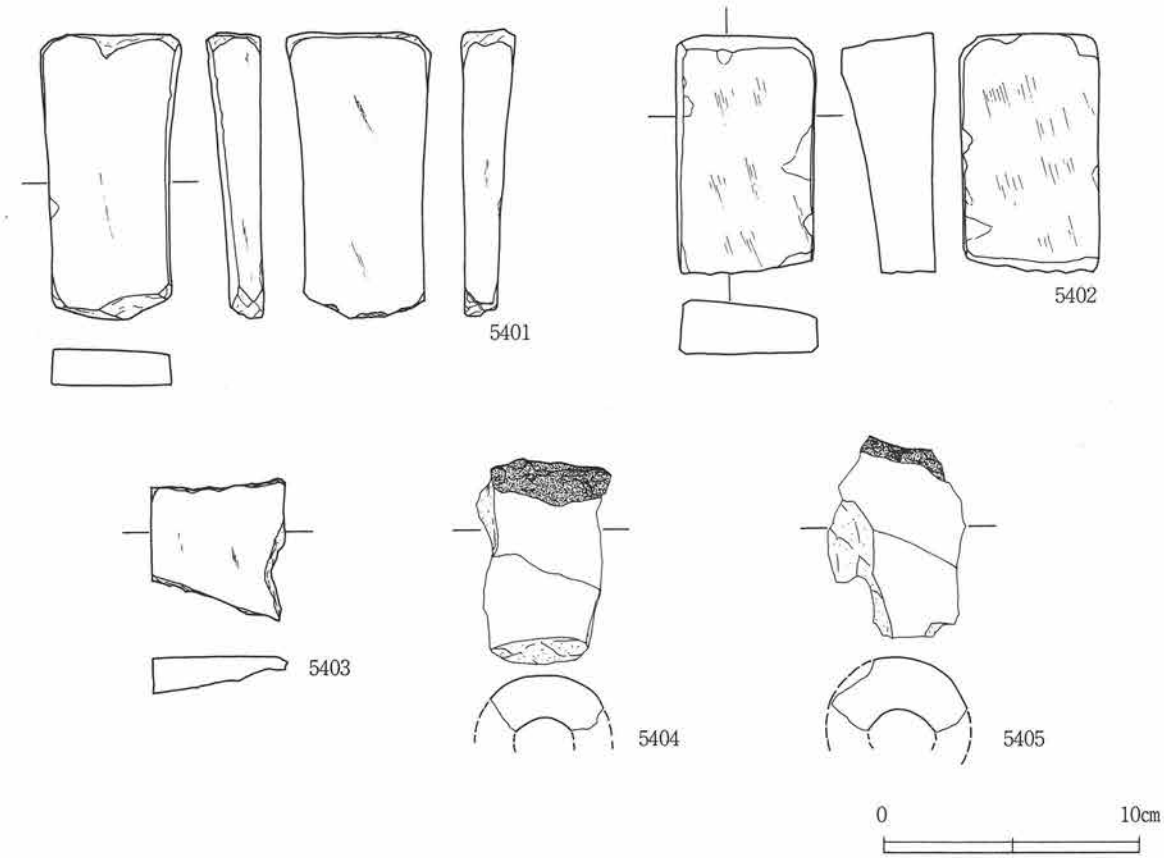
第209図　E地区の近世陶磁器②

5　石製品（第210図、写真図版183）

5401～5403は砥石である。いずれも66ＳＤ２からの出土で近世～近代のものである。

6　土製品（第210図、写真図版183）

5404、5405は羽口である。同一個体の可能性がある。鍛冶に用いられた羽口であろう。これら羽口も66ＳＤ２からの出土で近世～近代のものである。



番号	器種	出土位置	石質	その他
5401	砥石	66ＳＤ２埋土	白色細粒砂岩	4面使用
5402	〃	66ＳＤ２埋土	〃	2面使用
5403	〃	66ＳＤ２埋土	〃	1面使用

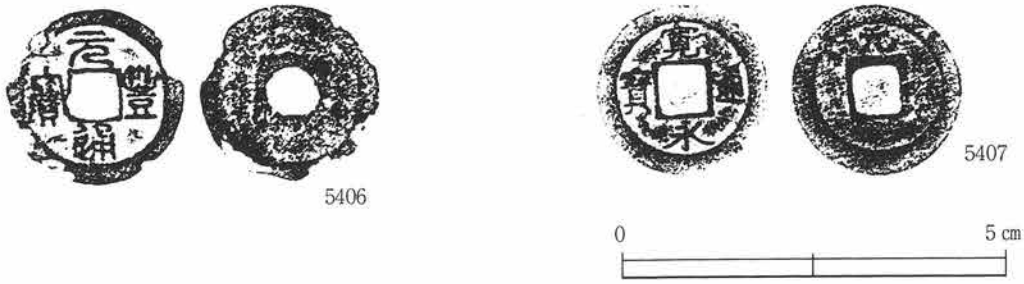
番号	器種	出土位置	法量（cm）			その他
			最大長	最大幅	厚さ	
5404	羽口	66ＳＤ２埋土	8.2	5.2	1.8	5405と同一個体か
5405	〃	〃	8.1	5.3	1.8	

第210図　Ｅ地区の石製品、土製品

7　金属製品（第211図、写真図版183）

銭が２点出土している。5406は北宋銭の元豊通宝である。模鋳銭ではなく本銭と思われる。初鋳年代は西暦1078年である。この銭は12世紀の遺構に伴う状態では出土していない。

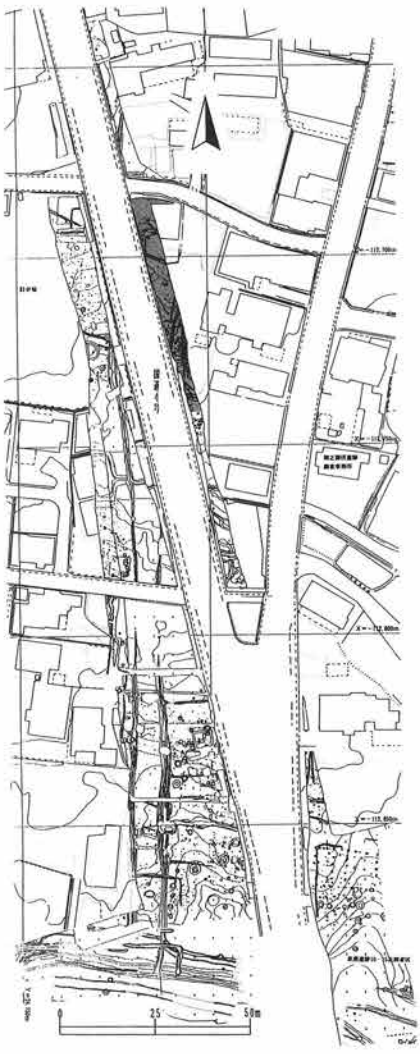
5407は寛永通寶である。銅銭で背面に「元」の字がある。西暦1741年初鋳の摂津高津新地所銭である。

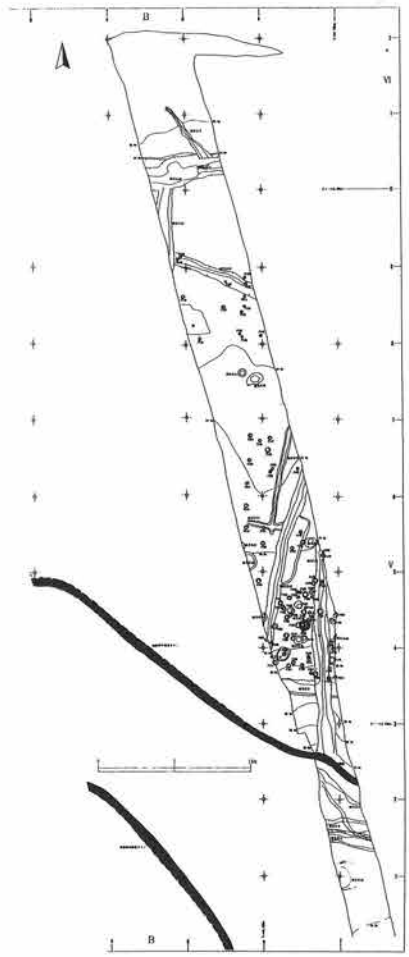


番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	鋳所など
5406	銭	66沢上層(ⅣB8g)	2.3	1.60	銅	1078	元豊通宝、北宋銭
5407	銭	表採	2.2	2.85	銅	1741	背元　摂津高津新地所

第211図　E地区の金属製品

第９章　Ｆ地区の遺構・遺物





第９章　Ｆ地区の遺構・遺物

第１節　Ｆ地区の概要

Ｆ地区は国道４号線の東側、ＶＢ０ｅ、０ｆ付近からⅥＢ１ｄ、１ｅ付近である。幅の狭い調査区であり、遺構の展開についての解釈はかなり難しかった。

南側は埋没沢が存在しており、その部分には埋立て整地がおこなわれている。これは12世紀後半の整地と考えられる。本調査区ではこの整地層より古い遺構（66ＳＤ５、66ＳＤ６）と整地後に構築された遺構（66ＳＫ13、66ＳＤ４）がある。66ＳＤ６からは馬骨が出土しており注目される。

埋没沢より北では柱穴、溝、土坑が検出された。掘立柱建物は12棟を示したが、調査区の幅が狭いため、建物全体のプランがわかるものはない。よって建物の所属時期についてもはっきり示すことができなかった。いずれも小規模な建物と推測される。溝の中で66ＳＤ13、66ＳＤ14、66ＳＤ15は非常に新しいもので、近代～現代の所属である。66ＳＤ10は大規模な溝で、Ｄ地区の66ＳＤ17と同一の溝である。この溝は現在の町道立石線と重なる古道の道路側溝の可能性が考えられる。また66ＳＤ11はＡ～Ｃ区で検出された南北に走る道の東側側溝と考えられる。66ＳＤ10とは同時存在と観察できた。66ＳＤ９、66ＳＤ12は遺構の切り合い関係から、12世紀前半の所属の可能性がある。

遺物の多くは南側の埋没沢の付近から多く出土した。中でも66ＳＫ13からは多量の手づくねかわらけが出土した。また66ＳＤ４からも国産陶器、かわらけが割合多く出土している。特筆すべき遺物には提子の金具（6301）がある。平泉遺跡群では志羅山21次調査での出土に次ぐ事例である。

第２節　遺構

１　建物

66ＳＢ43（第212図）

〔位置〕ＶＢ５ｄに位置する。

〔重複〕66ＳＤ12、66ＳＢ44とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。梁間は394cmで、桁行は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－90°－Ｗである。

〔柱間寸法〕梁間では６尺５寸（約197cm）が用いられている。

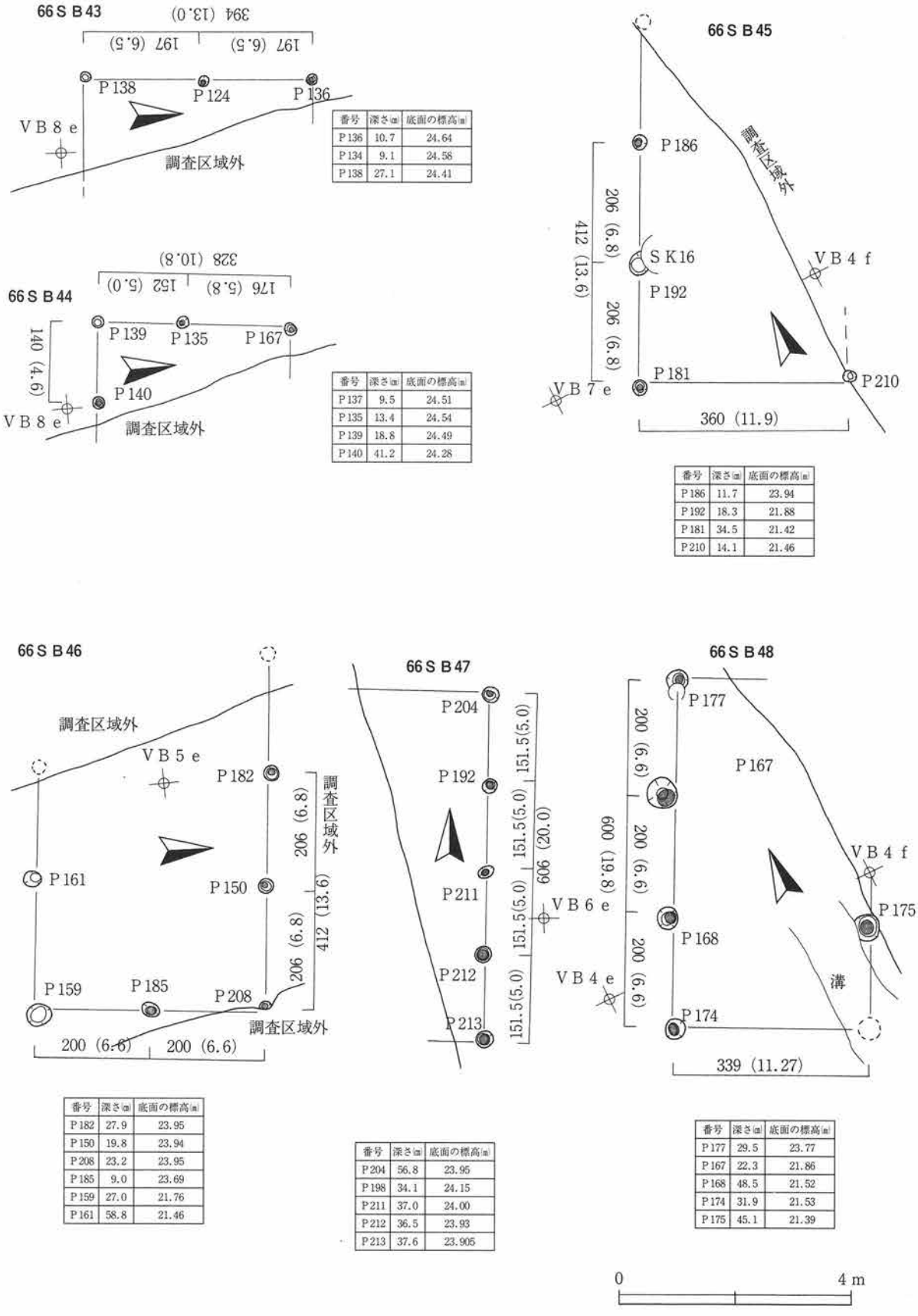
〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ44（第212図）



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P136	10.7	24.64
P134	9.1	24.58
P138	27.1	24.41

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P137	9.5	24.51
P135	13.4	24.54
P139	18.8	24.49
P140	41.2	24.28

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P186	11.7	23.94
P192	18.3	21.88
P181	34.5	21.42
P210	14.1	21.46

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P182	27.9	23.95
P150	19.8	23.94
P208	23.2	23.95
P185	9.0	23.69
P159	27.0	21.76
P161	58.8	21.46

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P204	56.8	23.95
P198	34.1	24.15
P211	37.0	24.00
P212	36.5	23.93
P213	37.6	23.905

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P177	29.5	23.77
P167	22.3	21.86
P168	48.5	21.52
P174	31.9	21.53
P175	45.1	21.39

第212図　F地区の建物①（66SB43～48）

〔位置〕ＶＢ５ｄに位置する。
〔重複〕66ＳＤ12、66ＳＢ44とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ12とＰ137が重複するが本建物が新しい。
〔平面形式〕掘立柱建物である。梁間は328cmで、桁行は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－88°－Ｗである。
〔柱間寸法〕梁間では５尺８寸（約176cm）と5尺（約152cm）が用いられている。桁行では4尺6寸（約140cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ45（第212図）
〔位置〕ＶＢ３ｅ、４ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ46、66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ51、66ＳＢ52、66ＳＢ53とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＫ16とＰ192が、66ＳＫ17とＰ181が重複するがいずれも本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で412cmで、梁間は360cmである。面積は検出された分で約4.5坪である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－27°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ46（第212図）
〔位置〕ＶＢ４ｄ、４ｅ、５ｄ、５ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ48、66ＳＢ51、66ＳＢ52、66ＳＢ53、66ＳＢ54とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ13とＰ150が重複するが本建物が古い。また66ＳＢ50の柱穴Ｐ160が本建物のＰ161と重複するが本建物が新しい。また66ＳＤ７とＰ159、Ｐ185、Ｐ208が重複するがおそらく本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で412cmで、梁間は400cmである。面積は検出された分で約5.0坪である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－86°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺８寸（約206cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ47（第212図）
〔位置〕ＶＢ５ｄ、６ｄに位置する。
〔重複〕なし
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は606cmで、梁間は調査区外に伸びるため不明である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－３°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では５尺（約151.5cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ48（第212図）
〔位置〕ＶＢ４ｄ、４ｅ、５ｄ、５ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ46、66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ52、66ＳＢ53とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ51の柱穴Ｐ178が本建物のＰ177と重複するが本建物が古い。また66ＳＤ７とＰ175が重複するが、本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で339cmで、梁間は600cmである。面積は検出された分で約6.2坪である。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－24°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺６寸（約200cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

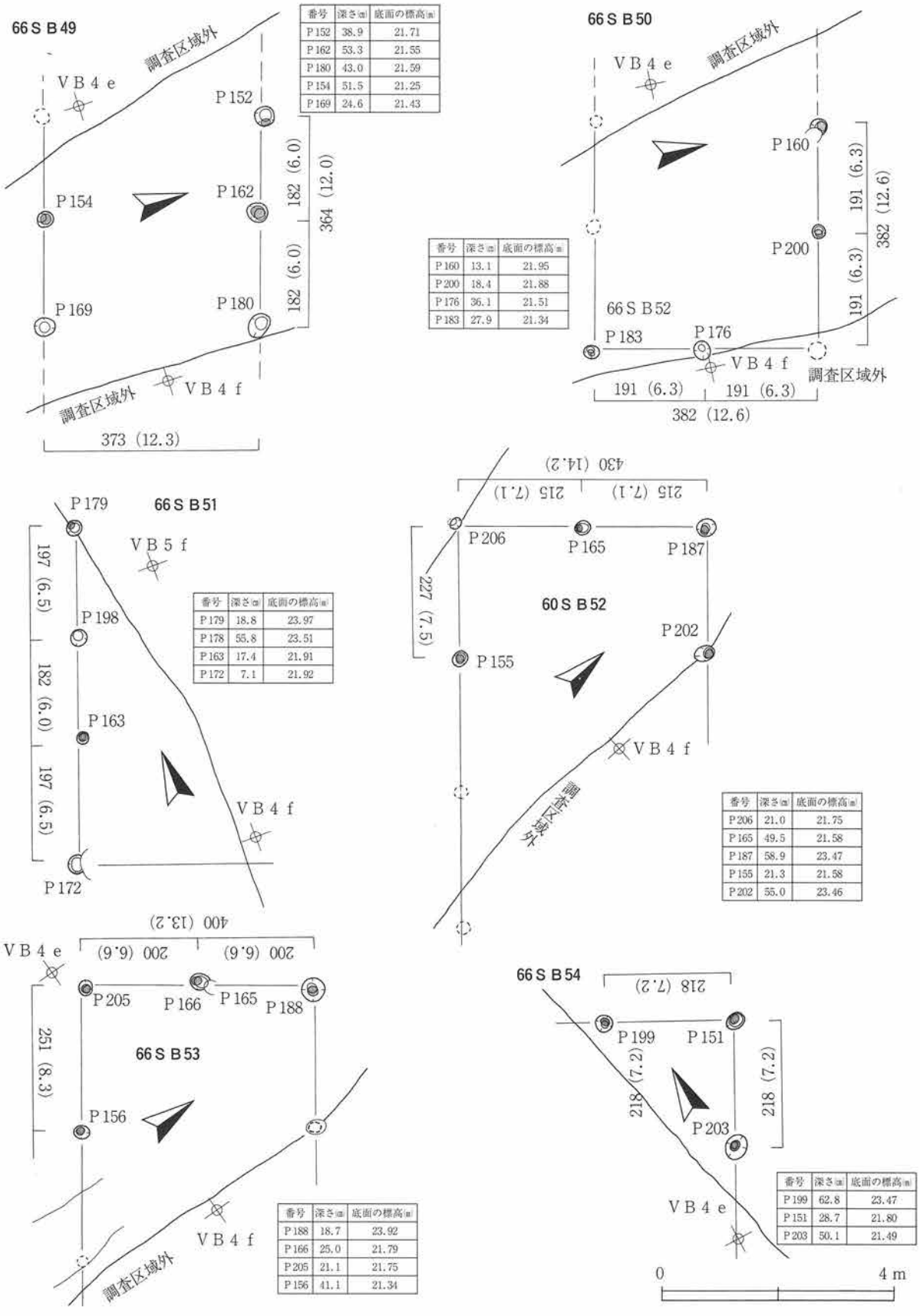
66ＳＢ49（第213図）
〔位置〕ＶＢ３ｅ、４ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ46、66ＳＢ48、66ＳＢ50、66ＳＢ51、66ＳＢ52、66ＳＢ53、66ＳＢ54とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ13と柱穴Ｐ152が重複するが本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で364cmで、梁間は373cmである。使用した柱穴は５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－73°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行では６尺（約182cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。12世紀から中世にかけての建物である可能性が高い。

66ＳＢ50（第213図）
〔位置〕ＶＢ３ｅ、４ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ48、66ＳＢ49、66ＳＢ51、66ＳＢ52、66ＳＢ53、66ＳＢ54とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ46の柱穴Ｐ161が本建物のＰ160と重複するが本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出した分で382cmで、梁間は382cmである。面積は検出した分で約4.4坪である。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－78°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行、梁間で６尺３寸（約191cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

66ＳＢ51（第213図）
〔位置〕ＶＢ４ｅ、５ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ46、66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ52、66ＳＢ53、66ＳＢ54とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ48の柱穴Ｐ177が本建物のＰ178と重複するが本建物が新しい。また66ＳＫ18とＰ172が重複するが、本建物が古い。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は576cmで、梁間は調査区外に伸びるため不明である。382cmである。使用した柱穴は４個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－20°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行で６尺５寸（約197cm）と６尺（約182cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

66ＳＢ52（第213図）
〔位置〕ＶＢ４ｅに位置する。
〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ46、66ＳＢ48、66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ51、66ＳＢ54とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ53の柱穴Ｐ166が本建物のＰ165と重複するが本



第213図　F地区の建物②（66 S B 49～54）

建物が新しい。また66ＳＤ７とＰ202重複するが、おそらく本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で227cmで、梁間は430cmである。面積は検出された分で約2.9坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－49°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行で７尺５寸（約225cm）、梁間で７尺１寸（約215cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＢ53（第213図）

〔位置〕ＶＢ３ｅ、４ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＢ45、66ＳＢ46、66ＳＢ48、66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ51、66ＳＢ54とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＢ52の柱穴Ｐ165が本建物のＰ166と重複するが本建物が古い。また66ＳＤ７とプランが重複するが、おそらく本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で251cmで、梁間は400cmである。面積は検出された分で約3.0坪である。使用した柱穴は５個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－55°－Ｗである。

〔柱間寸法〕桁行で８尺３寸（約251cm）、梁間で６尺６寸（約200cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＢ54（第213図）

〔位置〕ＶＢ４ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＢ46、66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ52とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66ＳＤ13と本建物のＰ203と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行、梁間はともに検出された分で218cmである。使用した柱穴は３個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－28°－Ｅである。

〔柱間寸法〕７尺２寸（約218cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

2　土坑

66ＳＫ13（第214図、写真図版83）

〔位置〕ＶＢ０ｆ、１ｆに位置する。

〔重複〕沢跡の整地層よりも新しい遺構である。調査の安全状の配慮のため全掘できなかった。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。壁面の一部に段が付く。

〔埋土〕３層に分けられる。最下層の３層は焼土、炭化物粒、かわらけ片からなる層である。

〔出土遺物〕手づくねかわらけ片が非常に多量に出土した。図示したものは（6050～6060、6064～6073）である。またろくろかわらけ（6086）も１片出土している。

〔遺構の性格〕出土したかわらけ片は使用痕がないものであった。またそれに混じって焼土、炭化物が多量に出土している。そのことから、焼成に失敗したかわらけを廃棄した土坑の可能性が考えられる。

〔年代〕12世紀代後半に所属する可能性が高い。

66ＳＫ14（第214図、写真図版83）

〔位置〕ＶＢ７ｄに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状であるが、壁はほぼ垂直に立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土内に自然木の根？がある。

〔遺構の性格〕不明である。人為的な遺構ではない可能性もある。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ15（第214図、写真図版83）

〔位置〕ＶＢ７ｄに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕埋土中から大堀相馬産陶器碗（6401）が出土した。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕近世以降の所属である。

66ＳＫ16（第214図、写真図版83）

〔位置〕ＶＢ４ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は平坦で底面は垂直に立つ。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕底面に桶の底板が置かれている。また底板の上から寛永通寶（6302）が出土した。

〔遺構の性格〕桶を埋設した肥だめ、または便所である。

〔年代〕近世～近代の遺構である。

66ＳＫ17（第214図、写真図版84）

〔位置〕ＶＢ３ｅ、４ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は不整で、壁は緩やかに立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ18（第214図、写真図版84）

〔位置〕ＶＢ４ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに立つ。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ19（第214図、写真図版84）

〔位置〕ＶＢ５ｆに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立つ。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ20（第215図、写真図版84）

〔位置〕ＶＢ５ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

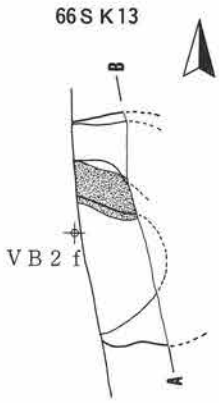
〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

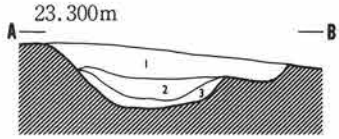
〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66SK13





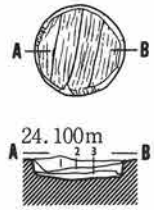
66SK13
1　5Y3/2オリーブ黒色土　2.5Y4/6オリーブ褐色土混入　炭化物多量混入
2　7.5Y4/1灰色粘土　炭化物少量混入
3　7.5Y3/2オリーブ黒色土　10YR2/3黒褐色土を多量に含む炭化物非常に多い　かわらけを多量に含む

66SK14

VB8e

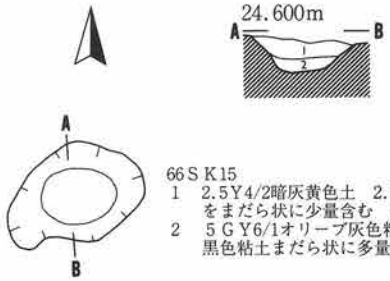
66SK14
1　5Y3/2オリーブ黒色土　炭化物粒少量混入

66SK16



66SK15

VB8e



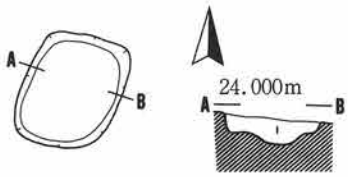
66SK15
1　2.5Y4/2暗灰黄色土　2.5Y4/6オリーブ褐色土をまだら状に少量含む　炭化物粒少量混入
2　5GY6/1オリーブ灰色粘土　5Y3/2オリーブ黒色粘土まだら状に多量混入

VB4e

66SK16
1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　炭化物粒混入　2.5Y4/6オリーブ褐色土粒多量混入
2　桶底
3　2.5Y3/2黒褐色粘土　2.5Y5/3黄褐色粘土がブロックで混入

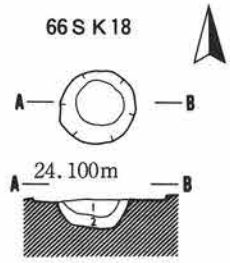
66SK17

VB4e



66SK17
1　2.5Y4/2暗灰黄色土　水酸化鉄分、炭化物粒多量混入

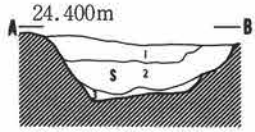
66SK18



VB3e

66SK18
1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　2.5Y6/3にぶい黄色粘土粒少量混入　水酸化鉄分、炭化物粒少量混入
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　2.5Y6/3にぶい黄色粘土まだら状に多量混入　炭化物粒少量混入

66SK19



VB5e

66SK19
1　2.5Y4/1黄灰色土　2.5Y4/3オリーブ褐色土まだら状に多量混入　酸化して2.5Y5/6黄褐色を呈する粘土がブロックで混入　水酸化鉄分多量混入
2　5Y4/2灰オリーブ色土　5Y5/3灰オリーブ色粘土まだら状に多量混入　炭化物粒多量混入
3　7.5Y5/2灰オリーブ粘土　5Y4/1灰色土まだら状に多量混入　炭化物粒少量混入

第214図　F地区の土坑①（66SK13～19）

66ＳＫ21（第215図、写真図版85）

〔位置〕ＶＢ５ｄに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ22（第215図、写真図版85）

〔位置〕ＶＢ４ｅに位置する。

〔重複〕なし

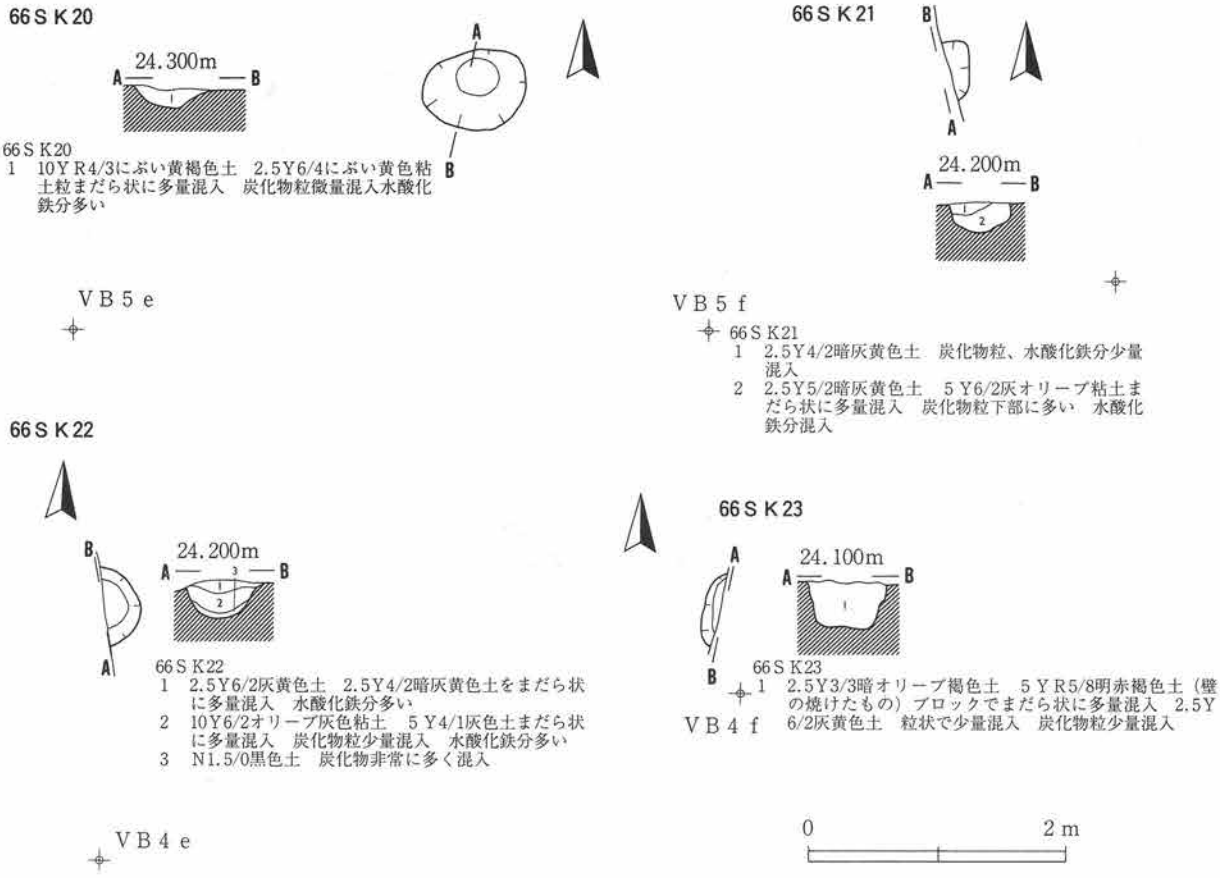
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕３層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。



第215図　Ｆ地区の土坑②（66ＳＫ20～23）

66ＳＫ23（第215図、写真図版85）

〔位置〕ＶＢ４ｅに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は概ね平坦で壁はやや斜めに立つ。

〔埋土〕１層に分けられる。焼けた壁土？が混入する埋土である。人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

3　溝

66ＳＤ４（第216図、写真図版85）

〔位置〕ＶＢ１ｅ、１ｆに位置する。

〔重複〕沢の整地層を切って構築されている。また66ＳＤ５、66ＳＤ６と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕２層に分けられる。流水により形成されたと考えられる。２層にはかわらけ片が非常に多量に含まれる。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（6009、6021、6061～6063、6074～6083、6085）、ろくろかわらけ（6088）、常滑産陶器甕（6104）、渥美産陶器甕（6119～6128）が出土した

〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属である。

66ＳＤ５（第216図、写真図版85）

〔位置〕ＶＢ１ｅ、１ｆに位置する。

〔重複〕沢の整地以前に構築されている。また66ＳＤ４と重複するが本遺構が古い。また66ＳＤ６と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕４層に分けられる。全体に砂質の埋土であり、流水により形成されたと考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明であるが、排水の目的の溝の可能性が高い。

〔年代〕沢整地以前の12世紀の所属である。

66ＳＤ６（第216～218図、写真図版85・86）

〔位置〕ＶＢ１ｅ、１ｆに位置する。

〔重複〕沢の整地層以前に構築されている。また66ＳＤ４と66ＳＤ５と重複するが本溝が古い。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は北西側が高く、北西から南東へ水が流れるようにな

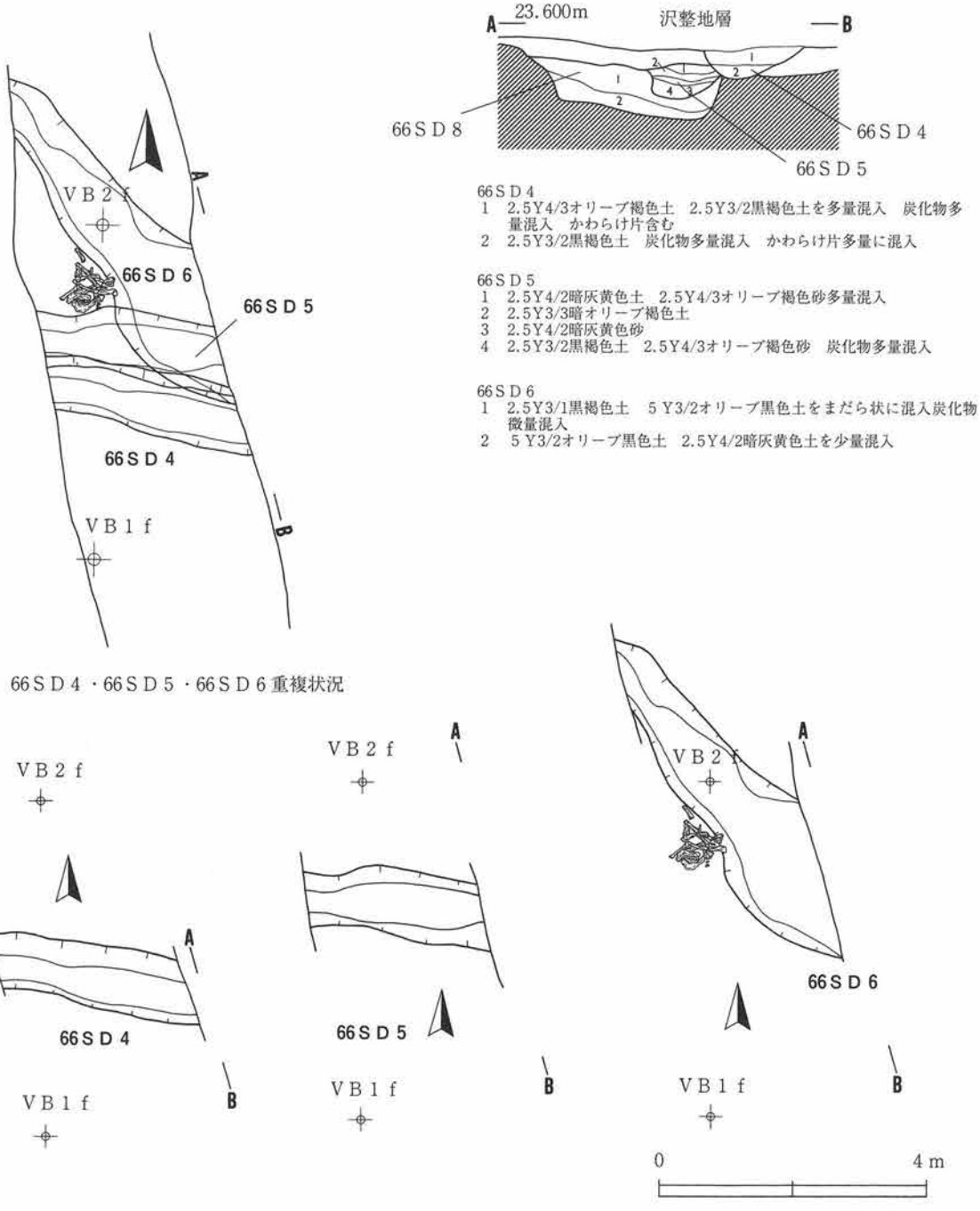
っている。国道西側の66ＳＤ20につながる溝である。埋没沢の縁に沿って構築されている。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

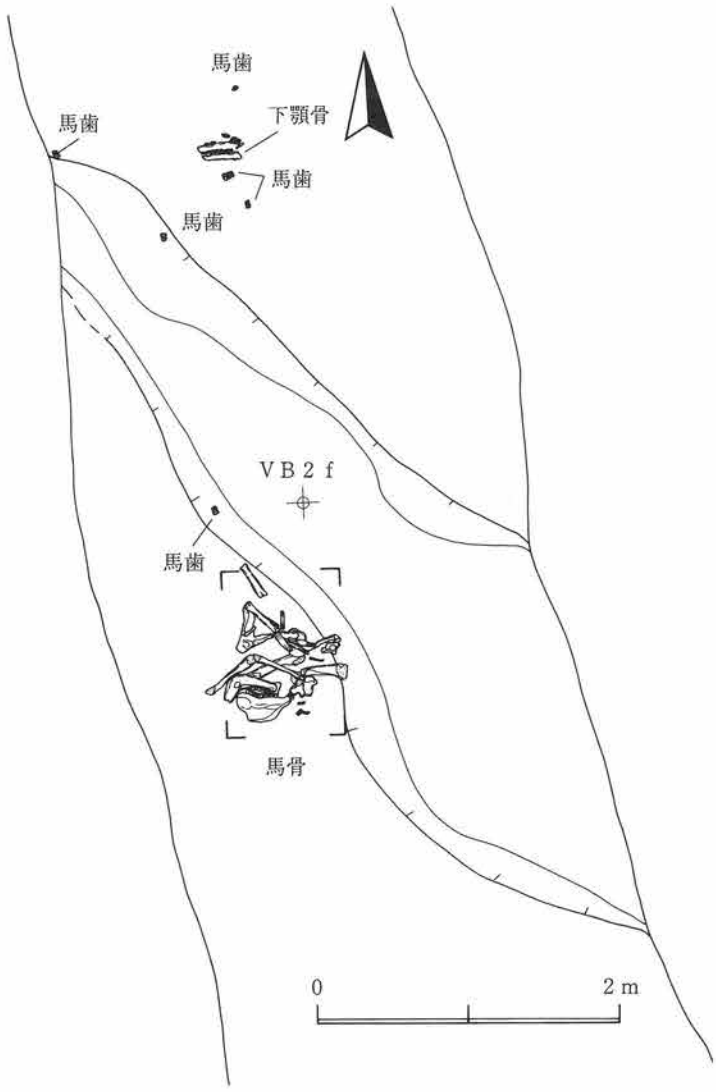
〔出土遺物〕溝の縁から馬骨、馬歯が出土した、下顎の骨が２つ有り、少なくとも２個体以上の馬の骨がある。図では馬骨が溝外にあるようになっているが、本来はこの出土部分は溝の肩の部分にあたる。溝の検出時に、溝のプランをよく把握できず、下げすぎたため生じたものである。

〔溝の性格〕不明である。

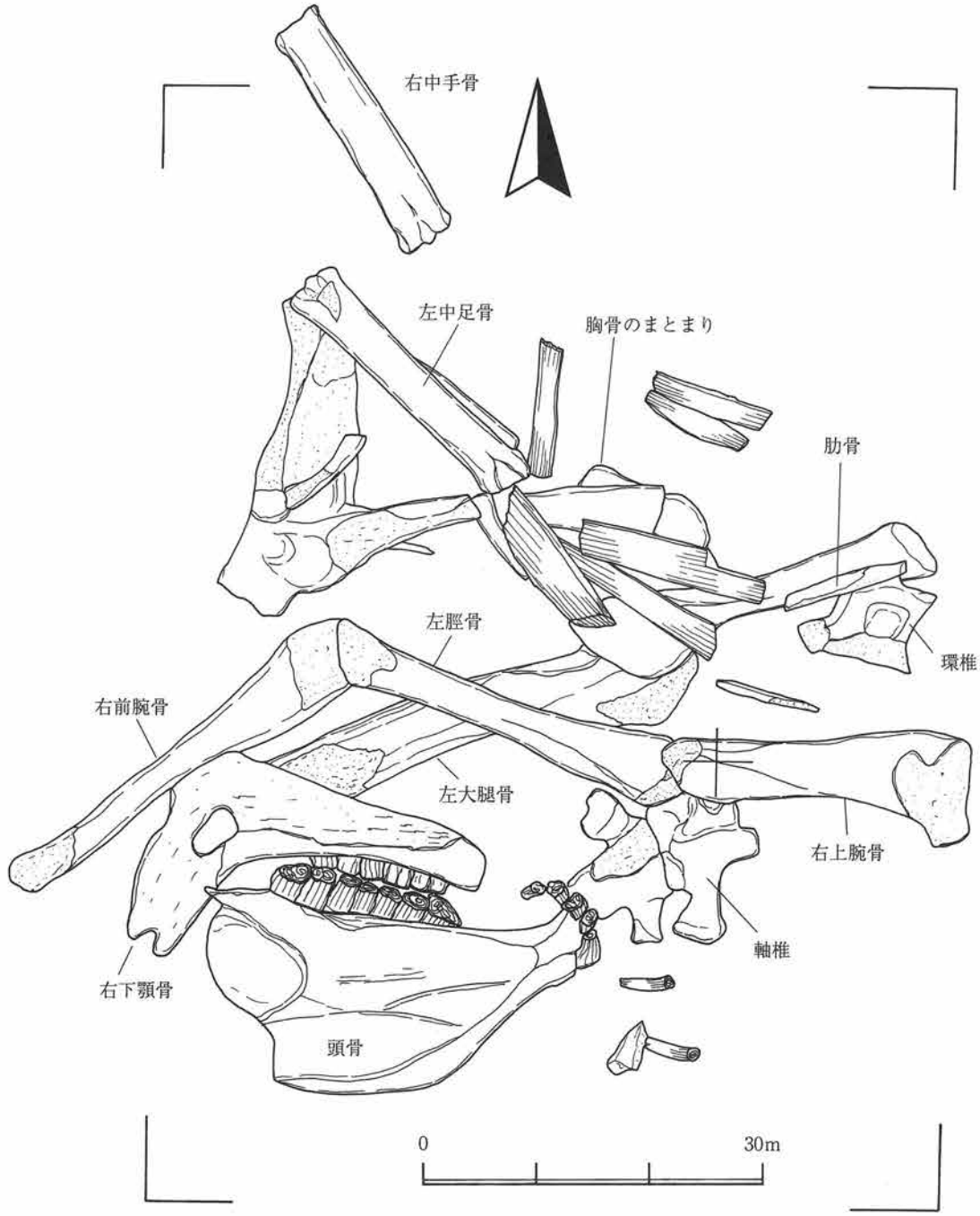
〔年代〕沢整地以前、おそらく12世紀前半の所属である。



第216図　Ｆ地区の溝①（66ＳＤ４～６）



第217図　66ＳＤ６馬骨出土状況①



第218図　66ＳＤ６馬骨出土状況②

66ＳＤ７（第219図、写真図版87）

〔位置〕ＶＢ２ｅ、３ｅ、４ｅ、５ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＤ８と重複するが本遺構が新しい。また66ＳＢ46、66ＳＢ48、66ＳＢ52、66ＳＢ53と重複するが本溝が新しい。また66ＳＢ49、66ＳＢ50、66ＳＢ51と重複するが本溝が新しい。66ＳＢ45とはプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の標高は北側が高く、北から南へ水が流れるようになってい

る。

〔埋土〕３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

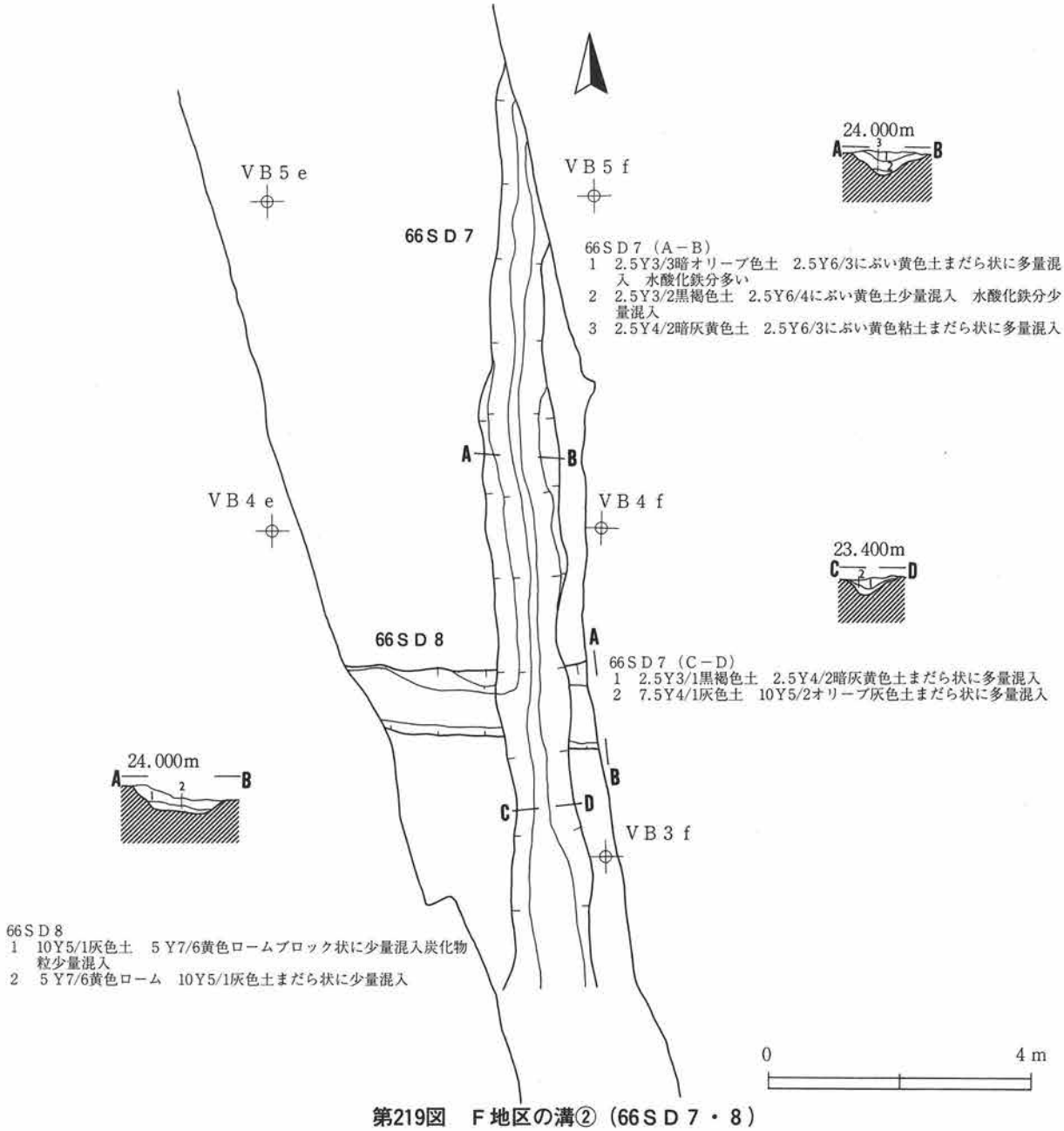
〔年代〕12世紀の所属である。

66ＳＤ８（第219図、写真図版86）

〔位置〕ＶＢ３ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＤ７と重複するが本遺構が古い。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。



第219図　Ｆ地区の溝②（66ＳＤ７・８）

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀の所属の可能性が高い。

66ＳＤ９（第220図、写真図版87）
〔位置〕ⅥＢ０ｃ、０ｄに位置する。
〔重複〕66ＳＤ10と重複するが本遺構が古い。
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐであるが、南東に行くにしたがって幅が広くなる。底面の標高は北東が高く、北東から南西へ水が流れるようになっている。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔溝の性格〕不明である。
〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる66ＳＤ10より古いことから、12世紀前半所属の可能性が高い。

66ＳＤ10（第220図、写真図版87）
〔位置〕ⅥＢ０ｃ、０ｄに位置する。
〔重複〕66ＳＤ９と重複するが本遺構が新しい。また66ＳＤ11と接するが本遺構と同時存在と考えられる。
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。国道西側の66ＳＤ17と同一の溝である。66ＳＤ17と本溝の上幅が合わないが、これは66ＳＤ17の漏斗状に広がる部分が、本溝の場合確認面が低いため検出されなかったためである。底面の標高は西側が高く、西から東へ水が流れるようになっている。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積と考えられる。
〔出土遺物〕埋土中から常滑産陶器甕（6105）が出土した。
〔溝の性格〕大規模な溝であり、単なる排水用の溝ではなく、都市を区画する溝と考えられる。
〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

66ＳＤ11（第220図、写真図版87）
〔位置〕ＶＢ９ｃに位置する。
〔重複〕66ＳＤ12と重複するが本溝が新しい。また66ＳＤ10と接するが本遺構と同時存在と考えられる。
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。底面の傾斜方向は検出した部分では不明瞭である。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕埋土中から常滑産陶器甕（6106）、渥美産陶器甕（6129、6130）が出土した。
〔溝の性格〕道路側溝である。ⅡＢ区から続く道路の東側の側溝である。本溝が66ＳＤ10にぶつかって止まっており、ⅡＢ区から続く道路の北端を示している。
〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

66ＳＤ12（第220図、写真図版87）

〔位置〕ＶＢ８ｄ、９ｃ、９ｄに位置する。

〔重複〕66ＳＤ11と重複するが本遺構が古い。また66ＳＢ44の柱穴Ｐ137と重複するが本溝が古い。また66ＳＢ43とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

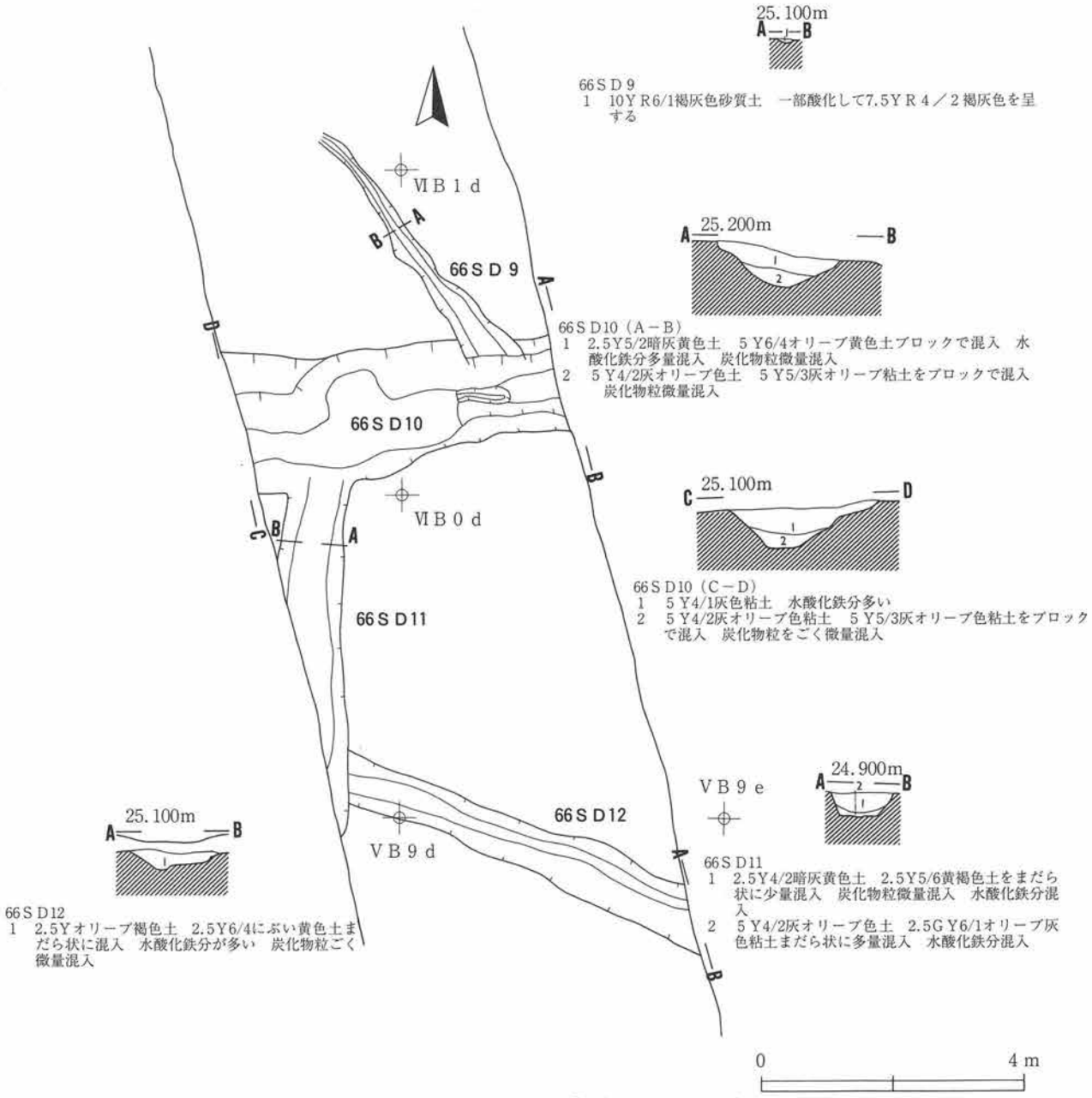
〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。国道西側のを66ＳＤ18と同一の溝である。底面の標高は北西側が高く、北西から南東へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀後半の所属と考えられる66ＳＤ11より古いことから、12世紀前半所属の可能性が高い。



第220図　Ｆ地区の溝③（66ＳＤ９～12）

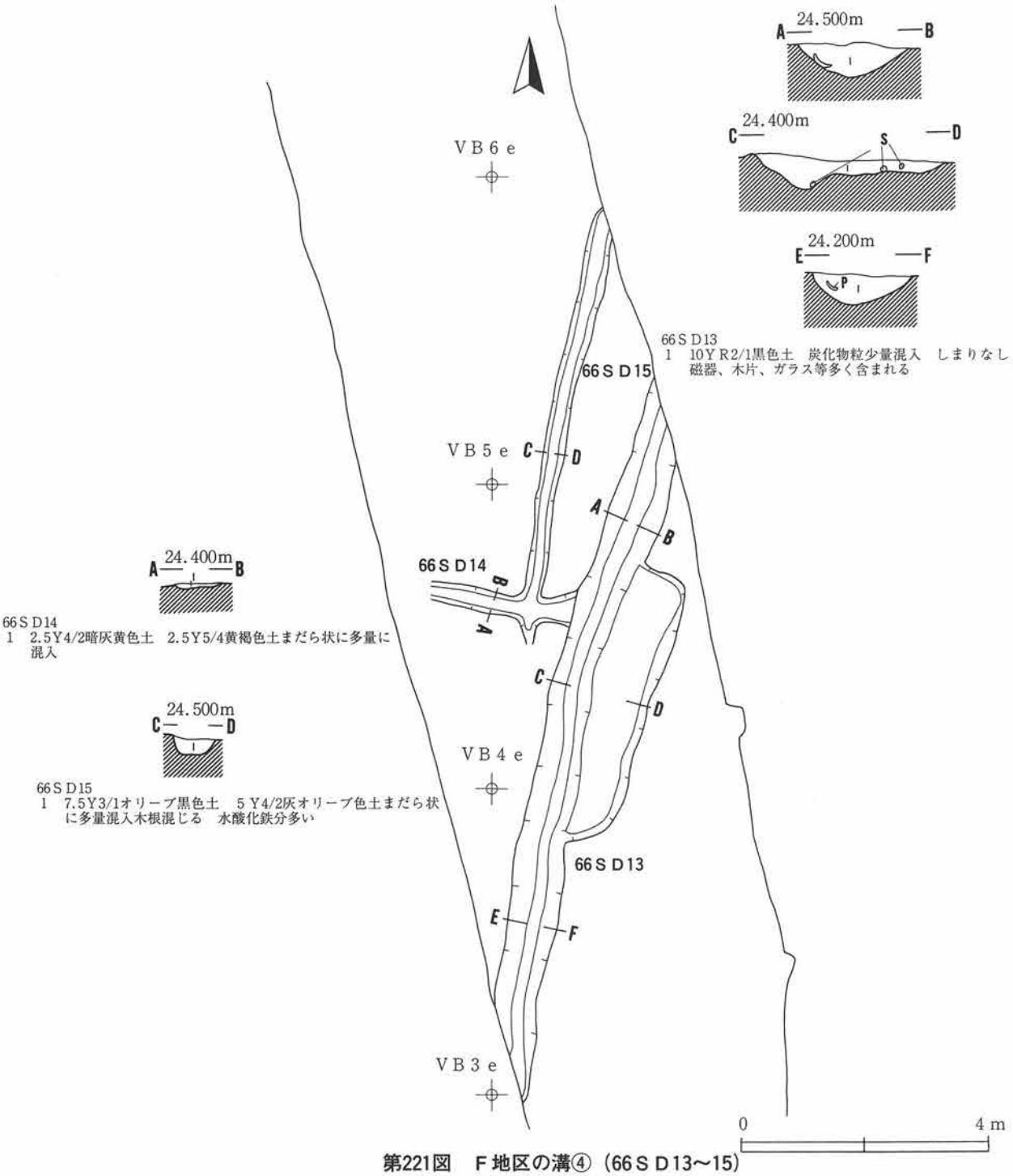
66ＳＤ13（第221図、写真図版88）

〔位置〕ＶＢ４ｅ、５ｅ、６ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＤ14と重複するが本遺構が新しい。また66ＳＢ46の柱穴Ｐ150、66ＳＢ49の柱穴Ｐ152、66ＳＢ53の柱穴Ｐ205、66ＳＢ54の柱穴Ｐ203と重複するが本溝が新しい。

〔平面形式〕全体的にほぼ真直ぐである。中程に溝本体に接するテラス状の部分がある。底面の標高は北側が高く、北から南へ水が流れるようになっている。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積と考えられる。



第221図　Ｆ地区の溝④（66ＳＤ13～15）

〔出土遺物〕近代の陶磁器片、ガラス片、木片が多量に出土した。他に渥美産陶器甕（6131）、大堀相馬産陶器碗（6402）、東北在地産陶器擂鉢が出土した。

〔溝の性格〕溝本体に接する形でテラス状の部分があり、洗い場といったような遺構と考えられる。

〔年代〕廃棄されたのは近代から現代にかけてのことである。

66ＳＤ14（第221図、写真図版88）

〔位置〕ＶＢ５ｄ、５ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＤ13と重複するが本溝が古い。また66ＳＤ15と交わるが前後関係を把握できなかった。同時存在の可能性もある。

〔平面形式〕やや不整な形状である。底面の傾斜方向は不明瞭である。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、ごく新しい時代の溝と考えられる。

66ＳＤ15（第221図、写真図版88）

〔位置〕ＶＢ５ｅ、６ｅに位置する。

〔重複〕66ＳＤ14と交わるが前後関係を把握できなかった。同時存在の可能性もある。

〔平面形式〕ほぼ真直ぐである。底面の傾斜方向は不明瞭である。

〔埋土〕１層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが、ごく新しい時代の溝と考えられる。

F地区柱穴計測表

柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66P133	19.7	24.48	
〃P134	9.1	24.58	66SB43
〃P135	11.34	24.55	66SB44
〃P136	11.6	24.64	66SB43
〃P137	9.5	24.51	66SB44
〃P138	27.1	24.40	66SB43
〃P139	18.8	24.50	66SB44
〃P140	41.2	24.28	66SB44
〃P141	16.1	24.52	
〃P142	11.7	24.53	
〃P143	16.8	24.57	
〃P144	6.5	24.58	
〃P145	9.2	24.57	
〃P146	9.4	24.45	
〃P147	43.4	24.09	
〃P148	22.1	24.29	
〃P149	12.5	22.01	
〃P150	19.8	23.76	66SB46
〃P151	28.7	23.80	66SB54
〃P152	38.9	23.71	66SB49
〃P153	7.4	22.01	
〃P154	51.5	29.94	66SB49
〃P155	21.3	23.59	66SB52
〃P156	41.1	23.35	66SB53
〃P157	30.5	23.38	
〃P158	44.2	23.46	
〃P159	27.0	23.76	66SB46
〃P160	13.1	23.95	66SB50
66P161	58.8	23.46	66SB46
〃P162	53.3	23.55	66SB49
〃P163	17.4	23.91	66SB51
〃P164	21.7	23.83	
〃P165	25.0	23.79	66SB52
〃P166	24.4	23.79	66SB53
〃P167	49.5	23.77	66SB48
〃P168	48.5	23.53	66SB48
〃P169	25.8	23.44	66SB49
〃P170	31.9	23.51	
〃P171	22.0	23.58	
〃P172	7.1	23.93	66SB51
〃P173	10.1	23.92	
〃P174	26.9	23.58	66SB48
〃P175	49.1	23.40	66SB48
〃P176	31.1	23.51	66SB50
〃P177	29.5	23.77	66SB48
〃P178	53.9	23.51	66SB51
〃P179	18.8	23.97	66SB51
〃P180	43.0	23.59	66SB49
〃P181	34.5	23.42	66SB45
〃P182	27.9	23.95	66SB46
〃P183	27.9	23.94	66SB50
〃P184	24.3	23.46	
〃P185	9.0	23.69	66SB46
〃P186	11.7	23.95	66SB45
〃P187	58.9	23.48	66SB52
〃P188	18.7	23.91	66SB53
66P189	32.3	23.97	
〃P190	12.4	23.99	
〃P191	29.0	22.01	
〃P192	18.3	23.88	
〃P193	9.3	23.95	
〃P194	20.9	22.02	
〃P195	20.4	24.24	
〃P196	24.5	24.18	
〃P197	49.5	23.86	
〃P198	34.1	24.16	66SB47
〃P199	62.8	23.47	66SB54
〃P200	18.4	23.88	66SB50
〃P201	7.1	23.95	
〃P202	55.0	23.47	66SB52
〃P203	50.1	23.49	66SB54
〃P204	56.8	23.96	66SB47
〃P205	121.1	23.66	66SB53
〃P206	21.0	23.75	66SB52
〃P207	欠番		
〃P208	32.2	23.95	66SB46
〃P209	欠番		
〃P210	14.1	23.46	66SB46
〃P211	37.0	22.00	66SB47
〃P212	34.4	23.94	66SB47
〃P213	37.6	23.90	66SB47
〃P214	12.9	24.54	

第3節　出土遺物

1　かわらけ（第222～225図、写真図版184～188）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊3　Xかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。下に分類基準を示す。

手づくねかわらけ

C類（口縁部二段なで技法）

C3類　上段のつまみは弱くいくらか内湾ぎみ。上段と下段のなで面はほぼ同じ幅である。口唇部断面形は丸い。

C4類　上段を強くつまむ。上段は下段のなで面より幅が狭い。口唇部断面形は丸い。

C5類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

C5′類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形だが面取り部がくびれる。

D類（口縁部一段なで技法）

D2 類　口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部断面形は丸い。

D3 類　口縁部は弱く内湾気味。口唇部断面形は丸い。

D4 類　口唇部面取り。口唇部断面形は三角形。

D4′類　D４類に類似。口唇部面取り後、口縁全体を一度なでる。断面形はほぼ三角形。

ろくろかわらけ

Ｒｄ　皿型の大型品

Ｒｂ　皿型の小型品（小型品は皿型とする。）

Ｒｂ　碗型

口縁部の形態

０類　口縁部が底部から丸く立ち上がるもの

１類　口縁部が底部からすぐにほぼまっすぐに立ち上がるもの

２類　口縁部が内湾し、均等の割合で口縁部、底部の二つに二分できるもの。

段の有無と段の数

0　段はなく、表面は滑らかである。

1　段はないが、表面には粗い調整痕がある。

2　段が２段ある。

3　段が３段ある。

4　段が４段ある。

5　段が５段以上ある。

底部の形状

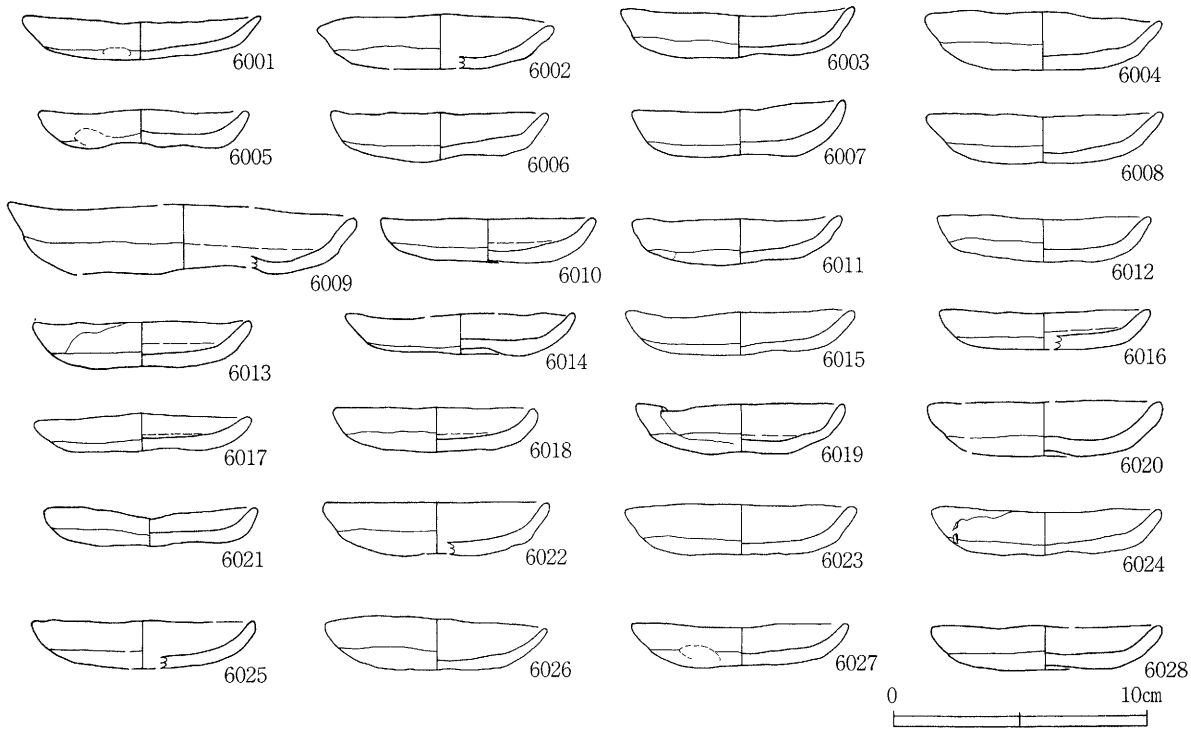
疑似高台がない場合はダッシュ（′）をつける。

疑似高台がある場合はダッシュ（′）をつけない。

以上の要素を合わせてＲｄ01′、ｒｄ10のように表す。

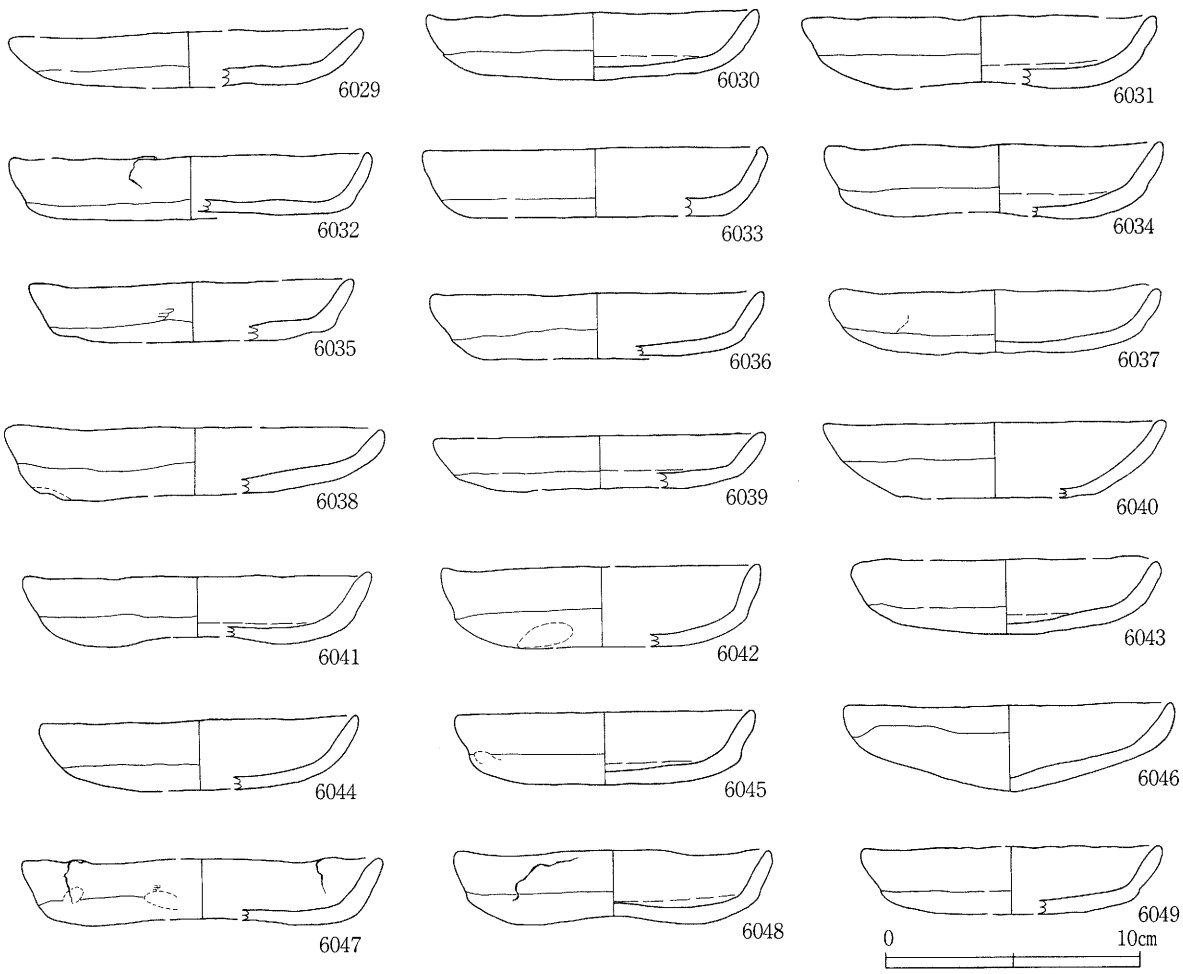
12世紀のかわらけは、手づくねかわらけ85点、ろくろかわらけ３点を図示した。不掲載のかわらけは27kgある。本調査区でかわらけが集中して出土した遺構は、66ＳＫ13と66ＳＤ４である。　特に66ＳＫ13からは多量のかわらけが出土している。手づくねかわらけが58点とろくろかわらけ１点を図化できた。これらの手づくねかわらけの内、C3類が１点、C4類は９点、D2類が６点、D3類が41点、D4類が１点と、D3類が圧倒に多数を占めている。ろくろかわらけの１点はＲｄ00であるが、小型の破片で混入したものと考えられる。

66ＳＤ４出土のかわらけは、手づくね16点、ろくろかわらけ１点が図化できた。



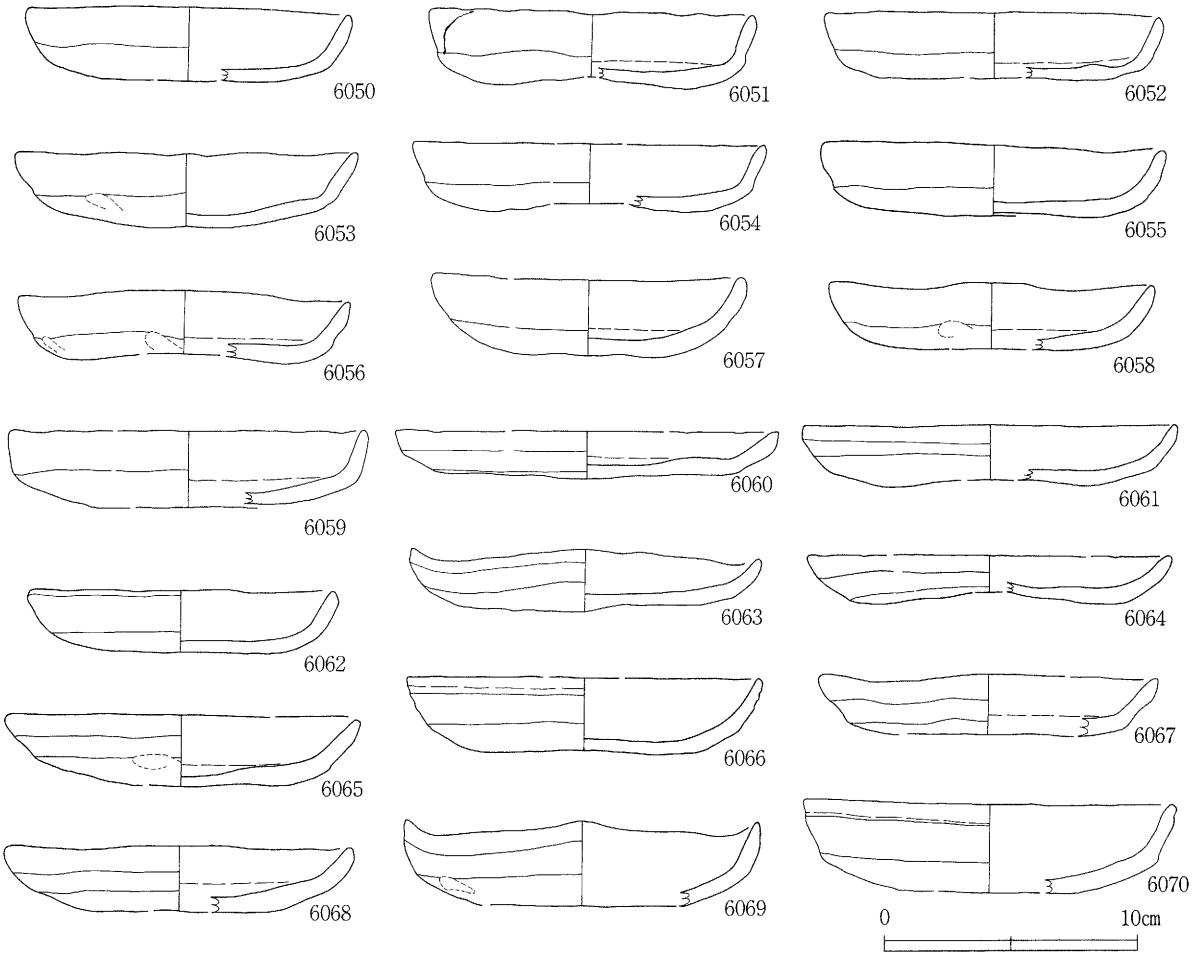
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
6001	66SK13埋土	D_2	9.1		1.8	不明	不明	50	細砂少量	摩耗している
6002	〃	〃	9.1		2.3	指	すのこ痕	50	〃	
6003	〃	〃	9.0		2.0	指		50	〃	
6004	〃	〃	9.2		2.4	〃		100	〃	
6005	〃	〃	8.0		1.5	〃	すのこ痕	70	〃	胎土に海綿状骨針わずかに混じる
6006	〃	〃	8.4		2.0	指？	すのこ痕	80	〃	
6007	沢整地層上（VB1e）	〃	8.2		2.2	不明	不明	50	〃	摩耗している
6008	沢整地層上（VB1f）	〃	9.2		2.0	指	すのこ痕	50	〃	
6009	66SD4埋土	〃	13.3		2.9	指	すのこ痕	50	〃	内面にわずかに炭化物付着
6010	66SK13埋土	D_3	8.4		1.8	指	すのこ痕	50	〃	
6011	〃	〃	7.9		2.0	指	すのこ痕	70	〃	
6012	〃	〃	8.4		1.95	〃		100	〃	
6013	〃	〃	8.4		1.9	〃		40	〃	
6014	〃	〃	9.0		1.65	指？	すのこ痕	100	〃	
6015	〃	〃	9.0		1.8	不明	不明	60	〃	摩耗している
6016	〃	〃	8.2		1.6	〃	〃	40	〃	〃
6017	〃	〃	8.4		1.5	指		60	〃	底部に亀裂が入っている
6018	〃	〃	7.7		1.8	〃	すのこ痕	70	〃	
6019	〃	〃	8.0		2.0	〃		60	〃	口縁部に亀裂が入っている
6020	〃	〃	9.0		2.2	指、ヘラ		50	〃	
6021	66SD4埋土	〃	8.6		1.6	不明	すのこ痕	60	〃	摩耗している
6022	沢整地層上（VB1f）	〃	8.7		2.1	〃		50	〃	〃
6023	〃	〃	9.1		2.05	〃		50	〃	〃
6024	〃	〃	9.0		2.0	〃		50	〃	〃
6025	VB2f地山上	〃	8.5		1.9	〃		50	〃	〃
6026	VB2e地山上	〃	8.6		2.15	〃		80	〃	〃
6027	沢整地層上（VB1f）	〃	8.4		1.8	〃		60	〃	〃
6028	〃	〃	9.0		1.8	〃		80	〃	〃

第222図　F地区かわらけ①



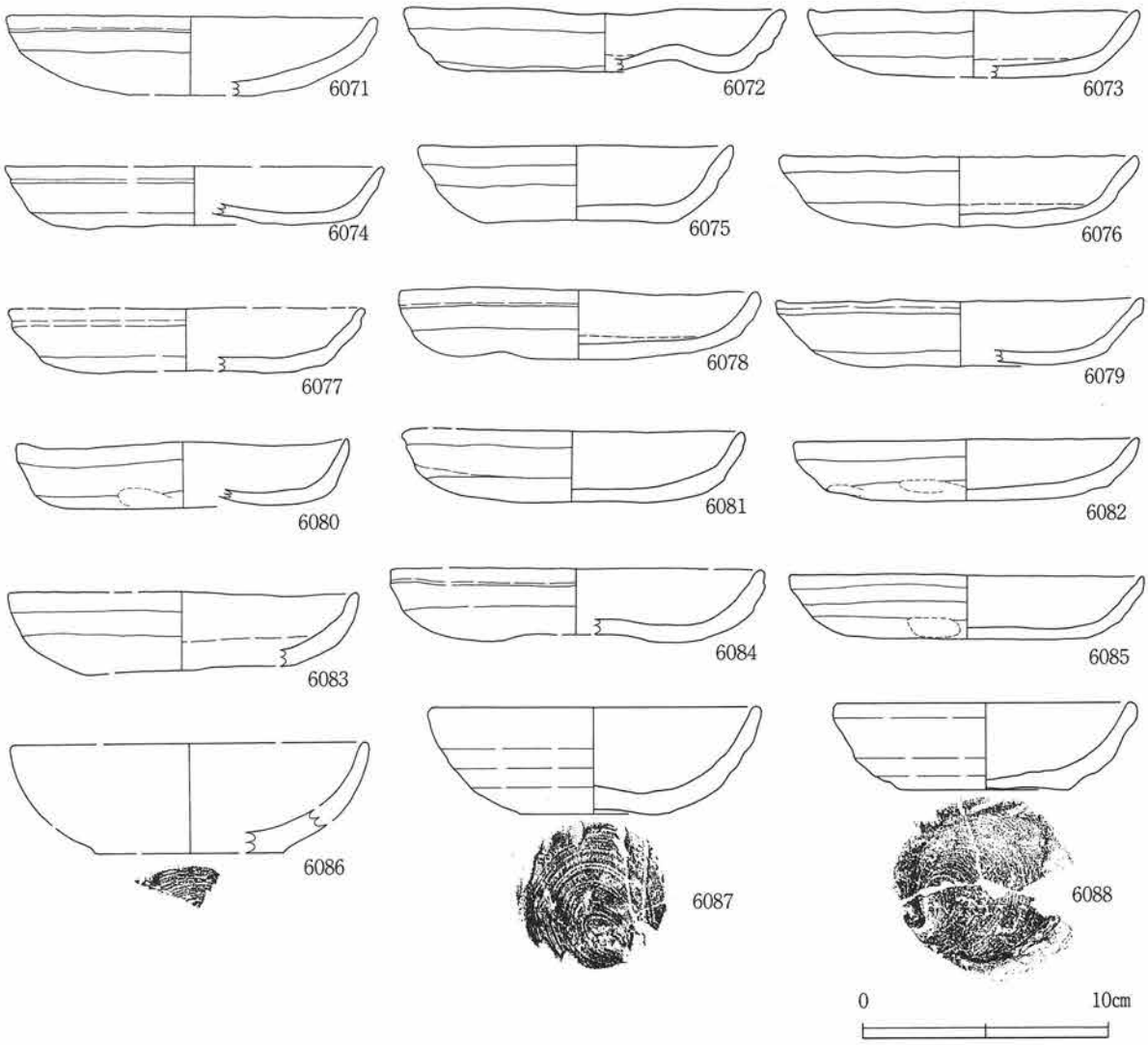
番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
6029	66SK13埋土	D_3	13.7		2.2	不明		40	細砂少量	摩耗している
6030	〃	〃	13.0		2.7	指、ヘラ	すのこ痕	30	〃	
6031	〃	〃	13.7		2.9	指	すのこ痕	40	〃	
6032	〃	〃	14.0		2.5	〃	〃	40	〃	
6033	〃	〃	13.1		2.8	〃	〃	30	〃	
6034	〃	〃	12.9		3.0	〃	〃	60	〃	
6035	〃	〃	12.6		2.4	〃		40	〃	
6036	〃	〃	13.0		2.65	〃		40	〃	
6037	〃	〃	13.0		2.65	指、ヘラ	すのこ痕	40	〃	
6038	〃	〃	14.4		3.0	指	〃	30	〃	ゆがんでいる
6039	〃	〃	13.0		2.1	〃	〃	40	〃	
6040	66P170埋土	〃	13.6		3.1	ヘラ？	〃	40	〃	
6041	66SK13埋土	〃	13.6		2.8	指、ヘラ	〃	50	〃	
6042	〃	〃	12.4		3.2	指、ヘラ	〃	40	〃	
6043	〃	〃	12.0		3.0	指	〃	50	〃	
6044	〃	〃	12.4		3.8	不明		40	〃	摩耗している
6045	〃	〃	11.5		2.9	指、ヘラ	すのこ痕	40	〃	口縁部に亀裂が入っている
6046	〃	〃	12.8		3.45	皮？		60	〃	摩耗している
6047	〃	〃	13.8		2.7	指	すのこ痕	40	〃	
6048	〃	〃	12.2		2.9	指、ヘラ	〃	60	〃	
6049	〃	〃	11.8		2.2	指		30	〃	

第223図　F地区のかわらけ②



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
6050	66SK13埋土	D_3	12.6		2.9	指	すのこ痕	40	細砂少量	
6051	〃	〃	12.8		3.0	指、ヘラ	すのこ痕	50	〃	
6052	〃	〃	13.1		2.6	指	〃	40	〃	
6053	〃	〃	13.6		3.0	〃	〃	40	〃	底部に亀裂が入る
6054	〃	〃	13.8		2.7	不明	〃	40	〃	摩耗している
6055	〃	〃	13.4		2.95	指	〃	100	〃	
6056	〃	〃	13.0		2.8	〃		40	〃	
6057	〃	〃	12.2		3.2	指、ヘラ	すのこ痕	40	〃	内面炭化物付着
6058	〃	〃	12.8		2.7	指	〃	40	〃	
6059	〃	〃	14.0		3.1	指、ヘラ	〃	40	〃	
6060	〃	D_4	15.0		1.9	指、ヘラ	〃	40	〃	ゆがんでいる
6061	66SD4埋土	〃	14.8		2.4	不明	〃	40	〃	摩耗している
6062	〃	〃	11.9		2.5	指	〃	70	〃	〃
6063	〃	〃	13.8		2.5	不明	〃	60	〃	〃
6064	66SK13埋土	C_3	14.2		1.9	指		40	〃	摩耗している
6065	〃	C_4	13.3		2.9	指	すのこ痕	90	〃	
6066	〃	〃	13.4		3.0	指		50	〃	
6067	〃	〃	13.4		2.4	〃	すのこ痕	30	〃	
6068	〃	〃	13.5		2.6	〃	〃	40	〃	
6069	〃	〃	14.0		3.3	指？		30	〃	
6070	〃	〃	14.6		3.6	指		30	細砂多量	

第224図　F地区のかわらけ③



番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
6071	66SK13埋土	C4	15.0		3.25	指	すのこ痕	40	細砂少量	
6072	〃	〃	14.4		2.6	指、ヘラ	〃	40	〃	
6073	〃	〃	13.4		2.8	指	〃	40	〃	
6074	66SD4埋土	〃	15.4		3.6	指？		30	〃	
6075	〃	〃	12.7		3.2	指	すのこ痕	70	〃	
6076	〃	〃	14.6		2.95	不明	〃	60	〃	摩耗している
6077	〃	〃	14.3		2.7	指	〃	50	〃	
6078	〃	〃	14.6		2.95	ヘラ	〃	80	〃	
6079	〃	〃	15.0		2.8	指	〃	50	〃	
6080	〃	〃	15.4		2.7	〃		50	〃	
6081	〃	〃	13.7		3.0	不明	すのこ痕	60	細砂多量	摩耗している
6082	〃	〃	14.0		2.6	ヘラ	〃	70	細砂少量	
6083	〃	〃	14.0		3.4	指、ヘラ	〃	50	〃	
6084	沢整地層上（VB1f）	〃	14.9		3.0	不明	〃	50	〃	摩耗している
6085	66SD4埋土	C5	14.3		2.6	指？		50	〃	
6086	66SK13埋土	Rd00	14.4	7.8	4.5	ロクロ	回転糸切	30	〃	
6087	沢整地層上（VB1f）	Rd04	13.1	6.0	4.4	〃	〃	70	〃	
6088	66SD4埋土	Rd24	12.0	7.0	3.6	〃	〃	100	〃	

第225図　F地区のかわらけ④

2　国産陶器

（1）常滑産陶器（第226図、写真図版188）

本調査区から出土した常滑産陶器で図示したのは片口鉢1点、三筋壺1点、広口壺3点、甕1点の計6点である。他に不掲載の常滑産陶器は15片ある。

6101は口縁部形態から3型式に分類される。口縁部の外面端部下が僅かに凹む。6102は三筋壺である。三筋文は三本線を単位にする櫛状の工具で施文されている。2型式に属する。6103は甕の体部破片である。体部中央付近の破片と思われる。6104～6106は広口壺の体部破片である。6104、6105は体部下半、6106は体部上半の破片である。

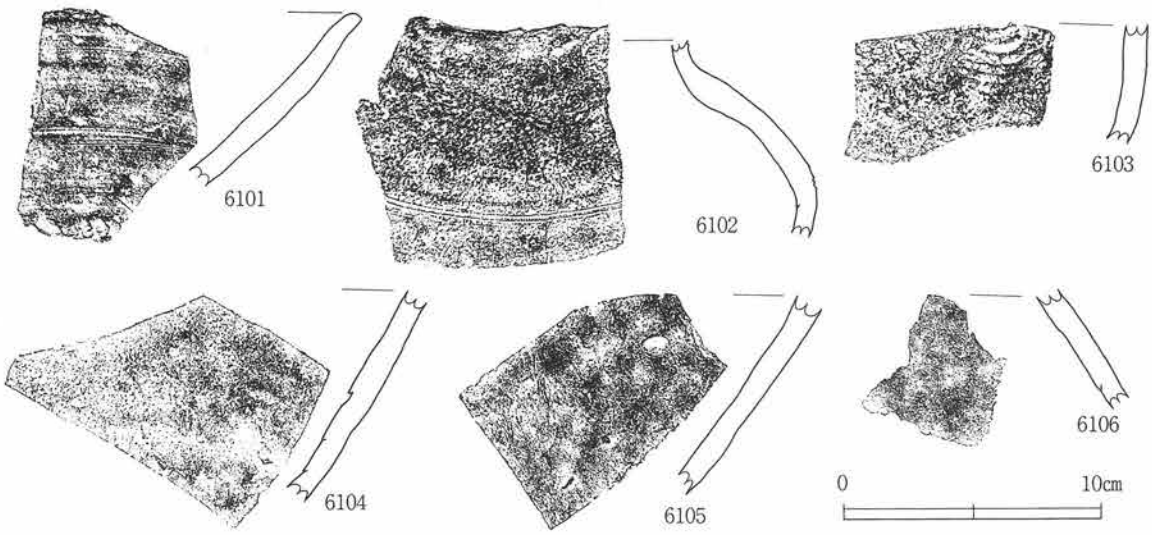
（2）渥美産陶器（第227・228図、写真図版188～190）

山茶碗1点、甕23点を図示した。不掲載の渥美産陶器は16片ある。

6108は山茶碗である。外底面には回転糸切痕がみられる。底辺部に釉が一条垂れており上半部に施釉されている可能性が高い。6109～6130は甕の破片である。6109は口縁部破片である。口唇部にはっきりした面取りがある。6118～6125の体部破片は同一個体である。6126の口縁部破片は口唇の面取りがはっきりしている。

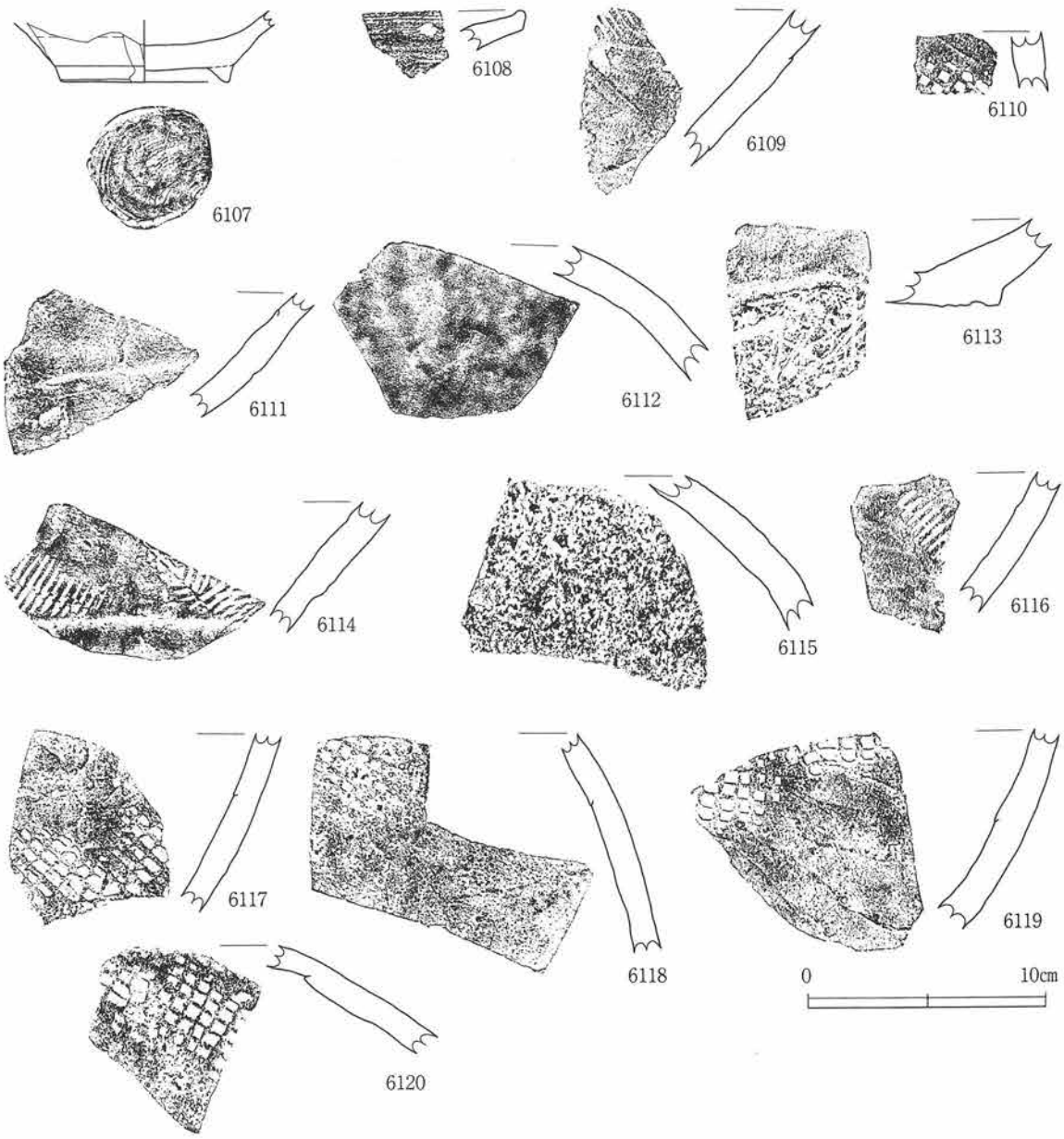
（3）須恵器系陶器（第228図、写真図版190）

1点の出土である。不掲載のものはない。6131は須恵器系陶器壺の体部破片である。胎土は灰色で緻密である。体部下半の破片であるが、波状文などは施されていない。



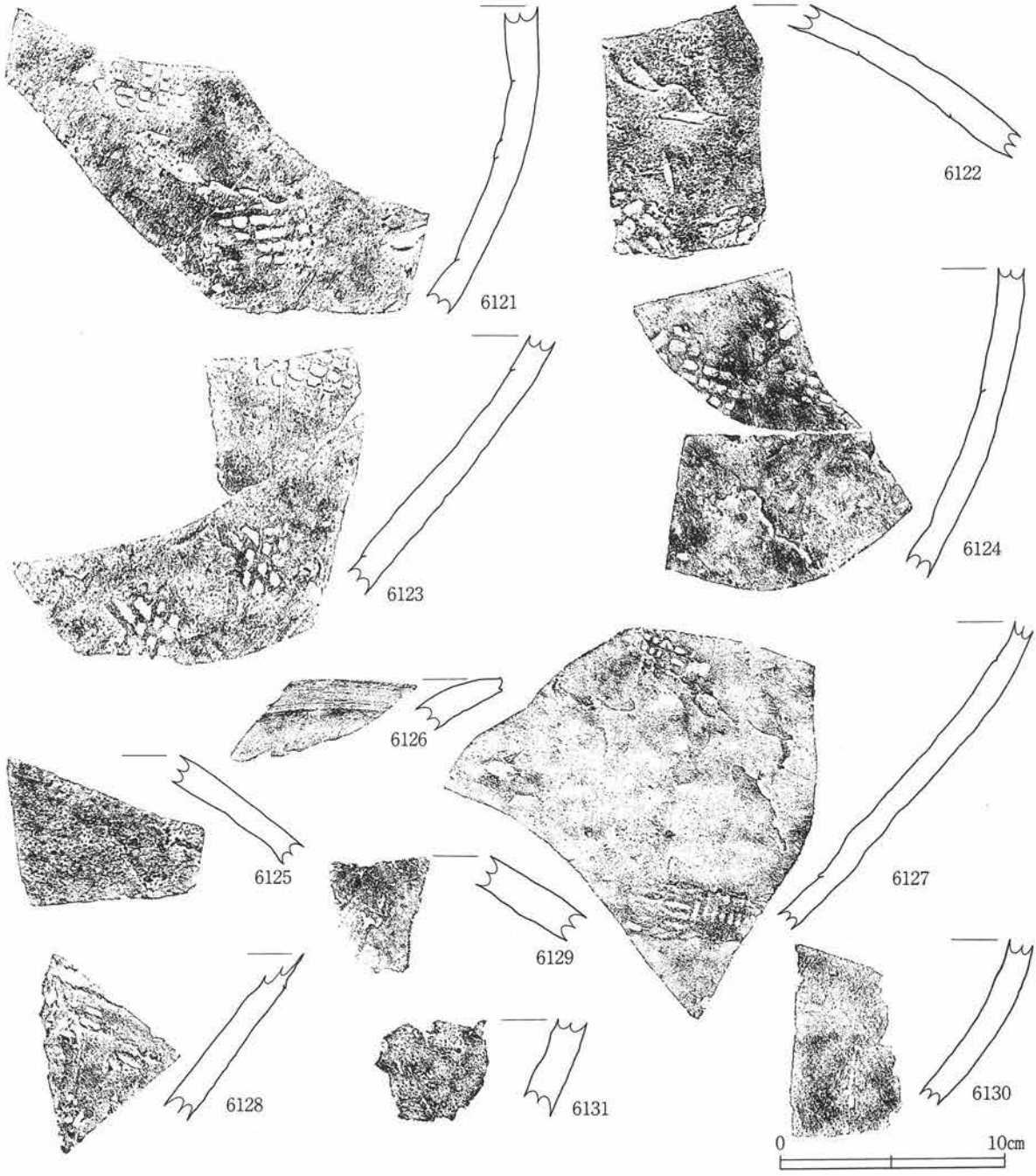
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
6101	常滑	片口鉢	口縁	ＶＢ２ｆ地山上	3型式	灰色	
6102	〃	三筋壺	肩	ＶＢ２ｆ地山上	2型式	灰白色	線の単位3本
6103	〃	甕	体	ＶＢ２ｅ地山上	2～3型式	灰色	
6104	〃	〃	体	66ＳＤ10埋土	〃	オリーブ灰色	
6105	〃	〃	〃	66ＳＤ11埋土	〃	灰褐色	
6106	〃	〃	〃	66ＳＤ13埋土	〃	灰オリーブ色	

第226図　Ｆ地区の常滑産陶器



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
6107	渥美	山茶碗	底～体	沢整地層上(VB1f)	12C	灰色	
6108	〃	甕	口縁	沢整地層上(VB1e)	〃	灰色	
6109	〃	〃	体	沢整地層上(VB1f)	〃	灰色	
6110	〃	〃	〃	〃	〃	灰白色	
6111	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
6112	〃	〃	〃	沢整地層上(VB2e)	〃	オリーブ黒色	
6113	〃	〃	底	VB2f地山上	〃	灰色	
6114	〃	〃	体	〃	〃	灰色	
6115	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰色	
6116	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
6117	〃	〃	〃	沢整地層上(VB2f)	〃	黄灰色	
6118	〃	〃	〃	沢整地層上(VB1f)	〃	灰オリーブ色	6119～6125と同一個体
6119	〃	〃	〃	66SD4埋土	〃	灰色	
6120	〃	〃	肩	66SD4埋土	〃	灰オリーブ色	

第227図　F地区の渥美産陶器①

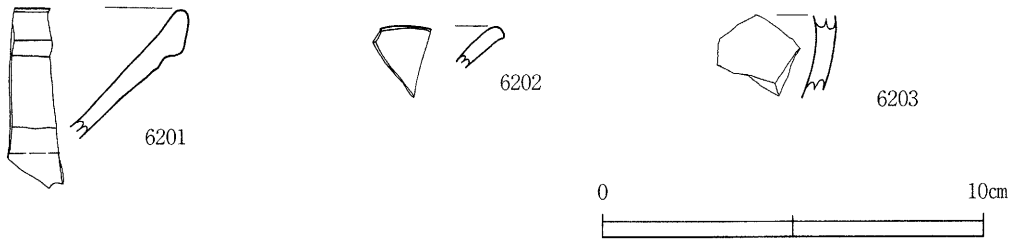


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
6121	渥美	甕	体	66ＳＤ４埋土	12C	灰色	6118～6120　6122～6125と同一個体
6122	〃	〃	〃	〃	〃	灰オリーブ色	
6123	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰色	
6124	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
6125	〃	〃	〃	〃	〃	灰オリーブ色	
6126	〃	〃	口縁	〃	〃	黒色	
6127	〃	〃	体	〃	〃	暗灰色	
6128	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
6129	〃	〃	〃	66ＳＤ11埋土	〃	オリーブ灰色	
6130	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
6131	須恵器系	壺	〃	66ＳＤ13埋土	〃	暗灰色	

第228図　Ｆ地区の渥美産陶器②、須恵器系陶器

3　中国産磁器（第224図、写真図版190）

本調査区で中国産磁器は白磁３点が出土している。6201は白磁碗である。玉縁口縁でⅣ類に分類される。6202の白磁碗は口縁部形態からＶ３類に分類される。6203の白磁壺は二次的に被熱している。器面が荒れているためはっきりしないがおそらくⅢ系と思われる。



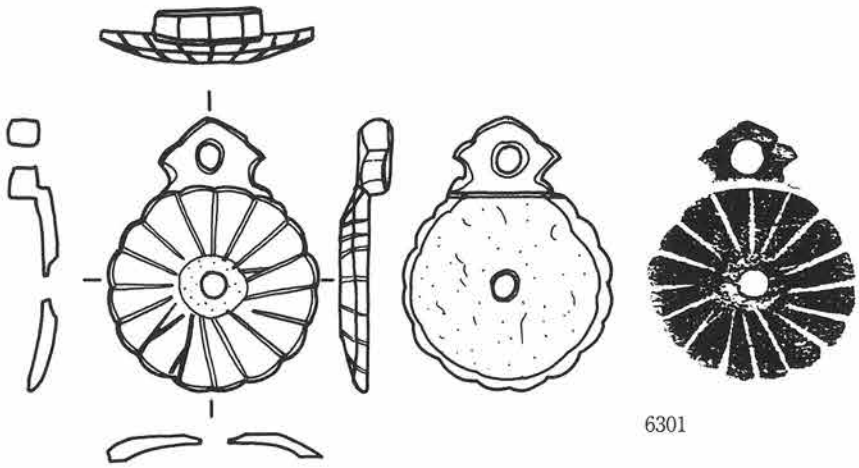
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
6201	白磁	碗	口縁	ＶＢ2ｅ地山上	Ⅳ	12C	
6202	〃	〃	〃	沢整地層上(ＶＢ1ｆ)	Ｖ３	12C	
6203	〃	壺	体	〃	Ⅲ系	12C	

第229図　Ｆ地区の中国産磁器

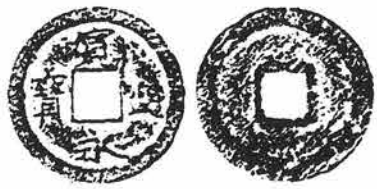
4　金属製品（第230図、写真図版190）

6301は銅製の金具である。銅製の提子の後側の鉉と容器部分をつなぐ金具である。12世紀のものと考えられる。

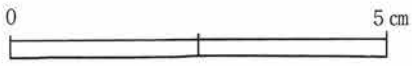
6302は寛永通寶である。鋳所は判断できないが、新寛永であり、18世紀中葉以降のものである。銅銭である。



6301



6302



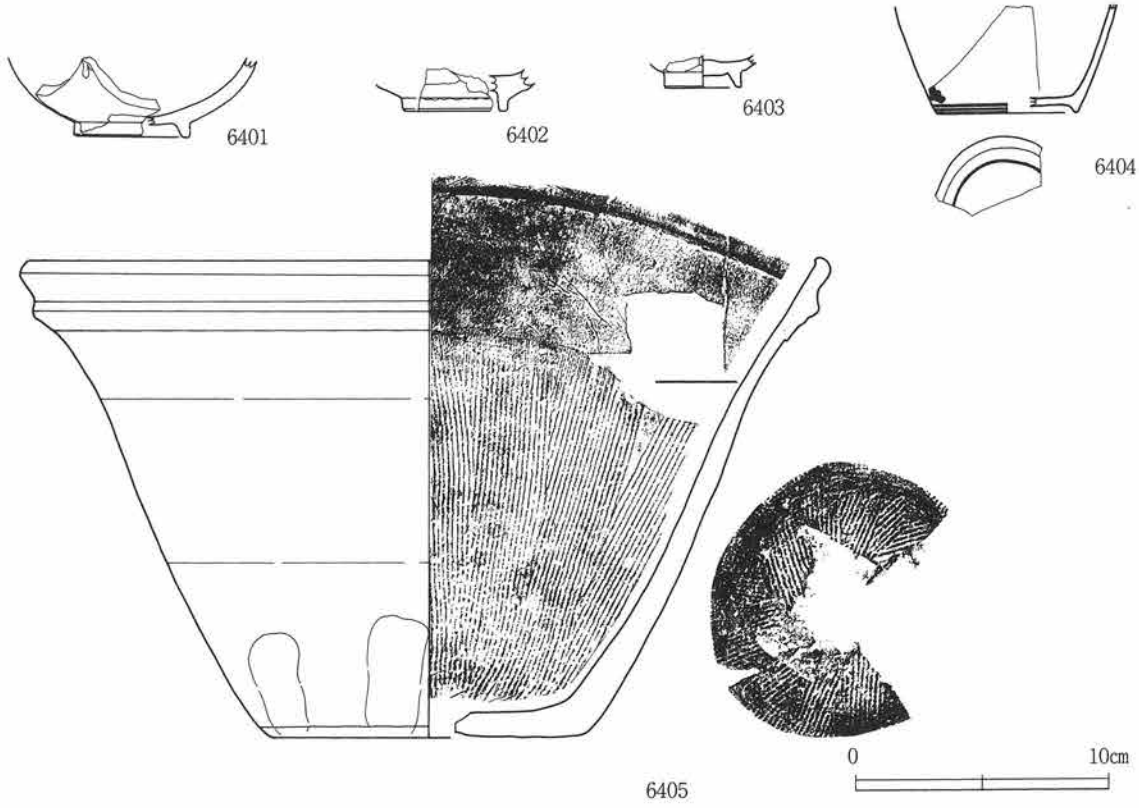
番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	鋳所など
6301	金具	ＶＢ２ｅ地山上	－	10.98	銅	12C	提子の金具
6302	寛永通寶	66ＳＫ16桶底上	2.2	1.95	銅	18C	新寛永

第230図　Ｆ地区の金属製品

5　近世陶磁器（第231図、写真図版190）

本調査区から近世陶磁器が少量出土している。近世陶磁器の他に近代～現代の陶磁器、ガラス瓶なども多量に出土したが、これらは報告を割愛した。本調査区の一部が含まれる字志羅山18番地は、明治初年の地籍図である「広土絵図」では宅地の地目になっている。この「宅地」が近世から存続して営まれた屋敷で、出土した陶磁器はこの屋敷に伴うものと推測される。

6401～6403は大堀相馬産の陶器碗である。いずれも透明性のある灰釉が施される。18世紀代のものと考えられる。6404は磁器の猪口である。肥前産と考えられる。18世紀代のもの。6405は陶器擂鉢である。器高の高い器形で底径も小さい。胎土は赤褐色で鉄釉が施される。東北在地産で19世紀前半のものと考えられる。内底面はかなり磨耗している。底部に穿孔があり、擂鉢として使用した後に植木鉢に転用したことがわかる。



番号	器種	出土位置	法量（cm）			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6401	陶器碗	66ＳＫ15埋土	－	4.3	(2.9)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	
6402	〃	66ＳＤ13埋土	－	3.9	(2.0)	〃	〃	〃	〃	
6403	〃	ＶＢ１ｆ表土	－	3.0	(1.2)	〃	〃	〃	〃	
6404	磁器猪口	ⅥＢ０ｆ表土	－	5.9	(4.2)	白色	染付	肥前	18～19C	
6405	陶器擂鉢	66ＳＤ13埋土	32.1	12.6	18.4	赤褐色	鉄釉	東北産	19C前半	植木鉢に転用している。

第231図　Ｆ地区の近世陶磁器

6　馬骨・馬歯（第218図、写真図版17）

66ＳＤ６の埋土中と縁から馬骨、馬歯が出土している。四肢骨、頭蓋骨、下顎骨などの集中が１つ、それとは別に下顎骨が１つ、その外、歯が６ヵ所から離れて出土した。下顎骨が２つあることから、少なくとも２つ以上の個体の骨があることは確かである。66ＳＤ６は断面の観察では、肩の部分にテラス状の段を持つ溝であり、図で溝の中に納まっていない馬骨、馬歯も、本来は66ＳＤ６のテラス状の段の部分に納まるものと解釈される。よって、これらの馬骨、馬歯はいずれも66ＳＤ６の埋土中からの出土とすることができる。66ＳＤ６は沢の埋立整地より以前の構築の溝であり、馬骨、馬歯も埋立整地以前の時代の所属ということになる。

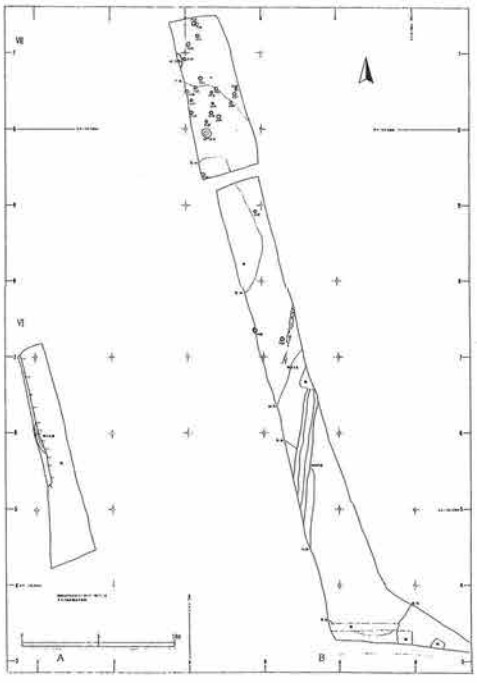
骨の集中部分はＶＢ２ｆグリッド杭の約１ｍ南に位置する。頭蓋骨、下顎骨、四肢の骨、頚骨があるが、１頭分には足りない骨の量である。複数の部位の骨があるのであるが、骨格の整合性がある状態ではなく、ばらばらの状態で出土している。だが頭蓋と下顎は整合性のある状態であり、意図して組み合わさる状態で置いたか、首を肉の付いた状態で置いたかのいずれかと推測される。頭蓋骨は縦に割れた状態であるが、66ＳＤ６に重複する66ＳＤ４、ＳＤ５の構築の際に壊された可能性もある。また他の部位の骨も、重複する溝の構築の際に失われた可能性が高い。骨の他に薄い板状の木が６枚出土している。腐食が著しく、加工痕の有無などは判断できなかった。

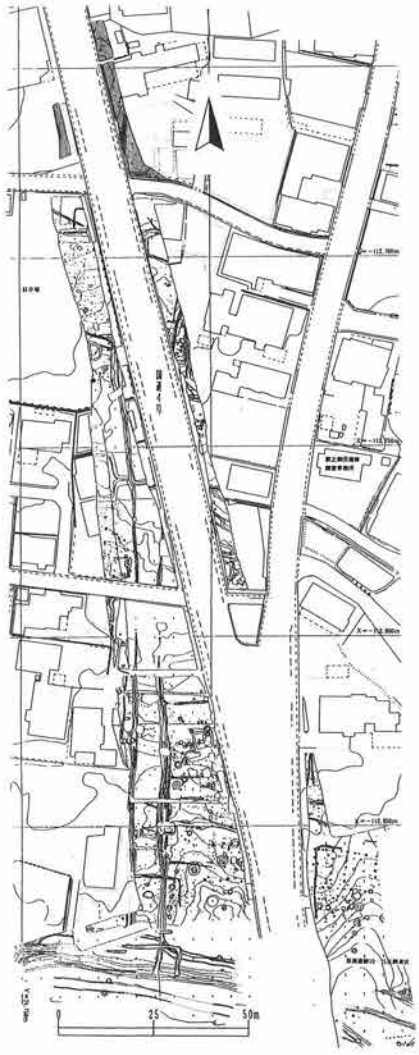
単独で出土した下顎骨は、ＶＢ２ｆグリッド杭の約２ｍ北に位置する。臼歯が２列とそれをささえる部分の下顎骨が残存していた。前歯とその部分の下顎骨は腐食のためか残存していなかった。

他に歯が６ヵ所から出土している。いずれも臼歯である。

これらの馬骨、馬歯の分析鑑定は八戸市縄文学習館の小林和彦氏に依頼している。詳細は小林氏の報告におまかせしたい。（第13章４）

第10章　G地区の遺構・遺物





第10章　G地区の遺構・遺物

第1節　G地区の概観

G地区は本報告書の調査区の最も北の部分である。ⅥB～ⅦB区が相当する。本調査区は12世紀以来の古道である町道立石線より北に位置しており、都市平泉の中では他のA～F地区と異なる地割りに位置することになる。他の地区は国道の東と西で分けていたが、G地区の西側部分は調査範囲も狭く、遺構も少ないので西側と東側を一括している。

国道の東側では道路側溝（66SD22）とそれに平行する塀（66SA5）が検出されている。この道路側溝は、町道立石線より南の道路状遺構の軸方向である正方位と異なり、東に約10度傾いている。他に掘立柱建物、土坑が検出されている。国道西側では撹乱が著しく、土坑が1基（66SK36）検出されたにすぎない。

出土遺物はかわらけ、中国産白磁、石製の挽臼が出土している。12世紀の国産陶器は1片も出土しなかった。

第2節　遺構

1　建物

66SB55（第232図）

〔位置〕ⅦB0a、1aに位置する。

〔重複〕66SB57とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66SB56の柱穴P429と本建物のP430が重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で556cm、梁間は412cmである。面積は検出された分で約6.9坪である。使用した柱穴は平泉町教育委員会の調査区の分を合わせて6個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はN－88°－Wである。

〔柱間寸法〕桁行では4尺6寸（約139cm）が用いられている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

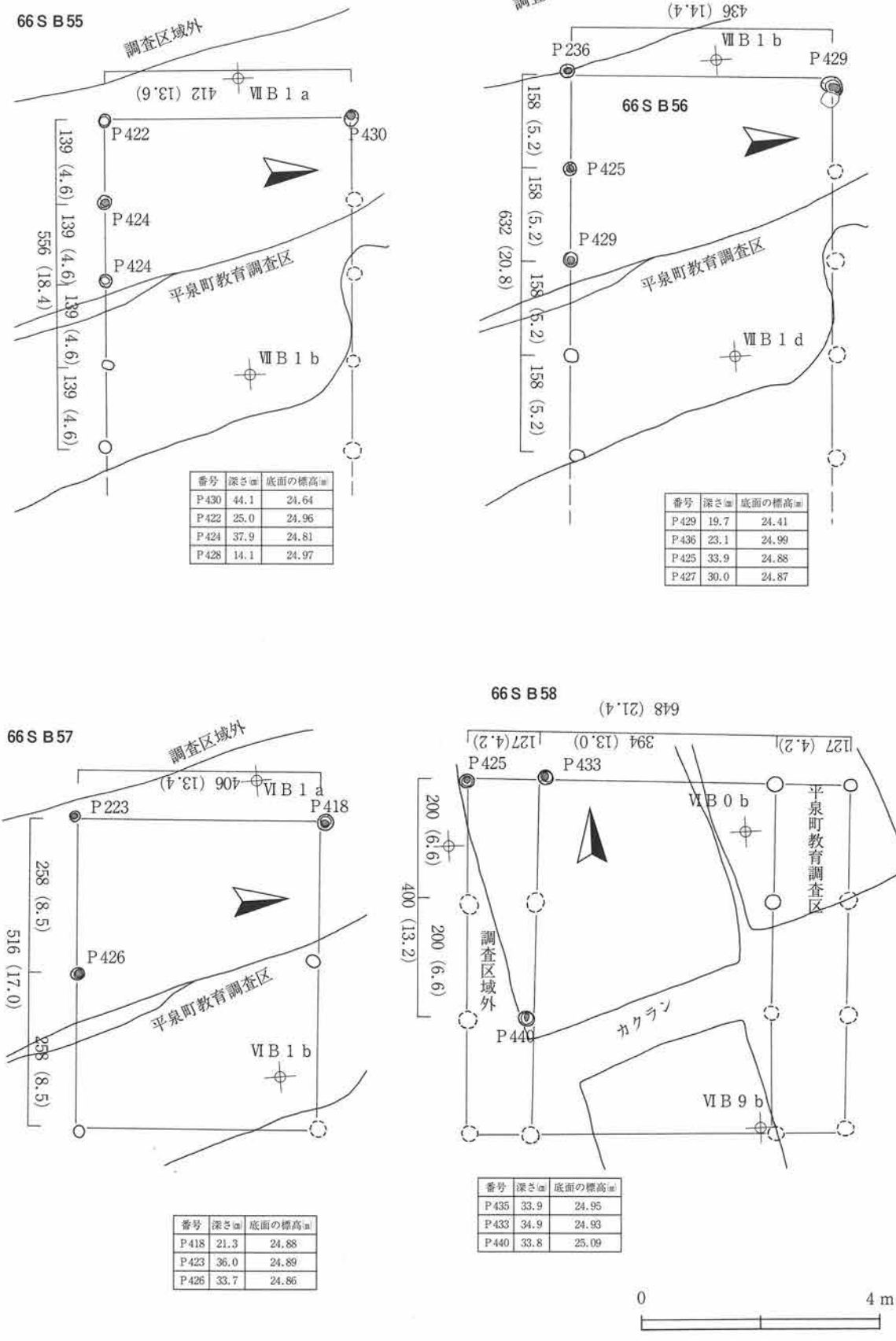
66SB56（第232図）

〔位置〕ⅦB0a、1a、0b、1bに位置する。

〔重複〕66SB57とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。また66SB55の柱穴P430と本建物のP429が重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で632cm、梁間は436cmである。面積は検出された分で約8.7坪である。使用した柱穴は平泉町教育委員会の調査区の分を合わせて6個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はN－86°－Wである。



番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P430	44.1	24.64
P422	25.0	24.96
P424	37.9	24.81
P428	14.1	24.97

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P429	19.7	24.41
P436	23.1	24.99
P425	33.9	24.88
P427	30.0	24.87

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P418	21.3	24.88
P423	36.0	24.89
P426	33.7	24.86

番号	深さ(m)	底面の標高(m)
P435	33.9	24.95
P433	34.9	24.93
P440	33.8	25.09

第232図　G地区の建物（66SB55～58）

〔柱間寸法〕桁行では５尺２寸（約158cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

66ＳＢ57（第232図）
〔位置〕ⅦＢ０ａ、１ａに位置する。
〔重複〕66ＳＢ55、66ＳＢ56とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は検出された分で516cm、梁間は406cmである。面積は検出された分で約6.3坪である。使用した柱穴は平泉町教育委員会の調査区の分を合わせて５個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－85°－Ｗである。
〔柱間寸法〕桁行では８尺５寸（約258cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

66ＳＢ58（第232図）
〔位置〕ⅥＢ９ａ、９ｂ、ⅦＢ０ａ、０ｂに位置する。
〔重複〕66ＳＢ59とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。
〔平面形式〕掘立柱建物である。東西に廂を持つ建物と考えられる。桁行は検出された分で400cm、梁間は394cmである。面積は検出された分で約7.8坪である。使用した柱穴は平泉町教育委員会の調査区の分を合わせて６個である。
〔建物方位〕桁行の軸方向はＮ－４°－Ｅである。
〔柱間寸法〕桁行では６尺６寸（約200cm）、廂では４尺２寸（約172cm）が用いられている。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕不明である。

2　土坑

66ＳＫ34（第233図、写真図版89）

〔位置〕ⅥＢ９ａ、ⅦＢ０ａに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

66ＳＫ35（第233図、写真図版89）

〔位置〕ⅦＡ０ｊ、ⅦＢ０ａに位置する。

〔重複〕なし

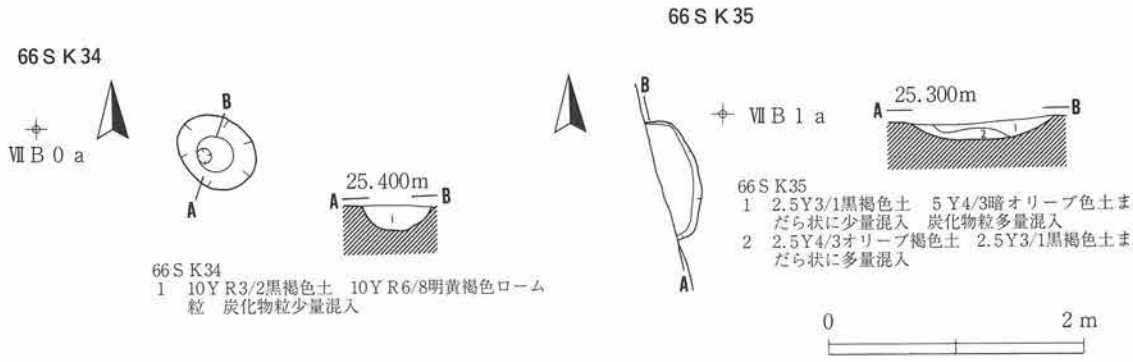
〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。



第233図　Ｇ地区の土坑①（66ＳＫ34・35）

66ＳＫ36（第234図、写真図版90）

〔位置〕ⅦＡ６ｉ、７ｉに位置する。

〔重複〕なし。撹乱によりプランの大部分が失われている。

〔底面、壁〕底面は皿状なっており、底面と壁面の区別ができない。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

第234図　G地区の土坑②（66SK36）

3　溝

66SD22（第235図、写真図版89）

〔位置〕ⅥB4b、5b、6bに位置する。

〔重複〕なし

〔平面形式〕ほぼ真直ぐである。底面の標高は南側が高く北側が低い。溝の方位は軸線の設定にもよるが、N－11°－Eである。

〔埋土〕3層に分けられる。2層は砂質で流水により生成された層と考えられる。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ（7001）が出土した。他に手づくねかわらけ片が2kg出土している。

〔溝の性格〕道路側溝である。道路の西側の側溝である。

〔年代〕12世紀後半の所属の可能性が高い。

4　塀

66SA5（第236図、写真図版89・90）

〔位置〕ⅥB6b、7bに位置する。

〔重複〕なし

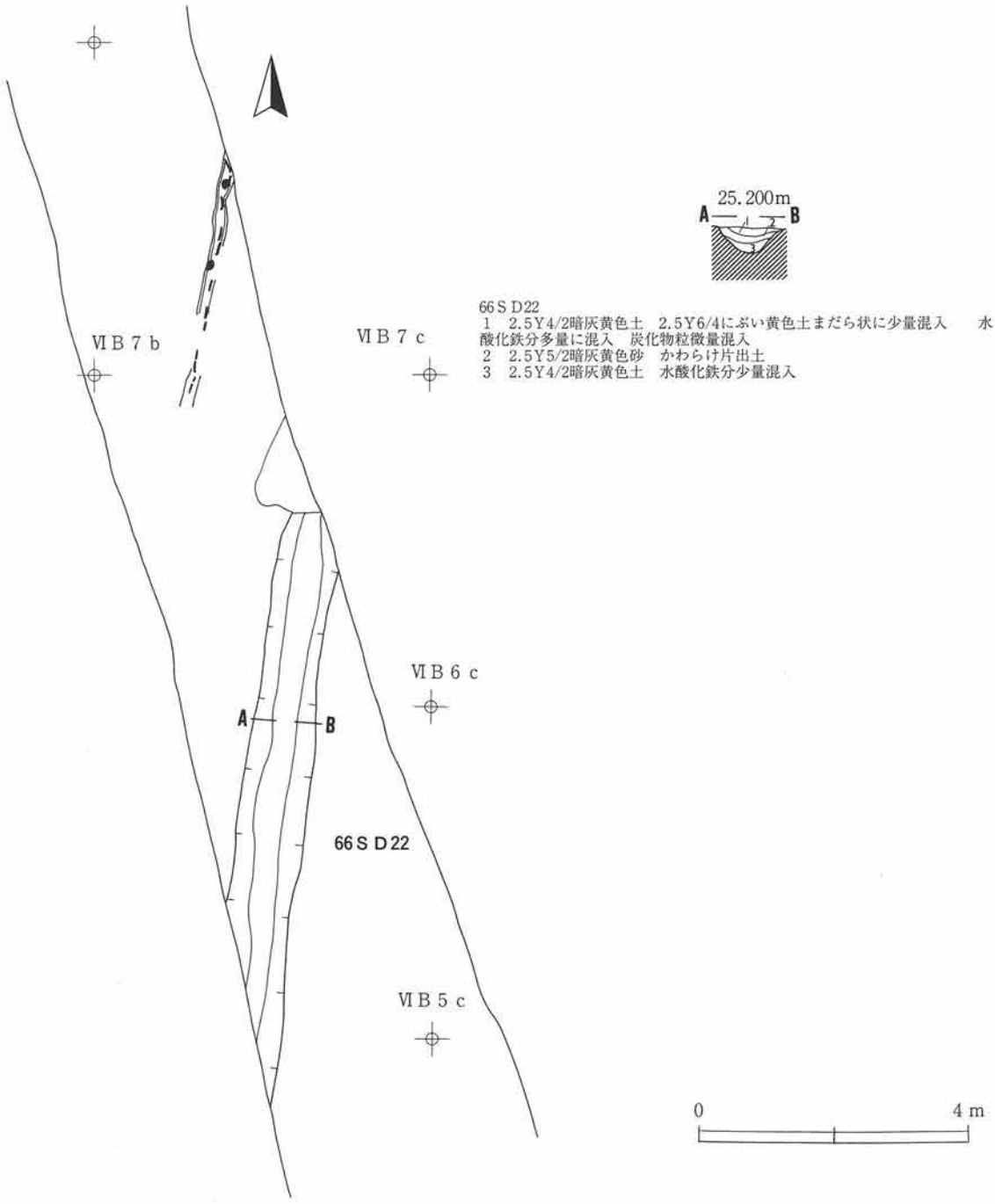
〔形式〕掘方が確認できた部分では幅約18cmで、断面形がU字形の掘方である。板材は幅約2cm、長さ約18cmほどである。断面の観察では先端は尖っていないが、掘方の底面から6cmも食込んでいるものがあり、意図的に打ち込まれたものと考えられる。また板状ではなく円形のプランの痕跡もみられる。板材は痕跡のみで、その木質が残存しているものはなかった。

〔埋土〕掘方の埋土は1層に分けられる。人為堆積である。

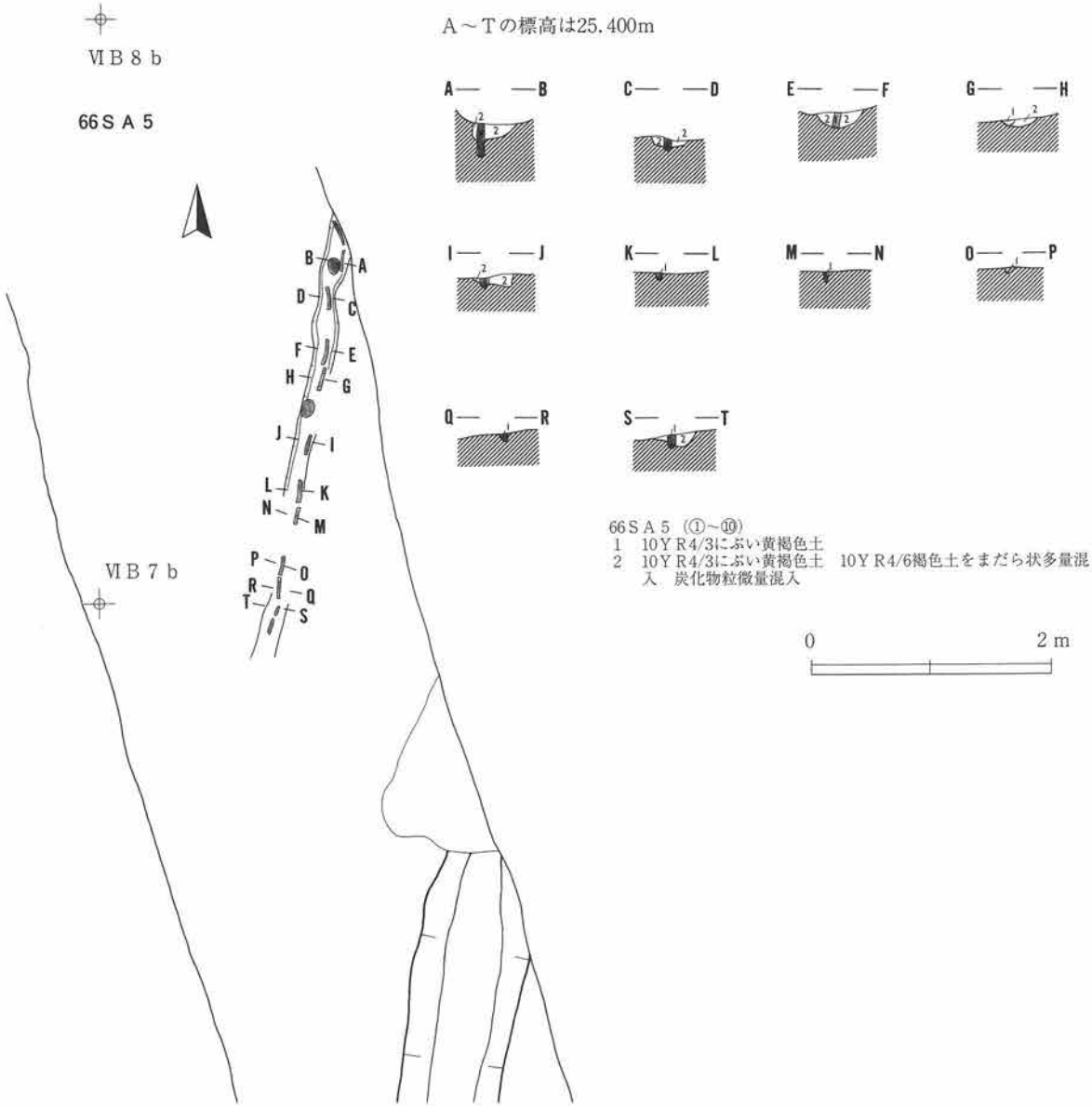
〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕板塀である。道路側溝と平行な位置にあり同時存在と考えられる。道路から屋敷を区画し、また道路から見えないようにする目隠し塀と考えられる。

〔年代〕12世紀後半の所属である。



第235図　G地区の溝（66ＳＤ22）



第236図　G地区の塀（66ＳＡ５）

G地区柱穴計測表

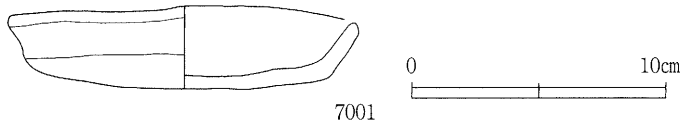
柱穴番号	深さ（cm）	底面の標高（m）	建物番号
66Ｐ418	21.1	24.88	66ＳＢ57
〃Ｐ419	17.1	24.95	
〃Ｐ420	21.1	25.05	
〃Ｐ421	34.0	24.84	
〃Ｐ422	25.0	24.96	66ＳＢ55
〃Ｐ423	36.0	24.89	66ＳＢ57
〃Ｐ424	37.9	24.81	66ＳＢ55
〃Ｐ425	33.9	24.88	66ＳＢ56
〃Ｐ426	33.4	24.89	66ＳＢ57
〃Ｐ427	30.0	24.88	66ＳＢ56
〃Ｐ428	14.1	24.98	66ＳＢ55
〃Ｐ429	19.7	24.90	66ＳＢ56
〃Ｐ430	44.1	24.64	66ＳＢ55
〃Ｐ431	27.1	25.01	
〃Ｐ432	22.5	25.06	
〃Ｐ433	34.9	24.93	66ＳＢ8
〃Ｐ434	30.1	24.94	
〃Ｐ435	33.9	24.95	66ＳＢ58
〃Ｐ436	23.1	24.99	66ＳＢ56
〃Ｐ437	9.8	25.25	
〃Ｐ438	8.4	25.35	
〃Ｐ439	欠番		
〃Ｐ440	33.8	25.09	66ＳＢ58

第３節　出土遺物

1　かわらけ（第237図、写真図版191）

かわらけの分類は、松本建速氏が平安京の形態分類を基本に柳之御所の資料を加えておこなった方法（岩手埋文　1995「柳之御所跡」分冊３　Ｘかわらけの形態分類と編年）に従うことにする。

本調査区で図示したのは手づくねかわらけ１点である。これは道路側溝である66ＳＤ22から出土した。かわらけの分類はＤ４類である。他本調査区では、不掲載のかわらけが２kg出土している。これらも66ＳＤ22からの出土である。

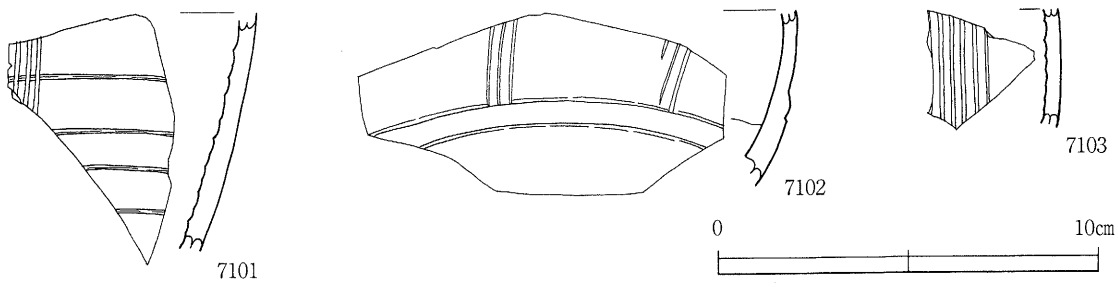


番号	出土位置	分類	法量（cm）			内面ナデ	外底（すのこ痕）	遺存度（%）	胎土	備考
			口径	底径	器高					
7001	66ＳＤ22埋土	C_4	13.6		3.3	指	すのこ痕	100	細砂少量	

第237図　Ｇ地区のかわらけ

2　中国産磁器（第238図、写真図版191）

本調査区で中国産磁器は白磁壺が３片が出土している。これらは同一個体と推測される。化粧土が施されておりⅡ系と考えられる。7101は体部中央の破片である。外面には横位に走る沈線が数条あり、３条以上の垂線が施されている。内面には施釉されている。7202は体部下半の破片である。破片の外面中央に段がありそれより上には３条を単位とした垂線が施されている。内面は上半まで施釉され、下半は釉がかかっていない。7103は体部中央の破片である。外面に４条以上の垂線が施されている。内面には施釉されている。これらの破片から全体形を推定するのはかなり難しいが、7102の湾曲具合からかなり大形の壺と考えられる。

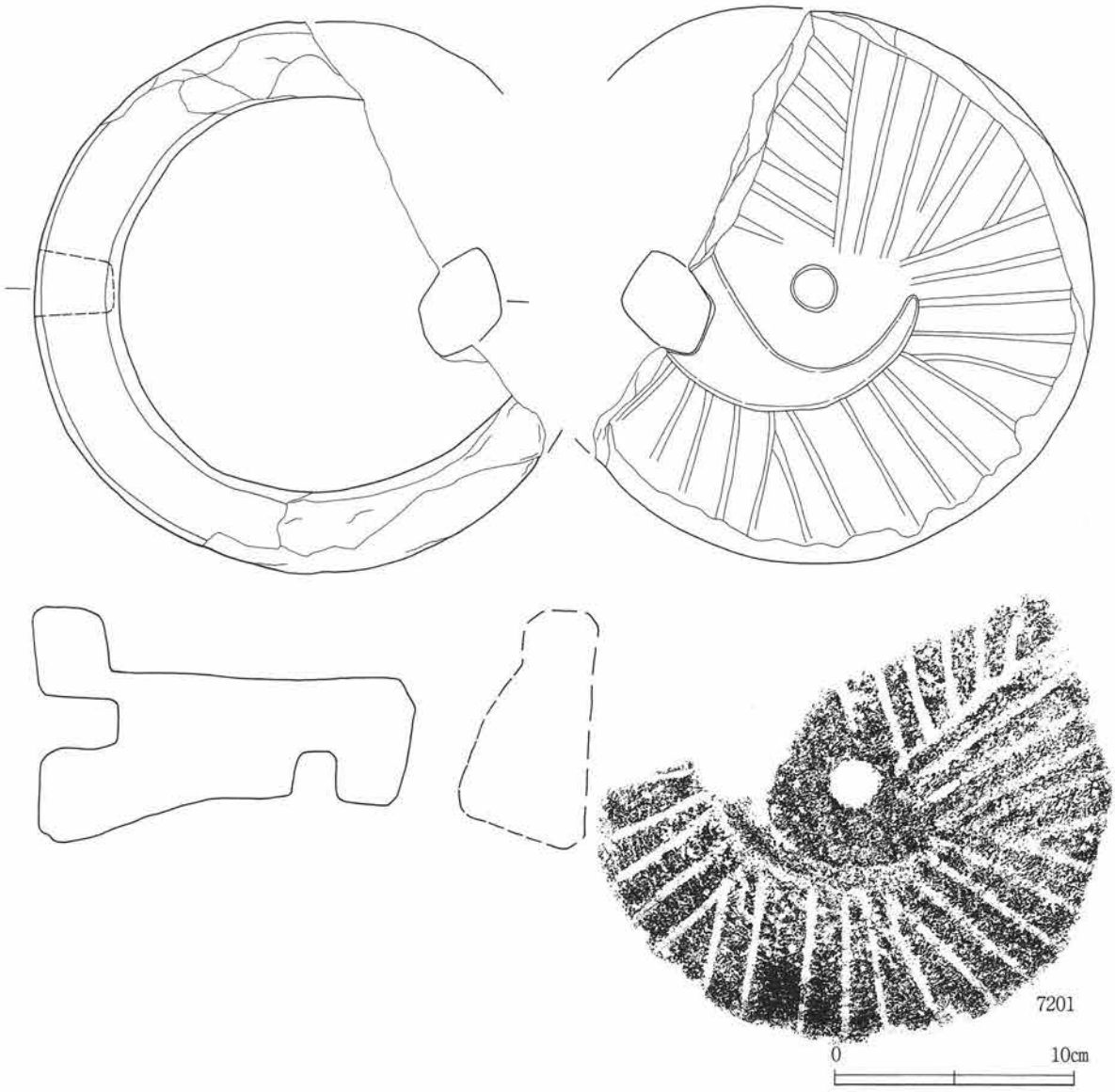


番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
7101	白磁	壺	体	66Ｐ429埋土	Ⅱ系	11Ｃ中～12Ｃ前	化粧土あり　7102、7103と同一個体か
7102	〃	〃	〃	ＶＢ９ａ地山上	〃	〃	
7103	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

第238図　Ｇ地区の中国産磁器

3　石製品（第239図、写真図版191）

7201の挽き臼が１点出土している。上臼で目のパターンは６分割されている。石質は溶結性凝灰岩である。現代の建物の基礎の中に礫とともに詰め込まれていたものであり、近代以降のものである可能性が高い。



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
7201	挽き臼	ⅥＢ８ｂかくらん中	溶結性凝灰岩	上臼	11000

第239図　G地区の石製品

第11章　複数調査地区にまたがる遺構

第１節　道路状遺構

本報告書の各調査次（46、66、74次）の各調査区にわたって道路状遺構が検出されている。調査区でいうと、Ａ地区、Ｂ地区、Ｃ地区、Ｄ地区、Ｆ地区、Ｇ地区でそれぞれ道路が検出された。この道は南北に縦貫する一連の道路である。道路の存在は、その道路の両端の道路側溝によって範囲が示されるものであり、各調査地区の報告でそれぞれ「溝」の報告で道路側溝の報告をおこなっている。だが道路状遺構の全体については報告をおこなっておらず、ここでは道路状遺構全体についての報告をおこなう。

〔道路の範囲〕この道は削平のために側溝が失われた部分と調査区域外で未調査の部分も含めて南北に合計約214ｍ分が検出されている。南端は志羅山遺跡の14次調査区から始まり、本報告書のＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区を南北に縦貫する。そして東側の道路側溝はＣ地区で、西側の道路側溝はＤ地区で調査区域外である現在の国道４号線の下に伸びていく。そして両側の道路側溝はしばらく国道４号線の下を通り、再び東側の道路側溝がＦ地区の北側で表れる。この側溝は東西に伸びる規模の大きい溝66ＳＤ10にぶつかって終わっている。66ＳＤ10にぶつかって道路側溝はいったん途切れ、その北には道路側溝は伸びない。再び道路側溝が検出されるのは、町道立石線を越えた北側のＧ地区で、道路の西側の側溝が検出されている。Ｇ地区で検出された道路の続きは、町教育委員会の調査による志羅山遺跡69次、76次、78次調査で検出されており、道路がＦ地区よりさらに北に伸びることが確認されている。

〔道路の軸方向〕道路の南端の14次調査区から、北の66ＳＤ10にぶつかる部分までは、道路側溝の軸は不整な部分があるが、道路全体の軸方向はほぼ真北の正方位である。

66ＳＤ10にぶつかって道路側溝はいったん途切れる。再び道路側溝が検出される町道立石線を越えた北側のＧ地区では、道路側溝の軸の方向は東に約11°傾いている。これは66ＳＤ10より南では軸方向が正方位であった道が、66ＳＤ10より北では軸方向が変わったと理解できる。つまり町道立石線は12世紀以来の道で、66ＳＤ10はその南側の側溝であると考えられ、南北に縦貫する道はこの東西の道（町道立石線）との交差点を境に道の角度が変化しているということである。

〔道路の路面〕道路側溝が検出された面は本来の12世紀の生活面より低く、道路の本来の路面が残っている部分は存在していない。よって、路面に残る痕跡や舗装の有無は判断できない。

〔道路の幅〕道路の幅（側溝の幅も含む長さ）は部位により均一ではない。これは側溝の幅が均一でなかったり蛇行することによる。66ＳＤ10より南では最大幅で10.5ｍ、最小幅で6.4ｍを計る。北側では道路側溝が対の状態で検出されていないので測定できない。

〔道路側溝〕またＡ地区のⅡＢ６ｄ付近からＢ地区のⅢＢ３ｄ付近にかけて東側の道路側溝が複数重複している。これは溝の前後関係から、道路の外側から道路の路面に食い込む形で側溝を作り替えていると判断できる。つまり側溝の作り替えによって道路の幅は狭くなっているのである。この側溝の作り替えはは１回のみではなく２回以上おこなっていることが観察できる。そして作り替えの度に路面の幅は狭くされている。この道路の東側に接する屋敷の所有者が屋敷地を広げるためにおこなった結果であろうか。

またこの側溝が重複する部分以外でも、側溝の肩部に段がみられたり、底面に段がありレベル差がみられる部分がある。これは側溝を浚渫して掘り返した結果と考えられる。

〔埋没沢と道路状遺構〕Ｃ地区の埋没沢の部分は埋没沢を埋め立整地した後に道路側溝を掘り込んでいる。この埋没沢の埋立整地の部分では西側の側溝が90°曲がり、路面を横切り道路外に溝が伸びていることが確認されている。この溝は埋没沢に溜まる水を道路外に排水するための溝と考えられる。また道路の西の傍らにある66１号池からの排水もこの溝に落ちる仕組みになっている。このように路面を溝が横切っており、この溝を渡るための何らかの橋のような装置があったと想定される。しかしその痕跡は確認されなかった。
〔道路の年代〕この道路状遺構の道路側溝からは多数の遺物が出土しているが、12世紀よりも新しい時代の遺物は全く出土していない。よって道路の廃絶年代は12世紀末とすることができる。構築年代についてははっきり示す資料がないが、道路の軸方向が変わる66ＳＤ10の南と北では構築年代に差がある可能性がある。道路の軸方向が正方位である66ＳＤ10より南の道路は、Ｃ、Ｄ地区の埋没沢の埋立整地よりも後の構築である。沢の埋立整地の年代ははっきりしないが、12世紀の中葉以降の可能性が高い。沢の埋立がこの年代であれば道路の構築はこれより後、即ち12世紀後半のことと推測される。

第２節　埋没沢

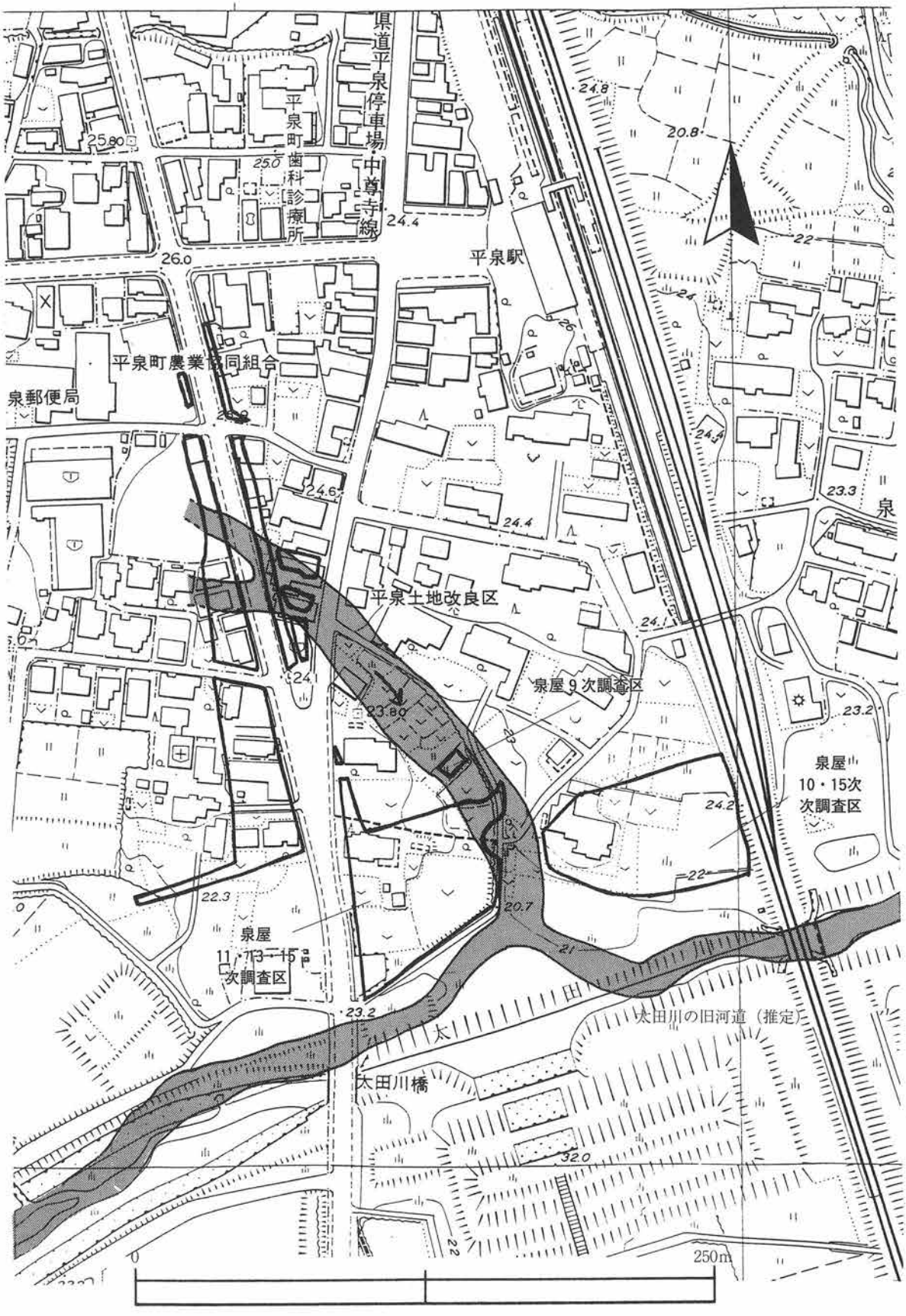
調査区内には西側から東側に流れる沢跡がある。この沢跡は調査区の広範囲に渡っているためここでまとめて記す。
〔位置〕調査区域の国道西側では沢は２箇所で検出されている。この２本の沢は国道の下で合流し、国道東では１本になっている。国道西側の２本の沢のうち南側はⅣＡ７ｊ、８ｊ、ⅣＢ６ａ、６ｂ、６ｃ、７ａ、７ｂ、７ｃ、８ａ、８ｂ、８ｃに位置する。北側はＶＡ３ｊ、４ｊ、５ｊ、ＶＢ２ａ、２ｂ、３ａ、３ｂ、４ａ、４ｂに位置する。国道東側はⅣＢ６ｆ、６ｇ、７ｆ、７ｇ、８ｆ、８ｇ、９ｆ、ＶＢ０ｆ、１ｅ、１ｇ、２ｅ、２ｄに位置する。
〔沢の平面形〕上述のように沢跡は国道西側の調査区では２本だっだものが、国道の下付近で合流し、国道の東側の調査区では一本の沢になっている。

調査区西側の２本のうち南側の沢は上幅約12ｍ70㎝、北側の沢の上幅は約13ｍ10㎝である。合流後の国道東側では上幅は約30ｍ10㎝になる。

調査区西側の２本のうち南側の沢はほぼ西から東に流れ、北側の沢は北西から南東に流れている。合流後の東側では北西から南東に流れている。そしてこれより沢の下流は北西から南西に向かって、やや弓なりに反りながら太田川に合流する。この沢の流路は航空写真によりその痕跡が確認できる。また町教育委員会の調査による志羅山遺跡36次調査（平泉町教育委員会1995）、志羅山遺跡39次調査（平泉町教育委員会1996）でこの沢が検出されている。またさらに下流部分が泉屋遺跡９次調査（岩手県教育委員会1993）と泉屋遺跡15次調査（㈶岩手県埋文センター1997）で検出されている。

調査区より西側の沢の上流部分は航空写真による地形観察によっても判然としない。これは下流部にくらべて、上流部は幅も深さも小規模なため、その痕跡が残りにくいためである。
〔埋土〕西側調査区の南側の沢部分では２ヶ所で断面を記録した。人為的に埋立てた整地層も含めて、断面Ａ－Ｂでは14層に、断面Ｃ－Ｄでは21層に分けられた。どちらの断面でも底部付近は二条の底面に分かれている。そして底部近くには十和田ａと推測される火山灰が混入する層がある。よって、本沢は十和田ａが降下する少し前の段階が、沢としてもっとも浸食が進んでおり、その後は埋没の過程が進んでいったことがわ

第240図　道路遺構全体図



第241図　埋没沢想定図

かる。

そして断面Ａ－Ｂの６層、断面Ｃ－Ｄの２～４層は埋立てに用いられた人為的に埋立てられた層である。断面Ｃ－Ｄではこの埋立ての土が分層できるが、埋立てが数次に及ぶのではなく、ほぼ一時の仕事と考えられる。この埋立て整地層から下は人為が介在せず、自然に埋没が進んでいった層である。底面から断面Ａ－Ｂの６層はこの位置にある１号池の底面を形成している層である。この部分では単に埋没沢の埋立てをおこなったのではなく、いったん池のプランを掘り込んでから、底面に土を貼ったのである。その上の３～５層は池が機能している段階で堆積した層、その上の１～２層は、池が機能しなくなってから堆積した層と考えられる。一方の断面Ｃ－Ｄは、埋没が進んで窪んでいる沢の上に、直接土を盛って埋立てた様子が理解できる。この断面中の最上部の１層は池と道路側溝をつなぐ溝状の部分が断面に引っ掛かったものである。

国道西側調査区の北側の沢は１ヶ所で土層を観察した。ここでは沢を埋立てた整地層を含めて５層に分けられる。南側の沢と異なり、十和田ａ火山灰が含まれる層は存在しない。１層は整地層である。２～５層が自然に堆積した後に、埋立ての整地を施したことがわかる。また、自然に堆積した層の２層の上面から66ＳＤ20、66ＳＤ21が掘り込まれているのが観察できる。これらは、埋立て整地が行なわれる前に構築された遺構ということになる。

国道東側の調査区では、国道西側で２本だった沢が合流して１本になっている。国道東側の調査区は幅が４ｍ程と狭く、安全面の観点から、人為的に行なわれた埋立て整地層の部分のみの確認を行い、沢の底面までの掘り下げはおこなわなかった。埋立ての整地層はおおよそ30～50㎝ほどの厚さで施されている。この整地層の下は自然堆積層と考えられる。志羅山遺跡36次調査区は本沢の南側部分に東接する部分が調査区である。この部分でももちろん埋没沢の続きが検出されている。この調査次でも沢部分の全部の掘り下げはおこなっていないが、一部分を底面まで掘り下げている。この部分の標高は約21ｍであった。これから類推すると本調査区の沢の底面の標高もこれに近いものと考えられる。この深さに達するためには整地層の確認面から２ｍ以上の掘り下げを行なう必要がある。現地表から整地層の確認面まで１ｍ50㎝ほど掘り下げており、ここからさらに２ｍ掘り込むのは部分的にしても調査区の幅４ｍほどの本調査区では無理なことであった。

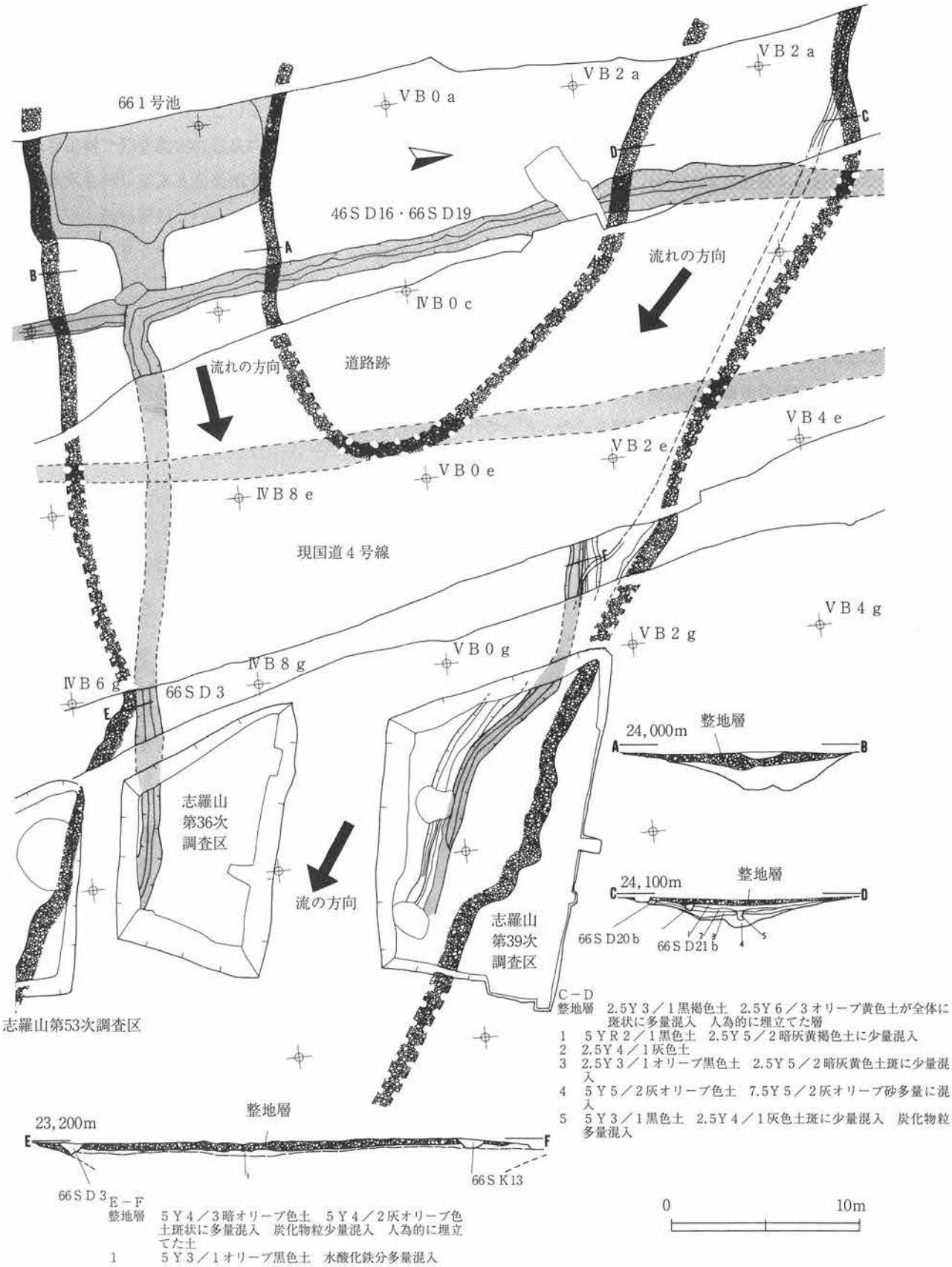
〔出土遺物〕国道西側調査区の南側の沢から古代の遺物が出土している。断面Ｃ－Ｄの５層からは須恵器の坏（3010）、６層からは須恵器の坏（3011）、断面Ａ－Ｂの７ａ層から須恵器の坏（3017、3018）、７ｂ層から土師器の坏（3019）が出土しているこれらは十和田ａ火山灰を含む層より上の層から出土である。また断面Ａ－Ｂの12層から土師器の坏（3020、3021）、土師器の長胴甕（3022）が出土している。これらは十和田ａ火山灰を含む層より下からの出土である。

また国道西側調査区の北側の沢では埋立て整地層中からろくろかわらけ（4139、4141）が出土している。また渥美産陶器片口鉢（4210）、丸瓦（4402）、平瓦（4404～4406）、銭（天聖元寶）が出土している。これら埋立て整地層中の出土遺物は埋立てが行なわれた時期を考える上での資料になりうる。

〔埋没沢の年代〕埋没沢の底面近くに十和田ａ火山灰の堆積がみられ、十和田ａ火山灰の降下前に沢の浸食が進んだ状態であったことがわかる。その後。沢の埋没が自然に進み、埋立て整地が行なわれた段階ではかなり埋没が進んだ状況であった。

〔埋立て整地の年代〕埋立て整地層中から出土したロクロかわらけ（4139、4141）の形態から、埋立て整地が行なわれたのは12世紀の中頃と考えられる。

〔埋立て整地の範囲〕本報告に係わる分（志羅山46次、66次検出分）の沢跡には全面に埋立て整地がおこなわれていた。未調査の国道下に部分も、もちろん埋立て整地がおこなわれていると推定される。本調査区の



C－D
整地層　2.5Y3／1黒褐色土　2.5Y6／3オリーブ黄色土が全体に斑状に多量混入　人為的に埋立てた層
1　5YR2／1黒色土　2.5Y5／2暗灰黄褐色土に少量混入
2　2.5Y4／1灰色土
3　2.5Y3／1オリーブ黒色土　2.5Y5／2暗灰黄色土斑に少量混入
4　5Y5／2灰オリーブ色土　7.5Y5／2灰オリーブ砂多量に混入
5　5Y3／1黒色土　2.5Y4／1灰色土斑に少量混入　炭化物粒多量混入

E－F
整地層　5Y4／3暗オリーブ色土　5Y4／2灰オリーブ色土斑状に多量混入　炭化物粒少量混入　人為的に埋立てた土
1　5Y3／1オリーブ黒色土　水酸化鉄分多量混入

第242図　埋没沢跡

東側に接する志羅山遺跡36次、39次調査区でも埋立て整地が行なわれているのが確認されている。

それより下流にあたる泉屋遺跡９次調査区についてであるが、土層の記述で、「４層：緑灰土層。粘土質のシルト」とあり、埋立て整地層に類似したものがある。だが、この層の下からも12世紀後半の遺物が出土したと記述があり、この層が志羅山遺跡の埋立て整地層に対応するものではないことがわかる。よってこの調査区では、沢は埋立て整地されていないと理解できる。そしてさらに下流の泉屋15次調査区で検出された沢の部分には埋立て整地がおこなわれていない。よって志羅山遺跡36次、39次調査区と泉屋遺跡９次調査区の間に、整地された部分とされていない部分の境界があることになる。上流部については発掘調査が行なわれていないため埋立て整地の有無は不明である。だが、上流部にいけば沢の幅も深さもかなり小さくなっているはずで、その部分にも整地がおこなわれたと考えた方が自然であろう。

〔埋立て整地の問題点〕上のようにかなりの広い範囲に埋立て整地が施されており、沢の埋没が進んだ段階に行なわれていたとはいえ、かなりの土の量が埋立て整地には必要であったはずである。そしてその土を動かすため大量の労働力が必要であったはずである。このように多量の土を得、労働力を動員するのは、大きな権力を行使できる者が、都市計画にのっとって行なわせた事業と考えられる。やはりこの事業には藤原氏かその権力を代行できる者の介在が考えられる。

埋立て整地に用いられた土には、ローム質のかなり地面を掘り込まなければ得られない土が用いられている。よってこの埋立てに用いられている土はいずれの所かを掘削して得られた土と考えられる。これは沢を埋立てる目的のために何処かを掘り、土を得たのか、又は逆に池などを構築するために何処かを掘削し、生じた排土を処理するために、沢の埋立てをおこなったのかどちらかであると考えられる。あるいは計画的に両者の目的でおこなった可能性も考えられる。

平泉町教育委員会1995　「平泉遺跡群発掘調査報告書」　岩手県平泉町文化財調査報告書第47集
平泉町教育委員会1996　「平泉遺跡群発掘調査報告書」　岩手県平泉町文化財調査報告書第55集
岩手県教育委員会1993　「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成４年度）」　岩手県文化財報告書第93集
(財)岩手県埋蔵文化財センター　1997　「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」
(財)岩手県埋蔵文化財調査報告書第247集

第12章　考察

1　　12世紀都市平泉の南辺の状況

一関遊水地事業の一環である太田川築堤事業に関わる大規模な発掘調査（志羅山14次、25次(1)、46次、66次、74次(2)、泉屋７次(3)、10次、11次、13次、15次(4)、16次(5)）により、平泉南辺の様相が明らかに成りつつある。ここでは、それに周辺の調査の事例を加え、12世紀の町割りについて考えてみたい。ここでいう平泉の「南辺」というのは中核部分の南辺ということで、太田川の北岸付近を指す。

①　太田川の旧河道

12世紀の河道は明らかでないが、明治時代に作成の河川台帳付図（測量した地図）に記載された河道を示した。

現在、志羅山地区、泉屋地区の南を流れる太田川は河川改修により直線的な河道となっているが、明治時代の河川台帳付図や、河川改修以前の航空写真をみるとかなり蛇行していることがわかる。近代の河川改修以前の流路は現在の国道４号線より東では沖積低地との境界に沿っていることが読み取れる。また国道４号線より西では沖積低地の境界より南を河道が走っている。

この近代の河川改修以前の河道が12世紀の河道と同一という確証はないが、大きな地形の変化はないので12世紀の太田川の河道を反映しているはずである。

②　沖積低地と段丘の境界

沖積低地と段丘の境界のラインである。遺跡の範囲もこのラインを境界としている。このラインの南側の沖積低地には12世紀の遺構は広がらないようである。

太田川の河道、沖積低地と段丘の境界のラインをみると、現在の国道４号線の付近で段丘が半島状に沖積低地に張り出していることがわかる。この地点は泉屋遺跡10・15次調査区、志羅山遺跡14・25次調査区（一部は志羅山46次調査区にもかかる）に相当する。

③　太田川に合流する沢

志羅山から泉屋にかけて南東に流れる沢跡がある。12世紀段階にはかなり埋没が進んでいる。埋没層の下部には十和田ａ火山灰を含む。

志羅山遺跡第36次(6)、39次(7)、46次、53次(8)、66次、泉屋遺跡第９次(9)、15次でこの沢跡が検出されている。上流部にあたる志羅山遺跡分では12世紀に埋立整地が行なわれている。下流部の泉屋遺跡分では埋立整地はおこなわれていない。下流部は現在の地割からもその痕跡が確認できる。

④　毛越寺、観自在王院の南辺を通る道

毛越寺、観自在王院の南辺を通る道が街を横断する形で、東側まで続くと推測される。町道立石線はその痕跡である。この道路では、対になる状態で道路側溝が検出されておらず、道の幅は不明である。対になる道路側溝は発掘調査の及んでない現道の下に存在すると予測される。この道路の軸方向は東西ほぼ正方位で

ある。

後述するように南北に走る12世紀の道はこの道を基準に設置されており、この道が都市計画の基準軸になっていると考えられる。また、この道が毛越寺造営時の都市の南辺であった可能性がある。

現況では旧国道から東側には町道立石線はまっすぐ伸びていない。だが、発掘調査で東側にも古道、溝が伸びていた可能性を示す事例がある。66ＳＤ10の東端から約260mほど離れた地点に泉屋遺跡第３次(10)調査区がある。この調査で検出された４号溝が66ＳＤ17・66ＳＤ10の延長線上に存在する。この４号溝は上端幅84～110cmで深さは25～30cmである。下層～底部から穿孔したかわらけが出土しており12世紀の所属と考えられる。深さが66ＳＤ17・66ＳＤ10に比較して浅いが、これについては削平の結果と解釈できる。また２号溝と６号溝は４号溝と平行に走っており、４号溝と性格を同じくする造り替えの前後関係を持つ溝と推測できる。これらの溝が66ＳＤ17、66ＳＤ10に連続する溝であるのならば、古道が国道４号線の東側に真っすぐ伸びていたと推測できる。４号溝の長軸方向は軸の設定にもよるが、Ｎ－90°－Ｅである。

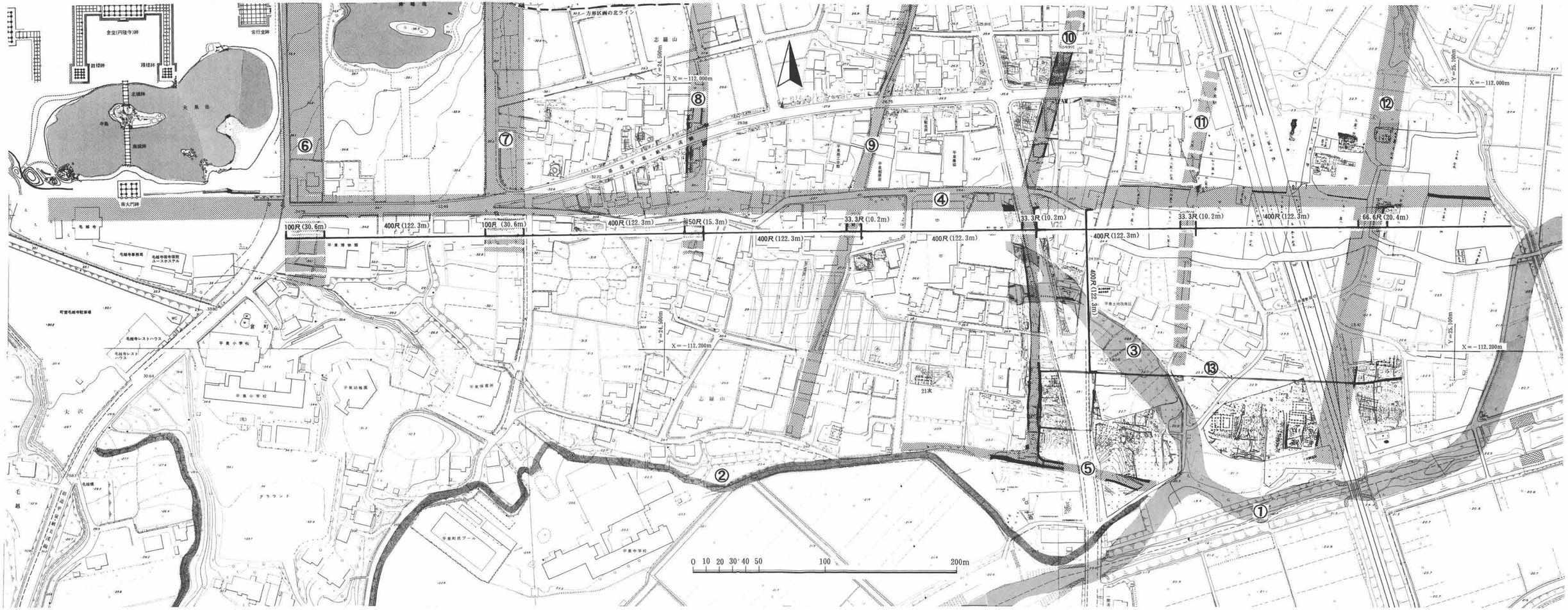
また地割り、地籍図から古道の痕跡が見出だせないか検討してみる。現在の地割り、地番は明治８年頃に定められた字切りによって定められている。平泉最古の地籍図は明治８年頃作成の「広土絵図」であるが、これは測量図ではないので現在の地図に重ねることは難しい。よって、昭和30年代頃の字泉屋の地籍図を観察する。志羅山地区の立石線を真っすぐ東に延ばしたラインに断続的にではあるが地番の境が観察できる。即ち69番と68番の境、50番と61番の境、51番と59番の境、53番と56番の境である。これらの境界には現況では地形の変化は観察できず、12世紀の道路に由来する地境と考えられる。

⑤　段丘の突出基部を切る道

②で述べたように現在の国道４号線付近で段丘が沖積低地に突出する形になっている。この段丘の突出基部を切る形で東西に走る道が検出されている。志羅山遺跡第14次、46次、泉屋10次調査で道路側溝が検出されている。南側の側溝が志羅山遺跡の14ＳＤ３・46ＳＤ７と泉屋遺跡の10ＳＤ３、北側の側溝が志羅山遺跡では14ＳＤ６、泉屋遺跡では10ＳＤ７・15ＳＤ24である。この道路幅は約７mほどで、軸方向はＥ－13°－Ｎである。

この道は西側の段丘と沖積低地の境に沿って続く可能性もある。しかし現在のところその部分には発掘が及んでいないため、その有無は不明である。後に述べる南北に走る⑩の道路はこの道路にぶつかって終わっているのである。この道路の結接点から西では⑤の道路の北側側溝が検出されていない。これが検出されるべき部分は下水道工事が施されていて、発掘調査が及んでいないところである。この部分に南北道路⑩の側溝46ＳＤ３が西側にＬ字型に曲がる形で伸びていると推測される。

この東西に走る道路の南側の段丘の張り出し部分は志羅山14次・25次によって調査がおこなわれている。この調査では12世紀代の井戸が３基検出されている。これらの井戸からは多量の12世紀の遺物が出土しており、この地点で12世紀の生活が営まれていたことを示している。だが12世紀の建物跡は検出されていない。井戸があり12世紀の生活遺物が多量に出土しているのに不自然なことである。第25次調査区は電話交換局の建物基部により破壊された部分があり、そこは調査がおこなわれていない。おそらくこの部分に12世紀の建物跡があったと推測され、この張り出し部分も屋敷として使用されていたと推測される。出土遺物に折敷や多量のかわらけがあり、宴会儀礼をおこなった格の高い屋敷地であったと思われる。南辺に突出した地形的に特殊な地点であるため、有力者の屋敷であった可能性が考えられる。



第243図　都市平泉南辺の状況

⑥　毛越寺と観自在王院の間の道

藤島亥治郎氏(11)によって明らかにされた道である。道幅100尺と設定されている。④の道より南に伸びるか否かは不明。軸方向はほぼ正方位である。藤島氏は観自在王院西辺の土塁の痕跡と毛越寺の東辺の土塁の痕跡の間に100尺の帯状の空白が生ずるとしている。

⑦　観自在王院東辺の道

本澤慎輔氏(12)が指摘の方形区画の西辺をなす道。道幅100尺が妥当と思われる。④の道の南に伸びるか否かは不明である。軸方向はほぼ正方位である。

本澤氏は発掘調査の成果、地形の現況、過去の都市計画図の読取りから観自在王院の東側に一辺約160m四方の方形区画の存在を想定した。この方形区画の存在の指摘は妥当であると考えるが、本澤氏の区画の一辺の長さは、その両脇にある道路幅をも含んだ長さであると考えたい。

⑧　方形区画東辺の道

本澤氏が指摘の方形区画の東辺をなす道。志羅山18次(13)、22次(14)、47次(15)調査で道路側溝を検出した。道幅は50尺である。方形区画より北に伸びるかどうかは不明である。また④の道より南に伸びるか否かも不明である。軸方向はほぼ正方位である。この道は本澤氏指摘の方形区画の内側に含まれることになる。

⑨　白山社参道の道

白山社に至る道で、現在も道として生き残っている。道幅は33.3尺と推測される。④の道より南にも同じ軸方向の道があり、沖積低地境付近まで角度を変えずに続いていたと考えられる。現道の両脇を志羅山遺跡３次(16)、４次調査（トレンチ調査）がおこなわれているが、道路側溝らしい溝は引っ掛かっておらず、12世紀の道と現道が重なっていることを裏付けている。軸方向はＮ－15°－Ｅである。

⑩　志羅山遺跡46次、66次、74次調査で検出された道

志羅山遺跡46次、66次、74次調査で検出された道である。④の道より南では軸方向がほぼ正方位、北では約Ｎ－15°－Ｅと変化する。道幅は33．３尺と推測される。南は⑤の道にぶつかって終わる。北は平成11年度調査の志羅山80次調査区で検出されている。それより北は現在のところ不明である。

⑪　道の間隔から存在が推測される道

⑥～⑫の道の間隔から存在が推測される道である。この道の存在すべき部分には発掘調査が及んでいないため、存在の有無は全く未確認である。よって軸方向などは不明である。

この道が通るべき部分には鈴沢の池につながる低地が広がっており、この低地が障害になり道が存在していない可能性もある。

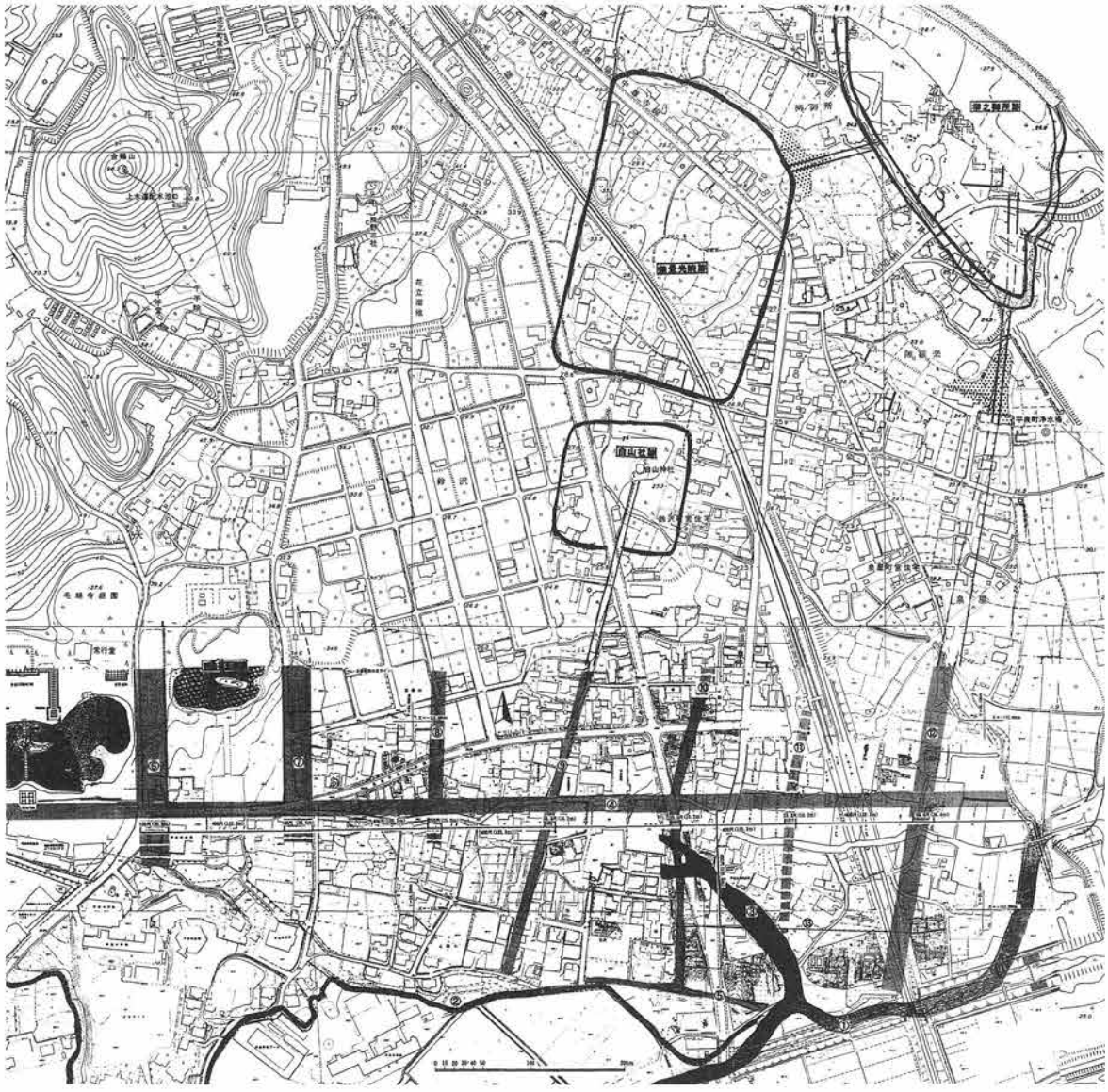
⑫　柳之御所遺跡に至る道

泉屋13次、16次で道路側溝と考えられる溝が検出されている。13ＳＤ12とそれに平行して重複する13ＳＤ13そして16ＳＤ８である。これを延長すると柳之御所遺跡の南側突出の堀にかかる橋、そして堀の内部の道路跡につながる。泉屋３次調査検出の溝もこの道の道路側溝の可能性がある。道幅は66.6尺と推測できる。

軸方向は約Ｎ－11°－Ｅである。

⑬　屋敷を区画する溝

⑩の道から東の志羅山74次、泉屋13次、泉屋16次調査でほぼ一直線上に溝が検出されている。道路の側溝のように溝が２条平行しているものではなく、屋敷地を区画する溝の可能性が考えられる。だがこの溝に沿って通路があった可能性は十分にある。この溝のラインにほぼ平行に、12世紀の建物が連なっているのが看取できる。溝の軸方向は東端でずれるが、約Ｅ－３°－Ｎである。またこのラインは④の道から400尺の距離にある。



第244図　平泉遺跡群主要部

まとめ（各道路幅と道路間の寸法について）

道路幅と各道路間の寸法を第１図に記す。ここでは藤島亥治郎氏が毛越寺、観自在王院の計画割りの考察の際に用いた寸法、１尺＝現尺の1.0093尺（0.3058m）を用いている。図に記した寸法は道④のライン上での寸法である。即ち町割りの際にはこの④の道を基軸にしたと推測されるのである。

⑥と⑦と⑧の間、⑨と⑩の間、⑪と⑫の間はそれぞれの道幅の長さを加えずに、400尺を測ることができる。しかし⑧と⑨、⑩と⑪の間はそれぞれ⑨、⑪の道幅を加えて400尺である。当初は⑧と⑩、⑩と⑫の間を800尺で設置し、その後に道を造営したのであろうか。そうであれば、⑨、⑪は後に加えられた道ということになる。いずれにせよ、平泉の都市計画の基準の長さの一つに「400尺」が用いられていることが看取される。④の道から⑬のラインまでも400尺である。

また道幅は100尺を基準に、その半分の50尺、２／３の66.6尺、１／３の33.3尺が用いられていると考えられる。

（羽柴　直人）

（１）（財）岩手県埋蔵文化財センター　1995　「志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書」　第216集
（２）（財）岩手県埋蔵文化財センター　2000　「志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書」　第312集
（３）（財）岩手県埋蔵文化財センター　1993　「泉屋遺跡発掘調査報告書」（第７次）　第184集
（４）（財）岩手県埋蔵文化財センター　1997　「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」　第247集
（５）（財）岩手県埋蔵文化財センターで1996年に調査　報告書未刊行
（６）平泉町教育委員会　1995　「平泉遺跡群発掘調査報告書」志羅山遺跡第36次　第35集
（７）平泉町教育委員会　1996　「平泉遺跡群発掘調査報告書」志羅山遺跡第39次　第55集
（８）平泉町教育委員会で1996に調査　報告書未刊行
（９）岩手県教育教育委員会　1993　「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成４年度）」　第93集
（10）平泉町教育委員会　1991　「泉屋遺跡第３次発掘調査報告書」第27集
（11）藤島亥冶郎編　1961　「平泉　毛越寺と観自在王院の研究」　東京大学出版会
（12）本澤慎輔　1993　「12世紀平泉の都市計画の復元」　古代文化第45巻第９号
　　本澤慎輔　1995　「都市平泉の成立と構造」　中世都市研究２　新人物往来社
（13）平泉町教育委員会　1993　「志羅山遺跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書」　第35集
（14）平泉町教育委員会　1993　「志羅山遺跡第11・12・19・22次発掘調査報告書」　第36集
（15）（財）岩手県埋蔵文化財センターで1995年に調査　報告書未刊行
（16）平泉町教育委員会　1985　「平泉遺跡群発掘調査報告書」　志羅山遺跡第３次　第６集

2　志羅山遺跡のものさしと柳之御所跡のものさしの比較

C地区の66次1号池跡からものさし（3111）が出土している。これは欠損しているもので、目盛りが三本刻まれている。樹種はスギである。寸法は保存処理を施す以前の濡れた状態の計測で、端部からそれぞれ一目盛りが3.61cm、3.76cm、3.68cmである。平均値3.68cmになる。

他に平泉遺跡群でものさしは、柳之御所跡第21次調査(1)の21ＳＤ１と28次調査の28ＳＥ16でそれぞれ１点が出土している。これはどちらも完形である。

21ＳＤ１のものさし（報告書掲載番号682）は樹種はヒノキで、目盛の付された部分の全長は35.27cmで、それが12等分されている。目盛りの５番目と10番目には「×」の記号がある。目盛の長さはばらつきがあるが、その平均値は2.939cmである。

岩田重雄氏はこの物差を日本で最も標準的に使用された尺度である「曲尺（マカリカネ）」であるとしている(2)。この尺度の長さは時代によって極端に大きく変化していないが、時代が下るにつれてやや長くなってきているという。即ち、大宝律令（西暦701年）で定められた「大宝大尺」の１尺の長さは29.39～29.69cm（９寸７分～９寸８分）であったと考証(3)されているものが、明治政府の統一尺度では、１尺がメートルの10／33の長さ約30.3cm。となっている。

28ＳＥ16出土のものさし（報告書掲載番号2745）は樹種がアスナロで全長が37.50cmである。目盛りはこれを10等分するように刻まれている。５本目の中央の目盛りには「×」の記号が付されている。目盛りの長さはばらつきがあるが、平均値は3.75cmである。三浦謙一氏はこの寸法を鯨尺相当の裁衣尺と想定している(4)。このものさしの供伴遺物には糸巻きがあり、裁衣尺であることを強めている。鯨尺は裁衣に用いられる尺で、近世以降では１尺が曲尺の１尺２寸５分に相当する長さである。即ち曲尺の１尺（30.3cm）×1.25＝37.875cmが鯨尺の１尺の長さになるということである。

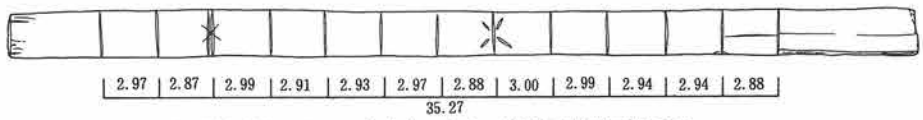
柳之御所は同時代の曲尺と鯨尺の２つが出土している非常に貴重な事例といえる。柳之御所の曲尺（報告書掲載番号682）と鯨尺（報告書掲載番号2745）の比は1.276である。岩田重雄氏は柳之御所12世紀後半の曲尺と鯨尺の比が1.276、16世紀後半の京都での出土品の事例(5)での比が1.266ということから、曲尺と鯨尺の比が時代とともに小さくなると解釈している。そして、この柳之御所のものさしの存在から、これまで知られていた15世紀末の事例(6)よりも、鯨尺相当のものさしの歴史が400年以上さかのぼるとしている。　志羅山遺跡のものさしの寸法は一目盛りの平均が3.68cmである。この寸法は鯨尺の長さに近く、鯨尺相当のものさしと考えられる。しかし、柳之御所の鯨尺相当のものさしの目盛りの平均は3.75cmであり、１寸での差が0.08cmあることになる。この程度の差は土中に埋没していたための変形結果と考えて良いのでないだろうか。柳之御所のものさしも変形が考えられるが、柳之御所の寸法が10目盛りでの平均値なのに対して、志羅山のものさしの寸法は３目盛りでの平均値である。この母数の大きさの違いからすれば、柳之御所の寸法の方が誤差が少ない数値といえる。ここでは志羅山遺跡のものさしは、柳之御所跡のものと同様に鯨尺相当の裁衣のためのものさしで、数値の違いは期の変形のための誤差と考えたい。

志羅山のものさしと柳之御所のものさしの目盛りの長さを合わせた１寸の平均値は3.734cmである。現在の段階では、この数値が12世紀後半平泉での鯨尺相当の１寸の長さとすることができる。この長さと柳之御所の曲尺（報告書掲載番号682）との１寸の比を求めると1.270となる。

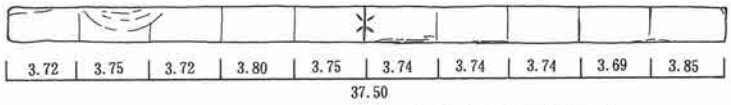
今後の平泉遺跡群の発掘調査で、ものさしの出土事例が増え、数値のデーターが増えればより誤差の少な

い当時の寸法が明らかになろう。

（羽柴　直人）



柳之御所跡21ＳＤ１出土ものさし（報告書掲載番号682）



柳之御所跡28ＳＥ16出土ものさし（報告書掲載番号2745）

志羅山遺跡66１号池出土ものさし（掲載番号3111）

第245図　柳之御所跡と志羅山遺跡のものさし

（１）（財)岩手県埋文センター　1995　「柳之御所跡」第21・23・28・31・36・41次報告書　第228集

（２）岩田重雄　1994　「柳之御所跡出土の尺度」　計量史研究Ｖｏｌ．16

（３）小泉袈裟勝　1977　「ものさし」　ものと人間の文化史22　法政大学出版局

（４）三浦謙一　1990　「柳之御所跡出土の木製品－速報－」　紀要Ｘ　（財）岩手県埋文センター

（５）京都市下京区西洞院通り出土の木製の断片で、岩田氏の計量で４寸が15.32cmであったという。

（６）鯨尺の名称の初見は北野社家日記、第２、延徳２年（1490）１月の笠袋調次第にある「鯨ノ物指」であるという。

3　平泉遺跡群の提子（ひさげ）について

1　平泉遺跡群出土の提子（ひさげ）

本報告書の志羅山遺跡66次調査Ｆ地区で菊花状の青銅製の金具（遺物掲載番号6301）が出土している。当初この金具が何の部品であるか判断できなかったが、福岡市の博多遺跡群(1)で「提子（ひさげ）」の完形品が出土していることを、福岡市教育委員会の大庭康時氏に教えていただき、志羅山遺跡出土の金具が提子の鉉と容器部分を接続する金具であると理解できた。この金具は注ぎ口とは反対側の後側の金具（以下、後金具という。）である。外面はにぶい灰色を呈しており、ほとんど錆びていない。

また、平泉町教育委員会の志羅山遺跡21次調査(2)では、提子の注ぎ口側の金具（前金具）が出土している。現在のところ平泉遺跡群で「提子」関係の遺物が出土しているのは、管見に及ぶ限りではこの２例だけである。容器部分、鉉は現在のところ出土していないようである。しかし金具部分だけでも出土があるということは、12世紀平泉に「提子」があったという証明になる。

この提子について平泉における様相を考えてみたい。

2　提子の名称について

提子（ひさげ）は国史大辞典によると、「銚子の一種。注ぎ口があり、鉉のついた鍋に似た形の金属性の器。銀・錫などで作る。水・酒などを入れて提げたり、暖めたりするのに用いる。のちにはもっぱら酒を入れるようになり、宴席で酒を注ぎ勧めるのに使用されるようになった。」とある。このように提子の用途は主に酒を注ぐ酒器として用いられたのである。

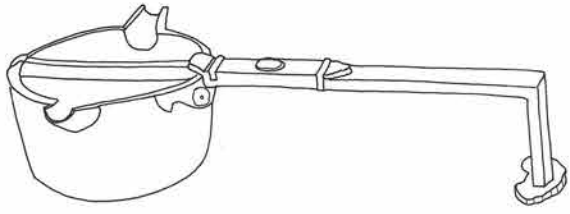
ここで銚子と提子について定義しておく。銚子（ちょうし）と提子（ひさげ）の用語の使い分けはあいまいである。

片口に長柄が付くもの・・・・①

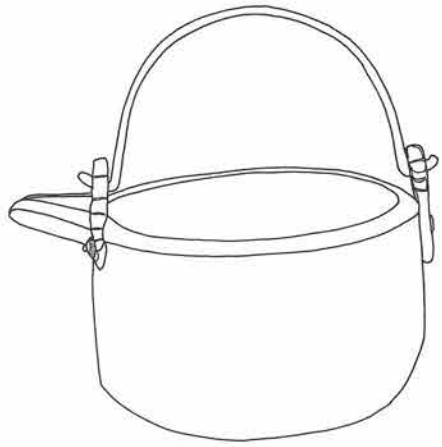
片口に鉉がつく形態のもの・・②

の二つがあるが、これらの名称使い分けがはっきりしていないのである。

①については「片口銚子」または「銚子」と称される場合が多い。一方②は「提子（ひさげ）」、「提（ひさげ）」と称される場合もあるが「銚子」と称される場合もあるのである。よって「銚子」といった場合に



①銚子（ちょうし）



②提子（ひさげ）

第246図　銚子と提子

①を指しているのか、②をさしているのかわからないのである。また②を「提銚子」と称する場合もあるようである。

このようにみると、「銚子」は①、②の両方を指す用語であり、厳密に言えば①は「長柄の銚子」で、②が「提子銚子」ということになろう。とりあえずここでは①を「銚子」と称し、②を「提子」と称する。

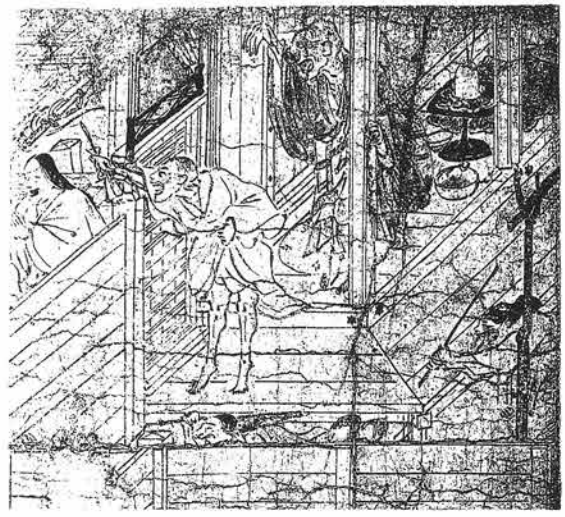
近世以降これらの名称はますます混同され、現在では陶磁器の燗徳利も「銚子」と呼ばれ、ますます混乱している。

3　絵巻物にみられる提子・銚子

絵巻に提子・銚子を探してみる。14世紀前半に描かれた「絵師草紙」の酒宴の場面で女が提子を持っている場面がある。酒宴の場面であるので、この提子は酒を注ぐために用いられているのであろう。博多遺跡群出土の資料と形態が類似している。

信貴山縁起は12世紀代に描かれたものと考えられている。山崎長者の家の場面で鉉がはっきりしないが、

絵師草紙



信貴山縁起

鳥獣人物戯画

第247図　絵巻物にみられる提子、銚子

提子が描かれている。これは加持を頼んだ僧侶へ出す酒肴を描いた部分であり、中には酒が入っていると推測される。12世紀の「長者」の家では提子を所有しているのである。奥州藤原氏の時代と同時代の提子を描いた資料である。鉉は倒れている状態のようであるが片口がある。器形は博多遺跡群の提子と類似する形態である。ここでも提子は酒器として用いられているのである。

また（長柄の）銚子は鳥獣人物戯画に兎が担いでいる状態で描かれている。鳥獣人物戯画は12世紀の製作とされ、12世紀に長柄の銚子が存在していたことが示されている。

また絵巻ではないが枕草紙に「心にくきもの」に、「提子の柄の倒れ伏すも、耳こそとまれ」とあり、10世紀末に提子が存在していたことを示している。

4　博多遺跡群84次調査の提子

前述のように博多遺跡群第84次調査で３個の提子が出土している。これらについて福岡市教育委員会の大庭康時氏は「鍋」として報告しており、安易に「提子」とするのには慎重な態度をとっている。それはやはり「提子」とすると酒器に限定されてしまう怖れがあるからだと思われる。特に３つの内一つは鉄製で、鉄製を基本とする「燗鍋」との区別が難しい。

しかし、ここでは煩雑を避けるため「提子」としてこれらの資料を指す。

３個の提子は重なった状態で出土しており、２点が銅製、１点が鉄製である。銅製のものは容器部、鉉、前金具、後金具からなり、金具と容器部はリベットで留められている。報告書から転載した図を示すが、容器部、鉉、金具の装着方法が良く分かる図である。鉄製のものは鉉を引っ掛ける部分が容器部と一体になったもので、鉉と本体をつなげるための金具は無い。これらの提子は遺構の重層関係から12世紀後半を下ることはない遺物である。その他に博多遺跡群では前金具が単独に出土した事例（博多62次調査）(3)もある。

博多遺跡群に近接する大宰府跡でも提子の金具が出土している(4)。これらは12世紀のみではなく、13世紀以降の所属と考えられるものもあり、「提子」が12世紀のみではなく、13世紀以降も類似する形態で変遷することを示している。また大宰府では前金具、後金具、鉉の鋳型が出土しており、この種の提子の生産が大宰府でもおこなわれていた事を示している。

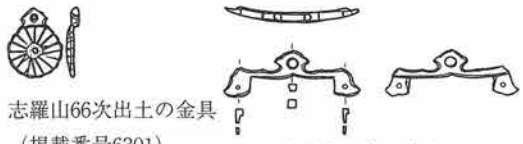
このような博多遺跡群、大宰府の金具の出土量からみると「提子」は稀な高級品ではなく、不偏的に存在する生活用品であった可能性が高いと考えられる。

平泉遺跡群出土の金具を持参し博多遺跡群出土の提子と実際に比較したのであるが、博多の容器部に平泉の金具がサイズ的にぴったり合い、平泉遺跡群の提子は博多のものとサイズがほぼ同じと推定できる。博多遺跡群の提子のサイズは口径約21cmである。

5　平泉の注酒器について

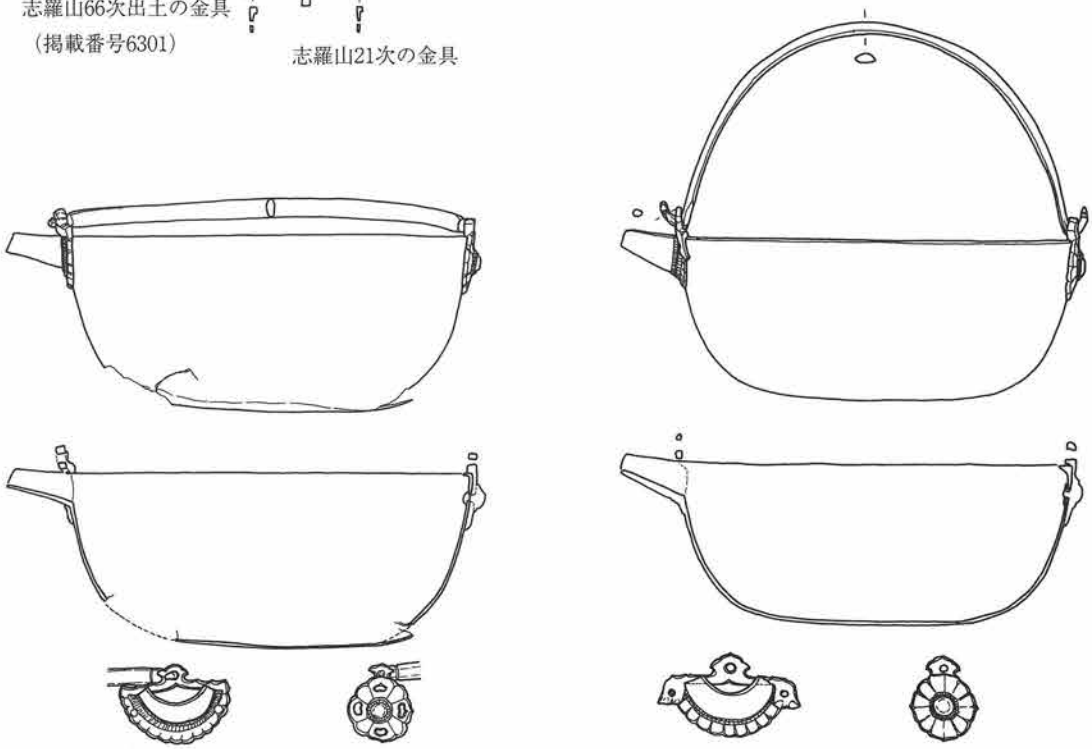
上記のように「提子」の主な用途は注酒器と考えられる。平泉の注酒器について触れた論考には、八重樫忠郎氏の論考(5)がある。八重樫氏は平泉の注酒器を白磁四耳壺、常滑産三筋壺などの、中国産、国産の陶磁器の小型壺と想定している。八重樫氏はこれらを「酒の中継容器」と表現しているが、直接にお話を聞くとかわらけへ酒を注ぐ容器と解釈しているということである。これらの壺には白磁四耳壺→渥美刻画文壺→常滑三筋壺→須恵器系壺の順でランクが付けられていた可能性があり、宴会でより上物の壺を中継容器に使用することによって、権威を示すことをおこなったとしている。

このように、壺にランク付けがあり、上物の壺を用いることが権威の表象であるということについては異

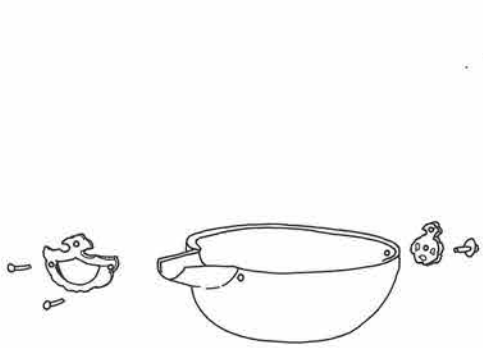


志羅山66次出土の金具
（掲載番号6301）

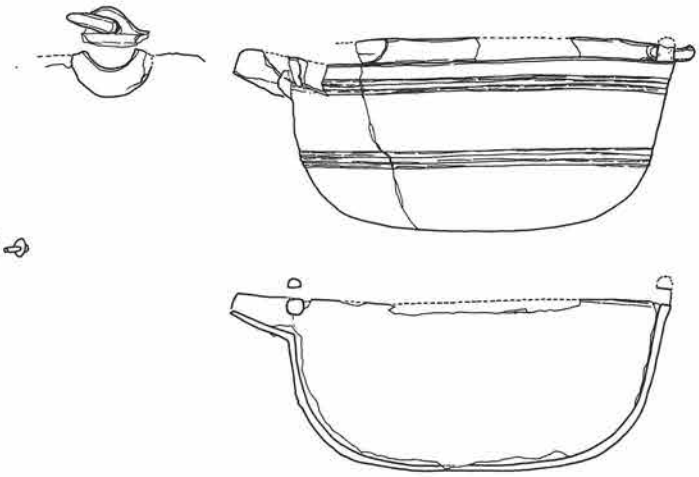
志羅山21次の金具



博多遺跡群84次出土の提子（銅製）

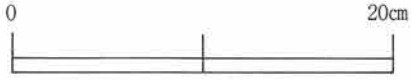


容器部分と金具の装着方法
（福岡市教育委員会1997　博多56に掲載の図を転載）



博多遺跡群84次出土の提子（鉄製）

大宰府跡出土の提子の金具



第248図　提子と提子の金具

論は全くないが、壺から直接かわらけに酒を注ぐのは苦しいものがあるのではないだろうか。

野場喜子氏は12世紀代の文献資料に登場する「瓶子」について論考(6)している。これによると瓶子には「茶碗瓶子」、「青瓷瓶子」の２種類があり、茶碗瓶子は青瓷瓶子よりも身分に高い人に用いられていることを明らかにしている。そして茶碗瓶子を中国産の磁器、青瓷瓶子を国産の緑釉陶器であるとしている。「瓶子」の使われ方として絵巻物の読み説きから、大きな貯蔵器から酒を小分けし一時的に溜めおく容器であったとしている。そしてそれから酒を銚子や提子に移して、銚子、提子から盃に酒を注ぐと想定している。また、瓶子と称している器の中に、瓶形のものと水注形があることを指摘し、水注形の瓶子は銚子、提子と同様に直接盃に酒を注ぐ器種ではないかと推測している。

12世紀の平泉について、これらの文献、絵巻の資料の内容を適応できると仮定して考えてみる。平泉で「瓶子」に相当する器種の陶磁器を探してみたい。12世紀段階では、古瀬戸の締め腰の瓶子ような器形の陶磁器は存在していない。また青白磁の梅瓶も12世紀の末になっての出現のようで、その出土量もそれほど多くない。よって12世紀平泉で「瓶子」にふさわしい器種は出土量も考え合わせると、中国産磁器であれば白磁の四耳壺、国産陶器であれば、渥美の刻画文壺、常滑産三筋壺、須恵器系陶器四耳壺があげられる。他に出土量は少ないが、常滑産長頸壺、水沼産壺なども上げられる。

これらの器種のものが12世紀平泉で「瓶子」とよばれていたとすれば、「茶碗瓶子」、「青瓷瓶子」というような区別があり、ランク付けが行なわれていたことは当然考えられる。これは八重樫氏の壺のランク付けの想定にも重ね合わせることができる。即ち中国産磁器の「茶碗瓶子」が白磁四耳壺、「青瓷瓶子」が国産陶器の壺に重ね合わせることができる。「青瓷」は本来は緑釉陶器を指す言葉であったのであろうが、12世紀段階では緑釉陶器は製作されていないので別なものを指していたのは確かである。考えられるものとしては東海地方産の常滑、渥美、猿投などの国産陶器が考えられる。これらの陶器の自然釉の緑色は、それを「青瓷」と称しても違和感は少ない。

これらの白磁四耳壺、渥美の刻画文壺、常滑産三筋壺、須恵器系陶器四耳壺が野場氏のいう酒甕から酒を小分けにして一時的に貯蔵する容器である「瓶子」であったとすると、盃（かわらけ）に直接酒を注ぐ提子または銚子の存在が必要となる。今回、志羅山遺跡で金具のみの出土ではあるが、その「提子」の存在が確認されたのである。

また論が少しずれるが、野場氏の水注も「瓶子」と呼ばれていたという指摘について考えてみたい。12世紀平泉で水注型の器種の陶磁器は中国産の白磁水注のみで、国産陶器でこの器種は存在しない。白磁四耳壺と水注は破片であるとどちらのものであるか分からない場合があり、四耳壺と水注の出土量の正確な比はわからないが、水注とはっきり認識できる破片の量は四耳壺に比べるとかなり少ない。この出土量の差からすると白磁水注は白磁四耳壺よりも希少性があったと考えられる。この希少性のある容器を権威の表象の場である宴会儀礼に使用した可能性は十分考えられることである。その場合は水注から提子に酒を移すことなく、直接水注からかわらけに注いだと考えられる。

しかし水注がすべて注酒器であると考えるのは問題があるかもしれない。志羅山遺跡21次調査では井戸の底面から完形の白磁水注が出土している。この水注の対面には杓が置かれており、明らかに意図があり置いた状態である。やはりこれは井戸に関する儀礼で、「水」に関わる思惟が感じられる行為である。これに水注が用いられているということは、水注が水を入れる容器、という観念も存在していたことも推察されるのである。平泉で水注が注酒器として使用された可能性も非常に高いが、全てがそうであったとは言い切れない状況である。

6　平泉の提子の普及率

平泉で実際に提子がどの程度の普及率であったのかは不明であるが、格式と権威、京都風を重んじた藤原氏が、酒を「瓶子」から注ぐといった見苦しい行為を行なったとは考えがたい。やはり、公の宴会儀礼においては提子、または銚子は必要欠くべかざる権威を表象する道具立てと考えられる。盛んにおこなわれる宴会儀礼に使用する多量の提子（または銚子）が平泉に普及していたと考えられる。平泉では今のところ「銚子」の出土例は無いが、その存在は提子と同様に十分推察される。

提子、銚子の出土量が少ないのは、やはりその材質に由来するためと考えられる。平泉遺跡群のみではなく、どの中世遺跡でも「提子」、「銚子」の出土量は非常に少ない状況である。しかし、絵巻などに登場する頻度からすれば、その普及率は平泉以外でも割合に高いと考えられる。

7　陸前高田市軍見洞出土の銚子

現在のところ平泉遺跡群では銚子の出土はないが、岩手県陸前高田市軍見洞で長柄の「銚子」が出土している。この資料は陸前高田市史(7)に写真が掲載されているが実測図はこれまでとられたことはないようである。よってここで実測図を示し、資料紹介をおこないたい。

この銚子は陸前高田市竹駒町軍見洞で昭和31年に土地所有者が牛舎建築のために裏山斜面を切り崩した際に土師器などとともに出土したという。この資料は昭和61年に奈良国立文化財研究所の土肥孝氏が写真鑑定をおこない、「この資料は青銅製の「さしなべ」で京都付近で出土した瓦器との比較から11～13世紀もの」と新聞記事にある。「さしなべ」とは銚子の訓読みのようである。

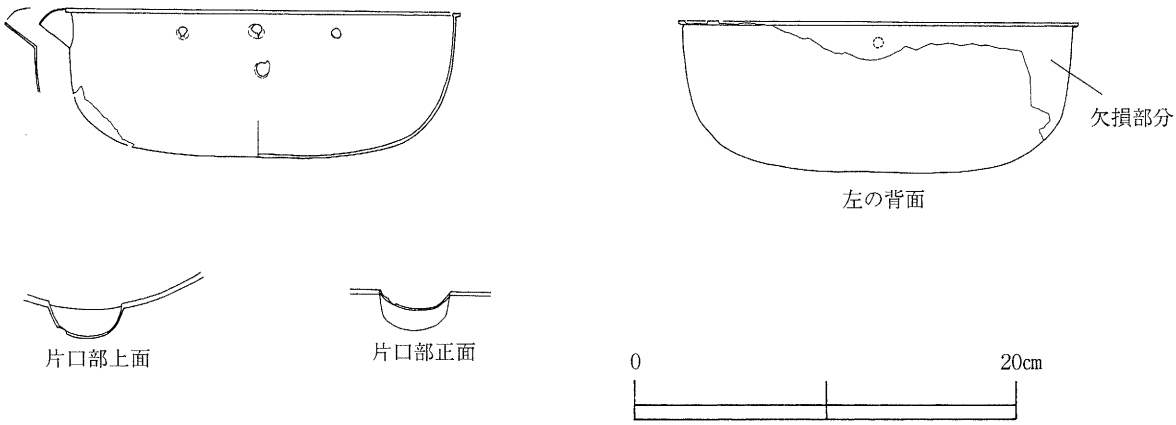
資料は青銅製で丸底の容器に片口が付き、片口の直角部分にあたる側面に４つの孔がある。これは銚子の柄を装着する金具を固定するための孔と考えられる。この孔と中心をはさんだ背面にも柄を固定ための孔があったと考えられるが、この部分は欠損しているため孔の有無は不明である。

この資料の片口は一つであるが、絵巻物に描かれる銚子はほとんどが片口が二つあるものである。12世紀の鳥獣人物戯画でも兎が担いでいる銚子には片口が二つある。この点からすればこの資料は「銚子」より「提子」の容器部分に類似しているといえる。この容器部の片口の両脇とその反対側に金具を固定する孔があれば銚子ではなく提子として通用しそうなほどである。だがこの部分には孔がなく、上述のように片口と直角部分に金具を固定する孔がある。やはりこの孔の位置からすればこの資料は提子ではなく銚子と解釈せざるを得ない。

銚子や提子はその材質の性質上、遺跡からの出土例は少ないものである。この資料がほぼ完形の状態で残存していたということは、遺構の中に埋納されていた可能性が高いと考えられる。出土地点は斜面で経塚などが作られるような地形ではないということである。経塚の埋納物でないのであれば、墓壙の類に埋納されていた可能性が考えられる。

この軍見洞の銚子は供伴遺物ははっきりしないため、確実な年代を示すことはできない。銚子自体の形態からも、銚子という器種の形態変化の過程が明らかでないので言うことができない。だが銚子の形態が12世紀のものである博多遺跡郡84次調査出土の提子の容器部分に非常に似ている点を重視したい。また出土地である竹駒町には奥州藤原氏に関連する伝承を持つ玉川金山が所在する土地である。また近接する陸前高田市矢先町の越戸内では12世紀前半代の渥美産陶器壺が出土している。軍見洞付近は奥州藤原氏に関連の深い地域のようである。この点も合わせてこの銚子が12世紀奥州藤原氏の時代のものであると考えたい。このよう

に12世紀の銚子が平泉の近辺で出土しているとういうことは、平泉にも銚子があったという証明の一つに成りえる。



第249図　陸前高田市軍見洞出土の銚子

8　まとめ

12世紀平泉では青銅製の「提子」が存在している。現在のところ、それは金具のみの出土であるが、宴会儀礼が盛んにおこなわれた平泉ではその普及率は割合に高かったと推察される。出土量が少ないのは青銅という材質に由来すると考えられる。

長柄の「銚子」の出土は現在のところ平泉では事例がない。しかし陸前高田市軍見洞出土例から、12世紀平泉での銚子の存在が推定できる。

「提子」の用途は酒を注ぐ注酒器であった。12世紀平泉に「瓶子」と称される器種が存在し、それらは酒甕から酒を移し一時的に酒を貯蔵する容器であった。それから「提子」、「銚子」に酒を移し、かわらけに酒を注いだのである。

（羽柴　直人）

（1）　福岡市教育委員会　1997　「博多56」博多遺跡群第84次調査の概要　第521集
（2）　平泉町教育委員会　1993　「平泉遺跡群発掘調査報告書」　志羅山遺跡第21次　第34集
（3）　福岡市教育委員会　1995　「博多48」博多遺跡群第62次調査の概要　第397集
（4）　太宰府市教育委員会山本信夫氏のご教示
（5）　八重樫忠郎　1997　「輸入陶磁器からみた平泉」　貿易陶磁研究№17
（6）　野場喜子　1997　「大饗の食器」　国立歴史民俗博物館研究報告第71集
（7）　陸前高田市史編集委員会編　1994「陸前高田市史第二巻」地質・考古編

4　志羅山遺跡第66次調査出土の笹塔婆についての考察

－１号池出土の笹塔婆を中心として－

1　はじめに

志羅山遺跡第66次調査では２基の池跡から笹塔婆と呼ばれる遺物が48点出土した。笹塔婆とは現在のところ明確な定義付けはされていないようである。しかし、塔婆に仏名等を記してあるものを笹塔婆と呼ぶ例もあり(1)、当遺跡で出土した48点も笹塔婆と呼ばれるものと考える。笹塔婆には仏名や種子、真言等が記されている場合が多く、仏教儀礼が背景にあるものと考えられているが、その信仰の内容や笹塔婆の使用目的については明らかにされていない。

本稿では12世紀末に機能していたと思われる66１号池（以下１号池と称する）出土の笹塔婆に注目する。そして、当時の社会に対する仏教の影響を考えながら、笹塔婆に記されている墨書の内容を検討することによって、これらの笹塔婆の使用目的やその方法を考察していきたい。

2　笹塔婆の出土状況について

笹塔婆が出土した２基の池跡は、ともに埋没沢を整地して造られている。沢は２本検出されており、調査区の西から東へ向かって流れ、東側で合流している。この２本の沢は12世紀の中頃には既に埋没が進んだ状態であった。２基の池跡はそれぞれの沢上に造成されている。１号池は12世紀の中頃、沢を人為的に整地する過程において造成されている。池の底面や側面には沢の埋立に使われた土と同様の土が使用されていた。南北幅13m、東西幅６mが検出されて、この池はさらに西側に広がっている様子である。この池の東側約３．５mには道路遺構がある。道路は１号池と同じ時期に機能していたとみられている。１号池からは道路側溝に通じる溝が造られていて、池の水がある一定の水位に達すると溝を通じて道路側溝に流れていくようになっていた。池底には粘土質の土が堆積しており、この層からは多数の遺物が出土している。笹塔婆もこの層から出土したが、他には鉄地銅象嵌の轡、馬骨、陽物、鉄鏃、墨書のあるかわらけなど特異な遺物が多数出土している。笹塔婆を含めて、これらの遺物は何らかの祭祀儀礼との関わりが想像され、１号池の性格を考える上で大きな手がかりとなるだろう。しかし、笹塔婆の出土状態からは祭祀の形跡をみることはできなかった。笹塔婆は池の南側に偏って分布していたが、いずれも横位でばらばらに散らばった状態で出土した。１号池は12世紀中頃に造成され、12世紀末までには廃絶したとみられる。

66２号池（以下２号池と称する）はもう一本の沢を整地した後にそこを掘り抜いた状態で造成されている。南北幅5.1m、東西幅2.9mが検出され、さらに調査区域外の西側に広がっている。この池では笹塔婆のほかに、漆器皿、曲げ物、ざる、東北地方産の瓷器系陶器片が出土している。その陶器片の帰属年代より13世紀後半から14世紀前半頃に機能していた池と考えられる。

笹塔婆は１号池から47点、２号池からは１点のみ出土した。１号池の笹塔婆のうち10点は墨書を確認することができなかった。しかし、形状が類似するために笹塔婆として取り上げた。１号池の笹塔婆は頭部が圭頭状で、頭部に近い左右の両側面に２ヵ所ずつ刻みが入っている。脚部は徐々に削られて尖っているものが多い。笹塔婆の形状に関しては定説がみられないが、頭部が圭頭状で左右２ヵ所に刻みがある形は、中世に関東地方を中心に盛んに造立された武蔵型板碑に類似している。武蔵型板碑の形状に関しては五輪塔の形を象っているともいわれているが、これについても明確な結論は出ていない。脚部が尖っていることから、何かに刺し立てて使用された可能性は高いが、今回の出土状況からそれを観察することはできなかった。

2号池では4013の笹塔婆が1点出土した。頭部は圭頭状に作られているが、1号池の笹塔婆のような刻みはない。脚部は徐々に削られているが先端は尖っていない。岩手県における笹塔婆の出土例は少ないが、水沢市仙人西遺跡の中世城館の堀跡などから出土した笹塔婆と4013は形状等、非常に似ている。本稿においては4013の笹塔婆について考察を述べないが、1号池が12世紀末で、2号池が13世紀後半から14世紀前半頃の笹塔婆と考えると、笹塔婆の形状に時間的な変化をみることができるのではないかと推察される。また、4013と仙人西遺跡の笹塔婆は墨書の内容（種子はバン、仏名は大日如来）も一致している。岩手県の板碑に大日如来の種子が多いことも考えて、中世の岩手県南地域における信仰内容を推察する手がかりになるかもしれない。

3　笹塔婆と十齋日信仰

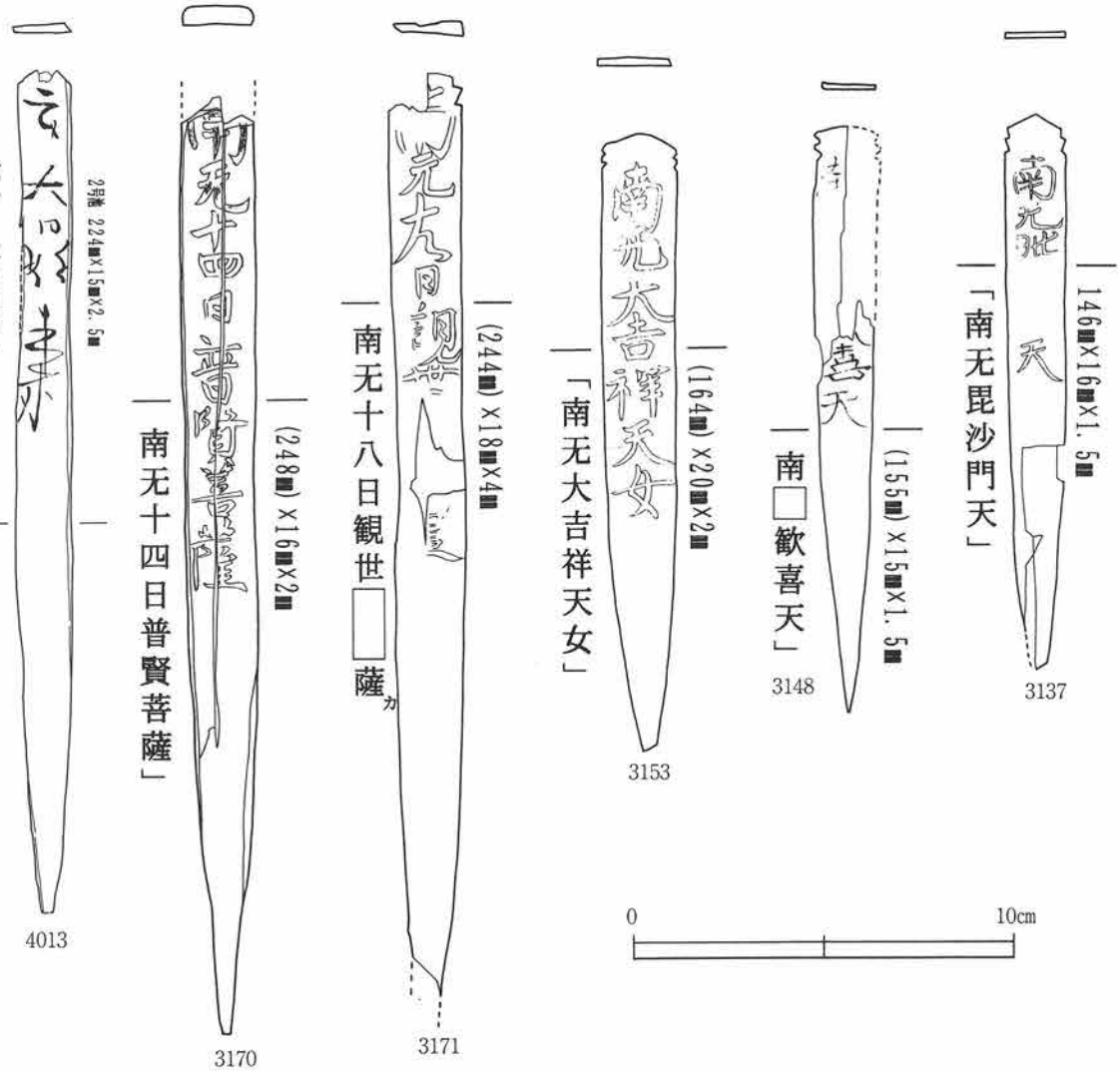
1号池の笹塔婆には大吉祥天女をはじめとして様々な仏名が墨書されていたが、まずはじめに3170と3171の笹塔婆の性格について考えていきたい。この2点を取り上げた理由は、1号池出土の笹塔婆の中では特にサイズの大きいもので、3170には「南无十四日普賢菩薩」、3171には「南无十八日観世音菩薩」と日にちが墨書されているため、他の笹塔婆とわけて考えらるべきものと思われるからである。この十四日と普賢菩薩、十八日と観世音菩薩の関係は『拾芥抄』の第十三齋月日部の中にある十齋日の信仰にみられる。『拾芥抄』のなかで齋日信仰については、十齋日のほかに六齋日や三長齋月の記述もみられるが、「十四日」と「十八日」が含まれているのは十齋日の信仰のみである。そして、十齋日の信仰については詳しく説かれており、それは以下のようである(2)。

一日定光仏　不殺生、念此尊除四十劫ノ罪
八日薬師如来　不偸盗、此日念此尊、除五十劫ノ罪
十四日普賢菩薩　不邪婬、件日念此尊、除一百廿劫ノ罪
十五日阿弥陀如来　不妄語、件日念此尊、除十劫ノ罪
十八日観世音菩薩　不沽酒、件日念此尊、除九千劫ノ罪
廿三日得大勢菩薩　説四衆過、件日念此尊、除一万劫ノ罪
廿四日地蔵菩薩　不自讃毀他、件日念此尊、除五万劫ノ罪
廿八日毘盧舎那仏　不慳性加毀、件日念此尊、除三万劫ノ罪
廿九日薬王菩薩　不瞋心、不受悔、件日念此尊、除四万劫ノ罪
卅日釈迦如来　不謗三宝、件日念此尊、除五万劫ノ罪

十齋日とは十戒（不殺生、不偸盗など）をわけてこれを持し、それぞれの日に配された仏を念ずると罪が除かれるという日である。『拾芥抄』は鎌倉中期頃の成立と考えられているが、この十齋日の信仰はいつころから行われていたのだろうか。11世紀前半に成立した『栄花物語』の「うたがひ」において、「十齋の仏を等身に造らせ給ふ」という一説がみられることから(3)、少なくとも11世紀には十齋日の信仰が行われていたと思われる。

次に、中国での十齋日の信仰についてみると、敦煌出土の未伝古逸仏典をまとめた矢吹慶輝氏編『鳴沙餘韻』所収の「大乗四齋日」のなかに十齋日の言葉がみられる。「大乗四齋日」には十齋日の他に、四齋日、六齋日、三長齋月について日にちが挙げられているが、十齋日についてのみ持齋の功徳が挙げられている(4)。

一日童子下、念定光如来仏除齋除罪四十劫不墮刀槍地獄
八日太子下、念薬師瑠璃光仏除齋除罪三十劫不墮粉草地獄


146㎜×16㎜×1.5㎜
「南无毘沙門天」
3137
(155㎜)×15㎜×1.5㎜
南□歡喜天」
3148
(164㎜)×20㎜×2㎜
「南无大吉祥天女」
3153
(244㎜)×18㎜×4㎜
南无十八日観世□薩カ
3171
(248㎜)×16㎜×2㎜
「南无十四日普賢菩薩」
3170
2号塔 224㎜×15㎜×2.5㎜
バン　大日如来」
4013
0
10cm

第250図　主な笹塔婆

十四日察命下、念賢劫千佛除齋除罪一千劫不墮蕩湯地獄

十五日五道大将軍下、念阿弥陀仏除齋除罪二百劫不墮寒氷地獄

十八日閻羅王下、念観世音菩薩除齋除罪九十劫不墮剣林地獄

廿三日天大将軍下、念盧舎那仏除齋除罪一千劫不墮我鬼地獄

廿四日大山府君下、念地蔵菩薩除齋日除罪九十劫不墮纔截地獄

廿八日天帝釈下、念阿弥陀仏除齋日除罪一千劫不墮鉄鋸地獄

廿九日四天王下、念薬王薬上菩薩除齋日除罪七千劫不墮磑磨地獄

卅日大梵天王下、念釈迦牟尼仏除齋除罪八千劫不墮寒氷

この十齋日では、それぞれの日にちに道教的色彩の濃い神将や天王をあて、その下で仏教的な仏を念じることで罪が除かれ、様々な地獄に堕ちないと説いている。日本における十齋日と比較すると、日にちは『拾芥抄』のものと一致するが、十四日と二十三日、二十八日において念ずる仏が異なる。矢吹氏はこれについて「本邦現時の風習と異なれり」という(5)。おそらく中国から日本へ伝わる過程において変わったのではないかと思われる。また、『鳴沙餘韻』のなかに「地蔵菩薩十齋日」という言葉がみられる。これは先に挙げた「大乗四齋日」にある十齋日と、多少の文言の違いはあるが内容に関しては同一であり、十齋日が地蔵信仰と密接に関係していることをあらわしていると思われる。そして地蔵菩薩の中心的経典といわれる「地蔵三経」のひとつ『地蔵菩薩本願経』にも十齋日の言葉がみえる(6)。

復次普広。若未来世衆生。於月一日八日十四日十五日十八日二十三日二十四日二十八日二十九日乃至三十日。是諸日等諸罪結集定其軽重。南閻浮提衆生挙止動念。無不是業無不是罪。何況恣情殺害竊盗邪婬妄語百千罪状。能於是十齋日。対仏菩薩諸賢聖像前讀是経一遍。東西南北百由旬内無諸災難。当此居家若長若幼。現在未来百千歳中永離悪趣。能於十齋日毎転一遍。

十齋日は罪が結集しその軽重を決める日だから、仏などの像にむかい『地蔵菩薩本願経』をよむように説いている。中国においては10世紀頃、末法思想のもと、地蔵菩薩の地獄抜苦の信仰が盛んになっていたようである。

日本でも同じく10世紀に、天台浄土教の源信がその著書『往生要集』で極楽往生について著すとともに、地獄の恐怖も描いている。このころは摂関政治期に入り、社会情勢が不安定でもあり、また末法思想が広く浸透していたことから、貴族社会においても浄土教の来世的信仰が盛んに行われるようになった。民間ではこの来世的信仰に伴い、六道・地獄思想が定着し、財力などがないために功徳がつめないという苦しさに民衆は地獄必定の恐怖も感じていた。このため、地獄抜苦の功徳が特にすぐれていると考えられていた地蔵菩薩の信仰が、平安時代末にかけて民間では急激に発達していたようである。

奥州藤原氏においても中尊寺金色堂や無量光院の建立からみられるように、来世的信仰が盛んであったと思われる。もし、地獄必定の観念が定着しつつあったとすれば、3170と3171の笹塔婆も地蔵信仰に基づく十齋日に使用された可能性が十分考えられる。

4　笹塔婆と密教修法について

1号池出土の笹塔婆に墨書されている仏名でもう一点注目したいのは大吉祥天女をはじめとして天部の仏が多いことである。天部の仏というのはもともとインドの神であったものが仏教に取り入れられたものである。密教においてはこれらの仏を本尊とした修法が多く行われた。

一般に平安時代の仏教は公的なものから次第に私的で個人的なものに変化するとされている。それは律令

体制が崩れて摂関政治、院政と移行する社会変動のなかで人々が不安定な状態におかれたためであろう。個人信仰には先に挙げた来世的浄土教の発生、発達も認められるが、個人の運命を有利に転換させようと呪術的な密教修法も盛んに行われていた。速水侑氏は平安貴族社会における仏教の主流はむしろ密教にあったと指摘している(7)。

先に述べたように、1号池では天部の仏名が記された笹塔婆が多数出土している。仏名をみると3153の大吉祥天女、3137の毘沙門天、3148の歓喜天の3種類にわけられる。これらは現世利益の仏として信仰されており、これらの仏を本尊とした密教修法は盛んに行われていたようである。

まずはじめに、「南无大吉祥天女」と墨書された笹塔婆は、推定で判読したものも含めて15点と最も多く出土している。大吉祥天女とは吉祥天のことである。吉祥天は幸福と美の女神で、『金光明経』大吉祥天女品でその功徳が強調されたため、吉祥天を祀って天下泰平・五穀豊饒を祈願する吉祥悔過が古くから行われていた。密教ではこの仏を本尊とした吉祥天法が修された。吉祥天法は「福徳の為にこれを修すべし」(8)とあり、吉祥天の持つ多くの功徳をもとに行われた。吉祥天はまた、毘沙門天と夫婦であるとして信仰されている。

次に、毘沙門天の名が墨書された笹塔婆は4点出土した。毘沙門天は財宝富貴をつかさどり、仏法を護持する神である。毘沙門天法は「福徳の為守護の為これを修す」とあり、「若しくは災難及び病患に遇ふ、亦た敬供すべし」(9)という。また、先に述べたように毘沙門天は吉祥天と夫婦とされるが、この二天を供養する修法として双身法というものがある。双身法と呼ばれる修法には双身毘沙門の供養法と、後述する歓喜天の供養法がある。双身毘沙門の供養法は特に台密において多く行われていた。これは息災増益の修法として用いられ、「福徳ならびに愛敬法の為これを修す」(10)るとされる。よって、毘沙門天と大吉祥天女の笹塔婆を組み合わせてみると双身法が修された可能性も考えられる。

歓喜天が記された笹塔婆は3148のみである。歓喜天もまた、先に述べたように双身で供養される場合が多い。双身歓喜天の供養法は主に東密で行われたが、台密でも修されていた。歓喜天法は障難を除き、または富貴等を得るために修する法である。歓喜天法は「種種成就。万事の為これを修すべき」(11)といわれ、その利益は強力であったようである。そのためか大法立ての修法には必ず歓喜天供が行われた。

以上のように、それぞれの仏が密教修法の本尊として供養されるが、本尊としてのみではなく他の修法において用いられることもある。例えば台密において修される冥道供では除病・延寿・攘災・招福のために多くの神仏が供養されるが、その中では大吉祥天女や毘沙門天、歓喜天も供養される(12)。このことから、天部の仏名が記された笹塔婆が、何の修法に使用されたかということについて言及するにはさらに検討を要する。いずれにしても現世利益を得るための密教修法において使用された可能性は高いといえるだろう。

5　おわりに

1号池の笹塔婆は来世的浄土教に基づく十齋日信仰に関するものや、現世利益的な密教修法によると考えられるものなど、様々な仏教儀礼に関わっているのであろう。これまで奥州藤原氏の仏教文化についてみるとき、どちらかというと中尊寺金色堂を代表として浄土教の影響をうけている面に注目されがちであったと思う。確かに1号池の笹塔婆にも極楽往生を願う十齋日信仰がみられた。しかし、密教修法に関わると思われる笹塔婆が多数出土し、笹塔婆以外にも多くの呪術的な遺物が出土していることを考えると、むしろ密教の影響が大きいだろうと思われる。そこには、むろん「法師陰陽師」と呼ばれる密教・陰陽道の両辺と関わ

りを持った者の存在をも想定すべきであろう。

本稿において密教修法に関しては『阿娑縛抄』をはじめとして主に台密の修法を参考にしたが、今後さらに、密教修法と笹塔婆の関わりを詳しく検討していきたいと思う。また、これまで挙げてきた笹塔婆の他にも「南无無量寿如来」と「南无如意輪観音」と墨書されている笹塔婆が出土している。これらについては本稿において特に考察を加えないが、その功徳についてのみ記すと、無量寿如来とは阿弥陀如来の異名で西方極楽浄土の教主である。また、如意輪観音は六道衆生の苦を救い、宝財を施し願望を成就させる菩薩である。これらの笹塔婆も含め12世紀の平泉における仏教儀礼を検討し、人々の精神生活を明らかしていきたい。

（高橋　実央）

注

（1）『日本仏教民俗基礎資料集成』第６巻（中央公論美術出版、1975）、62頁
（2）『新訂増補故実叢書』第十三回（吉川弘文館、1952）、452～453頁
（3）『三条西家本　栄花物語』中巻（岩波書店、1997）、186頁
（4）矢吹慶輝編『鳴沙餘韻』図録篇（臨川書店、1980）、83－Ⅳ
（5）矢吹慶輝『鳴沙餘韻解説』(臨川書店、1980)、235頁
（6）『大正新脩大蔵経』第13巻、783頁
（7）速水侑『平安貴族社会と仏教』(吉川弘文館、1975）参照
（8）『阿娑縛抄』第百四十四「吉祥天」(『大日本仏教全書』第40冊)、59頁
（9）『阿娑縛抄』第百三十六「毘沙門天王」(『大日本仏教全書』第40冊)、１頁
(10)『阿娑縛抄』第百三十七「双身法」(『大日本仏教全書』第40冊)、20頁
(11)『阿娑縛抄』第百四十九「歓喜天」(『大日本仏教全書』第40冊)、133頁
(12)『阿娑縛抄』第百六十六「冥道供」(『大日本仏教全書』第40冊)、参照

参考文献

『大日本仏教全書』第38・40冊(『阿娑縛抄』)
『大正新脩大蔵経』第76巻続諸宗部七(『行林抄』・『渓嵐拾葉集』)
源信『往生要集』永田文昌堂、1992
石田茂作『廃瓦塔の由来』大塚巧芸社、1974
井上光貞『新訂　日本浄土教成立史の研究』山川出版社、1989
千々和到『板碑とその時代』平凡社選書116、平凡社、1988
速水侑『地蔵信仰』塙新書49、塙書房、1991
司東真雄『岩手の石塔婆』モノグラム社、1985
『図説　日本の仏教』第２巻「密教」、新潮社、1988

5　66次1号池出土かわらけに関する若干の考察

松本建速（筑波大学博士課程）

1　数量

66 1 号池 3 ～ 5 層から28点のかわらけが出土した。完形品17点、残存率90％が 1 点、他の10点は残存率70～25％の破片である。池が作られて最初の段階で埋まった 5 層から出土したかわらけは20点である。そのうち、完形品あるいはそれに準ずると考えられるものは16点で、その内訳は、大皿が 7 点（ロクロが 1 点、他は手づくね製品である）、小皿が 9 点（ロクロが 4 点、他は手づくね製品である）である。

2　出土状況

5 層から出土した完形品のすべてと、ロクロかわらけ底部破片の3127・3128は正位の状態で出土した。

池の西端は調査区外にあたり、調査していないので、池に伴うかわらけがこれらですべてであるとは言えないし、池とかわらけの関係を述べることは完全にはできない。だが、かわらけが池底の粘土上に載った場合、粘土全体が動かなければ簡単にはかわらけも動かないと考えられる。よって、かわらけの位置はほぼ12世紀当時のままと考えて推測するならば、これらの完形品のかわらけやそれに準ずるかわらけの中には、3102・3104・3126・3127・3128のように、池中央を目指して投げ入れられた場合があったようである。

一方、同じ 5 層出土でありながら、笹塔婆の多くは池の南側に偏って分布している。池の水に流れがあるとすれば、池の形態から考えられるのは、22.9m以上の水があった場合には、東に向かう流れである。南に偏る笹塔婆の位置は、流された結果の位置とは思われない。水の流れを無視できる場合、水に浮き、しかも軽くて遠くに投げづらい木製の笹塔婆は、入れられた位置に近い場所に堆積したと考えられる。ほとんどの笹塔婆は池の南側から入れられた可能性がある。それらの笹塔婆の位置がそれらを入れた人々に望まれた位置であるならば、かわらけの場合は笹塔婆を置きたい場所とは異なる位置が望まれたことになるだろう。

同じ 5 層でも馬の歯や轡は池北東隅にある。その付近に手づくね小皿3103や手づくね大皿3115がある。

3　形態・製作技法・胎土

かわらけが多く出土しそれらの使用年代が推測されている柳之御所遺跡出土品の分類をもとに記述する。

形態・製作技法は、ほとんどが 1 段なで技法D_2・D_3型である。3120・3121・3122の 3 点だけが 2 段なで技法C_4型である。ほとんどのものの外底面に粘土板の両端を寄せて貼り付けた痕跡が見える。2 段なで技法のもののうち3121は非常に特徴的な形をしている。真横から見た形は、左右対称な台形を逆さにした形である。それは、まるで内型に入れて作ったかのようである。柳之御所遺跡では非常に少ないタイプである。3113は 1 段なで技法で、3121に比べ、器が浅いが、器内面のなで、口縁部のなでの雰囲気や口縁部内面をなでた時に口唇部の内面側が少し抉れる形状などは3121に似ている。形態・製作技法・胎土とも3108・3111・3112・3114・3115・3116は類似する。これらは、口縁部の形状が若干異なるが、3113にも似る。それほど違わない時に、ほぼ同じ技術で製作されたと思われる。

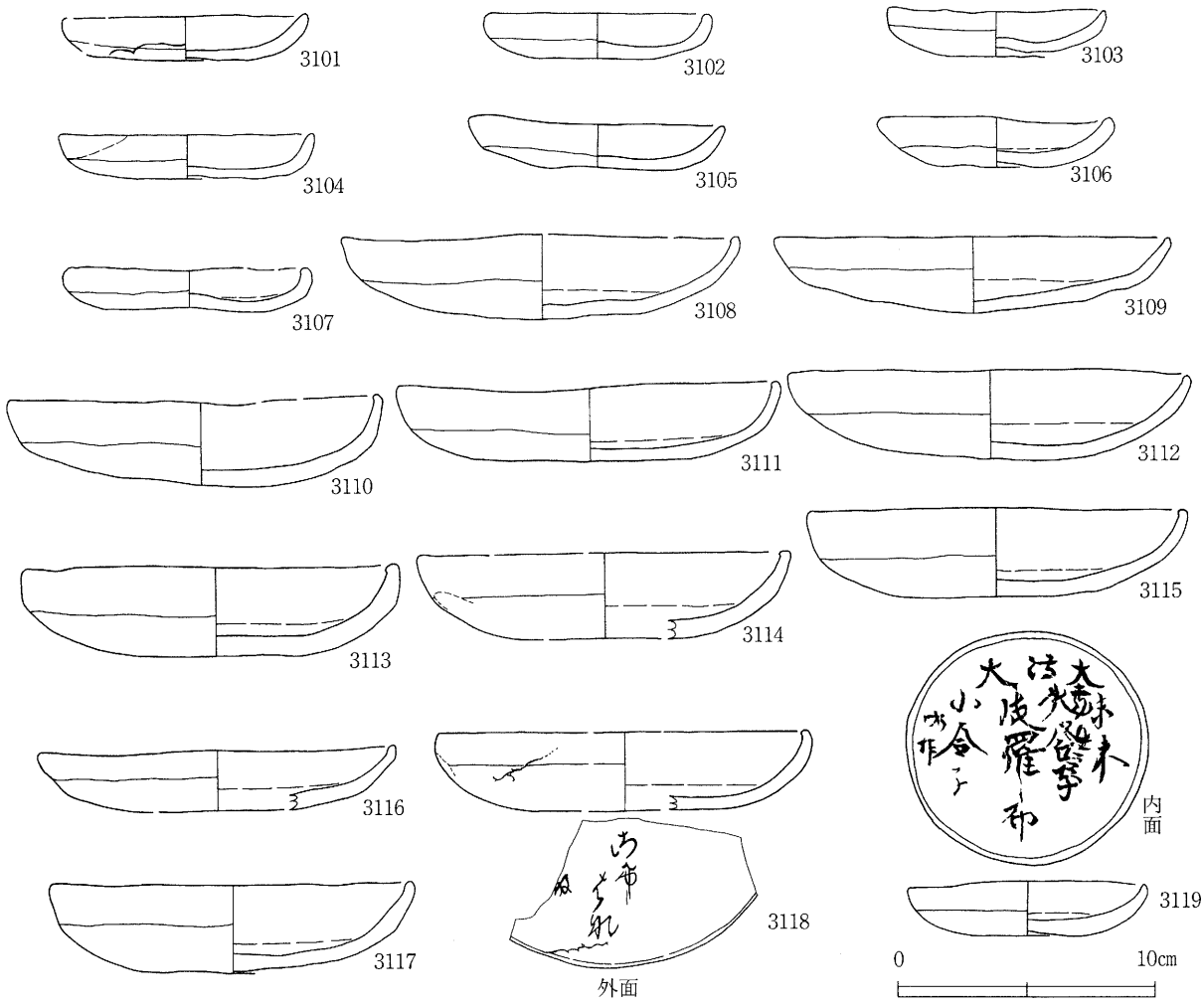
3104・3105・3119は表面の風化の度合いが低く、器外底表面には指紋が多く残されている。

手づくね製品の多くは、器を整形した後、内底面を横に一方向あるいは複数方向に重なるようになで、口縁部全体をつまみなでている。その際、水をよく含ませた布のような柔らかなものを用いてつまんだと思わ

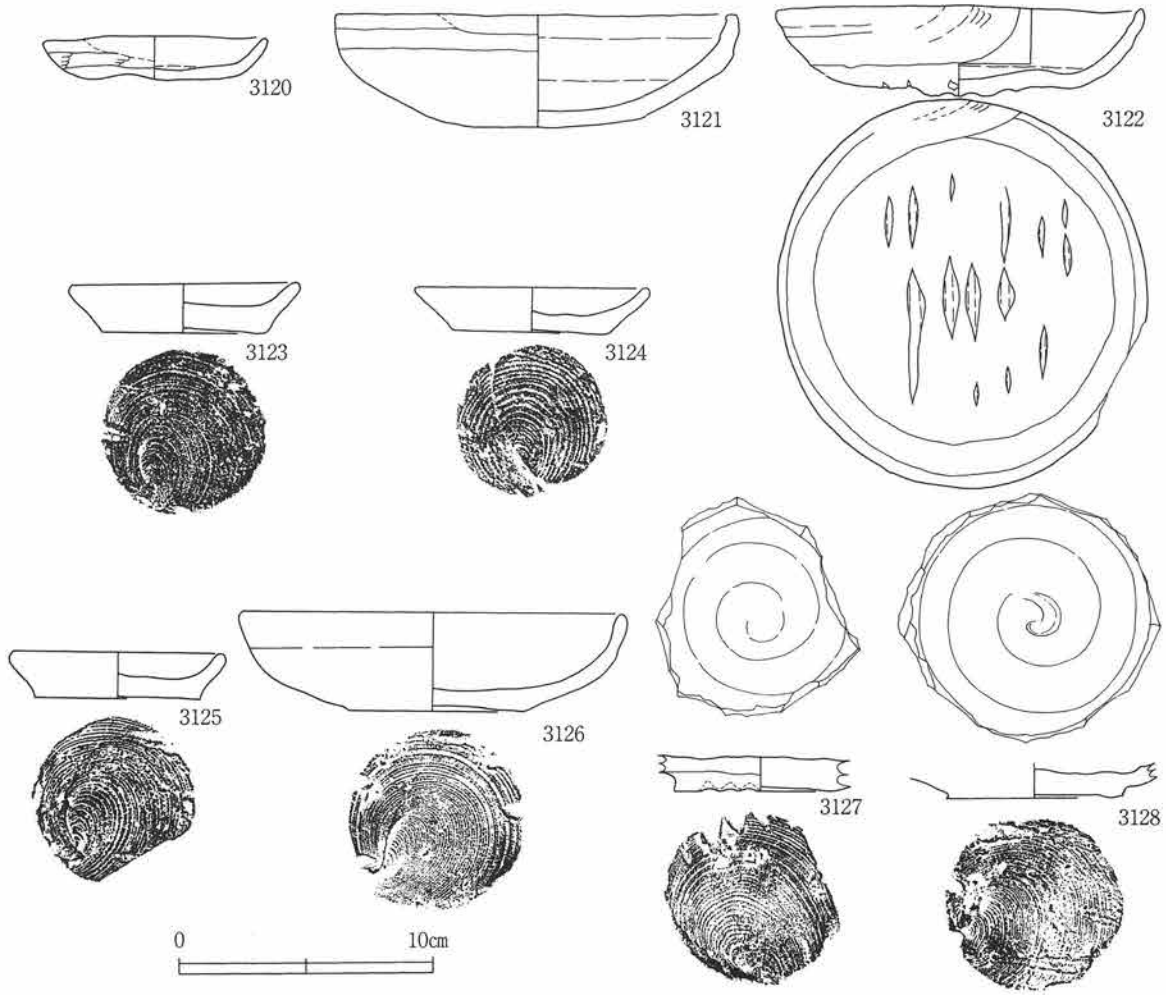
れる。指だけでは到底つまめない内面底の平らな部分にまでなでられた痕跡はおよんでいるのである。

ほとんどのものの外底面に、製品を乾燥させる際に、器自らの重みでついた痕跡が見える。その痕跡は、平泉町教育委員会1994などで「スノコ痕」と呼ばれているもので、器を載せた場所にあった物質の形状を写した痕跡である。池出土の製品に残された痕跡の多くは、幅５㎜ほどのヨシ、あるいはシノダケの茎と思われるものの凸部が平行してプリントされたものである。3122の場合は、器がやわらかいうちに、乾燥させる際に置いた場所の上で器内面底をなでたので、「スノコ痕」が他の製品に比べて、深く残っている。

ほとんどの製品の胎土中に海綿状骨針と細かな金雲母が入る。海綿状骨針は、ロクロ製品の3123・3125・3127・3128には一見して多数が見えるほど多量に入るが、他の製品の場合、少量しか入っておらず、時間をかけて探さなくてはならないほどの極少量しか入っていないものも複数ある。



第251図　１号池かわらけ①



第252図　1号池かわらけ②

4　使用状況

くぼ地である池に、「円いかわらけの完形品」を入れることに意味があった可能性がある。ロクロかわらけ大皿の底部破片3127・3128も、それらの周辺から出土した手づくねかわらけ小皿の完形品（3102・3104）とほぼ同じ直径であり、円板状なので、かわらけ小皿と同じ役割を与えられたのかもしれない。

「祓い」にかかわるであろう文句が書かれていた3119は、文句が書かれた内面を上向きにして、正位で出土した。ただし、文字が器内面に書かれた後、器内面には炭化物が付着しており、器に油が入れられ火が灯された可能性がある。その後、3119は池に入れられたのである。これらの行為が、「祓い」に関係があるのか、器の第一次使用目的から別の使用目的へと転用され、池に入れられたのかは不明である。3102の内面にも炭素が吸着しており、二次的に焼けてもいる。3112・3115の外面や3110・3114・3122の内面にも炭素が吸着している。3115・3122には二次焼成の痕跡がある。器外底面に文字が書かれた3118の内面にも炭化物が付着している。以上の炭化物の多くは器内面で火を焚いた際についた痕跡と思われる。また、3118の場合、かわらけは全体の25%ほどしか残っていない破片として出土した。文字も全体の一部しか残されていない。書かれた文字の内容は、池にかわらけを入れることとは無関係であると推測できる。

5　推測される使用年代

出土したかわらけの形態・製作技法・法量から推測されるその製作・使用年代について述べる。ロクロかわらけ大皿は、柳之御所遺跡のものとの対比では、Ｒｄ02型にあたり、柳之御所遺跡ではⅠ・Ⅱ期両期に出土するものだがⅡ期に多い。１段なで技法の手づくねかわらけ小皿もⅠ・Ⅱ期両期に出土するがⅠ期に多い。１段なで技法手づくねかわらけ大皿もⅠ・Ⅱ期両期に出土するがⅡ期に多い。だが、手づくねかわらけを真横から見た場合、Ⅰ期のかわらけは底部深さと口縁部幅の割合がほぼ同じくらいであるのに対し、Ⅱ期のかわらけは底部深さよりも口縁部幅の方が広くなる傾向がある。よって、池出土かわらけはⅠ期に入れられる。

また、池出土の１段なで技法手づくねかわらけ大皿は、直径が14.0～15.6cmにおさまる。柳之御所遺跡ではⅠ・Ⅱ期両期にまたがる形態・法量の製品が多くあったが、Ⅱ期の１段なで技法手づくねかわらけは、Ⅰ期よりも小さくなる傾向があり、複数枚の完形品が出土するような遺構出土品の場合、直径13.5cm以下の製品が混じるのが普通である。ただし、池出土品のように、出土手づくねかわらけのタイプが４つほどにしかわかれない場合、製作者や製作時の多様性が低いことになり、たまたま小さな製品を作らなかったこともあったかもしれないので、法量にたよって絶対年代を考えることは難しい。それでも、あえて言うならば、法量から考えても、池の出土品はⅠ期に入ることになる。

しかしながら、１段なで技法製品が主流であることを考えると、Ⅰ期でもⅡ期に近い頃と考えるべきであろう。柳之御所遺跡では、Ⅱ期とは1175年頃以降と考えられた時期である（岩手埋文1995）。66１号池出土かわらけは、柳之御所遺跡出土遺構と比較するならば、28ＳＥ４や「人々給絹日記」墨書折敷が出土した28ＳＥ16の頃、つまり1170年前後のものと推測できるのではなかろうか。

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1995　「柳之御所跡」第21・23・28・31・36・41次報告書　第228集

6　鴛鴦文銅象嵌鏡轡について

－法住寺殿跡出土轡との比較を中心に－

久保智康（京都国立博物館）

1　はじめに

12世紀半ばに後白河法皇が院御所とした法住寺殿の遺跡（京都市東山区三十三間堂廻り）が1978年に発掘調査され、W10と呼ばれる方形土壙から武器・武具・馬具類が出土した(1)。これらは、そのものの形式的特徴と伴出土器から12世紀後半、平安時代末期の遺品とされ、伝世品すらきわめて希少な時期の一括出土品として重要文化財に指定された。中でも、兜前面に立てる雲龍文鍬形と馬具の鶴文轡は、鉄地に文様部分を面的な銅象嵌で表わしその上に鍍金・鍍銀を施すという、前後の時代には見られない特異な技巧を凝らしたもので、金工史上もひじょうに重要な品である(2)。

この度の志羅山遺跡の調査で、法住寺殿跡出土品と酷似した鉄地銅象嵌の轡が出土したとの報にふれ、その遺跡が法住寺殿跡とほぼ同時期に営まれていたことを知った筆者は、まさしく瞠目を禁じ得なかった。と同時に、実物を見る以前の段階で、いくつかの明らかにされるべき問題点も早々と思い浮かんだものであった。まず第一に、両遺跡の鍬形は、どの程度近い関係にあるのか、ということ。第二に、もし両者がひじょうに近い関係（例えば製作工房や工人を同じくする、などといった関係）にある場合、これらが京都と、遠く離れた平泉に存在することは何を意味するのか、ということ等々である。

幸い、両遺跡の轡を実物同志で比較観察する機会に恵まれたので(3)、小稿ではその検討結果に基づき両轡の関係について考察し、志羅山遺跡轡が平泉の地域史研究においていかなる意味をもつものか論じたい。なお以下では、両轡を簡略に「志羅山轡」、「法住寺殿轡」と記述する。

2　志羅山轡と法住寺殿轡の比較

（1）轡の本体構造

いずれの轡も、馬の口元両脇に円形の鏡板が備わる「鏡轡」と称される形式である。総体に鉄・鍛造で、鏡板を中心に、頬の面繋がかかる「立聞」、手綱へと繋がる「引手」、馬が口に含む「喰」などの部位からなり、これらを遊金（鐶）で連結する構造となる(4)。

鏡板には冒頭でも触れたように、銅象嵌で文様を表わす。法住寺殿轡は羽根を広げて飛翔する鶴を左右鏡板に対称の構図で描き、「鶴文銅象嵌鏡轡」という重文の指定名称が与えられている（写真１）。一方の志羅山轡も鴛鴦文を同様の対称構図で描いており、前者に対応させ「鴛鴦文銅象嵌鏡轡」と呼びたい（図１・写真２参照）。なお、法住寺殿轡の立聞・引手、志羅山轡の引手の側面にも草花・唐草文を銅象嵌で表わしている。これらの象嵌技法については、後で詳しく検討する。

両轡は、上述のようにほぼ同じ形式と構造を見せている。にもかかわらず、両者を左右に並べて見ると、全体から受ける印象は相当に異なっている。ひとことで言えば、法住寺殿轡の方が志羅山轡よりも「量感」の上でまさっているのである。これは細部の造作や法量（表参照）を比較してみると、その違いがいっそう明らかになる。

鏡板は、両者とも鉄板を円形に鍛え整えたもので、表側（象嵌文様を施す側）をわずかに凸面にする点も同じである。しかし、板の厚みはわずかながら志羅山轡の方が薄い。また縁辺部の処理を見ると、法住寺殿轡がしっかりとした断面方形に作るのに対して、志羅山轡は処理がややあまく、縁端が薄くなったり丸みを

写真1　法住寺殿轡

（鏡板）

（鏡板）

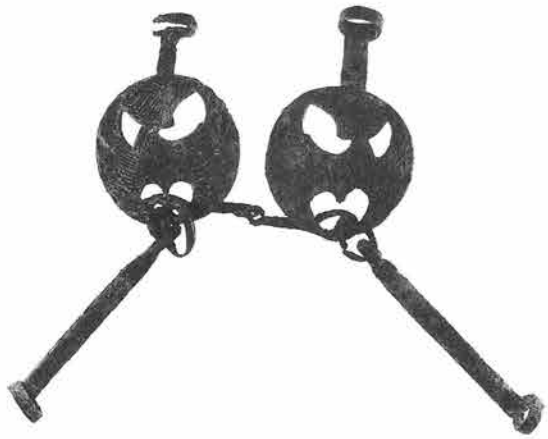


写真2　志羅山轡

表　法住寺殿轡と志羅山轡の部位ごとの法量比較

	法住寺殿轡		志羅山轡	
鏡板				
径/立聞方向	(左)10.10	(右)10.20	(左)9.60	(右)9.55
厚さ/縁辺部	(左)0.30～0.35	(右)0.35～0.40	(左)0.30～0.35	(右)0.35～0.40
〃 /中央部	(左)0.25	(右)0.25	(左)0.20	(右)0.20
立聞				
幅　/中央部	(左)1.40	(右)1.45	(左)1.15	(右)1.65
厚さ/最大	(左)0.45	(右)0.50	(左)　－	(右)0.40
引手				
幅　/中央部	(左)1.35	(右)1.40	(左)1.45	(右)1.40
厚さ/最大	(左)0.60	(右)0.60	(左)0.50	(右)0.50
喰				
幅　/中央部	(左)1.10	(右)1.00	(左)0.60	(右)0.50
厚さ/最大	(左)0.85	(右)0.95	(左)0.55	(右)0.60

※左・右は向って見た場合。単位はcm。0.05cm単位に計測した。－は計測不能箇所。

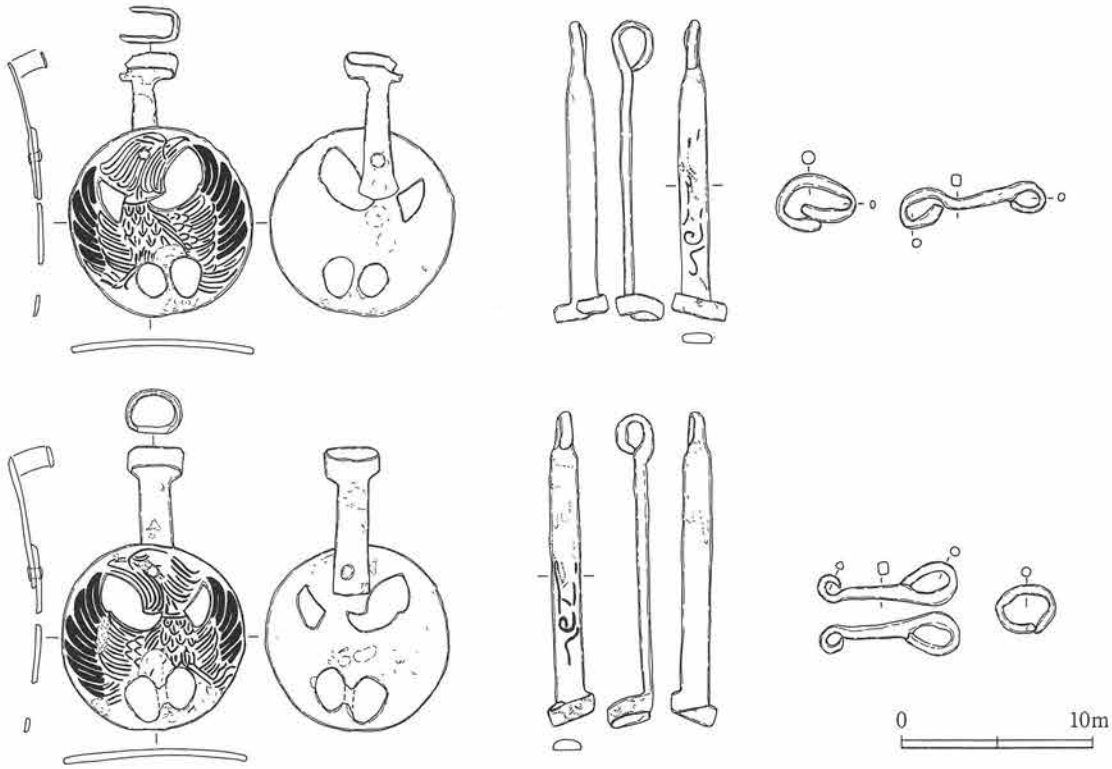


図１　志羅山遺跡の轡

帯びた箇所も見られる。この違いは透かし周縁部においていっそう顕著で、法住寺殿轡の鶴文周辺の透かしの縁がほぼ垂直なのに対し、志羅山轡の鴛鴦文の喉元付近の透かしは、表裏両側からやや斜め方向に透かしの鏨を打ち込んでいて、縁が尖がり気味になるなど形状が安定していない。後者の打ち透かし技法そのものがやや稚拙な印象を与える（写真３）。

鉄を鍛えて棒状にした立聞・引手・喰についても、造作に同様の違いがある。前二者の場合、幅はそれほど差がないが、喰は志羅山轡の方がかなり細い。厚さはいずれの部位も、志羅山轡の方が薄く作っている。断面形は、法住寺殿轡がしっかりとした方形を呈するのに対して、志羅山轡は、引手が蒲鉾形の断面で、立聞・喰に至っては著しく偏平になっている。さらに立聞上端の面繋をかけるための壺（輪）と、引手の先の手綱を通す壺も、鉄板を鍛え延ばして環状に繋ぐ手法は共通するが、法住寺殿轡が厚さ３～４㎜でしっかりとした方形に作り出すのに対し、志羅山轡は厚さが２㎜前後と薄く、形状も楕円形を呈する（写真４）。馬から見て右側の引手壺などはきちんと接合していない（写真５）。喰中央の左右の部分を連結する輪違や、鏡板下端の透かし部で引手と喰を繋ぐ遊金の造作もまた同様の較差が認められる（写真６・７）。

鏡板と立聞の接合部にも違いが認められる。法住寺殿轡は、鏡板に立聞根元をかしめ留める鋲の頭が、偏平ながら半球形に近い形状で飛び出しているのであるが、志羅山轡の場合は鋲頭の出がほとんど認められない（写真８）。外面から観察する限りでは、鏡板本体に浅い窪みがあらかじめ設けられ、鋲頭は叩いてこれに埋め込まれたように見える。

以上のように、志羅山轡は、法住寺殿轡と同様の構造形式を細部まで踏襲しているのであるが、成形の基本となる鍛造技法の点で相対的に拙さが目につくと言わざるを得ない。このことが、各所をやや薄手に作ることとあいまって、全体の量感を減じて見せているのである。それでは、両轡の最大の特色であるところの

写真３　側面方向から見た鏡板（左：法住殿轡　右：志羅山轡）

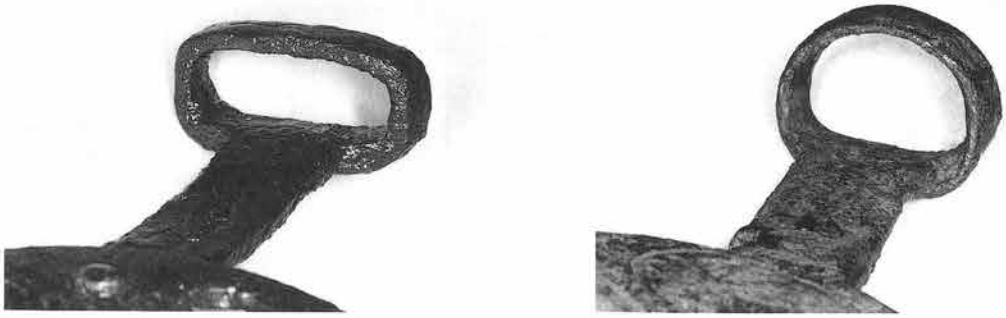


写真４　立聞壺（左：法住寺殿轡　右：志羅山轡）

写真５　志羅山轡の右側引手壺

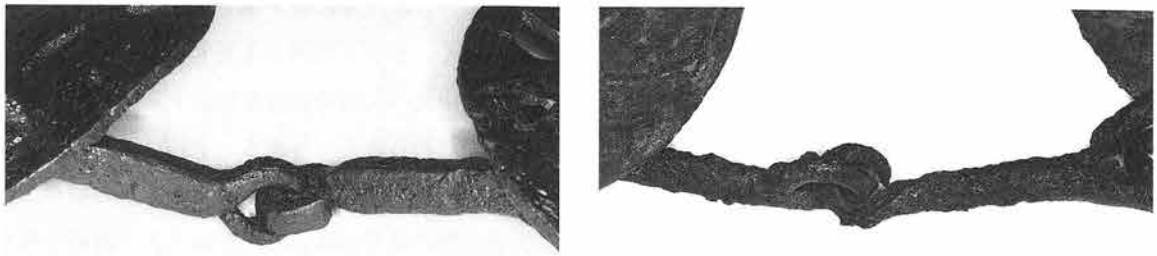


写真６　喰中央の輪違（左：法住寺殿轡　右：志羅山轡）

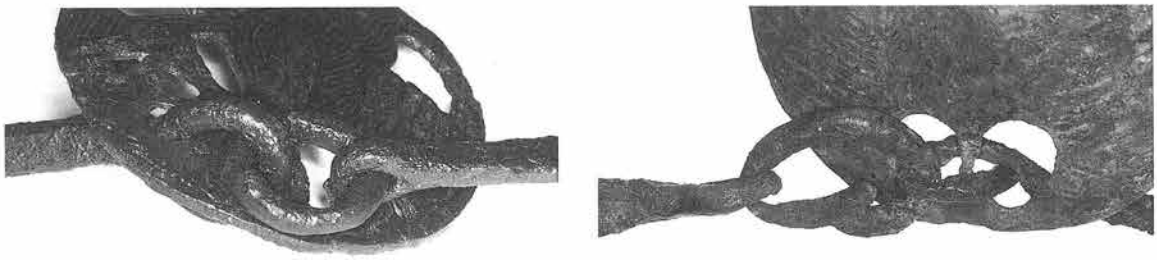


写真７　引手・喰を繋ぐ遊金（左：法住寺殿轡　右：志羅山轡）

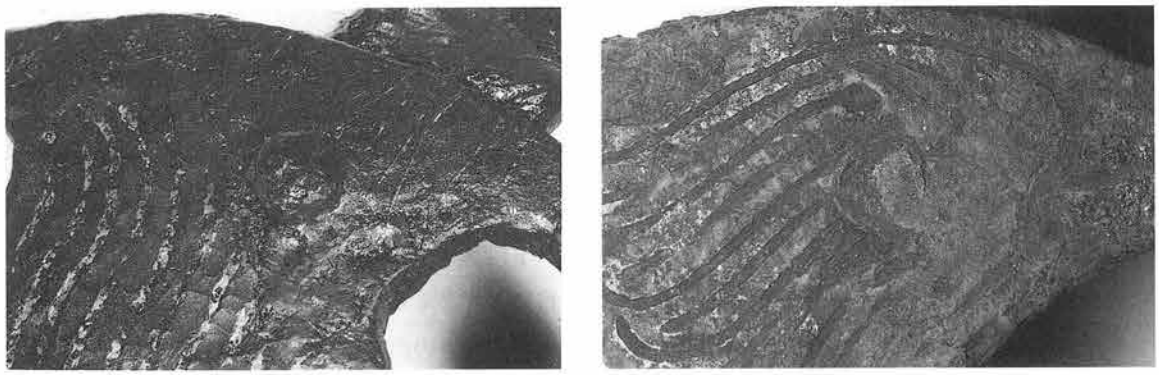


写真８　鏡板・立聞接合部の鋲（左：法住寺殿轡　右：志羅山轡）

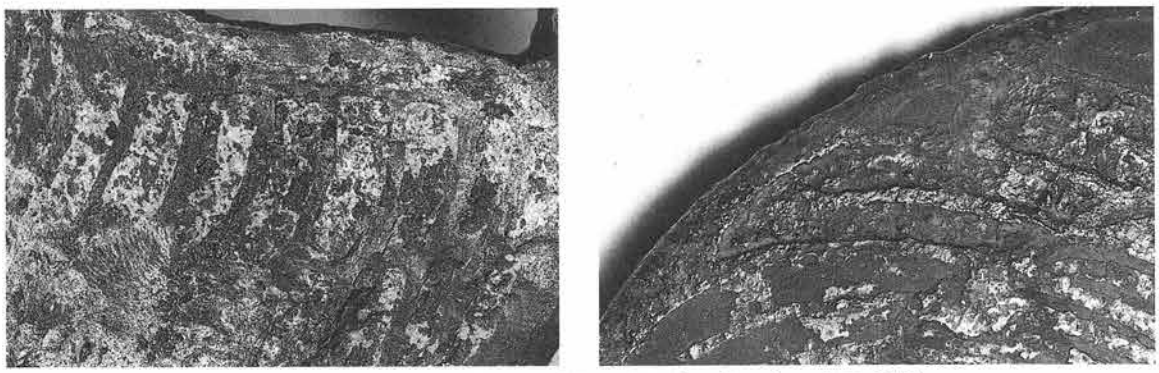


写真９　平象嵌の銅脱落箇所（左：法住寺殿轡　右：志羅山轡）

写真10　線象嵌の銅脱落箇所（左：法住寺殿轡　右：志羅山轡）

象嵌装飾については、何らかの差異を見出せるのであろうか。

（２）轡の鉄地銅象嵌技法

ア、象嵌に伴う鉄地彫り込み技法

法住寺殿轡と志羅山轡の鏡板の鉄地上に施された象嵌は、文様部分を線状に彫り窪めて銅を埋め込む「線象嵌」と、鶴・鴛鴦の羽根部分に見られるように、面的に彫り窪めて表現する「平象嵌」の２種の技法を併用している。冒頭でも述べたが、かかる銅平象嵌技法は遺例じたいが希少で、時期的にも平安時代後期に限定される(5)ことから考えて、構造形式を同じくする両轡がほぼ同時期にきわめて強い関係性のもとに製作されたことは疑いない。

西山要一氏は、法住寺殿跡出土の雲龍文鍬形と鶴文轡の象嵌技法について、理化学機器を用いて詳細に検討した(6)。まず鍬形については、「すなわち、鉄地に断面Ｖ字形の深い溝で文様の輪郭を刻み、内部を浅く削り、別に同大に切り抜いた銅板文様を嵌め込んで固定、象嵌部分を一旦金鍍金したのちに、龍の角・爪・雲気・雲文を銀鍍金」したものと結論づけた。また轡についても、おおむね鍬形と同様の技法とし、とくに第一段階の鉄地彫り込み技法について、鶴文の平象嵌部分断面のＸ線マイクロアナライザー２次電子像に見える鉄分布の形状から、鍬形で指摘した“輪郭部を深くＶ字状に彫り込み、その間を浅く鋤き込む”という手法を写真画像として提示することに成功した（図２－１）。

この西山氏の分析結果を踏まえつつ、あくまで肉眼観察にとどまるものであるが、法住寺殿轡と志羅山轡の象嵌を比較検討した結果、とくに第一段階の技法に関して、両者の間に明確な違いが見出され、また前者の技法についても若干の新知見が得られた。まず法住寺殿轡について、鏡板表面には平象嵌の銅が脱落し下の鉄地が露出した箇所が少なからず観察されるが、西山氏のいう輪郭部の「断面Ｖ字形の深い溝」を探しても、実際に肉眼でそれらしく見えるのは１、２箇所に過ぎない。多くは面全体がおおむね一定の深さで彫り窪められており、その縁は鉄地上面に向って垂直に近い角度で立ち上がっている（写真９左、図２－２）。

確かに、幅広の鋤彫り鏨で直接文様輪郭付近をなめらかに彫り進むのは難しいであろうから、西山氏の言うように鏨で先に線状の縁取りをしたと考える方が無難ではある。ただ「断面Ｖ字形の深い溝」は、文様を縁取った際にたまたま深く彫り込んだ場合にこう見えるのであって、厳密な意味での“技法”と見なすことには無理があろう。むしろ志羅山轡との比較の上で重要な留意点は、平象嵌部分の縁辺がひじょうになめらかな連続線をなしていることである。これは彫金技法でいう「毛彫り」、すなわち先端の尖った鏨で連続的に線彫りすることによって文様を縁取ったことを示しており、この線を目安に文様内部を鋤彫り鏨で幅をもたせて彫り下げたものと考えられる（その鋤彫りは、西山氏のいう浅い彫りではなく、毛彫り線が消えるほどに十分深く、しかも文様外縁ぎりぎりまで鋤取るというのが本来工人の目指すところであった)。かかる毛彫り技法は、線象嵌の銅脱落部分でも明瞭で、直線的かつなめらかに連続した溝の縁に、鏨が地を削り取りながら進んだ痕跡まで観察できる（写真10左)。

１、２　法住寺殿轡
３、４　志羅山轡

図２　平象嵌の断面模式図

それでは、志羅山轡象嵌の彫金技法はどうであろうか。平象嵌部分、線象嵌部分のいずれも法住寺殿轡以上に多くの銅脱落箇所があり、彫金の様子は比較的観察しやすい。平象嵌の縁辺部の各所には縁取りの線が

見られるが、それはほぼ１㎜のピッチで打たれた鏨痕の連続で、その内部を鋤彫りで彫り下げている。この場合も鋤彫りの深さは、縁取り鏨よりも深いところとほぼ同じ深さで縁までフラットに鋤込んでしまうところがある（写真９右、図２－３・４）。一方の線象嵌も全く同様の鏨痕で、溝というよりも微小な楕円形窪みの連続、という状況を呈している（写真10右）。

このような鏨彫りはいわゆる「蹴彫り」の範疇に属する技法で、前述の毛彫りとは全く異なるものである。いずれも線描を目的とする彫金技法だが、加工技術の分類から言えば、毛彫りは素材を削り取っていく切削加工であるのに対して、蹴彫りは鏨を打ち込むことで素材を凹ますだけで、削り屑の出ない塑性加工に含まれる。志羅山轡の鏨痕を拡大観察すると、窪みの縁の所々にわずかな地鉄の盛り上がりが見えるのも、比較的軟らかい地金に蹴彫りを加えた時によく見られる特徴である。ただ銅板などに打たれる蹴彫りは、ほとんどの場合先の尖った鏨によっており、連続する鏨痕の一つ一つは楔形を呈するのが常であるが、志羅山轡の場合はこれと異なり、正楕円形に近い鏨痕が連接して線をなしている。おそらく先のやや丸い鏨を、通常の蹴彫りよりも垂直に近い角度で打ち込んだものと思われ、やや特殊な技法といえる。

以上のように、法住寺殿轡と志羅山轡は、両者を最も特徴づける銅象嵌においても、基本的な技法の相違が見られた。銅板を嵌めて研ぎ仕上げた状況を想定すると、輪郭線の整った法住寺殿轡の方が精緻な印象を与えるものといえようか。なお鏡板以外の銅象嵌について付言すれば、法住寺殿轡の立聞・引手に比較的図様のはっきりとした草花・唐草文が描かれているのに対して、志羅山轡の立聞には象嵌を施さず、引手の象嵌にしても、線彫り技法は鏡板と同一ながら図様がひじょうに不明瞭で、この点でも優劣の差を認めざるを得ないのである。

イ、鍍金仕上げの有無について

西山要一氏は、法住寺殿跡出土の鍬形と轡について、銅象嵌部分の最終着色仕上げである鍍金・鍍銀技法についてもＸ線マイクロアナライザーにより元素分析を行っている(7)。まず雲龍文銅象嵌鍬形のうち「金色」を呈する龍の尻尾付け根部分について、金・銅・鉄を検出し、鉄地の上に象嵌された銅の表面に鍍金をしたものと確認した。興味深いのは「銀色」を呈する雲文部分の分析で、「銅の上に金層があり、金層の上に銀と水銀が重なっている」ことから、銅象嵌の全面を鍍金した後で部分的に鍍銀を行ったものと結論づけた。次に西山氏は、鶴文銅象嵌轡の鶴首上半の「やや白っぽい金色を呈する部分」について分析を行い、銅に重なる金・銀・水銀を検出した。そして「この部分に、銀が相当量含まれかつ水銀も相当量残存することから、当初、金鍍金上に銀鍍金されていた可能性」を示唆した。

西山氏が明らかにしたところの鍍金・鍍銀を重ねて施す技法は、伝統的な金工技法や現代工芸においてもしばしば行われるものである。その意味としては、銅胎に直接鍍銀を施すのは難しく、まず薄く鍍金してから鍍銀を行うと安定した鍍銀面を得られるといわれる(8)。古代・中世の遺品の中にも、仏像光背の鏡板や透彫り金具の地板などに、「白っぽい金色」あるいは「金色っぽい銀色」を呈する事例がしばしばあり、これらは基本的に上のような工程で「銀」もしくは「金・銀の中間色」を目指したものと思われる。

以上のように、かなり手の込んだ着色処理がなされた法住寺殿轡に対して、一方の志羅山轡はいかがであろうか。銅象嵌部分に鍍金・鍍銀面は全く目視できず、赤沼英男氏の分析によっても金・銀・水銀は確認されなかった（本書、赤沼氏報告参照）。すなわち志羅山轡には当初から鍍金・鍍銀は行われていなかった可能性がきわめて高い。さらに言えば、本品が法住寺殿轡と同じ形式のもので、平安後期の鉄地銅象嵌の遺品の大半が鍍金・鍍銀を施していることからみても、志羅山轡の場合は、この種の最終着色仕上げを省略したものと考えざるを得ないのである。

3　平泉金工工房の特質～志羅山轡の意味するもの～

志羅山轡と法住寺殿轡をめぐる大方の関心は、仮に法住寺殿轡を平安京周辺の工房品と想定したときに、志羅山轡が彼の地で製作されたのか、奥州平泉周辺で製作されたのか、という点であろう。前章で行った比較作業の結果、これらの轡は同じ形式であるにもかかわらず、鍛造・象嵌の両技法において相当の懸隔があることが判明し、少なくとも両轡が同じ工房で製作されたものとは見なし難い。また赤沼氏の分析結果によれば、鏡板の鋼の化学組成および非金属介在物組成が、それぞれ柳之御所跡出土銑鉄・鉄滓とほぼ同じであることが指摘されている（本書、赤沼氏報告参照）。

したがって志羅山轡は、当地、平泉で製作された可能性がきわめて高いと言えよう。ちなみに、この轡を出土した志羅山遺跡は、東方の柳之御所、伽羅之御所、無量光院、北方の中尊寺、西方の毛越寺、観自在王院といった御所・寺院群に囲まれ、都市・平泉の中枢にあって、上記諸施設の需要を満たすべく、手工業生産者も居住していたものと思われる。金工品関係でも、これまでに鏡など小型青銅製品を製作した銅細工関連遺跡が見つかっている。鴛鴦文銅象嵌鏡轡についても、66次調査区からほど遠からぬ場所に製作工房があった可能性は十分考えられよう。

以上のように、志羅山轡を平泉工房の製作と認めうるならば、逆にその作行から当地における金工品製作の特質が浮かび上がってこよう。まず第一に、おそらくは平安京周辺工房品と思われる法住寺殿轡と同一形式であるという点。鏡轡という同一の構造で、法量もミリ単位の違いしかない。しかも銅象嵌で鳥文の加飾を行うという点も重要な一致点である。そのような品を平泉工房で製作し得たということは、かかる鏡轡のモデルとなる品が当地にもたらされていたか、少なくともこの鏡轡の形式を細部にわたるまで熟知していた平安京周辺工房の工人が平泉にやって来ていたという状況しか考えられまい。何より文様形に鉄地を彫り窪めて銅板を埋め込むという当時にあってもきわめて特殊な技法は、モデル品の外見観察からだけで施工することはおよそ不可能で、この技術そのものを理解した工人の介在が確実視されるであろう。

なお平安京周辺で、法住寺殿轡のような金工品を製作した工房として最も有力視されるのは、左京八条三坊北半（現在のＪＲ京都駅前の七条通と塩小路通の間）を中心に展開していた七条町である。ここは藤原明衡が11世紀半ばに著した往来物『新猿楽記』で、七条保長金集百成の居住地として登場する。彼は鍛冶・鋳物師ならびに金銀細工を生業とし、武器・武具から日用の品、仏具に至る各種金工品の上手とされ、その中に「鐙、銜」などの馬具も含まれている。もちろん一人の工人がこれほどの多品目を担当したとは思われないが、最近のこの地区の発掘調査で刀装具や鏡、仏具など各種の鋳型が多数出土していて、ここが実際に鋳造・鍛冶・鍍金などの金工工人たちによる高密度な協業活動の展開した、中世ヨーロッパ都市の手工業ギルドにも擬せる同業者集住地区であったことが知られるに至った(9)。法住寺殿轡のように鍛造・彫金・鍍金などの技法が複合的に施された金工品の製作候補地としてはまことにふさわしい。

さて志羅山轡の製作工房を考える際の第二の留意点は、鍛造による本体作り込みにおける技量の較差、象嵌の第一工程である平象嵌文様の輪郭線および線象嵌文様線の鏨彫り技法の不一致、最終着色処理である鍍金・鍍銀工程の省略、などといった技術上の相違である。これらの所見のうち前の二点は、志羅山轡の製作に直接携わったのが、平安京工房（七条町工房か？）ではなく地元の工人であったことを物語っている。すなわち前段で確認したことと合わせると、轡を製作した平泉の金工工房には、平安京工房から来た工人と在地の工人の両者が存在したと考えてほぼ間違いないと思われ、おそらく前者が後者への指導的役割を担ったのであろう。なお上記のうち鍍金・鍍銀の省略について付言すると、平泉でこれらの技法が全く行われなかったとは考えにくい。たんなる「省略」と見る余地もあるが、工房の中に鍍金に熟達した工人が含まれてい

なかった、などという、平泉工房に特有の事情が見え隠れしているようにも思える。

ともあれ、このような工房の編成に奥州藤原氏が直接関わったことは想像に難くない。平泉という都市じたいが藤原氏の政治的な意図のもとに形成され盛衰を遂げたことを考えれば、ここに金工工房を置き、平安京から熟練工人を招聘し、在地工人をも編成して「都ぶり」の品々を製作させたと結論づけても無理はないであろう。そのような平泉金工工房の特質を窺いうる事例はほかにもある。

例えば志羅山遺跡37次調査で出土した鏡鋳型は、別稿(10)で詳論したⅡ類、すなわちスサや礫混じりの土質からなる粗型をベースに、きめの細かい良質の鋳物土である真土を一定の厚みで塗って鋳込み面とする二層構造の鋳型で、前述の平安京左京八条三坊で出土した多量の鏡鋳型と変りがない（図３）(11)。ところがただ一つ、平安京工房の鏡鋳型と異なる点がある。すなわち平安京出土のそれはほぼ例外なく粗型中央に「鳥目」などと後世呼ばれる円孔が見られる。この孔は、円鏡の外形を真土に挽き回すコンパスの軸を設定することと、鏡中央につく鈕（紐通しのつまみ）の高まりの分の窪みを確保するという二つの機能があり、平安京では粗型製作時に棒状の軸木を通し引き抜くことで貫通する孔を設けた。これに対し志羅山遺跡の鋳型は、中央があたかも指で押さえたような凹みだけで上記の二つの機能を果たしており、貫通する孔は見られないのである。この場合も轡と同じように、平安京における鏡製作の基本技術はおそらく招聘された工人により伝えられていて、結果として鏡鋳造に十分な鋳型となっているのであるが、中央孔という一点でのみ、平安京では有りえない手法が発現していて、ここでも在地工人の存在が指摘できるのである。

さらに製品で言えば、柳之御所跡出土の松鶴鏡が留意される（図４）(12)。真土に箆で押し描いた流麗な松や鶴の表現は、平安京工房で製作され全国に流通した松鶴鏡に通有のものである(13)。しかしこの鏡のように松と鶴の組み合わせに楓や蝶のモチーフを混在させる図様は、松鶴鏡としてはきわめて異例である。また鶴をこのようにやや高肉に表現するタイプは、幅２㎜前後で直立する断面長方形の周縁を通例とするのであるが、柳之御所鏡は周縁内側が傾斜をもち断面台形に近く、この点でも通例と異なる。文様も銅質も一見平安京の製品に見えるが、あるいは平泉工房における製作になるかも知れない。

このように眺めてくると、志羅山轡に見た製作の在り方は、平泉における金工工房の特質そのものであったのではないかと思えてくる。そしてそれは、平泉遺跡群で大量に出土する手づくねかわらけの内に平安京から搬入されたものがわずかに見られ、大半のものは在地ロクロ成形かわらけと技法・形態上融合したものであること(14)とも相い通じていて、当地における手工業生産全体の特質であるのかも知れない。もとより

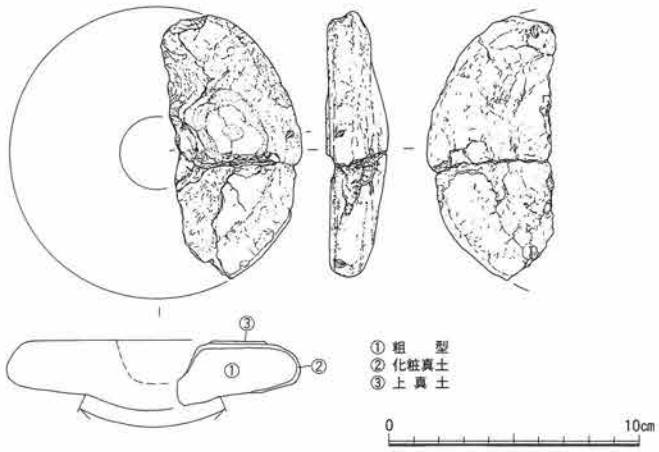


図３　志羅山遺跡出土の鏡鋳型（菅原1995）

図４　柳之御所出土の松鶴鏡（三浦他1994）

数少ない事例からの推量に過ぎず、全体像の最終的な見極めは将来に委ねなければならないが、志羅山遺跡出土の轡がこの問題を探る上できわめて重要な位置を占めていることだけは疑いないであろう。

小稿の執筆にあたって、法住寺殿跡出土轡を所有する木下美術館から写真の掲載許可をいただいた。記して深甚の謝意を表したい。なお同品の全体写真と鏡板の拡大写真については金井杜男氏が撮影し京都国立博物館が管理する原板を使用した。また志羅山遺跡出土轡の写真のうち、全体写真は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター撮影の原板を使用した。それ以外の両轡の部分拡大写真はすべて筆者の撮影によるものである。

注

1）片岡肇・植山茂他『法住寺殿跡』古代学協会　1984

2）西山要一「雲龍文象嵌鍬形の保存処理・材質分析とその製作技法について」、中野政樹「雲龍文鍬形の象嵌技法について」『法住寺殿跡』古代学協会　1984
西山要一「平安時代平象嵌技法の研究」『文化財学報』７集　奈良大学文化財学科　1989

3）1999年４～５月に京都国立博物館で開催した特別展覧会「妙法院と三十三間堂」において、法住寺殿跡出土品（轡・鍬形・大鎧）が所有者木下美術館の御厚意で出陳され、同時期に岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターより小稿執筆のため借用した志羅山遺跡轡と比較検討することができた。

4）轡に「銜」「勒」、喰に「啣」「銜」などの字が当てられるなど、部位名称は必ずしも一様でない。本稿では、片山寛明「和式轡の展開」『日本馬具大鑑　３中世』(吉川弘文館1990）の名称によった。

5）鉄地銅平象嵌技法は、志羅山遺跡・法住寺殿跡出土品以外に、京都府宇治市・平等院阿弥陀堂(鳳凰堂)の扉留め四稜花形金具と格子戸中鴨居受け花先形金具（天喜元年（1053）創建時のもの）、同・許波多神社蔵半舌鐙、奈良市・手向山神社蔵壺鐙、長野市・清水寺蔵鍬形、三重県鳥羽市神島・八代神社蔵鍬形（以上12世紀）、鳥取県大山町・大山寺蔵鉄厨子銘板（承安三年（1173）銘）が挙げられる。

6）前掲注２）西山1989文献

7）前掲注２）西山1989文献

8）長野裕・井尾建二・『金工の着色技法』理工学社1998

9）久保智康「七条町ぎると」（『京都国立博物館だより』104，1994)、同「金属製品の生産と流通～鋳造を中心として～」（『中世・近世の北陸　考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会・桂書房1997）、同「金属器の生産と需要の時代相～地域論の可能性をめぐって～」(『北陸中世の金属器』北陸中世考古学研究会1998)、同『中・近世の鏡』(日本の美術394，至文堂1999）などを参照。

10）久保智康『京都国立博物館蔵　和鏡』京都国立博物館1998、および前掲注９）久保1999文献。

11）菅原計二『志羅山遺跡第31・32・37次発掘調査報告書』平泉町教育委員会1995

12）三浦謙一他『柳之御所跡　一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・31・41次発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

13）久保智康「平安時代後期出土鏡の研究序説」『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史（下)』同朋舎1987

14）八重樫忠郎「出土遺物（１）かわらけ」『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』平泉町教育委員会1995

第13章　自然科学分析

1　志羅山遺跡46次調査におけるトイレ遺構分析

株式会社　古環境研究所

1　はじめに

トイレ遺構等の糞便堆積物は、堆積物中の寄生虫卵密度、花粉組成、種実組成にそれぞれ特異性が認められる。したがって、これらの分析を総合的に行うことによって、対象となる堆積物が糞便であるか否かがわかり、トイレ遺構を示唆することが可能である。また、寄生虫の特異な生活史や食用とされた花粉や種実を復元することによって、それらを排泄した人々の飲食物や食生活の検討を行うことも可能となる。

志羅山遺跡46次調査では、トイレ跡とみられる土坑が検出された。そこで土坑内堆積物について分析を行い、トイレ遺構の検討を行った。

2　資料

分析資料は、12世紀とされる土坑46ＳＫ８（Ａ地区検出）、46ＳＫ26（Ｃ地区検出）中の堆積物２点である。46ＳＫ８は埋土中位の有機質土（１層）であり、種実類が多く含まれている。46ＳＫ26では埋土下半の有機質土（４層）であり、これも種実類が多く含まれている。

3　寄生虫卵分析

（１）方法

寄生虫卵の分離、抽出は金原（1992、1994）を踏襲し、試料に以下の処置を施して行った。

１）サンプルを採集する。
２）脱イオン水を加えて撹拌する。
３）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈殿法を施す。
４）25％フッ化水素酸を加え30分間静置。（２・３度混和）
５）水洗後サンプルを２分する。
６）片方にアセトリシス処理を施す。
７）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
８）検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500ｒｐｍ、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

（２）結果

結果を表１、図１に表す。46ＳＫ８（１層）からは回虫卵、鞭虫卵、日本海裂頭条虫卵、肝吸虫卵が、46ＳＫ26（４層）からは回虫卵、鞭虫卵がそれぞれ検出された。試料（堆積物）１㎤中に算定して、46ＳＫ８（１層）で1,100個、46ＳＫ26（４層）で8,230個の密度を示す。46ＳＫ８（１層）では回虫卵、鞭虫卵、日本海裂頭条虫卵がやや多く、肝吸虫卵は少ない。46ＳＫ26（４層）は回虫卵、鞭虫卵のみであり、他の寄生

虫卵は検出されない。

分類群	（試料0.1cc中）	ＳＫ08	ＳＫ26
学　名	和名	１層	４層
Helminth eggs	寄生虫卵		
Ascaris	回虫卵	43	434
Trichuris	鞭虫卵	44	389
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵	2	
Diphyllothrium nihonkaiense	日本海裂頭条虫卵	21	
Tatal	計	110	823
	（試料１cc中に算定）	1100	8230

表１　志羅山遺跡46次調査における寄生虫卵分析結果

4　花粉分析

（１）方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以下の物理化学の各処理間の水洗は、1500ｒｐｍ、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974，1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表面断層の特徴と退避して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（２）結果

１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉17、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉22、シダ植物胞子２形態の計43である。これらの学名と和名および粒数を表２に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、ウルシ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、

分類群	（試料0.1cc中）	ＳＫ08	ＳＫ26
学　名	和名	1層	4層
Arboreal pollen	樹木花粉		
Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属	8	2
Cryptomeria japonica	スギ	16	6
Alnus	ハンノキ属	2	1
Betula	カバノキ属	1	
Carpinus－Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	3	
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属	14	5
Fagus	ブナ属	2	2
Quercus subgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	15	6
Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	3	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1	
Rhus	ウルシ属	1	
Acer	カエデ属	2	
Aesculus turbinata	トチノキ		3
Vitis	ブドウ属	4	
Tilia	シナノキ属	1	
Oleaceae	モクセイ科		2
Clethra barbinervis	リョウブ	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木･草本花粉		
Rosaceae	バラ科	2	
Leguminosae	マメ科	3	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属		1
Gramineae	イネ科	212	253
Oryza type	イネ属型	13	18
Cyperaceae	カヤツリグサ科	15	2
Aneilema keisak	イボクサ	2	
Monochoria	ミズアオイ属		1
Humulus	カラハナソウ属	90	176
Polygoum sect.Persicaria	タデ属サナエタデ節	1	
Rumex	ギシギシ属	2	
Fagopyrum	ソバ属		7
Chenopodiaceae	アカザ科	3	
Amaranthaceae	ヒユ科	146	966
Caryophyllaceae	ナデシコ科	13	2
Cruciferae	アブラナ科	126	13
Vicia	ソラマメ属	1	
Umbelliferae	セリ科	2	1
Solanaceae	ナス科	2	4
Cucumis	キュウリ属		1
Lactucoideae	タンポポ亜科	5	2
Asteroideae	キク亜科	8	4
Xanthium	オナモミ属	8	2
Artemisia	ヨモギ属	178	59
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	70	4
Trilate type spore	三条溝胞子	9	3
Arboreal pollen	樹木花粉	74	27
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木･草本花粉	5	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	827	1512
Tatal pollen	花粉総数	906	1539
	（試料１ccに算定）	14496	55404
Unknown pollen	未同定花粉	7	1
Fern spore	シダ植物胞子	79	7

表２　志羅山遺跡46次調査における花粉分析結果

シナノキ属、モクセイ科、リョウブ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、カラハナソウ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ソラマメ属、セリ科、ナス科、キュウリ属、タンポポ亜科、キク亜科、オモナミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2）46ＳＫ８（１層）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。イネ科、ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、カラハナソウ属の出現率が高い。樹木花粉は極めて少なくスギ、クリ－シイ属、コナラ属コナラ亜属などが出現する。

3）46ＳＫ26（４層）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。イネ科、ヒユ科、ヨモギ属、カラハナソウ属の出現率が高く、他にソバ属、キュウリ属が出現する。樹木花粉は極めて少ない。

5　種実同定

（１）方法

試料（堆積物）200ccを0.25㎜の篩を用いて水洗選別を行い、その残渣を双眼実体顕微鏡下で観察した。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（２）結果

1）分類群

樹木３、草本16、計19が同定された。学名、和名および粒数を表３に示し、主要な分類群を写真に示す。

以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

ａ．キイチゴ属　Rubus　核　バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。長さ1.7～1.9㎜、幅1.3～1.5㎜。

ｂ．ブドウ属　Vitis　種子　ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のヘソがある。長さ4.2㎜、幅3.8㎜。

ｃマタタビ属　Actinidia　種子　マタタビ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には規則的に並ぶ孔がある。長さ1.7～1.9㎜、幅1.1～1.3㎜。

〔草本〕

ｄ．イネ科　Gramineas　頴

黄褐色で長楕円形を呈す。長さ2.5～3.0㎜、幅0.8～0.9㎜。

ｅ．ホタルイ属　Scirpus　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起

がある。長さ2.0㎜、幅1.8㎜。

f．カヤツリグサ属　Cyperus　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で挟倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。長さ1.2～1.3㎜、幅0.5㎜。

g．カヤツリグサ科　Cyperaceas　果実

黒褐色で倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。長さ2.5㎜、幅1.2㎜。

h．タデ属　Polygonum　果実　タデ科

黒褐色でやや光沢があり、卵形を呈す。断面は三角形である。長さ2.2㎜、幅1.5㎜。

i．アカザ属　Chenopodium　種子　アカザ科

黒色で光沢があり、円形を呈する。中央にくぼんだヘソがあり、ヘソから周縁まで浅い溝がはしる。径1.0～1.1㎜。

j．ヒユ属　Amaranthus　種子　ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。径1.1～1.3㎜。

k．ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、一端がくびれてヘソがある。表面には小突起が蜜に分布する。径0.9㎜。

l．ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属－キジムシロ属　Duchesnea－Fragaria－Potentill　種子　バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。長さ1.1㎜、幅０．７㎜。

m．カタバミ属　Oxalis　種子　カタバミ科

茶褐色で球形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に６～８本の隆起が走る。長さ1.4～1.5㎜、幅1.0～1.1㎜。

n．エゴマ　Perilla frutescens Britton var. japonica Hara　果実　シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径2.1㎜。

分類群		(200cc中)	ＳＫ08	ＳＫ26
学　名	和名	部位	１層	４層
Arbor	樹木			
Rubus	キイチゴ属	核	71	27
Vitis	ブドウ属	種子	1	
Achinidia	マタタビ属	種子	4	
herb	草本			
Gramineae	イネ科	穎		7
Scirpus	ホタルイ属	果実		1
Cyperus	カヤツリグサ属	果実		2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	1
Polygonum	タデ属	果実		1
Chenopodium	アカザ属	種子	5	30
Amaranthus	ヒユ属	種子		127
Cayrophyllaceae	ナデシコ属	種子		1
Duchesne-Fyagaria-Potentilla	ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属-キジムシロ属	種子	1	
Oxalis	カタバミ属	種子	2	
Perilla frutescens Britton var.japonica Hara	エゴマ	果実	1	
Solanum melongena L.	ナス	種子	85	18
Solanaceae	ナス科	種子		1
Sesamum indicum L.	ゴマ	種子	12	3
Cucumis melo L.	ウリ類	種子	16	6
Siegesbeckia pubescens Makino	メナモミ	果実	1	
Tatal	合計		200	225
Unknown	不明			1

表３　志羅山遺跡46次調査における種実同定結果

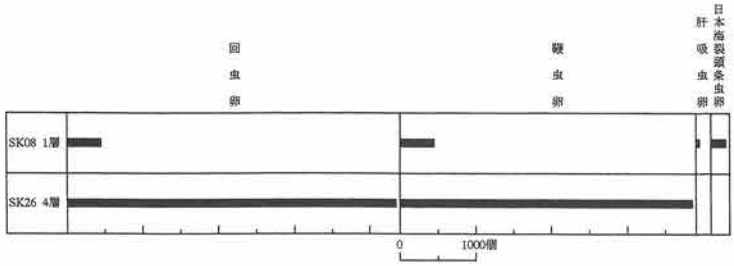


図1　志羅山遺跡46次調査における寄生虫卵組成図（試料1cc中）

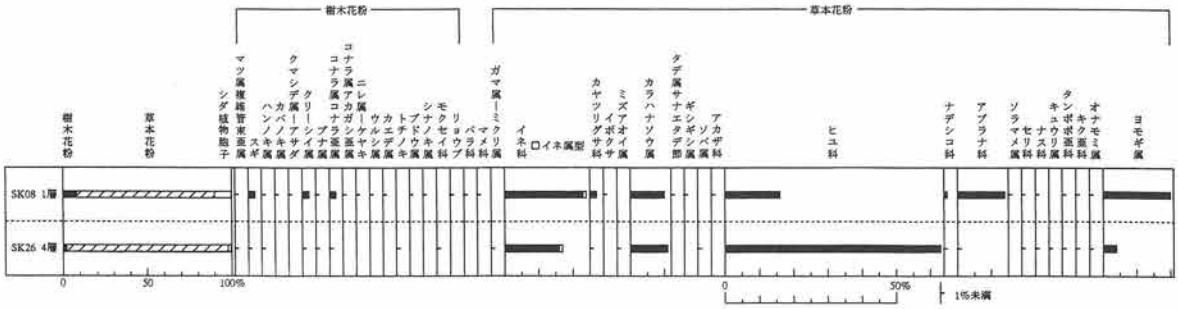


図2　志羅山遺跡46次調査における花粉組成図（花粉総数の基数）

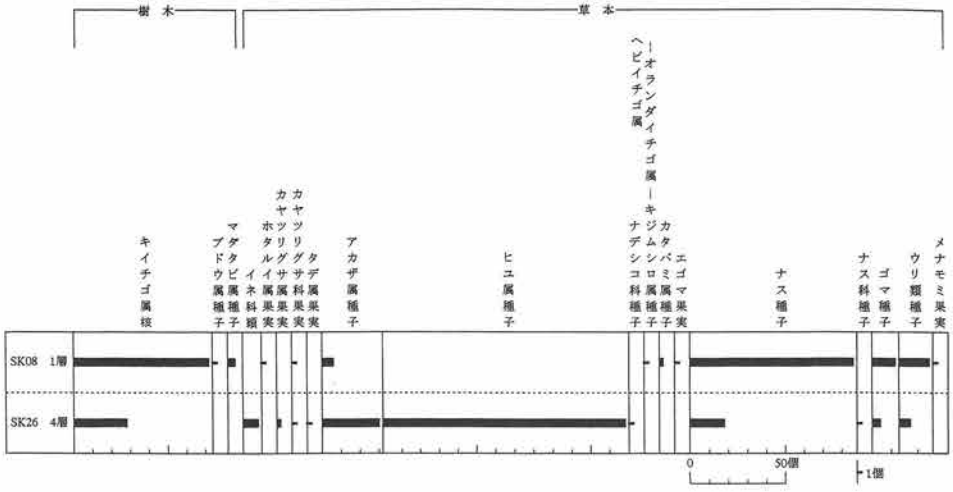


図3　志羅山遺跡46次調査における種実検出図（200cc中）

o．ナス　Solanum melongena　L．　種子　ナス科

茶褐色～黄褐色で円形を呈し、一端にくぼみがある。表面には不規則で微細な網目模様がある。断面は扁平である。径3.1～3.4㎜。径が3.0㎜以上と大きく、現生ナスの種子を酸処理したら網目状構造が一致したので、ナスと同定した。

p．ナス科　Solanaceae　種子

黄褐色で円形を呈す。、表面には網目模様がある。長さ2.1㎜、幅1.6㎜。

q．ゴマ　Sesamum indicum L.　　種子　ゴマ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈し、一端がややとがる。表面には微細な網目模様がある。長さ2.7～2.9㎜。幅1.7～1.8㎜。

r．ウリ類　Cucumis melo L.　　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈す。上端は「ハ」の字状にくぼむ。

46ＳＫ８出土で計測可能な種子が15個体あった。6.1～8.0㎜の中粒種子（マクワウリ・シロウリ型）が10個体、8.0㎜以上の大粒種子（モモルディカメロン型）が５個体であった。最大粒長は9.8㎜、最小粒長は6.8㎜であり、平均粒長は8.0㎜であった。

46ＳＫ26出土は計測可能な種子が２個体であり、6.5㎜と7.7㎜であった。

s．メナモミ　Siegesbeckia pubescens Makino　果実　キク科

黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。長さ2.7㎜。幅1.2㎜。

２）46ＳＫ８（１層）

キイチゴ属、ナスが多くウリ類、ゴマ、マタタビなどが検出される。食用になる植物が多い特徴を示す。

３）46ＳＫ26（４層）

ヒユ属が多く、アカザ属、キイチゴ属、ウリ類、ゴマと続く。ヒユ属とアカザ属が食用になるかどうかは不明だが、他は食用になる植物ばかりである。

6　考察

１）トイレ遺構の可能性

寄生虫卵分析において46ＳＫ８（１層）と46ＳＫ26（４層）とも試料（堆積物）１㎤３中に1,000個以上の寄生虫卵密度を示し、46ＳＫ26（４層）では8,000個以上にも達する。花粉分析において46ＳＫ８（１層）はイネ科、ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、カラハナソウ属が優占し、自然堆積物で多い風媒花の樹木花粉が著しく低率であり、自然堆積物の花粉組成とは異なる。46ＳＫ26（４層）においても、ヒユ属が優占し、イネ科、カラハナソウ属、ヨモギ属が多く、同様に特徴的な花粉組成を示す。種実同定において46ＳＫ８（１層）はキイチゴ属、ナス、ウリ類、ゴマ、マタタビ、ブドウ属の食用になる植物が極めて多い。46ＳＫ26（４層）ではヒユ属が多く、アカザ属、キイチゴ属、ウリ類、ゴマがやや多く、食用になる植物が多い。以上の46ＳＫ８（１層）と46ＳＫ26（４層）から得られた遺体群集の特徴からみて、試料となった堆積物が糞便の累積であると判断される。よって、46ＳＫ８と46ＳＫ26がトイレ遺構である蓋然性は高い。

２）食生活について

46ＳＫ８（１層）は回虫卵、鞭虫卵が多い。回虫、鞭虫は一般的な定住農耕によって蔓延的に感染する。花粉ではアブラナ科、ヨモギ属が多いことから、これらの野菜や野草が重要な感染源であったと考えられる。

他に、日本海裂頭条虫卵が検出されていることからサケ、マスが摂食されていたとみられる。また肝吸虫卵も認められることにより、コイ科の淡水魚の摂食も推定される。草本花粉でイネ科、ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、カラハナソウ属の出現率が高く、アブラナ科、ヨモギ属は前述したように野菜や野草の摂食を反映していると考えられる。イネ科にはイネ属型も含まれるが、イネ、ヒユ、アワのイネ科の穀類は頴の中に花粉が多く残存するため、脱穀した後でも含まれている可能性が高く、おそらくそれが反映したのであろう。ヒユ属は花序が薬用にされた可能性がある。カラハナソウ属はカナムグラの可能性が高く、北東日本の改変地に多い人里雑草であり、周辺に繁茂していたものが反映された可能性が高い。また、ヨモギ属についても同様の可能性がある。なお、カラハナソウ属も花序を薬用や香辛料に用いられた可能性が残される。種実ではキイチゴ属、マタタビの木本とナス、ウリ類、ゴマの作物が食べられていたようである。

46ＳＫ26（４層）では回虫卵、鞭虫卵のみであり、魚類の摂食が認められない。ヒユ科の花粉が多く、ヒユ属の種子も多く、ヒユ属が多く摂食されている。これは薬用とも考えられるが、ヒユ科ヒユ属のヒユは葉が野菜としても食べられ、植物全体を野菜として用いられた可能性がある。他に、花粉からはイネ科から穀類の摂食がが示唆され、ソバ（ソバ属）が食べられていたことが推定される。ヨモギ属とカラハナソウ属は46ＳＫ８（１層）と同様に食べられたか、周囲に雑草として多く生育していたものであったと考えられる。種実ではキイチゴ属の木本、ウリ類、ゴマの作物が食べられていたと推定される。

３）食生活の相違について

46ＳＫ８と46ＳＫ26では寄生虫卵の構成に大きな相違がある。46ＳＫ８では日本海裂頭条虫卵と肝吸虫卵が検出されるのに対し、46ＳＫ26からはまったく検出されない。つまり、46ＳＫ26の堆積物には魚類が摂食された痕跡が認められないということである。また花粉組成も異なり、両者では食生活が異なることが考えられる。僧坊である石川県鹿島町の大宮坊跡の厠跡（金原・金原1995）では同様の魚類などの肉食を行わない食生活が示唆されており、46ＳＫ26が同じ性格をもつ可能性もある。ただし、分析データーがそれぞれの遺構の食生活全体を反映していないことも考えられ、また、淡水魚以外の海水魚の摂食も考えられる。

参考文献

Peter JWarnock and Karl J.Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science,19, ｐ．231－245

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，Ｐ．14－15

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.９－55金原正明（1994）便所堆積物からさぐる古代人の食生活．助成研究の報告４，味の素食の文化センター，p.35－48

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82－110

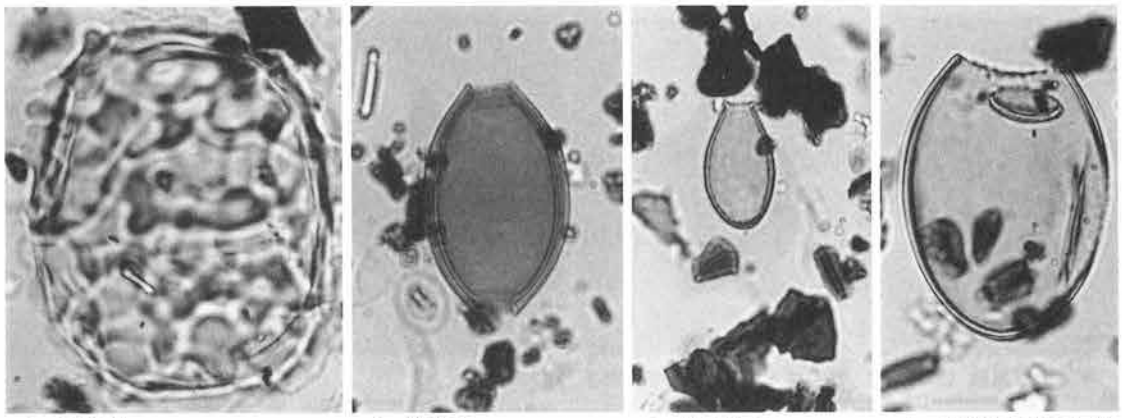
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60ｐ．

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第13集，91ｐ．

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187－193.

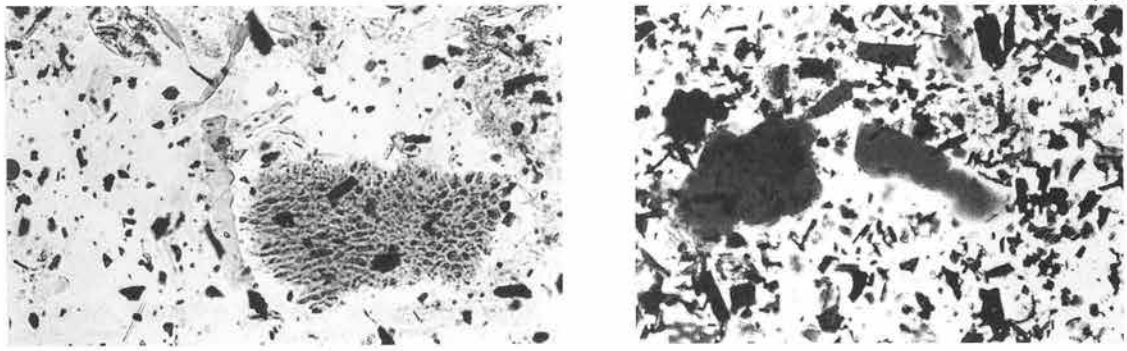
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21－30

金原正明・金原正子（1995）大宮坊（厠跡）における自然科学分析．史跡石動山環境整備事業報告書Ⅱ，石川県鹿島町教育委員会，p.51－62.



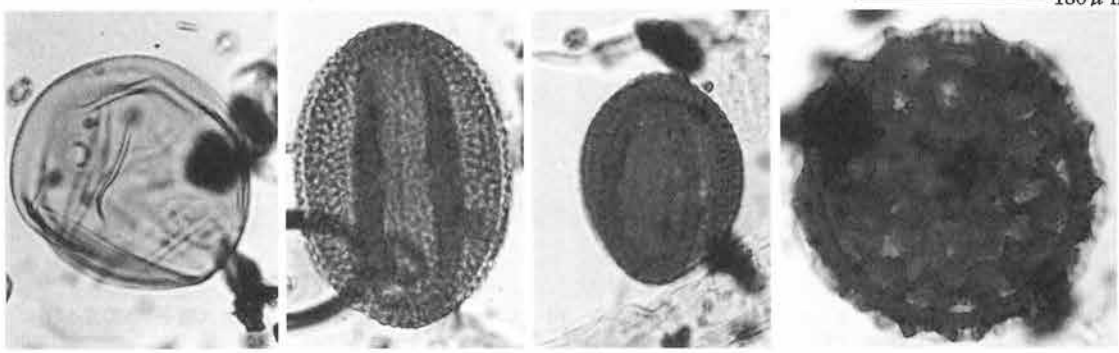
1　回虫卵　　2　鞭虫卵　　3　肝吸虫卵　　4　日本海裂頭条虫卵

45 μ m

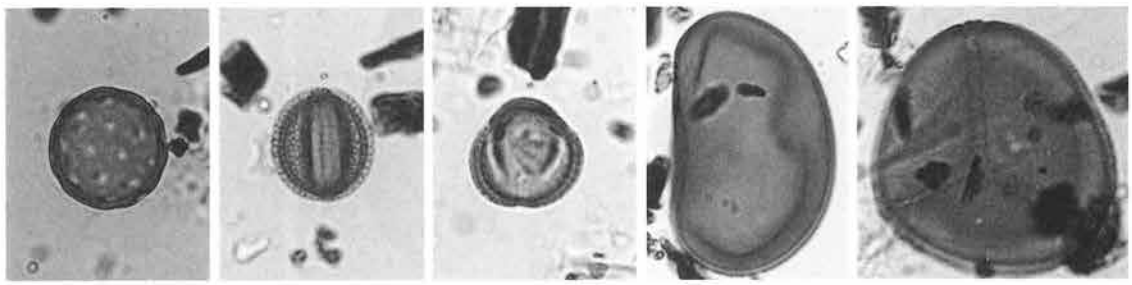


5　消化残渣　　6　消化残渣

180 μ m



7　イネ　　8　シバ属　　9　ソバ属　　10　タデ属サナエタデ節

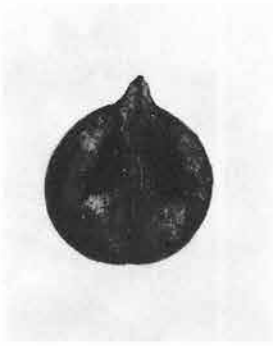


11　アカザ科-ヒユ科　12　アブラナ科　　13　ヨモギ属　　14シダ植物単条溝胞子　15　シダ植物三条溝胞子

45 μ m

志羅山46次寄生虫卵・花粉・胞子遺体

1　キイチゴ属核（SK26-4層）　0.5mm



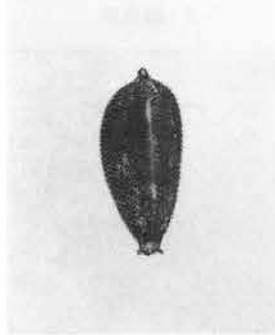
2a　ブドウ属種子（SK08-1層）

2b　同左　1mm

3　マタタビ種子（SK08-1層）　0.5mm

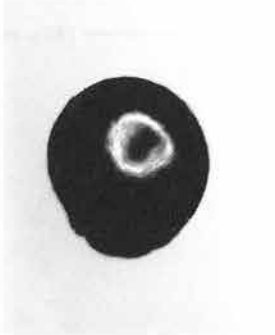
4　イネ科穎（SK26-4層）　0.5mm

5　ホタルイ属果実（SK26-4層）　0.5mm



6　カヤツリグサ科果実（SK26-4層）　0.5mm

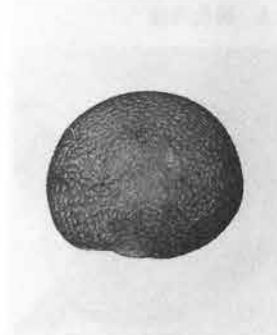
7　アカザ属種子（SK26-4層）　0.2mm



8　ヒユ属種子（SK26-4層）　0.2mm

9　カタバミ属種子（SK08-1層）　0.5mm

10　エゴマ果実（SK08-1層）　0.5mm



11　ナス種子（SK08-1層）　1mm

12　ゴマ種子（SK08-1層）　0.5mm

13　ゴマ種子（同左）　0.5mm

14　ウリ類種子（SK26-4層）　1mm

15　メナモミ果実（SK08-1層）　0.5mm

志羅山遺跡第46次調査出土種実

2　志羅山遺跡第66次・第74次調査出土材の樹種

高橋　利彦（木工舎「ゆい」）

1．試　料

試料は135点で、池跡（66－1号池・66－2号池）から検出された笹塔婆や形代などの祭祀具・椀や皿・箸・曲物・下駄などの木製品・加工材103点、トイレ状土坑（74ＳＫ12）から検出された「チュウ木」30点、井戸跡（74ＳＥ3）から検出された木製品2点である（表1参照）。試料の大半は平安時代末（12世紀）のものとされているが、66－2号池から出土した9点は13世紀後半～14世紀前半のものとされる。

2．方　法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum　Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1～4）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3．結　果

試料の中には確実な同定ができず類似種としたものもあったが、以下の11分類群（ここでは科・亜科・属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ」(佐竹ほか　1989）にしたがい、一般的性質などについては「木の事典　第1巻～第17巻」(平井　1979～1982）も参考にした。（　）のついた試料番号は類似種としたものを示している。

・スギ（*Cryptomeria japonica*）　スギ科　Ｎｏ．2501、2502、2503、2504、2505、2510、2519、2521、2525、3131、3132、3133、3136、3138、3140、3143、3144、3146、3148、3149、3151、3152、3154、3155、3158、3159、3163、3164、3166、3167、3168、3169、3170、3171、3172、3176、3178、3189、3190、（3193）、3198、3199、3200、3204、3205、3206、3217、3218、3219、3220、3221、3222、3223，3224、3225、3226、3227、3228、3229、3230、3231、3232、3233、3234、4010、4011、4012ｂ、4013

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。Ｎｏ．3193は切片が1年に満たないため類似種としたがほぼ確実と思う。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属の一種（*Chamaecyparis* sp.）　ヒノキ科　Ｎｏ．2573、3134、（3137）、（3141）、3150、3153、（3156）、（3157）、（3160）、3162、（3165）、（3173）、3175、3185、3187、3191、3194、3201、4012ａ

早材部から晩材部への移行はやや緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型

（Cupressoid）で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。Ｎｏ．3137・3141・3157・3160・3165・3173は放射柔細胞中に樹脂が詰まっているうえに細胞壁の劣化が進んでいて分野壁孔が十分観察できない。Ｎｏ．3156は切片が１年に満たない。

ヒノキ属にはヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）とサワラ（*C. pisifera*）の２種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第１位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にするほか各種の用途がある。

・アスナロ（*Thujopsis dolabrata*）　ヒノキ科　Ｎｏ．2506、2507、2508、2509、2511、2512、2513、2514、2515、2516，2517、2518、2520、2522、2523、2524、2526，2527、2528、2529、2530、2572、3139、（3142）、3145、3147、（3161）、3124、（3177）、3195、4015

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔は小型のヒノキ型～スギ型で１～６個。放射組織は単列、１～５（10）細胞高。Ｎｏ．3142・3161・3177は樹脂と細胞壁の劣化で分野壁孔が十分観察できなかった。

アスナロは本州・四国・九州に分布する日本特産の常緑高木で、時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata* var. *hondai*）があるが、解剖学的には区別できない。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ヒノキ科の一種（Cupressaceae sp.）　No. 3135

上記ヒノキ属やアスナロに似るが、試料の状態が悪く、良好な切片を作製することができず確定できなかった。写真図版は作製していない。

・ブナ属の一種（*Fagus* sp.）　ブナ科　Ｎｏ．4008、4009

散孔材で管孔は単独または放射方向に２～３個が複合、横断面では多角形、管壁はやや薄く、分布密度は高い。道管は単穿孔および段（bar）数が10前後の段階穿孔をもつ。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列・数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状および散在状。年輪界はやや明瞭。

ブナ属にはブナ（*Fagus crenate*）とイヌブナ（*F. japonica*）の２種がある。ブナは北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していた。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.）　ブナ科　Ｎｏ．3192、3202

環孔材で、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は同囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（いわゆるドングリ）が１年目に熟するグループで、カシワ（*Quercus dentata*）・ミズナラ（*Q. crispula*）・コナラ（*Q. serrata*）・ナラガシワ（*Q. aliena*）といくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。

・クリ（*Castanea crenata*）　ブナ科　Ｎｏ．3196、3197、3203

環孔材で孔圏部は１～多列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および２～３個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単（～２）列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椙木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・ケヤキ（*Zelkove serrata*）　ニレ科　Ｎｏ．3181、3182、3183、3184、3243

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の文様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～60細胞高。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材などの各種の用途が知られ、国産広葉樹の中で最良のものの一つに上げられる。

・イスノキ（*Distylium racemosum*）　マンサク科　Ｎｏ．3188

散孔材で、ほとんど単独、横断面では多角形。道管は階段穿孔をもち、段数は10前後。放射組織は異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～10細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状で目だつ。年輪界は不明瞭。

イスノキは本州（関東南部以西）・四国・九州・琉球の常緑樹林内に生育する常緑高木である。イスノキ属には他に小笠原に分布するシマイスノキ（*D. liepidotum*）がある。材は重硬で加工困難、強度・耐朽性は大きい。家具・器具・建築材として用いられるほか、櫛としてはツゲに次ぐ良材とされている。

・ハリギリ（*Kalopanax pictus*）　ウコギ科　Ｎｏ．4014

表1　志羅山遺跡第66次・第74次調査出土材の樹種

試料番号	検出遺構	用　途	種　　名
2501	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2502	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2503	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2404	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2505	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2506	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2507	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2508	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2509	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2510	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2511	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2512	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2513	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2514	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2515	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2516	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2517	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2518	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2519	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2520	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2521	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2522	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2523	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2524	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2525	74ＳＫ12 5層	チュウ木	スギ
2526	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2527	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2528	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2529	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2530	74ＳＫ12 5層	チュウ木	アスナロ
2572	74ＳＥ3 埋土	曲物側板？	アスナロ
2573	74ＳＥ3 埋土	不明(漆塗)	ヒノキ属の一種
3131	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3132	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3133	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3134	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属の一種
3135	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ科の一種
3136	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3137	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3138	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3139	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ
3140	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3141	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3142	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ類似種
3143	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3144	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3145	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ
3146	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3147	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ
3148	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3149	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3150	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属の一種
3151	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3152	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3153	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属の一種
3154	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3155	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3156	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3157	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3158	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3159	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3160	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3161	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ類似種
3162	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属の一種
3163	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3164	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3165	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3166	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3167	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3168	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ

試料番号	検出遺構	用　途	種　　名
3169	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3170	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3171	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3172	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3173	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属類似種
3174	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ
3175	66-1号池 5層	笹塔婆	ヒノキ属の一種
3176	66-1号池 5層	笹塔婆	スギ
3177	66-1号池 5層	笹塔婆	アスナロ類似種
3178	66-1号池 5層	墨書棒状品	スギ
3181	66-1号池 4層	漆紙入り皿	ケヤキ
3182	66-1号池 3層	皿	ケヤキ
3183	66-1号池 4層	椀	ケヤキ
3184	66-1号池 4層	底部	ケヤキ
3185	66-1号池 3層	漆塗板状品	ヒノキ属の一種
3186	66-1号池 5層	鳴り鏑？	不明（非木材）
3187	66-1号池 4層	不明漆器	ヒノキ属の一種
3188	66-1号池 5層	櫛	イスノキ
3189	66-1号池 4層	形代？	スギ
3190	66-1号池 5層	形代	スギ
3191	66-1号池 5層	形代？	ヒノキ属の一種
3192	66-1号池 5層	陽物	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
3193	66-1号池 5層	形代	スギ類似種
3194	66-1号池 4層	刀子柄	ヒノキ属の一種
3195	66-1号池 5層	刀子柄	アスナロ
3196	66-1号池 5層	連歯下駄	クリ
3197	66-1号池 5層	連歯下駄	クリ
3198	66-1号池 5層	笹塔婆状品	スギ
3199	66-1号池 5層	ものさし	スギ
3200	66-1号池 3層	曲物底板	スギ
3201	66-1号池 3層	蓋／底板	ヒノキ属の一種
3202	66-1号池 3層	不明加工材	コナラ亜属コナラ亜属コナラ節の一種
3203	66-1号池 5層	不明加工材	クリ
3204	66-1号池 5層	不明加工材	スギ
3205	66-1号池 5層	不明加工材	スギ
3206	66-1号池 3層	不明加工材	スギ
3217	66-1号池 5層	箸	スギ
3218	66-1号池 4層	箸	スギ
3219	66-1号池 5層	箸	スギ
3220	66-1号池 3層	箸	スギ
3221	66-1号池 5層	箸	スギ
3222	66-1号池 5層	箸	スギ
3223	66-1号池 5層	箸	スギ
3224	66-1号池 5層	箸	スギ
3225	66-1号池 4層	箸	スギ
3226	66-1号池 5層	箸	スギ
3227	66-1号池 5層	箸	スギ
3228	66-1号池 5層	箸	スギ
3229	66-1号池 5層	箸	スギ
3230	66-1号池 4層	箸	スギ
3231	66-1号池 5層	箸	スギ
3232	66-1号池 5層	箸	スギ
3233	66-1号池 5層	箸	スギ
3234	66-1号池 5層	箸	スギ
3243	66-1号池 3層	漆器	ケヤキ
4008	66-2号池	皿？	ブナ属の一種
4009	66-2号池	椀	ブナ属の一種
4010	66-2号池	蓋／底板	スギ
4011	66-2号池	蓋？	スギ
4012 a	66-2号池	曲物側板	ヒノキ属の一種
4012 b	66-2号池	同上底板	スギ
4013	66-2号池	笹塔婆	スギ
4014	66-2号池	椀	ハリギリ
4015	66-2号池	笹塔婆状品	アスナロ
4016	66-2号池	ザル	イネ科タケ亜科の一種

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の文様をなす。大道管は横断面では楕円形、ほぼ単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ（～Ⅱ）型、１～８細胞幅、１～40細胞高で時に鞘状の細胞が認められる。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ハリギリ（センノキ）は本州から九州の山地林内に自生する落葉高木である。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、耐朽性はあまり高くない。家具材のほか建築内装・器具・機械・彫刻材など各種の用途が知られる。

・イネ科タケ亜科の一種（Gramineae subfam. Bambusoideae sp.）　Ｎｏ．4016

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科（タケ・ササ類）には多数の種が含まれるが、解剖学的には区別できない。

Ｎｏ．3186は鳴り鏑か？とされていたものであるが、材ではなかった。このため種類は明らかにできなかった。

以上の同定結果を検出遺構や推定されている用途とともに一覧表で示す（表１）。

４．考　察

今回同定対象とした試料を通覧すると、スギが半数（68点）を、（変種ヒバを含む広義の）アスナロ（類似種を含む、以下同様）(31点）とヒノキ属（類似種を含む、以下同様）(19点）がそれぞれ２割程を占め、この他の分類群ではケヤキが５点、クリが３点認められた以外はいずれも１または２点にとどまっている（表２）。これは推定されている用途のほとんどが笹塔婆や「チュウ木」・箸など、薄板やその加工品とみられるもので占められているためで、割裂性に優れ加工のしやすいスギやヒノキ属・アスナロが選ばれたものであろう。この点は柳之御所跡出土試料で得られている傾向（能城　1995、高橋　1995）と類似するものである。

笹塔婆48点の用材は過半数をスギ（28点）が占め、ヒノキ属（11点）、アスナロ（８点）、このどちらかと思われるヒノキ科（１点）のいずれも針葉樹であった。また笹塔婆状木製品とされている２点もスギとヒノキ属に同定された。これらはいずれも厚さ２㎜前後の薄板を切削加工したもので、加工性に優れる材質が選択理由となったものと思う。平泉地域でこれほど多数の笹塔婆が検出・検討された例はこれまでないが、スギの多用は隣接する柳之御所跡出土試料でも認められ（高橋　前出、能城　前出）、当時の平泉地区では入手しやすい樹種でもあったものと思う。

笹塔婆ほど薄くはないが、形代（ただしＮｏ．3192を除く）・曲物・蓋または底板などの薄板にもスギとヒノキ属が用いられており、同じく加工性を選択理由にしているものと思う。

「チュウ木」は30点が検討され、アスナロ（21点）とスギ（９点）に同定された。７対３でアスナロが多く、割裂性に富む針葉樹が多用されている点では一致するもののスギが89％を占めている柳之御所出土試料（能城　前出）とは異なった組成を示している。

近代的な動力製材が行われるまでは、一枚の板を得るために費やした労力は多大なものであり、そうして得られた板材は、材料の入手しやすさとは無関係に貴重なものであった。そのため、一度製材・加工して用いた材料を二次・三次加工したり、他の用途に転用することはごく普通に行われていたはずである[1)]。そう

表２　志羅山遺跡第66次・第74次調査出土材の主な用途別樹種構成

？のついたものも各用途に含めた

分類群／用途	笹塔婆	チュウ木	箸	椀・皿	形代	蓋／底	漆器	曲物	下駄	その他	合計
スギ	28	9	18		3*	4				6	68
ヒノキ属	11*				1	1	1	1		4	19
アスナロ	8*	21						1		1	31
ヒノキ科	1										1
ブナ属				2							2
コナラ節					1					1	2
クリ									2	1	3
ケヤキ				3			1			1	5
イスノキ										1	1
ハリギリ				1							1
タケ亜科										1	1
合計	48	30	18	6	5	5	2	2	2	16	134

*：類似種を含む

した再利用・転用の中でも最終的な利用の形態が、燃材と「チュウ木」であろう。他の用途のために加工された痕跡（Ｎｏ．2501～2505など）の有無にかかわらず、「チュウ木」への転用・再加工が行われていた可能性は高いと考えるべきであろう[2)]。

今回の試料は幅１cm前後・厚さ数mmの材片であり、これを薄板を転用・再加工するのではなく板材から作り出すとすれば、厚さ１cm程度の板材を数mm幅で小割にすることになる。例えば片手で持てる程度の幅（10～15cm）の板１枚からは、数10本の「チュウ木」が作れるはずである。したがって今回対象とした試料はもちろん、柳之御所跡試料でも元の板材の数で見ればそれほど多くはない可能性もあり、両者の組成の違いは元の材料の大きさ（板幅）を反映しているのかも知れない。

一方、「チュウ木」は一定数量を常備しておかなければならなかったであろうから、他用途材の転用・再利用だけではまかないきれなかったことも考えられる。原木から「チュウ木」用の木取りが行われた場合には、他の用途にも多用されていることから当時入手しやすいかったと思えるスギが多く見だされることになるのかも知れない。

ただ、「トイレ状」土坑が認識されるようになったのは最近のことで、「チュウ木」の樹種が検討された例はまだ少ない。今後とも注目していきたいと考えている。

箸は対象とした18点全てがスギ製であった。柳之御所跡試料ではスギが45％を占め最多ではあるものの、アスナロやヒノキも多く（能城　前出）、その組成はやや異なっている。

ところで、試料の中で完形品とみられるものの大半（No. 3217、3223、3228、3233など）は、中央部が最も太く、両端に向かって細くなる「両口箸」である。「両口箸」には“神人共食”の意味があり、素木（しらき）[3)]のもの（主としてヤナギ製であるがスギ・ヒノキの白太[4)]も用いられる）は「晴れの箸」として、原則として使い捨てにされる（一色　1993）という。試料の加工は現在のものからみるとかなり粗い印象を受けるが、素木の両口箸であることと、多数の笹塔婆が出土した66－１号池跡遺構から検出されていることから、祭祀に用いられたものかもしれない。箸の製作も、「チュウ木」と同様に薄板を小割にした材料を削

るのが効率的で、かつまとまった量を一度に作ることもできる。祭祀に備えて量産したとすれば、全てがスギであったことも納得できる。

椀や皿とされているものは6点検討され、ケヤキ（3点）・ブナ属（2点）・ハリギリに同定された。ケヤキとブナ属製の椀・皿（漆器）は柳之御所跡試料にも認められるが、ハリギリの報告はない（高橋　前出、能城　前出）。いずれも、現在でも漆器木地として用いられている樹種である。

下駄は2点とも連歯下駄であるが、ともにクリ製であった。柳之御所試料ではケヤキを筆頭にいくつかの種が認められているが、クリも用いられている（高橋　前出、能城　前出）。また、志羅山遺跡第14次調査でも12世紀後半のものとされるクリとケヤキ製の下駄4点が認められている。

櫛（Ｎｏ．3188）も柳之御所跡試料と同様にイスノキ製であった。これは製品が移入されたものであろう。

＜注＞

1）同様の視点で、「（中世の桶の発掘品は小型のタイプに限られているが）鎌倉後期以降の図像資料、室町期の文献資料から推定すると、高さ二尺以上の桶が使用されているはずであるが、これらの実態は発掘資料として目にすることは今後も期待できない。その理由は大型の桶は使用不可能になったとしても、その原型をとどめて投棄されることはないということである。仮に側板や底板（ママ）がリサイクル可能であるならば、削り直して小型の桶用材に使用されたことであろう。（略）良質の材量は通常限界まで使用され、最後は薪としてその利用価値を閉じるのである（石村　1997）」とする指摘もある。

2）ただし、折敷底板と使用樹種が似ていることが転用のあらわれとする議論（能城　前出）は拙速にすぎるように思う。

3）原典には白木と表記され、塗り箸に対して白木箸とあることから無塗装のものを指しているが、木工関係では時にクリアー（透明）塗装を施したものを白木仕上げと呼ぶ場合があり、混乱を招くことがある。このため本稿では素木の表記を用いている。

4）辺材とも呼び、樹皮に近い部分を指す。樹心に近い部分（心材、赤身とも呼ぶ）が着色していることが多いのに対して淡色であるためそう呼ばれる。

引用文献

平井信二　1979～1982　「木の事典　第1巻～第17巻」、かなえ書房

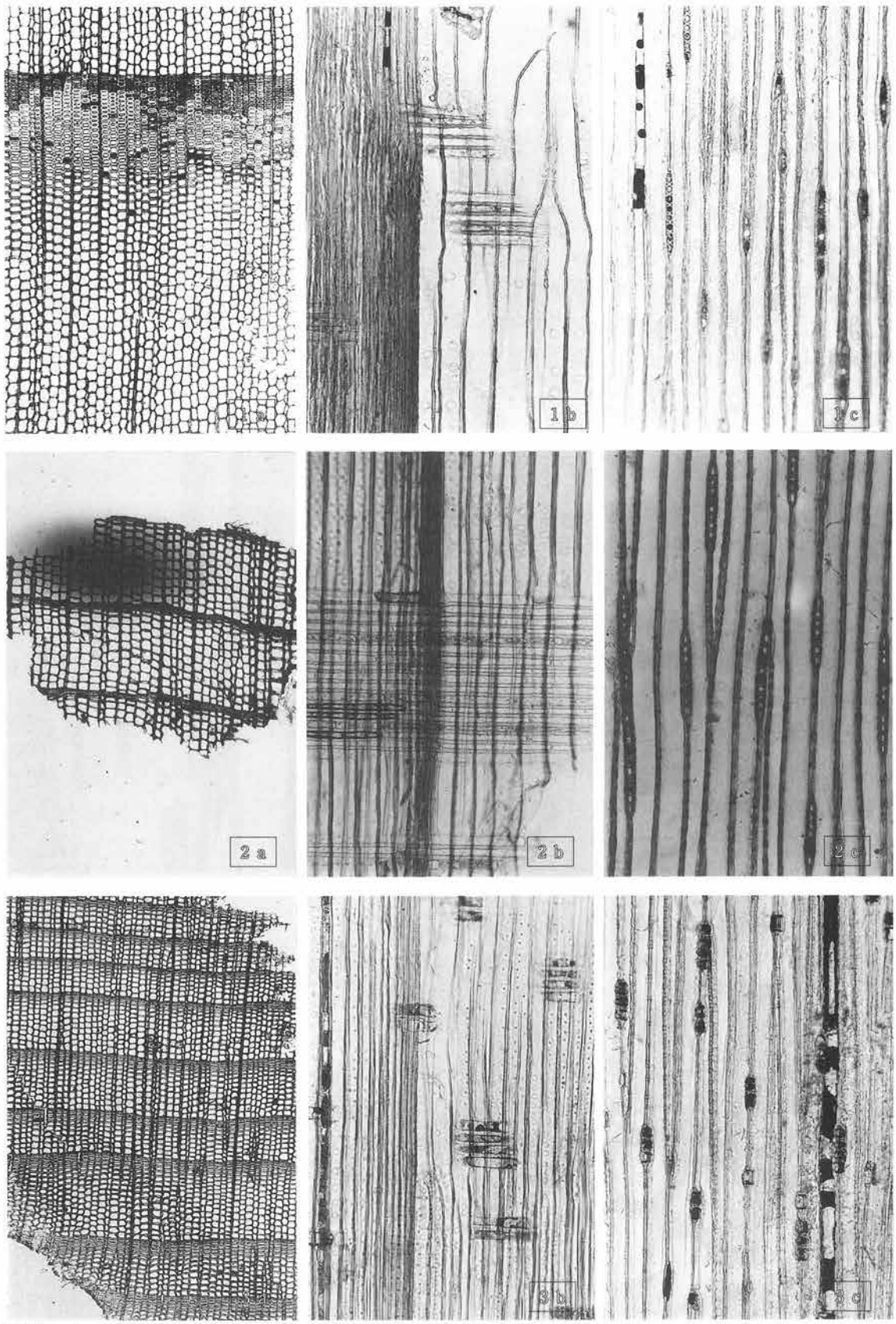
石村真一　1997　「ものと人間の文化史82　桶・樽　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、法政大学出版局、367・366・258ｐｐ．

一色八郎　1993　「箸の文化史（改訂版）」、御茶の水書房、237ｐｐ．

能城修一　1995　柳之御所跡から出土した木製品の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集　柳之御所跡　一関遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査《分冊1　本文・図版》」、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、433－456.

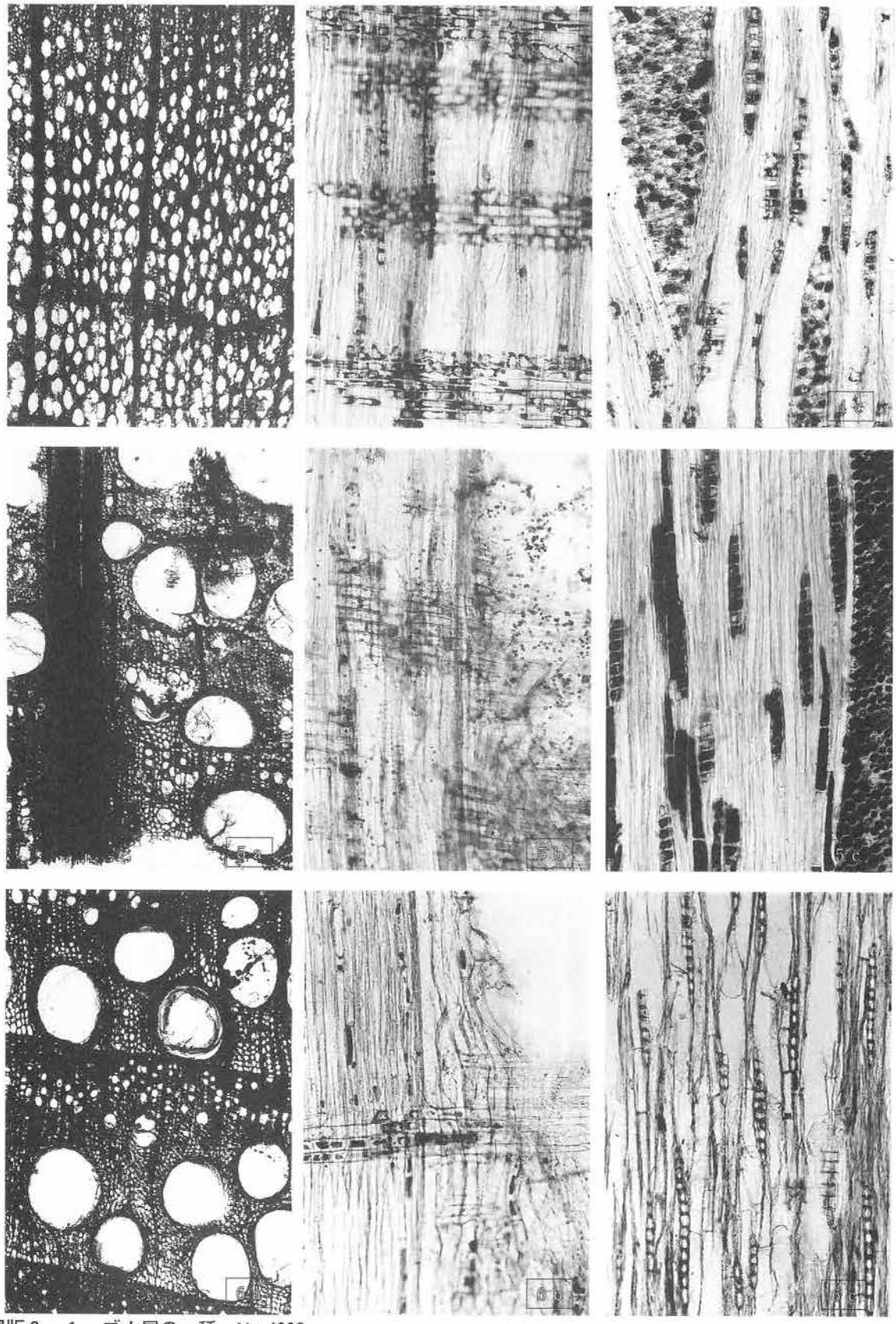
佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・冨成忠夫（編）　1989　「日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ」、平凡社、321・305ｐｐ．

高橋利彦　1995　柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集　柳之御所跡　一関遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査《分冊1　本文・図版》」、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、423－432.



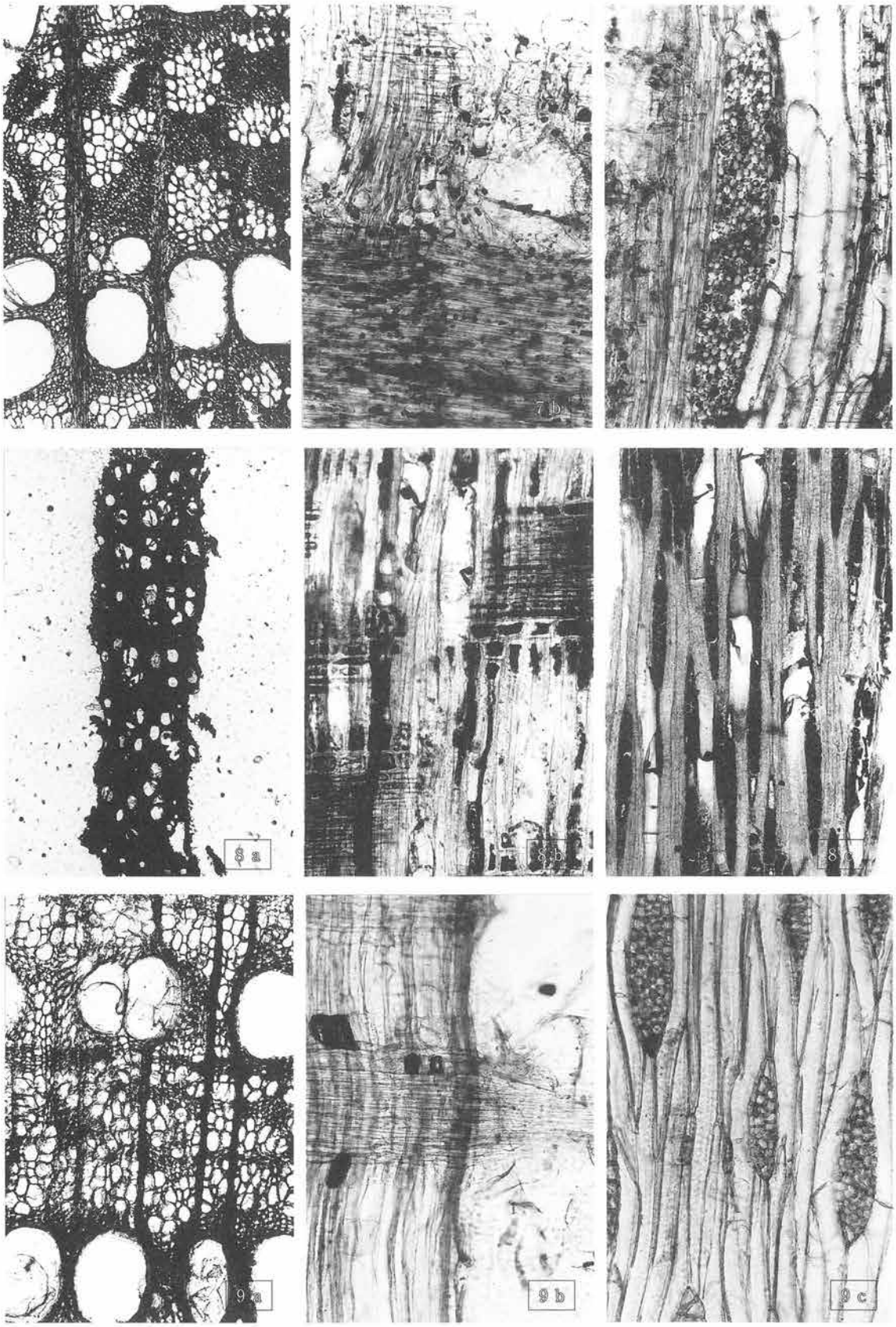
図版1　1．スギ　No.3199
2．ヒノキ属の一種　No.3201
3．アスナロ　No.2511

a：木口 x40 b：柾目 x100 c：板目 x100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。



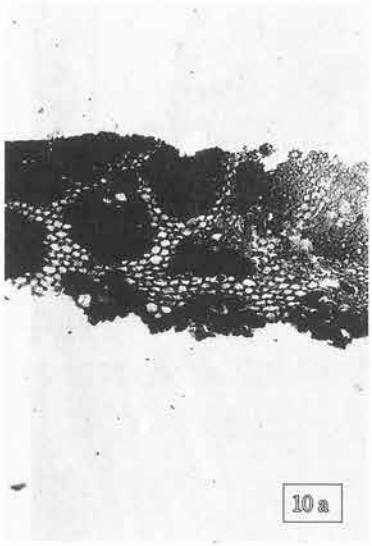
図版２　１．ブナ属の一種　No.4008
２．コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種　No.3202
３．クリ　No.3196

ａ：木口 x40 ｂ：柾目 x100 ｃ：板目 x100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。



図版 3　1．ケヤキ　No.3184
2．イスノキ　No.3188
3．ハリギリ　No.4014

a：木口 x40 b：柾目 x100 c：板目 x100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、
柾目では左から右。



図版4　10. イネ科タケ亜科の一種　Ｎｏ．4016　a：木口　x40

3　志羅山遺跡出土轡の金属考古学的調査結果

赤沼　英男（岩手県立博物館）

1　はじめに

岩手県平泉町志羅山遺跡における1997年の第66次発掘調査において、沢をせき止め粘土を貼って造った池と推定される遺構から鏡板に鴛鴦が象嵌された轡が検出された。周辺から馬骨、墨書土器、笹塔婆、鳴鏑が見いだされ、祭儀に用いられた可能性も想定できるという(1)。類似資料として国重要文化財「鶴文銅象嵌鏡轡」が知られており(2)、後白河法王院政時代における京都と平泉藤原氏の関係を検討するうえでの重要な資料として、関係者の注目を集めている。

このたび、その製作技法を解明することを目的として、複数箇所から摘出された微小試料片を用いて、金属考古学的調査を行った。その結果、鏡板、立聞、引手はいずれも亜共析鋼（炭素含有量0.8%未満の鋼）によって製作されており、鴛鴦は銅象嵌により描き出されていることがわかった。同時に、鏡板と引手、立聞の製作に使用された鋼には、非金属介在物組成および化学組成の点で差異がみられた。轡は全体として、加工はもとより象嵌をはじめとする様々な細工が容易な鋼を素材としているが、鏡板、引手の製造には組成の異なる鋼が用いられた可能性が高いと推定された。京都国立博物館久保智康氏による型式学的研究結果（本誌第12章　6鴛鴦文銅象嵌鏡轡について）をもふまえると、轡は平泉藤原氏に関係する工房跡で、素材流通に依拠し、製作技術の複合によって造り出されたものとみることができた。以下では、金属考古学的調査結果によって得られた知見について述べる。

2　調査資料

調査資料は、12世紀代に比定される志羅山遺跡出土の轡で、鏡板には鴛鴦の象嵌が施されている。金属考古学的調査には、図1の実測図に示すA～E、5ヶ所から摘出した微小試料片を用いた。摘出した5点の試料片のうち、AおよびCの試料片についてはさらに2分し、大きいものを組織観察に、小さいものを化学成分分析に供した。B、D、Eの試料片については摘出できた試料量がわずかであったため、組織観察のみを実施した。なお、Eから摘出した試料片には象嵌の一部が含まれていたため、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）により象嵌部分の構造を詳しく調べた。

3　調査方法

組織観察用試料片はエポキシ樹脂に埋め込み、ダイヤモンドペーストを使って研磨し、その表面を金属顕微鏡で観察した。さらに、地金の製造法を推定するうえで重要と判断された非金属介在物については、EPMAでその組成を分析した。Eから摘出した試料片を除く4点については、EPMAによる分析後、ナイタール（エチルアルコール97.5mlと硝酸2.5mlの混合溶液）で腐食し、金属顕微鏡で観察した。一方、E部から摘出した試料片には象嵌が残存していたため非金属介在物の分析と併行して、象嵌部分の組成と構造も調査をした。

化学分析用試料片は表面に付着する錆をハンドドリルで除去した後さらに2分し、それぞれをエチルアルコール、アセトンで超音波洗浄し、130℃で2時間乾燥した。大きい方の試料片についてはテフロン分解容器に直接秤量し、王水で加熱、溶解、蒸発乾固した。そして、容器内の残物を塩酸とふっ化水素酸混合液で

再溶解し、蒸留水で定溶とした。このようにして調整した溶液中のT．Fe、Cu、Mn、P、Ni、Co、Ti、Si、Ca、Al、Mg、Vの12成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP－AES法）で分析した。一方、小さい方の試料片については、含有されるC、Sを燃焼－赤外線吸収法で求めた。

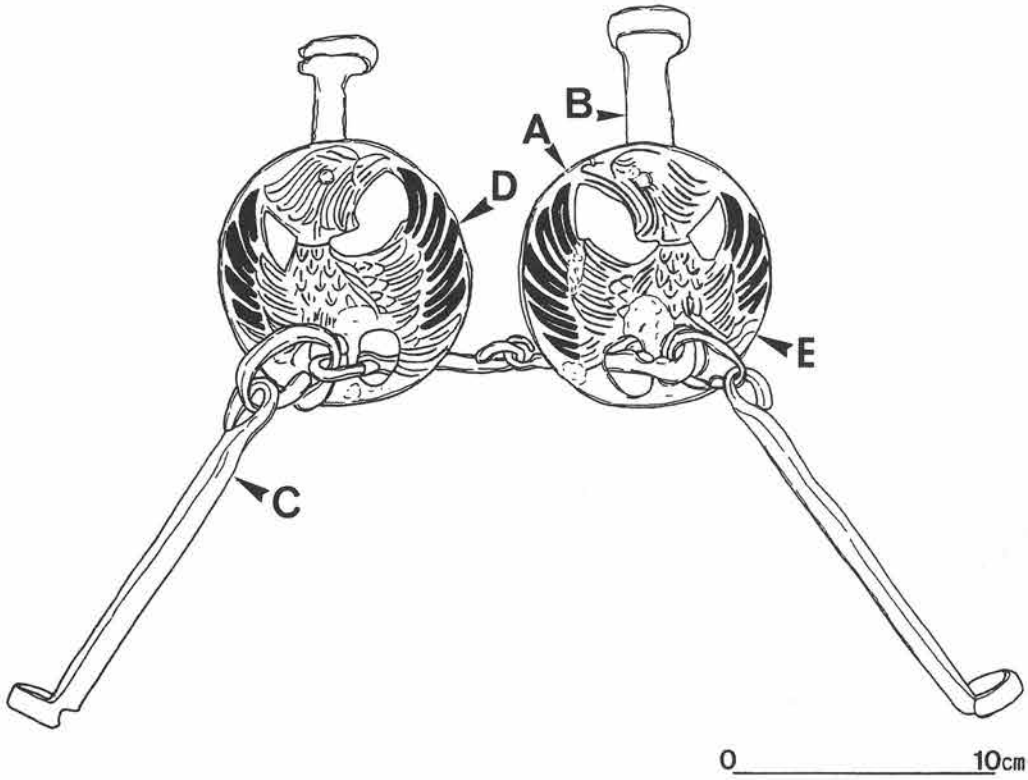


図1　轡の実測図と試料片摘出位置
実測は財団法人岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター　羽柴　直人氏による。

4　金属考古学的調査結果

4－1　摘出した試料片の組織観察結果

A部から摘出した試料片（以下試料片Aという）には相当量の健全なメタルが残存していたので、ナイタールにより腐食した（図2 a_2）。黒く腐食されたパーライト［フェライト（αFe）とセメンタイト（Fe_3C）の共析組織］がところどころに観察され、炭素含有量0.2～0.3%の鋼と推定された。同様の組織は試料片Bにも見いだされている（図2 b_3）。ただし、試料片Bにはそのほとんどがフェライトによって構成される組織も残存しており（図2 b_2）、炭素濃度分布にばらつきのある鋼が使用されていた可能性がある。

試料片Cにはフェライトが針状に析出したウィッドマンステッテン状組織が認められた（図3 b）。オーステナイト域から比較的速い速度で空冷されたものと推定される(3)。試料片Dの健全なメタルはわずかにフェライトが観察されるものの、その全域がほぼパーライトによって構成されていた。隣接する黒錆層も、金属光沢を呈する線状物質（Cm）が層状に析出することによって形成された島状組織がそのほとんどを占める。これまでに行われた出土鉄器の組織観察結果(4)に基づくと、線状物質Cmはセメンタイトの可能性が高く、島状組織は元の健全な鋼におけるパーライトとみることができる。上述の健全なメタルと隣接する錆の組織観察結果によって、試料片Dは炭素含有量が0.5～0.8%未満の鋼と推定される（図4 b、c）。

上述の組織観察によって、轡は基本的に亜共析鋼（炭素含有量約0.8%未満の鋼）を素材として製作され

ていることが判明した。そして、鏡板の製作に使用された鋼には、立聞や引手の製作に使用された鋼に比べ、炭素濃度分布にばらつきがみられた。鏡板の製作に使用された鋼の炭素濃度分布が不均一であったか、あるいは人為的に炭素含有量に差異がある鋼を合わせ鍛えて製作されたもののいずれかと思われるが、摘出した試料片があまりにも微小であるためその特定は困難であった。この点については、広領域にわたって試料片を摘出しその組織を調べ確かめる必要がある。

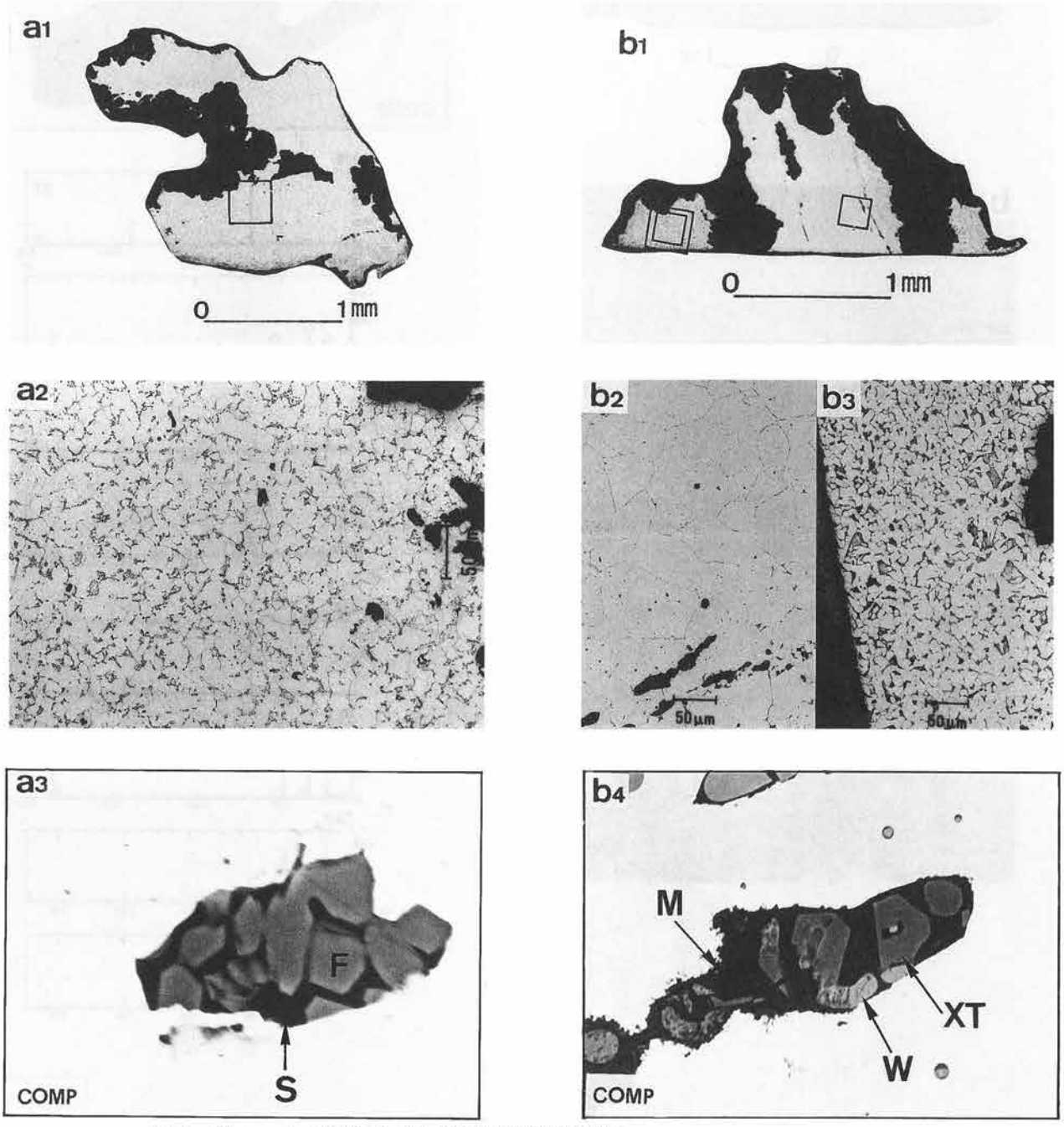


図2　轡A・Bから摘出した試料片の組織観察結果
a_1・b_1；それぞれA・B部から摘出した試料片のマクロエッチング組織
a_2・b_2；それぞれa_1・b_1の枠で囲んだ内部のミクロエッチング組織
b_3；b_1の二重枠で囲んだ内部のミクロエッチング組織
a_3・b_4；残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像（ＣＯＭＰ）

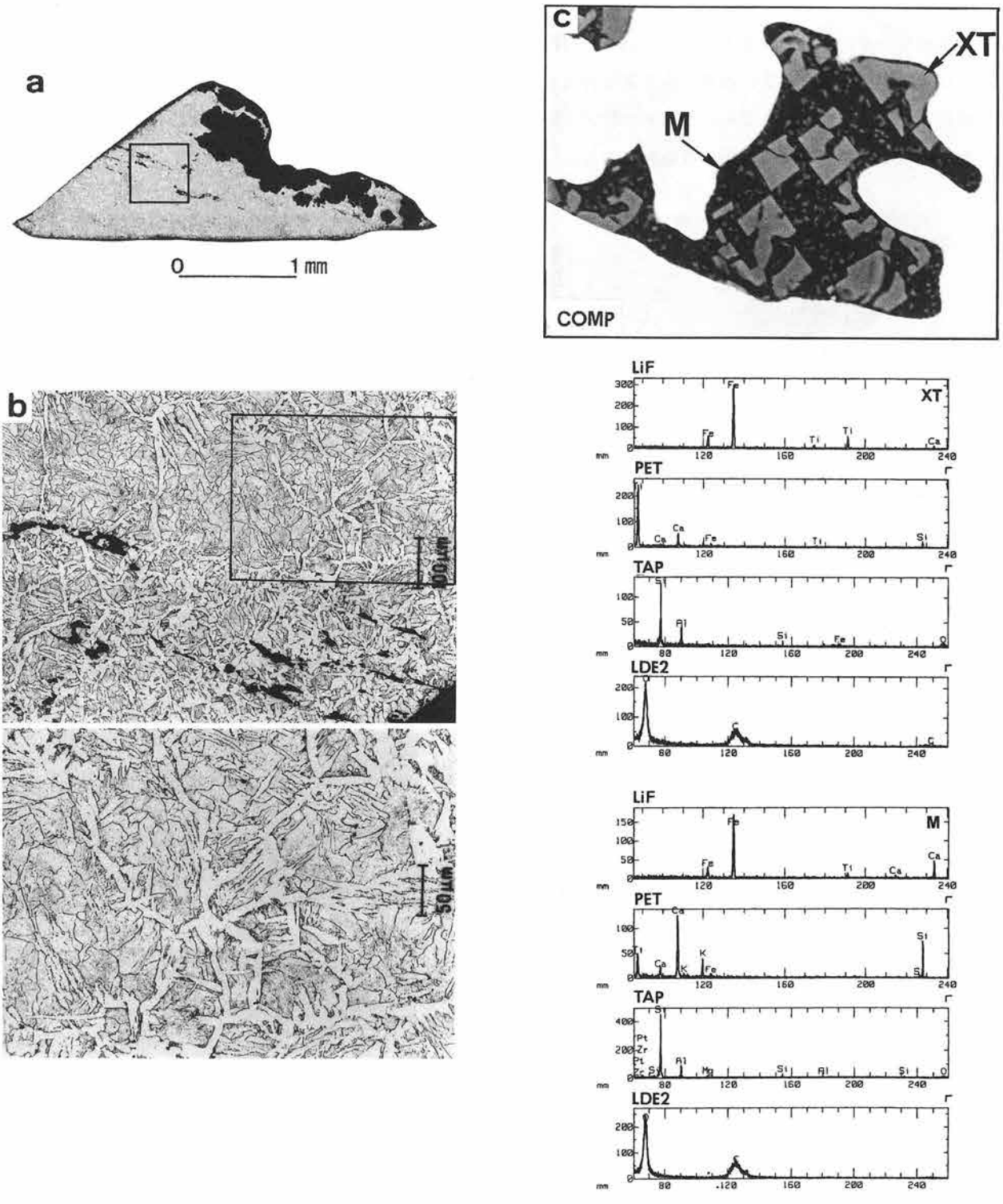


図３　轡Ｃ部から摘出した試料片の組織観察結果
ａ；マクロエッチング組織
ｂ；ａの枠で囲んだ内部のミクロエッチング組織
ｃ；残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像（ＣＯＭＰ）と定性分析結果

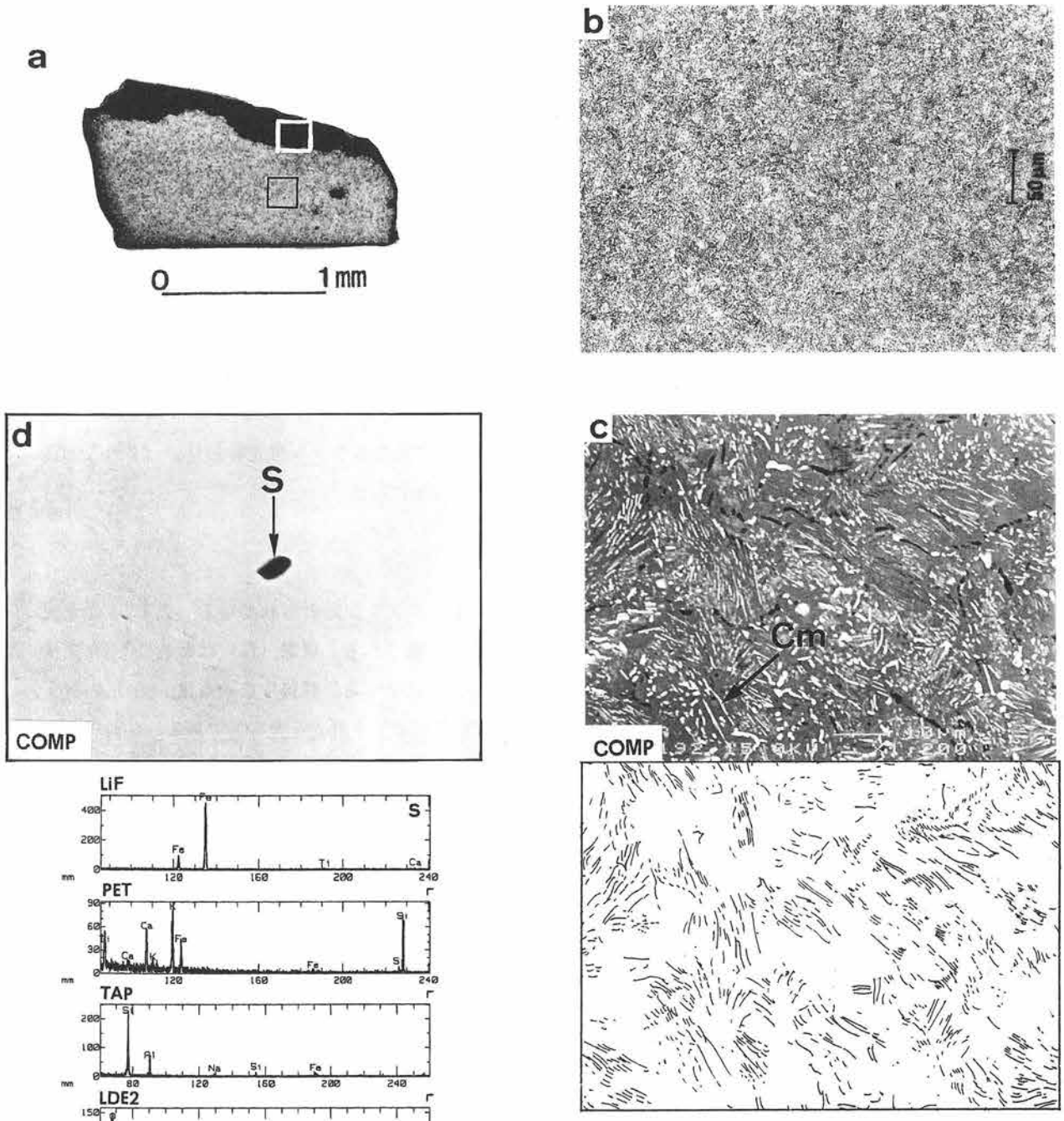


図４　轡Ｄ部から摘出した試料片の組織観察結果
ａ；マクロエッチング組織
ｂ；ａの枠で囲んだ内部ミクロエッチング組織
ｃ；ａの白枠で囲んだ内部のＥＰＭＡによる組成像（ＣＯＭＰ）
ｄ；残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像（ＣＯＭＰ）と定性分析結果

4－2　メタル中に残存する非金属介在物組成

試料片Aには灰色の結晶Fと黒色のガラス質けい酸塩（S）からなる非金属介在物が観察され、EPMAによる分析によって結晶FはFeO－SiO_2系の化合物(鉄かんらん石；2FeO・SiO_2と推定される)であり、ガラス質けい酸塩はFeO－Al_2O_3－SiO_2系であることがわかった（図2の3）。試料片Dには長さ数ミクロンの微細な非金属介在物がみられ、同様にして微量に酸化チタンを含むFeO－CaO－Al_2O_3－K_2O－Na_2O－SiO_2系のガラス系けい酸塩（S）からなることが確かめられた（図4d)。一方、試料片Eには灰色粒状をしたウスタイト（W；化学理論組成FeO）と微細な結晶が析出したガラス質けい酸塩(S)からなる非金属介在物が確認された（図5)。

試料片Cには、やや暗灰色をした角状の結晶XTとマトリックス（M）からなる非金属介在物が見いだされ（図3c）、の試料片Bにはそれに灰色の粒状結晶Wが加わった非金属介在物がいたるところにみられた（図2b4)。EPMAによる分析によって、結晶XTはFe－Ti－Al－O系の鉄チタン酸化物、結晶Wはウスタイトと判定された。轡の鏡板から摘出した試料片には明確な鉄チタン酸化物が見いだされなかったが、立聞および引手の試料片には2点とも鉄チタン酸化物の残存が確認された。

4－3　摘出した試料片の化学組成

試料片A・CのT．Feはともに97%以上にあり、ほぼ健全なメタルが分析されている（表1)。化学成分分析値への埋蔵環境からの富化の影響はほとんどないものと判断される。炭素（C）はともに0.3%未満にあり、亜共析鋼で製作されているとした組成観察結果ともよく整合する。試料片Cからは0.061%のNi、0.087%のCo、0.076%のTiが検出された。いずれも試料片Aの4倍を越える含有量である。試料片Cに含有されるTiの相当量は、残存する非金属介在物中の鉄チタン酸化物に起因するものと推測される。

表1　志羅山遺跡出土轡の分析結果

部位	化学成分(%)														
	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	n.m.i
A	97.30	0.24	0.006	0.007	0.001	0.001	0.017	0.021	0.010	0.183	0.007	0.008	0.002	<0.001	F.S
C	97.57	0.29	0.010	0.009	0.006	0.010	0.061	0.087	0.076	0.178	0.036	0.031	0.004	0.009	XT,M

注1）C，Sは燃焼赤外線吸収法、他はICP-AES法による。n.m.iは非金属介在物組成、Sはガラス質けい酸塩、XT
注2）B、D、Eについては化学成分分析が実施されなかったが、非金属介在物組成はB〔W(ウスタイト；化学理論組成FeO)、XT、M〕、D（S)、E（W、M）であった。

4－4　象嵌部の構造

試料片Eのマクロ組織は、銅色を呈する金属が鋼の中に埋め込まれている様子をよく示している（写真図版8)。鉄地金を最も深いところで約400μm、浅いところで約200μm彫り込み、W形の溝を造った後、その中に象嵌をはめ込んだものと推定される。EPMAによる元素濃度分布のカラーマップおよび定性分析によって、象嵌は銅象嵌であり、ところどころに砒素化合物が残存していることがわかった。金や銀、あるいは水銀の分布はみられない。銅象嵌と接する鋼は錆化が進んでいる。一方、銅象嵌の表面には硫化銅(CuS)の薄い層が認められた。肉眼観察において象嵌表面のところどころに黒色物質の付着が観察されているが、

硫化銅であることが確かめられたわけである。

5　考察

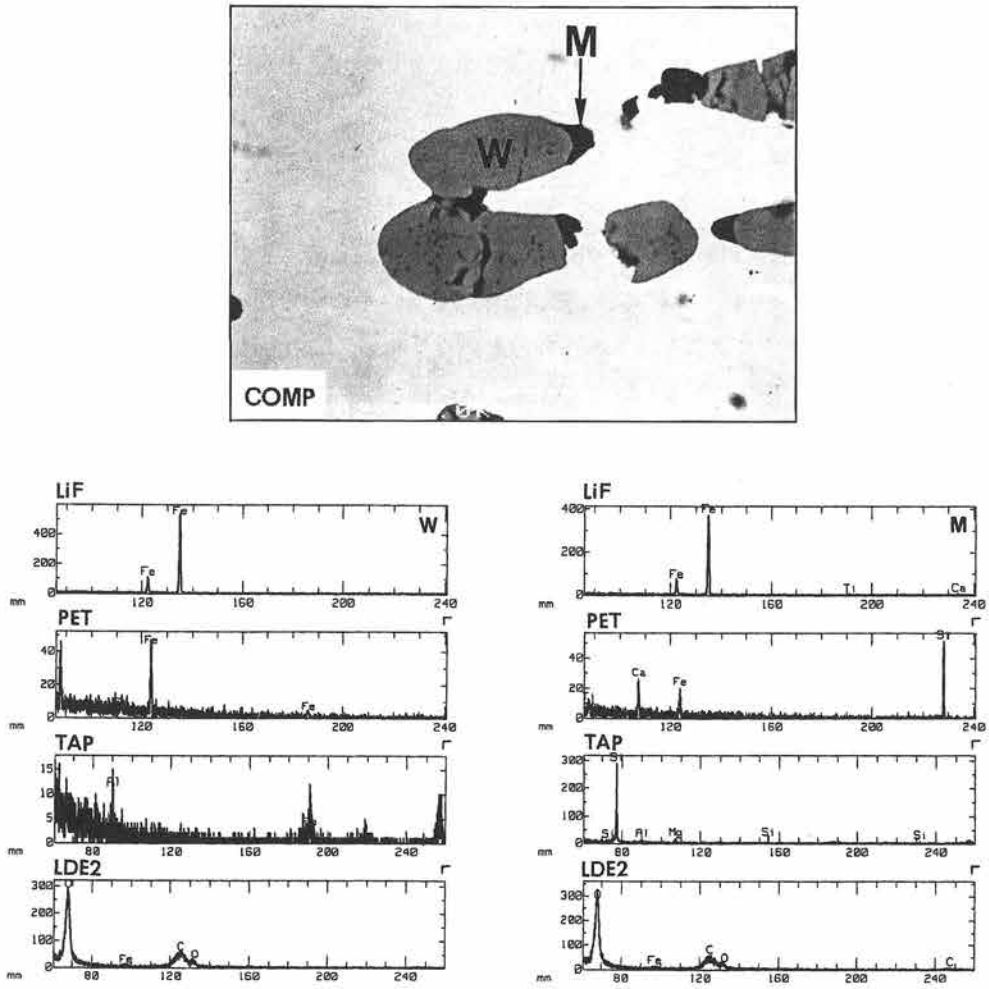


図５　轡Ｅ部から摘出した試料片のＥＰＭＡによる組成像と定性分析結果

５－１　轡地金の組成

鉄器は鋼を素材とする鋼製鉄器と、銑鉄を鋳造して製作される鋳造鉄器の２つに分類される。組織観察結果に基づくと、轡は鋼製鉄器であり、炭素含有量が0.8%未満の亜共析鋼を用いて製作されていることがわかった。立聞や引手には、炭素含有量が0.3%程度、もしくはそれ以下の鋼が配されていたが、鏡板から摘出した試料には、0.5%以上もしくは、0.2～0.3%Ｃの鋼が確認され、立聞や引手に比べ炭素含有量にばらつきがみられた。この点については、（イ）鏡板の製作にあたって、炭素含有量が不均一な鋼が使用された、（ロ）炭素含有量に差異のある鋼を合わせ鍛えて製作された、（ハ）相当量の炭素を含む鋼を加熱・鍛打し造形する過程で部分的に脱炭が進んだ、のいずれかによるものと判断される。今後、類似資料から広領域にわたって試料片を摘出し調査することによって、明確にすることができるものと思われる。

轡の引手から摘出した試料片には鏡板に比べ、４倍を越えるＮｉ、Ｃｏが含有されていた。Ｎｉ、Ｃｏの両成分は鋼製造法のいかんにかかわらず一度鉄中に取り込まれた後は、そのほとんどが鉄中にとどまることを考慮すると、轡の鏡板と引手の素材になった鋼の製造に使用された製鉄原料が異なっていた可能性がある。

加えて、立聞、引手に残存する非金属介在物には鉄チタン酸化物の残存が確認されたものの、鏡板には鉄チタン酸化物が見いだされなかった。後述するように現在考えられている鋼製造法に従うと、引手の製作に使用された鋼の製造にはＮｉ、Ｃｏ、Ｔｉを含む特殊な鉄鉱石（おそらくは磁鉄鉱）が用いられたか、あるいは相当量のＮｉ、Ｃｏを含む銑鉄を少量の鉄チタン酸化物を内包するスラグと接触した状態とし、空気を送風しながら、脱炭することによって製造された鋼が使われたかのいずれかが考えられる。

５－２　推定される中世の鋼の製造法

古代・中世の鋼製造法は未解明にあり、いくつかの方法が提案されている。その一つとして、製錬により得られた鉄塊［銑鉄と鋼が混在し相当量の不純物（鉄滓）を含む鉄と考えられている］に含有されている不純物を除去し、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。その鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見解がある(5)。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は直接製鋼法（近世たたら吹製鉄法による鍛押方(6)）に位置づけることができる。得られた鉄を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は、精錬鍛冶(5)と呼ばれている。

ところで、柳之御所跡出土遺物にみられるように、11～12世紀には内耳鉄鍋に代表される鋳造鉄器の出土が顕著になる。特に北海道では、その普及に伴い生活様式が大きく変わるため、擦文文化期からアイヌ文化期への変遷を考えるうえでの重要な資料に位置づけられている(7)。このような鉄鍋に代表される鋳造鉄器の普及は、当時、銑鉄を安定的に生産する方法が出来上がっていた可能性が高いことを示している。生産された銑鉄を溶解し、鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が造り出されるわけであるが、銑鉄中の炭素を低減する、すなわち銑鉄を精錬して鋼を製造するという、間接製鋼法の想定も可能となる。

志羅山遺跡に近接する柳之御所跡では、主として鉄かんらん石とウスタイト、それらを取り囲むガラス質けい酸塩からなり、ところどころにＦｅ－Ａｌ－Ｏ系化合物の残存した塊状の鉄滓や椀形滓が見いだされている。ほぼ溶融もしくは部分溶融したスラグが固化した資料である。直接製鋼法の立場に立てば、金属考古学的調査に付した上述の椀形滓や塊状滓は、その組成上から、製錬または精錬鍛冶に伴う排出物とみることができる。そして、製錬に不可欠な気密性を有する炉跡はもとより、相当量の木炭が生産されていたことを示す遺構も未確認にあるという発掘調査結果を加味すると、御所内において製錬が行われていた可能性は乏しく、精錬鍛冶の実施が有力となる。同時に、出発物質となる銑鉄や鋼が混在し炭素濃度分布が不均一で、相当量の鉄滓を含む鉄の入手方法を検討しなければならない。すなわち、当時そのような組成の鉄の広域流通があったか、あるいはその流通がなかったとすると、御所の近傍で製錬が行われ、そこでそのような組成の鉄が生産されていてはじめて精錬鍛冶の実施が可能となるからである。

柳之御所跡では上述の塊状滓や椀形滓とともに、0.113％近くのＰを含む銑鉄塊（表２）が見いだされている(8)。鋳型は未検出にあり、検出された銑鉄塊が鋳造鉄器の素材として使用された可能性は乏しい。塊状滓や椀形滓とほぼ同じ操作に伴って排出されたものとみることができる。この銑鉄塊の発見によって、柳之御所内ではあらかじめ準備された銑鉄を精錬（脱炭）して鋼が製造されていたとする見方をとることができるようになったわけである。

最近、日本中世史の研究者である福田豊彦氏は、近世の文献資料を詳細に検討することによって、近世には「荒鉄」もしくは「生鉄」(いずれも銑鉄）と熟鉄（αＦｅまたは亜共析鋼に近い組成の鋼と推定される）が流通しており、その状況は平安末まで遡れる可能性のあることを指摘されている(9)。また東大に収蔵されている「鐵山必要記事」を研究されたわが国の製鉄分野の大家である館充氏も、近世の中国地方では、銑

鉄を精錬して鉄を造る、間接製鉄法が主流であった可能性が高いことを報告されている(10)。このような文献資料の研究結果は上述とよく整合するものであり、筆者は柳之御所跡でも精錬がおこなわれていた可能性が高いと考える(11)。

5－3　遺物の組成からみた轡の製作形態

表2　平安期出土鉄塊の自然科学的調査結果

No.	出土地	推定年代	分類	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	ミクロ組織
1	柳之御所跡	12世紀第三四半期	塊状銑鉄	90.0	3.55	0.032	0.008	<0.001	0.118	0.019	0.034	0.007	0.176	G
2	別所遺跡	10世紀代	塊状銑鉄	－	－	－	0.076	－	0.27	－	－	<0.001	－	G
3	別所遺跡	10世紀代	板状銑鉄	91.3	4.16	0.055	0.031	0.009	0.195	0.022	0.045	tr	0.064	G,L

注1）C、Sは燃焼赤外線吸収法、他はICP－AES法による。－は分析せず。trは痕跡。
注2）Lはレーデプライト、Gは片状黒鉛。

轡の鏡板から摘出した試料片の非金属介在物には鉄チタン酸化物が見いだされなかったが、立聞や引手から摘出した試料片にはその残存が確認された。また引手と鏡板、それぞれに含有されるNi、Co、およびCuの3成分比も異なっていた。これらの事実は、鏡板の製作に使用された鋼と、引手、立聞の製作に使用された鋼の製鉄原料や網製造法が異なっていた可能性が高いことを示している。

一方、EPMAによる分析によって、轡の鏡板にある鴛鴦は、相当量の砒素を含む銅を素材とした象嵌により描きだされていることが明らかになった。まず、鏡板の形に加工された鋼に、約200～400μmの深さでW状に彫り込みを入れ、そこに銅象嵌を埋め込んだものと推定される。なお、銅象嵌の鉄地金と接触する部分に厚さ50～100μmの錆層が残存していたが、これは異種金属が接触によりその部分から鉄の腐食が進んだためと考えられる。また、銅象嵌の表面には厚さ100μm程度の硫化銅の層がみられたが、これは人為的な操作によるものではなく、埋蔵中に周辺物質との反応により生成したものと思われる。

既述のとおり、柳之御所跡から出土した塊状滓、椀形滓にはともに鉄チタン酸化物の残存は未確認にある(8)(12)。したがって轡の引手や立聞の製造に使用された鋼を、ただちに平泉において製造されたと解釈することは難しい。他地域において製造された鋼が平泉にもたらされ、そこで、引手や立聞に加工された、または引手、立聞に加工・整形されたものが運び込まれた、あるいは別途製品として供給された鉄器の再利用がはかられたという3つのうちのいずれかと推定される。

平泉藤原氏関連の工房に、銑鉄もしくは鋼素材にみられる原料鉄や銅素材が複数の地域から持ち込まれる。工房跡ではそれらを使ってまず必要な形状に加工を施し、次にそれらを組み合わせて最終製品にするという生産形態の中で、轡が生まれたものと思われる。素材の複雑な流通と生産技術の複合という要素を入れて、平泉藤原氏に関係する生産工房を研究することにより、製作の実態が一層みえてくるにちがいない。今後の研究の進展に期待したい。

（註）

（1）　（財）岩手県埋文センター羽柴直人氏からのご教示による。

（2）　『法住寺殿跡』　（財）古代学協會　1984年

（3）　『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』　丸善株式会社　1968年

（4）　佐々木稔、村田朋美　「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」　『季刊考古学』第８号　雄山閣出版　1984年　p.27－33

（5）　大澤正巳　「古墳共献鉄滓から見た製鉄の開始」　『季刊考古学』第８号　雄山閣出版　1984年　p.36－46

（6）　河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990年、p.11。

（7）　越田賢一郎　「北日本における鉄鍋」　『季刊考古学』第57号　雄山閣出版　1996年　p.61－65

（8）　『柳之御所遺跡調査報告書』　平泉町教育委員会　1994年　p.363－384

（9）　福田豊彦　「前近代の百科事典にみる鉄素材と製鉄方法」たたら研究、39、1999年、p.15－24。

（10）　館充　「鐵山必要記事について」　ふぇらむ Vol. 4，No. 3　1999年　p.22－30

（11）　ほぼ同じ組成の銑鉄塊は10世紀代に比定される東京都多摩市別所遺跡でも見いだされている（表２）。銑鉄の流通に伴う精練が広域的実施されていた可能性について検討する必要があろう。

（12）　『柳之御所跡』　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994　p.526－542

4　志羅山遺跡（第66次）から出土したウマ遺存骨

小林和彦（八戸市縄文学習館）

66ＳＤ６の溝跡からウマの歯や骨が出土した。

①から⑨まで９地点から検出された。とくに⑨の地点からは基本的に同一個体とみなすことのできる多くの骨が出土した。骨の保存状態は必ずしも良くはないが、発掘調査の際に発砲ウレタンで固定してまとめて取り上げられていたので、個々の部位の出土状況、相互の位置関係を観察することができた。ほかの地点からは、下顎骨や遊離した臼歯などが散在した状態で検出された。

①、②、③、④、⑦の各地点からはそれぞれ１個の遊離したウマの臼歯が出土した。いずれもセメント質や象牙質の部分はほとんど腐朽して、エナメル質だけが保存されていた。⑤では同一個体のものと考えられる左上顎前臼歯が３個出土した。⑥からはウマの上顎臼歯右５個、左２個が上顎骨の歯槽に植立した状態の位置関係を保ったまま検出された。臼歯列にわずかに付着するように歯槽骨が残存している。⑧ではウマの下顎骨臼歯部が左右本来の位置関係を保った状態で出土した。臼歯が左は６個全て、右は３個植立している。下顎体の槽間縁から切歯部にかけて、及び下顎枝は残っていない。また、この下顎骨の歯槽から脱落したと考えられる、右の臼歯２個が別に検出されている。

⑨の地点では90×90㎝の範囲にウマの骨の集積があった。最も南側に、頭骨が右を下にしてある。保存されていたのは、右顔面骨の外側の部分で、口蓋底を形作る骨は失われている。後部は眼窩前縁、頬骨側頭突起まで残されており、後頭部は欠損している。右切歯２個および臼歯６個植立している。臼歯列は歯槽の保存状態が悪く乱れており、臼歯相互にすき間が開いている。槽間縁の保存は不良で、犬歯の萌出の有無を確認できない。この上顎に関節した状態で、右下顎骨が検出された。この下顎骨は、臼歯部の第三前臼歯の位置から下顎枝にかけての破片で、槽間縁から切歯部にかけて欠損している。頭骨の鼻先にあたる位置から、軸椎が検出された。頭骨の北側に四肢骨が３個一列に並んでいた。一見、長骨が互いに関節で結合した状態を思わせるが、実際には東から順にそれぞれ右上腕骨、左脛骨、右前腕骨であった。かなり乱された状況であることが分かる。左脛骨の下から、これに骨幹部の位置で交叉して左大腿骨が見つかった。これらの四肢骨の北側には椎骨と肋骨がまとまってある。中央部に胸椎が８個検出された。ほぼ上下２段になっており、下段では４個の胸椎が相互に結合して並んだ状態が保存されている。少し離れて東よりに環椎がある。この胸椎のまとまりの周囲に、椎骨の棘突起や肋骨の破片が散在してる。この北側に左中足骨が、さらに北に右中手骨が検出されている。中足骨には第四中足骨が付随していた。ほかに保存が悪く、部位が同定できない骨片がいくつかある。また、発砲ウレタンで固定されることなく取り上げられた骨には、左下顎第一切歯１個、左上顎臼歯２個、胸椎破片２個、腰椎破片１個がある。以上が⑨の地点から出土した、同一個体のものと考えられるウマの遺存骨である。この地点からはほかに、別個体の左上顎臼歯２個と、別に取り上げられていたことから、別個体の可能性がある左肩甲骨破片１個が採集されている。

⑨から検出されたウマは、１個体分としてはかなり欠損部がある。左前肢、右後肢およびすべての手根骨、足根骨、指骨が検出されていない。検出された遺存骨の位置関係は、頭骨と下顎骨、胸椎４個の配列など、一部を除けばかなり乱されている。胸椎８個が２段に重なり合っていた様子にも不自然さがある。しかし骨の集積は、まとまりが良く大きく流された形跡もない。やはり欠損部の多くは、ウマが死後人の手によって処理にされる過程で、脱落したものと考えられる。解体痕は確認できないが、かなり細く解体処理されたこ

とによって、「欠損」や「乱れ」が生じたのであろう。

今回検出されたウマの歯には、乳歯や萌出中の永久歯は含まれていない。骨にも幼齢のものは含まれていない。したがってすべて壮齢以上と判断できる。

⑨には、同一個体と考えられる、臼歯列を残した右の上・下顎骨および遊離した左下顎第一切歯１個と左上顎臼歯２個がある。この左下顎第一切歯は、咬合面がほぼ三角形で、歯冠幅は歯冠長の1.02倍である。これによれば年齢は、18歳から20歳初期と推定される（註１）。臼歯は上・下顎ともかなり咬合面の摩滅が進行している。下顎前臼歯では歯根の分岐部付近まで達し、エナメル襞の形状は単純化している。上顎前臼歯は咬合面内部のエナメル質がほとんど消失している。これらの臼歯の摩滅状況からは、20歳を越えていると判断できる。⑨のウマは老齢である。

⑧の下顎骨やその他の地点の臼歯および⑨の別個体の臼歯の資料は、壮齢期のウマのもである。

⑨から出土したウマの中手骨と中足骨の最大長から「馬における骨長より体高の推定公式」を用いて推定体高を算出すると、それぞれ136.3cm、129.1cmとなる（註２）。いずれにしても中形在来馬の範囲に収まる。同時に出土した上腕骨体最少幅、橈骨中央部幅、脛骨中央部幅などの計測値もほぼその範囲にある。中手骨中央部幅35.1mmは中形在来馬の最大値付近にある（註３）。

⑧の左下顎骨の臼歯列長（咬合面）は184.4mmである。根城跡岡前舘ＳＥ６出土のウマの計測値は164.5mmであるから、在来馬としてはかなり大きな馬であった可能性がある。⑤の第三前臼歯は、根城ウマに対して歯冠長は113%、歯冠幅は115%ある。やはりかなり大きい（註４）。

まとめ

溝跡の埋土中、①から⑨の各地点からウマの遺存骨が出土した。⑨からは同一個体の骨を中心にまとまって検出された。一個体分の３分の１程度ある。それぞれの骨の配置はかなり乱れており、解体されて捨てられた状況である。肉が食糧として利用された結果と考えられる。

遺存骨の計測値から推定されるウマの体格は、中形在来馬の範囲に収まる。中でも⑧のように比較的大きな資料があることが注目される。青森県前川遺跡、李平下安原遺跡では、平安時代の小形馬が出土している（註５）。一般的には大きい馬は乗用に、小さい馬は役用に使用される。やや新しい資料であるが、鎌倉材木座遺跡では西暦1333年の戦闘で死亡したとみなされるウマの骨が多数出土した。これらは軍馬であったと考えられ、ほとんど中形馬であったという（註６）。遺跡の性格によって、出土するウマの体格の組成に違いが認められる。

今回調査の志羅山遺跡の発掘調査では、奥州藤原氏の拠点平泉におけるウマの、体格についても興味深い資料が得られた。

（註１）ウマの下顎第一切歯の咬合面の形状は、年齢によって変化する。摩滅が始まる時は、歯冠長は歯冠幅の約２倍ある。15歳位では交合面の形状は円形になって、歯冠長と歯冠幅は等しい。20歳代の初期には歯冠幅は歯冠長のほぼ１から1.5倍あり、咬合面の形状は三角形、そして30歳代では咬合面は四角形で横方向は狭く、歯冠幅と歯冠長の比率は２：１である（Getty, R.1975 Sisson and Grossman's The Anatomy of the Domestic Animals.Fifth edition.）。

（註２）林田重幸・山内忠平　1957　馬における骨長より体高の推定法　鹿児島大学農学部学術報告６

（註３）日本の在来馬には、体高108～122cmの小型馬と、体高127～137cmと推定される中形馬がある（林田重幸　1978　日本在来馬の系統に関する研究　日本中央競馬会）。

（註４）根城跡岡前舘ＳＥ６ウマは、四肢骨等の計測値から算出した体高が131.8cmである（小林和彦。1986　史跡根城跡から出土したウマの遺存骨　八戸市博物館研究紀要２）。

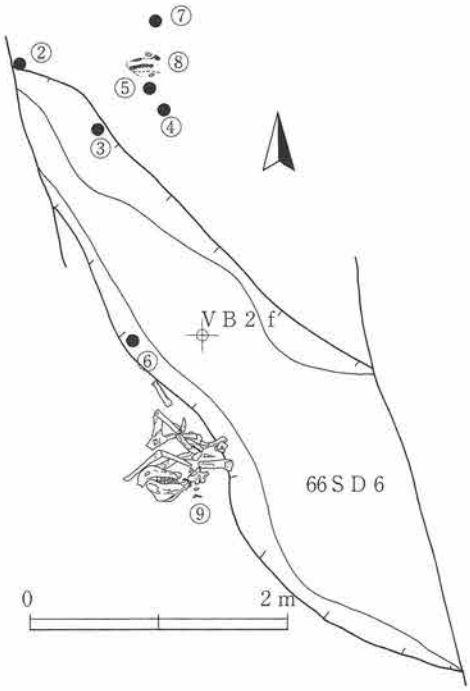
（註５）田舎館村教育委員会　1991　前川遺跡発掘調査報告書、青森県教育委員会　1988　李平下安原遺跡

（註６）（註３）の文献

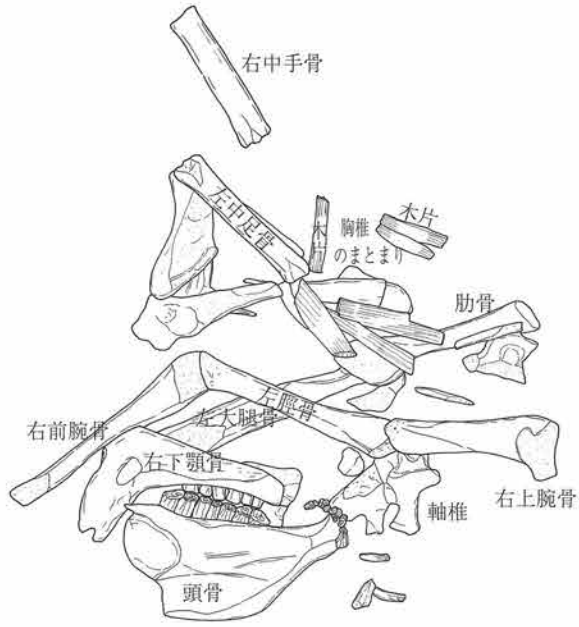
志羅山遺跡（第66次）から出土したウマの遺存骨

番号	地区・遺構・創位	部位・数量	備考
①	ＶＢ２ｅ　溝？　埋土	右上顎第二前臼歯（P^2）　1個	
②	ＶＢ２ｅ　溝　埋土	左上顎第三後臼歯（M^3）　1個	
③	ＶＢ２ｅ　66ＳＤ６埋土	右下顎第二後臼歯（M_2）　1個	
④	66ＳＤ６埋土	右上顎臼歯破片　1個	
⑤	66ＳＤ６埋土	左上顎前臼歯　3個	P^2、P^3、P^4、同一個体
⑥	66ＳＤ６埋土	左上顎後臼歯　2個	M^1、M^2 } 同一個体
		右上顎臼歯　5個	P^2、P^3、M^1、M^2、M^3 } 同一個体
⑦	66ＳＤ６埋土	右上顎第三後臼歯（M^3）　1個	
⑧	66ＳＤ６埋土	左下顎骨臼歯部破片　1個	P_2～M_3植立、臼歯列長（咬合面）残184.4㎜ } 同一個体
		右下顎骨臼歯破片　1個	P_3、P_4、M_3　植立 } 同一個体
		右下顎第二前臼歯（P_2）　1個	
		右下顎第一後臼歯（M_1）　1個	
⑨	66ＳＤ６埋土	※頭骨破片　右顔面骨部分　1個	鼻骨、涙骨、上顎骨、切歯骨、頬骨、I^1、I^3、P^2～M^3植立
		※右下顎骨破片　1個	臼歯部～下顎枝、P_3～M_3植立
		※左下顎第一切歯（I_1）　1個	
		※左上顎前臼歯破片　1個	
		※左上顎第一後臼歯（M^1）　1個	
		※椎骨破片　環椎破片　1個	
		軸椎破片　1個	
		胸椎破片　10個	
		腰椎破片　1個	
		※肋骨破片　3個	
		※右上腕骨破片　1個	両端破損、残存長250㎜、骨体最小幅33.9㎜
		※右前腕骨	橈骨両端破損、橈骨残存長305㎜、中央部幅36.6㎜、中央部径29.3㎜
		※右中手骨　1個	近位端破損 最大長（推定）225㎜、中央部幅35.1㎜、中央部28.0㎜、遠位部幅43.4㎜、遠位部径31.2㎜
		※左大腿骨破片　1個	遠位端破片、残存長446㎜
		※左脛骨破片　1個	両端破損、残存長322㎜、中央部幅40.3㎜、中央部径33.4㎜
		※左中足骨　1個	最大長258.0㎜、近位部幅46.7㎜、近位部径37.6㎜
		※左第四中足骨　1個	最大長11.4㎜
		左上顎臼歯破片　2個	前臼歯１、後臼歯１
		左肩甲骨破片　1個	近位端破損、頸部長63.0㎜

※同一個体と推定される。



馬骨・馬歯出土位置



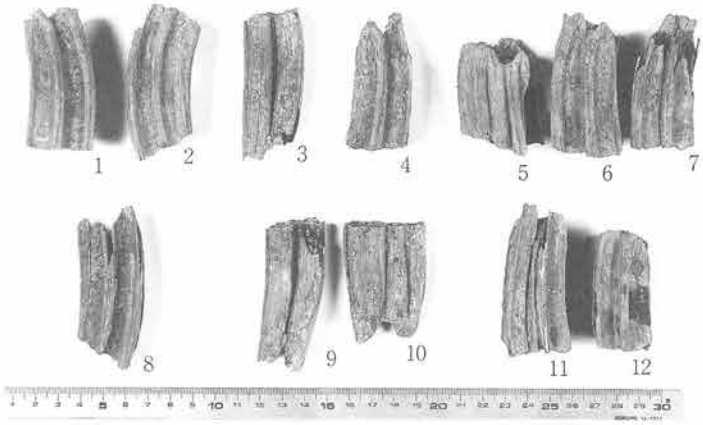
⑨の拡大

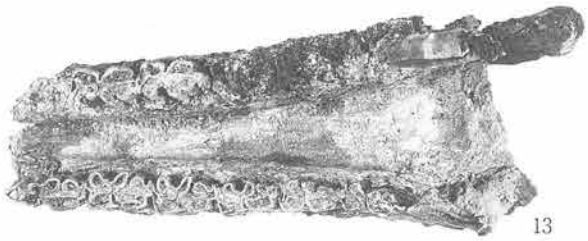
ウマの上顎歯計測値（単位：㎜）

上顎	歯冠長	歯冠幅	現全歯高
① 右P^2	29.0	28.8	64.4
② 左M^3	27.4	23.4	71.0
⑤ 左P^2	—	—	52.0
P^3	30.9	29.2	65.0
P^4	—	—	60.0
⑦ 右M^3	—	—	72.0
⑨ 右I^1	15.9	13.6	歯槽植立
I^3	15.8	—	〃
P^2	38.9	23.5	〃
P^3	27.7	25.4	〃
P^4	26.7	27.1	〃
M^1	24.2	27.3	〃
M^2	22.7	24.2	〃
M^3	27.8	24.8	〃
左M^1	23.9	26.2	43.0

ウマの下顎歯計測値（単位：㎜）

下顎	歯冠長	歯冠幅	現全歯高
③ 右M_2	—	15.5	66.0
⑧ 左P_2	36.1	15.6	歯槽植立
P_3	30.6	18.1	〃
P_4	30.0	17.7	〃
M_1	26.7	15.7	〃
M_2	27.2	15.1	〃
M_3	33.4	13.5	〃
⑨ 右P_3	27.3	15.0	歯槽植立
P_4	27.3	15.8	〃
M_1	22.3	14.1	〃
M_2	26.7	14.0	〃
M_3	36.2	13.0	〃
左I_1	12.3	12.6	38.0





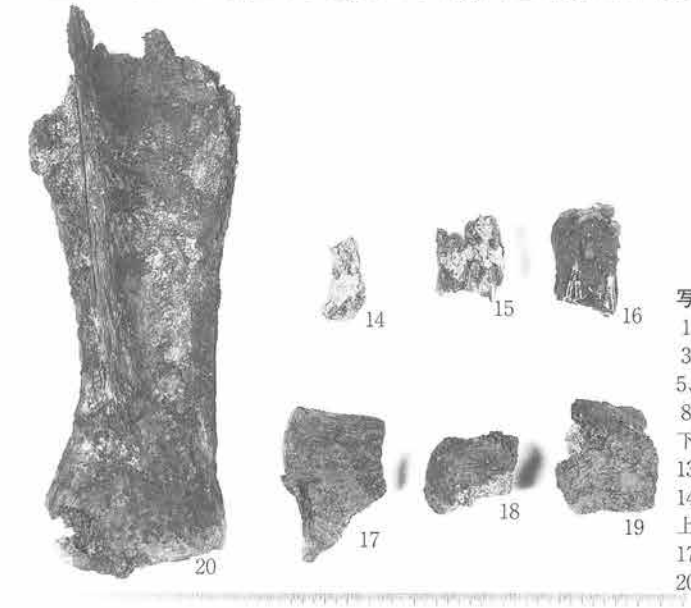


写真　ウマの遺存骨（1）

1　①右上顎前臼歯P^2　2　②左上顎後臼歯M^3
3　③右下顎後臼歯M_2　4　④右上顎臼歯
5、6、7　⑤左上顎前臼歯P^2、P^3、P^4
8　右上顎後臼歯M^3　9、10　⑧右下顎前臼歯P_2、下顎後臼歯M_1　11、12　⑨左上顎臼歯
13　⑧下顎骨臼歯部
14、15、16　⑨左下顎切歯I_1、上顎前臼歯、上顎後臼歯M^1
17　⑨腰椎　18、19　⑨胸椎
20　⑨左肩甲骨

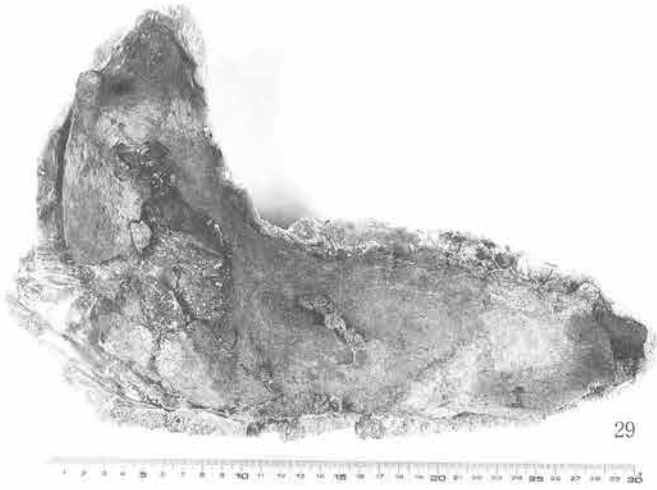


写真　ウマの遺存骨（2）

21　⑨右上腕骨　22　⑨右前腕骨
23　⑨右中手骨　24　⑨左大腿骨
25　⑨左脛骨　26　⑨左中足骨
27　⑨左第四中足骨
28　⑨頭骨（右顔面骨）
29　⑨右下顎骨

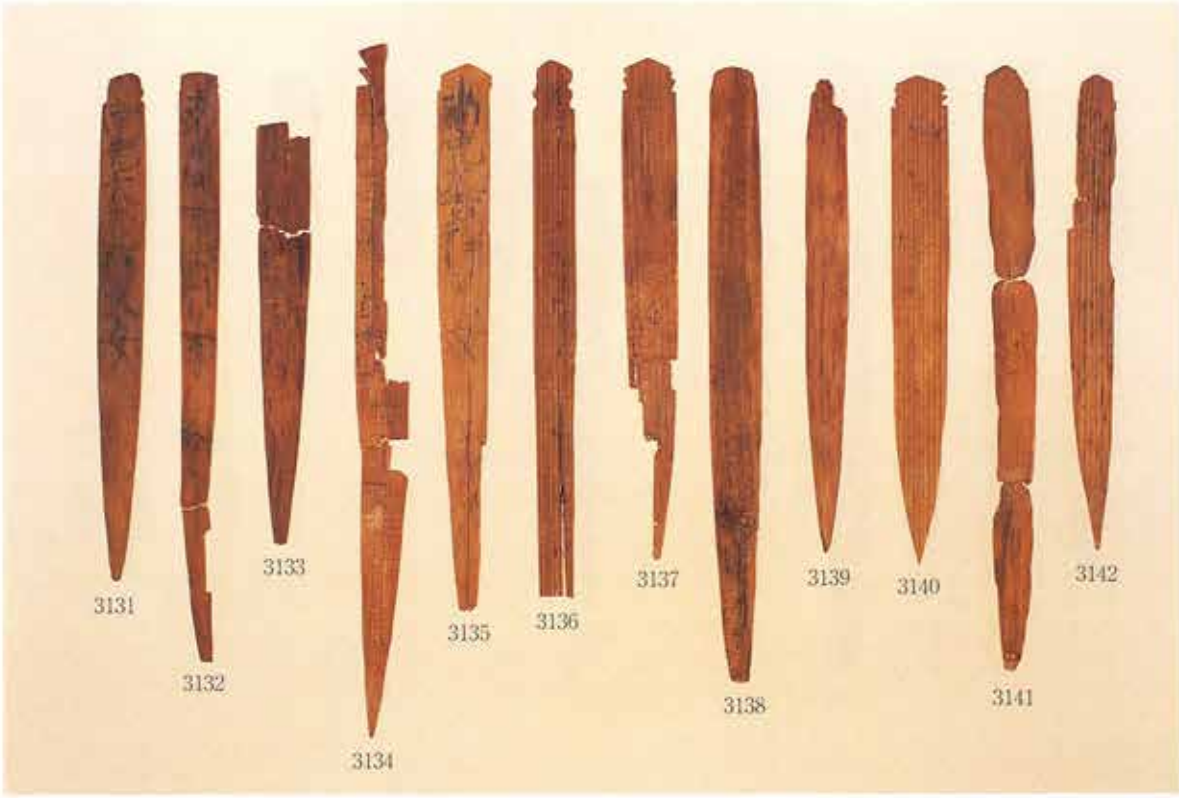
写　真　図　版

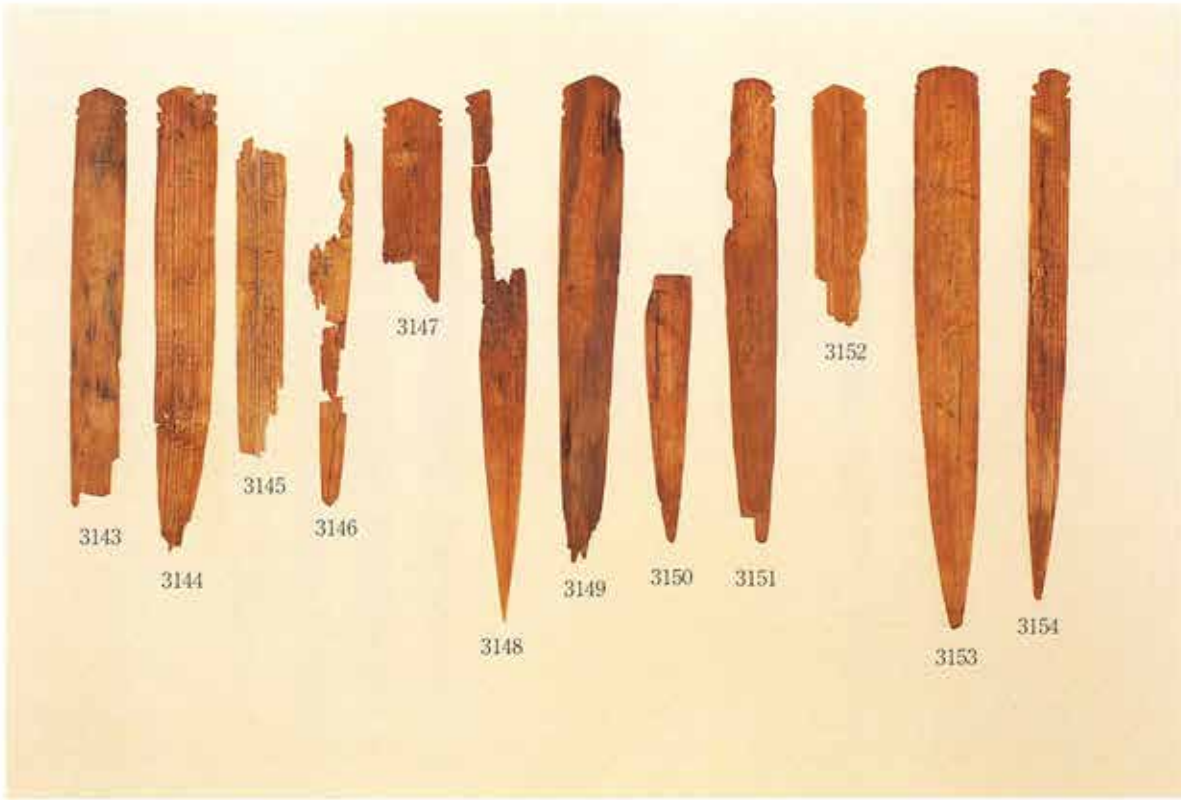
写真図版1　鴛鴦文轡（3246）

3118

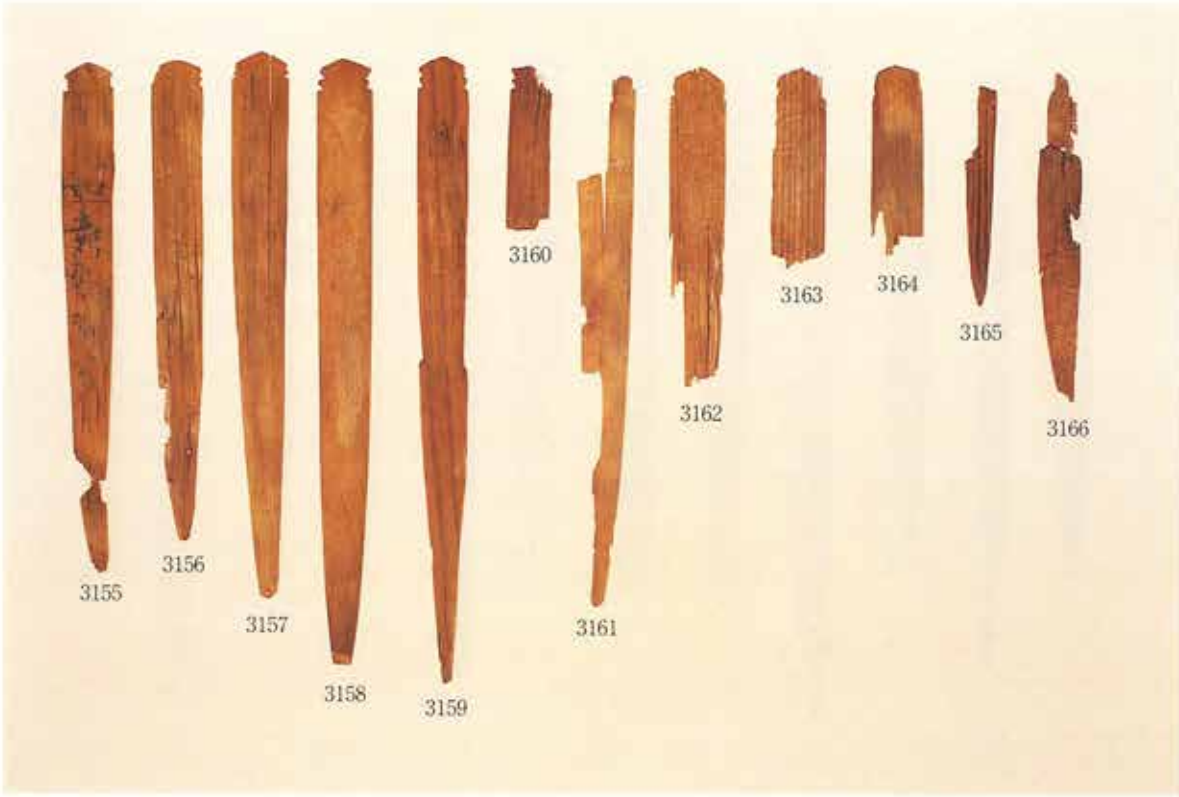
3119

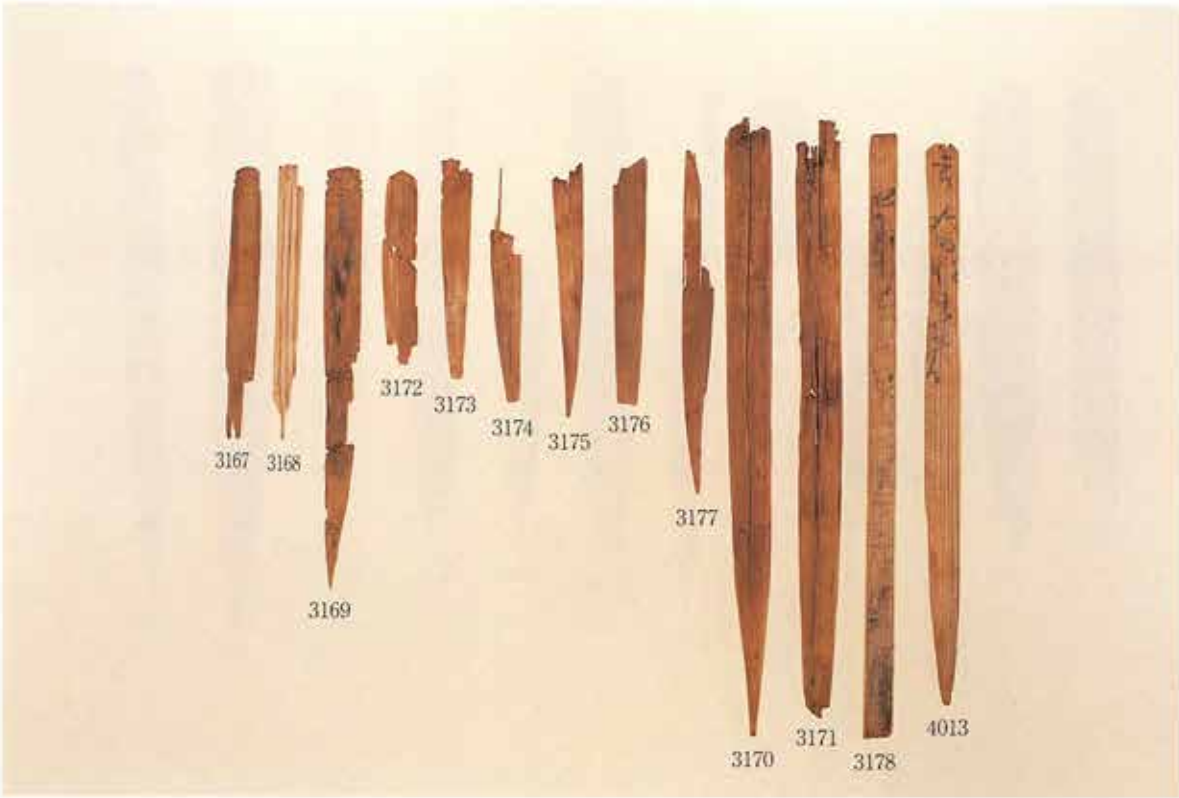
写真図版２　墨書かわらけ


3131
3132
3133
3134
3135
3136
3137
3138
3139
3140
3141
3142

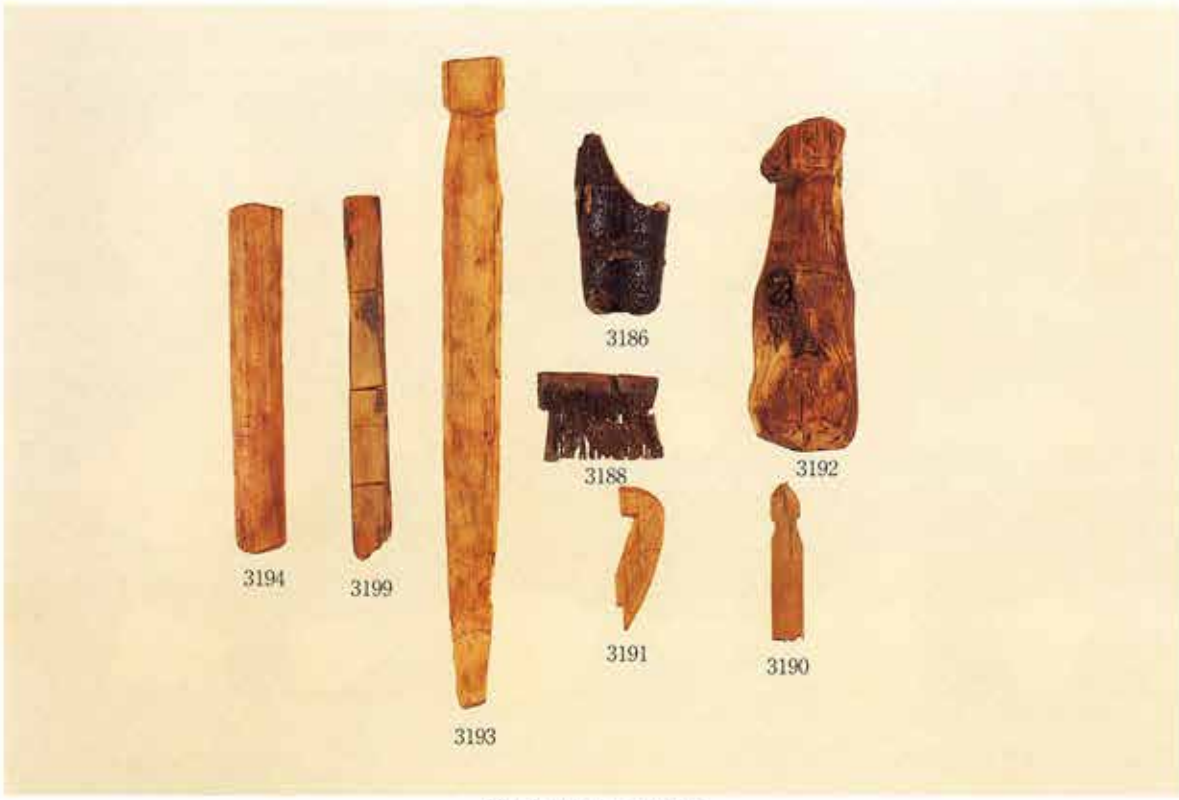

3143
3144
3145
3146
3147
3148
3149
3150
3151
3152
3153
3154

写真図版 3　笹塔婆①


3155
3156
3157
3158
3159
3160
3161
3162
3163
3164
3165
3166


3167
3168
3169
3172
3173
3174
3175
3176
3177
3170
3171
3178
4013

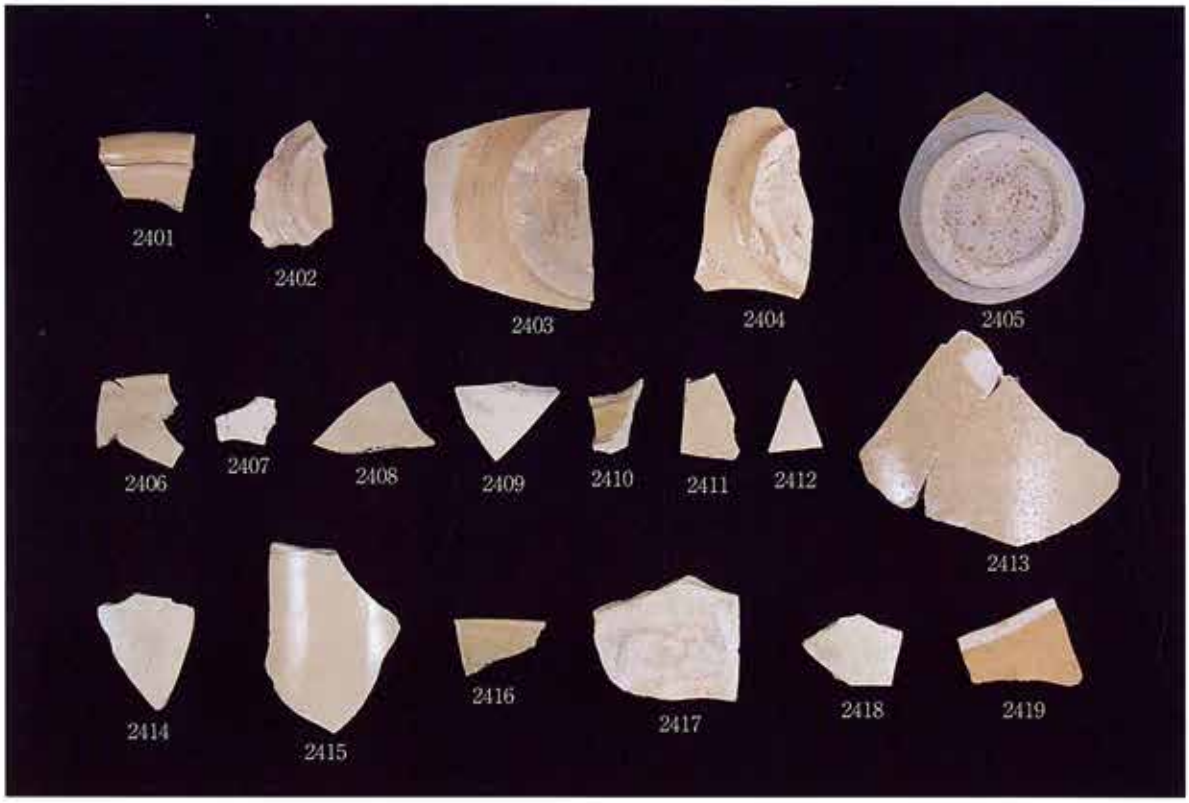
写真図版 4　笹塔婆②



66 1 号池出土木製品

常滑産甕（2231）

写真図版 5　木製品・常滑産甕

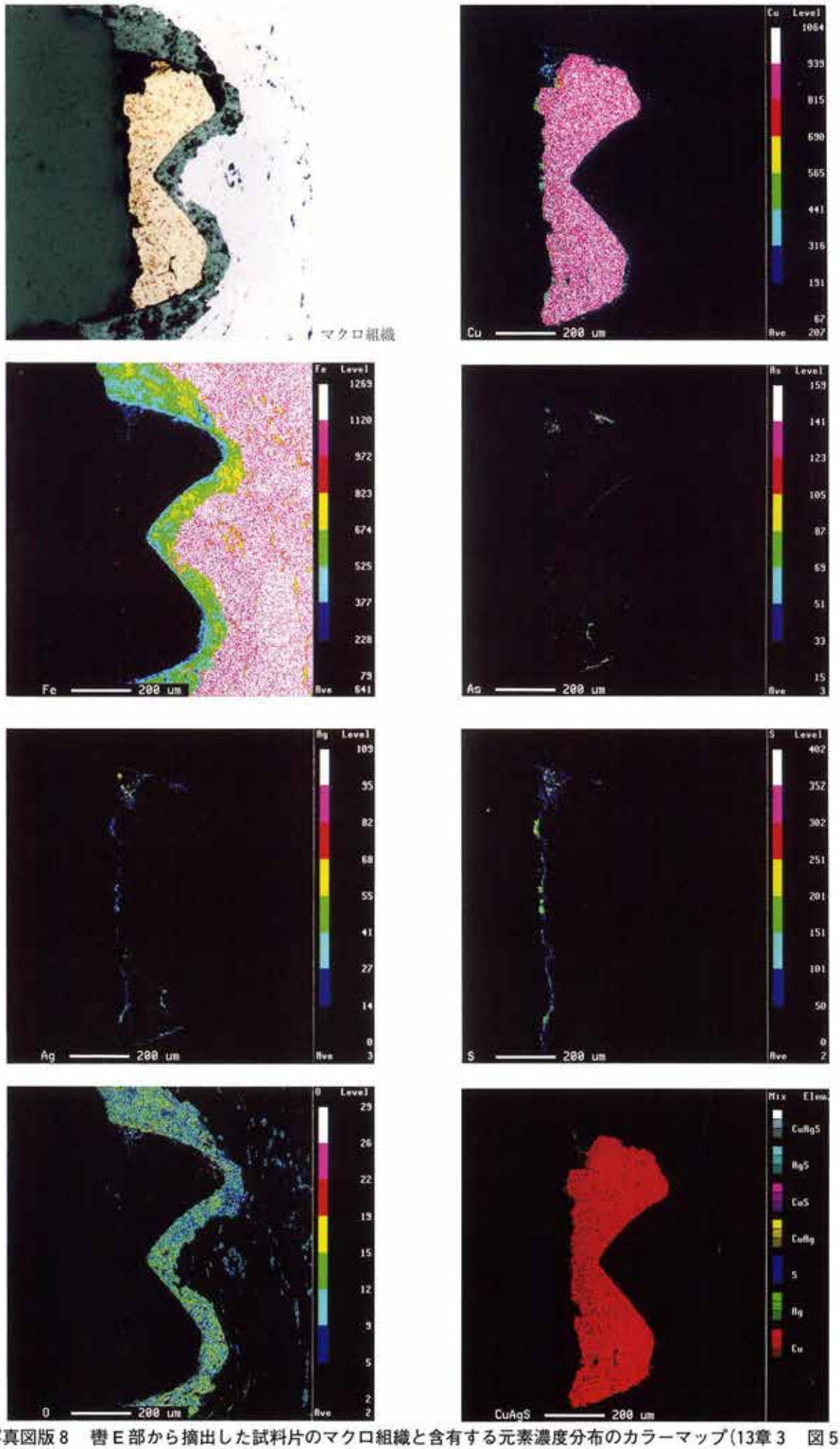


写真図版 6　B 地区出土の中国産陶磁器

46次調査区

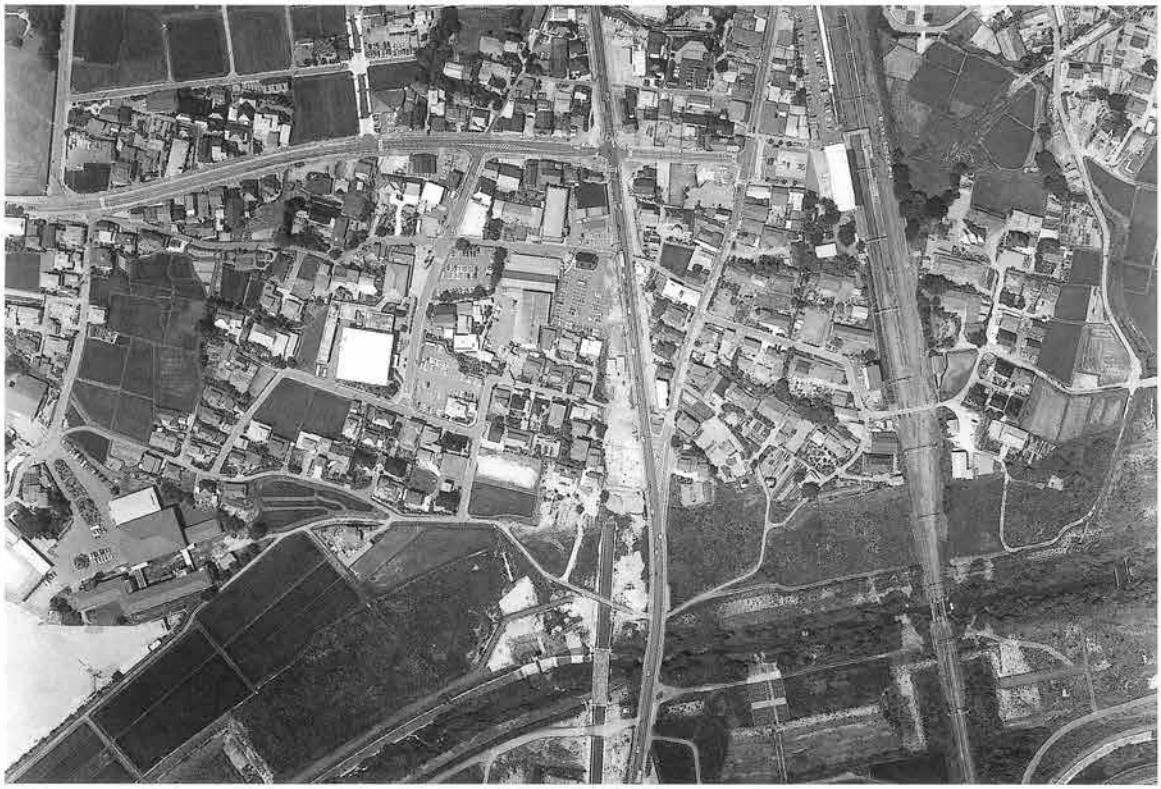
74次調査区

写真図版7　航空写真



写真図版８　轡Ｅ部から摘出した試料片のマクロ組織と含有する元素濃度分布のカラーマップ(13章３　図５)

写真図版 9　昭和30年代の調査区付近
（写真提供国土地理院日本地図センター）



志羅山遺跡航空写真

46次調査（A地区・C地区）航空写真

写真図版10　航空写真①

66次調査（D地区・G地区）航空写真

74次調査（B地区）航空写真

写真図版11　航空写真②

A地区道路状遺構（南→）

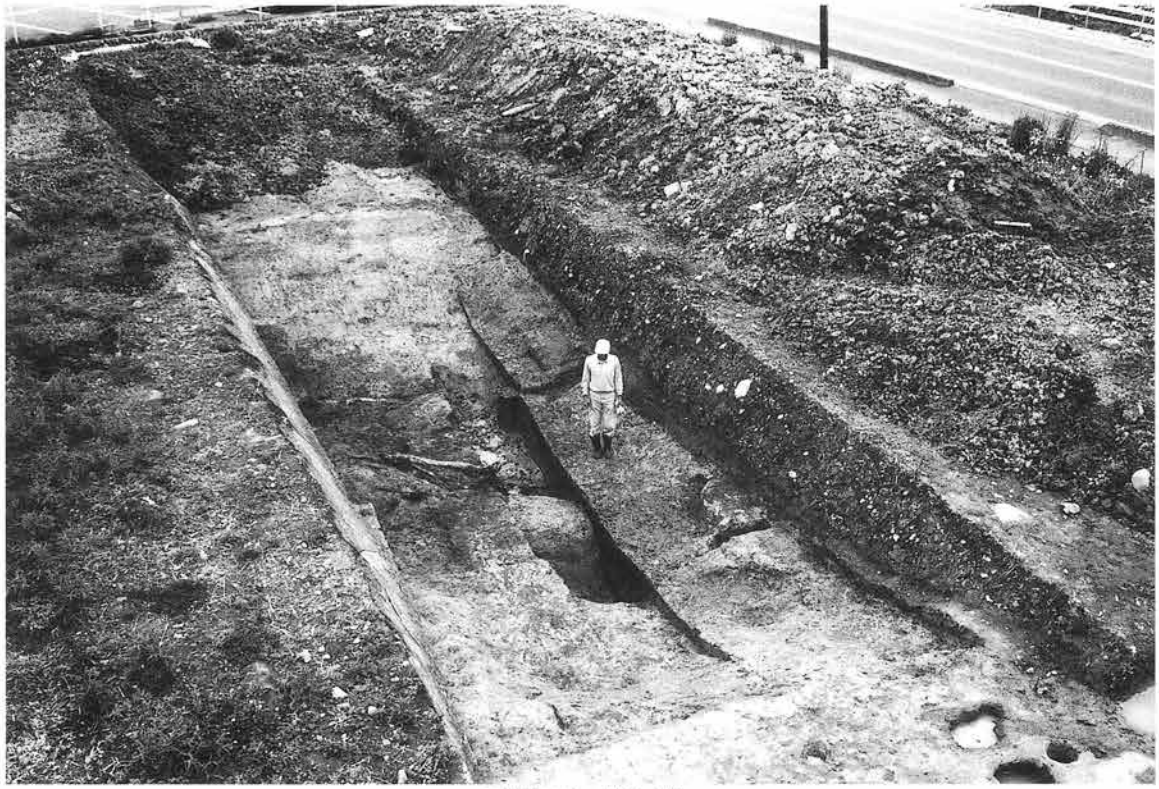
B地区道路状遺構（南→）

写真図版12　道路状遺構①

B地区・C地区道路状遺構（南→）

D地区道路状遺構（南→）

写真図版13　道路状遺構②



C地区66次1号池完掘

D地区埋没沢整地面

写真図版14　66次1号池・D地区沢整地層

66次１号池轡、馬歯、かわらけ出土状況

66次１号池墨書かわらけ（3119）出土状況

写真図版15　66次１号池遺物出土状況①

轡（3246）出土状況

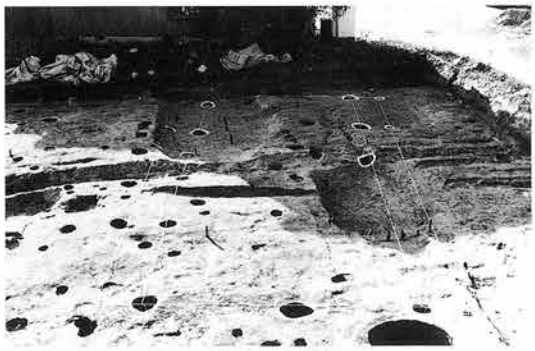
馬歯出土状況

写真図版16　66次１号池遺物出土状況②

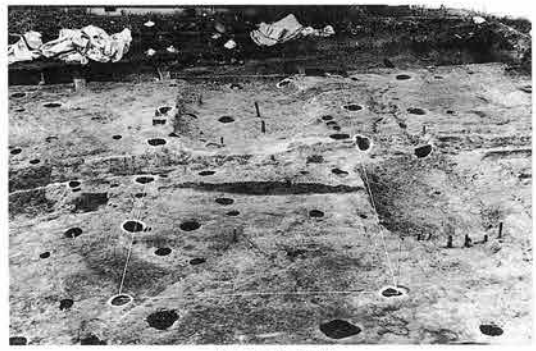
66ＳＤ６馬骨出土状況

66ＳＤ10・66ＳＤ17完掘（東→）

写真図版17　馬骨出土状況、66ＳＤ10と66ＳＤ17



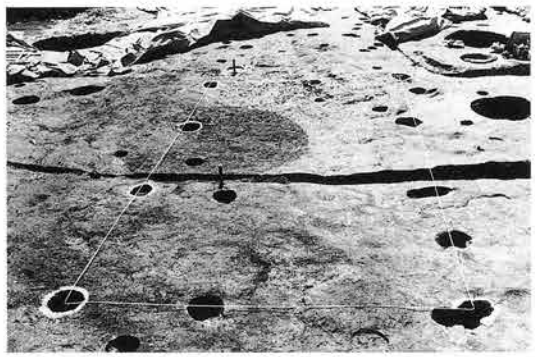
46ＳＢ１完掘



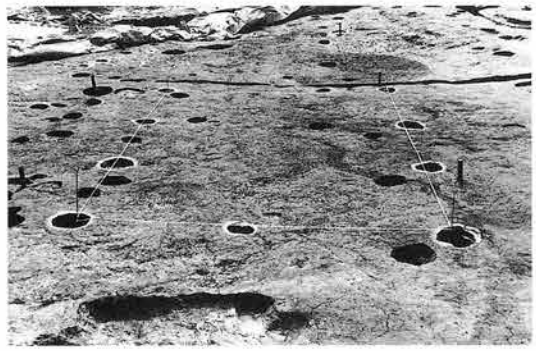
46ＳＢ２完掘

46ＳＢ３完掘

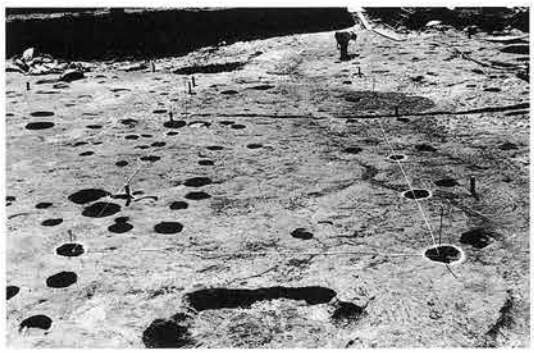
46ＳＢ４完掘



46ＳＢ５完掘



46ＳＢ６完掘



46ＳＢ７完掘

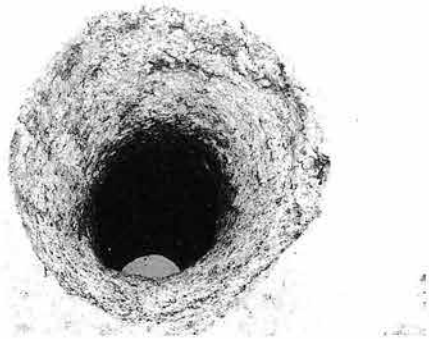
46ＳＢ８完掘

写真図版18　Ａ地区の遺構①

46ＳＢ９完掘

46ＳＥ１完掘

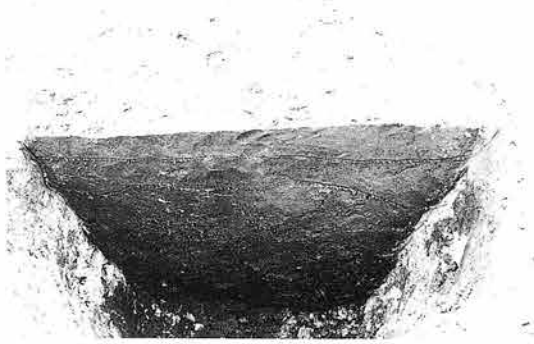
46ＳＥ２断面



46ＳＥ２完掘

46ＳＥ３断面

46ＳＥ３完掘

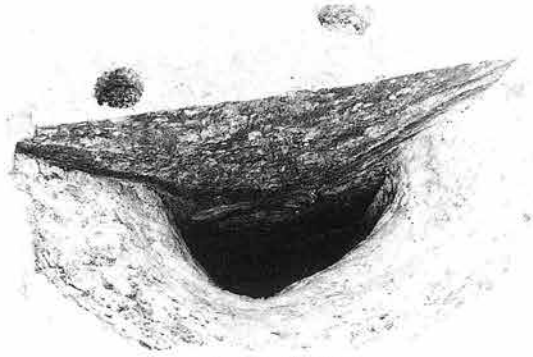


46ＳＥ４断面

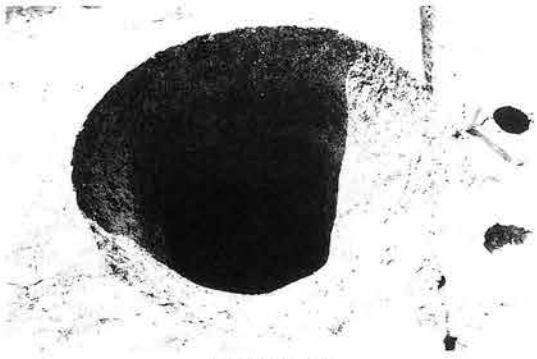
46ＳＥ４完掘

写真図版19　Ａ地区の遺構②

46ＳＥ５完掘



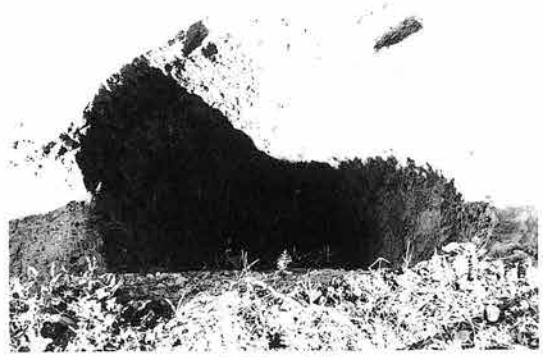
46ＳＥ６断面



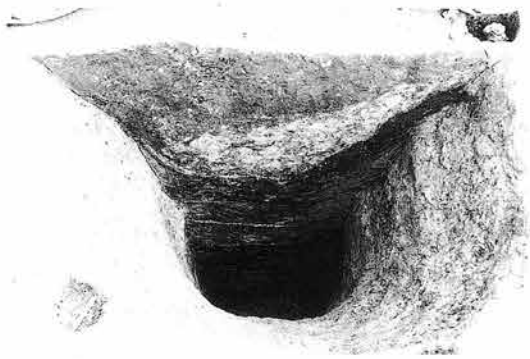
46ＳＥ６完掘

46ＳＥ７断面上部

46ＳＥ７断面下部



46ＳＥ７完掘



46ＳＥ８断面

46ＳＥ８完掘

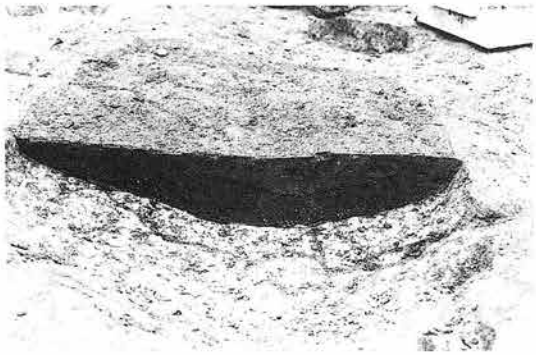
写真図版20　Ａ地区の遺構③

46ＳＥ９断面上位

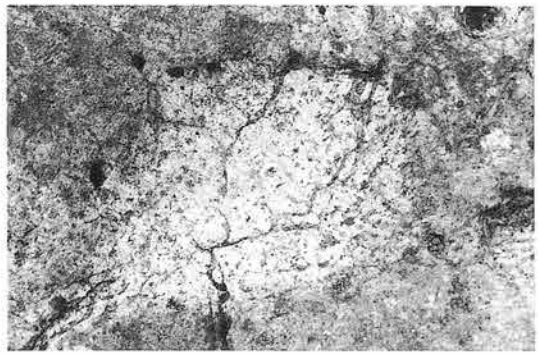
46ＳＥ９断面中位

46ＳＥ９断面下位

46ＳＥ９完掘

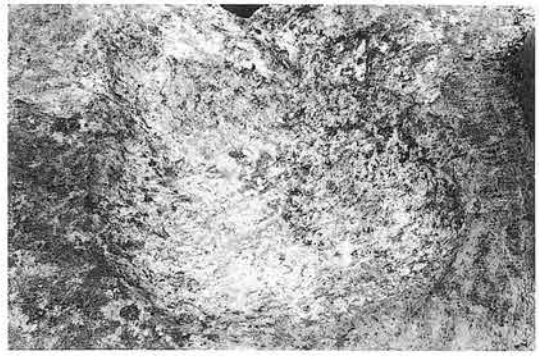


46ＳＫ１断面



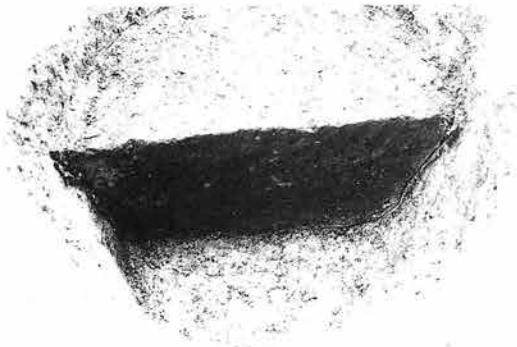
46ＳＫ１完掘

46ＳＫ２断面



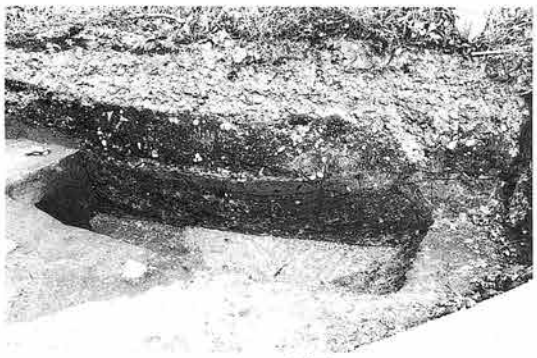
46ＳＫ２完掘

写真図版21　Ａ地区の遺構④



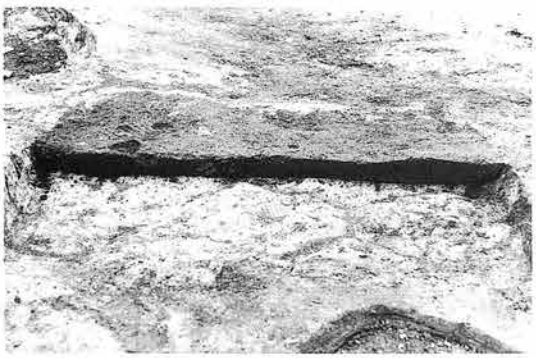
46ＳＫ３断面

46ＳＫ３完掘

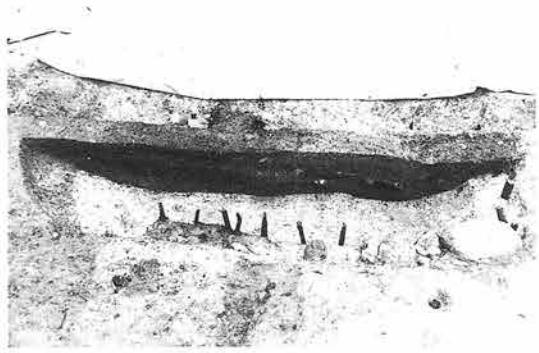


46ＳＫ４断面

46ＳＫ４完掘



46ＳＫ５断面

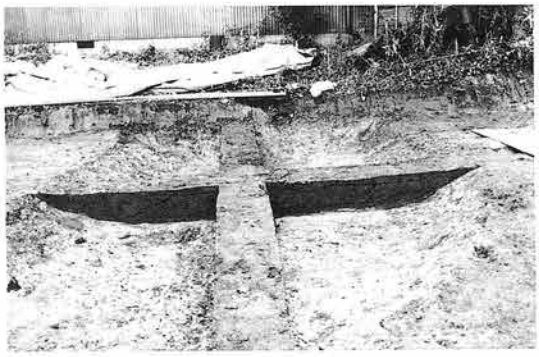


46ＳＫ６断面

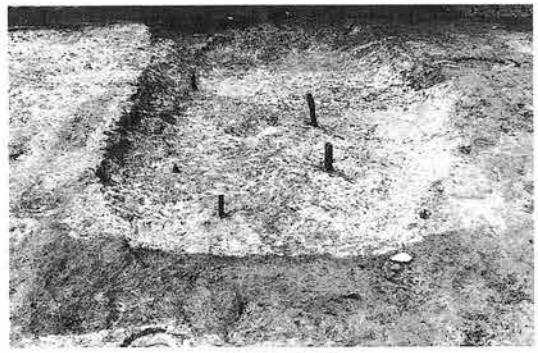
46ＳＫ６完掘

46ＳＫ６完掘

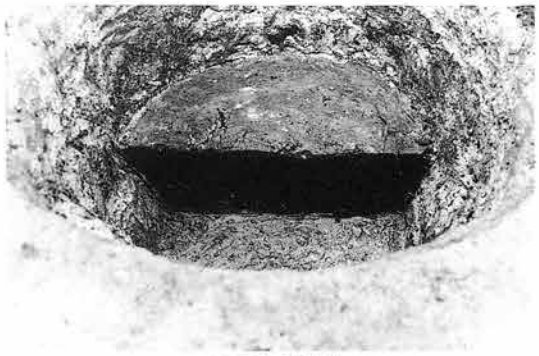
写真図版22　Ａ地区の遺構⑤



46ＳＫ７断面

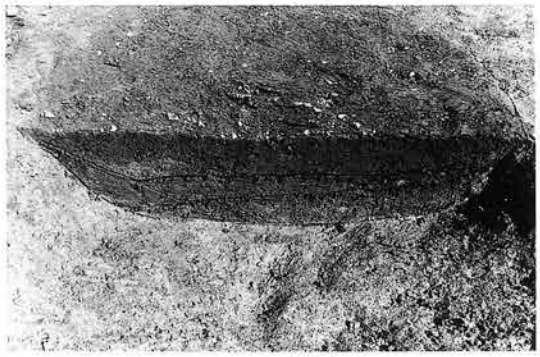


46ＳＫ７完掘

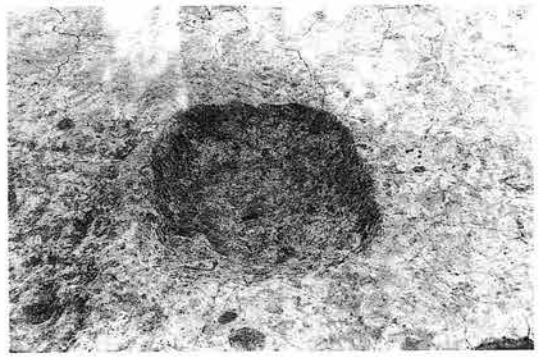


46ＳＫ８断面

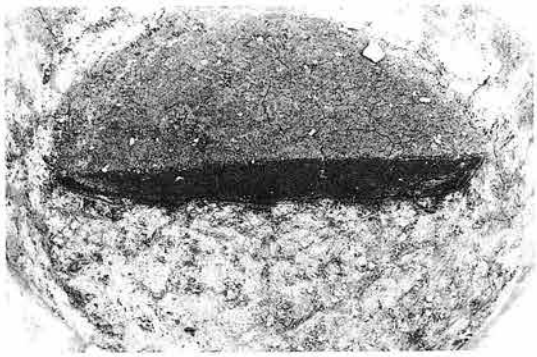
46ＳＫ８完掘



46ＳＫ９断面



46ＳＫ９完掘

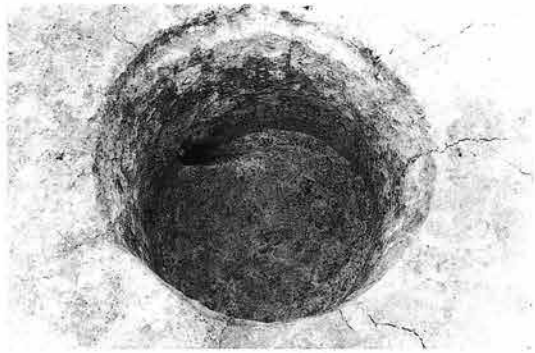


46ＳＫ10断面

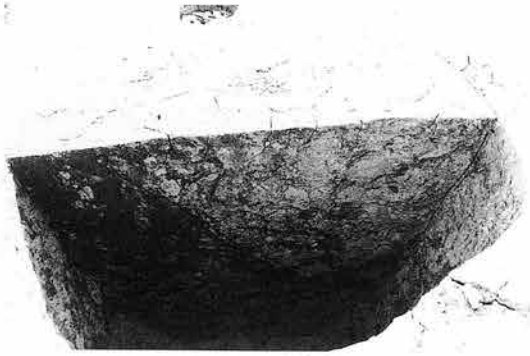
46ＳＫ10完掘

写真図版23　Ａ地区の遺構⑥

46ＳＫ11断面



46ＳＫ11完掘

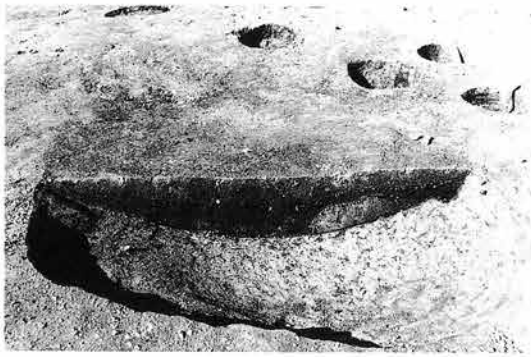


46ＳＫ12断面

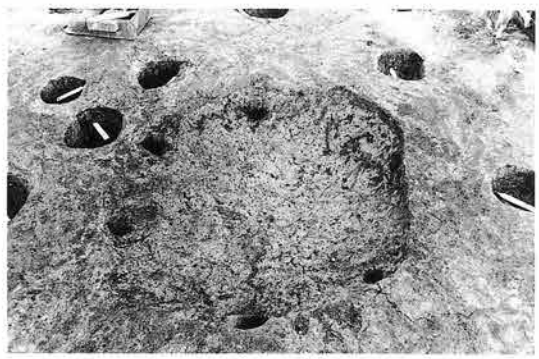
46ＳＫ12完掘

46ＳＫ13断面

46ＳＫ13完掘

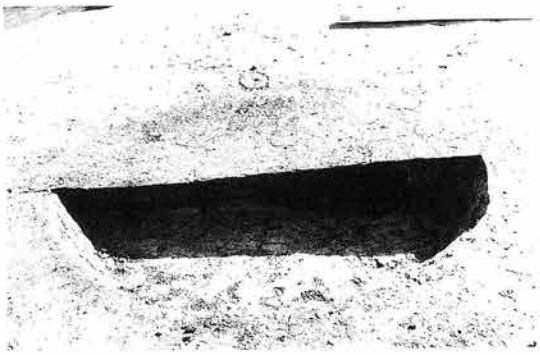


46ＳＫ14断面



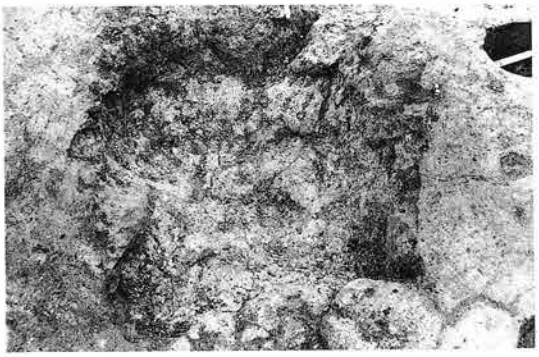
46ＳＫ14完掘

写真図版24　Ａ地区の遺構⑦

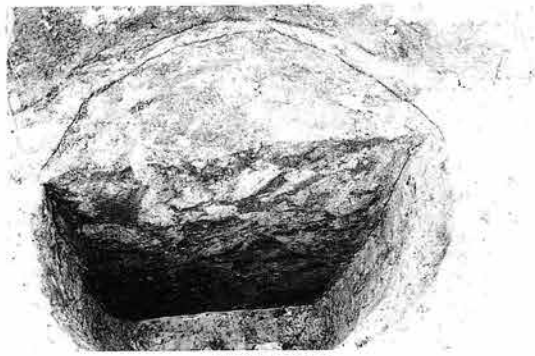


46ＳＫ15断面

46ＳＫ16断面

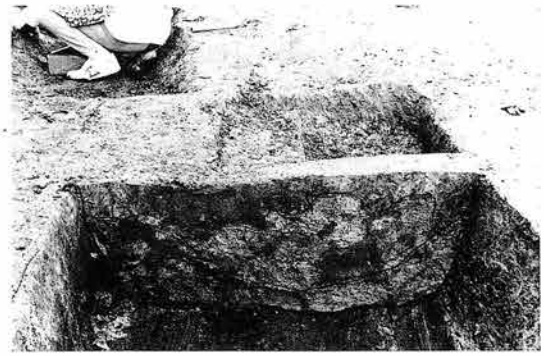


46ＳＫ16完掘

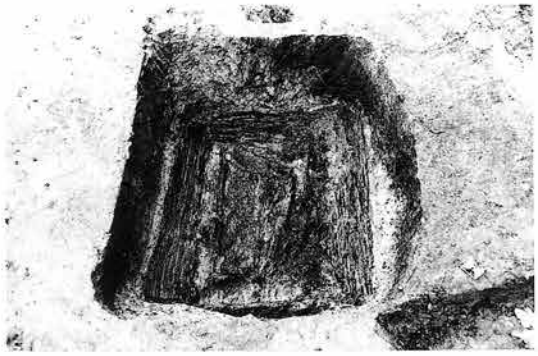


46ＳＫ17断面

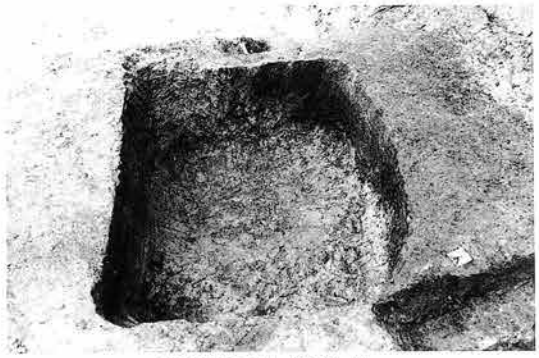
46ＳＫ17完掘



46ＳＫ18断面

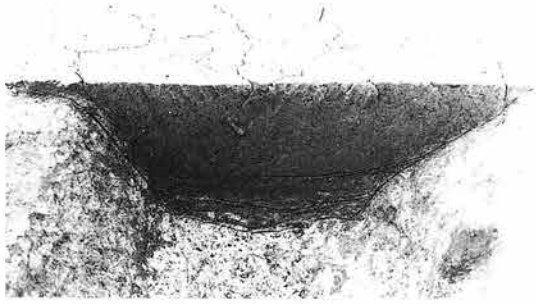


46ＳＫ18完掘



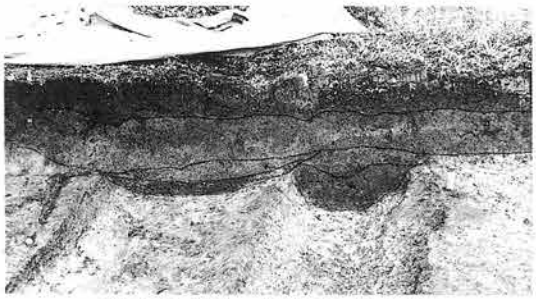
46ＳＫ18完掘（板除去）

写真図版25　Ａ地区の遺構⑧

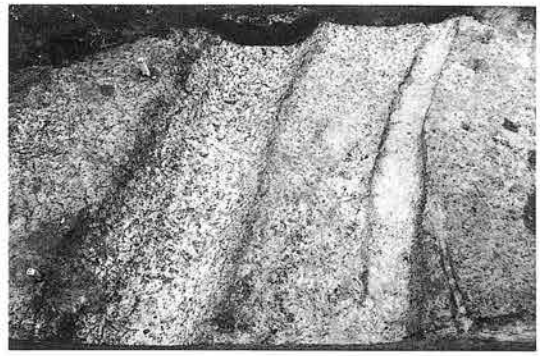


46ＳＤ１断面

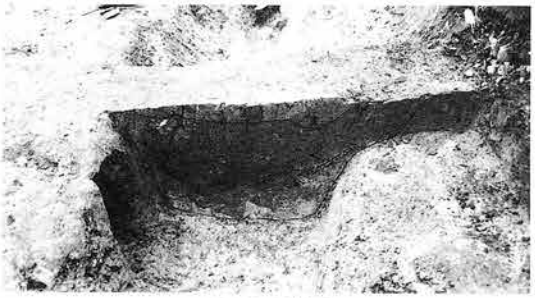
46ＳＤ１完掘



46ＳＤ２（左）・46ＳＤ３（右）断面



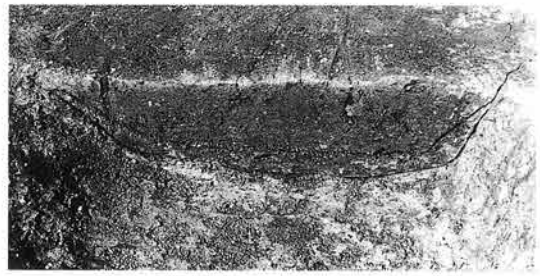
46ＳＤ２（左）・46ＳＤ３（右）完掘



46ＳＤ３断面

46ＳＤ４断面

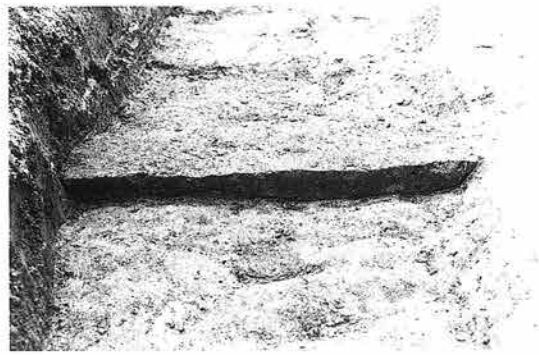
46ＳＤ４完掘



46ＳＤ５断面

写真図版26　Ａ地区の遺構⑨

46ＳＤ５完掘



46ＳＤ６断面

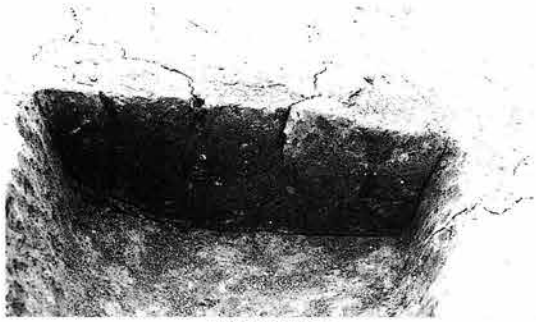
46ＳＤ６完掘

46ＳＤ７完掘

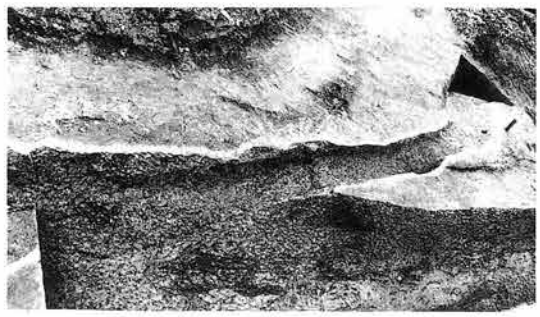
46ＳＤ７完掘

46ＳＤ７断面

写真図版27　Ａ地区の遺構⑩



46ＳＤ８断面



46ＳＤ８完掘

46ＳＤ９断面

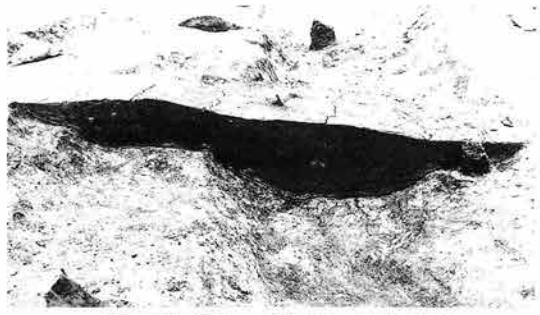
46ＳＤ９断面

46ＳＤ９完掘

46ＳＤ９完掘

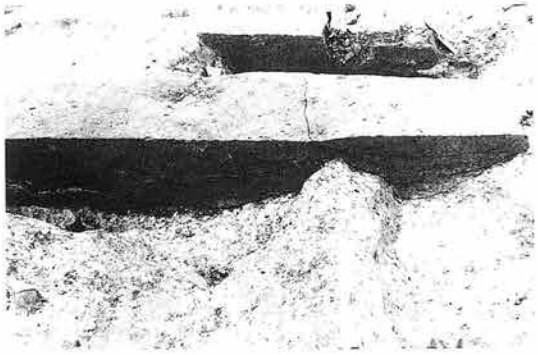
46ＳＤ10完掘

46ＳＤ10断面

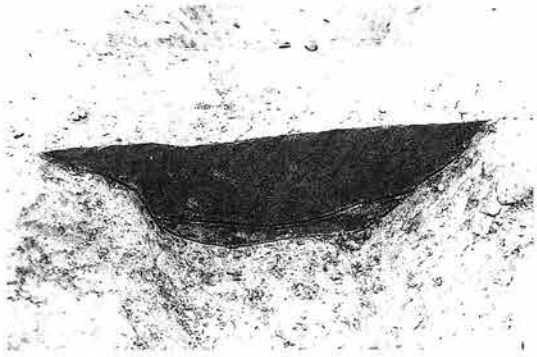


46ＳＤ11（左）・46ＳＤ12（右）断面

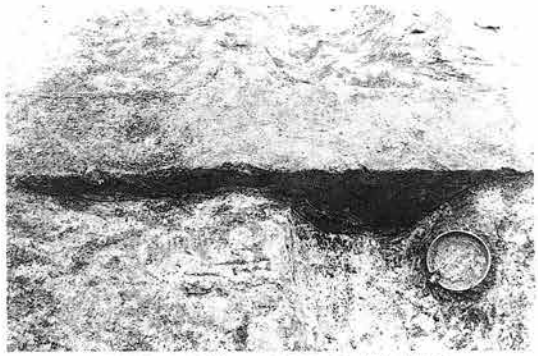
写真図版28　Ａ地区の遺構⑪



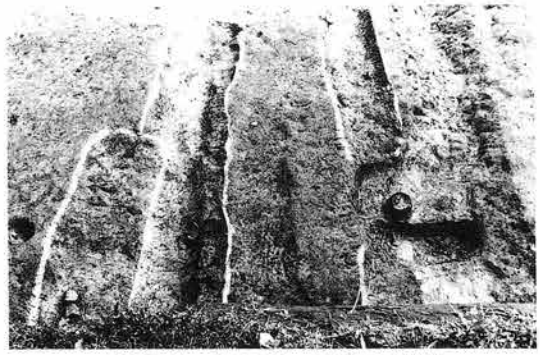
46ＳＤ14（左）・46ＳＤ１（中）
46ＳＤ12（右）断面



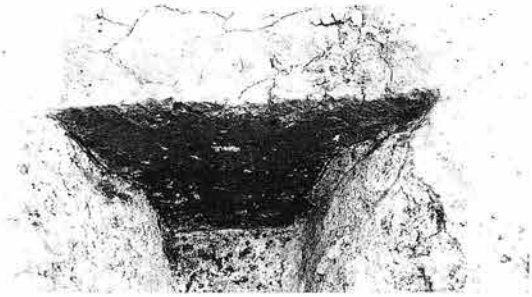
46ＳＤ13断面



46ＳＤ15（右）・46ＳＤ13（右）断面



46ＳＤ11・46ＳＤ13・46ＳＤ15完掘



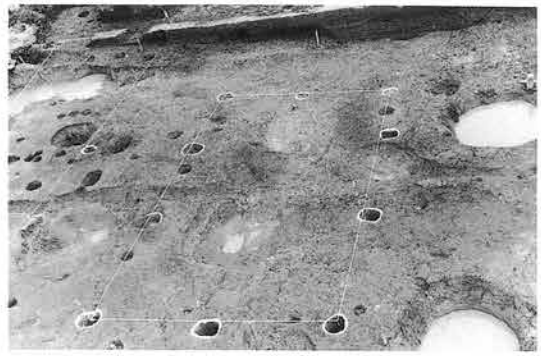
46ＳＤ14断面

46ＳＤ12完掘

46ＳＤ14完掘

写真図版29　Ａ地区の遺構⑫

74ＳＢ１完掘



74ＳＢ２完掘

74ＳＢ３完掘

74ＳＢ４完掘

74ＳＢ５完掘

74ＳＢ６完掘

74ＳＢ７完掘

74ＳＢ８完掘

写真図版30　Ｂ地区の遺構①

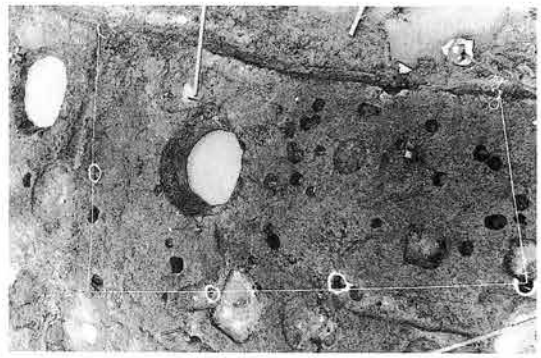
74ＳＢ９完掘

74ＳＢ10完掘

74ＳＢ11完掘

74ＳＢ12完掘

74ＳＢ13完掘



74ＳＢ14完掘

74ＳＢ15完掘

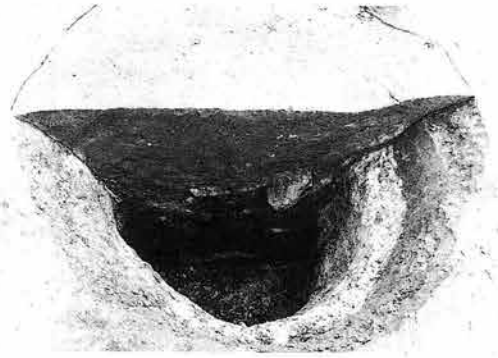
74ＳＢ16完掘

写真図版31　Ｂ地区の遺構②

74ＳＢ17完掘

74ＳＢ18完掘

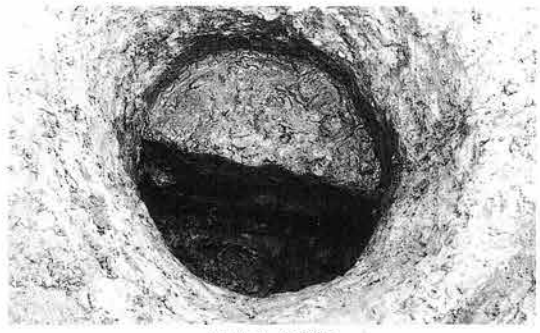
74ＳＢ27完掘



74ＳＥ１完掘

74ＳＥ１完掘

74ＳＥ２断面



74ＳＥ２完掘

写真図版32　Ｂ地区の遺構③

74ＳＥ２断面

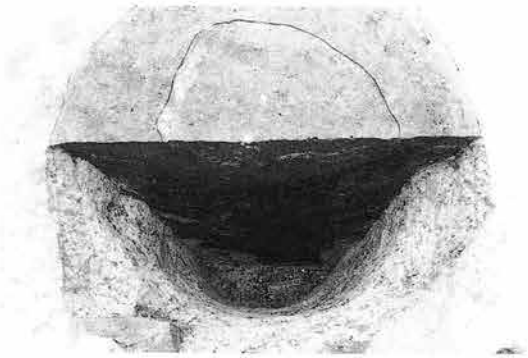
74ＳＥ２完掘

74ＳＥ３断面

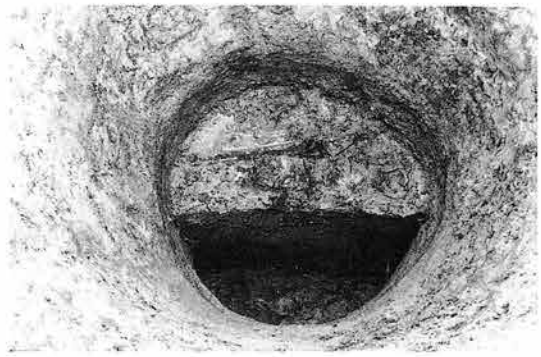
74ＳＥ３遺物出土状況

74ＳＥ３遺物出土状況

74ＳＥ３完掘



74ＳＥ４上部断面



74ＳＥ４下部断面

写真図版33　Ｂ地区の遺構④

74ＳＥ４完掘

74ＳＥ５断面（上位）

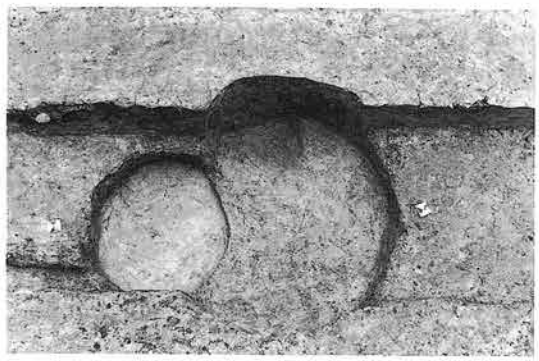
74ＳＥ５断面（中位）

74ＳＥ５完掘

66ＳＫ３断面

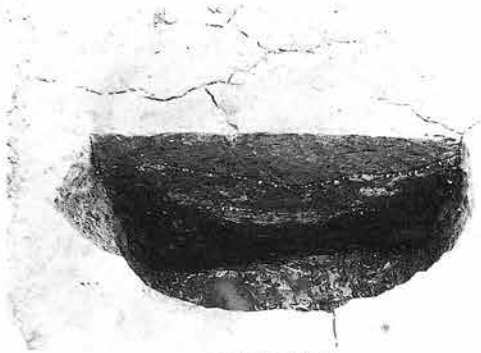
66ＳＫ３完掘

66ＳＫ４（右）・66ＳＫ６（左）断面



66ＳＫ４・66ＳＫ６完掘

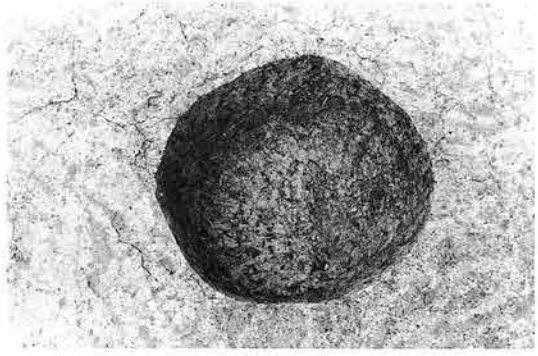
写真図版34　Ｂ地区の遺構⑤



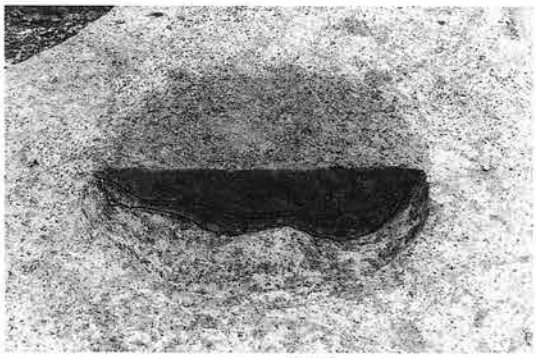
66ＳＫ５断面

66ＳＫ５完掘

74ＳＫ１断面

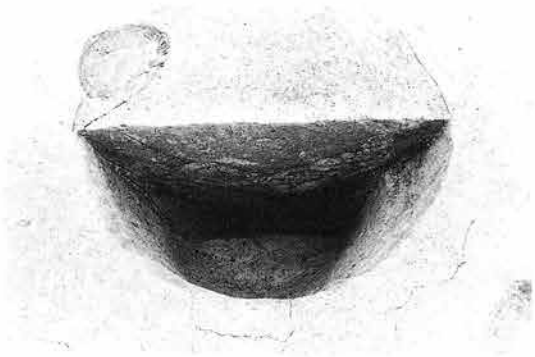


74ＳＫ１完掘

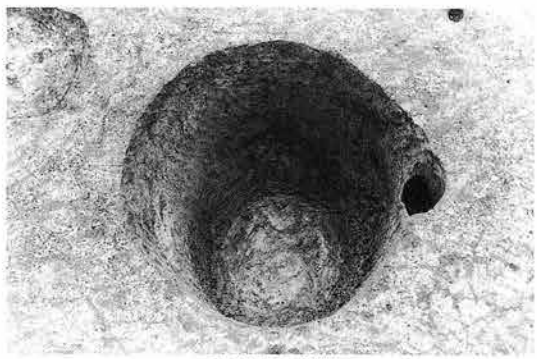


74ＳＫ２断面

74ＳＫ２完掘

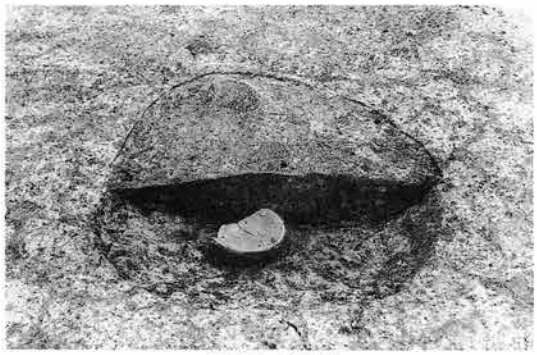


74ＳＫ３断面

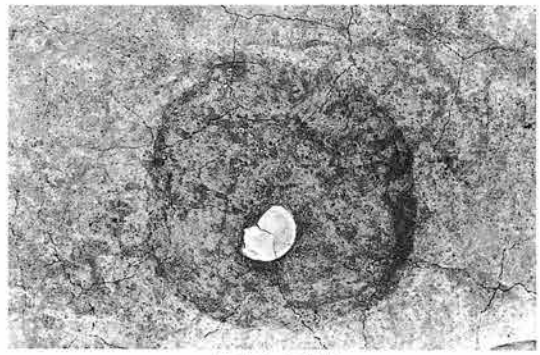


74ＳＫ３完掘

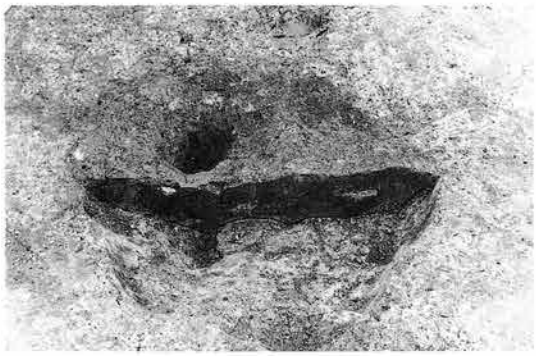
写真図版35　Ｂ地区の遺構⑥



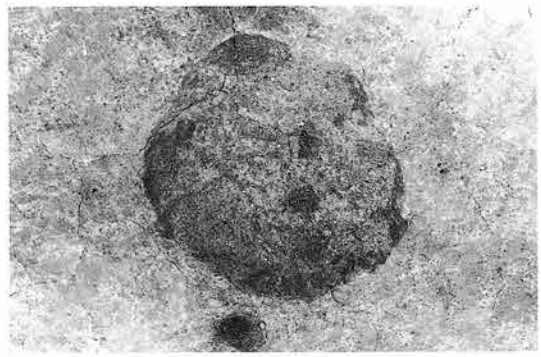
74ＳＫ４断面



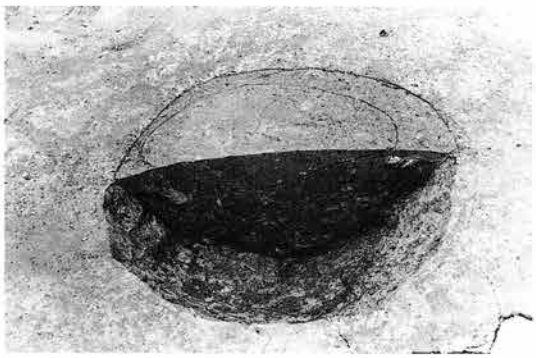
74ＳＫ４完掘



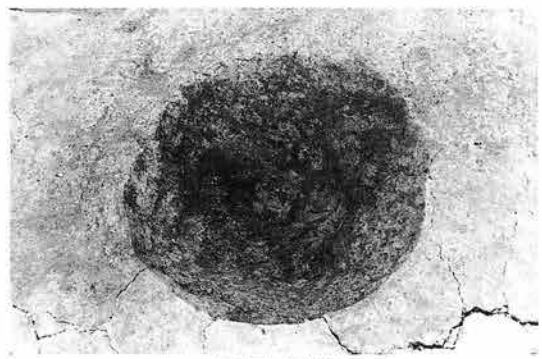
74ＳＫ５断面



74ＳＫ５完掘

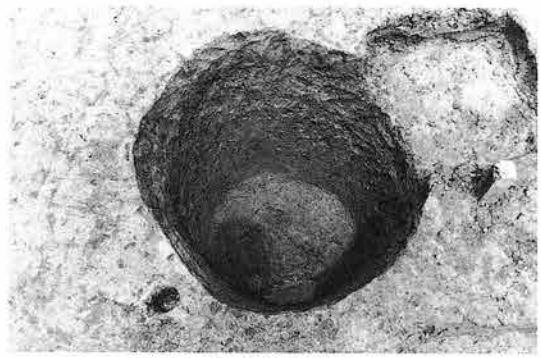


74ＳＫ６断面



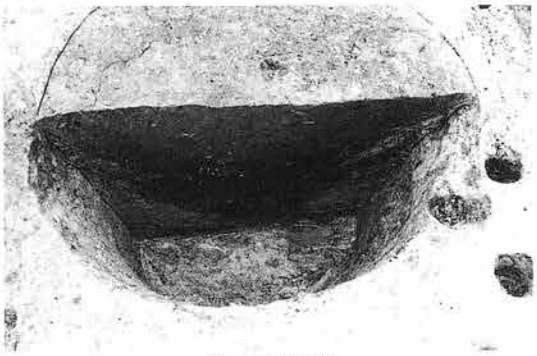
74ＳＫ６完掘

74ＳＫ７断面



74ＳＫ７完掘

写真図版36　Ｂ地区の遺構⑦



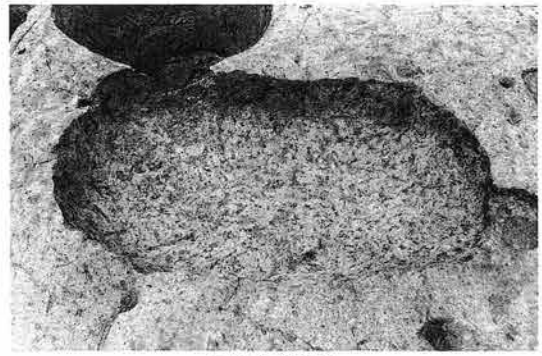
74ＳＫ８断面

74ＳＫ８完掘

74ＳＫ８遺物出土状況

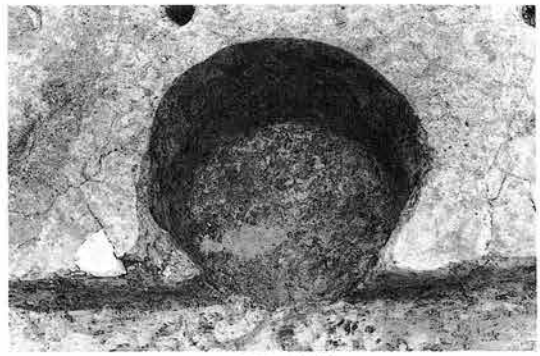
74ＳＫ９断面

74ＳＫ９遺物出土状況



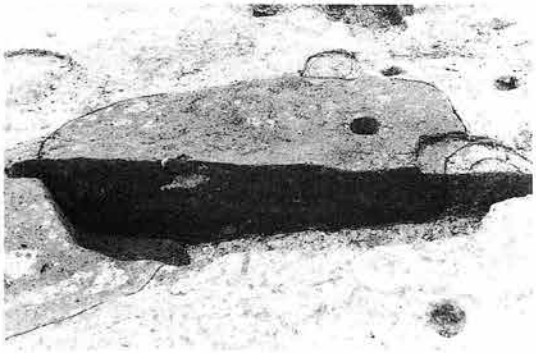
74ＳＫ９完掘

74ＳＫ10断面

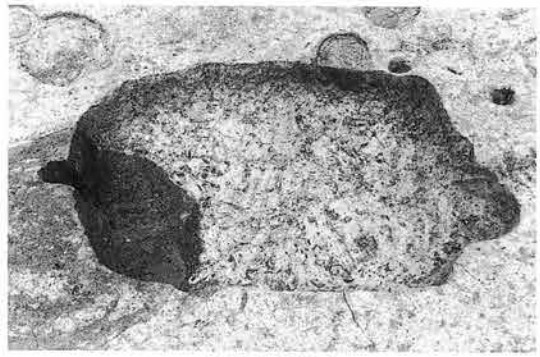


74ＳＫ10完掘

写真図版37　Ｂ地区の遺構⑧

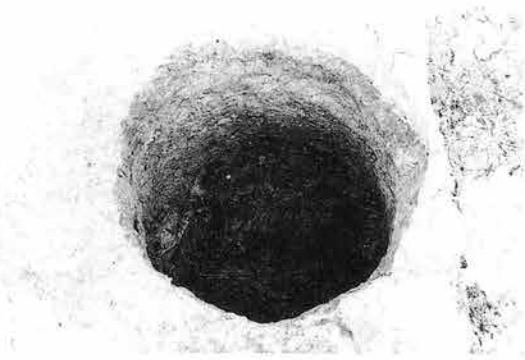


74ＳＫ11断面



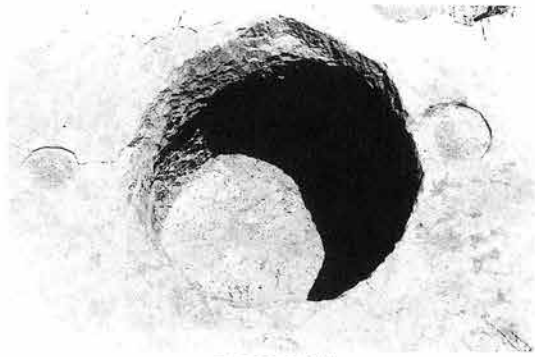
74ＳＫ11完掘

74ＳＫ12断面

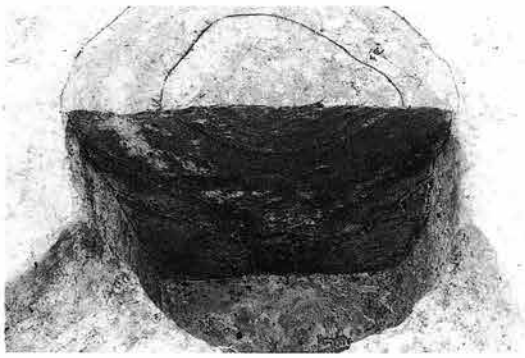


74ＳＫ12ちゅう木出土状況

74ＳＫ12ちゅう木出土状況



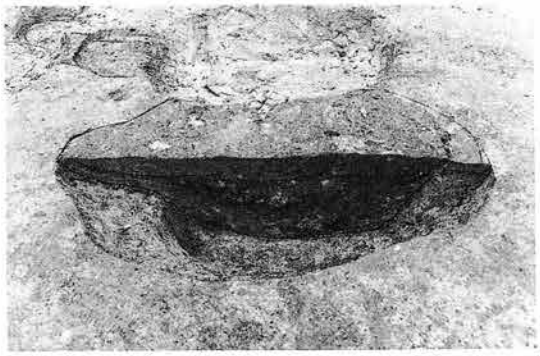
74ＳＫ12完掘



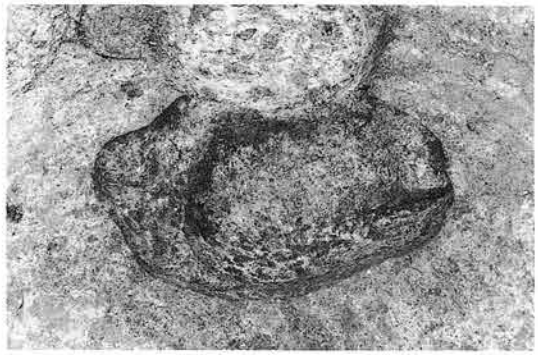
74ＳＫ13断面

74ＳＫ13完掘

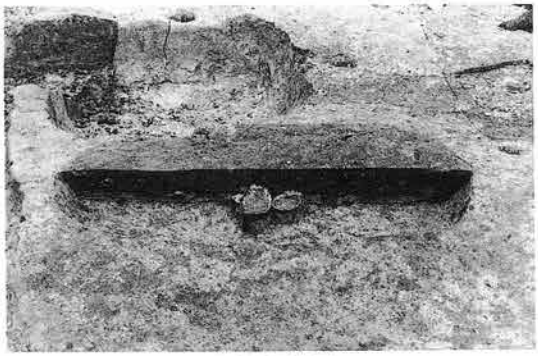
写真図版38　Ｂ地区の遺構⑨



74ＳＫ14断面



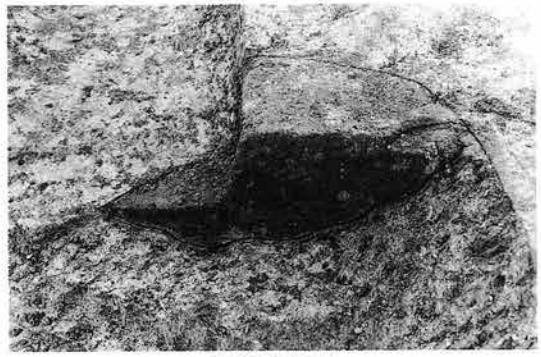
74ＳＫ14完掘



74ＳＫ15断面

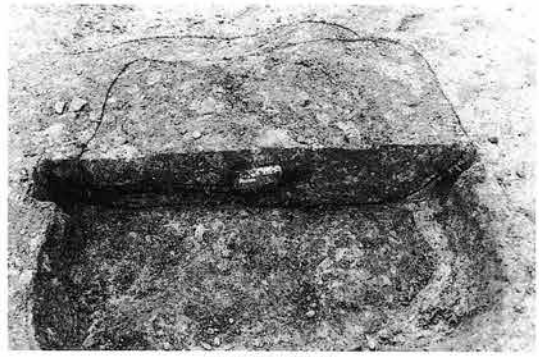
74ＳＫ15完掘

74ＳＫ16断面



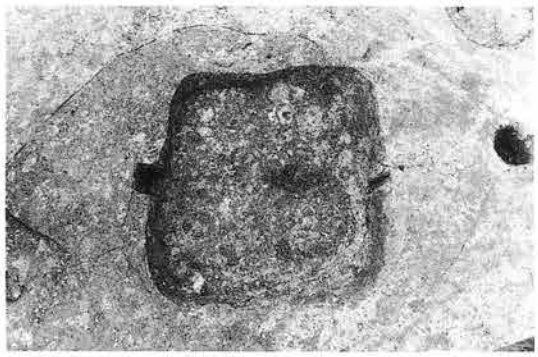
74ＳＫ21断面

74ＳＫ16・74ＳＫ21完掘

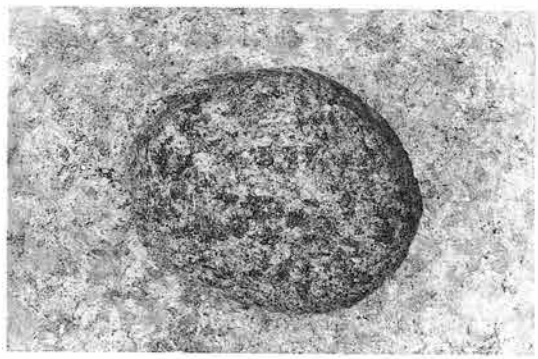


74ＳＫ17断面

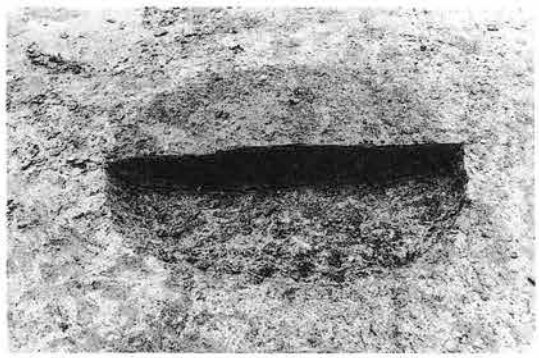
写真図版39　Ｂ地区の遺構⑩



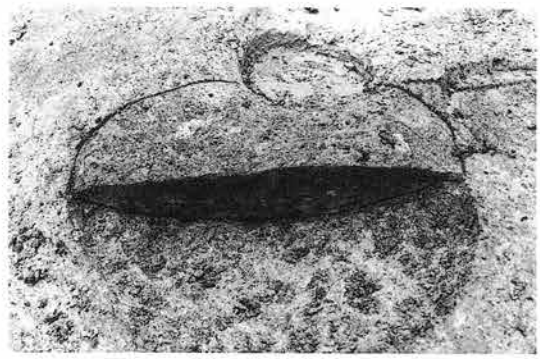
74ＳＫ17完掘



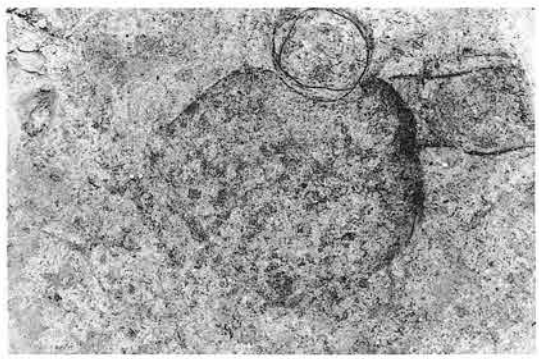
74ＳＫ18完掘



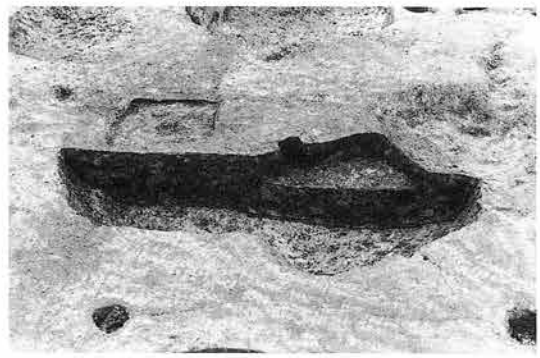
74ＳＫ18断面



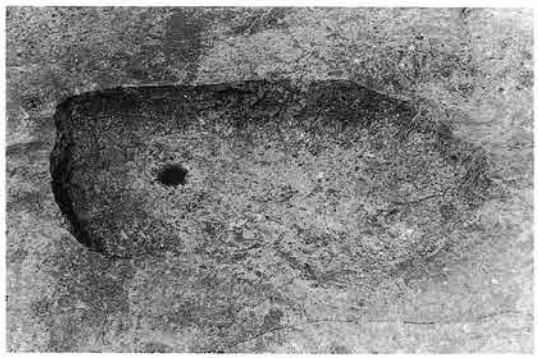
74ＳＫ19断面



74ＳＫ19完掘



74ＳＫ20断面

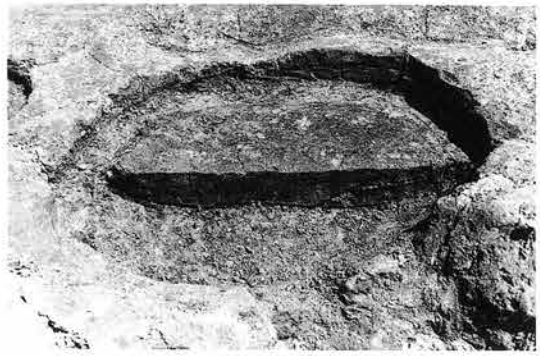


74ＳＫ20完掘

74ＳＫ22断面

写真図版40　Ｂ地区の遺構⑪

74ＳＫ22完掘

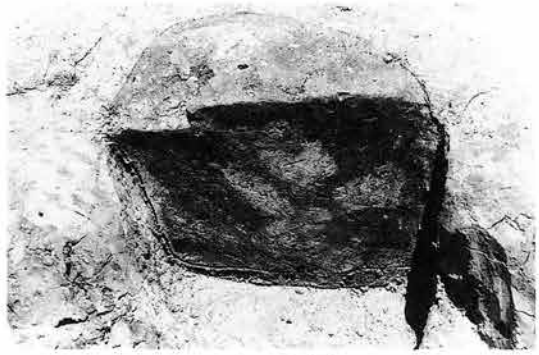


74ＳＫ23断面

74ＳＫ23完掘

74ＳＫ24断面

74ＳＫ24完掘

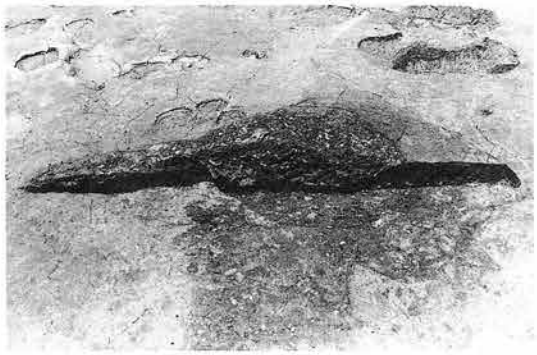


74ＳＫ25断面

74ＳＫ26断面

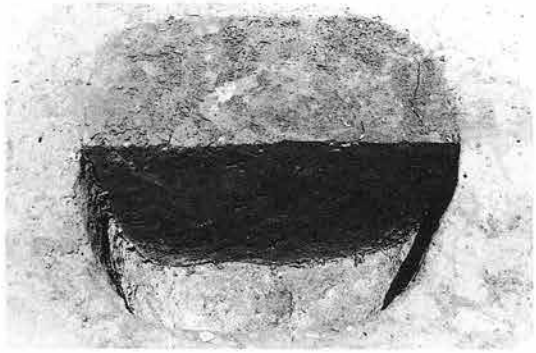
74ＳＫ26完掘

写真図版41　Ｂ地区の遺構⑫

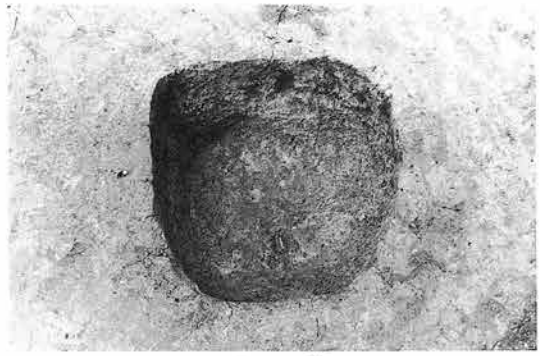


74 S K27断面

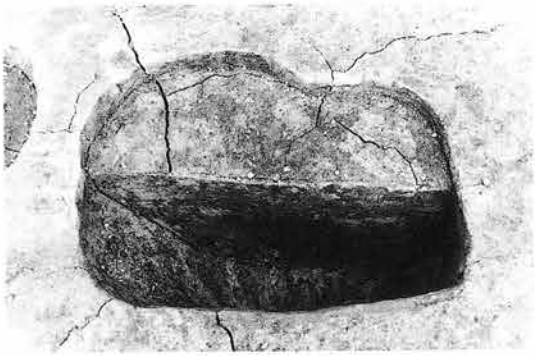
74 S K27完掘



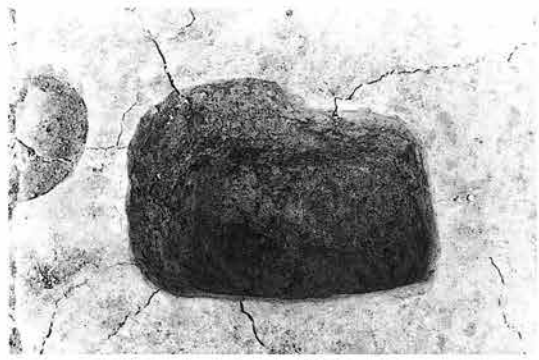
74 S K28断面



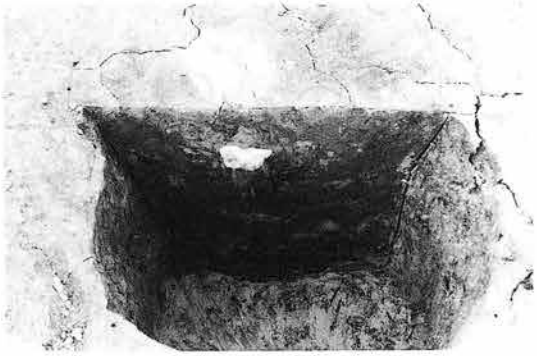
74 S K28完掘



74 S K29断面



74 S K29完掘



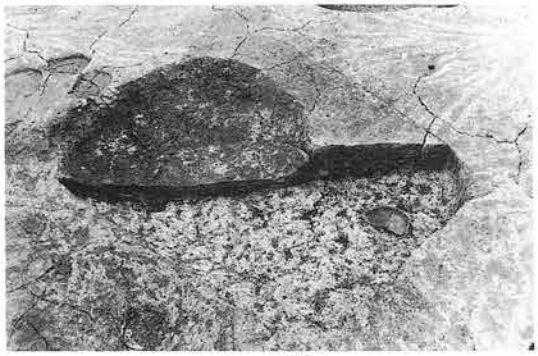
74 S K30断面

74 S K30完掘

写真図版42　B地区の遺構⑬

74 S K31断面

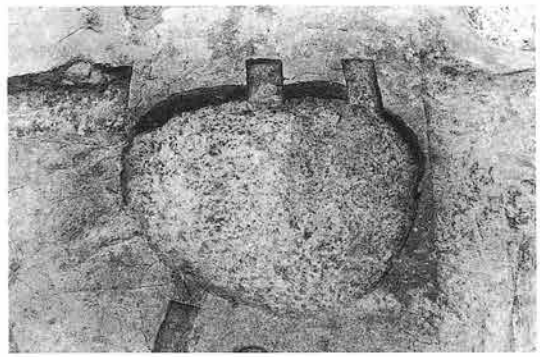
74 S K31完掘



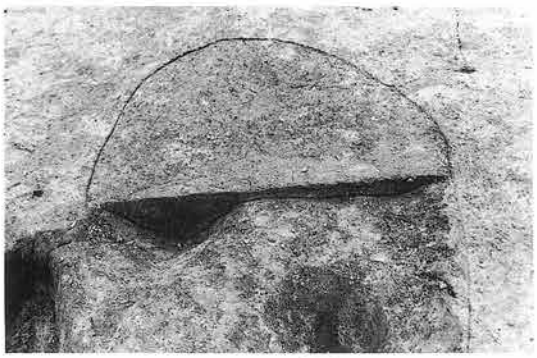
74 S K32断面

74 S K32完掘

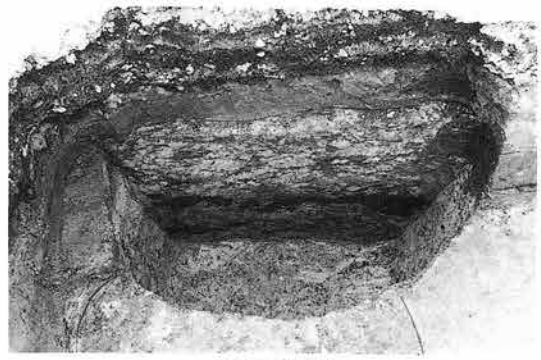
74 S K33断面



74 S K33完掘



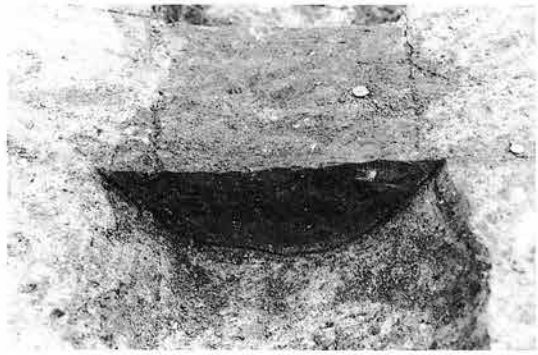
74 S K34断面



74 S K35断面

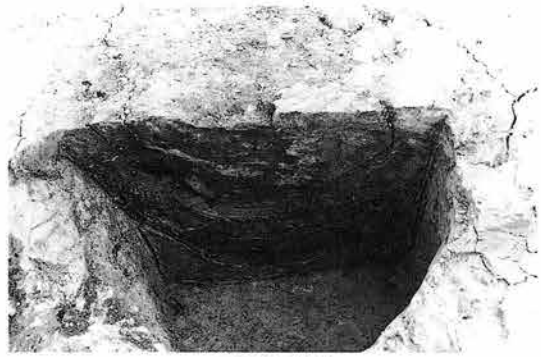
写真図版43　B地区の遺構⑭

74ＳＫ36断面



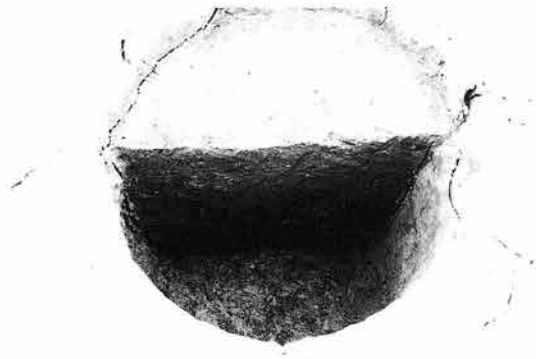
74ＳＫ36断面（溝部分）

74ＳＫ36完掘



74ＳＫ37断面

74ＳＫ37完掘



74ＳＫ38断面

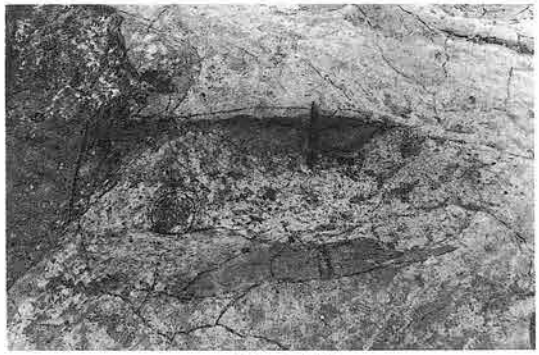
74ＳＫ38完掘

74ＳＸ１断面（東西）

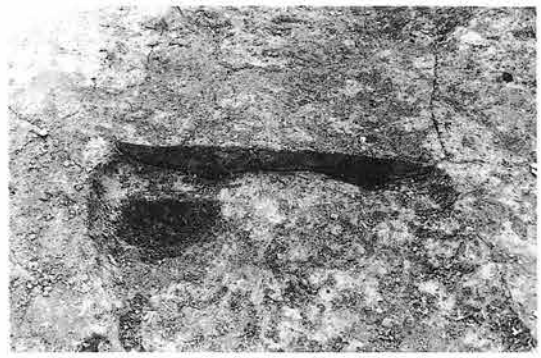
写真図版44　Ｂ地区の遺構⑮

74ＳＸ１断面（南北）

74ＳＸ１遺物出土状況



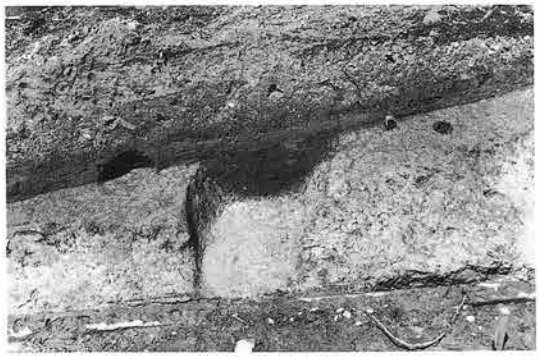
74ＳＸ１完掘



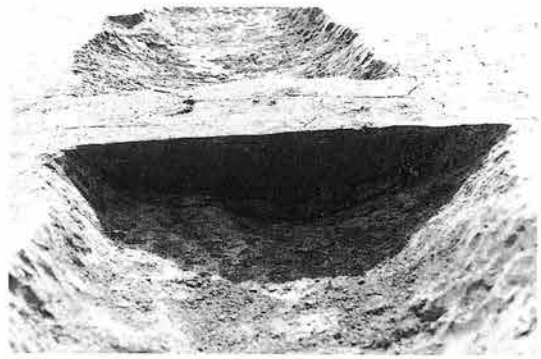
74ＳＤ１断面

74ＳＤ１完掘

74ＳＤ２断面

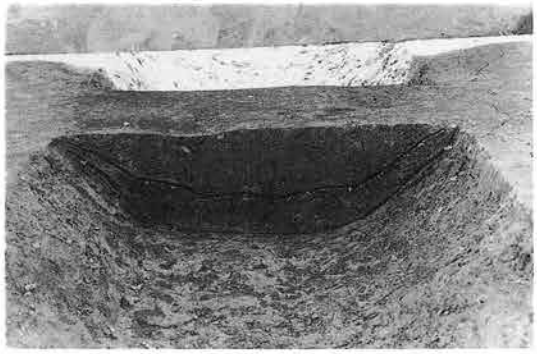


74ＳＤ２完掘

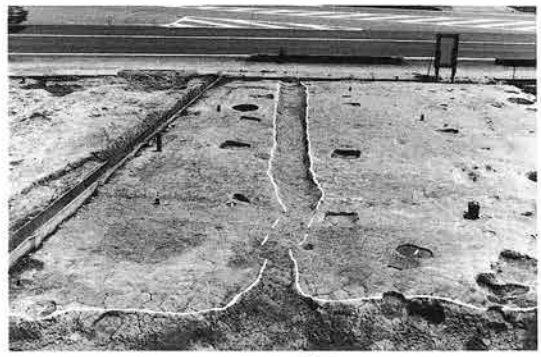


74ＳＤ３断面

写真図版45　Ｂ地区の遺構⑯

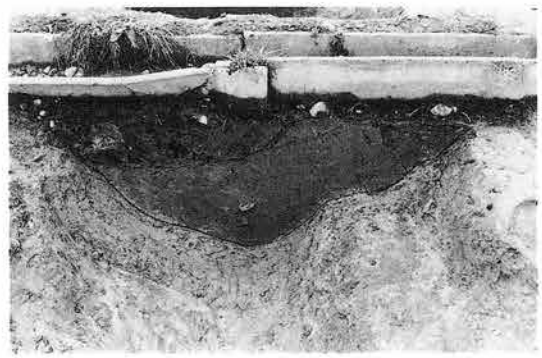


74ＳＤ３断面

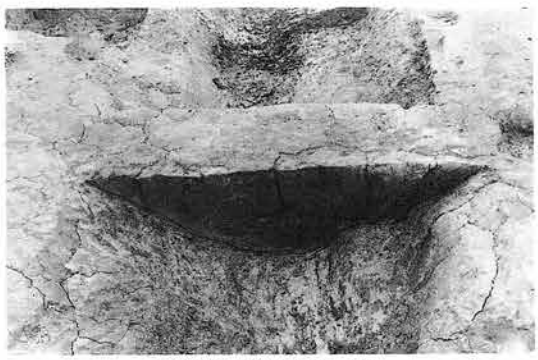


74ＳＤ３完掘

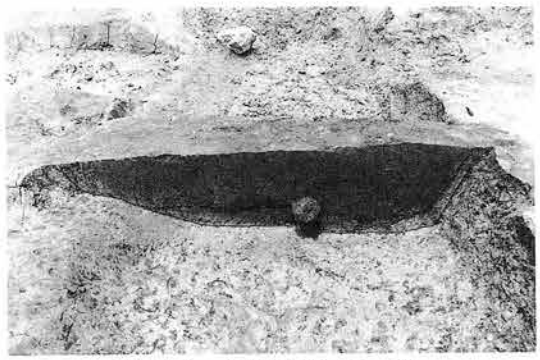
74ＳＤ４断面（Ａ－Ｂ）



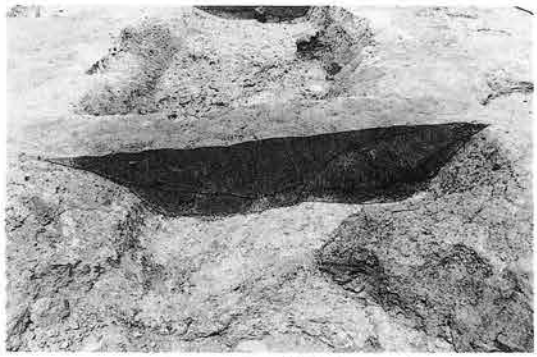
74ＳＤ４断面（Ｃ－Ｄ）



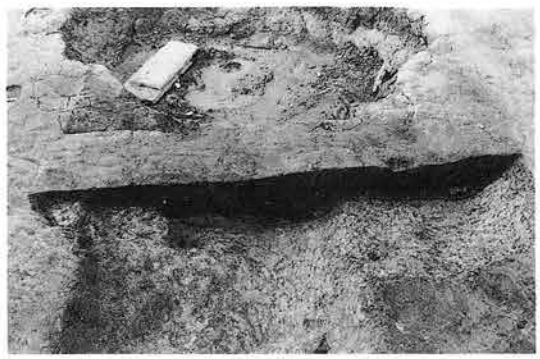
74ＳＤ４断面（Ｅ－Ｆ）



74ＳＤ４・ＳＤ５断面（Ｇ－Ｈ）

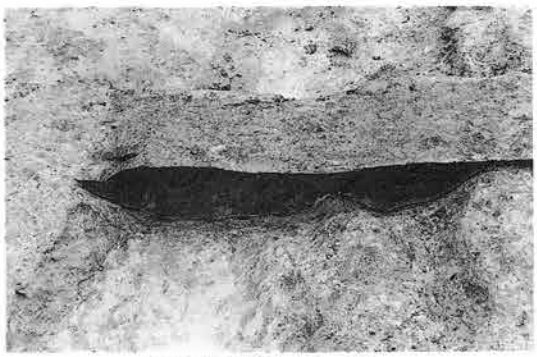


74ＳＤ４・ＳＤ５断面（Ｉ－Ｊ）

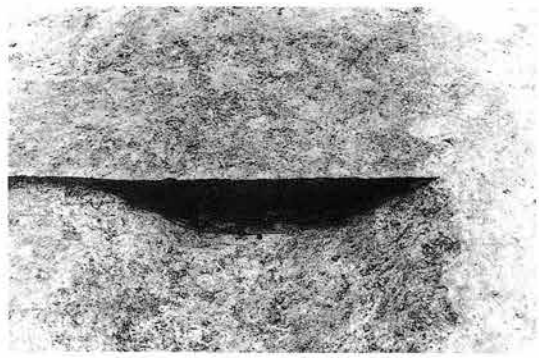


74ＳＤ４・ＳＤ５断面（Ｋ－Ｌ）

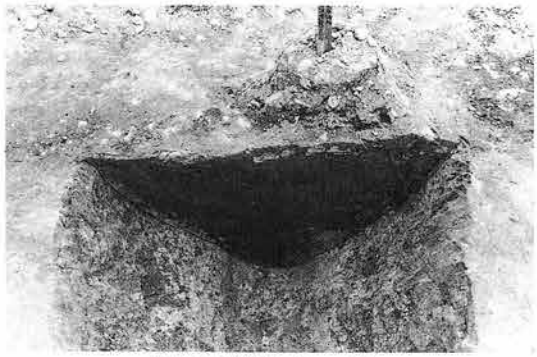
写真図版46　Ｂ地区の遺構⑰



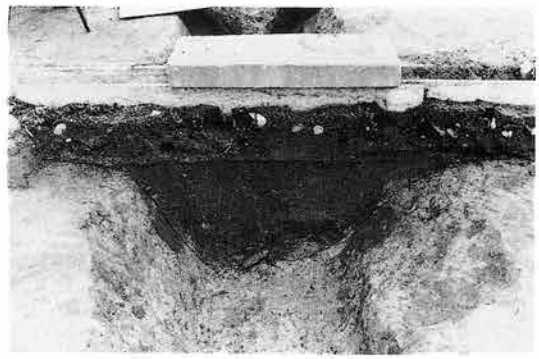
74ＳＤ４断面（Ｍ－Ｎ）



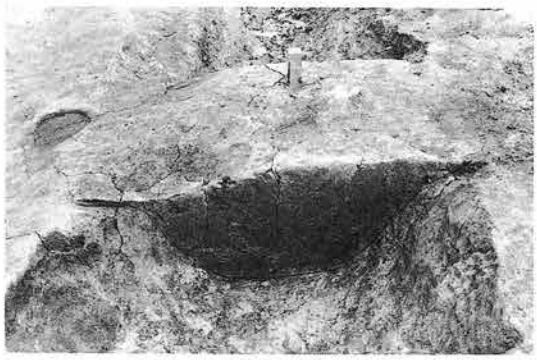
74ＳＤ５断面（Ｍ－Ｎ）



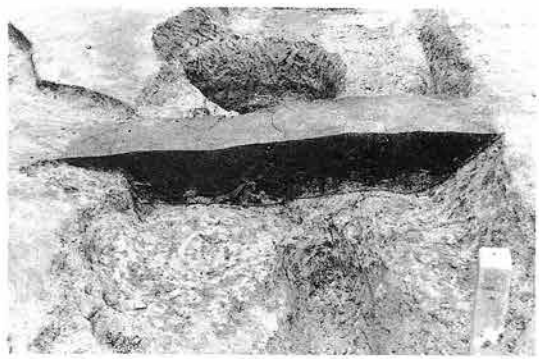
74ＳＤ６断面（Ａ－Ｂ）



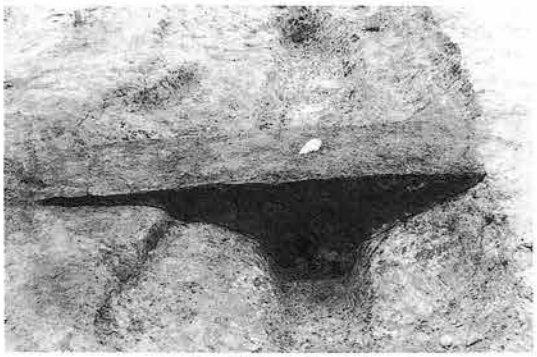
74ＳＤ６断面（Ｃ－Ｄ）



74ＳＤ６断面（Ｅ－Ｆ）



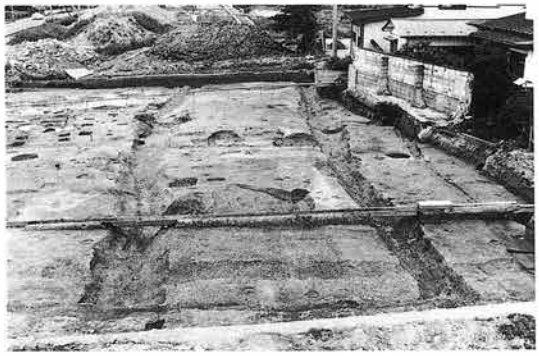
74ＳＤ６断面（Ｉ－Ｊ）



74ＳＤ６断面（Ｋ－Ｌ）

74ＳＤ６断面（Ｍ－Ｎ）

写真図版47　Ｂ地区の遺構⑱



74ＳＤ・ＳＤ６完掘（北→）

74ＳＤ４・ＳＤ６完掘（南→）

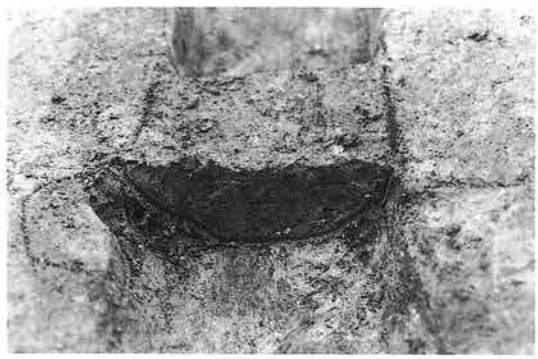
道路遺構（北→）

道路遺構（南→）

74ＳＤ７断面①

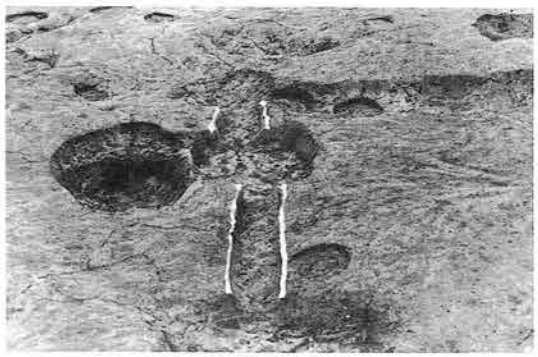
74ＳＤ７断面②

74ＳＤ７完掘



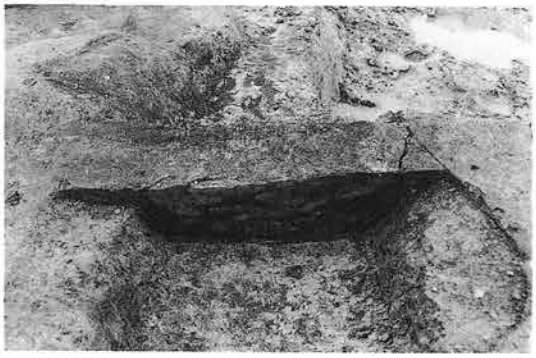
74ＳＤ８断面

写真図版48　Ｂ地区の遺構⑲



74ＳＤ８完掘

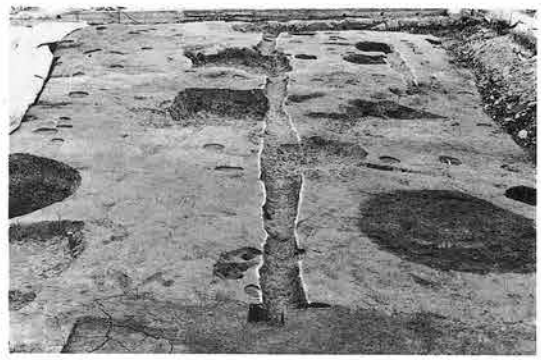
74ＳＤ９断面



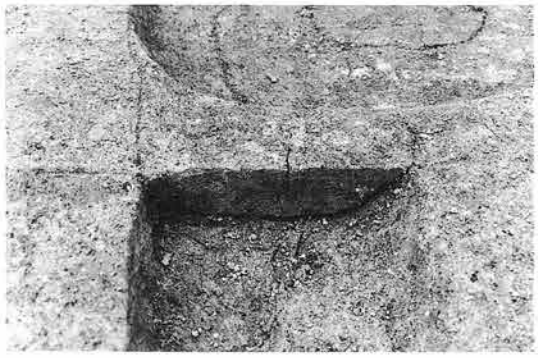
74ＳＤ９断面（Ｃ－Ｄ）

74ＳＤ９断面（Ｅ－Ｆ）

74ＳＤ９完掘（東→）



74ＳＤ９完掘（西→）

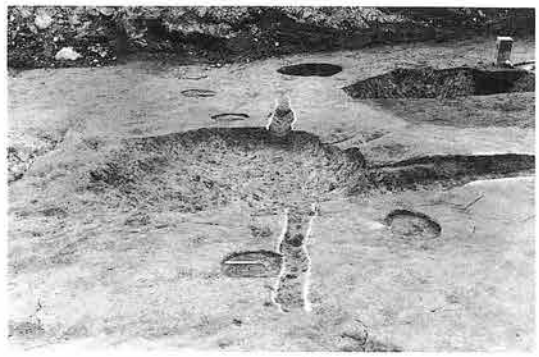


74ＳＤ10断面

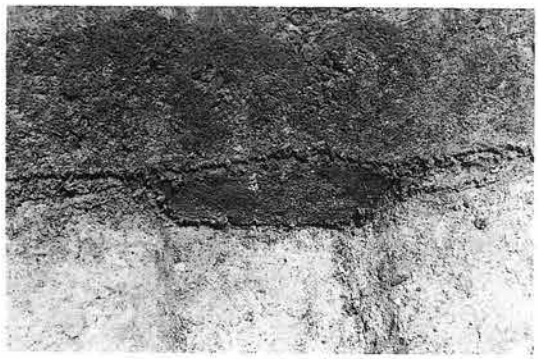
74ＳＤ10完掘

写真図版49　Ｂ地区の遺構⑳

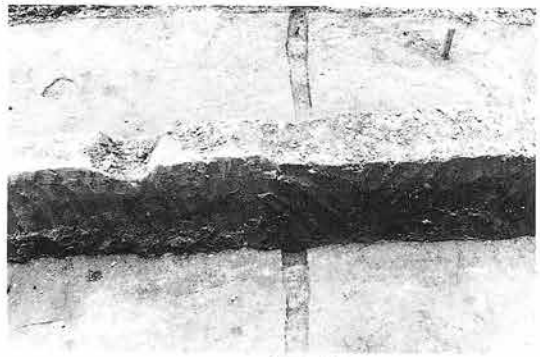
74ＳＤ11断面（北）



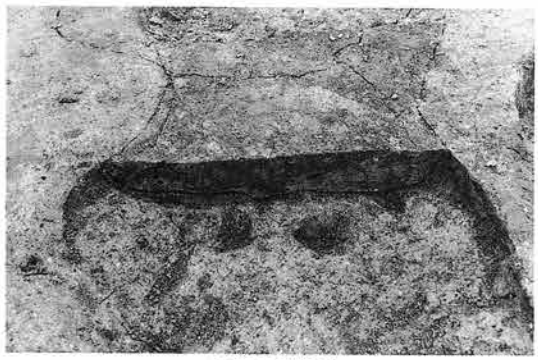
74ＳＤ11完掘



74ＳＤ11断面（南）

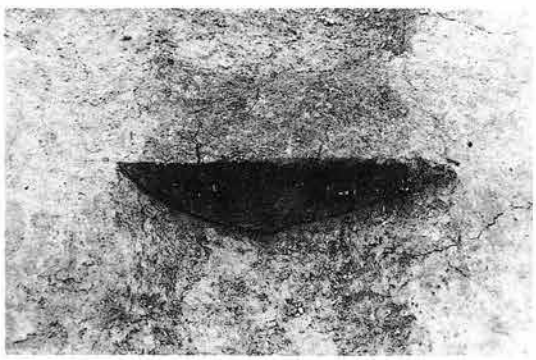


74ＳＤ11完掘（南）



74ＳＤ12断面

74ＳＤ12完掘



74ＳＤ13断面（Ａ－Ｂ）

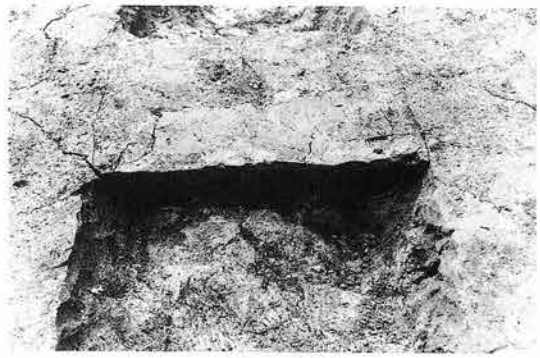
74ＳＤ13断面（Ｃ－Ｄ）

写真図版50　Ｂ地区の遺構㉑

74ＳＤ13完掘

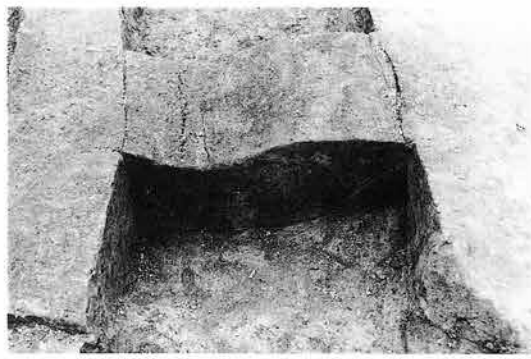
74ＳＤ14断面

74ＳＤ14完掘



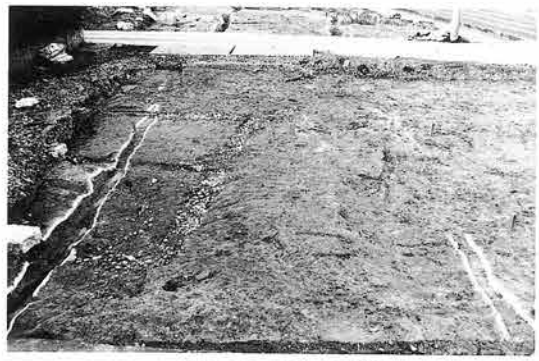
74ＳＤ15断面

74ＳＤ15完掘



74ＳＤ16断面

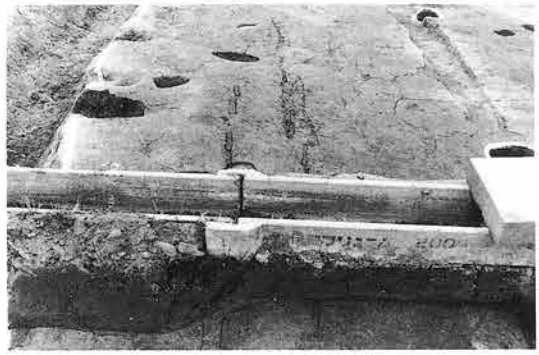
74ＳＤ16完掘



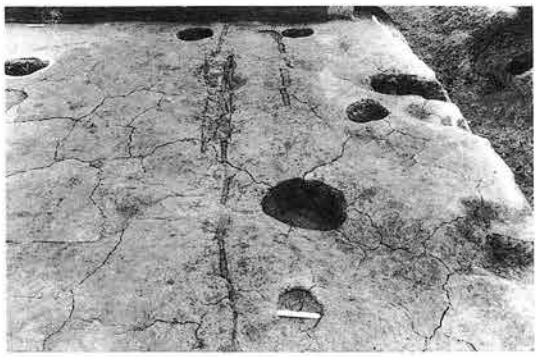
46ＳＤ16・ＳＤ17完掘

写真図版51　Ｂ地区の遺構㉒

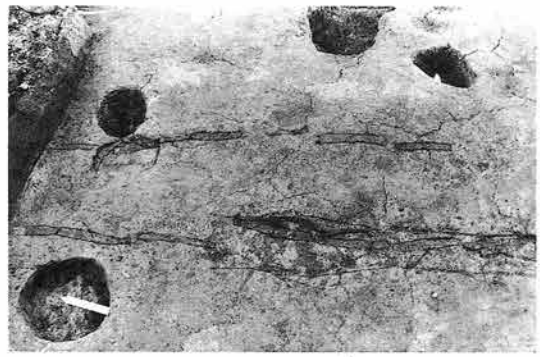
74ＳＡ１・ＳＡ２検出



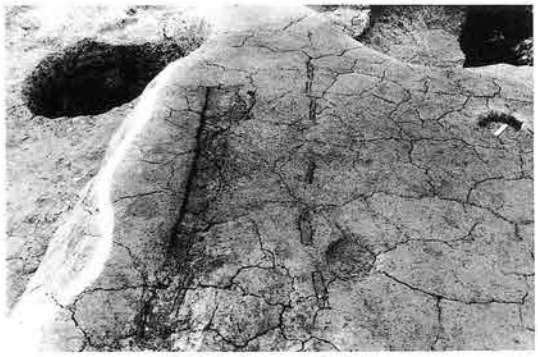
74ＳＡ１・ＳＡ２検出



74ＳＡ１・ＳＡ２検出



74ＳＡ１・ＳＡ２検出



74ＳＡ１・ＳＡ２検出

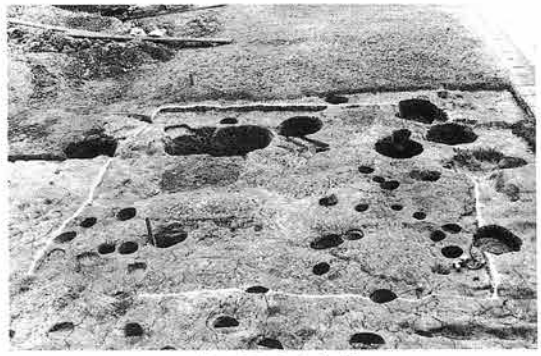
ＳＡ断面

ＳＡ断面

ⅢＢ９ａ付近完掘

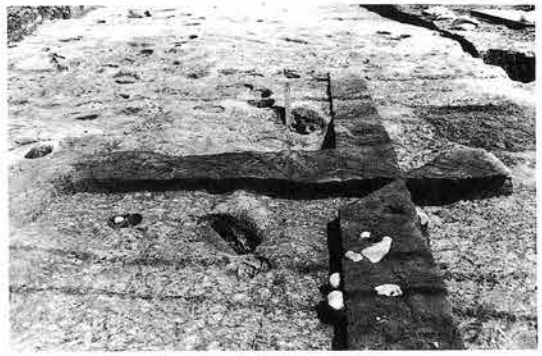
写真図版52　Ｂ地区の遺構㉓

C地区調査前

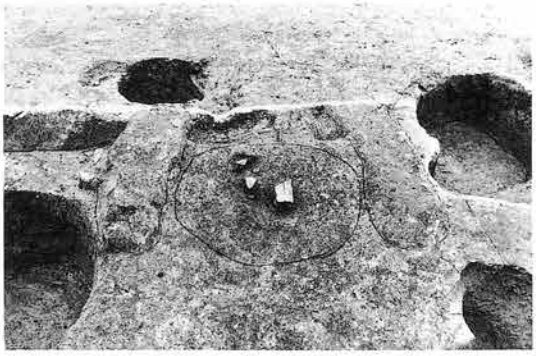


46・66ＳＩ１完掘

46・66ＳＩ１断面（南北）



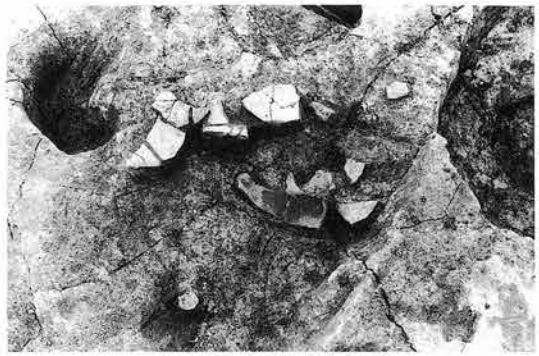
46・66ＳＩ１断面（東西）



46・66ＳＩ１かまど

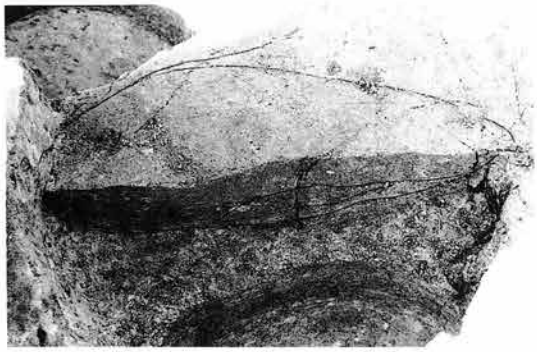
46・66ＳＩ１かまど断面

46・66ＳＩ１遺物出土状況



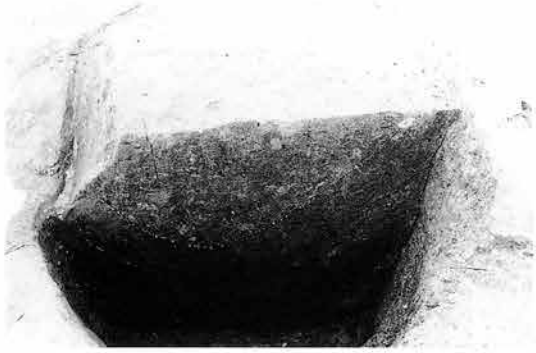
46・66ＳＩ１遺物出土状況

写真図版53　C地区の遺構①



46ＳＩ１住居内土坑断面

46・66ＳＩ１掘方



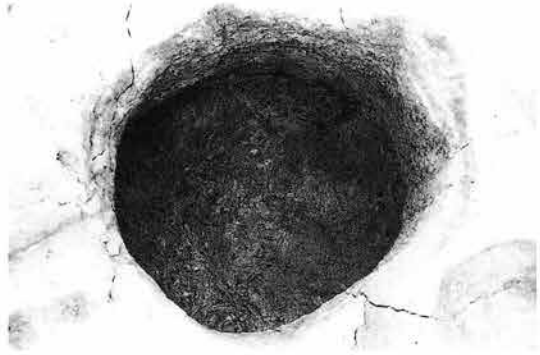
46ＳＫ19断面

46ＳＫ19完掘

46ＳＫ断面

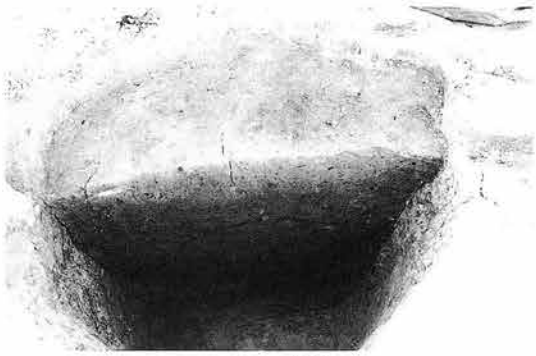
46ＳＫ20完掘

46ＳＫ21断面



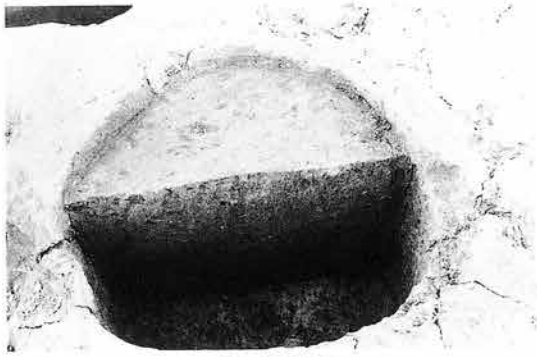
46ＳＫ21完掘

写真図版54　Ｃ地区の遺構②



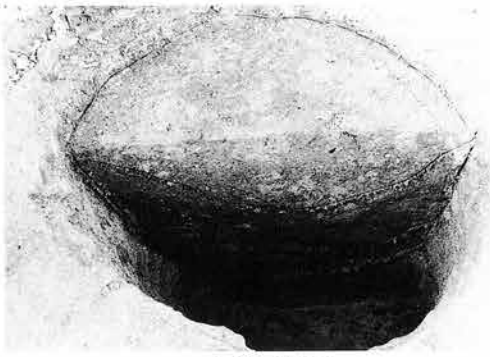
46ＳＫ22断面

46ＳＫ22完掘



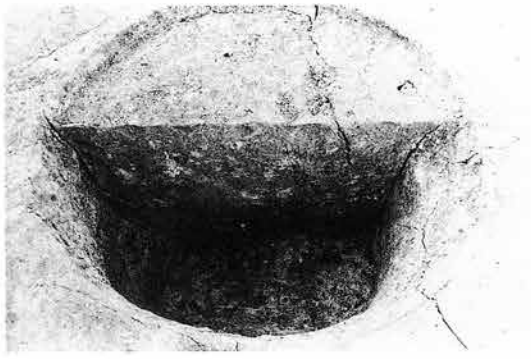
46ＳＫ23断面

46ＳＫ23完掘

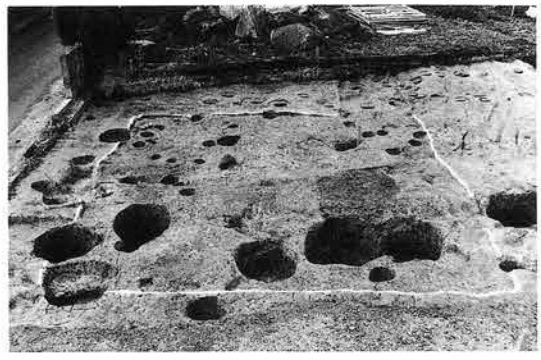


46ＳＫ24断面

46ＳＫ24完掘

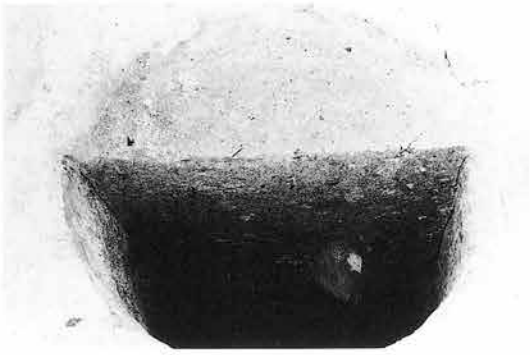


46ＳＫ25断面



土坑群と竪穴住居の切り合い

写真図版55　Ｃ地区の遺構③



46ＳＫ26断面

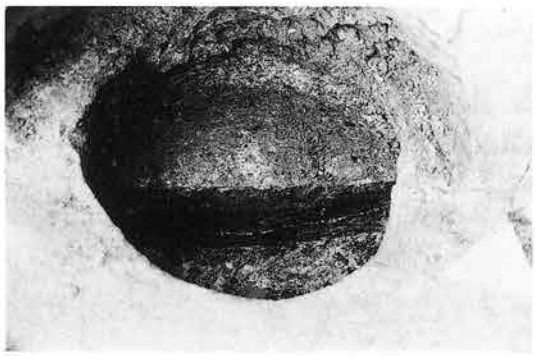
46ＳＫ26完掘

46ＳＫ27断面

46ＳＫ27完掘

46ＳＫ28断面

46ＳＫ28完掘



46ＳＫ29断面

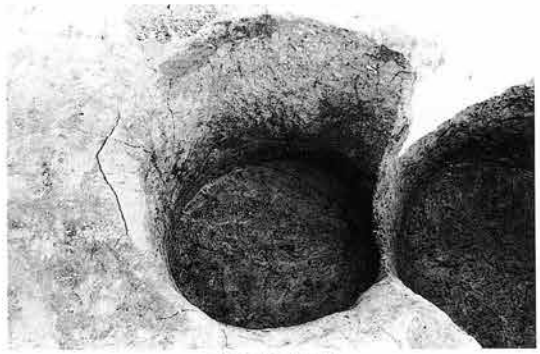
46ＳＫ29完掘

写真図版56　Ｃ地区の遺構④

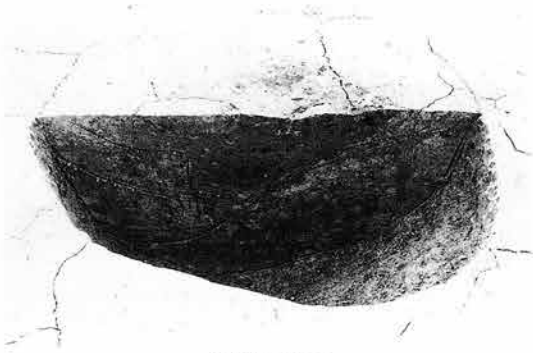
46ＳＫ30断面

46ＳＫ30完掘

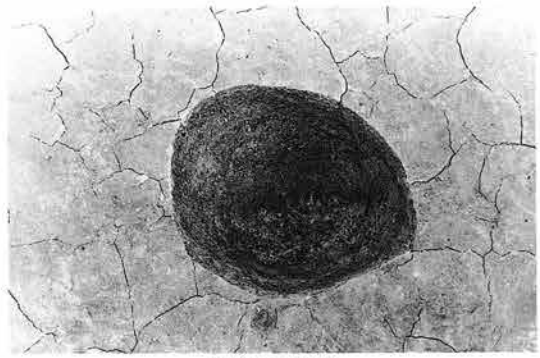
46ＳＫ31断面



46ＳＫ31完掘



66ＳＫ１断面



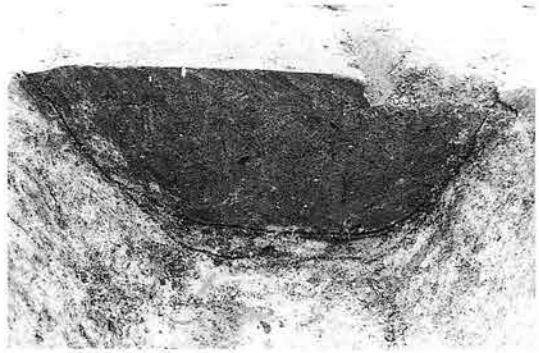
66ＳＫ１完掘

66ＳＫ２断面

66ＳＫ２完掘

写真図版57　Ｃ地区の遺構⑤

66ＳＫ７断面

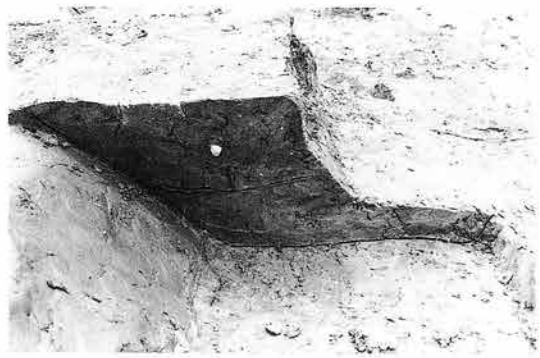


46ＳＤ16断面（Ａ－Ａ’）

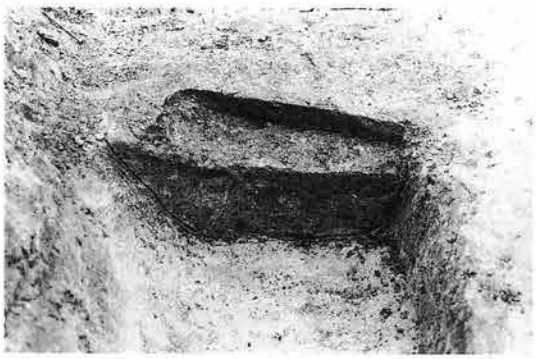
46ＳＤ16断面（Ｂ－Ｂ’）

46ＳＤ16断面（Ａ－Ａ’）

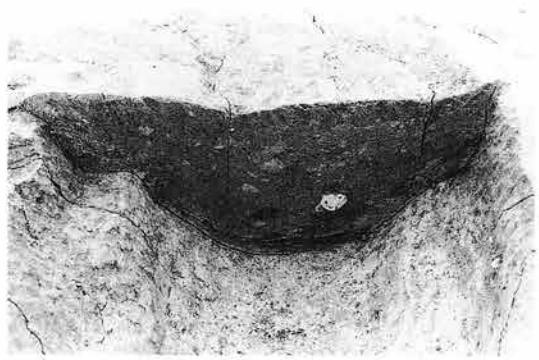
46ＳＤ16断面（Ｂ－Ｂ’）



46ＳＤ16（Ｃ－Ｃ’）



46ＳＤ17断面（Ａ－Ａ’）

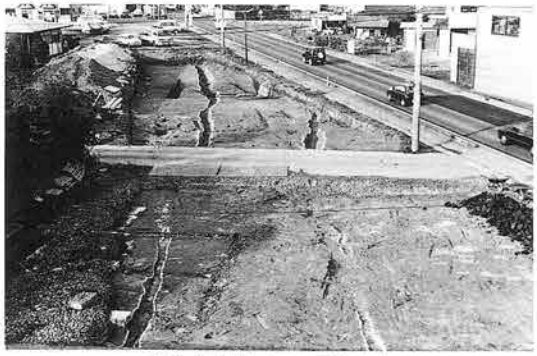


46ＳＤ17断面（Ｂ－Ｂ’）

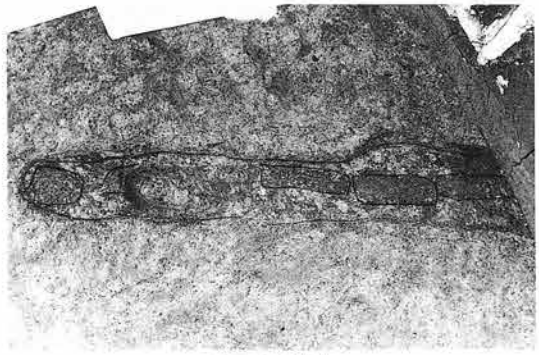
写真図版58　Ｃ地区の遺構⑥

道路状遺構（南→）

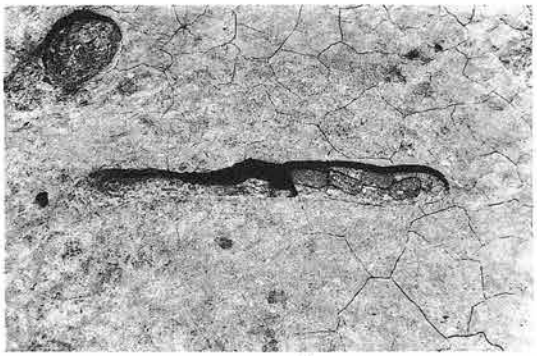
道路状遺構（北→）



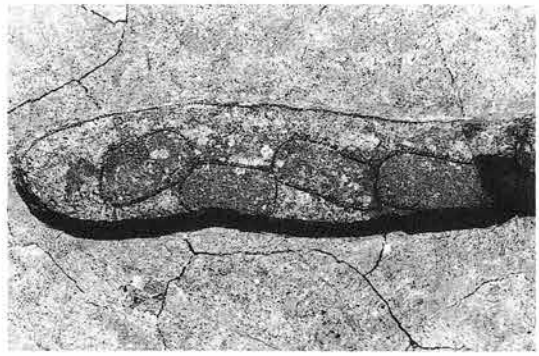
道路状遺構（ⅢＢ区から）



46ＳＡ１検出

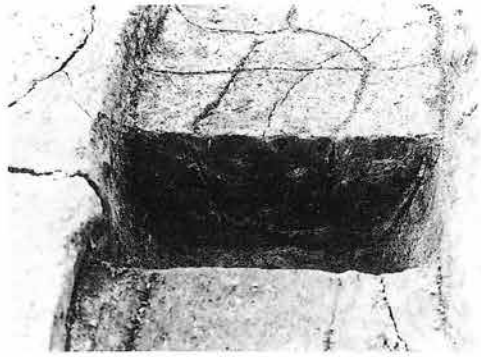


66ＳＡ１検出



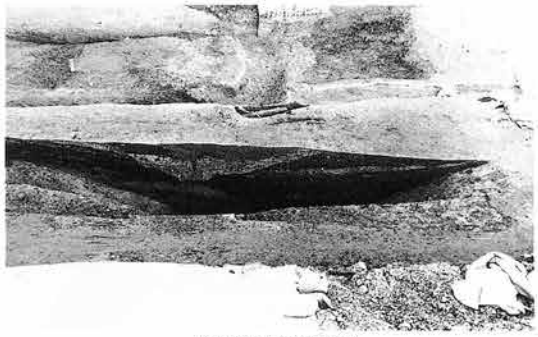
66ＳＡ１検出

66ＳＡ１断面



66ＳＡ１断面

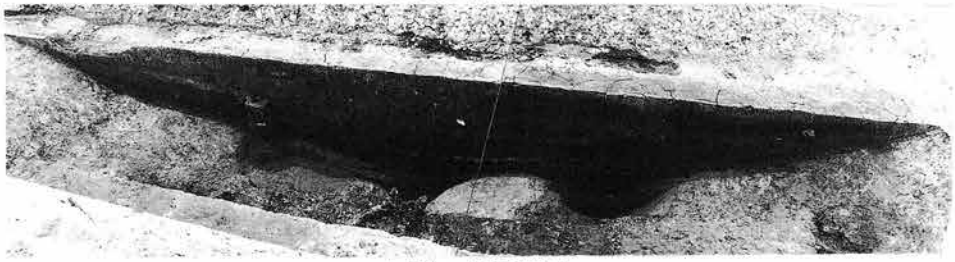
写真図版59　Ｃ地区の遺構⑦



C地区埋没沢断面

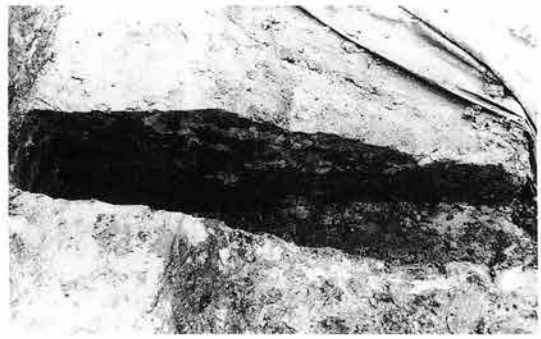
1号池・埋没沢断面

C地区埋没沢断面



1号池・埋没沢断面

1号池整地断面



1号池整地断面

1号池精査中

1号池精査作業風景

写真図版60　C地区の遺構⑧

66 1 号池完掘（北→）

66 1 号池完掘（南→）

66 1 号池完掘（東側）

66 1 号池調査風景

66 1 号池遺物出土状況

かわらけ（3107、3115）出土状況

かわらけ（3108、3112）出土状況

かわらけ（3113）出土状況

写真図版61　C地区の遺構⑨

墨書かわらけ（3119）出土状況

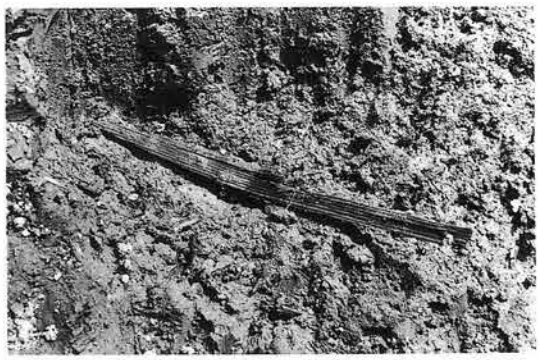
かわらけ（3112）出土状況

かわらけ（3126）出土状況

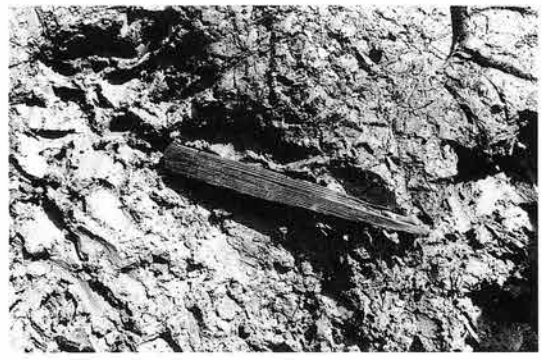
かわらけ（3128）出土状況

笹塔婆（3131）出土状況

笹塔婆（3132）、木製品（3193）出土状況

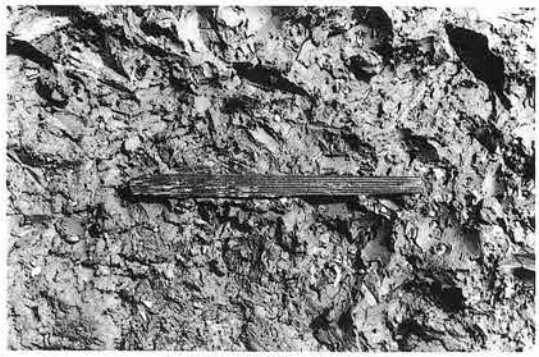


笹塔婆（3134）出土状況



笹塔婆（3135）出土状況

写真図版62　C地区の遺構⑩



笹塔婆（3136）出土状況

笹塔婆（3137）出土状況

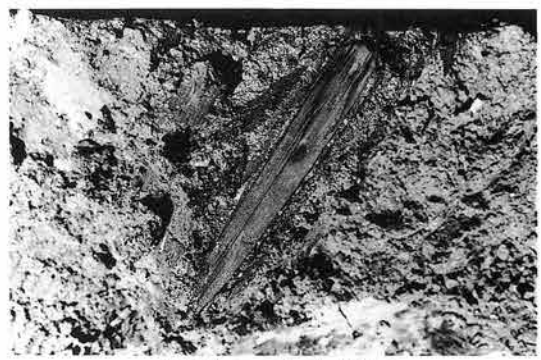
笹塔婆（3138）出土状況

笹塔婆（3141）出土状況

笹塔婆（3144）出土状況

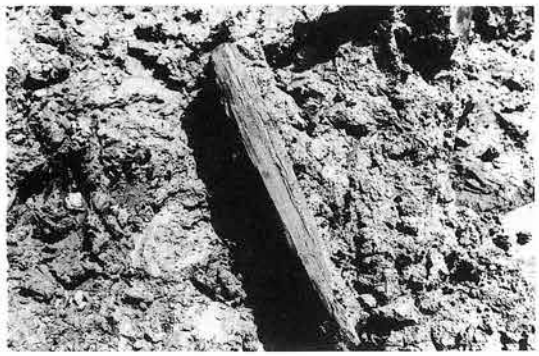
笹塔婆（3147）出土状況

笹塔婆（3148）出土状況



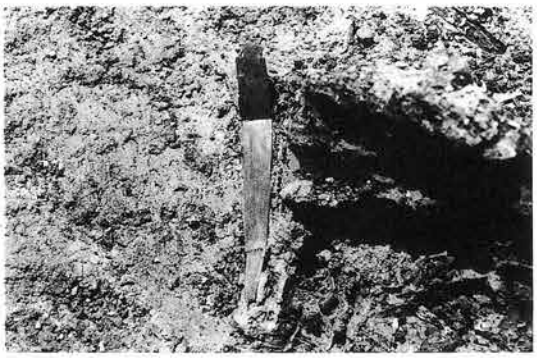
笹塔婆（3149）出土状況

写真図版63　C地区の遺構⑪

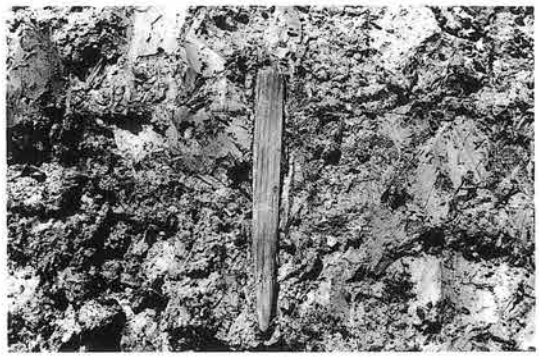


笹塔婆（3151）出土状況

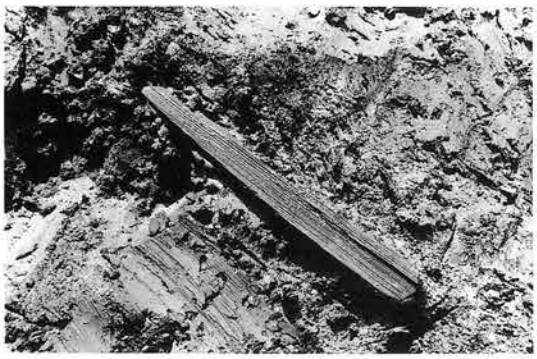
笹塔婆（3154）出土状況



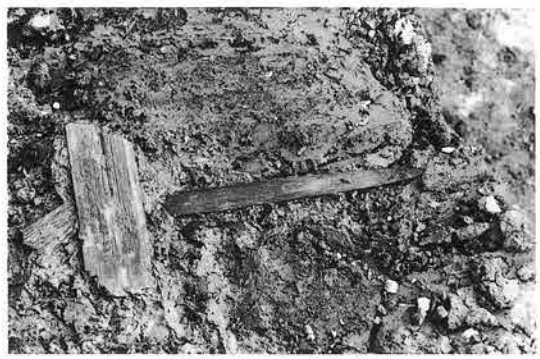
笹塔婆（3155）出土状況



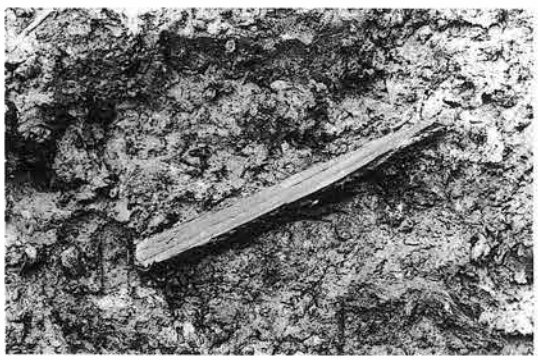
笹塔婆（3156）出土状況



笹塔婆（3157）出土状況



笹塔婆（3158）出土状況



笹塔婆（3159）出土状況

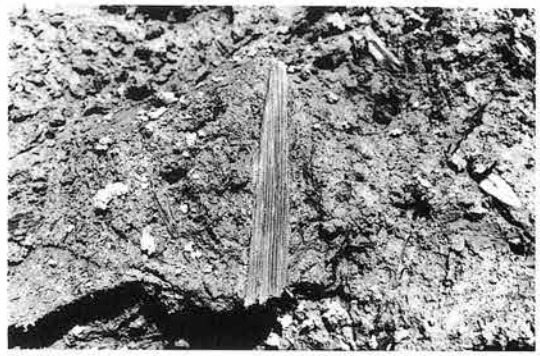
笹塔婆（3162）出土状況

写真図版64　C地区の遺構⑫

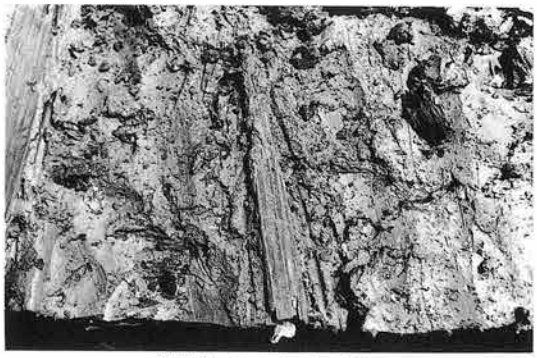
笹塔婆（3167）出土状況

笹塔婆（3171）出土状況

笹塔婆（3172）出土状況



笹塔婆（3174）出土状況



笹塔婆（3175）出土状況

墨書木製品（3178）出土状況

漆器皿（3181）出土状況

漆器（3182）出土状況

写真図版65　C地区の遺構⑬

木製品（3185）出土状況

かぶら？（3186）出土状況

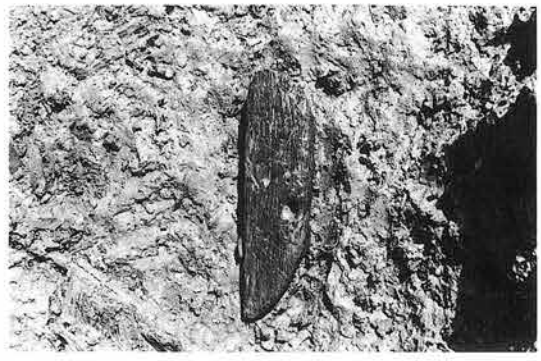
木製品（3190）出土状況

木製品（3191）出土状況

陽物（3192）出土状況

刀子柄（3195）出土状況

下駄（3196）出土状況



下駄（3191）出土状況

写真図版66　C地区の遺構⑭

曲物底（3201）出土状況

木製品（3202）出土状況

縄（3242）出土状況

瓦（3244）出土状況

馬歯・轡・かわらけ出土状況

轡（3246）出土状況

馬歯出土状況

馬歯出土状況

写真図版67　C地区の遺構⑮

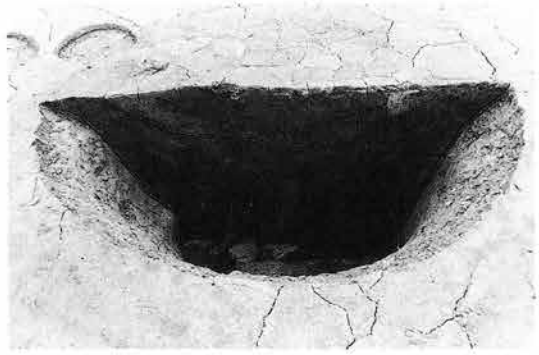
D地区調査前

D地区粗掘中

66ＳＢ20完掘

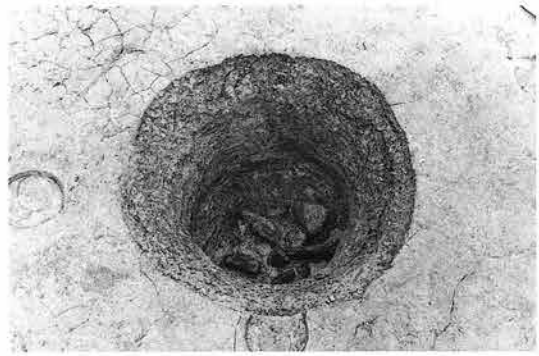
66ＳＢ23完掘

66ＳＢ31完掘



66ＳＥ１上部断面

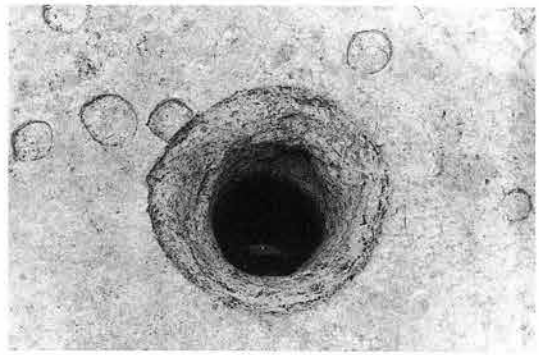
66ＳＥ１下部断面



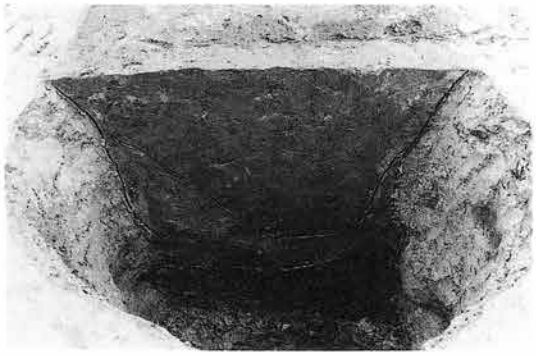
66ＳＥ１遺物出土状況

写真図版68　D地区の遺構①

66ＳＥ１遺物出土状況

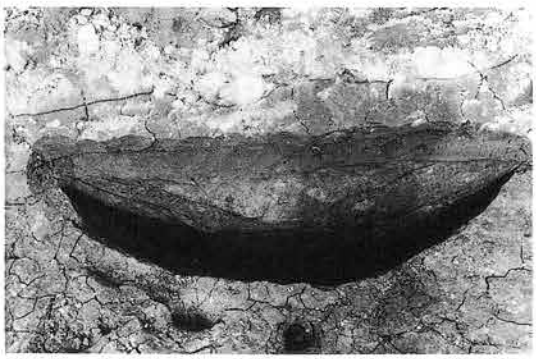


66ＳＥ１完掘

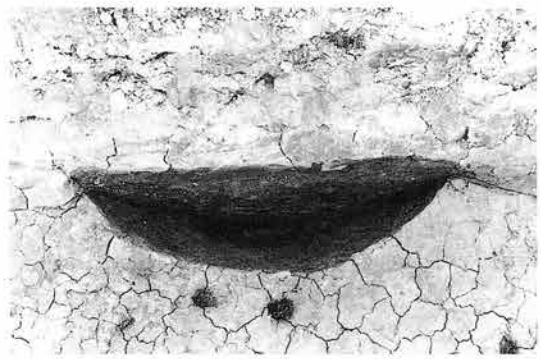


66ＳＥ２断面

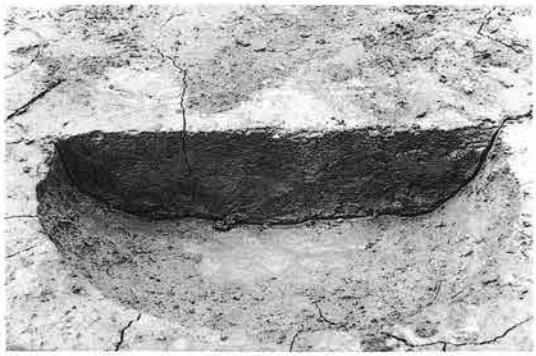
66ＳＥ２完掘



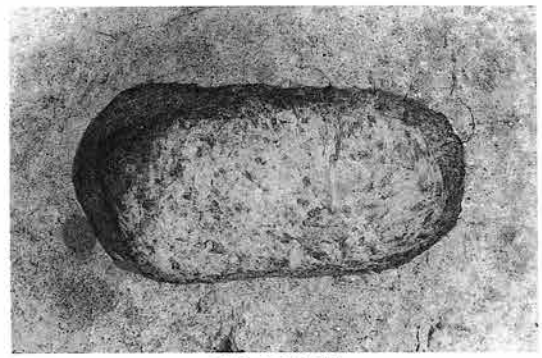
66ＳＥ３断面



66ＳＥ３完掘



66ＳＫ24断面

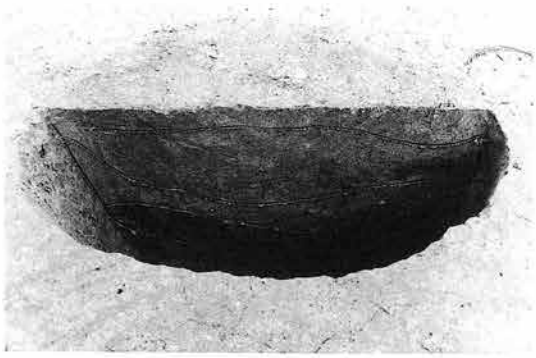


66ＳＫ24完掘

写真図版69　Ｄ地区の遺構②

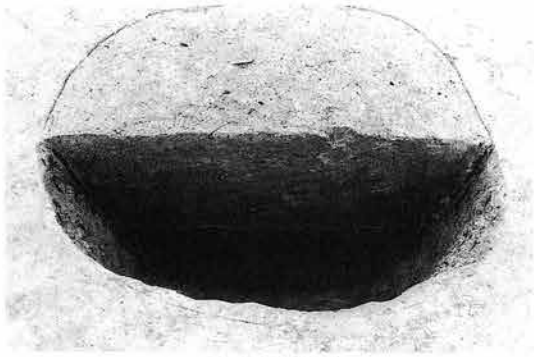
66ＳＫ25断面

66ＳＫ25完掘



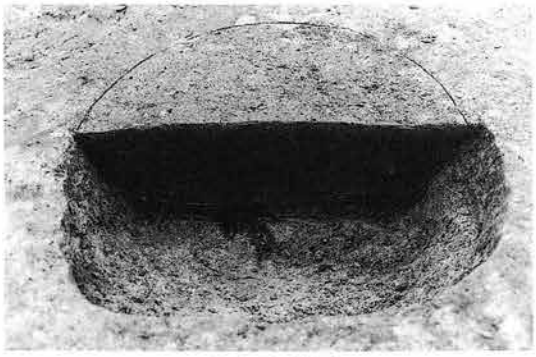
66ＳＫ26断面

66ＳＫ26完掘

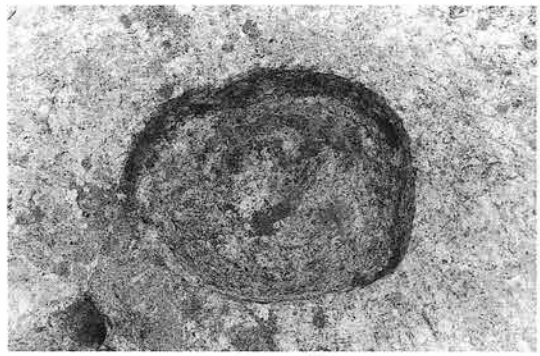


66ＳＫ27断面

66ＳＫ27完掘

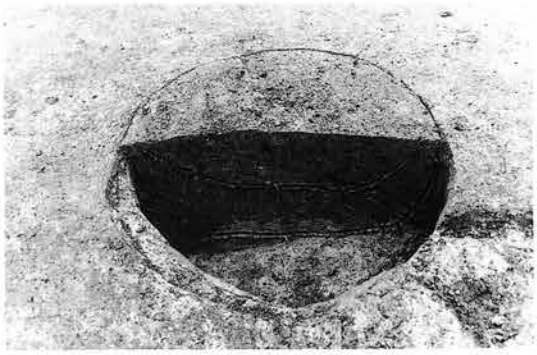


66ＳＫ28断面



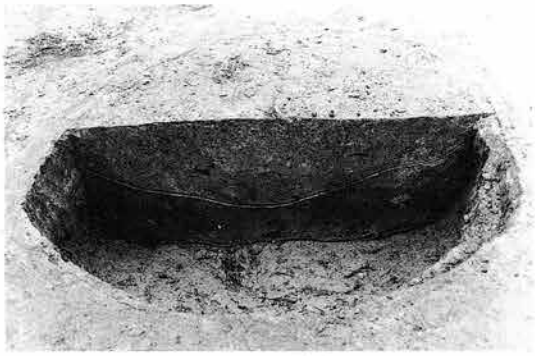
66ＳＫ28完掘

写真図版70　Ｄ地区の遺構③



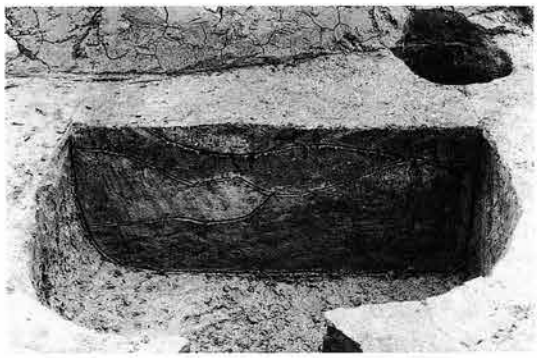
66ＳＫ29断面

66ＳＫ29完掘



66ＳＫ30断面

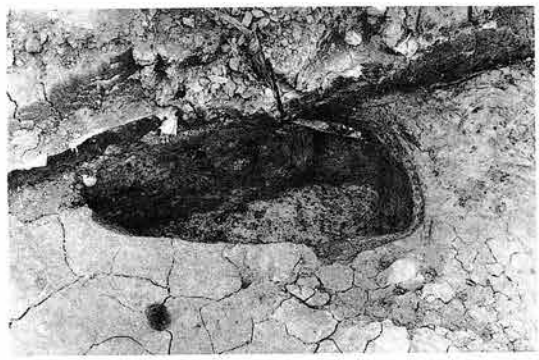
66ＳＫ30完掘



66ＳＫ31断面

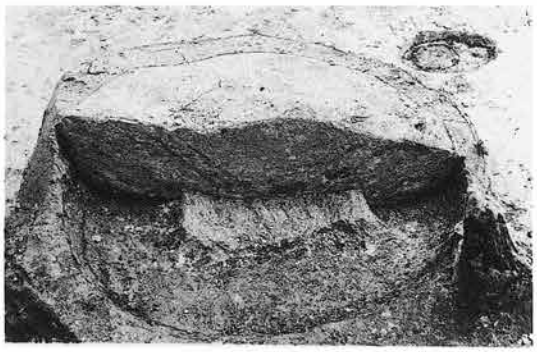
66ＳＫ31完掘

66ＳＫ32断面



66ＳＫ32完掘

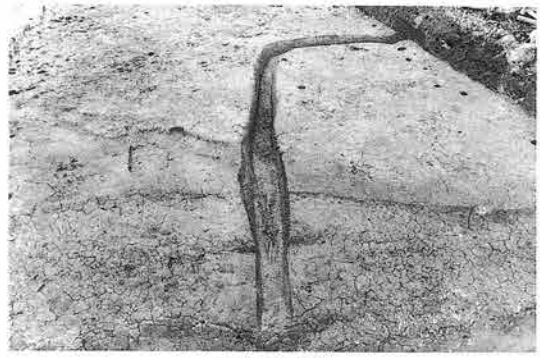
写真図版71　Ｄ地区の遺構④



66ＳＫ33断面

66ＳＫ33完掘

66ＳＤ16断面



66ＳＤ16完掘

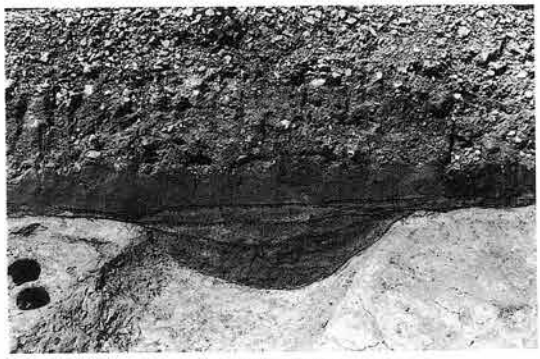
66ＳＤ17断面（西側）

66ＳＤ17断面（東側）

66ＳＤ17完掘

66ＳＤ10・66ＳＤ17完掘

写真図版72　Ｄ地区の遺構⑤



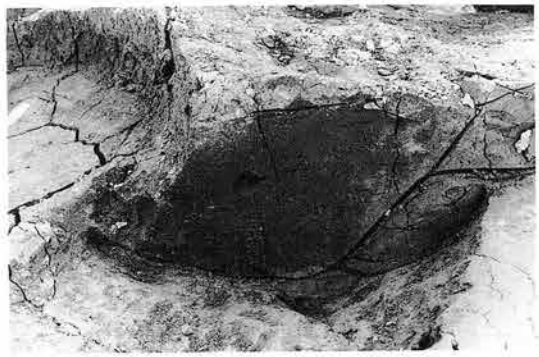
66ＳＤ18断面

66ＳＤ18完掘

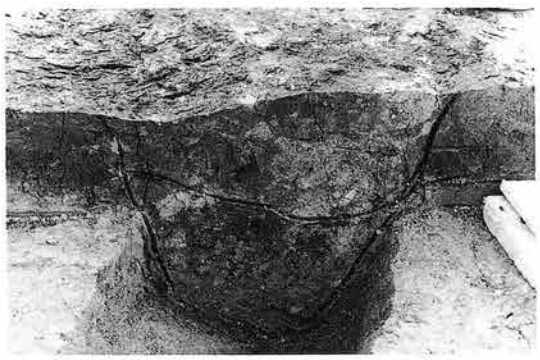
66ＳＤ19断面（Ａ－Ｂ）

66ＳＤ19断面（Ｃ－Ｄ）

66ＳＤ19完掘



66ＳＤ20断面

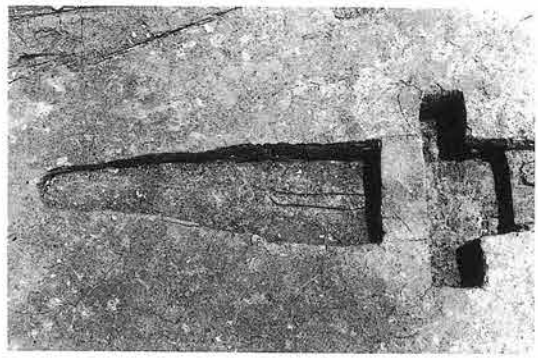


66ＳＤ21断面

66ＳＤ20・ＳＤ21完掘

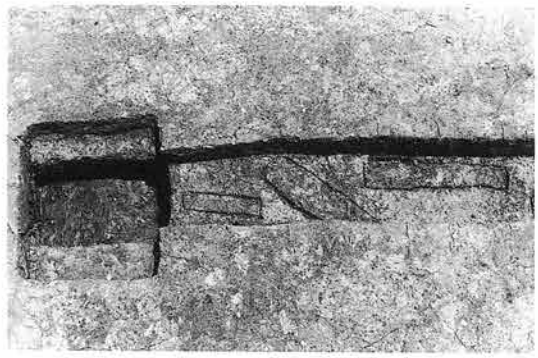
写真図版73　Ｄ地区の遺構⑥

66ＳＡ３・ＳＡ４検出

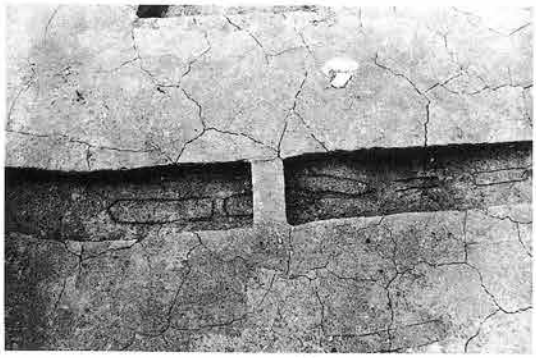


66ＳＡ４検出

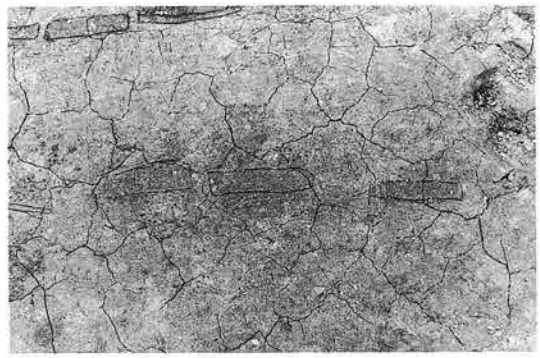
66ＳＡ４検出



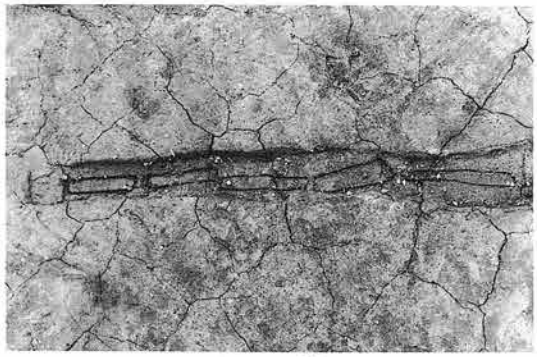
66ＳＡ４検出



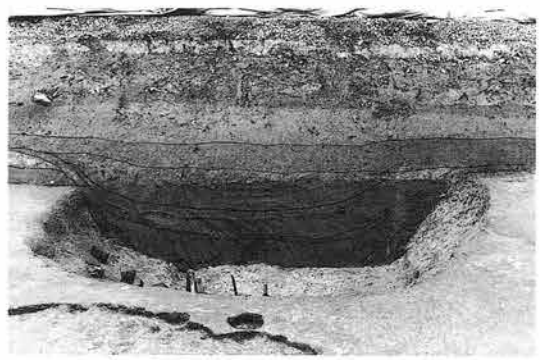
66ＳＡ４検出



66ＳＡ３検出



66ＳＡ３検出



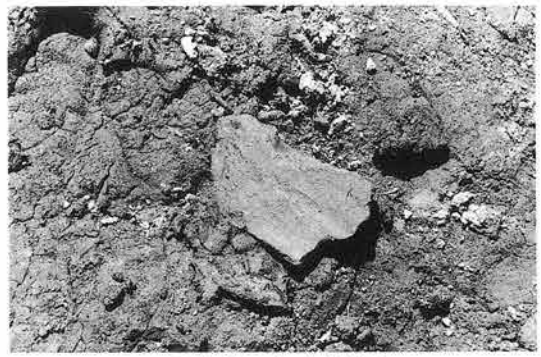
662号池断面

写真図版74　Ｄ地区の遺構⑦

662号池完掘

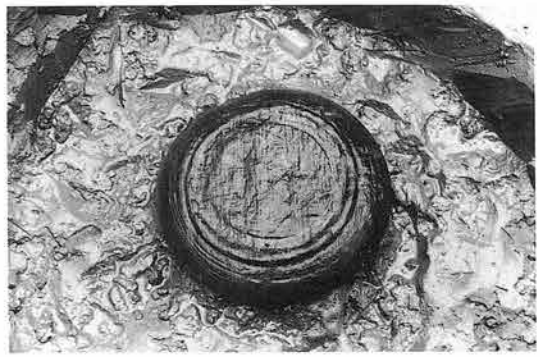
662号池完掘

陶器（4001）出土状況



陶器（4002）出土状況

木製皿（4008）出土状況

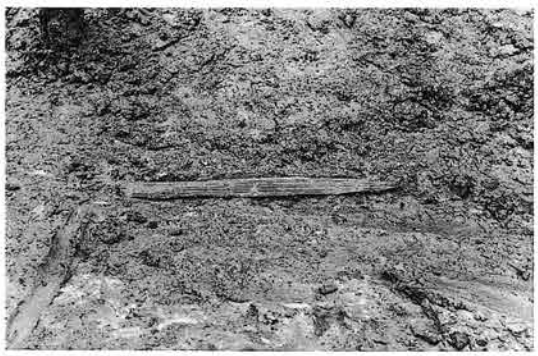


漆器皿（4009）出土状況

木製品（4010）出土状況

曲物（4012）出土状況

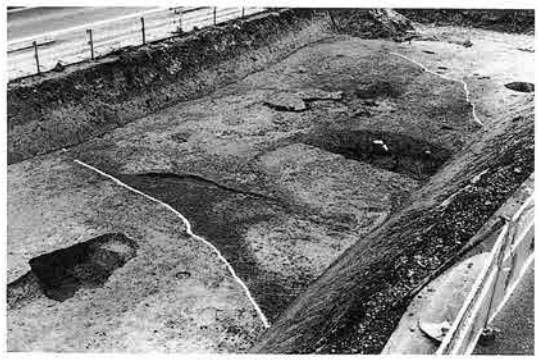
写真図版75　D地区の遺構⑧



笹塔婆（4013）出土状況

ざる（4017）出土状況

D地区沢整地面



D地区沢整地面

D地区沢、整地層断面

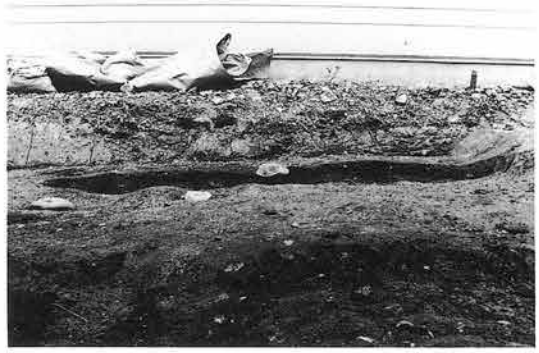
D地区整地層、沢断面

D地区完掘

写真図版76　D地区の遺構⑨

66ＳＫ８断面

66ＳＫ８完掘

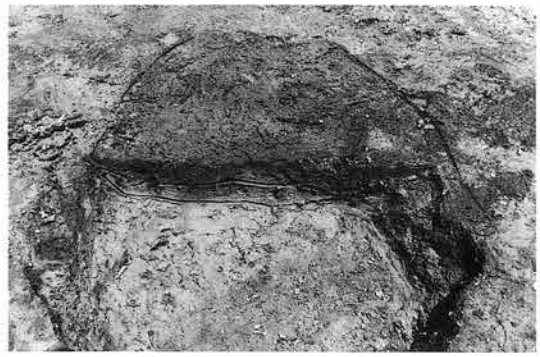


66ＳＫ９断面

66ＳＫ９完掘

66ＳＫ10断面

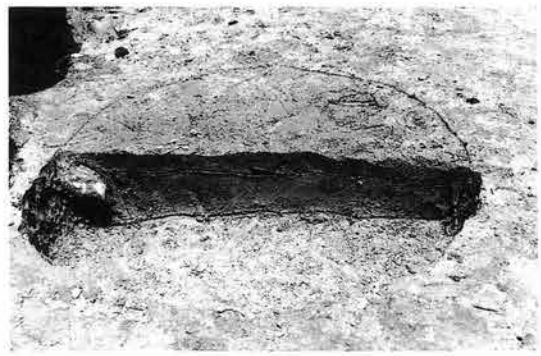
66ＳＫ10完掘



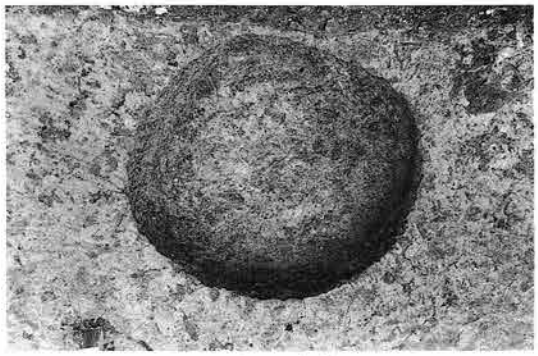
66ＳＫ11断面

写真図版77　Ｅ地区の遺構①

66ＳＫ11完掘

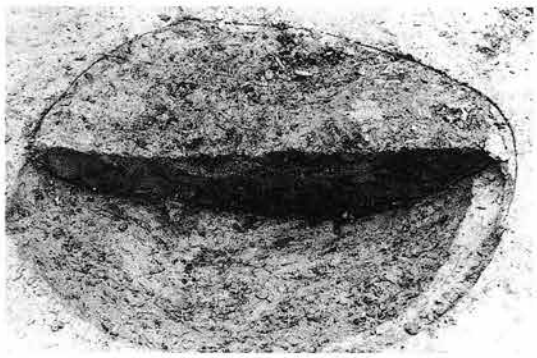


66ＳＫ12断面

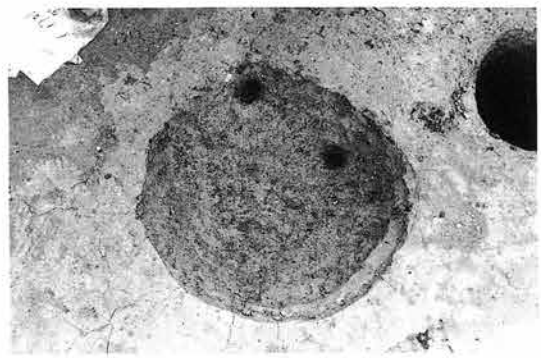


66ＳＫ12完掘

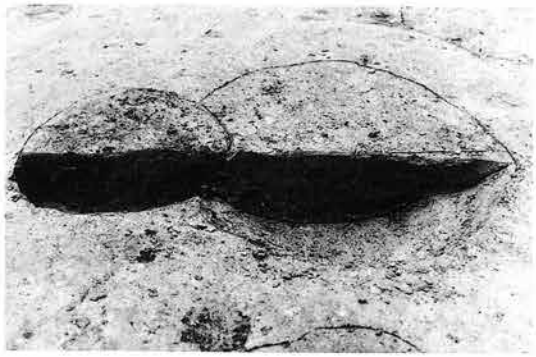
Ｅ地区ＳＸ群



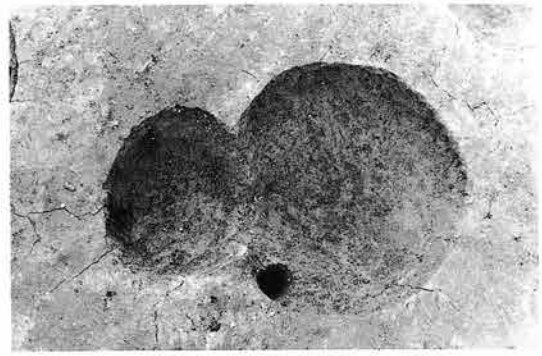
66ＳＸ２断面



66ＳＸ２完掘

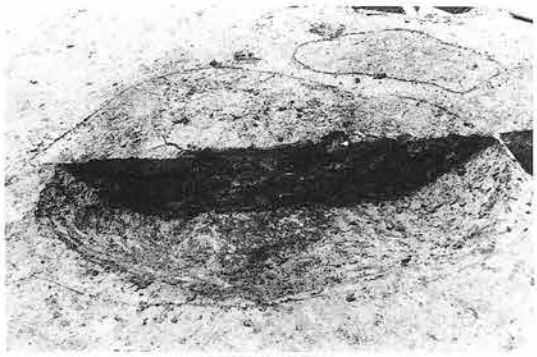


66ＳＸ３・ＳＸ４断面

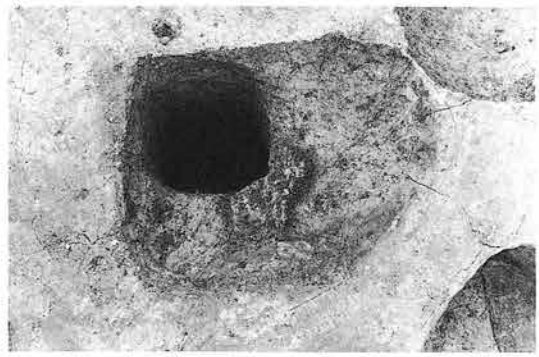


66ＳＸ３・ＳＸ４完掘

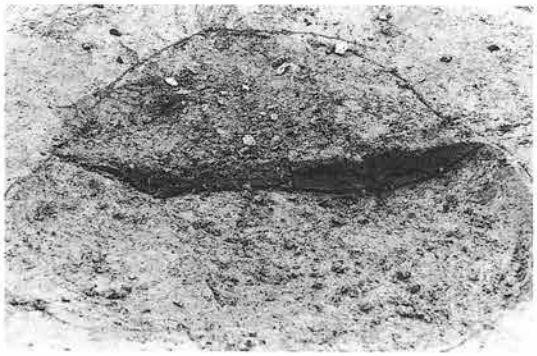
写真図版78　Ｅ地区の遺構②



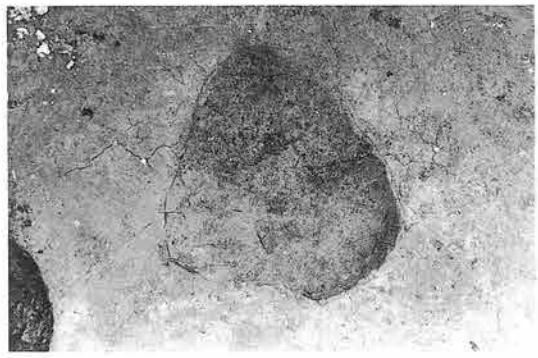
66ＳＸ５断面



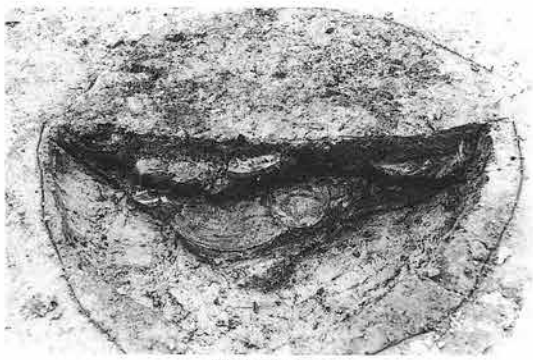
66ＳＸ５完掘



66ＳＸ６断面

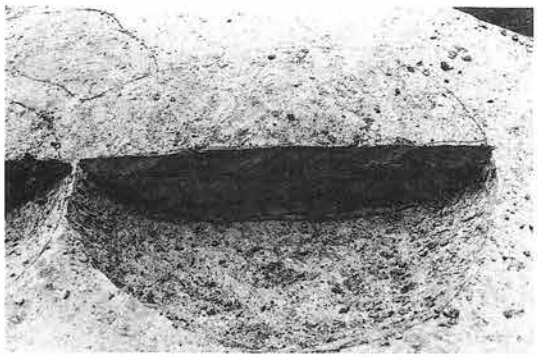


66ＳＸ６完掘

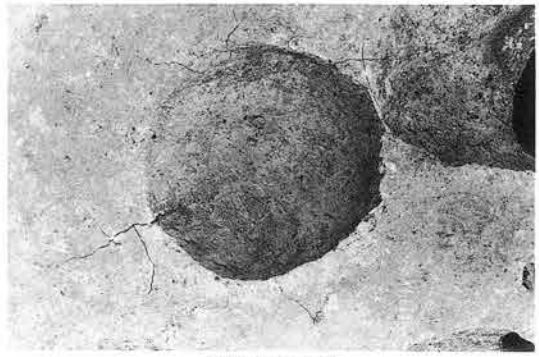


66ＳＸ７断面

66ＳＸ７完掘

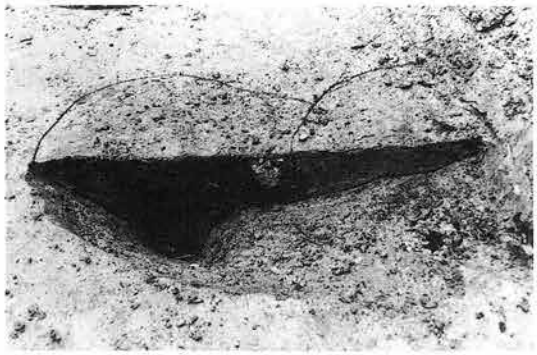


66ＳＸ８断面

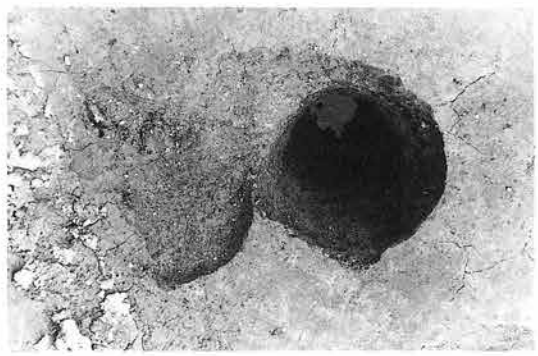


66ＳＸ８完掘

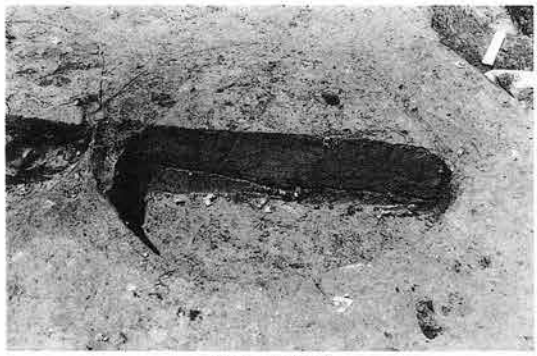
写真図版79　Ｅ地区の遺構③



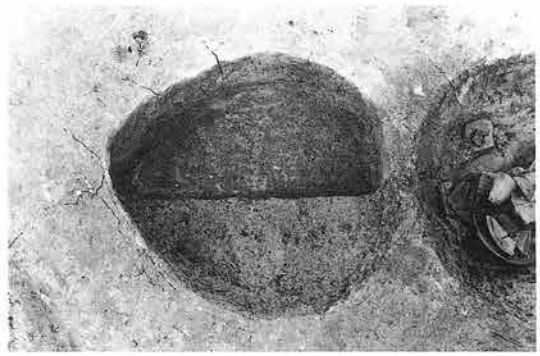
66ＳＸ10断面



66ＳＸ10完掘



66ＳＸ11断面

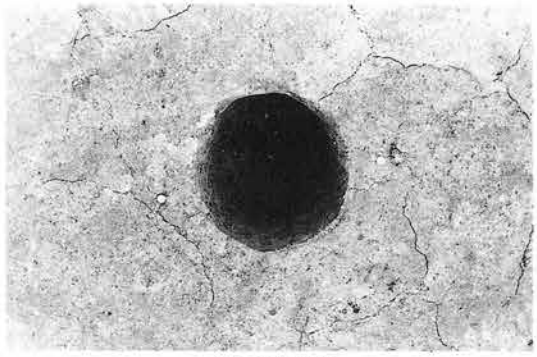


66ＳＸ11完掘

66ＳＸ12断面

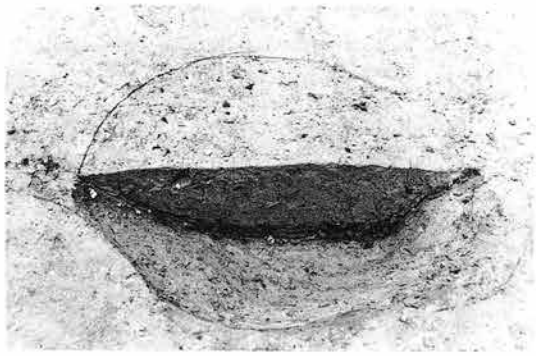
66ＳＸ12完掘

66ＳＸ13断面

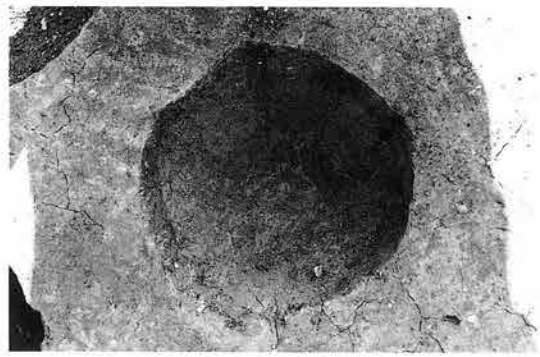


66ＳＸ13完掘

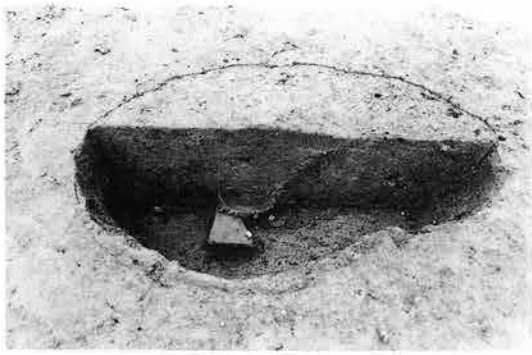
写真図版80　Ｅ地区の遺構④



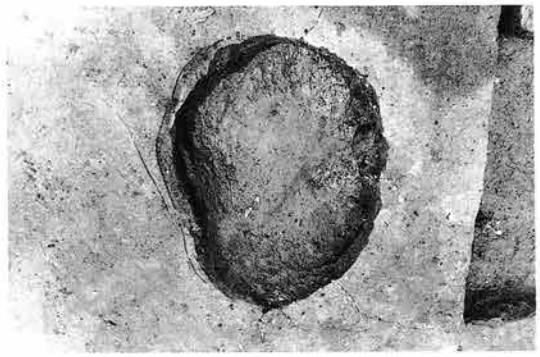
66ＳＸ14断面



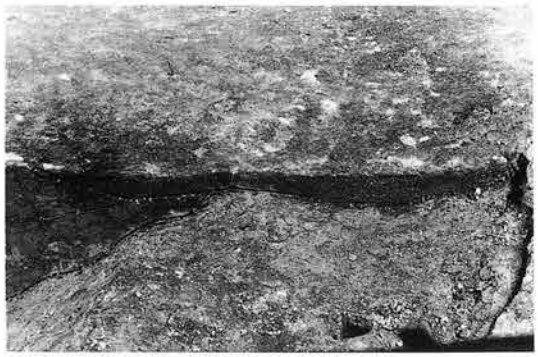
66ＳＸ14完掘



66ＳＸ15断面



66ＳＸ15完掘



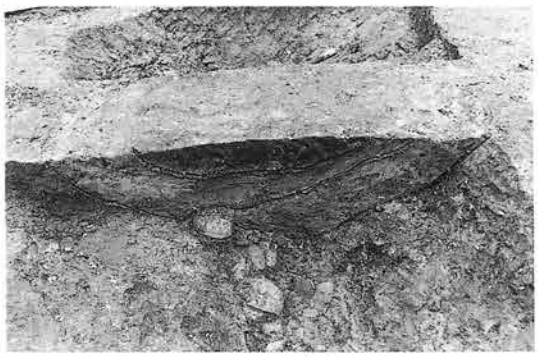
66ＳＤ１断面

66ＳＤ１完掘

66ＳＤ２断面

66ＳＤ２完掘

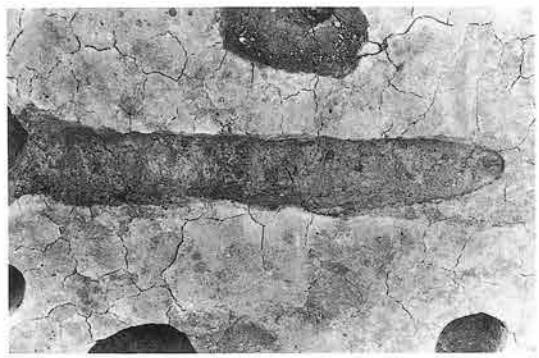
写真図版81　Ｅ地区の遺構⑤



66ＳＤ３断面

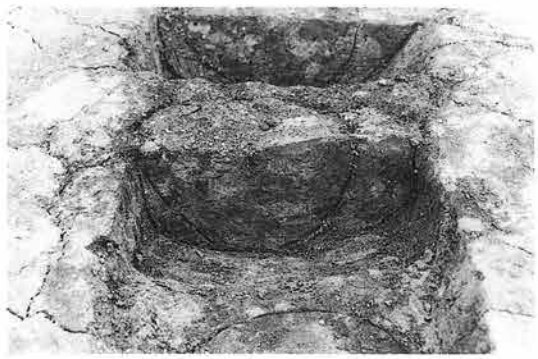
66ＳＤ３遺物出土状況

66ＳＤ３完掘

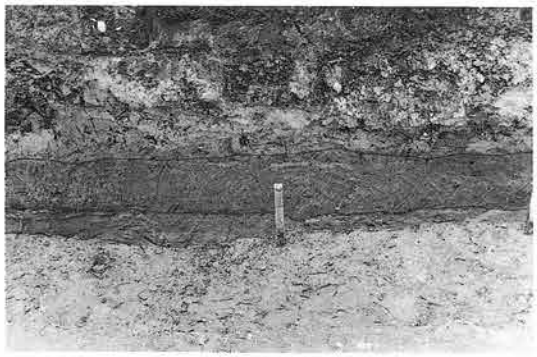


66ＳＡ２堀方

66ＳＡ２断面



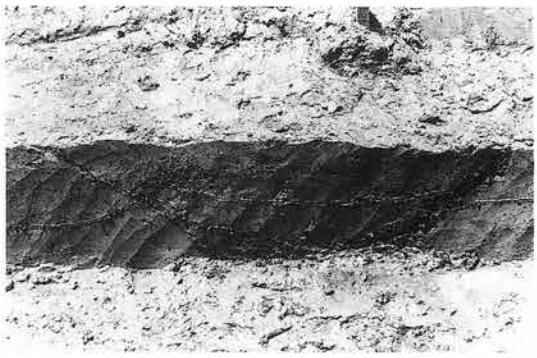
66ＳＡ２断面



Ｅ地区沢整地層断面

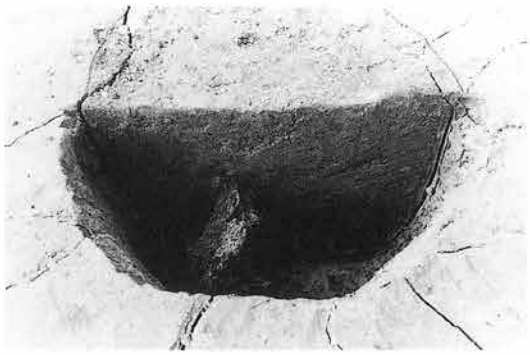
Ｅ地区完掘

写真図版82　Ｅ地区の遺構⑥



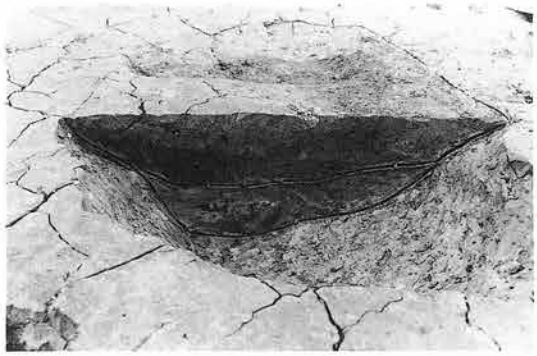
66ＳＫ13断面

66ＳＫ13完掘

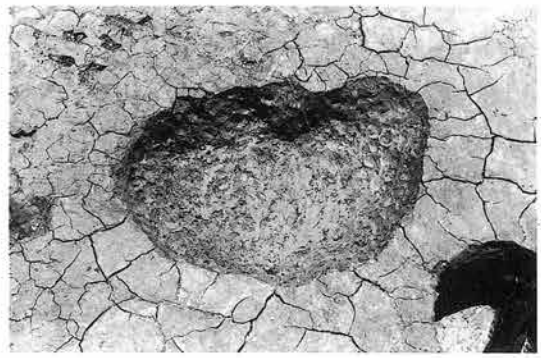


66ＳＫ14断面

66ＳＫ14完掘

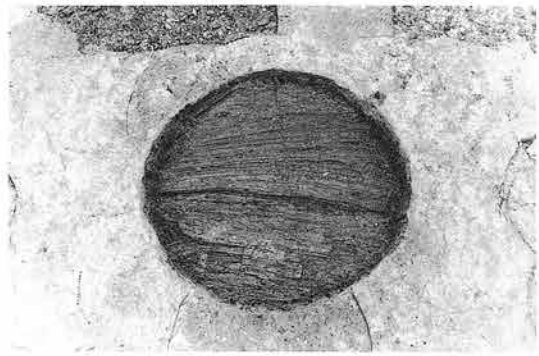


66ＳＫ15断面



66ＳＫ15完掘

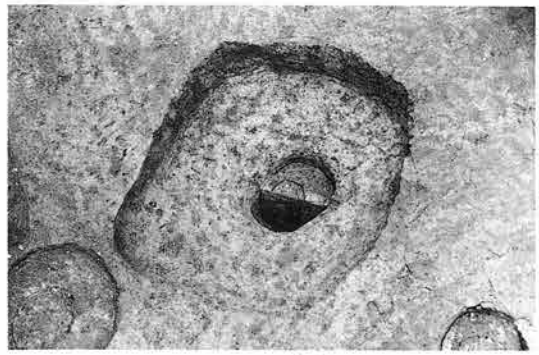
66ＳＫ16断面



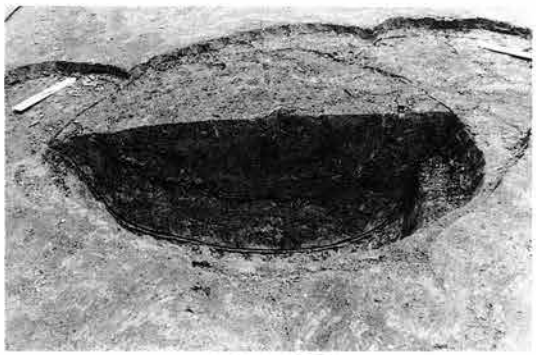
66ＳＫ16完掘

写真図版83　Ｆ地区の遺構①

66ＳＫ17断面

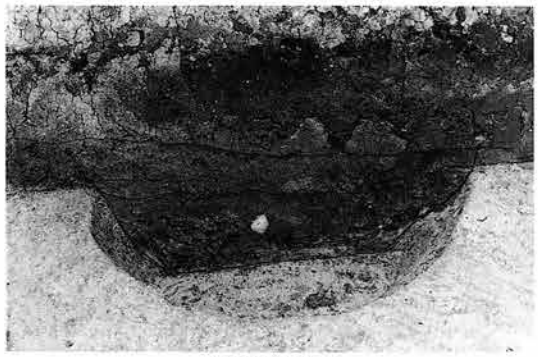


66ＳＫ17完掘

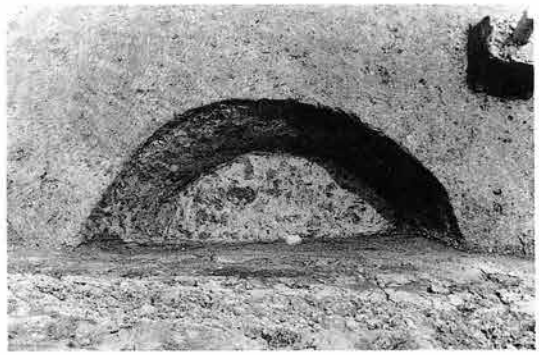


66ＳＫ18断面

66ＳＫ18完掘



66ＳＫ19断面



66ＳＫ19完掘

66ＳＫ20断面

66ＳＫ20完掘

写真図版84　Ｆ地区の遺構②

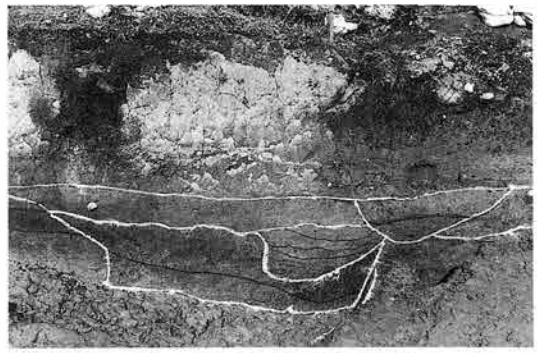
66ＳＫ21断面

66ＳＫ21完掘

66ＳＫ22断面

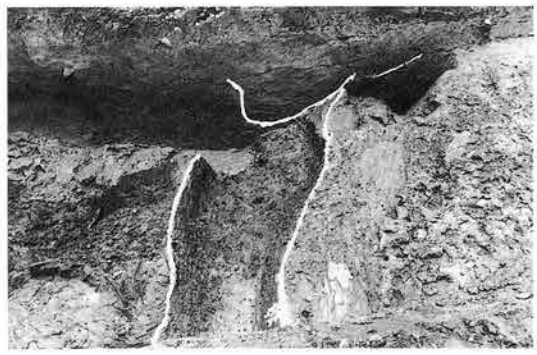
66ＳＫ22完掘

66ＳＫ23断面



66ＳＤ４・ＳＤ５・ＳＤ６断面

66ＳＤ４完掘



66ＳＤ５完掘

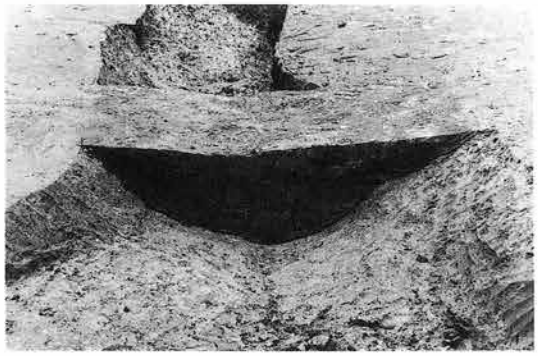
写真図版85　Ｆ地区の遺構③

66ＳＤ６完掘

66ＳＤ６馬骨出土状況

66ＳＤ６馬骨出土状況

66ＳＤ６馬骨（下顎）出土状況



66ＳＤ７断面

66ＳＤ７完掘

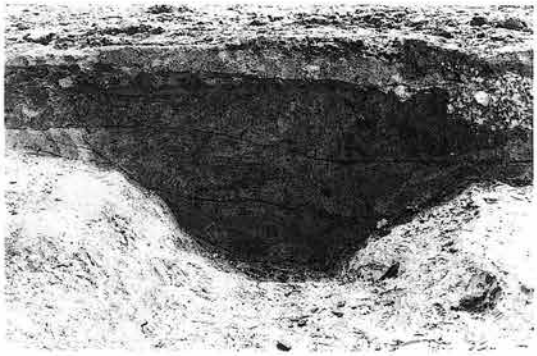
66ＳＤ８断面

66ＳＤ７・ＳＤ８完掘

写真図版86　Ｆ地区の遺構④

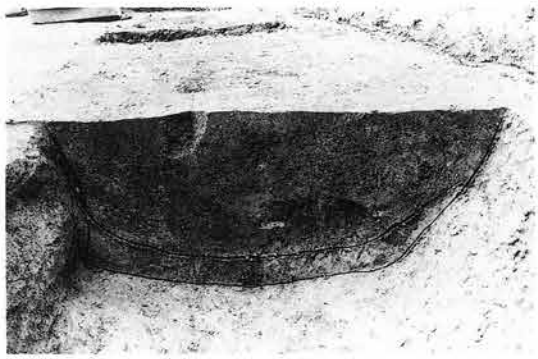
66ＳＤ９断面

66ＳＤ９完掘



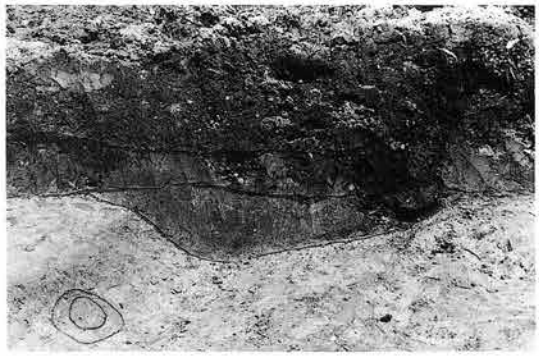
66ＳＤ10断面

66ＳＤ10完掘



66ＳＤ11断面

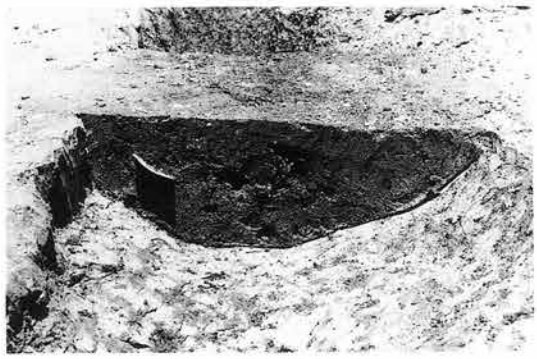
66ＳＤ11完掘



66ＳＤ12断面

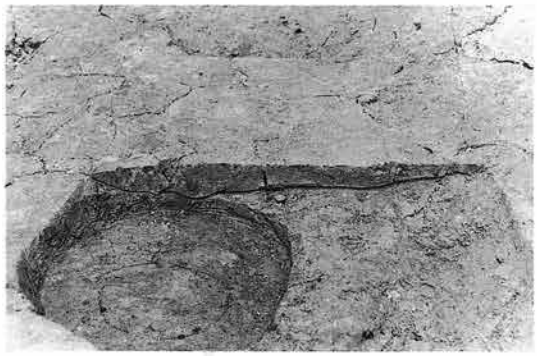
66ＳＤ12完掘

写真図版87　Ｆ地区の遺構⑤



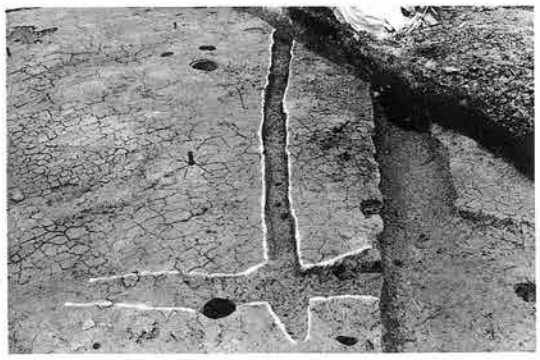
66ＳＤ13断面（Ｅ－Ｆ）

66ＳＤ13断面



66ＳＤ14断面

66ＳＤ15断面



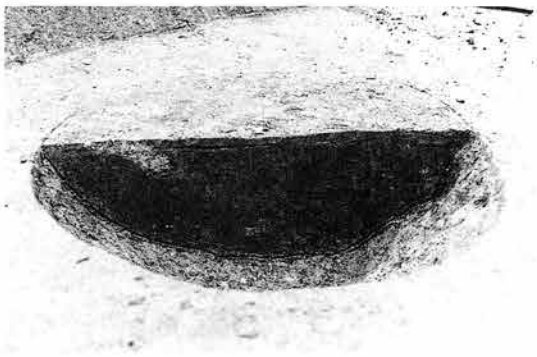
66ＳＤ15・ＳＤ16完掘

Ｆ地区柱穴群

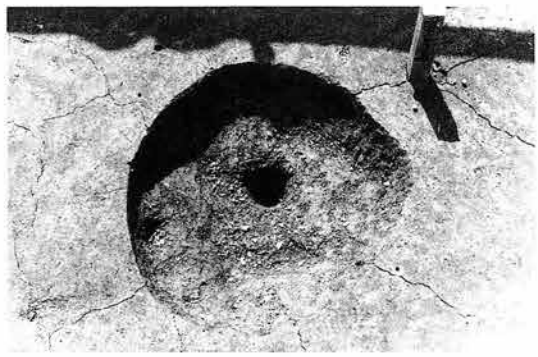
ＶＢ２ｆ　金具出土状況

Ｆ地区完掘

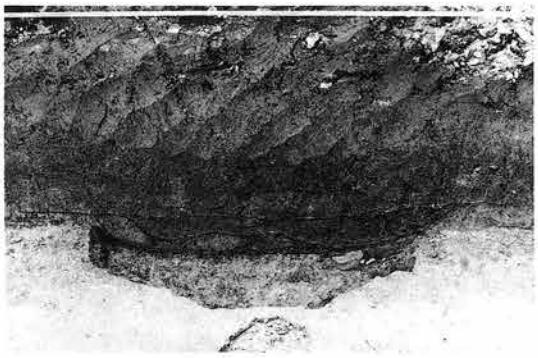
写真図版88　Ｆ地区の遺構⑥



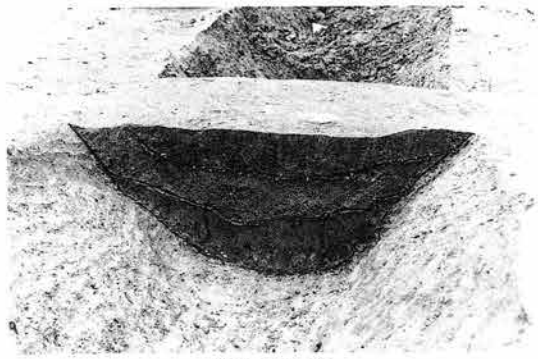
66ＳＫ34断面



66ＳＫ34完掘

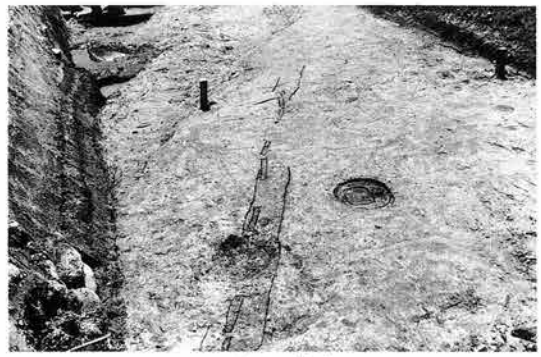


66ＳＫ35断面

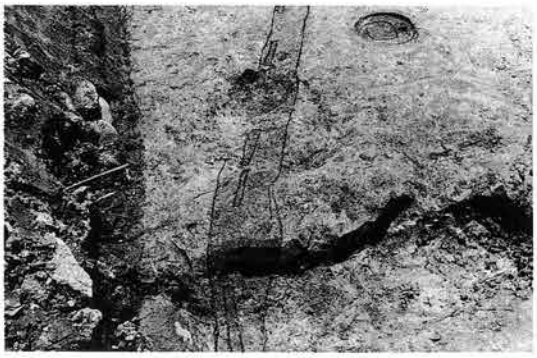


66ＳＤ22断面

66ＳＤ22完掘



66ＳＡ５検出

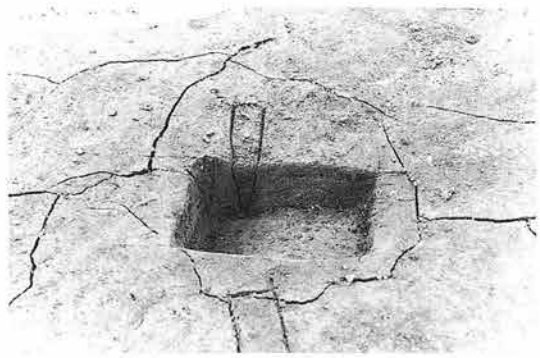


66ＳＡ５検出

66ＳＡ５断面

写真図版89　Ｇ地区の遺構①

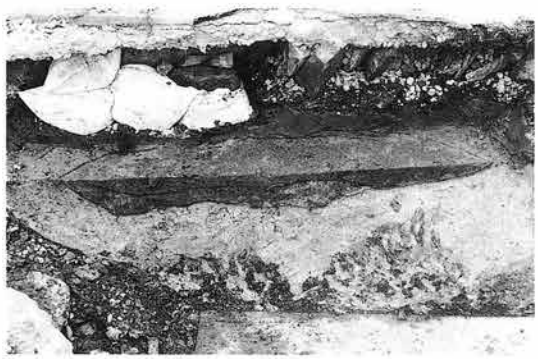
66ＳＡ５断面



66ＳＡ５断面

Ｇ地区東側完掘

Ｇ地区東側完掘



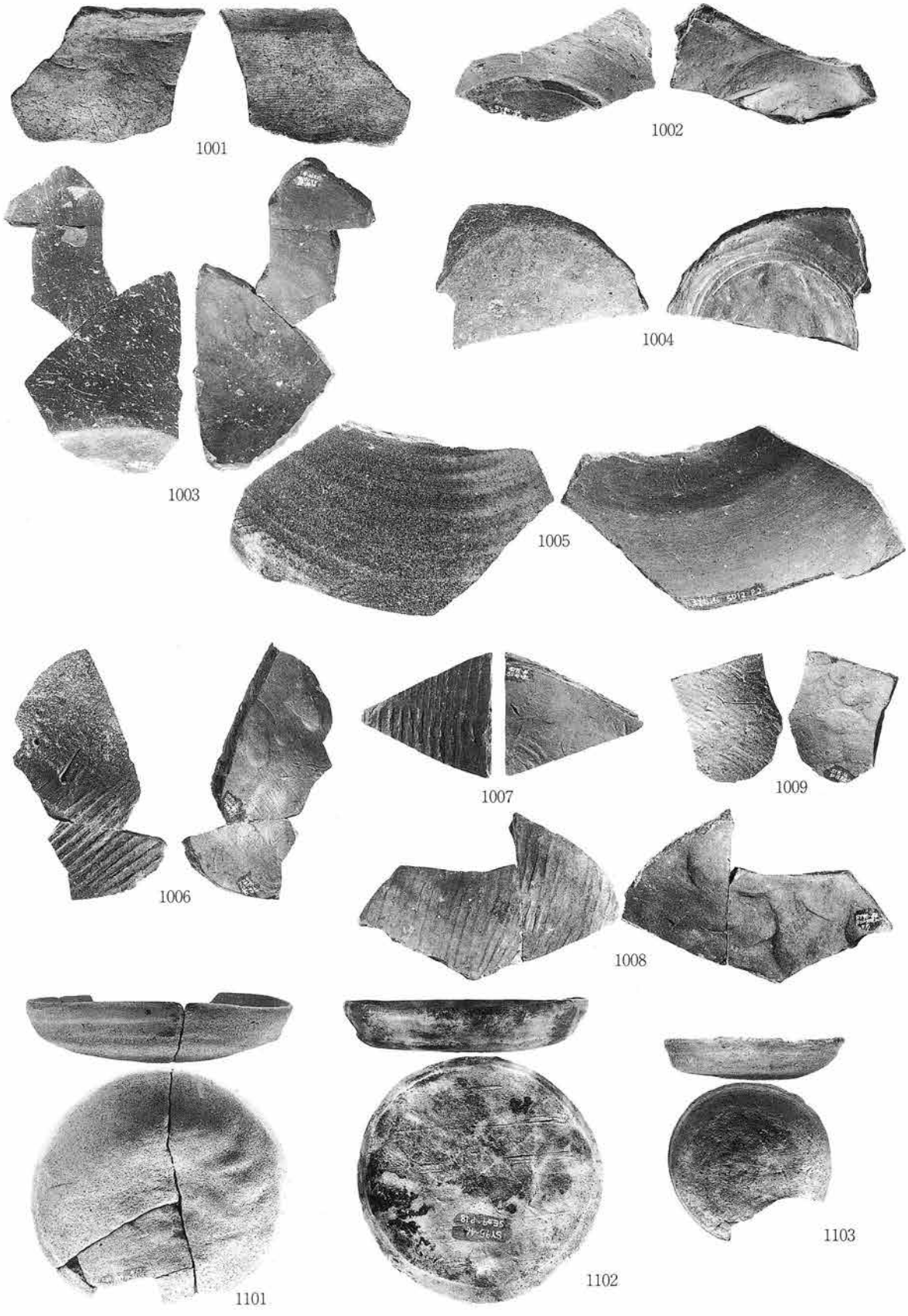
66ＳＫ36断面

66ＳＫ36完掘

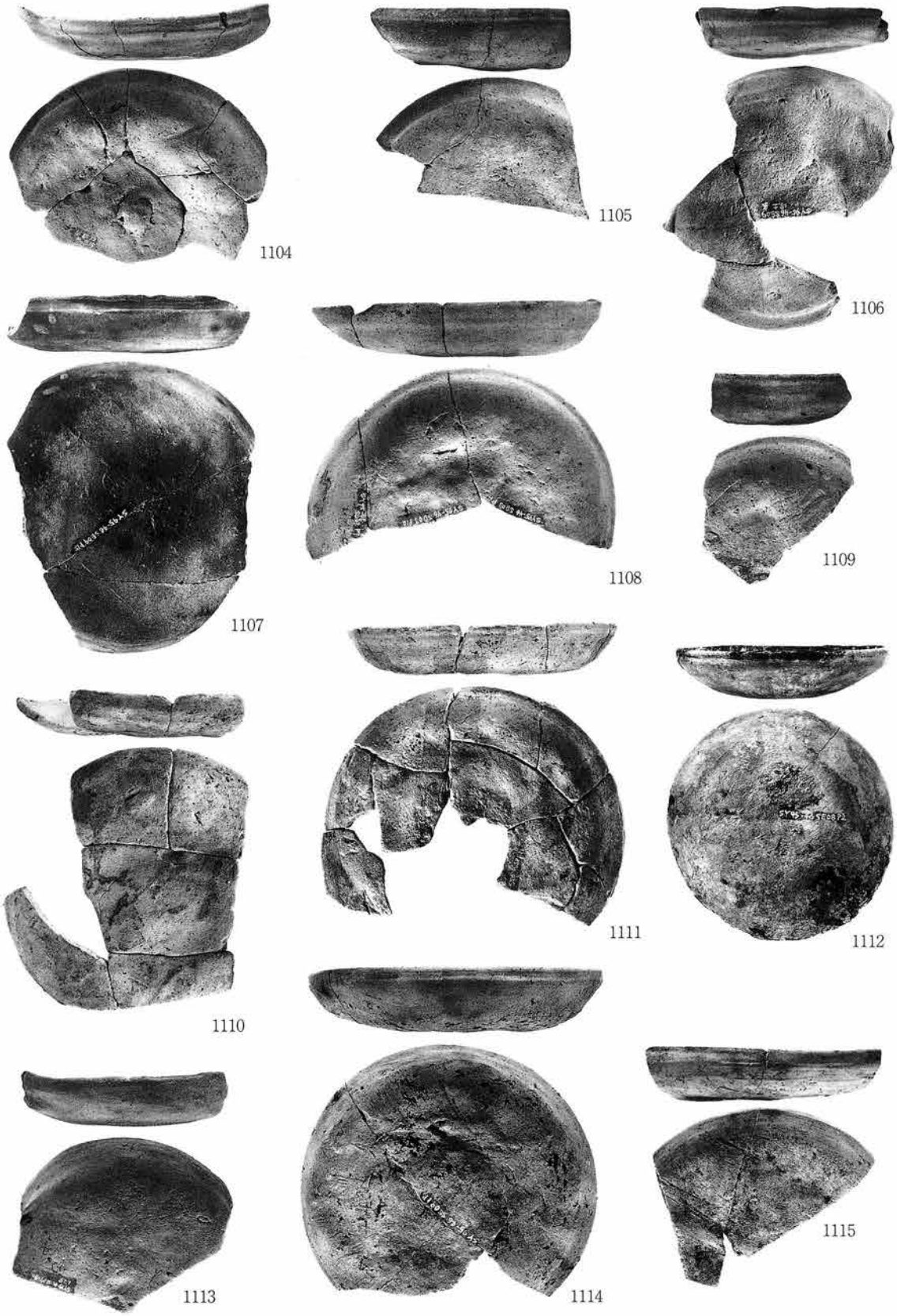
Ｇ地区西側完掘（北→）

Ｇ地区西側完掘（南→）

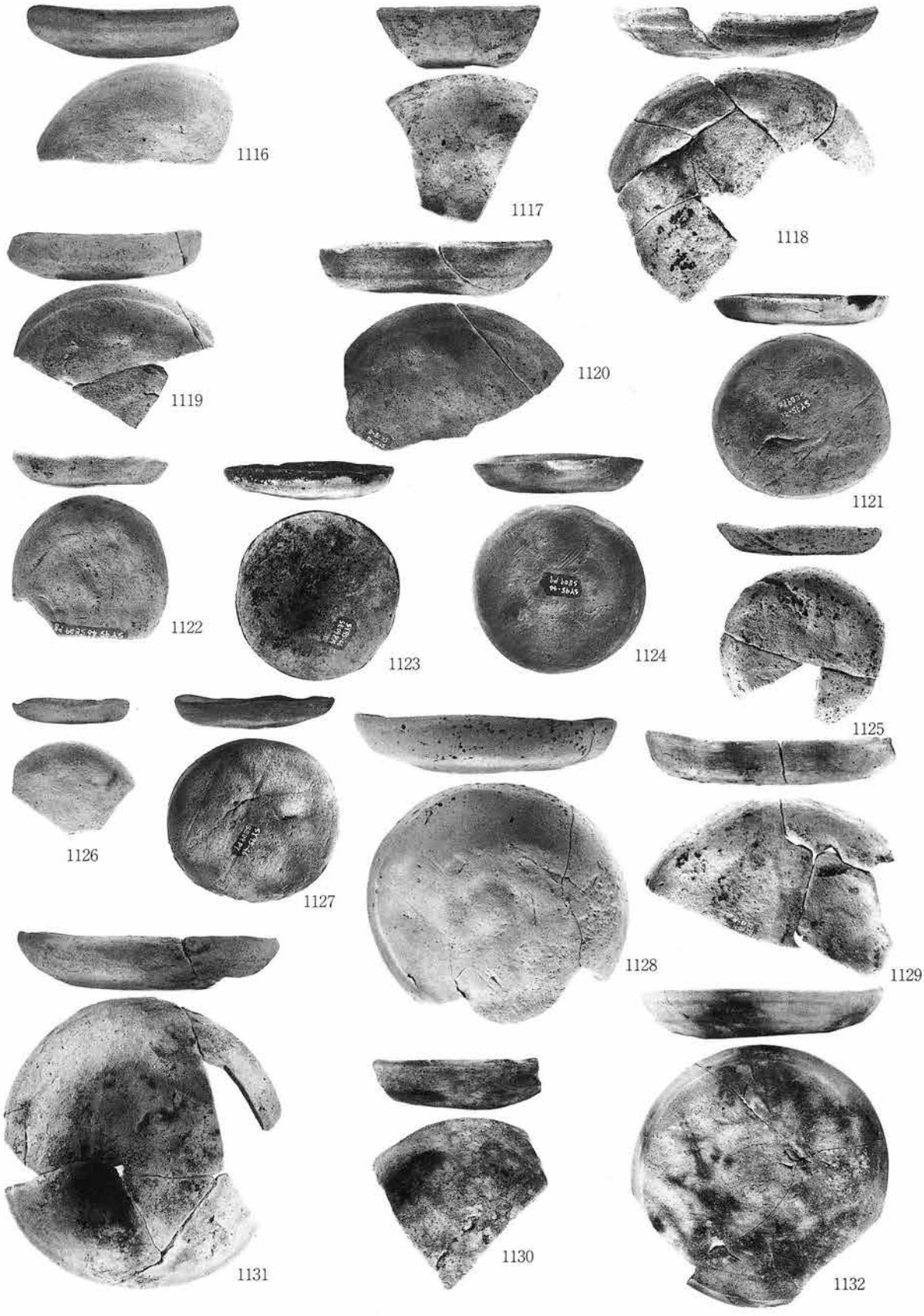
写真図版90　Ｇ地区の遺構②



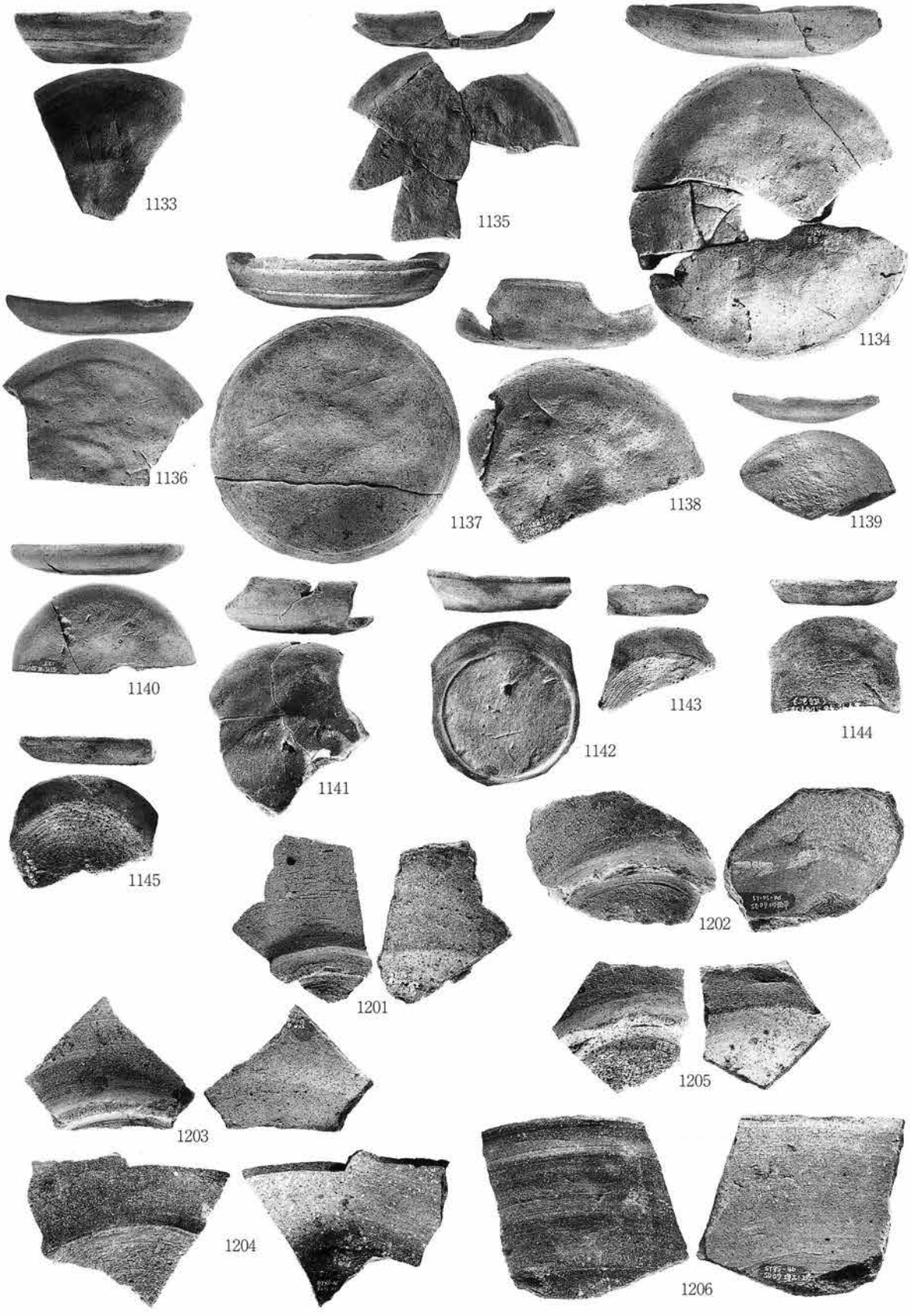
写真図版91　A地区の遺物①



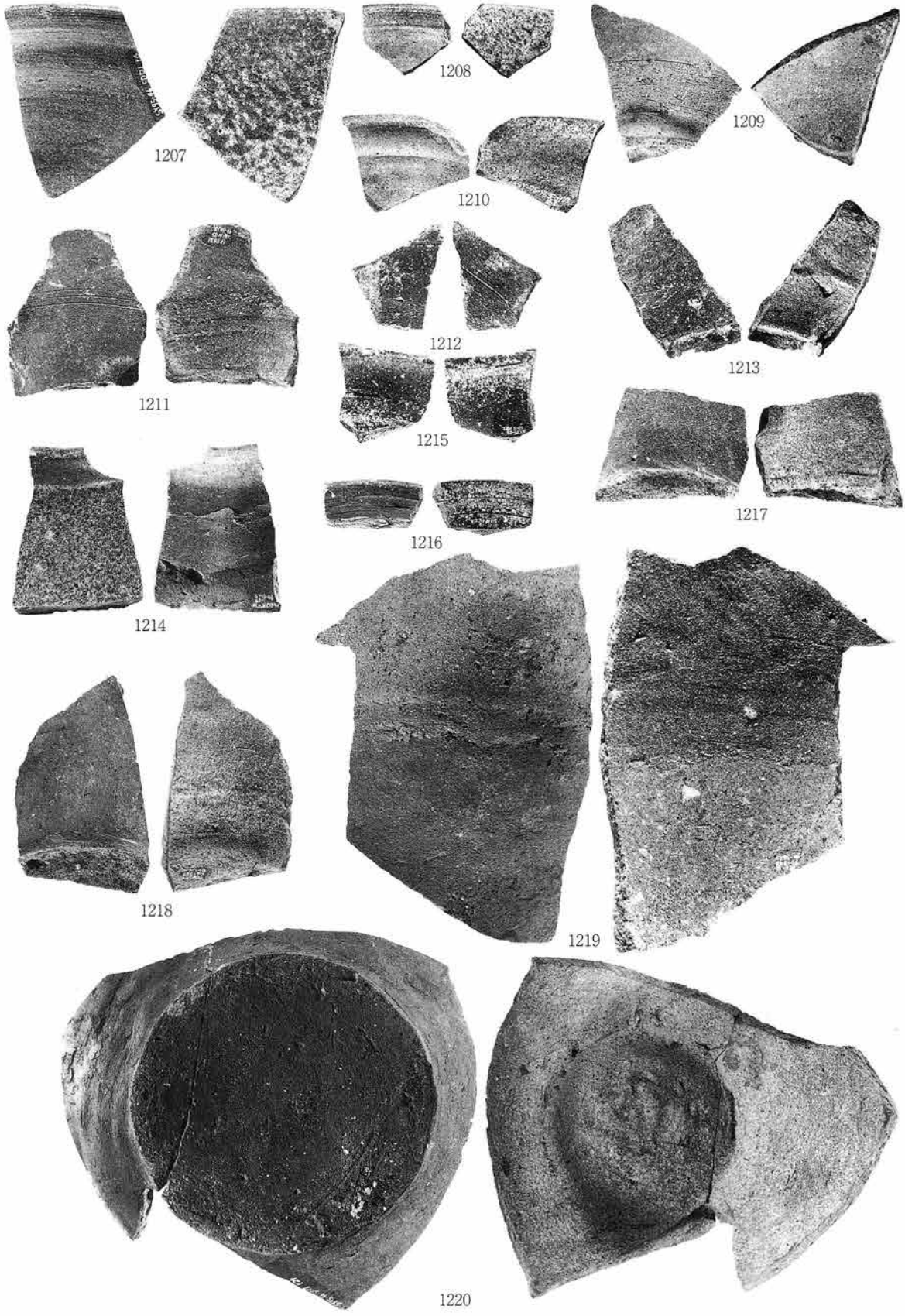
写真図版92　A地区の遺物②



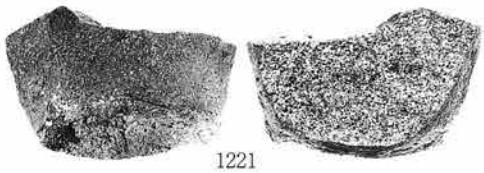
写真図版93　A地区の遺物③



写真図版94　A地区の遺物④



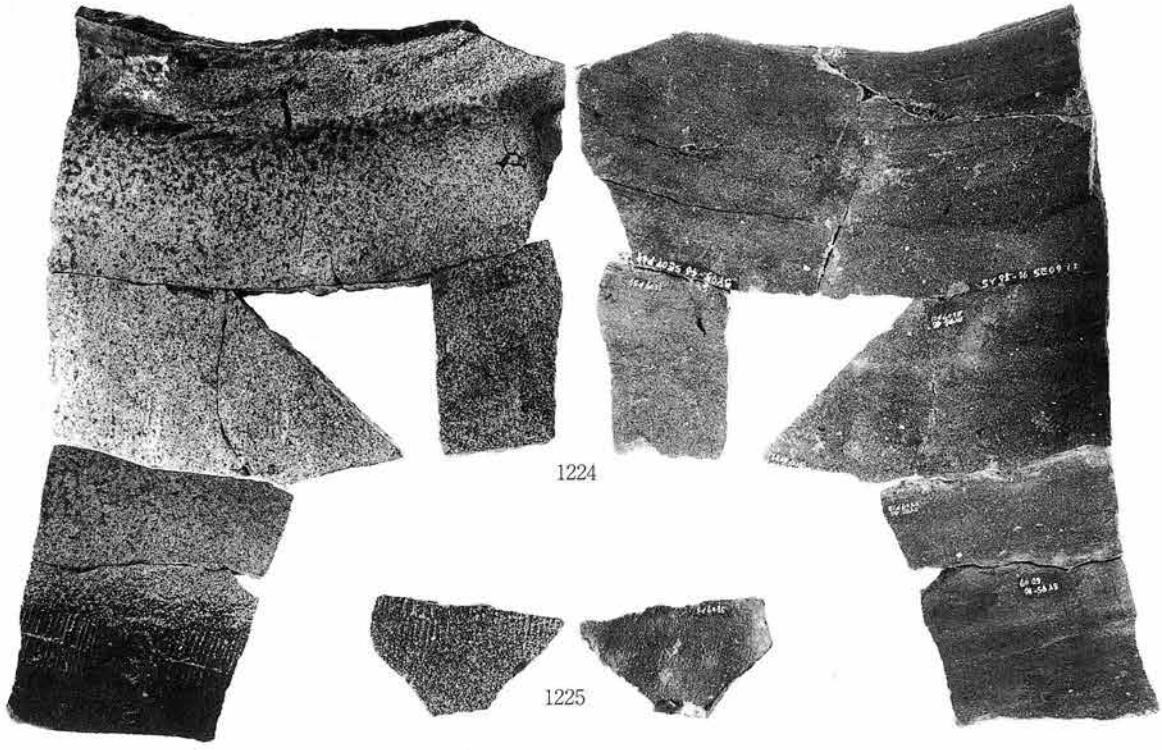
写真図版95　A地区の遺物⑤



1221

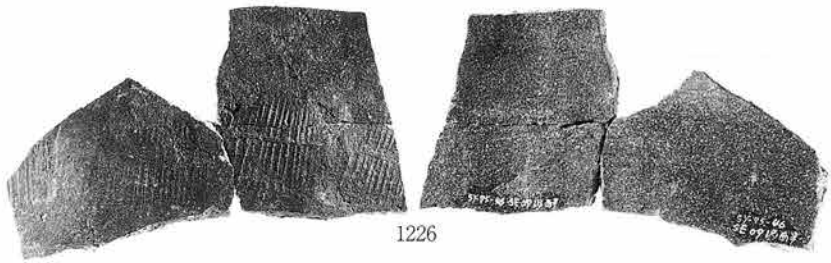
1222

1223



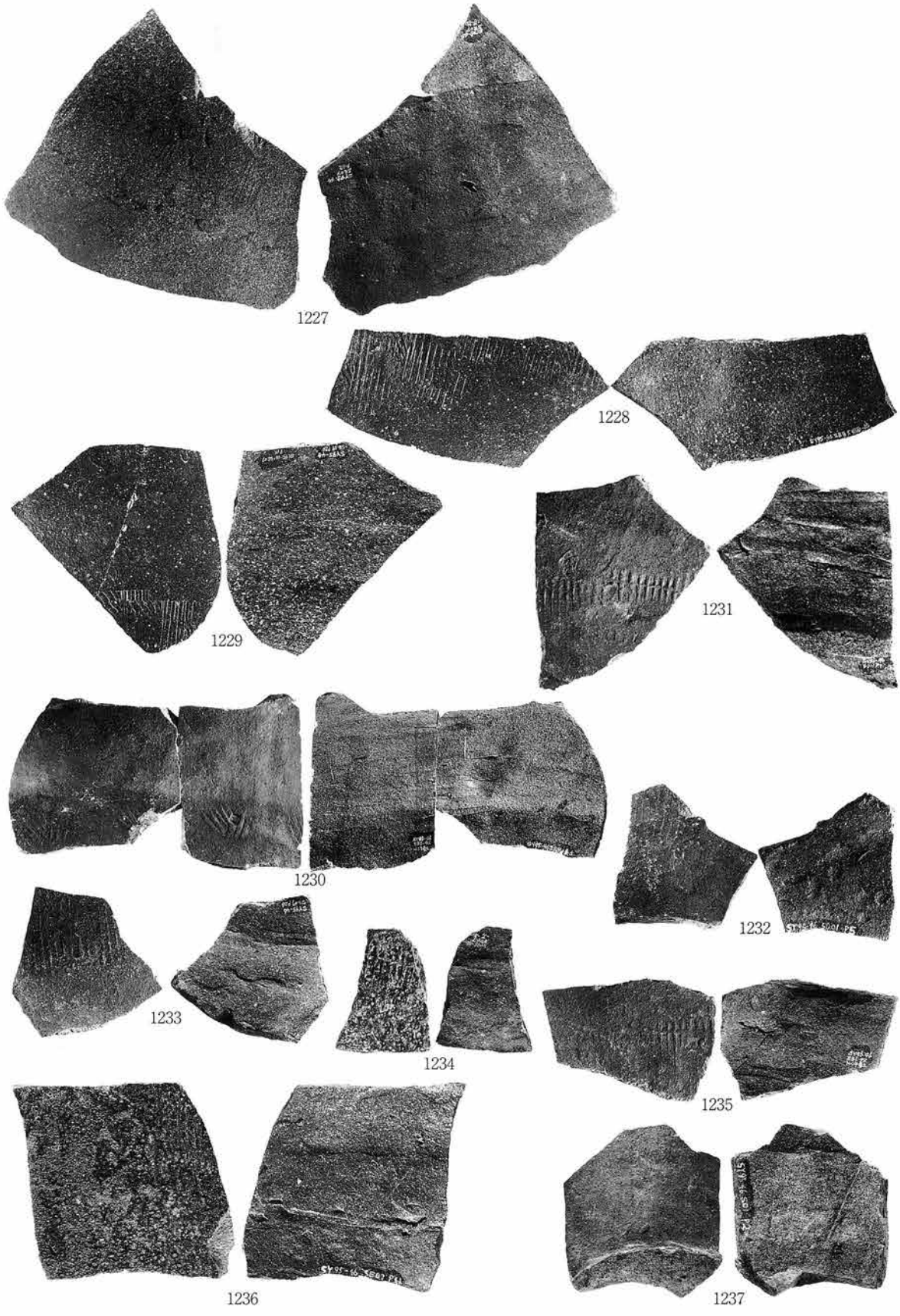
1224

1225

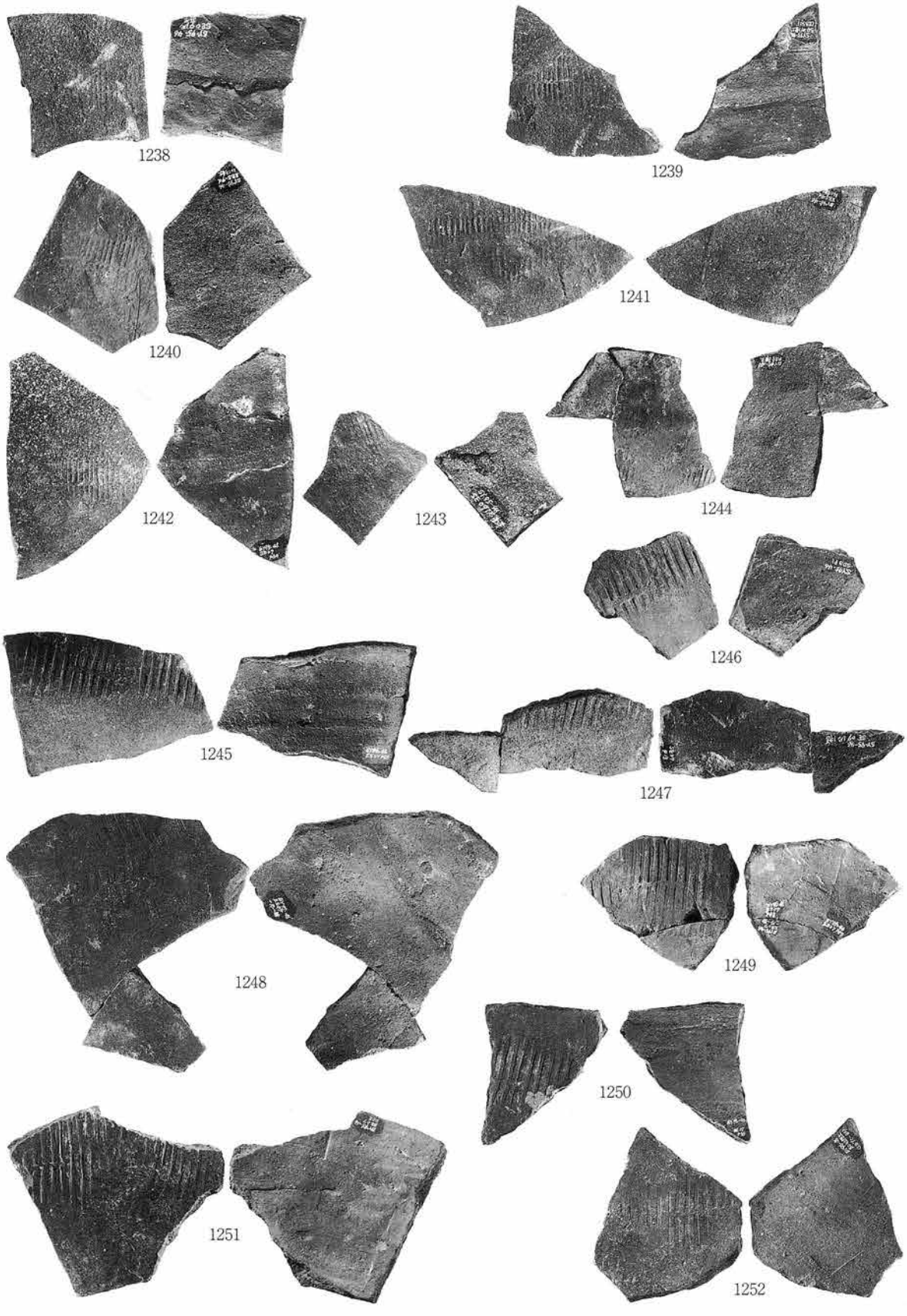


1226

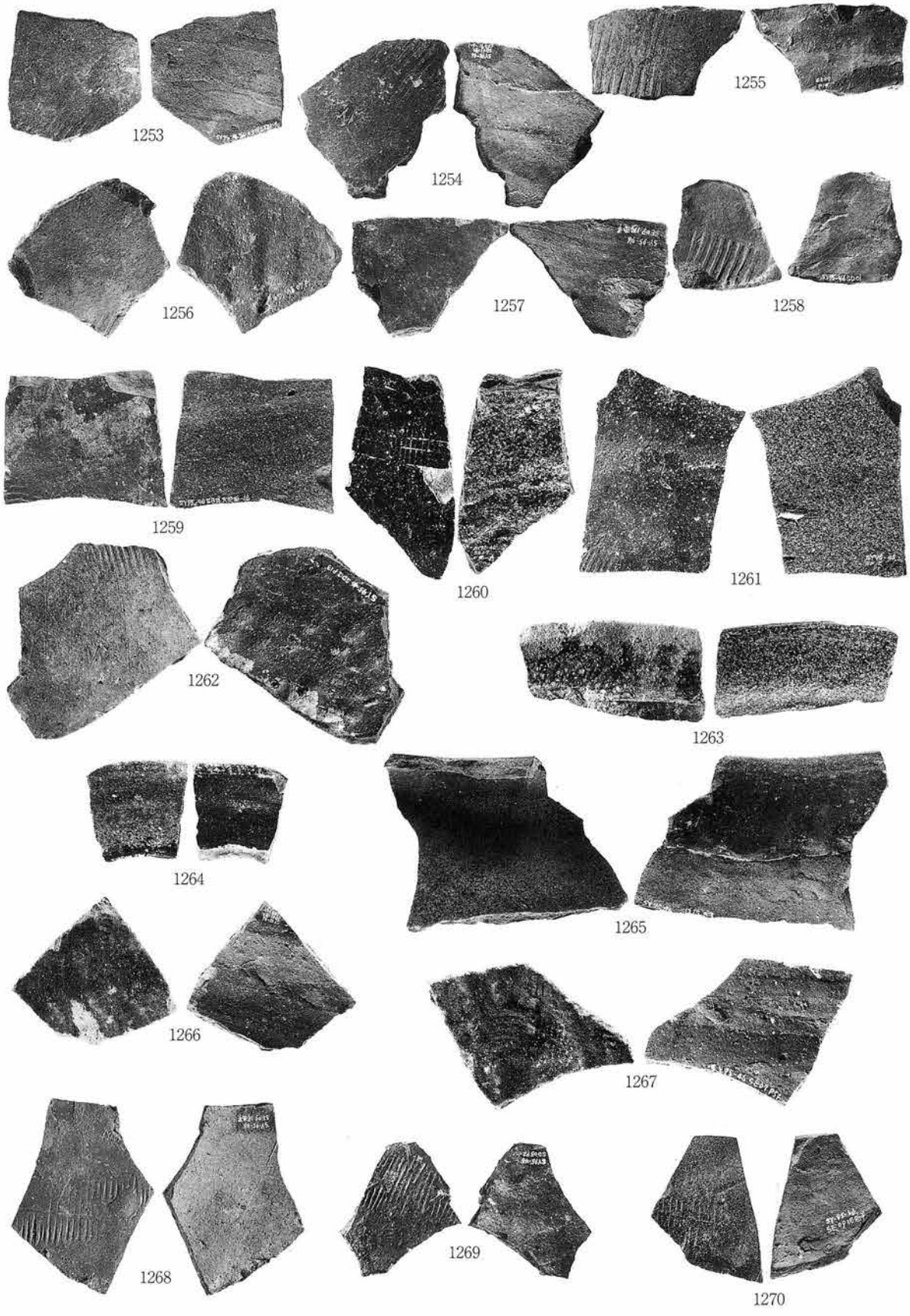
写真図版96　A地区の遺物⑥



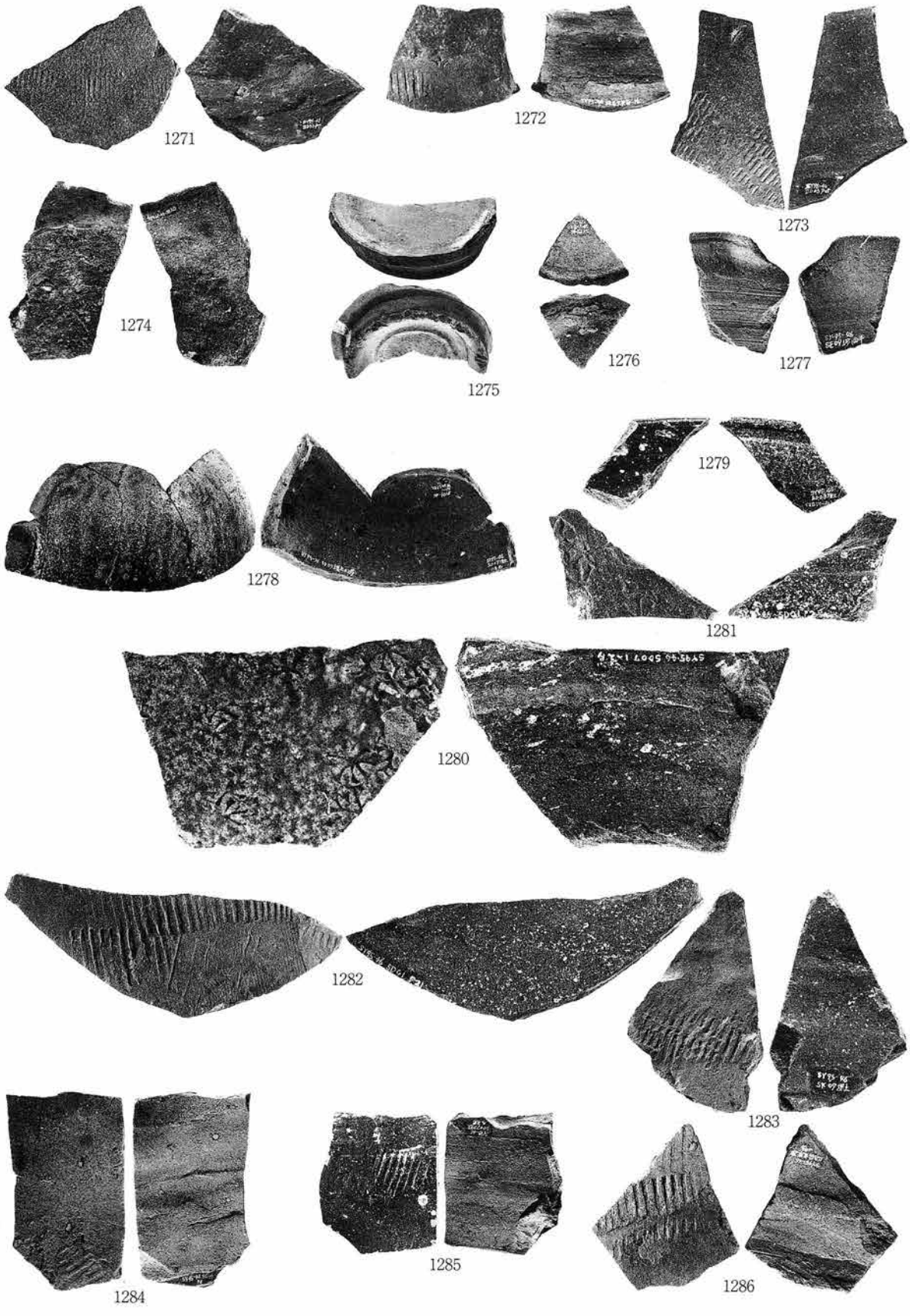
写真図版97　A地区の遺物⑦



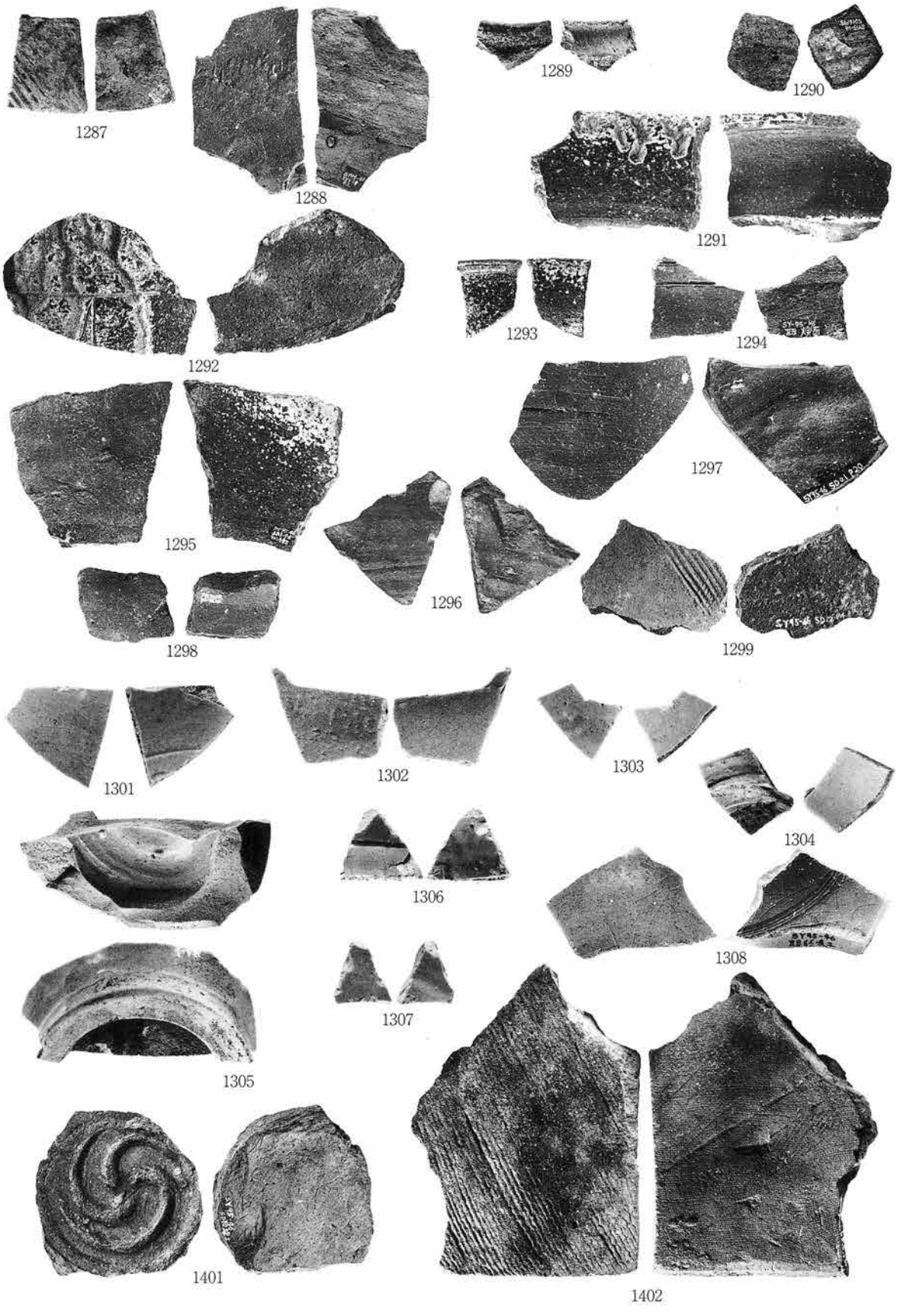
写真図版98　A地区の遺物⑧



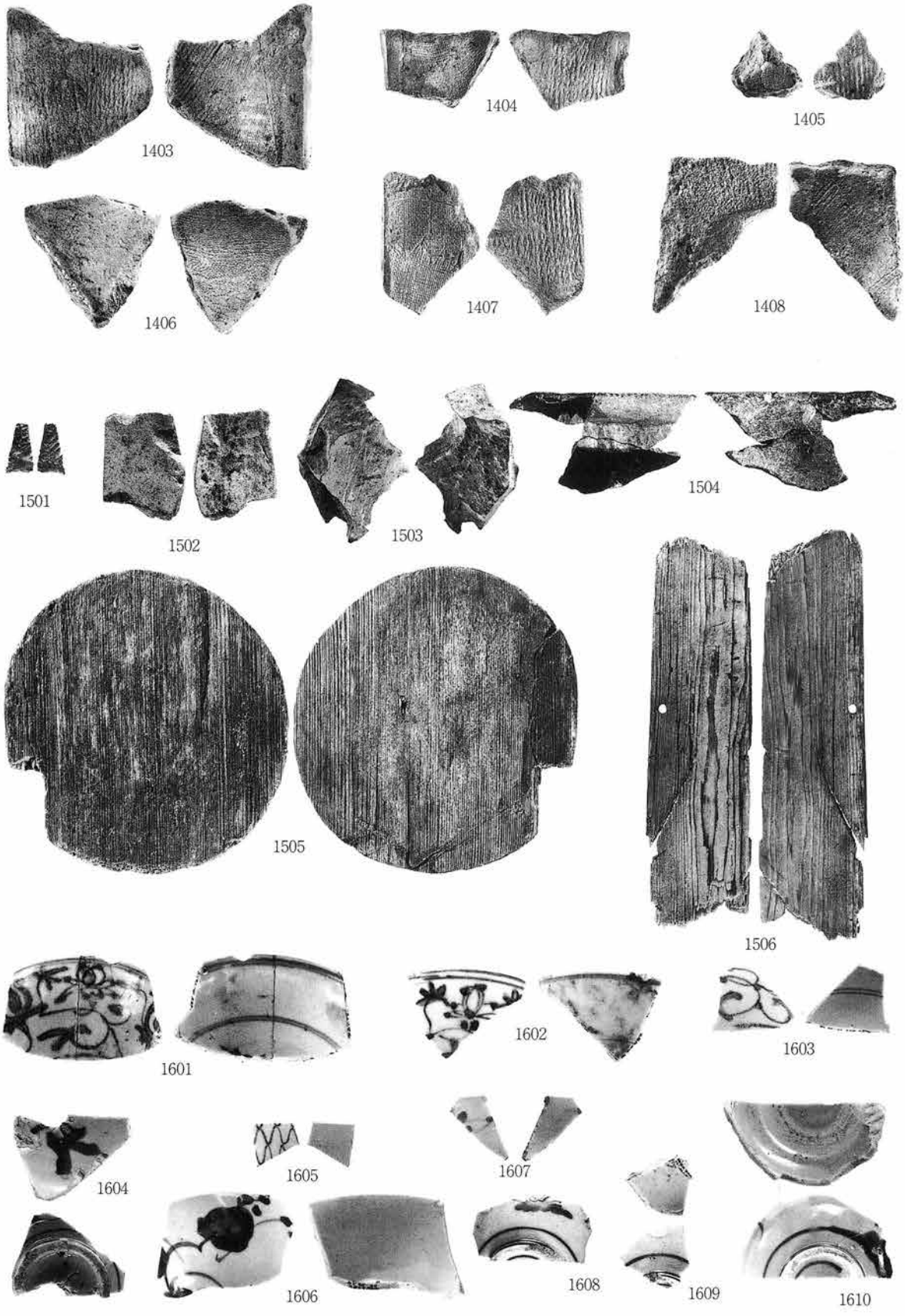
写真図版99　A地区の遺物⑨



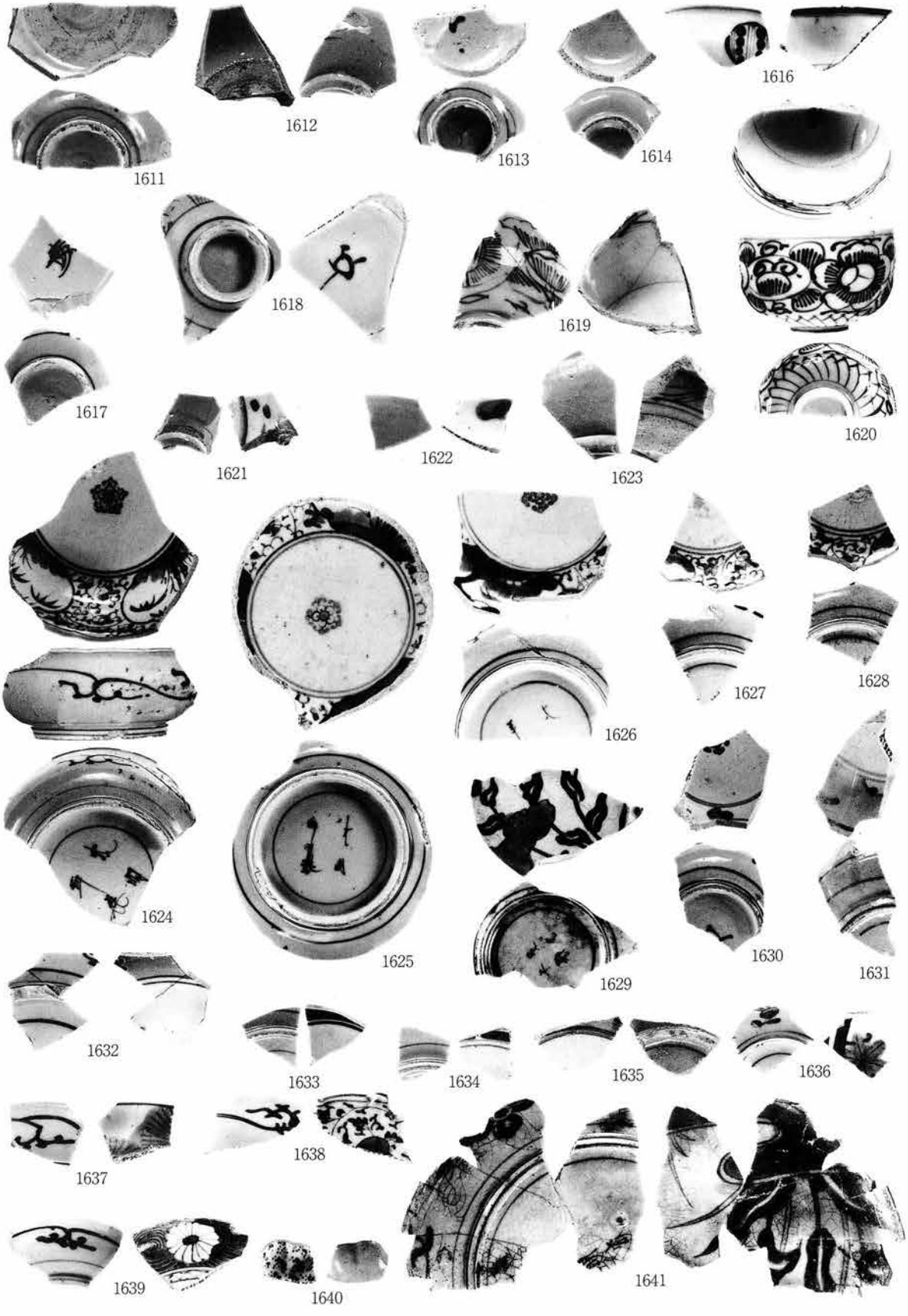
写真図版100　A地区の遺物⑩



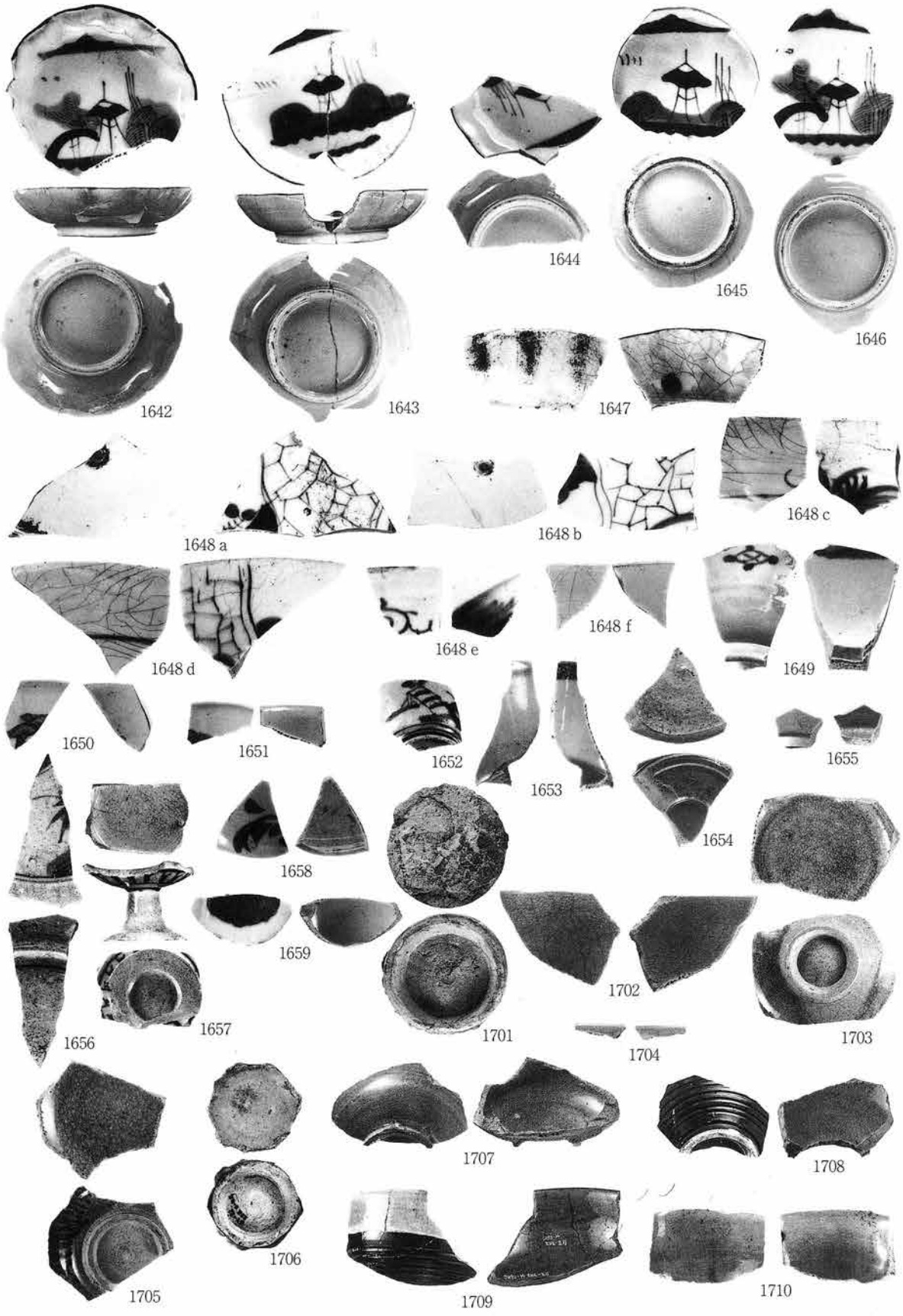
写真図版101　A地区の遺物⑪



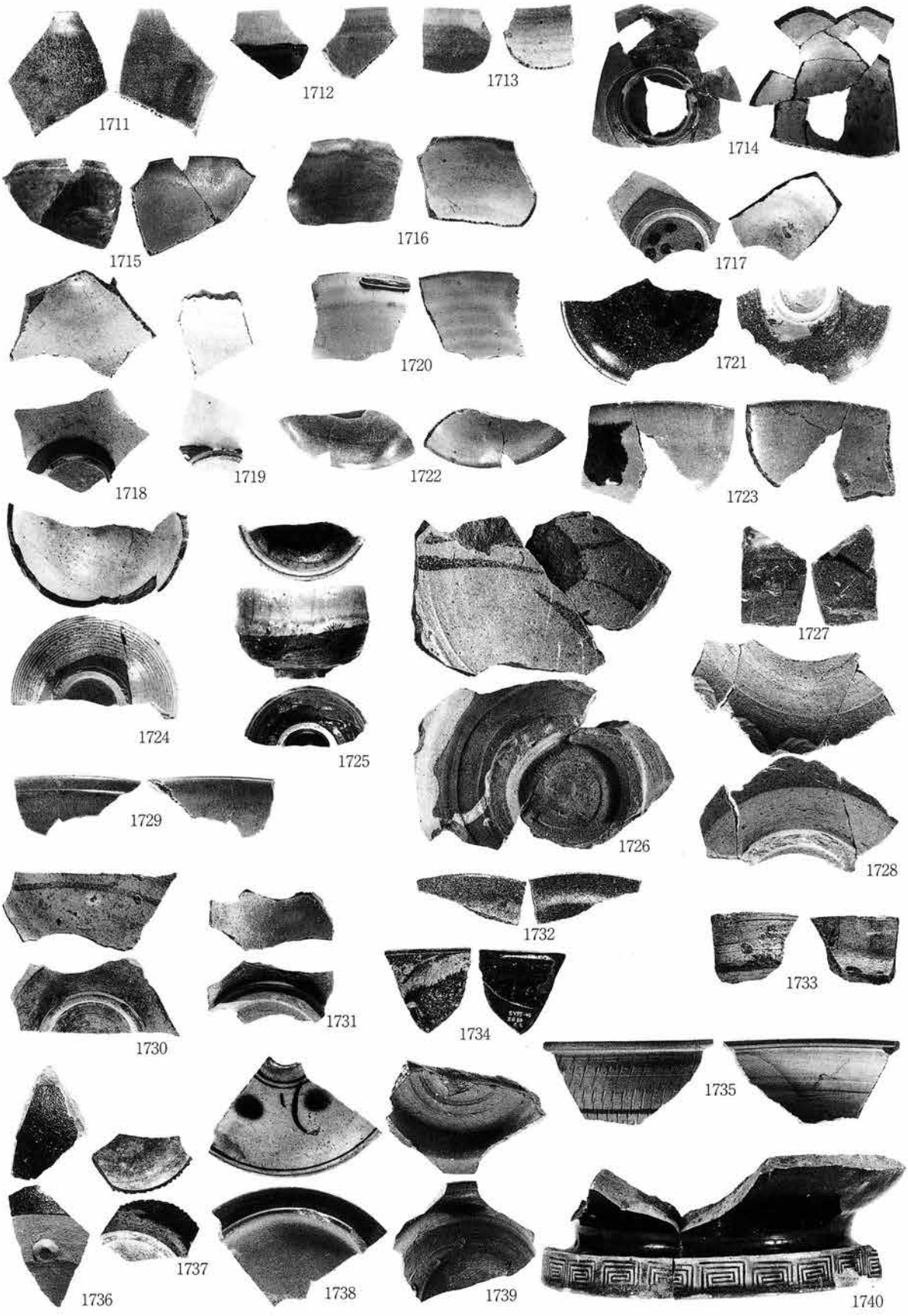
写真図版102　A地区の遺物⑫



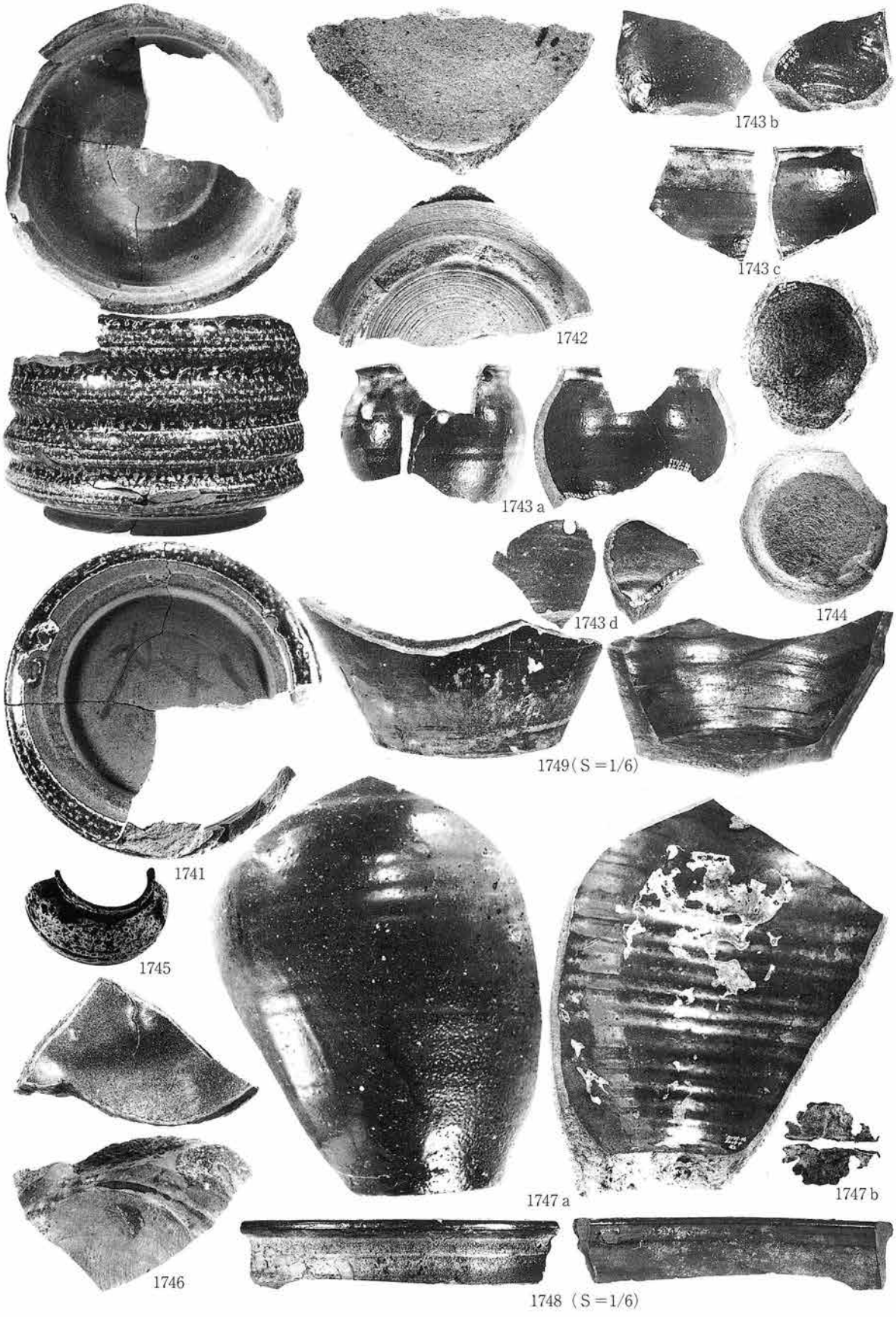
写真図版103　A地区の遺物⑬



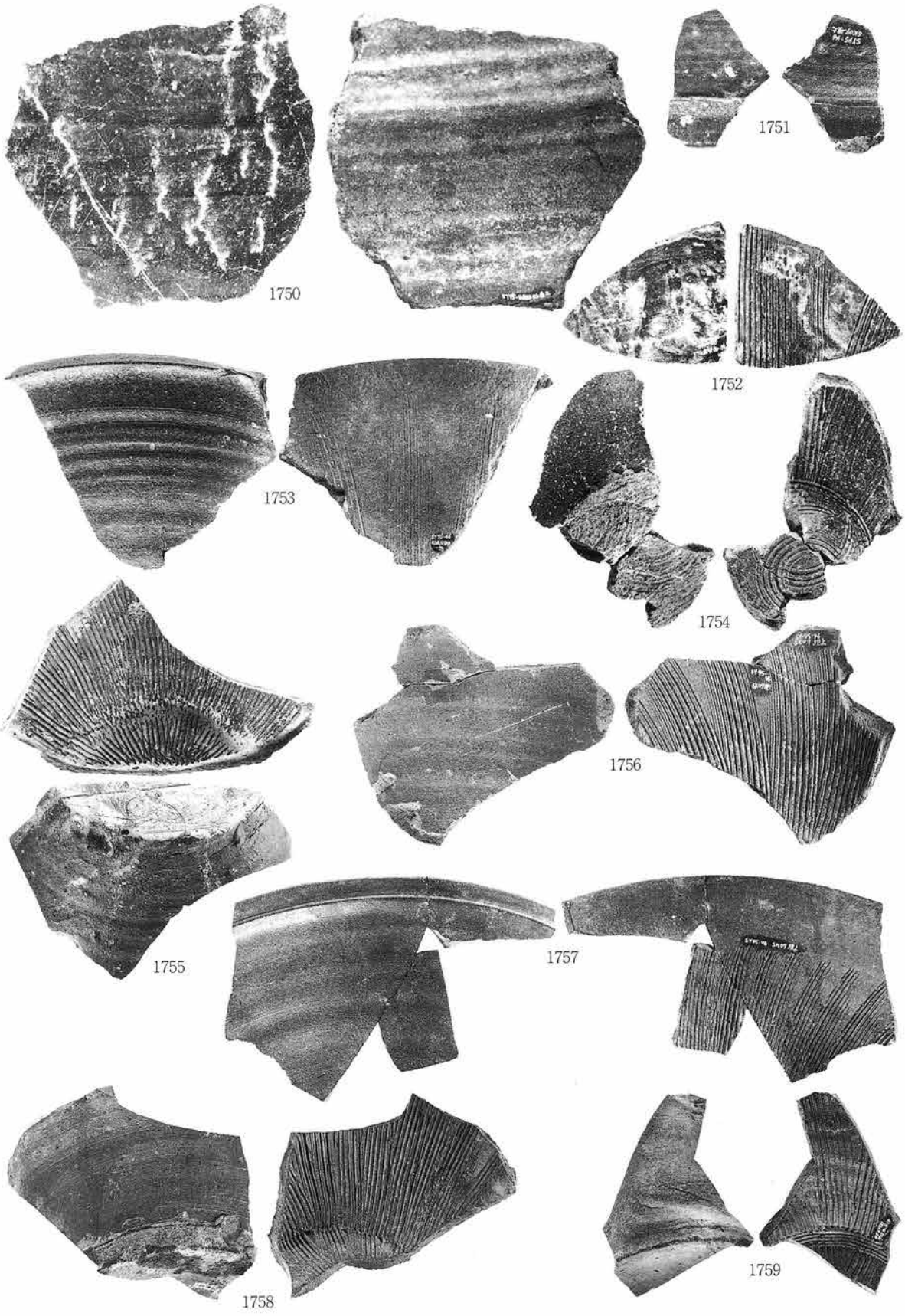
写真図版104　A地区の遺物⑭



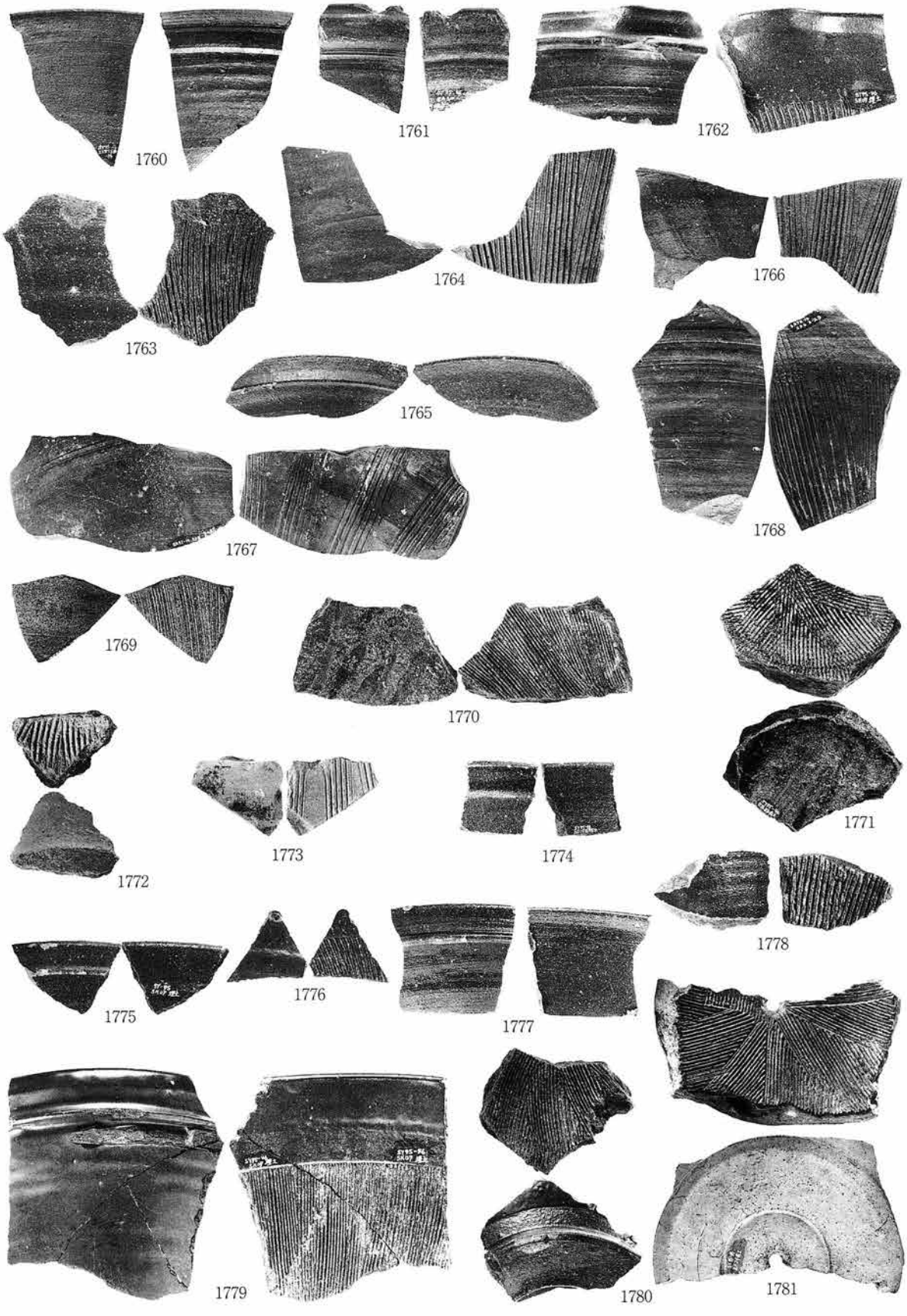
写真図版105　A地区の遺物⑮



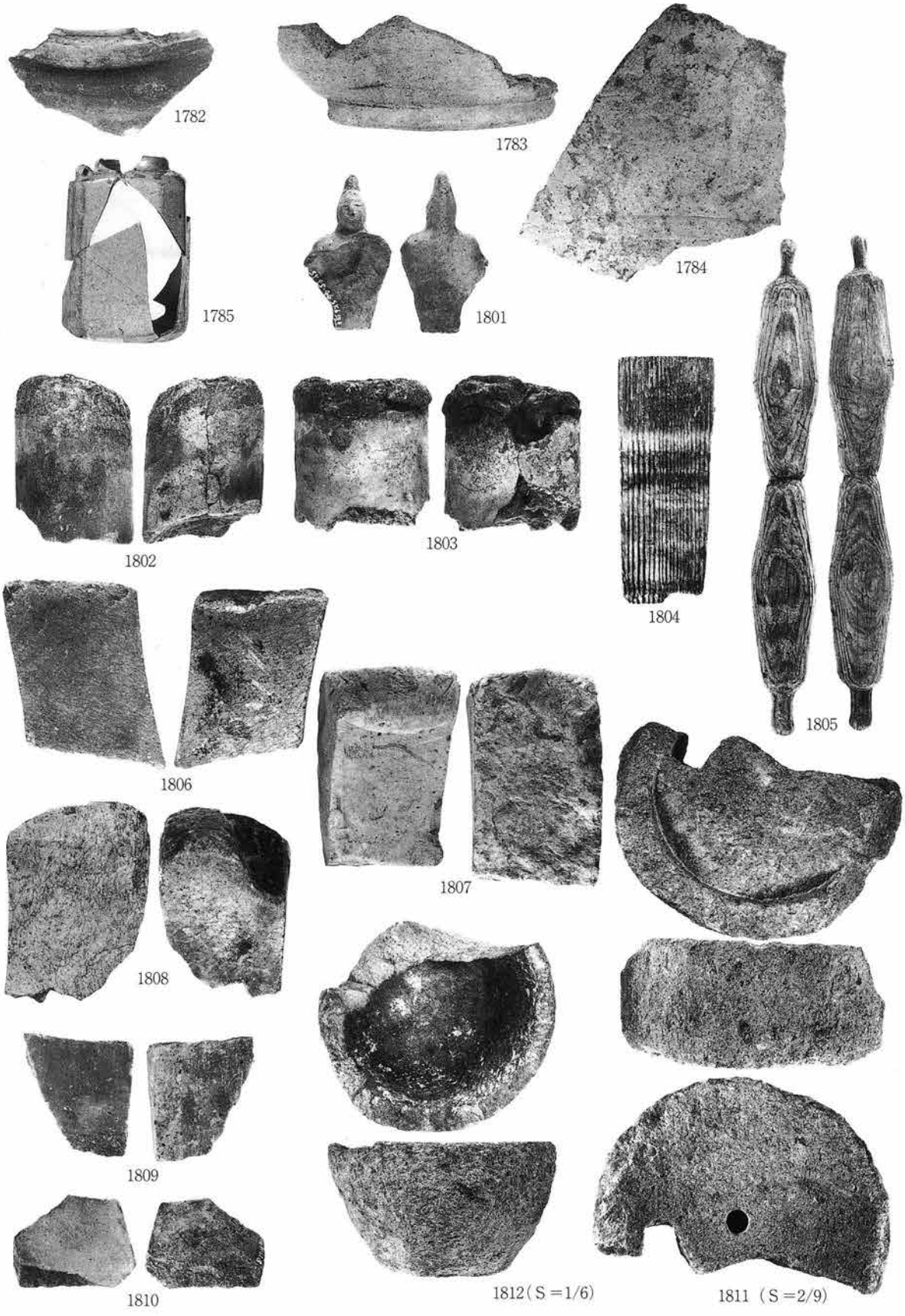
写真図版106　A地区の遺物⑯



写真図版107　A地区の遺物⑰



写真図版108　A地区の遺物⑱

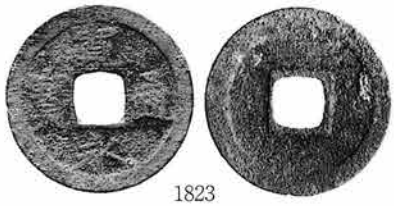


写真図版109　A地区の遺物⑲

1813

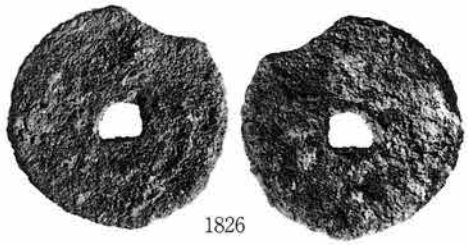
1821

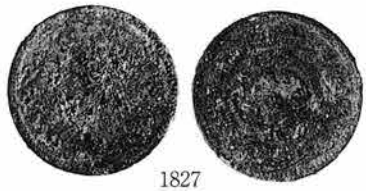
1822


1823

1824

1825


1826


1827

1828

1829

1830

1831

1832

1833

1834

1835

1836

写真図版110　A地区の遺物⑳

1901

1901（うら）

1902

1902（うら）

1903

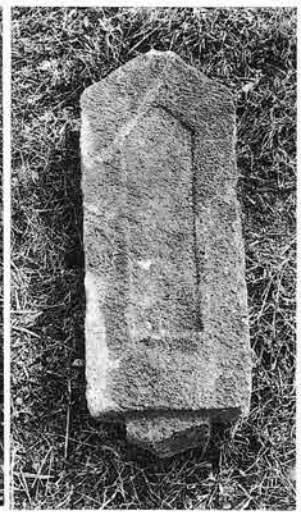
1903（うら）

1904

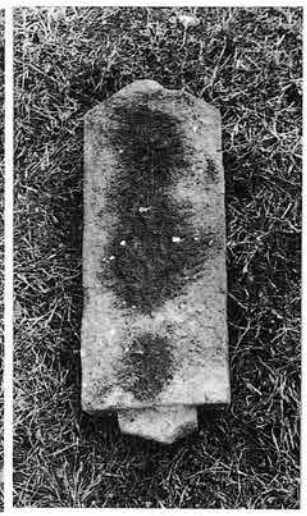
1904（うら）

1905

1905（うら）

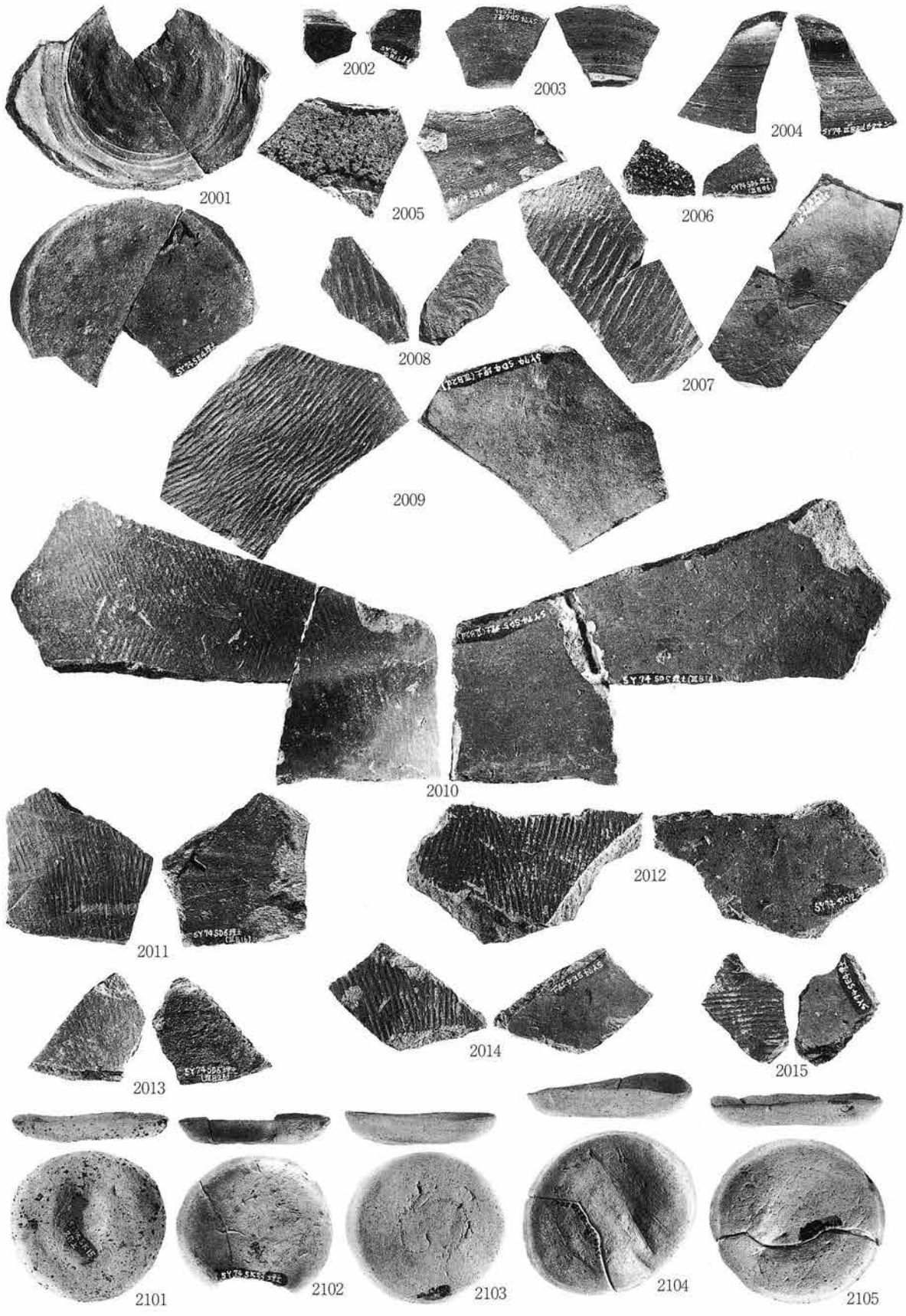


1906

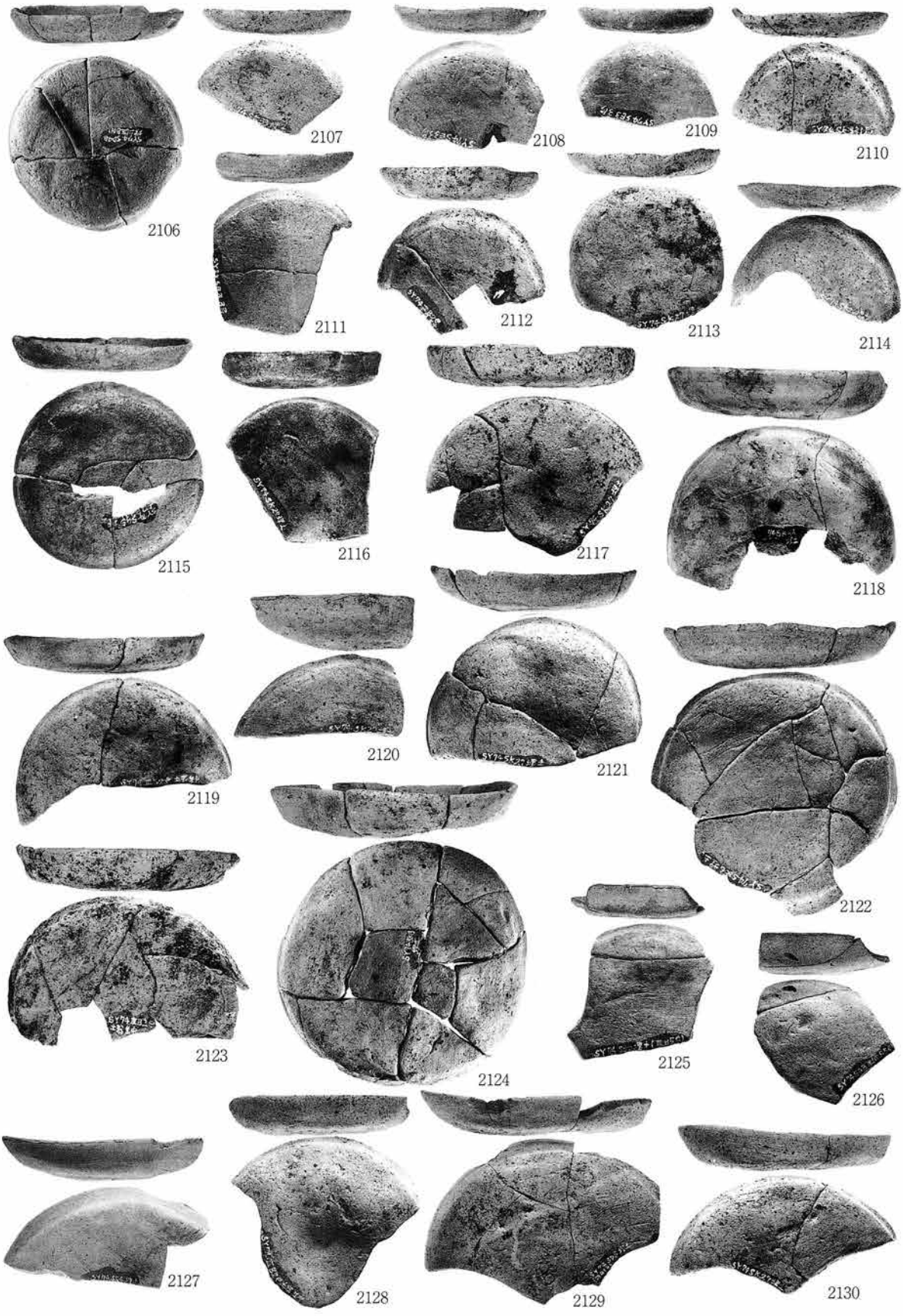


1906（うら）

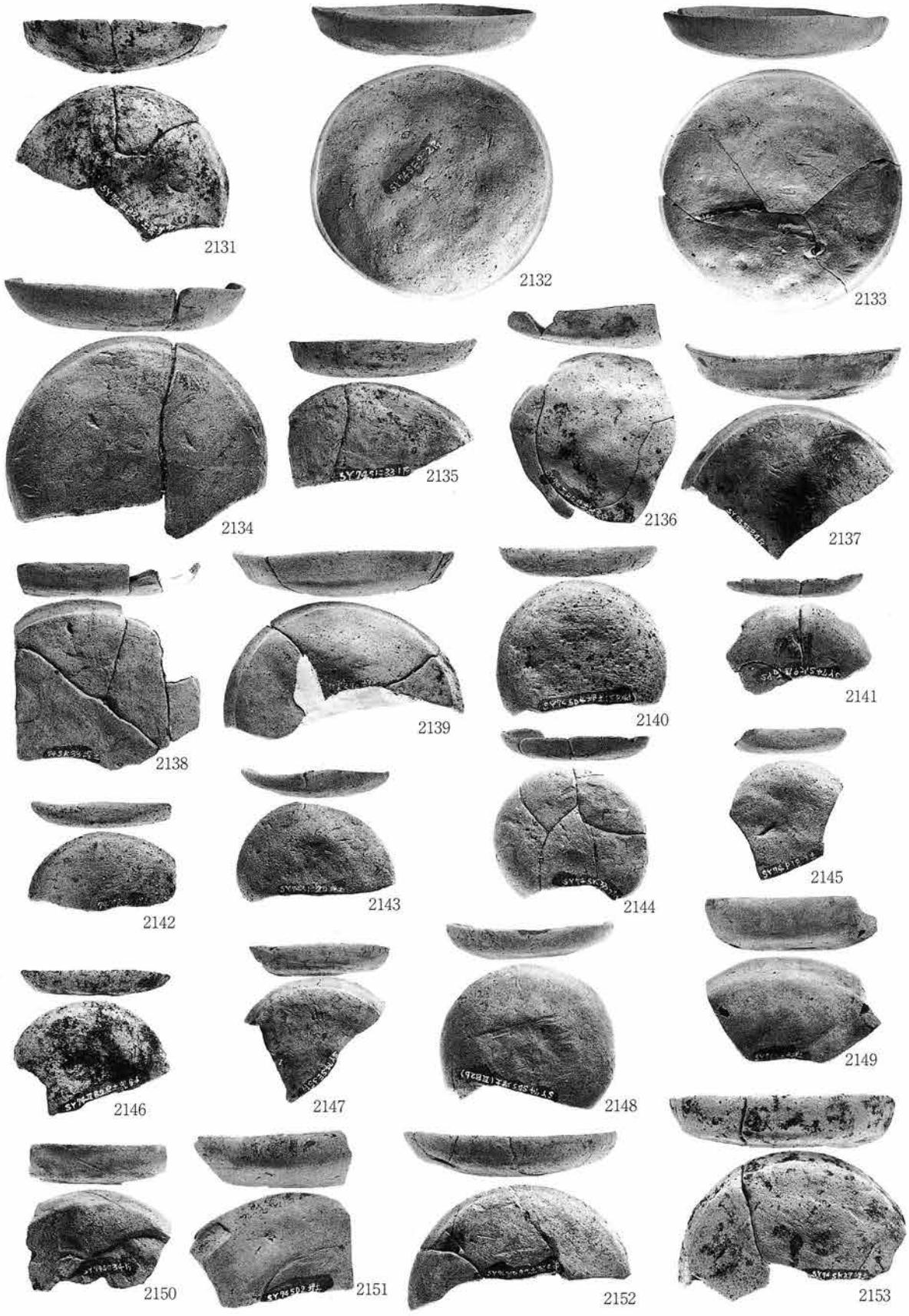
写真図版111　A地区の遺物㉑



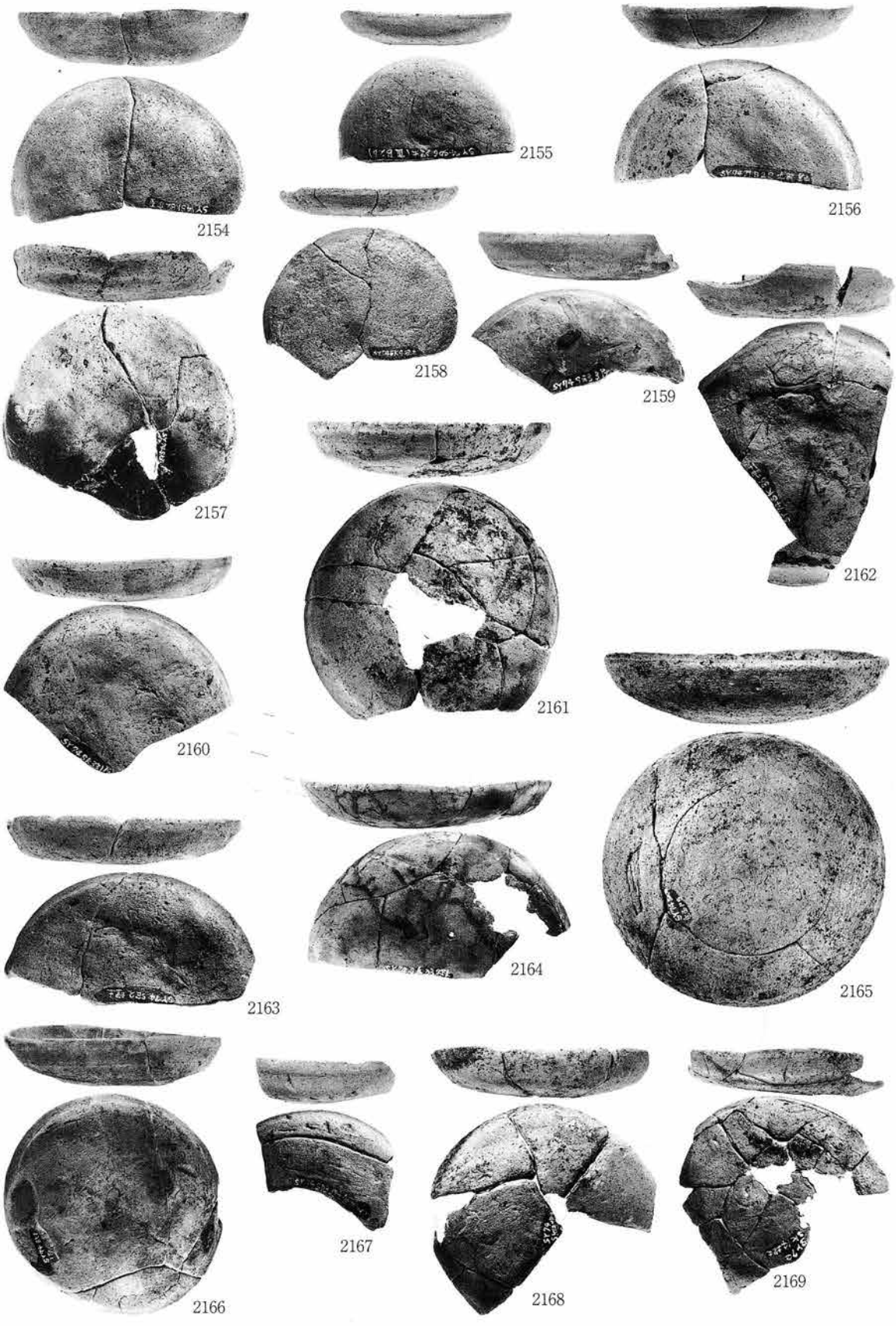
写真図版112　B地区の遺物①



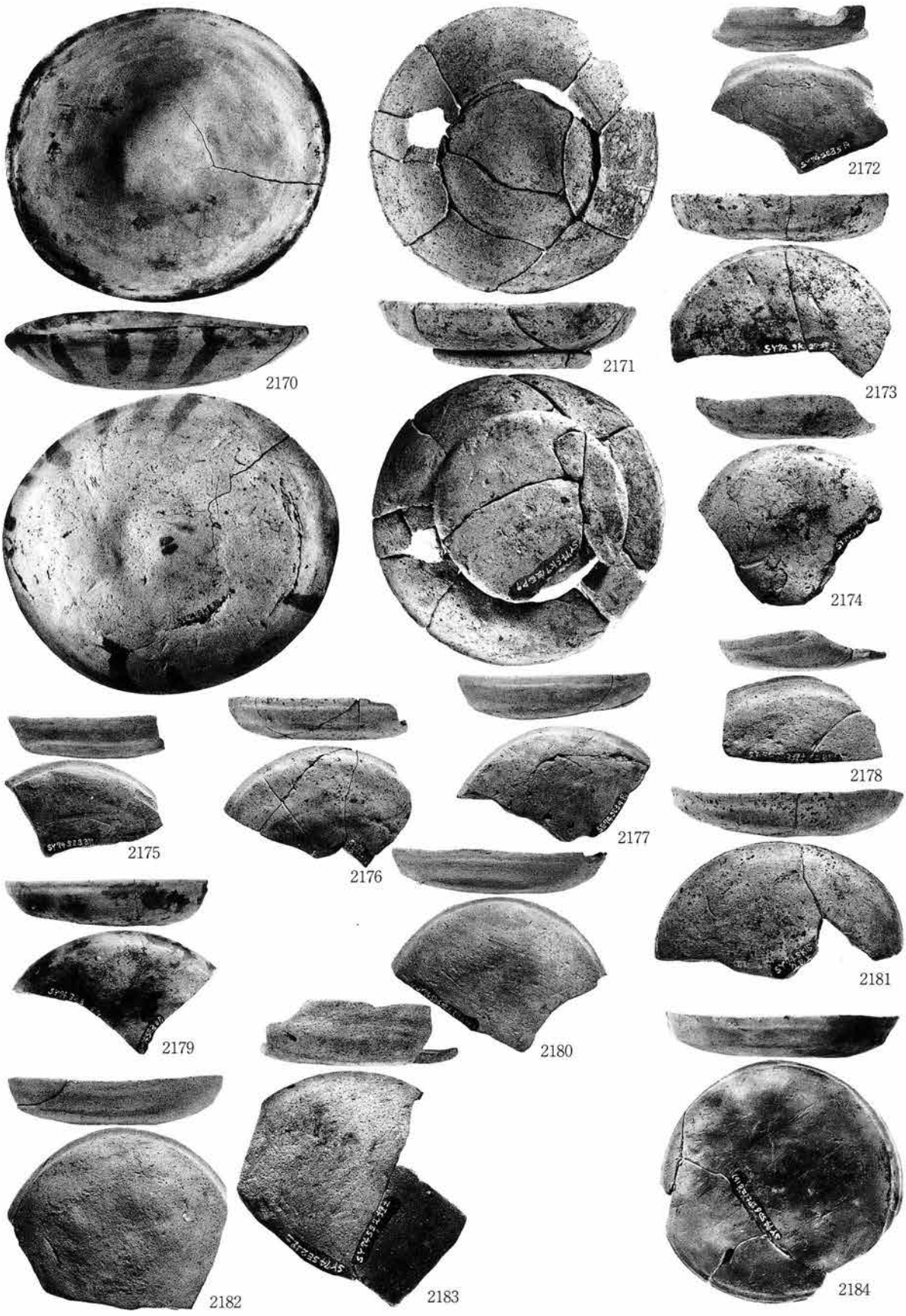
写真図版113　B地区の遺物②



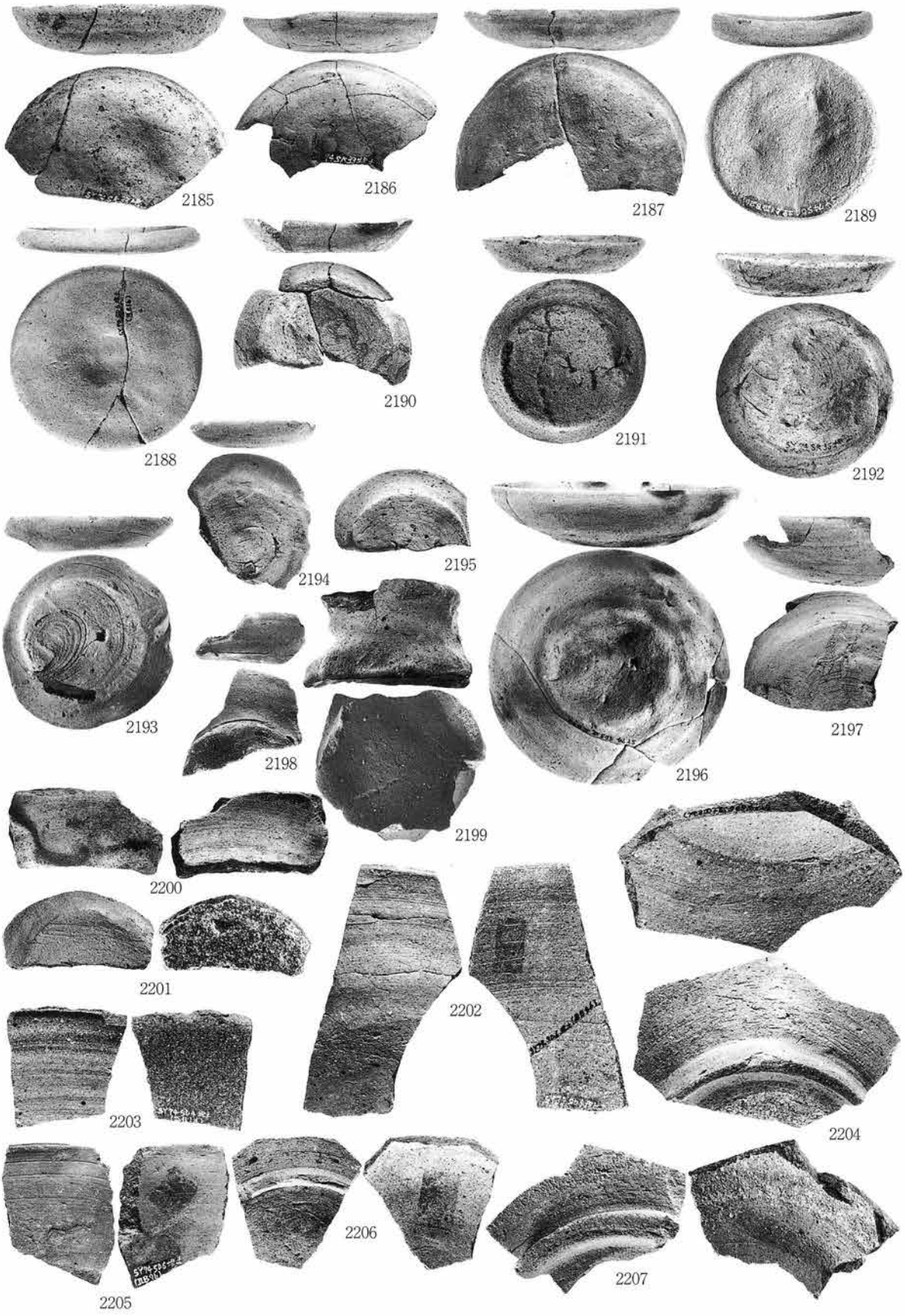
写真図版114　B地区の遺物③



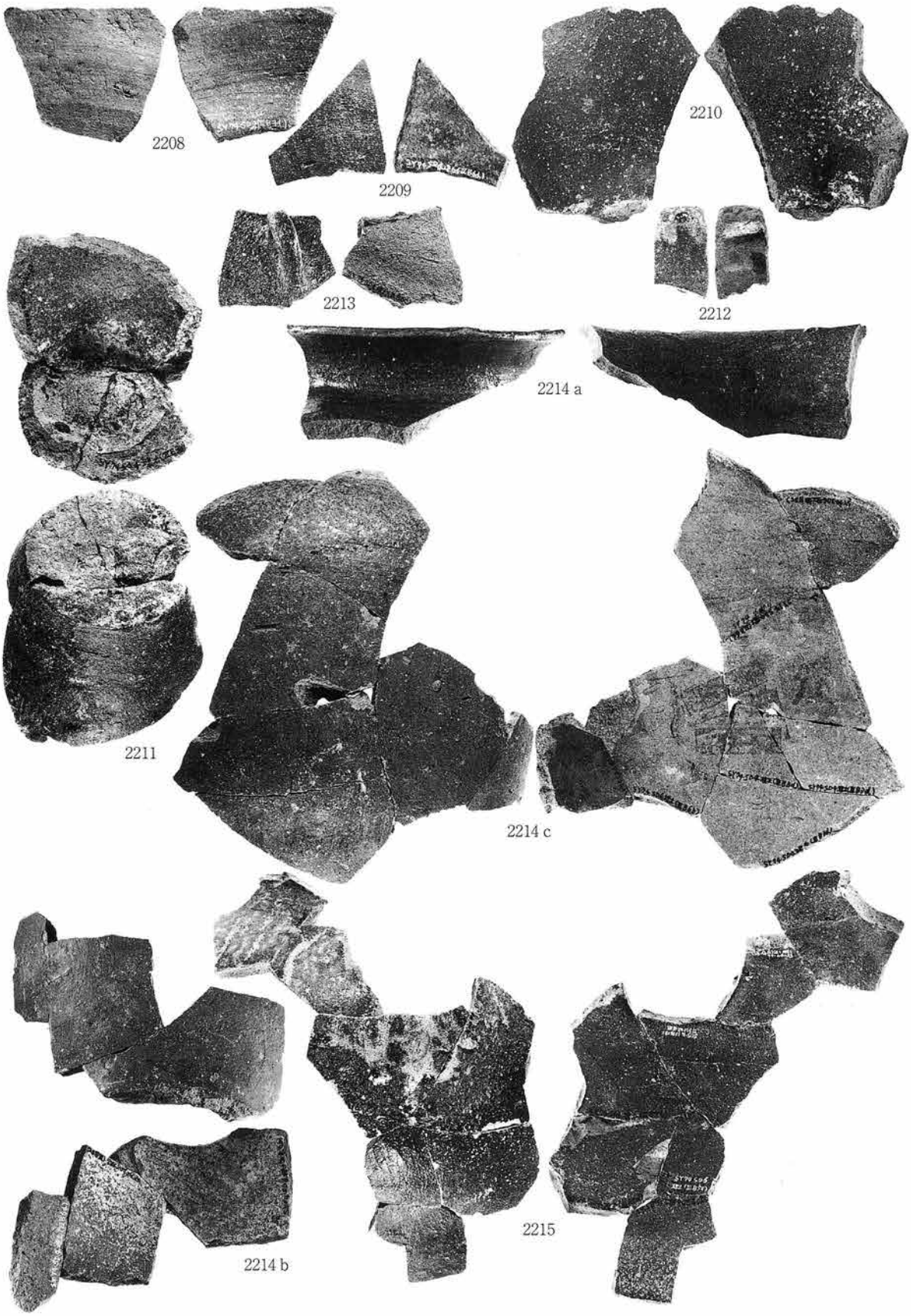
写真図版115　B地区の遺物④



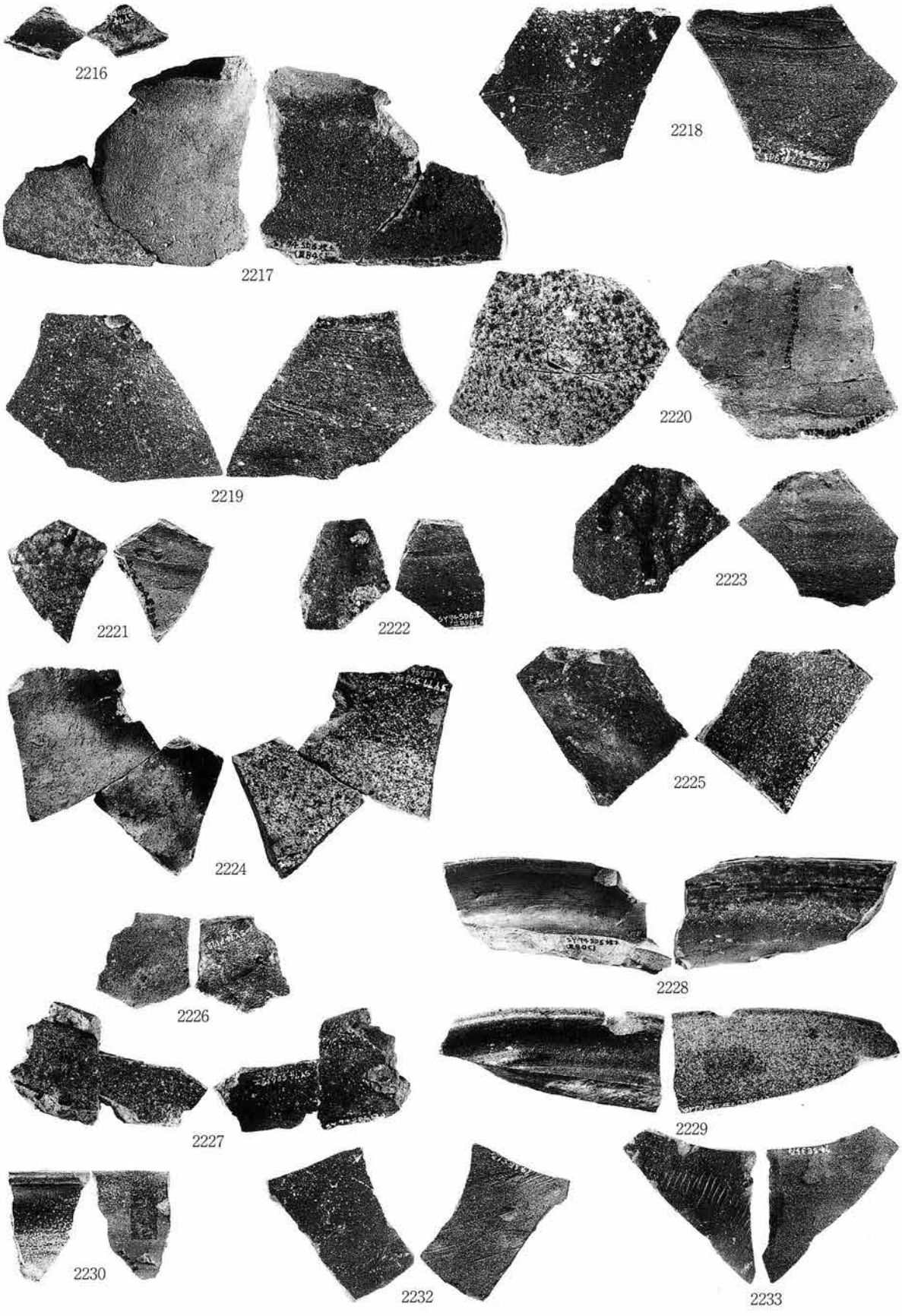
写真図版116　B地区の遺物⑤



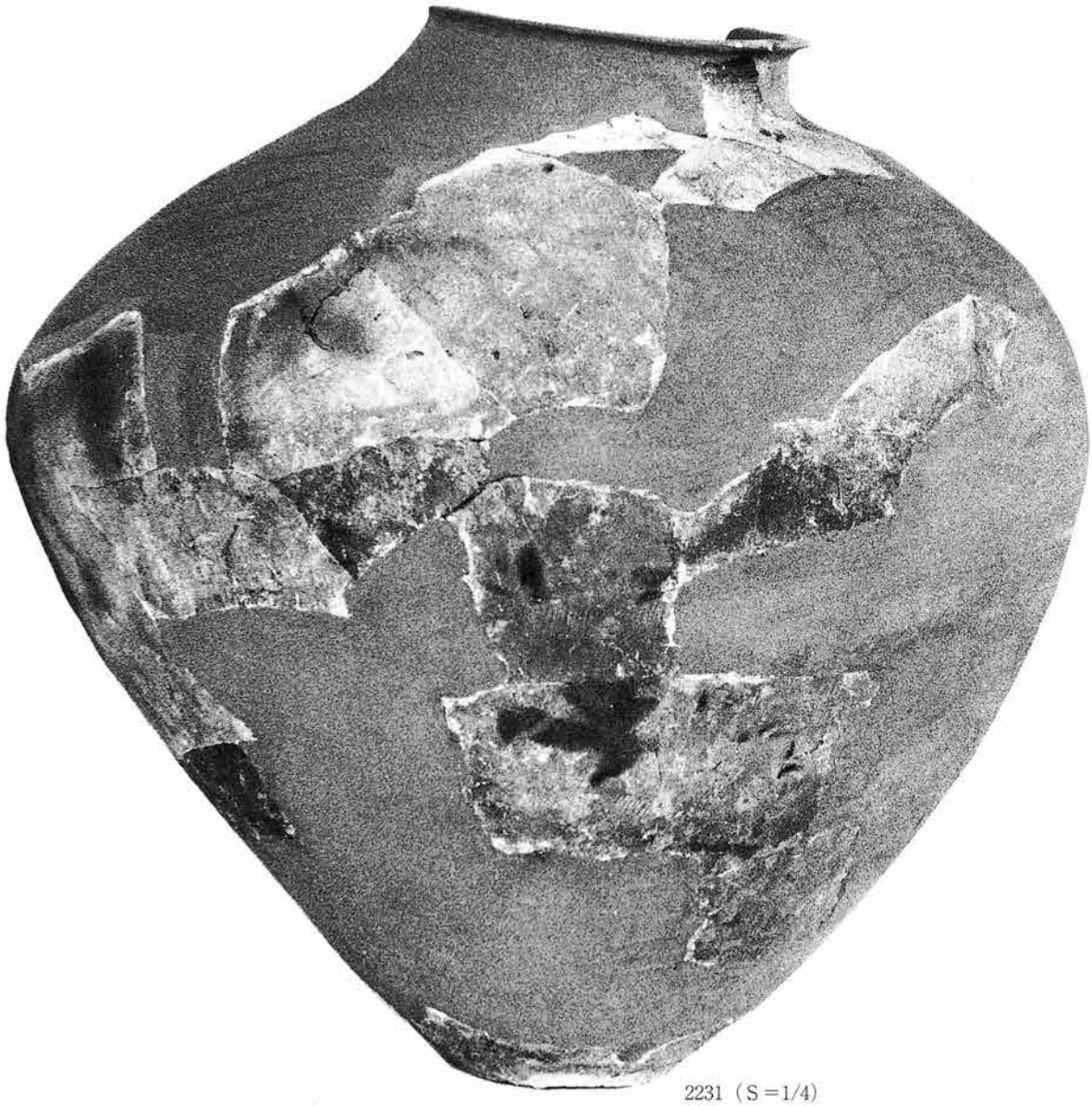
写真図版117　B地区の遺物⑥



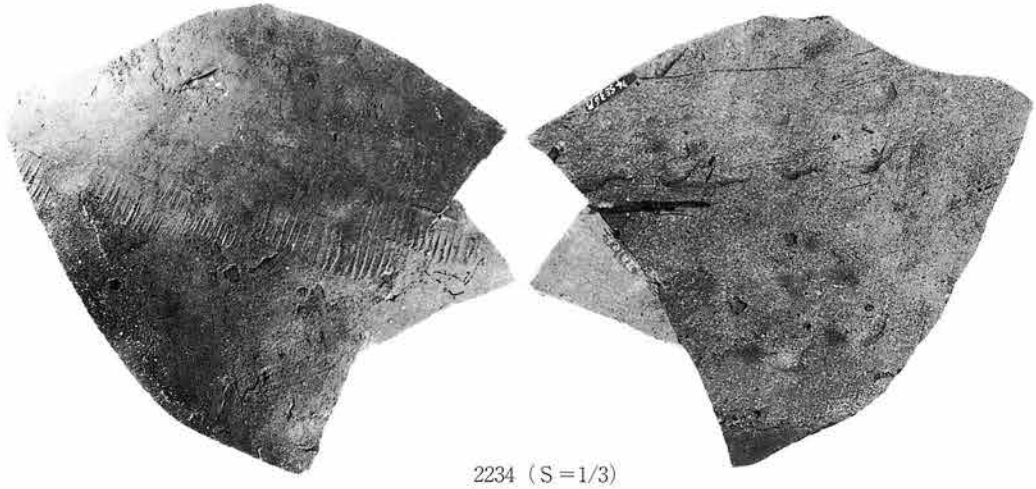
写真図版118　B地区の遺物⑦



写真図版119　B地区の遺物⑧



2231（S＝1/4）

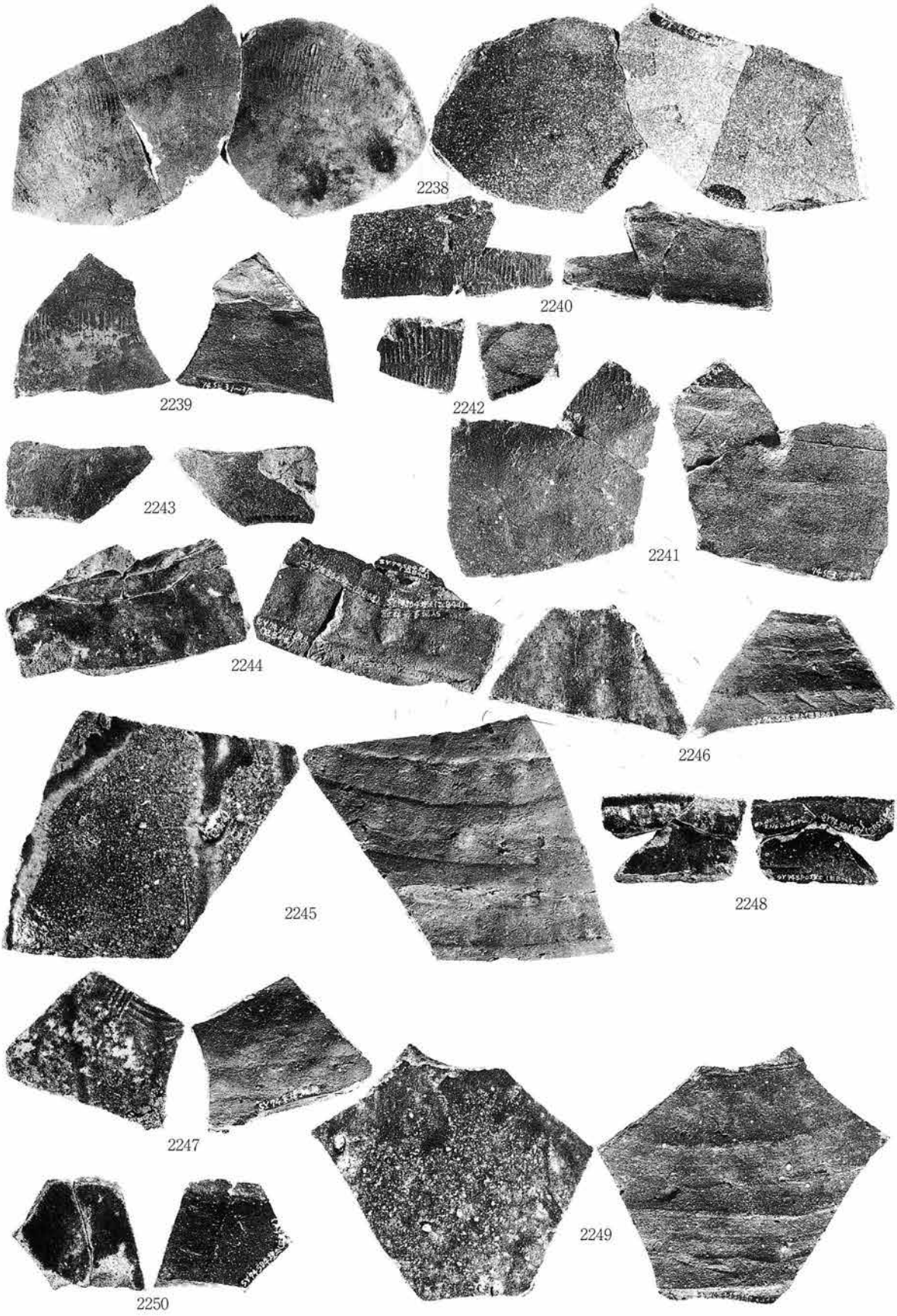


2234（S＝1/3）

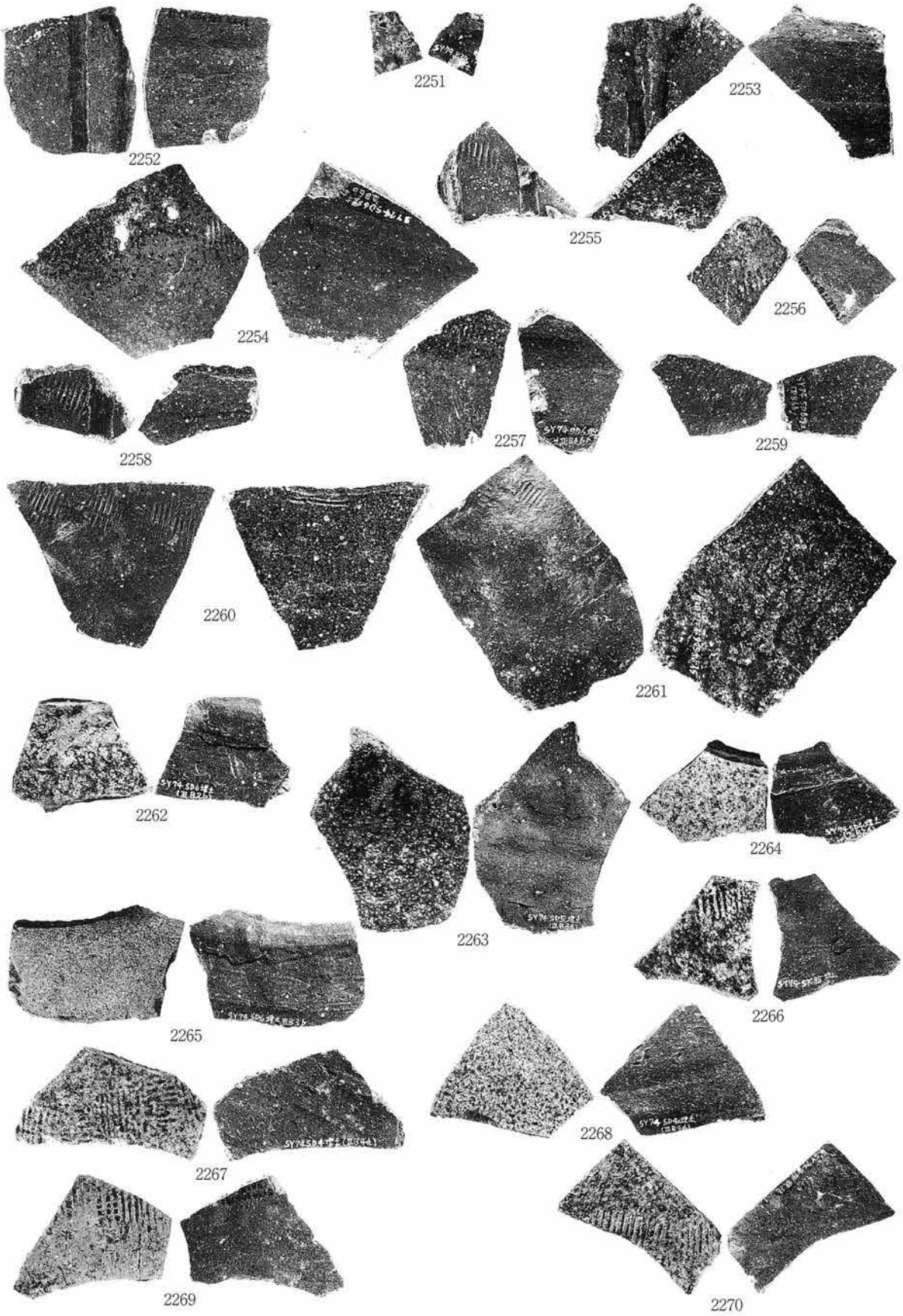
写真図版120　B地区の遺物⑨

(2235～2237　S＝1/4)

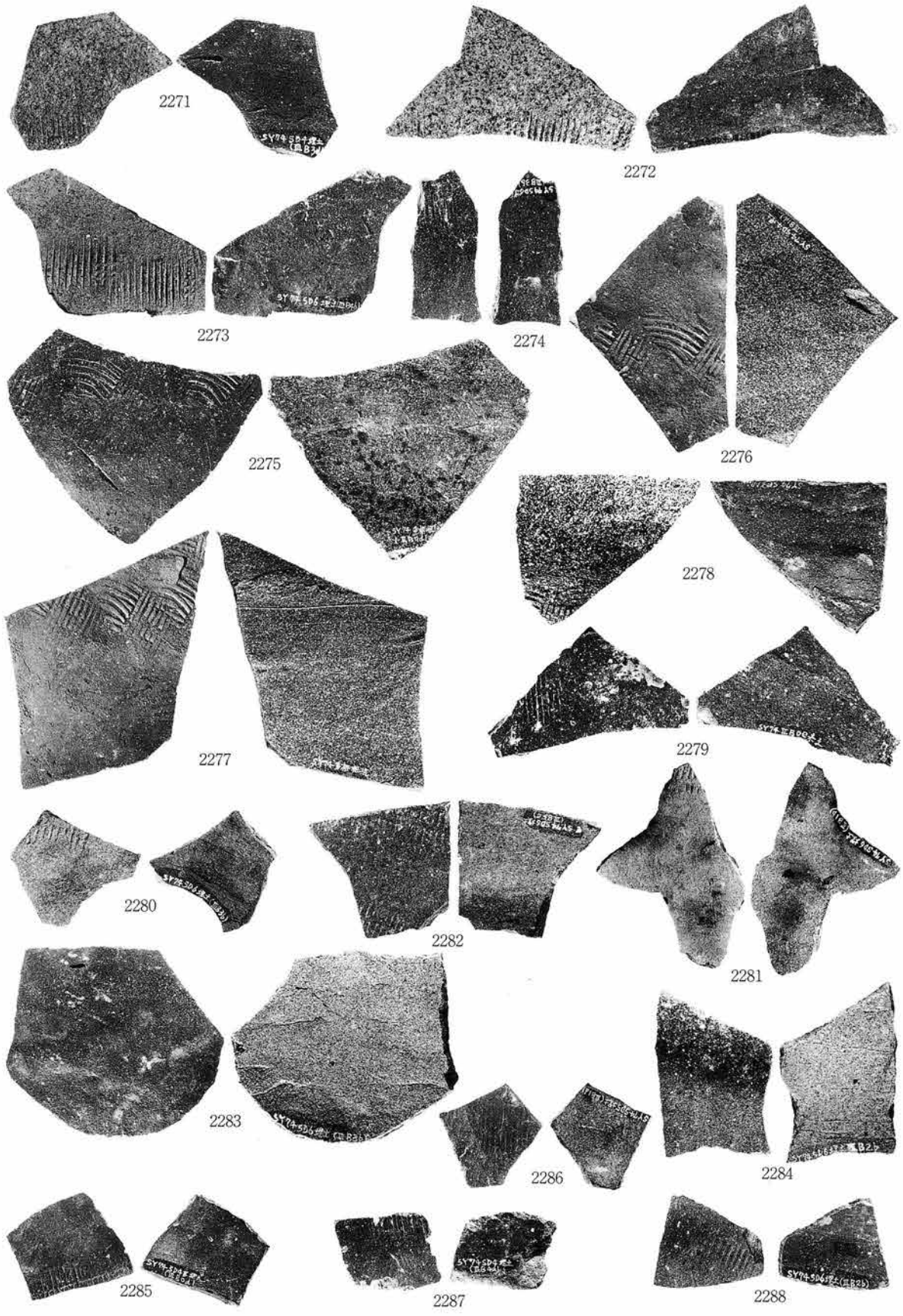
写真図版121　B地区の遺物⑩



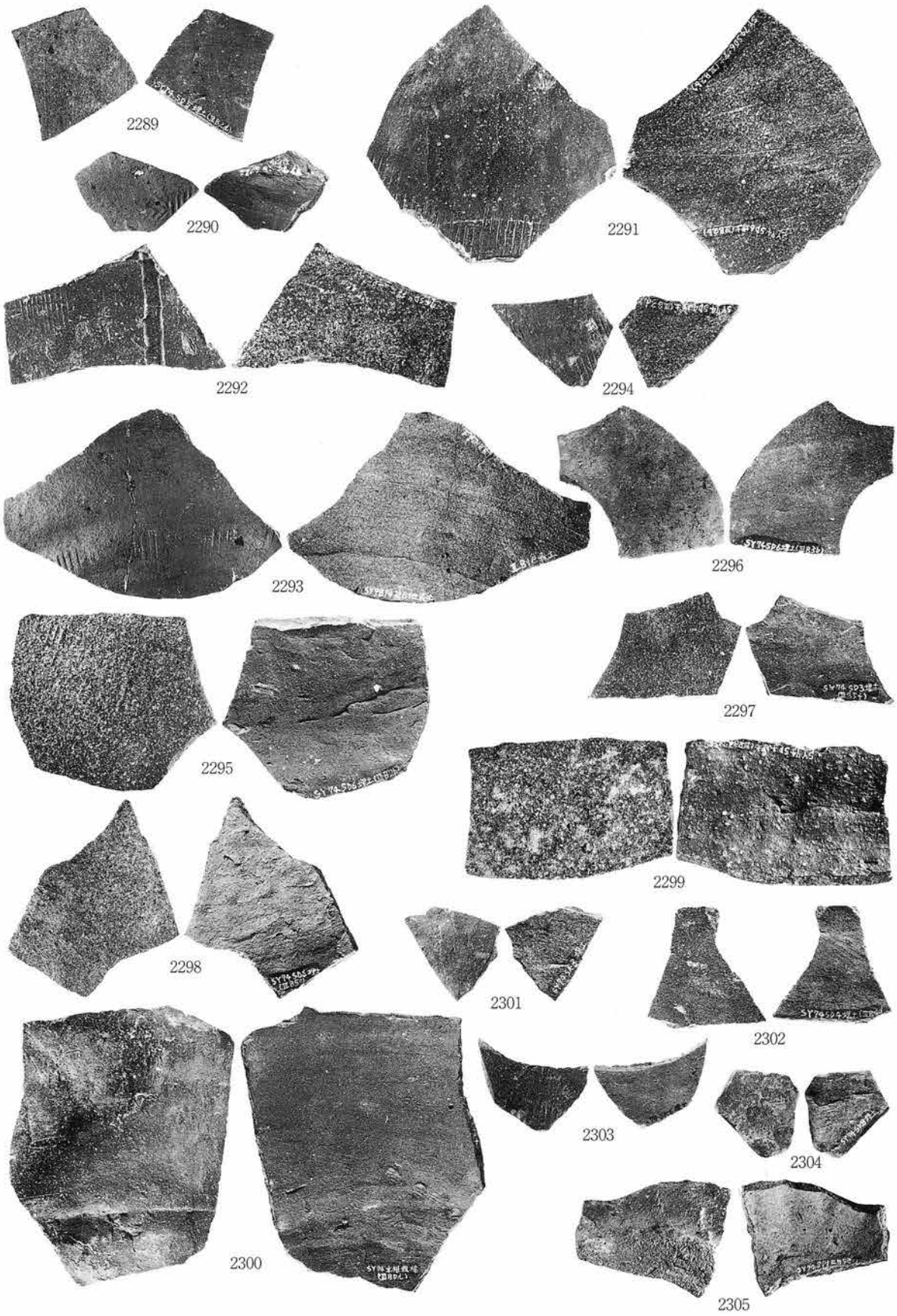
写真図版122　B地区の遺物⑪



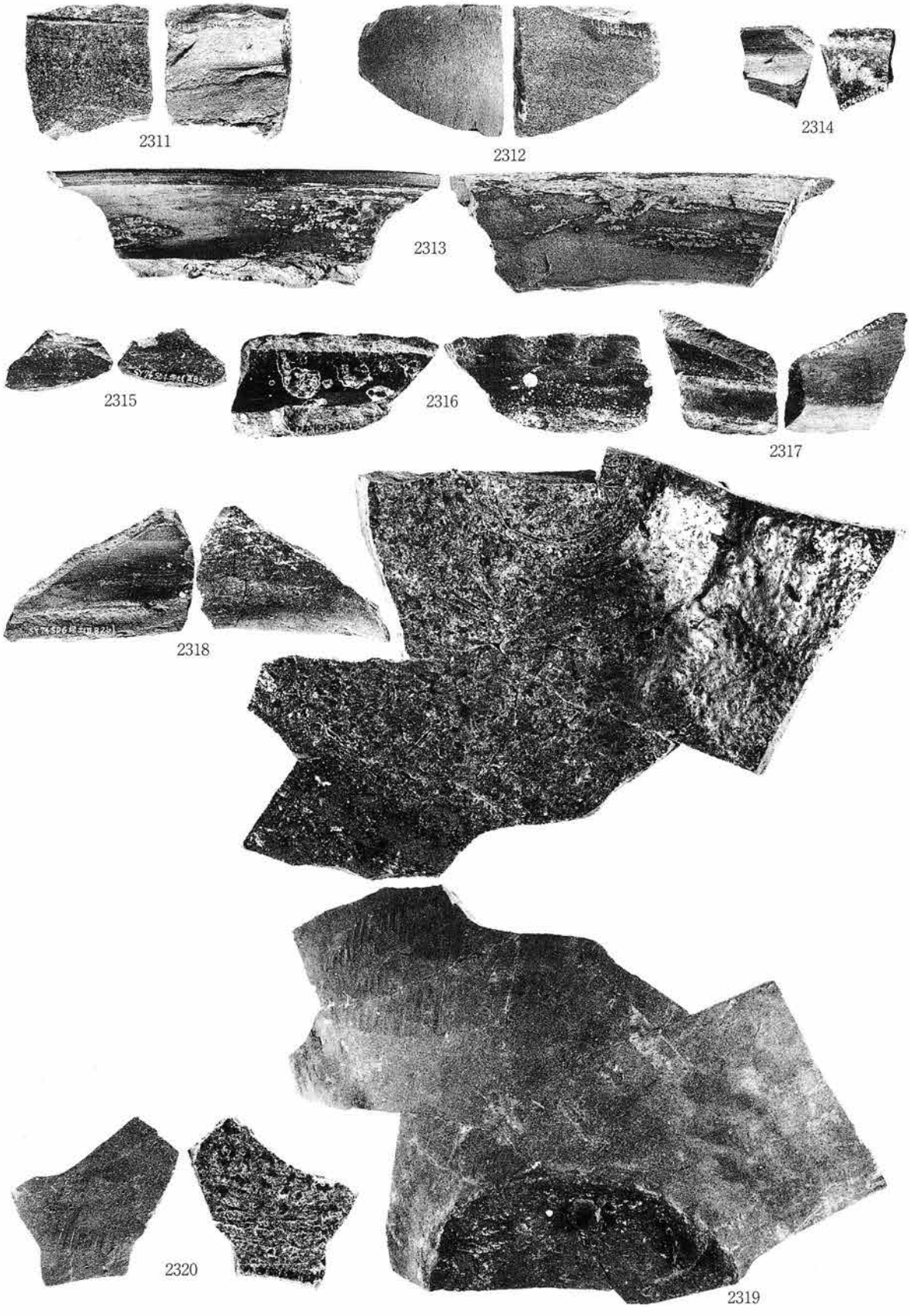
写真図版123　B地区の遺物⑫



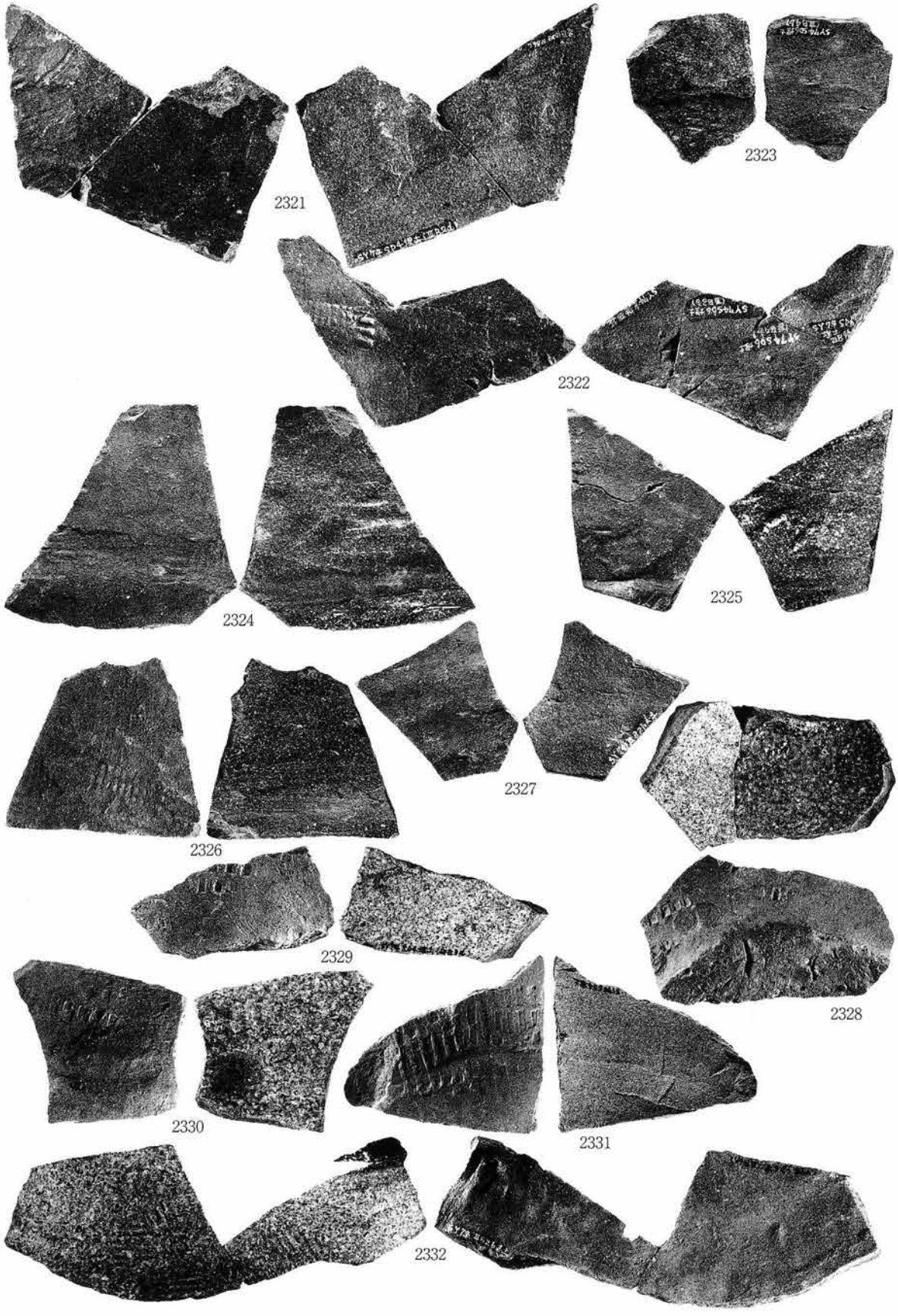
写真図版124　B地区の遺物⑬



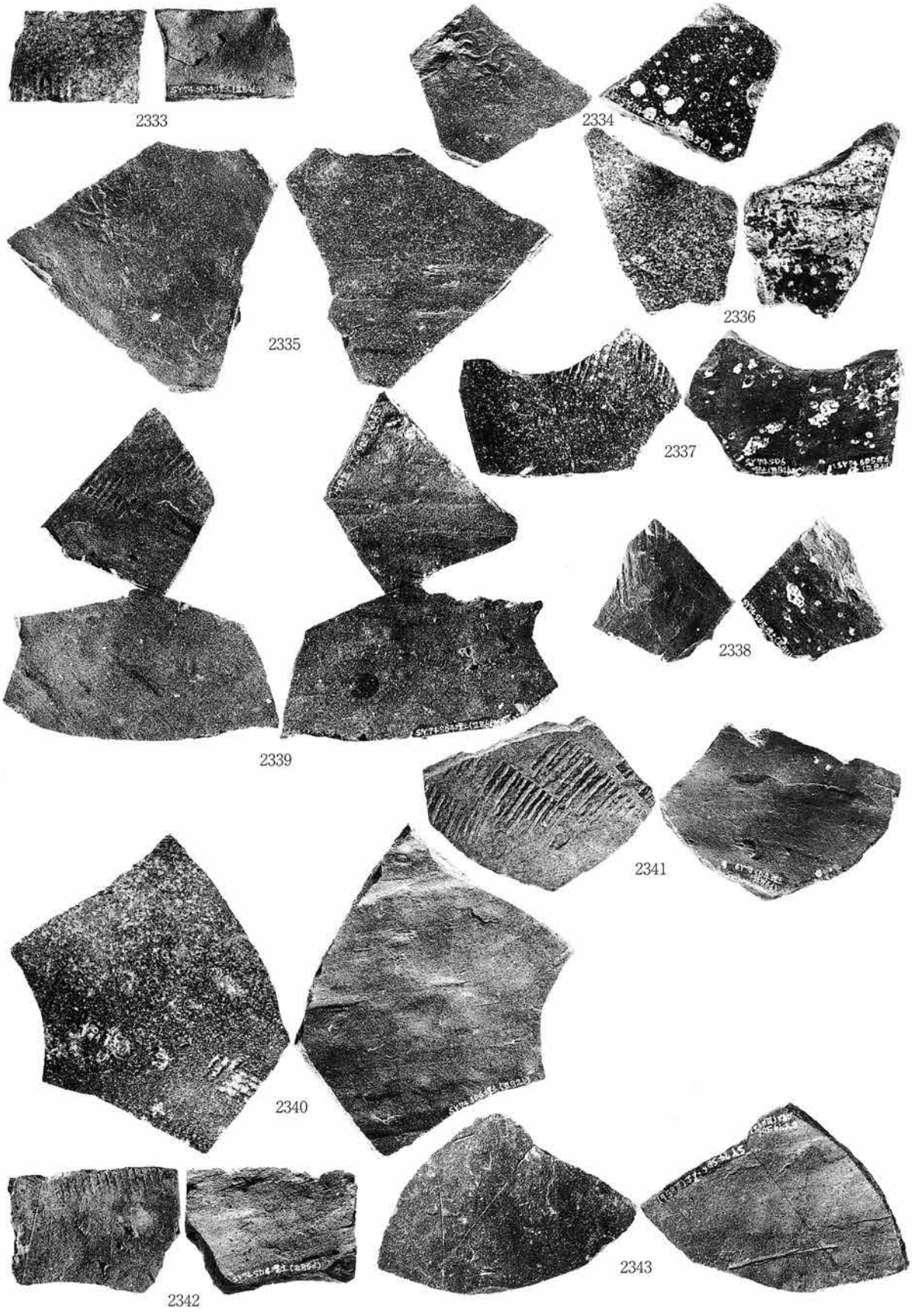
写真図版125　B地区の遺物⑭



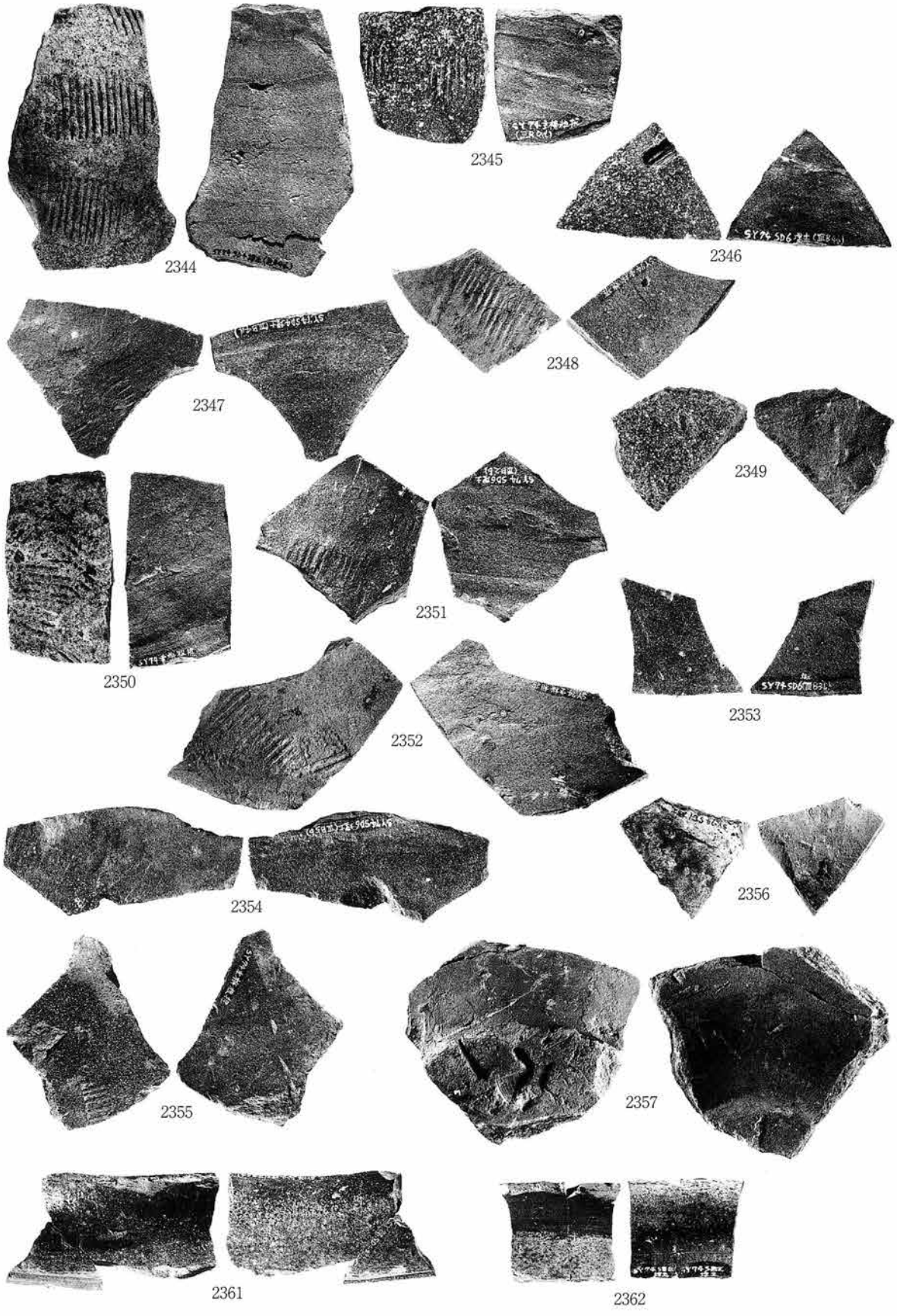
写真図版126　B地区の遺物⑮



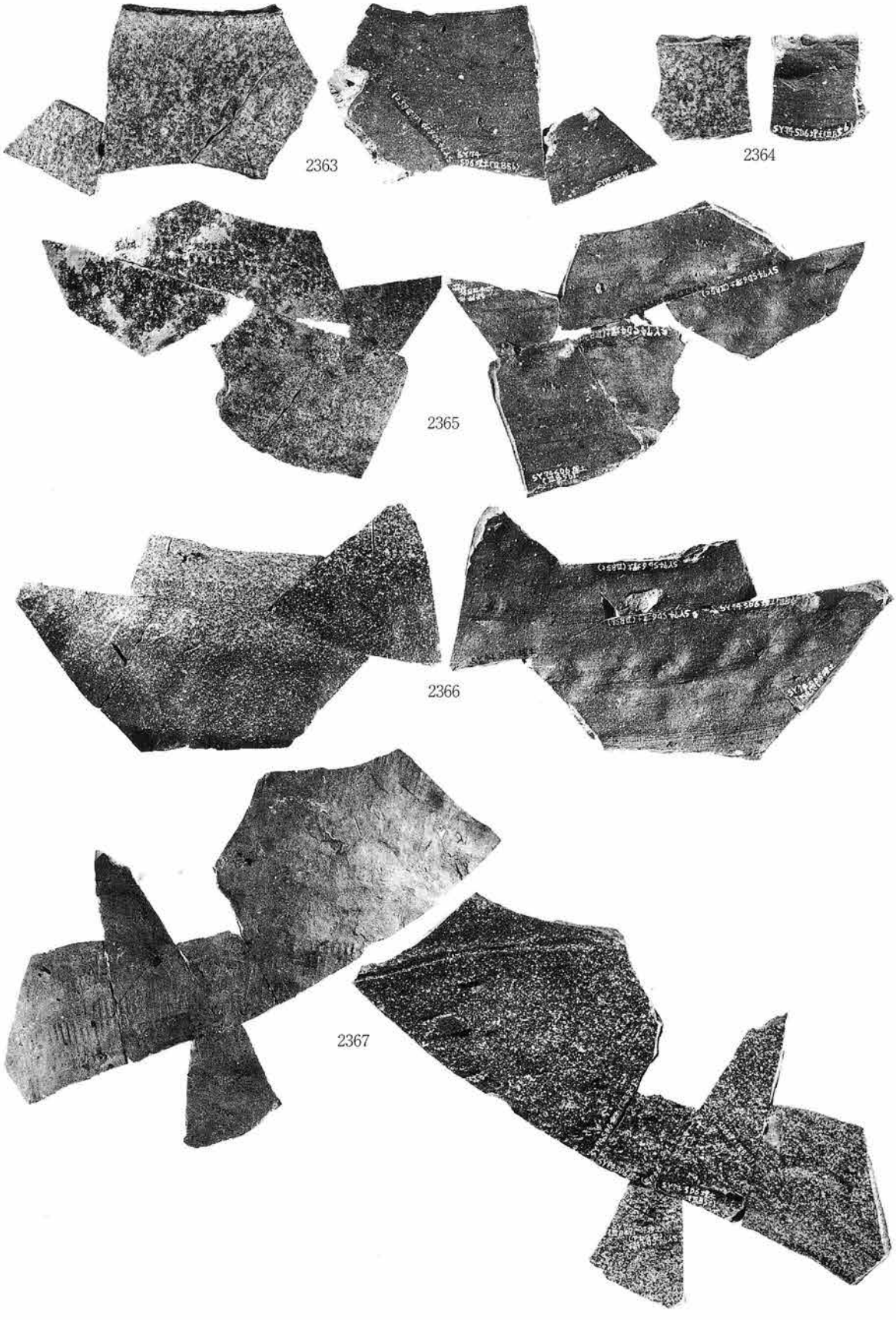
写真図版127　B地区の遺物⑯



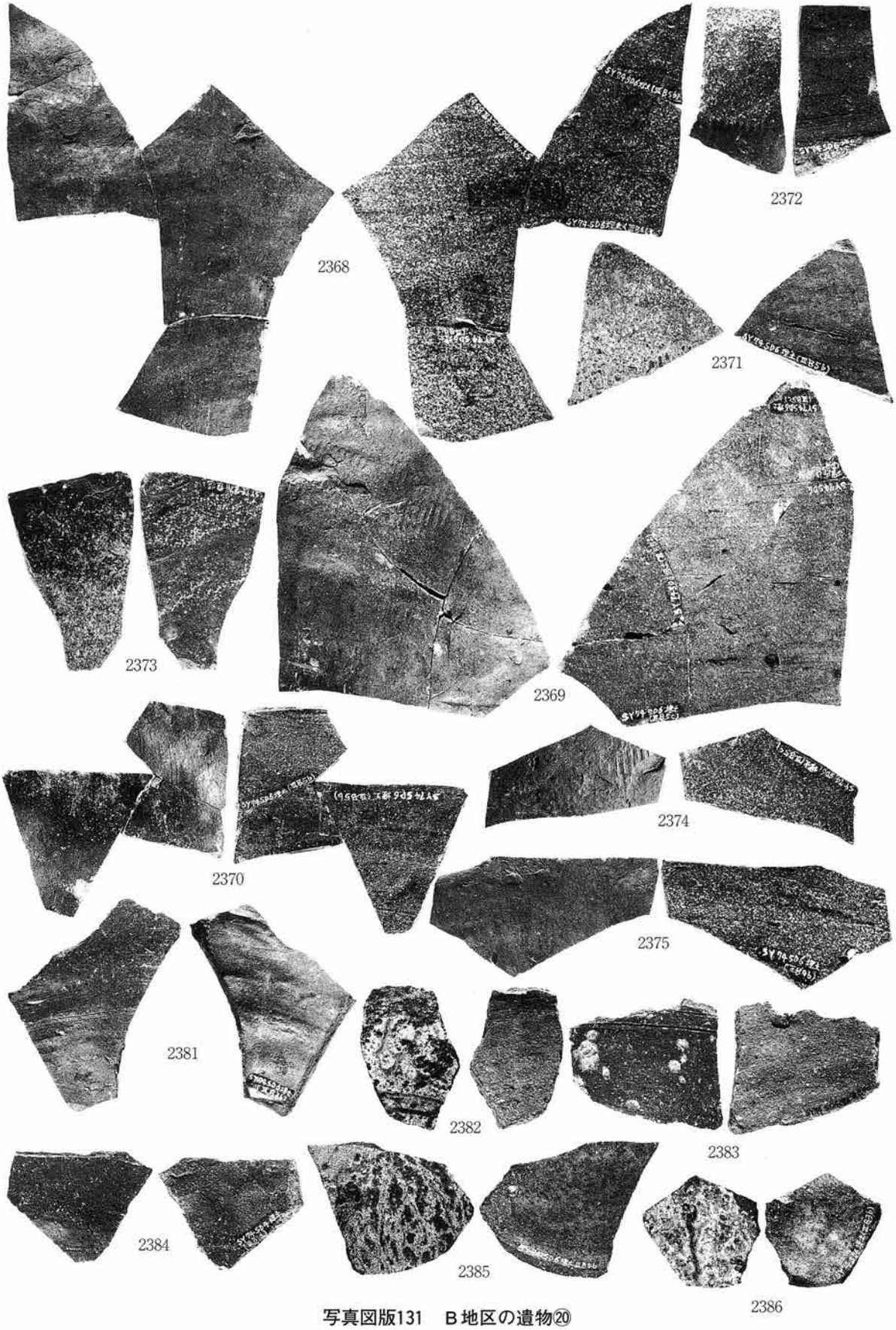
写真図版128　B地区の遺物⑰



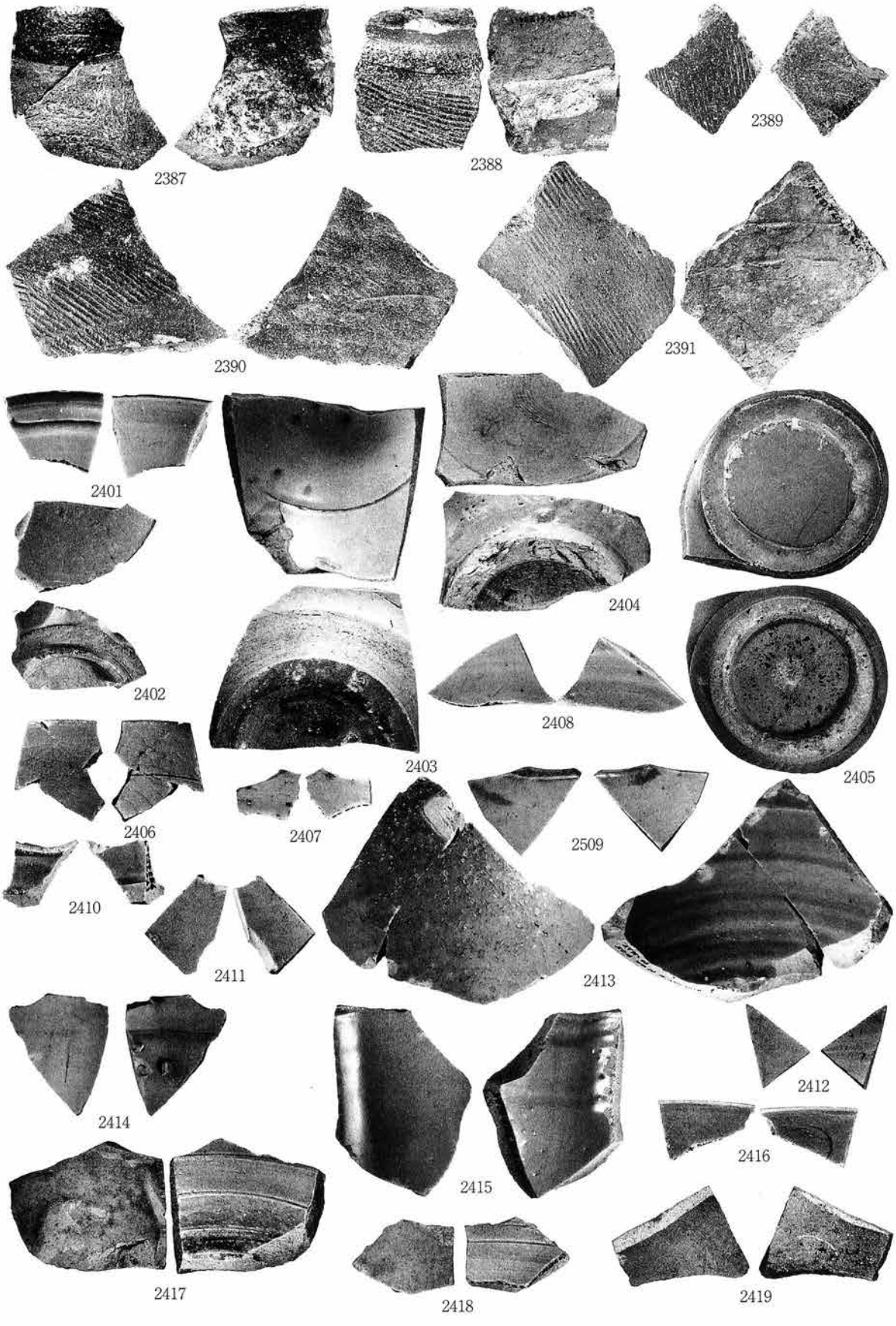
写真図版129　B地区の遺物⑱



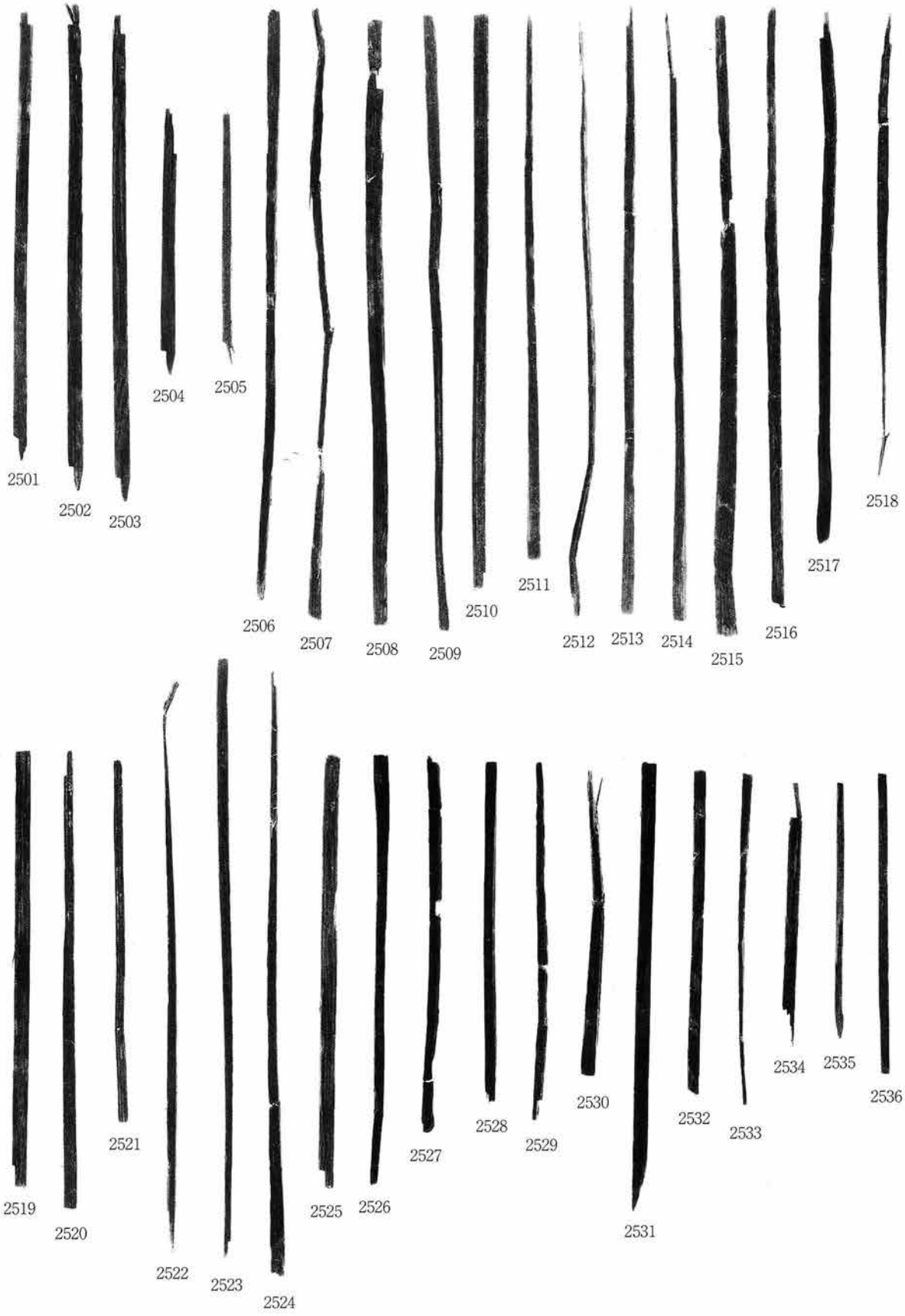
写真図版130　B地区の遺物⑲



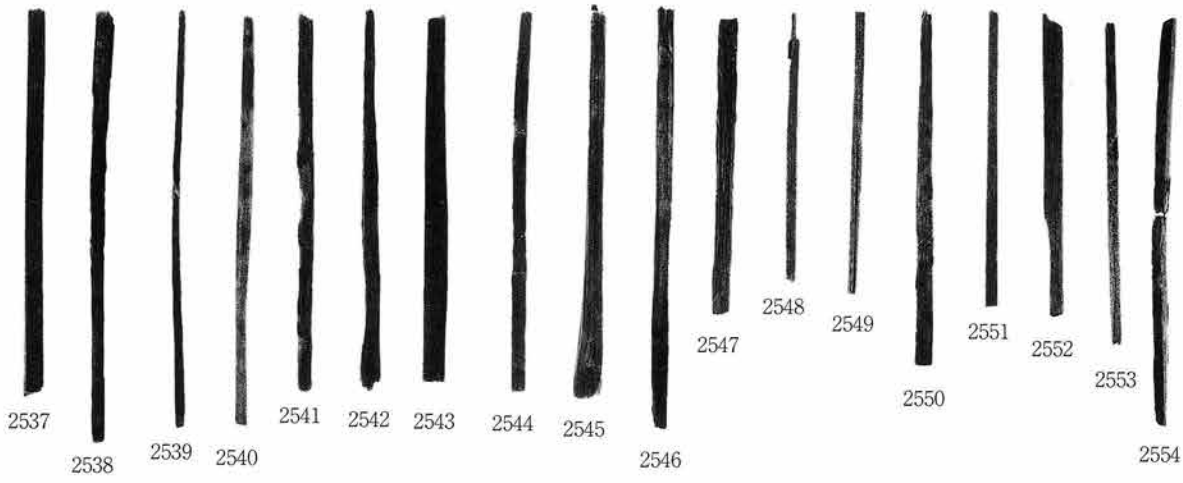
写真図版131　B地区の遺物⑳

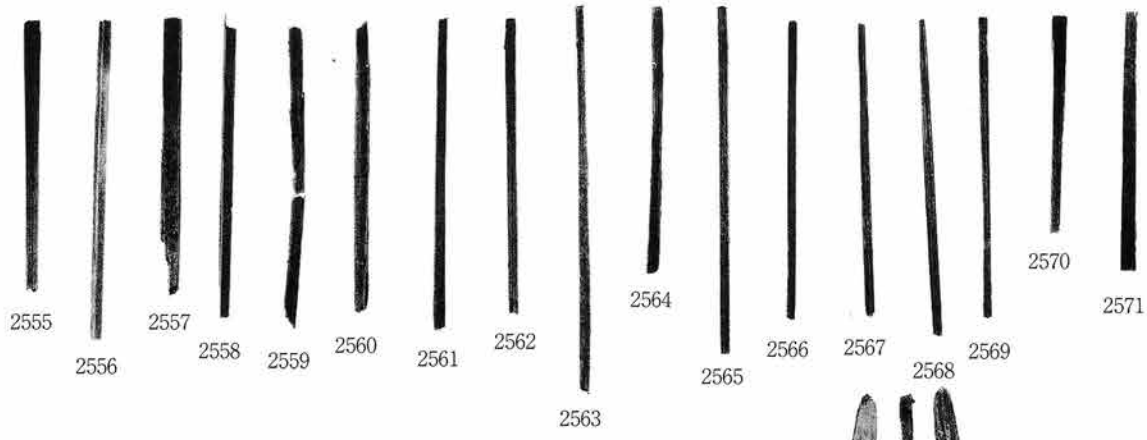


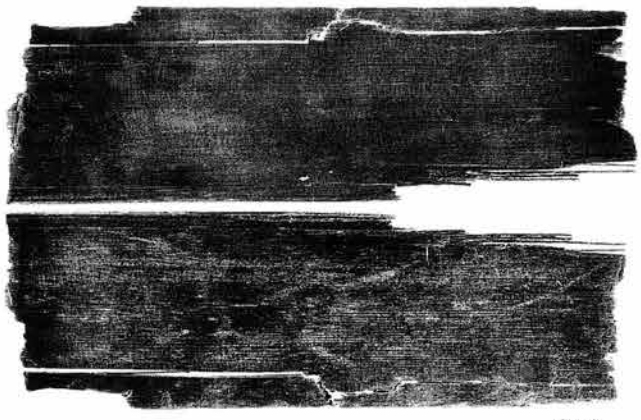
写真図版132　B地区の遺物㉑

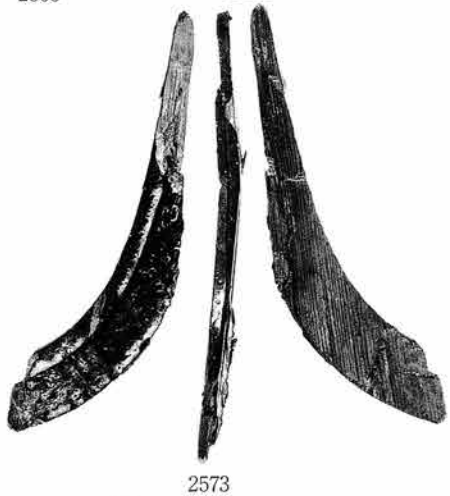


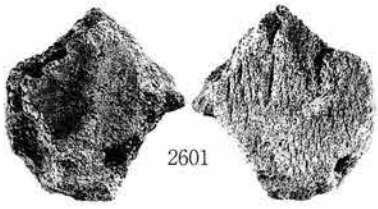
写真図版133　B地区の遺物㉒



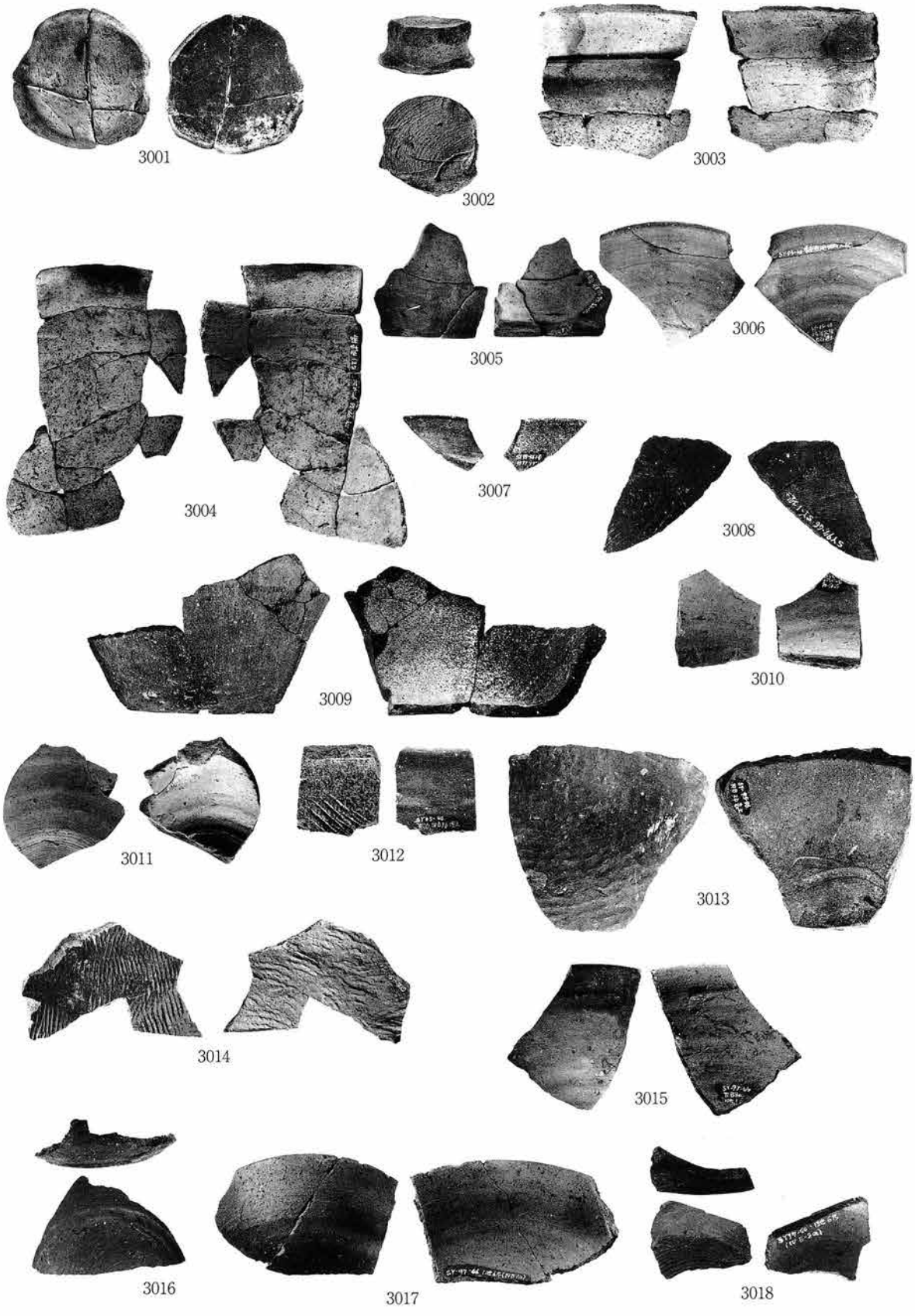




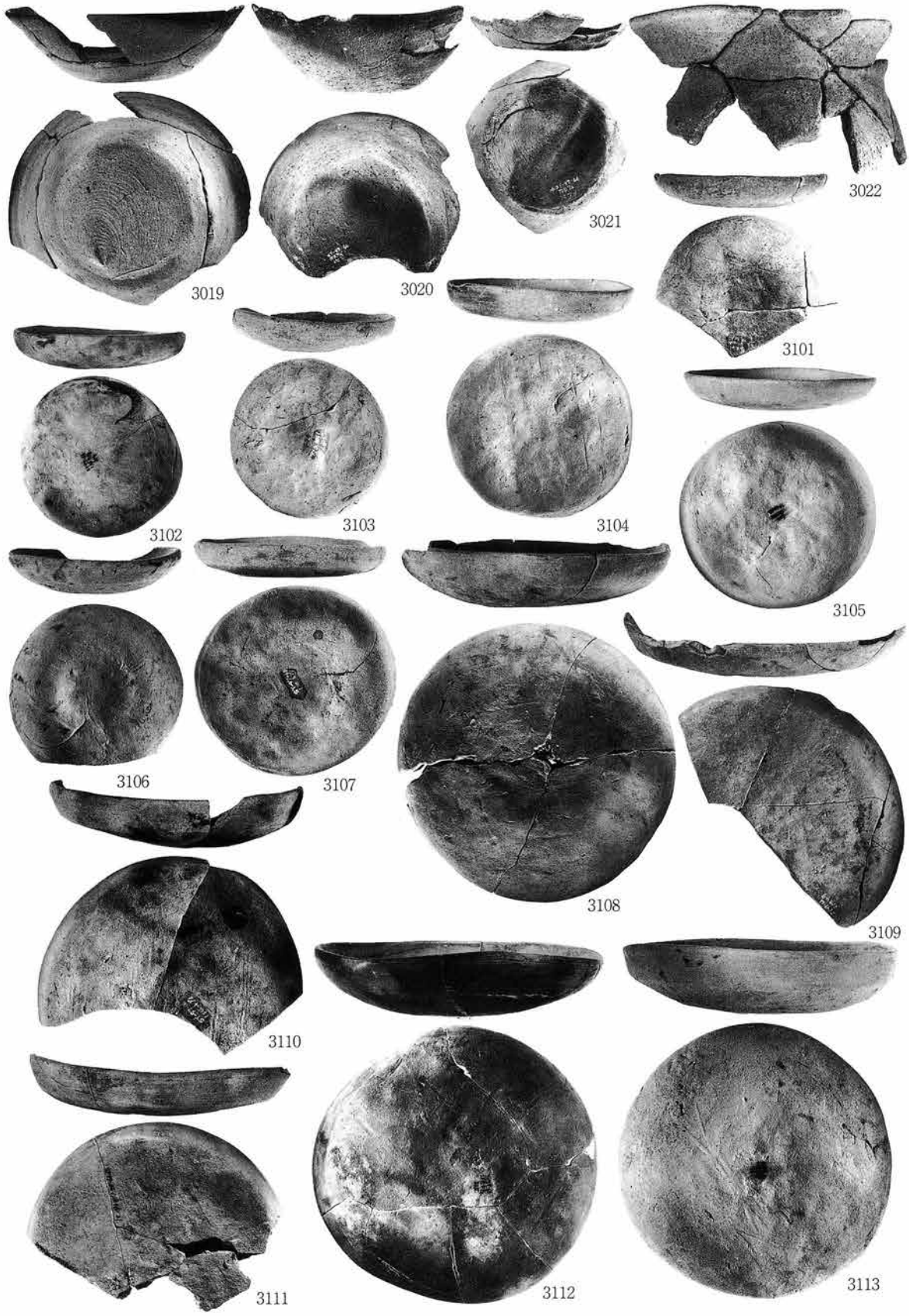




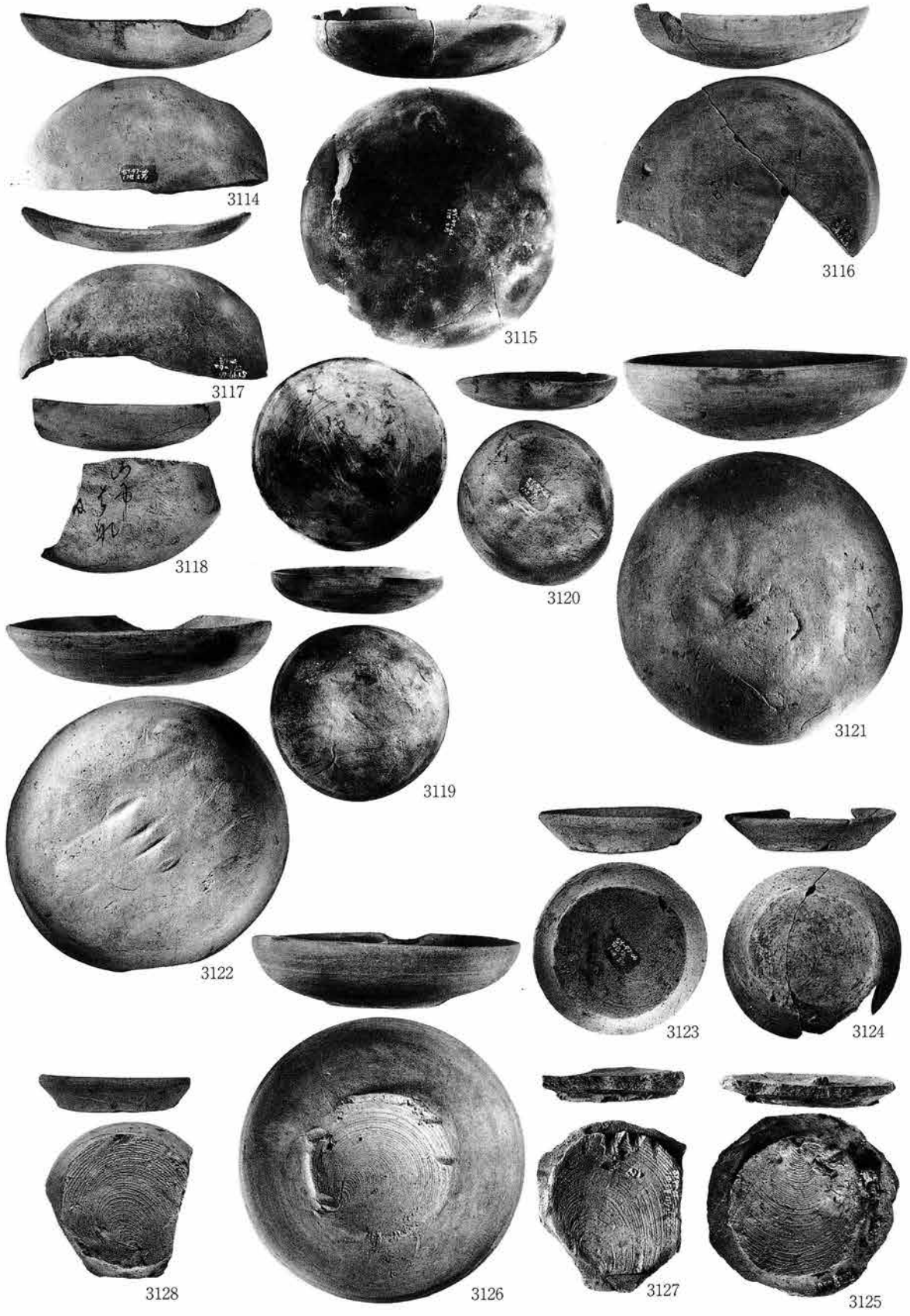
写真図版134　B地区の遺物㉓



写真図版135　C地区の遺物①

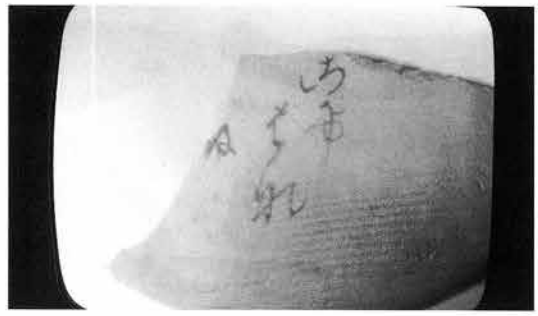


写真図版136　C地区の遺物②

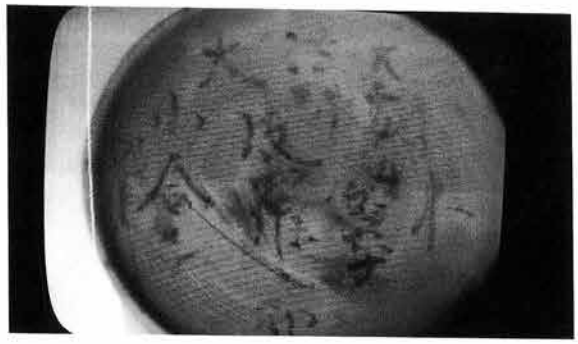


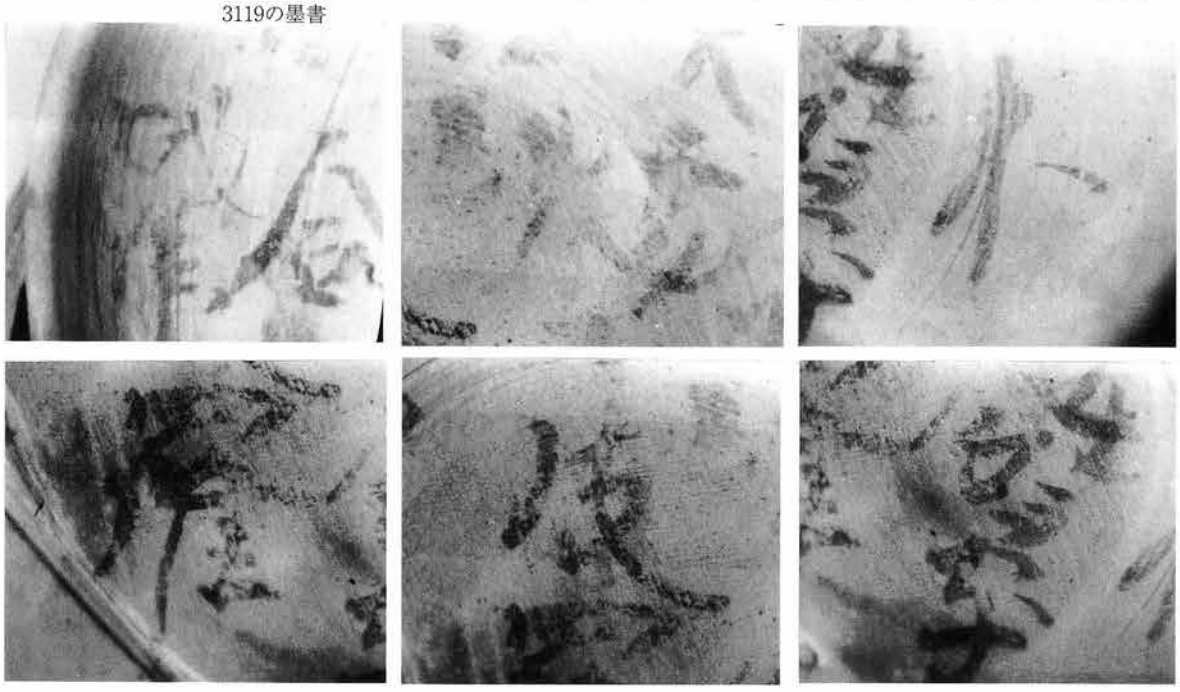
写真図版137　C地区の遺物③

3118の墨書



3119の墨書





写真図版138　C地区の遺物④（3118、3119の墨書赤外線写真）

3131

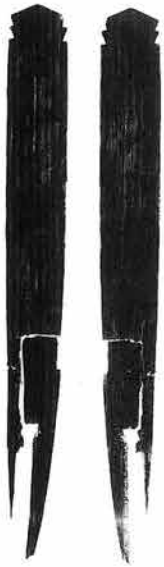
3132

3133

3134

3135

3136



3137

3138

3139

3140

写真図版139　C地区の遺物⑤

3141

3142

3143

3144

3145

3146

3147

3148

3149

3150

3151

3152

写真図版140　C地区の遺物⑥

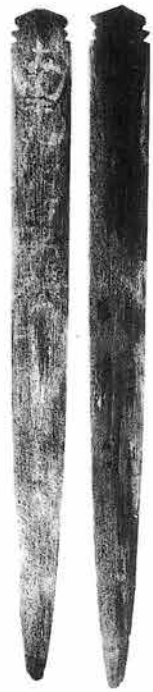
3153

3154

3155

3156

3157


3158

3159

3160

3162

3161

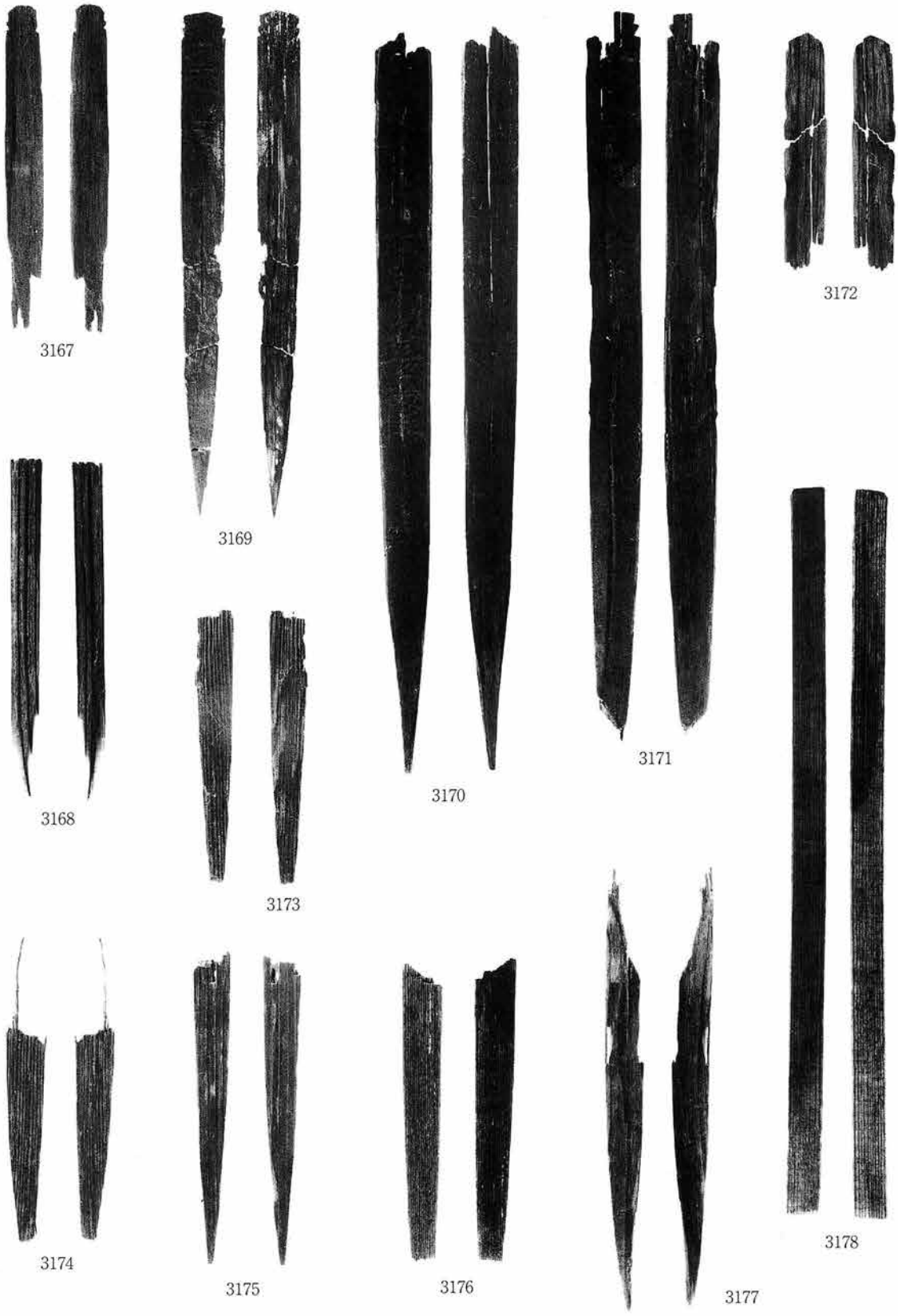
3163

3164

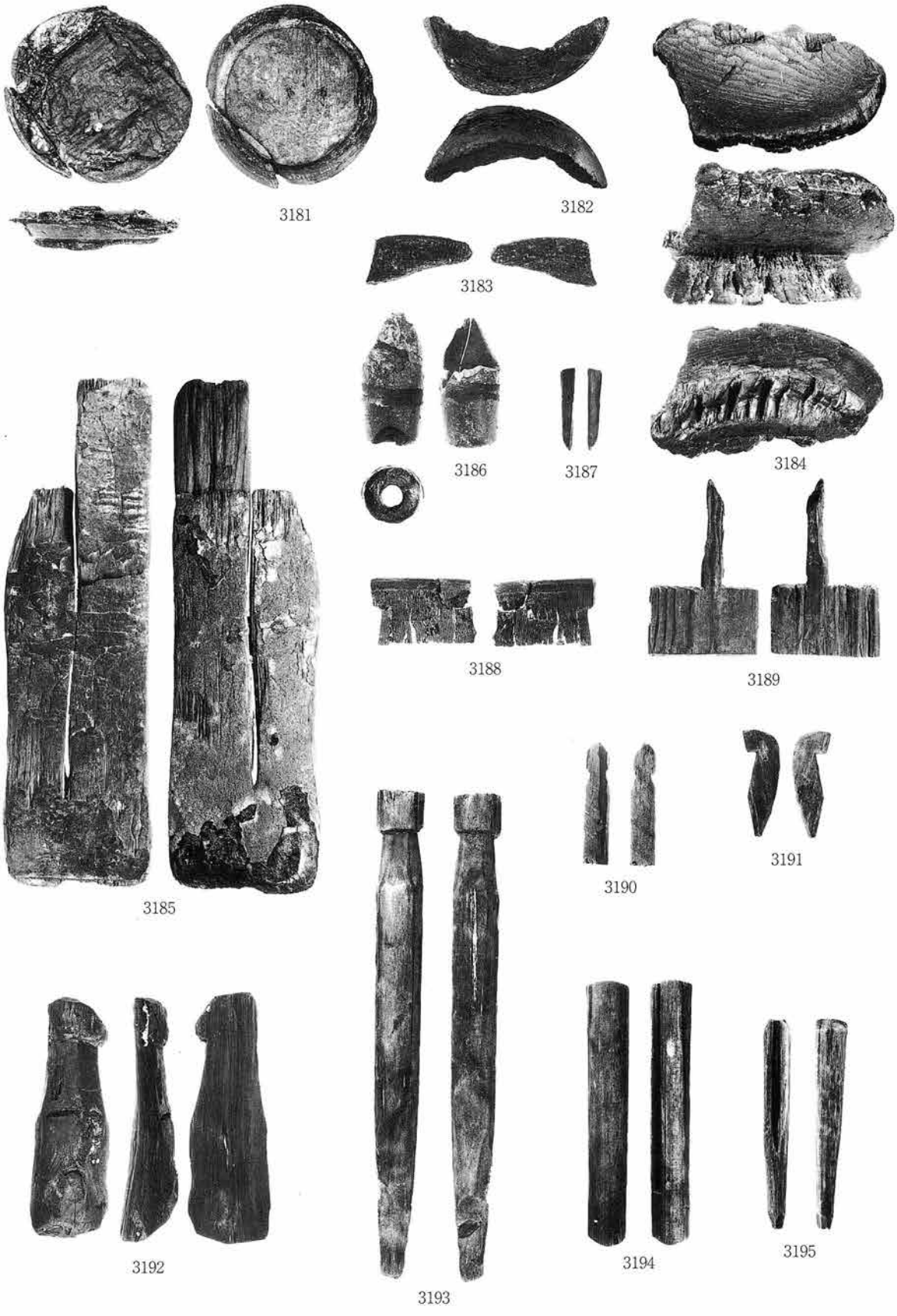
3165

3166

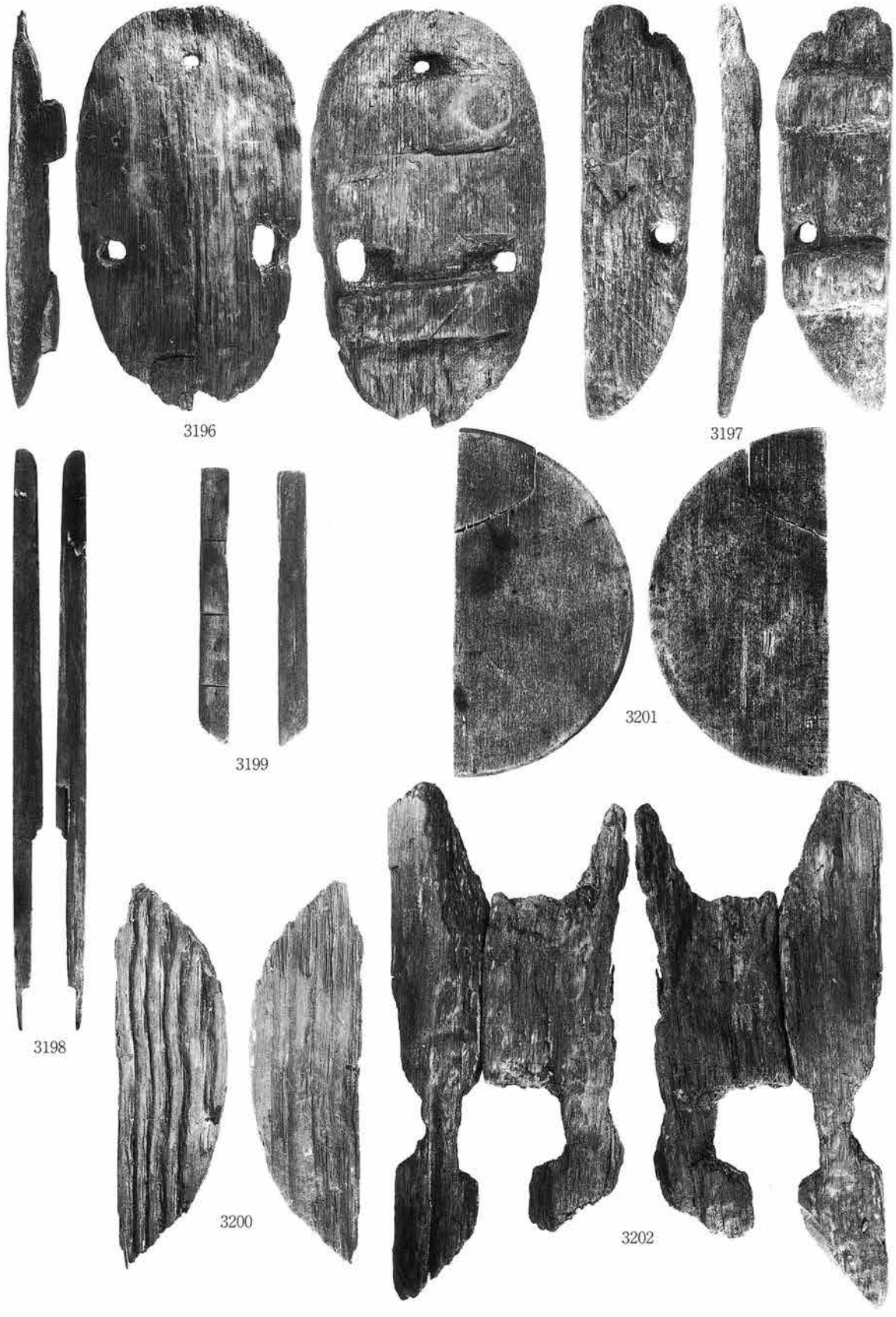
写真図版141　C地区の遺物⑦



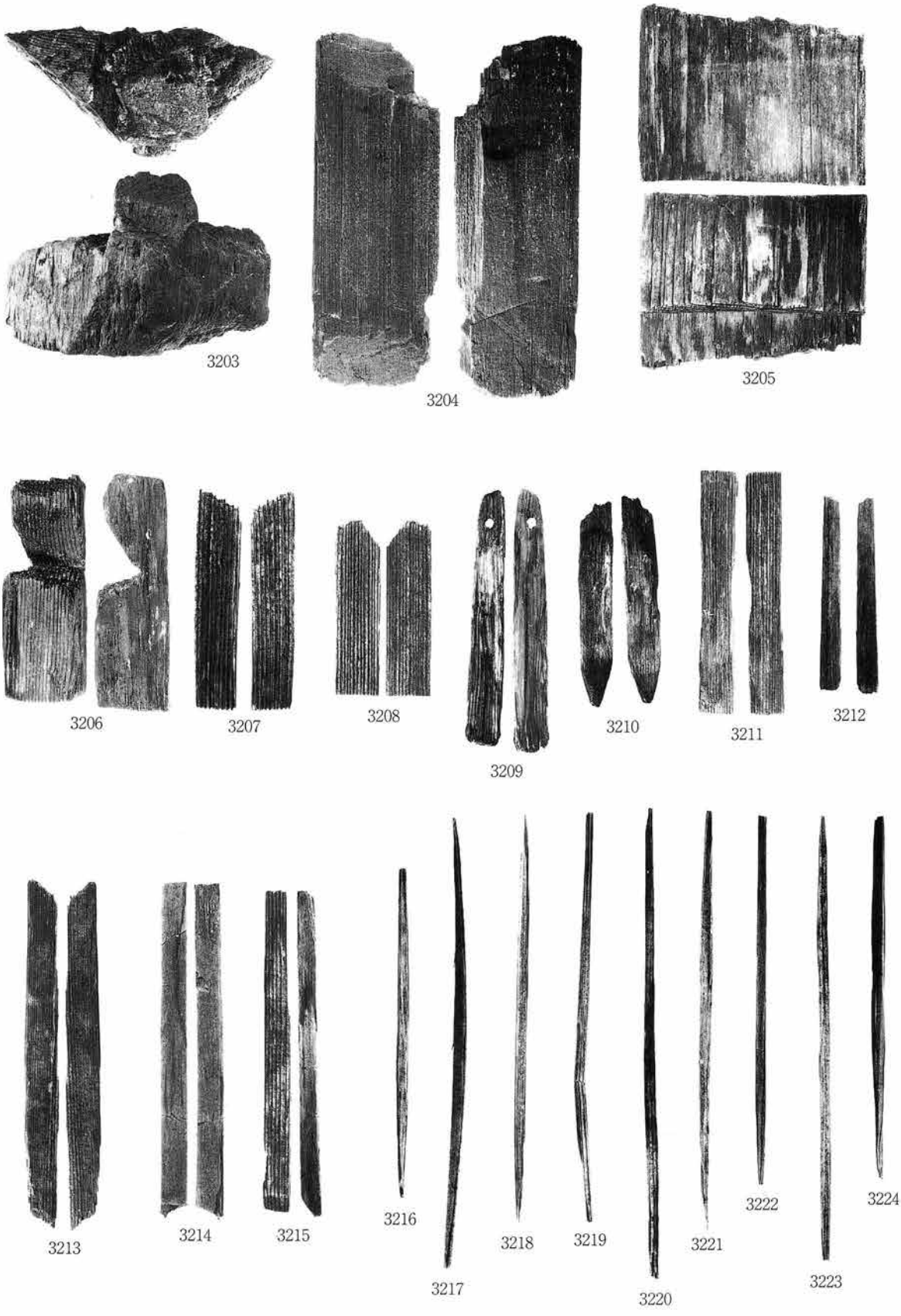
写真図版142　C地区の遺物⑧



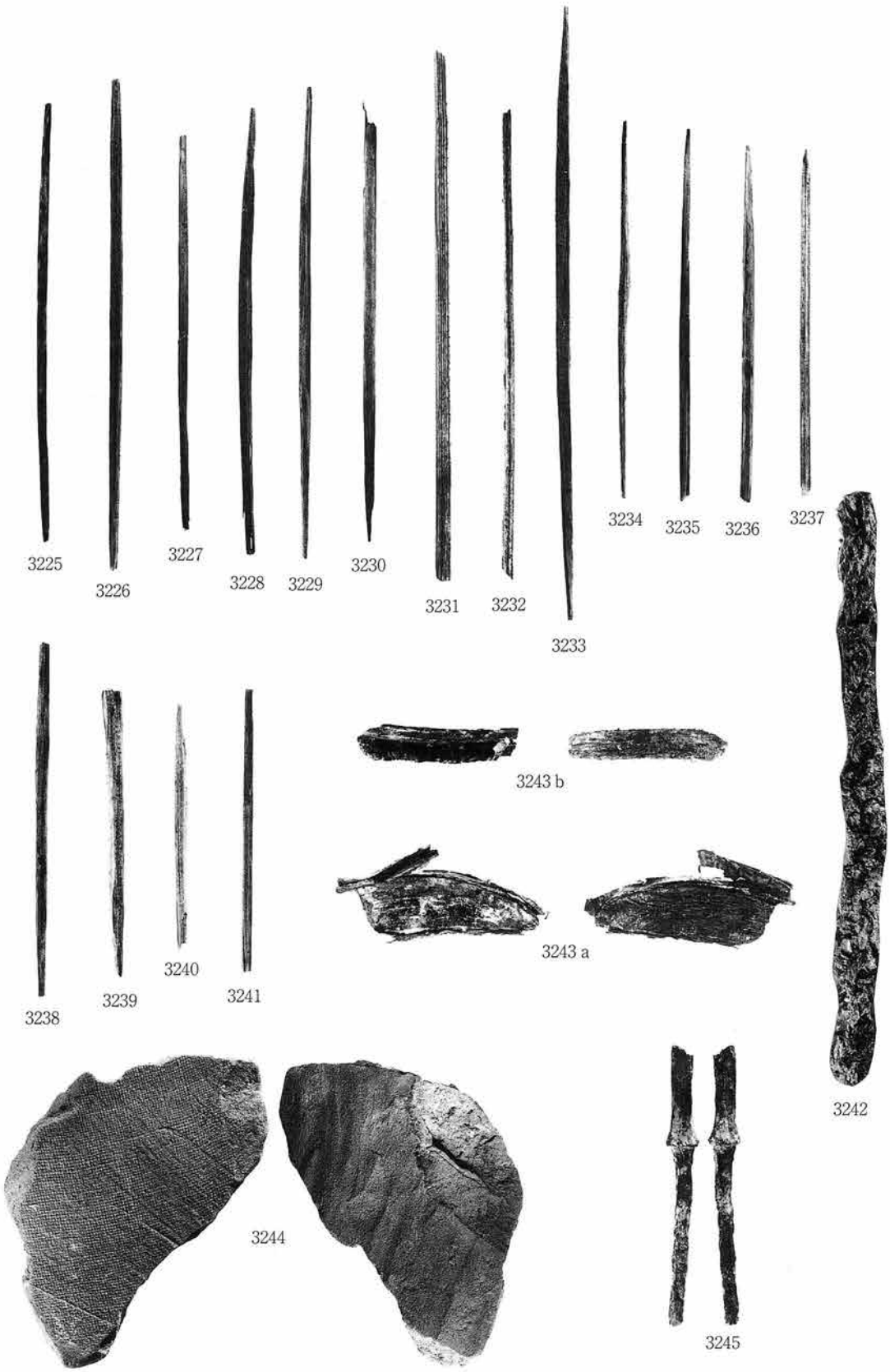
写真図版143　C地区の遺物⑨



写真図版144　C地区の遺物⑩



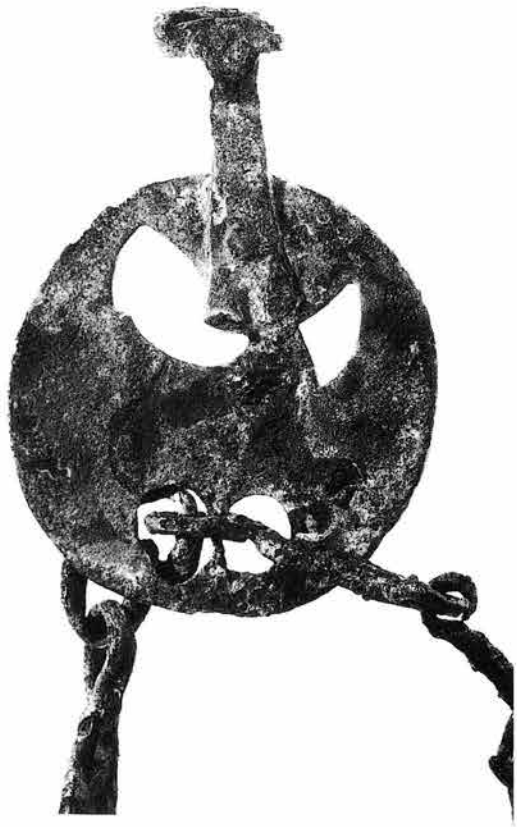
写真図版145　C地区の遺物⑪

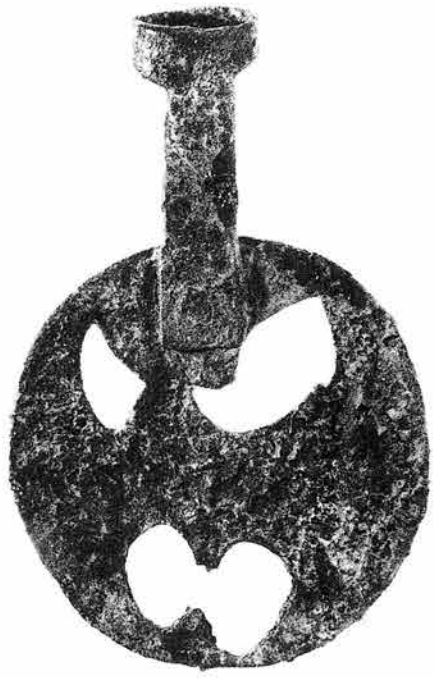


写真図版146　C地区の遺物⑫

3246

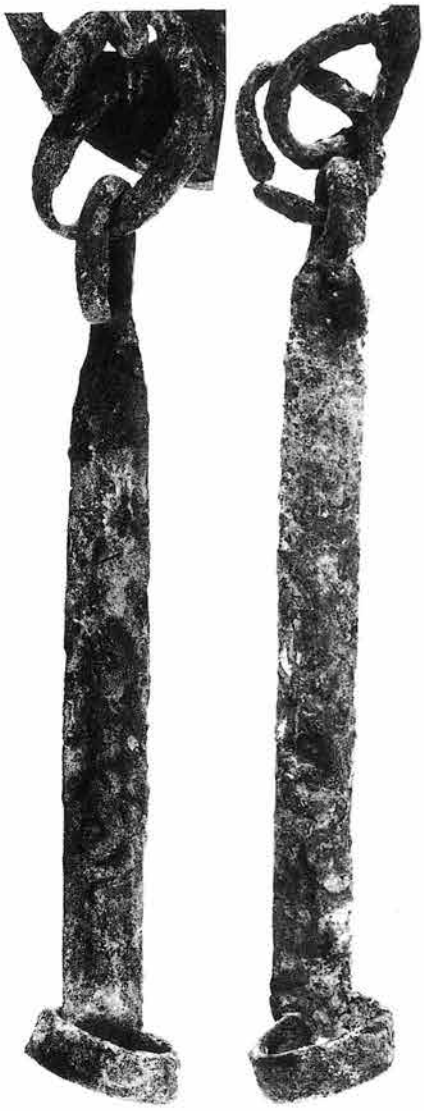
写真図版147　C地区の遺物⑬



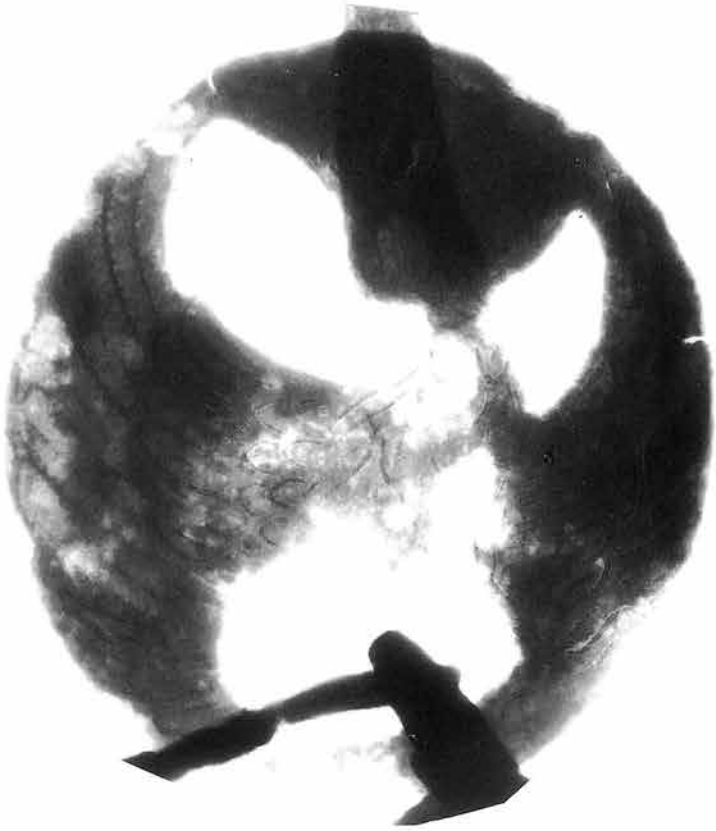


3246の鏡板

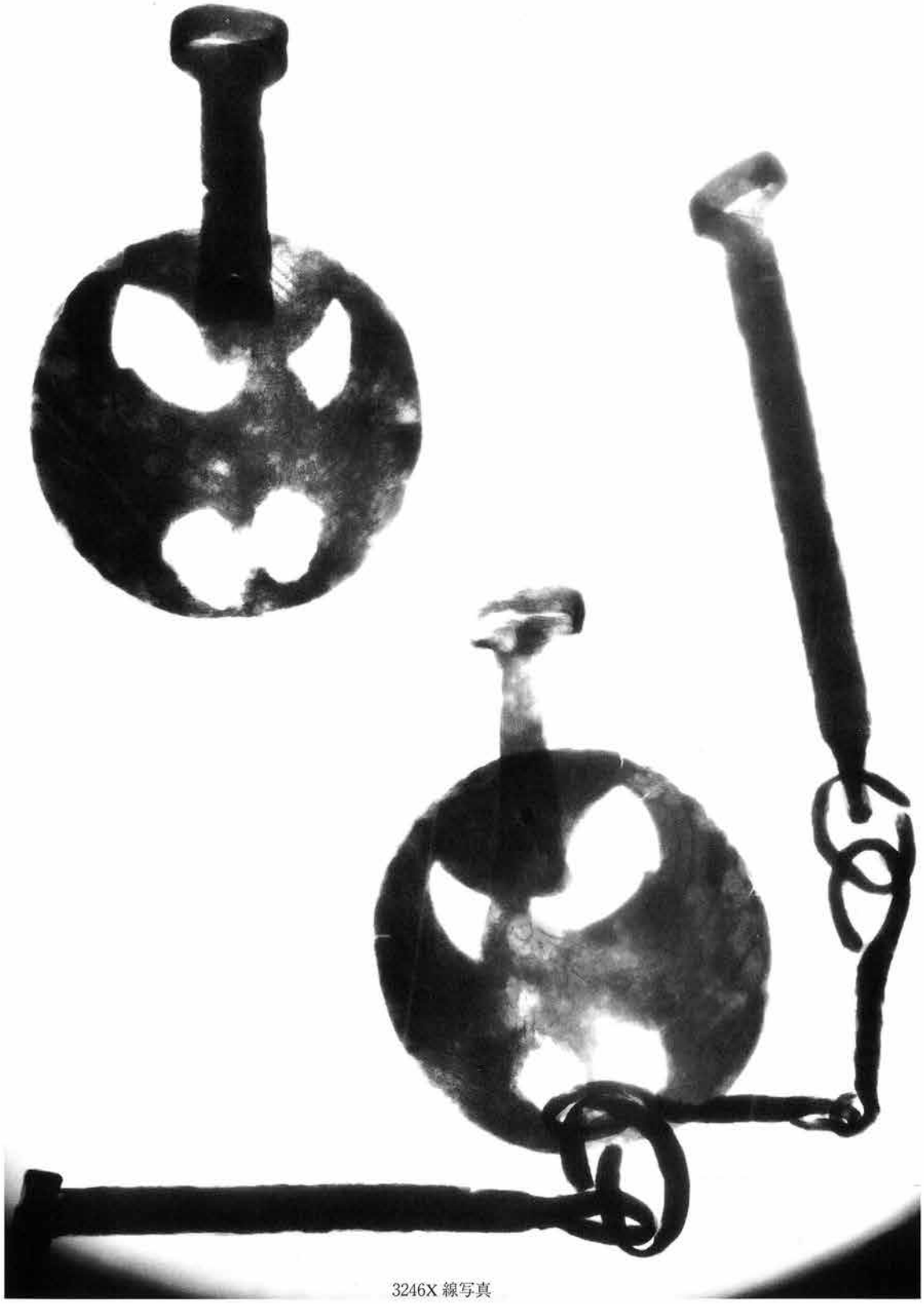
写真図版148　C地区の遺物⑭



3246の引手

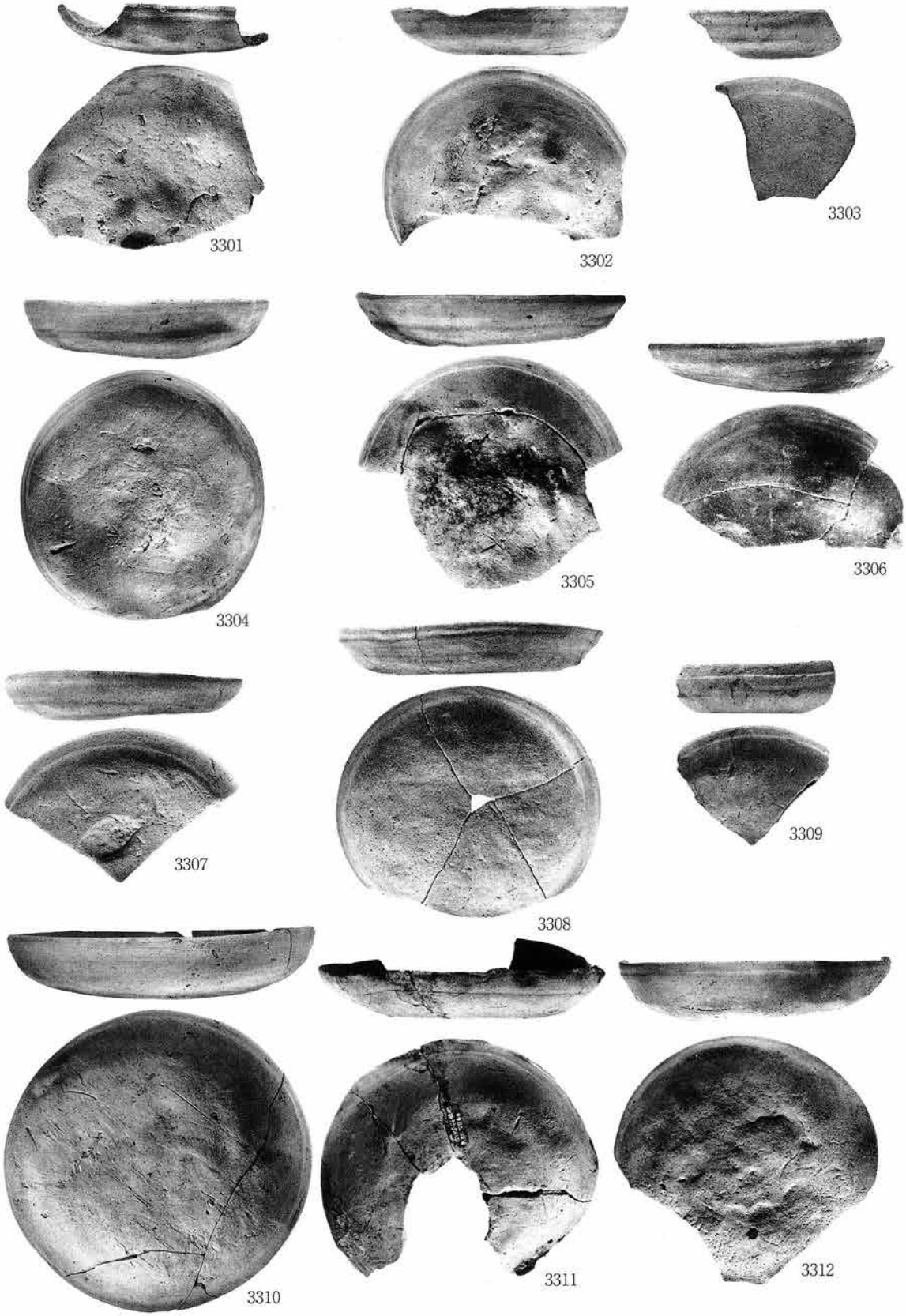


写真図版149　C地区の遺物⑮



3246X 線写真

写真図版150　C地区の遺物⑯



写真図版151　C地区の遺物⑰

3313

3314

3315

3316

3317

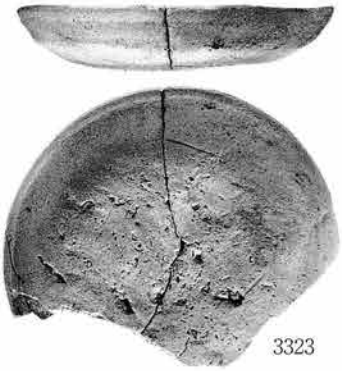
3318

3319

3320

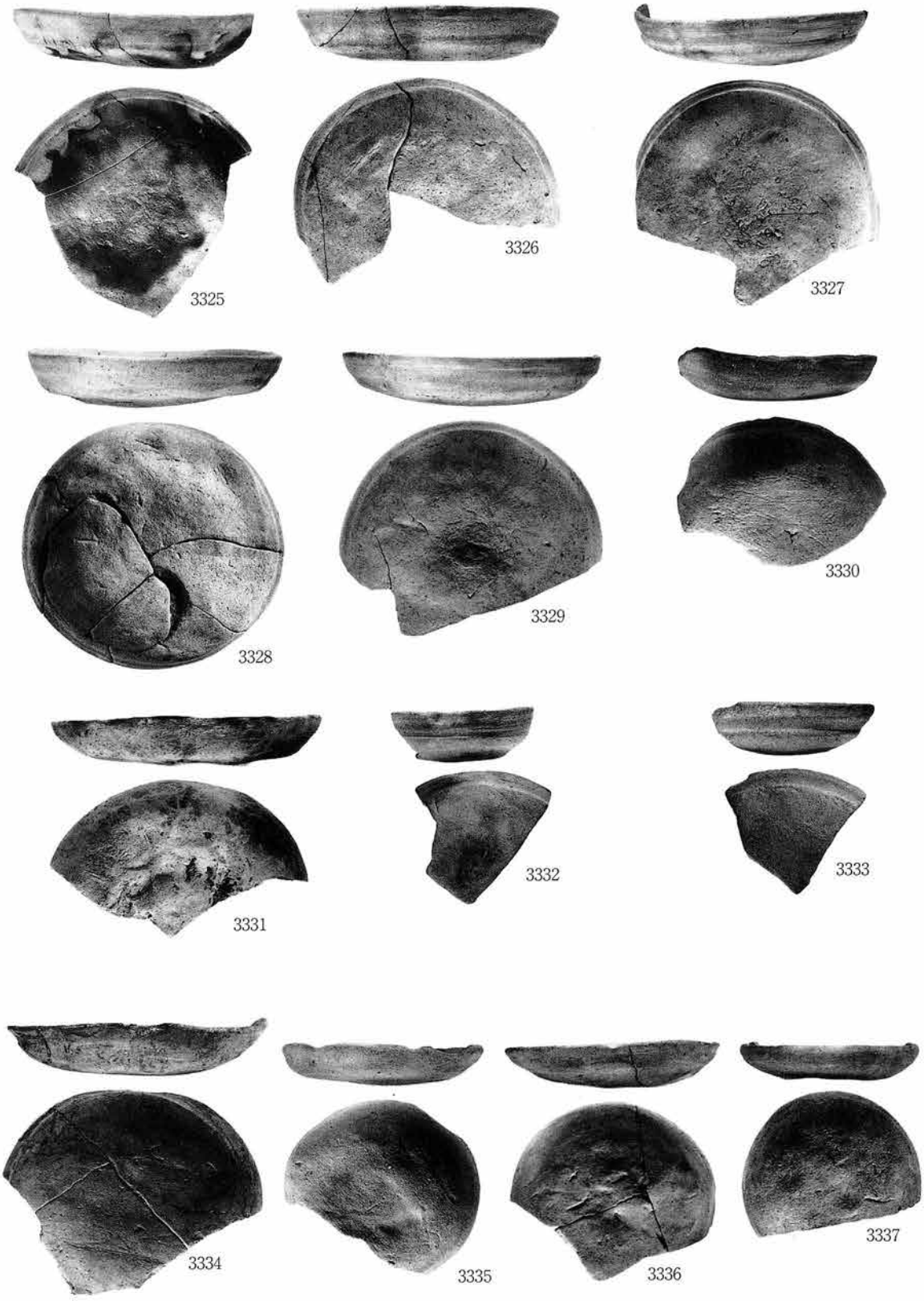
3321

3322

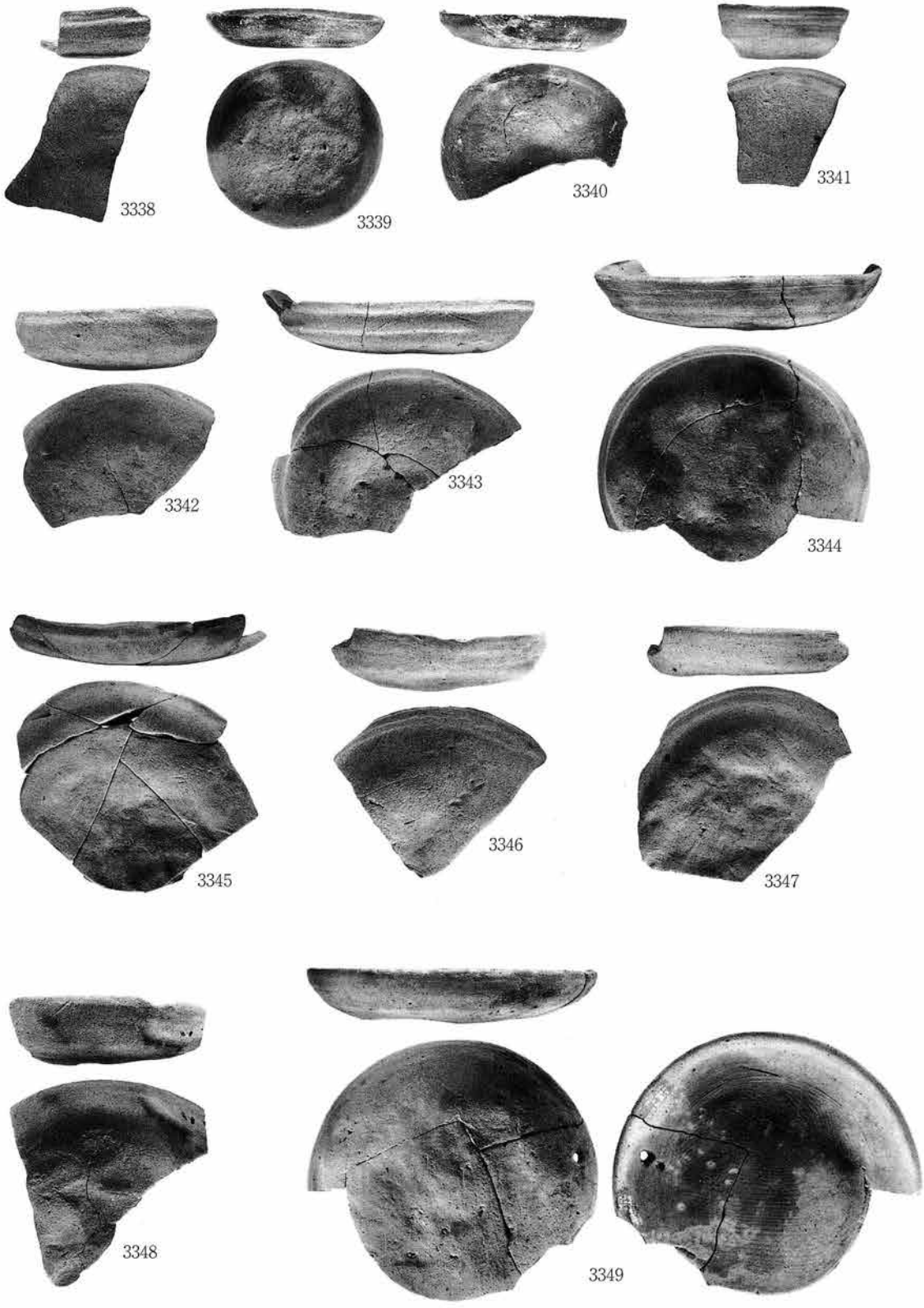

3323

3324

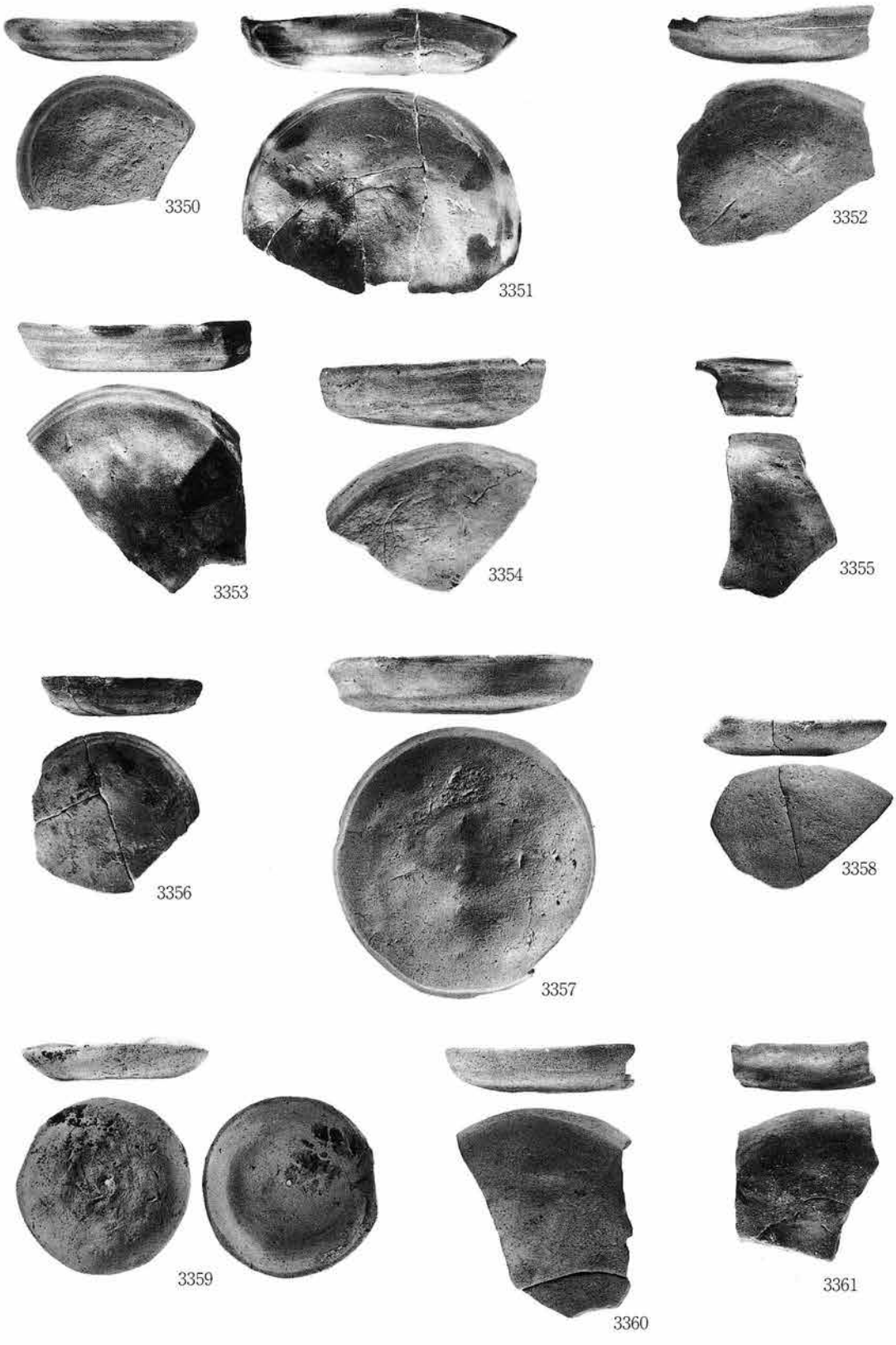
写真図版152　C地区の遺物⑱



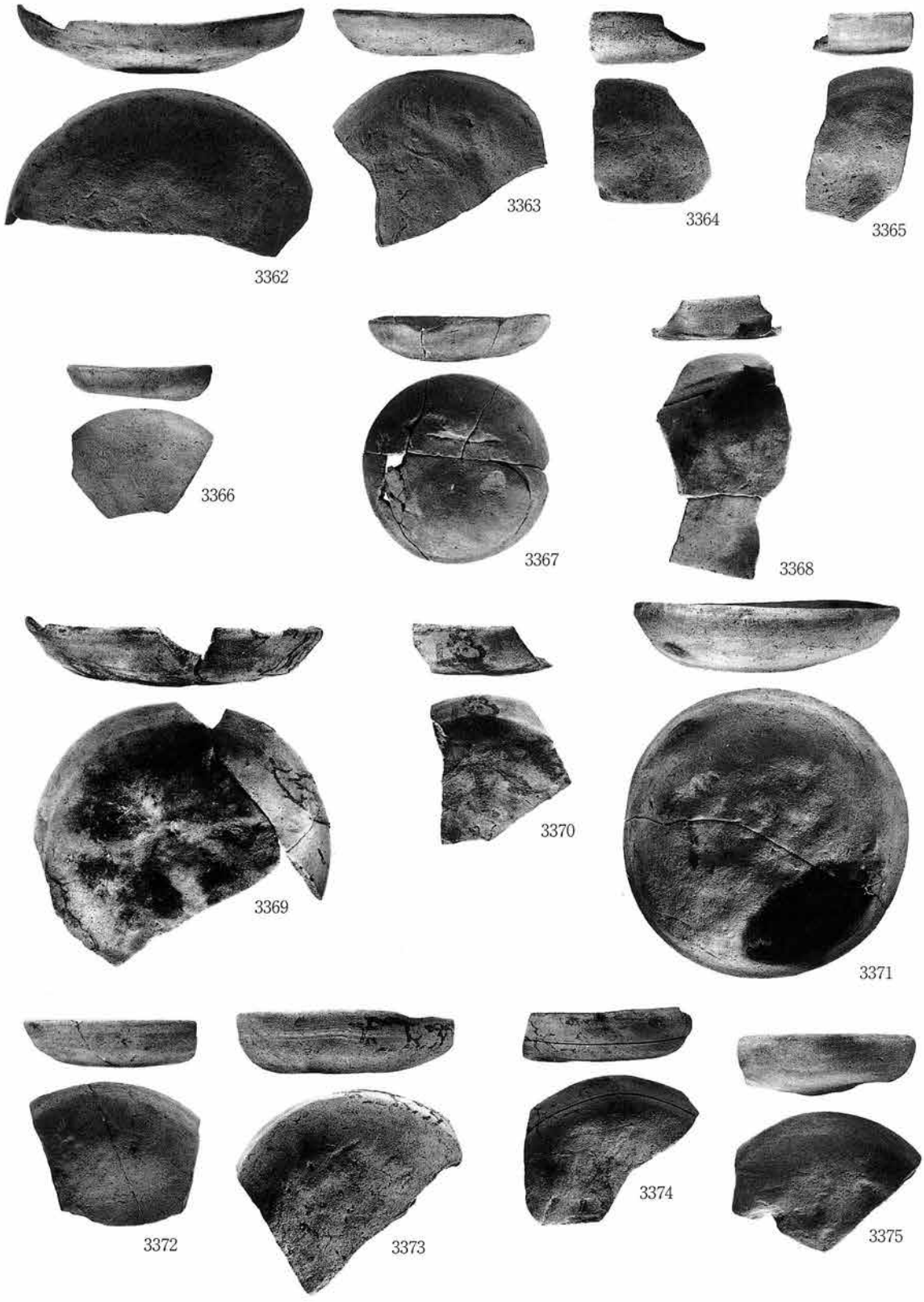
写真図版153　C地区の遺物⑲



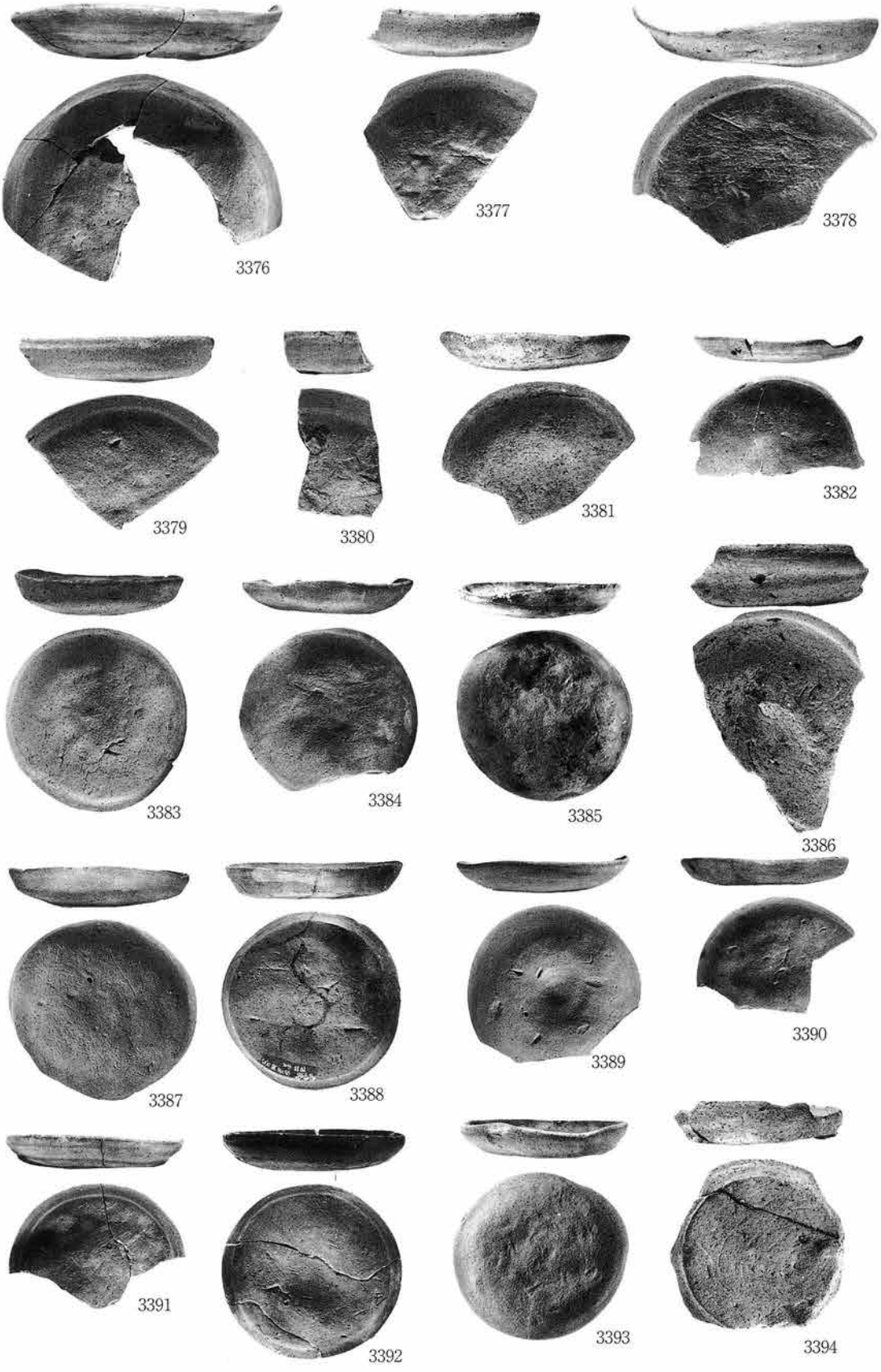
写真図版154　C地区の遺物⑳



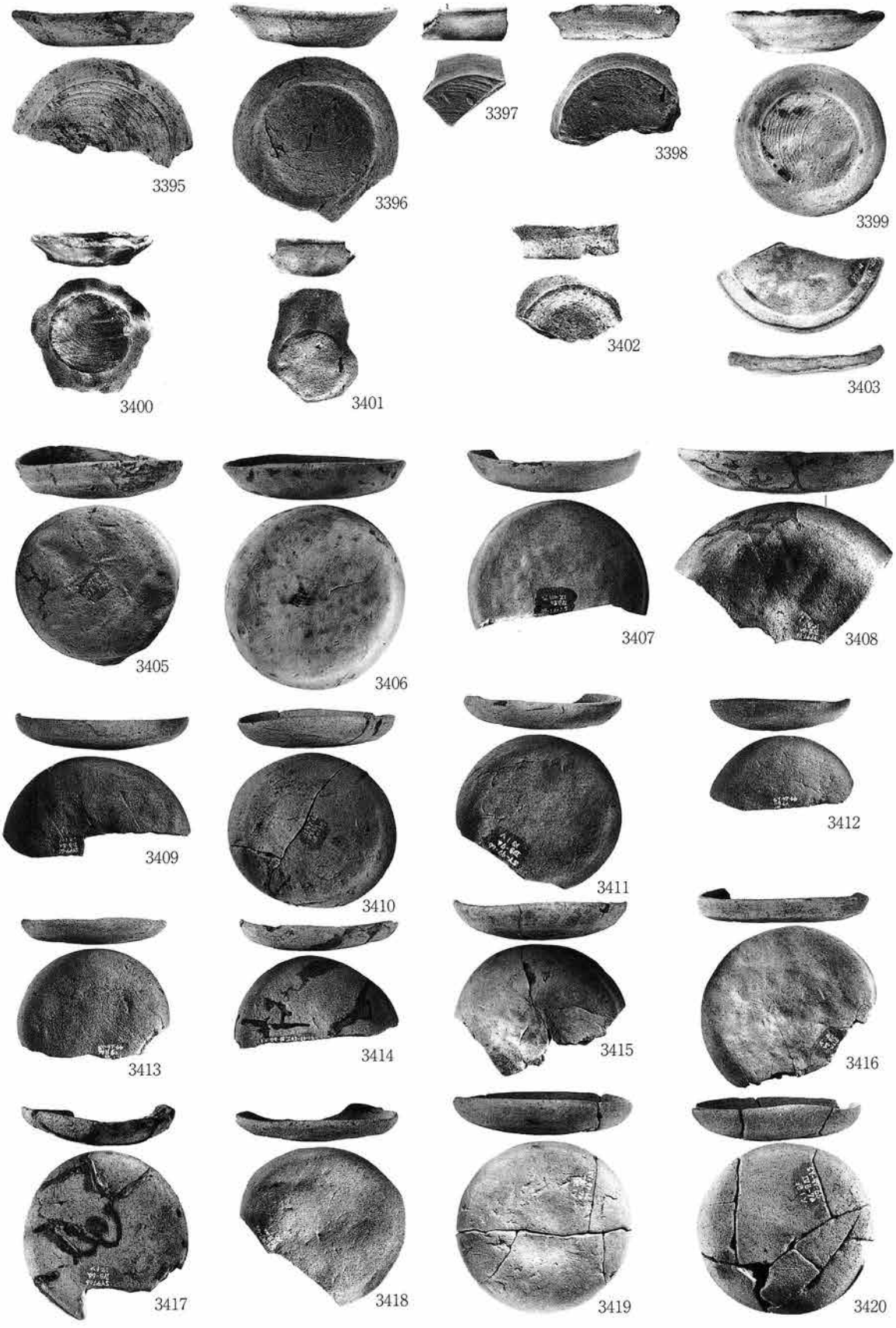
写真図版155　C地区の遺物㉑



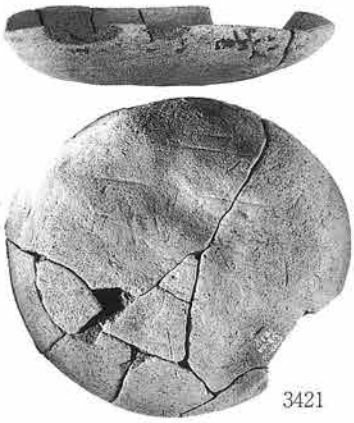
写真図版156　C地区の遺物㉒



写真図版157　C地区の遺物㉓



写真図版158　C地区の遺物㉔


3421

3422

3423

3424

3425

3426

3427

3428

3429

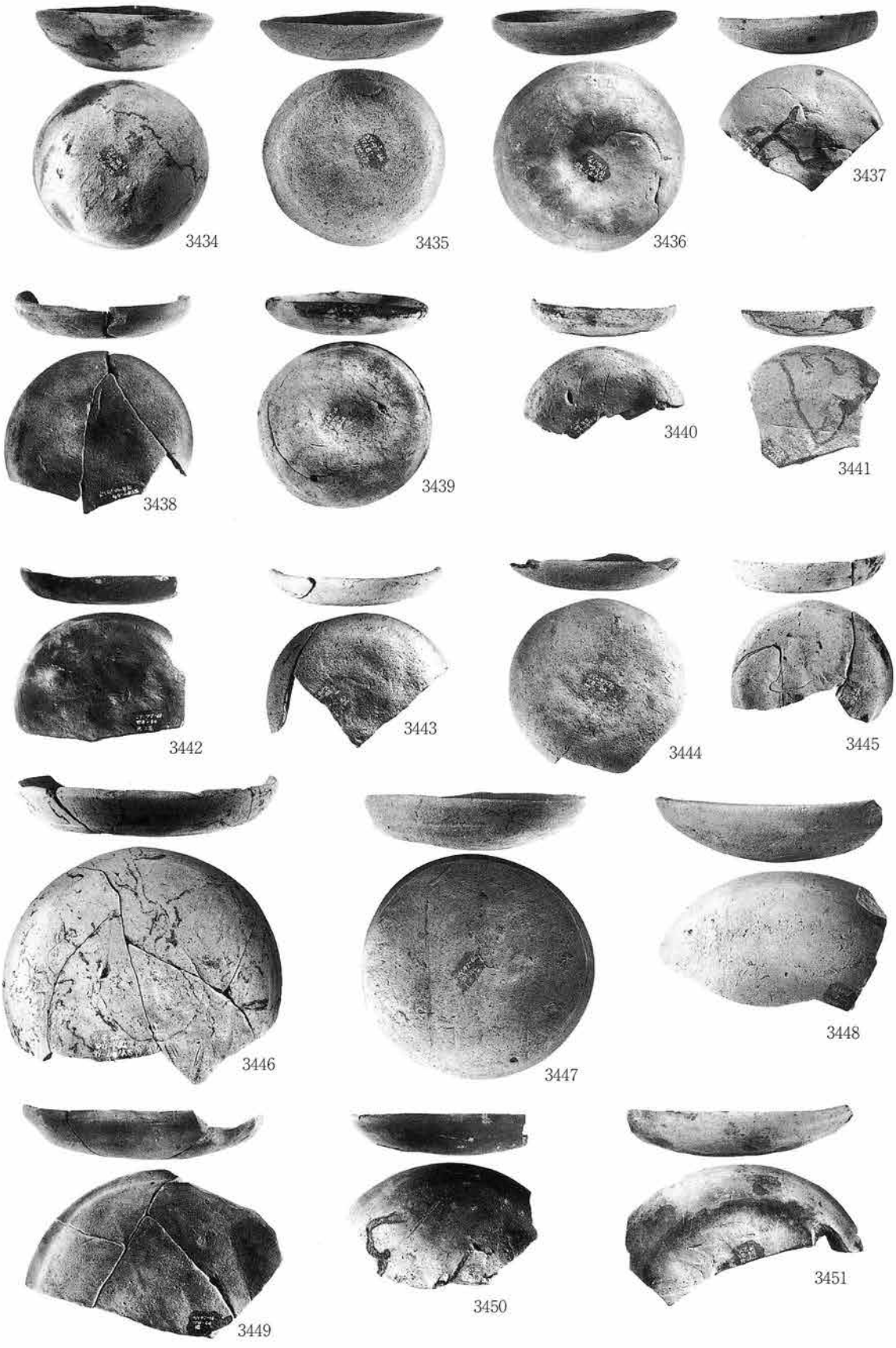
3430

3431

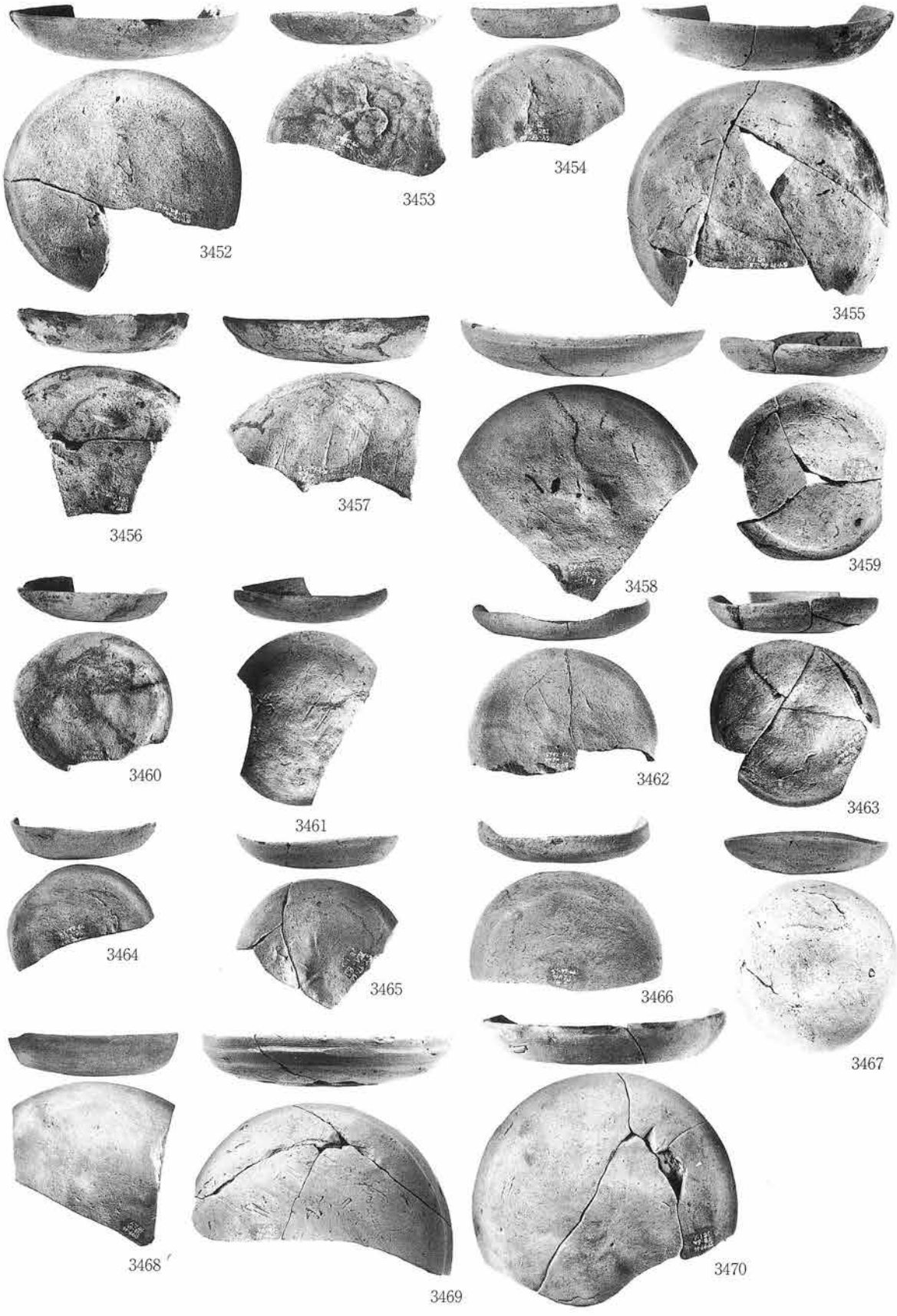
3432

3433

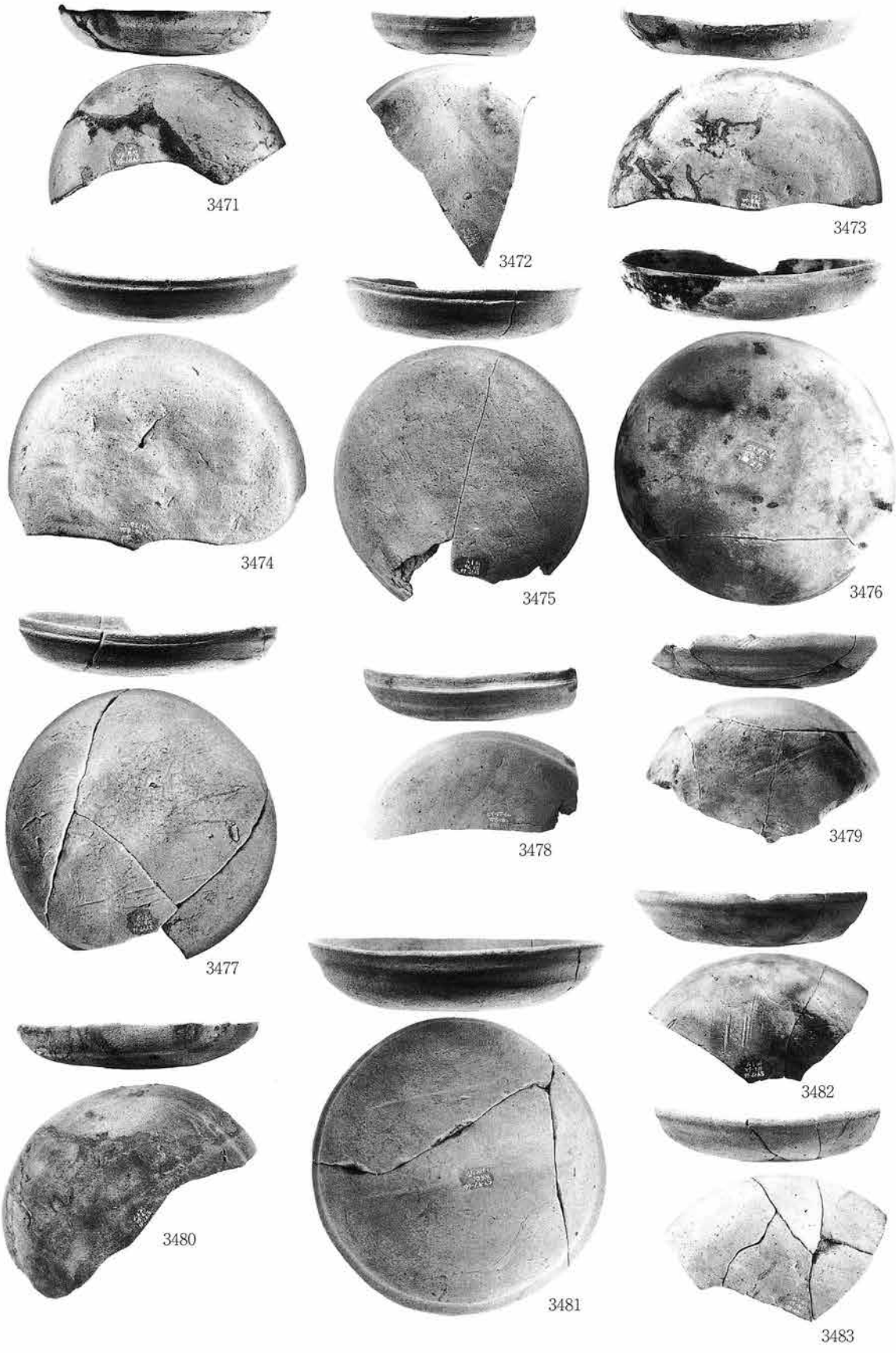
写真図版159　C地区の遺物㉕



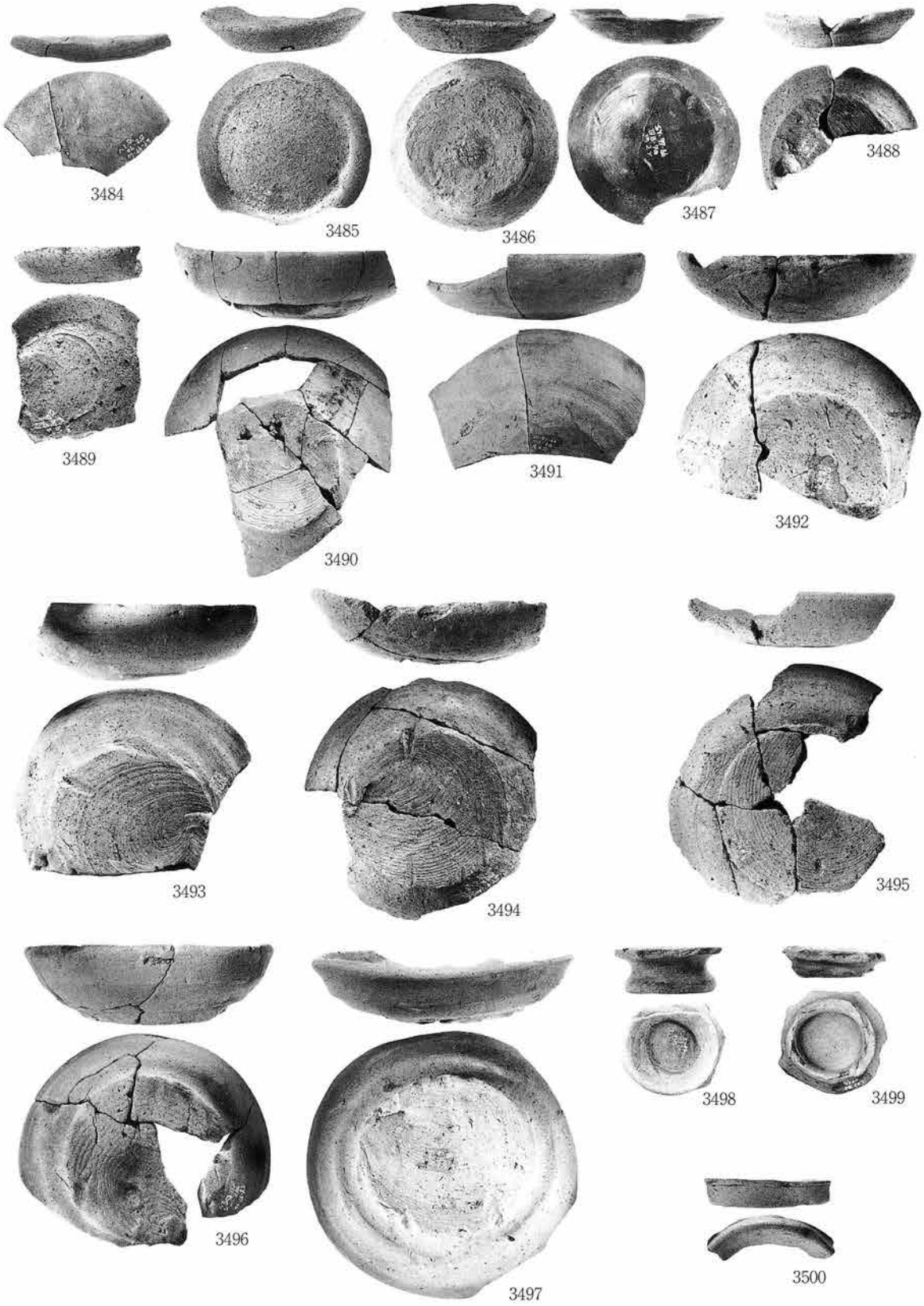
写真図版160　C地区の遺物㉖



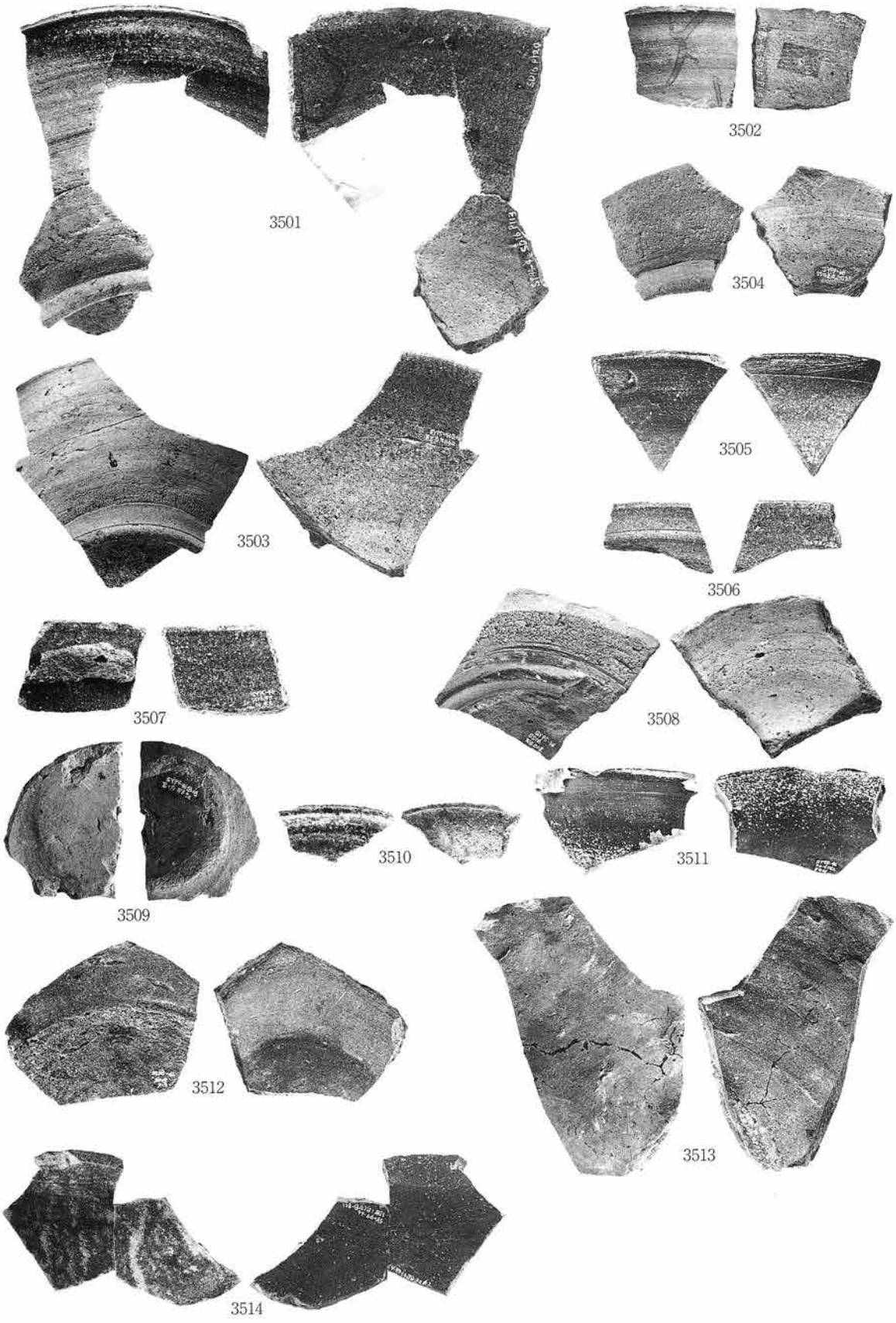
写真図版161　C地区の遺物㉗



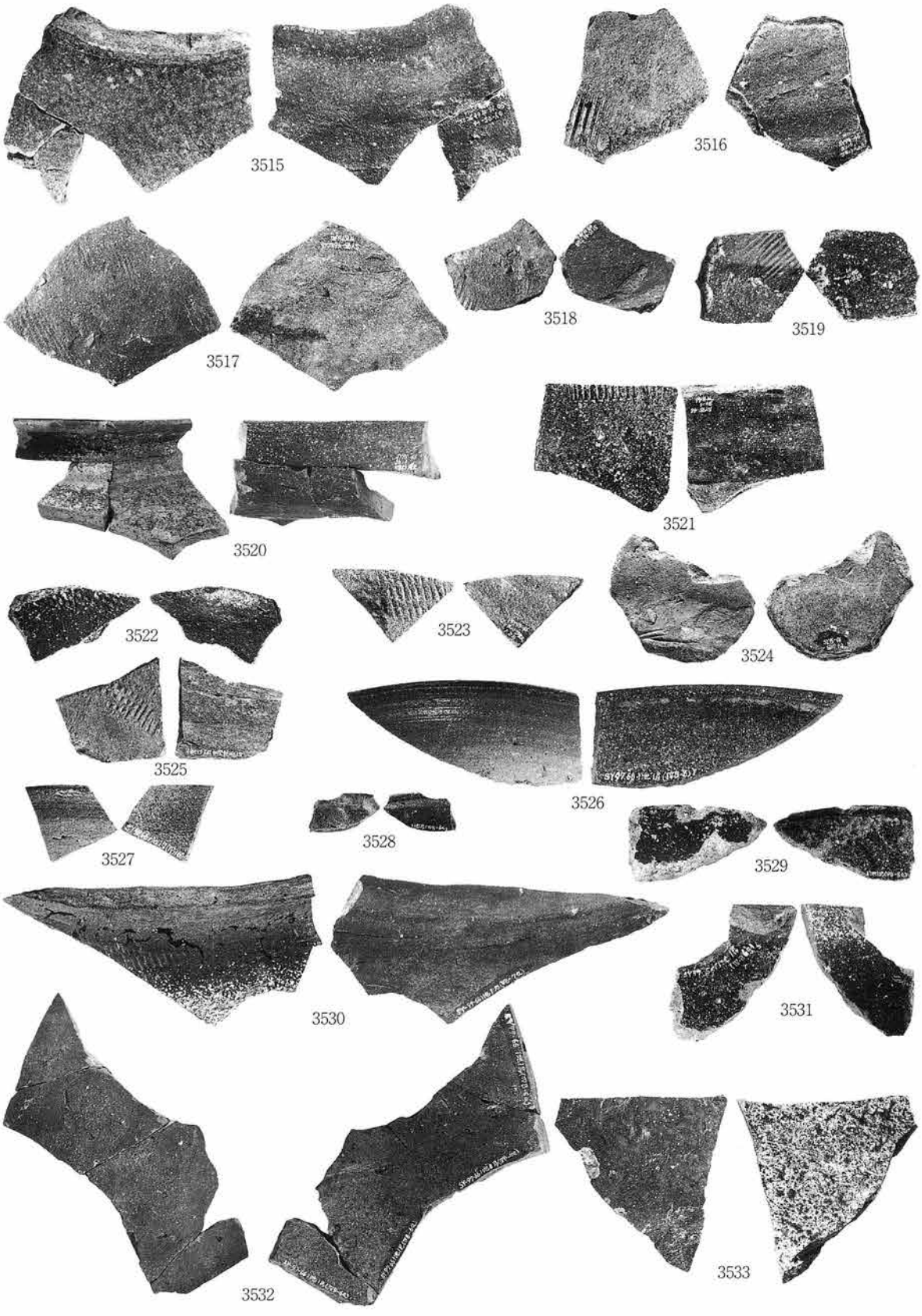
写真図版162　C地区の遺物㉘



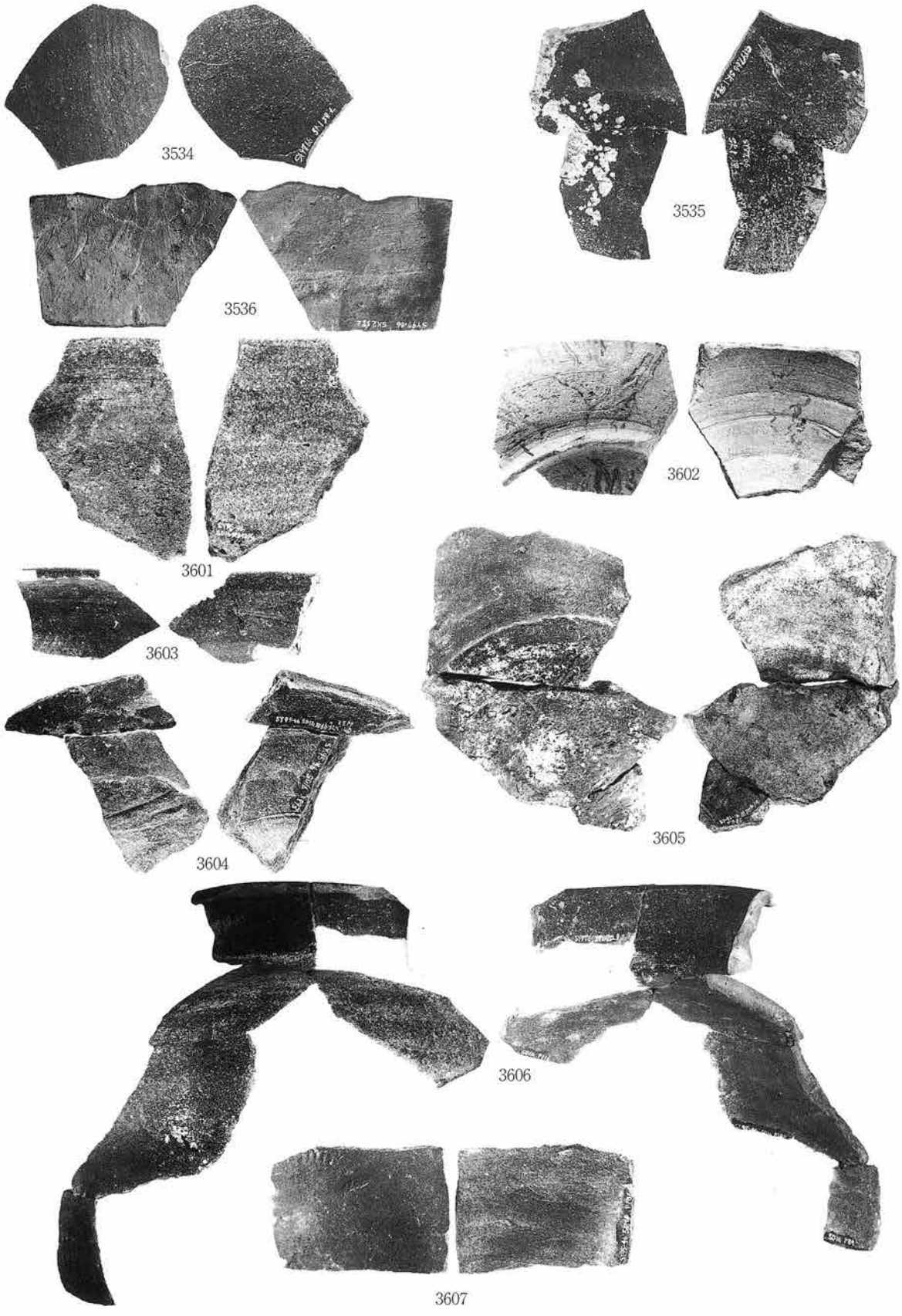
写真図版163　C地区の遺物㉙



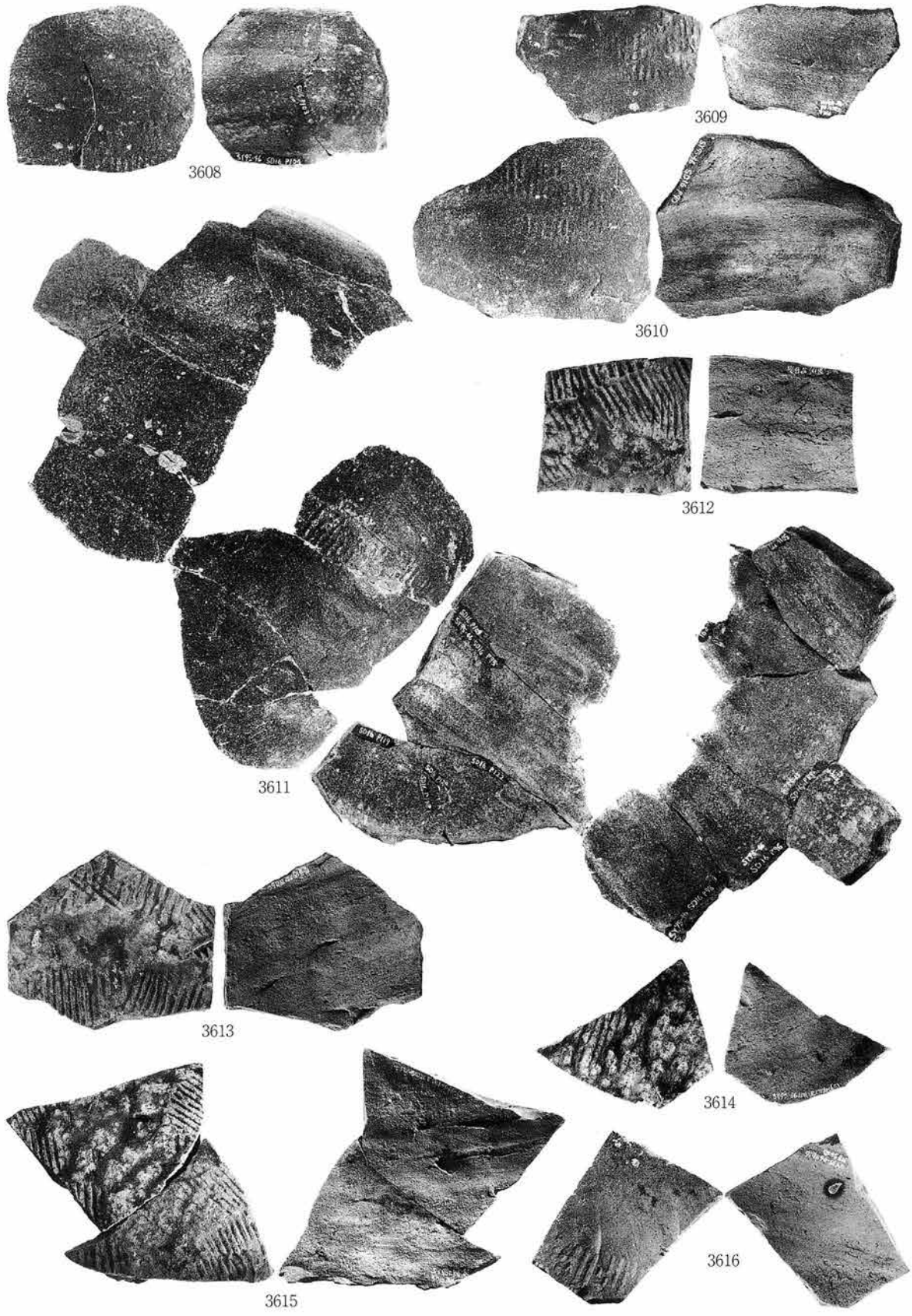
写真図版164　C地区の遺物㉚



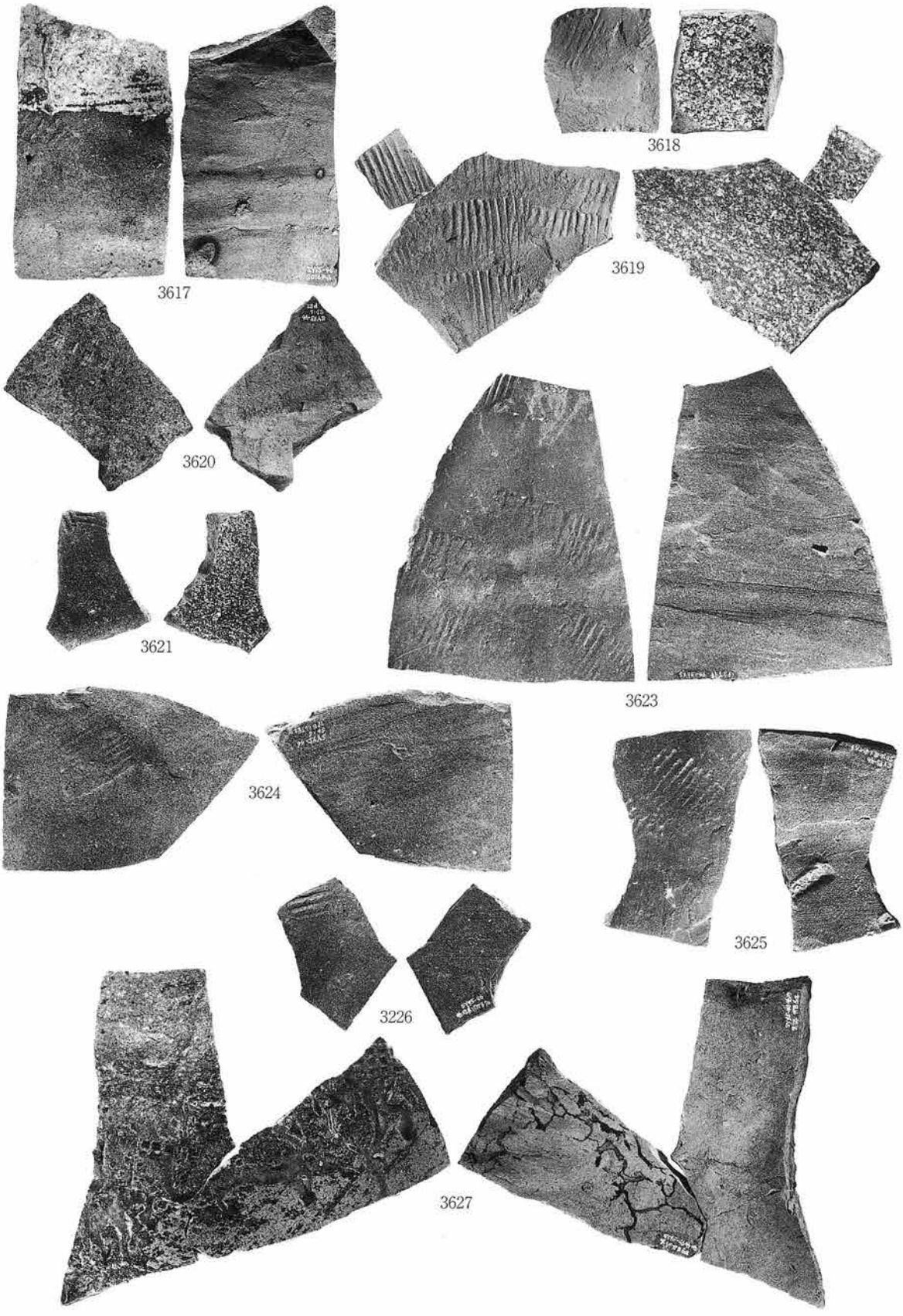
写真図版165　C地区の遺物㉛



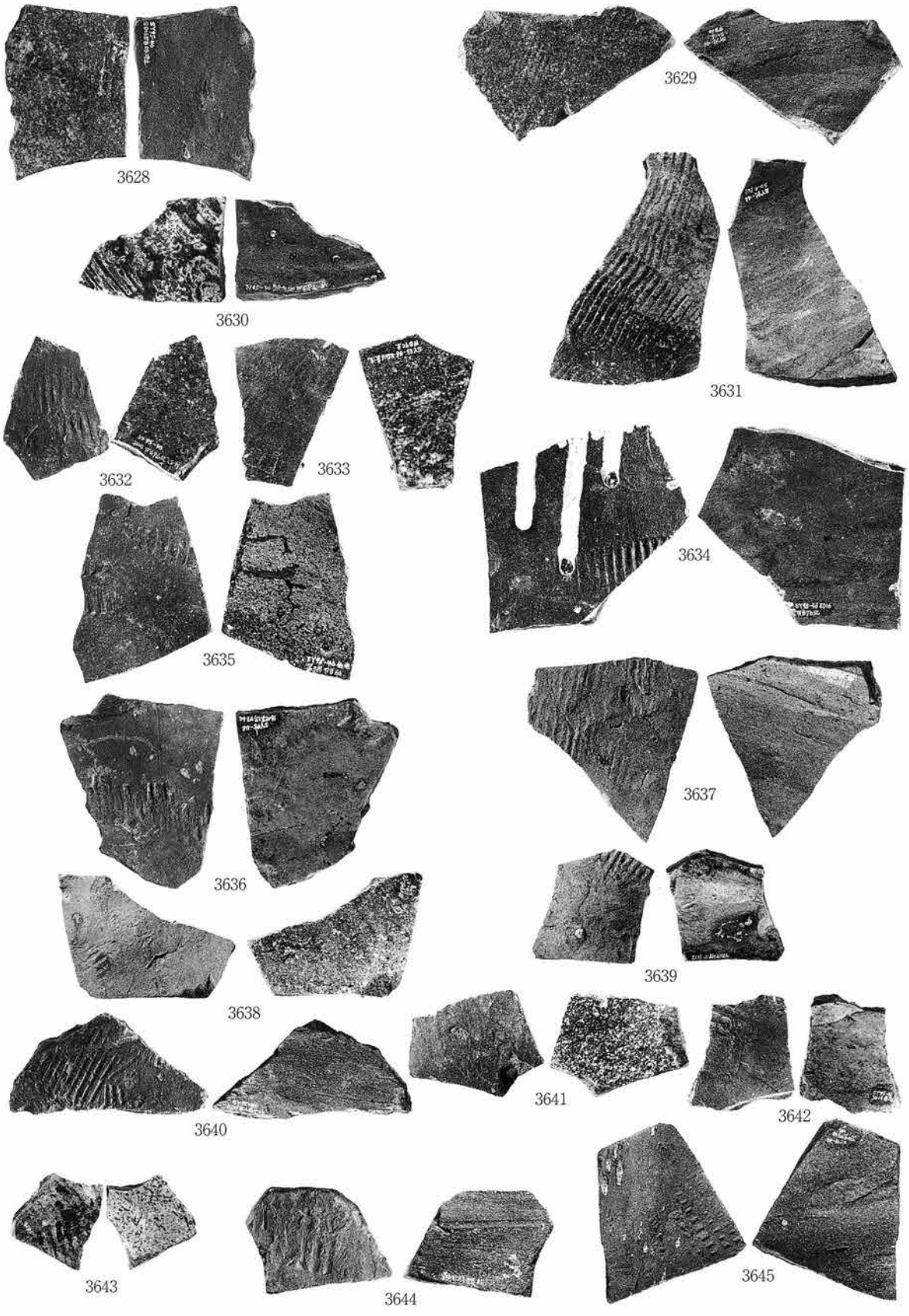
写真図版166　C地区の遺物㉜



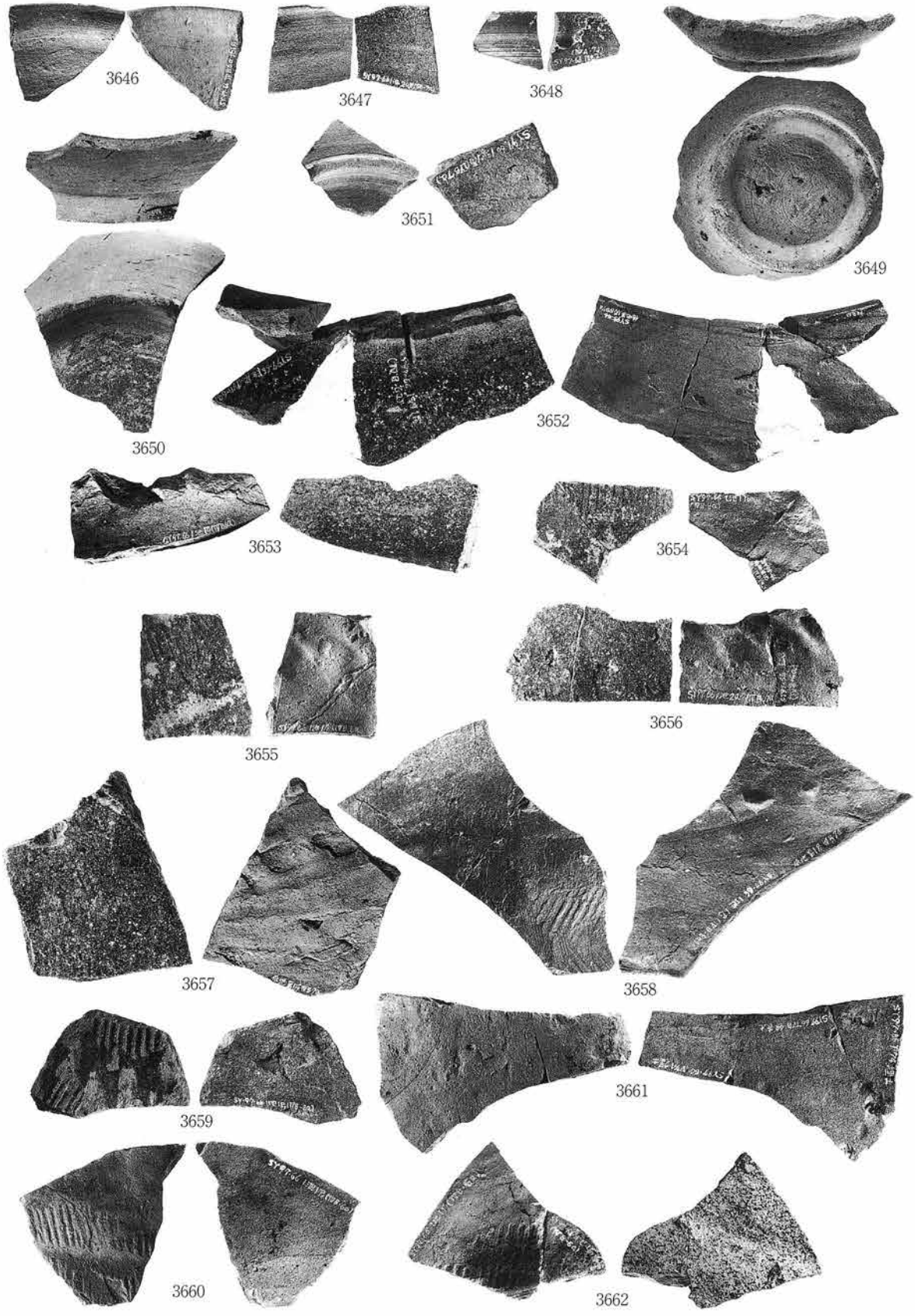
写真図版167　C地区の遺物㉝



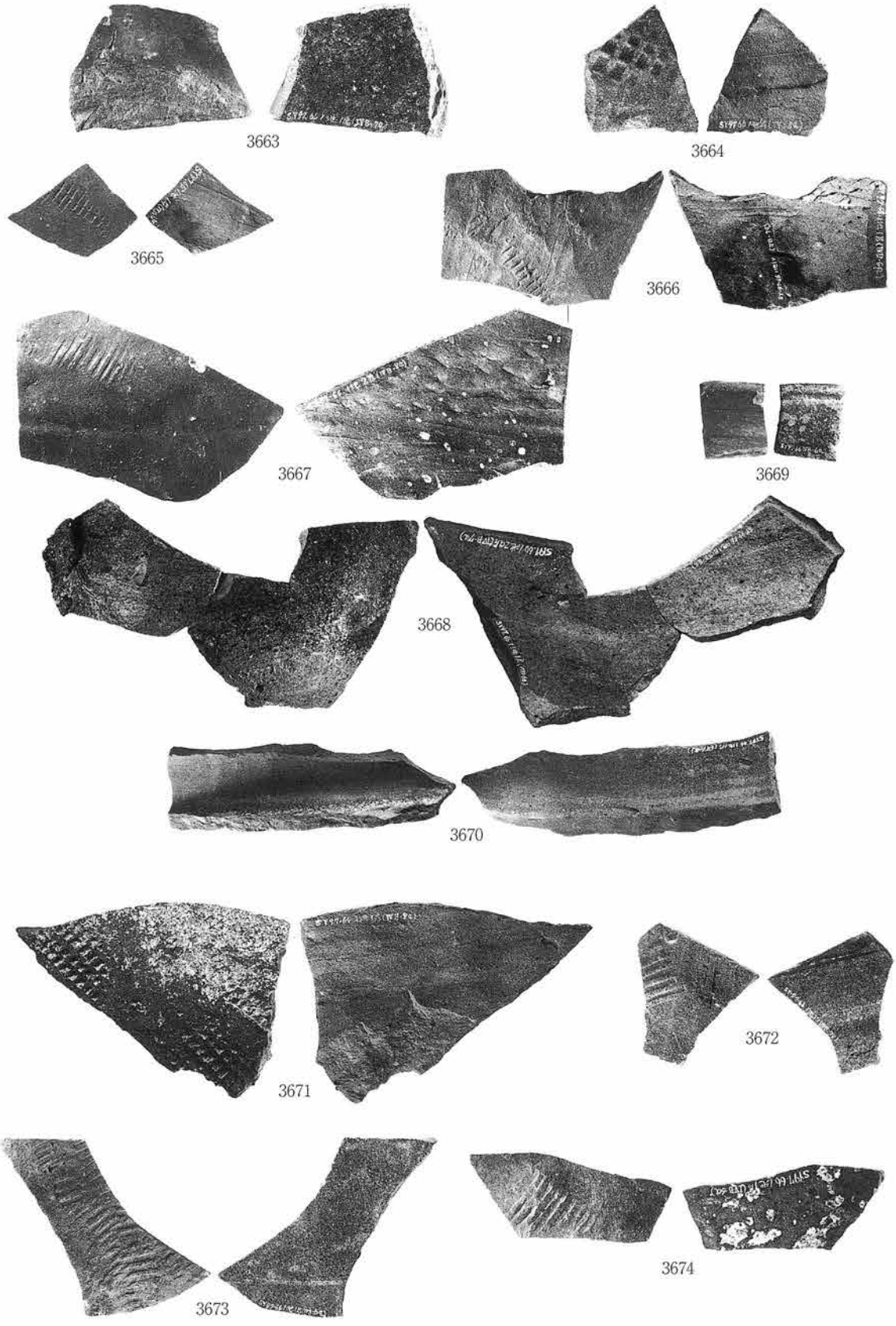
写真図版168　C地区の遺物㉞



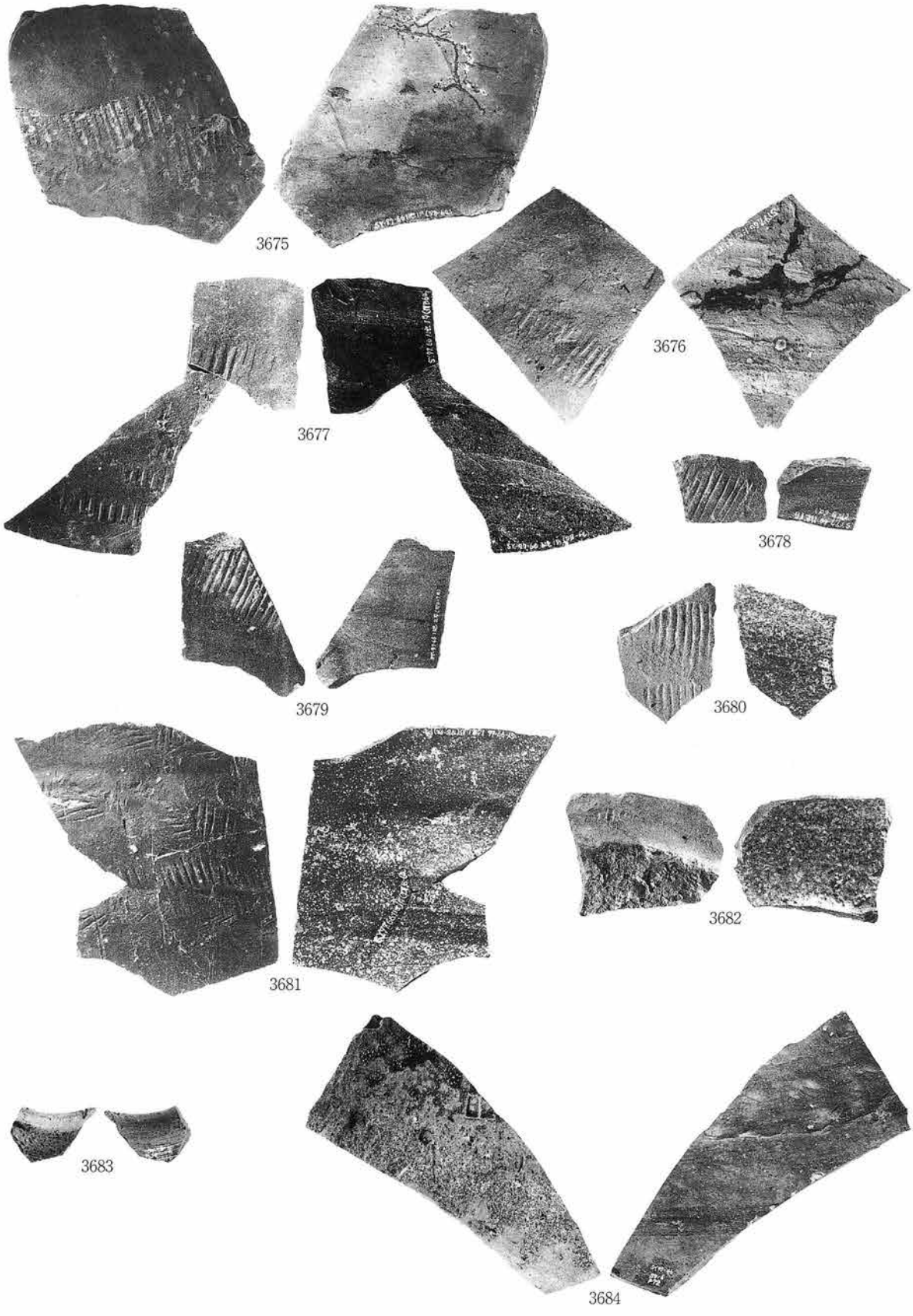
写真図版169　C地区の遺物㉟



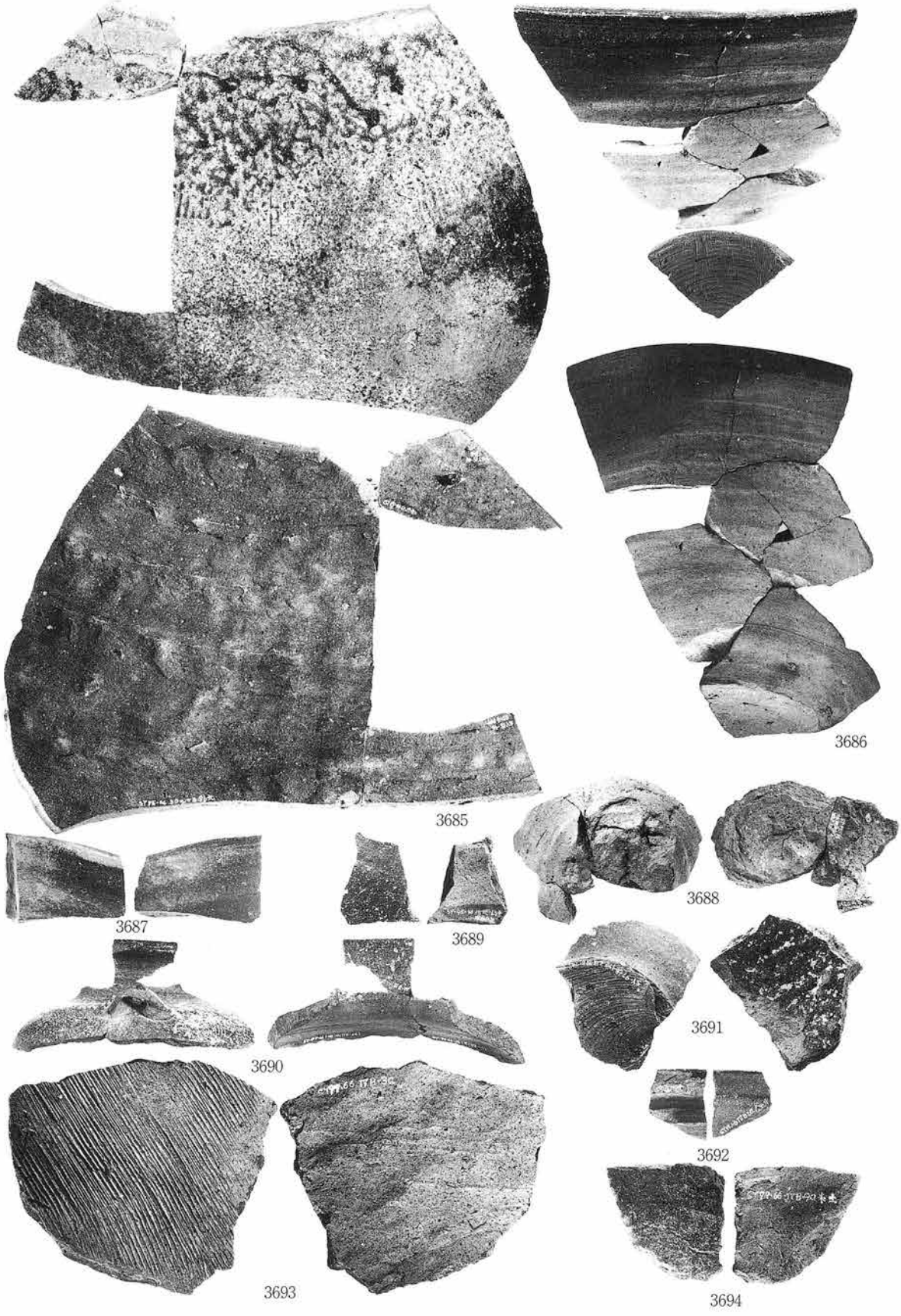
写真図版170　C地区の遺物㊱



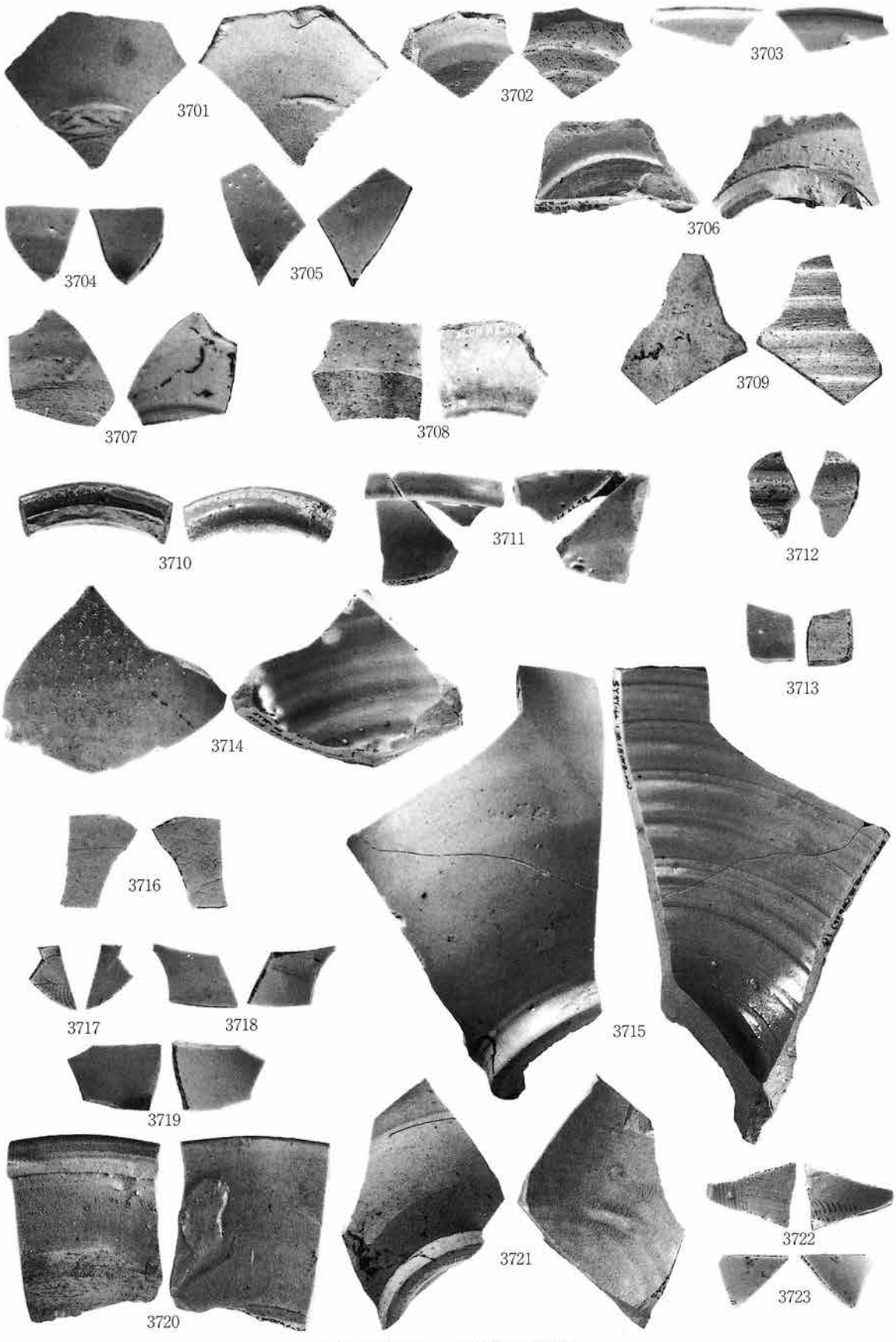
写真図版171　C地区の遺物㊲



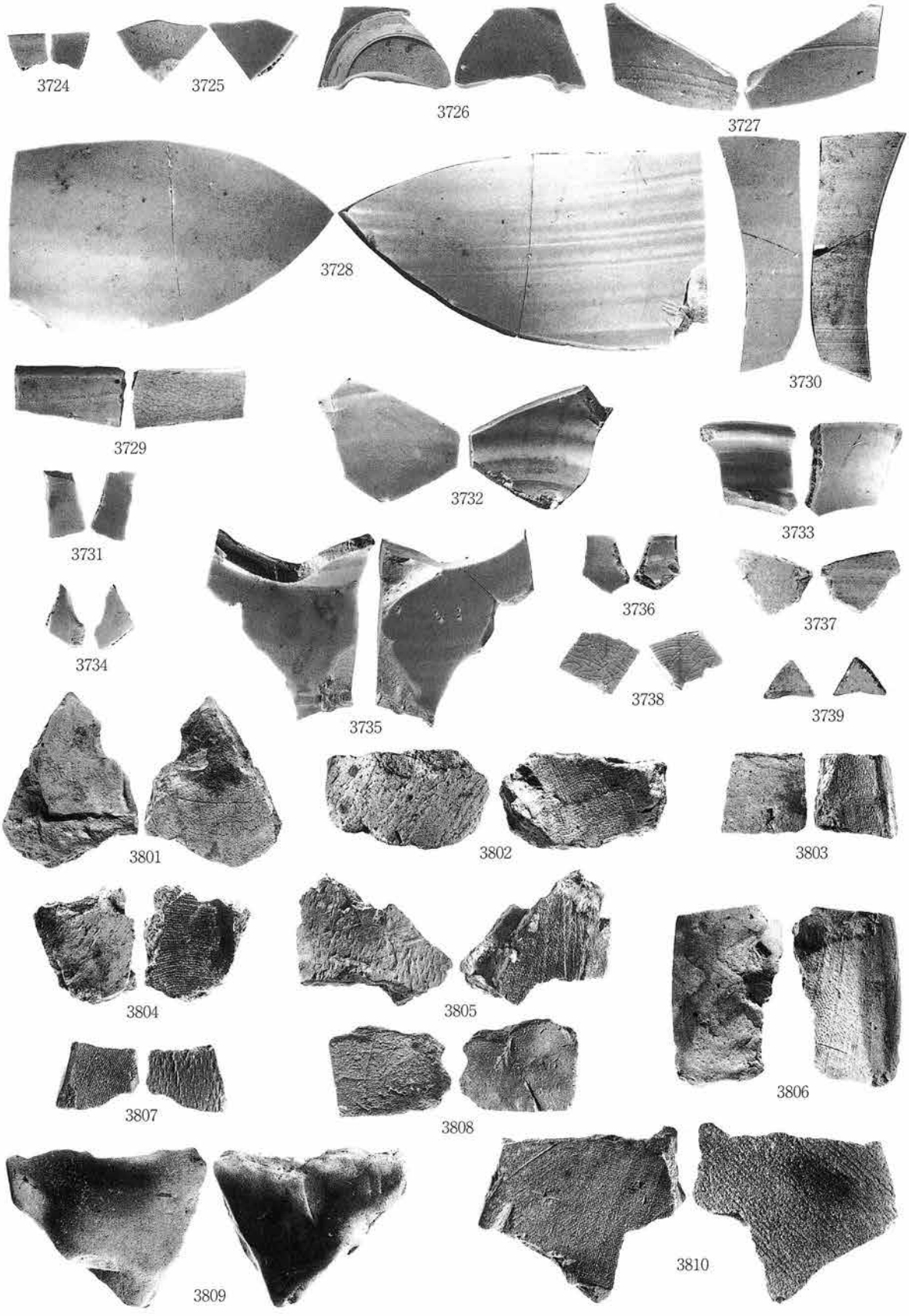
写真図版172　C地区の遺物㊳



写真図版173　C地区の遺物㊴

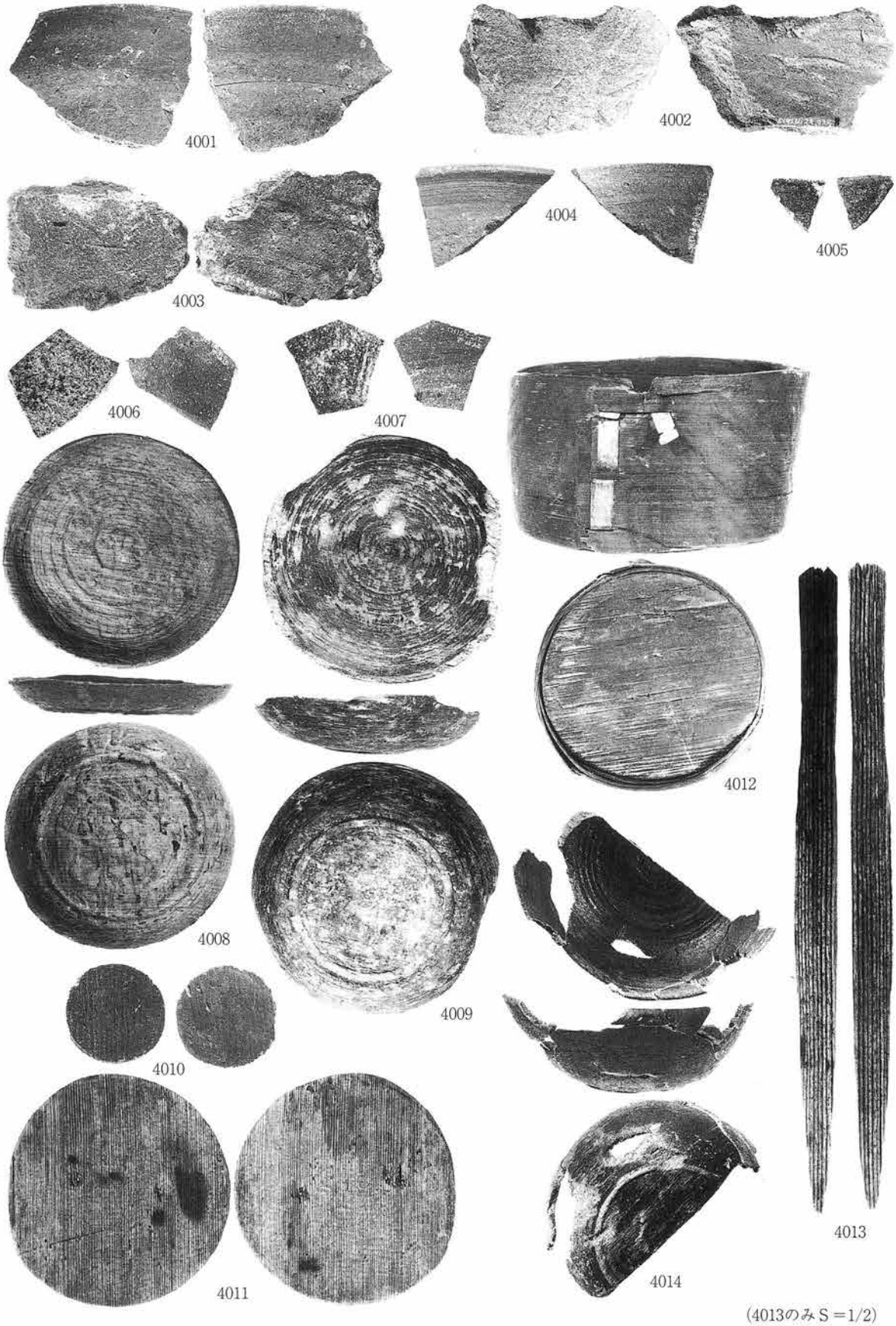


写真図版174　C地区の遺物㊵



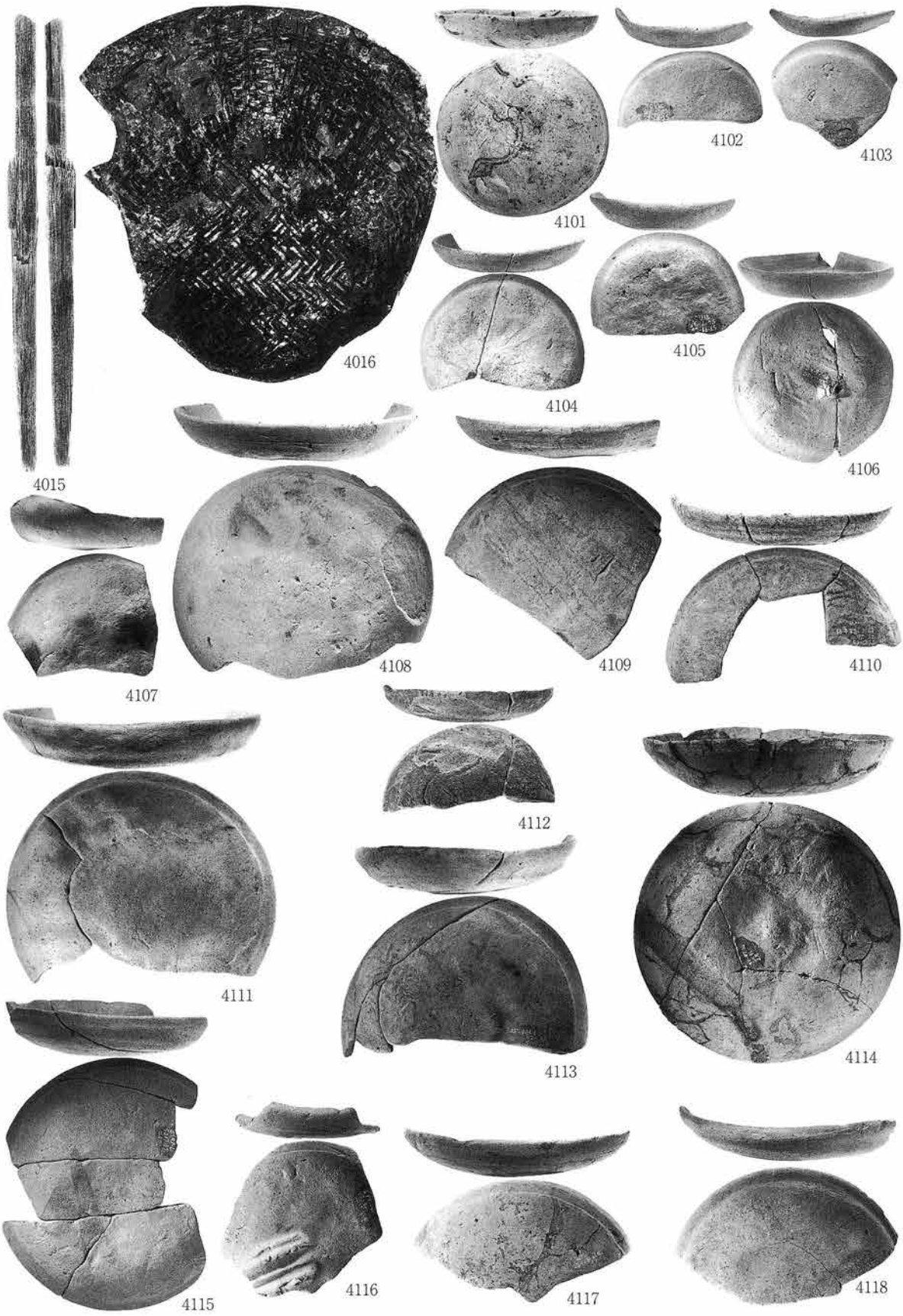
写真図版175　C地区の遺物㊶

写真図版176　C地区の遺物㊷

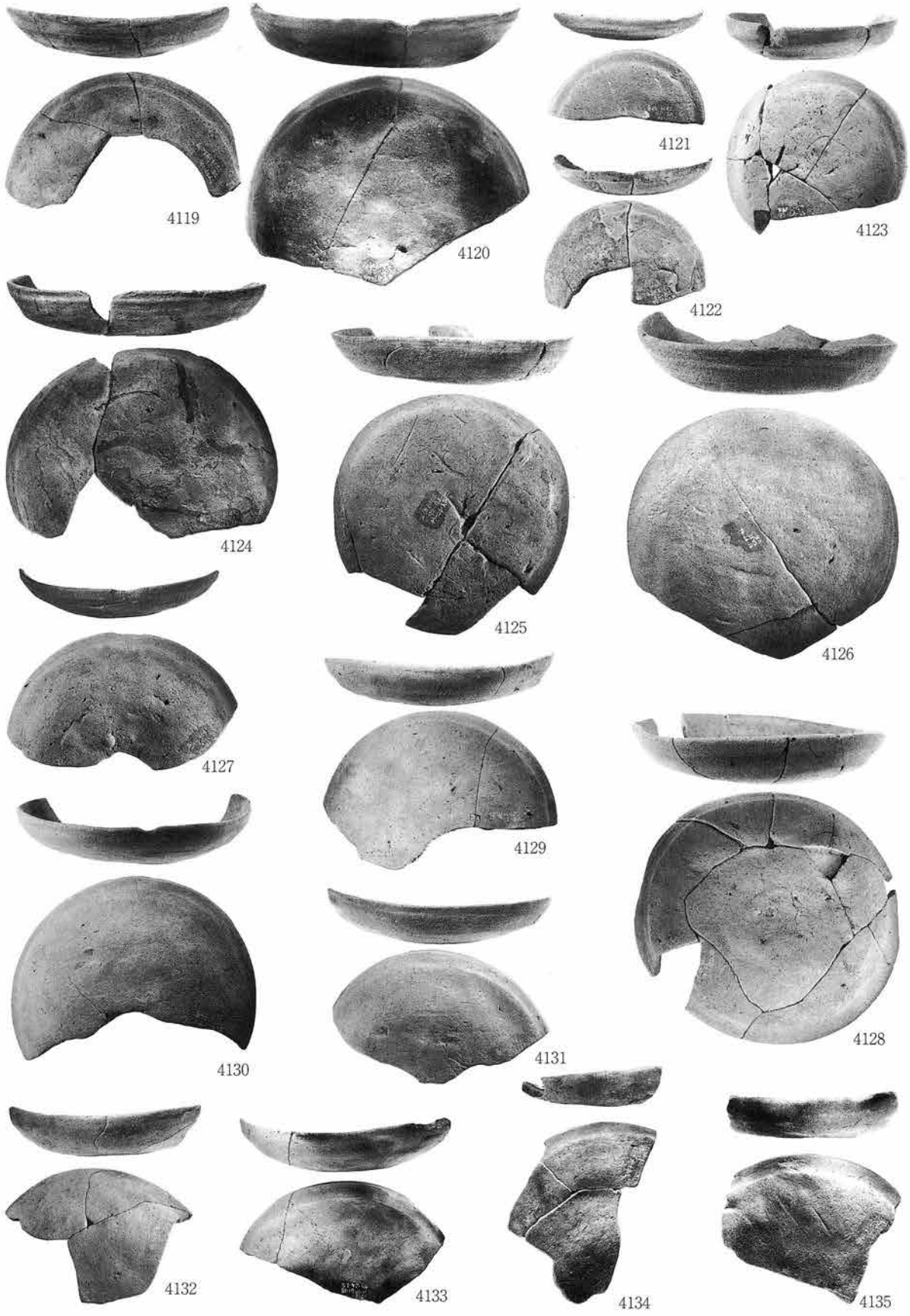


(4013のみS＝1/2)

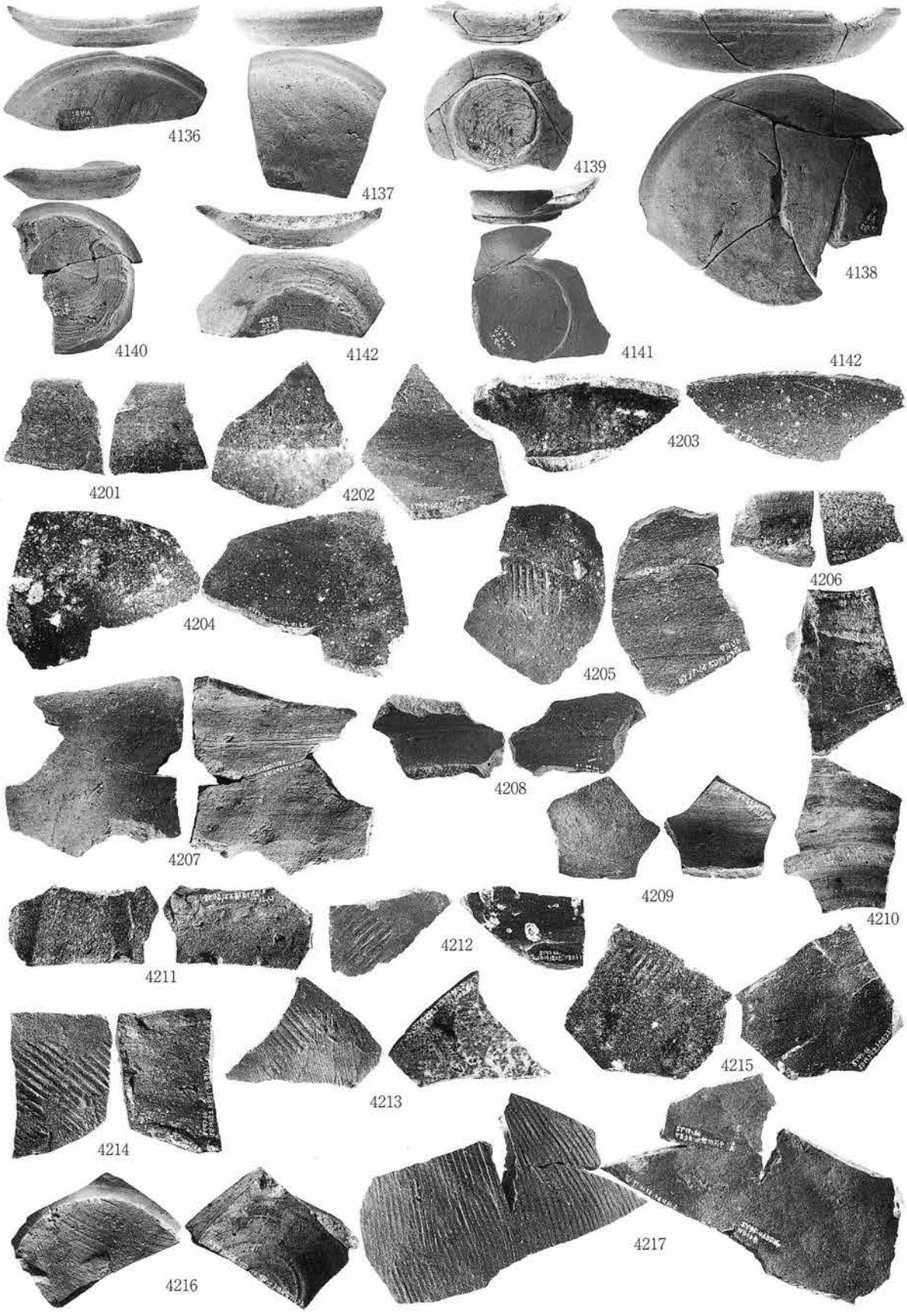
写真図版177　D地区の遺物①



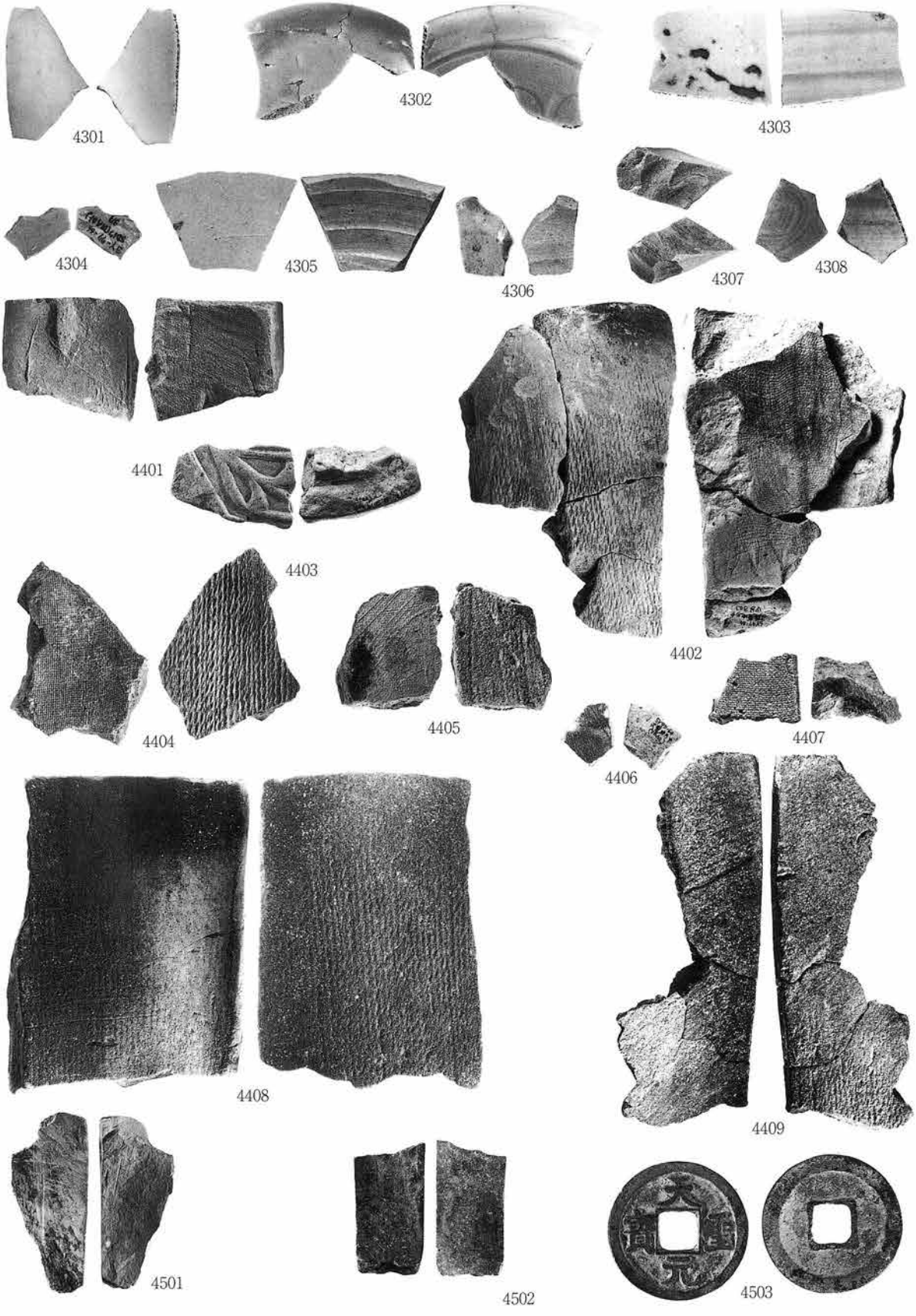
写真図版178　D地区の遺物②



写真図版179　D地区の遺物③

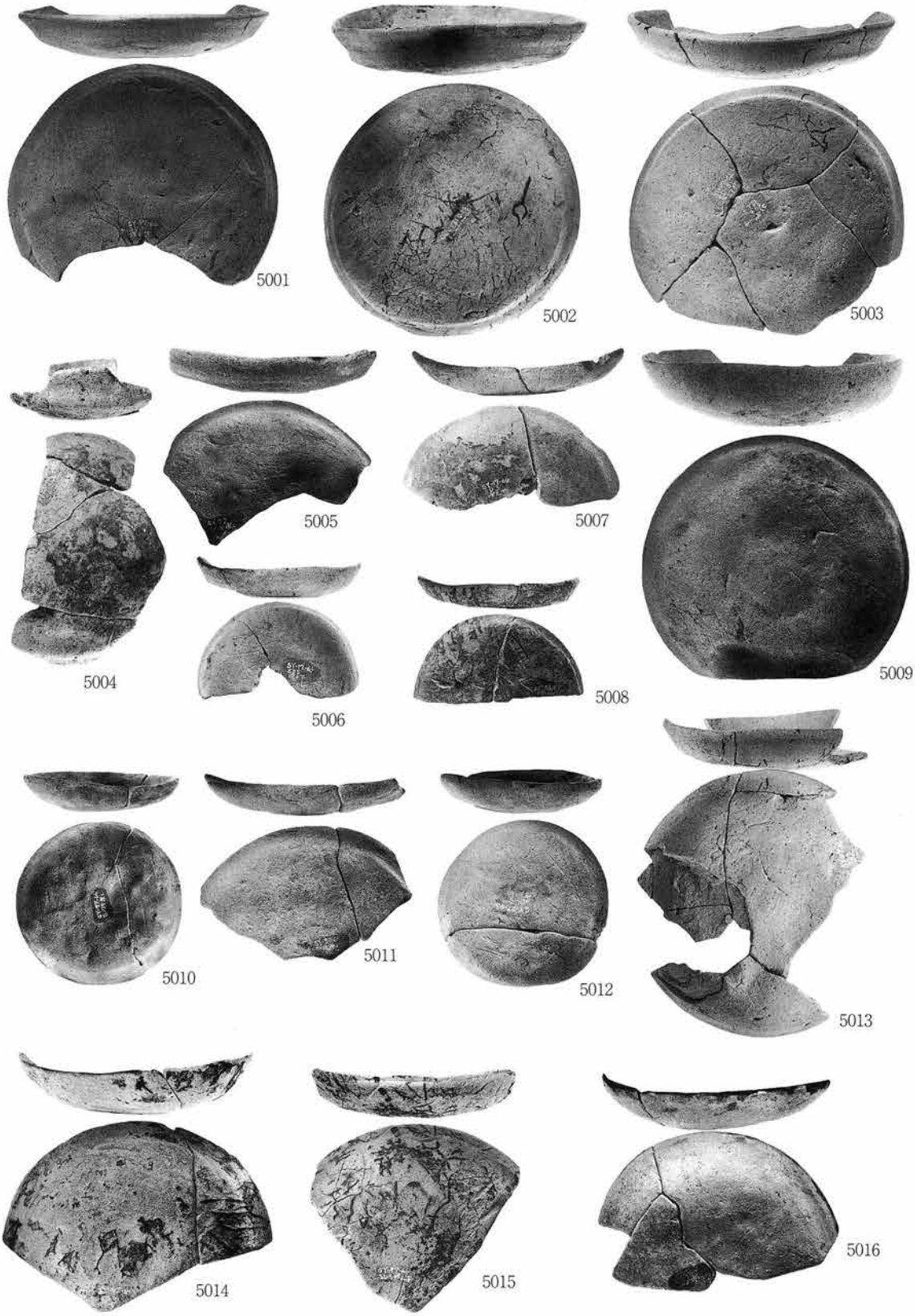


写真図版180　D地区の遺物④

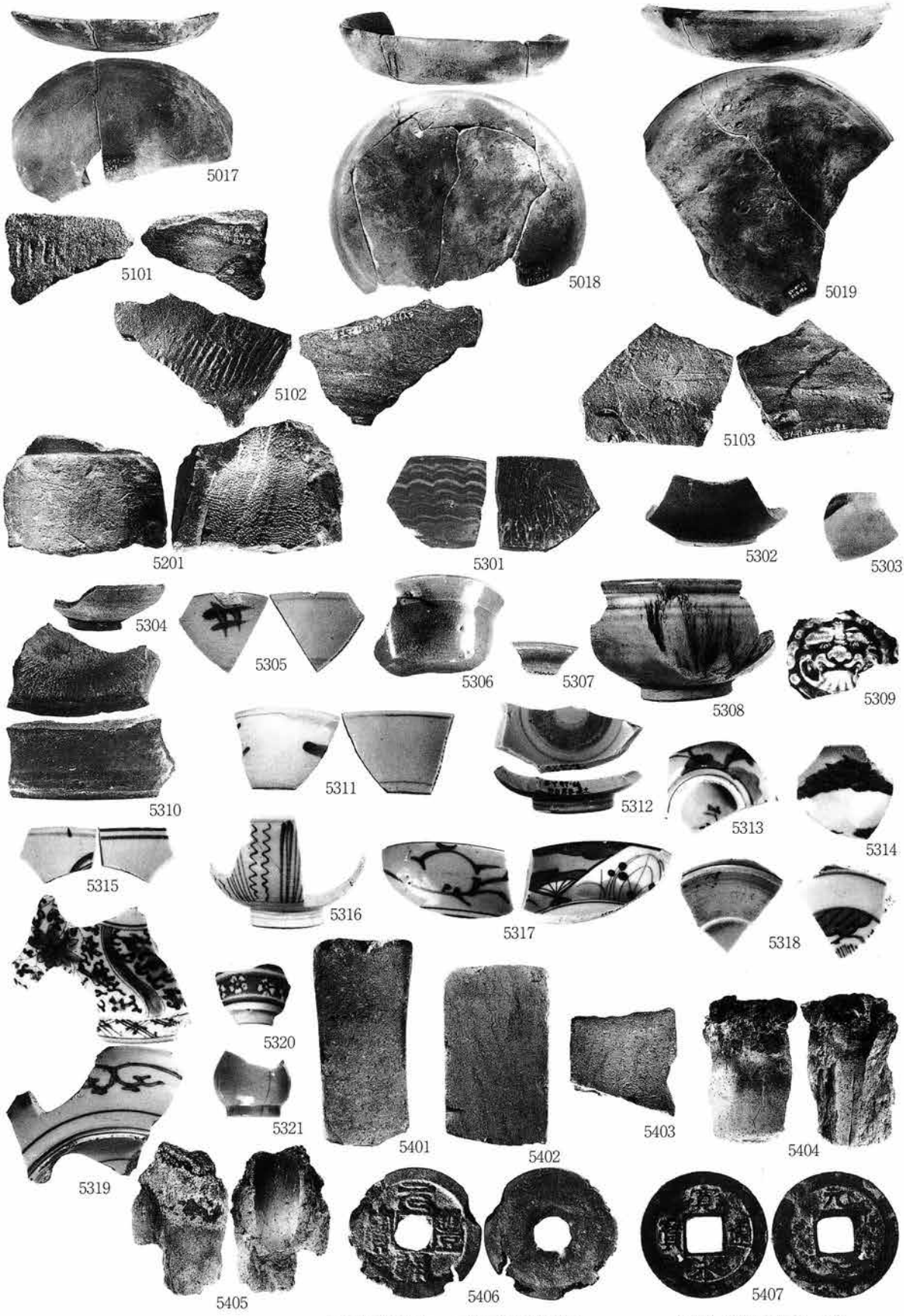


写真図版181　D地区の遺物⑤

4503のみ S＝1/1

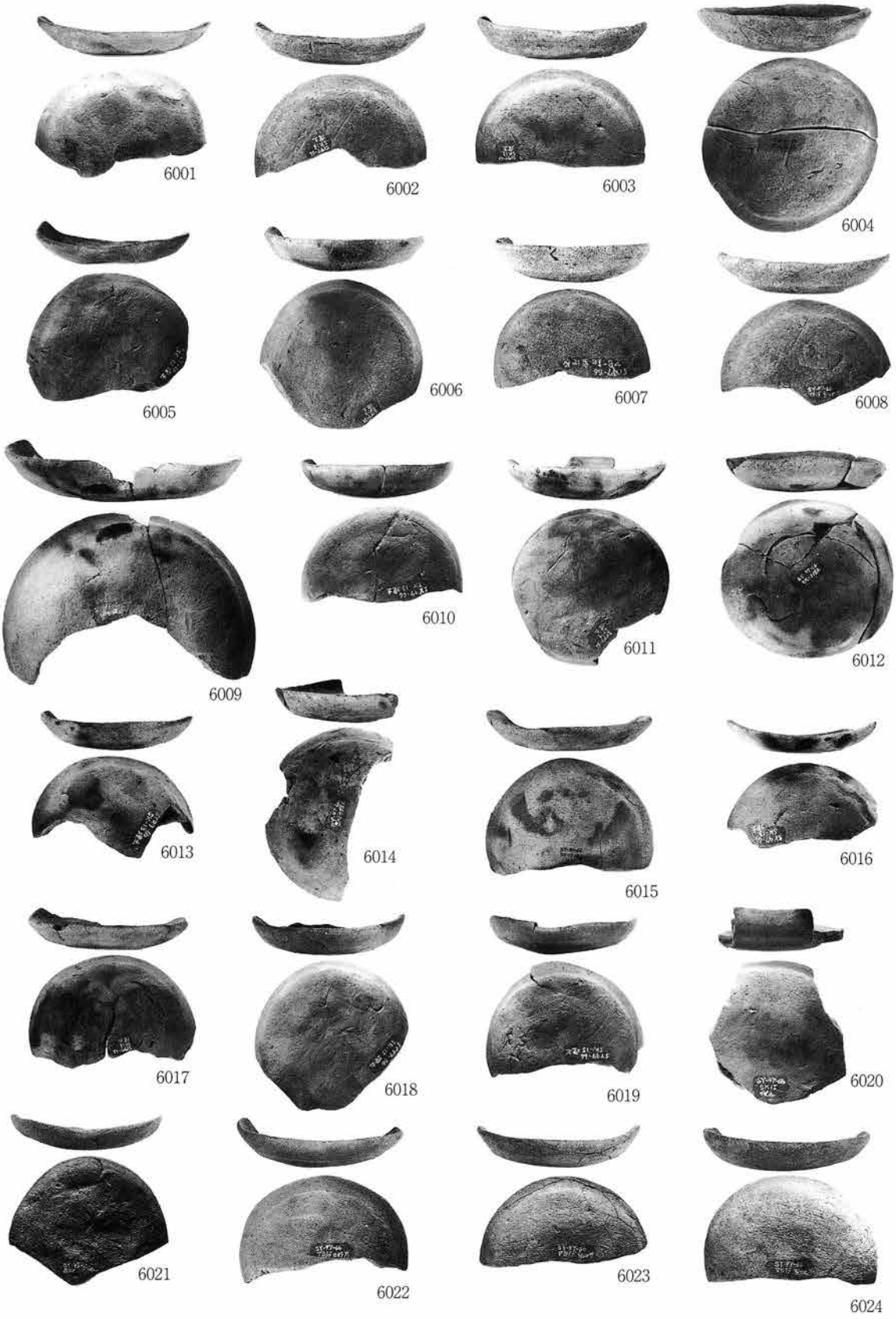


写真図版182　E地区の遺物①

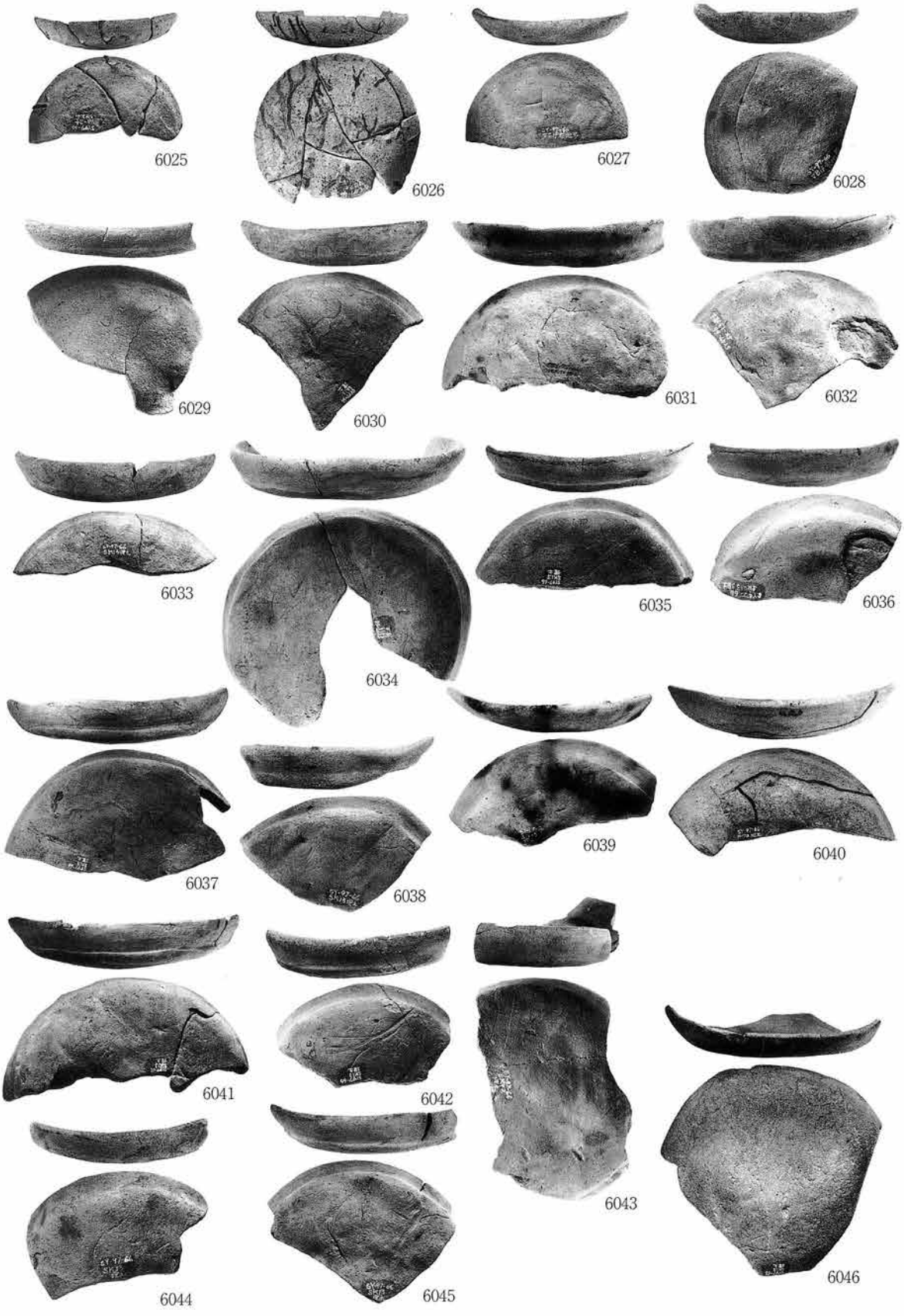


写真図版183　E地区の遺物②

5406、5407のみS＝1/1

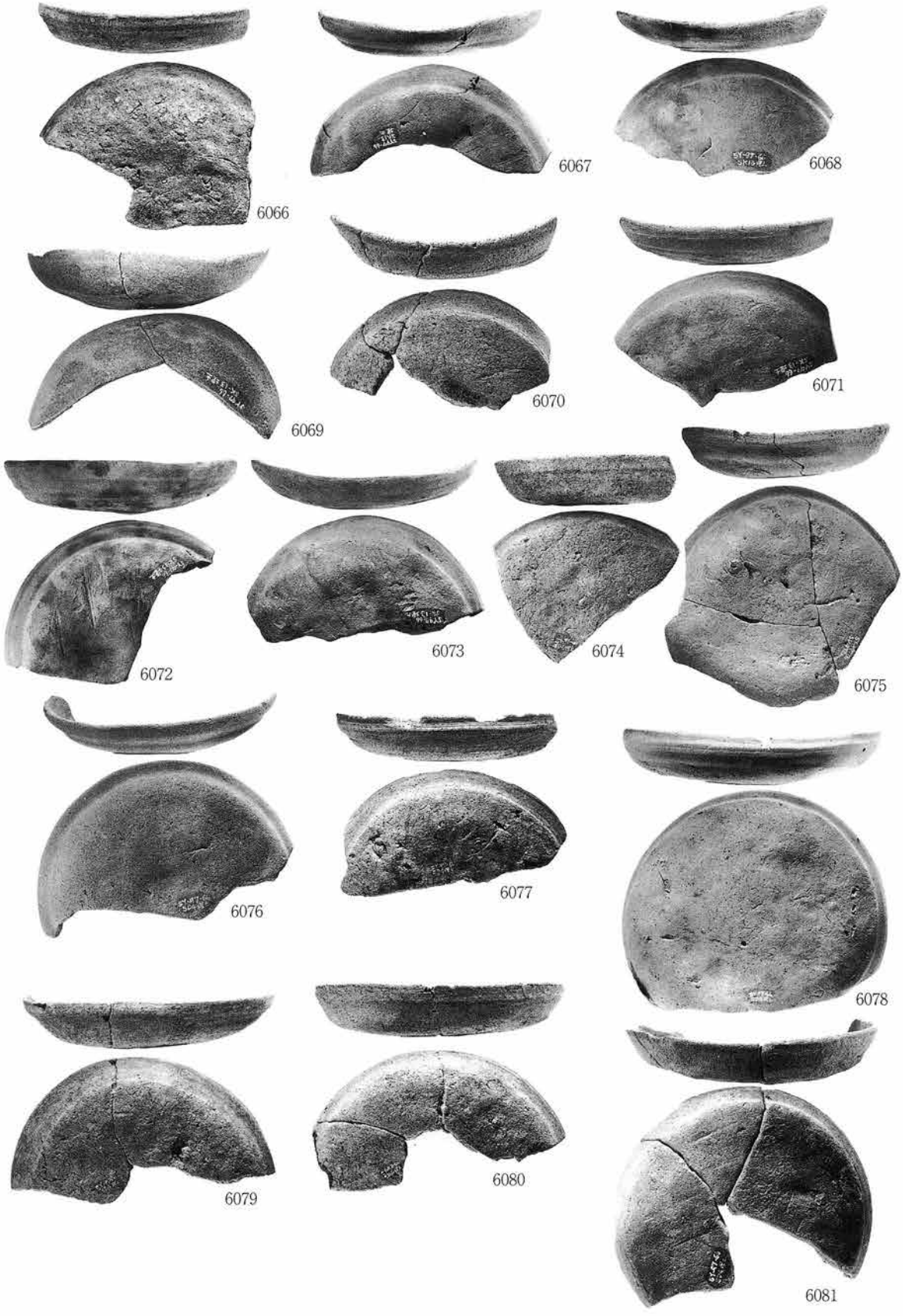


写真図版184　F地区の遺物①

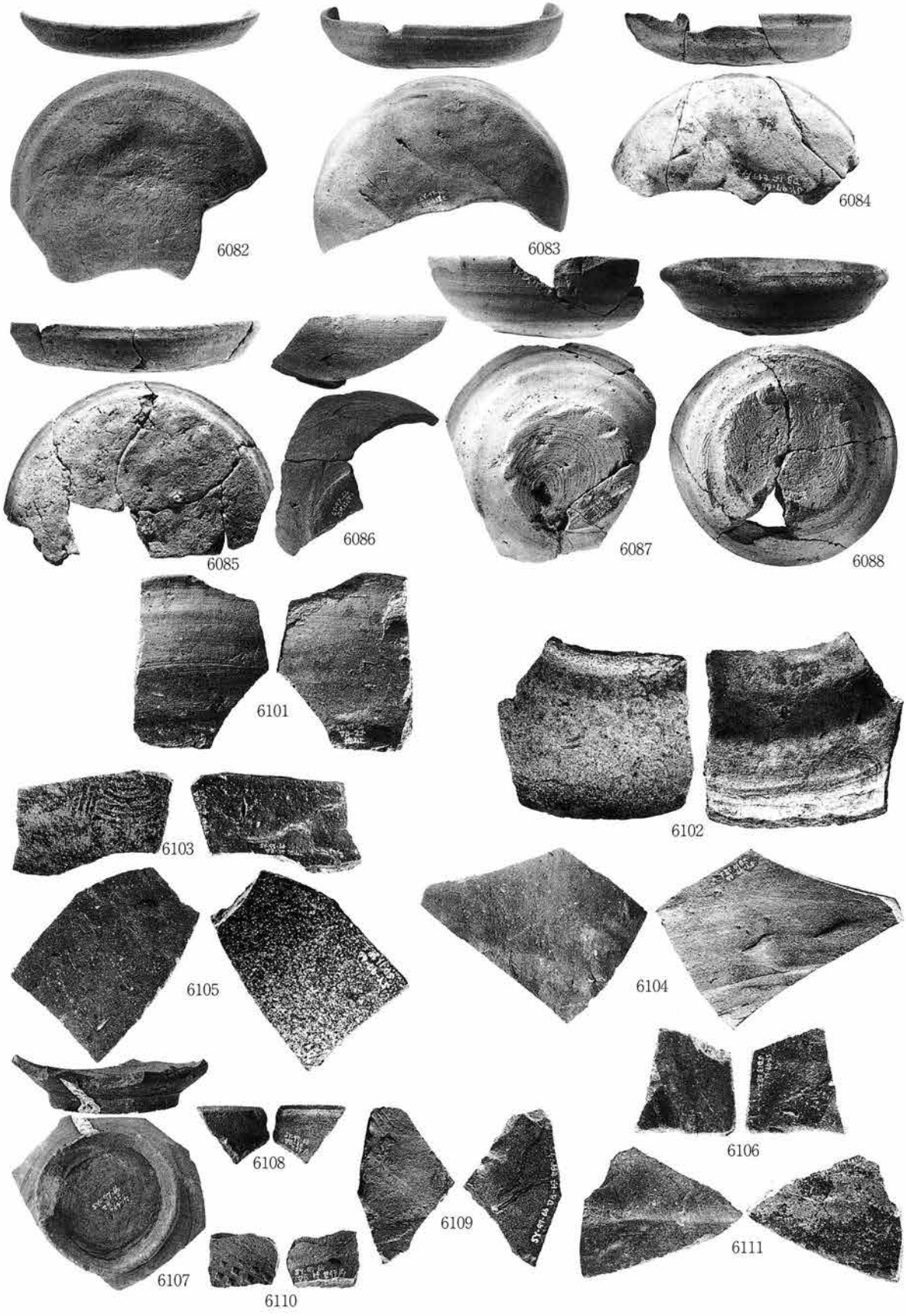


写真図版185　F地区の遺物②

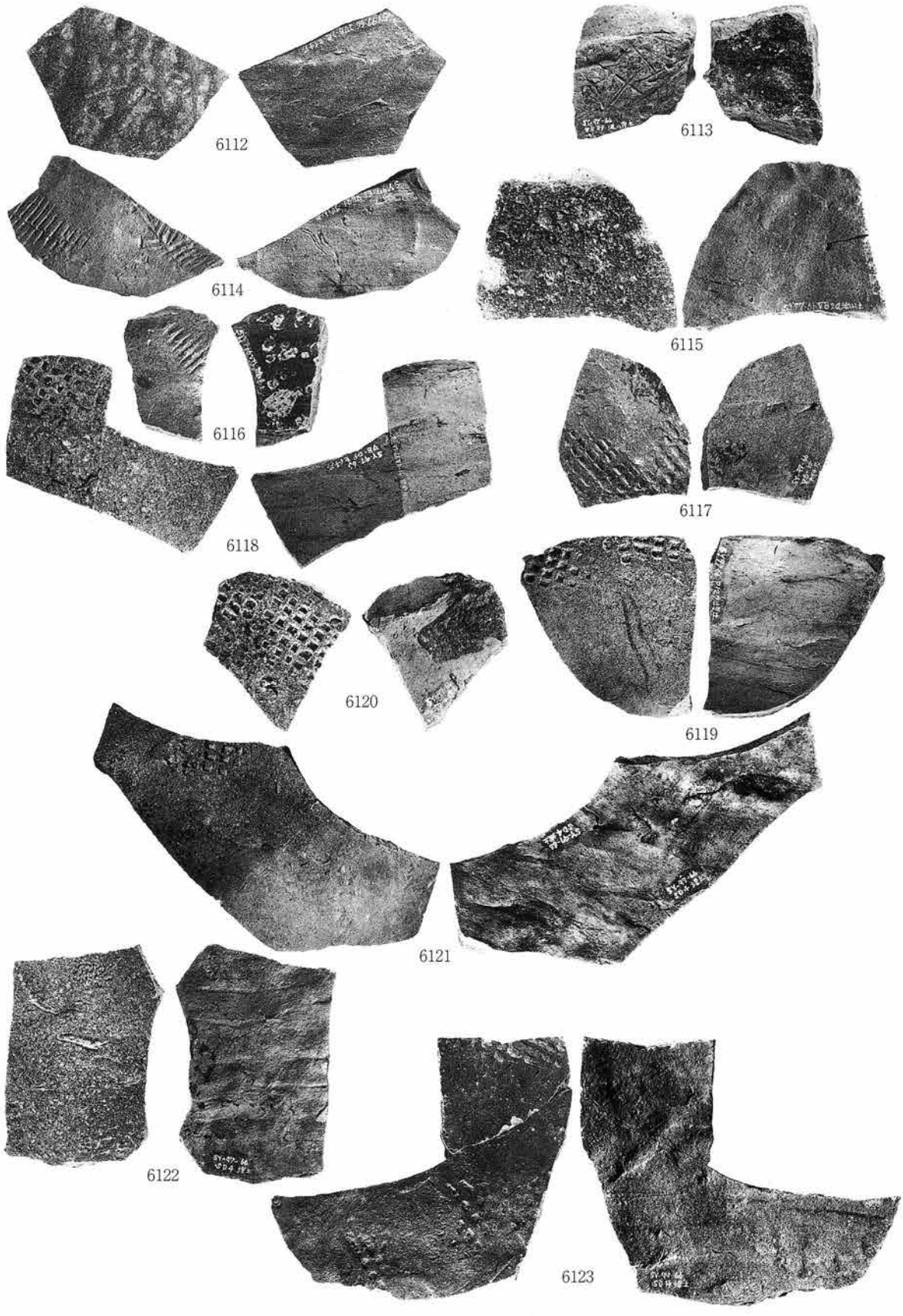
写真図版186　F地区の遺物③



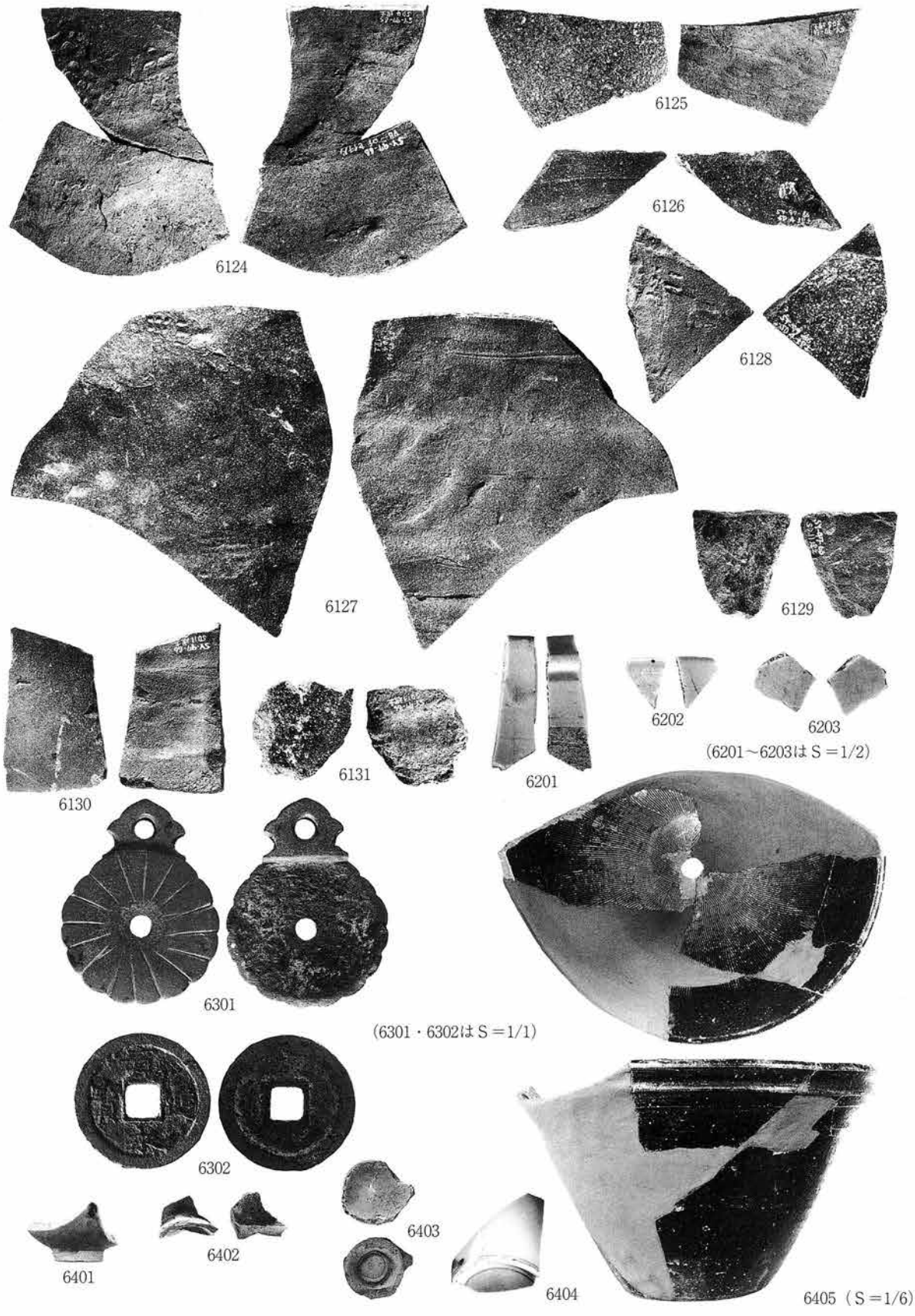
写真図版187　F地区の遺物④



写真図版188　F地区の遺物⑤



写真図版189　F地区の遺物⑥

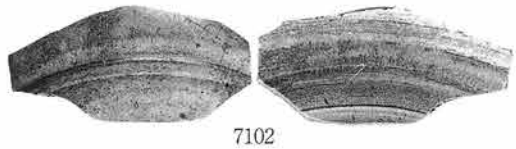


写真図版190　F地区の遺物⑦

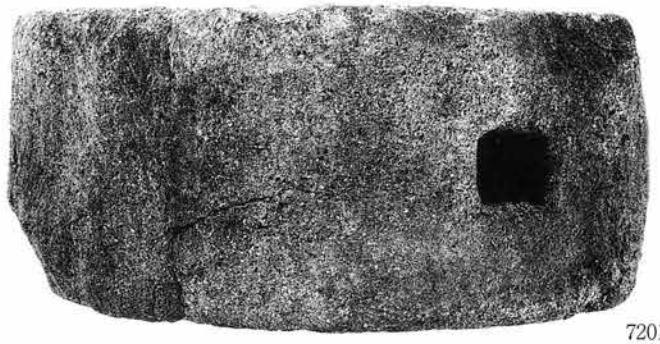
7001

7101

7103



7102



7201

写真図版191　G地区の遺物①

報告書抄録

ふりがな	しらやまいせきだいよんじゅうろく・ろくじゅうろく・ななじゅうよじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書
副書名	一関遊水地事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第312集
編著者名	羽柴直人
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　ＴＥＬ019-638-9001
発行年月日	西暦2000年３月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
志羅山遺跡 （しらやまいせき）	岩手県西磐井 （いわてけんにしいわい） 郡平泉町平 （ぐんひらいずみちょうひら） 泉字志羅山 （いずみあざしらやま） 32－１他	03402	ＮＥ76 －1088	38° 58′ 59″	141° 7′ 30″	第46次 19950807～ 19951122 第66次 19970407～ 19970831 第74次 19980501～ 19980731	2,102 1,891 1,001	一関遊水地事業に係わる太田川堤防工事、国道４号線改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志羅山遺跡 （しらやまいせき）	都市	12世紀	掘立柱建物 井戸 土坑 溝 塀 道路 池	国産陶器 中国産陶磁器 かわらけ、瓦、下駄、笹塔婆、漆器、形代、櫛、刀子柄、ものさし、はし、鉄鏃、轡、砥石、石鍋、銭貨、提子の金具、馬骨、	南北に縦貫する道路が約214m分検出された。池跡から鉄地銅象嵌鴛鴦文轡が出土した。 池跡から笹塔婆が47本出土した。
	集落？	13Ｃ～14Ｃ	池 井戸	国産陶器、漆器、ざる 笹塔婆	
	屋敷	16Ｃ末～現代	掘立柱建物 井戸 土坑 溝	陶磁器、羽口、挽き臼、石鉢、砥石、銭貨、小柄 煙管、墓石	中世末から現代まで存続する屋敷跡を検出した。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤　基
副所長	伊藤直司

〔管理課〕

管理課長	川浪清徳
主任	立花多加志
主事	日影睦夫

〔調査第一課〕

課長	小田野哲憲
課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	酒井宗孝
〃	小山内透
文化財専門調査員	中田迪
〃	吉田充
〃	鎌田勉
〃	小笠原健一郎
〃	鳥居達人
〃	濱田宏
〃	佐々木進悦
〃	安藤由紀夫
〃	木戸口俊子
〃	小野寺正之
〃	阿部勝則
〃	千葉正彦
〃	羽柴直人
〃	高木晃
〃	佐藤淳一
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	朝倉雄大
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	中村直美
〃	丸山浩治
期限付専門職員	佐藤綾子
〃	平めぐみ
〃	藤原賢徳
〃	江藤敦
〃	小林弘卓
〃	小原広幸
嘱託	藤島恵子
〃	新田トヨ
〃	佐々木光恵

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
文化財専門調査員	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	小原眞一
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	金子佐知子
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	佐々木務
〃	晴山雅光
〃	星雅之
〃	佐々木琢
〃	杉沢昭太郎
〃	溜浩二郎
〃	北村忠昭
〃	金子昭彦
期限付専門職員	鈴木聡
〃	平澤里香
〃	布谷義彦
〃	山口俊規
〃	熊谷佳恵
〃	吉田里和
〃	北田勲
〃	吉川徹

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集

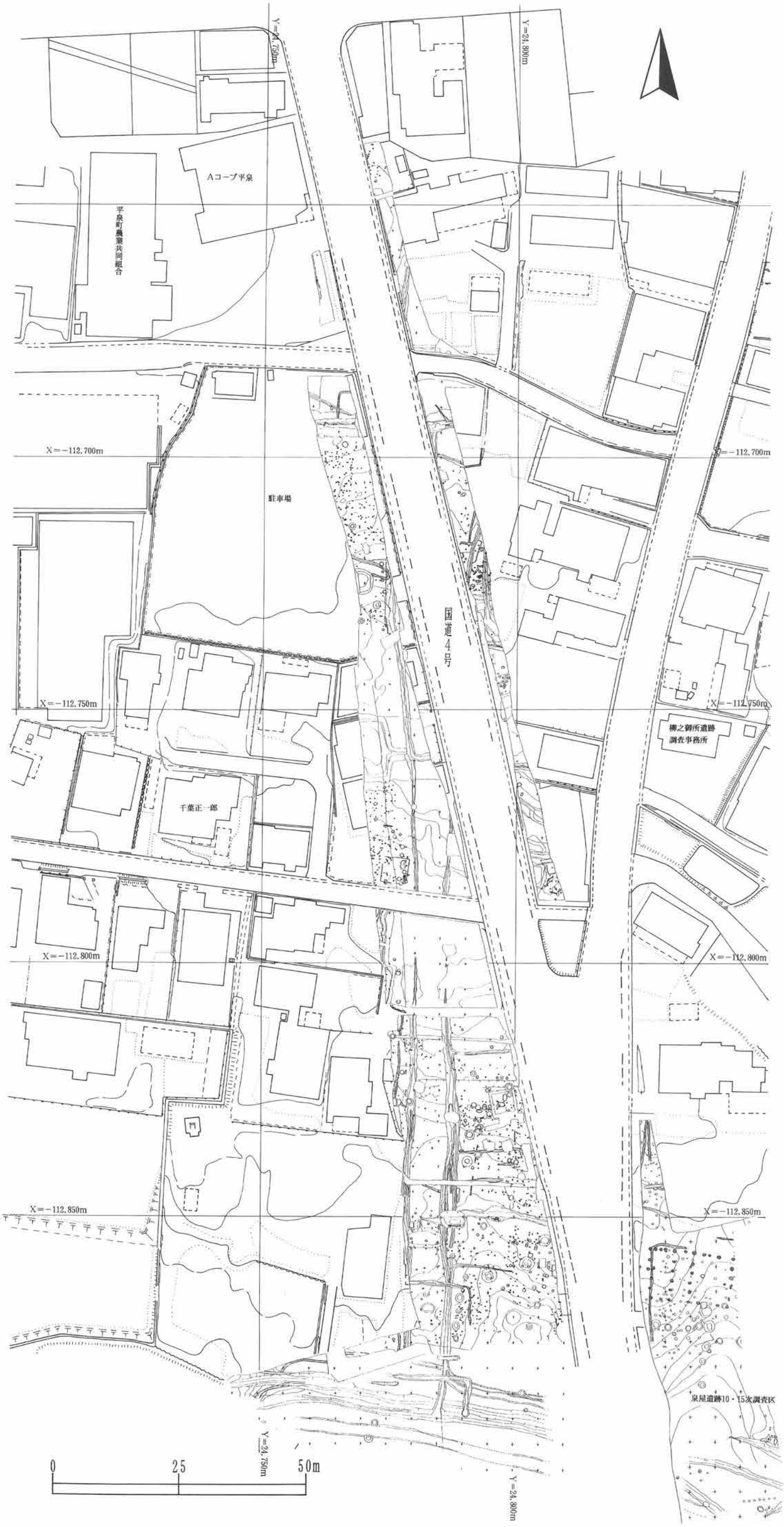
志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書

一関遊水地事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成12年３月17日
発行　平成12年３月24日

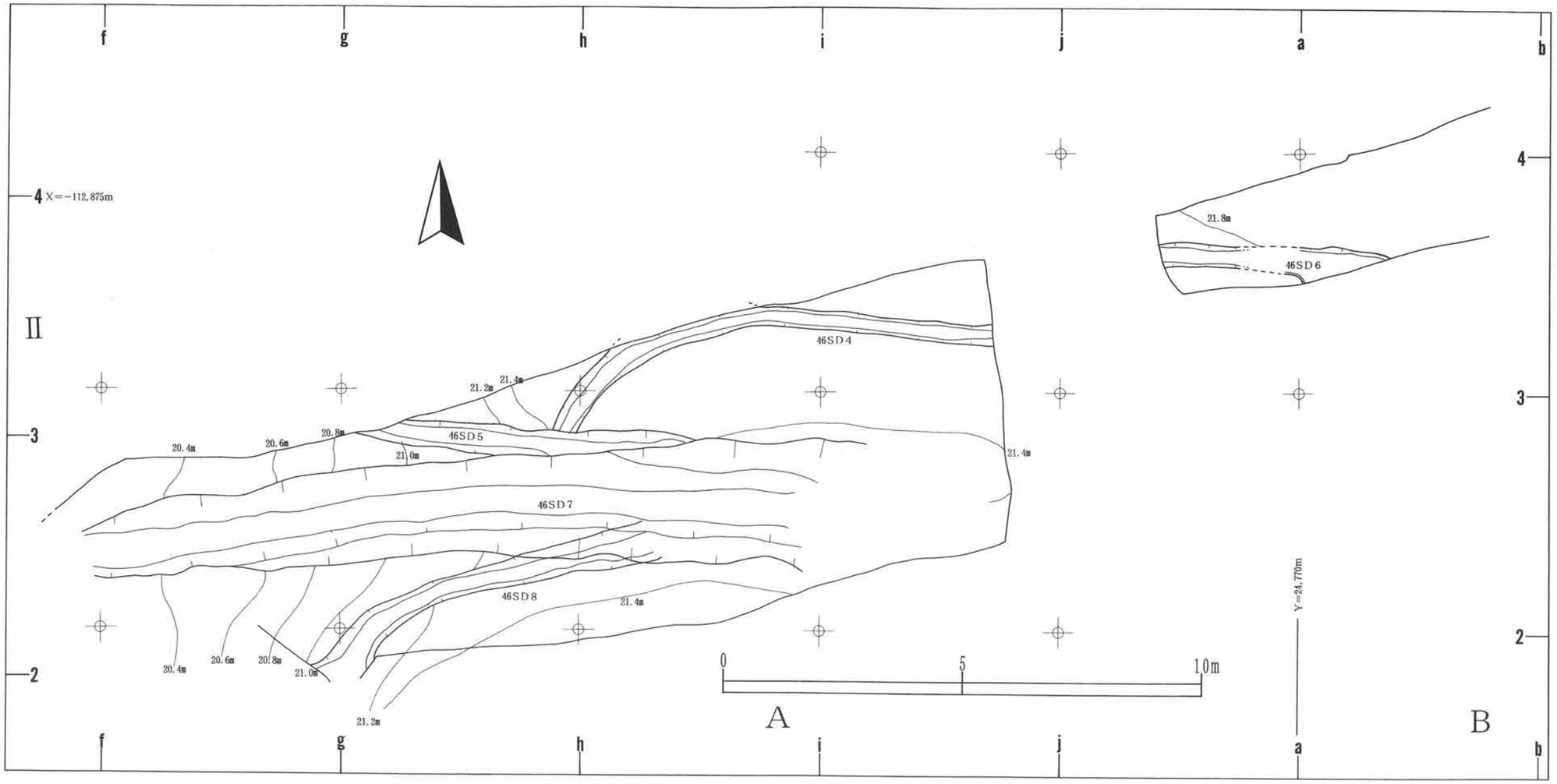
発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
ＴＥＬ（019）638－9001・9002
ＦＡＸ（019）638－8563
印刷　永代印刷株式会社
〒020－0811　岩手県盛岡市川目町23－10
ＴＥＬ（019）623－0111

©㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2000

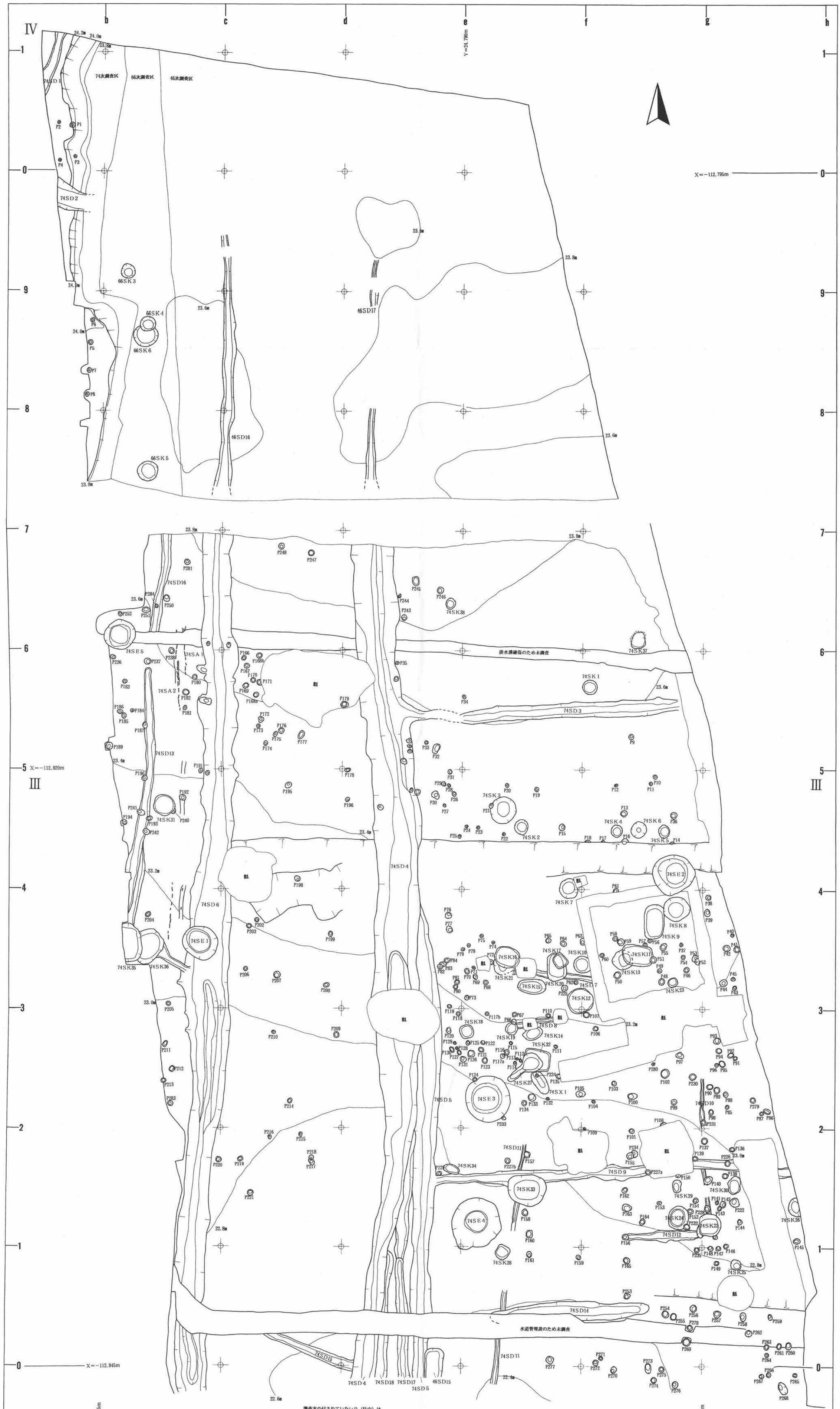


附図1　志羅山遺跡46・66・74次調査全体図

附図２　A地区遺構配置図①

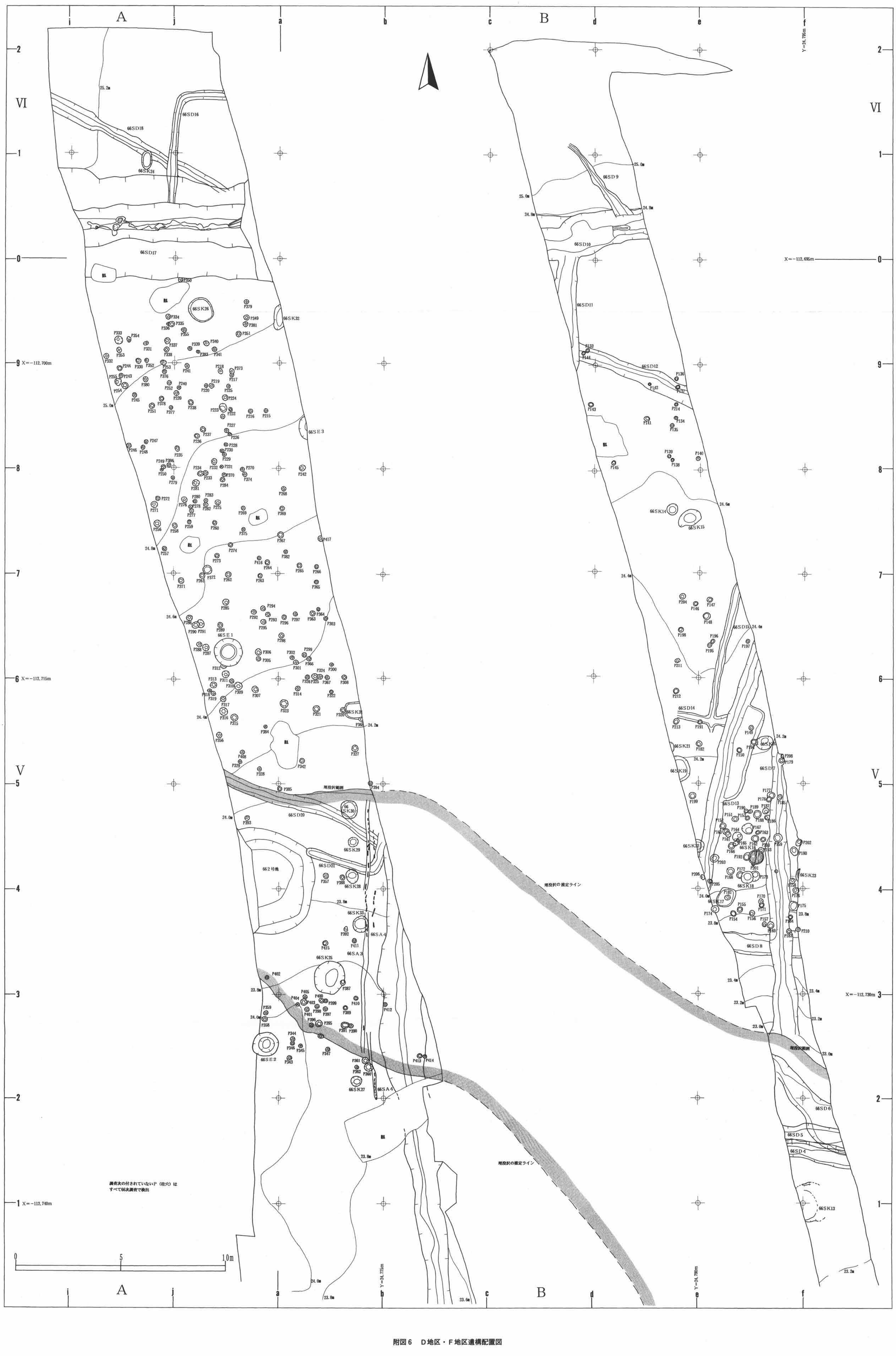


附図３　Ａ地区遺構配置図②

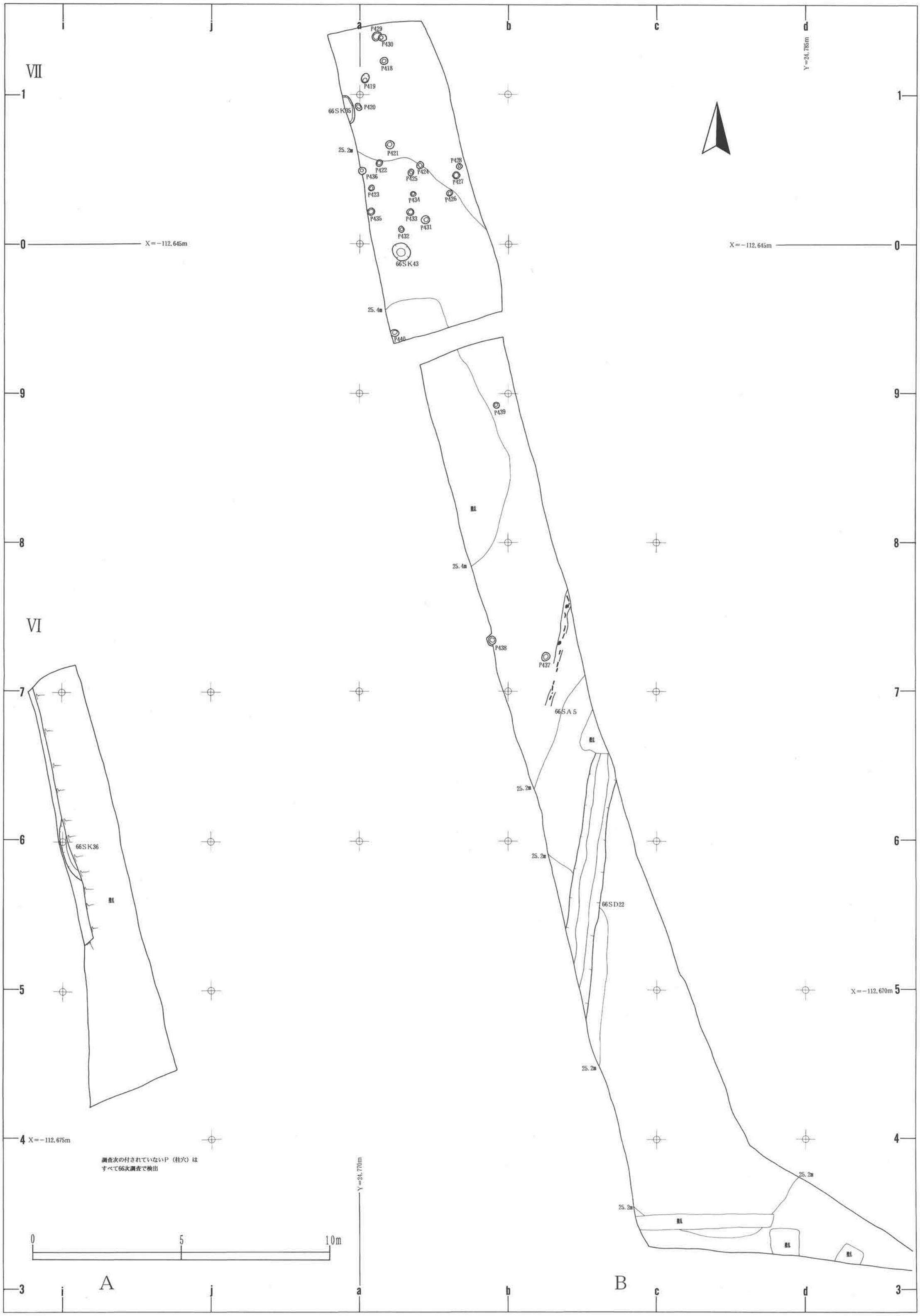


附図４　Ｂ地区遺構配置図

附図５　Ｃ地区・Ｅ地区遺構配置図



附図6　D地区・F地区遺構配置図



附図７　Ｇ地区遺構配置図